HALF☆NYANKO

姫百合

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ

【Ｎコード】
Ｎ１９２５Ｆ

【作者名】
姫百合

【あらすじ】
【完結しました！】人間と猫科モンスターの間に産まれたシュウは、二男七女の長男！父親を継いでハンターとなり、彼の目標は俺様で、我侭で、自分勝手で、横暴で、鬼で最強な『親父を超えること！』。コメ＆ラブコメ度高めです。らぶえっちというよりはバカえっち…。結婚しました。シリアスもたまにあります。※前作『ＮＹＡＮＫＯ』の世代交代版です。サイト移転しました。しばらくしたら削除するのご注意ください。

プロローグ（前書き）

読者様、ありがとうございます。
前作『ＮＹＡＮＫＯ』とその番外編を知らない方にも、分かるように書いていきたいと思っておりますー。

プロローグ

――今から約17年前。

葉月島葉月町葉月病院に、人間とブラックキャットという猫科モンスターの間に、1人（匹）の男の子が産まれた。

父親譲りの黒髪に、黒々とした瞳、父親そっくりな凛々しい顔立ち。

母親譲りの、絹のような手触りをした黒猫の尾っぽ。

その子の名は、生まれる前から『シュウ』と名付けられていた。

シュウの父親は、シュウが産まれたとき、シュウを優しく腕に抱いて問うた。

「おまえは、どんな子になるのかな……」

プロローグ（後書き）

９月３０日の２１時３０分ごろにメールをくださった方、ありがとうございました！
他の執筆についてですが・・・た、ただいま手一杯で無理そうです・・・・・ｏｒｚ
申し訳ございません＞＜

第1話　長男の目標

――現在。

今年で17歳のシュウ。

二男七女の長男となりました！

どんな子になるのかなって、おかげで世話上手なお兄ちゃんである。

去年父親を継いでハンター――普通よりも強い者だけが取得できる資格――となり、1年間父親の元に弟子入りして昨日で卒業。

まだまだ超一流ハンターの父親には及ばないが、新米でもすでに一流ハンター。

目標は、

『親父を超えること！』

である。

そのため、弟子を卒業した今、日々仕事と修行に励みたいのだが……。

8人の弟妹を抱える兄・シュウは、そうも行かなかった。

シュウの1日は、早朝6時に始まる。

ジリリリリリ！！

一斉に鳴り出す１０個の目覚まし時計を、

スパパパパパパパパパーーーン！！

と鮮やかに手で叩き止め、

ガバッ！！

と、ベッドから飛び起きる。

とりあえず向かう先は、自分の部屋に備え付けてあるバスルームの洗面所。

手早く顔を洗い、歯を磨き、寝癖ヘアを整えるのは後にして部屋を飛び出す。

シュウと弟妹たちの部屋は、屋敷の2階にある。

シュウが向かって一番右端の自分の部屋から出ると、隣の部屋のドアが開いた。

顔を見せたのは、シュウの妹で長女のミラである。

妹といってもシュウは5月生まれで、ミラは同年の１１月生まれ。

同い年である。

何故かというと、１０ヶ月で産まれる人間と、２ヶ月で産まれるブラックキャットの間にできたハーフは、５ヶ月で産まれるからである。

シュウと同様、ミラは父親譲りの黒髪に黒々とした瞳をしている。

それから、母親譲りの黒猫の耳。

顔はどちらかというと母親似で、性格を現すような温厚な顔つきをしている。

「おはよう、お兄ちゃん」

そう言って見せる笑顔は、とても愛らしい。

ちなみに、かなりのファザコン。

「オス、ミラ」そう言ってシュウはミラの頭を撫でながら、辺りに鼻をくんくんとさせた。「こっ…、これは味噌汁の匂い！　やべえっ、母さんもうとっくに起きて朝飯作ってんだ！」

「大変っ！　ママ1人に作らせちゃったっ…！」

シュウとミラは慌てて緩やかな螺旋階段を駆け下り、キッチンへと向かう。

キッチンへと入ると、母親・キラが優しい笑顔で振り返った。

「おはよう、シュウ、ミラ」

前作ヒロインのブラックキャット・キラ。

絶世の美女と言っても過言ではない繊細な顔立ちに、ガラスのような銀色の長い髪、黒猫の耳と尾っぽ。

大きな黄金の瞳に、白い肌、小柄なナイスぼでー。

今年で38歳だが、外見年齢が20歳前後の頃と変わらないのは、モンスターであるが故に何ら不思議ではない。

ちなみに、たまに激しく天然バカ。

「ご、ごめん、母さんっ！」

「ご、ごめんなさいっ、ママ！」

朝食作りは、キラに加えてシュウとミラで行っている。

慌てて手伝おうとしたシュウとミラだったが、朝食はもう出来上がっていたようだった。

「良い。私が早くにおまえたちの父上に起こされてな」

と、キラ。

出来上がった味噌汁を１１つのお椀に注ぎながら、苦笑する。

「…お疲れ、母さん」

そうシュウはキラに続いて苦笑するが、ミラは頬を赤く染めて言う。

「いいな、ママってば。私もパパに抱かれたいっ」

「問題発言すんな」

シュウはミラにデコピンして突っ込むと、朝食の盛られた皿類をテーブルへと運んだ。

キラもミラと一緒に運んで来ながら、シュウに言う。

「シュウ、妹たちを起こして来てくれるか？　母上は父上を起こしてくるぞ」

シュウは承諾し、再び緩やかな螺旋階段を駆け上がって屋敷の２

階へと向かった。

向かって一番右端がシュウの部屋。
その左隣は、ミラの部屋。

そのミラの左隣が、次女・サラの部屋である。

「サラ、起きろ。朝飯だ」

シュウが言いながら布団にもぐっているサラの身体を揺すると、明るめの茶色い頭が現れた。
本当はサラも黒髪なのだが、母親譲りの黄金の瞳に合わせたいが故にカラーリングしたらしい。

年齢はシュウの１つ下で、今年１６歳になる新米ハンターだ。
これから1年間は先輩ハンターの弟子になるが、その先輩ハンターに父親を選ばなかった。

「…っさいな、兄貴。眠いんだよ、アタシは。あとで食べるから出てけ、ウゼー」

この口の悪さは、女の子なのに父親に似てしまった。
その上、鋭い目つきも父親似。
１７０センチ弱と、女の子にしては背が高いのも父親似。
しかもちょっと、不良気味。

サラがワガママを言ったところで、シュウは容赦しない。

「うるせえ、さっさと起きろ！」

そう言って強引にサラをベッドから引きずり出す様は、やっぱりシュウも父親似。

シュウにずるずると廊下まで引っ張られ、サラは舌打ちをして1階へと向かう。

それを確認したあと、シュウはサラの左隣の部屋へ。

「リン、ラン。朝だぞ、起きろ」

三女のリンと、四女のラン。

双子の部屋だ。

今日から葉月島にある魔法学校3年生になる、15歳。

といっても早生れなので、15歳になるのは来年だが。

母親譲りのガラスのような銀髪に、黄金の瞳、黒猫の尾っぽ。

顔立ちは父親と母親のちょうど中間といったところだが、性格はまるで母親似。

無邪気な笑顔も、口調も、困ったことに天然バカなところも。

それから、ミラがファザコンなら、リンとランはブラコン。

「兄上ーーーっ！！」

声を揃えるなり、ガバチョッとベッドから起き上がってシュウの首に抱きつく、リンとラン。

「おはよう、兄上！」

と、リンがシュウの右頬にキスし、

「おはよう、兄上！」

ランがシュウの左頬にキスする。

「あー、はいはい。おー、よしよし」

リンとランを首にぶら下げつつ頭を撫でてやり、シュウは廊下へと出る。

リンとランが一階へと向かって行ったら、シュウは今度はまたその左隣の部屋へと入る。

双子の次に産まれたのは、三つ子だった。

三つ子の上から順に、シュウは呼んで起こす。

「ユナ！」

「…うー……はいー」

五女・ユナが目を擦りながら身体を起こし、

「マナ！」

「…はい…」

六女・マナがぱちりと目を開け、むくりと起き上がり、

「レナ！」

「はあああいっ！　あっさごっはん～～～！」

七女・レナが元気良く飛び起きる。
そして、真っ先に一階へと駆け下りていく。

ユナ・マナ・レナの３つ子は、母親譲りの銀髪に黒猫の耳。
それから父親の黒々とした瞳でもなく、母親の黄金の瞳でもなく、淡い紫色の瞳をしていた。
恐らく祖父母譲りかと思われる。

顔立ちはどちらかというと母親似で、もうすぐ１３歳。
今日から魔法学校の１年生だ。

３つ子なので外見はそっくりでも、それぞれ中身がまるで違っていた。

ユナはとにかく泣き虫で、ミラと同じくファザコン。そしてその胃袋は偏食。

マナはとにかく口数が少なく、母親から天然バカを受け継いだ。
そしてその胃袋はゲテモノ好き。

レナはとにかく元気が良く、いつも屋敷の中を駆け回っている。
そしてその胃袋は巨大。

３つ子が一階へと向かってった後。
シュウはまたその左隣の部屋に入った。

最後は、次男で末っ子の弟を起こす。
シュウの１２歳下で、３つ子の８歳下と、年の離れたアイドル的存在の可愛い弟。

「ほーら、ジュリ。朝だぞー」

可愛くて仕方がないジュリを起こすときは、思わずシュウの顔が綻んでしまう。

ガラスのような銀髪から、大きな黄金の瞳、真っ白な肌、黒猫の耳と尾っぽ、その顔立ちまで、全部母親譲りだ。

はっきり言ってそこらの女の子よりも、ずっと可愛いのだ。

「あにうえー、おはようございます」

「おー、おはよう。さあ、朝飯食おうなあー」

シュウはジュリをいつものように抱っこして、一階へと向かう。

「オレの弟は可愛いぜ、こんちくしょうっ♪」

なんて、朝の慌ただしい雰囲気の中ですっかり機嫌を良くされながら。

朝の食卓へと戻ってきて、シュウはジュリを専用の椅子に座らせた。

そのあと、妹たちを見て訊く。

「なあ、親父はまだかよ」

「ママが起こしに行ったまま、まだ戻ってこないの」

と、ミラ。

今、両親の寝室で何が行われているか察したシュウは、顔を引きつらせた。

「あんの万年発情期親父が……！」

1階にある両親の寝室へとドスドスと足音を立てて向かって行く。

ドアに『ただいま取り込み中！　入ったら説教！』と札がぶら下がっているが、シュウはお構いなし。

思いっきりドアを蹴り開ける。

バァン！！

「朝っぱらから子作りに励んでんじゃねえ、親父！！」

「てめ……」

そして、前作主人公である、シュウの父親・リュウ。

シュウとそっくりな顔の、その鋭く黒々とした瞳でぎろりとシュウを睨み付ける。

「真っ最中に入ってくんじゃねえって、いつも言ってんだろうが！！　とんでもねー息子だな、おまえはよ！？」

「そういうアンタこそとんでもねー親父だろうがよ！？」

「お父上様と言え！！　このバカ息子がっ！！」

「親父で充分だ、このエロオヤジがっ！！　早朝から欲情して母さんのこと起こしたクセに、何でまたヤッってんだよ！？　もうこれ

以上弟妹はいらねーって言ってんだろ！！」

「ちゃんと避妊してら！！　ったく、うるせーな、おまえは！！
さっき2回しかヤッてねーんだぞ！？」

「充分だろうが！！　いーから朝飯だ！！　さっさと終わらせて出て来い！！」

バタンと大きな音を立ててドアを閉め、シュウは溜め息を吐いて食卓へと戻る。

今や世界の誰もが知る葉月島の超一流ハンターで、それから葉月ギルドのギルド長となったリュウ。
今年で３９歳だというのに、未だに強くなり続けるバケモノだ。
しかも人間なのに、何故か老けない。
昔から老け顔というものあるのだろうが、リュウはシュウと兄弟に見間違えられるほどだ。

リュウの力をたしかに受け継いでいるシュウだが、まだまだリュウには及ばなかった。
修行を兼ねてリュウとときどき刃を交えるが、まだ一撃すら当てたことがない。

兄弟のようにそっくりでも腕周りはリュウの方が一回り太いし、胸板だってリュウの方が厚い。
身長だって、数センチほどリュウの方が高い。

キラと娘たちと末の弟には甘いのに、リュウはシュウにはとことん厳しい。
俺様で、我侭で、自分勝手で、横暴で、はっきり言って鬼だ。

武術や魔術などハンターとして必要な面で、シュウは未だに一度も褒められたことがない。
そのせいか、シュウはもう1つ目標があった。

（親父に褒めてもらうこと）

強くなったと、リュウに一言褒めてもらいたかった。

それはリュウに一撃与えられたときか、超一流ハンターに昇格できたときか、リュウを越えたときか、いつかは分からないが。

あれでも父親には変わりなくて、その大きな背はやっぱり偉大だと感じさせる。

一言で良いから、強くなったと褒めてもらいたい。

（って、オレはファザコンじゃねーっすよ!?）

なんて読者様に訴えつつ、シュウは食卓に着いてリュウとキラを待つ。

朝食だけは家族そろって『いただきます』をするのが一家の決まりであるが、その決まりを作った張本人のリュウがいないのはどういうことか。

シュウは苛々とし、サラを除く妹たちと末の弟はおとなしく両親を待ち、サラは先にさっさと食べ始めている。

「親父がふて腐れるぞ、サラ」

「知るか」

そう言い、サラはシュウの忠告を聞かずに朝食を食べ続ける。

食卓へとやってきたリュウが娘たちと末の息子に『おはようのキス』を頬にされながら、サラを見て顔をしかめた。

「おい、サラ。何で先に食ってんだ」

「親父が遅いのが悪いんでしょ」

「少しくらい待ってくれてても――」

「ごちそうさまー。おいしかったよ、ママ」

リュウの言葉を遮ってさっさと自分の部屋へと戻り、着替えて再び一階へと戻ってきたサラ。

「んじゃ、アタシ先にギルド行ってるわ。ギルドで師匠来るの待ってよーっと」

そう言って屋敷から出て行った。

サラの師匠が誰であるかは、後ほど分かる。

案の定、ふて腐れたリュウ。

「なっ…んだよ。飯くらい一緒に食えってんだ、あいつはっ…！しかも何で俺を師匠に選ばねえんだよ……！」

「オレもサラの師匠となる人を師匠に選びたかったっての…」シュウは溜め息を吐いて言い、突っ込まれる前に続けた。「いーからさ

っさと朝飯食おうぜ」

というわけで、次女・サラを除く一家で『いただきます』。

いつものごとく、シュウの声が飛ぶ。

「ああっ、醤油ねえ！　悪い、ミラ持ってきてくれ。って、コラ！　レナっ、兄ちゃんの卵焼きを取るなっ！　ユナはちゃんとサラダ食え！　――って、あああ、すぐ泣くなよユナ～～～っ！　ほーらほら、兄ちゃん怒ってねーからなーっ♪　…んっ？　おお、マナ！　ジュリの魚ほぐしてやってんのかー、えらいえらい……って、オイ！　内臓食わしてんなっ！　その母さん似のオッサンくせー味覚が誰にでも通用すると思ったら間違いだからな、マナ！　大丈夫か、ジュリ？　あー、苦かったなーっ。ほら、ティッシュにペッとしろ、ペッって――ソコ！　リン・ラン、デザートは最後に食えっていつも言ってんだろうが！　母さんも！　いっつもいっつもデザート先に食うから飯残してんだろ!?　つーか、朝っぱらから酒飲んでんじゃねえ親父!!!」

シュウに指を差され、リュウは深く溜め息を吐く。

「本当口うるせーな、おまえ。誰に似たんだよ」

「この環境で育ったら嫌でもこうなるわ！」

「味噌汁おかわり」

「自分で持ってこ――」

ゴスッ！！

リュウの拳骨が、シュウの言葉を遮った。

「早くしろ」

「…く、くそっ……！」

リュウのお椀を持ち、しぶしぶと味噌汁を注ぎにいくシュウ。

物心がついた頃からこんなことをしている気がする。

朝食が終わったら終わったで、今度は休む間なくシュウはキッチンへと向かう。

キラとミラが食器洗いをする傍らで、シュウは魔法学校へ通う双子と三つ子の弁当作りを開始。

それぞれの弁当箱にご飯を詰めて熱を冷ましつつ、栄養バランスと彩りを考えておかずを手早く作る。

できあがった弁当を見てブラコンの双子は素直に喜ぶが、３つ子はうるさい。

泣き虫で偏食のユナが、しゃくりあげながらシュウのところへやってきて言う。

「に、兄ちゃんっ…、ヒック…えぐっ…、プチトマトやだぁっ」

「好き嫌いすんなっ！」

その次に無口でゲテモノ好きなマナがやってきて、ゆっくりとした口調で言う。

「兄ちゃん…、ザザムシ入れて……」

「……。わり、ないわ」

さらにその次に、常に元気一杯で巨大な胃袋を持つレナが慌ただしく駆けて来て言う。

「兄ちゃんっ！　弁当足りないよ！」

「じゅ、重箱４段ありゃ充分だろうがっ！」

やっと３つ子が離れていって、シュウの弁当作りは完了。
ようやく仕事へ行く準備に入る。

自分の部屋に戻ってクローゼットから今日の戦闘服を選び、寝巻きから着替える。

２つの視線を感じながら。

「……コラ」

と、シュウが言うと、わずかに開いているドアの向こうにいる２匹が飛び跳ねた。

「の、覗いてなんかないのだっ！」

そう声を揃え、ドアを開けて顔を出したのはリンとランである。
にやけないように必死に真顔を作り、黄金の瞳をシュウから逸らす。

リン、ランと交互に言う。

「ほ、本当なのだ、兄上」

「そ、そうなのだ、兄上」

「わ、わたしたち嘘なんか吐いてないのだっ」

「そ、そうなのだっ」

「そーかそーか、悪かったな」

と、2匹に笑顔を向けてやるシュウ。
そのあと笑顔を消して、

「今日の兄ちゃんのパンツは何色だ!?」

「青」

即答したリンとラン。

「あっ」

しまった、と口を手で塞ぎ、誤魔化すように笑顔を作って逃げていった。

（まったくうちの家族は…）

溜め息を吐きながらシュウは寝癖ヘアを整えて剣を持ち、部屋から出て1階へと向かう。

（何で『マトモ』と言えるのがジュリしかいねーかな……）

玄関へとやってきたシュウ。
顔が引きつる

「パパっ…、早く帰ってきてねっ、私寂しいっ…！　ねえ、もっとキスしてっ……！（はーと）」

そうおねだりしてリュウから頬にキスしてもらっているのは、ファザコンのミラである。

おかしい。
おかしすぎるだろ、オイ。

年頃の女の子の「パパのパンツと一緒に洗わないでっ！」なんて台詞とは遥かに無縁のようだ。
父親（リュウ）の相手を疎ましがるサラの方が普通に見える。

「おい、ミラ。傍から見たらヤベー親子だぞ……」

「ん？　あ、お兄ちゃんもいってらっしゃい♪」

「おう、いってくる……」

愛らしい笑顔でシュウがツッコミをスルーされたあとは、キラが駆けて来た。

「リュウ、シュウ、もう行くのかっ？」

「ああ。母さん、いってきます」

そう言ったシュウの傍らで、リュウが寄って来たキラを左腕に抱っこした。

モンスターをペットとすることが流行っているここ葉月島で、元はリュウのペットだったキラ。

リュウのキラに対する扱いは、妻というより飼い猫を構っているようにも見える。

「行って来るぜ、俺の可愛い黒猫」

「いってらっしゃい、私の愛する主」

こういった会話は、キラがペットの頃からららしい。

毎朝のごとく、玄関先で『いってきますのキス』をする。

そして毎朝のごとく、シュウは突っ込む。

「簡易に済ませろってんだ、親父！」

「うるせーな。俺はこれから家を離れるんだぜ？」

「昼飯のときに一度戻って来んだろうが！　長期出張にでも行く気かアンタは！？」

と言いたくなるほど、リュウはキラに熱いキスをしていて。

子供が見ていようが見ていまいがお構いなしだ。

一番の癒しであるジュリの頭を撫でたあと、シュウはリュウと共

に屋敷を後にした。
溜め息を吐き、リュウの一歩斜め後ろを歩く。
らぶらぶな両親の下、たくさんの弟妹たちに囲まれて育ったシュウ。
大声を出さない日はないし、溜め息を吐かない日はない。
ハンターの仕事で一歩外に出れば、戦ってばかりで体力的にも疲れない日はない。

「おい、シュウ」

「何だよ、親父」

「おまえ今日から1匹で仕事だな」

「おう」

「……へマして死ぬんじゃねーぞ」

そう、前を向いたまま呟くように言ったリュウ。
斜め後ろからリュウの横顔を見て、シュウは笑った。

「心配すんなっての」

シュウの父親は、俺様で、我侭で、自分勝手で、横暴で、鬼だ。
そして、誰もが最強の超一流ハンターだと認めるほどの強い男。
そんな父親を持つシュウの目標は、

『親父を超えること！』

第1話　長男の目標（後書き）

初っ端から登場人物多いですね、すみません（汗）

第2話　赤い髪、現る

家を出たシュウは、父親・リュウと共に葉月町にある葉月ギルドへと向かった。
いつもなら家を出たらすぐに受付済みの仕事へと向かうのだが、今日だけは特別だった。

今は4月の頭。
葉月島の学生たちが進学・進級して学校へ向かう中、同様に新米ハンターたちもギルドへと向かう。
新米ハンターがギルド長であるリュウと顔を合わせる、学生でいえば入学式みたいなものだ。

シュウも一緒に着いていかなければならないのは、活動している一流ハンターだから。
新米ハンターは1年間、それなりに活動している一流以上のハンターに弟子入りしなければならず、今日はリュウから師弟の組み合わせが発表される。
といっても、師弟の組み合わせを一生懸命決めたのは、忙しいリュウに代わって仕事をこなしている副ギルド長だが。

葉月町の中央にあるキラの銅像の前を通れば、ギルドはすぐそこだ。
母親の銅像がたっているのは、いつ見ても違和感たっぷりのシュウである。
なんでも、シュウが産まれる前にキラはこの世を救い英雄になったからとか何とか・・・。

リュウがギルドの扉を開けると、すでに集まっていた一流以上の

ハンターと新米ハンターが整列していた。
１匹を除いて、一斉にリュウに頭を下げる。

その１匹とは、新米ハンターの次女・サラである。
ぎゅっと男の腕に抱きついている。

灰色の猫耳と尾っぽに、青い髪と赤い瞳。
長身のリュウよりも５センチ低く、シュウよりは２センチほど低い身長１８０センチ。
外見年齢２３～２５で、実年齢は今年で３２歳になるミックスキャット――ブラックキャットとホワイトキャットの間にできた青年。
その名をレオン。

リュウに睨むように見られ、レオンは苦笑する。

「怖いって、リュウ・・・」

リュウの師匠であるグレルのペットであり、キラを姉のように慕うレオン。
シュウたち兄妹からは、小さい頃から「レオ兄」と慕われている。
リュウとの付き合いは１８年、ハンター歴１４年。
最強の一種といわれる猫科モンスターが故に、その力は最初から超一流ハンターだった。

「信じてるからな、レオン」

そんなリュウの言葉に、レオンは溜め息を吐く。

「はいはい、分かってるよ・・・」

「んで、リンクは？」

「今戻ってくるよ」

レオンがそう言ってから少し経つと、ギルド長室へと続く廊下へのドアが開いた。

現・副ギルド長で、リュウが新米ハンターの頃からの付き合いがあり、なお且つ親友のリンクが姿を見せた。

金髪に、相変わらずの童顔ぶり。

リュウと同じく今年で３９歳だというのに、シュウよりも幼く見えなくもない。

「おう、来たかリュウ。ほな、これ見てやー」

と、リンクがリュウに渡したものは師弟の組み合わせが書かれた紙だ。

シュウはリュウと一緒になってそれを覗き込む。

全体的にざっと目を通していく。

他の島と比べて明らかに女ハンターの人数が多いのは、他の島からも女ハンターが集まってくるからである。

その目当てはリュウまたはシュウか、レオンか・・・・・・というのが大半だ。

紙の一部に、動いていたシュウとリュウの視線が止まった。

カレンという新米女ハンターのところ。

試験官との実践テストで普通は１００点満中の得点が書かれるところに、『顔パス』と書かれている。

シュウとリュウが眉を寄せてリンクの顔を見ると、リンクが苦笑して小声で言った。

「あとで説明するわ・・・・・・」

それを聞いたあと、リュウが続けて紙に目を通しながら整列しているハンターたちに言う。

「俺がギルド長のリュウな。んでコレが息子のシュウ。こいつの弟子希望結構いるみてーだけど、こいつに弟子はつけねーから。あと俺も弟子はいらね。それから、あっちの黒猫ハーフの美少女は俺の娘ね。手ぇ出した奴は即クビだからヤロウ共は肝に銘じとけ」

すみません、こんなギルド長で・・・・・・。

と、シュウとリンク、レオンは苦笑するしかない。

リュウが続ける。

「んじゃ、師弟の組み合わせ発表する。1回しか言わねーから、ちゃんと聞いてろよ。1人の師につき、1人～2人の弟子な。まあ、一部は例外として、超一流ハンター・レオンのところはサラとカナエとアキコとミサキとミヨコと――」

「親父」

サラが刺々しい口調でリュウの言葉を遮る。

「レオンのところはサラとカナエとアキコとミサキと――」

「親父」

「レオンのところはサラとカナエとアキコと――」

「親父」

「レオンのところはサラとカナエと――」

「親父」

「レオンのところはサラと――」

「親父」

「レオンのところはサラ・・・・・・、な」

「はーいっ♪」

と、満開の笑顔になるサラ。

「くそっ・・・」と、リュウはぼそりと文句を言う。「2匹きりにしたくねーってのにっ・・・！」

「ったく」と、シュウは呆れたように溜め息を吐く。「どーしてそう、娘には弱いんだか・・・」

「フン」

と、ふて腐れ、リュウが苛々とした様子で指定の組み合わせを発表した。

「以上だ。文句ねー奴は早速仕事行け。文句ある奴は俺の前に出て来い」

誰も出て来ず、ハンターたちはギルドの出入り口へと向かっていく。

たとえ文句があったとしても、リュウに恐縮して出て来れなかっただろうと、シュウは思う。

サラとレオンを除く師弟たちがギルドから出て行くと、リュウがリンクに顔を向けた。

「んで？　この『顔パス』のカレンって女は何者だ」

「今日は来てなかったみたいやけど・・・」

「来てねえってどういうことだよ」

「のんびりなんかも。お嬢様やから」

「どこの」

「カレンってさー」と、サラが口挟んだ。「なーんか聞いたことあんだよねー」

「カレンだろ？　カレン・・・？」シュウが首を傾げて考える。「あれ・・・、何か聞いたことがあるよーな・・・・・・」

シュウとサラの顔を見て、リンクが言う。

「ほな、シュウとサラにヒントだしたる。カレンは葉月病院の・・・・・」

「あっ」シュウとサラが声をそろえた。「院長の孫娘！」

「ああ、それで顔パスな」リュウが納得しながら、溜め息を吐いた。「キラがおまえたち産む度にあそこの院長には世話になってっからなあ。でかい病院の孫娘が何でハンターに・・・・・・」

そんな疑問を口にしたリュウの顔を、シュウとサラがじっと見つめた。

「？　なんだよ」

「親父、覚えてねーの？」と、シュウ。「ジュリがあそこの病院で産まれたときのこと」

「ジュリが産まれたとき？」リュウが鸚鵡返しに訊いた。「何か変わったことあったっけ」

「すげー変な女が現れただろ。オレやサラと同じくらいの年の、真っ赤な髪したやつ」

「ああ、そういえばそんなガキが気付いたら俺の背にぶら下がっていたよーな」

「あー、それで僕も思い出したよ」そう言って、レオンが苦笑した。「あのときの子ね。覚えてるよ。リュウ、本当に覚えてないの？」

「詳しくは覚えてねーな」

「せやろなあ」と、リンク。「おまえはキラにそっくりなジュリにすっかり見惚れてたから」

「あー、それでか」なんて納得したあと、リュウはギルドの時計に顔を向けた。「じゃ、俺仕事行って来るわ」

「あ、待った。おまえ1人で大丈夫か？」

と、リュウを呼び止めて心配そうな顔になるリンク。
昔はリュウの助手としてリンクが一緒に働いていたらしい。
今日からはシュウもいないというのに、リュウに依頼される仕事の量は増えていた。

「大丈夫だ、心配すんな」リンクにそう言ったあと、リュウがシュウに顔を向けた。「気ぃ抜いて仕事すんじゃねーぞ」

「わかってんよ」

シュウが承知したあとは、リュウがサラとレオンに顔を向ける。

「いーか、サラの門限は午後6時な・・・！？　それまでに終わらなかった仕事はレオン1匹でやれよ・・・！？　それから決して遊ぶんじゃねえぞ・・・！？　仕事へ行くんだからな・・・！？　いいな・・・！？　余計なことすんじゃねーぞ・・・！？　分かったな・・・！？　怪我したら俺かシュウを呼べよ・・・！？　サラが怪我した場合はそっこー呼べよ・・・！？　いいな・・・！？　・・・・・オイ、返事は！？」

「はいはい」

サラとレオンが呆れたように返事をしたあと、リュウは足の速くなる魔法をかけて仕事へと向かって行った。

それを見送ったあと、サラが溜め息を吐いた。

「門限6時ってバッカじゃないの。嫌だっての」

「いや、一応きいてやれ、サラ」そう言って、シュウが苦笑した。

「それ守らないと怒られんのはレオ兄だから」

「うわあ、何て最悪な親父」

そう言って顔をしかめたサラの頭に、レオンの手が乗った。

「リュウはサラが大切で仕方ないんだよ。門限過ぎる前に、僕が家まで送るからね」

そう言って見せる優しいレオンの微笑みに、シュウとサラの瞳が恍惚とする。

「レオ兄、素敵・・・・・・」

昔からシュウやサラの憧れといえば、レオンなのだ。

俺様で我侭で自分勝手で横暴で鬼のリュウとは、似ても似つかない温厚篤実な性格で。

「えーと、うっとりしてるとこ悪いんやけどー」と、口を挟んだあと、リンクが苦笑した。「話戻ってカレンのことなんやけど。やっぱあれやんな？　彼女リュウの弟子希望やったんやけど、あれやん

な？　絶対あかんよな？」

リンクの質問に、シュウとサラ、レオンが深く頷いた。

シュウが苦笑する。

「親父は弟子つけねーけど、それ以前の問題だよな。そのカレンがハンターになったってことは、あの言葉は本気だったってことだろ？」

「だろうね。えーと、当時のカレンちゃん、病院の中でリュウに何て言ったんだっけ？」

レオンがリンクに訊くと、リンクが当時のカレンを真似て上目使いで言った。

「『ねえ、リュウさま？　あたくしが将来ハンターになりましたら、今の奥様と離婚して、あたくしと再婚してくれるかしら』・・・やで。なんちゅーこと言うガキやねんと思ったで、おれは」

「ま、親父に相手にされないだろーけどね」と、サラ。「ママにゾッコンじゃん、親父。たぶん鼻で笑われて終わるよ」

「それで終わればええんやけどな。ほんまにハンターになりにきたってことは、リュウのこと本気ってことやろ？　そう簡単に諦めへんと思うんやけど。んで、しつこくされたリュウがキレて大変なことになって・・・・・」

キレたリュウを想像して、リンクの顔が蒼白する。

「有り得るね」レオンが同意した。「ていうか、絶対そうなるよね。

そのカレンちゃんどうするの？　リュウの弟子がダメなら誰の弟子にするの？」

「もー、こうなったらさー」と、サラがシュウの顔を見た。「兄貴の弟子にすればいーじゃん」

「はぁっ？」シュウの声が裏返った。「なっ、何でオレなんだよ！？」

「だって親父と顔一緒だし、何とか文句言われずに済むと思って」

「だっ、だからってオレはごめんだ！　ただでさえ家に帰ればおまえたちの世話があるっていうのに！」

サラに続き、

「んー、シュウの弟子かあ。良いかもね」

と、レオン。

さらにリンクが、

「あー、ええかも。シュウ面倒見ええしなあ。リュウはシュウに弟子つけへん言ってたけど、おれがちゃーんと説得するで！　というわけでー・・・・・・」

シュウに集まる視線。

シュウは後ずさった。

「いっ・・・嫌だっ！　嫌だからなっ、オレは！　絶対嫌だからな

！」

くるりと身体の方向を変え、出入り口へと駆けて行ったシュウ。

出入り口のドア約３メートル手前まできたとき。

ガチャ・・・

ドアが開いた。

（やべっ、ぶつかる！）

そう思って急ブレーキをかけたシュウ。

何とか止まれたシュウの瞳に飛び込んできた少女は――。

「ごめんなさい、少しばかり遅れてしまいましたわ」

肩下５センチの赤い巻き髪。

「あら、ハンターさんたちこれだけなのかしら？」

俗に言うロリータファッションに実を包んだ小柄な身体。

「まあ、あなたは！」

気の強そうな赤茶色の瞳が、シュウを見上げて輝く。

「リュウさま・・・！」

いえ、シュウです。

「会いたかったですわあああああああっ！！」

投げ捨てられた白い日傘。

ピョーーーーン

と、小柄な身体が宙に舞う。

ガシッ

柔らかい腕がシュウの首に巻きついた。

ゴスッ

それと同時に頭に被っているボンネットのツバがシュウの顔面を直撃。

「――カハァッ！」

ドサッ・・・！

床に仰向けに倒れたシュウは、仰天して自分の上に乗っている相手の顔を見た。

見ていたサラたちの目も丸くなる。

「あら、ごめんなさい、リュウさま」

とか謝っておきながら、まるでシュウの上から避ける気配もない少女。

「あたくしのこと覚えていらっしゃるわよね？　そう、カレンですわ。ちゃーんとハンターになりましたのよ？　さあ、約束通り奥様と離婚してくださらない？」

うふふ、と笑う少女――噂のカレン。

「いや、オレは――」

リュウじゃなくてシュウだ。

そう言おうとしたシュウの言葉を、カレンが遮った。

「あら？　ヤ・・・ヤダ・・・・・・！　いっ・・・いやっ・・・・・・！！」

カレンの顔が見る見るうちに驚愕していく。

「コレ倅（せがれ）の方じゃなくってえええええええええええええ！？」

ビシィッ！！！

小さな手が、シュウの頬を張り飛ばした。

第2話　赤い髪、現る（後書き）

メールくれた方、ありがとうございましたーゞ（＊´∀`＊）ノ゛

第3話　喧嘩～前編～

――葉月町ギルドの中。

少女の悲鳴と打撃音が鳴り響いた。

ビシィッ！！！

「――んなっ・・・！」頬を殴られたシュウの目が丸くなる。「なっ、なにしやがるんだおまえ！？」

「お色気が足りないと思いましたら、倅（せがれ）の方でしたのね！　リュウさまとそっくりな顔しないでちょーだいっ！　紛らわしいわ！」

床の上に仰向けに倒れているシュウの上に跨り、きゃんきゃんと喚いているのは赤い髪が特徴的なカレンという少女である。

シュウの上から避けて立ち上がり、ゴテゴテとしたロリータファッションのスカートについた汚れをぱんぱんと手で払う。

（なんっなんだ、この女は）

込み上げてきた怒りを堪えながら、シュウは立ち上がって殴られた頬に治癒魔法をかけた。

カレンが自分の手を見て顔を歪める。

「痛っ・・・」

「・・・・・バカじゃねーの、おまえ。んな柔な手で殴っから。

ほら、手ぇ貸せ」

そう言いながら、腹の立てた相手に治癒魔法をかけてやってしまうシュウ。

（なんて悲しい性分なんだ、オレ・・・）

そんなことを自分に思って苦笑する。

「あとは？　痛いとこねーな？」

おまけに心配までしちゃったりして。

「ええ、ないわ」

カレンがそう答えたところで、ようやく呆然として見ていたサラとレオン、リンクが近寄ってきた。

落ちているカレンの日傘を拾い上げ、レオンがカレンに渡す。

「はい、どうぞ」

「あら、どうもありがとう」

そうレオンに笑顔を向けたあと、カレンが周りに立っているシュウたちを見上げて見回した。

「それで、リュウさまは何処にいらっしゃるのかしら？」

「親父ならもう仕事へ行った」シュウが答えた。「言っておくけどな、親父に母さんと離婚しろって言っても無理だからな」

「それは何故かしら？」

「うちの親父は母さんがいないと生きていけねー男なんだよ」

「代わりにあたくしがいれば大丈夫ですわ」

「いや、だからな？　他の誰でもなく、母さんじゃないとダメなんだよ、あの親父は」

「あたくしが、あなた方のお母様に劣るとでも？」

「は・・・？」サラの顔が歪んだ。「アタシのママがあんたに劣るとでも？」

「あら、劣るでしょ？　面白いこと訊くのねぇ」

「このっ・・・！」

かちんと来て、サラが手を振り上げる。
その手を、すかさずレオンが握った。

「サラ、駄目だよ」

「レオ兄っ・・・」

サラがレオンの顔を見上げる。
真剣なレオンの顔を見て困惑したあと、サラが小さく頷いた。

「・・・っ・・・は・・・い・・・・・・・」

「良い子だね」そう言って、レオンが微笑んでサラの頭を撫でる。
「それじゃ、僕たちも仕事行こうか。ね？」
サラが頷くと、レオンがサラの手を引いてギルドを後にした。
（ああ・・・、レオ兄って本当イイな・・・・・・）
なんてシュウは恍惚としてサラとレオンを見送ったあと、カレンに目を落とした。
「・・・んで、おまえの師のことなんだけど」
「リュウさまでございましょ？」
「親父は弟子つけねーんだよ」
「あたくし、リュウさまが良いわ」
「だから親父は――」
「なあ、カレンちゃん？」リンクが口を挟んだ。「リュウはな、ほんまに忙しい奴やから、弟子がおると仕事が終わらへんねん」
「あら、それはいけないわね・・・」
「せやろ？　というわけで、カレンちゃんはシュウの弟子ってことでええかな」
「う」

シュウの顔が引きつった。
カレンがじっとシュウの顔を見て考える。
「うーん・・・・・・」
嫌だと言ってくれ！
心の中、シュウは懇願する。
「うーん・・・・・・・」
頼むから！
「うーん・・・・・・・」
オレこれ以上、手ぇかかる奴の面倒みたくねえ！
「うーん・・・・・・。わかったわ」
え！？
「あたくし、この・・・シュウ？　でもよろしくってよ。顔だけならリュウさまですし」
何ィーーーー！？
シュウ、愕然。
「おー、良かった良かった」と、リンクが笑う。「ほな、おれも仕

事あるから。シュウ、よろしく頼んだで、カレンちゃんの師匠♪」

そういうことにされてしまったシュウである。

（オレって仕事中も誰かの世話に追われる運命なの!?　ねえ、そうなの!?）

リンクがギルド長室へと向かっていき、シュウはカレンと2人きりで向き合う。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・えーと、カレン？」

「なんですの？」

「おまえ、その格好でハンターの仕事ヤル気なの？」

「あたくしは見ているだけですもの」

「は？」シュウは眉を寄せた。「なんだそりゃ」

「危ないでしょう？」

「・・・・・・も、もしかしておまえ」

「なんですの？」

「まっったく、何の力も持ってないのか！？」

「持ってますわよ、炎魔法が使えますわ」

「へえ、炎使いか」

「ええ、それはもう偉大ですのよ」と、カレンが得意そうな顔になって言う。「あたくしのおじー様のおじー様のおじー様のおじー様のおじー様のおじー様のおじー様の」

と、いったん息を吸い、

「おじー様のおじー様のおじー様のおじー様のおじー様のおじー様のおじー様が、とーっても偉大な炎使いでしたのよ！」

「・・・・・。それ、おまえは力継いでんのか？」

「ええ、ほら」と、カレンが指先に小さな炎をおこした。「こんなことできちゃいますのよ？」

「・・・・・オイ」

「なんですの？」

「それしかできないのか？」

「ええ」

「・・・・・。おまえ、何でハンターになるなんて言ったの」

「リュウさまと1日中ご一緒したいもの」

「たっ・・・戦えねークセに何言ってんだ、おまえっ！　悪いこと言わねーから、今すぐハンターやめて帰れ！　ハンターっていうのは本当に危ねー仕事なんだからな！　帰れったら帰れ！」

「嫌ですわ。あなたの弟子になれば、絶対リュウさまにお会いできますもの」と、カレンがギルドの出入り口へと向かっていく。「さあ、お仕事に行きましょう？　あたくしの護衛よろしくね」

「なっ・・・・・・」

なんなんだ、この女は。

シュウは顔を引きつらせながら、カレンを追った。

これじゃ、本当に足手まといにしかならねーじゃねーか、オイ。しかも護衛よろしくねって、よろしくねって、何様だよ！？おまえ弟子の身分だろうがよ！？ふざけんじゃねーぞ、この――

ブスッ

「――グハッ！」

「あら、ごめんなさい」

「ちょ、おま・・・・・・！！」

カレンの日傘の先端が思いっきり腹に突き刺さり、シュウは身体

をくの字に折り曲げる。

「かっ、傘を差すときは人に向けるんじゃない！」

「あなたがあたくしの差す方向に立っていたのですわ」

「なっ、なんだと！？」

「謝りましたのに、うるさい男ですわね。だからお色気が足りないのですわ」

「意味わかんねーこと言ってんじゃねえ！」

「さあ、お仕事に行きましょ」

「そっちじゃねえ、こっちだ！」

シュウは言い、今日の仕事先へと向かう。

早歩きのシュウの背を、カレンは小走りで着いて来る。

「ちょっと！　お待ちになって！」

「ああもう、おせーなっ・・・！」苛々としつつも、シュウはカレンの歩く速さに合わせてやる。「散歩してんじゃねーぞ、オレはっ！　・・・・・・って、ん？」

シュウの足が止まった。

「なんですの？」

と、カレンがシュウの視線を追うと、こちらへと向かってくる人間と猫モンスターのハーフの5人組が目に入った。

シュウの妹である双子のリン・ランと、三つ子のユナ・マナ・レナである。

どうやら登校中らしい。

母親のキラに似てよく通る声をしているリン・ランの明るい声が、交互に聞こえてくる。

「良いか、ユナ・マナ・レナ♪」

「姉上たちの後を、離れずに着いてくるのだぞっ♪」

「おまえたちは今日初めて魔法学校へ通うからな♪」

「姉上たちが、魔法学校まで案内してやるぞ♪」

いや、案内されなくても学校までの道なんて分かるだろ・・・。

心の中で、シュウは苦笑して突っ込む。

というか、

（この今のオレの光景、リンとランに見られたらヤベー気がする）

そう勘付いても、遅かった。

リン・ランの黄金の瞳が、ばっちりシュウを捕らえ、声をそろえる。

「あっ！　兄う――」そして、黄金の瞳はカレンを捕らえた。「えーーーーーーー！？」

驚愕して、思わずといったように後方に飛び退いたリンとラン。
シュウとカレンを交互に指差して、交互に声をあげる。

「あ、兄上！？」

「ど、どういうことなのだ！？」

「そ、その女は一体！？」

「な、何者なのだ！？」

シュウよりも先に、カレンが答えた。

「あたくし、この男の弟子ですのよ」

「でっ、弟子だとぅ！？」リンとランが声をそろえ、シュウに詰め寄った。「どういうことなのだ、兄上っ！！」

「いや、なんか半ば強制的にこういうことになっちまって・・・・・・」

そう言って苦笑したシュウの顔を見たあと、リンとランがじろりとカレンを見下ろした。
交互に問い詰める。

「おい、小娘！」

「どういうつもりだ！」

小娘といっても、ハンターになれる年齢なのだから最低でも今年で１６歳であって、カレンはリン・ランよりも年上なのだが。

カレンが溜め息を吐く。

「何てうるさいメス猫たちかしら」

ブチッ

と、リン・ランの中で何かが切れた音。
シュウの耳にも聞こえた気がした。

リンとランが無表情になり、くるりと後方にいる三つ子に顔を向ける。

「ユナ・マナ・レナ」

「先に学校へ行っていろ」

今がどういう状況になっているのか何にも分かっていない三つ子が承諾し、学校へ向かっていく。
その背を見送ったあとは、リン・ランの瞳はカレンを向けられる。

「おい、小娘」

「もう一度言ってみろ」

リン・ランにそう言われ、カレンがもう一度はっきりとした口調

で言った。

「うるさいメス猫。黙りなさい。きんきんとした声に耳が腐ってしまいそうだわ」

ブチブチィッ・・・・・・！！

リンとランの中で、さらに何かが切れる音がした。

「おい、小娘」

「よーく聞け」

「わたしの名をリン」

「わたしの名をラン」

「葉月島葉月町魔法学校・水学部、今日から3年1組」

「同じく葉月島葉月町魔法学校・水学部、今日から3年2組」

「最強人間の父上と」

「最強モンスターの母上を受け継ぎ」

「この運動能力」

「この魔力」

「本物ぞ！」

「食らえ、小娘！」

カレンにかざされた2つの手。

「ばっ・・・・・・！！」

葉月町（こんなところ）で、魔法を放つんじゃねえ！！

なんてシュウが言う間もなく、リン・ランが声をそろえた。

「ダイヤモンドダスト！！」

大気中の水蒸気が巨大な氷の結晶を作り、カレン目掛けて降り注いだ。

第４話　喧嘩～中編～

「ダイヤモンドダスト！！」

大気中の水蒸気が巨大な氷の結晶を作り、カレン目掛けて降り注ぐ。

ズドドドドドーーッ！！！

「あっ・・・！」

魔法を放ったリンとランの顔が、狼狽していく。

「あっ、兄上ーーーーーーっ！！！」

巨大な氷の結晶の雨を浴びたのは、瞬時にカレンを庇ったシュウだった。

シュウの身体が氷の山の下敷きになってしまっている。

「や、やばいのだ、ラン！」

「や、やばいのだ、リン！」

「ど、どうしよう、ラン！」

「ど、どうしよう、リン！」

「そ、そうだ！　わたしたちは水使い！」

「そ、そうだ！　水をかけて溶かしてみるのだ！」

魔法で水をおこし、氷の山の上からかけてみたリンとラン。

「ふにゃあああああ！　やばいぞ、ラン！」

「ふにゃあああああ！　やばいぞ、リン！」

「な、何故なのだっ！」

「や、山がでっかくなってしまったぞ！」

「どっ、どうすれば良いのだあああ！」

「あっ、兄上があああああああっ！」

おろおろとするリンとラン。

そのとき、

「ゴルアアアアアアアア！！」

というシュウの声と共に、氷の山が崩れた。

氷の山の中からシュウが姿を現し、リンとランが声を高くする。

「おおーっ」

「おおーっ、じゃない！」

「にゃっ」

シュウにデコピンされ、リンとランが両手で額を押さえる。

「リン、ラン！　葉月町（こんなところ）で魔法を放つんじゃない！　危ないだろうが！」

「ふにゃあああああん！　ごめんなさあああああい！」

「ああもう・・・・・・」リンとランに泣かれ、シュウの気が抜ける。「反省したならもういいから、早く学校行け。遅刻するぞ」

シュウが頭を撫でてやると、リンとランが涙を拭って魔法学校へと駆けて行った。

そのあとシュウは慌ててカレンを抱き起こす。

「おい、大丈夫か！？」

カレンがシュウの腕に支えられながら立ち上がり、声をあげる。

「信じられませんわ！　なんってことをするのかしら、あなたの妹たちは！」

「悪い・・・・・・」シュウが言いながら、カレンの身体をあちこち見てチェックした。「怪我、してねえ？　痛いとこは？」

「・・・・・・ありませんわ」

カレンはシュウの心配そうな顔を見ながら言った。

ぼそりと呟く。

「優しいのね・・・・・・」

「ん？」シュウがカレンの声を見た。「何だって？　オレ、母さんの聴力そんなに継いでねーから人間並なんだわ。もう1回言ってくれねえ？」

「なんでもありませんわ」そう言い、カレンが歩き出した。「さあ、行きましょう」

「・・・いや、だからそっちじゃねえって。もしかして、おまえ方向音痴のせいで今日遅刻したのか？」

「うっ、うるさいのだわっ・・・！」

カレンが顔を赤くして眉を吊り上げた。

「図星かよ」

「う、うるさいと言っているでしょうっ・・・！」

「歩く速さ合わせてやっから、ちゃんと着いて来いよ」

「偉そうにっ・・・」

そう文句を言ったあと、カレンは少しだけ頬を染めてシュウの一歩後ろを着いて行った。

昼時。
いったん家へと帰ってきたリュウは、キラとミラ、ジュリと一緒に昼食を食べながら時計を見た。

（おせーな、シュウの奴・・・。仕事手こずってんのか？）

リュウの様子を見て、キラが言う。

「遅いな、シュウは」

「ああ」

「だが、シュウはリュウと私の力をよく継いだ。無事であろう」

「そうだな」

そう同意したリュウだったが本当は心配で仕方がない。
そんなことは、妻であるキラにはバレていた。

素直になれないリュウに、キラはこう言ってやる。

「でもまあ、私はシュウが心配だ。リュウ、食べ終わったらシュウに電話してみてくれるか？」

リュウが承諾した。

食べ終わったあと夫婦の寝室へと向かい、リュウは携帯電話を取ってシュウに電話をかける。
シュウが出るまでに、結構な回数の呼び出し音が鳴った。

「も、もしもしっ、親父っ・・・？」

「どうかしたのか、シュウ――」

リュウの声を遮るように、リュウの耳に女の声が聞こえてきた。

「リュウさま!?　リュウさまですの!?　ちょっと、あたくしに変わりなさいっ！」

リュウは眉を寄せた。
何でシュウが仕事中に女といるのか。

「てめ・・・、シュウ」リュウの顔が引きつる。「仕事さぼってデートとはイイ度胸してやがる・・・・・・！！」

「ばっ・・・！　ちっ、ちげーよ、親父!!　リンクさんからまだ何も聞いてねーのかっ!?」

「？　何だよ」

「弟子ができちまったんだよ、オレに！　しかも、今朝噂してたカレンがよ――って、オイ！　離せコラっ！　カレン！」

シュウの声に続いて、カレンと思われる女の声が聞こえてくる。

「嫌ですわ！　あたくしもお屋敷へと連れて行きなさいと言ってい

るでしょうっ！」

「グエェェェ！　くっ、首をじめるなあぁぁぁぁ・・・！！」

どうやらシュウはとりあえず無事らしい。

それが分かったリュウは、時計を見て言った。

「んじゃ、俺はもう仕事行くから。おまえも早く帰ってきて飯食えよ。じゃーな」

リュウは電話を切り、部屋を出て玄関へと向かって行った。

見送りのキラとミラ、ジュリに言う。

「シュウの奴、弟子つけられて仕事に手こずってたみてーだな」

「ほお」キラが声を高くした。「そうか、弟子か」

「ああ。葉月病院の院長の孫娘の、カレンっていう」

「え？」

と、ミラの眉が寄った。

「もしかしたら、一緒に帰ってくるかもな。じゃ、行って来る」

そう言ってリュウがキラの唇にキスし、ミラとジュリには頬にキスし、仕事へと向かって行った。

そのあと、ミラが眉を寄せたままキラを見た。

「ねえ、ママ？」

「ん？」

「パパの言ってた葉月病院の孫娘のカレンさんって、会ったことあるわよね？」

「そうだったか？」

「あるじゃない。ほら、ママがジュリを産んだときに・・・・・・って、そっか。ママはあのとき会ってなかったわよね」

「ミラたちは会ったことあるのか」

「ええ・・・」と、ミラが苦笑した。「お兄ちゃん、連れて来たらどうしよう・・・・・・」

ミラのそんな不安から約１５分後。

的中。

シュウが背に真っ赤な髪をした少女をぶら下げて帰ってきた。

「た、ただいま・・・・・・」

「おかえり、シュウ」

と、キラ。

シュウの背から降りたカレンを見て、にっこりと笑う。

「いらっしゃい。そなたがシュウの弟子のカレンだろう？　今、昼ご飯を作るから、食べて行くと良いぞ」

そう言って、キラがキッチンへと向かう。

（ああ・・・、何事も起きませんように・・・・・・）

シュウがそんなことを願いながらカレンと共に食卓へと向かうと、そこにミラがいた。

上手く作れていない笑顔をカレンに向ける。

「い、いらっしゃい、カレンさん。ゆっくりしていってね」

「ええ、そうさせていただくわ」そう言い、カレンが席に着いた。

「あなた、名前は？」

「え、えと、ミラです・・・」

「そう。ミラ、紅茶をくださらない？　ダージリンが良いわ」

ミラの笑顔がさらに引きつった。

「ご、ごめんなさい、カレンさん。今ダージリンは切らしていて・・・・・。あの、アッサムならありますけどっ・・・」

「仕方ないわね」と、カレンが溜め息を吐いた。「アッサムでも良いわ。早くくださらない？　あたくし、慣れないことして疲れているのよ」

「は、はい、ただいま・・・」

そうカレンに言ったあと、ミラがシュウに強張った顔を向けた。
低い声になって訊く。

「お兄ちゃんは？」

「オレは――」

「わかった、水ね」

「お、おう・・・・・・」

シュウが頷くと、ミラがキッチンへと向かって行った。

（な・・・、何事もなく終わらねー気がしてきた・・・・・・）

というか、何事もなく終わらなかった。

ミラが淹れてきたアッサムティーを一口飲んで、カレンが顔をしかめる。

「ミラ、あなた紅茶を淹れるのがヘタクソね。マズイわ」

「ご・・・ごめ・・・ごめんなさいっ・・・・・・・！？」

ミラの笑顔が引きつる。
そりゃもう、笑顔とは言えないくらいに。

さらに、キラが本日の昼食であるシュウの好物・ラーメン（醤油）

を運んできて。

「あら・・・、これは何かしら、キラさん？」

「ん？　そうか、そなたはラーメンを知らなかったのか」

「らあめん？　聞いたことはありますわ」

「こうな、箸ですすって食べるのだぞっ♪」

と、キラが人差し指と中指を箸に見せ、麺をすする真似をして見せた。

それに倣ったカレン。

「きゃっ」

と、声をあげた。

ラーメンの汁が服に飛んで。

「ヤダ！　お洋服が台無しだわ！」

「だ、大丈夫かっ？」

キラが慌てて近くにあった布巾を取り、カレンの洋服の汚れた箇所を拭き取る。

「ちょっと、何をするのよ！」と、カレンがキラの手を跳ね除けた。

「もっと清潔なもので拭いてちょうだい！　信じられないわ！　リュウさまはこんなところにお住みになってるというの！？」

ここでミラ。
スマイル完全消去。

「いーーー加減になさってくれません、カレンさん？」

「あら、何がですの？」

「とてもじゃないけど、お兄ちゃんのお弟子さんの身分とは思えない態度ですね」

「とてもではないけど、お客様に対する態度ではないわね、ミラ？」

「なっ――」

「レディがそんなことでは、お嫁にいけなくってよ？　キラさんはどんな教育をなさっているのかしら。呆れるわ」

ブチッ・・・

前話のリン・ランに続き、ミラからもそんな音が聞こえた。

「ミラ！」

落ち着け！

シュウがそういう前に、キラがミラの前に出た。

「ミラ、下がっていろ」

「ママっ・・・！」

「ほら」

そう言ってミラに余裕の笑顔を向けるキラ。

ミラを後方に下がらせた。

（おお、さすが母さん！　見た目は２０歳前後でもさすが大人だぜ！）

冷静なキラの様子を見て安堵したシュウ。

キラがカレンに言う。

「気を悪くさせてしまったようで悪かったな、カレン。申し訳ない」

「まったくですわ。ちょっと、キラさん？　このらあめんというものは下げてちょうだい。代わりにスパゲッティ・ボンゴレをくださるかしら」

「わかった。ちょっと待っててくれるか？」

そう言い、キラがカレンのラーメンの器を持ってキッチンへと向かっていく。

その途中でのこと。

「まったく、何なのかしら、この家」と、カレン。「リュウさまがお気の毒で仕方がないわ。さっさと離婚させてあげなくてわ」

キラの足がぴたりと止まった。

ゆっくりとカレンに顔を向ける。

「今、何と？」

カレンが声を大きくして言う。

「リュウさまをあなたと離婚させてあげなくてわ、と言っているのよ。リュウさまはあなたよりあたくしと一緒になる方が幸せになれるのだわ」

なんてこと言うんだ、この赤毛女は・・・・・！

シュウは顔面蒼白した。

誰に喧嘩売ってんだ、オイ！

オレの母さんにかよ！？

最強を謳われるブラックキャットの中でも、飛びぬけて最強のブラックキャット・キラ母さんにかよ！？

おまえ正気かよ！？

どんな度胸してんだよ！？

自慢じゃねーが、ソコまで言われて大人になれるよーな母さんじゃないぜ！

ほーら、見ろ！

世間は平和だってのに、うちだけ地震起きはじめたぜ・・・・・！？

ドドド・・・

屋敷内、地震のような地響きが起きはじめる。

ドドドドドド・・・

「マ、ママ！」さすがにやばいと思ったミラが、ジュリを守るように腕に抱いた。「お、落ち着いてママ！」

「母上は、落ち着いているぞ、ミラ」

一体どこがだろう。

屋敷が横揺れを始める。

ドドド・・・！

ミラが叫ぶ。

「おっ、お兄ちゃん!!　早くその人連れて出て行って!!　お家壊れちゃうよ!!」

「お、おう!!」

シュウは承諾し、好物のラーメンを残してカレンを抱きかかえた。

カレンが鼻で笑って言う。

「レディとはいえ、所詮はモンスターね。野蛮だわ。さっさと山へお帰り」

この、バカ女がーーーっ！

シュウはさらに蒼白した。

ブチブチブチィ・・・！！！

そんな音が聞こえた。

ばっちり聞こえた。

キラから。

「こぉぉむぅぅすぅぅめえぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

ズドド・・・！！

ズドドドドドドドドドド！！！

屋敷が激しく縦揺れする。

ガシャシャシャーーーン！！！

おまけに全室の窓ガラス粉砕。

「切り裂いてくれるわあああああああ！！！」

鋭い爪を光らせ、キラがカレンに飛び掛った。

「うっわあああ！！」と、カレンを抱きかかえているシュウが飛び避け、慌てて玄関へと駆けて行く。「母さん、落ち着いてくれえええええええええ！！」

「お願いママ、落ち着いてえええええええええっ！！」

ミラがキラを足止めいていてくれる間に、シュウは屋敷を飛び出した。

第４話　喧嘩～中編～（後書き）

メールくれた方ありがとうございました！
執筆の励みになりますー＾＾

第5話　喧嘩～後編～

シュウは走った。
カレンを腕に抱えて走った。
死に物狂いで走った。

葉月町の中央、息を切らして母親・キラの銅像の前で四つん這いになる。

（や・・・屋敷、壊れてませんよーに・・・・・・）

まったくキラは恐ろしい。
危うく屋敷が壊れるところだった。

そして、キラに喧嘩を売るこの女――カレンも恐ろしい。

「お、おい、カレン」

「なんですの？」

と、カレンが白い日傘を差しながら訊いた。

「死にてーのか、おまえっ・・・」

「死にたくありませんわよ？」

「だったら母さんに喧嘩を売るなっ！　ていうか、オレの家族に喧嘩を売るな！　一番弱いミラだって、おまえ程度殺せちまうぞ！」

「レディのくせに、可愛らしくないのね。あなたあたくしの護衛でしょう？　しっかり守りなさいね」

「おま――」

「ねえ、お腹が空いたわ。高級レストランのフルコース食べに連れて行ってちょーだい」

「んなだらだら食ってる暇なんてねえよっ」

「あたくしは食べたいと言っているの。早く連れて行って」

「だから――」

「ああほらっ・・・」と、カレンがふらふらとシュウに身を預けた。

「空腹で倒れてしまいそうだわっ・・・・・・」

いや、おまえ演技だろ。

そう心の中で突っ込みながら、シュウは溜め息を吐いて携帯電話の時計を見た。

（まあ、いいか・・・。オレの仕事が終わるの遅くなるだけだ）

シュウはカレンを連れて、高級レストランへと向かった。

魔法学校に入学して初日。
ユナ・マナ・レナの三つ子は、午後3時過ぎに下校していた。

ユナが泣きじゃくっている。

「えぐっ・・・えぐっ・・・1年生のうちは学部関係ないのにっ・・・！　何であたしだけ別のクラスになっちゃったのっ・・・？　マナとレナは一緒なのにっ・・・！」

「もー、泣かないでよ、ユナ。大丈夫だよ！」と、レナが笑う。「別のクラスって言っても隣なんだし、休み時間になったら毎回遊びに行くし！　ね、マナ？」

寡黙なマナが、静かに頷いた。
そのあと、遠くを見て口を開く。

「・・・あ・・・」

「え？」と、ユナとレナがマナの目線を追った。「あ、兄ちゃん」

ユナ・マナ・レナの足が止まった。
ついでにユナの涙も止まった。

3匹で顔を見合わせ、レナが言う。

「兄ちゃん、今朝一緒にいた女の子といるね。あの女の子、兄ちゃんの弟子って本当だったんだ」

「みたいだね」と、ユナ。「あの女の子、可愛いなあ。お姫様みた

いで」

「・・・可愛いね・・・・」マナが同意した。「・・・あのほっぺ・・・」

ほっぺ・・・。

ユナとレナがカレンの頬に視線を向ける。

プニプニ・・・・・・・（ぽっ）

なんて思っていたときのこと。

シュウがユナ・マナ・レナに気付いた。

「おー、おまえら今帰りかー」

と、シュウが一緒にいる女の子――カレンと共に、近づいてきた。

3匹でシュウの顔をじっと見上げる。

「？　何だよ」

「兄ちゃん」レナが訊く。「その女の子のどこが好き？」

「は？」

「ほっぺ？」

三つ子に声をそろえられ、シュウは眉を寄せる。

「ほっぺ・・・？」と、隣にいたカレンの頬に顔を向けたシュウ。
「・・・・・うまそうだな、オイ」

「しっ、失礼ですわっ！」

カレンが顔を赤くして眉を吊り上げ、シュウの足を踏んだ。

「いてっ！　なっ、なんだよ褒めてんのにっ！」

「褒め言葉になっていないのですわ！」

「いでででででっ！　ヒールでぐりぐりすんなっ！」

シュウとカレンの様子を見て、三つ子が声をそろえる。

「仲良しだね」

カレンが三つ子に顔を向けて、声を裏返した。

「なっ、仲良しっ！？　そ、そんなわけないでしょうっ！？　バカなこと言わないでちょうだいっ！」

「ごめ・・・んなさ・・・っ・・・・」

と、ユナが涙ぐむ。

カレンが続けた。

「良いこと？　あたくしはこのシュウではなくて、リュウさまを想っているのですわ！」

「えっ・・・？」ユナが驚いた顔をしてカレンを見た。「パ・・・パパが好きなのっ・・・？」

どうやら、ジュリが産まれたときにカレンと出会ったことを覚えていないらしい三つ子。

カレンが続ける。

「そうよ、リュウさまよ！　リュウさまは離婚して、あたくしと再婚するのですわ！」

「えっ・・・？」

ユナの瞳にさらに涙が溜まる。

カレンが、ふふん、と笑って続ける。

「あなたたちはリュウさまに捨てられるのよ。今のうちにせいぜい仲良し親子やってなさい」

「ふっ・・・ふにゃあああああん！」ユナがついに泣き出した。「パパはっ・・・パパはあたしたちのこと捨てたりしないもおおおおん！」

「あー、よしよし！」シュウが慌ててユナの頭を撫でる。「当たり前だろ、ユナ。うちの親父が可愛い娘のおまえたちを間違っても捨てるわけがねえ」

「そうだそうだ！」

と、すっかり腹を立てたレナが声をあげた。
カレンを指差して言う。

「あんた、バカなこと言わないでよね！」

「バカはどっちかしら。あたくしがせっかく、これから起こる現実を教えてあげているというのに・・・」

「そんなわけないでしょ！　パパはママのことしか愛せないんだからね！」

カレンが鼻で笑った。

「笑わせないでちょーだい。先ほどあなたたちのお母様にお会いさせていただきましたけど、とてもではないけれどリュウさまと釣り合うとは思えませんわ」

「は！？　ママほどパパに釣り合う女の人いないよ！　あんた、あたしたちのママのこと悪く言う気！？」

「リュウさまがあーんな野蛮なモンスターなど、愛するわけがないのですわ」

「バッカじゃないの！　パパとママの愛の結晶を目の前にして、何言ってんの！？　このチビデブ！！」

そして熱を増す喧嘩。
シュウが口を挟む隙なく、レナとカレンが言い争う。

「チッ、チビデブですってぇーーー!?　もういっぺん言ってみなさいよ、この白髪頭!!」

「だっ、誰が白髪頭だ!　銀髪って言ってよね!」

「銀髪も白髪も一緒なのですわ!　まるで老婆ね!」

「なっ、何だとぅ!?　焼いたモチみたいにぱんぱんの顔してるくせに!」

「なっ、何ですってぇーーー!?」

「ぷにぷに二の腕!　ムチムチ太もも!」

「きゃーーーっ!!」カレンが甲高い声をあげた。「信じられないのですわ!　黙りなさい!!」

「貧乳!!」

「なっ、なっ、なんですってぇーーーーー!?　もう許さないのですわ!!」

ああ、何だろうこの子供の言い争い・・・。

シュウは苦笑しながら、ようやく割って入った。

「はいはいはいはい。落ち着け、おまえら。今朝といい、葉月町(こんなところ)で迷惑だぞ」

「兄ちゃん邪魔しないでっ!!」

シュウの腕に押さえられ、じたばたと暴れるレナ。
そんなレナの肩を、マナがぽんと叩いた。

「帰ろう・・・」

「マ、マナ・・・・・・」

レナはいつでも無表情なマナの顔を見つめたあと、頷いておとなしくなった。
泣いているユナの手を引き、家へと向かって歩いていく。

（ああもう、また余計な時間食っちまったじゃねーか・・・・・・）

と、シュウが携帯電話の時計で時刻を確認して溜め息を吐いたときのこと。

まだこの場にいたマナが、カレンの顔をじっと見て呟いた。

「性格ブス」

うわ、すげえ・・・。

シュウの顔が引きつる。
衝撃を受けて硬直しているカレンの脇を、マナが何事もなかったかのように通り過ぎていく。

（ど・・・、どれからフォローしてやろう・・・・・・）

と、シュウはカレンに目を落とした。

「え・・・、えと・・・、カレン？」

「・・・・・・なんですの」

「あ、あれだぜ？　おまえたしかに小さいけど、デブじゃねーぞ？　うちの女たちは華奢だけど、おまえのその気持ち良さそうな頬とか二の腕とか太ももとか・・・って、太ももは見えてねーから知らねーけど・・・・・・、オレはいいと思うけど？　女っぽくて」

「・・・・・・」

「それに貧乳だって――」

「貧乳言わないでちょうだい」

「わ、わり。その・・・、ない方が可愛いと思うぜ？　オレは・・・」

「・・・・・・リュウさまは？」

「え？」

「リュウさまもそう思っているの？」

「えっ？」

シュウの声が裏返った。

や、やべえ。

親父すーげー巨乳派・・・！

嘘も方便というし、ここで嘘を吐いてやった方がいいのか？
いや待て、カレンはすでに巨乳の母さんに会ってんだ！

ま・・・、まるで説得力ねえ！
や、やべえ。
どうしよう・・・。

カレンがシュウの顔を見上げる。
上目遣いでシュウを見つめるその瞳にはちょっと涙が浮かんでいる。

「う・・・」

ま、まずい。
泣くかも。

シュウは慌てて言った。

「いいじゃねーかっ・・・、親父のことなんかっ・・・！」

「良くないのですわ」

「うっ・・・、うるせえっ！　乳はない方が可愛い！　可愛いったら可愛い！　おまえは可愛い！！」

なんじゃそりゃーーーっ。

自分で言っておいて、シュウの顔が引きつる。

質問に対して、なーーんの答えにもなってねーぞ、オレ。
しかも何だ、オイ。
この自分の意見を押し通す強情っぷりはよ!?

まるで親父じゃんよ!?
駄目じゃんよ!?

もしかしてオレ、外見だけじゃなく中身も親父に似てんの!?
似てきてんの!?

うーわー。
オレの未来、すげー不安だぜ!

――って、話ずれてるぜ!

シュウは、はっとして再びカレンを見た。

カレンが俯いている。
シュウに聞こえないように呟いた。

「・・・あり・・・がとう・・・・・・・」

「え?　何?」

「何でもないのですわっ!」

そう言ってシュウを見上げたカレンの顔は、元気を取り戻していた。
どうしてかは分からなかったが、シュウはほっと安堵して笑った。

「そうかよ」

「ええ。さあ、次のお仕事へ向かうのですわ」

「おうよ。早くしねーと仕事終わるの深夜になっちま――って、おいカレン。そっちじゃねえって。おまえ本当、激しい方向音痴だな・・・」

「うっ、うるさいのです・・・わーーーーーっ!?」

「わーーーーっ!?」突然叫んだカレンに、思わず驚いたシュウ。「びっ、びっくりすんな、おまえ。どうしたんだよ?」

と、カレンの目線を追ったシュウ。

「――!?」

顔面蒼白した。

(つ・・・ついに)

ごくりと唾を飲み込む。

(ついに会っちまったーーーーーーーーーーっっっ!!!)

第5話　喧嘩～後編～（後書き）

最近忙しくなってきたため、少し更新ペース落ちてしまいそうです・・・・・・orz

申し訳ございません＞＜

第6話　告白の前日

ついに遭遇してしまった。
極力避けていたシュウだったのに。

カレンと、リュウの接触を。

恐らく次の仕事への移動中だろうリュウ。
足の早くなる魔法をかけ、車道をどの車よりも速く駆けて来る。

「きゃあああああ！！　リュウさまあああああああああああ！！」

黄色い声をあげ、カレンが飛び跳ねる。

シュウとカレンの近くまで走ってきたリュウが、車道と歩道を遮る柵をぴょんと乗り越えた。
シュウの脇で急停止。

ゴスッ！！

「いってえぇ・・・！」

いきなりリュウの拳骨を食らい、シュウは頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「何、ちんたら歩いてんだおまえは！　そんな暇ないだろうが！
昼飯はちゃんと食ったんだろうな！？」

「く、食った・・・」

「ならさっさと仕事行け！　じゃーな――」

「リュウさま！」カレンが慌てて声をあげた。「お待ちになって、リュウさま！！」

「ん？」どうやら今になってカレンに気付いたリュウが、カレンに目を向けた。「ああ、葉月病院院長の孫娘でシュウの弟子の・・・・・」

「カレンですわ！」

「そうか」

と、言うなり猛ダッシュでその場を去っていったリュウ。

「えっ！？　ちょっ！？　お待ちになってえぇぇぇぇぇぇぇ！？」

そうカレンが慌ててリュウに手を伸ばしたときには、リュウの姿はすでに夜空に浮かぶお星様サイズ。

（よし、何事も起きなかった）

そう安堵したシュウだったのだが。

カレンがシュウを見上げて喚く。

「ちょっと、シュウ！　早くリュウさまを追いかけて！」

「ばっ・・・、バカ言うなっ。あんなバケモノの足に追いつけるかよ」

「追いかけてったら、追いかけて！」

「無理だ。ていうか、見てただろ、さっき。オレも仕事行かねーと怒られるんだよ」

「嫌っ！！　追いかけて！！」

「ああもう、ワガママな女だな！」

「やっと」必死なカレンの瞳に、涙が浮かんだ。「やっとお会いできたのですわ・・・・・・！」

う・・・。

泣かれる・・・。

シュウはカレンの頭の上に手を乗せた。

（こいつ、本気で親父のこと好きなんだな・・・・・・）

そんなことを思って、シュウは小さく溜め息を吐く。

「分かったよ。そうだな・・・明日にでも親父に会わせてやるから。今は我慢してくれよ」

「・・・・・約束してくださる？」カレンが上目遣いでシュウを見上げる。「明日、必ずリュウさまに会わせてくれるって・・・・・・」

「ああ。約束する。約束するから、今は仕事行こうぜ」

カレンが頷いて承諾した。

暗くなる前にカレンを家へと送ってやり、自分は深夜に仕事を終えてやっと帰宅したシュウ。

屋敷の中はもう寝静まり帰っていた。

昼間に母親・キラが粉砕した全室の窓は、どうやらガラス屋に直してもらったようだ。

（よくたった1日で直してもらったもんだ。親父の権力か。すげーな、親父は・・・・・・）

そんなことを思いながら、シュウは暗いリビングのソファーに寝転がった。

きっとキッチンにキラやミラが作った晩ご飯が置いてある。

でも、あまりの疲れに食事が咽を通らなそうだった。

（飯ちゃんと食わねーと、親父にどやされる・・・。食わねーと・・・・・）

そう思っているのに、瞼が閉じていく。

（ああ・・・、すげーな、親父は・・・。オレよりずっと仕事の数多い・・・のに・・・・・・・）

起き上がることができず、夢の中に入っていったシュウ。

それから少しして、リビングの電気が付いた。

（やーっと帰ってきたか）

と、シュウの父親であるリュウは溜め息を吐いた。

ソファーで寝ているシュウのところへとやってきて、死んだように眠っている息子の寝顔を見つめる。

（青い顔しやがって・・・・・・）

リュウはシュウの身体を揺すった。

「おい、シュウ。起きろ」

起きる気配のないシュウ。

リュウはもう一度身体を揺する。

「シュウ、起きろ。こんなところで寝てんな」

やはりシュウは起きない。

「まったく、仕方ねえな・・・・・・」と、リュウは溜め息を吐いた。「世話の焼ける息子だ・・・・・・ぜっ！！」

ドスッ！！

「――ガハァッ！！」

腹に衝撃を受け、シュウの頭と足が浮く。

一気に夢から現実へと引き戻されたシュウは、腹を抱えてリュウの顔を見た。

「おっ、親父・・・、い、今何した・・・！？」

「カカト落とし？」

「ふっ、ふざけんなっ・・・！！」

「いてーの？」

「当たり前だろうがっ・・・！！」

「何だよ、力抜いてやったのに。だらしねえ」

そう言いながら、リュウがシュウの足を避けてソファーに座った。

シュウが重たい身体を起こして体勢を整えると、リュウが訊いた。

「こんな時間まで仕事に手こずった理由は何だ」

「いや、その――」

「弟子か」リュウがシュウの言葉を遮った。「あの葉月病院院長の孫娘のカレンっていう。昼間会ったときは急いでたから大して気にしてなかったが、あの女は本当にハンターになる気あんのか？」

と、眉を寄せてリュウが訊いた。

きっとカレンの服装を思い出して言ったのだろう。

なんせ、ハンターという戦いばかりの仕事にも関わらず、ロリータファッションだったから。

リュウが続ける。

「そのカレンのせいで、倍近く時間食ったんだろ？」

シュウは否定できなかった。

実際、うろちょろとするカレンを見張ったり守ったりしていなければ、仕事はずっと早かったし、ここまで疲れなかっただろう。

移動だって、カレンがいなければその3倍のスピードで出来た。

かといって、はっきりと肯定もできなかった。

リュウに一途に恋するカレンが、リュウに悪く思われてしまう気がして。

もちろん、リュウとキラの離婚を望むカレンの味方をしているわけではないが。

ただ、可哀相だと感じた。

シュウの様子を見て、リュウは肯定したと判断した。

「なら、カレンは別の師につける。俺はもともとおまえに弟子つける気なかったしな」

「いや、親父っ・・・！」シュウは慌てて口を開いた。「か、構わ

ねーから、オレはっ・・・。弟子がいてもっ・・・・・・」

昼間のカレンの必死な顔が、シュウの脳裏に浮かぶ。
カレンがシュウの弟子をやめたら、カレンはますますリュウに会えなくなってしまう。
あんなにもリュウに会いたがっているのに。
そう思うと、やっぱり可哀相で。

眉を寄せたリュウが口を開く前に、シュウは続けた。

「そ、それでさ、親父。明日、少し時間あっかな」

「明日なら・・・まあ、午前で仕事終わらそうと思えば終わっけど？」

「じゃあ、昼過ぎからは家にいるよな？」

「ああ」と、リュウがじっとシュウの顔を見た。「カレン連れてくると、俺の可愛い黒猫（キラ）と娘たちが機嫌悪くなんだけど？」

「う・・・。き、聞いたのかよ。今日何があったのか・・・・・・」

シュウは苦笑した。

「いや、何があったまでかは聞いてねーが。そろって不機嫌そうにカレンの名を出してたからよ。キラが全窓ガラス粉砕したのも、カレンが関わってんじゃねーの？」

「・・・・・。ごめん、窓ガラス・・・」

「ガラスくらい気にすんな、大したことねえから」と、リュウがシュウの肩をぽんと叩いた。「あとで金返せよ」

「うん・・・――って、オレが払うのかよ！？」

シュウが仰天してリュウの顔を見ると、リュウがきっぱりと答えた。

「当たり前だろうが。カレンが原因だと分かったら、師であるおまえの責任だ」

「う・・・・・・」

たしかにリュウの言う通りなので、シュウは抵抗できず。

リュウが続ける。

「んで、ガラス代のことなんだけど。大量購入割引で安くしてもらったんだぜ」

「へ、へえ？」シュウはごくりと唾を飲み込み、「い・・・いくら・・・・・・！？」

「９００万」

「たっ、たけぇーーーーっ！！！」

「一応一流ハンターなんだからそう時間かかんねーで返せるだろ」

「そ、そうかもしれねーけどっ・・・」

「利子は十日で一割ね」

「ハァ!?　ちょっ、待っ――」

「俺って闇金デビューもできるんだぜ」

「自慢げに言ってんな!!」と、リュウに突っ込んだあと、シュウは訊いてみる。「お、おい、親父。このオレの立場が、もしサラでも同じことさせてたよな・・・!?」

そんなシュウの問いから数秒後。
リュウの顔が驚愕していった。

「そっ・・・、そんな鬼畜なことを俺が娘にさせるわけねえだろ!?　なっ、何考えてんだ、おまえ・・・・・・!?」

「あっ、あんたこそ何考えてんだよ・・・・・・!?」シュウの顔も驚愕する。「この息子と娘の差は何だよ!?　天国と地獄じゃねーかよ!?」

「息子に甘くするもんじゃねーぜ」

「って、ジュリには甘いじゃねーかよ!?　オレがジュリくらいの年のとき、すでに今の扱いと変わらなかった気がすんだけど!?」

「いーんだよ、ジュリは。なんせ、すーげーマジ半端ねえ可愛いさだからな」そう言ったあと、リュウが瞳を恍惚とさせて付け足す。
「キラそっくりで」

「はいはい・・・」

シュウは呆れながら苦笑した。

そりゃ、キラは絶世の美女と言っても過言ではないけれど。
どうやったらここまでバカになれるのだろう。

リュウが欠伸をして立ち上がった。

「じゃ、飯食ってから寝ろよ。おやすみ」

と言って、リビングのドアへと向かっていく。
シュウは慌てて呼び止めた。

「まっ、待ってくれ親父っ！」

「何だよ」と、リュウが眉を寄せて振り返る。「俺、おまえとは『おやすみのキス』に抵抗あんだけど」

「あっ、当たり前だ気持ちわりぃっ！！　オレが言いたいのはそうじゃねーよ！！」

「借金の利子はきっちりトイチな」

「う・・・・・・。そ、そのことでもなくて」

「？　じゃあ、何だよ」

「そのっ・・・、明日カレンがうちに来たら、話してやってくれねえかなっ・・・・・・。あいつ、ずっと親父に会いたがっててさ。

だからっ・・・・・・」

そう、懇願したような顔で言ったシュウ。
それを少しの間見つめたあと、リュウは小さく溜め息を吐いた。

「おまえは、昔っから自分のことより他人のことだな」

そう言って、リュウが再びリビングのドアへと向かっていく。

「おっ、親父っ・・・！」

返事は？

シュウが訊く前に、リュウが答えた。

「してやるよ、話くらい」

「お、おう」シュウは安堵して笑顔になった。「サンキュっ・・・」

「優しいな、俺」

そう言ってもう一度欠伸をしたあと、リュウはリビングから出て行った。

第6話　告白の前日（後書き）

読者様、いつもありがとうございます。
前作『ＮＹＡＮＫＯ』とその番外編の盗作疑惑がある作品が、昨日から連載開始したとの連絡を何件かいただいた姫百合です。
ちょっと被ってしまったんだろうなー程度に思いつつ、作品を拝見させていただきました。
正直、衝撃的でした。シュウに続いてリュウのカカト落とし食らった気分です。
設定やネタなどが、多々被りすぎでした。
もし本当に偶然なら大変失礼なことなので私からはメールを送らなかったのですが、もしここを見ていて心当たりのある作者さまがいらっしゃいましたら、作品の削除をお願い致します。
ふざけたようなネタでも、ふざけて書いているわけではないのです。
あれやこれやと色々考えて書いているのです。
もちろん偶然ならそのままで結構ですが、そうでないのなら削除をお願い致します。
とてもショックです。お願い致します。

個人的なことで長くなってしまい、申し訳ございませんでした・・・・。

第7話　告白タイム

翌朝、シュウは仕事へ行く前にカレンを家まで迎えに行った。
どこかで待ち合わせしたところで、道に迷って遅れて来るに決まっていたから。

朝迎えに行ってから仕事が一段落するまでの間、カレンは何度も同じことを訊いてきた。

「ねえ、今日のあたくしどうかしら？　おかしなところないわよね？」

どうやらリュウに会うために、ファッションに気合を入れてきたらしいカレン。
シュウには昨日の服との違いが分からなかったが、とりあえず訊かれるたびに褒めておいた。

その度に安堵して、少し頬を染めて笑うカレン。

（本当に親父のこと好きなんだな）

そう、昨日に続いてシュウは思った。

仕事が一段落したのは午後2時。
カレンと外で昼食を取ってから家へと向かおうと思ったシュウだったが、カレンがすぐに行きたいというのでそうした。

シュウが先に家の中に入ってリュウの姿を確認すると、どこにもいないようだった。

リュウどころか、キラやミラ、ジュリの姿も見えない（サラは仕事、双子と三つ子は魔法学校）。

（裏庭にいるのか）

そう察してシュウはカレンを連れて屋敷をぐるりと回り、裏庭へと向かう。

キラとミラ、ジュリのはしゃぐ声が聞こえてきて、シュウとカレンは屋敷の角から覗くようにして様子を見た。

カレンが眉を寄せる。

「・・・いい年して、あれは何をしているんですの？」

「えーと・・・」シュウは苦笑した。「鬼ごっこ・・・・・・？」

ミラは幼いジュリの遊び相手をしてやっているという感じだが、キラはマッハで裏庭を駆け回っている。

見た目が２０歳前後とはいえ、いや２０歳前後でも鬼ごっこなんてしないのが一般的である中で、今年３８歳になるキラは大はしゃぎだ。

（ちょっと恥ずかしいぜ、母さんよ・・・・・・）

シュウがカレンの目を塞いでしまおうかと考えてしまう傍らで、カレンの視線はリュウに移された。

キラとミラ、ジュリが駆け回っているところから少し離れて、リュウが芝生の上に腰掛けている。

優しく微笑んでいるリュウの横顔。
その視線の先にはキラと子供たち。

カレンの耳に、微かにリュウの声が聞こえた。

「こっち来い、キラ」

キラが黒猫の耳をぴくんと反応させ、立ち止まってリュウに顔を向ける。
命令に従い、リュウの下へと駆けて行ったキラ。

駆け寄ってきたキラの手を引いて、リュウがその腕にキラを抱き締めた。
キラのガラスのような銀色の髪を撫でて、黒猫の耳に、瞼に、頬にキスして、リュウの顔がますます優しく綻ぶ。

さらに駆け寄ってきたミラとジュリがリュウに抱きついて、楽しそうな笑い声がカレンの耳に響いてきた。

（リュウさまのあんな表情（かお）、初めて見ましたわ・・・・・・）

カレンは踵を返した。

「おい？　どうした？」

シュウもそのあとを追って踵を返す。
カレンの脇に並び、シュウはカレンの顔を覗き込んだ。

「おい、カレン。親父に会うんじゃなかったのかよ？」

「・・・・・・夜」

「え？」

「・・・・・・今夜、リュウさまお宅にいらっしゃるのよね？」

「ああ。いると思うけど」

「それなら、夜にするわ。お腹も空いたことだし」

「なんだよ」シュウは顔をしかめた。「結局昼飯が先かよ」

「今日はアランチーニを頂きたいわ」

「んじゃあコースじゃなくていいから、そんなに時間食わねーな」

シュウは言いながら、『外食してくる』とリュウにメールを送信。
そのあと時刻を確認して、レストランへと向かって行った。

（どうもおかしいな、カレンの様子が・・・）

シュウがそう気付いたのは、レストランに入ってカレンと向き合って座ったときから。
レストランを出て、仕事へ向かってからもそれは変わらなかった。

（おとなしいというか、元気がないというか・・・・・）

昨日は、戦えないくせにモンスターがいるにも関わらず散々うろちょろと動き回っていたカレン。

今日はシュウが指定した場所にじっと座っている。

おかげでシュウの仕事は捗ったが、逆に昨日よりもカレンのことが気になってしまう。

仕事が一段落し、シュウは剣を腰に戻した。

岩の上にシュウの上着を敷き、その上に座らせておいたカレンの顔を覗き込む。

「どうしたんだよ」

シュウがそう問いかけると、カレンの赤茶色の瞳がシュウの顔を捉えた。

「なにがですの」

「なんか元気なくね？」

「そんなことありませんわよ」カレンがそう言いながら、岩の上からぴょんと飛び降りた。「次の仕事へ行くのでしょう？」

「ああ」

シュウはカレンを連れて、次の仕事の場所へと向かって歩き出した。

まるで喋らないカレンを横目に見下ろして、シュウは気になって仕方がない。
やっぱりカレンの様子が明らかにおかしくて。

「シュウ」

しばらくして、カレンが口を開いた。

「お、おう？」

「リュウさまって、あたくしのこと覚えていないのかしら」

「ジュリが産まれたときのことか？　覚えてないみたいだけど」

「そう・・・」

「う、うん」

「あたくし、今夜リュウさまに告白するわ」

「え」

待ってくれ。

シュウの足が止まった。

告白って、やっぱ愛の告白だよな？
い、いかん。
嫌な予感する。

あの親父、カレンに何て言って振るんだろう。

普通に『貧乳に興味はねえ』とか言いそうでコエェェ・・・！

そこでカレンがしつこいようだったら、ブチ切れそうでもっとコエェェ・・・！！

やばい。

メール打っとこ！

シュウは携帯電話をポケットから取り出して、リュウにメールを送信した。

長男・シュウからメールが来たのは夕方のこと。

『愛の告白を断るときは言葉を選べ』

って、何だいきなり。

リビングのソファーの上、愛する妻・キラの膝枕に頭を乗せて寝転がりながら、父親のリュウは眉を寄せる。

リュウの顔を見て、キラが訊く。

「メール、誰からだ？」

「シュウ」

「何だって？」

「別に。くだんねーこと」

そう言ったのは、キラがまったく気にしないという内容でもないから。

（選べも何も、俺いつも一緒なんだよな。愛の告白に対する言葉なんて）

今日はカレンがおとなしくしていてくれたおかげで、シュウは何とか夜の９時には仕事が終わった。

屋敷のドアの前、シュウは唾をごくりと飲み込む。

（頼んだぜ、親父。言葉選んでくれよ）

はらはらとしているのはシュウだけであって、リュウに愛の告白をするカレンは落ち着いた様子だった。

屋敷の中では絶対に聞き耳を立てる者がいるので、カレンは裏庭に待たせている。

シュウは玄関のドアを開けると、リュウがいるだろうリビングへ

と向かって行った。
案の定、リュウはそこのソファーでウィスキーを飲んでいた。
膝の上にはキラ。
その周りには娘たちがそろってテレビを見ているようだった。
シュウに気付いて、女たちがそれぞれが「おかえり」を言う。
そのあと、リュウがシュウを見た。

「これを見てくれ、シュウ」

「なんだよ」

「ハーレム・・・・・・！」

と、恍惚としながらリュウ。

シュウの顔が引きつる。

「いーからちょっと来てくんねえかな」

「おまえ、お父上様から楽園奪って楽しい？」

「いーーーから来てくれよ」シュウの顔がさらに引きつった。「約束しただろ、昨日！」

「ああ、そういえば」

なんかしたな。

と思い出して、リュウはウィスキーのグラスをガラステーブルの

上に置いた。

「仕方ねえなあ」

立ち上がり、シュウのところへと歩いていく。

「母さんも置け！！」

「うるせーな、まったく・・・」

リュウが抱っこしていたキラをしぶしぶソファーの上に置くと、シュウがリュウを引っ張って外へ出て行った。

裏庭の方へと歩いていく。

リュウが眉を寄せた。

「おい、シュウ。こんなところまで俺を引っ張り出す意味はあんのか」

「・・・・・・」

屋敷の角に来て、シュウは立ち止まった。

ここを曲がれば、カレンの姿が見える。

シュウは恐る恐るというようにリュウに振り返った。

「・・・・・・信じてるからな、親父」

「あ？」

「夕方、メール送ったろ」

「ああ、愛の告白何たらかんたら・・・・・・って」リュウの顔が驚愕した。「ばっ、おま・・・・・・！　ＢＬの上に親子でソレはやべ――」

「オレじゃねえっ！！」

「おっ、驚かすんじゃねーよ、おまえ・・・！！」

「オレの方が驚いたわ、このバカ親父！！」

ゴスッ！！

「ぐおぉ・・・」

リュウの拳骨を食らい、シュウは頭を抱えて蹲る。

「一言多いぜ、バカ息子。・・・んで？」と、リュウは屋敷の角から裏庭を覗きこんだ。「・・・・・・ふーん。そういうことか」

そう言って、リュウがシュウに顔を戻す。

「あのカレンが俺に話あるって、そういうことだったのな」

「ま、まあ、うん・・・。オレも今日の夕方に知ったんだけど・・・・」

シュウが立ち上がってリュウの顔を見ると、リュウが小さく溜め息を吐いた。

「あのな、シュウ。言葉選べって言われても、俺は正直にしか言えねーよ」

「な、何て言うんだよ・・・？」

「いつも同じ」

リュウがそういうなり、屋敷の角を曲がってカレンのところへと歩いて行った。

（いつも同じって、何て言ってんだよ親父・・・！？）

シュウははらはらとしながら2人の様子を覗き込む。

リュウの背でカレンの姿は隠れたが、カレンがリュウの方に向き直ったのが分かった。

「あっ・・・リュウさまっ・・・！」カレンの声が聞こえてくる。

「お会いできて嬉しいですわっ・・・・・・！」

「そうか」

「あ、あのっ・・・・・・、あたくしのこと、覚えていらっしゃらないのですねっ？」

「ああ、まったく」

ずばっと即答したリュウ。

（少しは嘘吐いてやれっ、バカ親父っ・・・！！）

シュウは顔を引きつらせ、心の中で突っ込んだ。

「そうですか・・・」と、カレンの少し寂しそうな声。「あの・・・リュウさまっ」

「何だ」

「あたくしっ・・・あたくしっ・・・・・・・！　あのっ・・・・・・・・・！！」

緊張し出したカレンの声。

こ、これは・・・！

シュウはごくりと唾を飲み込んだ。

告白タイムにレッツゴオォォォォォ！？

もしかしたら一番（嫌な）動悸がしているかもしれないシュウ。

カレンが思い切って、声を大きくした。

「ずっと昔から、リュウさまのことが好きでしたっ・・・・・・！」

第7話　告白タイム（後書き）

前話の後書きに書いた件ですが、無事に解決しました。
お騒がせしてしまい、申し訳ございませんでした。

また、私の訴えにすぐに応えてくださった作者さま、ありがとうございました。
これからもお読みいただけると嬉しいです♪

第8話　そして失恋

カレンは思い切って告白した。

「ずっと昔から、リュウさまのことが好きでしたっ・・・・・・！」

カレンと向かい合って立っているリュウが訊く。

「で？」

――ってオイ、親父！
どうなの、その反応・・・！？

屋敷の角から裏庭にいる2人の様子を窺っていたシュウの顔が引きつる。

カレンが困惑した様子で続ける。

「そっ、それであのっ・・・！　あ、あのっ・・・・・・・、あたくしと再婚してくださいっ！」

なかなかすごい台詞を頑張って吐いたカレン。

リュウが即答する。

「無理」

少しは考えたフリしてやれ！

心の中、シュウは突っ込まずにはいられない。

「俺、キラしか愛せねーから」

うわ、本当にバカ正直。

「悪いな」

絶対思ってねーだろ、アンタ。
ていうか・・・

と、シュウはごくりと唾を飲み込む。

どうする、カレン。
どう出るんだ、カレン。

ここでしつこく追いかけるようだったら、絶対親父ブチ切れんぞ・・・!?
ていうか、おまえ絶対しつけーだろ、カレン・・・・・・・!!

だってあんなに親父のこと落とす自信満々だったし!?
むちゃくちゃ親父のこと好きみてーだし!?
もう何年も想ってるみてーだし!?

絶対しつこく親父のこと追い掛けまわ――

「わかりました。諦めますわ」

ほーらねえぇぇぇぇ!?
――って、え?

シュウは耳を疑った。

ウソ、何？
諦めた？
しかもすげーあっさり？
どうしたんだよ、オイ・・・・・・？

予想外のことにシュウが困惑していると、リュウが踵を返して戻ってきた。

「これが俺のやり方だ。文句言うなよ」

そう言って、シュウの脇を通り過ぎて玄関へと向かっていく。

文句は言わない。
バカ正直だったとはいえ、思ったよりずっとマシな台詞だったから。

（それより・・・）

と、シュウはゆっくりとこちらへ向かってくるカレンを見た。

キラの夜目が利くところは、それなりに受け継いだシュウ。
暗くてもカレンの表情がよく見えた。

（ああ・・・、やっぱり・・・・・・）

シュウの胸が痛む。

(平気な顔、してねえ)

カレンが必死に何ともない顔をしているのが分かった。
いつもの気の強そうな瞳は、とても弱々しくなっていて。

俯きがちにシュウの脇を通り過ぎたカレン。

「おいっ・・・」

シュウの手が、カレンの手首を掴んだ。
カレンがシュウに背を向けたまま、口を開く。

「何かしら。あたくし、もう帰らなくては」

「・・・・・送る」

「1人で帰れますわ」

「何言ってんだ、方向音痴が」

そう言ってシュウは、カレンの手首を引いてカレンの一歩前を歩く。
カレンの歩くスピードに合わせて。

これから葉月町に入ろうかというとき、シュウは口を開いた。

「・・・・・大丈夫か?」

「・・・な・・・何を言っているのかしら」カレンの足が止まった。
「大丈夫に決まっているじゃない。平気ですわ、こんなの」

シュウが振り返ると、カレンが俯いていた。
カレンが続ける。

「平気よ・・・平気なのですわ。だって・・・だって、分かっていましたもの。昼間、リュウさまを見たときから・・・・・・」

「え？」

昼間といえば、カレンは屋敷の裏庭でキラたちと一緒にいるリュウを見た。
そしてきっと、そのあとから元気がなかった。

「分かっていたわ・・・分かっていたのだわ。・・・あなたのお母さまには、敵わないって・・・分かっていたのだわ・・・・・・」

カレンの脳裏に再び浮かぶ。

キラを見つめるときの、リュウの優しい顔が。
リュウにあんな顔をさせることができるのは、きっとキラだけ。
リュウが言ったように、リュウはキラしか愛せない。
世の中のどんな女も、このカレンも、キラには敵わない。
リュウに、愛されない。

「だからっ・・・！」

俯くカレンの視界がぼやける。

「だから、平気なのですわっ・・・・・・！」

カレンの足元に、ぽたりぽたりと雫が滲んでいく。

シュウの胸がずきずきと痛む。

（ああもう・・・）

シュウは一歩カレンに近づいた。

（葉月町に入れなくなっちまったじゃねーか・・・・・・）

カレンの小さな身体を優しく抱き締めたシュウの腕。

カレンは少し驚いてシュウの顔を見上げたあと、シュウの胸に顔を埋めて子供みたいにわんわんと泣き出した。

しばらくしてカレンが泣き止んだあと、シュウはカレンを家の前まで送って行った。

「カレン」

「何ですの」

「その・・・、ハンターやめるか？」

「・・・・・あーら、どうしてかしら？」と、カレンのいつもの

気の強そうな瞳がシュウの顔を見上げる。「あたくし、あなたの弟子をやってあげるのだわ」

「偉そうだな、オイ。・・・っていうか、まだハンターやる意味あんのか？」

シュウは訊いた。

カレンがハンターになったのは、リュウの傍にいるためである。

リュウのことを諦めた今、もうハンターをやる意味がないように思えた。

カレンの顔がむくれる。

「何かしら。あたくしが弟子をやってあげると言っているのに、嫌だと言うのかしら」

「そうは言ってねーけどよ」

「だったら、おとなしく明日も迎えに来ればいいのですわ」

と、もうすっかり元気になった様子のカレン。

「はいはい、分かったよ」そう言って、シュウは笑う。「それじゃ、また明日な」

シュウがぽんとカレンの頭に手を乗せたあと、踵を返していく。

リュウよりも少しだけ華奢なシュウの背中。

それが見えなくなるまで、カレンは見つめていた。

軽い動悸を感じながら。

シュウが自宅へと帰って来ると、リンとランの双子が出迎えてくれた。

「おかえりなさいなのだ、兄上」

そう声をそろえて、シュウをキッチンへと引っ張っていく。

大好きなシュウをテーブルに着かせたリンとラン。

キラとサラが用意してくれておいた晩ご飯を温めなおし、シュウに持ってきてくれる。

「ありがとな、リン、ラン」

シュウに頭を撫でてもらい、リンとランは嬉しそうに笑った。

シュウの向かいに座って、声をそろえる。

「それで、兄上」

「ん？」

「どこへ行っていたのだ？」

「へっ？」

シュウの声が裏返った。

ま、まずい。

リン・ランはブラコン。

カレンを送ってきただけならまだしも、抱き締めてましたなんて言えネエェェ！

「ちょ、ちょっとコンビニに――」

「兄上」

リン・ランがシュウの言葉を遮った。

「な、なんだ？」

消えるリン・ランの笑顔。

「服にマスカラ付いてる」

「――！？」

しまったあぁぁぁぁ！！

シュウは自分の胸元に目を落としてぎょっとした。

こら、カレン！

泣いても落ちねーマスカラ使えっ！

あったよな、そういうマスカラ！？
たしかうちの女たちが愛用してるとか何とか！
何だっけ！？

ウォ・・・？
ウォーター・・・・・？
ウォータークローゼット！？

――って、それ便所だよ！
大丈夫か、オレ！
すーげー恥ずかしいボケかましたぜ、オレ！

シュウの動揺した様子を見て、リンが言う。

「ウォータープルーフのマスカラを使わないからそういうことになるのだ」

そう、それそれ！
ウォータープルーフ！
カレンにすすめとこ。
ていうか・・・

シュウは苦笑した。

「リン、ラン。怒るなよ」

ランが言う。

「あの女だな、兄上。カレンだな？」

ばれてーら。
完全にばれてーら。

シュウは箸を置いて、溜め息を吐いた。

「そんなに心配すんな、おまえたち。カレンが好きだったのはオレじゃねーんだよ」

「え・・・」

リンとランが、ぱちぱちと瞬きをした。

シュウは続けた。

「いずれバレるかもしれねーから言っておくけど・・・。カレンは、親父が好きだったんだよ。その想いが叶ったか叶わなかったかなんて、おまえたちも分かるだろ？」

「・・・・・・」

「だからさ、あいつはオレの弟子続けるけど、そう目の敵にするなよ。あれで結構、繊細なんだぜ？　仲良くしてやってくれよ」

リンとランが顔を見合わせた。
そのあとシュウの顔を見て、リン、ランの順に口を開いた。

「分かったのだ、兄上」

「今度カレンに会ったら、ごめんなさいするのだ」

「よし、良い子だな」

そう言ってリンとランに笑顔を向けてやり、シュウは再び箸を手に持った。

「明日は兄ちゃんが、特別におまえたちの好きなものを弁当に入れてやろう」

それを聞いて、リン・ランがきゃっきゃとはしゃぐ。

キラ似の無邪気なその笑顔は、まだまだ幼い。

（やっぱ妹って可愛いよな）

そんなことを思いながら、味噌汁をすすったシュウ。

その背後を、リュウとミラが通りかかった。

「さて、俺は風呂入るかな」

「パパ、私も一緒に入りたぁーい（ハート）」

「ぶっ」

シュウ、味噌汁噴射。

「やだっ！」ミラが声をあげた。「お兄ちゃん汚いな、何してるのよ」

「おっ・・・、おかしいだろ、ミラ！　おい、ここに座れ！」

と、シュウは自分の隣の椅子を引いてミラを座らせた。

リュウのことは風呂に行かせ、シュウは食事を中断してミラと向き合う。

「おい、ミラ」

「何よ、お兄ちゃん」

「今年で17になろう年頃の娘が父親と風呂入るなんて、おかしいと思わないのか!?」

「おかしいかしら」

「おかしいのっ!」と、シュウがミラにデコピン。「1匹で入れ!いいなっ?」

「はーい・・・」ミラは額を擦りながらしぶしぶ承諾したあと、シュウの胸元に目を落とした。「ふーん。カレンさん、パパに振られちゃったんだ」

「――!?」

なっ、何で分かったのおぉぉぉぉ!?

シュウ、仰天。

女ってスゲエェェ・・・!

女ってコエェェェ・・・!

なーんて思うのは後にしろ、オレ!

リン・ランに続いて、シュウはミラにも言う。

「おい、ミラ。カレンさ、もう憎まれ口叩かねーと思うから仲良くしてやってくれねーかな」

「カレンさん、お兄ちゃんの弟子続けるの？」

「ああ。だからこれからも顔合わすと思うし。・・・いいよな？」

「・・・・・ん、いいよ。私ももう、怒ってないから」ミラがそう言って笑い、立ち上がった。「カレンさん、サラや三つ子とも喧嘩したんでしょ？　伝えてくるね」

「おう、サンキュ」

シュウは再び箸を持ち、食事を続けた。

（あとは母さんだよな。全室の窓ガラス粉砕させるほど怒らせちまったし、大丈夫かな・・・・・）

晩ご飯のあとにシュウがキラを探すと、キラは夫婦の寝室にいるようだった。

ドアをノックして、キラの声が聞こえてきてから中に入る。

「どうかしたのか、シュウ」

と、キラがビール片手に、ベッドの上に何十種類も並べられた首輪を見つめながら聞いた。
猫科モンスターが揃って大好物のものといえばビールである。
また、首輪は野生のモンスターではないという証になるものだから、キラのように純粋なモンスターは必ずつけなければならなかった。
ハーフに関しては、ぱっと見でモンスターに近い場合は首輪をつけなければいけない。
よって、黒猫の耳が生えているミラや三つ子、ジュリは首輪をつけている。
黒猫の尾っぽだけが生えているシュウや双子は、つけなくても良い。
黒猫の耳も尾っぽも生えていないサラは、まったくつけなくて良い。
キラが真剣な顔をして訊く。
「明日の首輪、どれが良いと思う?」
最近、首輪をコレクションしているキラである。
毎日違う首輪をつけては鏡の前で満足しているそうな。
「とりあえず、その皮製で鋲が一周ぐるりと打たれてていかにも首輪っぽいのは親父のドS心を鷲掴みにして朝まで寝かせてもらえないと思うからやめた方がいいんじゃねーかな」
「・・・・・・。そうだな」

キラが苦笑して納得し、レースで出来たチョーカーのような首輪を選んで着けた。

「それで、どうしたのだ？　シュウ」

「ああ、うん。その・・・」シュウはキラの顔色を窺いながら言った。「カレン・・・のことなんだけどさ」

「良いぞ」

「え？」

「おそらく、リュウに振られたカレンがこれからもおまえの弟子を続けるといったところだろう？　良い。連れてこい」

「なっ、なんで分かったの・・・！？」

「えっ！？」キラの声が裏返った。「べ、べべべ、別に母上はカレンがリュウに振られるところを立ち聞きなんかしてないぞっ？」

「・・・・・。ふーん・・・」

「なっ、何だ白い目はっ！？　ほっ、本当なのだっ！　母上、本当に立ち聞きなんかしてないのだぞっ！　立ち聞きなんて、そんな悪いことしないのだぞ？」と、言ったあと、キラが誇らしげに胸を張った。「母上な、ちゃーんと座って聞いてたのだぞっ♪」

「いや、うん、あのさあ・・・・・・」

立って聞いていようが座って聞いていようが同じことだと思うのだが、何でそれに気付かないんだろう、この黒猫。
よくリンクさんに天然バカって言われてるけど、本当否定できねーぜ、オレは。
なあ、ＭＹマザーよ・・・・・・。
言葉が続かず、シュウは苦笑して話を戻した。

「えーと、それでさ、母さん」

「なんだ？」

「カレンとさ・・・、その・・・仲良くやってくれるよな？」

「ああ」そう言って、キラが優しく微笑んだ。「だから心配せずに連れて来い」

「ありがとう、母さん。それじゃ、おやすみ」

シュウは安堵して両親の寝室から出た。

緩やかな螺旋階段を上っている途中、２階から下りてきたミラと遭遇した。
ミラが笑顔で言う。

「あ、お兄ちゃん。サラもユナ・マナ・レナも、カレンさんのこと受け入れてくれるって」

「おう、そうか」

それが分かれば、もう大丈夫だった。
リュウはカレンを見たところで何食わぬ態度をするだろうし、これでカレンとシュウの家族が揉めることはないだろう。

「説得してくれてありがとな、ミラ。おやすみ」

そう言ってミラの頭を撫でたあと、シュウは自分の部屋へと入った。
シャワーを浴びる前に、少しの間だけベッドに寝転がって疲れた身体を伸ばす。

そのときにメールの着信音が聞こえて、シュウはポケットから携帯電話を取り出した。

（カレンからか）

そのメールの内容を見るなり、シュウは微笑えんだ。

『今度、あなたのご家族に謝らせてもらえるかしら？』

第9話　仲間入り

シュウがカレンを再び自宅へと連れて来たのは、あれから3日後の日曜日。

ユナ・マナ・レナの三つ子誕生日パーティーに、カレンも一緒に呼ばれたのだ。

一番真っ先に頭を下げて謝ったのはカレンだった。

それに続いてシュウの母親・キラや、妹たちもそれぞれに謝って一件落着。

そしてリビングへと連れられてきたカレン。

目を丸くした。

「すごいですわね」

何がって、人数が。

シュウ一家の1人と10匹に加えて、リュウの親友で葉月ギルドの副ギルド長・リンク。

そのリンクの妻で、レオン同様にキラを姉のように慕う白猫の耳と尾っぽがチャームポイントのホワイトキャット・ミーナ。

今年で年齢30歳だが、キラやレオン同様モンスターなので、外見年齢は20歳前後だ。

そしてキラの言うことなすことを全て正しいと思うミーナも、バカのうち。

そしてそのミーナにそっくりな娘・リーナ（9歳）が、興味津々

と白猫の耳をぴくぴくとさせながらカレンのところへと寄って来た。

「お姉ちゃん、名前なんていうん？　うちはリーナいうんやで」

思いっきりリンクの地方訛りを受け継いだリーナである。

「え？　あ・・・あたくしは、カレンですわ。よろしくね」

「カレンちゃんやな、覚えたで。カレンちゃん、かわええなあ。そのホッペなんてナイスやで」

「え？　ええ、ありが――」

「まんじゅうみたいで」

「・・・・・・」

「こっ、こらリーナっ！」リンクが慌てて駆けてきて、リーナの腕を引っ張った。「ご、ごめんなあ、カレンちゃんっ・・・・・・」

「なんやねん、おとん」と、リーナがリンクの顔を見て顔をしかめた。「ほめとるんが分からんのかい。いきなり割って入ってきて、何あやまっとんねん。カレンちゃんにめっさ失礼やで。これやからモテへん男は困んのや」

「おま・・・・・・」

そんなリンクとリーナの親子のやり取りに大笑いしながらやって来た男の顔を見上げて、カレンはぎょっとせずにはいられない。

思わずシュウの背に半分身を隠したカレンに、シュウが笑いなが

ら言う。

「大丈夫だ。一見クマみてーだけど、この人はグレルおじさんって言って親父とリンクさんの師匠で――・・・って」シュウの顔が引きつる。「抱っこすんなっ！！」

「なーんだよ、シュウ？　照れ屋だな、おまえはよっと♪」

がっはっはっと、大きな声をあげて笑うグレル。

まだシュウから小さい子供のイメージが離れないのか、シュウたち兄妹を見るたびに抱っこする。

そのリュウを１０センチも上回る巨大な身体は年々クマ化し、今年で４７歳になる。

そしてレオンの飼い主であり、月刊ＮＹＡＮＫＯ（猫モンスター専門雑誌）＆月刊ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ（人間と猫モンスターのハーフ専門雑誌）の編集長を務めている。

グレルも超一流ハンターなのだが現在は活動しておらず、雑誌の編集の仕事に追われている。

この人も天然バカで、前作ではキラとミーナ、グレルで３バカと言われていた。

グレルのペットであるレオンが寄ってきて、苦笑しながらグレルの背を叩く。

「ちょっと、グレル。いい加減シュウのこと降ろしてあげなよ」

「なーんだよ、レオン？　ヤキモチか？　可愛いな、おまえはよ♪　ほーらほら、おまえも抱っこだぜ～っ♪」

「ちょ！？　やっ、止めてよ恥ずかしいっ！　僕いくつだと思っ・・・・・降ろしてっ！　早く！」

いつまでもじゃれているグレルに、リュウが言う。

「師匠。見ておもしれーけど、全員そろったし席に着いてくれないっすか」

というわけで。

カレンを含めた１７人（４人と１３匹）が、席に着いた。

「んじゃ、うちの可愛い三つ子の誕生日パーティー始めんぞー」と、リュウ。「プレゼント渡せー」

カレンは慌てて持ってきたプレゼントを手に持った。

皆に紛れてユナ・マナ・レナにプレゼントを渡す。

全員渡し終わったあと、リュウが箸を手に持って言う。

「さあ食え」

えっ？

それだけですのっ？

あまりにあっさりさにカレンが唖然としていると、右隣に座っていたシュウが顔を覗き込んだ。

「どうした、カレン」

「ええ・・・あの・・・、誕生日パーティーだというからもっと何

か特別なことをしたりするのかと・・・」

「ああ、最近はいつもプレゼント渡したあとに食っちゃ飲みして終わりだな。ほぼ毎月誰かの誕生日だからさ、いちいち派手なことはしねーな」

「そ、そうなの」

「って言っても、みんな夜中まで飲むから酔っ払い出てきて、地味ではねーな・・・・・・」

と、シュウが苦笑。

葉月島では、人間の飲酒は２０歳から。
モンスターの飲酒は年齢制限なし。
人間とモンスターのハーフは、１２歳から。

よって、この場で飲酒できないのはジュリとリーナ、それからカレンである。
カレンの左隣に座っていたサラが、ビールを飲みつつカレンを見た。

「ねえ、アンタさ」

「え？」カレンがサラを見た。「あたしくですの？」

「何飲む？　アルコール以外は、オレンジジュースとコーラしかないんだけど」

「そ、それでは、オレンジジュースをいただくわ」

「んー」

と、サラがオレンジジュースの入ったペットボトルに手を伸ばす。

続いてシュウが訊く。

「おい、カレン。何食いてえ？　そのひらひらした袖じゃ、料理ついて汚れちまうだろ。取ってやる」

「そ、それでは、全部少しずつお願いするわ」

「ん」

シュウが承諾し、カレンの取り皿に料理を取り分ける。

今度は、ユナが声をあげた。

「わあ！　これ、誰からのプレゼントっ？」

続いてレナも声をあげる。

「わあああ！　可愛いねっ！」

さらに無口なマナもそれなりに声をあげる。

「・・・綺麗・・・・・」

三つ子の手に握られているのは、きらきらと輝くおそろいのティアラだった。

「あ・・・」と、カレンが控えめに手をあげる。「それはあたくし

からですわ。どんなものが喜ばれるか分からなかったのだけれど・・・・・」

と、恐る恐るという風にカレンが三つ子の顔を見た。

ユナ、マナ、レナの順番に言う。

「ありがとう、カレンちゃん！」

「・・・とても綺麗・・・」

「かっわいいいいいいいいいい！！　カレンちゃんっ、ありがとうっ！！」

どうやらえらく喜んだ三つ子。

鏡を持ってきて、ティアラを自分の頭に乗せてはしゃいでいる。

おまけに、キラとミラ、リン・ラン、ミーナやリーナもそれを貸してもらってはしゃいでいる。

それを見ながら、シュウが笑った。

「へーえ？　女へのプレゼントは、女がよく分かってるもんだな」

「あー、でも」と、サラがカレンを見た。「アタシの誕生日の場合、ああいう乙女なもんはいらないからね。武器とか防具とか、そっちの方がいいや」

「あら、そうなの」

そう言いながら、カレンはサラが自分と同い年の新米ハンターだ

とシュウから言われたことを思い出した。

サラが訊く。

「アンタさ、誕生日いつ？」

「１０月よ」

「へえ、じゃあ１０月の誕生日パーティーの予定も埋まるんだ」

「だな」と、シュウが続いた。「今まで7月と１０月が空いてたんだが、１０月はカレンの誕生日パーティーで埋まったな」

「えっ・・・？」カレンは戸惑ったようにシュウの顔を見た。「あ・・・あたくしの誕生日パーティー・・・？」

「おう。・・・って、ああ、そうか。悪い」と、シュウがカレンの頭に手を乗せた。「おまえはおまえで、周りに祝ってもらうよな」

カレンは必死に首を横に振った。

葉月病院・院長である祖父は大忙し。
祖母は他界。
両親も葉月病院で働いていて、日々多忙。
年の離れた兄がいるが、それも多忙な葉月病院の医者。

誕生日なんて、こんな風に祝ってもらうことなんてなかった。
プレゼントだけ渡されて、それで終わり。

素直になれない性格のせいで、友達だっていない。

こんな賑やかな雰囲気の中に入るのだって、初めてだ。
想像していた誕生日パーティーとは、まるで違っていたけれど。
それでも、この場はとても温かかった。
首を横に振るカレンに、シュウが言う。
「ん？　そうか。んじゃあ、新入りのおまえの今年の誕生日は盛大に祝うかな」
「よ、良いのかしらっ・・・？」
「何、遠慮してんだ」シュウが笑った。「弟子のクセに」
「何かっこつけてんだか」
と、突っ込んだのは、キラを挟んだところに座っているリュウである。
短く笑って言う。
「借金抱えてる奴が」
「うっ、うるせ――」
「借金？」カレンがシュウの言葉を遮った。「シュウ、借金しているの？」
「ま、まあ、うん・・・」

「いくらですの？」

「９００万に加えてトイチの利子・・・・・・」

「といち？？」

「ま、おまえは気にすんなっ！」

「そうね。大した金額でもありませんしね」

「・・・・・・」

こいつ、金銭感覚おかしーな。
これだからお嬢はよ・・・。

シュウは苦笑した。

そりゃ、うちの親父も金の使い方ぶっ飛んでるけど。
母さんや娘たちのためならいくらでも使うし。
娘たちの小遣い札束だし。
母さんが買い物に行くなんて言えばその３倍の厚さの札束だし。
いつの間にかヘリとジェット機が買ってあるし。
高級車２０台になってるし。

母さんも娘たちもソレが普通だと思ってるし。

何でオレの周りってこういうのばっかなんだろう。
ハンターになってから小遣いもらえないオレ、ちょっとひもじい気分だぜ・・・・・。

シュウの表情を見て、カレンが首をかしげる。

「どうかしましたの？」

「いや・・・なんでも・・・・・・――って、ゴルアアアアアア！！」

「きゃあああああっ！　なっ、何ですのっ！？」

突然声をあげたシュウに驚いたカレン。

「未成年が酒飲むんじゃねえっ！！」

「へっ？」

ぱちぱちと瞬きをして、自分の持っているグラスに目を向けたカレン。

オレンジジュースが入っていると思ったのだが、どうやらビールが入っている。

「あ、あら？　何故かしら？」

「ハーイ」と、サラが悪戯っぽく笑う。「アタシが入れてやったー」

「ばっ・・・・・・！　コラ！！」と、シュウがサラに手を伸ばしてデコピンする。「何してんだよおまえっ！！」

「いったいな！　いーじゃん、ちょっとくらい！」

「良くねえっ！！　この不良娘がっ！！」

「っさいな!!　どうして兄貴ってそうバカ真面目なわけ!?」

「真面目のどこが悪い!!」

「うざいとこー」

「何だと!?」

「うざいんだってば。聞こえなかったわけ?」

「おっ・・・、おまえのその捻じ曲がった根性叩きなおしてやらあああああああああっ!!」

「フン、やってみやがれってのよ!!」

立ち上がったシュウとサラ。

「はいはいはいはい」と、サラの隣に座っていたレオンがサラの手を引いた。「落ち着いて、サラ」

「レオ兄っ・・・!」

「おまえも落ち着け、シュウ」と、リュウがシュウの足元を指差した。「ぶっ倒れてんぞ」

「へっ?」

と、自分の足元――自分とサラの間のところに目を落としたシュウ。

「うっ、うわあああああっ！！　だっ、大丈夫かカレン！！」

どうやら酔っ払って倒れてしまったカレンを、慌てて抱き起こした。

サラも一緒になって慌てる。

「ちょっ・・・！？　アンタ大丈夫！？　一口で酔っ払ったわけ！？」

「ほら見ろ！！　おまえが酒飲ませるからっ！！」

「っさいな！！　さっさとベッドに運んでやりなよ！！」

「分かってら！！」

シュウはカレンを抱き上げると、客間へと向かって行った。

そこのベッドにカレンを寝かせる。

「おいっ・・・、大丈夫か、カレン・・・・・・・！？」

「め・・・目がぐーるぐるですの・・・よおぉ・・・・・・・？」

「ほら、目閉じて寝てろっ・・・！」

「お・・・起きるのですわぁ・・・・・・」

と、カレンが身体を起こそうとする。

「何言ってんだ、寝てろ！」

「あたくしだって・・・あたくしだって・・・あの中に入りたいのですわあぁ・・・・・・」

「え？」

「初めてなのですわあぁ・・・・・・・」

「何がだよ？」

「こんなに楽しいのはあぁ・・・。１人の誕生日なんて、寂しいだけなのですわあぁ・・・・・・」

「・・・・・」

「目がぐーるぐーる・・・。お、起こしてくださらないかすらあぁ・・・？」

「かすらって、おまえ呂律回ってねーぞ」

シュウは苦笑しながら言い、起き上がろうとするカレンの身体を寝かせた。

「いーから寝てろよ。まだ夕方だし、おまえが数時間して目を覚ましても、みんなまだパーティーやってっから」

「・・・その間、あたくし１人でここにいるのかすらあぁ・・・？」

「オレがいてやっから」と、シュウは小さく溜め息を吐いた。「寂しくねーから、おとなしく寝ろよ」

カレンがぐるぐると回っている瞳で、シュウの顔を捉えようとする。
探すように伸ばしたカレンの手を、シュウは握った。
「ほら、いるって言ってんだろ。寝ろよ」
「・・・・・・」
カレンが頷いて、ようやく瞼を閉じてくれた。

第１０話　外泊

（寂しい・・・・・・か）

酔っ払って眠ったカレンの寝顔を見つめながら、シュウの胸が痛む。

（オレはこの大家族の中で育ってきたから、そんなこと思ったことないけど・・・・・・）

シュウはカレンの手に目を落とした。

小さな手で、しっかりとシュウの手を握っている。

（あのギャースカうるせー空間に入りたいなんて、よっぽどなのかな。どんな寂しい環境で育ってきたんだろう・・・・・・）

カレンに握られていない方の手で、シュウはカレンの前髪を撫でる。

こういったことを自然とやってしまうのは、たくさんの弟妹を持ったシュウならではかもしれない。

「・・・う・・・ん・・・・・・」

仰向けに寝ていたカレンが、握っているシュウの手に擦り寄るように横臥した。

シュウは布団をカレンの肩までかけ直す。

キィー・・・・・・

なんて音を聞きながら。

シュウは苦笑した。

「・・・・・コラ。覗きはやめろ」

客間のドアの向こう、二つの身体が驚いて飛び跳ねる。

姿を現したのは、ブラコンの双子・リンとランである。

焦った様子で、リン、ランと交互に言う。

「な、何を言っているのだ、兄上！」

「の、覗いてなどいないのだ、兄上！」

「あ、あくまでもカレンを心配して見に来ただけなのだ、兄上！」

「け、決して兄上とカレンがいちゃついてたら軽く5、6発ぶっ飛ばそうなんて思って来たわけではないのだ、兄上！」

ああ、恐ろしいな・・・。

我が妹たちよ・・・・・。

青ざめてしまいそうなシュウに、リンとランが声をそろえて言う。

「それで、兄上？」

「お、おう？」

「それは何を？」

と、リンとランの視線が突き刺さったのは、カレンと繋いでいるシュウの手。

「ああ・・・、こいつが寝てる間一緒にいるって約束したからさ・・・・・」リン・ランから突っ込まれる前に、シュウは続けた。「こいつさ、どうも寂しい環境で育ったみたいなんだよ。オレたちには分からないけど・・・・・・。きっとこうしてやると1人じゃないって安心するんだろうから、怒らないで分かってやれよ」

リンとランが顔を見合わせる。

そのあと、リン、ランの順に言う。

「わ・・・分かったのだ、兄上」

「今日ごめんなさいしたし、怒ったりしないのだ」

「おう、ありがとな」

そう言ってシュウが笑うと、リン・ランはリビングへと戻って行った。

それからしばらくして、リュウが客間の前を通った。

空きっぱなしになっていたドアから中を覗き込む。

「・・・・・おい、シュウ」

「ん？」

シュウは振り返った。

リュウが眉を寄せている。

「バカだな、おまえ。カレン、おまえの部屋のベッドに寝かせろよ」

「え？　ああ、そうか。この部屋、リンクさんたちが泊まるか」

「いや、そうじゃなくてよ」

「？」

「寝込み襲うんだろ？　客間じゃ邪魔が入――」

「そっ、そんなこと考えてねえっ！！」

「嘘っ・・・」リュウの顔が驚愕する。「おまえ誰の子・・・・・・！？」

「アンタこそ誰の親だよ・・・・・・！？」シュウの顔も驚愕する。

「まじ信じらんねえっ・・・・・・！！」

「ばっ・・・・・・！！　俺、寝てようが起きてようが関係ねえよ！？」

「じっ、自慢にならねえっ！！」

「ああ、驚いた」

「オレが驚いたわ！！」

「ところで」と、リュウが携帯電話で時刻を確認しながら言う。「

カレンどうすんの？　帰んの？　泊まんの？」

「あ・・・、今何時？」

「８時」

カレンが眠ってから、３時間が経っていた。

「カレンに聞いてみなきゃ分かんねーけど・・・・・・、帰るならそろそろ起こして、少しでもパーティー楽しませてやらねーと」

「どっちにしろ起こせ」と、リュウが溜め息を吐く。「泊まるなら泊まるで、親御さんが心配する前に電話しなきゃいけねーからよ」

「うわ・・・」リュウを見るシュウの目が見開かれる。「いっ、今、親父がすげーマトモに見えー―」

すっっっぱーーーーーーん！！

ドア付近から飛んできたリュウのスリッパが、シュウの顔面を直撃。

「早く起こせ」

「ハ、ハイ・・・・・・」

シュウはじんじんと痛む顔を擦ったあと、カレンの身体を揺すり起こした。

「おい、カレン。起きろ」

「・・・うー・・・ん・・・・・・」

カレンがゆっくりと目を開けた。

「大丈夫か？　気持ち悪かったり、頭痛かったりしねえ？」

「・・・ええ、大丈夫よ」そう言ったあと、カレンがシュウと繋がれている手に目を向けた。「・・・・・・本当に、一緒にいてくれたのね」

「約束しただろ。疑ってたのかよ」

「そういうわけではないけれど」

「そうか。・・・・・・起きれるか？」

シュウがカレンの身体を抱き起こすと、ドアのところにいるリュウが訊いた。

「おい、カレン。泊まってくか？」

「リュウさま・・・」

そうリュウを見て一瞬驚いた顔をしたあと、カレンが時計を探すように顔ををきょろきょろとさせた。

「今、８時だけど」

シュウが言うと、カレンの顔が元気を無くして行った。

「あと少ししたら、帰らなくては・・・・・・。あたくしのおじいさま、とても厳しい方だから」

「え？　・・・わ、悪い。もっと早く起こせば良かったかっ・・・・・・」

カレンが首を横に振り、ベッドの脇に立った。

俯きながらドアの方へと向かってきたカレンに、リュウが言う。

「カレン」

「は、はい。リュウさま」

「泊まりたいのか」

「え・・・・・・？」

カレンがリュウの顔を見上げると、リュウがもう一度訊いた。

「泊まりたいのか」

「・・・は・・・はい・・・・・・」

カレンは頷いた。

門限までに家に帰ったところで、誰かがいるわけでもない。

入浴を済ませて、１人で眠るだけだ。

もっとここに居たい。

「ん。じゃ、リビング戻って遊んでろ」

そう言い、どこかへ歩いていくリュウ。

「お、親父っ」シュウは呼び止めた。「ど、どこ行くんだよ?」

「書斎。カレンはうちのハンターなんだから、書類見りゃ連絡先分かるだろ」

「れ、連絡先調べたところでどうするんだよ? ま、まさかカレンの親御さんを説得するのか?」

「説得しなきゃ泊まれねーだろ」

「で、できるのかよ」

「当たり前だろが」と、リュウが溜め息を吐いた。「おまえ、俺を誰だと思ってんの?」

なんだろう、このすーげー自信。

シュウは苦笑する。

そりゃ、ハンターなんて危ない職に孫娘を任せるほど、リュウは葉月病院の院長（カレンの祖父）に信頼されているけれど。

そりゃ、王の絶対的な信頼さえも持っている男だけど。

「余計な心配してねーで、子供は遊んでろ」

リュウがそう言うので、シュウとカレンはリビングへと戻った。

カレンがほろ酔いになっている皆に囲まれて遊び出して、3分後。

リュウが戻ってきた。

何事もなかったかのように、ソファーに腰掛けてウィスキーのグラスを傾ける。

「お、おい、親父」シュウはリュウの隣に座って訊いた。「ど、どうだったんだよ？　院長に許可取れたのかっ・・・・・・？」

リュウが眉を寄せてシュウの顔を見る。

「余計な心配すんなって言っただろうが」

と、いうことは。

シュウがカレンの顔を見ると、シュウと見つめ合ったカレンの顔が輝いていった。

カレンがリュウを見て訊く。

「あたくし、泊まって行っても良いのですね！？」

「ああ」

カレンが舞い上がった。

一緒になって喜んだ皆に囲まれて、カレンの笑顔が咲く。

それを見てシュウは微笑んだあと、リュウの顔を見た。

「サンキュっ、親父！」

「おう。・・・・・・んで」

と、リュウがシュウの首に腕を絡ませて引き寄せた。
顔を強張らせ、小声になって訊く。

「今さらなんだけどよ、シュウ」

「な、なんだよ、親父」

「おまえ貧乳派だったの・・・・・・!?」

「は・・・?」

「だって、良く見たらカレンて貧乳じゃねーかっ・・・!」

「そ、そういうこと言うなっ・・・!　・・・ていうか、オレは別にカレンのこと好きとかじゃ――」

「貧乳じゃ挟めねえよ!?」

「ちょ――」

「いいのかよ、おまえ!?」

「だ、だから――」

「で、ゴム何個いる?」

「ひっ・・・、人の話を聞けえええええええっ!!」

思わず大声を出したシュウ。

カレンが驚いてシュウを見た。

「ど、どうかなさったの？」

「いーからいーから」と、サラがカレンの肩を組む。「兄貴が大声出すのなんて日課だから、気にしなくていいっての」

「まあ、すごい日課なのねえ」

いや、うん。
好きで大声出してるわけじゃねーんだけどね？

シュウ、苦笑。
カレンの目が逸れたあと、再び小声になってリュウに言った。

「だからさ、親父。オレは別にカレンのことが好きってわけじゃねーんだよ」

「んなの？」と、リュウが眉を寄せた。「おまえがお人好しなのは知ってっけど・・・・・・、紛らわしい奴だぜ」

シュウも眉を寄せる。

（紛らわしいって、カレンのこと好きだって見えるような態度取ったか、オレ・・・・・・？）

シュウはカレンに顔を向けた。

（別に・・・普通だよなあ・・・・・・？）

「ね、カレンってさ。兄貴のこと好きなの？」

深夜、カレンと共にベッドに入ったサラが興味津々と訊いた。

パーティーは０時過ぎまで続き、カレンは一番仲良くなったサラの部屋に泊まることになった。

「な・・・、なんですの、いきなり？」

カレンは少し動揺しながら訊いた。

「カレンが親父のこと好きだったのは知ってるけどさ、兄貴と仲良く見えたから」

「そっ・・・そんなんじゃありませんわよっ？」

「ふーん？　でも、兄貴の方はカレンのこと好きなのかもねえ」

「えっ？」カレンの声が裏返る。「ど、どうしてですのっ？」

「兄貴、カレンに優しい気がしてさ。いやまあ、あれはお人好しだからはっきりとは言えないけど」

たしかにシュウは優しいと、カレンは思う。
でも、
「きっと、単にあたくしが弟子だからですわ・・・・・・」
「そうなのかなあ」
「サラは？」
今度はカレンが興味津々と訊く番だった。
「サラは、レオンさんが好きなのでしょう？」
「へっ？」サラの声が裏返る。「・・・ア、アタシのことはいいじゃんっ」
「いいじゃない、教えてほしいわ。ねえ、そうなのでしょう？」
「・・・・・・う・・・・・・うん」
と、サラが赤面しながら頷いた。
「もしかして、お付き合いなさっているのっ？」
「つ、付き合ってないよっ」サラが慌てたように首を横に振った。
「レオ兄、まだアタシのこと子供扱いしてるみたいだし・・・・・・」
そのあと顔を引きつらせ、

「親父はうるさいしさ」

「そ、そう。大変なのね。あたくし、サラとレオンさんはとてもお似合いだと思うわ」

「えっ？」

「美男美女だし、身長だって釣り合っているし。モデルさん同士のカップルみたいよ？」

「・・・・・・」

サラの頬が染まる。

カレンは笑って言った。

「あたくし応援するから、頑張ってね」

「う・・・うんっ。ありがと、カレン」と、サラも笑う。「アタシとあんた、すっかり友達だね」

友達。

それを聞いたカレンの胸に、喜びが込み上げてきた。

「ええ、そうね。友達ね、サラ」

見つめ合って照れくさそうに笑ったあと、カレンとサラは夢の中に入っていった。

第11話　障害物マラソン～その1～

――4月半ば。

シュウがカレンと共に昼食を食べに一旦帰宅すると、キッチンのテーブルには同じく一時帰宅したリュウとサラ、それからレオンが座っていた。

キラとミラはまだ料理中のようだ。

「ただいま」

シュウが言うと、リュウとサラ、レオンが振り返った。

それぞれに「おかえり」を言われたあと、シュウはカレンと並んでテーブルに着いた。

リュウが言う。

「おい、シュウ。今月末、ギルドイベントあんぞ」

ギルドイベント――ギルドで開催されるイベントである。

大半はギルド同士の勝負物が多かった。

「急だな。どこのギルドが言い出したの」

「文月ギルド」

文月ギルド――ここ葉月島の隣に浮かぶ、文月島文月町にあるギルド。

そこの現・ギルド長はゲールという男で、キラがこの世で一番苦

手とする男と言っても過言ではない。

「ふーん。今度は何すんの？」

「えーと」と、サラが口を開いた。「たしか『葉月島ハンターＶＳ文月島ハンター障害物マラソンＩＮ文月島』・・・だってさ」

「障害物マラソン？」シュウは鸚鵡返しに訊いた。「つまり運動会でやる障害物競走の距離が長くなった・・・みたいな？」

「まあ、そうだね。長いね、距離」と、レオンが苦笑する。「なんせ、距離が２００ｋｍらしいし・・・・・・」

「なっ・・・なげえええええええっ！！」

シュウは驚愕して声をあげた。

おかしいだろ、オイ！

一般人よりずっと体力があるハンターとはいえ、２００ｋｍはねーだろ、オイ！？

リュウが言う。

「まあ、距離は短けーからいいんだけどよ」

「いっ、一体どこが短いっていうんだよ親父！？」

「なんだよ、シュウ。おまえたかが２００ｋｍで苦戦するわけ？」

「するだろ普通！？　女ハンターとか、絶対走りきれねーだろ！」

「だって俺が言ってんのは、男の部だし」

「へ、へえ。じゃあ、女はもう少し短けーのか。何ｋｍ？」

「２ｋｍ」

「みっ・・・短けえええええええ！！」

ふざけんなコラ！！
なんだよ、この男女の差はよ！？
なあオイ、親父！？

シュウがさらに驚愕していると、リュウが溜め息を吐いた。

「当たり前だろうが、おまえ。だってうちのサラが参加するっていうんだぜ？」

「だっ・・・だからって差がありすぎじゃねえかな・・・・・・！？」

「じゃあ、何、おまえ・・・・・・！」リュウの顔が驚愕していく。
「サラに何百キロも走らせろっていうのかよ・・・！？　なんっって鬼畜な兄なんだおまえ・・・・・・！！」

「そっ、そういうアンタこそなんっって鬼畜な親父なんだよ・・・・・・！？　オレは！？　息子はいーのかよ！？」

「走れ、たかが２００ｋｍ。そんなんで俺を超えるなんて大間違いだぜ」

えと、うん。
オレ、目標の相手間違ったかも。
・・・なぁーーんて、弱気になってんじゃねーぞオレ！！
シュウは勢い良く立ち上がった。
「絶対（まだ親父は抜かせないけど）５位以内に入ってやらあああああああああ！！！」

――４月末。

『葉月島ハンターＶＳ文月島ハンター障害物マラソンＩＮ文月島』。

２ｋｍしか走らない女子の部は午前で終わり、サラが２位でゴールしてみせた。
カレンもハンターではあるが、その力も体力も一般人とあまり変わらないため参加しなかった。

カレンとサラが応援に駆けつける中、男子の部に参加するハンターがスタート地点にぞろぞろと並ぶ。

スタート地点の白線のところ。
シュウとリュウ、レオンが並んでいる。

リュウの隣には、文月ギルドのギルド長・ゲールがいた。
顔を半分覆う長い前髪が特徴的な、別名・超一流変態ゲールは、超一流ハンターでもあった。
足には絶対的な自信を持っており、リュウと競い合ってかれこれ17年。
今のところ、走る競技でリュウと戦い18対18で引き分けだとか。

「よう、ゲール」

「・・・やあ、リュウ・・・」と、ゲールがにやりと笑う。「・・・ふふふ・・・、・・・今回勝つのは私かな、君かな・・・」

「フン、俺に決まってんだろ」

ゲールを睨み付けたあと、リュウがシュウの顔を見た。

「おい、シュウ」

「なんだよ、親父」

「俺が1位を掻っ攫うから、おまえは宣言通り絶対に5位以内に入れよ。うちのギルドの格を落とすわけにはいかねえからよ」

「お、おう。頑張るけど・・・・・・。ところで、障害物があるんだろ？　どんなのが待ち受けてんだよ？」

「言わなかったけか。えーと――」

「リュウ、シュウ、レオン！！」リュウの言葉を遮るように、キラの声援が聞こえてきた。「がんばるのだあああああああっ！！」

その脇にいるカレンやミラ、サラ、ジュリの声援も続いて聞こえてくる。

キラや娘たちの声援により、リュウのヤル気は倍増。

顔がにやけている。

「なあ、シュウ」

「なんだよ、親父」

「俺が1位取れば、今夜キラ奉仕してくれるよな？」

「・・・・・・。知らねーけど、とりあえず大喜びするだろうな、母さん」

「だよな、すーげー喜ぶよな。んで、今夜は朝までご奉仕しまぁーすってか！？　燃えるじゃねーか、こんちくしょうっ！」

ああ・・・。

単純だな、エロオヤジよ・・・。

シュウが呆れ顔になる中、リンクがメガホンを持って選手のところへと歩み寄ってきた。

「はーい、そろそろ始まりますんで、用意してくださいー」

と、リンク。
選手たちが準備を整える中、リンクが続ける。
「ほな、簡単なルール説明しますー。聞いてるとは思いますけど、魔法の使用は一切禁止です。使った人は失格になるんで、注意してくださいな。また、障害物はあんまり安全ではないんで、充分気をつけてください。以上ですー」
あまり安全ではない障害物。
それを聞いて、シュウは眉を寄せた。
（つまり結構危ねーってことか・・・？　そりゃ、ハンターだから普通の障害物競走みたいなのではないと思ってたけど・・・・・・）
一体どんな障害物が待ち構えているのか。
シュウがもう一度リュウに訊こうとしたとき、リンクが選手たちの様子を見ながら言った。
「そろそろええみたいですな」と、リンクが咳払い。「ほな、行っくで～～～っ！！」
リンクがピストルを天に掲げ、選手たちに気合が入る。
（よし、頑張るぜ！！）
周りと同時に、シュウの気合も充電。

「よおおおいっ・・・・・・・！！」

パァン！！

ピストルの音と同時に、選手たちが走り出した。

「おっしゃあ！！　行っくぜえええええええええええええええええ！！」

バッッッビューーーーーーーーーーーン！！

と、１人勢い良く飛び出したのはリュウである。

「ぶっ！？　ちょっ・・・・・・・！？」

ハエェェェェェェェェェ！！

あまりの光景に、シュウの目玉が飛び出そうになる。

オ、オイ、親父！！

アンタ何者だよ！？

ナニモノだよって、バケモノだよ！！

どんなスピードで走ってんだよ！？

どこの世界最速短距離選手だよ！？

これマラソンだぞ！？

しかも２００ｋｍだぞ！？

ゆっくりのびのび有酸素運動だぞ！？

それでゴールまで行くの!?
行けるの!?
行けちゃうの!?

おっ・・・、親父!!
アンタまじで・・・・・・!!

スゲエエエエエエエエエエエエ!!!

なんて驚愕しているシュウの傍ら、ゲールが口を開いた。

「・・・ふふふ・・・。・・・負けないよ、リュウ・・・!」

そう言うなり、リュウにも劣らないスピードでリュウの背を追いかけ始めたゲール。

「――んなっ・・・・・・・!?」

またもや驚愕して目を見開くシュウに、傍らを走っているレオンが苦笑しながら言った。

「いつ見てもすごいなあ、あの人たち。本当に人間か疑っちゃうよね」

「まっ、まさかレオ兄もあのスピードで走るっていうんじゃ・・・・・・!?」

「言わないよ。シュウと僕は、あの2人を除いた先頭集団と一緒に行こうか」

そういうことになった。

３０ｋｍ地点を過ぎたとき、シュウは眉を寄せながら口を開いた。

「ねえ、レオ兄。障害物なくね？」

「そろそろ来るよ」

「ふーん？　障害物って何あんの？」

「僕も詳しくは聞いていないんだけど・・・・・・」と、レオンの目線が上の方へと移っていた。「・・・・・・あ」

「え？」

と、レオンの視線を追ったシュウ。

歩道橋の上、三つ子の一番上であるユナがいた。
両手をぶんぶんと振っている。

「兄ちゃあああああああん！！　がんばってえええええええええ！！」

「おー、ユナ！」シュウは笑顔で手を振り替えした。「応援ありがとな！　兄ちゃん頑張るぞ～！」

「いっくよー？」

「なっにをー？」

「せーのっ！」

「せーのっ？」

「ファイアァァァァァァァァァァァァ！！」

「ファイ――・・・アァァァァァァァァァァァー――ー！？」

ゴオオオオオオオオーーーーーッッッ！！

と、ユナの両手から火炎噴射。

「あちっ！！　あちちちちちちっ！！」

シュウはレオンや周りの集団と共に思わず立ち止まり、服に付いた炎を慌てて消した。

驚愕して歩道橋の上にいるユナを見上げる。

「なっ・・・、何してんだゴルァァァァァァ！！　危ないだろうがっ！！」

「だっ・・・・だって・・・・・・・！」と、泣き虫のユナが泣き出す。「あたしっ、障害物の役なんだもおおおおおおおおおおおおん！！」

「はっ！？」

「兄ちゃんのバカァァァァァァァァァァァ！！」

ゴオオオオオオオオーーーーーッッッ！！！

さらにユナの両手から、火炎噴射が増す。

「あちちちっ！！　こっ、こらユナ！！　ゴジ○かおまえは！？
や、やめ――」

「兄ちゃんがいじめたってパパに言いつけてやるうううううううう！！」

「そっ、そんなことしたら兄ちゃん殺されちゃうなあああああああ！？」

ユナが大声で泣き喚き、あちこちに火炎噴射をしまくる。

（ユナが障害物の役って、一体どういうことだよ！？）

両腕で必死に炎を防御しながら、シュウの頭が混乱する。

「シュウ！」

レオンがシュウの手を強く引き、炎の中から突き抜けた。
そのまま逃げるように、マラソンを再開する。

振り返ると、炎を突き抜けることができずに脱落する選手がいくつかいるようだった。

当たり前である。

リュウもキラも物理的な力だけでなく、魔力だって最強。
その間に産まれた子供たちに、まだまだ未熟とはいえ普通のハンターより弱い者はいなかった。

レオンに引っ張られながら、シュウは訊いた。

「レ、レオ兄、どういうことだよ？　障害物って・・・・・・」

「いや、うん、あのね・・・」と、レオンが苦笑した。「僕も詳しくは聞いていないんだけど、魔法学校に通う子たちが障害物担当らしくて・・・・・・」

「はっ？」

「ユナが出てきたってことは、きっとこれから先、シュウの妹たちが障害物担当として待ち受けているんだろうね・・・・・・」

「なっ・・・」

何ィィィィィィィィィィ！？

第１２話　障害物マラソン～その２～

――続・『葉月島ハンターＶＳ文月島ハンター障害物マラソンＩＮ文月島』。

「シュウの妹たちが障害物担当として待ち受けているんだろうね」

そんなレオンの言葉に、シュウは狼狽せずにはいられなかった。

リュウとゲールを除く、先頭集団としてレオンと共に走っていたシュウは、あまりの焦りに声が裏返ってしまう。

「レ、レオ兄っ！？　そっ、それやべーんじゃねえかな・・・！？」

「魔法学校に入学し立ての三つ子のユナでさえあの威力だったから、リン・ランが待ち構えている地点は苦戦するハンター多いだろうね」

「あっ・・・、危なすぎるって！！　三つ子の中で一番魔力がないユナでアレだったんだぜ！？　選手が魔法使っていいならずっと楽だけど、選手は魔法禁止なんだぜ！？　脱落者多すぎるだろ！！」

「そうだね」と、レオンが苦笑した。「とりあえず新米ハンターは、あそこさえ突破するのは難しいだろうね・・・・・・」

「つっ、次は三流ハンターが脱落する番か！？」

「かも・・・・・・」

と、なると。

次に待ち構えているのは、三つ子の中で2番目に魔力の高いレナのように思えた。

そして的中。

６０ｋｍ地点を過ぎると、道路の真ん中にレナが座っているのが見えた。

何をしているのかと思いきや、弁当を食べている（しかも重箱四段）。

「そっ、そんなところで弁当を食うなっ、レナ！！」

「あっ！」と、レナがシュウに気付いて声をあげた。「兄ちゃんおそおおおおおおおい！！　パパなんて、とーーーっくの昔に行っちゃったよ？」

「あっ、あのバケモノと比べないでくれっ！！」

「だらしないなあ、もう」

そう言って溜め息を吐きながら、レナが弁当を道路の脇に避難させた。

道路の真ん中へと戻ってきて、シュウに手をかざす。

「それじゃあ、妨害いっちゃうよ～！」

「よ、よし！」

どんと来いっ！！

レオンと共に、構えたシュウ。

レナが張り切った様子で声をあげる。

「サンダァァァァァァァァァァァァァ！！」

ズガアアアアアアアン！！

シュウ目掛けて、稲妻が降り注いだ。

瞬時に飛び退けたシュウは、笑い声をあげる。

「はっはっは～！　魔法が飛んでくるって分かってれば、兄ちゃんはちゃーーんと避けられ――」

「サンダー！」

ズガーン！

「ぶっ！？　ふっ、不意打ちはやめ――」

「サンダサンダー！！」

ズガーンズガーン！！

「ちょっ、レナ待っ――」

「サンダサンダサンダサンダサンダァーー！！」

ズガンズガンズガンズガンズガンズガーーーン！！

「ぎっ、ぎゃあああああああああああああああっ！！」

待ってくれ、我が妹よ！！
おまえ何のつもりだよ！！

容赦なく降り注がれる稲妻を、シュウは顔面蒼白して飛び退ける。

お、おいレナ！！
オレ兄ちゃんよ！？
おまえの兄ちゃんよ！？
すーげー血縁者よ！？

本気で魔法ぶっ放してんじゃネエエエエエエエエエ！！

「お、おいっ、レナ！？」

「何、兄ちゃん」

「にっ、兄ちゃん何かレナに恨まれるようなことしたかなあああああ！？」

「いっつもいっつも」

「いっ、いつも！？　いつも兄ちゃん何かしたか！？」

「弁当」

「べっ、弁当!?」

「たりなあああああああああああああああああい!!」

じゅっ、重箱四段じゃダメですかーーーーっっっ!?

必死に逃げるシュウを見ながら、レナが身体中に気合と魔力を込める。

「にいぃぃぃちゃあああああああああん・・・・・・・!!」

ゆらゆらと怪しく揺れるレナの銀髪。

シュウはごくりと唾を飲み込んだ。

「まっ、まっ、待て、レナ・・・!!　落ち着いてくれっ・・・・・・!!」

「スペシャル」と、レナの手が逃げるシュウにターゲット固定。「サンダアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!!」

ズガアアアアアアアアアアアン!!!

シュウの脳天直撃ィィィィィィィィィィ!?

――と、思いきや。

稲妻がシュウに達する前に、機敏なレオンがシュウを担いでこの

障害物を突破した。

後方からレナの叫び声が聞こえてくる。

「兄ちゃん待てえええええええええええええっ！！」

「重箱五段にするから許してくれ、レナァァァァァァァァァ！！」

「約束だからねえええええええええええええええ！？」

約束するぜ、我が妹よ！

シュウは心に誓った。

ああ、レナよ。

おまえの食い意地・・・・・・本物ダゼ。

尊敬の眼差しでレナの姿が見えなくなるまで見つめたあと、シュウはレオンの肩から降ろしてもらった。

再び自分の足で走りながら、レオンの顔を見る。

「あ・・・ありがと、レオ兄」

「うん。食べ物の恨みって、怖いよねえ・・・・・・」

そう苦笑するレオン。

同意して、シュウも苦笑した。

「それでさ、シュウ」

「うん？」

「レナの次は、やっぱりマナかな」

「だと思う・・・・・・」

三つ子の中、魔力が弱い順にユナ、レナ、マナ。

この障害物マラソン、走っていけば走っていくほど難易度がじわじわと増していく気がした。

そうなると、順番的に次はマナだった。

ほーらね。

シュウは苦笑する。

やっぱり、レナの次はマナだった。

９０ｋｍ地点を目前にしたあたりで山道に入り、その脇にある木の枝のところにマナが座っている。

マナが片手をあげて、小さくシュウに手を振る。

恐る恐るといったように、シュウも片手をあげた。

「い、いよう、マ――」

「メテオ」

ハイ、いきなりキターーーーーー！！

シュウとレオンを、突然出来た影が包み込む。
顔を上げれば、そこには召喚された隕石さんこんにちは。

ズドォォォォォォン・・・！

落下してきた直径５ｍの隕石を、シュウはレオンと共にガニ股になって両腕で支える。

「ぐおぉぉぉぉ・・・・・・！！」

シュウの両腕がぷるぷると震える。
膝が曲がっていく。
足が地にめりめりとめり込んでいく。

「シュ、シュウ」

「な、何、レオ兄」

「い、いい？　せーので前方に投げるよ？」

「お、ＯＫ」

「じゃ、じゃあ行くよ？」

「う、うん」

せーのっ！！

「うおぉりゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっっっ！！」

雄叫びと共に、シュウは力いっぱい隕石を放り投げた。

ピューーーー。

微妙な弧を描き、前方へと飛んでいった隕石。

ピューーーー。

綺麗な弧を描き、戻ってきた。

「え」

ズドオォォォォォン！！

「グエェェェェ・・・・・・・！！」

今度は支えられず、隕石の下敷きになったシュウは潰れた声をあげた。

マナが言う。

「甘いよ、兄ちゃん・・・」

うん、そうだね。

兄ちゃんが甘かったよね。

指一本で隕石操っちゃうもんね、マナちゃんね。
兄ちゃん潰すときも無表情だもんね、マナちゃんね。
何気に一番怖いよね、マナちゃんね。

シュウは身体が押しつぶされていく感覚を存分に味わいながら、
木の上にいるマナを見上げた。

「よ、よ、よし、マナ。に、兄ちゃんに何をしてほしいんだっ・・・
？　んっ・・・！？」

「今夜・・・」

「こ、今夜なんだっ・・・？　さ、さあ、遠慮なく言ってみろっ・・
・・・！」

「新鮮な・・・」

「し、新鮮なっ・・・？　さ、魚かっ？　魚の内臓だなっ・・・？
兄ちゃん釣ってく――」

「イナゴの炭火焼が食べたい・・・」

「・・・・・・。・・・いっ、今は春だから難しいかなっ・・・・・・
・」

「そう・・・」

と、マナが人差し指をひょいと下に動かした。
さらに隕石に押しつぶされ、シュウの視界に三途の川がちらつく。

「グエェェエエェェェ・・・・・・・・！！！　わ、わ、わ、分かったっ・・・！　分かったよ、マナ・・・・・・・！　い、今は秋だろう遠い島まで行って、イナゴ捕まえて来るよ兄ちゃんっ・・・・・・・・！！　で、で、で、でも、スゲエェェェェ遠いから明日の夜で許してくれねえかなっ・・・・・・・・・！？」

「明日の夜・・・か・・・」と、溜め息を吐いたマナ。「・・・まあ、いいよ・・・」

そう言い、ひょいと人差し指を上に動かして隕石を持ち上げた。

（た、助かった・・・・・・・！）

シュウは危うく潰れかかった身体を、レオンに抱き起こしてもらった。

マナが言う。

「行っていいよ、兄ちゃん・・・」

「あ、ありがとうございます・・・・・・・」

「がんばってね・・・」

「お、おう。兄ちゃんがんばー―」

「イナゴ獲り」

「・・・・・・。うん・・・」

我が妹・マナよ。

兄ちゃん、ちょっと泣きそうダヨ・・・・・・。

レオンと共に、シュウはよれよれと再び走り出した。
生気を失っているシュウの横顔を見て、レオンがシュウの肩をぽんと叩く。

「ぼ、僕も一緒にイナゴ獲りに行くから元気出して、シュウ」

「レ、レオ兄・・・！」シュウの瞳が感動に潤む。「なんっっって優しいんだ、レオ兄・・・！　大好きだ、レオ兄・・・・・・！！」

「大袈裟だね」

そう言って笑ったレオン。
そのあと顔が強張る。

「ところで、マナってちょっとリュウに似てきたんじゃない？　キラから受け継いだ天然バカに加えてリュウの鬼っぷりって考えると、本気で末恐ろしいよね」

「・・・・・・・・・」

天然バカの上に鬼。

想像したシュウの顔が蒼白していく。

「ご、ごめん、シュウ。変なこと言っちゃったねっ・・・！」レオンが慌てて言い、話を逸らした。「ほ、ほら、シュウ？　次の障害物担当は、リン・ランだろうね！　あの双子はシュウのこと大好きだし、きっと優しくしてくれるに違いないよ？」

「おお・・・！」

そうだ。
きっとそうだ。

リン・ランは兄ちゃん大好きブラコンだもんな！
兄ちゃんのため、きっと手加減しまくってくれるぜ！

シュウはすっかり生気を取り戻し、元気良く駆け出した。

ゴールまであと約１１０ｋｍ。
この時点で三流と二流ハンターがもろもろと脱落し、選手の数はスタート当初の四分の一に。

シュウは気合を入れなおして叫んだ。

「絶対５位以内に入ってやらあああああああああああああ！！！」

第１３話　障害物マラソン～その３～

――続の続・『葉月島ハンターＶＳ文月島ハンター障害物マラソンＩＮ文月島』

シュウとレオンは今、１００ｋｍ地点を走っていた。
コースのちょうど半分だ。

「や、やっと半分かよっ・・・・・・・！」

「あと半分頑張ろう、シュウ」

「お、おう、レオ兄っ・・・！　ところで親父の奴、今どのへん走ってんだろっ・・・・・・？」

そうシュウが疑問に思ったとき、ポケットに入れて持ってきておいた携帯電話が鳴った。

噂をすれば何とやら。
リュウからだった。

「も、もしもし、親父っ・・・？」

「なあ、シュウ。おまえ今どこ走ってんの？」

と、リュウ。
その周りからは、女たちの黄色い声が聞こえた。

シュウは眉を寄せる。

「親父こそ、今どこ走ってんの？」

「走ってねーよ。休んでる」

「へえ、やっぱり親父も人間だな」

「さっきゴールテープちぎってよ」

「そうなんだ――・・・って、アンタもうゴールしちゃったんだ！？」

「おう、1位でな。おまえ2位になれっかもよ？　ゲールの奴、まだ姿見えねえ」

「へ？」シュウはぱちぱちと瞬きをした。「んなの？　てっきり親父と並んでんのかと思ってた」

「最後の障害物までは並んでたんだけどよ、あの変態、最後の障害による快感に耐えられなかったみてえ」

「は？」

「まだ快感味わってんのかもな。――って、おっ、俺の可愛い黒猫がヘリから降りて来たぜ！　おい、キラー！　喜べ、俺1位だぜ！　今夜奉仕してくれるよなあ！？　明日の朝までとは言わず、明日の昼までででも構わないぜ、俺は！　・・・え、何、無理？　水臭ぇな、遠慮無用だぜ――」

電話が切れる。

シュウはポケットに携帯電話を戻すと、眉を寄せてレオンの顔を見た。

「ねえ、レオ兄。親父ゴールしたみたいなんだけどさ」

「おかしいよね」

「うん、おかしいよね。んで、ゲールさん最後の障害物のところで快感を味わってるらしいんだけどさ・・・・・・」

「ああ・・・、彼はドMだからね」と、レオンが苦笑する。「もしかしたら、物凄く痛～い障害物が待ってるのかも・・・・・・」

「痛～い障害物」シュウは鸚鵡返しに言って、顔を引きつらせた。「な、なんだ？　まだあと１００ｋｍもあるし、最後の障害物はリン・ランじゃねーのか・・・・・？　リン・ランてまだ魔法学校の３年生だけど、たしか６年生のトップよりも魔力あるハズなんだけど・・・・・・」

シュウよりも少し魔力の低いリン・ランを上回るとしたら、超一流ハンターが最後の障害物として待ち構えている気がした。

そうなると、まだ一流ハンターのシュウがそこを突破するのは難しいわけで。

（いや、でも魔法学校の生徒が障害物担当って言ってたよな・・・・・）

そうだとしたら、葉月島と文月島の魔法学校でリン・ランを超える魔力の生徒はいないはずだ。

（やっぱり、ラストはリン・ランだよな・・・・・？）

そうとしか考えられない。

シュウはそう思うことにして、コースを足取り軽く進んで言った。

１５０ｋｍ地点。

顔を傾ければ砂浜と、夕日に染まった紅い海。

しばらく障害物がないと思ったら、やっと現れた。

双子のリンとランが。

道路脇のテトラポットの上、リンとランが座っている。

これがラストの障害物かどうかは分からないが、とりあえずブラコンのリンとランは手加減してくれるだろう。

そんな期待に胸を膨らませながら、シュウは笑顔でリン・ランに手を振った。

「おぉーい、リン・ラン！　兄ちゃん来たぞ～っ！」

「兄上っ！」リン・ランが笑顔になり、ぴょんと立ち上がった。「がんばるのだっ、兄上～～～っ！！」

「おう！　おまえたち障害物担当なんだろっ？」

「う、うむ！」

そう揃って頷いたあと、リン、ランと交互に言う。

「で、でも、兄上っ！」

「わたしたち、大好きな兄上にとてもではないが攻撃できないのだ！」

「よって、兄上っ！」

「このままここを通過するのだっ！」

ああ、リン・ランよ。
おまえたちは天使だな。
三つ子にさんざんいじめられた兄ちゃん、目頭が熱くなりそうだぜ。

シュウは言う。

「ありがとう、おまえたち・・・！　だが、そんなのズルして勝ったことになっちまう！　それじゃ、兄ちゃん嬉しくもなんともねえっ！」

「あっ・・・兄上っ・・・・・・・！」

「さあっ！　兄ちゃんの愛する妹リン・ランよ！　気にせず力いっぱい兄ちゃんの進行を阻んでくれっ！！」

なんて両腕を広げ、絶対手加減してくれることを信じて言ったシュウ。

リン・ランの黄金の瞳が見る見るうちに潤んでいく。

2匹そろって零れ落ちてきた涙を手の甲で拭い、リン、ランと交互に言う。

「あっ、兄上っ！」

「わっ、わたしたち、感動したのだっ！」

「それでこそ大好きな兄上なのだっ・・・！」

「それでこそ尊敬できる兄上なのだっ・・・！」

「ああ、兄上よ！」

「わたしたち、了解したのだ！」

「兄上に従うのだ！」

「胸が潰れそうだけど、兄上に従うのだ！」

ああ、素直な妹たちよ！

胸を押し潰されそうになりながらも、兄ちゃんの指示に従ってくれるんだな！

なんっっって健気なんだ！

兄ちゃんは最高の妹を持ったぜ――・・・・・・って？

・・・・・あれ？

何？
なんだって？

兄ちゃんに従う？
オレ何て言ったっけ？

シュウ、自分の言ったことを思い出すまでに数秒間動作停止。
そのあと、全身から冷や汗が噴出しそうになった。

オレ、『力いっぱい進行を阻んでくれ』って言った・・・・・・！？
ていうか、言ったよな・・・・・・！？

え、何！？
従っちゃうの！？
素直に従っちゃうの！？

ちょっ、待っ・・・・・・！！

従うんじゃねえコラっ！！
おまえら第二反抗期に入れよ！！

大体、何でオレの本心を察することができねーんだよ！？
これだから困るんだよ、母親似（キラ）天然バカ猫はよ！？

リン・ランの銀髪がゆらゆらと揺れ出す。

「ちょっと待っててくれ、兄上」

「今魔力を最大限に引き出しているのだ、兄上」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや」

ふざけんなっ！！

リン・ランに片手を伸ばし、必死に首を横に振るシュウ。

「リン・ラン！　やっぱいいや、うん！　兄ちゃん傷つけるの辛いだろっ！？　兄ちゃんは、可愛いおまえたちに辛い思いをさせたくねえ！」

「兄上っ・・・・・・！」

リンとランの黄金の瞳が、再び涙に濡れる。

「ありがとうなのだ、兄上！」

「わたしたち嬉しいのだ、兄上！」

「わたしたち、本当に辛いのだ！」

「兄上のこと傷つけると思うとっ！」

よーしよーし、良い子だ。

そのまま優しくオレの進行を阻んでくれ。

ほっと安堵したシュウ。

リン・ランが涙を拭って、シュウに笑顔を見せた。

「でもわたしたち、兄上のお役に立ちたいのだ！」

「わたしたち、兄上のためにがんばるのだ！」

がっ・・・、頑張るんじゃネエエエエエ！！

そんなシュウの心の中の突っ込みなんて、リン・ランが察するわけもなく。

にこにこと笑い、声をそろえた。

「ブリザードっ♪」

ゴオオオオオオオオオオオオッッッ！！！

強烈な暴風雪がシュウとレオンの身体を巻き上げる。

「兄上～っ」と、下の方からリンとランの声。「どう？」

「ううーん、マラソンで火照った兄ちゃんの身体に心地良～～い風☆」

――な、わきゃねえだろっ！！

サミイィィィィィィィィに決まってんだろうがっ！！

こんなときにボケてやってんじゃねーよオレ！！

真っ白な視界の中、シュウは必死に手をあちこちに伸ばした。

「レオ兄っ！　レオ兄っ、どこいんの！？　やべっ・・・息苦しく

なっ・・・・・・！」

「ここだよ、シュウ！」

レオンがシュウの腕を掴んだ。

シュウの頭を胸元に寄せて、両腕で抱える。

レオンの腕でシュウの顔周りの風が遮られ、シュウは呼吸を整える。

「あ・・・ありがと、レオ兄っ・・・・・・」

「大丈夫？　シュウ」

「う、うん・・・なんとかっ・・・」

「だけど、困ったね。この暴風雪の中から、どうやって抜けようか」

「魔法さえ使えりゃ、どうにでもなったのにっ・・・！　ああ・・・、手がかじかんできた・・・・・」

寒さでシュウの体力が奪われていく。

シュウの様子を見たレオンは言った。

「僕が魔法を使うから、シュウはその間に次に進むんだよ？」

「えっ・・・！？」

「雪までは消せないけど、風なら静められるから」

「なっ・・・何言ってんだよ!?　魔法使ったら、レオ兄が失格になっちまう!」

「僕は良いんだよ、勝負ごとはあまり好きな方じゃないしね」そう言って、レオンが笑った。「まあ、葉月島の超一流ハンターとして、ゴールできないのはリュウに怒られるかもしれないけど。でも、シュウがゴールできないのと僕がゴールできないのじゃ、リュウの怒り度はまるで違うし」

たしかに、リュウはレオンがゴールできないよりも、シュウがゴールできなかった場合の方がブチ切れるだろう。

「で、でも、レオ兄っ」

せっかくここまで走ってきたのに、オレのために失格になるなんて・・・・・・!

シュウが戸惑っている間に、レオンが魔法で風を操って静めていった。

ついさっきまではシュウとレオンの身体を巻き上げるほど強かった風がなくなり、シュウとレオンは地面に落ちていった。

「あれ」と、リン・ランがぱちぱちと瞬きをして声をそろえる。「レオ兄、失格だぞー」

「うん、いいんだ」

そう言ってリン・ランに笑顔を向け、レオンはシュウの身体を支えながら地に足を降ろした。

困惑したシュウの顔を見て、レオンが微笑んで言う。

「さあ、あと５０ｋｍだよ」

「・・・レ、レオ兄っ・・・・・・！」

「頑張ってゴールするんだよ、シュウ？」

感動に込み上げてきそうな涙を堪えながら、シュウは頷いて再び走り出した。

ああっ、レオ兄・・・！

オレが女だったら、あなたにゾッコンＬＯＶＥだったよ！！

オレ・・・！

オレ、絶対にゴールするぜえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

（いや、うん、あのさあ・・・・・・、何で？）

ゴールまであと１０ｋｍ地点。

シュウは立ち止まった。

（何で、魔法学校の生徒じゃねー人が立ってんだ？）

すっかり日が暮れて暗くなったが、キラの夜目が利くところは受け継いだシュウ。
次の障害物担当者を見て、顔が引きつる。
（この障害物マラソン、どんだけ難易度たけーんだよ・・・・・・！？）
シュウの視線の先には、２人の人物。
「・・・ああっ・・・イイッ・・・！　・・・もっと・・・もっと私に苦痛をっ・・・！」
文月ギルドのギルド長兼、超一流ハンター兼、超一流変態のゲールと、
「なーんだよ？　もっとかよ？　仕方ねーなっ♪　んじゃあ次はー・・・・・、バックドローーーップ♪」
リュウとリンクの師匠で、雑誌月刊『ＮＹＡＮＫＯ』と月刊『ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ』の編集長であるグレル。
ゲールは選手なのだから、グレルが障害物担当ということだった。
（どーすりゃいいんだよ、これ・・・・・・）
シュウは困り果てる。
葉月島でリュウとタメを争えるとしたら、この一見クマのような大男のグレルだけであって。
まだ超一流ハンターに満たないシュウがそんな男を突破していく

のは、難易度ＭＡＸなわけで。

（たしかにこりゃ、ドＭのゲールさんが快感を味わえてしまうほど痛～い障害物だな・・・・・・）

シュウは唾をごくりと飲み込んだ。

（親父、レオ兄・・・、ゴールがオレを拒否するぜ・・・・・・）

第１４話　障害物マラソン～その４～

――続の続・『葉月島ハンターＶＳ文月島ハンター障害物マラソンＩＮ文月島』。

１９０ｋｍ地点。

ゴールまであと１０ｋｍだけだというのに、シュウは立ち止まらずにはいられなかった。

リュウとずっと並んで走っていたゲールは、この最後の障害物でまだ足止めされていた。

といっても、どう見ても自ら止まっているのだが。

「・・・ぐぁぁあぁ・・・！　・・・何と素晴らしいバックドロップだ・・・！　・・・次はライダーキックを・・・！」

本当にあなた超一流変態ですね、ゲールさん。

オレの母さんがこの世一苦手とする男なだけあるよ・・・。

ゲールの気持ちの悪さに、シュウの全身にトリハダが立つ。

「そーかそーか、次はライダーキックがいいんだな？　そーれいっ♪」

そしてそんなあっさり恐ろしい願いを叶えてやらないでください、グレルおじさん。

リン・ランに続いて、また天然バカかよ。

しかも障害物って魔法じゃないのかよ。

すでにボロボロのオレ、あなたのバックドロップだのライダーキ

ックだの食らって生きてる自身ネエェェ・・・。

さらに恐ろしさも加わって、シュウの全身のトリハダが増す。

（さて、どうやってここを突破しようか・・・・・・）

グレルとゲールの１０ｍ手前、シュウは頭をフル回転させて考える。

１．本当は優しいグレルの同情を誘い通してもらう。（ゴールまでぶん投げられて送られそうで怖いぜ）

２．ペットであるレオンがコース１５０ｋｍ地点で呼んでいたと騙す。（バカでも携帯の存在くらい忘れねーか）

３．おとなしくグレルと対決。（オレまだ死にたくねーよ）

４．気付かれていない今のうちにグレルの脇を通過する。（これだ！）

シュウはじゃれ合っているグレルとゲールに気付かれないよう、そろそろと歩き出した。

腰を少し屈め、グレルの背をドキドキと通過する。

抜き足。

差し足・・・。

忍び足・・・・・・。

「よぉ〜し！　次はサマーソルトキ〜〜〜ック♪」

ドカッ！！！

「――ガハァッ！！！」

バタッ・・・

と、後方宙返りしたグレルの足が背中に直撃して倒れたのはシュウである。

「あれ？　悪い、ゲール。当たんなかったのか。でも今たしかに当たった気がしたんだけどな。気のせいだったか」

「・・・グレル・・・」

「なあ、ゲール。オレこの年になって、また背ぇ伸びたみてえ。おまえがさっきより小さく見えちゃうぞっと♪」

「・・・踏んでるよ・・・」

「お？」

と、自分の足元に目を落としたグレル。

ぱちぱちと瞬きをしたあと笑う。

「いよう、シュウじゃねーかっ♪　なんだ？　もうすぐゴールだってのに、へばって寝ちまったのか？」

そう言ってシュウの上から避けたグレル。

シュウをひょいと抱き上げた。

「おい、シュウ？　起きろ」

「・・・・・・」

オレはもうダメだぜパト◯ッシュ・・・・・・。

ああ・・・、そろそろ天使が迎えに――

「おおーい、起きろーい」

「カハッ・・・！」

グレルに首根っこを掴まれてぶらぶらと振られ、シュウは吐血しながら瞼を開けた。

「グ・・・グレルおじさっ・・・、や、やめ・・・・・・！」

「おお、起きたかシュウ。おまえ、寝るならゴールしてからにしなきゃダメじゃねーかよ♪」

そう言いながら、グレルがシュウを地に下ろした。

グレルが続ける。

「んじゃ、障害物を次の選択肢から選べよっと♪」

選択肢。

それを聞いて、シュウの胸に少し希望が湧いた。

「せ、選択肢があるんだっ・・・？」

「おうよ！　まず、１」

と、グレルが１本の指を立てた。

シュウは真剣な顔で訊く。

「オレの風魔法を食らう」

「・・・・・・」

きついぜ、それは。

だってグレルおじさんの水魔法と風魔法って、親父よりも強いっていうし。

シュウは却下した。

グレルが２本の指を立てて続ける。

「２．オレが連続で旋風脚をするから何発か食らいながら通過する」

「・・・・・・」

本気で天使がオレを迎えにくるぜ。

シュウは却下した。

グレルが３本の指を立てて続ける。

「３．オレと腕相撲対決」

「・・・・・・」

オレの腕、骨ごと折れるよな。

シュウは却下した。

グレルが４本の指を立てて続ける。

「４．腹筋５０００回を先にやったもの勝ち」

「・・・・・・」

アンタできちゃうんだ！？

シュウは却下した。

グレルが５本の指を立てて続ける。

「そして最後、５．古今東西ゲーム対決。さあ選べ♪」

「・・・・・・」

えーと。

なんで古今東西ゲーム？

意味わかんね。

・・・・・・い、いや、待て！

シュウははっとした。

（これなら勝てるかもしれねーじゃん！）

シュウは言った。

「5の古今東西ゲーム対決でお願いします！」

「お？　チャレンジャーだなー、おまえ」と、グレルが感心したように言った。「オレ、絶対5だけは選ばねーと思ってた。言っておくけど、オレすーげー強ぇぜ？」

そうだとしても、他の選択肢を選んだところで突破できないシュウである。

「5でいいんです。古今東西ゲームでいいんです。オレは必ず勝って、ゴールするんだ！」

「よし、分かった。じゃあ、ルール説明するぞっと♪」

「は、はい」

「オレに1回でも古今東西ゲームで勝てれば通過していいぜっと♪」

「えっ・・・？　そ、それだけでいいんすかっ・・・？」

「おうよ！　しかも、お題はぜーんぶおまえが出していいぜ？」

「おお」

シュウは声を高くした。

これなら早いうちに勝てる！

（よし、考えるんだオレ！　オレが勝てるお題を・・・・・・！）

考えて数秒後、シュウはにやりと笑った。

「じゃあ、行きますよグレルおじさん」

「おうよ！」

「古今東西！」

「イェーイ♪」

「『信号の色』！　赤っ」

「黄色♪」

「青っ」

よし、勝ったオレ！

心の中、ガッツポーズを作ったシュウ。

「緑♪」

「――なっ・・・」シュウ、驚愕。「なぬぁーーーーっ！？」

「オレの勝ち～♪」

「ちょっ、グレルおじさん！　そんなのアリかよ！？」

「だってオレ、信号は青じゃなくて緑に見えるし」

「・・・・・・」

そ、そうか。

個人の主観まで考えてなかったぜ、オレ。

シュウは気を取り直して次のお題を考えた。

（オレから始まるんだから、奇数になるお題だよな・・・・・・。

よし、今度こそ勝てるぜ！）

シュウはにやりと笑った。

「古今東西」

「イェーイ♪」

「『調味料のさしすせそ』！　砂糖っ」

「塩♪」

「酢っ」

「醤油♪」

「味噌っ」

よし、勝ったオレ！

再び心の中、ガッツポーズを作ったシュウ。

「ソース♪」

「――なっ・・・」シュウ、驚愕。「なっ、何でソース!?」

「オレの勝ち～♪　知らねーのかよ、シュウ？　さしすせその『そ』は一部で違うんだぜ？」

「・・・・・・」

し、知らなかったぜオレ。

これはオレの勉強不足だったな・・・。

シュウは気を取り直して、次のお題を考えた。

（ちっくしょう・・・。次のお題は何にしよう・・・・・・？　マニアックなのがいいよな、普通は知らねえような・・・・・・）

あれやこれやと考えた末、シュウは再びにやりと笑った。

「じゃあ、グレルおじさん。焼肉屋メニューいいっすか」

「おうよ♪」

心の中、シュウは声をあげて笑う。

（はっはっは～！　これは勝った！　勝ったぜ！　こーんなカルビばっか食ってそうなグレルおじさんには分からないだろうよ！　焼肉屋のメニューはメニューでも、一般的にマニアックな内臓類だぜ！　詳しいぜ、オレは！　だってうちにはゲテモノ好きが2匹もいるからな！）

ちなみに、その2匹とはキラとマナのことである。

マラソン再開の準備満タンで、シュウは言った。

「古今東西！」

「イェーイ♪」

「『牛の4つの胃』！　ミノっ」（↑第一の胃）

「ハチノス♪」（↑第二の胃）

「センマイっ」（↑第三の胃）

「ギアラ♪」（↑第四の胃）

シュウ、ここで再びにやりと笑い、

「ガツっ」（↑ミノの別称）

よし、勝った！
今度こそ買ったぜオレ！
ナイスだオレ！
牛の胃は4つだけど、オレは名称を5つ知ってるんだぜ！

心の中、シュウはガッツポーズで飛び跳ねる。

よっしゃあ！

マラソン再開――

「赤センマイ♪」（↑ギアラの別称）

――！？

心の中、飛び跳ねていたシュウの動きが止まる。

「なっ・・・、何ソレ！？」

「オレの勝ち～♪」

「ねえ、グレルおじさん！？　ソレ何！？」

「何って、ギアラの別称だぜ」

「詳しいね！？」

「奴ってば、カルビ並に油のってて美味いんだぜっ♪　オレどこの焼肉屋入ってもカルビと奴はなくなるまで食っちまうんだぜっ♪」

「・・・・・・」

や、やべえ・・・！

何か知らないけど、この人・・・・・・！

シュウはごくりと唾を飲み込んだ。

本気でツエエエエエエエエ！！

――3時間後。

とっくにゲールはゴールへと向かって行ってしまった中、シュウは声を嗄らしながらお題を口にした。

（オレ・・・、何でこんな身近なことに気付かなかったんだろう・・・・・）

そんなことを思いながら。

「こ・・・、古今東西」

「イェーイ♪」

「・・・『オレの家族の名前』。オレ・・・、シュウ」

「リュウ♪」

「キラ」

「ミラ♪」

「サラ」

「リン♪」

「ラン」

「ユナ♪」

「マナ」

「レナ♪」

「ジュリ」

「おーっと、負けちまったいっ♪」と、グレルが大きな口を開けて笑う。「なかなかやるじゃねーかよ、シュウ！」

「ど・・・ども・・・・・・」

オレもう、このゲーム二度とやりたくねえ・・・。

シュウはようやく、マラソンを再開した。

口は疲れたが、体力は回復した。

ゴールを目指して軽やかに走る。

（ああもう・・・、すっかり深夜じゃん。ゴールで誰も待ってなさそ・・・・・・）

シュウは苦笑する。

（まあ、いいか・・・。ゴールはゴールだ。レオ兄との約束守れた。3位だし、親父との約束も守れた・・・・・）

そう思えば、シュウは満足だった。

誰も待っていてくれないかもしれないけど、シュウはゴールを目指して加速した。

――ゴール手前、５００ｍのところ。

シュウははっとした。

「シュウ！　来た来た！」

「レオ兄っ・・・！」

コース脇でレオンが待っていてくれて、シュウは感動に目頭が熱くなりそうだった。

シュウと一緒に走りながら、レオンが言う。

「がんばったね、シュウ！」

「レオ兄っ、ありがとう！　待っててくれてっ・・・！」

「当たり前だよ。みぃーんな、シュウのこと待ってるよ？」

「えっ・・・！？」

シュウは驚いた。

ゴール手前４００ｍのところには、近道してきたグレルが。
ゴール手前３００ｍのところには、リン・ランが。
ゴール手前２００ｍのところには、ユナ・マナ・レナが。
ゴール手前１００ｍのところには、カレンとサラが。

ゴールテープを持っていてくれるのは、眠ったジュリを背負ったキラとサラ。
ゴールテープの奥には、リンク・ミーナ夫妻と、リンクの背で眠るリーナ。

そして、

（親父っ・・・！）

リュウの姿を見て、シュウは今にも涙が零れそうだった。

（まさか、あの親父まで待っててくれるなんて・・・・・・！！）

みんなの声援を受けながら、シュウは最後の１００ｍを力を振り絞って走った。
白いゴールテープを腰でちぎり、シュウは腕を広げてリュウのところへと向かう。

ドラマだったら、シュウとリュウの間に流れるスローモーション。

「親父ぃいいいいいいっ・・・・・・・・・！！」

「シュウっ・・・・・・・！！」

ここで感動的に熱い抱擁を！

――と、なるわけがなかった。

「おっせえ！！」

ゴスッ！！

「――ぐおぉ・・・・！」

リュウの拳を食らい、シュウは頭を抱えて蹲る。

「何時間かかってんだよ、おまえはよ！？　待ちくたびれさせやがって！！」

「うっ、うるせーなっ！！」シュウはリュウを見上げて立ち上がった。「オレちゃんと5位以内でゴールしただろ！？　褒めてくれたって、いーじゃねーかっ！！　3位だぜ、3位！？」

「3位でゴールしたって言ったって、あとは全員脱落ってなりゃあ、おまえはビリなんだよ！！」

「オっ・・・、オレ3位なのにビリかよ！？」

「ああ。まったくダセーな」

「うっ、うるせーなっ！！　ゴールできただけ――」

「でもまあ」と、リュウがシュウの言葉を遮った。「ビリでも3位だ。ほら・・・、おまえの分の賞金」

「おお」

シュウは瞳を輝かせた。

3位の賞金は１００万ゴールド。

その札束に、シュウは笑顔で手を伸ばした。

「さっ、サンキュ――」

「んじゃ」と、リュウがシュウの目の前から札束を引っ込める。「コレ俺のな」

「――！？　ちょっ、なんでだよ！？」

「何でって、おまえ俺にまだ借金返しきってねーじゃん」

「う・・・・・！」

そうだった。

シュウが抵抗できず黙ると、リュウが言った。

「んじゃあ、葉月島に帰るか。ミーナ、瞬間移動頼む」

子供の頃は遠いところまで瞬間移動できなかったミーナだったが、大人になってからは隣の島までは瞬間移動ができるようになっていた。

今朝ここ文月島に来たときのように、ミーナが皆を連れて葉月島に瞬間移動した。

瞬間移動場所は、今朝の集合場所――自分の家の前に来て、シュウは喜びで胸がいっぱいになった。

（やっと・・・！　やっと帰って来れたんだな、オレ・・・・・・！）

リンク一家や、グレルとレオンがカレンを連れて帰っていく。

（さて、オレも風呂入って寝ようっと）

玄関のドアノブを握ったシュウ。

袖を引っ張られ、目を落とす。

「ん？　どうした、マナ」

「兄ちゃん・・・」

「ん？」

「約束したよね・・・」

「約束？」

鸚鵡返しに訊いたシュウ。
数秒後、思い出して顔が強張っていく。
「がんばってね、兄ちゃん・・・」
「マ、マ、マナっ？　に、に、兄ちゃんっ、やっぱり今からはちょっと無理かなっ・・・！？」
「パパ・・・」と、マナがくるりとリュウに振り返った。「兄ちゃんが、あたしとの約束やぶった・・・」
「なっ・・・、何だと！？」驚愕したリュウ。「こんのっ・・・バカ息子がっ！！」
ゴスッ！！
さっきに続いてまたもやリュウの拳を食らい、シュウは頭を抱える。
「可愛い妹と約束しておきながら、守らねえとはどういうことだ！？　あ！？」
「だっ、だって親父っ！　マナが明日の夜に新鮮なイナゴの炭火焼食いたいって言うんだぜ！？　オレ、今は秋だろうスゲエェェェ遠い島まで飛ばないといけねーんだぜ！？　今から飛べって言うのかよ！？」
「飛べ」
「あっ、あっさり言うなっ！！　オレ今、すげー疲れてんだぜ！？」

「それがどうした・・・・・・！？」

リュウから漂い始めた殺気。

（う・・・、行かないとマジで殺されるっ・・・・・・・！）

シュウは携帯電話を取り出した。

一緒にイナゴ獲りに行くと言ってくれた、レオンに電話をかける。

「も、もしもし、レオ兄っ！？　オレ、すっかり忘れてたんだけどっ・・・、イナゴ獲りのことっ・・・・・・」

「ああ、そうだった」と、レオンが電話の向こうで苦笑したのが分かった。「わかった、これから一緒に空港に行こう」

「う、うんっ・・・。ありがー―」

シュウの言葉を遮るように、リュウがシュウの手から携帯電話を取った。

「なあ、レオン」

「ん？　何、リュウ」

「あのよ、ちょっと頼まれてくれねえ？」

「何を？」

「シュウの奴これから飛ばないといけねーからよ、明日シュウの分

の仕事も頼んだわ」

「えっ！？」

と、レオンが電話の奥で驚くと同時に、シュウも驚いた。

リュウが続ける。

「俺、明日の仕事多くて無理っぽいからよ。頼んだわ」

「ちょ、ちょっと――」

「んじゃ、明日の朝にシュウの分の仕事内容教えっからちゃんと来いよ」

と、リュウが電話を切り、シュウに携帯電話を返す。

「おっ、親父っ？」シュウの声が裏返る。「オ、オレさ、レオ兄と一緒にイナゴ獲り行く約束してたんだけどっ・・・！？」

「さっき言った通り、レオンは明日おまえの仕事代理すっから無理だな」

「オ、オレ1人で行くのっ・・・！？」

「おう、頑張れよー」

と、リュウが欠伸をしてキラと娘たちを連れ、家の中へと入っていった。

カチャ。

なんて鍵まで掛けられた。

「・・・・・・ガンバリマース」

――1時間後。

シュウは遠い島へと行く飛行機の中にいた。

窓に映るシュウの頬に、一粒の涙が光ったのは秘密だ。

第１４話　障害物マラソン～その４～（後書き）

私の周りでは「古今東西ゲーム」というのですが、「山の手線ゲーム」ともいうみたいですねー。

第15話　次女の悩み

灰色の猫耳と尾っぽ。
しなやかな身体。
艶のある青い髪。
整った顔立ち。

その紅い瞳にアタシを映して。
その優しい声でアタシを呼んで。

「サラ・・・」

なぁに、レオ兄。

「・・・き・・・っ・・・・・・・・」

えっ？

「・・・きろ・・・」

レオ兄？

「起きろっ！」

えっ！？
ちょ、声ちが――

「起きろっつてんだゴルァァ！！」

布団をがばっとめくられ、次女・サラは目を覚ました。
そこには一家の長男・シュウの顔。

「やーっと起きやがったか。朝飯だぞ」

「・・・・・・アタシときどき本気で兄貴のことぶっ飛ばしたくなるわ」

「なっ・・・、何だよいきなり!?」

「せっかくいい夢見てたってのに、ムカつく。親父と同じ顔ってだけでムカつくのに、何なの?」

「なっ、何なのって、おまえこそその可愛くねえ性格は何なの!?」

「フン」

サラはベッドから起き上がって部屋から出た。
2階から一階へと続く緩やかな螺旋階段を下りてキッチンへと向かう。

キッチンには長女・ミラがいた。
いるはずの母親・キラの姿が見えないのは、きっと父親・リュウを起こしに行ったら欲情されて捕まっているのだろう。

「おはよ、お姉ちゃん」

「おはよう、サラ」

「いただきまーす」

「あっ、こらサラっ。みんなそろってから食べないと、パパに怒られちゃうわよ？」

「いちいち親父に構ってられないよ。何であんなにうるさいんだろ」

と、サラは溜め息を吐く。

サラには大きな悩みがあった。

リュウがうるさいせいで、思うように恋愛ができないことだ。

（レオ兄はレオ兄で、親父に逆らわないし・・・）

サラが小さい頃から恋をしているミックスキャットのレオン。

飼い主であるグレルや、リュウとキラ、リンクとミーナとの付き合いは、もうかれこれ１８年になる。

そのせいでリュウと親しく、リュウの性格もよく知っていて、リュウを怒らせるようなことは極力しない。

おかげでリュウが決めた門限６時までにサラを必ず家に送るし、「サラに手を出すな」なんてリュウの命令に背いたことはない。

（まあ、アタシに何もしてくれないのは、アタシのことそういう対象に見てないからかもしれないけど・・・・・）

レオンのサラに対する態度は、他の兄妹たちに対する態度と何ら

変わらない。
もう16歳になるのに、小さいときからの態度のままだ。

(アタシの気持ち知ってて何もしてくれないってことは、やっぱりアタシはレオ兄にとって恋愛対象じゃない・・・・・か)

妹たちがシュウに起こされて続々と2階から下りてくる中、サラはさっさと朝食を終えて自分の部屋へと戻った。
ハンターの仕事へ行く準備をして、玄関へと向かう。

「おいサラ！　朝飯一緒に食えって言ってんだろうがっ！」

そんないつものリュウの声を無視して、サラは師でもあるレオンとの待ち合わせ場所へと向かった。

毎朝のごとく、ふて腐れるリュウ。

「なっ・・・んだよ、サラの奴。あいつ誰に似たんだよっ・・・！」

「どう考えても親父だろうが」そう言って、シュウは溜め息を吐いた。「本当、そっくりで可愛くねえ・・・・・・」

「まあ、リュウに似ているなサラは」と、キラが同意した。「そのせいか、サラは小さい頃からリュウに甘えるのが上手くなかった。ミラや妹たちがリュウに甘えるのを、サラはいつも離れたところで見ているような子だった」

「ああ・・・、そうだったな」シュウは小さい頃からのサラの様子を思い出しながら言った。「んで、そんなサラをよく構ってたのがレオ兄だったよな」

「ああ。そのせいか、サラは昔っからレオンが大好きだな」そう言ったあと、キラが小さく溜め息を吐いてリュウを見た。「リュウ、いい加減サラの好きなようにさせてやってはどうだ？」

「な・・・、なんだよ？」リュウがキラの顔を見た。「好きなようにって・・・・・・」

「サラだってもう１６になるのだ。恋愛くらいさせてやっても良いだろう」

「嫌だ」

どこのガキだよ・・・。

と、シュウは心の中でリュウに突っ込んで苦笑する。

キラが深く溜め息を吐いて続けた。

「リュウ・・・、娘たちはいずれみんな嫁にいくのだぞ？」

「ふっ、ふざけんなっ！」

「うちの場合だと、長女のミラよりもサラの方が先に嫁にいくだろうな」

「やっ、やらねえっ！」

「良いではないか、レオンなら」

「よっ、良くねえっ！」

「サラに嫌われるぞ、リュウ」

「なっ・・・・・・！」

ゴスッ！！

「――ゴフッ！？」

と、殴られたのはシュウである。

「なっ、何でオレを殴るんだよ親父！？　意味わかんねえっ、夫婦喧嘩だろ！？」

「うるせえっ！！　俺にキラは殴れねえっ！！」シュウにそう怒鳴ったあと、リュウが再びキラを見た。「お、おい、キラ！　なっ、何でそういうこと言うんだよ・・・・・・！？」

「サラが不憫でな」

「そっ、それじゃ俺が悪いことしてるみてえだろ！？」

「サラにとっては良くはないだろう」

「なっ、何・・・・・・！？　キ、キラおまえっ・・・・！　今夜２回しか抱いてやらねえからなっ！！」

「良いぞ」

「――！？　いっ、いいのかよ！！」

「むしろ1回にして良いぞ」

「・・・・・・。・・・やっぱ5回で許してやるぜっ・・・・・・・!?」

「そんなに甘くしてくれなくて良いぞ、リュウ」

「・・・キ、キラ、俺の好意を受け取ってくれて構わねえんだぜ・・・・・・!?」

「悪いから受け取らぬぞ」

「いやいや遠慮するなっ・・・!!」

「遠慮するぞ」

「・・・・・たっ、頼むから受け取ってくれ!!　2回ってどんなイジメだよ!?　おまえいつからそんなひでー女になったんだよ!?　なあオイ、キラ!?　おまえまだ俺のこと好きか!?」

突っ込みどころ満載すぎて突っ込めないぜ、親父・・・。

シュウはさっさと朝食を終わらせて、魔法学校に通う妹たちの弁当作りと、仕事へ行く準備を始めた。

（本当に可哀相だよなあ、サラの奴）

仕事の休憩中、シュウはそんなことを考える。

（あいつ、本当にレオ兄のこと好きだし・・・・・・）

野原にあった切り株の上に座っているシュウ。

日傘を差して機嫌良さそうに近くを歩いていた弟子のカレンが、笑顔でシュウの顔を覗き込んだ。

「ぼーっとして、どうかなさったのかしら？」

「・・・・・・」

じっとカレンの顔を見つめるシュウ。

プニッ

なんて、人差し指でカレンのぽちゃっとした頬を触って笑った。

「可愛いな、オイ」

「ちょ、ちょっと？」カレンが少し顔赤らめて眉を吊り上げた。「今、あたくしのことバカにしたんじゃなくって！？」

「してねーよ」

「かっ、顔が笑っているのですわあああああっ！」

ぽかぽかとシュウを殴るカレン。
シュウは笑いながらカレンの小さな手を握って抑えたあと、カレンに訊いた。

「なあ、おまえさ。サラと仲良しだよな？」

「ええ。夜になると、よく電話で話しているわ」

「ふーん。じゃあ、悩み事とか相談し合ったりしてんの？」

「ええ、そうね・・・・・・」

「あいつ、親父に困ってるだろ」

「えっ・・・？」少し戸惑ったような声を出したあと、カレンが頷いた。「リュウさまのことを悪くなど言いたくないけれど、リュウさまちょっと厳しすぎるのではないかしらっ・・・・・」

「ちょっとどころじゃねーだろうな、サラにとっては」そう言って、シュウは溜め息を吐いた。「レオ兄と、デートくらいさせてやりてーんだけどなあ・・・・・・」

「そうね。・・・・・・あっ、そうだわ！」

「ん？」

「明日の夜、あたくしとサラとシュウとレオンさんで、こっそりデートプランを立ててみてはどうかしら！　リュウさまにバレないで出来るようなっ」

「明日の夜？」

シュウがぱちぱちと瞬きをすると、カレンが呆れたように言った。

「明日は、あなたのバースデーパーティーでしょう？」

「あ」

そうだった。

5月の誕生日は自分だったとシュウは思い出す。

カレンが嬉しそうに笑って続けた。

「あたくし、ちゃんとおじいさまから外泊の許可もらったのよ？明日だけではなくて、これからずっと、あなたのお宅なら外泊の許可をもらえるわ。パーティーなどにお呼ばれしたときだけだけれど」

「そうか、良かったな」

そう言って微笑み、シュウはカレンの頭を撫でる。

カレンが頬を染めて言った。

「あたくしからのバースデープレゼント、期待していてね？」

――翌日の夕方。

リュウ一家宅のリビングにて、毎月のように行われる誰かの誕生日パーティー。

今月はシュウの17歳の誕生日だ。

シュウの姿を見た、リュウとリンク、レオンの顔が引きつっている。

「シュウ、おま・・・・・・。俺と同じ顔してやめてくれ、気持ちわりぃ」

「オ、オレだって好きでやってんじゃねえぜ、親父っ・・・！」

その傍らでは、キラやミラ、双子のリン・ラン、三つ子のユナ・マナ・レナ、ミーナやリーナという女集団と、グレルがはしゃいでいる。

「可愛いぞ～っ、シュウ！」

「仲が良いのは知ってるけどハモらないでくれ、母さんとミーナ姉・・・」

「似合うじゃねーかよ、シュウ♪」

「そ、そうは思えねえな、グレルおじさん・・・」

さらにその傍らでは、サラがシュウを指差して大爆笑している。

「あーーっはっはっはっは！　最高っ！　兄貴ちょーウケる！　おいしすぎる～～～っ！！」

「うっ、うるせえっ！！　涙出るまで笑ってんじゃねえっ、サラ！！」

「うふふ、どう？」と、シュウの隣に座っていたカレン。「特注なのよ？　お気に召したかしら？」

にこにこと笑って聞かれ、シュウは激しく返答に困る。

何がお気に召したか訊かれてるって、カレンからシュウへの誕生日プレゼントが。

（こっ、こんなものを特注するんじゃないっ・・・・・・！！）

と、カレンの笑顔を見ては心の中でしか突っ込めず。

カレンからシュウへの誕生日プレゼントは、甘ロリワンピースにヘッドドレス、リボンチョーカー（鈴付き）。

おまけにチョーカーと同じリボンが、シュウの黒猫の尾っぽの先につけられている。

（オレに女装趣味なんてねえっ！！）

カレンがもう一度訊く。

「ねえ、どうかしら？　首と尾っぽのリボンについてる鈴がチャームポイントよ♪」

気に入ったと言ってほしいと言わんばかりのカレンの笑顔。
シュウは引きつった笑顔を作りながら言った。

「き・・・・・・気に入ったっ・・・・・・・・」

「良かったですわ！」

「・・・サ、サンキュなっ・・・、カレンっ・・・・・・・！」

とか言ってやっちゃうオレ、悲しい性分なんだぜ・・・。

カレンから顔を背け、シュウの笑顔が消え失せる。
シュウがカレンからのプレゼントを堪能（？）したあとは、女たちがそれらを自分の身につけて遊びだした。

「まあ、みなさんも喜んでくださったのね！」

と、はしゃいでいる女たちを見て嬉しそうに言ったカレン。
シュウは耳打ちした。

「なあ、カレン」

「何かしら？」

「パーティー終わったら、オレの部屋にしようぜ」

「分かったわ。こっそりサラにも伝えておくわね」

カレンが小声でそう言い、さりげなくサラの隣に移動した。

シュウとカレンの行動を見逃さなかったリュウ。
シュウの首に腕を絡ませ、自分の方に引き寄せた。
シュウの耳元、小声で訊く。

「今おまえ、カレンと何の話した?」

ギクッ。

としてしまいながら、シュウは冷静を装った。

「親父には関係ねえことだよ」

「俺には言えねえことの間違いじゃねーの」

またギクッ。

としてしまい、シュウの手から箸が一本落ちた。

「ち、ちげえよっ、親父っ・・・」

「おまえって嘘吐くのヘタクソだよな」

またまたギクッ。

としてしまい、シュウの手からもう一本箸が落ちた。

「う、嘘なんか吐いてねーよっ・・・!?」

「なあ、シュウ」

「な、何だよ？」

「俺はこうしておまえと話しながら、違うところを見ていたんだぜ」

「はっ？」

テーブルの方を見ていたシュウは、顔を傾けてリュウの顔を見た。

リュウの視線の先を追うと、そこにはレオンにこそこそと耳打ちしているサラ。

（や、やべえ・・・！）

シュウはごくりと唾を飲み込んだ。

（オレたちがこれからサラとレオ兄の『親父に秘密で出来ちゃうデートプラン』を考えようとしていることがバレる！）

シュウの耳元、リュウが小声で続ける。

「おまえがカレンに何かを伝え、それをカレンがサラに伝え、それを今度はサラがレオンに伝えたな」

「・・・っ・・・・・・！」

シュウは冷や汗を掻きはじめた。

「と、いうことは・・・・・・」

と、数秒の間、考えたリュウ。

シュウの目の前、リュウの顔が驚愕していく。

「おっ、おまえらっ・・・・・・・！！」

「おっ、怒らないでくれっ、親父――」

「４Ｐすんの！？」

「――ちっ・・・」シュウの顔も驚愕する。「ちげえええええええええっ！！」

「おっ、おまえセックスしたきゃカレンと２人でやってろよ！　サラは妹だってのに、まじ信じらんねえっ・・・・・・・！！」

「おっ、オレはアンタの思考回路が信じらんねえよっ！！」

「でもまあ、サラを抜いて３Ｐにすんならいいぜ？」

「だっ、だからちげえって言ってんだろ！！」

「何だよ、驚かせやがって」

「オレが驚いたわっ！！　このバカ親父っ！！」

ゴスッ！！

リュウの拳骨を食らい、シュウは両腕で頭を抱える。

「いてえぇっ・・・！」

「一言多いからそういうことになるんだぜ、バカ息子」

リュウが呆れたように言い、小さく溜め息を吐いた。

（さて）

と、リュウの鋭い瞳が、シュウとカレン、サラ、レオンを見回す。

（なーに企んでんだか）

第16話　予定変更で・・・

シュウとカレン、サラ、レオンでこっそりとした相談の結果。
サラとレオンのデートは、シュウの誕生日から一週間後の日になった。

当日の分の仕事は前日までに終わらせ、当日は仕事へ行くフリをしてサラとレオンはデートへと向かう。
サラがとても喜んでいたせいか、レオンは反対できなかったようだ。
リュウに内緒でデートに行く、ということを。

（サラと内緒でデートに行ったなんて親父にバレたら、レオ兄ただじゃ済まされねえよな・・・・・。絶対バレねーようにしねえと）

サラとレオンのデート日の2日前、仕事から帰ってきたシュウは螺旋階段を上りながらそんなことを考えていた。
2階へと上って、向かって一番右端の自分の部屋へと向かう。

途中、サラの部屋のドアが少し空いているのに気付いて立ち止まった。

「サラ？　いるのか？」

「いるよー」

と、サラの声。
シュウがドアを開けると、サラがうきうきとした様子でクローゼットからたくさんの洋服を出していた。

「気が早いな。デート明後日だろ？」

「いーの。ねえ、兄貴」

「ん？」

「レオ兄ってミニスカとショーパンどっちが好きかな」

「さあ？　んでも、どっちでも褒めてくれるだろ」

「うーん。初デートだし、スカートにしよっと」

サラの姿を見て、シュウは微笑む。

（こういうとこは可愛いよな。サラも女の子っていうか）

サラが続ける。

「ねえ、兄貴」

「ん？」

「勝負下着は可愛い系と清純系とセクシー系とエロカワ系どれがいいかな」

「・・・・・。おまえヤル気満々だね」

シュウは苦笑した。

サラが続ける。

「ねえ、兄貴」

「ん？」

「アタシさ、門限６時までに帰ってこなきゃいけないじゃん？　遅くなると親父にバレるかもしれないし」

「そうだな」

「外が明るいうちに入りやすいラブホってどこかな」

「・・・・・・。知らね・・・」

サラ、おまえ・・・。

間違いなく親父の血を引いてるな・・・・・・。

シュウは顔を引きつらせたあと、サラの部屋のドアを閉めた。

一階の方からリュウの声が聞こえてきた。

「シュウ、帰ったのか？」

「お、おうっ・・・」リュウの声にどきっとしながら、シュウは訊いた。「な、何？　親父っ・・・」

「一週間分の仕事渡すから、書斎まで来い」

良かった、仕事の話か。

シュウは安堵して再び一階まで下り、書斎へと入っていった。

リュウが仕事内容の書かれた書類を、シュウに渡す。

「まずこれが明日の分な」

「ん」

シュウは書類を受け取りながら、ざっと目を通していった。

「で、これが明々後日の分な」

「ん」

と、次の書類を受け取ったシュウ。
瞬きをしてリュウの顔を見る。

「あれ？　明後日の分は？」

「おお、悪い。忘れてた」

と、リュウ。
一枚の紙をシュウに渡した。

「ほら、明後日の分」

「え？　１つだけか、めずらし――」

紙に目を通したシュウの顔が強張る。

『依頼内容：葉月島超一流ハンター・リュウの可愛い娘である次女・サラと、同じく葉月島超一流ハンターであるミックスキャット・レ

オンのデートを尾行せよ。詳細は依頼者まで。

依頼者：葉月島超一流ハンター・リュウ
住所：おまえと同じ
連絡先：おまえ知ってるだろ

報酬金額：１０万ゴールド』

シュウは驚愕してリュウの顔を見た。
リュウがダークな笑みを浮かべている。

「どうかしたか、シュウ」

「なっ、何で知って・・・・・・！？」シュウは、はっとした。「まっ、まさか親父っ、オレの誕生日の日、オレたちが話してるの盗み聞きしてたな！？」

「俺はおまえらが怪しいってことに気付いただけで、そんな無骨なことしてねえぜ」

「じゃ、じゃあ何で知ってんだよ！？」

「珍しくレオンがいつまで経っても俺に何も言わねーもんだから、ついさっき電話で吐かせてな。なぁに、安心しろ。デート後だったらぶっ飛ばしてたが、デート前だから何もしねえぜ。優しいな、俺」

ああ、レオ兄・・・。
言っちゃったのね・・・・・・。

シュウは苦笑した。

リュウに問われたら、レオンが黙っていられるわけがないとは思っていたが。

「で、依頼の詳細を話すからよく聞け」と、リュウ。「いいか、シュウ。これは仕事だ。無粋だなんて思わずに、心置きなくサラとレオンを尾行しろ」

「って、言われてもよ・・・・・・」

「んで」と、リュウが続ける。「サラがレオンに何かされそうになったら、すかさず阻止するように」

「それじゃあ、尾行してたのバレバレじゃねーか」

「あくまでも偶然を装え。決して仕事だとバラすなよ、俺がサラに嫌われっからな・・・!?　絶対だぞ・・・!?　絶対にバラすんじゃねーぞ・・・・・・!?」

必死だな、親父・・・。

シュウは深く溜め息を吐いて承諾した。

「わかったよ、親父」

「よし」

「でもさ、やっぱり尾行なんてしたくねえからさ・・・。オレとカレンも一緒に遊びに行くっていうのじゃダメ?」

「ダブルデートか」

「ダブル・・・？　オレとカレンは別にデートってわけじゃねえけど」

「いいぜ、それでも。すぐ間近にいた方が、すぐにサラを助けられるしな」

と、リュウ。

依頼内容を『サラ・レオンを尾行しろ』から、『サラ・レオンと一緒に遊んで来い』に変更した。

リュウから一週間分の仕事を受け取ったあと、シュウは自分の部屋へと戻った。

部屋のドアを閉めるなり、レオンに電話をかける。

「もしもし、レオ兄？」

「うん、ごめん・・・・・・」電話の向こう、レオンが苦笑したのが分かった。「シュウの誕生日の日、何を話してたか訊かれて・・・・・。黙ってられなかったよ」

「いや、いいよレオ兄。レオ兄は誠実ってだけだから。それでさ、親父にバレたことサラには言ってないよね？」

「うん、まだ言ってないよ」

「じゃあさ、言わないでくれるかな」そう言ったあと、シュウは苦笑した。「オレ、親父に仕事頼まれてさ・・・・・・」

「仕事？　何だって？」

「サラとレオ兄のデートに一緒に行けっていう・・・・・・」

「へえ、リュウにしては優しい依頼だね。デートに行かせるなっていうような内容かと思ったよ」

「アレだろ。そんな内容だと、親父が裏にいるってバレバレだから」

「ああ、なるほどね。バレてサラに嫌われるのが怖いのね」

「そゆこと。だからさ、オレとカレンも仕事として一応一緒に行くけど、サラには仕事だってバラさないでくれないかな。必死なんだよ、親父・・・・・・」

「分かった。サラには言わないよ」

「ありがと、レオ兄。サラの説得はカレンにしてもらうのがいいよな。オレがサラに言っても喧嘩になるだけだろうしさ」

レオンの同意を確認したあと、シュウは電話を切った。
次はカレンに電話をかけ、今の状況を伝える。

「つまりダブルデートの提案を、あたくしがサラに出してみれば良いのよね？」

「そうしてくれると助かる」

「分かったわ。リュウさまにバレてしまったものは仕方ないもの。これからサラに電話してみるわ」

「サンキュ。それじゃ、おやす――」

「あっ、待ってっ・・・！」と、電話の向こうでカレンが慌てたように声をあげた。「ね・・・、ねえ、シュウ」

「ん？」

「明後日のダブルデート、どんなお洋服がご希望かしら？」

「おまえも張り切ってんのかよ」シュウは笑った。「オレなんかとのデートで、気合入れなくてもいいっての」

「きっ、気合なんて入れないのですわっ・・・！」カレンの声が上ずった。「でっ、でもっ、一応気を遣って訊いてあげたのですわっ・・・・・！」

「そうかよ、サンキュ」そう言いながら、シュウはもう一度笑った。「じゃあ、そうだな。おまえが一番気に入ってる服がいいな」

「分かったのですわっ」

カレンが明るい声で承諾した。

電話を切ったあと、シュウはベッドに寝転がって微笑む。

（デート前の女の子は可愛いな、まったく・・・・・・・）

それから３０分後あたりか、うとうととしていたシュウは身体を揺すられて目を開けた。

「兄貴っ、兄貴っ」

と、シュウを呼んでいるのはサラだった。
はしゃいだ顔をしている。

「ねね、兄貴。明後日さ、やっぱりダブルデートね！」

何も知らないフリして、シュウは鸚鵡返しに訊く。

「ダブルデート？」

「アタシとレオ兄、それから兄貴とカレンで！　楽しそうだからいいよねっ？　ていうか、もうカレンと一緒に決めちゃったし！」

どうやら、カレンはばっちりサラの説得をできたらしい

「分かった、いいぜ」

シュウがそう答えると、サラがさらにはしゃいだ。
あまりお目に掛からないサラのこういった表情に、シュウは顔を綻ばせる。

（可愛いな、オレの妹）

なんて思ったあとに苦笑した。

（とかバカなこと言ってると親父みたいだぜ・・・・・・）

デート当日。
サラは仕事へ行くフリしてカレンの家へ行き、そこでデートの準備をする。
シュウは車で屋敷まで迎えに来てくれるレオンと一緒に、時間になったらカレンの家へと向かう。

朝食と魔法学校へ通う妹たちの弁当作りを終えたあと、シュウは自分の部屋へと向かった。
ドアを開けると、そこにはサラの姿。

「はい、兄貴。今日これね」

と、サラがシュウに渡したものは、リュウのクローゼットから持ってきただろう服。
サラが言う。

「ファッションに関しては、兄貴より親父の方がカッコイイからね。ほら、このジャケット良いでしょ？」

「デートとなると、オレもそれなりに気合入れないといけねーのか・・・」

「あったりまえじゃん！　カレン気合入れてくるんだよ？　兄貴もカレンのためにいつもよりカッコよさ3割増しくらいにはなってよね」

シュウが差し出された服を受け取ると、サラが戸口へと向かって行った。

「じゃ、アタシ行くね。１０時だからね、１０時。ちゃんとレオ兄と一緒に迎えに来てね」

「分かってるよ」

シュウが笑って承諾すると、サラが足取り軽く玄関へと向かって行った。

サラが家から出て行ったあとは、リュウがシュウの部屋までやって来た。

「やっぱりおまえか」

と、リュウ。

シュウが持っている服を見て言った。

「サラが持ってきたんだよ。親父、今日この服着んの？」

「いや」

「んじゃあ借りていいよな」

「いいけど」そう言ったあと、リュウがじっとシュウの顔を見つめた。「・・・・・・なあ、シュウ」

「ん？」

「なんだかんだで、おまえも気合入ってんのな。カレンのこと落としてくんの？」

「そんなんじゃねえって」

「ちゃんとゴム持ってけよ。ラブホのゴム良くねえぞ」

「違うって・・・・・・」

「違わねーよ？」

「ゴムの話じゃねえっ！」シュウは突っ込んだあと、溜め息を吐いてリュウの顔を見た。「オレはカレンのこと好きとかそういうんじゃねえって言ってんの。前も言っただろ」

「ふーん。でも、カレンの方はどうだろうな」

「は？」

「何でもねー」

リュウがそう言いながら、シュウの部屋のドアを閉めた。

鍵も掛けた。

「お、親父？　何して・・・・・・？」

「期待させてワリィけど、俺おまえのことは抱けな――」

「んなこと期待してねえっ！！　何してんだって訊いてんだよオレは！？」

「リン・ランにデートの準備してるってバレたら厄介なことになんだろ」

「ああ・・・、それで鍵かけたのね」と、納得したあと、シュウはぱちぱちと瞬きをしてリュウの顔を見た。「てか、何で親父がオレの部屋に入ってくんの？」

「手伝ってやる」と、リュウが備え付けてあるバスルームの洗面所へと向かって行く。「デートの準備」

「は？　いいよ・・・」

「じゃあ来い」

「いや、遠慮するって意味で・・・・・・」

「うるせーなあ」と、リュウが整髪料片手に洗面所から顔を出した。「ビシッと決めてくれねーと困るんだよ、俺と同じ顔してんだから」

「それが理由かよ」

「さっさとこっち来い」

「分かったよ・・・」

シュウは苦笑しながら、リュウのいる洗面所へと向かった。

ふと時計を見ると8時少し前。

ダブルデートまで、あと約2時間だ。

第17話　ダブルデート～前編～

――午前9時半過ぎ、レオンが車でシュウを迎えにきた。
思ったよりも少し遅い時間だった。

レオンの車の助手席のドアを開けてから、シュウは気付いた。
2つのミニブーケが助手席に置いてあることに。

「な・・・」シュウの目が丸くなる。「なんってカッコイイことするんだ、レオ兄・・・！」

「何が？」レオンが笑いながら、助手席のミニブーケを避けた。「さあ乗って、シュウ」

シュウは助手席に乗ってシートベルトをすると、レオンの手から2つのミニブーケを取った。
レオンが車を発進させる。

「なあ、レオ兄。これ、サラとカレンへのプレゼントだろ？」

「うん。花屋さんの前を通りかかったときに、目に入ってね。可愛いから買ってきた。1つは僕からサラへ、もう1つはシュウからカレンちゃんへのプレゼントだよ。これ買ってたから、少し遅くなっちゃったんだけど」

「レオ兄だとキザにならねーところが無茶苦茶カッコイイぜ」

シュウはそう言ったあと、2つのミニブーケを見つめた。
赤系とピンク系のミニブーケ。

「こっちがカレンかな」と、シュウはピンクのミニブーケを指して言った。「あいつピンク好きみてーだし、サラは赤いイメージがするから」

「うん、僕もそのつもりで買ってきた」レオンが同意した。「カレンちゃんは可愛らしいピンク色のイメージで、サラは鮮やかな赤のイメージ。どんな人混みの中に紛れてても、すぐに見つけられるような鮮やかさだよね」

そうサラを語るレオンの顔は、とても優しい。

「なあ・・・、レオ兄?」シュウはレオンの横顔を見ながら訊いた。「つかぬこを訊くんだけど。サラのこと可愛いって思ったりする?」

「するよ?」レオンが即答する。「可愛いよ、サラは」

「ふーん。それってやっぱり、レオ兄の前だからだろうな。あいつ、オレの妹の中で一番可愛くない。生意気だし、素直じゃないし、口は悪いし、本当親父を女にしたみてーでさ」

レオンがおかしそうに笑った。

そのあと、シュウの頭に片手を乗せた。

「でもね、シュウ。サラがリュウに似ているということは、サラはとても弱いところも持っているんだよ」

それって、親父が弱いってこと・・・?

シュウがレオンの言葉を飲み込めずにきょとんとしていると、レ

オンがシュウから手を離して笑った。

「なんでもないよ。ねえ、シュウ。サラの門限はいつも通り6時でいいのかな？」

「うん」

レオンが笑顔で承諾して、カレン宅へと急いだ。

午前10時10分前のカレン宅。

そこには、カレンとサラしかいなかった。

カレンの部屋の中、もうすぐ迎えが来るというのにまだ慌ただしかった。

「ね、ねえ、カレンっ？　アタシおかしいところないっ？」

「とても素敵よ、サラ。本当にもう、モデルさんの様だわ！　あたくしの方こそ、おかしなところはないかしらっ？」

「すんごい可愛いよ、カレン。お姫様みたいっていうかさ！」

大きな鏡の前、並んで己の全身をチェックするカレンとサラ。

鏡の中、視線が合う。

「頑張ってね、サラ？　そのセクシーで美しい生脚なら、きっとレオンさんもイチコロなのですわっ！」

「カレンこそ、頑張りなよ？　そんな可愛い服着ちゃってさ、やっぱり兄貴のこと意識してんじゃん？」

「そっ、そんなことないけれどっ・・・！」カレンの頬が少し染まった。「で・・・でも、シュウはあたくしのことどう思っているのかしらっ・・・・・・？」

「兄貴って、自分のことにはニブいから今の時点では何も言えないけどさ。カレンといるときはよく笑う気がするよ」

「そう・・・なの・・・・・・？」

「うん。こうなったらアタシたちであの男2匹ラブホ連れ込むか～っ！？」

「きゃあああああっ！　そっ、そんなのダメですわあああああっ！」

「オレ、おまえのこと好きみてえ。なあ、いいだろ？」（↑シュウ風に）

「いっ、いけませんのですわあああああああっ！！」

「顔笑ってるし」

なんてカレンとサラが騒いでいたら、インターホンがなった。

はっとして顔を見つめあい、カメラへと向かう。

そこには、並んだシュウとレオンが映されていた。

「は、はいっ」

カレンが上ずった声でマイクに向かって声を出すと、シュウが笑顔になって言った。

「いよう、迎えに来たぜ」

「ええ。今行くわっ・・・！」

カレンとサラは玄関へと急いだ。

「ちょ、今日のレオ兄ちょーカッコイイ・・・！　兄貴もちゃーんと決めてきたね」

「え、ええ。ちょっとドキッとしちゃったわっ・・・！　レオンさんも素敵だしっ！」

玄関で靴を履き、カレンとサラは顔を見合わせた。

うん、と頷き玄関の扉を開ける。

「お迎えに上がりました、サラ姫さま」

と、サラにミニブーケを差し出したレオン。

「迎えに来たぜ・・・・・、チビ姫」

と、カレンにミニブーケを差し出したシュウ。

「えっ、ちょっ・・・！　レオ兄かっこいいいいいいいいいいっ！！」

サラ、赤面して卒倒しそうになる。
その傍ら、カレンがぽかぽかとシュウの胸を殴る。

「チビ言わないでちょうだいっ！！」

「うるせーな、レオ兄に倣うのが恥ずかしかったんだよ」

「もうっ！　まだまだですわねっ！」そう顔を眉を吊り上げて怒ったあと、カレンはミニブーケで少し顔を隠して言った。「・・・あ・・・ありがとう、お花。嬉しいのですわっ・・・・・・」

「おう」そう言ってカレンの全身を見て、シュウはぽんとカレンの頭に手を乗せた。「うん、可愛いな」

カレンが嬉しそうに笑った。

早々に骨抜きにされてしまったサラを支え、レオンが車へと向かう。

「行こうか」

「うん」

レオンの後を着いて行ったシュウ。
途中、カレンが着いて来ていないことに気付いて振り返る。

「カレン？」

「ちょっと、シュウ」と、むくれた顔のカレン。「あたくしにはエスコートないのかしら」

シュウはぱちぱちと瞬きをして一度レオンを見、またカレンに振り返った。

「悪かったよ」そう言って笑って、カレンのところへと戻る。「ほら」

シュウが手を差し出すと、カレンが満足そうに小さな手を重ねた。

「まったく、本当にどこの姫なんだか」

「レディはみんなお姫様なのですわ」

「そうかよ」

シュウは笑い、車の後部座席のドアを開けた。
カレンが中に乗ったあと、反対側の後部座席に回って乗り込む。

「出していいぜ、レオ兄」

「ん。それじゃあ、行くよ。動物園に」

カレンとサラがはしゃいだ。
向かう先は葉月島最大の葉月動物園。
カレンと（意外にも）サラは動物好きだった。

葉月動物園へと到着すると、世間は平日なだけあって空いていた。

園内に入るなり、サラとカレンが駆け出す。

「見て見てカレン！　レッサーパンダ！」

「きゃあっ、可愛いのですわ～っ！」

あとからゆっくり歩いて行きながら、シュウとレオンは笑った。

「可愛いよね、女の子の反応って」

「てゆーか、あいつらガキだなあ――・・・って、おぉぉおぉぉおっ！」シュウが突然駆け出した。「ちょ、来て来てレオ兄っ！　カワウソいるカワウソ！　何こいつスゲエェェ可愛いっ！！　なっ、なんってつぶらな瞳をしているだ、こいつぅっ！！」

「サラたちと変わらないじゃない、シュウ」と、おかしそうにレオンが笑った。「まったく可愛いね」

「う・・・・・」

シュウは赤面した。

咳払いをし、カレンとサラのところへと向かう。

「楽しいか、おまえら」

「ええ、とっても！」

と、笑顔でカレンが振り返った。

シュウの手を引いて歩き出す。

「次はあそこにいるゾウが見たいのですわっ！」

「アタシもアタシも！」

サラがカレンに続き、レオンの腕を取ってゾウゾーンへと向かう。

「わあ」と、カレンが声を高くする。「やっぱりとっても大きいですわね」

「でかいねー」と、サラが続く。「見てよ、あのウン○！　ちょー快便！」

「サラ、おま・・・・・・」

シュウは顔を引きつらせた。

１６になろう乙女の台詞じゃなくて。

恐る恐ると言ったようにシュウがレオンの反応を窺うと、レオンはただおかしそうに笑っていた。

（レオ兄じゃなきゃ引いてたよな、絶対。やっぱりサラにはレオ兄しかいねえ・・・・・・）

なんてシュウは思う。

カレンがシュウの手を引いて歩き出した。

「あっちにはおサルさんがいるみたいですわよっ！」

うきうきとした様子のカレン。

シュウの顔を見上げて笑う。

「・・・・・・連れて来て良かったなあ」

「え?」

と、カレンがシュウの言葉にぱちぱちと瞬きをした。

「可愛いなーと思って」

「な・・・」カレンの頬が赤く染まった。「なんですの、急に?口説かれてる気分ですわっ・・・」

「そんなんじゃねーよ」と、シュウが笑う。「そう思ったから言っただけ」

「・・・・・・あ、あの、シュウ?」

「ん?」

「あなたのそういうところって、天然なのかしら?」

「?」

首を傾げているシュウ。

レオンが脇を通りながらカレンに言う。

「天然だよ」

「・・・・・・」

まー、何て罪作りな男なのかしら。

と、カレンは思わず立ち止まってしまいながら思う。

リュウさまにそっくりな顔にそんなこと言われたら、意識しないレディはいなくってよ。

そのへん分かっているのかしら、この男。

いや、分かっていないわよね。

困った男だわ。

カレンの顔を見下ろし、シュウが首をかしげる。

「なんだよ、天然って？」

「・・・・・なんでもないのですわ」

カレンは言って、再び歩き出した。

シュウの手を引きながら。

（でもまあ、良いわ）

と、小さく溜め息を吐く。

（あなたに可愛いと言われるのは、特別なものを感じるもの・・・・・）

カレンの胸が、心地良い動悸を上げていた。

第17話　ダブルデート～前編～（後書き）

読者様、いつもありがとうございます。
日差しがすっかり秋の色に変わったなーなんて思う姫百合です。
季節の変わり目に体調など崩さぬよう、お気をつけくださいませ。
それから鋭利な刃物にもお気をつけくださいませ。

研ぎたての包丁でマッハでキャベツの千切りを作っていたら、指をざっくり切った私であります。
包帯ぐるぐるで執筆しにくっ・・・・・・orz

第18話　ダブルデート～中編～

――葉月島最大の葉月動物園にて。
只今、シュウとカレン、サラとレオンのダブルデート中。

これから猛獣ゾーンに入ろうかとき、シュウはカレンの耳元に口を近づけた。
前方を歩くサラの背を見ながら小声で言う。

「トラやライオンのところで、面白いものが見れるぜ」

「面白いもの？」

カレンはシュウの目線を追い、サラを見つめた。

トラゾーンのところで立ち止まったサラ。
トラたちがビクッとしてサラを見つめる。
サラが無言の圧力をトラたちに投げかけて数秒後。

トラたちが突然愛想を振りまくように寝転がり、腹を見せた。

「まあ」と、カレンは目を丸くした。「なんて可愛らしいのかしら！　怖いお顔していてもやっぱり猫ちゃんね！　すごいわ、サラ！」

「だろ？　トラにボスだと認めさせた図だ。ちなみにうちの母さんが通りすがったら、トラは大慌てで腹を見せるぜ。母さんは猫友達とか言うけど、トラの方は絶対怯えてるだけだよな」

「ま、まあ！　キラさんたら、あんなにお美しいのにすごいのねえ

っ」

「母さんも異常に強いからな。最強を謳われるブラックキャットの中でもダントツ。葉月町の中央にある母さんの銅像がそれを物語ってるけどさ」

葉月町の中央にあるキラの銅像。

キラが英雄だという証。

カレンも知っている。

キラはその力で世界を破滅から救ったのだと、祖父や両親から聞かされていたから。

シュウが続ける。

「ブラックキャットっていうのは破滅の呪文っていう、すげー強い魔法持っててさ。オレたちが産まれる前、母さんが親父やレオ兄たちを守るために使ったんだって」

「まあ・・・！　何と格好良い女性かしら！　素敵だわ！」

「どうやら一度使ったら使えないらしくて、母さんはもう破滅の呪文持ってないけど・・・。それでも強いぜ、あの黒猫は。親父もバケモノ並だし、なんって最強夫婦なんだ・・・・・・」

苦笑したシュウの顔を、カレンが覗き込んだ。

「どちらの血を引くあなたも、最強になれるってことよねえ?」

「オレ?　どうかな。オレの目標は親父を超えることだけど、まだまだ追いつけねえや」

「・・・・・ね、ねえ？」

「ん？」

「あたくし、弟子としてやっぱり足手まといかしらっ・・・？」シュウの返事を待たずに、カレンが続ける。「訊くまでもなく、足手まといよねっ・・・！　だ、だからあたくしも、ちゃんとハンターとして働こうと思うのだけれどっ・・・・・・！」

「え・・・」シュウはぱちぱちと瞬きをした。「つまりおまえも武器を持って戦ったりするってことか？」

「ええ」

「そりゃ、ありがたいけどさ・・・・・・」シュウが苦笑する。「おまえには向いてねえから止めとけよ。走れるような服装して、オレの仕事中にちょろちょろしないでくれれば大分助かるから」

「でも、あたくしっ・・・・・・！」

もっとあなたの役に立ちたい。

と、カレンは心の中で続けた。

必死なカレンの頭に、シュウの手が乗る。

「いいからよ、戦わなくて」

「・・・・・あたくし、役立たずなのですわ」

しょげ返ったカレン。
シュウが笑った。

「役に立ってるって、このへんが」と、カレンの頬を指で突く。「あー、気持ちいい。なあオイ、何だよコレはよ？　癒されるぜ、まったく」

「ちょっ、やっ、やめてっ・・・・・・！」

「ダイエットなんかすんじゃねーぞ？」

「やっ、やめなさいってば！　ちょっ・・・！　もおおおおおおお！！」

カレンが顔を真っ赤にし、シュウの胸をぽかぽかと殴り始める。
離れたところにいたサラが呼ぶ。

「ちょっとー、そこのお2人さん。ジャレてないでグレルおじさん見に行くよー」

レオンが笑った。
グレルを見に行く＝クマを見に行く、である。

手擦りに手をかけてクマを見下ろしながら、カレンが目を丸くする。

「まあ、こうして改めて見ると、本当にグレルさんみたいねえ」

「だよねー」サラが同意する。「紛れてたら一瞬分かんないよね」

そんな会話を聞いて、グレルのペットであるレオンはおかしそうに笑っている。
カレンとサラが次のゾーンへと向かう中、シュウはふと思い出したことをレオンに訊いてみる。

「なあ、レオ兄。いつだったか親父が言ってたんだけどさ、野生のレオ兄をグレルおじさんが引きずって家まで連れて帰った挙句、レオ兄をペットにしたって本当？」

「本当・・・」と、レオンが苦笑した。「当時の僕は１４歳だったんだけど、まるでグレルの怪力に敵わなくてね。グレルは僕がおとなしく着いて来たと思ってるけど、僕は必死に逃げようとしてたんだよ」

「へ、へえ・・・。でも、ちゃんとグレルおじさんのペットになったんだ」

「うん。当時の僕は、本当に素直になれなくて」と、レオンが当時を思い出しているかのように懐かしそうに微笑んだ。「ミックスキャットの僕は、ブラックキャットからもホワイトキャットからも疎まれる存在で、ちょっと捻くれてたんだよね。ホワイトキャットもブラックキャットも信用できないのに、人間のグレルはもっと信用できなかった。でも、グレルは本当に優しくてね・・・・・・」

本来ホワイトキャットとブラックキャットは犬猿の仲。
その間に生まれたミックスキャットは、どちらからも疎まれるものだった。

シュウはぱちぱちと瞬きをした。

「レオ兄が捻くれてたって、想像つかねーなあ」

「本当、捻くれてたんだよ?」そう言ってレオンが笑う。「グレルの仕事上、グレルはたくさんの猫モンスターを構うでしょう?」

「猫モンスター雑誌の編集者だしな」

「うん。当時の僕はさ、それが許せなくて。まあ、ヤキモチだよね。グレルが他の猫モンスターの撮影に行くたびに、僕はそこへ駆けつけて問題を起こすような子だったんだよ。そうすれば、グレルの気を引けるから」

「問題って?」

「リンクのお腹割いたりとかね。あのあと僕、キラに殺されそうになってさあ」

そう言ってレオンは笑うが、あまり笑える話ではない。

レオンが続ける。

「野生は別として、僕がホワイトキャットやブラックキャットから疎まれなくなったのってキラのおかげなんだよね。僕は本当にキラに・・・、姉に感謝してる」

ミーナもキラを語るとき、レオンと似たような表情をする。

本当の姉のようにキラを語り、心から信頼し想っているというような微笑み。

そういうのを見ると、シュウは感じる。

（オレの母さんて、本当にすごい猫なんだな）

でも、

（激しい天然バカには変わりねえ・・・・・・）

シュウが苦笑すると同時に、レオンも苦笑して言った。

「まあ、天然バカなところは困ったものだけどね・・・・・・」

シュウは深く同意して頷いた。

昼時、シュウたちは園内にあるファーストフード店で昼食を取った。

食休み中、カレンとサラは一緒に化粧室へと向かった。

鏡の前、食事で取れたリップグロスを塗りながら会話する。

「ねね、カレン。動物園を出たあとさ、どうする？」

「どうしようかしらね」

「アタシとレオ兄、カレンと兄貴に分かれて行動する？」

「う、うーん・・・」

カレンは困惑した。

シュウの仕事は、「サラ・レオンと一緒に遊んで来い」である。
そして、レオンがサラに手出しをしようものなら阻止しなければならない。
つまりすぐ近くで、サラとレオンを見張っていなければならないのだ。

かと言って、サラの友達であるカレンは、サラとレオンを2人きりにさせてあげたいもので。

サラが言う。

「兄貴と2人きりになれるチャンスだよ、カレン？」

「でもそれはいつものことだわ」

「いつもは師弟関係だけど、今日はデートだよ？　男と女なんだよ？　2人きりにならないと損でしょ～っ。アタシ今日は、絶対キスだけはしてから帰るつもり。欲を言えばエッチしたいんだけどさ」

「せ・・・積極的ねえ、サラ」

「もういい加減、待ってられなくてさ。レオ兄がアタシに何もしてくれないなら、アタシからレオ兄に迫るしかないっしょ」

笑いながら言ったサラ。
でも、その目は本気だと語っていた。

「・・・・・そうね、分かったわ！」ぎゅっと、カレンはサラの

両手を握った。「こうしましょう！　お互いが見えるところにいるけれど、離れて行動しましょう！」

そうすればサラの邪魔にもならないし、シュウの仕事である「サラ・レオンと一緒に遊んで来い」という内容に反しない気がしたから。

「そう・・・だね。今日はダブルデートだしね、離れたら意味ないか！　よし、そうしよう！」

そういうことになった。

ひそひそと話しながら、シュウとレオンのいるところへと戻る。

「動物園を出たら、海ね。で、そこで分かれて行動。これでＯＫ？」

「ＯＫよ、サラ。がんばってね、甘いキッス♪」

「もち、頑張るよアタシはっ！」

「明日にでも感想聞かせてねっ？　アンもうっ、羨ましいのですわっ！」

何だかやたらと楽しそうな雰囲気で戻ってきたカレンとサラ。

シュウは首をかしげた。

「何の話してたんだよ？」

「何でもないのですわっ！」

カレンはそう言い、シュウの手を引っ張った。

同時にサラもレオンの手を引っ張り、カレンと一緒に歩き出す。

小獣コーナーを見つつ、カレンはサラ・レオンと離れたところで口を切る。

「ねえ、シュウ？」

「ん？」

「動物園を出たあとのことなのだけれど」

「うん？」

「あたくしとサラ、海に行きたいのですわ」

「海かあ」

「それで、そこでのことなのだけれど。サラとレオンさん、２人きりにさせてあげない？　といっても、あたくしたちからはちゃんと見える距離で」

「あー・・・、そうだよな。サラの奴、２人きりの時間もほしいよな」シュウは同意して、うんうんと頷いた。「親父はレオ兄がサラに手出しするのを心配してるけど、それを知ってるレオ兄はサラに手出ししないしな。別に離れても大丈夫だよな」

「ええ、大丈夫よ」

サラはレオンさんに手出しするけれど。

と、カレンは心の中で続ける。

でもそれなら、リュウさまからの依頼内容に反しないわよね。

リュウさまは、あくまでもレオンさんがサラに手出しすることを心配しているのだもの。

サラがレオンさんに手出しするのは、まったくもって悪くないのですわ。

シュウの仕事が失敗になどなったりしないのですわ。

カレンは、じっとシュウの顔を見上げた。

「・・・ねえ、シュウ」

「ん？」

「レオンさんは、サラのことをどう思っているのかしら？」

「オレも詳しいことは分かんねえけど・・・・・・」シュウの瞳が離れたところにいるレオンを捉えた。「サラのこと好きっていう気がしないでもない」

「はっきりしないわね」

「レオ兄は、サラだけじゃなくオレや妹たちにも優しいからな。でも、こう・・・、サラに対しては特別優しい気がするよーなしないよーな？」

「・・・本当はっきりしないわね」

「おまえはどう思うんだよ?」と、シュウがカレンを見た。「レオ兄は、サラのこと好きだと思うか?」

「好きよ、きっと」

そうであることを、カレンは願いたい。
それは友達であるサラの幸せに繋がるから。

ついでに、

(シュウはあたくしのことを好きになってくれたらいいのに・・・・・)

そんなことを願っている自分に、カレンは気付いた。

第１８話　ダブルデート～中編～（後書き）

私なんぞの心配をしてくださった上にとても励みになるメールを下さった方、ありがとうございました！
そうなんですよー、指がポーンって吹っ飛んで跡形もなくなっちゃいましてねー、執筆に苦労しますわー。

――って、いやいやいやいや、指あるあるあるある（笑）

怪我が治るまで、無理せずに執筆したいと思いますー＾＾
本当にメールありがとでした！

第19話　ダブルデート～後編～

シュウとカレン、サラとレオンのダブルデート。
動物園を出たあとは、海へと向かった。

ある程度皆一緒に砂浜を歩いたところで、カレンとサラはアイコンタクトで会話をする。

（行くよ、カレン）

（OKよ、サラ）

サラがレオン手を引く。

「アタシあっちに行きたいな、レオ兄」

同時に、カレンがシュウの手を引く。

「シュウ、あたくしあちらの方をお散歩したいのですわ」

カレンとサラが向かう先は、正反対の方向。
カレンとシュウ、サラとレオンに分かれていく。

サラに引っ張られながら、レオンがシュウに振り返って言った。

「じゃあ、またあとでね」

「う、うん」

シュウは承諾し、カレンに引っ張られていった。
小走りのカレンに、シュウは歩きながら言う。

「コケても知らねーぞ」

聞こえているのか聞こえていないのか、カレンは結構な距離を走ったあと、くるりと振り返ってシュウの胸元に身体を寄せた。
シュウの腹のあたりの服を両手で握り、顔をそろそろと横に動かしていく。
シュウの身体から半分顔を覗かせ、カレンは遠くにいるサラとレオンの様子を窺った。

「ああ・・・、何て素敵なカップルなのかしら。こうして遠くから見てもお似合いだわ」

「・・・・・・覗きかよ」

「のっ・・・覗きなんかしていないのですわっ！」カレンは眉を吊り上げてシュウの顔を見上げた。「変な言い方しないでちょうだいっ！」

「覗きに見えるだろ。何オレの身体に隠れてんだよ？　壁かオレは」

カレンははっとして、握っているシュウの服を放した。

（なっ、何をしているのかしらっ、あたくしっ・・・・・・！）

顔が熱くなって、カレンはシュウに背を向ける。

「んなに慌てなくてもいーけどよ、別に怒ってねえから」

「・・・・・別に怒られると思って慌てたわけではないのだけれど」

「ふーん？　じゃあ何で？」

「・・・・・気にしなくてよろしいのですわ」

そう言いながら振り返ってシュウの顔を見上げ、カレンは溜め息が出そうになる。

シュウの鈍感さに。

「そうかよ」と言って、シュウが着ていたジャケットを脱いで砂浜の上に敷いた。「ほら、座ってろ。疲れるだろ」

「ええ、ありがとう」

カレンは敷かれたジャケットの上に座った。

カレンの隣に座りながら、シュウが言う。

「レオ兄だったら、ハンカチとか出てくるんだろうな」

「素敵よね、レオンさんて」

「ああ。カッコイイよ、レオ兄は。優しいし、気が利くしさ。モテねーわけがねえよな」

「やっぱりレディの憧れの的なのかしら」

「もう、すげーよ？　舞踏会行ったときとか」

「舞踏会？」カレンが声を高くして、鸚鵡返しに訊いた。「まあ、素敵なのですわ！　ハンターは舞踏会にも招かれるのね！」

「いや、王の信頼が厚い親父とレオ兄だけ。舞踏会全体の警護の仕事で毎月行くんだ。昔は親父とリンクさんで行ってたみたいだけど、今のリンクさんは親父に代わってギルド長の仕事をしてる分忙しいからな。代わりにレオ兄が行くようになったんだ」

興味津々と、カレンは頷いている。

「それで？　舞踏会で、リュウさまやレオンさんも踊るのかしら？」

「ああ。それがすげーんだよ。オレも去年1年間は親父の弟子だったから舞踏会に着いてったんだけどさ、親父にもレオ兄にもご婦人たちが詰め寄ってバトル始めんだぜ？　誰から親父やレオ兄のダンスパートナーやるかで」

「まあ、さすがですわね。・・・あなたにはレディは寄って来なかったの？」

そんなわけがないと分かりながら、カレンは訊いた。

シュウが苦笑して言う。

「来た。そりゃそうだろ、あの親父の息子ってなったらどんなんでも興味沸かれるぜ」

「それもあるだろうけれど・・・・・・」

そうでなくてもレディは寄って来ていたと思うわ。

そう続けようとして、カレンは口を閉ざした。
口を閉ざしたカレンの顔を、シュウが覗きこむ。

「何だよ?」

「なんでもありませんわ」

「またかよ」シュウが眉を寄せた。「何なんだよ、さっきから。気になるじゃねーか、教えろよ」

「良いから、続きを聞かせてくれないかしら?」カレンは話を逸らす意味も含めて催促した。「あなたもレディと踊ったの?」

「うん」

「踊れるのね」

「親父にステップ叩き込まれた」

「そう。羨ましいのですわ、舞踏会。あたくしも踊ってみたい・・・・・」

カレンの頭の中に、シュウの腕にエスコートされて踊る自分が浮かぶ。
少し頬を染めて微笑んでいるカレンの横顔。

シュウはそれを見ながら言った。

「んじゃあ、連れて行ってやるよ」

「えっ？」カレンは驚いてシュウの顔を見た。「ほ、本当っ？　本当に連れて行ってくださるのっ！？　舞踏会にっ！？」

「ああ。親父に言えば、オレも連れて行ってもらえるだろうから。そうしたら弟子のおまえも着いて来れるだろ。次の舞踏会は６月の頭な」

カレンの瞳がきらきらと輝いていく。

「ありがとうっ・・・！」

「おうよ」そう言って笑って、シュウがぽんとカレンの頭に手を乗せる。「おまえ、踊りたいんだろ？」

「え、ええっ・・・」カレンは赤面しながら頷いた。「あっ・・・あたくしも――」

「親父と」

「は？」

「オレが親父に頼んで優先させてやっから、期待していいぜ」

「・・・・・・」

誰かこの男を何とかしてくださらない？

何なのかしら、このニブさ。

この男のことを好きだと気付いたら気付いたで、いろんな意味で苦労しそうなのですわ。

リュウさまに失恋したときのことを思い出すと辛いものだから、今度はもう少し慎重に行きたいのだけれど。
ここまでニブいと、サラのように積極的に行かないとダメなのかしら。
そう、サラのように・・・・・・。
カレンの瞳が、遠くのサラを捉えた。

レオンと並んで歩いていたサラは、振り返ってシュウ・カレンとの距離を確認して立ち止まった。

（これくらい離れればいっか）

繋いでいた手を引っ張られ、レオンがサラに振り返る。

「座ろ、レオ兄」

「そうだね」

レオンがハンカチを取り出し、サラのために砂浜に敷いてやる。

「ありがと、レオ兄」

サラはそう笑顔で言って、ハンカチの上に腰掛けた。
レオンが隣に座るのを待ってから、サラは単刀直入に言う。

「ねえ、キスして」

「へ？」

レオンがきょとんとしてサラの顔を見つめた。

「キスして、レオ兄。アタシがレオ兄のこと好きだってこと知ってるよね。ねえ、キスして」

「・・・・・えーと」レオンが苦笑する。「リュウに許可取ってからじゃダメかな」

「言うと思った」サラは小さく溜め息を吐いた。「あの親父が許してくれると思う？」

「む、難しいけど・・・・・・」

「ていうか無理だよ。単に親父に言わなきゃいーんだから、キスしてよ」

「う、うーん。リュウを裏切ることになっちゃうからなあ」

「・・・・・何よ、親父親父って」サラが膝を抱えて顔を埋める。
「アタシがキスしてって言ってるんだから、してくれたってっ・・・・・。・・・ぐすっ・・・」

レオンは狼狽して、サラの顔を覗きこむように見た。

「ご、ごめんね、サラっ・・・・・・・？」

「・・・ぐすっ・・・えーん・・・」

「お願い、泣かないで・・・・・・・！」

頭に触れたレオンの手を、サラが握った。
膝に埋めていた顔を、サラが徐に上げる。

レオンの赤い瞳に映ったのは、リュウ風・不敵な笑み。

「なぁーんてね」

目の前数センチの距離でぱちぱちと瞬きをしたレオンに、サラの唇が重なった。
呆然としているレオンの顔を見て、サラが笑う。

「なぁに、レオ兄？　アタシ、キスしてくれないからって可愛く泣き落としに出るような女じゃないよ、めんどくさい。してくれないならこっちからするまで」

「・・・・・・やられたね。さすがはリュウの子だよ」

そう言ってレオンが笑った。

「ねえ、される方なら親父を裏切ったことにはならないよ？」

「そうだね」

「というわけでー・・・・・ああーっと！」サラ、いかにもワザとらしくレオンを押し倒す。「ごめーん、レオ兄。手が滑ったぁ。大丈夫？」

「大丈夫」レオンがそう言いながら、おかしそうに笑った。「まったく、ストレートだね。リュウそっくり」

「嬉しくないし」

「ごめんごめん、怒らないで」

レオンは手を伸ばしてサラの頭を撫でた。

レオンの顔を見下ろす、サラの母親譲りの黄金の瞳。

不安そうに揺らいでいる。

「レオ兄、アタシのこと好き・・・・・・？」

レオンは微笑んだ。

（そんな顔もリュウを思わせるね、サラ。大丈夫だよ・・・・・・）

レオンの手がサラの頬に触れる。

「好きだよ、サラ」

サラの顔が不安から喜びへと変わっていく。

「ま、分かってたけどね」

「バレちゃってたか」

そう言ってやって、レオンはおかしそうに笑う。
サラの首の後ろに手を当てて誘う。

「ほら・・・、おいで」

再びサラの唇が、レオンの唇に重なった。

（サラのように積極的に・・・・・・って）

遠くのサラを見つめていたカレンは、ぼっと顔が熱くなるのを感じた。

「す・・・、すごすぎるわ、サラ」

「サラ？」

と、カレンに続いてサラに顔を向けたシュウ。
仰天した。

「なっ、何あいつレオ兄のこと押し倒してんだよ！？」

「らぶらぶですわねえ」

「いや、レオ兄が襲われてるだけだろ！」

「ああ、素敵な甘いキッス・・・」

「いや、噛み付いてるだろアレ！　獲物をし止めたトラのお食事中だろ！」

「あら、ではお邪魔しないようにしないといけませんわね」

「いや、助けなきゃだろ！」

慌てて立ち上がったシュウ。

グイッ

と黒猫の尾っぽを引っ張られて飛び跳ねる。

「フギャッ！！」

「すごい声出すのねえ」

「なっ、何すんだおまえ！？　尾っぽはオレの弱点なんだからやめてくれっ！」

「やっぱり猫ちゃんねえ。無粋なことしないで座りなさい」

「オレはレオ兄を――」

「ほーら、あたくしネコじゃらし持ってきたのですわよ～。ほ～ら

ほらほら♪」

「ふにゃあぁ～～～ん♪　――なんて、誰がジャレるかっ！！　そんなもん持って来てんじゃねえっ！！」

「あら、ジャレないの。じゃあハイ、マタタビお食べ♪」

「おおっ、美味そうなマタタビにゃー・・・ハグハグ・・・――って、マズイわっ！！　おまえバッグの中に何入れて来てんだよ！？」

「次は尾っぽの毛をブラッシングしましょうね～♪」

「うぅーん、皮膚の血行が良くされてツヤツヤ尾っぽ☆　・・・・・・・・・・・・い～～～～加減にしろゴルァァァァァァァァァ！！」

「うふふ、面白いのですわ」

「てんめー・・・・・・！　仕返ししてやらあああああああああああ！！」

「きゃっ！？　ちょっ、ちょっとやめなさいっ！！」

「オラオラオラ！！　何だよこの頬肉はよ！？　え！？　焼いて食うぞゴルァ！！」

「やっ、やめてっ！！　触らない・・・・・・・でっ！！」

「フギャアァッ！！　おっ、尾っぽを引っ張るなっつってんだろうがあああああああ！！」

シュウとカレンがぎゃあぎゃあと騒ぎ立てて数分後。

ドカッ

と、尻を蹴られてシュウは振り返った。
そこにはいつの間にかサラとレオンの姿。

「にっ、兄ちゃんの尻を蹴るんじゃないっ、サラ！」

「まったくこんなところでジャレないでよ、恥ずかしい」

「はっ、恥ずかしいっておまえに言われたくねえっ！！　レオ兄のこと襲いやがって、なんっって女だおまえはっ！！」

「あーうるさい。行こ、カレン」

サラがカレンの手を引いて立たせ、仲良く腕を組んで車の方へと向かって行った。
はしゃいだ様子でひそひそと話しながら。

シュウはジャケットを拾って砂を掃い、レオンの顔を見た。

「レ、レオ兄、大丈夫？」

「大丈夫だよ」と、レオンがシュウの強張った顔を見て笑う。「ねえ、シュウ」

「ん？」

「今日サラを家まで送ったら、リュウに話したいことがあるんだけど」

「へっ？」シュウの声が裏返った。「な、何っ？　ま、まさかサラとお付き合いします宣言っ！？」

「まあ、そんなとこ」

「――！？」

ガシッと、シュウはレオンの両肩を握った。

必死に首を横に振る。

「だっ、ダメだよレオ兄っ！！　死ぬ死ぬ死ぬ死ぬっ！！　こーろーさーれーるーーーっ！！」

「大丈夫、大丈夫」そう言って、またレオンが笑った。「軽く5、60発殴られる覚悟で行くけどね。キラが僕たちに賛成してくれているなら、リュウは最後には許してくれるよ」

「でっ、でも親父と母さん、サラとレオ兄の件に関してはいっつも喧嘩になってて・・・・・・！」

「大丈夫だよ、シュウ。リュウにとって、キラの一言はとても重いからね」

「でっ、でも・・・・・・」

「心配しないで、シュウ。さあ、行こう」

シュウはレオンに背をぽんと押され、車へと向かって行った。

（怖いぜ。スゲエェェェ怖いぜ・・・！　レオ兄、親父に殺されたらどうしよう・・・・・・！）

そんな不安で顔面蒼白しているシュウとは裏腹に、レオンの表情はとても穏やかだった。

第２０話　交際許可

午後６時５分前。
シュウはごくりと唾を飲み込み、カレンとサラ、レオンと一緒に自宅のドアを開けた。

「た・・・ただいま」

「おう、おかえり」

と言ったのは、玄関で待ち伏せしてただろうリュウ。
サラが眉を寄せて言う。

「親父そんなとこで何してんの？」

「と、通りかかっただけだ」

「今日の仕事もう終わったわけ？」

「おう、ついさっき帰ってきてな」

「ふーん」

キラがパタパタと駆けてくる。

「おかえり。レオンとカレンも晩ご飯食べていくか？」

「ええ、是非。ありがとうございます、キラさん」

「ありがとう、キラ」そうキラに笑顔を向けたあと、レオンがサラを見た。「サラ、自分の部屋に行ってな」

「ついでにカレンも」

と、シュウ。

サラは戸惑いながらレオンの顔を見たあと、カレンと共に2階の自分の部屋へと向かって行った。

不審そうな顔をしているリュウに、レオンが真剣な顔で言う。

「ちょっと外でいいかな、リュウ」

「・・・・・ああ」

レオンと共に、外へ出て行ったリュウ。

嫌な予感がしたキラが続き、心配で仕方ないシュウも続いて外へと出た。

サラの部屋に入るなり、カレンは狼狽した様子で口を開いた。

「や、やっぱりレオンさん危ない気がするわっ・・・！」

「アタシも心配で仕方ないよ、親父に殴られてもおかしくないし・・・・・」そう言いながら、サラがベッドに腰掛けた。「それに、

あの親父が許してくれるとは思えない」

「い、今からでも遅くないかもしれないわっ！　レオンさんを止めましょう！　リュウさまにサラとレオンさんがお付き合いをしていることを黙ってれば良いだけのことですわ！　黙っていれば、レオンさんは危ない目にあったりしないのですわ！」

「うん・・・・・。アタシもさ、最初はそう思ったんだ。レオ兄が、親父にアタシとの交際許可取りたいって言ったとき。でもレオ兄は誠実だから、そんなこと出来ないよ」

「・・・そ、そう・・・・・・」

「それにさ、レオ兄がアタシとのこと真剣に考えてくれてる気がして嬉しいんだ。レオ兄が殴られるのなんて見たくないけど・・・・・、嬉しいんだ。って、何だそりゃ」サラは自分に突っ込んで苦笑した。「何が言いたいんだろ、アタシ。言ってることおかしいよね」

「・・・・・いいえ、サラ」と、カレンがサラの隣に腰掛けた。「好きな人が自分のために何かしてくれるって、とても嬉しいことよね。分かるわ」

カレンが微笑むと、サラも微笑んだ。

「ところで」と、カレンは頬を染めて小声になる。「レオンさんとの甘いキッスのこと、詳しく聞かせてくれないっ・・・？」

「ＯＫ」サラがにやりと笑った。「こう、アタシがえーんって泣いたフリしてー、レオ兄が心配して顔寄せてきたところにチュッってしたのが１回目でー」

「きゃあああっ」カレンが口を両手で隠して黄色い声をあげる。「サラってば小悪魔レディなのですわあああああっ！　それでそれでっ？」

「それで次はー、こう～」

ドサッと、サラがカレンをベッドの上に押し倒した。

「手が滑った～って押し倒して～」

「きゃあああっ。サラってば大胆なのですわあああああっ！」

サラが突然シュウの口真似をして言う。

「カレン、オレのこと好きか・・・・・・？」

「えっ！？」カレンの顔がぼっと熱くなる。「あっ、あなた誰！？」

「誰ってシュウだろ？　なあ、オレのこと好きか？」

「・・・・・・すっ、すっ、すっ、好きですわあああああっ！」

「オレもおまえが好きだぜ、カレン。ちゅーーー・・・・・・・」

「えっ・・・あっ・・・シュウってばダメェっ・・・・・・・！」

「今夜はおまえを離さないぜ☆」

「あああああっ、ダメよシュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」

「――なぁーんて」と、サラが笑う。「いつかなるかもおおおおおおおおっ！！」

「きゃあああああああああああああっ！！　いっ、いけないのですわあああああああああああっ！！」

ベッドの上、カレンとサラが抱き合ってごろんごろんと転がって数秒後。

ぴたりと止まって冷静になる。

「程遠いのですわ」

「兄貴（あれ）ニブいしね」

「ええ、本当に」

カレンとサラは顔を見合わせて、深く溜め息を吐いた。

その頃の屋敷の裏庭では。

シュウとリュウ、キラ、レオンで四角形を作っていた。

レオンと向き合っているリュウが最初に口を切る。

「何だ、レオン。わざわざこんなところに呼び出すってことは、殴られる覚悟の上での話ってことか」

「うん。軽く5、６０発殴られる覚悟だよ」

「ほお？」リュウがぼきぼきと指を鳴らす。「とりあえず言ってみろ」

レオンが頭を下げた。

「サラと・・・、お付き合いさせてください」

「ふ」

短く笑うなり、リュウがレオンの胸倉を掴んだ。

レオンが殴られる前に、シュウはリュウを押さえつける。

「止めろよ、親父！！」

同時に、キラがレオンを背に庇って眉を吊り上げた。

「そうだぞ、リュウ！　私の可愛い弟を殴るな！」

「どけ」

リュウがいとも簡単に、力いっぱい押さえつけていたシュウを突き放した。

レオンを背に庇いリュウの前に両手を広げて立っているキラを、リュウが睨むように見下ろす。

「おまえもどいてろ、キラ。おまえとは、前からこの件にして意見が合わねえ」

「当たり前だ！　娘が可愛いのは分かるが、リュウのしていることは単なる我侭だ！」

「うるせえ、どけ」

「どかぬ！　おまえは何故、サラやレオンの気持ちになってやれぬのだ！　逆に愛する娘を不幸にしているということが、何故分からぬのだ！」

「・・・・・・」

ゴスッ！！

と殴られたのは、キラではなくシュウである。

「いっ、いってーな！　だから何でオレを殴るんだよ親父！？　夫婦喧嘩の八つ当たりすんなよなっ！！」

喚くシュウを無視し、リュウはキラに怒鳴りつける。

「俺を怒らせてねーで、さっさとそこをどきやがれ！」

「どかぬ！」

「どけ！」

リュウがキラを引っ張り、レオンの前から退かせた。

リュウの拳に顔を殴打され、レオンの身体が後方によろける。

「レオン！」

「レオ兄っ！」

シュウとキラが、慌ててレオンに駆け寄った。

必死にリュウとレオンの間に立ちはだかる。

「いいんだよ、キラ、シュウ」レオンが言った。「殴られるのは覚悟の上だったし、僕はサラの傍にいてあげたいんだ。リュウから許可をもらえるなら、どんなに殴られたっていいよ」

「ダメだ、レオ兄っ！」シュウが声をあげる。「そんなカッコイイこと言ったところで、殴られるだけ殴られて許可なんかもらえねえっ！　さあっ、今のうちに逃げてくれ！」

「逃がさねえよ」

リュウがシュウを脇に突き飛ばした。

キラはレオンを守るように、必死にレオンにしがみ付いている。

リュウよりも先に、キラが声をあげた。

「どかぬからな！　レオンは何も悪くない！　私は、絶対にどかぬ！！」

「どけ」

「どかぬ！　サラもレオンも可哀相だ！」

「どけ」

「どかぬったら、どかぬ！！　絶対にどかぬ！！」

「どけったらどけ！！」

リュウがキラの腕を掴み、力ずくでレオンから引き剥がそうとする。

「嫌だ！　どかぬったらどかぬ！　絶対にどかぬっ・・・・・・！！」

ぽろぽろと零れ始めたキラの涙。

シュウ、大衝撃。

「あああああああっ！！」と、リュウを指差す。「いーけねーんだ、いけねーんだ！　母さんのこと泣ーかせたあああああああああああっ！！」

「うっ、うるせえっ！！　マザコンはすっこんでろ！！」

「まっ、マザコンじゃねえっ！！　アンタ最っっっ低だ！！　最っっっ低、最っっっ悪のクソ親父だ！！」

「うるせえっ！！」

ゴスッ！！

リュウの拳骨を食らい、シュウが蹲る。

「いってえぇ・・・！」

「おまえは割り込んでくんじゃねえ、シュウ！　この件に関しては、俺はいくらキラに泣かれようと――」

「娘、娘って・・・・・・！」リュウの言葉を、キラが遮った。「リュウには私がいるのにぃ・・・・・・！　ふにゃあああんっ」

「――かっ・・・」

可愛いじゃねーかっ！！

ガシャーン！

とリュウの拳が突き破ったのは、傍らにあった夫婦の寝室の窓である。

カチャッと窓の鍵を開け、左腕にキラを抱っこする。

「そうだな、キラ。俺はおまえだけで充分だぜ。ほら泣くな、晩飯の前に可愛がってやるからな。おー、よしよし」

キラに心を鷲掴みにされたリュウがにやにやと笑いながら言って、夫婦の寝室の窓を開けて中に入っていく。

「あっ、あのっ、リュウ！」レオンが慌ててリュウを呼び止めた。

「僕とサラのことはっ・・・・・・？」

「おー、いいぜー。サラのこと大切にしろよー」

機嫌良さそうなリュウの声のあと、窓と鍵、カーテンが閉まる。
唖然としてしまったが故の無言のあと、シュウは口を開いた。
「えーと・・・・・、玄関から入れよ親父」
と、今さら突っ込んだところでリュウには聞こえていない。
レオンが笑いながらシュウの顔を見た。
「ほらね、シュウ。キラの一言ってすごいでしょ？」
「オレは親父の単純さの方を尊敬する」
シュウはレオンの頬に治癒魔法をかけたあと、レオンと一緒に玄関へと回って行った。

サラの部屋のドアを、レオンがノックする。
「誰ー？」
「僕だよ、サラ」
「レオ兄っ・・・！」

パタパタと駆けるスリッパの音がしたあと、サラがドアを開けた。

「だ、大丈夫だったっ？」

「どうでしたのっ？」

サラ、カレンの順にレオンの顔を見上げて訊いた。

レオンはにっこりと笑って言う。

「一発しか殴られなかったから大丈夫。それから、やっぱり僕の姉の一言はやっぱりすごいよ」

「えっ？」カレンとサラが声をそろえた。「ということは・・・・・・！？」

「サラと僕、お付き合いしていいってさ」

それを聞いたカレンとサラが顔を見合わせて驚喜した。

「うっそおおおおっ！　あの親父がっ！？　奇跡いいいいいいいいっ！！」

「きゃあああああっ！　良かったわねサラァァァァァァァァ！」

カレンとサラが抱き合い、その場をぴょんぴょんと小躍りする。

「それじゃ、サラ」と、カレンが部屋からパタパタと駆けながら出て行く。「がんばってねえええええええええっ！！」

「まかせてえええええええええええっ！！」

すごいテンションだなあ・・・。

なんて思っているレオンの手を引っ張って部屋の中に入れ、サラは部屋に鍵を掛けた。

「とりゃっ！！」

両腕を前方に伸ばして宙を舞い、レオンの首にしがみ付いて豪快にベッドに押し倒す。

ドサッ！

「はぁい、そこのカッコイイ猫のお兄さんアタシとマッパでイイことしなぁい？」

レオンがおかしそうに笑う。

「本当、ストレートに誘ってくれるね」

「お兄さんなら無料でサービスするアルヨ」

「それ何語？」

「なんだったかな」

サラが笑った。

レオンのシャツのボタンを外していきながら訊く。

「ねえ、するの？　しないの？」

「じゃあ――」

「分かった」

「何が分かった？」

「するのね」

「したいよ。すごく」

「えっ・・・？」

サラはレオンの顔を見た。

はっきりと言われたら何だか恥ずかしくなって、頬が染まってしまう。

レオンのシャツのボタンを外していた手も止まってしまう。

そんなサラを見て、レオンが笑った。

サラを抱き締めて、サラを身体の下にする。

「どんなにリュウ似でも、やっぱり女の子だね」

「あ、あのっ・・・」

「可愛い」

レオンの唇が、サラの唇に重なった。

リュウとキラが夫婦の寝室に入ってから3時間後。
キラは備え付けのバスルームでシャワーを浴び、リュウはベッドの中で深い溜め息を吐いていた。

（サラとレオンの付き合い許可しちまった・・・・・・）

リュウは今さらになって後悔する。

（やっぱり駄目って言ったらサラに嫌われっかな・・・。嫌われるよな・・・・・・）

リュウはもう一度深い溜め息を吐いた。
ドアをノックする音が聞こえて、リュウは意気消沈した声で口を開く。

「開いてるー」

ドアを開けて姿を見せたのは、サラだった。

「サラ・・・」サラを見て一瞬驚いたあと、リュウは戸惑いながら顔を逸らした。「・・・レオンは帰ったのか」

「うん、さっき」

「ふーん・・・」

会話が途切れる。
少しして、サラから口を切った。
「あの・・・、親父？」
「・・・ん」
「あ・・・、ありがとうっ」
「え？」
リュウはサラの顔を見た。
サラが続ける。
「レオ兄とアタシのこと、許してくれて」
そう言って、サラが嬉しそうに笑った。
リュウがサラに礼を言われるのはどれくらいぶりだろう。
サラがリュウに笑顔を向けてくれるのも、どれくらいぶりのことだろう。
複雑だったけど、リュウは嬉しかった。
（いいか・・・、もう。レオンがどんな男か、俺はよく知ってる。サラのこと何よりも大切にしてくれる。もう、いいか・・・・・・）
リュウの顔が綻んだ。
「おう、仲良くやれよ」

「もちろん！　それでさ、門限もう少し遅くしてくれない？」

「・・・まあ、いいか。じゃあ、門限は日付変わる前な」

「ありがと、親父っ！」

「おう」

ああ・・・。

俺、またサラに礼と笑顔もらっちゃったぜ・・・・・・。

心の中、そんなことに感動してしまうリュウ。

サラがもう一度言う。

「本当にありがとう、親父」

「もう分かったから、そんなに言わなくても――」

「まじで」と、サラがリュウの言葉を遮る。「良かった・・・・・・！」

と、恍惚としているサラ。

嫌な予感に襲われ、リュウの顔が引きつる。

「ま、待てサラ。よ、良かったって何がだ」

「あんもうっ、レオ兄ってばあっ・・・・・・！」

「――！？」

「んじゃね、親父♪　さっさとご飯食べなよー」

ひらひらと手を振り、サラが寝室のドアを閉める。

「まっ、まっ、まっ、まっ・・・・・・・！」

リュウの身体がわなわなと震えた。

「待てコラァァァァァァァァァァァァ！！！」

「うっわ！？　娘の前にパンツ一丁で出てこないでよ親父っ！！」

「うるせえっ！！　やっぱり駄目だ！！　レオンと付き合うことは許さねえっ！！」

「は！？　何言ってんの今さら！？　ふざけんじゃないよ！！」

「許さねえったら、許さねえっ！！」

リュウの怒声が、屋敷中に響き渡って行った。

「ぜっっったい、許さねえええええええええええええええええっ！！！」

それから数時間後。

またキラに泣かれたリュウは、結局サラとレオンの交際を許可したのだった。

第２１話　カレンの危機

５月の半ば過ぎ。

リュウの弟子としてハンターの仕事へ行くときは、大好きなロリータファッションを着ないようになったカレン。
何のためにって、シュウになるべく迷惑をかけないように。

走り易いように巷で流行っているらしいショートパンツとローヒールの靴を身につけて、シュウに指示された場所にじっと座っている。
これもまた、シュウに迷惑をかけないように。
モンスターがいつどこから現れるか分からないような場所でちょろちょろと動き回っていると、シュウの手間をかけさせるだけだから。

只今カレンが座っているのは、木の枝の上。
目当ての凶悪モンスターを倒したシュウが剣を腰に収めて、カレンのところへとやってきた。

「よしよし、じっとしてて偉かったな」

そう言いながら、シュウがカレンに両手を伸ばした。
ひょいと抱っこして地に降ろして、カレンの頭を撫でる

シュウの顔を見上げて、カレンは溜め息を吐く。

（サラとレオンさんは、すっかりラブラブ恋人同士だというのに・・・・・）

シュウが眉を寄せた。

「何だよ、人の顔見て溜め息吐いて」

「あたくしのこと、妹さんたちと同じ扱いしているんではなくて？」

「え？」

「あなたが人の頭を撫でるのって、長男が故のクセなんでしょう？」

「まあ・・・・・・、そうだな」

「あたくしのことも、妹みたいに思っているのではなくて？」

「かも」

と答えたシュウに、カレンがむっとした顔をした。

「ちょっと、それやめてくださらない？」

「弟妹も弟子も、似たような感じがするっちゃするんだよな」

「まったくもって、嬉しくないのですわ」

「・・・・・何だよ？」と、シュウが膨れているカレンの頬を指で突いた。「頭撫でられるの嫌なのか？」

「い・・・嫌ではないけれどっ・・・・・・、ちょっと子供扱いされてる気がするのですわっ」

「子供扱い」鸚鵡返しに言って、数秒の間シュウがカレンの顔をじっと見つめる。「おまえ特に小さいから無意識にしてんのか、オレ？　おまえうちの母さんよりも少し小さいよなー」

そう言いながら、シュウがカレンの頭を撫でる。

カレンの頬がさらに膨れていくのを見て、シュウははっとして手を離した。

「わ、わり・・・。自然とやっちまうオレがいたんだぜっ・・・」

「小さくたって、一人前のレディなのですわ！」

「バカにして言ったわけじゃねえよっ・・・。いっ、いーじゃねーかっ！」そう言って、シュウはまたカレンの頭を撫でた。「おまえが自分で気にしてるとこって、オレは可愛いと思うけど？　小さいとことかプニプニホッペとか貧――・・・いや、乳小さめのとことか。二の腕だって太ももだって別に太くねーし、皮と骨みたいなのよりオレは好きだけど？」

「・・・じゃっ、じゃあ」と、カレンの頬が染まる。「あっ、あたくしのこと、レディとして恋愛対象に入るのかしらっ？」

「入るだろ」

「ほっ、本当っ？」

「小さい女が好きな男も多いし、ちょいぽっちゃりしたのが好きな男も多いし、何気に乳は小さい方が好きな男も結構いるし」

「・・・・・・」

だーーーれが他の男のこと言ってるのよ、このニブちん。
一瞬ぬか喜びしてしまったじゃないのよ。

呆れ顔になってしまうカレン。
溜め息を吐いて、歩き出した。

「おい、そっちじゃねーよ方向音痴。こっちこっち」

「わっ・・・、分かってるのですわっ！」

戻ってきてシュウの傍らを歩き出す。
カレンが歩きやすい靴になってからは、歩く速度が少し上がった。

カレンの赤い頭を横目に見下ろして、シュウは表情を曇らせた。

「・・・・・・ごめん」

「え？」

カレンは歩きながらシュウの顔を見上げた。

「何か知らないけど、おまえオレといるとときどき気分悪くするみてーだから」

「そっ・・・そんなことありませんわよっ？」

「そうか？」

「ええ」

カレンは笑った。

「おまえがオレの弟子を続ける理由は知らねーけど、嫌になったら無理しないで言えよ。親父に言っておまえの師匠変えてもらうから」

そんなシュウの言葉に、カレンの笑顔が消える。

「・・・あたくし、やっぱりあなたにとって足手まといでしかないのかしら」

「そうじゃねーよ。嫌な思いしたくねえだろ？」

「・・・・・・優しいのね」

そう呟いて、カレンはシュウから顔を逸らした。

（でも、寂しいことを言うのね。あたくしがいなくても平気だって言われた気分ですわ。そりゃ、平気なのでしょうけど）

カレンの口から小さく溜め息が漏れる。

（あたくしが一度でも辛い思いをしたならば、あなたはすぐにあたくしから離れて行ってしまうのでしょうね・・・・・・）

シュウはその日の仕事が終わってようと終わってなかろうと、カレンを午後9時までに家の前まで送る。

「送ってくれてありがとう」

「おう。それじゃ、また明日な」

シュウはいつもそう言って、カレンの頭にぽんと手を乗せてから去っていく。

これからまた仕事へ行くのか、自宅へと帰るのかは分からないが。

カレンはその背が見えなくなるまで見つめてから、ようやく玄関の鍵を取り出す。

鍵を開けて、誰もいない真っ暗な空間へと続くドアのノブを握る。

そのとき背後に気配を感じて、カレンは振り返った。

「・・・あの・・・・・・？」

カレンは動揺しながら目の前に立っている人物たちを見回した。

見たことのない顔が１０人近く集まっている。

ただ1つ分かったのは、全員が女ハンターということだった。

午後１０時過ぎに自宅へと帰ったシュウは、遅い晩ご飯を取ったあとにリュウから書斎に来るよう言われた。
書斎に入るときは、大抵仕事の話だ。

「緊急の仕事の追加？」

シュウが訊くと、椅子に座っていたリュウが椅子をくるりと回転させてシュウの方を見た。

「なあ、シュウ。おまえんとこのカレン何ともねえ？」

「・・・何ともって？」

「最近様子がおかしいとか」

「うーん・・・、オレの顔見てよく溜め息吐いたり、オレが機嫌損ねさせたりしちゃってるな」

「ああ、それはたぶんおまえが鈍感男だから」そう言ったあと、リュウは突っ込まれる前に続けた。「そういう、おまえといるときのことじゃなくてよ」

シュウは眉を寄せた。

「オレと一緒にいねーときのことまでは知らねーよ」

「カレン、何かに怯えた様子とかねえ？」

「ないけど？」

「・・・・・そうか」リュウが椅子をくるりと回転させ、シュウに背を向ける。「自分の部屋行っていいぞ」

「おう・・・？」

シュウが書斎から出て行ったあと、リュウは携帯電話を取り出した。

電話をかける相手はリンク。

「どうやった、リュウ」

電話に出るなり、リンクが訊いた。

その後ろでは、電話の呼び出し音が鳴っている。

リンクはまたギルド長室にいるのだと、リュウは察した。

「またか、リンク」

「ああ、またやろな。また非通知やから、また苦情の電話やろ」

「くだんねーから出んなよ」リュウは溜め息を吐いた。「ったく、カレンばっかりシュウの弟子ずるいから何とかしろって何だよ・・・・・」

「おまえがシュウに弟子つけへん言ったのに、おれがシュウにカレンちゃんを押し付けたせいやんな。ごめん・・・」電話の向こうで、リンクが苦笑したのが分かった。「でもくだらん言ってられへんで。女は怖いんやでって、うちのリーナが言っとったで」

「ふーん、リーナがねえ。おまえんとこのリーナの性格って、おまえにもミーナにも似なかったよな。何だあのマセガキぶりは」

「まったくやで・・・。リーナの奴、もう『おとんのパンツと一緒に洗わへんで』とか言うんやで？」

「おまえ哀れだな。俺んちなんて、ミラが俺のパンツ洗いたがるぜ」

「す、すごいなファザコンて」

「この間、ミラが洗った俺のパンツをニヤニヤしながら干してたのを見たときはちょっとビビッたな。気のせいかと思ったんだが、乾いた俺のパンツを畳んでるときもやっぱりニヤニヤしてたな」

「・・・・・そこまでいくと、ファザコンやなくて痴女やな。めっさかわええのに勿体ない」

「うるせーよ。話ずらしてんじゃねーよ」

「お、おう、ごめんっ・・・・・・って、ずらしたのおまえやなかった！？」

「発端はおまえだ。んで」リュウは話を戻した。「たしかに放っておいたら、カレンに何かあるかもしれねーな。シュウに訊いたところ、今のところカレンは無事みてーだが」

「そ、そか、良かった」

「あくまでも、今のところ、だ。カレンて家にいるときはほとんど1人みてーだから、そこ狙われる可能性高いよな」

「せやな。何かあってからや遅いわ。シュウの弟子外すか？」

「外すだけで治まる気がしねえなあ」

「せやろか・・・」

「んだって、苦情が一気に増えたのってシュウとカレンのデート現場目撃されたからだろ？　サラとレオンと一緒のダブルデートのときに」

「みたいやな。・・・せやな、シュウの弟子外したところで治まらへん気するわ。デート現場見られたとなっちゃあ、一部のシュウのファンは黙ってへんやろな」

「ファンねえ。シュウの奴、すげー口うるさいのに何がいいんだか」

「おまえと同じ顔で、おまえより優しいところやないか？」

「俺とシュウのファンクラブの会員ってどっちが多い？」

「謎なことに、おまえのが多いな」

「・・・・・まじでファンクラブあったのか」

「知らなかったんかい」

「勝手なもん作りやがって・・・・・・」リュウは溜め息を吐いたあと、リンクの声の後ろでいつまでも鳴っている電話の呼び出し音に顔をしかめた。「ああもう、それにしてもうるせーな。ギルド長室の電話線引っこ抜け」

「おまえ、仕事の依頼の電話やったらどうすんねん・・・・・・って、おわあああっ！」電話の向こう、リンクが動転した声を出す。
「ひっ、非通知やないやん！　あっ、あかん、依頼の電話かもっ」
「何してんだ、バカが。さっさと出ろ！」
「・・・は、はい、葉月ギルドですー」ギルド長室の電話に出たリンクの声が聞こえてくる。「あれ、サラ？」
サラと聞いて、リュウは眉を寄せた。
「ああ、リュウなら今おれと電話しとったから通じなかったんやな。どしたん？　リュウに急用か？」
「リンク、電話切れ」リュウは言った。「俺からサラにかけなおす」
リュウはリンクとの電話を切ったあと、サラがリンクとの電話を切るだろう時間を考えて１０秒ほど間を置いた。
それから、サラの携帯電話へと電話をかけた。
「親父っ！」リュウよりも先に、サラが甲走った声を出した。「頼まれてっ！」
「頼まれるぜ！」
だって可愛い娘の頼みだし！
リュウは張り切って立ち上がった。
「お願いっ、来て！」

来て。

その言葉を聞いて、リュウは自分に足の速くなる魔法をかけた。
書斎から飛び出て、玄関へと向かっていく。

サラが続ける。

「絶対兄貴には内緒で！」

シュウには内緒。

その言葉で、カレンに何かがあったのだとリュウは察する。
リュウは屋敷の外に飛び出した。

「早く親父っ！　5分以内にカレンの家に来て！」

「2分以内に行ってやる」

電話を切ったリュウの頭の中、うろ覚えだったカレン宅への地図がくっきりと浮かぶ。

「待ってろよサラァァァァァァァァァァァ！！！」

リュウがカレン宅の前へと着くと、そこでレオンが待っていた。

「・・・よ、よくここまで1分20秒で来たね、リュウ。車でも10分はかかるのに」

「んなことよりサラは！？」

「正しくはサラじゃなくて、カレンちゃんだよ。こっち、早くリュウ！　カレンちゃんの親御さんが帰ってくる前に！」

リュウは靴を脱ぎ捨て、レオンの後を着いてカレン宅の中を走った。

カレンの部屋だろうところに入ると、サラの姿が目に入った。

「親父っ！　早くカレンに治癒魔法をっ・・・・・・！」

そしてサラの傍ら――ベッドの上には、カレンがぼろぼろの姿で寝かされていた。

第２２話　犯人は・・・（前書き）

昨夜２１時４５分頃に興奮したメールをくださった読者様へ。

はい、深呼吸してくださーい。
吸ってー、吐いてー、吸ってー、吐いてー。

落ち着いたら期待外れを覚悟して本文へレッツゴオォォォォ（笑）

第２２話　犯人は・・・

カレン宅のカレンの部屋の中。

お姫様が眠るようなベッドの上に、カレンが寝かせられている。
とてもお姫様とは思えぬような姿で。
無傷の顔に対して破られた衣類、柔肌に作られたいくつもの痣。

（クソッ・・・！　遅かったか・・・・・・！）

リュウはすぐにカレンの身体に治癒魔法をかけた。
身体の痣も苦痛も消えたはずだというのに、カレンの声が震えている。

「あっ・・・ありがとうございます、リュ、リュウさまっ・・・・・・」

明らかに戦慄が走っているカレン。
その手は、必死にサラの手を握っていた。

リュウが訊く前に、カレンの手を握っているサラが声をあげた。

「ねえっ、カレン・・・！　お願いだから本当のこと言ってよ！！」

「ほ・・・本当なのよ、サラ」そういうカレンの様子は尋常ではない。「ほ、本当に、あたくし階段から落ちただけなのよっ・・・。し、心配しないで、サラっ・・・・・・」

「そんなわけないじゃん！！　どう見ても、暴行受けた跡だったよ

！！　ねえ、誰にやられたの！？　ねえ、カレン！！」

泣き声に近くなるサラに、カレンが必死に笑顔を作った。

「ほ、本当なのよ、サラ？　あたくし、階段から落ちただけで――」

「カレン」リュウがカレンの言葉を遮った。「俺は気が長くねえんだ。さっさと本当のことを言え」

「ちょっとリュウ！　脅さないでよ！」レオンが慌てて口を挟んだ。「ごめんね、カレンちゃん。大丈夫・・・、シュウには知られたくないんでしょう？　シュウには言わないから、僕たちに話してくれないかな」

「・・・しっ、心配などなさらないで？　あ、あたくし本当に――」

「カレン」

リュウがもう一度カレンの言葉を遮った。

リュウの手が、カレンの額に重なる。

少し乱暴だけど、その手はシュウに似ていた。

「正直に話せ、カレン。俺はおまえの勤めるギルドのギルド長だ。おまえはうちのハンターだ。少なくとも、俺にはおまえを守る権利がある」

優しかった。

シュウのように優しかった。

シュウの手は、リュウから受け継いだものだと知った。

じわじわとカレンの瞳に涙が込み上げ、リュウを見つめるその瞳は堪えきれずに涙を零す。

「おっ・・・お願いですっ、リュウさまっ・・・！　お願いですっ・・・、シュウには言わないでっ・・・！　言わないでっ・・・・・・！！」

「言わねえよ。言わねえから、本当のことを話せ。誰に何を言われ、何をされた？」

「・・・だ、誰なのかは分かりませんっ・・・！　か、顔も初めて見る方たちばかりでっ・・・！　た、ただ、皆が女ハンターなのだと分かりましたっ・・・・・・！」

「女ハンター！？」サラが鸚鵡返しに訊いた。「な・・・、何？何で？　もしかして、兄貴のファンの女とかっ・・・・・・？」

「そうだろうよ」リュウは小さく溜め息を吐く。「おまえたちがダブルデートした次の日から、ギルドに苦情が殺到してんだよ。俺がシュウに弟子はつけないって言ったにも関わらず、カレンがシュウの弟子ってどういうことだっていう内容のな」

「なっ・・・何ソレ！」サラが思わずと言ったように声をあげた。「くっっっだんな！　嫉妬ってこと！？　嫉妬でカレンにこんなことしたってこと！？」

「だろうね」そう言って、レオンが苦笑する。「怖いなあ、女の子って・・・・・・」

「リュウさまっ・・・！」カレンが必死に泣き声をあげる。「お願

いです、リュウさまっ！　シュウには言わないでっ・・・！　言わないでっ・・・・・・！　あたくしっ、彼の傍にいたいのですっ・・・・・・！！」

弟子であるカレンが、己のせいでひどい目に合ったと思えばシュウはカレンの前から去ってしまう。

それはシュウの弟子であるカレンも、シュウの父であるリュウも、シュウの妹であるサラも、シュウに兄のように慕われているレオンも分かりきっていることだった。

「ねえ、カレン」サラの声は怒りに満ちていた。「あんたの顔は傷付けずに、身体だけボコるなんて、親父や兄貴に必死に内緒にしようとしてる証拠じゃん？　チクッたら許さないとか、やっぱり脅されたんでしょ？」

カレンが戸惑いながら頷いたあとに、意を決したように言った。

「あっ・・・あたくしっ・・・あたくし、撮られたのっ・・・・・・！」

「とられた・・・？」

リュウとサラ、レオンが声をそろえて訊いた。

カレンがもう一度、声を震わせながら言う。

「お洋服を破かれて、痣だらけになった身体を、写真に撮られたのっ・・・！　バラしたら、町中にばら撒くって、言われたのっ・・・・・・！」

カレンが両手で顔を覆った。
目尻から流れた涙の粒が、カレンの耳元へといくつも落ちていく。

「あたくし、そんなのをバラまかれたら葉月町を二度と歩けないわっ・・・！　あたくしはシュウの傍にいたいっ・・・、でもそんなものを見られたらっ・・・・・・！」

「大丈夫だよ、カレン」そう言いながら、サラが指をぼきぼきと鳴らす。「んなこと絶対させないから。ねえ、親父？」

「おう。させねえから安心しろ、カレン。・・・・・ったく、うちのギルドの名を汚すようなことしやがってカス共が」

サラに続き、指をぼきぼきと鳴らすリュウ。
レオンは苦笑した。

「えーと、そこの親子とりあえず落ち着いてねー。そろそろ帰らないと、カレンちゃんの親御さんに驚かれちゃうよ」

「おっと、そうだった！」ベッドの傍らにしゃがんでいたサラが立ち上がった。「行こうカレン！」

「えっ・・・？」カレンは驚いてサラとリュウの顔を見た。「あたくしもっ・・・？」

「早く準備しろ、カレン」リュウが言う。「おまえ、ハンターやってたいんだろ？　その様子じゃ親御さんに何があったか訊かれて辞めさせられるのがオチじゃねーの。俺はそこまで面倒見れねーぞ」

「リュウさま・・・・・・」

「それに」と、リュウが小さく溜め息を吐く。「シュウの傍が一番安心するだろ」

「・・・っ・・・はい・・・・・・！」

頷いたカレンの瞳から涙が零れ落ちる。

もう怖くないと言ったら嘘になった。

シュウの傍にいなくても平気だと言ったら、大嘘になった。

「親御さんには俺が連絡しておいてやるから、早く準備しろ」

カレンは早急に泊まる準備をして、リュウ・サラと共に自宅を後にした。

夢の中に入っていたシュウは、身体が締め付けられてうっすら瞼を開けた。

「・・・こーら、兄ちゃんの背中にしがみ付いてんのはどいつだー」

「あ・・・あたくしよ・・・、カレン・・・」

「・・・カレン・・・？　送り忘れたのか、オレ・・・・・・」半分眠っている状態のシュウの頭では、そう判断された。「・・・で、どうかしたのかー・・・？」

「・・・こ、怖い夢を見たのっ・・・。と、とても怖い夢っ・・・」

「怖い夢ー・・・？　子供みたいなやつだな、おまえ・・・」

シュウが寝返りを打って、カレンがいる方を向いて横臥した。
カレンが必死に胸にしがみ付いてくる。
カレンを抱き締めながら、シュウは笑う。

「んなにしがみ付かなくても怖くねえって、オレがいるんだから・・・。どんな奴が来ても守ってやるよ・・・」

シュウの瞼が閉じていく。

「あー・・・でも・・・、親父が襲ってきたらオレ死ぬなぁ・・・。そしたらオレが殺されてる間に逃げろよー・・・・・・」

シュウは再び夢の中に戻った。

優しいシュウの腕の中、恐怖に満ちていたカレンの胸が落ち着きを取り戻す。
シュウの体温を感じながら、カレンは瞼を閉じていった。

翌朝６時。

ジリリリリリ！！

一斉に鳴り出す１０個の目覚まし時計に、シュウは一気に目が覚める。
毎朝のごとく、シュウはうるさい音を手で鮮やかに叩きとめた。
「・・・・・・。待て、オレ。昨日ちゃんとカレン送っただろ」
シュウは布団をめくった。
胸にしがみ付いているカレンの姿を確認する。
「・・・・・・どういうことだ、オイ」
シュウの部屋のドアが開いた。
「おっはよー、兄貴」サラだった。「早くママとお姉ちゃんと一緒に朝ご飯作りに行けってのー」
「なあ、サラ」と、シュウは眉を寄せる。「何でカレンがうちに泊まってんの？」
「あー、アタシ昨日仕事終わったあと、カレンと遊びたくて夜に迎えに行ったんだわー」
「迷惑な奴だな、おまえ・・・」
「んで、アタシと一緒に寝てたんだけど怖い夢見たみたいでさ。アタシが兄貴の部屋に連れてきたんだ。ほら、兄貴はカレンの師匠だし？　弟子としては安心すると思って」
「ふーん。それでか」

と、納得した様子のシュウ。

話し声で、カレンが目を覚ました。
瞼を手の甲で擦り、シュウの顔を見上げる。

「オッス」と、シュウがカレンの頭を撫でながら笑った。「ちゃんと眠れたか？　ガキんちょめ」

「・・・ええ」

そう答えて笑ったカレンを確認したあと、シュウは朝食作りへと向かった。
そのあとにリュウと、やって来ていたらしいリンクが入ってきてシュウの部屋のドアを閉めた。
リンクの手には封筒が握られている。

「うちのハンターの名簿から、シュウのファンクラブの女の子抜き出して持ってきたんや。顔写真付きやから、カレンちゃん見てみてや」

幸いハンターという力の持った者しかなれない職から数は多くなく、一枚一枚をベッドの上に並べて見られた。
一般人のシュウのファンを含めたら、一部屋使っても並べ切れなかったかもしれない。

サラが言いながら一枚を手に取って言う。

「アタシこの女の噂知ってるー。兄貴の隠し撮り写真たくさん持ってるとか何とか」

「・・・あっ」と、サラが持っている女ハンターの顔写真を見て、カレンが短く声をあげた。「その人、たしかにいましたわ！」

1人思い出したら、カレンの頭の中にぞくぞくと顔が浮かんできた。

昨夜の女ハンターたちの。

「この人と、この人、それからこの人も！」

カレンが指した女ハンターの情報が書かれた紙を、リュウが手に取って目を通していく。

そして、ベッドの上から5人を取ってカレンに渡した。

「あとはこの中にいねえか、カレン？」

「・・・あっ」と、カレンが再び短く声をあげた。「間違いないですわ、リュウさま！　あとはこの人たちですわ！　この5人の人たちですわ！　さっきのを含めて、これで全員ですわ！」

「おお」リンクが声を高くした。「何で分かったん、リュウ？」

「その9人の住所を見てみろ」

そう言われ、9人の犯人の住所を見たカレンとサラ、リンク。

「あっ」と、声をそろえる。「同じ！」

9人全員が、ハンターの女子寮に住んでいた。

「なーるほどねー、寮の中で集団リンチ作戦練ってたのねー」そう言いながら、サラが指をぼきぼきと鳴らす。「腕が鳴るわぁー、今夜ぁー」

「こっ、今夜っ？」

カレンがぱちぱちと瞬きをして、サラの顔を見、その隣のリンクの顔を見、またその隣のリュウの顔を見た。

９人の犯人の情報をじっくりと見ながら、リュウが言う。

「ああ。俺とサラ、リンクに加えてキラ、リン・ラン、ユナ・マナ・レナ、それからレオンにグレル師匠、ミーナで女子寮に殴り込み行って来っから、カレンおまえはミラ、ジュリと一緒にここで待ってろ。何、安心していいぜ。撮られた写真を奪うのはもちろん、カメラもパソコンも怪しいものは全部破壊してくっからよ」

「・・・は、はいっ・・・・・・」

カレンが承諾すると、リュウが顔をサラとリンクに向けた。

「寮の消灯は２３時だ。寝静まったとこに奇襲かけんぞ」

サラとリンクが頷く。

「よって、本日２４時に決行だ」

第２２話　犯人は・・・（後書き）

前書きの続きで、昨夜メールをくださった読者様へ。

すごいですねー、最近の医療技術は。
ちょっと１，０００，０００，０００$作ってきますわ～。
んじゃ、いってきまーす。

・・・・・・・・・・。
・・・・・・・。
・・・。

無理（笑）

第２３話　奇襲

これから仕事に行こうかとき、急にリュウから仕事を追加されてシュウはぎょっとした。

「ちょ、ちょっと待ってくれ、親父っ！」

「何だよ、シュウ」

「追加するにしたって、なんっっっだよこの量は！？　オレ、カレンも連れてんだぜ！？　絶対今日中に終わらねえだろっ・・・！」

「んじゃあ、今日はカレンを置いて仕事へ行け」

「・・・そ、それでも２４時過ぎるな、こりゃっ・・・・・・」

「ごちゃごちゃ言ってるヒマあったらさっさと仕事に向かえ」

「く、くそうっ・・・！　カレンに理由言っておいてくれよっ！」

シュウはそう言って、家から飛び出して行った。

それを確認したあと、リュウは書斎から出てリビングへ向かいながら携帯電話を手に取った。

「いいぜ、ミーナ」

「分かったぞ！」

と、ミーナがリュウとの電話を切る。
ほんの1秒後にはレオンとグレルを連れ、瞬間移動でリビングに現れた。

リビングに集まっているのはリュウとキラ、ミラ、サラ、魔法学校へ行く前の双子・リンとラン、同様に三つ子のユナとマナとレナ。
それからリンクとミーナ、レオン、グレル。
そしてカレン。

リュウはそこに集まっている者たちの顔を見回した。

「よし、全員集まったな」

「うむ。では話をするぞ」と言ったのはキラだ。「私は昨夜リュウから聞いたのだが・・・・・・」

まだ何も聞いていなかったミラや双子、三つ子はキラの話を聞いて驚愕した。
リン、ランと交互に声をあげる。

「しゅっ、集団リンチだと!?」

「なっ、何てことをする輩なのだ!」

「わたしたちだって、嫉妬はするけどそんなことしないぞ!」

「わたしたちだって、ぶっ飛ばそうと思うけど行動には出さないぞ!」

ユナが泣き出す。

「ふっ、ふみゃあああああん！　カレンちゃん可哀相だよおおおおおっ！」

マナが舌打ちをする。

「チッ・・・、ゲスが・・・」

レナが怒りに顔を真っ赤にして立ち上がる。

「ぜっ、絶対に許さないんだからあああああああああああああっ！！」

カレンの隣に座っていたミラが、呆然とした様子でカレンの顔を見た。

「ほ・・・本当なの？　カレンちゃんっ・・・・・・・」

「・・・ご、ご迷惑をおかけしてしまって・・・ご、ごめんなさいっ・・・・」

カレンの返事は、ミラの質問を認めたものだった。

「なっ・・・なんてこと・・・・・・・！」

ミラが手で口を塞ぎ、ぽろぽろと涙を零す。

「お姉ちゃん」と、サラがミラにハンカチを渡しながら言った。「お姉ちゃんは、カレンとジュリと一緒に家で留守番お願い」

ミラが承諾した。

リュウが話を続ける。

「本当はリン・ラン、ユナ・マナ・レナも連れて行きたくなかったんだが、犯人の数が数だから協力してもらうことにした。悪いな」

リン・ランが首をぶんぶんと横に振って言う。

「何を言っているのだ、父上！」

「わたしたちそんな輩は許せないぞ、父上！」

ユナ、レナと続く。

「そうだよ、パパ！　あたしたち喜んで協力するよ！」

「そうだそうだ！　絶対にそんな奴ら許さないんだからね！」

マナがリュウの袖を引っ張って訊いた。

「パパ・・・、その犯人の数は・・・？」

「9人だ。全員がハンターの女子寮に住んでる」

「9人・・・か」キラが短く笑った。「弱い輩ほど群れるものだな。・・・リュウ、9人全員の部屋に同時に突っ込むのだろう？　割り当てを教えてくれ」

「おう、今から言うぞ」リュウは犯人たちの情報が書かれた紙を見ながら言った。「力のある犯人から順に、犯人A、B、C、D、E、F、G、H、Iとする。こっちの絶対的な安全を考えて、犯人Aの

部屋は俺、犯人Ｂの部屋はグレル師匠」

「おう、任せろいっ！」

と、グレルが承諾した。
リュウは続ける。

「犯人Ｃの部屋はキラ」

「分かったぞ！」

「犯人Ｄの部屋はレオン」

「分かったよ」

「犯人Ｅの部屋はリンクとミーナ」

「了解やで！」

「犯人Ｆの部屋はサラ」

「ＯＫ」

「犯人Ｇの部屋はリンとラン」

「了解なのだ、父上！」

「犯人Ｈと犯人Ｉの部屋は・・・・・、うーん。この程度のハンター相手なら、マナ１匹でいけるか。でもまあ、絶対の安全を考えて犯人Ｈの部屋にユナとレナで、犯人Ｉの部屋にマナな」

三つ子がそれぞれ承諾したあと、リュウは皆を見回した。

「いいか、部屋の隅々まで調べろよ。写真を見つけたら奪い、カメラや画像保存されている可能性のあるパソコンやメモリー、メディアなどは必ず全て破壊しろ。携帯もだ。シュウには夜中までかかる仕事を与えてある。カレンはシュウにバレないことを望んでっから、シュウが家に帰ってくる前に終わらせっぞ。あと犯人は逃がさねえように、ロープで縛っておくように」

全員が承諾したのを確認したあと、リュウはにやりと笑った。

「本日24時、楽しく決行しようぜ」

――23時55分。
葉月島葉月ギルドの女子寮前。

リュウ引き連れる一同は、ミーナの瞬間移動でやってきた。
リュウが一同を見回し、小声で確認する。

「ロープは持ったか？」

全員がロープを掲げた。

「突っ込む部屋の鍵は持ったか？」

全員が鍵を確認した。

「武器はあるな？」

それぞれが自分の武器を見て頷く。

「よし、行くぜい！」

２３時５６分。
女子寮内に侵入。
そろりそろりと足音を立てないように、それぞれが割り当てられた犯人の部屋の前へと歩いていく。

２３時５８分。
暗い中、全員が己の担当する犯人の部屋の前に安着。

２３時５９分。
それぞれ鍵を準備。

２３時５９分４５秒。
鍵をドアノブに挿し込み・・・。

２３時５９分５０秒。
気分はアイドルの部屋に入る寝起きドッ〇リテレビの司会者になって、鍵をそーっと回し・・・・・・。

２３時５９分５５秒。
ドアノブを握り締め・・・・・・！

２４時００分００秒。

いざ、奇襲！！

犯人Ａの部屋にて。

バァン！！

リュウは部屋を蹴り開けた。

「起きろ」

「だっ、誰！？」

当然のごとく、犯人Ａは仰天する。

「おまえの愛する男と同じ声って言われんだけどな」

部屋の電気が点いて明るくなり、リュウの姿を見た犯人Ａは目を見開いた。

「・・・リュ、リュウさま！？　ど、どうしたんです！？　緊急のお仕事ですか！？」

「おまえどんだけ脳内幸せなの。一流に行くか行かないかごときの女ハンターに、俺がわざわざ訪ねて仕事の依頼持って来るかよ。俺がやって来た理由なんて、ちょっと自分の胸に訊いてみりゃ分かるだろ？」

犯人Ａの部屋にあったデジカメがリュウの拳で潰され、ノートパソコンがリュウの手で２つに折られ、４つに折られ、さらにそれは８つに折られた。

机の上に散らばっていたカレンの写真を手に取り、リュウの黒々とした鋭い瞳は犯人Ａの怯えた瞳を捉える。

「なあ、分かるだろ？」

「――」

犯人Ａにこれまでの人生で一番の戦慄が走った。

犯人Ｂの部屋にて。

「邪魔するぜ～っ♪」

「ふぎゃっ！」

開けたドアの後ろでそんな声がしたのに気付かず、グレルは犯人Ｂの部屋の中へ入っていった。

「あーれえ？　留守かよ、仕方ねーなあ。んじゃあ、勝手にあさらせてもらうぞーっと♪」

犯人Ｂの部屋にはデジカメやパソコンはなく、本棚から椅子まで家具をぶっ倒して見つけたものは、何一つなかった。

「何だよ、何もねーのかよ。つまんねーなあ」

くるりと身体の向きを変えて、戸口を見たグレル。

鼻から血を出し床に倒れている犯人Bにようやく気付いて、ぱちぱちと瞬きをする。

「おまえ風邪引くぞ？」

その方がマシでした。

犯人Bは気絶した。

犯人Cの部屋にて。

足がぶらぶらと宙に浮いている犯人Cの首に、キラの右手の爪が食い込んでいる。

その細い腕から、どうやったらこんな力が出るのだろう。

犯人Cの瞳に映る。

黒猫の耳と尾っぽ。

ガラスのような銀色の長い髪の毛。

並ぶ者がいないほど整った顔立ち。

ここ葉月町の中央にある銅像と同じ姿。

この世の英雄が、今たしかに己の目の前にいる。

冷然として光る大きな黄金の瞳に、犯人Cは総毛立った。

「おい、犯人C」

「・・・はっ・・・、はいっ、キラさまっ・・・！」

「カレンを集団でリンチしたことを認めるか」

「・・・はっ・・・はいぃっ・・・・・・！」

「私は人間だろうとモンスターだろうと、ゲスは嫌いでな」

「・・・ごっ・・・ごめんなさいっ・・・！　ごめんなさいっ・・・、もう2度としませんっ・・・・・・！」

「その言葉に嘘はないか」

「こっ、心に誓ってございませんっ・・・・・・！」

「そう・・・か」

犯人Cの首から、キラの手が離れた。

「ならば、おまえたちがやらかした今回の事件に関する物を全て出せ。そうすれば命は許してやる」

「はっ、はいっ・・・・・・！」

犯人Cが慌ててカレンの写真やら、デジカメやらメモリーやらをキラの前に出す。

「おい、犯人C。もう1つ訊いても良いか」

「はっ、はいっ、キラさまっ！」

「良いか、正直に答えろ」

「もっ、もちろんですキラさまっ！」

「私、今、前作並に目立っているか？　私、前作ではヒロインだったのだが、どうだ？」

「・・・・・・・」

あの、キラさま。
もしかして目立ちたかっただけですか？

「・・・・・・前作に引き続き、ヒロインのような輝きっぷりでございます」

犯人Cはそう言って、キラの機嫌を取っておいた。

犯人Dの部屋にて。

泣いている犯人Dの手足を縛りながら、レオンが言う。

「2度とこんな卑劣なマネをしたら駄目だよ。ハンターという職は、人々を守るものなんだからね。それなのに人を傷付けてどうするの？」

「ごめんなさいっ、ごめんなさいっ！」犯人Ｄが泣きじゃくる。「お願いですっ、命だけは助けて下さいっ！」

「それは僕じゃなくて、リュウの判断によるけど・・・・・・」

「助けてくださいっ！　レオンさんっ、助けてください！　私たち、リュウさまに殺されちゃうかもおおおおお！」

わんわんと泣かれ、レオンは溜め息を吐いた。

「分かった分かった。リュウに頼んでなるべく優しい処分にしてもらうから、本当にもう2度とこんなことはしちゃ駄目だよ？　分かったね？」

「はっ、はい！　レオンさんっ、ありがとうございますっ・・・・・・！　あんもうっ、かっこいいですぅっ・・・・・・！」

犯人Ｄがシュウよりもレオンに心が傾いたのは秘密である。

犯人Ｅの部屋にて。

犯人Ｅをリンクが縛っている。

「怪しいもの探せやー、ミーナ」

「分かったぞ、リンク！」

ミーナが犯人Ｅの部屋の中を調べ出す。

「おおっ！　ビールあったぞリンク！　じゅるるっ」

「涎垂らすなや、家帰ればあるやん・・・」

「おおっ！　プリン５００ｇサイズあったぞリンク！　じゅるるっ」

「あとで買ったるから・・・」

「おおっ！　ケーキもあるぞっ！　じゅるるっ」

「それも買ったるから・・・」

「おおっ！　ピンクダイヤの指輪もあるぞっ！」

「ああもう、ちゃんと買ったるか――」リンク、はっとして言葉を切る。「いやいやいやいや！　いっ、今の嘘っ！　嘘やからなっ！？　嘘や――」

「おおおおっ！　ピンクダイヤの指輪買ってくれるのか、リンク！　よし、キラとお揃いにするぞーっ」

「ちゃうちゃうちゃうちゃう！！」

「なあ、犯人Ｅ？　この指輪いくらだ？」

「えと・・・、宝くじ当たって買ったのですが、８００万でした」

「だそうだぞ、リンクー。楽しみにしてるぞーっ」

「あかんあかんあかんあかん！！　無理無理無理無理！！　つい先日もキラとお揃いの超高級ウォーターベッド買ってやったやろ！？　絶対あかんからなっ！！」

「・・・・・ほしいのだぁ」ミーナのグリーンの瞳に涙がうるうると込み上げる。「わたしもピンクダイヤの指輪がほしいのだあああああっ！　ふみゃあああああああん！　キラァァァァァァァァァ！！！」

「そっ、その名を呼ぶなあああああああああああっ！！！」

顔面蒼白して叫んだリンクだったが、ミーナが呼んでしまった以上来ないわけがない。

「ミーナァァァァァァァァァァァァ！！！」

キラ、ドア突き破って降臨。

「貴様っ、リンク！　私の可愛い妹を泣かせるとはどういう了見だ！！」

「おっ、おっ、落ち着けキラっ・・・・・・！！」

「ふみゃあああああん」ミーナがキラに泣きつく。「リンクがピンクダイヤの指輪買ってくれるって言ったのに嘘吐いたあああああああ！！」

「なっ、なんだと！？　嘘吐いただと！？」

「うっ、嘘やなくて間違いで――ぎっ・・・、ぎゃあああああああああああっっっ！！！」

女子寮の全ハンターを眠りから起こすようなリンクの叫び声。

この人たち、何しに来たんだろう・・・・・・。

犯人Ｅは、部屋の隅っこで喧嘩が終わるのを待った。

犯人Ｆの部屋にて。

ぐっすりと眠っていた犯人Ｆは、いきなり身体に衝撃が走って眠りから目が覚めた。

まさに奇襲を受け、真っ暗な中で声を発する間もないほど身体中を殴られ続ける。

犯人Ｆがぐったりとして動かなくなったあと、部屋の明かりが点いた。

「あー、スッキリした。さて・・・」

サラは犯人Ｆの部屋の中を調べ始めた。

犯人Gの部屋にて。

寝ていたところをリン・ランにロープでぐるぐる巻きに縛られた犯人G。

目の前にリン・ランが仁王立ちしている。

「申し訳ございませんでしたっ！　おっ、お許しください～～っ！」

リン、ランと交互に言う。

「まったく、駄目だぞ！」

「集団リンチなんて、しちゃいけないのだぞ！」

「弱いものいじめをしよって！」

「父上はきっと、おまえたちに厳しい処分を与えるぞ！」

犯人Gが恐怖に泣き出す。

「ごめんなさいっ・・・！　ごめんなさいごめんなさいっ！　許してくださいっ！」

「わたしたちに言われても困るのだが」と、リン・ラン。「父上に甘い処分にするよう頼んでやっても良いぞ？」

「えっ!?」犯人Gはリン・ランの顔を見た。「ほ、本当ですか!?」

「ああ」リン・ランが、こほんと咳払いをし、「ア、アレくれるな

ら・・・・・・」

犯人Gはリン・ランが指した物を見た。
そこには、『シュウの隠し撮り写真集』・・・。

「・・・・・・。ほしいんですか、お兄さんの隠し撮り写真集」

「う、うむ。だ、駄目か？」

「・・・・・・・。どうぞ」

「おおーっ！　おまえ良い奴だなっ！　わたしたち、頑張って父上を説得するぞ！」

犯人Gの処分が甘くなるのは確定のようだった。

犯人Hの部屋にて。

犯人Hと格闘した末に勝ったユナとレナは、大きな本棚と向き合っていた。

「うーん、この本棚怪しいよね、ユナ。絶対カレンちゃんの写真ありそう」

「うん、怪しいよね、レナ。でもここまで大きいと、探すの大変だよね」

「・・・あっ、そーだっ！」と、レナがぱちんと指を鳴らした。「ユナの魔法で燃やしちゃえばいーじゃん！」

「あっ、なーるほど！　そうしよう！　えいっ、ファイアァァァァァ！！」

ユナの炎魔法により、あっという間に燃え始めた本棚。

「おお、すごいじゃんユナ」

「えへへ、最近ちょっと魔力上がったんだぁ♪」

「あー、あたしもあたしも！　でもマナの魔力の上がり方はもっとすごいよねー」

「だよねー。1年生の中でもトップだしねー」

ユナとレナが話している傍らで、縛られている犯人Hは狼狽した。

「ちょ、ちょっとちょっとちょっとちょっと！　火が燃え移ってる！」

「え？」と、ユナとレナは燃える本棚に目を戻した。「――わっ、わあああああああああああ！！」

本棚を包む炎はカーテンに移り、ベッドに移っていた。

慌ててリュウを呼ぶ。

「パパッ！！　助けてパパァァァァァァァァ！！」

違う階にいたリュウは、４秒後にやってきた。

「ユナっ、レナ！？」

ユナとレナが、縛った犯人Ｈを引きずりながら慌てて部屋から飛び出てくる。

「ぱっ、パパパパパパパパ！！　も、も、燃えるううううううっ！！」

「げっ」

リュウが慌てて魔法で水を起こし消火したが、犯人Ｈの部屋は大半が真っ黒焦げとなった。

カレンの写真どころかカメラやパソコンも持っていなかった犯人Ｈは、呆然と部屋の中を見て立ち尽くした挙句、失神して廊下に倒れこんだ。

「・・・ごっ、ごめんねっ？」

そんなユナとレナの言葉は、犯人Ｈの耳にはもちろん聞こえていない。

犯人Ｉの部屋にて。

クシャ

と、マナの召喚した石にデジカメと携帯電話が潰され、

グシャッ

とマナの召喚した岩にパソコンを潰される。

「あとは・・・」マナは部屋の中を見渡した。「カレンちゃんの写真はどこ・・・？」

「もっ、持ってないです！」犯人Ｉは必死に嘘を吐いた。「持ってないですっ！　私本当に何も持ってないです！」

「ねえ・・・」

「――グエっ！」

マナの召喚した隕石に潰され、犯人Ｉは床の上に這いつくばった。

「写真どこ・・・」

「ほ、ほ、本当に持ってないですっ・・・・・・・！」

そう答えた犯人Ｉに、マナが人差し指で隕石を操る。

「グエェェェェェ！」さらに押しつぶされる犯人Ｉ。「ご、ご、ご、ごめんなさいぃ、言いますぅぅ・・・・・・・！！　つ、机の上から2段目の引き出しですぅぅぅ・・・・・・・！！」

「そう・・・」

マナ机の上から2段目の引き出しから無事にカレンの写真を見つけ出し、犯人Ｉの上から隕石が消える。

「しっ、死ぬかと思ったっ・・・！」

「あとはない・・・？」

「なっ、ないです！　あとは本当にまじで絶対にないです！」

「そう・・・」

「そっ、それにっ！　カレンさんのことだって、私は本当はリンチなんてしたくなかったんです！　先輩たちに、無理矢理連れて行かれたんですっ！　本当なんですっ！」

「犯人Ｉ・・・」

いつでも無表情のマナの紫色の瞳が、犯人Ｉを捉えた。

「はっ、はいっ！！」

「見苦しい・・・」

犯人Ｉの上に、先ほどよりも一回り大きい隕石が落下した。

２４時２１分。

縛られた9人全ての犯人が、女子寮の前に集められた。
がくがくと震えている犯人、恋したようにぽーっとしている犯人、気絶している犯人、ボコボコにされた犯人と何故かリンク、瀕死状態の犯人など色々な状態で。

犯人たちの処分をどうするかで話し合いが始まった。

２５時００分。

ようやく処分が決まる。
犯人たちは、ハンターの少ない睦月島に飛ばされることになった。
そこに永住してしっかりと働けとのリュウの命令を、犯人たちは喜んで引き受けた。
思っていた処分よりも、ずっと甘いものだったから。

２５時１０分。

ミーナの瞬間移動でそれぞれ帰宅。
屋敷の前、キラはカレンの写真を見て顔を歪めた。

「本当にひどいことをしたものだ」

「まったくだよ」と、サラが溜め息を吐いた。「でもまあ、これで写真全部だよね。良かった。あとはこれを兄貴に見つからないよう処分して――」

「何を？」

と、後方から声が聞こえ、一同は驚倒して振り返った。
そこには仕事を終えて帰宅したシュウの姿。

「わっ、わあああああっ！！」

慌ててカレンの写真を隠そうとする一同。

「なっ、なっ、何でもないよ兄貴っ！？」

「・・・すげー声裏返ってんぞ、サラ」

「なっ、何でもないっ！　何でも――」

固まった一同の中から、ひらりひらりと一枚の写真がシュウの足元へ落ちていく。

「やばっ・・・・・・！！」

慌てて写真を拾い上げようとしたサラだったが、それはシュウの手に奪われた。

「返して兄貴っ！　返せっ！！」

「怪しいから返さねえ」

シュウがサラの手に届かぬよう、写真を高く掲げる。

そして、その写真に顔を向けた――。

第２３話　奇襲（後書き）

あれ・・・、ドッ○リテレビっていつまでやってたんでしょう（笑）

昨夜２１時４０分頃にメールくださった読者様へ。

前話の前書きをこっそり一文字だけ訂正したのは秘密です。

それから、

黒幕は九人＝微妙な数＝実はもう一人いる＝十人そろってトオ（１０）レンジャー

ということにはなりませんでしたね（笑）

第２４話　涙の理由

深夜までかかった仕事をようやく終え、屋敷へと帰宅したシュウ。
屋敷の前、深夜だというのに家族ほぼ全員が玄関の前に立っていた。
今までどこかへと出掛けていたというような雰囲気で。

母・キラや妹たちが固まって何かを見ていた。
何かとシュウが声を掛けたら、女たちは大慌てでシュウから見ていたものを隠した。

女たちの間から、ひらりひらりとシュウの足元へ落ちてきた一枚の写真。
シュウは、それを誰よりも先に手に取った。

キラや妹たちの手に届かぬよう、それを高く天へと掲げた。
顔を上げたシュウの瞳に映る。

カレンの写真――顔を除いた身体中が傷だらけになったカレンの写真。
キラの夜目が利くところを受け継いだシュウの瞳には、たしかにはっきりと映った。

「――なん・・・だよ、これ・・・！」

シュウの手から、シュウよりも３ｃｍほど身長の高いリュウが写真を奪い取る。
シュウが自分とそっくりなリュウの顔に目をやると、リュウが何食わぬ顔をして言った。

「シュウ、おまえは幻を見た」

「な・・・何言ってんだよ、親父」

シュウの頭は衝撃を受けて混乱していたが、この目ではっきりと見たのだ。

ぼろぼろになり、恐怖に満ちた顔で泣いているカレンの姿を。

「よっ・・・、寄こせよ、その写真っ！　どうなってんだよ!?　どういうことだよ!?　カレンがっ・・・、たしかにカレンがっ・・・・・・！!」

「落ち着け、シュウ」

「落ち着けねえよ、親父っ！　なあっ、どういうことだよ!?　なっ・・・なんだよ、そのカレンはっ・・・!?　どっ、どういうことなんだよ・・・・・!?」

「まっ、幻だって言ってんでしょっ！」

そう言ってサラがリュウの手からカレンの写真を取り、屋敷の中へと入って行った。

キラや妹たちも、シュウとは目を合わせようとはせずに屋敷の中へと入って行く。

（おい・・・、待ってくれ・・・・・・・！）

シュウは頭の中の混乱が治まらないまま、母と妹たちの背を追った。

（カレンだ・・・！　たしかにそれは、カレンだった・・・・・・！）

シュウがサラの手を引っ掴もうとしたとき、カレンがミラと共に駆けて来た。

「おかえりなさいっ・・・！　どうでし――」

シュウの姿が視界に入り、カレンがはっとして言葉を切る。
カレンの傍らにいたミラが狼狽したように声をあげた。

「おっ、お兄ちゃんっ・・・！？　もっ・・・、もうお仕事終わったのっ！？」

「・・・ああ。オレ、思ったよりも成長してるみたいで。それより、何事もなかったわけじゃないよな・・・？」

「なっ、何がっ？　何もないよ、お兄ちゃんっ・・・！」

このシュウに、さっきから必死に何かを隠そうしている家族の様子。

シュウを見つめる、カレンの動揺した瞳。
シュウの瞳をじっと見つめていられず、カレンが俯く。

「・・・カ・・・カレンっ・・・・・・・？」

シュウが手を引いても、シュウの顔を見ようとしないカレン。
俯いたまま、恐る恐る訊く。

「・・・み・・・見たの？」

「・・・・・・見た」

カレンに衝撃が走り、シュウに握られている手がぴくんと動いた。

「な、なあ、カレン。は・・・、話してくれるよな？」

「もう終わったことだよ！」

サラがシュウとカレンの間に割り込んだ。

カレンを背に隠すようにして、サラはシュウを睨むように見上げる。

「もう全部終わったこと！　今さら訊くな、うるさい！」

「うるせえのはおまえだ！　何でオレにだけ黙ってんだよ！？　オレに見つからねえようにこそこそして、どこ行って何してたんだよ！？」

「あっ、兄上っ！」リンが口を挟んだ。「ごめんなさいなのだ！でもっ、兄上には関係のないことなのだ！」

「そうなのだ！」ランが続く。「兄上には、まったく関係のないことなのだ！」

「・・・・・リン、ラン」シュウは、リンとランが大切そうに腕に抱えている物を見た。「それ貸してみろ」

「あっ！」

シュウに腕の中の物を奪われ、リンとランは狼狽した。
今シュウの瞳に映ってしまっているのは、リンとランが犯人からもらってきた『シュウの隠し撮り写真集』で。

「・・・オレの写真・・・？　隠し撮り・・・・・・？」シュウは眉を寄せる。「・・・リン、ラン。これをどこの誰からもらってきた」

リン、ランが必死に首を横に振る。

「ちっ、違うのだ兄上！」

「もっ、もらってきてなんかいないのだ兄上！」

「嘘を吐くな、リン、ラン。本当のことを言え」

「嘘じゃな――」

「言え！！」

シュウに怒鳴られ、リンとランが泣き出す。

「ふっ・・・ふにゃあああああん！」

「妹泣かせてんじゃねーよ、バカが」リュウがシュウにそう言ったあと、リンとランの頭を撫でた。「おまえらは部屋に戻ってもう寝てろ。ユナ・マナ・レナも。明日も学校だろ」

リン・ランとユナ・マナ・レナが、承諾して2階の自分たちの部屋へと入って行った。

シュウがリュウの顔を見て訊く。

「オレが・・・、オレが関わってんだろ?」

リュウは溜め息を吐いた。

「ああ、そうだよ」

「親父っ・・・!」サラが慌てて口を開いた。「なっ、何言う気!?」

「下がってろ、サラ。このバカうるさくて仕方ねえ。こうなったら話すまで纏わり付いてきやがるぜ」

「それもそうだな」と、キラが小さく溜め息を吐く。「・・・だが、シュウ。良いか? 決して自分を責めるな」

「母さん・・・」

「良いな?」

強い声で訊いたキラ。

シュウが戸惑いながら頷いたのを確認したあと、リュウの顔を見た。

そしてリュウが話を続ける。

「そうだよ、シュウ。おまえが関わってんの。カレンな、おまえのファンに集団リンチされたんだぜ？」

「えっ・・・？」シュウは困惑した。「・・・オレの・・・ファン・・・・・！？」

「おまえ、カレンを家まで送ってるんだよな」

「あ、ああ。送ってるよ、ちゃんと送ってる。そ、それなのに何で・・・いつ・・・・・・！？」

「カレンがちゃんと家に入るの確認してるか」

「――」

していなかった。

カレンを家の前まで送って、すぐにその場から去っていた。

シュウの表情を見て、リュウは溜め息を吐いた。

拳でシュウの顔を殴り飛ばす。

「バカが。カレンがリンチされたのはおまえのせいだ、シュウ」

シュウに自分を責めろと言わんばかりのリュウの台詞に、キラは苦笑する。

壁に背を打ち付けられたシュウ。

身体の痛み云々より、胸の中が苦しかった。

カレンの顔を見て、身体が震えそうになる。

「・・・お・・・オレのせいで・・・・・・・」

「――」

カレンの胸が痛んだ。

お願い、シュウ。

言わないで。

「オレがカレンの師匠なんてやってるから・・・・・・・」

言わないで。

聞きたくないの。

「ご、ごめんなカレン・・・。でも、もう危ない目に合わねえからっ・・・・・・・」

言わないで、シュウ。

言わないで。

その言葉を聞くのが怖い。

言わないで・・・。

「オレ・・・・・・、オレ、カレンの師匠を辞め――」

「言わないで!!」

カレンが泣き叫んだ次の瞬間。

リュウとサラがシュウの前に並んだ。

全身を回転させながら片足で飛び上がる。

ピョーン・・・

（え）

ドカッ！！！

「――！！？」

顔面の左側にはリュウの足を、顔面の右側にはサラの足を食らい、どちらの方向にも飛ばされなかったシュウの身体。

シュウはあまりの打撃に声を発することなく床の上に倒れこんだ。

「あ」と、ぱちぱちと瞬きをしたリュウとサラ。「やべ」

「見事だったぞーっ」と、キラが感心したように声を高くした。「さすが親子だぞーっ。見事に息の合った旋風脚だったぞーっ」

「ねえ、ママ」

「なんだ、ミラ？」

「お兄ちゃん動かないけど大丈夫かな」

「おおっ、やばいぞリュウ！　シュウが死んでるから早く治癒魔法を！」

「死んでたら治癒魔法かけても意味ねえよ？」そうキラに言ったあと、リュウはサラを見た。「駄目じゃん、おまえ」

「駄目じゃん、親父」と、サラが溜め息を吐く。「蹴る方向は同じにしてやんないと」

「飛ばされなかった分、もろに衝撃食らったよなー」

「・・・・・あ、あの、リュウさま」カレンは口を挟んだ。「本当に死ぬ前に、早く魔法をおかけになった方がよろしいのでは？」

「だな」

ようやくリュウに治癒魔法を掛けてもらったシュウ。

がばっと飛び上がり、リュウとサラを交互に指差して喚く。

「おっ・・・、オレを殺す気か!?　いっ、今本気で天使がオレを迎えに来てたぜ!?」

「ぷ、天使だって」

「はっ・・・、ハモって嘲笑すんなあああああああああっ!!」

リュウ、サラと向き合いぎゃあぎゃあと騒ぎ出すシュウ。

ミラが溜め息を吐いて口を挟んだ。

「ねー、お兄ちゃん。喧嘩はあとにしたら？　女の子泣かせておいて・・・」

「え？」

シュウは振り返った。

カレンの瞳からぽろぽろと涙が零れている。

「――か、カレンっ！？」

シュウはぎょっとし、カレンの前に立ち膝になって顔を覗き込んだ。

カレンの両肩を握り、小さい子に話しかけるようにして訊く。

「どっ、どうかしたのかっ？　カレンっ？　もう大丈夫だぞっ？　オレの弟子さえ辞めれば――」

「ねえ、親父。次はドロップキックにしない？」

「おう、サラ。両側から勢いつけて食らわせてやろうぜ」

「ふっ、ふざけんなっ！！」シュウはサラとリュウに顔を向けた。

「オレのこと本気で殺す気か！？」

「バカは死ななきゃ治らないって言うし、殺してみるのもいいかもね」と、サラ。「兄貴見てると、アタシときどき本気で苛々するわ」

「なっ、何だよそれ」

「この、鈍感男が。カレンが泣いてる理由が、まーーーったく分かってない。カレンは兄貴の弟子辞めたくないってことが、何で分からないわけ？」

「え？」

シュウは再びカレンに顔を向けた。

カレンの顔を覗き込む。

「・・・そうなのか、カレン？」

カレンが泣きじゃくりながら言う。

「言わないでっ・・・！　師を辞めるなんて、言わないで！　あたくしっ・・・あたくし、あなたの弟子をやっていたいのっ・・・・・・！」

「――・・・そう・・・だったのか」

そうだと分かったら分かったで、シュウは困惑した。

カレンがそう言うなら、カレンの師を続けてやりたい。

でも、そうしたらまたカレンが同じ目に合ってしまうかもしれない。

シュウの様子を見たリュウが口を開く。

「なあ、シュウ。カレンがおまえの弟子でも安全な方法がないわけでもねえんだが」

「な、何？　教えてくれよ、親父っ・・・」

「これはおまえとカレン、それからうちの家族の同意、カレンの親御さんの許可が必要になる」

「お、おう・・・？」

「いいか。それは・・・・・・――」

今この場にいる者皆が、リュウの言葉に耳を傾けた。

第２５話　居候

自宅玄関先。
シュウは、母・キラと妹のミラ、サラ、そしてカレンと共に、父・リュウの言葉に耳を傾けた。

「いいか。それは・・・・・・」と、リュウがカレンを見た。「カレン、おまえうちに居候する？」

「居候っ？」

話を聞いていた一同は声をそろえた。

「なっ、何言い出すんだよ、親父っ！？」

と、困惑したシュウとは裏腹に、サラが張り切って賛成した。

「それ、イイ！　そうしようよ！　部屋もいっぱい余ってることだし！」

「たしかに良い考えだな」うんうんと、キラが頷いて賛成した。「ちゃんとカレンを家の中まで送ったところで、安全とは言い切れないからな。うちに来た方がずっと安全だぞ」

「そうよね、そうした方がいいと思うわ」と、ミラも賛成へ。「実際、師のお家に居候するお弟子さんてたくさんいるし。お兄ちゃんと一緒に外へ出て行って、お兄ちゃんと一緒にうちへ帰ってくるなら安心よ」

「そっ、そりゃ母さんたちの言うことは分かるけどっ・・・！」と、シュウは戸惑いながらカレンを見た。「おまえは困るだろ？　カレン」

「あっ・・・あたくしはっ・・・そのっ・・・・・・・」と、シュウの顔を見たカレンの頬が染まる。「みっ・・・皆さまが賛成してくださるのなら、嬉しいですわっ・・・！」

「え!?　何!?　おまえいいの!?　他人の家だぞ!?　嫌じゃねーのっ!?」

「ま、まったく嫌ではありませんわっ・・・！　あたくし、自分のお家よりここにいる方が好きですもの。・・・シュウは嫌なのかしら？」

「オレは構わねえけどっ・・・・・・」

「じゃーいーじゃん、兄貴」と、サラ。「なーに、ブラコンのリン・ランは話せば分かってくれる子たちだから大丈夫だって。三つ子も賛成するだろうし、素直なジュリは反対なんかしないでしょ。決定ね、カレンの居候」

「おっ、おまえあっさり言うなよ！　カレンの親御さんが許してくれるわけねーだろ!?」

「俺が説得してやるよ」と、リュウ。「いつもの1泊や2泊の外泊じゃねーから、そう簡単にはいかねーだろうけど。・・・まあ、俺に任せろ」

「で、でも、もし居候の許可出たとしても、弟子は1年間なんだぞ

？　1年後にはカレンは実家に戻るってことだろ？　また同じこと起きるんじゃ・・・・・・」

「1年後のことは、すでに俺の頭の中に計画してある」

「何だよ？」

「そのときが来たらまた俺の口から言ってやるよ」そう言い、リュウが欠伸をしてキラを左腕に抱っこした。「今日はもう遅いから寝る・・・・・・キラとやることやってから。おやすみ」

と、リュウはキラを連れて夫婦の寝室へと向かって行った。

「私も寝るね。おやすみなさい」

ミラも自分の部屋へと向かって行き、この場にはシュウとカレン、サラが残された。

「んじゃ、カレンもアタシの部屋で――」サラは言い直した。「いや、今日もカレンは兄貴と寝なね。まだちょっと怖いでしょ？　んじゃ、おやすみー」

サラも自分の部屋へと向かう。

立ち膝になってカレンと身体を向き合わせていたシュウは、カレンの顔を見た。

「えーと・・・。おまえもう風呂入ったんだよな？」

「え、ええ。いいお湯でしたわ」

「そうか。んじゃあ、オレはシャワー浴びるから先に寝てろ・・・オレのベッドで。・・・っていうか、おまえまだ怖いの？」

「こっ・・・」シュウの質問に数秒戸惑ったあと、カレンは答えた。

「・・・・・・怖いのですわっ」

「じゃあ、オレの部屋でいいんだな？」

「もちろんですわっ・・・」

「ん」シュウは立ち上がり、カレンの頭にぽんと手を乗せた。「・・・でもまあ、おまえが怖くないって言ってもオレと一緒に寝かせてただろうな」

「えっ・・・？」

それは何故？

カレンが口に出して訊く前に、シュウはカレンの手を引いて自分の部屋へと続く緩やかな階段を上っていった。

シュウの部屋。

ベッドの枕元の電気だけが付いている。

（さっきのシュウの言葉って、どういう意味だったのかしら・・・）

シュウのベッドの中で、カレンはそんなことを考える。

（あたくしが怖くないって言っても、あたくしをあなたと一緒に寝かせてたって・・・？　それはどうして・・・・・・？）

カレンの胸がどきどきと鼓動をあげる。

（・・・・・まあ、期待しない方がよろしいわよね）

カレンは苦笑した。

少しして、シュウが自分の部屋に備え付けてあるバスルームから出てくる。

まだ眠らずに、じっと見つめてきているカレンの顔を見る。

「あれ・・・、まだ寝てなかったのか。どうした、怖いのか？」

「・・・・・怖いわ、とても」

カレンは少し嘘を吐いた。

もう怖くないとは言えないけれど、とても怖いわけではない。

昨夜みたいに、シュウの腕に抱き締められて眠りたかった。

だから少し嘘を吐いた。

シュウがカレンのところへとやって来て、ベッドに入る。

自然とカレンに腕枕を貸すのは、普段妹たちにそうしてやっているからなのだろう。

きっと、ブラコンの双子・リンとランあたりに。

「・・・ねえ、シュウ。訊いてもよろしいかしら」

「おう？」

「さっき、あたくしが怖くないって答えていても、あなたと一緒に寝かせようと思ったのは何故？」

「ああ、そのことか」と、シュウが腕枕を貸していない方の手――右手で、カレンの頭の頭を撫でた。「おまえが怖くないって言っても、オレが怖かったんだよ。なんていうかさ・・・、うちにいれば安全なのは分かってるけど、またおまえが襲われちまう気がして」

「何故？」

「え？」

「あたくしが襲われたら、怖いと思うのは何故かしら？」

「うーん・・・、あれだろうな。やっぱりおまえは妹に似た感じがするからっていうか」

「・・・・・・」

本当期待しない方がよろしいわよね、この男。

シュウの顔を見つめ、カレンは深く溜め息を吐く。

シュウが眉を寄せた。

「何だよ？　溜め息吐いて」

「なんでもありませんわ」カレンはそう言って、シュウから突っ込まれる前に続けた。「もう寝ましょ」

シュウがじっとカレンの顔を見つめる。

「・・・な、何かしら？」

「寝る前に、ちょっといいか」

「え？」

「オレ、すげーしたかったことがあるんだけど」と、シュウが顔をカレンに近づけてくる。「・・・・・・いい？」

「えっ・・・？」

こ、こ、これは・・・！

キ、キス！？

カレンの頬が染まる。

そうよね、これはキスよね！？

間違いないわよね！？

甘いキスよね！？

優しい口づけよね！？

夢の接吻よね！？

情熱のベーゼよね！？

ど、どうしましょう！

急でドキドキしてしまうのですわっ！

動揺しているカレンを見て、シュウの顔が元気を無くす。

「・・・・・わり、嫌だよな」

「いっ、いいえっ！？」カレンは慌てて首を横に振った。「嫌じゃなくってよっ！？」

「えっ？」と、シュウが期待に瞳を輝かせる。「じゃあ、していいのか？」

「え、ええっ」

「おおっ、サンキュっ！」

ヘイ、カモオォォォォォン！

ですのよおおおおおっ！！

カレンはぎゅっと瞼を閉じた。

どきどきとしながらシュウのキスを待つ。

スリ・・・

「へ？」

カレンは眉を寄せて瞼を開けた。

スリスリスリ・・・

「ちょ、ちょっ・・・・・・・・!?」

スリスリスリスリ・・・

し、したいってキスじゃなくて・・・!?

カレン、愕然。

ほっ、頬ずりでございますのことおおおおおおおおおお!?

スリスリスリスリスリスリ!

「おおおおおっ!」と、シュウが歓喜の声をあげる。「何だコレ何だコレエェェェェ!」

「ちょ、ちょっと・・・!?」

「スゲエェェ! なんって気持ちいい奴なんだよ、おまえはよ?え?」

「やっ、やめ・・・!」

「おおおおっ、たまんねえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」

3分後。

ようやくカレンはシュウの頬ずり攻撃から解放された。

「あー満足した」

すっかりご満悦のシュウ。

不機嫌そうなカレンの顔を見て、ぱちぱちと瞬きをした。

「？　何だよ」

「期待外れなのですわ。そりゃっ・・・頬ずりも嫌ではないけれどっ・・・・・・」

「期待って、何してたんだよ」

「何でもないのですわっ」

シュウの頬を小さな手でぺちんと叩き、カレンが枕元の電気を消した。

さも不機嫌そうに背を向けたカレンを、シュウが抱き締める。

「おやすみ」と、シュウが欠伸をした。「オレが寝てる間にどっか行くんじゃねーぞ」

「行くかもねっ！　もう大して怖くありませんしっ！」

「オレが怖いからダメー・・・・・・」

もう半分眠っているような声で言ったシュウ。

数秒後には、規則正しい寝息がカレンの耳に聞こえてきた。

「あと少ししたらベッドから抜け出てやるのですわっ・・・！」

そう言った１０分後。
カレンは身体の向きを変えて、シュウの胸にしがみ付いて眠っていた。

翌日。
シュウはカレンと共に、カレン宅のカレンの部屋にいた。
リュウからの『今日はカレンの引越しの準備してろ』との命令で、カレンの部屋の物をダンボールに詰めている。

（これでカレンの親御さんに居候の話を拒否されたらどうすんだよ、親父・・・・・・）

そう思ってシュウは苦笑してしまう。
一方のカレンはえらくうきうきとした様子だ。

「リュウさまからのお電話、いつ頃あるのかしら？　夕方までにはあたくしのおじい様から居候の許可をいただいてきてくださるわよねっ？」

カレンの居候の件に関して、シュウの家族からは賛成をもらっている。
朝起きるなりリュウからその件について話され一瞬戸惑っていたリン・ランも、今朝家を出て行く前にはカレンの身を案じて賛成してくれた。

よって、あとはカレンの親御さんの許可だけなのだが。

「おまえ、親御さんから居候の許可もらえる気満々だね」

「あら、もらえるでしょう？　あたくしが先ほどおじい様に話したときは、とりあえす反対されたけれど。でも大丈夫ですわ。なんたって、説得してくださるのはリュウさまだもの！」

「そうだけどよ・・・。期待しないで待てよ」

「期待するわ！　期待して大丈夫なのですわ、リュウさまだもの。誰かさんじゃなくて、リュウさまだもの。誰かさんみたいに、期待外れにはしないのですわ！」

「・・・・・その誰かさんって、もしかしてオレか」

「もしかしなくてもあなたですわっ」

「ああもう・・・」シュウは溜め息を吐いた。「悪かったよ。昨日おまえがオレに何期待したのか知らねーけど、期待外れにして悪かったよ」

「まったくなのですわっ」

「んで？　その期待してたこと言ってみろ。してやるから」

「・・・いっ、今さら恥ずかしいのですわっ」

「恥ずかしいことなのか」

「うっ、うるさいのですわあああああああっ！」

「何怒って――フギャアァ！！　尾っぽを引っ張るなって言ってんだろうがよ！？」

「うるさいのよ鈍感男っ！　尾っぽ結んでやるのですわっ！！」

「てっ、てめっ、止めろ！　こんのっ・・・、頬肉噛み千切んぞゴルアァァァァ！！」

荷物をまとめるのを忘れ、シュウとカレンが騒ぎ出してから１０分後。

シュウの携帯電話が鳴った。

ぴたりと喧嘩が止まる。

「リュウさまっ？」

「ああ。まさか、もうカレンの親御さん説得できたっていうんじゃ・・・。いや、まさかな。まだ午前中だし」

シュウはリュウからの電話に出た。

「もしもし、親父？」

「おう。そろそろそっちに引越し屋着くぞ」

「・・・ま、待て親父。カレンの親御さんの説得は？」

「終わった。んじゃ、俺仕事だから」

そう言うなり、リュウが電話を切った。

「・・・・・えーと」

シュウが眉を寄せながらカレンの顔を見ると、カレンが期待にきらきらと瞳を輝かせていた。

「どうっ？　どうでしたのっ？」

「信じがたいことに・・・」

「うん？」

「・・・その、まさかだったみてえ・・・・・・」

カレンが歓喜に黄色い声をあげて、シュウの首に飛びついた。

第２６話　居候記念

無事にシュウ宅に居候することになったカレン。
カレンの部屋は、シュウの向かい側の部屋になった。

家族がもう1人増えた気分なのか、はしゃいだ女たちによってカレンの居候初日の夜にパーティーが開かれた。
シュウの家族とカレンに加え、キラが呼んだだろうリンク一家、サラが呼んだだろうレオンと、それに着いて来たグレル。
つまり、ほぼ毎月行われる誰かの誕生日パーティーメンバー一同が集結した。

誕生日パーティーのときのように乾杯したあとは、キラがこんなことを言った。

「カレンの居候を記念して、みんなでどこかへ行きたいのだが」

「よし、行くぞ」

即決定をしたのはリュウである。
キラを膝に抱っこして訊く。

「どこに行きたいんだ、キラ？」

「うーん・・・、ミーナの瞬間移動で届くところが良いだろうな」

「おかんの瞬間移動で届くところ？　ほな、ここ葉月島かとなりの文月島か長月島やな」と、リーナ。「うち、この間テレビＣＭで新しくできた温泉旅館見たんやけどな、露天風呂がめっちゃでかかっ

たで！　泳いでみたいわあ」

「ああ、あの長月島の温泉かリーナ。わたしも行ってみたいぞーっ」

と、ミーナが望んだとなれば決定されたも同然。

キラがリュウの顔を見て言った。

「その長月島の温泉に行きたいぞ」

「よし、次の日曜に皆で長月島の温泉に行くぞ」

そういうことになった。

そして次の日曜日。

一同はミーナの瞬間移動で、長月島にある温泉旅館の前へとやってきた。

「いや、うん、あのさあ親父・・・」

「何だ、シュウ」

「いや、うん、あのさあリュウ・・・」

「何だ、リンク」

「旅館丸ごと貸切にする理由は！？」

シュウとリンクが声をそろえた。

「貸切のがキラたち喜ぶだろ」と、リュウがキラを見る。「なあ、キラ？」

「すごいぞーっ」と、キラの瞳がきらきらと輝いている。「温泉貸切だぞーっ。さっすがリュウだぞーっ」

「すごいぞーっ」と、ミーナも続く。「さっすがリュウだぞーっ。リンクとは違うぞーっ」

「せやな！　さっすがリュウ兄ちゃんや！　おとんとは大違いで、やることがめっさ男らしいで！　ほな、行っくで～～～っ！！」

と、浮き輪を肩からぶら下げ、ジュリの手を取って旅館へと入っていくリーナ。

「居候記念レッツゴオォォォォ♪」

カレンとサラが腕を組んで続き、

「ゴオォォォォ♪」

キラとミラ、双子、三つ子、ミーナ、グレルも続いて旅館へと入って行った。

「みんな大はしゃぎだね」そうレオンがおかしそうに笑ったあと、リュウに顔を向けた。「ところで、リュウ？　言われた通り２０万ゴールド持ってきたけど、何するの？」

「おれも聞きたいわ」

と、眉を寄せながらリンク。

シュウも気になっていた。

ジュリを除く男たちは、リュウから２０万ゴールドずつ持ってくるよう言われていたのだ。

リュウがにやりと笑う。

「何って？　勝負だよ。俺とシュウ、リンク、レオン、師匠で。ジュリはまだ子供だから早い。金に５０万、銀に２５万、銅に１５万、鉄に１０万、アルミは無し」

「金・銀・銅までは分かるけど、鉄とアルミてなんやねん。っていうか、アルミの奴大損やん」

「その大損の奴なんだが、俺はおまえの気がしてるぜ、リンク」

「おれかいなっ！？　しょ、勝負って一体何すんねん、リュウ！？」

「あとで教えてやる」

と、旅館へと入っていくリュウと、それを追っていくリンク。

残されたシュウとレオンは、顔を見合わせた。

「なあ、レオ兄」

「何、シュウ」

「オレ、親父の考えてる勝負って何か分かった気するんだけど」

「うん、僕もだよ」

「くだんねーよな」

「本当にね」

シュウとレオンは、呆れて溜め息を吐いた。

案内された部屋に荷物を放り投げ、一同は早速露天風呂へ駆けつける。

女湯に入る手前、キラはリュウに手を引かれて振り返った。

「なんだ、リュウ？」

「キラ、俺・・・金メダル取ってくるぜ」

きらーんと瞳を輝かせ、自信満々な様子で言ったリュウ。

にやにやと笑いながら男湯へと入っていった。

（金メダルって・・・・・？）

キラは眉を寄せながら女湯へと入った。

他の女たちと服を脱ぎながら言う。

「男たちが何やら勝負するらしいぞ。まあ、リュウの考えていること

とは大体想像がつくがな」

「うち、いっちば～～～ん！」

まったく話を聞いていないリーナがさっさと服を脱ぎ捨て、女湯側に連れて来たジュリと共に露天風呂へと駆けて行った。

それを見送ったあと、ミラがぱちぱちと瞬きをして訊く。

「勝負って、何の？」

「決まってんじゃん、お姉ちゃん」と、サラがにやにやと笑いながら言う。「男同士裸の勝負といえば～。まったく、楽しいこと始めんじゃん。これは男風呂覗かなきゃだね」

「えっ！？」ミラの頬が染まる。「だっ、ダメよサラ！　覗いちゃダメっ！　・・・あぁん、でもパパ見たぁい！」

「わ、わ、わ、わたしたちも！」と、リン・ランが挙手した。「あっ、兄上の一糸もまとわぬ裸体を拝ませていただきたいのだ！」

「えっ！？」カレンが顔を真っ赤にして声を裏返す。「みっ、皆さん覗くんですの！？　そんなレディがはしたないのですわっ！」

「カレン」ぽんと、サラがカレンの肩に手を乗せた。「皆で覗けばエレガント（謎）」

「・・・・・あ、あら、そうっ？」

「まったく、私の娘たちは・・・」と、キラが溜め息を吐いた。「仕方ない、そんなに覗きたいのなら母上が手本を見せてやるから倣

うと良い。どうせなら勝負が始まる前から覗く。男たちにバレぬよう、大声を出すのではないぞ」

「ラジャッ！」

女たちが了解したあとは、キラを先頭に露天風呂へと向かう。男風呂と女風呂を遮っている木で出来た塀に沿って、そろりと歩いていく。

「抜き足・・・」

そろり・・・

「差し足・・・」

そろりそろり・・・

「千鳥足・・・」

そろ――

「ママ違っ」

「ま、間違ったのだミラ。え、えーと、忍び足・・・」

そろりそろりそろり・・・・・・。

露天風呂では、ジュリとリーナが浮き輪に乗ってはしゃいでいた。風呂と木の塀の間――約１ｍの隙間を指し、キラが小声で言う。

「マナ、塀の天辺まで頭が届くよう、ここに岩を召喚してくれ」

「ラジャー・・・」

と、マナが木の塀に沿って大きな岩をごろごろと召喚して並べていった。

キラが岩に上り身体を屈めながら言う。

「良いか、一応言っておくぞ。母上は手本のためにやっているが、良い子はマネをするんじゃないぞ？　分かったな？　・・・・・・って、こ、こら。よ、良い子はジュリとリーナだけだったのかっ・・・！？」

つまり、ジュリとリーナを除く女湯にいる者全員が岩の上に上った。

サラがわくわくとしながら言う。

「まあまあ、ママ。続き続き！」

「わ、分かったぞ。みんな、岩の上に乗ったな？　そうしたら屈めた身体をゆっくりと伸ばし、塀の天辺からそ～～っと頭を出し、目を出し、はいストップ！　良いか、目までだぞ。あんまり出すとバレるからな」

「ラジャッ！」

塀の上に女たちの頭が1、2、3、4、5、6、7、8、9、10。

内、猫耳付きは6つ。

少しすると女たちの目に、シュウとリンクが露天風呂へとやってくる姿が映った。

「にゃあああああっ！　兄上～～っ！」

リン・ラン、早速大興奮。

「コラっ、静かにしなっ！」

サラが叱ると、リンとランが慌てて口を塞いだ。
うんうんと承諾して頷き、口を塞いだまま男風呂へと目を向ける。

湯に浸かる前、リンクがシュウの肩や腕を触りながら言う。

「へえ、大分筋肉付いてきたやん、シュウ」

「ああ、うん。そうかも」

「さすがはリュウの子やな。恵まれた身体しとる。すぐに超一流ハンターになって、すぐにおれなんか抜かすんやろうなあ」

「それは言えるな」

と言ったのはリュウの声。
シュウとリンクの後方から、リュウが姿を見せた。
いきなり素っ裸で現れたリュウに、カレンは真っ赤になった顔を手で覆う。

「や、やだリュウさまったらっ・・・・・・！！」

一方その傍らにいたミラ、鼻から鮮血噴射。

「ちょ、パパってばセクシーダイナマイッ・・・・・・・！！」

「・・・お姉ちゃん、早く鼻血止めないとバカキャラにされるよ」

「わっ、分かってるわよサラっ・・・！」

「お？　そろそろ勝負始めるのではないか？」

とのキラの声で、女たちの視線は男風呂へ。

「おわあっ！」リュウに腰のタオルを取られ、リンクが声をあげた。

「な、何すんねん、リュウ！」

「男同士で恥ずかしがってんじゃねーよ。勝負始めんぞ」

「――って、まさか勝負って・・・！？　おっ、おまえが金メダル前提の勝負やないかいっ！！」

喚いているリンク。

キラが凝視して言う。

「なあ、ミーナ」

「なんだ、キラ？」

「おまえの主、こうしてリュウと比べると羨ましいサイズだな」

「うむー。こうしてリュウと比べると、リンクのは可愛いぞ」

「ママ、ミーナ姉」
「なんだ、サラ？」
「褒め言葉になってないってソレ」
「ほお」
「ハモってないで、ほら。親父が兄貴のタオル狙ってるよ」
女たちの視線は再び男風呂へ。
「おい、シュウ」
「な、なんだよ、親父」
「早くタオル取れよ」
「い、嫌だ、こんなくだんねー勝負――って、取るんじゃねえええええっ！」
シュウの腰に巻いていたタオルをリュウが取り、それはポイッと投げ捨てられ湯の中へ。
「ぎっ、銀メダルっ・・・！？」
とリンクが目を見開くと同時に、リン・ランが頭を引っ込めた。
「み、見たか、ラン」

「み、見たぞ、リン」

「あ、兄上、あんなところまで父上似だったぞっ・・・！」

「あ、兄上、あんなところまですごかったぞっ・・・！」

「いっ、いけないのですわあああ！」と、顔を手で覆いながらカレンが小声で喚く。「ダメよっ、見ちゃダメよおおおおおっ！」

「カレンカレン」

「な、何かしらサラ？」

「指の間からバッチリ見てんじゃん」

「ギクッ」

「あっ、レオ兄来たあああああっ」

女たちの視線はまたまた男風呂へ。

「まーったくもう、こんなことだろうと思ったよ、リュウ」と、呆れ顔でレオンが登場した。「くだらない勝負やってないで――って、ちょっとタオル取らないでよ！」

「うわ、レオンおまえ、思ったよりえげつねえ・・・！　そんなんで俺の娘を！？」

「えげつないって、自分の見てから言ってよね、リュウ。そんなん

で僕の姉を!?　しかも毎日毎日何時間も!?」

「俺の可愛い黒猫（キラ）は喜んでいる」

サラがキラを見た。

「喜んでんの、ママ？」

「いや、きついぞ」

「だよね」

「それにしてもレオンは思ったよりすごいな」

「でしょでしょっ？」

「こうして見ると、順位は・・・・・・？」

女たちの視線は、またまたまた男風呂へ。

リュウが言う。

「俺が金メダル、シュウが銀メダル、レオンが銅メダル、リンクが鉄メダルか」

「おれの鉄メダルってなんやねんっ・・・！」

「ていうかよ、親父」

「何だ、シュウ」

「グレルおじさんまだ来てねーじゃん」

「ああ、師匠忘れてた。師匠とは何度か一緒に温泉入ったことあっけど、見たことねーなあ。なあ、レオン。師匠ってどうなの」

「金メダルとれると思ったら大間違いだよ、リュウ」

「何・・・」

リュウが眉を寄せた。

シュウとリンクが眉を寄せ、覗いていた女たちの眉も寄る。

（それってつまり・・・・・・？）

気配を感じた男たちが、後方に振り返った。

「おおーい、レオン。オレ、タオル持ってくるの忘れたみてえ」

とグレルの声。

数秒後、男たちの視界にグレルが入ってきた。

「――きっ・・・、金メダル奪取されたぜっ・・・！」

「おっ、親父が銀メダルってことは、オレ銅メダルかっ・・・！」

「じゃあ僕は鉄メダル？」

「ほ、ほな、おれは・・・・・・アルミ！？　アルミメダル！？　なんやねんソレっ！」

女たちがさらに眉を寄せて、目を凝らしたとき。
もやもやとした湯気の中からグレルが全裸で登場につき、

「――ぎっ・・・ぎゃあああああああああああああああっっっ！！！」

あまりの光景に絶叫。

「――！？」

驚倒した男たちが声のした方に顔を向けると、女湯から大きな水しぶきが上がった。

葉月島へと帰る前の、旅館での夕食の席にて。

（あー、驚いたのですわ）

カレンの顔が引きつる。

（本当にもう、忘れられない記念になりましたわ・・・・・・）

シュウの隣はリン・ランに取られてしまったが、シュウの向かいの席をキープしたカレン。
シュウが心配そうにカレンの顔を覗き込んだ。

「おい、カレン？　どうした？　女みんなで仲良く岩の上から湯にダイブしたときに、どっか怪我でもしたのか？」

「・・・・・・」

シュウの顔を見るカレンの頬が染まり、耳まで染まる。

（本当にもう、忘れられない居候記念でしたわ）

カレンはこほんと咳払いをしてから呟いた。

「ご、ごちそうさま」

第２６話　居候記念（後書き）

良い子は真似しちゃイケマセン。

昨日１４時５５分頃メールくださった読者様へ。
一気読みと応援ありがとうございます。
双子には、タイミングを見て頑張ってもらおうかなーなんて思っております。

昨日２０時頃メールくださった読者様へ。
私は飲み物を飲みながらメールを見るのをやめますわ。
メール見た私は口からコーヒー噴射した・・・ｏｒｚ

第27話　入れ替わり　～前編～

――6月。

毎月葉月島ヒマワリ城で行われる舞踏会に、リュウとレオンは舞踏会全体の警護の仕事へ向かう。
招待客のフリをするが故に、燕尾服またはタキシード着用。

そこへ、今回は一緒に連れて行ってもらったシュウとカレン。
シュウもタキシードを着用し、カレンはドレスを身にまとった。

シュウと踊るため、リュウからダンスのステップを教えてもらい一生懸命覚えたカレン。
シュウと踊るため、サラやキラ、ミラに協力してもらって精一杯ドレスアップした。

・・・・・と、いうのに。

「頼む、親父。カレンと踊ってやってくれ」

とリュウに懇願したシュウにより、カレンはリュウと踊ることに。

「おい、カレン。おまえ何で俺と踊ってんの」

「これはこれで嬉しいのですが、あたくしも訊きたいのですわ、リュウさま」

「あのバカ息子、おまえが俺のためにめかし込んだと思ってるわけ？」

「そのようですわ、リュウさま」

「まじか」

「まじですわ、リュウさま」

「苦労かけるな、カレン」

「いいえ、リュウさま」

と、リュウとカレンがそろって溜め息を吐いたのは6月の頭のこと。

6月の半ば、サラの誕生日パーティーにて。

いつものように深夜まで飲んで騒いだあと、カレンはサラと共にサラの部屋へと向かった。

そこでサラがもらったプレゼントの包みを開けながら訊いた。

「ねえ、カレン。兄貴と何か進展あった?」

「ないわ。一つ屋根の下だというのに・・・」カレンが溜め息を吐く。「たまに一緒に寝るけれど、頬ずりされて終わりですのよ」

「何ソレ。兄貴って本当に男かね」

「あたくし、どうも妹さんと同じに見られているようですわ」

「うーわ、まじで？　アタシが男だったら、カレンみたいな可愛い女には頬ずりで済まないね。あーんなことや、こーんなことしてー・・・・・・」

「シュウの中身がサラだったら、あたくしこんなことで悩まないのでしょうね」

「まったくだよ」

そんなことを話していたときのこと。

次のプレゼントを手に取ったサラの顔が引きつった。

「う・・・、これ、マナからのプレゼントだ」

「マナちゃんからのプレゼントがどうかしたのかしら？」

「カレン、三つ子の部屋の中よーく見た？」

「ええ。薬のようなものの入った瓶がたくさん並べられた棚が、とても印象的なお部屋でしたわね」

「その薬、全部マナが作ったものだよ」

「まあ」と、カレンは声を高くした。「マナちゃん、すごいのねえ。どんなお薬を作っているのかしら？」

「マナの将来の夢は薬屋なんだけどさ・・・。それがただの薬じゃ

なくってさ。何入ってるか分からない薬に、魔法がかかってさ。去年は脚長になれる薬もらったんだけど・・・」

「あら、ほしいわ」

「いやいやいや！　飲んでみたら、アタシ脚だけ５０ｃｍ伸びてキモいの何のって！　アタシ身長約２２０ｃｍだったよ！　しかも５日間も！　外出れなかったね、まじで」

「・・・す、すごいわね」

「すごい通り越して恐ろしいって・・・」サラが手に持っているプレゼントを見つめ、ごくりと唾を飲み込んだ。「さ、さて今年は一体何が・・・・・・」

カレンもサラと一緒になってどきどきとしながら、プレゼントが開けられるのを待った。

丁寧に包装されている紙を取り、箱の蓋を開ける。

そこには、水色の液体とピンク色の液体が入った瓶。

水色の液体の方にはＡ液、ピンク色の液体の方にはＢ液と書かれていた。

中に一緒に入っていた手紙を取り、サラが声に出して読む。

「なになに？　『入れ替わり薬（ハーフ用）が完成しました。効果は２４時間。使うときは入れ替わるハーフ２匹を連れて、マナのところまで』・・・だって」

「ハーフって、つまりサラたちみたいな人間とモンスターのハーフ

のことよねえ？」

「そうさね。・・・じゃ、じゃあ、何？　もしかして、さっき話してたアタシと兄貴の中身入れ替わりができちゃうわけ！？」

「ええっ！？」カレンの頬が染まる。「じゃ、じゃあ、何かしら！？　シュウの中身がサラになったら、あたくし念願の甘いキッスしてもらえるのでございますのこと！？　優しい口付けを！？　夢の接吻を！？　情熱のベーゼを！？」

「何言ってんだよ、カレン・・・」と、サラがシュウの口調になりつつカレンの肩を抱き寄せる。「キスだけじゃ済ませねえぜ☆」

「きゃっ、きゃあああああああっ！　好きにしてえええええええっ！」

カレンとサラが抱き合い、ごろんごろんとベッドの上を転がる。

「よおおおし、カレン！　さっそく明日の朝試してみよおおおおおおうっ！！」

そういうことになった。

朝食作りはシュウとキラ、ミラに加えて、カレンも一緒にするようになっていた。

カレンが料理をできるなんて意外に感じたシュウだったが、実家ではいつも1人でいたというところを考えると何ら不思議ではなか

った。

シュウが担当している魔法学校へと通う双子と三つ子の弁当作りも、カレンが手伝ってくれるようになったので大分楽になった。

弁当作りを終えたシュウとカレンのところへとやって来て、サラが言う。

「兄貴ー、ちょっとアタシの部屋に来てー」

「何で？」

「いいからー」

シュウは首をかしげながらも、サラの部屋へと向かった。

カレンもどきどきとしながら着いて行く。

サラの部屋に入ると、マナの姿が目に入った。

「はい、兄貴」

と、サラがシュウに水色の液体の入った瓶――入れ替わり薬Ａ液を渡した。

シュウがそれを眉を寄せながら受け取る。

「何だ、これ・・・？」

「マナがさ、アタシと兄貴のために健康ドリンク作ってくれたんだって。ほら、アタシにはこっち」と、サラがピンク色の液体の入った瓶――入れ替わり薬Ｂ液をシュウに見せた。「ありがたく飲もう

じゃん、兄貴！　普段ハードな仕事でお互い疲れてることだしさ」

「おおっ、マナ・・・！　おまえ、何て良い子なんだ・・・！」と、シュウが感動に瞳を潤ませる。「ありがとな、マナ。兄ちゃんは嬉しいぜ。んじゃ、いただきます！」

と、シュウが瓶の蓋を開けて、ごくごくと入れ替わり薬Ａ液を飲み干す。

続いてサラも、入れ替わり薬Ｂ液を飲み干した。

サラがにやりと笑って言う。

「ＯＫだよ、マナ」

「じゃあ行くよ・・・」

「へ？」

行くよって何が？

シュウがぱちぱちと瞬きをした次の瞬間。

「はい、チェンジ・・・」

という台詞と共に、マナが指をぱちんと鳴らした。

「――うっわ・・・！？」

シュウの視線ががくんと低くなり、

「おおっ！」

サラの視線がぐんと高くなる。

「お、おい、何だ!?　何が起きた!?」シュウは動揺しながら自分の手足を確認した。「・・・なっ・・・なっ、なっ、なっ、ななななな、何だコレエエエエエエエエエエエエ！！！」

何も知らなかったシュウは、それはもう仰天した。

身体がサラになっているものだから。

慌てて近くの鏡を取って自分の顔を見てみると、やっぱりサラになっている。

叫んだ声も、自分の声ではなくサラの声だった。

シュウの身体になったサラが、自分の姿を鏡で確認しながら満足そうに言う。

「よしよし、無事成功！　さっすがマナ！　えーと、今は・・・」と、サラがベッド脇に置いている置時計で只今の時刻を確認した。「ＡＭ７時２０分ね、分かった。効果は２４時間だから、明日のＡＭ７時２０分までこのままだからヨロシク兄貴」

「ハァ!?　ちょ・・・・・・!?」サラの身体になったシュウは、マナに顔を向けた。「お、おい、マナ!?　お、おまえ、オレとサラに何飲ませた!?」

「入れ替わり薬（ハーフ用）・・・」

「健康ドリンクってのは嘘だったのか!?」

「嘘吐いたのはサラ姉ちゃん・・・。飲ませたのもサラ姉ちゃん・・・。あたし悪くない・・・」

「そ、そうだなっ・・・」

と、シュウはサラに顔を向ける。

鏡や映像に映されているわけでもないのに、自分の姿を目の前にするのは大変な違和感である。

「お、おいコラ、てめーサラ！　何考えてんだよ!?」

「いーじゃん別に、1日くらい。兄貴が今日予定してた仕事は、親父に事情話して休ませてもらうし。あー、でもぉ、兄貴はちゃんと仕事行ってよね。レオ兄1匹じゃ大変だし」

サラが歩き出す。

「お、おい、待てよサラ！　どこ行くんだよ!?」

「うるさいな。どこって、ちょっとトイレだよ」

「トイっ・・・・・・!?」

待ってくれ!

シュウの願い虚しく、サラは部屋に備え付けてあるトイレの中へ。

少しして、トイレの中でサラが大爆笑。

「あーーーっはっはっはっはっ!!　やっぱり近くで見ても兄貴のえげつな〜っ！　これで銅メダルかよ!」

「や、やっぱり近くで見てもって・・・！？　な、何でオレが銅メダルだって知って・・・・・・！？」

困惑するシュウ。

見る見るうちに、顔が赤くなっていった。

「おっ、おっ、おまっ、おまえら女共、男風呂覗いてたなあああああああああああああああ！？」

サラの身体になったシュウの声と、シュウの身体になったサラの声が屋敷中に響き渡る。

入れ替わり効果は２４時間。

サラがベッド脇の置時計で時刻を確認したときは、ＡＭ７時２０分。

だが、そのときサラの部屋の掛け時計はＡＭ７時３０分であったことに誰も気付いていなかった。

第２７話　入れ替わり　～前編～（後書き）

明日から三連休ですね。
更新・・・遅れるかもです（汗）

昨日の１９時４０分頃メールくださった読者様へ。
誤字報告ありがとうございました。
あとヒロインお持ち帰り禁止です。
金メダルはどうぞ（笑）

Ｐ．Ｓ
ＢＬジャナイヨ。

第２８話　入れ替わり　～中編～

健康ドリンクだと言われ、入れ替わり薬Ａ液を飲まされたシュウ。
サラが入れ替わり薬Ｂ液を飲み、マナが指をぱちんと鳴らしながら言った。

「はい、チェンジ・・・」

次の瞬間、シュウとサラの中身が入れ替わってしまった。

サラの身体になったシュウは、急遽リビングに家族全員と居候のカレンを集めた。
リュウが訊く。

「どうした、サラ」

「いや、サラじゃねーんだよ親父。オレだよ、オレ。シュウだよ」

「は？」

と、リュウとキラがぱちぱちと瞬きをした。
シュウの身体になったサラが続ける。

「アタシがサラね。マナの作った入れ替わり薬飲んだらさ、こういうことになったんだわ」

マナの作った薬。

何も知らなかった家族たちは、それで全てを理解した。

ユナ、レナと言う。

「すごいなあ、マナって」

「本当だねー。今度は入れ替わる薬作っちゃったんだあ」

リン・ランと続いた。

「すごいぞーっ、マナ！」

「天才だぞーっ、マナ！」

キラ、リュウも続く。

「うむ、マナは将来有望だな！」

「だなあ。本当すげーな、うちのマナ」

おまけにジュリも続いた。

「マナあねうえ、すごいねー」

「いや、感心してねーでさ・・・」シュウは苦笑した。「明日までこのままなんだぜ？　どうすんだよ・・・」

「どうって、何がだよ」と、リュウ。「たった1日なら別に困らねーだろ」

「そそ」と、サラが同意した。「でもさ、親父。アタシ仕事休んでいいでしょ？」

「ああ、そうだな。慣れない身体で怪我したら、苦痛を味わうのはシュウじゃなくてサラだしな。よし、今日は休め」

「うぃー」

「んでも、おまえは仕事行けよ、シュウ。レオンならサラの身体に怪我させねーから大丈夫だし、レオンの奴も仕事多いから1匹じゃ大変なんだよ」

「そ、そりゃレオ兄のことは手伝いに行くけどさっ・・・・・・」

と、シュウはサラを見た。「おい、サラ。おまえオレの身体で変なことすんなよ!?」

「分かってるって」

そういうサラの顔はにやけている。

シュウは顔を引きつらせた。

「てーめえ、何考えてやがる・・・!?」

「何もー」

「嘘こけっ!!　その顔は絶対何か良くねーこと考えてやがる!!　ああもうっ!!　よりによって、なんでサラなんだよ!?」

「お姉ちゃんよりマシじゃん。お姉ちゃんと入れ替わってたら、女の子座りされたり、内股になられたり、親父にキス求めたりされてたって」

「・・・だ、だな。ミラと入れ替わった場合を考えるとサラのがマシかっ・・・」

「そそ。分かったらいつまでも喚いてないで、さっさと仕事行けってのー。ママの銅像の前でレオ兄と待ち合わせだからねー」

「わ、分かったよ。んじゃ、行って来る」

シュウが立ち上がり、同じく仕事へ行くリュウや魔法学校へ通う双子や三つ子も一斉に立ち上がって玄関へと向かって行った。

それを手を振りながら見送ってやったあと、サラは傍らにいたカレンに目を落とした。

「・・・・・ふーん、こりゃ可愛いわ」

「え？」

と、カレンがシュウの身体になったサラの顔を見上げる。

「兄貴から見たカレンって本当小さくて、頭撫でたくなるの分かる。可愛いもん。どれ、ちょっと抱っこ」

と、サラはカレンの身体を姫抱っこしてみる。

そして驚いた。

「うわあ、軽いや。兄貴からしたら、女ってこんなに軽いんだ。アタシも自分の身体で女のこと姫抱っこできるけど、こりゃ感じる重さがまるで違うわ。親父だったらもっと軽く感じるんだろうな」

「そんなに驚くほど軽いの？」

「うん。兄貴の前では体重気にしなくて済むなあ、女は」

「あら、それは嬉しいわねえ」

そんなことを話していたとき、ミラの声が聞こえてきた。

「サラ、カレンちゃーん！　今日お家にいるなら、家事手伝ってくれる～っ？」

カレンとサラは、承諾してミラのところへと向かった。

そこではキラとミラが、洗濯物を干そうと庭へ向かおうとしていたところだった。

カレンが赤面する。

「ね、ねえ、サラ？」

「ん？」

「シュウの姿であたくしの下着を干されると、何だか恥ずかしいのだけれど」

「え？　あはは、そっか。ごめんごめん。んじゃあ、アタシ別のことしてるわー」

「それでは」と、キラが言った。「ミラと一緒に、2階の部屋の掃除を頼むぞ」

サラとミラは、2階へと向かって行った。

「んじゃあ、お姉ちゃん。アタシ兄貴の部屋掃除するから、お姉ちゃんはアタシの部屋の掃除からお願い」

「分かったわ」

ミラはサラの部屋へと入った。

シュウはリュウを継いで火・水・風・地・光を操れる。
もともと風を操るサラには、掃除機は不要だった。
シュウの身体でも風を操り、部屋中の塵や埃を巻き上げて、窓から外へポイッと捨てれば終了だ。

一方、治癒魔法しか使えないミラはいつもそうしているように、掃除機を使う。
部屋の隅々まできっちりと掃除機をかけ、棚の上などは雑巾で水拭き。

「ふぅ、サラの部屋は完了」

掃除を終えてサラの部屋を出ようとしたとき、ミラはあることに気付いた。

「あれ・・・？」

と、ベッド脇の置時計と壁の掛け時計を見比べる。

（この置時計、時間遅れてるわね。ときどき秒針が止まるし、電池が切れそうなのかしら）

あとでスーパーに買い物に行ったときにでも、電池を買って来ようか。

ミラがそんなことを考えていたとき、サラが大慌てで部屋に入ってきた。

「おっ、おおおおおお、お姉ちゃあああああああああんっ！！」

「ど、どうしたのよ、サラ！？」

ミラは驚倒してサラの顔を見た。

サラの顔といっても、シュウの顔だが。

「た、たたたた、大変だよお姉ちゃん！！　ヤバいって！！　これはヤバい！！」

「だ、だからどうしたのよ、サラ！？」

「あっ、兄貴の部屋っ・・・・・・！！」

「おっ、お兄ちゃんの部屋っ！？　お兄ちゃんの部屋がどうしたの！？」

「隅々まで探したのに、エロ関係のものが何もないっ！！！」

「は？」

「おかしいって！！　これはおかしい！！　兄貴17だよ！？　健全な17歳だよ！？　なっ、何でないの！？」

「・・・・・もう、驚かせないでよ、サラ」と、ミラが溜め息を吐いた。「あれでしょ？　ネット利用してんのよ、お兄ちゃん」

「あー・・・、なるほど」

「納得したなら、次はカレンちゃんのお部屋を頼むわ。私は自分の部屋のお掃除始めるから」

「うぃー」

サラが承諾してカレンの部屋へと入り、ミラは自分の部屋へと入った。

ミラの頭は、すっかり置時計の電池のことを忘れてしまっていた。

昼下がり。

昼食を取りに来たシュウやリュウ、レオンは再び仕事へと向かい、キラとミラは庭でジュリの遊び相手を始めた。

カレンのメルヘンな部屋の中、ティータイム中のカレンとサラ。紅茶を飲みながら、カレンが訊いた。

「ねえ、ティータイムが終わったら何しようかしらね、サラ？　・・・って、顔を見るとやっぱりシュウと話しているみたいだわ」

「嬉しいでしょ？」と、サラが笑う。「兄貴になるのって楽しいなー。カレンって、兄貴の前だと可愛い表情とか反応するね。恋する女の子っていうか」

「そ・・・、そうかしらっ・・・」

「うん。まったくもう」と、サラがティーカップを置いた。「オレ、ムラムラしちゃうぜ？」

突然シュウ口調になったサラの言葉に、カレンが赤面する。

「ム、ムラムラって・・・・・・」

「さて、するか」

「な、何をかしらっ？」

サラがにやりと笑い、立ち上がった。
カレンを姫抱っこしてベッドに寝かせる。

「何って、念願のキス」

「あっ、甘いキッス！？　優しい口付け！？」

「夢の接吻。情熱のベーゼ」

「きゃあああああああっ！　待って、準備するからっ！」

と、カレン。
胴の上で手を組んで目を閉じ、気分はおとぎ話のお姫様。

「いざっ、カモオォォォォン！　ですのよおおおおおおっ！」

「いざっ、ゴオォォォォォ！」

とサラがカレンに負い被さり、躊躇いなく唇を重ねた。
抵抗しようがしまいがお構いなしというような勢いのキスは、シュウというよりリュウを思わせる。

心の中、カレンは黄色い声をあげる。

きゃあああああああっ！

してるっ！
してますわっ！
あたくし、たしかにしてますわ！

シュウとキスを！
中身がサラとはいえ、シュウの唇とキスしてますわ！

ああっ・・・！

これぞ念願の甘いキッス！
優しい口付け！
夢の接吻！
情熱のベーーーーーゼっっっ！！

ああっ・・・・！
し・あ・わ・せ・・・・・・・（ハート）

それにしても、サラってば・・・。
何その・・・、その・・・。
テクニック・・・・・・！？

レオンさんと毎日どれだけキスしてるのかしらっ・・・！

ああっ・・・！

とろけそうっ・・・！

今のあたくしは、まるで湯煎にかけられたチョコレートっ・・・！（謎）

キスをしてから1分が経ち、2分が経ち、5分が経過。

もう少し先に進もうかとサラが思ったとき、ドアをノックする音が聞こえた。

「邪魔が入ったか・・・」と、舌打ちをして、サラはドアの方に顔を向ける。「何ー？」

「サラ、お兄ちゃんの身体の間に手伝ってほしいことがあるんだけど」声の主はミラだった。「お味噌とかお醤油とか、そういう重いものを業務スーパーで大きいの買いたいのよ。荷物持ちとして来てくれない？」

「あー、そっか。分かった。玄関で待っててー」

ミラが承諾して玄関へと向かって行ったあと、サラは腕の間のカレンに目を落とした。

恍惚としてしまっているカレンを見て笑う。

「続きは今夜だぜ、カレン」

「続きっ・・・！？」

「キスだけじゃ済ませねえぜって言っただろ」

「えっ・・・!?」

カレンの顔が真っ赤に染まるのを見たあと、サラはカレンの部屋を後にした。

スキップしながら2階から降りてきたサラを見て、ミラが苦笑する。

「ちょっとサラ、カレンちゃんの部屋で何してたわけ?」

「べっつに〜っ?」

「唇にカレンちゃんのグロスついてるわよ」

「あ」

と、サラが手の甲で唇を擦る。

「まったく、お兄ちゃんの身体なのに・・・」

「んだってさ、お姉ちゃん。カレン可愛いんだもん。もう、たまんねーよ?」

「・・・・・サラ、あなた。男の子に生まれてきても良かったわよね」

「だよねー」

サラが笑いながら玄関の戸を開け、ミラと共にスーパーへと向か

った。

その辿り着いたスーパーにて、ミラは何かを忘れているということを思い出す。

何を忘れているのか思い出そうと思うのだが、まるで思い出せそうになくて、ミラは唸る。

「うーん・・・うーん・・・」

「どしたの、お姉ちゃん」

「何か忘れてるのよねー。何かを買おうと思っていたような・・・」

「忘れる程度のものってことじゃん。大したものじゃないよ」

そんなサラの言葉に同意したミラ。

「じゃあ、気にしなくてもいいわよね」

そう思うことにしたミラは、電池売り場の脇を通り過ぎていった。

第２９話　入れ替わり　～後編～

ただいま２４時間限定で中身入れ替わり中のシュウとサラ。

サラの身体になったシュウは、レオンと背中を合わせてモンスターと戦いながら、本日だけで５０回は口にしている言葉をまたもや発する。

「心配だ・・・。ああ、心配だ・・・」

「たしかにまあ、心配だよね」と、レオン。「昼食のときにお邪魔したときサラ楽しそうだったし・・・、なんていうか男を満喫してる感たっぷりで・・・・・・」

「絶対良からぬことするよな」

「リュウ似だからね、サラは」

そう言ってレオンがおかしそうに笑う。
そんなレオンにシュウは苦笑した。

「それ笑えねえってレオ兄・・・」

「まあまあ、シュウ。今日は早くに家まで送るから」

「うん・・・」

現在の時刻はＰＭ３時。
シュウは、リン・ランが帰宅するだろうＰＭ５時までには帰りた

かった。

（だって、すーげー嫌な予感がするからな・・・・・・）

そしてＰＭ５時にレオンに家まで送ってもらったシュウは、すぐさまリビングへと駆けて行った。

リビングでは、キラとミラがくつろいでいた。

「ただいま！」

「おかえり」

と、キラとミラが言い切るか切らないかうちに、シュウは訊いた。

「サラは！？」

「お風呂よ。お部屋の方じゃなくて、大きな方の」

と、ミラ。

「ふ、風呂ぉ！？」シュウの声が裏返る。「ま、待て、あいつがオレの身体を洗ってんのか！？」

「それはまあ、そうでしょうね。でも、リンとランも一緒に入っていったわよ」

「――なっ・・・」

なぬぁーーー!?

嫌な予感が的中したシュウ。
慌てて1階にある大きなバスルームへと駆けて行った。

脱衣所へと入り、浴室のドアに耳を近づけると、リン・ランの声が聞こえてきた。

「サラ姉上、兄上の口調で頼むぞーっ」

「兄上の口調の方が洗いっこ盛り上がるぞーっ」

洗いっこ!?
何考えてんだ、オイ!

シュウはますます聞き耳を立てる。
サラがシュウの口調で言う。

「リン・ラン、兄ちゃんの身体を隅々まで洗ってくれるか?」

おいコラ、サラ!
オレそんなこと言わねえよっ!
何言ってんのおまえ!?

驚倒しつつ、シュウは浴室の会話に心の中で突っ込みを入れる。

「兄上、お背中流すのだ♪」

「兄上、お髪を洗うのだ♪」

背中と頭だな！？
そこらだけだな！？
よしよし、リン・ラン！
そこでストップしろ！

「何言ってんだよ、リン・ラン。そんなに遠慮しねえでいいぜ」

なっ・・・！？
何言ってんだよサラ！？
遠慮させろよ！！

「えっ・・・！？　良いのか、兄上！？」

「えっ・・・！？　良いのか、前の方も洗っても！？」

よっ、良くねえええええええええ！！

「もちろんいいぜ、おまえたち。ほぉーらほら、存分に兄ちゃんの身体を楽しめ。今のうちによーく見ていいぞ。別に減るもんじゃねーしな」

ちょっ！？
ちょちょちょ！？
てめっ、サラ！！
何言ってやがる！！

「おおーっ！　やっぱり兄上のはすごいぞーっ！」

「おおーっ！　銅メダルとはいえ、やっぱり父上を継いでるぞーっ

！」

ぎゃあああああああっ！！
じっくり見てんじゃねえええええええええっ！！
リン・ラン、おまえらそれでもこれから１５歳になろう乙女かっ
！？

「おーっと、あんまりいじるなよ。もっとえげつなくなるからな。・
・・あーっはっはっは！　だからいじるなって！」

そしてサラ！
おまえそれでも１６の女の子か！？
なんっって恥じらいがないんだよ、おまえはよ！？
なんっっで親父似になっちまったんだよ、おまえはよ！？

「よしよし、今度は兄ちゃんが洗ってやろうなー」

あっ、洗わなくていーよおまえ！！
年頃の妹の身体を洗うんじゃねーよおまえ！！

「あっ・・・、兄上、もうちょっと前の方をっ・・・」

「あっ・・・、兄上、スポンジじゃなくて素手でっ・・・」

いやいやいやいや！！
ブラコンとはいえおかしいだろっ！！
おい、リン・ラン！？
おまえら兄ちゃんをアブノーマルな世界に連れ込む気か！？

「よーしよし、分かった分かった。そういうなら恥じてねーで脚広

げろなー」

なっ、何言ってやがんだゴルアァァァァァァ！！

バァン！！

シュウは浴室のドアを蹴り開けた。

「いーーー加減にしろおまえらあああああああああああっ！！」

「――にゃっ、にゃあああああああっ！！　本物出たあああああっ！！」

リン・ランが狼狽し、大きなバスタブに飛び込む。

「おかえり～、兄貴」

「おう、ただいま～――って、いかにも家族の会話してんじゃねえよサラっ！！」

「家族じゃん？」

「いや、そうだけどよっ・・・！　んな会話してる場合じゃねーだろうよ！？　何してんだよおまえはよ！？」

「いやあああん、エッチィィィィ！！」」

「うわあああ、ごめえええええん！！　――って、オレの身体をオレが見て何が悪いっ！！　気持ちわりー声を出すなっ！！」

「うら若い妹の身体を見るなって」

「うっ・・・」

シュウはリン・ランと目を合わせたあと、浴室のドアを閉めた。

「お、おい、サラっ・・・！」

「何」

「行き過ぎたことすんなよっ・・・！？」

「分かってるって」

そんなサラの返事を確認したあと、シュウは1階のバスルームから出た。

リビングには見当たらなかったカレンの姿を探し、2階へと向かう。

カレンの部屋のドアをノックすると、機嫌の良さそうなカレンの声が返ってきた。

「はぁーい♪　どちらさまかしら？」

「オレ・・・、シュウだけど」

「えっ！？　シュ、シュウ！？」

「何だよ、急に慌てて」

「べっ、べべべ、別になのですわっ！」

「・・・・・怪しいっ！」

シュウはカレンの部屋のドアを開けた。

「きゃっ、きゃあああ！」とカレンが顔を赤くして声をあげる。

「乙女の部屋に勝手に入らないでちょうだいっ！」

「うっ・・・！　わ、悪いっ・・・」

シュウは慌ててドアを閉めた。

ベッドの上には、カレンの下着がたくさん並べられていて。

「カ、カレンっ、おまえ何してるわけっ・・・！？」

「なっ、何って何かしらっ？　コレクションを並べて見てただけですわっ・・・！」

「そ、そうか」

「・・・・・と、ところでシュウっ？」

「お、おう？」

「か、可愛い系がお好きっ？　そ、それとも清純系っ？　セクシー系かしらっ？　あっ、エロカワっ？」

「オ、オレ？　可愛い系か清純系かな・・・」

「可愛い系か清純系ね！　分かったのですわ！　・・・うーん、これがいいかしら。こっちも良いわね。きゃあっ、そういえばこんな可愛いのもありましたわっ♪」

何をそんなに張り切ってるんだろう・・・。

そんなことを疑問に思いつつ、シュウは自分の部屋に入った。

ベッドに転がって数秒後。

「・・・なんかオレの部屋、スゲエェ荒らされてねえ？」

荒らした犯人はサラであることを、シュウは何となく察する。

「何を見つけ出そうとしてたんだか、あいつは・・・」

シュウは深い溜め息を吐いた。

「明日の朝まで見張ってねーとだな・・・・・・」

とりあえず普通に晩ご飯を終え、リビングで皆とくつろぎ、ミラに身体を洗ってもらったあとのこと。

リビングに戻ってきたシュウの顔が引きつる。

「サラ・・・、おまえ何してんの？」

「見りゃ分かんじゃん。酒飲んでんの」

と、サラ。
注がれたビールを飲み干す。
そのサラにビールを注いでやっているのは、両脇にべったりとくっ付いているリン・ランである。

「妹に酌させてか！？」

「兄貴って普段いい思いしてんなあ」

「オレそんなことしねえっ！！　しかもっ」と、シュウはサラの腕を指差した。「どこのエロ親父だおまえはっ！！」

突っ込まずにはいられなかった。
サラはリンとランの腰をしっかりと抱き寄せていて。

「うるさいな。喜ばせてんだよ」

「喜ばせてるぅ！？」

シュウはリン・ランの顔を見た。

（よっ、喜んでやがるっ・・・）

また顔が引きつってしまう。
リン・ランの顔は、すっかり恍惚としてしまっていたものだから。

「兄貴よりアタシのが女喜ばせられるよねー」

「うっ、うるせーなっ・・・！　・・・ああもうっ、オレの姿でエロ親父みてーなことしないでくれっ！！」

「分かってるって」

「とか言いながらリンの太股触ってんじゃねえっ！！　・・・こっ、こらラン！　自ら乳触らせてんじゃねーよっ！！」

ぎゃあぎゃあと喚いているシュウを無視し、サラはリビングの中の時計に目を向けた。

（そろそろかな）

サラが立ち上がり、心の中でにやりと笑う。

（そろそろ、カレンが風呂上がる頃かな）

サラは足元にいるリン・ランに笑顔を向けた。

「酌ありがとな、リン・ラン」と、サラはシュウ口調で言う。「今日は兄ちゃんもう寝るから、後片付け頼めるか？」

「分かりましたなのだ、兄上～っ・・・」

頬を染めたリン・ランにリビングから見送られたあと、サラは自分の部屋へ行くフリをしてカレンの部屋へと直行。

足取り軽く2階へと続く緩やかな階段を駆け上がって行った。

（そうか、寝るんだな。よしよし）

と、安堵したシュウ。

（今日は気を揉んで疲れたから、オレももう寝よう）

そう思い、サラに続いて2階へと上っていったシュウだったが。

（あれ？）

と、ぱちぱちと瞬きをする。

（サラの奴、今カレンの部屋に入らなかったか？）

サラとカレンが一緒に寝るのは、別にめずらしくとも何ともない。

だが、嫌な予感がする。

カレンの部屋のドアに、シュウは耳を近づけた。

「何だ、もうとっくに風呂上がってたんだ」

と、サラ。

続いてカレンの声が聞こえてくる。

「ええ、先ほどあがりましたのよっ・・・」

「そんなに待ち遠しかったか、オレが」

シュウ口調になったサラ。

シュウは眉を寄せた。

続けてサラが言う。

「ベッドに入って待ってろよ。肩冷えてんじゃねーか」

「だ、大丈夫よっ・・・。きゃっ・・・」

「見た目も可愛けりゃ、下着も可愛いぜ。ああもう、たまらんっ・・・」

は？

何この会話。

シュウはますますドアに耳を近づけた。

だが、しばらくの間、会話が聞こえてこなかった。

「ううーん、柔らかい唇だぜっ」

は！？

サラおまえ、カレンに何してんの！？

シュウはドアにへばりついて中の会話を聞き取る。

「さて・・・、カレン。オレのえげつねーけどいいか？」

なっ・・・！？

何考えてやがんだゴルアァァァァァァ！！

シュウは仰天して、カレンの部屋のドアを蹴り開けた。

バァン！！

「サラっ！！　てめえっ、カレンに何して――」

大体は想像してドアを開けたシュウだったが、目玉が飛び出そうになってしまった。

カレンのベッドの上。

すでにシャツを脱ぎ捨てたサラが、カレンを押し倒している。

しかもカレンの寝巻き――パイル生地で出来たキャミソール型ワンピースを脱がしかけている。

「なっ・・・、なっ、なっ、なっ、何してやがるテメエエエエエエエ！！」

シュウも仰天したが、突然入ってきたシュウにカレンも仰天した。

「きゃっ、きゃあああああああああっ！！　こっ、ここここれは、そっ、そそそのおおおおおお！！」

パニックになりつつあるシュウとカレンの傍ら、サラは舌打ちをする。

「チッ・・・、する前にバレたか」

「サラっ、おまえ！　ふざけんのもいい加減にしやがれっ！！」

シュウはカレンの上からサラを突き飛ばすと、慌ててカレンを抱き起こした。

カレンの手を引き、自分の部屋へと向かう。

「あっ！！　ちょっと兄貴っ、カレン返してよ！！　何すんの！？」

「何すんの、じゃねえっ！！　おまえといちゃ、カレンが危ねえん

だよ!!　親父似にも程がある!!　まじ信じらんねえっ・・・!!」

シュウがカレンを連れて自分の部屋のドアを閉め、鍵を閉め、さらにドアの前に本棚を持ってきて塞ぐ。

「ちょっ・・・!?　ちょっと、開けてよ!!　兄貴っ!!」

ドアをどんどんと叩いて暴れたサラだったが、シュウはてんで無視。

もういっそドアを破壊してやろうかと思ったサラの前に、リン・ランがやって来て言う。

「兄上ーっ」

「一緒に寝たいのだーっ」

リン・ランに見つかってしまった。

そうなるとカレンを取り戻したところで、したかった行為を続行することは難しく。

（くそぅ・・・、諦めるしかないか）

サラはがっくりと肩を落とし、リン・ランの腰を抱いて自分の部屋へと入っていった。

（ダメだ、やっぱ諦められん）

サラがそう思ったのは、翌朝のこと。
皆と共に朝食を終え、サラは自分の部屋へと戻った。

（しかし、今からどうすれば・・・・・・）

ベッドに寝転がり、考えるサラ。
ベッド脇の置時計が目に入る。

（7時3分前か。自分の身体に戻るまで、あと23分。・・・・・・なんとかなるんじゃね!?）

サラはがばっと勢い良く起き上がり、自分の部屋から飛び出た。
階段を少し降り、1階のキッチンの方へと向かって叫ぶ。

「カレン、アタシの部屋に来てえええええええ!!　服のボタン取れたあああああああっ!!」

キッチンでシュウと共に魔法学校へ行く双子と三つ子の弁当作りをしていたカレンは、サラの声を聞いてシュウの顔を見た。
シュウが溜め息を吐いて言う。

「まったくあいつは女だってのに、ボタンも自分でつけられないのか。・・・いいぜ、カレン。行ってボタンつけてやれ」

カレンは承諾して、サラの部屋へと向かった。
サラの部屋に入るなり、ベッドに押し倒される。

「へっ!?　サ、サラ!?」

「見て、カレン！」と、サラがベッド脇の置時計を指す。「今は7時！　入れ替わり終了まで、あと20分！　ぎりぎり何とかなるかも！」

「えっ！？　ちょっ、サラ――」

カレンの唇が塞がれた。

このとき、ベッド脇の置時計が差している時刻はAM7時。

入れ替わったときの時刻は、AM7時20分だった。

だが、そのとき壁の掛け時計が差していた時刻はAM7時30分だった。

そして現在、壁の掛け時計はAM7時20分を差していた。

「あっ」

と、キッチンで朝食の後片付けをやっていたミラが声をあげた。

シュウはぱちぱちと瞬きをし、弁当作りの手を止めてミラの顔を見た。

「どうした、ミラ？」

「今さら思い出した。昨日、スーパーで電池買おうと思ってたんだ」

「電池？」

「サラの部屋の置時計がね、電池切れで止まりそうだったのよ。もう止まっちゃったかも」

「ふーん？」

時計と聞き、シュウはキッチンの時計に目をやった。
ただいまの時刻、ＡＭ７時２５分。

（昨日の朝の時点でサラの部屋の置時計は遅れてたのか。入れ替わったとき、７時２０分だったもんな。あれ、じゃあ、いつ戻るんだ？　・・・まあいいか、そろそろだよな）

サラの部屋の中。
突然サラに押し倒されて動揺したカレンだったが、今ではすでにサラの腕の中で骨抜きにされている。

「さぁーてと」と、サラがにやりと笑う。「いよいよ後半レッツゴオォォォだぜ」

「カっ・・・カモオォォォォンですのよおおおおおっ」

「絶対半端なく痛いけど我慢してね。えーと・・・」

元に戻るまで、あと何分だろう？

と、もう一度置時計に目を向けたサラ。
数秒後、眉を寄せる。

「・・・あ、あれ？」

「？　どうしたの？」

「いや、その、時計が・・・・・・」

ＡＭ７時５分のまま止まってる。

そうサラが気付いたとき、壁の掛け時計の針はＡＭ７時３０分を差した――。

第２９話　入れ替わり　～後編～（後書き）

昨日２１時３０分頃メールくださった読者さまへ。

えぇっ！？

はっ、犯人誰ェェェェェ！？

その例の台詞、これからも出てきちゃうかと思います♪

第３０話　一歩前進

ＡＭ７時３０分。
シュウとサラの中身入れ替わり終了につき、シュウとサラは１日ぶりに自分の身体へと戻った。

自分の部屋にカレンといたサラは、一瞬にて視界がキッチンに変わってぱちぱちと瞬きをした。
どうやら魔法学校へと通う双子と三つ子の弁当作りの途中だったらしいシュウ。
自分の身体に戻ってきたサラの視界には、おかずを詰めている途中の弁当箱が並んでいた。

「あれ、戻っちゃったよ」

近くで朝食の後片付けをしていたキラとミラが振り返る。

「あ、戻ったの？」と、ミラ。「中身、お兄ちゃんじゃなくてサラ？」

「うん、アタシ」

「そう」

「・・・なーんか、やばいとこで戻っちゃったかも？」

サラがそう言った次の瞬間、シュウの声がキッチンまで響き渡ってきた。

それまでキッチンで魔法学校へと通う双子と三つ子の弁当作りをしていたシュウは、一瞬にて変わった目の前の光景に絶句した。

身体が硬直する。

自分の腕の中に、一糸まとわぬカレンがいて。

しかも、確認しなくても分かるが、自分もパンツすら身につけていない。

「時計？　時計がどうしたの？」と、カレンがベッド脇の置時計に顔を向ける。「あら？　やだっ、止まってるのですわっ！　今何分なのかしらっ・・・！？　シュウとサラが入れ替わったのって、たしか２０分よねえっ？」

「サ・・・、ササササササ・・・」

「それ、ゴキブリが動くときの効果音みたいで嫌ねえ」

「ササササッ・・・」

シュウの顔が、耳が、首が真っ赤に染まっていく。

次の瞬間、屋敷中にシュウの声が響き渡っていった。

「サッ、サラァァァァァァァァァァァァァァっっっ！！！」

サラを呼んだ。

シュウの身体が、サラを呼んだ。

（――と、いうことは、つまり・・・・・・！？）

シュウに続き、カレンの顔が、耳が、首が真っ赤に染まっていく。
さらにシュウの声に続き、カレンの声が屋敷中に響き渡る。

「いっ、いやあああああああああああああああっっっ！！！」

「ごっ、ごめんっ！」

シュウは慌ててカレンの上から避け、カレンに背を向けて横臥した。
胸を両腕で隠し、カレンもシュウに背を向けて横臥する。

「・・・って、何でオレが謝ってんだよ！　わっ、悪いのはサラじゃねーかっ！」

そのサラの声が、ドアの向こうから聞こえてくる。

「カレン、兄貴ー、大丈夫ー？」

「だっ・・・、大丈夫なわけねえだろっ！！」ドアの方を見、シュウが怒鳴る。「おまえふざけんのもいい加減にしろ！！」

「だって――」

「だってもクソもねえっ！！　カレンにこんなことしやがって、何考えてんだよ！！」

完全に激怒してしまっているシュウの声に、カレンは背を向けたまま慌てて口を挟んだ。

「シュ、シュウ！　サラは悪くないのですわっ！　サラを怒らないでっ・・・！」

「庇わなくていい、カレン」

「ほっ、本当なのよシュウっ・・・」

「いいから早く服を着ろ」

「本当なのっ、本当――」

「服を着ろ！！」

カレンはベッド脇に落ちている服を拾い上げ、慌てて身につけた。
シュウの声が怖い。

「き・・・、着たわ」

「じゃあ、自分の部屋行って仕事行く準備してろ」

「え、ええ」

カレンはドアへと歩いて行った。
ドアノブに手を掛け、一度立ち止まる。

「・・・シュウ、怒らせてごめんなさい。でも本当にサラは悪くないの。あたくし、嫌ではなかったから」

嫌じゃなかった？

シュウは眉を寄せて、ドアのところにいるカレンの背を見つめた。
カレンが続ける。

「むしろ、嬉しかったのですわ。サラはそれを知っていたから・・・。知っていたから、あたくしのために行動に出てくれたのですわ」

「・・・嬉しかったって、何でだよ」

シュウの質問に対し、少しの間カレンが戸惑って口を閉ざした。
そのあと、カレンが思い切った様子で告白した。

「だってっ・・・、だってあたくし、あなたのことが好きなんだもの」

カレンが部屋から出て行く。

「・・・・・・。え?」

あなたのことが好きなんだもの?

カレンの告白に、まるで実感のわいていないシュウ。

あなたってオレ?
オレしかいねーよな、この部屋に。

いや、オレのわけねーだろ。
カレンがオレのこと好きなわけねーだろ。

あれ、でもオレしかこの部屋にいねーよな。

じゃあ何、カレンがオレのこと好きだと？

んなわけねーだろ。

自惚れてんなよ、オレ。

あいつ、誰のこと好きだって言ったんだ？

あ、オレだっけ？

いや、ありえねーだろ。

いい加減にしろよ、オレ。

大丈夫か、オレ。

病院行けよ、オレ。

病院はやっぱカレンのじーさんのとこかなあ。

カレンと入れ違いに、サラが部屋の中へと入ってきた。

仰向けになって思案顔をしているシュウの顔を見下ろして訊く。

「アーニキっ！　カレンの気持ちを知った気分はどーお？」

「なあ、サラ」と、シュウがサラに顔を見て訊く。「病院行くならさ、やっぱカレンのじーさんがいるとこ行くべきだよな」

「は？」

「ついでに挨拶してくるから、手土産は何がいいと思う？」

「急に何言ってんの？」

「オレどーも、頭ちょっとおかしいみてえ。カレンがオレに好きって言ったんだけどさ」

「言ったね」

「そんなわけねーのに、オレ、カレンに好きって言われた気がしてさ。いや、言われたんだけど、言われたわけねーし。カレンがオレのこと好きなわけがないのに、好きって言われてさ。あれ、何かすげー言葉おかし――」

ドカッ！！

「――グハッ！！」

サラのカカト落としがシュウの腹に直撃したが故に、シュウの言葉が遮られた。

腹を抱えて悶えるシュウに、サラが驚愕した様子で言う。

「あっ、兄貴っ・・・！　ちょっとまじ本気で病院行って来いっ・・・！」

「おっ、おう・・・！　いっ、行かねえとヤベえ痛さだぜっ・・・！　おっ、おまえカカト落としが親父のように見事になってき――」

「頭を診てもらえって言ってんだよ、アタシは！！」サラがシュウの言葉を遮った。「あー、びっくりした！　まじびっくりした！　何で！？　何ではっきり好きって言われたのに、まだ分かってないの！？　カレンは兄貴のことが好きなんだってば！！　他の誰でもなく、カレンは兄貴のことが好きなんだってば！！」

「そっ、そんなわけねーだろっ・・・！　カレンがオレなんかのこと好きなわけが――」

ドスッ！！

「――グエェっ！！」

今度は高く飛び上がったサラのダイビング・ボディプレスを胴体に食らい、シュウの言葉が遮られた。

シュウの身体の上、サラが増して驚愕した様子で訊く。

「まだ言っちゃう！？　兄貴、まだ言っちゃう！？」

今度は腕十字を食らうシュウ。

「いでででででっ！！　ちょっ、おま、ひっ、肘が脱臼すっ・・・・・！！　分かった分かった分かった！！」掴まれていない方の腕でベッドのマットをばんばんと叩き、降参したシュウ。「言わねえよ、もう！！　言わねえからっ！！」

サラに解放してもらったシュウは、とりあえず布団の中で服を身につけた。

（カレンはオレのことが好き。カレンはオレのことが好き。カレンはオレのことが好き）

その事実を飲み込もうと、シュウは何度も同じ台詞を頭の中で繰り返す。

そしてじわじわと実感していく。

（あれ・・・、も、もしかして、カレンってオレのこと好きだからオレの弟子続けてるとか・・・！？　も、もしかして、オレに妹扱

いされて機嫌悪くなるのって、オレのこと好きだからとか!?　もしかして、この間の舞踏会、親父とじゃなくてオレと踊りたかったとか!?　だからオレじゃなくて親父にドレス買ってもらってたのか!?　オレと踊るために!?　オレに見せたくて!?　オレのためにあんなに可愛かったのか!?　ていうか、もしかしなくてもオレのことが好きだから、中身入れ替わったサラに手ぇ出されても嫌じゃなかったのか!?　むしろ嬉しかったんだっけ!?　まじか、オイ!!）

今までのカレンの言動を次から次へと思い出し、シュウははっきりと実感する。

「サッ、サササササ・・・」

「ゴキブリか」

「サ、サラ!!」

「何」

「カっ、カカカ、カレンがっ・・・!」シュウの顔が見る見るうちに赤く染まっていく。「カレンが、オレのこと好きなんだってええええええええええええっ!!」

「だからそうだってば」と、サラが溜め息を吐く。「やっと実感わいたわけ?」

「わ、わ、わわわわいたっ!!　わっ、わわわいたぜ、オレ!!」

「で、ご感想は?」

「かっ、感想!?　え!?　かかか、感想っ!?」

感想はどうかと訊かれたシュウは、ぴたりと動きを止めて考えた。

数秒後。

「うわ・・・」と、目を丸くする。「オレ、スゲエェ嬉しい・・・！」

「んじゃあ、兄貴もカレンのこと好きなんだ」

「そっ・・・、そこまでは分かんねえよっ・・・」

「何で」と、今度はサラが目を丸くする番だった。「そんなに喜んでんのに」

「だってやっぱりおまえたち妹に対するものと似たような感じが・・・・」

「ハァ!?」

と、サラの声色が変わったとき。

「いいのよ、サラ」と、仕事へ行く準備を終えたカレンが部屋に入ってきた。「シュウが嬉しいって言ってくれたなら、あたくし的には一歩前進なのですわ」

そう言ってカレンが嬉しそうに笑う。

「ええー?　本当にいいの?　カレン」

「いいのよ、サラ。あたくしも思い切って告白してみたらスッキリしたし、シュウにとって迷惑でないのなら・・・」

「めっ、迷惑だなんてとんでもねえっ！！」と、シュウが慌てたように口を挟んだ。「ほっ、本当まじで嬉しいから、オレっ・・・」

だからさ、それってさ、カレンのこと好きな証拠じゃん？
カレンの気持ちに気付いたと思ったら、今度は自分の気持ちに気付かないのかよ。
バカ兄貴だね、まったく。

サラは呆れて溜め息を吐いた。

「でもまあ、いっか・・・」サラはそう呟いたあと、カレンの嬉しそうな顔を見て微笑んだ。「一歩前進、だしね！　カーレンっ♪　さあっ！　甘いキッス、優しい口付け、夢の接吻、情熱のベーゼへレッツゴオォォォォ！！」

「え！？」と、動揺したのはシュウである。「なっ、何言ってんのおまえ！？」

「ハァー？　何、嫌だっていうわけ？」

「オ、オレじゃなくてカレンがっ・・・！」

「カレンが嫌なわけないじゃん。ねえ？」

と、サラがカレンに顔を向けると同時に、シュウもカレンに顔を向けた。

カレンがシュウの顔を見上げ、頬を染めて言う。

「カっ・・・カモオォォォォンですのよっ・・・！」

カレンに続き、シュウの頬も染まる。

サラはカレンとシュウの顔を交互に見ると、笑いながらドアの方へと向かって行った。

「ごめんごめん、アタシ邪魔かあ。そろそろ仕事行く時間だから、制限時間は3分ね。ドアが閉まったら、ハイどーぞっ♪」

サラが部屋から出て行き、ドアが閉まった。

カレンが俯きがちに、ベッドに腰掛けているシュウの前まで歩いて行く。

やって来たカレンを脚の間まで引っ張り、シュウは呟いた。

「な・・・、何て幸せな奴なんだっ、オレ」

カレンが目を閉じて顔を上げる。

シュウはカレンの頭を引き寄せて有難く口付けた。

第３１話　落ち込んだ双子

６月末。
季節は梅雨に入り、外では雨が降りしきっている。
自宅リビングの中、ほぼ同時に仕事から帰ってきたリュウとサラはソファーに座って晩酌をしていた。

「ねえ、親父。春だねえ」

「ああ、サラ。春だな」

リュウとサラの目線の先には、テレビの前に胡坐を掻いて座っているシュウの背。

「本当、春だよねえ、親父」

「本当、春だぜ、サラ」

「シュウ（あれ）の」と、リュウとサラは声をそろえる。「脳内」

そんな背後の会話はシュウに耳には入っていない。
膝の上に座らせているカレンの爪を整えてやって、ご機嫌そうな声が聞こえてくる。

「でーきたっ！　よしよし、これで怪我しねーなっ♪」

ここのところ、シュウはずっと機嫌が良い。
６月の半ばにカレンの気持ちを知り、カレンとキスして以来ずっ

とだ。

「それにしても、何だよこの可愛い手。こんな可愛い手、子供以外でなかなか見たことねえ。ああ・・・、たまらなく可愛いぜ・・・」

と、カレンの小さな手を見つめてうっとりとした様子のシュウ。

そんなシュウを指し、サラは小声で言う。

「親父、親父。兄貴の奴、あれでも自分がカレンのこと好きだってことに気付いてないんだよ」

「まじかよ、オイ」と、リュウも小声になる。「あいつ最近、カレンの頭から爪先、中身まで全て可愛い可愛い言ってるけど、惚れた欲目だってことに気付いてねーのかっ・・・」

「最近の兄貴ってさ、ママを見る親父みたいだよね」

「ばっ・・・！　何言ってんだよっ・・・！？　俺がキラを見るときなんて、もっとうっとりしてんぞ！？」

「・・・・・。そうだけどさ」

ひそひそと話しているリュウとサラに向かって、シュウがくるりと身体の向きを変えた。

「見て見て、親父、サラ」と、シュウがカレンの手首を持ち、カレンにバンザイさせて言う。「かっわいいだろ、このカレンの手～♪小さい子供みてえ～っ♪」

にこにこと笑っているシュウ。

その膝の上のカレンの顔を見ると、複雑そうな表情をしていた。

（あたくし、何でこんなに子供扱いされてるのかしら・・・）

シュウに抱っこされるのは嬉しいが、やっぱり何かが違う。

（あたくしにとってシュウは恋する相手だけれど、シュウにとってのあたくしはやっぱり妹と変わらないのかしら）

そんなことをカレンは感じている。

まあ、それは好きだと告白する前からのことだが。

でも、以前に増してシュウが構ってくれるようになったのも事実だ。

（よく構ってくれるようになったのは、あたくしの気持ちを知って、ただ単に嬉しいから？　それだけよね？　あたくしのこと恋の対象として好きとかそういんじゃないわよね）

じゃあ、シュウがこっそりおやすみのキスを毎晩してくれるようになったのは何故だろう。

カレンはますます疑問が浮かんでしまう。

（あたくしが毎日どきどきしているおやすみのキス・・・。それも妹としてる感覚だっていうのかしら。たしかに、いつも軽いキスよね。サラがシュウの身体になったときは、もっとこうラブラブな恋人同士がするような濃厚なキスだったし・・・。やっぱりあたくしとのキスは、妹としている気分なのかしら・・・？）

カレンは頭を後ろに傾け、シュウの顔を下から見つめた。

（・・・ああもう、考えるのやめましょう。考えれば考えるほど分からなくなってくるのですわ。それに、今のあたくしはこれだけでも幸せを感じているのだから。あのとき思い切って告白して良かった。迷惑がられなくて良かった。喜んでくれて良かった・・・）

シュウがカレンに目を落とし、頬を指でつんつんとしながら訊く。

「何だ、人の顔じっと見て。キスか」

「カモオォォォォン！　ですのよ」

「やめろよ、カレン。おまえのその台詞のせいで、一部の読者さまの腹筋が破壊された挙句に窒息死してるらしいぜ」

「知っててワザと言ったのですわ」

「ちょっと楽しいしな」

「ええ」

シュウがカレンに、ちゅっと音を立ててキスをする。

リュウは溜め息を吐いて言った。

「シュウおまえ、女に現抜(うつつ)かして叶えるべき目標忘れんなよ」

リュウの目にはカレンがシュウに夢中になっているというよりも、シュウがカレンに夢中になっているように見えて。

シュウとカレンが仲良くやってくれること自体は良いのだが。

夢中になりすぎて、シュウの目標である『親父を超えること！』というものが忘れ去られているような気がしてならない。
シュウにさらさら抜かされる気はないリュウだが、シュウにその目標を忘れてほしくはない。

そしていつかは、あくまでもいつかの話だが、超えるとは言わずとも並んでほしいと思う。
男の子が産まれたら、このリュウに継ぐ超一流ハンターに育てるのが夢だったから。

シュウがリュウの顔を見て口を尖らせる。

「べ、別に忘れてねえよっ・・・！　いつでも母さんに夢中な親父に言われたくねえってのっ・・・！」

「俺はキラに夢中になる分、強くなるからいいんだよ」

たしかにリュウは、今年で３９歳だというのに未だに強くなり続けているようなバケモノだ。
その一番の原因がキラ、次に来るのが娘たちだろう。
それらを守るために、リュウは強くなっている。

「・・・ま、忘れてねーならいーけどよ」

「おう」

「ところでよ、シュウ」

「なんだよ、親父」

「おまえ、リン・ランの前じゃカレンと何もないフリしてるつもりだろうが、リン・ランはおまえの異変に気付いてんぞ」

「へっ？」動揺したシュウの声が裏返った。「う、嘘っ、何でっ・・・！？」

「まー、気付くだろうねー」と、サラが口を挟んだ。「兄貴、リン・ランの前でカレンのこと構わなくても、カレンを見る目がこの間までと違うもん。自然と目で追ってるし。カレンも、リン・ランとここ最近気まずそうだよね」

「え」と、シュウは再びカレンに目を落とした。「な、何、そうなのかっ？」

「え？　えとっ・・・」カレンがシュウから目を逸らしながら言う。「す、少しっ・・・」

「なっ・・・なぬぁー！？　お、おいカレン、リン・ランと喧嘩になったりしてねえっ？」

「ええ、大丈夫よ。喧嘩にはなっていないのよ。喧嘩ではなくて・・・、リンちゃんランちゃんがあたくしのせいで何だか落ち込んだ様子で・・・・・」

「いや、間違ってもカレンのせいじゃないけどさ」と、サラ。「兄貴、ちょっと最近リン・ランのこと放っておきすぎなんじゃない？」

「え・・・・・・」

言われてみれば、そうだったかもしれない。
ここ最近、リン・ランの笑顔を見ていない気がする。

シュウの様子を見たカレンが膝の上から避けると、シュウはリン・ランの部屋へと向かって行った。

双子の三女・リンと四女・ラン。

母親(キラ)譲りのガラスのような美しい銀髪と、大きな黄金の瞳が彼女たちの自慢。

チャームポイントは何かと訊かれたら。「兄上(シュウ)とおそろいの黒猫の尾っぽ」だと答える。

現在、満１４歳で魔法学校水学部３年生。
その並外れた魔力から、６年生のトップもびっくりの優等生。

身長は次女・サラの次に高い１６５ｃｍ。
身長の高さは父親(リュウ)似なのだろうが、口調・性格などは母親(キラ)似。
たまに激しく天然バカなところには困ったもの。

ブラコン歴１０年以上。

そんな彼女たちの部屋の中。
ここ最近、頻繁に深い溜め息が漏れている。

「はぁ・・・」

と、リンが溜め息を吐き、

「はぁ・・・」

と、ランも溜め息を吐く。

只今ベッドに寝転がり、一緒にシュウの隠し撮り写真集（カレン集団リンチ事件の犯人からもらったもの）を見ているのだが、普段はあまり見ることのできない仕事中のシュウの姿に恍惚として溜め息を吐いているわけではない。

「兄上、最近カレンちゃんと仲良しだな・・・、ラン」

「うむ、とっても仲良しなのだ・・・、リン」

「兄上、最近わたしたちのこと忘れてる気がするのだ・・・」

「うむ、とっても忘れられてる気するのだ・・・」

そんな心配が、リン・ランに溜め息を吐かせていた。
同時にぽろりと零れてきた一粒の涙を手の甲で拭う。

「何故だと思う、ラン」

「何故だと思う、リン」

「わたしたちが、悪いことしたからかっ？」

「わたしたちが、兄上とサラ姉上の中身が入れ替わったときに、兄上の身体をいじくったからかっ？」

「あのとき、いじくりまくったからかっ？」

「あのとき、楽しみまくったからかっ？」

「でも、わたしたち的に一線は越えてないぞっ」

「うむ、わたしたち的に我慢したぞっ」

「それにしても、あのとき・・・」と、リン・ランが声をそろえる。

「楽しかったぞー・・・・・・」

当時を思い返し、うっとりと恍惚するリン・ラン。

その後方――ベッドの足元には、少し前から部屋に入ってきていたシュウが顔を引きつらせていた。

「・・・・・・コラ」

とシュウの声で、リン・ランが驚倒して飛び上がる。

「ふにゃあああああああっ！？」同時にくるりと振り返り、シュウの顔を目を丸くして見る。「あっ、兄上っ！？　いっ、いつからそこに！？」

「少し前からだよ。おまえたちオレの中身がサラになってたとき、オレの身体を随分といじくって楽しんだようだな」

怒ったシュウの顔を見て、リンとランが泣き出す。

「ふっ・・・、ふにゃあああああん！　ごめんなさいなのだあああ

ああああ！」

わんわんと泣かれ、シュウは脱力してしまう。

苦笑しながら双子の頭を撫でてやる。

「ああもう、泣くなよ。兄ちゃん怒ってねーから。おまえたちの一線が兄ちゃんの中の一線と同じだと信じてるぜ・・・」

「兄上えええええええっ！！」

リン・ランがシュウにしがみ付いた。

リン、ランの順に言う。

「あっ、兄上っ、最近わたしたちのこと忘れてないかっ？」

「あっ、兄上っ、最近カレンちゃんのことばっかり見てないかっ？」

ギクッ

としてしまったシュウは、慌てたようにリン・ランの頭を胸元に抱き締めた。

「そんなことねえよ。兄ちゃん、おまえたちのこと忘れたことなんかねーし」

「ほ、本当にっ？」

「本当、本当。え、えと、うーん・・・、そ、そうだ、リン・ラン！」シュウは双子から深く疑われないうちに話を逸らした。「今度、兄ちゃんと一緒に出掛けようぜ！」

「えっ？」と、リン・ランがシュウの顔を見上げる。「兄上とお出掛けっ？」

「ああ。最近、オレとおまえたちだけで出掛けてなかっただろ。行きたいところとか日付とか決めておけよ。兄ちゃん、その日の分の仕事は前日までに終わらせるから」

リン・ランの瞳が輝き、満開の笑顔が咲いた。

「にゃあああああっ！　兄上とお出掛けなのだ～～～っ！」

ベッドの上、リン・ランが抱き合って小躍りする。

（ああ・・・、やっぱり）

シュウの胸が痛んだ。

（リンとランの笑顔、久しぶりに見た。オレが知らないうちに、落ち込んでたんだな・・・）

シュウはリン・ランの額にキスしてやったあと、部屋をあとにした。

ドアの近くには、カレンとサラの姿があった。

「コラ」と、シュウはカレンとサラにデコピンする。「立ち聞きか」

「別に、そういうつもりじゃないよ」と、サラが額を擦りながら言う。「リン・ランがちょっと心配でさ。んでも、元気出たみたいだね」

「ああ」

シュウは頷いたあと、機嫌を窺うようにカレンの顔を見た。

カレンが笑って言う。

「あたくしのことは気にしないで、リンちゃんランちゃんとお出掛けしてきてよろしいのですわ」

「おう・・・、サンキュ」

そう言って微笑んで、シュウはカレンの唇にキスした。

リン・ランの『兄上とお出掛け』は、次の土曜日に決定された。

第３１話　落ち込んだ双子（後書き）

昨日の１９時頃メールくださった読者さまへ。

ちょ・・・、「腹筋ブレイカー姫百合」て（笑）

私の腹筋をブレイクしないでください。

第３２話　長男の脳内

7月――季節は梅雨だが、この日は梅雨の中休みで外には陽が射していた。

双子のリンとランは自宅玄関にわくわくとして立っていた。

この日のために用意した、色違いのワンピースを着て。

玄関には、見送りにリュウとミラ、サラが来ていた。

「そーんな可愛いカッコしてどうしたの～？」

サラが訊くと、リンとランが声をそろえて答えた。

「兄上とお出掛けするのだっ♪」

「そう、良かったね」

と、ミラとサラは微笑むが。

その傍らにいるリュウは、本日リン・ランをシュウに独占されてしまうことになって不機嫌だ。

「リン・ラン、父上も今日午後からオフだぜ？」

「ごゆっくりお休みくださいなのだ、父上♪」

「・・・・・。おう・・・」

リュウ、傷心。

「ご愁傷様、親父」

サラが短く笑ってから数秒後。
シュウが2階から降りてきた。

「兄上っ」

シュウの姿を見たリン・ランの尾っぽが嬉しそうに揺れる。

「おっ？　可愛いじゃん、おまえら」リン・ランの頭を撫でてやり、シュウは見送りの家族たちに振り返る。「晩ご飯までには帰ってくるから。んじゃあ、いってきます」

階段の上から眺めているカレンをちらりと見上げたあと、シュウはリン・ランと共に自宅を後にした。
リュウが溜め息を吐く。

「リン・ランは何でブラコンなんだ・・・」

「元気出して、パパ」と、ミラがリュウの首に手を回す。「私がいるわ。私、パパ以外のお嫁さんになんかならないもん♪」

「ミラ・・・・・」リュウがミラを抱き締め、ミラの頬にキスした。「今夜パパと一緒に寝るか」

「――ブハッ！」

ミラ、鼻から鮮血噴射。
リュウの腕の中、ミラの上半身が後方へと倒れる。

「もしもし、お姉ちゃん。本当にバカキャラにされるよ」サラはそうミラに声をかけるが、ミラの反応なし。「ちょっと、鼻血吹かせた張本人。びびってないでお姉ちゃんに治癒魔法かけてよ」

「・・・お、お、おう」

リュウが仰天しつつミラに治癒魔法をかけてやると、ミラが上半身をむくりと起こした。

「あんもう、パパったら・・・！　色々想像しちゃったじゃないっ・・・！」

「お、おう、悪い・・・」

「えーと、それで？」と、ミラがハンカチで鼻の下の血を拭いながらサラを見た。「お兄ちゃんとリン・ランは、どこにお出掛けするって？」

「うーんと？」

と、サラが階段の上のカレンに問いかけるように見ると、カレンが階段を降りてきながら答えた。

「えーと、『ネズミー通り』？　と、いうところへ行くらしいですわ。どんなところなのかしら？」

「ああ・・・」

と、リュウとミラ、サラは声をそろえた。

猫モンスター大好き『ネズミー通り』ね・・・。

葉月島葉月町にある『ネズミー通り』には、猫モンスターが好む店がずらりと５ｋｍに渡って並んでいる。
キラが大好きなところであるが、キラの性格を良く継いだリン・ランも大好きなようであった。
名前を裏切らないその通りには、ネズミに関する店がたくさんだ。
ほとんどの店は午前８時には開店するため、朝から猫モンスターやハーフで賑わっている。

左腕をリンに、右腕をランに引っ張られながら、シュウは『ネズミー通り』を歩いていた。

（オレは別にネズミが好きじゃねーから久しぶりに来たけど・・・、相変わらず猫モンスターでごちゃごちゃしてんな。どこの店もネズミだらけで、カレン連れて来てたら悪い意味で絶叫してたかも）

シュウがリン・ランの顔を見ると、他の猫モンスター同様に瞳をきらきらと輝かせていた。
まだ通りを歩いているだけだというのに、リン・ランがぴょんぴょんと飛び跳ね始める。

「兄上、兄上。楽しいなっ♪」

「兄上、兄上。嬉しいなっ♪」

「そうか、良かったな。ところでおまえたちの目にはネズミが一体どう見えて――」

「兄上、兄上」リン・ランがシュウの言葉を遮る。「ネズミー映画見るのだっ！」

「・・・おう」

シュウはリン・ランに引っ張られ、ネズミー映画館に入った。
他の猫モンスター同様にシュウとリン・ランもビールを買い、ネズミー映画を見る。
ネズミーの映画を見るときは頑丈なシートベルトを着用。

「・・・・・。面白いか、リン・ラン」

リン・ランが映像に夢中になりながら、頷いて返事をする。
シュウからすれば、ただネズミが走り回っているその映像のどの辺が面白いのか謎だ。

シートベルトを着用しなければいけないというところも謎であったが、リン・ランや周りの猫モンスターたちを見れば納得できた。
今にもスクリーンに向かって飛び出しそうである。

（猫モンスターたち、すげー興奮してんな。カレン連れて来てたら怯えてたかも・・・）

3時間に渡りネズミー映画を見終わると、時刻はちょうど昼時。
シュウはリン・ランにネズミーバーガーショップへと連れて行かれた。
ネズミ型にくり抜かれた木製テーブルは、正直使いづらい。

「・・・コラ」と、シュウは苦笑する。「3匹並んで座ったら狭いだろ」

リン・ランと向き合う形で座ろうと思っていたシュウだったが、両脇にはリン・ランがべったりだ。

シュウの話を聞いているのか聞いていないのか、リン・ランがフライドポテトネズミ風味をシュウの口へと持って行く。

「はい、兄上♪」

「はい、あーん♪」

「こ、ここでかよっ・・・」

シュウが周りの目を気にしつつ口を開けてリン・ランに食べさせてもらうと、リン・ランが嬉しそうに笑った。

そしてまたシュウに食べさせてあげて、きゃっきゃとはしゃぐ。

はしゃいだリン・ランを見て微笑みつつ、シュウは思う。

(はい、あーん・・・か。・・・カ・・・、カレンにやってみてえな・・・なんて・・・)

リン・ランがにこにこと笑いながら訊く。

「兄上、兄上、おいしいっ?」

「おう、なかなか」

「兄上、兄上、タルタルソースたっぷりネズミバーガーどうぞなのだ♪」

「おう、サンキュ。何コレ食用ネズミ肉？」

「うむ！」

「へえ」

ぱくりと一口ネズミバーガーを齧ってみたシュウ。

（ん？　なんだ、美味いじゃん。これならカレンも食えるかなあ）

そんなことを考えていたシュウの傍らでは。

シュウの口元を見たリン・ランがにやりと笑った。

（待ってましたなのだ・・・！）

リンとランがシュウの首に巻きついた。

「んもう、兄上ってば」

「ん？」

「口の端にソースついてるのだ♪」

シュウの口の端を、リンとランがぺろりと舐める。

「ばっ・・・！　な、舐めるなよ、おまえたちっ・・・」

シュウ、赤面。

（一瞬カレンを想像したオレがいるっ・・・！）

リン・ランがおかしそうに笑った。

「兄上ってば、真っ赤なのだ」

「兄上ってば、可愛いのだ」

「・・・お、おいっ？」

リン・ランに口の端を舐められ続け、シュウの耳や首まで赤く染まっていく。

（カっ・・・、カレンを想像してるオレがいる！　カレンを想像しまくってるオレがいる！　カレンにこんなことされたらオレどーしよ・・・！　どーしよ、どーしよ、どーしちゃう！？　どーしちゃうも何もされちゃうよ！？　おとなしくされちゃうよオレ！？　かっ・・・帰ったらやってもらおうかなあー・・・・・・なぁーんて、変態かオレはっっっ！！！）

ゴスッ！！

とテーブルに自ら頭突きをして興奮を静め、シュウはぎょっとしているリン・ランの顔を見て言う。

「さっさと食って、次に行くぞ」

「はっ・・・はいなのだ、兄上っ・・・」

シュウと一緒にあちこち店に入って遊んではしゃいで、リン・ランから笑顔が溢れる。
そんな妹たちを見て、シュウは微笑まずにはいられない。
可愛い妹の笑顔を見れることは、とても嬉しいことだから。

でも、シュウの頭からカレンが離れることはなかった。

ネズミーゲームセンターで猫パンチングマシーンをしているときもクレーンゲームでネズミのぬいぐるみを取っているときも、ファッションビル・ネズミーでリン・ランに服やアクセサリーを選んであげているときも。

シュウの頭には、常にカレンが思い浮かぶ。

(なーんでオレ、カレンのことばっか考えてるんだろ)

リン・ランとさんざん遊んだ帰り道、シュウはそんなことを考える。
でも答えは出ない。
自分の気持ちに気付かない。

(カレン、今日オレがいなくて何してたかな。サラも仕事だったし。母さんやミラと一緒に家事でもしてたのかな。・・・あいつ今朝オレの部屋に入ってきて、何時ごろに帰ってくるのか訊いてきたっけ)

葉月町を出て自宅までの一本道になったとき、シュウは立ち止ま

った。

「？　兄上？」

と、顔を覗き込んで来るリンを左腕に、ランを右腕に抱っこする。

「兄ちゃんが家まで抱っこして行ってやろう」

「えっ？」

とぱちぱちと瞬きをしたあと、リン・ランがはしゃいでシュウの首に巻きついた。

シュウの歩く速度が速くなる。

（カレン、オレのこと待ってるかな・・・）

シュウは自宅へと急いだ。

シュウとリン・ランが夕刻に帰宅すると、ミラが出迎えてくれた。

「おかえりなさい、お兄ちゃん、リン・ラン。楽しかった？」

「ただいまなのだ、ミラ姉上」と、リン・ランが声をそろえる。「とっても楽しかったのだ～っ♪」

「そう、良かったわね」

そう言ってミラは、言葉通りの笑顔を見せるリン・ランに微笑む。

「いっぱい遊んだら、お腹すいたのだ」

「もう少しで晩ご飯できるから、キッチンに行ってなさい」

「はいなのだ、ミラ姉上！」

と、リン・ランがぱたぱたとキッチンへと駆けて行く。

リン・ランの姿が見えなくなったあと、ミラはシュウの顔を見た。

「お兄ちゃん、カレンちゃんならお部屋にいると思うわよ？」

と、教えてやる。

シュウがカレンのことを気にしているのは分かっていたから。

「おう、そうか。サンキュ」

ミラの頭にぽんと手を乗せたあと、シュウは2階へと続く緩やかな螺旋階段を駆け上がって行った。

真っ先にカレンの部屋を覗いてみたが、カレンの姿はなし。

（あれ、どこ行ったんだろ）

首を傾げながら、シュウはとりあえず先に着替えようと自分の部屋に入った。

「・・・・・・コラ」

と、シュウは自分のベッドの方を見て微笑む。

そこには、カレンが眠っていて。

シュウがベッドの淵に腰掛けると、カレンがゆっくりと瞼を開けた。

「・・・ん・・・？」瞼を擦り、カレンがシュウの顔を見る。「・・・あ・・・、おかえりなさい」

「ただいま。なーにオレのベッドで寝てんだ？」

「いつの間にか眠ってしまったのですわ」

そう言いながら、カレンが身体を起こした。

「なあ、カレン。今日少しでもオレのこと考えた？」

「・・・・・愚問ですわね」と、カレンがシュウから顔を逸らす。

「あたくしがここで眠っているのを見れば、分かったことじゃなくて？」

「だな、愚問だった」

そう笑って、シュウはカレンの頭を引き寄せてキスした。

シュウの顔をじっと見つめ、カレンが訊く。

「あなたは？」

「ん？」

「あなたは、今日あたくしのこと少しでも考えてくれた？」

「朝からずっとおまえのこと考えてた」

「えっ・・・？」

「何でだろうな。オレの脳内、おまえのことばっかみてえ・・・」

再びシュウの唇がカレンの唇に重なった。

今日のキスはいつもよりも長い。

（このまま舐めてくれねえかなあ・・・）

なんてシュウが思ったのは秘密だ。

第３２話　長男の脳内（後書き）

読者のみなさまいつもありがとうございます。最近頭が重い姫百合であります。
同じ姿勢を続けてたり、目の疲れや肩こりからくる緊張性頭痛とか何とか・・・。日々頑張られている作者さまたちは、本当激しく冗談抜きでお気をつけください（執筆に影響出てしまうので・・・）。

昨日１８時４５分頃メールくださった読者さまへ。
いろいろとすみません。
お姉さんにバレないように、コッソリ読んでね（笑）

ＰＳ．１へのお返事↓ヒロインお休みしませんでした。
ＰＳ．２へのお返事↓了解です。つい書いちゃったんですわ・・・（笑）
ＰＳ．３へのお返事↓いや、うん、本当いつもすみません・・・ｏｒｚ　そして助かってます、ありがとうございます。

第３３話　停学

シュウと出掛けてさんざんはしゃいだ双子のリン・ランは、その日は早くに眠ったようだ。

「これ、父上にお土産なのだー」

そう言ってリビングのソファーでウィスキーを飲んでいたリュウに、ネズミ耳カチューシャをつけてから自分の部屋へと戻っていったリン・ラン。

リュウの向かいに座っていたシュウが苦笑する。

「どんな強いネズミだよ。それじゃあ猫の方が食われるぜ。可愛くねえ」

「うるせーよ。それよりおまえ、今日どうだったわけ」

「えっ・・・！？」

と、赤面するシュウを見て、リュウが眉を寄せる。

「おまえ妹と何してきたの。返答によっては７、８００発ほどぶっ飛ばさせねーといけねーんだけど」

「なっ、何もしてねーよっ！　何もっ！」

と、シュウは慌てて首を横に振る。

リュウの言葉は冗談にならなくて。

「どっちかといったら、オレされた方だしっ・・・！」

「何を」

「ソースが付いた、くっ・・・、口の端をぺろっと・・・と」

「で？　妹に欲情したのか、おまえ」

「しっ、してねえよっ！！」

「じゃあ何赤くなってんだ」

「え！？　・・・えと・・・、そ、その舐められたときにカレン想像しちゃって・・・！？　ていうか、今日1日ずっとカレンのこと考えちゃって・・・！？　なっ、何でだと思う、親父」

「・・・・・。おまえ俺にどう突っ込んでほしいわけ？　拳か？　蹴りか？　魔法か？」

「なっ、何だよそれっ！？　真剣に訊いてんのにっ！！」

「おまえ本気で病院行って来い」

と、リュウは息子の鈍感さに深く溜め息を吐く。

（何で自分の気持ちに気付かねーかな。とっくに両想いだってのに、待たされてるカレンが哀れだぜ。つーか、さっさとくっ付いてくれねーと俺の1年後の計画が台無しになるじゃねーか）

最後の一言については、まだリュウの中だけの秘密である。

そこへ、一階にある大きなバスルームで入浴していたカレンとサラがやってきた。

「うわ」と、サラがリュウを見て目を丸くする。「なんっって、強いネズミ・・・！」

「おまえら本当兄妹だなあ、同じこと言って」

そうシュウとサラと見て言ったリュウ。
頭からネズミ耳カチューシャを外し、カレンを手招きする。

「こっち来い、カレン」

「？　はい、リュウさま」

と、リュウの元へと歩いて行ったカレン。
カレンの頭にリュウがネズミ耳カチューシャを付け、シュウに向かって言う。

「ほら、そこの黒猫。こんなとこに美味そうなネズミがいるぞ」

「おおっ！　美味そうにゃーーんっ♪」と、シュウが腕を伸ばしてカレンをひょいと抱き上げる。「――って、何やらせんだよ親父っ！」

「おまえノリツッコミ好きだよなー」

「やらせないでくれっ！　まったくもうっ・・・！」口を尖らせていたシュウだが、カレンを膝の上に乗せて笑顔になる。「ああ・・・

何だよこの可愛いネズミはよ？　え？」

シュウの尾っぽが嬉しそうにソファーの上をぱんぱんと叩く。

（コレでよく自分の気持ちに気付かないな）

と、尊敬の眼差しでシュウを見るサラ。

そのあとリュウと顔を見合わせて、一緒に溜め息を吐いた。

（でもまあ、この調子じゃそう遅くないうちにカレンとくっ付くさね。リン・ランも今日で元気取り戻したし、我が家はしばらく平和☆　ってかー？）

それから3日後のこと。

（我が家はしばらく平和☆　じゃ、ネェー・・・）

レオンと共に仕事の移動中、携帯電話に出たサラの顔が引きつる。

その電話の相手は三つ子の真ん中の子――マナだった。

ジュリ以外は皆変わっている家族であるが、その中でもマナが一番と言っても過言ではない。

いつも無表情で寡黙、神色自若としているマナ。

家族ですら、ときどき考えていることが分からない。

サラは足を止めて訊いた。

「ねぇマナ、もう1回言ってくんない？」

「停学になった・・・」

「な、何で？」

「ユナが泣かせられてたから・・・」

「すぐ泣くからね、ユナは」

「泣かせてた男子に隕石落としたら怪我して・・・」

「せめて岩にしなよ、あんた」

「そこを先生に見つかって・・・」

「見つからないとこでやりなよ」

「サラ姉ちゃんが一番理解あると思って電話した・・・」

「まあアタシだったら瀕死になるまでボッコボコに――って、いやいやいやいや！　アタシそんなことしないって！　いや本当まじで！」

灰色の耳を傾けて隣で話を聞いていたレオンは苦笑し、サラから携帯電話を取った。

「もしもし、マナ？」

「レオ兄・・・」

「今どこから電話かけてるの？」

「生活指導室・・・」

「一匹で？」

「うん・・・。先生は家に電話してるみたいだけど、出ないみたいで・・・」

今は午後2時過ぎ。

キラやミラ、ジュリは買い物にでも行っているのだろうと、レオンは察した。

「じゃあこれから僕とサラで迎えに行くから、先生に言っておいて」

「はい・・・」

レオンはマナとの電話を切ると、苦笑しながらサラを見た。

「これはちょっとマズイかもね、サラ」

「ちょっとどころじゃないよ、レオ兄。親父やママも怒るだろうけど、兄貴ブチ切れるって絶対。だからマナは、アタシにフォローしてほしくて電話してきたんだろうけど・・・」

「とりあえずマナを迎えに行こうか。・・・リュウとキラに電話しながら」

サラは承諾して、レオンと共に魔法学校へ向かった。

「て・・・？」

自宅リビングの中、仕事から帰宅したシュウの眉が寄り、

「て・・・て・・・て・・・！？」

目が見開いて行き、

「てててててて・・・！！」

顔が驚愕し、

「てっ、停学ううううううううううううううううっっっ！！？」

屋敷中にその声が響き渡っていった。

「まあ、落ち着け」

と、声をそろえたのは、リビングにいたリュウとキラ、サラだ。

「おっ、落ち着けねえっ！！　おいっ、マナは！？　マナはどこ行った！？　部屋か！？」

「落ち着きなって、兄貴。どういうわけか話すから。ほら、ここ座って」

と、サラが自分の隣をぽんぽんと手で叩いた。
落ち着いた様子なく、シュウがそこに座る。

「で!?　どういうわけだ!?　停学って何したんだよ!?」

「まあ、簡単に言えば暴力なんだけど」

「ぼっ、暴力だとぅ!?」

「でも相手の男の子も悪いんだよ。ユナを泣かせてたらしくってさ、それでマナが怒って隕石落としたっていう・・・」

「でも、相手の子に怪我させちまったんだろ!?」

「相手の男の子なら治癒魔法で怪我は治ったし、それにさっき親父とママがマナと一緒に頭下げに行ってもう落ち着いたから」

「――」

シュウはリュウとキラを見た。
よく見たら、ついさっきまで出掛けていたというような畏まった服装をしている。

謝罪に頭を下げているリュウとキラを想像した途端、シュウの目に涙が浮かんできた。
落ち着けと言われても無理だった。

リビングを出て、階段を駆け上がる。

「ちょっと、兄貴っ！！　マナだって反省してるよっ！！　兄貴っ！！」

サラが慌ててシュウを追う。
シュウが三つ子の部屋のドアノブを握ると、鍵が閉められていた。
どんどんとドアを叩き、シュウは怒鳴る。

「おい、開けろ！！　マナ！！　開けろ！！」

返ってきた声は、ユナとレナの声だった。
ユナ、レナと交互に必死になって言う。

「にっ、兄ちゃん落ち着いてよっ！！」

「そうだよ、兄ちゃんっ！！」

「マナはあたしのために怒ってくれただけなんだからっ！！」

「それにもう、マナだって反省してるんだからっ！！」

完全に頭に血が上ってしまっているシュウの耳には、ユナとレナの必死な声はまったく届いていない。

「おいっ！！　開けろったら開けろっ！！　開けやがれっ！！　おい、マナ！！　おまえ親父と母さんに頭下げさせたんだからな！！　分かってんのか！？」

「ああもうっ、兄貴っ！！」サラがシュウの身体を背後から押さえつける。「マナだって、もう反省してるってば！！　もういいよ、何も言わなくて！！」

「おまえのせいで親父と母さんの名が穢れたんだぞ！！　ユナやレナ、リン・ランだって、学校でどんな目で見られるかっ・・・！！　おい、マナ！！　聞いてんのかおまえっ！！」

マナの返事は返ってこない。

「あああああ、もう・・・！！　兄ちゃんはそんな妹なんかいらんっ！！　出て行けっ！！」

「ちょっ・・・！？」サラ、驚愕。「なっ、何様だよ兄貴っ！！　親父やママが言うならまだ分かるけど、兄貴が言う台詞じゃないじゃんソレ！！」

「うるせえっ！！　きっとマナは他所の子だ！　オレはマナみてーな子を産んだ記憶はねえっ！！」

「あったらスゴいし」

「・・・・・・」

「ぷ、赤くなってやんの」

「・・・うっ、うっ、うるせえっ！！　出て行けったら、出て行けっ！！　出て行けえええええええええええっ！！！」

「あっ、マナっ・・・！？　マナっ！！」

と、三つ子の部屋からユナとレナの狼狽した声。

そのあと、すぐに三つ子の部屋の鍵が開いた。

シュウよりも先に、ユナとレナがドアを開ける。

「ユナ、レナ――」

「兄ちゃんのっ」ユナとレナがシュウの言葉を遮った。「バカァァァァァァァァ！！！」

サラが瞬時にシュウの背後から避けると、ユナの炎魔法とレナの光魔法がシュウ目掛けて放たれた。

咄嗟に両腕で防御し、シュウは驚愕してユナとレナの顔を見る。

「んなっ、何すんだよっ！？」

「こっちの台詞！！」と、ユナとレナが声をあげる。「マナ、本当に出て行っちゃったじゃん！！」

「――はっ！？」

サラが慌てて三つ子の部屋の中を覗くと、部屋のカーテンが風でひらひらと揺れていた。

第３３話　停学（後書き）

昨日、私なんぞのことを心配してメールくださった読者さま、ありがとうございました。
早速教えて下さった対策をやってみた姫百合であります。
肩こり対策ちょっと感動しました。ちょっとやってみただけで楽になったのが分かって、あーびっくり（笑）　３０分置きにやってます。
でもやっぱり休むことが一番なようなので、２、３日お休みさせていただきたいと思います。
更新が遅れてしまうことになり、申し訳ございません・・・。

あと、質問の答えですが。
「訊く」の読みは「きく」で正解であります。
たずねる場合の「きく」は「聞く」ではなく、「訊く」と書くようにしてます。

第３４話　六女の家出

グレルとレオンのマンションをマナが尋ねたのは、夜２２時過ぎのことだった。

「おー、来た来た」と、玄関先でグレルがマナを抱っこする。「ついさっきリュウから電話あって聞いたぜ。シュウと喧嘩したんだって？　よしよし、可哀相になあ」

マナと聞き、レオンが慌てたように駆けて来た。

「ああ・・・、良かった」と、レオンがマナの姿を確認して安堵の溜め息を吐く。「リュウの予想通り、うちに来てくれて・・・」

そう言いながら、レオンはマナが裸足でここまでやって来たことに気付く。

足は泥だらけ、全身は雨でずぶ濡れだった。

いつも無表情で寡黙なマナが、静かに口を開く。

「兄ちゃん・・・、あたしのことといらないって・・・」

「そんなわけないじゃない、マナ」

「兄ちゃん・・・、あたしに出て行けって言った・・・」

「シュウは頭に血が上りやすいからね。カッとなって、つい思ってもいないこと言っちゃっただけだよ」

「あたし、帰らない・・・」

無表情なマナは感情が分かりづらい。
それでも、淡い紫色の瞳に傷が浮かんで見えた。

「とりあえずお風呂に入っておいで、マナ。ついさっき溜まったところだから」

レオンが言うと、マナが頷いてバスルームへと入って行った。
グレルが携帯電話を手に持ち、リビングのソファーに座りながらリュウに電話を掛ける。

「師匠っ!?　マナは!?」

狼狽しているリュウの声。
その後ろからも家族の落ち着きのない様子が伝わってくる。

「落ち着け、リュウ。マナはうちに来たからよ」

「そ・・・そうすか、マナは師匠の家に」

リュウの声が安堵する。
リュウの言葉を聞いた家族も安堵したようである。

「んで、シュウはどうした?」

「シュウなら皆に責められて、今頃自分の部屋でカレン抱き枕にしてフテ寝してる。まあ、明日になりゃマナ迎えに行くと思うけど」

「エー」

「なんすか、エーって」

「停学３日間なんだろ？　３日間うちに泊めても――」

「自宅謹慎しなきゃなんねーのに外泊させんでください。停学中、課題だっていっぱい出されてんだ」

「だってよ、リュウ。聞けよ、おまえ」

「なんすか、もう・・・」

と、リュウが溜め息を吐く。

「もうしばらくレオンがよ、一緒に寝てくれねーんだぜ？　オレもう寂しいったら」

「当たり前じゃないすか。いつまでレオンが子供だと思ってんだ。３１と４６のオッサンが一緒に寝てんじゃねえ気持ちわりぃ」

「いーじゃねーか、レオンの外見年齢は２０代前半なんだしよー」

「それでも気持ちわりぃわ」

「なんだよ、おまえやリンクは今でも愛猫と一緒に寝てるっていうのによ」

「夫婦すから」

「オレも一緒に寝てくれる猫がほーしーいぃぃぃぃぃっ！！」

「ガキかあんたは・・・」

「よし、決〜〜めたっ♪」

「？　何をすか」

「マナ、オレの嫁さんにもーらおっと♪」

「――はっ！？」

リュウの声が裏返った。

「えーと、あと約3年経てばマナ16歳になるし、結婚できるよなっ♪」

「ふっ・・・、ふざけん――」

「よろしくな、お義父さん♪」

「・・・おっ、俺よりオッサンにオトーサン言われたくねえええええっ！！」

「んじゃ、マナの着替えとか課題とか、ミーナの瞬間移動を利用して持ってこいよ♪」

「はっ！？　しっ、師匠――」

グレルは電話を切った。

レオンが苦笑して言う。

「何言ってんの、グレル・・・。マナがグレルのお嫁さんになってくれるわけないじゃない」

「ひでーこと言うなあ、レオン。なんだよ、ヤキモチか？」

「いや、僕もうそんなに子供じゃないから」

「ショボーンだぜ、オレは」

「別に昔よりグレルから気持ちが離れてるってわけじゃないよ？グレルを主と認めたときから、僕は生涯グレルのペットであることを望んでいるんだから。・・・猫モンスターはそういうものだって、分かってんでしょ？　猫モンスターとそのハーフ専門雑誌の編集長・グレル？」

「まーなっ♪」

「じゃあ落ち込まないでよ、もう」

「ごめんよっと♪　でもまあ、稀に変わった性質の猫モンスターもいるよなあ」

「ああ・・・、いたね・・・・・・」

一匹のホワイトキャットがレオンの頭に浮かんだ。
白猫の耳と尾っぽ、それからピンクブラウンの腰まであるウェーブヘア。

（あの子、今は卯月島にいるんだっけ・・・？）

レオンがそんなことを考えていたとき、リュウがミーナと共に目の前に現れた。

「あ、リュウ」

やっぱり来た。

とレオンが言う前に、リュウがグレルに詰め寄る。

「師匠!?　師～～～匠!?　マナは!?　マナどこに隠したんすか!?　え!?」

「隠してねーよ、別に。人聞きが悪いぜ」と、グレルが口を尖らせる。「マナなら風呂に入ってるよ。雨でずぶ濡れだったからな」

「あんた、マナを嫁にするなんて冗談っすよねえ!?」

「エー?　オレ本気だしぃ」

「ふっ・・・、ふざけんな金メダルっ!!!」

「銀メダルよりカッコイイじゃねーかよー?」

リュウとグレルが言い争う傍ら、レオンはソファーから立ち上がりながらミーナに言う。

「ごめん、ミーナ。マナの着替えや学校で出された課題を持ってきてくれないかな?」

「分かったぞ」と、ミーナ。「着替えは何日分だ？」

「停学は3日間の自宅謹慎みたいだけど・・・、マナの様子からすると、たぶんその間は帰らないと思うんだよね」

「ふむ。シュウと結構な喧嘩をしたのか」

「そうみたいだけど・・・、まあ、シュウの方は明日には言い過ぎたって反省すると思うから。そのあとはマナ次第だよ」

「そうか。マナはリュウとキラの子供たちの間で一番分かりづらい子だから、わたしもマナがこれから先どうするのか読めないが・・・。とりあえず、課題と一週間分の着替えを持ってくるぞ」

ミーナが一旦去って行くと、レオンはとりあえずマナが着る用の服をバスルームの脱衣所に持っていった。

そのあとリビングに戻り、まだグレルと言い争っているリュウを見て溜め息を吐く。

「そんなに心配してくても大丈夫だよ、リュウ。マナがグレルを選ぶわけないじゃない」

「・・・そ、それもそうか。師匠みてーな、すげー天然バカでクマだか人間だか分からない上にバケモノで金メダルのオッサンなんか、マナが選ぶわけねーよな」

「そうそう。だから心配しなくていいよ。マナの様子だと停学中はまず帰らないと思うけどね」

「いや、おまえそれ困るし」

「パパ・・・」

と、マナの声。

リュウが振り返ると、風呂上りのマナがレオンの服を着てリビングに入ってきたところだった。

リュウが口を開く前に、マナが言う。

「あたし、帰らないよ・・・」

「何言ってんだ、マナ」とリュウが小さく溜め息を吐き、マナを抱っこした。「停学中に家にいないわけにはいかないだろ?」

「帰りたくない・・・」

「先生からおまえに電話かかってきたらどうするんだ?」

「帰りたくない・・・」

「帰るの」

「兄ちゃんなんか嫌い・・・」

「それは構わないけどよ」

「だから帰らない・・・」

「パパが好きなら帰るの」

「パパ・・・」と、マナが溜め息を吐く。「嫌いになるよ・・・？」

「ちょ、おま・・・・・・！？」リュウ、衝撃。「おっ、脅しかよ！？　パパが何したよ！？」

「あたしが帰りたくないって言ってるのに、どうして帰らせようとするの・・・」

「どうしてもクソもおまえよ・・・！？　つーか、そのワガママっぷり誰に似たんだよ・・・！？」

「パパでしょ・・・」

「なっ・・・！？　俺もっとすげえよ！？」

「自慢にならないから、それ」

レオンは苦笑しながら突っ込んだ。

溜め息を吐き、リュウの肩を叩く。

「もう諦めなよ、リュウ。今ミーナにマナの課題と着替え取りに行ってもらってるから」

「なっ、何勝手なことしてやがるっ！」

「今は停学中だし、なるべくなら僕もこんなことはしたくないけどさ。マナが帰りたくないって言うんだから仕方ないじゃない。・・・それに、本当にもう諦めないとマナに嫌われるよ、リュウ？」

「うっ・・・！？」

リュウは顔を引きつらせながらマナの顔を見た。
それはもう冷淡な紫色の瞳が、じっとリュウを見つめている。
（あっさり嫌いって言われそうだぜっ・・・俺っ・・・・・・！）
リュウは、マナの停学中の外泊を許可した。
魔法学校の先生からマナに電話が掛かって来たら、ミーナの瞬間移動を利用することにした。

翌朝。
シュウは一斉に鳴り出す１０個の目覚まし時計をいつものように手で鮮やかに叩き止め、ぱちりと目を開けた。
（・・・懐かしい夢を見たな。あいつの夢、最近はまったく見てなかったのにな。それより・・・）
と、シュウは苦笑した。
「オレ、マナに何てこと言っちまったんだよ・・・」
「今頃反省？」
と呆れたように言ったのは、シュウの抱き枕にされていたカレンである。
「なあ、カレン～～～っ」シュウがカレンにすがる。「マナの奴、

帰ってきてくれるかな。一生家出しっぱなしだったらどうしよう・・・」

「マナちゃんのことは、あたくしもよく分からなくってよ。でも、とりあえず今日レオンさんとグレルさんのお宅を伺って、マナちゃんに謝ってみるのがよろしいと思いますわ」

シュウはそういうことにした。

――のだが。

「なっ、なっ、なっ、何でマナがいねえ・・・!?」

昼食後、ミーナの瞬間移動でレオン・グレル宅へとやってきたシュウは驚愕した。

仕事のレオンとグレルの姿がないのは分かる。

だが、何故マナの姿までないのだろう。

「あれ?」と、ミーナが部屋の中をきょろきょろと見回する。「本当だぞ、マナがいないぞ。これでは学校の先生からマナに電話が掛かってきても、マナをすぐに連れて帰れないぞ」

「ど、どこ行ったんだよ、オイ・・・!」

「マナに電話してみたらどうだ?」

「オレからの電話に出てくれねーんだもん、あいつ・・・」

シュウは苦笑した。

朝から何度もマナに電話を掛けているのに、マナは一向に出る気配はない。

「では、わたしから電話してみるぞ」

ミーナがそう言い、マナに電話を掛ける。

3コール目でマナが出た。

「はい・・・」

「ミーナ姉だぞ、マナ。今どこにいるのだ?」

「グレルおじさんに着いて・・・」

「グレル師匠に着いて?」

「海で『ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ』８月号に載るページの撮影中・・・」

「おおっ、邪魔したぞ」

ミーナが電話を切る。

シュウは眉を寄せた。

「ミーナ姉?」

「マナは今、『ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ』のモデル中だそうだぞ」

「は？」

「海で撮影だそうだ。居場所が分かったから安心するのだ、シュウ♪」

「あっ・・・、安心できねえええええええええええっ！！」シュウ、驚愕。「いっ、今マナは停学中なんだぞ、ミーナ姉っ！？　邪魔したぞって電話切らないでくれよっ！！　遠慮せずに邪魔してくれよっ！！」

「何を言っているのだ、シュウ。人の邪魔なんて、そんな悪いことしてはいけないのだぞ？　小さい頃にキラから教わっただろう。まったくもう・・・」と、ミーナが溜め息を吐く。「あまりキラを悲しませないでくれ」

あんたはそのバカを何とかしてくれ。

シュウは、レオン・グレル宅の玄関から外へと飛び出した。

その頃のマナは海にいた。

小雨の中、グレルに肩に座りながら月刊『ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ』のモデルを務めている。

といっても、撮ったマナの写真は全部無表情である。

まるで表情を変えないマナに、カメラマンは苦笑してしまう。

「えーと・・・、マナちゃんもう少し笑ってくれない？」

「・・・・・」

「いーんだよ、これで」と、グレル口を挟む。「これがマナの売りなんだぜっと♪」

「は、はあ、そうすか編集長・・・。ま、まあいいか、可愛いことには違いないし・・・」

「そそっ♪」

「どうせなら、メンズモデルにシュウ君連れて来てくれれば良かったのに。何で編集長なんすか、むさ苦しいなあ・・・」

カメラマンは苦笑しながら、マナにピントを合わせてシャッターを切り続けた。

無表情とはいえ、リュウとキラの子供たちは目を見張るほど綺麗な顔立ちをしている。

シャッターを切らずにはいられない。

ふと、マナが顔を傾けて遠くを見た。

マナの視線を追ったカメラマンが言う。

「ああ・・・、向こうの集団は『ＮＹＡＮＫＯ』の撮影だよ。今日は新人モデルさんの撮影でね。ホワイトキャットの女の子なんだけど、これがまたすっごく可愛い子なんだ。まあ、それでもマナちゃんに敵うとは言わないけどね」

「・・・・・・」

カメラマンの言葉を聞いているのか、聞いていないのか。
マナはじっと遠くの集団を見つめている。

グレルやカメラマンには見えないようだが、キラの視力を継いだマナにははっきりと見える。
集団一人一人の顔が。

（何で・・・）

マナの瞳に映る、一匹のホワイトキャット。
ピンクブラウンの腰まであるウェーブヘア、マナよりも濃い紫色の瞳。

（あの猫、葉月島にいるんだろう・・・）

周りから見たら、分かるか分からないかくらいの角度でマナが首を傾げる。

マナのポケットの中、携帯電話が鳴った。
相手の名前を見てみると、今朝からずっと無視しっぱなしのシュウからだった。

グレルが言う。

「またシュウか？　そろそろ出てやってもいーんじゃねーか？」

マナは頷いて、シュウからの電話に出た。

「はい・・・」

「マナっ!?　おおっ、マナ!」電話の向こう、シュウの声が歓喜に高くなる。「やっと出てくれたのか、マナ!　昨日はごめんな!　兄ちゃん、思ってもないこと言っちまって・・・」

「・・・・・」

シュウの声を聞きつつ、マナは再び遠くの集団に顔を向ける。
マナの声が返ってこないものだから、シュウが狼狽したように続けた。

「えっ!?　マ、マナ!?　お、怒ってる!?　お、怒ってるよな、うん!　ごめんな!　本当ごめんっ!」

「・・・・・」

「マ、マ、マ、マナちゃーん・・・!?　兄ちゃんのこと許してくれないかなあ〜っ!?」

「・・・・・」

「ご・・・ごめんってば・・・!　ごめん!　ごめんごめんごめんごめんごめんなさいっ!!　兄ちゃんが悪かったから許してくれよマナァァァァァァァァァっ!!」

半泣きのシュウの声。
マナは相変わらず遠くの集団を見つめながら口を開いた。

「いいよ・・・」

「えっ!?」

「許してあげる・・・」

「ほっ、本当かマナっ!?　帰ってきてくれるのかっ!?」

「うん・・・」

「おおおおおおおっ!!」電話の向こう、シュウが再び歓喜に声を高くする。「ありがとうな、マナ！　兄ちゃん今おまえのいる海に向かってマッハで走ってんだけど、どのへんにいい――」

「兄ちゃん・・・」マナがシュウの声を遮った。「これから一波乱ありそうだし・・・」

「へっ?」

電話の向こうで走っていたシュウが立ち止まったのが分かった。マナが続ける。

「ちょっと可哀相になって・・・」

「えーと・・・?」

「だから許してあげた・・・」

「お、おう、ありがとな・・・。んで、その一波乱とは一体?」

「あの猫が来てるよ・・・」

「どの猫?」

「なんだっけ、名前・・・？」と、マナは小さく首を傾げる。「白猫で・・・」

「ホワイトキャットで？」

「ピンクブラウンの髪してて・・・」

「――」

ホワイトキャットでピンクブラウンの髪。

そこまで言われれば、シュウが分からないはずがなかった。

今朝久しぶりにその白猫の夢を見たせいもあって、一瞬にてシュウの頭に蘇る。

マナの指す、ホワイトキャットの姿が。

「兄ちゃんの元ペットの女の子・・・」

第３４話　六女の家出（後書き）

２日間たっぷりと休んで大分回復した姫百合です。
これからは同じことを繰り返さないように、ちゃんと休みも入れないとなーと思いました；；

※停学中に外泊してはイケマセン。

第３５話　元ペット

シュウの脳裏に蘇る。

白猫の耳。
毛足の長い白猫の尾っぽ。
濃い紫色をした瞳。
腰まであるピンクブラウンのウェーブヘア。

「何で・・・マリアが・・・？」

「そう、それ・・・」電話の向こう、マナが言う。「マリアさんがいるよ、兄ちゃん・・・」

「な、何で・・・？」シュウの頭が困惑する。「そ、そうか、旅行か何かでっ・・・！」

「『ＮＹＡＮＫＯ』の新人モデルだって・・・」

「・・・な、何でだよ。だってマリアは、卯月島に行って・・・・・。　そ、そうだ、飼い主はっ？　飼い主の姿、近くにねえっ？」

「それっぽい人は見当たらないけど・・・」

「く、首輪はっ？」

「首輪はしてる・・・」

「そうか・・・」

良かった。
また捨てられたんじゃなくて。

シュウは安堵の溜め息を吐いた。
マナが訊く。

「兄ちゃん・・・、海(ここ)に来る気・・・？」

「あ、ああ。そのつもりだったんだけど」

「マリアさんに会いに・・・？」

「いや、マナが停学中に外出してるってんで慌てて走ってきただけ」

「あたしこれからちゃんと帰るから・・・、兄ちゃん来ない方がいいと思うよ・・・」

「でもオレ、マリアにどういうことか訊きたいんだけ――」

「兄ちゃん・・・」マナがシュウの言葉を遮った。「あたし帰らないよ・・・？」

「おっ・・・、脅しかよっ！」シュウ、驚愕。「ついさっきちゃんと帰るって言ったじゃねーかよっ！？」

「わざわざ自分から波乱起こそうとする兄ちゃんにイラっとして・・・」

「べ・・・、別に波乱なんか起きねえだろっ・・・」

「平和主義なんだよね、あたし・・・」

「ぼっ、暴力で停学になった奴が平和主義語るなっ！」

「とにかく来ないで・・・」

「ちゃ・・・ちゃんと帰ってくるんだろうな・・・！？」

「帰るから・・・」

「・・・わ、分かった」

「じゃあ切るよ・・・」

「あ、待った、マナ。その・・・、マリア元気そうか？」

「相変わらずだよ・・・」

「そうか・・・」

じゃあいい。

シュウはマナとの電話を切ったあと、踵を返した。

その夜。

書斎にいたリュウに、グレルから電話が掛かってきた。

回転椅子に座って、仕事の書類を整理しながら電話に出る。

「なあ、リュウ。シュウが去年飼ってた猫って、ホワイトキャットだったのな」

「シュウが去年？　・・・ああ、そうっすよ。師匠見たことなかったっけ」

「おう。見る前に飼い主変わった言われてビックリだったぜ。オレはてっきりブラックキャットかと思ってたんだけどな。なんせシュウがブラックキャットのハーフだし、ブラックキャットと犬猿の仲のホワイトキャットは好かねえと思ってな」

「いや、うちの子供たちは幼い頃からホワイトキャットのミーナと接してるから」

「ああ、なるほど。だからホワイトキャット見ても何とも思わねーのか」

「んで、何で急にその話題？」

「うちの『ＮＹＡＮＫＯ』の新人モデルが、そのシュウの元ペットらしくってよ」

「・・・・・・は？」

書類を整理するリュウの手が止まった。

「今日のマナとシュウの電話の会話聞いてたら、そんなこと言ってたぜ？」

「そのホワイトキャットの名前は？」

「マリア」

「特徴は？」

「ピンクと茶色混ぜたような髪してて、目が濃い紫。あと尾っぽの毛足が長くてふわふわしてたな」

間違いなく、シュウが去年飼っていたホワイトキャット――マリアだった。

リュウの眉が寄る。

「何であのマリアがまた葉月島に・・・？」

「だから、『ＮＹＡＮＫＯ』の新人モデルだってばよ。卯月島から来たとは言ってたけど、もしかしなくても葉月島を出て行って戻ってきたのか。でも飼い主は卯月島にいるとか何とか」

「は？」ますますリュウの眉が寄る。「出張モデルすか？」

「いーや。マリアはこれから葉月島に住むけど、飼い主は卯月島に住んだままだってよ」

どういうことか少しの間考えたあと、リュウは溜め息を吐いた。

再び書類を整理しながら言う。

「あのメス猫、また飼い主捨てる気か」

「へ？」

「きっと葉月島で次の飼い主見つけたら、今の飼い主捨てる気すよ。マリアの最初の飼い主は二流ハンターだった。んで、その次の飼い主がシュウ。去年新米ハンターだったあいつは、俺の弟子の身分だから報酬なんてたかが知れてて、大して金持ってなかったんすけど」

「やれよなー、小遣い」

「働き始めた息子に小遣いはやらねーよ。・・・んで、マリアが高価なものを何でもかんでもほしがるものだから、シュウの金はすぐ底を尽きた。報酬も、それまで溜めて持ってた小遣いも全て。それが分かった途端、マリアはシュウを捨てたんすよ。んで、当時シュウより金持ってた一流ハンターに媚びてペットにしてもらったってわけっす」

「その一流ハンターってのが、今の飼い主ってところか」

「だと思いますけど、卯月島から来たっていうなら。その飼い主の一流ハンター、俺が卯月島に送ったし」

「ふーん？　あれか。その一流ハンターも金が底を尽きたわけか。んで、マリアは次の飼い主を探してるとな。ふむふむ。困ったちゃんだなあ、マリアは」

「そすね。人間の世界に入った以上、金は大事だけど・・・。猫モンスターらしからぬマリアの性格は好けねえな」

リュウはそう言いながら、マリアが去っていったときのシュウを思い出す。

シュウがマリアを飼っていたのは、ほんの3ヶ月間。
それでも、これから先ずっとマリアを飼っていくつもりだったシュウにとって、マリアを失ったときの衝撃は傍から見ても大きかった。
家族に心配かけないよう、必死に笑顔を作っていた。

本来猫モンスターは、キラやミーナ、レオンのように主と決めた者を生涯愛してしまうもの。
比べてマリアは、何の悪びれた素振りも未練もなくシュウの元を去って行くような猫モンスターだった。

マリアが他の主を見つけたと言ったときも、マリアが去って行くときも、シュウは引き止めなかった。
新しく主となるハンターの男に『マリアを大切にする』と約束させて、シュウは引き下がった。
笑顔を作ってマリアを見送った。

これでいいのかと問うリュウに、シュウは『マリアが幸せになるならいい』と答えた。

シュウがマリアを失ってとても悲しんだのは事実。
でも、マリアの幸せを心から願ったのも事実。

（あんときゃガキがかっこつけてんじゃねーぞバーカって思ったけど、あいつのそういうとこってキラを継いだのか。キラは俺にいらないと言われたら、すぐに俺の前から消える。死ねって言われたら死ぬ。己よりも愛する者の幸せが最優先。・・・それと一緒か）

リュウの眉間に皺が寄る。

「シュウの奴、すげームカつくじゃねーか」

「は？」電話の向こう、グレルがぱちぱちと瞬きをする。「何だよ、いきなり？」

「あいつ、『マリアが幸せになるならいい』とか言ってマリア手放したんすよ」

「へえ。そういうとこキラっぽいな」

「俺は間違っても『キラが幸せになるならいい』とか言ってキラを手放せねーし」

「ああ・・・、おまえは弱いからな。キラがいなくなったら死んじまうような」

「うるせーな。だからシュウがムカつくってんだよ。あいつのが精神的に俺より強いみてーじゃん」

「キラを継いでるなら、精神的には確実におまえより強いさ」

「あー、ムカつく」

ドカッと、リュウが机の上に足を乗せる。

グレルがおかしそうに笑った。

間を置いたあと、リュウは言った。

「・・・師匠」

「ん？」

「・・・俺が本当は弱いってこと、子供たちには言わないで・・・、ダセーから」

「分かってんよ。ま、その代わりマナをオレの嫁さんにくれよなっ♪」

「ふっ・・・、ふざけんじゃねえええええええええええええっ！！」

「3年後が楽しみだぜいっ♪」

「いい加減にしろ金メダル！！　オッサン！！　クマ！！　バケモノ！！」

リュウが騒ぎ出して数分後。

書斎のドアをノックする音が聞こえて、リュウはグレルとの電話を切った。

そのあと、苛々としながら戸口に向かって言う。

「入れ」

顔を覗かせたのは、仕事から帰ったシュウだった。

「ただいまー。何騒いでたんだよ、親父？」

「何でもねえよ」

という割りには不機嫌そうなリュウに、シュウは苦笑する。
リュウがくるりと回転椅子で身体の向きを変え、シュウに背を向けて書類を整理しながら訊く。

「んで、どうしたシュウ」

「その・・・さ・・・。えと・・・」

「いい辛そうだな。マリアのことか」

「えっ・・・!?」ずばり言い当てられ、シュウの声が動揺する。
「なっ、何で分かったっ・・・!?」

「ついさっきまで師匠と電話してな。『ＮＹＡＮＫＯ』の新人モデルがマリアだっていうからよ」

「ああ・・・、そうか。グレルおじさん、オレとマナの電話聞いてた――」

「んで?」と、リュウがシュウの言葉を遮った。「俺に何を言いにきた。マリアをまた飼いたいとでも言うのか」

「そっ、そうじゃねえよっ・・・！　マナが言うにはマリアは首輪してたみたいだけど、飼い主の姿が見えないのがやっぱりちょっと気になって・・・。ほ、本当はまた捨てられたんじゃないかって考えると心配で――」

「捨てられた、だと?」再びリュウがシュウの言葉を遮り、椅子を回転させてシュウの方を見た。「バカか、おまえ。おまえがマリア

を飼い始めたとき、マリアは前の飼い主を捨てたんだ。マリアはおまえのことも捨てたんだ。んで、これからまた今の飼い主を捨てるところだ」

シュウの顔が気色ばんだ。

「・・・何でそういう言い方すんだよ」

「マリアはそういうメス猫だぜ？　気付けバーカ」

「アッタマ来んな！！」シュウが思わずと言ったように声をあげる。
「マリアのこと悪く言うんじゃねーよ！！　今の飼い主の連絡先調べてもらおうと思ったけど、もういい！！　親父には頼まねえっ！！　リンクさんに頼む！！」

どかどかと足音を鳴らし、戸口へと向かっていくシュウ。
ドアノブを握ったとき、リュウが言った。

「わざわざそんなことしなくても、どーせ近いうちにマリア本人が尋ねて来るっての」

「は？」

シュウは眉を寄せながら振り返った。
リュウが溜め息を吐いて言う。

「これからまた、我が家に一波乱がやってくるぜ・・・」

マナの3日間の停学が終わった。
マナの起こした事件で、魔法学校に通う双子や三つ子のことを色々と心配したシュウだったが、今までと変わりなく過ごせているようだった。
むしろ、ユナを泣かせたり、マナを停学に追い込んだ男子生徒の方が冷たい視線を浴びているとか何とか。

（そういや、親父と母さんが相手の男の子の家に謝罪に行ったとき、逆に相手の親御さんの方が申し訳なさそうだったんだっけ・・・。よく考えれば、うちの親父と母さんの子供を停学させたとなりゃ恐縮してしまうわな。親父もすごい男だけど、母さんなんてこの世の英雄だしな。ああもう、相手のご家族に本当申し訳ねえ・・・）

なんてことを思い、シュウは魔法学校に通う双子と三つ子の弁当を作りながら苦笑する。
そんなシュウの顔を覗き込み、カレンが首を傾げた。

「どうかしたのかしら、シュウ？」

「いや、うん・・・。うちの家族って恐ろしいなって・・・。特に親父と母さんが・・・」

「ん？」と、シュウの傍らで朝食の後片付けをしていたキラが振り返った。「恐ろしいって、何がだ？　母上、良い子には優しいぞーっ」

「そうだけど、なんていうか・・・存在そのものが偉大すぎて。世間の人々から見たら、うちの家族ってどう思われてんだろ。すごいこと想像されてんのかな。スゲエェェ変なのばっかなのに」

「コラ、最後の一言は余計だぞ」

と、キラが頬を膨らませたとき。

「おっじゃまっしまあああああす♪」

家族ではない女の声が聞こえてきた。

キッチンにいたカレンとキラ、ミラがぱちぱちと瞬きをする傍ら、シュウの動きが止まる。

こ、この声は・・・！

「シュウ～っ？　どっこにゃあ～っ？」

姿を現す前から、シュウには見える。

その白猫の耳が。

毛足の長い白猫の尾っぽが。

濃い紫色をした瞳が。

ピンクブラウンの長いウェーブヘアが――。

シュウは弁当作りを放り出し、キッチンから飛び出した。

玄関の方へと向かって走っていく。

広間へと入ったとき、シュウは一瞬目を丸くした。

そこにいる者の姿が分かっていても、驚いてしまった。

「――マリアっ・・・！」

シュウの元ペットのホワイトキャット――マリアが、今目の前にいる。

シュウの姿を捉えたマリアの濃い紫色の瞳がきらきらと輝く。

白猫の耳をぴんと立たせ、毛足の長い白猫の尾っぽの先を振り、シュウのところへと向かって、マリアがぴょーんと飛び跳ねた。

「シュウゥゥゥ

第３６話　波乱

白猫の耳と、毛足の長い尾っぽ。
濃い紫色をした瞳。
ピンクブラウンの腰まであるウェーブヘア。

シュウの元ペットのホワイトキャット――マリアが、再びシュウの前に現れた。

自宅のキッチンから広間まで駆けて来たシュウの方へと、マリアがぴょーんと飛び跳ねる。

「シュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！　会いたかっ――」

ズドドドドド！！

宙に浮いているマリア目掛け、突然降り注いだ氷の結晶。

シュウがぎょっとして広間から2階を見上げると、リン・ランが物凄い形相をして立っていた。

さらに、

「うらあっ！！！」

ドガガガガッ！！！

氷に埋もれているマリアにトドメを刺すように、２階から飛び降りたサラのカカト落とし。

サラの足が、見事に氷の山の天辺から地に這いつくばっているマリアまで到達した。

「なっ、何てことしてんだよお前たちっ！！　マリアっ、大丈夫――」

驚愕しながらマリアへと駆け寄ろうとしたシュウ。

シュルルッ・・・
ガシッ！

背後から飛んできたロープに、胴体がぎゅっと縛られる。

「なっ・・・！？」

シュウが振り返ると、そこにはミラの姿。

「ミ、ミラおまえ、どっからロープ出して・・・！？」

「大丈夫よ、お兄ちゃん。そこの白猫さん、あの程度では怪我を負わないわ。よく知ってるでしょ」

「そっ、そうかもしれねえけど――」

「ママ、ＧＯ！」

とミラが言った次の瞬間、キッチンから飛び出した黒い影。
その正体はキラ。
目にも留まらぬ速さで広間へと駆けて行く。

キラがシュウの脇を通り過ぎたとき、シュウは慌てて声をあげた。

「やっ、やめてくれ母さんっ！！」

あんたの爪を食らったら、どんな猫モンスターも一溜まりもねえっ！！

そうシュウが叫ぼうとしたとき、もう1つの黒い影がシュウの脇を通り過ぎた。

その影が、マリアに飛びかかろうとしたキラの手を押さえる。

「・・・おっ、親父っ・・・！」

キラの手を押さえたのはリュウ。

シュウはほっと安堵した。

リュウに押さえられ、キラがじたばたと暴れる。

「放せっ！　放せリュウ！」

「落ち着け、キラ」

「落ち着けぬ！　こんな主をぽんぽんと変えるような猫、私が成敗してくれるっ！！　これ以上、このメス猫のせいで悲しむ主なんていなくて良いのだっ！！」

「今ここでマリアを殺したら、一応悲しむ主いるかもしれねえぜ？首輪ついてんだからよ」

そう言われ、マリアの首元を見たキラ。

マリアの首には、白い首輪がつけられていた。

「だから落ち着け、キラ。主命令だ」

夫である以前に己の飼い主であるリュウの顔を見上げ、キラはおとなしくなった。

「はい・・・」

しょげて黒猫の耳を寝かせるキラを、リュウが左腕に抱っこする。

ここでようやく、シュウはマリアのところへと行くことができた。身体のロープを解き、マリアのところへと駆けつける。

「マリアっ・・・！　だ、大丈夫かっ？」

「にゃあああん、痛いよぅ、シュウ～っ」

と、マリアが泣きながらシュウの胸にしがみ付く。

「あ？」シュウの傍らにいたサラが気色ばんだ。「嘘泣きしてんじゃないよ。無傷のクセに」

シュウが見た限りでも、マリアは無傷だった。

それでもシュウはマリアに治癒魔法を掛ける。

「ありがと、シュウ。相変わらず優しいにゃ♪」

そう言ってマリアが、シュウを見上げて笑う。

大好きだった懐かしい笑顔に、シュウの胸が熱くなった。
去年の今頃そうしていたように、マリアの身体をぎゅっと抱き締める。

「あっ、兄上っ!?」

リンとランの前だった。

「シュ、シュウ・・・？」

騒ぎに駆けつけたカレンの前だった。

2階から見下ろしているリンとランの顔が驚愕する。
シュウの背後の方にいるカレンの顔が動揺する。

（だ・・・誰なの、この子。シュウの何・・・！？）

カレンの表情を見て、サラが言った。

「このホワイトキャット、兄貴の元ペットなんだよ」

「元ペット？」カレンがサラの顔を見て、鸚鵡返しに訊いた。「ペットって・・・ペットって、シュウも半分猫モンスターなのにっ？」

「モンスターを飼えるのは『ハンターの資格を持つ者』だからね」

「そ、そうだったわね。ハーフでも、シュウもハンターだものねっ・・・」

「まあ、半分人間とはいえモンスターがモンスター飼うのって変に

思うかもしれないけどさ。ハンターであることに変わりはないから飼えるんだわ」

カレンは再びマリアに顔を戻した。

シュウに抱き締められて、嬉しそうに尾っぽの先を振っている。

（可愛い子・・・。こんな子が、シュウのペットだったなんて・・・）

カレンの胸がずきずきと痛む。

（でも、どうして元ペットがまたシュウのところに来るの・・・？）

カレンが思った疑問を、シュウがはっとしたように訊く。

「マリアっ・・・、おまえどうしてまたオレのところにっ？　飼い主はっ？　本当は捨てられたっていうんじゃないよなっ・・・？」

「シュウ・・・！」再びマリアの瞳に浮かぶ涙。「マリア・・・、マリア、捨てられちゃったにゃあああああっ！！」

「――なっ・・・！」

シュウに衝撃が走った。

マリアがシュウの胸で泣き喚く。

「ふにゃあああああん！　帰るお家ないよおおおおおおおお！」

「ど・・・どういうことだよ・・・！」わなわなと怒りが込み上げ、シュウは声をあげる。「あの人、マリアのこと大切にするって約束

したじゃねーか!!　どういうことだよ!!」

「ハァ？　バカじゃないの、兄貴」サラが短く嘲笑した。「マリアが捨てられたんじゃなくて、飼い主の方が捨てられたに決まってんじゃん。飼い主の金がなくなったのを見て、マリアは捨ててきたわけ。飼い主を捨ててきたわけ。そういう女なわけ。分かる？」

「黙れサラっ!!　マリアを悪く言うなっ!!」

「あー、苛々する。何だこのバカ兄貴。いっぺん死んで来い」

「なっ、何だと!?」

始まったシュウとサラの兄妹喧嘩。

カレンはキッチンへと踵を返した。

（シュウ、あの子のためにあんなに怒って・・・。そんなにあの子が大切なのね）

弁当作りを再開しながら、カレンの胸が痛む。

広間で怒鳴るシュウの声がキッチンにまで聞こえてくる。

マリア、マリア、マリア。

その名を何度口にすれば気が済むのか。

「ああもう、うるせえっ!!」

そんなリュウの声が聞こえた。

同時に、カレンはシュウがリュウの拳骨を食らったことを察する。

「いつまで喚いてやがる、シュウ！！　おまえ弁当作りはどうした！？　仕事へ行く準備はどうした！？」

「やべっ！」

シュウが慌ててキッチンへ駆けて来る足音が聞こえる。
でも今さらキッチンへ戻ってきても遅い。
カレンはもう弁当作りを終えて、弁当の蓋を閉めていた。

「あれっ！？　ご、ごめんカレン、一人で作らせちまってっ・・・！」

カレンが振り返ると、シュウがマリアの手を引きながらカレンのところへとやって来た。
マリアがカレンの顔を見て首を傾げる。

「にゃ？　この子、マリア知らないよ。だぁれ？」

「ああ、えと、こいつは」と、シュウがカレンの頭に手を乗せながら言う。「カレンって言って、オレの弟子なんだよ。んで」

と、シュウがもう片方の手をマリアの頭に乗せて言う。

「カレン、こいつマリアっていうんだ。オレの元ペットで、去年の大体5月から8月の間に飼ってて――」

「兄上っ！！」

シュウの言葉を遮るように、リンとランが現れた。
眉を吊り上げ、リュウの腕をぐいぐいと引っ張る。

「わっ！？　な、なんだよおまえたち！？」

「ちょっと来てなのだ、兄上っ！」

「こっち来るのだ、兄上っ！」

シュウがリン・ランに半ば強引に引っ張れて行き、キッチンにはカレンとマリアが残された。
カレンとマリアがじっと見つめあうこと7秒。

マリアが先に口を開いた。

「カレンちゃんて、可愛いにゃ♪」

「えっ？」

あらヤダ、褒められちゃったのですわ。
良い子じゃない。

なんて、思わず笑顔になったカレン。

「ありがとう、マリアちゃ――」

「マリアには劣るけどにゃ♪」

「・・・・・・」

前言撤回するのですわ。

カレンの笑顔が消えた。

「カレンちゃんて、何歳なのかにゃ？　マリアは１８歳だよ♪」

「そ、そう。マリアちゃんはシュウより１つ年上なのね。あたくしは――」

「マリアね、マリアね、瞬間移動が大得意なんだよ♪　カレンちゃんは何が得意なのかにゃ？」

「そ、そう。ホワイトキャットちゃんだものね。あたくしは――」

「あとね、あとね、マリアって攻撃力はないんだけど、防御力はいーーっぱいあるんだよっ♪　カレンちゃんはどうなのかにゃ？」

「そ、そう。だからサラやリンちゃんランちゃんの攻撃を食らっても何ともなかったのですわね。すごいわ。あたくしは――」

「それでね、それでねっ♪」

「・・・・・・」

な、なんのかしら、この白猫・・・！？

カレンの顔が引きつる。

聞いたなら答えさせなさいよ！

あたくしにちゃんと答えさせなさいよ！

あたくしのことも喋らせなさいよ！

何なのよ。

何なのよ、何なのよ、何なのよ！

こうなったら質問にソッコーで答えてやるわよ！

あなたが言い切る前に答えてみせるわよ！

あたくしだって登場し立ての頃は口が達者だったのよ！

負ける気はないのですわ！

そこの白猫！

ヘイ、カモオォォォォン！

ですのよおおおおおっ！！

「マリアはね、身長１６２ｃｍなんだっ♪　カレンちゃんは――」

「１５２ｃｍですわよ」

カレン、訊かれる前に（早口で）返答する。

「マリアはね、趣味がショッピングなんだっ♪　カレンちゃん――」

「テディベア作り、ドール遊び、一人ファッションショーですわよ」

「マリアはね、宝石の中ではダイヤモンドが一番好きなんだっ♪
カレンちゃ――」

「ルビーかしら」

「マリアはね、お金持ちの男の人が大好きなんだっ♪　カレン――」

「お父様に似て外見や強さは申し分ないのだけれど、ときどき本気で呆れるくらい鈍感な男が好きな状態ですわねえ」

「マリアはね、ブラジャーがDカップなんだっ♪　カレ――」

「Aカップですわよ」

「・・・・・・」

よし！

この白猫、ついに黙ったのですわ！

心の中、高らかに笑うカレン。

おーーっほっほっほ！

この勝負、あたくしの勝ち――

「カレンのおっぱい寂しいにゃ」

「――なっ・・・」

なんですってえええええええええええええ!?

カレン、完敗。

その頃。
シュウは双子の部屋に閉じ込められていた。
部屋に鍵を閉め、リン、ランとシュウに詰め寄る。
「何をしているのだ、兄上っ！！」
「何を考えているのだ、兄上っ！！」
リン・ランの迫力にたじろぎながら、シュウは訊く。
「な・・・、何だよ？」
「訊いているのはわたしたちなのだ、兄上っ！！」
「マリアのことどうするつもりなのだ、兄上っ！！」
「・・・ど・・・どうするつもりって・・・」シュウはリン・ランに背を向けた。「・・・何とかしてやりたいって思ってるよ」
「何とかって！？」
リンとランが声をそろえた。
「だからっ・・・、何とか。マリア、飼い主に捨てられちまったんだぜ？　困り果ててオレのところに来たんだろうし、このまま放っておけねえよっ・・・」
「マリアをまた飼うのかっ！？」

シュウは戸惑ったのち、答えた。

「・・・マリアがそうしたいって言うなら、そうしてやりたいと思ってる」

「――」

リン・ランに衝撃が駆け抜けた。

「去年のオレは親父の弟子だったから金なんてなかったけど・・・、今のオレは一流ハンターとしてちゃんとそれなりに稼いでる。今度こそ、マリアを幸せにしてやれるかもしれない」

「マリアのことなんか、うちの家族は誰も認めないぞ!?」

「分かってる。マリアが戻ってきたことで、うちの家族が揉めちまうことは分かってる。・・・でもオレ、本当にマリアが大切だったんだ。今でもそうだ。だから・・・」

「・・・わ・・・わたしたちが」リンとランの声に涙が混じった。

「わたしたちが、飼わないでって言っても・・・？」

「・・・・・・ごめん」

シュウが呟くように言って、リン・ランの部屋を出た。

ドアを閉めても、泣き出したリン・ランの声は廊下まで響いてくる。

シュウがキッチンに戻ろうとすると、目の前にマナが立ちはだかった。

「マナ・・・」シュウは苦笑した。「おまえや親父が言ったとおり、本当に波乱がやってきちまったな」

「波乱を起こしたのは兄ちゃんでしょ・・・」マナの冷淡な瞳がシュウを見上げる。「すぐにマリアさんを追い返せば、波乱なんか起きなかった・・・」

「お・・・追い返せねえよっ・・・！」

「あたしたちは家族だから、そう簡単に失わないだろうけど・・・」

「う、うん・・・？」

「カレンちゃんは失うかもね・・・」

「――えっ・・・？」

「それでもいいなら・・・」マナがシュウに背向け、その場を去りながら言う。「マリアさん飼ってもいいんじゃない・・・」

呆然として立っているシュウの視界から、マナが消えていく。

（カレンを失う・・・？）

シュウの胸に嫌な動悸が走った。

（そんなわけ・・・ねえよな・・・・・・？）

第３６話　波乱（後書き）

前作からご愛読いただいている読者さまから、「ハーフってモンスターのペット飼えるっけ！？」と突っ込みがあったので、本文のサラに加えてここにも書いておこうと思います。
本文でサラが言っている通り、モンスターを飼えるのは『ハンターの資格を持つ者』です。

前作・ＮＹＡＮＫＯの第１話で「モンスターを飼うなどと危険極まりないが故に、モンスターを飼うには、普通の人間よりも強い力を持った者だけが取得することができる、ハンターという資格を必要とする」と、説明しております。

前作・ＮＹＡＮＫＯでは人間しかハンターになれなかったからというものありますが、たしかにこれではちょっと”人間がモンスターを飼う方法”みたいに思えてしまいますね、すみません（汗）
ですが、もっとも重要なところだけ引き抜いて説明すると「モンスターを飼うには、ハンターという資格を必要とする」と、いうことになります。

つまり、しつこいようですがモンスターを飼えるのは『ハンターの資格を持つ者』となります。
前作ではハンターといえば人間だけでしたが、現在ではハーフもモンスターもハンターになれるので、ハーフのシュウもモンスターをペットとして飼えることができるのです。
純粋なモンスターのレオンも、モンスターを飼おうと思えば飼えちゃうのです（笑）

昨日２２時２０分頃メールくださった読者さまへ。

→の説明で納得してください。
ミックス犬が純血統の犬をペットに云々考えちゃダメです（笑）
単純に、シュウはハンターだからモンスター飼えるって思ってください。
それからカレンもマリアも持ってっちゃヤーヨ。

PS.
いつもお気遣いありがとうございます。これからはちゃんと休みも入れるので大丈夫です♪

第37話　上空5000m

マナの言葉に、シュウの胸が不安に包まれる。

（マリアを飼えば、カレンを失う・・・？）

そんなわけがないと頭の中で繰り返しながら、シュウはキッチンへと向かった。

キッチンの入り口で立ち止まり、中にいるカレンを見つめる。

カレンは、マリアのマシンガントークに付き合ってやっているようだった。

背後に気配を感じたマリアがシュウの方に振り返る。

マリアの視線を追い、カレンもシュウを見た。

その瞬間、カレンの眉が吊り上った。

「シュウ！」

「お・・・、おうっ？」

カレンは何を怒っているのか。

シュウは動揺する。

「ちょっと、あなた！　Dカップのペット飼ってたのですわねっ！？」

「へっ？」シュウはぱちぱちと瞬きをした。「あ・・・ああ、マリ

アね・・・」

「あたくしにバストは小さい方が可愛いとか言っておきながら、本当はDカップはほしいのですわね!?　あたくしに嘘を吐いたのですわね!?」

「うっ、嘘なんか吐いてねーよっ・・・!」

「うるせーな、何をまた騒いでんだよ」

と声が聞こえてシュウが振り返ると、リュウが溜め息を吐きながらシュウのところへとやってくるところだった。

マリアが訊く。

「えー?　シュウ、マリアのおっぱい不満なのー?」

「へっ?」シュウはマリアに顔を向けた。「い、いや、不満だなんて思ってねーよっ?」

「じゃあ」と、カレンが顔を真っ赤にして声をあげる。「あたくしのバストは不満ってことなのですわね!?」

「え!?」と、シュウはカレンに目をやる。「ちっ、ちげーよっ!　そうじゃねえってっ・・・!　ぶっちゃけ、オレは胸のでかさなんてどうだっていいんだよっ!!　な、なあ、親父っ!?」

と、リュウに助けを求めたシュウ。

リュウがきっぱりと言う。

「俺の好みはＦ６５だ」（↑キラのサイズ）

「は？」

「そして身長は１５５ｃｍ、ウエストは５５ｃｍ、ヒップは８２ｃｍの絶世の美女といえる顔立ちのブラックキャットなんかすげー好み」（↑つまりキラが好み）

「きっ・・・、訊いてねえっ！！」

「おまえが乳のでかさどうでもいいとか、俺にふられても知らねーし。んなことより、おまえどうする気？」

「何がだよ？」

「マリアのことに決まってんだろーが」

「あ・・・、う、うん・・・」

シュウはマリアを見た。
シュウが訊くよりも先に、マリアが瞳を潤ませて言う。

「マリア、またシュウのペットになりたいっ・・・！」

は・・・？
はぁ！？

カレンは驚愕してマリアの顔を見た。
黙っていられず、声をあげる。

「ちょ、ちょっとマリアちゃん！　サラが言うには、あなた、お金がなくなった飼い主を捨てて来たのでしょう！？」

マリアが必死に首を横に振る。

「マリア、そんなことしないにゃっ・・・！」

「あたくしはあなたのこと知らないけど、サラたちのあなたに対する態度を見れば分かりますわ！　去年あなたがシュウから飼い主を変えた理由も、シュウのお金がなくなったからなのですわね！？」

「ま、そんなとこだ」と、リュウが口を挟んだ。「ちなみに、今の飼い主はまだ捨てられてねーよ。シュウを飼い主にしてから捨てるんだろーよ」

「ちっ、違うにゃっ！」マリアが慌てたように声をあげた。「マリア、捨てられて――」

「ハッタリもいい加減にしろ」リュウが溜め息を吐く。「おまえ、俺を誰だと思ってんの？　おまえの飼い主の連絡先なんざ、ちょっと調べりゃ一発なんだよ」

「お、親父っ、マリアの飼い主と連絡取ったのかっ・・・！？」

シュウが訊いた。

「ああ、取ったぜ。ついさっきな。多額な借金抱えて毎日ぼろぼろになるまで働きながら、必死にマリアの行方探してたってよ」

「えっ・・・？」

シュウは困惑しながらマリアを見た。

マリアが笑顔になって言う。

「ばーれちゃったにゃ！　てへっ♪」

「ほ・・・、本当なのか？　マリア・・・」

「本当だよ？　マリア、お金ない男の人なんか好きじゃないもん。増してや、いっぱい借金抱えてる人のペットなんてやってられないにゃ。ねえ、シュウ？　マリアのこと、またペットにして？」

「ぬけぬけと・・・！」カレンの顔が引きつった。「ちょっと、あなたおかしいのですわ！　そりゃ、お金は大切よ！？　あたくしだって、お金には苦しまない環境で育ちましたもの！　でもあたくしは、愛する人が借金抱えようと見捨てなくってよ！？　シュウのこと一度捨てておいて、またペットにしてですって！？　笑わせないでちょうだい！」

「笑ってないよぅ、カレンちゃん。怒ってるよぅ」

「揚げ足を取らないで！」

「マリアを幸せにしてくれるのはお金だよ？　幸せがあるところに行って何が悪いのかにゃ？　ねえ、シュウ？　マリアをまたペットにしてほしいにゃ？」

マリアがシュウを見る。

リュウもシュウを見、カレンもシュウを見た。

2人と1匹の視線がシュウに突き刺さる。
キッチンの中が静まり返って十数秒。

シュウが口を開いた。

「分かった」

「えっ・・・!?」カレンに衝撃が走った。「そ・・・それって、マリアちゃんをまた飼うってこと・・・!?」

「ああ。オレもまったく借金ないわけじゃねーけど、あと少しで親父に返し終わるし。マリアがオレに飼われて幸せだっていうなら、オレはマリアを飼う。オレは、マリアを幸せにしてやりたいんだ」

何かしら、その台詞は・・・?
意味が分からないのですわ。

カレンが呆然としてシュウを見つめる。

マリアを幸せにしてやりたい?
何かしら、それ。
どういうことかしら、それ。

シュウ、あなた、どういうつもりなの?
あたくしの気持ちを知ってて言っているの?
それがあたくしへの答えなの?

さんざんあたくしのこと構ってきたクセに。
キスしたクセに。

今までのその態度は何だったの？

最近、サラがあたくしに言ってくれていたわ。
シュウは、もうすぐであたくしに振り向いてくれるって。
あたくしもそれを感じていたところなのに。
もう少しであたくしのこと好きだって、言ってくれると思っていたのに。

それが何？
元ペットが戻ってきたから幸せにしてやりたい？
しかもあなたのお金だけが目当てのような？
あたくしじゃなくて、そんな子を選ぶというの？

現在あなたの一番近くにいたのは、あたくしのはずだったのに。
あたくしは、純粋にあなたのことが好きだったのに。

期待って、するものじゃないのね――。

マリアが舞い上がってシュウの首に抱きつく。
それを見ながら、リュウが溜め息を吐いた。

「・・・・・おまえのバカさにはほとほと呆れたぜ、シュウ」

そう言い、リュウがカレンの手首を引いてキッチンから去っていく。

「おっ、おい、親父っ・・・！」シュウは慌ててリュウを追った。
「カレンどこ連れてくんだよっ・・・！？」

「カレン、仕事行く準備してこい。おまえ今日から俺の弟子にする」

リュウがそう言ってカレンの背を押すと、カレンが頷いて2階へと上って行った。

シュウは狼狽しながら言う。

「カっ・・・カレンが親父の弟子ってどういうことだよ!?　親父、弟子なんていらねーって言ってたじゃねーかっ!!」

「仕方ねーだろ。カレンはもうおまえのファンに目ぇ付けられちまってんだ。ハンターやめさせて実家に帰せば、またこの間みたいなことが起こってもおかしくねえ」

シュウの顔が困惑する。

「・・・い・・・、意味わかんねえよ、親父っ・・・・」

「おまえ、本当バカだな」リュウが溜め息を吐いた。「カレンを失ったことも分かんねーのか」

「えっ・・・!?」

「マリアを飼うっていうことは、そういうことだ。おまえごときがどっちも幸せにできるわけがねえだろ？　おまえはマリアを幸せにすることを選んで、カレンを捨てたんだよ」

「ちっ、違――」

「違わねーよ。おまえ、自分がカレンのこと好きだって知ってる？　知ってるわけねーよな、バカの上にすげー鈍感だもんな。ほんの

少し手を伸ばせば届くところにカレンはいたってのに、とんだ大失態だったな。カレンはもう上空５０００m地点まで行っちまったぜ。手ぇ伸ばしても届かない。ハイ残念バーカ、ご愁傷様」

リュウが玄関へと向かっていく。

マナの言葉がシュウの頭に再び蘇った。

（マリアを飼えば、カレンを失う・・・）

そんなわけがないと、シュウは頭の中で繰り返して願っていた。

（オレ・・・、カレンを失ったのか・・・？）

そんなわけがない。
そんなわけがない。
そんなわけがない。

シュウは頭の中で繰り返す。

２階からぱたぱたと駆け下りてくる足音が聞こえて、シュウは慌てて玄関へと走って行った。

カレンがリュウの前に立っている。

「準備できましたわ、リュウさま」

「ん。じゃ、行くぞ」

「はい」

「まっ、待ってくれっ！　カレンっ！！」

カレンに向かって伸びたシュウの手。

「触らないで！」

露骨に嫌な顔をしたカレンに振り払われた。

「――」

じょ、上空５０００ｍっ・・・！！

シュウ、大衝撃。

リュウが自分に足の速くなる魔法を掛け、カレンに上着を被せて脇に抱えた。

「んじゃ、おまえもさっさと仕事行けよ」

シュウにそう言い、雨の中を走って行ったリュウ。

もともとバケモノ並の足の速さに加えて魔法も掛かったとなれば、その背はあっという間に見えなくなってしまった。

呆然と立ち尽くすシュウの背に、ぴょんぴょんと駆けてきたマリアが抱きついた。

「シュ～～ウっ！　マリア今日モデルのお仕事オフだから、シュウのお仕事瞬間移動で手伝うにゃん♪　いっぱい稼ごうねっ♪」

「・・・・・マリア」

「にゃ？」

「オレ、おまえには本当に幸せになってほしいんだ」

「分かってるよぅ」

「でもオレ、カレンのこと失いたくなったんだ」

「ふーん？」

「ど、どうしよう。や、やばい・・・」

シュウはごくりと唾を飲み込んだ。

（プリーズ上空５０００ｍからダイビーーーング・・・！！）

第３７話　上空５０００ｍ（後書き）

何このサブタイトル・・・（笑）

昨日２１時頃メールくださった読者さまへ。

うん、私もシュウに同じこと言いたいですわ。

第３８話　上空５０００ｍまでの階段

カレンに手を伸ばしたら振り払われた。
カレンの部屋のドアをノックしたら鍵を掛けられた。
カレンの隣に座ったら、カレンが即その場から去っていった。

カレンの名前を呼んだら、カレンが振り返ってくれた。
でもその赤茶色の瞳は、とても冷淡だった。

（オレは地上。カレンは上空５０００ｍ。まるで手が届かねえ・・・）

自分の部屋に備え付けてあるバスルームで頭からシャワーを浴びながら、シュウは絶望しかける。

「プリーズ上空５０００ｍからダイビーングっ・・・！」

「なぁに、それ？」

と、マリアの声。

シュウが振り返ると、マリアが全裸でバスルームに入ってきていた。
シュウの首にしがみ付く。

「シュウ、カレンちゃんのこと考えてたの？」

「・・・・・ああ」

「もうマリアがいるんだから、いいじゃない。あんまりマリア以外に夢中にならないでほしいにゃ」

マリアの唇がシュウの唇に重なった。

「・・・マ、マリア・・・」

シュウは戸惑いながら唇を放す。

カレンの顔が頭に浮かんで。

でもマリアは構わず唇を重ねてくる。

その強引な様は去年と変わらない。

「マリア、シュウのこと大好きにゃ」

それも去年と変わらないマリアの台詞。

シュウはその言葉を疑うことはなかったし、実際マリアの本音だった。

シュウの金が底を尽きるまでは。

「ねえ、マリアのこと抱いてよぅ」

その台詞も、去年マリアを飼っていたとき毎晩のように言われた。

そしてシュウはマリアが望むだけ、マリアを抱いていた。

と言っても、リュウほど出来ないが。

（ああ、そうだよ。バケモノの親父には敵わねーよ。オレ3回が限界だし。――って、そんな情報バラさせるんじゃねーよ作者っ！！）

なんて赤面しつつ、シュウはマリアの肩を持ってマリアを引き剥

がした。

「ご・・・、ごめん、マリア。オレ今、そういう気になれなくて・・・」

「シュウ・・・？」マリアの瞳が潤む。「マリアのこと、ペットにしてくれたんだよねっ・・・？　それなのに、マリアのこと嫌いなのっ・・・？」

「そうじゃねえよ、そうじゃねえっ・・・！」

「Dカップじゃ嫌？」

「そっ、そうでもなくてっ・・・、その・・・カレンが悲しむ気が――」

「自惚れにゃ」

うん、そうだよね。
オレの自惚れだよね。

シュウが苦笑して再びマリアに唇を奪われたとき、バスルームの戸が蹴り開けられた。

バァン！！

「ハイハイ、そこの白猫退いてねー」

サラだった。
しかも全裸。

シュウが仰天してしまう中、サラがマリアの首根っこを引っ掴んでバスルームから放り投げる。
脱衣所に鍵を掛け、浴室にも鍵を掛ける。

「お、おい、サラ!?　おまえ何して・・・!?」

シュウは慌ててサラに背を向けた。
マリアが入ってきたときは驚倒しなかったが、年頃の妹が入ってきたとなれば驚倒してしまう。

「16の女の子が、恥じらいなく兄ちゃんの前にマッパで出てくるのっておかしくねえっ・・・!?」

「気にすんなって。入れ替わったときにお互い見てんでしょ」

サラが言いながら風呂椅子に座った。
ボディソープを含ませたバススポンジをシュウに渡して言う。

「ほら、背中流して」

「な、何様だっ、おまえはっ・・・!」

「早くしろっての」

「・・・ま、まったくもうっ・・・・!」

シュウは戸惑いながらサラの背に回って膝を付き、サラの背中をバススポンジで擦り始めた。
めっきり強くなったサラだが、キラのように細い背をしている。

「ねー、兄貴」

「何だよ」

「アタシさ、もうすぐで兄貴は自分がカレンのこと好きだって気付いて、カレンにそれを伝えて、カレンとくっ付くんだと思ってた。そう、確信してた。なのに、こんなことになってビックリだよ」

「・・・ご・・・ごめん」

「兄貴は、カレンよりマリアなんだね」

「そっ、そういうんじゃねえっ！」シュウは声をあげた。「そういう気でマリアをペットにしたんじゃねえんだよ・・・！　オレ・・・、オレ、去年マリアを飼ってたときから、マリアを幸せにしてやりたかったんだ。だから――」

「それは兄貴自身の手じゃなくてもいいんでしょ？　マリアが兄貴よりいいって思う人が現れたら、兄貴はその人にマリアを渡すんでしょ？」

「ああ・・・。もちろん、オレよりマリアを幸せにできる人が現れたなら、オレはその人にマリアを委ねるよ。マリアはそれを望むから」

「だったら兄貴がマリアの飼い主になるなんてやめて、他にマリアの飼い主を探せばいい。それでマリアを兄貴よりも幸せにできる人に渡して、兄貴はカレンを愛せばいい」

「で・・・、でもさ、カレンはもう遠いところにいるっていうか・・・」

「ああ、親父にカレンは上空５０００m地点にいるって言われたんだって？」と、サラが笑った。「たしかにね。それくらいカレンは届かないところに行っちゃったよ。アタシが兄貴のこと話そうとしても、まるで聞いてくれないし」

「そ・・・そか・・・」シュウの胸が痛む。「だからもう、オレ・・・、カレンのこと諦め――」

「好きなんでしょ？」

サラが声を強くして、シュウの言葉を遮った。
顔をシュウの背後に向けて訊く。

「自分がカレンのこと好きだって、気付いたんでしょ？」

「・・・き・・・、気付いたよ・・・さすがに」

「だったらカレンのこと追えばいい！　今度は兄貴が追いかければいい！　上空５０００mまでの階段駆け上がるくらいの根性見せろ、このバカ兄貴っ！！」

「・・・サ、サラ――」

「そんなに」と、サラがシュウの股間に目を落とした。「えげつないくらい立派なもん付けてんだからさー」

「――ばっ・・・！？」シュウは赤面し、慌てて股間を隠す。「み

っ、見てんじゃねえっ！！　だ、大体こんなとこのデカさが何で根性に繋が――」

「ああ、アタシはデカさよりカタさ派ね」

「は！？　おま、何の話して――」

「大切なのは1に愛、2にカタさ、3にデカさ、4にテク」

「おい――」

「その比率としては8：1：0．6：0．4かなあ」

「こら――」

「よって愛があればOKっていうか？」

「サラ――」

「ああでも、レオ兄のカタさは天下一品・・・！」

「いっ、いい加減黙れえええええええっ！！」シュウはサラの口を塞いだ。「女が親父に似るととんでもねえことになるな、オイ！？　恥じらいをどこに落としてきたおまえはよ！？　え！？」

サラがシュウの手を離し、溜め息を吐く。

「話ずらすなって、兄貴」

「お、おう、ごめん――って、それはおまえだろうがっ！！　話を

戻せ、話を！！」

「さっき述べた大切な順番と比率についてはあくまでもアタシの中のことで――」

「そこじゃねえっ！！　もっと前だよ、もっと前！！」

「ああ、もっと前ね。早く言えっての」

「お、おう、ごめん――って、分かれよそれくらいよ！？」

「で、何だっけ？」

「忘れたのかよ！！」

「冗談だって」

そう言ってサラが笑い、顔を前に戻した。

数秒間を置き、サラが再び口を開く。

「兄貴」

「何」

「兄貴ってさ、来るもの拒まず去るもの追わずって感じだよね。去年マリアを飼ったのも、マリアに泣きつかれたからだったし。マリアが望んだものは、何でも与えてやってるように見えた。マリアが他の人のところに行きたいって望んだときも、兄貴はまったく止めなかったね」

「・・・ああ」

「兄貴マリアが去っていってからしばらく空元気だったよね。アタシたち家族に心配かけないように必死に笑顔作ってたんだろうけど、兄貴がひどく悲しんでたのはみんな分かってたよ」

「・・・そうか」

「アタシにはとてもじゃないけど出来ないや。レオ兄がアタシのところを去ろうとしたら、アタシは必死にレオ兄を追うよ。泣き喚いてすがり付いて、どんなにカッコ悪くてもレオ兄が傍にいてくれるならいいよ。レオ兄なしの生き方なんて、今さら分からなくて・・・」

力も気も強いサラが、何だか弱々しくシュウの目に映った。

そして不思議と、リュウのキラに対する思いを聞いている気がした。

たしかシュウとカレン、サラとレオンのダブルデートの日にレオンが言っていた。

リュウに似たサラは、とても弱い部分を持っていると。

あのときは分からなかった。

サラとリュウの弱さなんて。

特に、リュウに弱いところがあるなんて。

でも今、それを分かった気がした。

サラが続ける。

「兄貴って強いんだなって、アタシ思うよ。愛する人が遠くに行っちゃっても耐えられるなんてさ。愛する人の幸せを一番に考えられる兄貴はすごいと思う。・・・でもさ、もうちょっと自分の幸せのために必死になってみてもいいんじゃない？」

「・・・でも、もうカレンはさ・・・」

「マリアを幸せにするのは兄貴じゃなくて金。カレンを幸せにするのは金じゃなくて兄貴だった。そして兄貴を幸せにするのもカレン。アタシさ、兄貴といるときのカレン見てるの好きだった。本当、可愛くてさ。それから、カレンといるときの兄貴を見てるのも好きだった。去年マリアを失って以来ぶりに見たよ、あんなに幸せそうな兄貴の笑顔。毎日でなくても、よく見れたらいいなって思う。・・・だからさっ・・・」

と、サラが涙に声を詰まらせた。

「諦めるなんて言わないで、上空５０００ｍまでの階段上りきれってんだっ・・・！」

「・・・サラ・・・」

サラの背が少し震えている。

（そうだな・・・、サラ）

シュウは微笑んだ。

（上空５０００ｍまでの階段を上ろう。オレは、カレンのことが好きなんだから。ここで諦めたら、情けない兄ちゃんになっちまうよ

な）

シュウの腕がサラを抱き締める。

「ありがとな、サラ。おまえって可愛い奴」

「あっ、兄貴・・・！？」と、サラが驚愕した様子でシュウの顔を見た。「アタシ兄貴とエッチは激しく抵抗があるん――」

「当たり前だっ！！」

風呂上り、シュウはカレンの部屋のドアをノックした。

カレンの返事がない。

「カレン？　もう寝たか？」

「寝たわ」カレンの刺々しい声が返ってきた。「だから何も聞こえなくってよ」

「んじゃ、独り言」

シュウは少し間を置いてから続けた。

「オレは今地上にいて、カレンは上空５０００ｍにいて・・・って、意味わかんねーか。まあ、今オレとカレンにはそのくらいの距離ができちまってて、今のオレがカレンに手を伸ばしてもまるで届かないんだけど・・・。オレ、カレンのいるところまでの階段上ろうと

してるとこ。やっと気付いたんだよ、オレはカレンのことが好きだって。だから・・・、階段上る」

カレンの返事はない。

「よって、そこで待っててくれると嬉しい・・・です。・・・以上、オレの独り言。おやすみ」

シュウは、カレンの向かいにある自分の部屋に戻った。

中に入るなり、マリアに唇を奪われる。

「マリアっ・・・」シュウはマリアの口を手で塞いだ。「んなことしなくても、金ならやるから」

マリアがぱちぱちと瞬きをし、シュウの手が離されてから口を開く。

「エッチしなくてもいーんだ？」

「ああ」

「シュウって、それでもお金くれちゃうんだ？」

「ああ」

「変なのー。ま、それならそれで楽だけどにゃんっ☆」

マリアがシュウから離れ、自分の荷物の中から宝石を取り出して遊び始める。

宝石に囲まれてはしゃぐマリアをしばらくの間見つめたあと、シ

ユウはベッドに寝転がった。

（まずは、マリアにこれ以上ないくらいぴったりの飼い主を見つけてやること・・・だな）

第３９話　新・飼い主

マリアにとって、これ以上ないくらいぴったりな飼い主。

シュウは考える。

（何と言っても第一に金持ちだよな。マリアはモンスターだから、必然的にハンターの資格を持つ者・・・か。マリアの前の飼い主、一流ハンターなのに借金までできちまったんだっけ。もしかして、超一流ハンターじゃないとダメなのか？）

朝食と弁当作りのあと、シュウは書斎にいるリュウのところへと向かった。

「親父、お願いがあるんだけど」

「何だ。カレンならおまえの弟子に戻りたくねーってよ」

「・・・そ、そうじゃなくてさ。その・・・、葉月島の超一流ハンターの連絡先を教えてほしいんだけど」

「は？」リュウが眉を寄せた。「何で」

「マリアの飼い主・・・探そうと思って」

「・・・・・ふーん。葉月島はハンターが多いが、超一流ハンターは俺とリンク、レオン、師匠を含めて現在３０人もいねえ」リュウは言いながら、書類の中から超一流ハンターの連絡先が書いてある紙を集めた。「大抵はもうすでにモンスターのペット飼ってるか、

飼ってなかったらモンスター嫌いの奴が多いから、難しいと思うぜ？」

「そ・・・そか。でも、一応訊いてみるからさ」

シュウがリュウから葉月島の超一流ハンターの連絡先が書かれた紙を受け取り、書斎から出て行く。

リュウの予想。

（最終的には困り果てて、シュウは俺に助けを求める）

リュウはにやりと笑い、携帯電話を手にした。

（そしてシュウを助けてやることは俺の利益に繋がるぜ）

仕事から仕事への移動中、シュウはリュウから教えてもらった葉月島の超一流ハンターへと電話をかける。

ホワイトキャットのメスを飼ってくれないかと頼んでみるが、リュウの言っていた通り受け入れてくれる超一流ハンターはいなかった。

その理由は、

もうすでにモンスターを飼っていて、これ以上飼うことは難しいから。

モンスターは敵にしか見えなくて、愛でることは難しいから。

モンスターだろうが動物だろうが、ペットはいらないから。

などなど。

（すーげー困ったし・・・）

シュウは苦笑する。

（葉月島の超一流ハンターがダメとなりゃ、一流ハンターか？　いや、でも、そうなると1年も持たないうちにマリアの飼い主をやめるハメに・・・。こうなったら他の島しか・・・）

仕事を終え、夜に帰宅したシュウ。

自分の部屋へと向かい、今日はモデルの仕事へと行っていたマリアに訊いてみる。

「なあ、マリア」

「おっかえりー、シュウ♪」と、マリアがシュウの首に抱きつく。

「とぉーってもお金持ちなマリアの飼い主見つかったかにゃ？」

「いや、それがまだで・・・」シュウは苦笑した。「あのさ、他の島になってもいい？」

「えー」マリアが顔をしかめて言う。「マリア、やっぱり葉月島が一番いいよぅ。猫モンスター専門のお店がいーっぱいあるしにゃっ♪　卯月島もなかなか良かったけど、戻ったら前の飼い主に捕まっちゃいそうで嫌だしー」

「そ、そか。う、うーん・・・」

ヘルプミーだぜ、親父っ・・・！

シュウはリュウのところへと向かった。

書斎の中、リュウは回転椅子に座って機嫌良く回っていた。

「なあ、リュウ。おまえ、めっさ機嫌ええなあ」

と、リュウと電話中のリンク。

「おう、分かったかリンク」

「分かるわ、声明るいし。おまえ今、顔にやけてるやろ」

「んなことねーよ」

と言うリュウの顔は、今朝からにやにやしっぱなしである。

「嘘こくなや。何年おまえの親友やっとると思ってんねん。おれには今のおまえの顔がよく見えるで。そんなに嬉しいんか、シュウがマリアの飼い主探しに困り果ててておまえを頼ってくるのが」

「おうよ。俺って何て優しいお父上様だ」

「シュウを助けてやることによって、おまえにええことがあるんやろ」

「リンク、おまえ意外と鋭いな。ガキ面のクセに」

「うっさいわ」電話の向こう、リンクの顔が引きつる。「んで？シュウを助けることによって、おまえにどんなええことがあんねん」

「ふっふっふ」

「キモいわ」

「ついに・・・！」

「ついに？」

「キラを飼い始めて約2ヵ月半からまじすーげー厄介だった虫を追っ払えるぜ！」

「キラを飼い始めて約2ヵ月半からまじすーげー厄介だった虫？」鸚鵡返しに訊き、リンクが数秒考える。「・・・って、王子のことか？」

「よく分かったな、アホ面のクセに」

「うっさいわ！　ていうか・・・」電話の向こう、リンクが苦笑した。「おまえ、王子に押し付けるなんて何様のつもりやねん」

「押し付けるとは人聞きが悪いぜ。今朝俺が王子に電話して『すげー可愛い18歳のホワイトキャットのメスがいるんすけど飼いませ

んか』って言ったら、何て返ってきたと思う」

「あの王子のことやから、とりあえず飼いたいって口から出たんちゃうん？」

「そう、そうなんだよ。『おお、是非とも飼いたいぞ』だってよ。さすが超・女ったらし！　ナイスだぜ王子っ！　これで王子はもうキラに顔合わせできねえ！　しょっちゅう『舞踏会にキラを連れてこい』だの『キラとデートさせろ』だの『もう妃にはできないが、せめてペットにさせろ』だの言われてたが、マリアを飼ったとなればもうそんな台詞言えねえだろ！　言いたくても言えねえだろ！　キラの顔見たくても合わせる顔ねえだろ！　さんざんキラのこと口説いてきたんだからな！」

「楽しそうなやあ、おまえ・・・」

「ふっふっふ」

「キモいて」

「ああ、もうダメだぜ。嬉しくて楽しくて愉快で俺はもう耐えられん・・・！　俺のキャラが前作のようにまた崩れると思うと嫌だが、今の主人公がシュウな分まだマシだろう。ああ、ダメだ。もうダメだ。込み上げてきたぜ・・・・・・！！」

「は？」

何が？

とリンクが訊く前に、リュウが答えた。

「ぶわーーーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ！！！」

正解は、大爆笑。

「うわ、リュウの大爆笑聞いたのこれで人生3度目や・・・！」

1度目は約18年前、リュウが初めてキラの絵を見たとき。
2度目は、コウノトリは男女が一緒に呼べば来るものだと信じていた17歳のミーナと一緒に、リンクが窓から「コウノトリさあああああああああん！！」と叫んだとき。

そして現在、リンクは3度目のリュウの大爆笑を聞いている。
リュウの古くからの親友であるリンクだが、リュウが大声で笑っている姿には驚倒してしまう。

そして、

「おっ・・・、親父っ・・・・！？」

リュウに用があって書斎までやってきたシュウも驚倒する。
シュウの人生では、リュウの爆笑する姿を見るのはこれで2度目である。
1度目はリンクとミーナがコウノトリを呼ぼうと叫んだとき。
当時4歳と幼かったシュウだが、リビングのソファーでリュウが笑い転げているというあまりにも衝撃的な光景は今でもはっきりと覚えている。

シュウがいることに気付いて、リュウがはっとして爆笑を止めた。

ぶちっとリンクとの電話を切って言う。

「・・・・・おまえは幻を見た、シュウ」

「ま、幻？　いやオレ、今たしかに親父がバカ笑いをしてる姿を――」

「夢だ。幻だ。おまえ仕事で疲れてんじゃねーの」

「・・・そ、そう思うことにするぜっ・・・！」

本気でコエェェから。

シュウは話を切り出した。

「な、なあ、親父。マリアの飼い主のことなんだけど・・・」

「何だ（よし、早く言え！）」

「その・・・さ、やっぱり葉月島の超一流ハンターでマリアを飼ってくれる人が見つからなくてさ・・・」

「だろうな。諦めて自分で飼うことにしたか（ＹＥＳと答えたらしばく）」

「ち、違うっ・・・！」シュウが首を横に振る。「で、でも、オレの頭じゃもう飼い主見つけてやれなくてっ・・・！　お願い、親父。何とかしてくれっ・・・！」

「甘えんな（と、俺らしく焦らさねーとな）」

「甘えたこと言ってるのは分かってる。でも、お願いだよ親父・・・！」

「・・・・・・（すがれ。もっと俺にすがれ。偉大なお父上様にすがれ）」

「オレ・・・、オレ、上空５０００ｍまで上りたいんだっ・・・！　お願いだよ、親父っ・・・！！」

「・・・・・・ったく、仕方ねーな」とリュウは溜め息を吐き、「何とかしてやるよ（おっしゃあ！　シュウ、俺は今、おまえが果てしなく可愛いぜ！）」

「あっ・・・ありがとう親父っ！！　やっぱり困ったときは親父だよなっ！！」

「まーな（グッバイ、王子！！　ぶわーーーっはっはっはっは！！！）」

リュウは再び携帯電話を手に取った。
シュウが首を傾げる。

「？　誰に電話かけて・・・？　もしかして親父、オレのためにもう飼い主見つけて――」

「もしもし、王子？　明日の朝、例のホワイトキャット連れて行くんでよろしくお願いします。それじゃ」

リュウが電話を切る。
シュウはぱちぱちと瞬きをした。

「オージさんて、誰？」

「ちゃんとハンターだぜ？　まあ、顔パスで受かったんだけど」

「顔パスで？　カレンみたいだな」

「カレンも金持ちのお嬢だが、それとは比べ物にならないほどの金持ちだから安心しろ」

「そんなにっ？　うわあ、すげー人がいたもんだなあ。葉月島の人だよな？　マリアは葉月島がいいって言うから、違ったら困るんだけど」

「ああ、葉月島だぜ」

「葉月島のどこに住んでんの？」

「ヒマワリ城」

「は？」

「ヒマワリ城」

「・・・・・・」

リュウの言葉を理解するまでに数秒。

シュウの顔がみるみるうちに驚愕していった。

「オージって、おーじって、オウジって、おうじって・・・・・・

！！！」

王子様かよっ！！！

翌朝。

シュウは、リュウとマリアと共にヒマワリ城の門の前に立っていた。

（まじ信じらんねー、親父・・・）

シュウはごくりと唾を飲み込む。

（王子に押し付けるなんて、恐れ多すぎるだろっ・・・！！）

と、恐縮してしまっているのはシュウだけである。

リュウの顔を見れば何故かウキウキ。

マリアの顔を見ればえらくワクワク。

シュウとリュウ、マリアが門の前にやってきてから１０分後。

ブロンドの長いウェーブヘアに、ブルーの瞳。

若い頃と変わらず、まるで絵本に出てきそうな葉月島ヒマワリ城の王子が登場。

「申し訳ございませんでしたっ！！」

と、思わず頭を深々と下げてしまうシュウ。
王子が驚いたように目を丸くした。

「何のことだ、シュウ？」

「そっ・・・そのっ、このマリアのことをっ・・・」

マリアと聞き、王子はシュウの傍らにいたマリアに顔を向けた。

「おおっ」と、瞳を輝かせる。「これはこれは何と愛らしい子猫ちゃんだ・・・！　私は嬉しいぞ、リュウ！」

あれ、なんかすげー喜んでる？

シュウは眉を寄せて頭を上げた。
きらきらと瞳を輝かせている王子に、マリアがきらきらと瞳を輝かせて抱きつく。

「王子さま、マリアのことペットにしてくれるかにゃ？」

「ちょ、マリアっ・・・！」

慌てて王子からマリアを引き剥がそうとしたシュウだったが、王子がマリアを抱き締めて言う。

「そなたのようにとても愛らしいレディなら、私は大歓迎だぞマリア」

「にゃあんっ、マリア嬉しいにゃあっ！」

マリアにキスされ、王子がでれでれと鼻の下を伸ばす。
リュウがにやりと笑って、王子の肩にぽんと手を乗せた。

「良かったすね、王子」

「ああ。礼を言うぞ、リュウ」

「気にしなくていいっすよ。王子に愛猫ができたって、キラにも伝えておきます」

「ぐっ・・・！」リュウの顔を見る王子の顔が引きつる。「ま、待て、リュウ・・・！　キ、キラには伝えないでくれっ・・・！」

「いやいや、うちのキラにも王子の幸せを祝ってもらわねーと。キラに祝いの品持ってこさせましょうか」

「えっ！？」

「どうしたんすか、嫌なんすか。ああ、キラに顔見せられないんすね、そうっすよね、すみません」

「リュ、リュウ、おまえ仕組んだのだなっ・・・！？」

「何のことすか。んじゃ、帰るぞシュウ」

「おっ、おいコラ、リュウ！　待てっ！」

王子に向かって短く笑い、リュウが自分とシュウに足の速くなる魔法をかけてその場を去った。
王子がぷんすかと怒ってリュウの背を見送る。

「なっ、なんって奴だリュウは！」

「も、申し訳ございません・・・」

と、シュウはもう一度王子に深々と頭を下げた。

（親父、あんた・・・、オレのためでもなくマリアのためでもなく、自分の利益のためだったんだな・・・・・・・・）

リュウらしすぎて、シュウは苦笑するしかない。

王子がシュウを見て言う。

「頭を上げろ、シュウ」

シュウは頭を上げた。

王子が言う。

「中身は父親に似るでないぞ、シュウ」

「もちろんです」

「おまえはマリアの元飼い主だそうだな」

「は、はい」

「安心しろ。私はマリアを幸せにすると約束する」

「あっ、ありがとうございますっ・・・！」

と、シュウは再び王子に頭を下げた。
そのあとマリアの頭に手を乗せて言う。

「よかったな、マリア」

「うんっ♪」

「元気でな」

今度こそ幸せになれよ。

シュウはマリアの笑顔を少しの間見つめて微笑んだあと、自宅へと踵を返した。
カレンの顔を思い浮かべながら全速力で走る。

（オレ、階段どこまで上れたかな・・・）

第３９話　新・飼い主（後書き）

マリアの飼い主を予想した読者様・・・。
うん、大正解・・・・・・ｏｒｚ

第４０話　只今、上空２５００ｍ

マリアを王子に渡し、全速力で自宅へと帰ってきたシュウ。
真っ直ぐ2階へと駆け上がる。

カレンの部屋の前に来て立ち止まり、走って乱れた呼吸を整えてからドアをノックした。

「カレン、オレ・・・、シュウだけどっ・・・！　オレ、もうマリアの飼い主じゃないから。マリアにはもう、別の飼い主がいるからっ・・・。そのっ・・・、オレの弟子に戻ってきてくれねえかなっ・・・、お願いだからっ・・・」

そうシュウが言ってから十数秒。

カレンがドアを開けた。
シュウの顔を見ずに部屋から出て階段を降りていく。

「カっ・・・、カレンっ・・・？」

シュウは戸惑いながらカレンを追った。
1階に降りたカレンがリビングに向かい、そこにいたサラに訊く。

「ねえ、サラ。リュウさま知らないかしら？」

「親父ならついさっきハイテンションで帰ってきて『グッバイ王子！』とか言いながらママのこと抱っこしてスーゲー嬉しそうに寝室に入ってったから、今もろにエッチの真っ最中かと」

「そ、そう・・・」

カレンが顔を赤くしながらも、リュウとキラの寝室に向かう。
シュウもそのあとを着いて行こうと思ったが、サラに腕を引っ張られて振り返った。

「ねえ、兄貴。マリア、無事に王子のペットになったってことだよね？」

「ああ」

「あっ、兄上っ・・・？」

と、声がしてシュウは振り返った。
リビングの入り口の壁に身を隠すようにして、リンとランが立っている。

おどおどとしながら、シュウの顔を見つめて訊く。

「あっ、兄上っ、マリアのこと手放したのかっ・・・？」

「あっ、兄上っ、マリアはもう兄上のペットではないのかっ・・・？」

「ああ」と、シュウはリン・ランに微笑んで言う。「マリアはもう大丈夫だ。何せ新しい主は王子だから、オレなんかもう生涯必要とされねえよ。この間は泣かせちまって悪かったな、リン・ラン」

シュウの顔を見つめながら、視界がぼやけていくリンとラン。
ぽろぽろと涙を零し、シュウにしがみ付いた。

「ふっ・・・ふにゃあああああん！　兄上えええええええええええっ！」

「おー、よしよし。今日兄ちゃんと一緒に寝ようなー」

声をあげて泣くリンとランの頭を撫でながら、シュウはサラの顔を見た。

「ん？　何？」

と、サラがシュウの顔に耳を寄せると、シュウは小声で訊いた。

「オ・・・オレ、もしかしてまだ階段少しも上れてない？」

「何でそう思う？」

「カレンがまだ口きいてくれないんだけど・・・」

「アタシの予想としてはー」と、サラが笑って言う。「兄貴、階段の半分まで一気に駆け上がったと思うよ？」

「と、いうことは・・・」

オレ只今、上空２５００ｍ？

もうそこまで階段を上れたのだろうかとシュウが考えていると、カレンがリビングへと戻ってきた。

シュウの顔を見てカレンが口を開く。

「今リュウさまと話してきて――」

「え、何」と、サラがぱちぱちと瞬きをする。「エッチの真っ最中に親父とママの寝室に入ったの？　兄貴みたいなことするね」

「いいえ、ドアの前で・・・」

と、カレンが頬を染めながら苦笑する。

「そ、それで？　カレン」

シュウが話を催促すると、カレンが続けた。

「あたくし、あなたの弟子に戻ることにしたのですわ」

「えっ・・・！？　ほ、本当にっ！？」

「ええ」

「おっ・・・おおおおっ・・・！」

オレ・・・！

オレ今、まじで上空２５００ｍにいるっ！！

シュウの瞳が感動に輝く。

「ありがと、カレン！」

そう言ってシュウが笑うと、カレンがシュウから顔を逸らして言った。

「早く着替えてきたらどうかしら。あたくしはもう、仕事へ行く準備整っていますわよ」

「ちょ、ちょっと待ってて！　すぐ着替えてくるからっ！」

シュウが2階へ向かい、

「あ、わたしたちも学校へ行く準備しなきゃだぞっ」

リン・ランも2階へと向かう。

そのあと、サラがカレンを見て訊いた。

「兄貴、上空２５００m地点まで上ってきた？　兄貴の弟子に戻ってあげたってことは」

「まあ、そうですわね・・・」カレンが俯きがちになって言う。「『嫌いではない』というレベルになりましたもの。あたくしがリュウさまの弟子だと、リュウさまに多大なご迷惑をかけてしまって・・・。リュウさま、仕事から仕事へと移動するとき、あたくしを脇に抱えて走らなければならないのですわ。本当にもう申し訳なくてどうしようかと考えていたところだったから、ちょうど良かったのですわ」

「そか。・・・兄貴のこと『嫌い』になってたんだ、やっぱり」

「・・・ええ。シュウがマリアちゃんを飼って幸せにしてやりたいって言ったとき、本当にショックだったの。何だかとても裏切られた気分になって・・・。そのせい・・・かしら・・・」

「うん？」

「あたくし、またシュウを好きになれるかどうか分からないのですわ。・・・でも、シュウがちゃんとマリアちゃんに別の飼い主を見つけてきて、あたくしのいる上空５０００ｍ？　まで、本気で上ってくるつもりだというのはよく分かった・・・。シュウがあたくしのいるところまでの階段、どれくらい上れるのか見てみたい気もするわ」

「じゃあさ、上空５０００ｍ地点で動かずに待っててあげてほしいな。アタシの兄貴は、どんなに時間が掛かっても上り切るから・・・絶対に」

カレンが顔をあげ、真剣なサラの顔を見つめる。
少し間を置き、

「・・・わかったわ」

そう言って頷いた。

「ありがと、カレン」

そう言って笑ったサラ。
がしっとカレンの首に腕を絡ませて言う。

「とりあえずこの話は落ち着いたことにして、水着買いに行ってみよおおおおおおおおおっ！！」

「水着っ？」

「もうすぐ梅雨明け！　そのあとは夏！　イコール海！　毎年うちの家族とレオ兄、グレルおじさん、リンクさん一家と一緒に遊びに行くんだよね。うちの無人島に」

「あら、楽しそうねえっ！　行きましょう、水着買いにっ！」

「よおおおしっ！」

カレンとサラが腕を組み、

「レッツゴオォォォォォっ♪」

「は？　どこへ？」

と、シュウの声。

リビングの入り口のところに、仕事へ行く準備を急いで整えてきたシュウが立っている。

「あ、ごっめーん兄貴！」と、サラが笑う。「アタシとカレン、これから買い物行ってくるわ。というわけで今日は一匹で仕事行ってきてー」

「なっ、なぬぁーーーっ！？」シュウ、衝撃。「かっ、買い物って何を買いに行くんだよ！？」

「水着ー」

「水・・・着・・・？」と、カレンに目を向けたシュウの顔が赤くなる。「き、きききき、着るのっ・・・！？　カ、カカカ、カレン、着るのっ・・・！？」

「着るから買いに行くのですわ」

と、カレン。

「だ、だよな、うん。そ、そうか、無人島行ったときに着るのかっ・・・！」

「そうですわよ」

「・・・オっ・・・、オオオ、オレっ・・・オレもっ・・・オレも一緒に無人島行ってもいいっすか・・・!?」

「別に構わないのですわ」

「おっ・・・おおおおおっ！」

ってことは、カレンの水着姿を拝ませていただけちゃうよオレっ・・・！

すげーぜ上空２５００m・・・！

ますます赤くなるシュウの顔。

カレンが玄関へと向かって歩き出す。

「それじゃ、行きましょうサラ」

「あっ、ちょっと待ってカレン！」と、シュウはカレンに手を伸ばした。「・・・しっ・・・白がいいなー・・・なんて言ってみたりっ・・・！」

「・・・・・・」

「ゴメンナサイ調子こきました。もう二度と偉そうにリクエストなんてしません」

「・・・・・別に、良くってよ」と、カレンが玄関へと再び歩き出しながら言う。「白かピンクにしようと思っていましたもの」

「えっ!?　じゃ、じゃあ、水着は白・・・!?　しっ、ししっ、白ビキニとかになさっちゃうので・・・!?」

「ええ」

「ま・じ・でえええええええええええええ!!!」

オレ、白ビキニ大好きいいいいいいいいっ!!!!

早く来い来いパッピーサマァァァァァァ!!!!

――そして梅雨が明けた7月末。

天を仰げば真っ青な空と、真っ白な入道雲、じりじりと照りつける太陽。

耳に聞こえてくるのはセミの鳴き声。

シュウはどきどきわくわくしながら家族とカレン、リンク一家、レオン、グレルと共に自宅前に立っていた。

皆の手には遊び道具などがたくさん。

さりげなくカレンの隣に立っていたシュウが横目にカレンを見下ろすと、カレンの花柄のワンピースの肩紐と一緒に、白い水着の肩紐が見える。

（おお・・・！　白だ、まじで白だ！　や、やべえ、すでに顔が熱いぜっ・・・！）

と、頬が赤くなるシュウ。

リュウが皆を見回しながら言う。

「えーと、皆そろったか？　カレンいるな、リンク・ミーナ・リーナもＯＫ。レオンと師匠もいる。うちの家族はー・・・、ああもう数えるの面倒くせえ！　番号！　１！」

「２！」↑キラ

「３！」↑シュウ

「４♪」↑ミラ

「５～」↑サラ

「６だぞ！」↑リン

「７だぞ！」↑ラン

「はーちっ♪」↑ユナ

「9・・・」↑マナ

「じゅーうっ」↑レナ

「じゅういちー」↑ジュリ

「よし、全員いるな！　んじゃ、今年も無人島へ」

ミーナの瞬間移動で、

「レッツゴオォォォォォォォっ！！！」

第４０話　只今、上空２５００ｍ（後書き）

１５日の２３時１５分頃にメールくださった読者さまへ。

本当ＴＵＥＥＥＥＥＥ！　と思ったよ、私も・・・（笑）

あ、マリアほしかったら直接王子に交渉お願いします。

第４１話　長男のハッピーサマー

シュウとその家族、カレン、リンク一家、レオン、グレルが声をそろえる。

「レッツゴオォォォォォォォっ！！！」

次の瞬間には、ミーナの瞬間移動で無人島へ到着。

砂浜へと足を着け、目の前に広がる青い海を見てカレンが顔を輝かせる。

「わあ・・・！　あたくし、海へ遊びに来るのとても久しぶりなのですわ！」

「カレン、カレン、早く遊ぼうっ！」

と、サラ。

カレンが振り返ると、皆が服を脱ぎ始めていた。
服の中に着ていたが故に、あっという間に水着姿に。

「ほな、遊ぶでジュリちゃん！」

「はいっ」

と、ジュリとリーナは波打ち際で遊び始め、

「うーん、今年は砂で何作ろうか、マナ、レナ？」

「山・・・」

「・・・・・・。ねえマナ、もっと凝ったのにしない？」

ユナ・マナ・レナの三つ子は砂で遊び始める。

「よし、行くぞミーナ♪」

「うむ、行くぞキラ♪」

と、キラとミーナはシャチの浮き輪を持ち海に浮かび始め、

「さて、早速勝負しようぜ、リュウ♪　今年も勝った方に１００万ゴールドな」

「うす、師匠。去年に引き続き今年も負けねーっすよ。リンク、審判頼むわ」

「任せいっ！　いつものように、あの遠くに浮かんでる岩が折り返し地点な！　勝負は１０回！　引き分けだったら延長！」

リュウとグレルは毎年のように『かけっこ勝負ＩＮ海面上』を開催。

リンクはスタート地点でピストルを天に掲げる。

リュウが自分とグレルに足の速くなる魔法をかけ、スタート地点に立つ。

「ほな、いっくで～～っ！　よおおおい！」

パァン！

とピストルが鳴ると同時に、砂浜から飛び出て海面を走り出すリュウとグレル。

初めて見るカレンは仰天してしまう。

「えええっ！？　リュ、リュウさまとグレルおじさま、海の上を走るんですの！？　なっ、何故！？　何故走れるの！？」

「ああ、うん。あの2人、人間のクセにバケモノだから」そう言ったあと、シュウは苦笑する。「えーと、いつも思うんだが大人はレオ兄だけかー？」

と思ってしまうくらい、レオン以外の大人たち（リュウ・キラ・リンク・ミーナ・グレル）は子供みたいなはしゃぎっぷりで。

「兄上っ、兄上！　見てなのだっ！」

と呼ばれてシュウが振り返ると、リン・ランが色違いのビキニを着て立っていた。

リンはオレンジ色、ランはレモン色。

期待に瞳を輝かせてシュウに訊く。

「似合うっ？」

「おー、似合う似合う」と、シュウはリンとランの頭を撫でながら笑った。「可愛いぞー、おまえたち。・・・・・つーか」

と、シュウは苦笑してリン・ランの傍らにいたミラに顔を向けた。

「早く鼻血を止めろ、ミラ」

ミラが砂浜の上に正座し、鼻からだらだら血を垂らしてリュウを見つめている。

「だっ、だってお兄ちゃっ・・・！　あんもうっ、パパってばセクシーすぎてやばぁいっ・・・！」

「おまえがやべーよ・・・」と、ミラに呆れながらカレンに戻したシュウ。「――って・・・!?」

赤面する。

カレンが花柄のワンピースを脱いで、白いビキニ姿になっていて。

（やっべ・・・！　やっっっべ！　まじやっっっっっべ・・・・・・・・・!!）

ミラに続き鼻から流血し、シュウは鼻に手を当てて治癒魔法を掛ける。

（サラと入れ替わって戻ったときに一度カレンの裸見てるオレだが、あの時はパニック状態でほとんど覚えてないしっ・・・！　カレン、おまえがパッドで誤魔化してても本当は乳がないことは分かってる！　だけどっ、だけど何その二の腕とか太股とか、腰からヒップにかけてのラインとかっ・・・！　スゲエェ女っぺーじゃねーかっ、オイ!!　しっ、しかも白ビキニでさらにやべえええええええっ・・・・!!!!）

シュウの様子をじっと見ていたサラが、にやりと笑ってシュウの耳元に口を寄せた。

「今晩のおかず、で・き・た？」

「――ぶっ！？」シュウ、さらに鼻から鮮血噴射して治癒魔法を掛けまくる。「ちょっ、おまっ、そういうこと言うんじゃねーよっ・・・！！」

「ああ、ごめん。そういうこと言われちゃったらやりにくいか」

「ちっ、ちがっ・・・！！」

ひそひそと話しているシュウとサラを見て、カレンが首をかしげる。

「何を話しているのかしら？」

「えっ！？」シュウが声を裏返してカレンを見る。「なっ、ななっ、なんでもねえよ！？」

「そう・・・？」

「う、うんっ！　そっ、それよりカレンっ・・・！」

「何かしら」

「しっ、ししっ、白っ・・・白ビキニっ、かっ、かかかっ、可愛いっ！　かっ、可愛いっす・・・！！」

「ありがとう」

そう言って笑ったカレン。

久しぶりにもらったカレンの笑顔。

シュウは感動に包まれる。

（何このハッピーサマー・・・！　上空２５００ｍすーげー・・・！）

サラがビーチボールを持ってカレンとレオンを引っ張り、海の中に入っていく。

砂浜の上にミラと並んで正座したシュウ。

はしゃぐカレンを見つめて瞳が恍惚とする。

（カレン・・・、かぁーーわいいん・・・！　しかも白ビキニ・・・イイっ・・・）

リンとランが、シュウの顔を覗き込んだ。

「兄上？」

「どうしたのだ？」

「わたしたちと遊んでなのだ」

「早く遊んでなのだ」

「えっ・・・！？」

もうちょっとじっくりカレンの白ビキニ姿を拝ませてくれっ！！

と願うシュウだったが、リンとランに引っ張られて海の中へ入っていく。
途中、カレンたちとすれ違った。

（オレもカレンと遊びてえええええええええっ！！）

と必死に訴えているような表情をしていたシュウを見て、レオンは苦笑した。
シュウを呼んで手招きする。

「こっち来ればいいじゃない、シュウ。リンとランも。ほら、早くおいで」

「えっ！？」と、シュウが声を裏返す。「いっ、いいいいいの！？　オっ、オオオっ、オレもそっち行っていいの！？　いっ、いいいっ、いいんすか！？」

シュウが視線を投げかけている相手はカレン。
カレンが眉を寄せて言う。

「別にそれくらい良くってよ？　何をそこまで遠慮しているのかしら」

「お・・・、おおおおっ・・・！」

まじハッピーサマァァァァァァァァっ！！！

シュウはリンとランの手を引っ張り、水の中を駆けてカレンのところへと向かった。

「あざーーーすっ！！！」

隣へとやってきたシュウの顔を、カレンが見上げる。

（ずいぶんと嬉しそうね、たったこれだけのことで・・・）

レオンが言う。

「僕、ちょっとあっちの方行ってるね」と、指したのは波打ち際で遊んでいるジュリとリーナのところ。「まだ小さいから危なっかしくてさ」

「あー、うん。そっか。分かったあ」

サラが少し残念そうにレオンを見送ったあと、中断していたビーチバレーを再開した。

シュウとカレン、サラ、リン、ランで円を作り、か弱いカレンも取りやすいようにビーチボールを優しくパスする。

カレンがいなかったら豪速球が飛んでいたところだ。

（ああ、オレ・・・、カレンとビーチバレーしてるぜ・・・）

そんなことに感動しているシュウの耳に、シャチの浮き輪に乗って遊んでいるキラとミーナの声が聞こえてきた。

「おお、あそこを見てみるのだ、ミーナ」

「おお、今年は来てくれたぞ、キラ」

「今年は1匹で来たみたいだな」
「うむ。1匹しかいないみたいだぞ」
何のことだろう？
シュウはキラとミーナの会話に耳を傾けた。
「今年のイルカは変わった泳ぎ方をするな、ミーナ」
「今年のイルカはいつもよりも大きいな、キラ」
ああ、イルカか。
たまに現れるんだよな、ここ。
イルカね、イルカ。
イル・・・カ・・・？
シュウの顔がにやける。
カレン、イルカ見たらどんな反応するかな。
動物好きみたいだし、やっぱり大喜びしたりすんのかな。
きゃあああっ、可愛い～～～っ（ハート）
とか言って？
イルカときゃっきゃウフフ戯れちゃったりして？
シュウもこっち来て～～～っ（ハート）
なんて言われちゃったりして？

うっわ、どうしようオレ・・・！
どんだけハッピーサマァァァァァァァァ！！！

「あ、シュウ！　そっちにイルカ行ったぞーっ！」

と、キラの声。

「はあああああい！」

ヘイ、カモオォォォォォォォン！！

と振り返ったシュウ。

「――って・・・！？」驚愕した。「イっ、イルカじゃねえええええええええええええ！！！」

キラがぱちぱちと瞬きをして言う。

「違うのか？」

「かっ、母さんコレっ・・・！」

「うん？」

「フカヒレェェェェェェェェェェェェェェェ！！！」

と、叫ぶと同時に、シュウはカレンをサラの胸元に突き飛ばした。

「ちょっ、サメェェェェェェ！？」

サラが慌ててカレンを姫抱っこして砂浜に駆けて行き、レオンもジュリとリーナを抱っこして砂浜に上がった。

「リン・ランーーーーーーーっっっ！！」

と、海の上を走っていたリュウも慌ててやってきてリン・ランを脇に抱えて砂浜へと向かう。

シュウがカレンを突き飛ばしてからそこまでわずか2．5秒。

「来やがれフカヒレっ！！　切り取って茹でて皮を取って油脂分落として天日干しで乾燥させてから、贅沢に姿煮にして食ってやるぜ！！」

と、倒す気満々で腰に手を持っていったシュウ。

「あっ」

剣ネエエエエエエ！！！

巨大な口を開けたサメが、シュウに襲い掛かった。

第４１話　長男のハッピーサマー（後書き）

昨日の２０時１５分頃にメールくださった読者さまへ。

本当シュウバカですなあ。
ちょっと失笑しちゃう・・・（笑）
あと予想ハズレ！

ＰＳ．ペンネームちゃんとありましたよ。てか、なくてもたぶん分かったから悩まなかったかな、うん。

第４２話　只今、上空３０００ｍ

巨大な口を開けたサメがシュウに襲い掛かる。
頭から胴体にかけてパックリと噛みつかれ、シュウは海の中に沈められていった。

（いでででででででっ！！！　こっ、こらフカヒレ！！！　放しやがれっ！！！）

サメの口の中、シュウは必死に暴れる。
だが、サメはシュウの胴体に牙を食い込ませたまま放そうとしない。

（ぐおおお…！　食いちぎられるううううう…！　倒そうと思ったのに、何倒されかけてんのオレェェェ…！　だっ、だっせえええええ…！　とか言ってる場合じゃねえええええ…！　しっ、死ぬううううう…！　おっ、親父いいいいいっ…！　レオ兄いいいいいっ…！　はっ、早く助けてえええええええええええ！！）

そんなシュウの傍ら、近くでシャチの浮き輪に乗っていたキラとミーナが声をあげる。

「おおーっ！　見るのだミーナ！　シュウがフカヒレを取りに行ったぞ！」

「おおーっ！　さっすがキラとリュウの息子だぞ！　勇敢だぞーっ！」

海面が真っ赤な血に染まっていく。

カレンが悲鳴をあげた。

「きゃっ、きゃあああああっ！！」両手で口元を覆い、カレンは青ざめる。「いっ、嫌っ…！　シュ、シュウ……！？」

「あっ、兄上えええええええええええ！？」

リン・ランも狼狽して叫び、

「おっ、親父っ！！」サラも慌てて声をあげる。「兄貴浮いてこないよ！！　やばいって！！」

「シュ、シュウ、おまっ……！！」リュウの顔が驚愕する。「かっ、か弱えええええええええええええええっ！！」

リュウは慌てて海へと飛び出した。
同時にレオンも海へと飛び出す。

リュウの拳とレオンの爪の一撃で、サメ退治は一瞬にて終了。
リュウはサメの口からシュウを引きずり出した。

「うっ…げほげほっ……！　あ…ありがと親父、レオ兄っ…！　げほげほげほっ！！」

「なっ…、何！？」キラとミーナ、今さらになって狼狽する。「もしかしてシュウ、食われていたのかあああああ！？」

リュウがシュウを担いで砂浜まで戻って来ると、皆がシュウに駆け寄ってきた。
リュウはシュウを砂浜に寝かせ、血の流れ出ているシュウの胴体

に治癒魔法を掛ける。

「…あ…ありがと、親父。ああー、まじ死ぬかと思っ――」

と、身体を起こしかけたシュウの頬にリュウの拳。

「グハッ！」シュウは再び砂浜に仰向けに倒れた。「なっ、なにすんだよ親父っ！！」

「うるせえっ！！　焦らせやがって！！」

「だっ、だって海パンだから剣なかったんだよっ……」

「サメも素手で倒せねーのかおまえは！！」

「ふっ、普通倒せねえっ！！」

「おまえは俺とキラの血引いた息子なんだよ！！　か弱く普通になってんじゃねえっ！！」

「……。それと同じことジュリに言える？」

「あ！？　ジュリはいいんだよ」と、リュウが恍惚としながら、「すーげー可愛いから（キラそっくりで）……！」

「なっ、なんだよそれ！？　そりゃジュリはスゲエェェ可愛いよ！？　そこらの女の子じゃまったくもって敵わねえくらい可愛いよ！？　だからってオレと差がありす――」

「うるせえっ！！」リュウがシュウの頬にもう一撃食らわせる。「

おまえはこの世に生まれる前から俺を継ぐ超一流ハンターになるって決まってんだよ！！　それなのに、たかがサメごときに殺されかけやがって……！！　おまえがそこまで弱いとは思わなかったぜ！！　あああああっ、情けねえっ！！　情けねえ情けねえ情けねえっ！！！」

「まあまあまあまあ」と、リンクが再びシュウに殴りかかりそうなリュウを背後から押さえつけた。「落ち着けや、リュウ。シュウやてまだ17なんやから。強くなるのこれからやで」

「フンっ」リュウがリンクの腕を振り払い立ち上がった。「腹減った！！　おい飯！！　サメ食うぞ、サメ！！」

「はいはい……」

とキラとレオンが苦笑して調理器具を用意し始め、それにミラも続いた。

グレルはすでにサメをさばき始めており、三つ子はテーブルや椅子を設置し始める。

「なっ…なんだよ、親父の奴っ……！」

とフテ腐れるシュウの頭を、リンクが笑いながら撫でた。

「まあまあ、シュウ。リュウやて、おまえくらいの年のときは素手でサメ倒せへんかったで、きっと。リュウはただ、おまえが大切やからめっさ心配したねんな。分かったってや」

「だっ、だからって、何もあそこまでボロクソに言わなくてもいーじゃねーかっ…！」

しかも、カレンの前で。

シュウは仰向けに寝たまま、恐る恐る自分の頭の横に跪いていたカレンの顔を見上げた。

（――おっ…、怒ってーら……！）

しかも、

べちん！

とカレンの小さな手に頬を叩かれた。

リュウの拳を2発食らったあととなると、結構な痛さだった。

「カっ…カレンっ…？」

カレンが立ち去りながら言う。

「嫌いよ」

「――！？」

シュウの頭に、上空２５００ｍから地上へと真っ逆さまに落下していく自分の映像が流れる。

地に叩きつけられ、大衝撃。

（きっ…、きききき、嫌われたあああああああああああああああ！！！）

昼食後、再び遊び始める子供たち。
砂浜の上に仰向けに寝ているシュウの身体に、ミラと双子、三つ子が砂を盛ってはしゃいでいる。

されるがまま状態のシュウは顔を傾けた。
シュウの瞳に映るのは、波打ち際でサラとジュリ、リーナと一緒に遊んでいるカレン。

（ああ…、カレンが遠い……。また口きいてくれなくなっちゃったぜ……。カレンのいる上空５０００ｍまでの階段半分まで上ったのに、また振り出しかよ……。そりゃそうだよな、オレまじでダサかったし……。ああ…、さっきまでの浮かれすぎて痛々しいほどバカだったオレが懐かしい……）

すっかり意気消沈したシュウ。

そこから１０ｍほど離れたところのテーブルで、大人たち（リュウ・キラ・リンク・ミーナ・レオン・グレル）はまだ酒を飲んでいた。
キラを膝の上に乗せ、グラスにウィスキーを注いでは仰ぎ、不機嫌露わな顔をしているリュウ。

それを見て、リンクが苦笑する。

「ええかげん落ち着けや、リュウ……」

「落ち着けねえっ！」

バリンっ

と、リュウの手の中でグラスが割れる。

昼食のときから数えて、これで3度目だ。

キラが新しいグラスにウィスキーを注ぎ、リュウに渡しながら言う。

「落ち着くのだ、リュウ。シュウは無事だったのだから。おまえの大切な息子はちゃんと生きているぞ?」

「……」

リュウがウィスキーを仰ぎ、グラスをどんとテーブルの上に置く。

両腕でキラを抱き締め、深く溜め息を吐いた。

「なあ、キラ……。シュウの奴、何であんなに弱いんだと思う」

「何を言っているのだ、リュウ。シュウはまだ17だ。それなのに一流ハンターだ。普通のハンターからすれば、驚くほど強いではないか」

「そうやで、リュウ」リンクが続いた。「おまえも17の頃はまだ一流ハンターやったやん。おまえが超一流ハンターになったので、たしか19とか20とかそのあたりやろ」

「えー?」リュウが眉を寄せ、ウィスキーをグラスに注ぎながら訊く。「んだっけ?」

「んだぜ？」と、グレル。「だが、リュウの方が明らかに打たれ強かったな。ハンターが昇格するときに行う試験では、防御云々よりも攻撃の方を重視されっからな。物心ついたときからリュウに剣の使い方や戦い方を教わってきたシュウは、とりあえずリュウよりも先に超一流ハンターになるんじゃねえ？　その剣さばきだけで」

「それちょっと危ないかもね」レオンが真剣な顔で言った。「超一流ハンターなんて本当に危険な仕事ばかりなんだから、いつ命落としてもおかしくないよ」

バリンっ

と再びリュウの手の中で割れたグラス。

「わあああああっ、ご、ごめんリュウ、心配かけてっ……！　僕の言ったこと気にしないで！　……とは言えないけど、と、とりあえず落ち着いて！」

「……決めた」

と、リュウ。

「何を？」

テーブルにいた者たちは、リュウの返答に耳を傾けた。

朝から無人島へとやってきて、今はすっかり夜だ。

帰る前に、たくさんの花火をやっていく。

打ち上げ花火の担当はグレル。

一本数百万の花火が惜しみなく次から次へと夜空に咲く。

夜空を仰ぎ、笑顔になるカレン。

離れたところからその横顔を見て、シュウは溜め息を吐く。

（もっと近くで笑った顔が見てえ……）

シュウの視線に気付き、カレンがシュウの方を見た。

「ご…、ごめん……」

何となく謝ってしまいながら、シュウはカレンから顔を逸らして俯いた。

カレンが溜め息を吐き、シュウのところへと寄ってくる。

「もう怒っていなくってよ」

「えっ…」シュウはカレンの顔を見た。「ほ、本当っ？」

「ええ」

「そ、そか」

と安堵して笑ったあと、またシュウの顔が沈む。

（でもオレ、地上に落ちたままだよな……）

カレンが続ける。

「悪かったのですわ、さっき」

「…な、何がっ？」

「嫌いになっていないのですわ、別に」

「……えっ！？　何っ！？」

シュウは耳を疑った。

カレンが声を大きくして言う。

「あなたのこと、嫌いになっていないと言っているの」

「――まっ、ままま、まじでっ！？」

「ええ。ただ……」と、カレンがシュウに背を向けた。「心配したのですわ、とても……。しっ…、死んでしまったかと思ったじゃないっ……！」

カレンの声に涙が混じり、シュウは狼狽しながら砂浜に正座した。

土下座しまくる。

「ごめんなさいっ！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいカレン様！　お嬢様！　お姫様！　なっ、泣かないでくれえええええええ！！」

「……そこまでしなくてもよろしいわよ、別に」

「あっ…、はいっ……！」

シュウは頭をあげた。

正座したまま、まだ背を向けているカレンにどきどきとしながら訊いてみる。

「…な、なあ、カレン。オレ…、上空２５００ｍにいるっ……？」

カレンが少し間を置いたあと、口を開いた。

「……あたくしのこと、庇ってくれてありがとう」

「えっ……！？」

カレンが振り返る。

「上空、３０００ｍ」

「――うっそ」

キタこれ。

キタこれキタこれキタこれ！！

キタキタキタキタキタァァァァァァァァァァァ！！

オレ、上空３０００めーとるううううううううううううっっっ！！！

ガッツポーズで舞い上がるシュウ。

突然、背に打撃を食らった。

ゴスッ！！

「――ガハッ！！」

シュウは砂浜の上にうつ伏せに倒れ、何事かと振り返ると、そこには仁王立ちしているリュウの姿。

「おっ、親父っ…！　いっ、今殴っただろ……！」

「蹴った。膝で」

「膝蹴りすんなっ！　いってえぇ……！」

と、さも痛そうに自分の背中を擦っているシュウを見て、リュウが溜め息を吐いた。

「おまえ、本当打たれ弱いな」

「え？」

「俺、決めたんだわ」

「何を」

「おまえちょっと行って来い」

「どこへ」

「修行」

は？

修行っ？

シュウはぱちぱちと瞬きをしながら、首をかしげた。

第４２話　只今、上空３０００ｍ（後書き）

この度「・・・」を「…（三点リーダ）」に変えた姫百合です。
前作からぜーんぶ修正していきたいと思います。

あと余談ですが。
サメの肉ってアンモニア臭すごいらしいですねえ。
シュウたちはそんな臭いに包まれながら昼食取ったんですねえ（笑）

第４３話　修行へいってきます

――８月。

シュウがリュウから『修行に行って来い』と言われたのは１０日前のこと。

その次の日からリュウは、仕事の他にミーナの瞬間移動でどこかへと行っているようだった。

「なあ、カレン。親父、オレの修行場所でも探しに行ってんのかな」

「どうなのでしょうねえ？」

と、カレン。

シュウの仕事中、木の枝の上に座らせられていた。

シュウに抱っこされ、地に足を降ろす。

（ああ…、上空３０００ｍってすげえ……！）

カレンが普通に会話してくれる上に抱っこまでさせてもらい、シュウは内心で大喜びする。

が、その喜びっぷりはパタパタ振ってしまった黒猫の尾っぽでバレている。

カレンが呆れたように溜め息を吐いた。

「ずいぶんな喜びようですわね。この間まで、あたくしのこと普通に抱っこしていたクセに」

「そっ…、そうだけど、この間まではオレおまえのこと好きだって知らなくて……。い、いやでも、それでもおまえが可愛くて抱っこすると嬉しかったんだけどっ……。今はもうオレはおまえのことが好きだって分かって、そうしたらなんか……この間まで以上に嬉しくてっ……。ああもうっ」

オレのバカァァァァァ！！

すーげー勿体ないことしやがって！！

と、シュウは己の鈍感さに改めて後悔する。

抱っこどころかキスまでしてたじゃん、カレンと！！

今のオレからすれば、この間までのオレってスゲエェェ贅沢男っ！！

すーげー羨ましいっ！！

ううう…。

過去に戻りたいぜ……。

うな垂れるシュウに、カレンが訊く。

「どうしたのかしら？」

シュウは溜め息を吐き、カレンの顔を見た。

「…恋すると欲望が込み上げてくるもんなんだな……」

「欲望？　たとえば？」

「もっとカレンの笑顔が見たい、もっとカレンの声が聞きたい、も

っとカレンの料理が食べたい、カレンの頭なでなでしたい、カレンと手ぇ繋ぎたい、カレンの頬つんつんしたい、カレンに頬ずりしたい、カレンを抱っこしたい、カレンを抱き締めたい、カレンとまた一緒に寝たい、カレンとキスしたい、それからっ……」

「それから？」

「な…、なんでもないっ……」

そう赤面しながら呟くように言って、シュウは口を閉ざした。

（カレンを抱きたい）

なんてことはカレンに引かれそうで言えなかった。

――の、だが。

カレンがシュウの顔を覗き込んで言う。

「スケベなこと考えているんでしょう」

「ギクッ」としてしまい、シュウはカレンから顔を逸らした。「…す、好きな相手なら当たり前だろっ…！　…と、初恋のオレが言うのってどうなんだろう……」

「あら、初恋なの」

「お、おう。よく考えてみればオレってこれが初めてで……」

「マリアちゃんには恋していなかったの？」

「マ、マリアはやっぱりペットっていう感じで、カレンに対するものとやっぱ違う……」

「ふーん？　でも、恋人同士がするような行為はしたんじゃなくって？」

「えっ…！？」シュウの声が裏返る。「…し……た。けど、それは求められたからで……」

「つまり好きなレディ相手でなくても、そういうことできるってことなのですわね？」

「でっ…、でもっ、オレ、マリアには欲求されたから応えてたけど、おまえにはオレから…、そのっ…、オレが……！　あああもうっ、オレはおまえのこと抱きたいんだよっ！！　欲求される側じゃなくて、欲求してる側なんだよ！！　抱きたい抱きたい抱きたいっ！！　抱きーたーいーのおおおおおおおおおおおっ！！」

と、ぶっちゃけてしまったシュウ。

言った直後に早くも後悔する。

「あああああっ、何言ってんのオレェェェェェ！！　引かないでくれカレン～～～っっっ！！」

「別に引いてはいないわ。そんなの、レディだって恋すれば同じことですもの。でも」と、カレンが日傘を差しながら歩き出す。「何もしないでちょうだいね」

「わ、分かってるよ……。っていうか、おまえそっちじゃねーよ。本当、方向音痴だな」

「う、うるさいのですわっ……！」

カレンがシュウの隣を歩き出す。

カレンの歩くスピードに合わせながら、シュウは話を戻した。

「んでさ、親父の奴、やっぱオレの修行場所探してんのかな」

「そうかもしれないわねえ。お仕事だけでも大変だというのに……」

「なんかオレ…」シュウはごくりと唾を飲み込み、「すーげーサバイバルになる気がしてんだけど……」

その予想。

的中。

「まっ…、待ってくれ……！　待ってくれ親父っ！！」

夜、自宅リビングの中、シュウは声をあげた。

リビングの中には家族全員とカレンが揃っている。

「ま、まず、何を買ってきたって！？」

リュウが膝の上に乗せているキラの黒猫の耳をいじりながら答える。

「修行に適した山」

「で、その山がなんだって!?」

「すげー大自然でモンスターわんさか、魔法付き」

「どんだけサバイバル!!　っていうか魔法付きって!?」

「ところどころ俺が魔法掛けてきた。修行の期間は１０日間。１ヶ月くらい行かせようと思ったが、そこまで仕事放ったらかしにするわけにはいかねえからな。修行初日は俺が一緒に行って１日のメニュー教えてやっからちゃんと覚えろよ」

「まっ、待って親父っ!!」と、シュウはリュウに手を伸ばした。
「１日目は親父も一緒だとして、残りの９日間は!?　オレ一匹!?」

「いや、レオンも一緒に行くことになってる。レオンにはおまえの剣術修行のときに相手してもらう」

「そ、そかレオ兄も一緒かっ…!」

それなら安心だとシュウは安堵した。
リュウの右隣に座っていたサラが言う。

「親父、アタシも行く」

「ばっ、おまっ……!!」リュウの顔が驚愕する。「あんなすーげー危ねえところに可愛い娘のおまえを行かせるわけにはいかねえよっ!!」

「――って、オレは行かせるのかよ!?」シュウの顔も驚愕する。
「そのすーげー危ねえところに!?　この娘と息子の差はなんだよ……!?　まじひでえっ……!!」

「あぁ？　甘えてんじゃねーぞ」

「ねえ、親父ってば」サラがリュウの袖を引っ張って言う。「レオ兄も行くんでしょ？　アタシも行きたいよ。レオ兄がいるなら安全だし、アタシも修行したい」

「う、うーん……。まあ、いいか…、気をつけて行って来い」

「ありがと親父っ！」

「おう――」

「父上、父上っ」と、シュウを挟んで座っていたリン・ランも続く。
「わたしたちも行きたいのだ！」

「え!?　…さっ、最近めっきり強くなったサラはともかく、おまえたちはまだ駄目だ！　絶対に駄目だ！　危険すぎる！　１０日間もシュウに独り占めさせたくねえよムカつく!!」

その最後の台詞が本音だろ、親父。

シュウは苦笑しながら心の中で突っ込んだ。
リン・ランの瞳に涙がじわじわと浮かぶ。

「お、お願いしますなのだ、父上っ…！」

「あ、兄上と10日間も離れたくないのだ、父上っ…！」

「せ、せっかくの夏休みなのにっ…！」

「あ、兄上とたくさん遊ぼうと思ってたのにっ…！」

「……だ、駄目ったら駄目だ」

とリュウがリン・ランから目を逸らすと、リン・ランが泣き出した。

「ふっ、ふにゃあああああああんっ！！　父上なんか大嫌いなのだあああああああっ！！」

「――！！？」

リュウ、大衝撃。

キラの頭にうな垂れる。

「…わ、わ、わ、分かったっ……。リ、リン・ランも充分に気をつけて行って来いっ……」

そういうことになった。

リンとランが泣き止んではしゃぐ中、シュウは話を続けた。

「んで、親父。修行いつから？」

「明日の早朝」

「はっ？」

急すぎるわ！

シュウとサラ、リン・ランは急いで修行へ行く準備を始めた。

寝る前、修行へ行く準備を終えたシュウ。

そのあと、カレンの部屋を訪ねた。

ドアをノックしてカレンの返事がきて、シュウはカレンの部屋の中に入る。

カレンは趣味の１つである人形遊びの最中だった。

そのおかげで機嫌が良いらしく、カレンが明るい声でシュウに訊く。

「どうかしたのかしら、シュウ？」

と、ベッドの上で背丈６０ｃｍくらいの人形の着せ替えをしながら。

「……。オレにはその魅力がさーーっぱりわかんねーんだけど、人形遊びって楽しいの？」

「楽しいのですわ。明日から１０日間はお仕事ないし、たくさん遊ぶのですわ。お店にも久しぶりに行ってみようかしら♪」

「……楽しそうだな」と、シュウは少しふて腐れながら言った。「

オレは１０日間もおまえの顔見れなくて寂しいのに」

「そう」

「……おい」

「なぁに？」

「……人形に夢中になってないで、こっち見ろよ」

「偉そうですわねえ」

「ゴメンナサイこっち見てくださいお願いしますカレン様」

「仕方ないですわね」

と、カレンが戸口にいるシュウの顔を見た。
シュウの顔が明るくなり、尾っぽの先が嬉しそうに振られる。

「それで、あたくしに何の用かしら？」

「…その…さ、修行すげー厳しいものになりそうなんだけど……」

「そのようですわね」

そう言ったあと、カレンはシュウが期待している言葉を察した。
シュウに笑顔を向けて言ってやる。

「がんばってね」

「う、うんっ、サンキュっ…！」と、シュウが笑顔になる。「頑張るぜ、オレっ……！」

そのあと真顔で頬を赤くしながら、

「んで、すーげー贅沢なことお願いしていいっすか……！？」

「何かしら？」

「オレが修行から帰って来てからのことなんだけどっ……」

「だから何かしら？」

「その…、オレが今より強くなって帰ってきたら、キ、キキキっ、キキキキスさせてもらっていいっすか！？」

「は…？」

カレンの眉が寄る。

「ゴメンナサイ嘘です許して下さいもう二度と言いません」

強張るシュウの顔。

カレンは溜め息を吐いて言った。

「分かったわ、良くってよ。でも――」

「ま・じ・でえええええええええええええええ！！！」カレンの言葉を遮り、舞い上がるシュウ。「オレ修行スゲエェェェェ頑張るうううううううううううう！！！　ビバ・修行だぜ

ヒャッホオォォォォォォォイっっっ！！！　おやすみいいいいいいいいいっっっ！！！」

カレンの話を最後まで聞かず、飛び跳ねながら出て行く。

1人部屋の中、カレンは遮られた言葉を続けた。

「ほっぺまでですわよ……？」

翌朝5時。

シュウとリュウ、サラ、リン・ランは玄関に並んだ。

少しして一緒に修行に行くレオンと、瞬間移動のためのミーナが欠伸をしながらやってきた。

「ふあぁ…」

「いよっ、ミーナ姉！　いい朝だな！」

「ミーナ姉は眠いぞ、シュウ…」

「さあ、修行の山へレッツゴオォォォだぜっ！！」

「張り切ってるな、シュウ…」

「もっちろん！！　オレは強くなって帰ってくるぜ！！」

親父に一歩近づけるし！！

っていうか、カレンのキスというご褒美が待ってるし！！

まだ眠っている家族の目が覚めるようなシュウの声が、屋敷中に響き渡っていった。

「んじゃっ、修行いってきまあああああああああああああああす！！！」

第４４話　修行中の長男と、その頃のカレン　～前編～

リュウがシュウの修行場所へと選んだのは、葉月島から島を2つ隔てた霜月島にある山だった。
葉月島から長月島へ、長月島から神無月島へ、神無月島から霜月島の山へと、3回のミーナの瞬間移動でやってきた。

「ふぅ、疲れたぞ」と、ミーナ。「遠くまでの瞬間移動を連続して3回も繰り返すのは、結構な労力だぞーっ」

「あー、おまえ大人になっても魔力大したことなかったからな。魔力ありゃあ、一度にもっと遠くまで瞬間移動できたのにな」

「うっ、うるさいのだっ、リュウ！　今夜置いて帰るぞ！？」

「ふっ、ふざけんなミーナっ（俺キラいねーと眠れねーのにっ）！」

リュウとミーナが騒ぎ始める傍ら、シュウとサラ、リン・ラン、レオンは辺りを見回した。

広葉樹が葉を赤や黄色に染めている。
霜月島はすっかり秋のようだった。
山の中が故に、葉月町の冬のような寒さだ。

「うわあ、さみぃ。長袖持って来て良かっ――」

「シュウ、剣構えて」サラとリン・ランを背に庇いながら、レオンがシュウの声を遮った。「モンスターの気配がするよ」

シュウは言われて気付いた。

「さっそくモンスターご登場かよ」

しかも物凄い数の気配だ。

シュウは腰から剣を抜き、モンスターがいつどこから出てきても良いように構える。

リュウがシュウとレオンを見、眉を寄せた。

「何してんの、おまえら。まずはウォーミングアップと体力づくりを兼ねて山道のジョギングからだぜ？」

「おい、親父」

「何だよ、シュウ」

「気付いてねーわけねーよな、あんたが。このモンスターの気配に」

「そりゃそうだぜ。周りにいるこいつらは――」

「おっ、親父っ！！」

シュウは叫んだ。

突如リュウの背後から飛び出してきたオオカミ風モンスターが、リュウの背に飛びかかる。

シュウがオオカミ風モンスターに剣を振り下ろそうとすると、リュウの剣がシュウを吹っ飛ばした。

「うっわあ！！」近くの木に背をぶつけて止まり、シュウは目を見開いてリュウを見た。「なっ、何す――」

「俺の話を最後まで聞け。こいつらはすでに手懐け済みなんだよ」

「へ？」

シュウはぱちぱちと瞬きをした。

５匹のオオカミ風モンスター―銀色の毛をしていて、見た目はオオカミそっくりだがその体長はオオカミの倍ほどの大きさがある―が、尾っぽを振りながらリュウの周りにおとなしくお座りしている。

ミーナが言う。

「名前は大きい方から、ギンタロー、ギンジロー、ギンサブロー、ギンシロー、ギンゴローだぞ。わたしが名付けたのだぞっ♪　そしてこの子たちのボスはリュウだぞっ♪」

オオカミのボス……？

シュウとレオンはリュウの顔を見た。

わー、ぴったり……。

「んで」と、リュウが続ける。「こいつらには、シュウ、おまえの修行手伝ってもらうことになってるからな」

「へ？」

「ここの山道は険しい部分も多くてな。走りにくいからってだらだら歩かねえように、こいつらにおまえが元気出すよう応援してもらうんだわ。実際むかーし、キラがこの方法でリンクの足を速くしたんだぜ？」

「へえ？」シュウは声を高くした。「オレのこと応援してくれるなんて、可愛い奴らじゃん！　よろしくなー、おまえら！」

とギンタローたちの頭をシュウは嬉しそうに撫でるが。

その傍らで、レオンは眉を寄せる。

（昔キラがリンクの足を速くした方法？　それってもしかして……？）

リュウが娘たちを見て言う。

「サラとリン・ランは、今日はとりあえずギンタローたちの背中に乗ってろ。ついでにミーナも」

サラとリン・ラン、ミーナが承諾した。

サラはギンタローに、リンはギンジローに、ランはギンサブローに、ミーナはギンシローに乗る。

それを確認したあと、リュウが言った。

「んじゃシュウ、レオン、ジョギング行くぞ。ギンタローたちシュウの応援よろしくな」

と、リュウが走り出す。

そのジョギングとは思えぬ速さにシュウは苦笑する。

「どこの短距離選手だ、オイ…」

「ガルルルル…」

「ガルルルル？」シュウは眉を寄せながら振り返った。「――！？　ど、どうしたオイ！？」

シュウは困惑しながらギンタローたちから後ずさった。
さっきまでの従順な瞳とおとなしさは何処へやら。
ギンタローたちが一斉に牙を剥いてシュウを見ている。

「やっぱりね…」とレオンが苦笑し、走り出しながらシュウの腕を引っ張った。「噛まれるから行くよ、シュウ」

「か、噛まれ……？」

え、何。
どういうこと？

シュウが首をかしげたとき、ギンタローたちがシュウに飛びかかった。

「――うっわあああああっ！！」と、ぎりぎりのところで避けたシュウ。「なっ、何、ちょっ……！？　ぎっ、ぎゃあああああああああっ！！」

リュウが走って行った方向に向かって、死に物狂いで走り出した。
ギンタローたちが今にも噛み付きそうな勢いで追いかけてくる。

背後からサラの笑い声が聞こえてくる。

「あーーっはっはっは！　兄貴ウケるー！！」

続いてリン、ランの声も聞こえてくる。

「おおーっ！　すごいぞ兄上ーっ！」

「おおーっ！　速いぞ兄上ーっ！」

「いっ、嫌でも速くならあああああああああああああああっ！！！」

シュウがリュウの傍らに並ぶ。

続いてレオンも並ぶと、レオンは苦笑してリュウを見た。

「ちょっとリュウ、やっぱりだったんだね」

「おう？」

「キラが昔、『葉月島ハンター＆猫モンスターＶＳ文月島ハンター＆犬モンスター運動会ＩＮ葉月島葉月町葉月小学校校庭』のリレーのときに、リンクの足を速くしようとしたあの作戦でしょ、これ……」

「おう、正解。まあ、リンクのときは普通のトラだったがな」

「おい、親父！？」必死なシュウが、声を裏返して訊く。「こっ、これは一体！？　これのどこが応援で！？」

「これはだな、シュウ」と、ミーナが答えた。「昔キラが、運動会

で鈍足だったリンクの足を速くさせるために練った策なのだ。人間、危機に遭遇すると己の限界以上の力が出るものだというところを利用したな。そしてトラに追われたリンクは、見事に足が速くなったのだぞっ♪　どうだっ、キラは賢いだろうっ♪」

「かっ、賢くねえええええええええええっ！！」シュウ、驚愕。

「ミーナ姉、母さんのいうこと何でも正しいと思わないでくれっ！！　こんなの危ネエェェだけだろっ！！　ていうかオレにまでそのバカな策を実行すんなっ！！　リンクさんのときみたいに運動会じゃねーのに、何でこんなマッハで走らなきゃいけねーんだよ！？」

リュウが眉を寄せて言う。

「何言ってんだ、シュウ。おまえ毎日この状況で走るんだぜ？　己に甘えが出て休むことも歩くこともできねーし、嫌でも体力付くじゃねーか。良かったな」

「は！？」

「人間のリンクのときはトラだったが、おまえはハーフだからモンスターに追わせるくらいがちょうどいいと思ったんだが、見事正解だったな。さすが俺」

「ちょっ――」

「おまえのスピードが落ちようものならば死なない程度に噛み付くようギンタローたちのこと躾けてあっから、痛い思いしたくねーなら気ぃ抜くなよー」

「おっ…」

鬼いいいいいいいいいいいいいいいいっっっ！！！

シュウたちの修行初日の日。
カレンは、キラとミラ、夏休み中の三つ子と、ジュリと一緒に昼食を取っていた。

「あの、キラさま。ランチを終えたらお出掛けしてきてもよろしいですか？」

「ん？　どこへ行くのだ、カレン？」

「ドールショップです」

「お人形屋さんかあ」と、ミラ。「カレンちゃん、お人形さん好きだものねっ♪」

「お人形屋さん…」マナが呟いた。「どこの…？」

カレンが場所を言うと、ユナとレナが声をそろえた。

「あー、あそこの！」

「あら、ユナちゃんたち知っているの？」

「うん。入ったことはないけど知ってるよ」と、レナ。「あのレンガ造りでアンティークな感じのお店でしょ？」

「ええ、そうそう。そうですわ」

「あたしたちも一緒に行くよ」と、ユナ。「あたしとレナがよく行く雑貨屋さんの向かいだから。あと、近くにはマナの作る薬の材料売ってるお店もあるし。一緒に行くよ、カレンちゃん」

「方向音痴だし…」

と、付け足したマナに、カレンは苦笑した。

「そ、それ言わないで……」

キラが言う。

「カレン、おまえを1人で外に出すのは心配だ。またシュウのファンに狙われるかもしれぬからな。ユナ・マナ・レナと一緒に行って来い」

「はい、キラさま。ユナちゃんマナちゃんレナちゃん、ありがとう」

と、カレンは安堵しながら言った。

集団リンチ事件以来、正直1人で外を歩くのは不安だったし、マナの言うとおり方向音痴だからなかなか店まで辿り着ける自信ないし、一番仲良しのサラがいなくて寂しいと思っていたところだから。

昼食を食べ終わったあとはキラとミラと一緒に後片付けをし、そのあと自分の部屋へと行って着替える。

大好きなロリータファッションを久しぶりに身にまとい、鏡で全身をチェックしてから三つ子と一緒に外へと出た。

「ねえねえ、カレンちゃん」と、ユナが興味津々と訊く。「カレンちゃんのお部屋にあるお人形、何ていうの？　綺麗なお顔してるよね」

「球体関節人形よ。その名の通り関節が球になっていて、可動範囲が広いから色んなポーズを取らせることができるのですわ。あ、ネットで検索すると泣き叫びたくなるほど怖い画像とかも出てくるから要注意ですわよ」

目的の場所の前へと着くと、カレンはドールショップへ、ユナとレナはその向かいの雑貨屋へ、マナはもう少し離れたところにある薬の材料屋へと入った。

久しぶりのドールショップに一歩足を踏み入れただけで、カレンの瞳がきらきらと輝く。

店内には人形とそのファッション関連のもの、ウィッグやグラスアイなどが並べられている。

カレンは小走りでドレスが並べられているコーナーへと向かった。

久しぶりに来たこともあって、初めて見る新作ドレスがたくさんだった。

「あ、あの……」

と、少しおどおどとした声がして、カレンは振り返った。

（――わあ…！）

カレンの目が丸くなる。

（まさにドールみたいなお顔をした女の子ですわ…！）

カレンの瞳に映るのは、栗色をしたショートカットの女の子。
年齢はカレンと同じくらいだろうか。
身長はリン・ランと同じくらいで、とても華奢な身体をしている。
細身のパンツスタイルが良く似合っていた。
胸に名札がついていることから、どうやら店員らしい。
カレンが初めて見る顔だった。

接客に慣れない様子で、その店員の女の子が続ける。

「え、えと…、どのようなドレスをお探しですかっ……？」

「そうですわね…、ロリータファッションのドレスかしら」

そうカレンが言うと、店員の女の子がロリータファッションのドレスを集めて持ってきた。

「ロリータファッションのドレスですと、この８つになります。どれになさいますかっ……？」

カレンが好みのものを選んでいると、店員の女の子が言った。

「可愛いですよね、ロリータファッション。私もドールに着せているんです」

「そう」と、カレンは店員の女の子の顔を見た。「あなた、新しいバイトさん？」

「はい、３日前からここで働かせてもらっているんです」

「そう。ドールはたくさん持っていたりするのかしら？」

「そうですね。ここのドールももちろん持っていますが、創作人形を作っていて……」

「まあ、ドールを自分で作っているの！　すごいのですわ！」

カレンはついつい時間を忘れて、店員の女の子と人形の話で盛り上がった。

大分話し込んでから結構な時間が経っていることに気付き、慌てて選んだドレスの会計を済ませる。

（大変、ユナちゃんたち待っているかしらっ…！）

店の出入り口に向かうカレンに、店員の女の子が慌てたように声をかけた。

「あのっ、お客様っ…！」

カレンは振り返った。

「何かしら？」

「よくここへはお買い物に来てくださるのですかっ…？」

「色々忙しくて、今日は久しぶりに来たのだけれど…。でも、今日から１０日間はちょくちょく来れそうですわよ」

店員の女の子が明るい笑顔になり、カレンに深々と頭を下げた。

「お待ちしております、カレンさま」

「ええ、またね、ミヅキちゃん」

カレンはにっこりと笑って店員の女の子――ミヅキに小さく手を振り、店を後にした。

ミヅキの背後に1人の男が現れる。

「あれえ？　お客様、帰っちゃったか。新作ドールの情報がたった今届いたから、お知らせしようと思ったんだが」

「店長…」

と、ミヅキは振り返った。

男――店長が続ける。

「なあ、ミヅキ。おまえやっぱり」と、店長がからかうように笑った。「女店員だと思われたりしたのか？」

「そうみたいです。ぼくのこと、『ちゃん』付けで呼んでいましたし」

「あっはっは！　こうなったら女装して看板娘になるかーっ？」

「そうします」

「まじか、オイ。いや、男性客が確実に増えそうで有難いけど」

「その方が、これから色々と都合が良さそうなので」

そう言って、ミヅキが微笑んだ。

一方、その頃のシュウ。

精神統一のため滝行中。

「ぎゃあああああああああああああああああっっっ！！！」

リュウの魔法により、異常な勢いで頭上に降り注いでくる滝に首が折れそうになっていた。

第４４話　修行中の長男と、その頃のカレン　～前編～（後書き）

球体関節人形…。ネットで検索すると本当怖いのもあります。夜眠れなくなっちゃいます。
あとグラスアイ（ガラス製の目）など出てくるので苦手な方は要注意です。

昨日２１時３０分頃にメールくださった読者さまへ。
ちょっともう…、本当に飲み物を飲みながらメール見るのやめます。
あっぶないったらもう！　何その愉快すぎる夢（笑）
ああもう、噴出したコーヒーでキーボード壊れるかと思った……。

第４５話　修行中の長男と、その頃のカレン　～中編～

修行初日。
シュウはリュウから1日の修行メニューを教わった。

ＡＭ５時ちょっと過ぎ。
穏やかなところもあれば険しいところもある山道を、オオカミ風モンスターたちに追いかけられながらジョギング。

（オオカミに7回尾っぽ噛まれたってことは、7回走るスピード落ちたのか、オレ。そりゃ落ちるわ、長距離をダッシュされられりゃあ……）

ＡＭ７時。
腹筋・背筋・腕立て・スクワットを各１０００回ずつ。

（本当は２０００回だったところを、レオ兄が親父を説得してくれて１０００回になったんだぜ……）

ＡＭ８時。
霧で視界が真っ白になってしまう場所で剣術の修行。

（親父の剣がどこから飛んでくるのかさっぱり読めなかったぜ。ついつい剣術より、治癒魔法かける方に集中しちまったじゃねーか。でもまあ、明日からは親父が相手じゃなくてレオ兄が相手だし、レオ兄は手加減してくれるよな……）

ＰＭ１２時。
リン・ランが作ってくれた昼食を食べた。

（オレのために可愛い妹のリン・ランが一生懸命作ってくれたと思うと、それだけで美味かったぜ。ありがとな、リン・ラン）

ＰＭ１３時３０分。
精神統一のため、リュウの魔法が掛かった滝での滝行。

（ありえねえええ勢いで水が降り注がれるものだから、本気で首折れるかと思ったぜ。石とか混じってるし。丸太落ちてきたし。隣で普通に何食わぬ顔して頭から滝浴びてる親父はやっぱツエェェェと思った……）

ＰＭ１４時。
どうやらオオカミ風モンスター以外にも手懐けていたらしいリュウ。
リュウを継ぎ火・水・風・地・光を操れるシュウに用意されていたのは、その５つの属性を主とするモンスターたち。

（それぞれ集団で遠慮なく攻撃してきやがった。火属性の飛行型のモンスターたちが吐いた炎により火傷したあと、水属性のキングコングみたいなモンスターたちに氷漬けにされて凍傷を負い、そこへさらに風属性の可愛い妖精みたいな姿のモンスターたちの台風で身体を巻き上げられ、ようやっと地面に落ちてこれたと思ったら地属性の巨大モグラみたいなモンスターたちが大地から岩を勢い良く突き出しオレの身体を再び宙に舞わせ、トドメに光属性のアフロヘアーをしてトラ柄のパンツを吐いた雷様風のモンスターたちが激しすぎる落雷をオレの身体に突き抜けさせたんだぜ……。オレよく生きてるな、オイ。魔力は上がったか分からんが、とりあえず耐性はついた感じ……）

ＰＭ１８時。
リン・ランの作ってくれた晩ご飯を食べる。

（美味かった。昼に続き。すげー美味かった。リン・ラン、おまえたちの愛情により、すげー美味かったぜ。ぼろぼろの兄ちゃん、おまえたちのおかげで癒されたぜ……）

ＰＭ２０時。
魔法学校へ通うリン・ラン、ユナ・マナ・レナが図書室から借りてきた魔法書を読み、魔力と魔法の種類の増加に努力する。

（おおー、オレもついに足の速くなる魔法を覚えたぜ。これで仕事の移動が楽になるな）

ＰＭ２２時。
炎魔法と水魔法を使って湯を作り、この大自然の中に不自然に置かれたネコ足バスタブに入れて入浴タイム。

（やっぱ1日の疲れを取るには風呂だよなあ。……にしてもリン・ラン、兄ちゃんの身体をそんなに必死に隅々洗おうとするな……）

ＰＭ２３時。
リュウがミーナと共に葉月島へ帰る。
シュウとリン・ラン、サラとレオンのテントに分かれて就寝。
シュウはリンとランにべったりとくっ付かれながら、瞼を閉じた。

（明日から親父いねーけど、修行頑張らねーとな。この厳しい修行で親父に一歩近づけるし、強くなって帰ったらカレンのキスが待ってるし……。カレン、今日何してたかな。好きな人形売ってる店行くみたいなこと言ってたっけ……。今何してるかな。もう、寝たか

な……）

修行初日の夜。

シュウはカレンの顔を思い浮かべながら眠りに落ちていった。

シュウたちが修行に向かって3日目のこと。

昼下がりに買い物に行こうと玄関に向かったキラのところに、カレンが駆け寄ってきた。

「キラさまっ、どこへお買い物に行かれるのですかっ？」

「ん？　今夜の夕食の材料を買いに近くのスーパーへ…、いやまあ…、それなりに品揃えの良いスーパーならどこでも良いのだが」そう言ったあと、キラはカレンの様子を見ながら訊いた。「行きたいところがあるのか？　カレン」

「はい、一昨日行ったドールショップへ行きたいのです」

「そうか。では私はその近くのスーパーに行くことへするから、一緒に着いてくると良い」

「ありがとうございます、キラさま！」

カレンはうきうきとしながら、キラと一緒に外へ出た。

キラが言う。

「カレンは本当に人形が好きなのだな。一昨日その店に行ったばかりだろう」

「はいっ！　毎日行っても飽きないくらいですわ。一昨日久しぶりに行ったとき、あたくしの知らないバイトの女の子がいたのですが」

「ふむ？」

「ミヅキちゃんと言うのですが、一緒に話しているととても楽しくて……」

「ほお」と、キラが声を高くした。「友達になったのか？」

「いえ、そこまでではないのですが。彼女は自分でドールを作れてしまう特技を持っていて、ドールが好きなあたくしとしてはとても羨ましいことで……。もし友達になれたら、その技術を教えてほしいと思うのです」

「そうか。だが、カレン。おまえの安全のために言っておくぞ」

「はい、キラさま？」

「念のため、おまえがハンターで、そしてシュウの弟子だということは伏せておけ。ハンターたちにはもう知れ渡っているだろうが、一般人の口の端にはまだそんなに上っていないはずだとリュウが言っていた」

カレンは承諾した。

一昨日もやって来たドールショップの近くでキラと一旦別れ、ア

ンティークなレンガ造りのそこへとカレンは小走りで向かう。
店内に入ると、すぐさまミヅキが寄ってきて笑顔で迎えてくれた。

「いらっしゃいませ、カレンさま！　お待ちしておりました！」

今日のミヅキは、カレンと同じようにロリータファッションをしていた。

「わあ」と、カレンは顔を輝かせてミヅキを見る。「ミヅキちゃん、とっても可愛いのですわ！」

「ありがとうございます。でもカレンさまの方がお似合いです」

「あら、ありがとう」

カレンとミヅキが店の出入り口で話していると、店の奥から店長がやってきた。

「おや、カレンちゃん。お久しぶり」

「ごきげんよう、店長。お久しぶりですわ」

「ここのところ見ないから心配していたんだよ」

「ええ、ちょっと色々忙しかったもので……」

「そうかい、大変だねえ。…あ、これ」と、店長がミヅキの頭に手を乗せて言う。「うちの看板娘なんだよ。よろしくね……というか、もう仲良さそうだったね。話をするなら、店の端にテーブルと椅子があるからそこでするといい」

ということで、カレンはミヅキと顔を合わせたあと店の端にある椅子に座った。

ミヅキが紅茶を持って来て、カレンの向かいに腰掛ける。

「アールグレイでよろしかったですか、カレンさま」

「ええ、ありがとう。ミヅキちゃん」と、カレンは出された紅茶を一口飲んだあと、「ねえ、ミヅキちゃんの創作人形のことなのだけれど」

訊きたかったことを、さっそく切り出した。

「ここのドールみたいにキャスト製かしら？　それともビスクドールかしら？」

「キャストです。ビスクよりもキャストの方が好きで……」

「そう」と、カレンが声を高くする。「あたくしもなのですわ。キャストだとメイクも変更できるし、着せ替えも楽しめるし。ビスクも良いけれど、何せ陶器だから着せ替え中に壊してしまいそうで……」

「そう、そうですよね。だから私もキャスト製が好きなんです」

「それでそれで、ドールの作り方のことなのだけれど……」

ドール製作のことで話が盛り上がる。

一昨日に続き、カレンはついつい時間を忘れてしまった。

「あっ、いけない！」

と慌てて立ち上がる。

（キラさま、もうお買い物終わってしまったかしらっ…）

カレンに続いて、ミヅキも立ち上がった。

「お帰りですか？」

「ええ。もっと話をしていたかったのだけれど……」

「今日は私とお話をしてくださるためにここへ……？」

「ええ。…あっ、ごめんなさい！　何か買っていくわね」

「いえ、結構ですからお気になさらずに。それより、わざわざ私とお話をするために来ていただいたなんて……、とても嬉しいです。ありがとうございます」

そう言って嬉しそうに笑うミヅキの顔を見て、カレンは少しおどおどとしながら言ってみた。

「…あ…、あの、ミヅキちゃん？　そのっ…、あたくし、ミヅキちゃんとお話しているととても楽しくて……。お、お友達になれたらな……なんて思うのだけれどっ……」

「えっ、本当ですかっ？」

と、ミヅキが声を大きくした。

「ええ。迷惑でなければの話だけれどっ…」

「わあ、嬉しいです！　私もカレンさまとお話していると、とても楽しくて！　ありがとうございます！」

というわけで、カレンとミヅキの友達契約成立。

カレンが店から出て行ったあと、ミヅキは交換したカレンの携帯電話番号を確認する。

（まずはもう少し電話で仲良くなったあとに遊びに誘って……。あそこまで創作ドールに興味があるとなると、ぼくの家まで連れ込むのは容易だろうな。ぼくのこと女だって思いこんでるみたいだし、ちょっと誘えばあっさり着いて来そうだ）

ミヅキは携帯電話をポケットにしまった。

店長がやってきて言う。

「カレンちゃん、帰ったのか」

「ええ。つい先ほど」

「そうか。創作ドールの話をしていたみたいだな。俺も詳しくは聞いていなかったが、ミヅキおまえ、どういうキャストドール作っているんだ？」

「どういう？　まあ、女の子ドールですね」

「ふーん。作った型に何度か流し込んで、同じ造形のドールをいく

つか作ったりすんの？」

「そうですね。特に」

と、ミヅキは店長から顔を逸らし、にやりと笑って続けた。

「好きな女の子のドールなんか……ね」

第４５話　修行中の長男と、その頃のカレン　～中編～（後書き）

ビスクドール↓陶器製。
キャストドール↓レジンキャスト製。合成樹脂です。

昨日２２時３０分頃メールくださった読者さまへ。
ちょっと（笑）
だから言ったじゃないですかあああああああ！
絶対検索するんだろーなって思ってたけど……。
でもカレンの持ってる球体関節人形は可愛いよｂｂ

第４６話　修行中の長男と、その頃のカレン　～後編～

――霜月島にある山の中での、シュウの修行５日目。
寝る前にシュウとサラ、リン・ラン、レオンはテントの近くに火を焚いて囲み、猫モンスターもハーフも大好きなビールを飲んでいた。

主に炊事担当のリンとランが訊く。

「兄上、修行の方はどうなのだ？」

「兄上、強くなった気がするか？」

「んー、そうだな……」と、シュウは数秒考えた。「物理的な力も魔力も強くなった気するけど、それより体力とか防御力、魔法に対する耐性のがついた気するかなあ」

「そうだね」レオンが同意した。「シュウを見てるとそれは僕も感じるよ。この修行は正解だったね。リュウの目的はシュウの総合的な力の増加だったけど、その中でも特に打たれ強くなることが目的だったから」

「ふーん？」

そうなのかと数回首を縦に振りながら、シュウはサラに目を向けた。
携帯電話をいじくっているサラに、シュウは眉を寄せながら言う。

「ここ、もろに圏外だろ？　サラ」

「うん…、そうなんだけどさ。カレン、どうしてるかなあと思って」

うん、オレも気になる。

とシュウが心の中で同意したとき、キラがミーナの瞬間移動で現れた。

焚いていた炎の上に。

「ん？　寒いと聞いていたのだが、暖かいぞ」と、キラが足元に目を向ける。「おお、火を焚いていたのか。消してしまって悪かったぞ」

「いや、うん、それより母さん流石だね…」

炎の上に落ちて何ともないなんて……。

オレこの黒猫の血、本当に引いてんのかな……。

なんて思わず疑ってしまいながら、シュウは薪に再び魔法で火をつけた。

サラが訊く。

「わざわざどうしたの、ママ？」

「ビールが切れるころだと思って、追加持ってきたぞ」

と、キラとミーナが両手の袋を掲げた。

「おおーっ、母上とミーナ姉上ありがとうなのだ！」

「おおーっ、母上とミーナ姉上さすがなのだ！」

リン・ランが涎を垂らし、袋の中から新しいビールを取り出して飲みだす。

「キラ、ミーナ。少し話していくでしょ？」

と、レオンが身体をずらしてキラとミーナが座れるスペースを隣に作った。

レオンの隣にキラが、キラの隣にミーナが座る。

サラが訊く。

「ねえ、ママ。カレンどうしてる？」

キラの返答に、シュウも耳を傾けた。

「カレンも一緒に連れてこようと思ったのだが、部屋で電話中だったから連れて来なかったぞ」

「電話中？」シュウが鸚鵡返しに訊いた。「…って、ああ、親御さんか」

「いや」

と、キラが首を横に振る。

ミーナと共にビールの缶を開けて、一口飲んでから続けた。

「共通の趣味の友達とだぞ」

「共通の趣味の友達？」と、今度はサラが鸚鵡返しに訊いた。「え、何。カレンってそういう友達いたの？」

「シュウが修行でいないことにより、カレンは暇ができたわけだろう？　だから久しぶりに人形屋へ行ったみたいでな」

「ああ、カレン人形遊び好きだもんね」

「そこのバイトと仲良くなったみたいだぞ」

「バイト？」シュウとサラが声をそろえる。「って、男？　女？」

「ミヅキっていう名の女みたいだぞ」

それを訊いてシュウは安堵するが、サラの顔はむっとしたように歪んだ。

「電話してるってことは、携帯番号とか交換したんだ。ふーん、仲良いんだね」

「みたいだぞー」

とキラが同意したことにより、ますますサラの顔が歪む。

「その女、気に食わない」

「サラ…」シュウは苦笑した。「嫉妬かよ、オイ。おまえカレンのこと好きだなあ」

「アタシ帰ろうかな」

「何をする気だ？　サラ」キラが訊いた。「ミヅキには、カレンがシュウの弟子だということは黙ってある。サラがカレンと一緒にミヅキの前へ出たら、そのことを勘付かれてしまうぞ」

「それ危ないぞーっ」と、リン・ランが口を挟んだ。「今度は兄上の一般人のファンが、カレンちゃんを狙うかもしれないぞーっ」

「でも気にくわない」と、サラが口を尖らせる。「カレンの一番の仲良しはアタシでいいんだ。その女に、カレンに近寄るなって言いたい。嫌だって抜かしたらボコりたい」

「くぉらっ！」シュウは手を伸ばし、サラにデコピンをした。「おまえは新米とはいえ列記としたハンターだろうがっ！　一般人に手を上げるんじゃねえっ！」

「わ…かってる……けど」

と、サラが額を擦る。

それから３０秒ほど思案顔になったあとに立ち上がった。

「アタシ帰る」

カレンがミヅキと携帯電話番号を交換し合ったのは一昨日のこと。

一昨日も、昨日も、そして今日もカレンはミヅキと電話していた。

もうすっかり仲良くなった２人。

ミヅキが訊く。

「ねえ、カレンちゃん。明後日、私バイト休みなんだけど、一緒に遊びに行かない？」

「明後日？　ええ、いいわよ。遊びましょう」

とカレンが言ったとき、部屋のドアが開いた。

サラが姿を見せる。

シュウと一緒に修行へ行ったはずのサラが現れて、カレンはぱちぱちと瞬きをした、

「あらっ？　サ……。えと、おかえりなさい？」

「ただいまあ」と、サラが大きな声で言った。「カレン、誰と電話してんのー？」

「え、えと、友達よっ…」

「ふーん？」

と、不機嫌そうに、ベッドに腰掛けているカレンの隣に座ったサラ。

電話の向こうで、ミヅキが訊く。

「カレンちゃん、兄弟姉妹いるの？」

「え、ええ。そうなのよ、今のは姉で……」

「へえ？　顔とか似てるの？」

「…に、似ていませんわね、まるで。姉は強いしモデルさんのようだし」

「わあ、すごいねえ！」

「あ、ありがとうっ…。え、えと、ミヅキちゃん、姉があたくしに用事があるみたいだから、そろそろ……」

「あ、うん。分かった。それじゃあ、明後日の予定とかメールするね。おやすみ」

「ええ、分かったわ。おやすみなさい」

と、電話を切ったカレン。

サラが寝転がり、カレンの膝に頭を付ける。

カレンがサラの頭を撫でながら、おかしそうに笑った。

「サラってときどき甘えん坊ですわよね。それで、急に帰ってきてどうしたのかしら？」

「アタシも行く」

「え？」

「アタシも明後日一緒に遊びに行く」

「…そ、それはまずいかもしれないわっ…。あたくし、ここに居候

してることをミヅキちゃ……あ、えと、ついさっき電話してた子ね？　ミヅキちゃんには内緒なのだもの。サラが一緒に着いて来たらバレちゃうかもしれないでしょう？」

「大丈夫。変装して背後からこっそり着いていくから。だからアタシも絶対に行くからね」

何だかフテ腐れた様子のサラに、カレンは困惑した。

「ど、どうしたのよ、サラ…？」

「何が何でも絶対一緒に行く。ミヅキ、どんな女か見てやろーじゃん。あームカつく」

「だ、だから何を怒っているのかしらっ？」

「……アタシが一番」

「え？」

「アタシが、カレンの一番の友達なの！」カレンの膝に顔を埋め、サラが足をじたばたとさせて喚く。「アタシが一番、アタシが一番、アタシが一番～～～～～～っっっ！！！」

「もう、サラったら」とカレンは溜め息を吐いた。「そんなの当たり前のことですわ。あたくしの一番の友達なんてサラに決まっているじゃない」

サラが仰向けになり、下からカレンの顔を見ながら訊く。

「本当にぃ？」

「本当よ。だからフテ腐れたりしないで、ご機嫌直してくれないかしら？」

「……わかった、直す」

「よかっ――」

「尾行させてくれたらね」

「……わかったわよ、もう……」

と、カレンは苦笑しながら尾行の許可を出した。

シュウの修行7日目の日。

ＰＭ１２時。

ミヅキと遊ぶというカレンを、サラは待ち合わせ場所――葉月町の中央にあるキラの銅像前まで送ってやった。

そしてそこから後方２０ｍへと下がる。

（ウィッグよーし、帽子よーし、サングラスよーし、念のためにカラコンよーし）

変装バッチリ、サラはミヅキの姿が現れるのを待つ。

（これでアタシだとは気付かれまい！　さあっ、そのツラ見せてみろやミヅキっ！！）

そして数分後、カレンの前に姿を現せたミヅキ。

（――ぐはっ！！）

サラ、何となく衝撃を受ける。

（すんごい可愛い女じゅわんっ！！　ちょっ、何それ反則っ……！！　可愛いもの大好きなカレンにとっちゃ、ドツボの女かもっ……！！）

本日のミヅキは、カレン同様のロリータファッション。

カレンと二言、三言交わしたあと、カレンの手を取って歩き出した。

サラの顔がひきつる。

（なっ…なあああああああんで手ぇ繋いじゃうわけえええええええ……！？　あっ、ちょっ、くっ付きすぎっ！！　おっ、おのれミヅキィィィ……！！）

イライライライラとしながら、サラはカレンとミヅキを尾行する。

カレンに対するミヅキの態度は、友達というより恋人に見えた。

彼女に対する彼氏の態度、というような。

（何なの、ミヅキって…！？　レズなわけ…！？　だったらカレン

危ないじゃん！　……って、あれっ？　兄貴と入れ替わったとき、カレンといちゃつきまくったアタシもレズ！？　……いや、アタシはそれとは違うか。アタシ、レオ兄のこと大好きだし。…ん？　バイってやつかアタシ！？　アタシどんだけ節操な――ゴホゲホゲフッ……。アタシどんだけオールマイティー！！）

しばらく尾行してから、サラはあることに気付く。

（ミヅキの奴、どこかに立ち寄る度に携帯取り出して、カレンの顔画像撮ってない……？　しかも色んな角度から）

サラは眉を寄せた。

（顔の正面や横顔は分かるけど、顔の下からは撮らないでしょ、普通…。あれっ？　今度は耳？　耳撮ってるっ？　おかしいだろ、オイ。…すーーーんごい、怪しい女なんだけど……）

ミヅキを不審に思い、サラの顔が歪む。

カレンがミヅキと落ち合ったのは昼前で、今はもう夕刻。

夏でまだ明るいとはいえ、カレンは夕食前には帰ることになっている。

（そろそろ帰る雰囲気だな。とりあえず良かった、カレンに何もなくて……）

そうサラが安堵したときのこと。

今日の昼に待ち合わせしたキラの銅像前に、カレンとミヅキが立ち止まる。

サラがカレンの口元に注目すると、「今日はありがとう、楽しかった」というようなこと言っているようだった。
ミヅキの斜め後ろから見ているものだから、ミヅキが何を言っているのかまでは見えない。

（いつまでカレンと話してんの、ミヅキの奴。さっさと帰れって――……えっ？）

苛々としていたサラは、突然のミヅキの行動に目を丸くした。

キラの銅像前、サラが凝視している前、人々が行き交う公衆の面前。
何ら戸惑った様子も周りの目を気にする様子もなく、カレンにキスした。

キスした。
キスした。
キスしやがった。

（――レズ、決定）

顔を赤くしながら呆然として立っているカレンの前から、ミヅキがにっこりと笑って去っていく。
それと同時に、サラはカレン目掛けて飛び出した。

目の前にサラが物凄い形相で現れ、カレンはぎょっとしてしまう。

「サ、サラっ……！？」

「ちょっとちょっとちょっとちょっと！」と、サラはミヅキが去っ

ていった方向を指差しながら言う。「何あれ何あれ何あれ何あれ！
レズ！？　レーズー！？　ズーレー！？　ズーレーかあああ！
？」

「ちっ、違うわよ、いくらなんでもっ……！」

「だってキスされてたじゃんカレン！」

「え、ええ。あたくしも驚いたのだけれど、それがミヅキちゃんの地元の挨拶だそうよ」

「ああ、そういえばそういう島もあると聞いたことが……。なーるほどねー、挨拶だったかあ」と一度安堵したサラだったが、そのあとぶんぶんと首を横に振った。「って、いやいやいやいや！　挨拶に交わすようなキスじゃなく見えた！　だって結構長かったし！　あれレズだよ、レズレズレズ！！」

「そんなわけ――」

「そんなわけある！　絶対ある！　カレン危ないよ！　もうミヅキと会っちゃダメ！！」

「え、ええっ？」

「ダメったらダメだよ！？　いいね！？　分かった！？　よし、分かったね、イイ子イイ子」

とサラがカレンの手を引き、帰路へと着く。

カレンは小走りになってサラの後ろを着いていきながら、慌てたように言った。

「ま、待ってサラ！　あたくし、ミヅキちゃんと次に遊ぶ約束しちゃってっ……！」

「断ればいい。断れないっていうなら、アタシが断ってやるよ」

「あっ、あたくし、ミヅキちゃんから教えてもらいたいのですわっ……！」

「創作人形の作り方？　球体関節人形だっけ？　そんなの親父に頼んでちょっと調べてもらえば詳細まで分かるよ」

「でっ、でもっ、ミヅキちゃんと話しているととても楽しいのですわ、あたくしっ…。今まで共通の趣味持っている人は周りにいなかったから、ミヅキちゃんと仲良くなれたことが余計に嬉しくてっ……！」

「……」

サラの顔が膨れる。

「お願いよ、サラっ…！　あたくし、ミヅキちゃんとお友達でいたいのですわっ……！」

「……」

さらに膨れる。

「ねえ、サラっ…！　心配しなくても大丈夫なのですわ、ミヅキちゃんは本当に良い子だからっ……！　お願い、お友達でいさせてっ

……！」

「……」

ぱんぱんに膨れた。

サラが立ち止まり、カレンに背を向けたまま口を開く。

「あとはここの道まっすぐ行けば、家に着くから」

と、カレンの手を離して先に家に向かって駆けていく。

「あっ、サラっ…！」

慌てて追いかけるカレンだが、サラの足には追いつかない。

カレンが５０ｍ走る間にサラの姿は小さくなってしまい、カレンは立ち止まった。

「もう……」

と、苦笑しながら自分のペースで歩き出す。

（ヤキモチ焼きの幼い彼氏を持った気分なのですわ……）

家に帰ったはずのサラが再びミーナの瞬間移動でやって来て、食事中だったシュウとリン・ラン、レオンはぱちぱちと瞬きした。

「どうしたの、サラ？」

とレオンが訊くと、サラがレオンの膝の上に腰掛けた。
レオンの向かいの席からシュウがサラの顔を覗き込む。

「えらく膨れてんな。カレンと喧嘩でもしたのかよ？」

サラが口を開く。

「……カレンにキスしやがった」

「へっ！？」思わず声が裏返ったシュウ。「だっ、誰がっ！？」

「ミヅキ」

「ミヅキ…」鸚鵡返しに言いながら、シュウはぱちぱちと瞬きをする。「って、女の子だろ？」

「レズだレズ。ズーレーだ」

「おまえだってカレンとしようと思ったらできるだろ？」

「できるよ。でも、アタシとカレンは友達だけど、ミヅキは違う感じ！　明らかにカレンに恋してて狙ってるっていうか！　危ないからもうミヅキと会っちゃダメって言ったのに、カレンがミヅキと友達でいたいって言う！　アタシがダメだって言ってるのに！」

「それでフテ腐れてまたここに来たわけね、おまえ……」そう察しながら、シュウは苦笑した。「おまえ本当親父そっくりだな、俺様でワガママで独占欲強いところが。あ、おまえは女だから俺様じゃなくて女王様か？」

「ムカつく！　ムカつくムカつくムカつく！　ミヅキ、ムッッッカつく！！」

「はいはい、サラ。落ち着こうね」

そう言ってレオンがサラの頭を撫でると、サラがレオンにだらんと背を預けて口を閉ざした。

まだむくれているサラの顔を見ながら、シュウは呆れて溜め息を吐く。

（何をそんなに心配してんだか。カレンの一番の友達はサラだろうし、そのミヅキっていう女の子は別にレズじゃないと思うけどね、オレは。…でも、もし本当にレズだったら……？）

シュウは眉を寄せた。

（もしかしてオレのライバルか？）

第４６話　修行中の長男と、その頃のカレン　～後編～（後書き）

２２日の２２時５５分頃メール下さった読者さまへ。

はい、ごめんなさい（笑）

カレンとミヅキが友達になるまでの過程に「共感し合える会話」を何か入れようと思って考えたら、アレしか思い浮かばなかったのですわ……ｏｒｚ

それで最初は本文に説明入れてた→マニアックすぎて何の小説書いてるか分からなくなった→消した→気になった読者さまがいらっしゃったら、わざわざ検索かけてしまうかも→後書きに書いておこ……。

とまあ、こんな感じです……。

さて、ゴソゴソゴソゴソ……

第４７話　修行から帰りました

シュウの修行１０日目――最終日。
早朝からミーナの瞬間移動でリュウがやって来て、シュウの傍らで修行の様子を見ていた。
その鋭い瞳で、凝視していた。

最後の修行を終え、荷物をまとめながらシュウはリュウの顔をちらちらと見る。

（な…、なんだろ。親父、何も言わねーな。も、もしかしてオレ、まったく成長してねえとかっ……？）

と不安に思いながら、シュウはリュウに訊く。

「お、親父…、オレ成長したっ……？」

「あ？」

とシュウの顔を見たあと、背を向けたリュウ。

（え、何、親父怒ってんの！？　オレまじで成長してねえの！？）

シュウが狼狽したとき、リュウの表情を見たレオンが笑って言った。

「成長したってよ、シュウ」

「えっ？」

「リュウのにやけた顔がそれを物語ってる」
「うるせーな」
と、リュウがレオンをどついた。
シュウはリュウの前まで走って行って訊く。
「ほ、本当っ？　親父っ！？　オレ、成長した！？」
「……ま」と、リュウがシュウから目を逸らして言う。「思ったよりはな」
「…お…おおおおお……！」
シュウの顔が感動に輝く。
（オレ、親父に少し近づいた！）
そして、
（カレンとキスできちゃうよオレ！）
シュウは舞い上がった。
リュウが続ける。
「んで、シュウ、サラ、レオン。明日はおまえらに仕事入れてねーから休んどけよ」

シュウとサラ、レオンは承諾した。

修行を終え、霜月島からミーナの瞬間移動で帰ってきたシュウとリュウ、サラ、リン・ラン、レオン。

シュウは1階でキラや妹たちと顔を合わせたあと、2階に駆け上って自分の部屋に荷物を放り投げた。

そのあとカレンの部屋のドアをノックする。

「どうぞ」

と久しぶりに聞くカレンの声に、シュウは笑顔になる。

中に入ると、ベッドに腰掛けているカレンの姿があった。

ますます顔が明るくなったシュウだったが、カレンはどうやら電話中。

カレンの隣に腰掛け、おとなしく電話が終わるのを待つことにした。

「そうそう、そうですわよね、ミヅキちゃん」

カレンの電話の相手は、どうやら噂のミヅキのようだ。

（本当に仲良しなんだなあ…）

と、カレンの楽しそうな顔を見ながらシュウは思う。

まだまだ終わりそうにない気配なので、疲れているシュウはカレンの背後に寝転がって待つことにした。

5分後。

（長いなあ…）

黒猫の尾っぽでベッドのマットの上をぱんぱんと音を立てて叩き、カレンの気を引こうと試みたシュウ。

しかし、カレンは電話に夢中で反応なし。

さらに10分後。

（まーだっかなあ……）

ベッドつけられているカレンの片手を、尾っぽの先でくすぐってみたシュウ。

ビシッ

と振り払われた。

またさらに20分後。

（本当長いな、オイ……！？　まーだーかーよおおおおおおおおおっっっ！！）

バシバシバシバシと、カレンの手を尾っぽで叩くシュウ。

カレンは溜め息を吐き、シュウの尾っぽをグイッと引っ張った。

「フギャッ！」

というシュウの声に、電話の向こうのミヅキが驚いたようだった。

「い、今、すごい声が聞こえた気がっ…」

「誤って飼い猫の尾っぽを踏んでしまったのですわ」

「そ、そう」

「ごめんなさい、ミヅキちゃん。そろそろ……」

「あ、うん、分かった。それじゃ、明日ね。おやすみ」

「ええ、明日ね。おやすみなさい」

カレンはミヅキとの電話を切ると、眉を寄せてシュウに振り返った。

怒ろうと思ったカレンだったが、嬉しそうに笑っているのシュウの顔を見たら気が抜けてしまった。

「なーにを笑っているのかしら……」

「やっとこっち見た。ただいまっ」

「おかえりなさい。修行、がんばってきたのかしら?」

「おう！　んでオレ、ちゃんと成長したって！　強くなったって！」

「そう。良かったわね」

「だ、だからっ…」と、シュウが少し頬を染めながらカレンの顔に手を伸ばす。「や、約束のキスさせてくださいっす……！！」

「ああ、そのことなのだけれど。あなた、あたくしが全部言い切る前に部屋から出て行ってしまうのだもの」

「？　何だよ」

「キス、ほっぺまでよ」

「――！？」シュウ、衝撃。「なっ、なっ、なっ、なんだよそれ！？　きっ、聞いてなっ……！！」

「だから、あたくしの話を全部聞く前にあなたが部屋から出て行ったからでしょう」

「オっ、オレ、唇にしていいと思って頑張ってたのにっ！！」

「そんなの知らないのですわ」

「あああああ……、もうダメ。すーげーヘコんだ……」

と、カレンに背を向けて横臥し、口を閉ざして傷心モードになるシュウ。

そこへサラがドアから顔を覗かせた。

「あっ…！　サラっ…！」と、サラの機嫌を窺いながら、カレンは笑顔を作った。「お、おかえりなさいっ……！」

「……ただいま」サラがカレンから目を逸らして訊く。「……怒っ

てる？」

「え？」カレンはぱちぱちと瞬きをしたあと、笑って言った。「どうしてあたくしが怒るのかしら？　あたくしの方こそ先日はごめんね、サラ。怒らせてしまって……。えと…、まだ怒っているのかしらっ？」

サラが首を横に振り、カレンのところへと歩いてきた。

カレンの隣に座り、寝転がってカレンの膝枕に頭をつける。

「あっ」振り返り、短く声をあげたシュウ。「サ、サラおまえ、なんって羨ましいことをっ……！」

シュウの声が聞こえているのか聞こえていないのか、サラはシュウには何も言わずカレンに訊く。

「ねえ、カレン。ミヅキとまた遊ぶんでしょ？」

「え、ええ…」

と、カレンは戸惑いながら頷いた。

「いつ？」

「えと…、あ、明日ですわ」

「アタシまた尾行する」

「サ――」

「あの女」と、サラは声を大きくしてカレンの言葉を遮った。「やっぱり怪しいよ。レズ云々じゃなくても、何かおかしい。カレンが危ない気がする」

「何」

と、シュウは眉を寄せた。

カレンが危ないだなんて、聞き捨てならず。

「どういうことだよ、サラ？」

「この間カレンがミヅキと遊んだときさ、ミヅキ、携帯のカメラでカレンの顔撮りまくってたんだけど。その数があまりに多かったし、撮り方がどうもおかしくて」

「おかしいって？」

「カレンの正面の顔や、横顔を撮るのは分かるよ？　でも、顔の下から撮るのっておかしくない？　あと耳とかも撮ってた」

「た…、たしかにおかしいな」

カレンが言う。

「そ、そのことについてはあたくしもおかしいと思ったのだけれどっ……。アレじゃないかしらっ？　ミヅキちゃん創作人形を作っているから、ドールの顔を作る際に役立つとかっ……！」

「それってつまり」シュウは眉を寄せた。「カレンの顔した人形を作るってことも有り得るってことか？」

「うっわ、何それ」サラが顔を引きつらせる。「きもっ！　こわっ！　ミヅキやばくね！？」

「そ、そんなことしないのですわ、ミヅキちゃんは！」と、カレンが慌てたように言った。「あたくしの顔したドール作るなんて、あたくし聞いていないものっ…！　ドールを作るにあたって、色んな人の顔が勉強になるのよ！　……た、たぶん、きっと」

「……」

シュウとサラは顔を見合わせた。
同時にカレンの顔を見て、サラ、シュウの順に言う。

「アタシやっぱり明日尾行するよ、心配だから」

「オレも。明日の仕事は親父から休みもらってるし」

そういうことになった。

カレンとミヅキの待ち合わせ場所は、先日と同様に葉月町の中央にあるキラの銅像前。
そこから後方２０ｍ。

変装したシュウとサラが並んで立っていた。
サラが自分とシュウをチェックする。

「カラコンよーし、サングラスよーし、帽子よーし、ウィッ……ぷっ、ウィッグよーし」

「……おい、サラ」シュウの顔がひきつる。「おまえ今笑っただろ」

「気のせい」

「嘘こけ。おまえは今、オレのヅラを見て笑った。そしてカレンもさっき堪えきれずに笑いを吹き出した。だがオレは笑えん。笑えねーぞ……！！　おい、サラ！？」

「何」

「オレのヅラ、なあああああんでボーズなんだよ！？」

「最近、結構流行ってるって」

「この１０円玉ハゲは！？」

「帽子被ってんだから分かんないって」

「帽子被ってんならヅラいらなくね！？　っていうか、何だよこの薄っぺらいプラスチックは！？　これどう見てもファッション用じゃなくてパーティー用だろ！！　手触りつるつるだぜ！！」

「うるさいなあ、もう。…あっ、ほら！　ミヅキ来たよ！」

と、サラが指を差す。

シュウは帽子を深く被りながらミヅキの姿を確認した。

本日もカレンと同じロリータファッションのミヅキ。

「ん？　カレンに負けず劣らずの可愛い子だな」

「顔はね。ま、乳も可愛いか」

「…たしかにカレンに勝るとも劣らない貧乳……。…ていうか…なんか……」

シュウはミヅキに違和感を感じ、首をかしげた。

カレンとミヅキが歩きだし、サラがシュウを引っ張って歩き出す。

「なんか、何？　兄貴」

「いや……、あのミヅキちゃんて子、すげー可愛いけどさ。あんまり女の子っぽくないっていうか……」

「貧乳だから？」

「それ言ったらカレンもじゃねーかよ。乳じゃなくて、脚とか…」

「脚？　細いね、ミヅキ」

「いや、細いんだけどさ……。オレには今にもスネ毛が生えてきそうに見える」

「は？」ぱちぱちと瞬きをし、ミヅキの脚に注目するサラ。「……あれ……？」

シュウに続いて違和感を感じ、サラは眉を寄せた。

「なんか良く見ると筋肉質？　ていうか、あのふくらはぎの形っていうか、脚のラインが……」

「女の子とはちょっと違うよな」

サラが同意して頷く。

シュウとサラは顔を見合わせ、声をそろえた。

「まさか男……とか？」

第４７話　修行から帰りました（後書き）

昨日の２３時頃メールくださった読者さまへ。
脱字報告ありがとうございます。それからすみません。反省してます、反省してますとも。心から反省してますとも。
だけど…、あなた様に続いて私も……ハライテェｗｗｗ
やばいとこ脱字しちゃったよｗｗｗ
きっとシュウのファンの間では売られてるんでしょうね、『自爆機能つきシュウ薪』！

あっ、それから第９話よりコピペです←

葉月島では、人間の飲酒は２０歳から。
モンスターの飲酒は年齢制限なし。
人間とモンスターのハーフは、１２歳から。

１回しか書かなかったし忘れちゃいますよね、すみません。

第４８話　ミヅキのアパートにて…

カレンとミヅキが歩くところから後方２０ｍ。
シュウとサラは、ミヅキを不審に思いながら尾行していた。

「おい、見ろよサラ。ミヅキちゃんて首細いけど、カレンと比べると大分太いぞ」

「本当だ。あと微妙に喉仏が見える気が……」

「やっぱ男か？」

「兄貴、痴漢のフリして確かめてくれれば？　前からスカートめくれば分かるんじゃない？」

「ばっ、バカ言ってんじゃねーよっ！　ミヅキちゃん女の子だったらどうすんだよ!?　っていうか、こんな公衆の面前で白昼堂々痴漢したら捕まるだろっ……！」

「それもそーか。じゃあ、うーん……。あっ」とサラが指をぱちんと鳴らして言う。「ミヅキの正面に回って、風魔法で風吹かせてスカートめくらせるとかどう？」

「すっ、すぐ隣にいるカレンのスカートまでめくれちまうじゃねーかよっ……！」

「良かったじゃん、兄貴。カレンのパンツ見れるよ」

「お…、おおお……！　ありがてえっ……！　――じゃなくて！

だっ、ダメだそんな――」

「今日のカレンはイチゴぱんちゅっ☆」

「イっ、イチゴぱ……！？　イ、イイイっ、イチゴぱんちゅ！？
イチゴぱんちゅっすか！？　なっ、なんって可愛いパンツはいてんだカレンめっ……！！」

「よし、風吹かせるか」

「おうっ！　強風じゃなくて、こう下からフワッいく風の方がめくれ安いかもな――って、なっ、何言ってんだよオレはっ……！！
ダメダメダメっ！　ダメだからな、サラ！！」

「じゃー、どうやってミヅキの性別確認すんの」

その方法をあれやこれやと考えながら、カレンとミヅキの尾行を続けるシュウとサラ。
これといった方法が見つからず、日が暮れて行く。

「…あ、そろそろ帰る時間だな」

とシュウが携帯電話で時刻を確認したとき、夕立がやってきた。
結構な勢いで空から雨が降ってくる。

「うわ、カレン風邪が引く前に帰らねーとっ…！」

そう慌てたシュウだったが、ミヅキがカレンを引っ張ってどこかへ走っていく。
シュウとサラが追いかけていくと、ミヅキは割と近いところにあ

ったアパートに入っていった。
大き目のアパートだ。
そこの1階にある部屋へとカレンを引っ張っていく。
アパートの中まで追いかけることはできず、シュウとサラは立ち止まった。
「ここってミヅキちゃんのアパートか」
「そうだろうね、たぶん。ど、どうしよう、兄貴……」
「ど、どうしような、サラ……」
ミヅキのアパートまで引っ張られてきたカレンは、リビングらしき部屋に連れて来られた。ミヅキの部屋となると自分の部屋と同じように乙女な空間かと思っていたカレンだったが、そこはとても小ざっぱりとしている。
人形も飾られていない。
部屋の中を見回しながら、カレンは訊いた。
「ミヅキちゃん、1人暮らしなのかしら?」
「うん。両親は地元にいるよ」
「そう」
「ちょっと待ってて。カレンちゃん濡れたままじゃ風邪引いちゃう

から、何か着替え持って来るね」

「あ、大丈夫よ。あたくし夕食までには帰らないと行けないから、そんなに長くいられないのですわ」

「そっか。じゃあ、これで身体拭いて」

と、ミヅキがタオルをカレンに渡した。

「ありがとう。ミヅキちゃんは早く着替えてきて。風邪引いてしまうのですわ」

「それじゃ、ちょっと失礼して……」

ミヅキがリビングの向かって右側の方にあった部屋へと入っていった。

そこが寝室なのだろうと、カレンは察する。

（じゃあ）

と、カレンはリビングの向かって左側の方にあるドアに顔を向けた。

（あっちのお部屋が、ミヅキちゃんのドール工房かしら。ああ、見てみたい。見てみたいのですわあああああっ！　入るには、ミヅキちゃんの許可をいただかなくてはね！）

ミヅキが戻ってくるのを待ちきれず、カレンはミヅキが入っていった部屋へと向かった。

ドアが少し開いていて、中を見ることができる。

カレンが隙間から中の様子を見ると、ミヅキが着ていたパフスリーブのトップスを脱いだところだった。

（――えっ…！？）

カレンは驚きのあまり、一度ドアの後ろに隠れた。

（な…、何…？　えっ……？）

恐る恐る、もう一度ドアの隙間からミヅキを見たカレン。

ミヅキはクローゼットを開け、着る服を選んでいるようだった。

（な…、何…？　何かしらっ……？）

カレンは足音を立てずにリビングへと戻っていった。

（何かしら何かしら何かしらっ……？）

混乱する。

カレンの頭が混乱する。

バッグの中にある携帯電話が鳴り、カレンはすぐに取り出して出た。

電話の相手は、サラと共にアパートの前にいるだろうシュウだ。

「もしもし、カレ――」

「ねえ、シュウ」カレンはシュウの言葉を遮った。「さ、最近のレディのことなのだけれどっ…」

「お、おう？」

「さ、ささささ、最近のレディは脇へアー、ノー処理ＯＫっ？？」

「は？　何？」

「さ、ささささ、最近のレディは逞しくも、は、ははは、腹マッスル割れてマッスルっ？？？」

「……。…と、とりあえず、おまえが今パニクッてることはよく分かった。落ち着いて分かる言葉でもう一度言ってみろ」

「だ、だだだ、だからですわねっ、さ、ささささ、最近の――」

「カレンちゃん？」

カレンの言葉がミヅキの声に遮られた。

カレンは驚きのあまり、思わず電話を切ってしまった。

「あっ、ミヅキちゃんっ……！　き、着替え終わったのねっ……！」

「うん。電話中だったみたいだけど、もう終わったの？」

「えっ？　ええ、終わりましたわっ」

「そう。あ、そこのソファーに座ってて。今お茶淹れるね。アイスティーでいい？」

「え、ええ、ありがとうっ……」

ミヅキがダイニングキッチンへと向かい、カレンはリビングの２人掛けのソファーに腰掛けた。
カレンの頭がまだ混乱している。

（ど、どどど、どういうことなのっ？　どういうことなのかしらっ…！？　さ、さっき見たミヅキちゃんの身体、お、男の子のようだったのですわっ…！　ま、まさかミヅキちゃんて男の子…！？　…そ、そんなわけありませんわっ！　こんなに可愛い男の子なんているわけがありませんものっ…！　って、ジュリちゃんも女の子顔負けの可愛さじゃなくって！？　じゃ、じゃあやっぱりミヅキちゃんも……！？　…と、と、と、とりあえず落ち着くのですわ！　落ち着くのよ！　落ち着きなさい、あたくし！）

ミヅキが自分の分とカレンの分のアイスティーを持って、カレンのところへとやってきた。
２つのグラスをテーブルの上に起き、ミヅキがカレンの隣に腰掛ける。

「あ、ありがとう、ミヅキちゃん」

カレンはそう言って笑顔を作り、落ち着こうとアイスティーをごくごくと半分ほど飲んだ。
グラスをテーブルの上に置き、カレンはミヅキの顔を見た。

「え、えと、ミヅキちゃん？」

「ん？　なぁに、カレンちゃん」

「え、えと…、そのっ……」

本当は男の子なのかしら？

と、訊く勇気はカレンにはなかった。

「そ、そのっ……、あっちのお部屋は、ドール作りのためのお部屋かしらっ？」

「うん、そうだよ。最近ね、新しいドールのヘッドができあがって…」

「まあ！　どういうお顔なのっ？」

「可愛いよ、すごく。本当クリソツで、ぼくの中の最高傑作だ」

「ぼく？　今、ミヅキちゃん、ぼくって言いましたわよね？　ミヅキちゃん、もしかして本当は――」

カレンは言葉を切った。

身体がおかしい。

「えっ…？」

カレンの手が、足が、身体が麻痺したように動かなくなっていく。

ミヅキがおかしそうに笑った。

「一気に半分も飲んでくれるとは思わなかったよ、カレンちゃん」

「ミ…ヅキ…ちゃ……？」

「おかげで大分効いちゃったみたいだね、痺れ薬」

「し…、しび…れ……？」

「すごいでしょう、これ。魔法がかかっているんだって。でも安心してね、人体に悪影響はないんだって。誰から買ったと思う？　あのリュウさんとキラさんの子供のマナちゃんだよ。マナちゃんが夏休み中だけ週に一度、葉月町のとある路地で色んな薬を良心的な価格で売ってくれるんだ」

「！？」

ちょ、マナちゃん裏でそんな商売していたの！？

カレンは驚愕すると同時に、マナの作った薬となればそれはもう強力で、しばらくは動けないだろうことを察した。

（こ…、怖いわ……）

カレンの怯えた瞳を見て、ミヅキが笑う。

「大丈夫だよ、カレンちゃん。痛いことはしないから。ねえ、ドール作りの部屋が見たいんでしょ？　見せてあげるよ」

ミヅキがそう言いながら、リビングの左側の方にある部屋のドアを開けた。

カレンをその細い腕で抱き上げ、そこの部屋へと連れて行く。

（――いっ…、嫌っ……！）

部屋の中に入れられるなり、カレンにぞっと寒気が走った。

8畳ほどの部屋の壁に沿って置かれている棚の上には、球体関節人形が隙間なく並べられている。

恐らく、そのうちの7割がミヅキ手作りのもの。

そして床には、人形がいくつか壊れた状態で投げ捨てられていた。

だが、カレンに恐怖を与えたのはそこらではない。

部屋の中央あたりに作られた、木製の作業台のようなところ。

そこの上にいくつも並べられた、同じ造形の人形の顔。

全て同じ塗装・グラスアイのその人形の顔は、まだウィッグを被せていない状態でもカレンは分かった。

（あたくしの…顔……！）

ミヅキがにっこりと笑って言う。

「ね？　クリソツでしょ？　この間ぼくがカレンちゃんのお顔を色んな角度からたくさん撮ってたのって、このためだったんだ」

ミヅキが戸口から中央の方へと歩いて行き、作業台の空いているところにカレンの身体を寝かせた。

恐怖に零れたカレンの涙を見て、ミヅキが笑う。

「やだなあ、痛いことなんてしないってば。ぼくね、3人の姉がいるんだけど。小さい頃から、女みたいだってバカにされて育ってきたんだ。だから姉たちなんか大嫌いでさ……。それからなんだ、ドールが好きになったのって。だって、ドールは傷付くことなんか言わないでしょ？　それに、ドールはぼくの思うがままにできる。だ

からぼくね、好きな女の子のドールをたくさん作るのが好きなんだ。ぼくの好きなように扱って、1つや2つ壊れてしまっても大丈夫なように。飽きるまで、ぼくの好きに……思うがままにするんだ。まあ、飽きる前にいらなくなって壊しちゃうドールもあるけどね。床に転がってる子たちみたいに。あの子たちのモデル、ぼくの昔の彼女たちなんだ。ぼくと別れるときに、みーんな揃って言うんだよ。ぼくのこと『気持ち悪い』って。ひどいよね。まるでぼくの姉たちみたいだ。傷付いて思わず壊しちゃったよ。比べてドールは本当にいいよね、自分の思うがままにできるし傷付くことなんか言わないから。生身の人間じゃ、なかなかこうもいかない。…でも……」

カレンの目尻から耳元へといくつも流れている涙を、ミヅキが指で拭った。

「今のカレンちゃん、ドールと変わらないね。動けないから、ぼくの思うがままだ。いつもはモデルの顔だけ作るんだけど、今回は身体もそっくりに作りたかったから痺れ薬を飲ませたんだ。動けなくして、裸にして、細かいところまで測って、そのままドールサイズに縮小して作って、カレンちゃんのヘッドと組み合わせる。そうすれば、小さくともそのままカレンちゃんだ。嬉しいな、ぼく。本当にカレンちゃんが好きでさ。……ああ、それにしても」

と、ミヅキが不気味に微笑む。

「今のカレンちゃん、本当にドールと変わらないね。動けないし、薬が効いてもう何も言えない。ぼくの思うがままだ」

ミヅキの手がカレンの服にかかる。

カレンは助けを呼ぼうと思うが、もう口まで痺れてしまって言葉を喋ることができない。

（た…、助けてっ……！　助けて、サラっ……！）

心の中、カレンは必死に叫んだ。

（助けて、シュウっ……！！）

第４８話　ミヅキのアパートにて…（後書き）

ＮＮＲ（ネット小説ランキング）からお越しの読者さまへ。
１１月１９日が最後の更新みたいになってしまっていて申し訳ございません。
どうやら違反者が多いらしく、「小説家になろう」全体が登録拒否とされてしまっているようです。新規登録もできなければ、私のように変更すらできない状態であります。
ご迷惑をお掛けしてしまい、申し訳ございません……。

それにしても今回の話、姫百合のリアル恐怖体験を一部入れたら思ったより恐ろしくなってしまいましたねー。
いるんですよね、ミヅキのモデル。外見は似てないんですけど。

第４９話　約束のキス

夕立が止んだミヅキのアパートの前。

カレンに突然電話を切られ、シュウは眉を寄せた。

「えーと……？」

「カレンなんだって？　兄貴」

と、サラがシュウの顔を覗き込むように見て訊いた。

「な、なあ、サラ？　脇ヘアー、ノー処理ＯＫ？　って何だろ？」

「は？　何それ」サラも眉を寄せる。「脇…ヘアー……？　あ、脇毛のことじゃない？」

「ああ、なるほど。じゃあつまり、最近のレディは脇毛を処理しなくてもいいかと訊いてたのか、カレンは」

「……普通にした方がいいかと」

「ま、まあな。んで次…、腹マッスル割れてマッスルって何だと思う？」

「は？　何？」サラがますます眉を寄せた。「腹マッスル？　マッスルって何のことだっけ？」

「筋肉だったはず」

「ってことは、腹筋じゃないの？」

「ああ、そうか。んじゃあ、最近のレディは腹筋が割れてますかと訊いてたのか、カレンは」

「……いやまあ、ハンターなら別に珍しくはないかと。アタシは縦には割れてても、横には割れてないけど。スポーツとかもやってない一般人の女の子だったら、なかなか割れてないんじゃない？」

「ていうか、カレンは何でそんなこと訊いてきたんだ？　カレンは今ミヅキちゃんとと一緒にいて――」

シュウははっとして言葉を切った。
同時にはっとしたサラと顔を見合わせる。

「サ、サラ。も、もしかしてカレンはミヅキちゃんのことを言っていたのか？」

「あ、兄貴。も、もしかしなくてもカレンはミヅキの脇毛と割れた腹筋を見たのかと思われる！」

「じゃ、じゃあミヅキちゃんは、細くても筋肉質な脚をしていて、首が普通の女の子よりも太くて微妙に喉仏らしきものが見え、脇毛は処理していなくて、腹筋が割れてるってことだな！？」

「ま、間違いないよ！」

「…そ、そうか。…た、たしかなものを見たわけではないが……」
シュウはごくりと唾を飲み込む。「オレは今…、ミヅキちゃんは男

と判断した！！」

そういうことになると、サラは安堵する。

「なぁーんだ、ミヅキ男だったんじゃーん。んじゃあ、ヤキモチ焼く必要ないやっ♪」

一方のシュウは狼狽する。

「こっ、今度はオレが腹立つわ！！　ミヅキちゃ――いや、ミヅキ！！　女のフリしてカレンにキスしてんじゃねえっ！！　あああああっ、もうっ！！　こうしちゃいられねえっ！！　カレンは今、男と2人きりなんじゃねえかっ！！」

「うわ、そうだ」と、サラが目を丸くする。「あっ、危ないじゃんカレン！！　よし、兄貴突撃しよう！！」

「いや、待てサラ！　この格好じゃ怪しすぎてドア開けてくれねえ！　かといって、カレンはオレの弟子だってこと一般人には広めないようにしないといけねえから、正体バラして突っ込むわけにもいかねえしっ……！！」

「ああもうっ、どうすりゃいいのさ兄貴っ！！」

「今考えてるよ！！」

シュウが頭をフル回転させ、ミヅキの部屋に自然と入れる方法を考える。

そこへ、一台のトラックがアパートの前に止まった。

マナの作った強力な痺れ薬をミヅキに飲まされ、カレンの身体が麻痺して動かない。
言葉すら喋ることができない。

ミヅキのドール作り専用にしている部屋。
そこは壁際の棚の上に隙間なく球体関節人形が並べられ、床には壊された人形たちが転がっている。
部屋の中央の作業台の上には、カレンの顔形をしたたくさんの人形の頭。

そして作業台の空いているスペースのところに、カレンの身体が寝かせられていた。

ミヅキの手が服にかかり、カレンは心の中で必死に助けを求める。

（助けて、サラ…！　シュウ、シュウっ……！　シュウっ！！）

ミヅキは不気味に微笑しながらカレンの服を脱がしていく。

「そんなに泣かないでよ、カレンちゃん。大丈夫だよ、優しくするから。怖くないよ」

インターホンが鳴った。

（シュウ…！？　サラっ……！？）

そう察したカレン。

だが、ミヅキは無視してカレンの服を脱がし続ける。

今度は連続して鳴るインターホン。

「うるさいな」と、ミヅキが顔をしかめた。「誰だろう」

インターホンの次は、どんどんとドアを叩く音。

続いて玄関の方から声が聞こえてきた。

「ブラックキャッツ宅配便でえええええええす！！　お留守ですかあああああああああああ！！」

シュウの声だった。

「ああ…、宅配便か。ドール作りの材料ネットで注文してたからな」

「重いです早くしてくださあああああああああああああああああああい！！」

「そりゃたくさん注文したから重いだろうけど…」

「あああああっ、腕がちぎれるうううううううううううううう！！」

「ああもう、分かったよ！　出ればいいんでしょ、出れば！　まったく、どんな人雇ってんのブラックキャッツ宅配便！」

ミヅキが苛々とした様子で、玄関へと向かって行った。

途中でカメラに映された映像を確認すると、ダンボールの箱で玄関に立っている人物の顔は見えなかった。

ミヅキが玄関の鍵とチェーンを外す間も、ドアはどんどんと叩かれている。

「はいはい、今開けますよ！」

ミヅキがドアを開けると、目に飛び込んできたのは大きなダンボールだった。

「重いので中まで運びますねー」

「は？　いいですよ、玄関に置いてくれれば――って、ちょ、ちょ……！？」

リビングまでダンボールに押し出されていくミヅキ。

ダンボールが床に置かれたときに気づく。

ブラックキャッツ宅配便の人だと思っていたミヅキだったが、その制服を身につけていない背の高い男が立っている。

サングラスに深く被った帽子と、見るからに怪しい。

そしてその背後からも、似たような格好をした女が現れた。

「――だっ…、誰ですあなたたちは！？」

「はいはい坊や、おとなしくしてねー」

と、男の背後から現れた女――サラが、ミヅキの両手を背後で押さえつける。

そして男の方――シュウはリビングの中をきょろきょろと見渡し

た。
ソファーの上にはカレンのバッグ。
リビングの向かって左側の部屋のドアが、開けっ放しになっている。

シュウはそこへ向かって歩いて行った。
中に入るなり、シュウは驚愕する。

作業台の上に、下着姿のカレンが寝かされている。

「――カっ…カレン！！」

シュウはカレンに駆け寄ると、Tシャツを脱いでカレンの身体に被せた。
シュウを見るカレンの瞳から涙が溢れ出す。

「…シュ…っ……！」

上手く喋れないらしいカレンを見て、シュウはカレンがミヅキに何かおかしなことをされたのだと察する。
シュウはすぐさまカレンに状態異常も治る治癒魔法を掛けた。
狼狽したが故に、３回連続して掛けた。

麻痺が治り、カレンがシュウの身体にしがみ付く。
安堵し、声をあげて泣いた。

カレンの様子を見れば、カレンが何をされそうになったかは一目瞭然。

（――オレ、今初めて一般人をぶっ飛ばしたいと思った）

身体の脇で握られたシュウの拳が震える。

リビングの方からミヅキの声が聞こえてくる。

「ちょっ!?　なっ、何すんですか!?　ええ!?　ちょ、ちょっと待っ……!!」

続いてサラの声。

「暴れんじゃないよ!　おとなしくしな!　……あー、やっぱり!!」

サラがミヅキの腕を押さえながら、シュウのところまで連れて来る。

「兄貴!!　こいつの下半身確認したよ!!」

「す…、すごいことするね、おまえ」シュウは苦笑しながら振り返った。「んで、どうだった?」

「リンクさんからアルミメダル奪取した感じなんだけど、最下位のアルミメダルだったリンクさんて今度は一体何メダルになっ――」

「んなことどうでもいいわ…。んで、つまり男だったのな」

「リンクさん…?」ミヅキが眉を寄せた。「葉月ギルド・副ギルド長の……?　あなたたち、さてはハンターですね!?」

「だったら何だってんだよ、ええ!?」

サラがミヅキの腕を捻り上げ、ミヅキが顔を歪めて声をあげる。

「いっ…痛い痛い痛い痛い！！　ハンターのクセに、一般人のぼくにこんなことしていいんですか！？」

「何を偉そうに！」

サラがますますミヅキの腕を捻り上ることにより、ミヅキもますます苦痛に声をあげる。

怒りで今にもミヅキを殴り飛ばしてしまいそうなシュウは深呼吸をした。

サラに言う。

「放せ、サラ。オレたちはハンターだ。一般人に暴力は振るえねえ」

「兄貴っ…」

「放せ、サラ」

シュウの顔を見て戸惑ったあと、サラはミヅキから手を放した。

ミヅキが言う。

「あなたたちのこと、葉月ギルドに連絡しますからね！！　いきなりぼくの家に入ってきて、ぼくが何したっていうんだ！！」

「は？」サラが失笑した。「何したって？　うちのカレン犯そうとしてんじゃないよ」

「えっ…！？」

ミヅキが困惑したようにカレンに顔を向けた。
シュウの着ていたTシャツを着て、シュウの背に隠れながら怯えた瞳でミヅキを見ている。

サラが作業台へと歩いて行き、カレンの顔をした人形の頭を1つ手に取った。

「しかも、何これ。カレンじゃん。何してんの、あんた。ド変態がいるって言って、警察に突き出してやるよ」

「あっ、あなたたちこそ、葉月ギルドに連絡すればクビになりますよ！？」

「アタシたちがクビだって？」サラがもう一度失笑し、シュウに顔を向けた。「兄貴、ここはビシッと言ってやんなよ。この際、かっこよ～く正体バラすしかないって」

「…そう、だな」

ここは、威厳たっぷり俺様系親父のようにかっこ良く！
そう、親父のようにかっこ良く！！

シュウは咳払いをした。
リュウのように瞳を鋭く光らせてミヅキを見据え、

「ミヅキ……、オレたちを誰だと思っていりゅ」

やべっ、いきなり噛んだ！

シュウは少々赤面しながらサングラスを外し、

「おまえなんて、（親父に頼めば）すぐに留置所送りにできちまうぜ。そしておまえがオレたちをクビにしようとしても無駄だ。何でかって？」

ふ、と短く笑いながら、シュウは帽子を脱ぎ捨てる。

リュウのように声を冷たく響かせ、

「この顔を見れば分かるだろ……！？」

よし、なんとか決まったか？

とシュウが心の中でにやけたとき。

「――ぶはっ！！」と、サラが吹き出した。「あーーーっはっはっはっは！　あっ、兄貴っ、兄貴っ！！」

「な、なんだよ。最初ちょっと噛んだからってそこまで笑わなくても――」

「ウィッグ！　兄貴、ウィッグ！！」

「――ハッ！」

しまった！

オレ今、１０円玉ハゲつきボーズウィッグ被ってるんだった！！

シュウは首まで真っ赤にしながら、慌てて頭からウィッグを取っ

た。
穴があったら入りたいほど恥ずかしい。
変装なしのシュウの顔を改めて見て、ミヅキが目を丸くする。
「えっ…！？　リュウさんの息子の……！！」
「それから」と、サラがサングラスと帽子、ウィッグを取って言う。
「ここに娘もいるよ？　おまけに、兄貴の弟子でアタシの友達のカレン」
ミヅキがシュウとカレン、サラの顔を愕然として見る。
シュウは咳払いをして気を取り直し、ミヅキに言った。
「分かっただろ？　オレたちを相手にするってことは、オレたちの親父を相手にするってことだ。んな恐ろしいことしねーで、おとなしく警察に――」
「ま、待って！」と、シュウの背中でカレンが慌てたように言った。
「待って、シュウ、サラ…！　ミヅキちゃんを警察には連れて行かないでっ……！」
ミヅキを庇うカレンを、シュウとサラは驚きながら見た。
カレンが続ける。
「ミ、ミヅキちゃん、繊細なのよ。心がガラスのように繊細なの。ミヅキちゃん、ドールは傷付くこと言わないから好きだって……。お姉さんたちにいじめられて育ってきたミヅキちゃんは、ドールに癒しを求めているだけなのですわっ……！　だから――」

「カレン」と、サラがカレンの言葉を遮った。「庇わなくていいよ、こいつのことなんか。カレン、分かってる？　あと少しで犯されるところだったんだよ？」

「わ、分かっているわ。と、とても怖かったものっ……！　で…、でも庇わせてサラ……！」

「何で」

「警察はまずいわ、まずいのですわ」

「何で」

「警察に行かせたら、あたくしに飲ませた痺れ薬なんかのこともいつかは訊かれると思うのですわっ……！」

「痺れ薬」とシュウが鸚鵡返しに言った。「そうか、カレン痺れ薬飲まされてたのか！　おい、ミヅキ！　あんたどこでそのヤバイ薬を手に――」

「シュウ！」と、カレンが慌てたようにシュウの言葉を遮る。「そ、その痺れ薬のことなのだけれどっ……」

「おう？」

「…マ、マナちゃんから買ったみたいなのっ……！」

「は？」と、シュウとサラがぱちぱちと瞬きをする。「誰だって？」

「マ、マナちゃん。あなたたちの妹の、マナちゃんっ…！　だ、だから警察に行ったらマナちゃんの名前も出てくることになるし、色々まずいと思って……！！」

「……」

シュウとサラは顔を見合わせた。

カレンの言葉を理解するまでに数秒。

そのあと、お互いの顔が驚愕していった。

「マっ、マナァァァァァァァァァ！？」

ミヅキを警察に突き出さない代わりに、シュウは４つミヅキに約束させて帰って来た。

１つ目は、カレンがこのシュウの弟子であることを言いふらさないこと。

２つ目は、マナが金を取って薬を売っていたことを黙っていること。

３つ目は、もう相手の許可なしに人形を作らないこと（特にカレン）。

４つ目は、当たり前だが強姦はしないこと。

帰って来たシュウはもちろん、まっすぐ三つ子の部屋へと向かってマナをみっちりと説教した。

そのあと夕食を食べ、後片付けをし、自分の部屋でシャワーを浴

びる。

頭からシャワーを浴びながら、シュウは溜め息を吐いた。

（今日は修行の疲れを取らなきゃいけなかったのに、どっと疲れちまったな。なんかオレ、今日すーげーかっこ悪かったし……。同じ顔でも親父のようにはいかねーぜ……。……でも、カレンが何もされなくて良か――）

何もされなくて良かった。

と心の中で言おうとして、シュウははっとして顔を上げる。

（カレン、ミヅキにキスされてんだった！！　…あああ…、もう…、オレなんか結局ほっぺにチューもしてねえのに……。あとでさせてもらおうかな…、いや、無理かな……。カレンは男に襲われたんだ。男が怖くなっちまっただろうな……）

シュウはもう一度溜め息を吐いた。

バスルームから出るとベッドにカレンが寝転がっているのが目に入って、シュウは少し驚いた。

「カ、カレン…。な…、何してんだよ、おまえ」

「？　何って、ベッドに横になっているのですわ」

「…ちょっと無防備なんじゃねーの、今日あんな目に合っておきながら。ここはおまえの部屋じゃなくて、男（オレ）の部屋だぞ」

「……あなたも、ミヅキちゃんと同じようなことするの？」

そう訊きながら、カレンの顔が悲しそうに歪む。

「し…、しねーけどさっ、オレはっ……」

シュウは言いながら、ベッドに腰掛けた。

背後に寝転がっているカレンに訊く。

「…おまえ、男が怖くねーの？」

「怖いわ。でも、あなたは怖くないのですわ。それから、あなたの周りの男性も」

「そ…、そか。サンキュっ…」

とシュウは笑った。

どうやらカレンに怯えられていないようで安堵する。

カレンが言う。

「今日、助けてくれてありがとう。あたくしね、今日心の中でサラとあなたに助けを求めたの。特に、あなたの名前は何度も叫んでいたわ」

「え…？」シュウは振り返ってカレンの顔を見た。「あ…、ああ、オレとサラがミヅキのアパートの前にいたの分かってたのか」

「それもあるけれど、サラとあなたがきっと遠いところにいても叫んでいたのですわ。特に、あなたの名前は」

どきどきとしながら、シュウは訊いた。

「そ…、それは何で？」

「何で？　愚問なのですわ……」

「えっ…？」

「あなた、あたくしの護衛でしょう」

「――ゴフッ」と、シュウの上半身がカレンの傍らに倒れる。「そ…、そうっすよね、オレってカレンの師であり護衛っすもんね……」

ああ…。

一瞬、カレンがオレのこと好きになったのかもって期待しちゃったぜ……。

カレンに背を向けて横臥した状態で、シュウは苦笑する。

カレンが言う。

「ねえ、シュウ」

「はい…」

「約束のキス、してよろしくてよ？」

「えっ…？」とシュウが顔を明るくし、寝返りを打ってカレンの方を見た。「約束のほっぺにチューＯＫっすか！」

「ほっぺじゃなくて唇でしょう？」

「――えっ、何！？」シュウは耳を疑った。「くっ、くくくっ、唇！？　唇って言った今！？　言ったの！？　ハイそれじゃあもう一度！　さんハイっ！」

「くーちーびーるぅーー。に、してよろしくてよ。最初はほっぺのつもりだったけれど……。あなたなら、嫌じゃないわ」

「……」

カレンの顔を見つめるシュウの頬がぽっと染まる。

カレンが仰向けに寝た。

瞼を閉じて言う。

「カモオォォォォンですのよ」

「まっ…、ま・じ・でえええええええええええええええええ！！！」

ガバチョっ！

とシュウがカレンに負い被さり、カレンの唇に吸い付いた。

それこそ、襲ってるといわんばかりに。

第５０話　六女の仕返し　～前編～

シュウの部屋の中。
ベッドの上、カレンの唇に吸い付いたシュウ。
軽く済ませるキスのつもりで許可したカレンだったが、唇が奪われて奪われて奪われまくる。

「ちょっ、シュ――」

喋ろうと思っても唇がふさがれる。

黒猫の尾っぽをぱたぱたと振りながら、シュウはカレンから唇を離そうとはしない。

（カレンと久しぶりのキッスゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっっっ！！）

ちゅっ、ちゅっ、ちゅうううっ

（ううーん、デリシャス☆）

んちゅっ、ちゅっ…、ちゅうううううううううううううっっっ

（うっ…、止まんなくなってきた…。も、もうちょっと……）

シュウの舌が唇に触れ、驚いて声をあげようとしたカレンの口が少し開く。

すかさずカレンの口の中に舌を突っ込んだシュウ。

「――いっ…いれれれれれれれれれれれれっ！！」思いっきり舌を噛まれ、たまらず声をあげた。「ほっ、ほめんなはい、ひょーしほきまひたあああああ（ごめんなさい、調子こきました）！！」

一方、そのころのキッチンでは。

ぐつぐつと煮える2つの鍋。

それを交互にかき回しているのは三つ子の真ん中の子――六女・マナ。

薬を作っている最中だ。

その様子をキッチンの入り口から、三つ子の一番上の子――五女・ユナと、三つ子の一番下の子――七女・レナは覗いていた。

小声でひそひそと話す。

「ね、ねえ、レナ。マナ、兄ちゃんにお説教されてすごく機嫌が悪いね…」

「う、うん、ユナ。マナのオーラがやばいことになってるよ…」

「なんの薬作ってんだろ…？」

「3日後のリンクさんの誕生日パーティーのときにあげるプレゼントと、兄ちゃんにあげる薬って言ってたけど…」

「に、兄ちゃんにあげる薬？　…ま、まさか仕返しに毒薬……！？」

「毒飲ませたところですぐに治癒魔法で治されちゃうし、マナはそんな甘い仕返ししないよ」

「そ、そうだよね。治癒魔法って、何が直せるっけ？」

「えーと、外傷と軽い病気、毒、麻痺、石化……かなあ？」

「じゃあ、それ以外の仕返し……ってことだよね？」

「う、うん……」

ユナとマナは顔を見合わせて、ごくりと唾を飲み込んだ。

「ど、どんな薬だろう……？」

8月末。

今日はリンクの誕生日パーティー。

いつものメンバー――シュウとその家族、カレン、リンク一家、レオンとグレルの合計4人と13匹がシュウ宅のリビングに集まっていた。

それぞれリンクに誕生日プレゼントを渡したあとは、いつも通り飲んで食べて騒ぐ。

この日、マナはさりげなくシュウの隣に座っていた。

「兄ちゃん…」

「ん？　なんだ、マナ」

「この間は本当にごめんなさい…」

「え？　ああ、もういいって」と、シュウは笑いながらマナの頭を撫でた。「もう変な薬売らないって兄ちゃんと約束してくれたしな」

「あたし、これ…」と、マナがシュウに薬の入った瓶を差し出した。「兄ちゃんのためにがんばって作った…」

「ん？」シュウはマナから瓶を受け取り首をかしげた。「赤黒くて毒々しいけど、どういう薬だ？」

「誕生日パーティーの日はたくさんお酒飲むから、２日酔いにならない薬…。兄ちゃんの明日のお仕事に響かないように…」

「…おお……！」と、シュウの瞳が感動に輝く。「何ていい子なんだおまえは…！　ありがとな、マナ……！」

と、シュウが薬の入った瓶の蓋を開ける。

「兄ちゃん、おまえが大好きだぜ」

ぐいっと一気に薬を飲み干したシュウ。

「兄ちゃん、あたしも大好きだよ…」いつもは無表情なマナが、にやりと笑う。「単純で…」

「え…」

マナの表情を見ながら、シュウが眉を寄せたときのこと。
突然眩暈に襲われ、後方へと上半身が倒れていき床の上に転がったシュウ。

一同が驚き、シュウに顔を向ける。
シュウは気を失っているようだ。

ユナとレナが恐る恐るといったように訊く。

「マ、マナ、兄ちゃんに何を……？」

「仕返しを…ね…」

と再びにやりと笑うマナの表情に、一同は寒気を覚える。

「リュ、リュウ」

「な、なんだキラ」

「あ、あのマナのダークな笑みはリュウを継いだぞ」

「お、俺の方がまだ怖くねーよ？　……そ、それでマナ。シュウにどんな――」

どんな薬を飲ませたのか。

とリュウが訊こうとしたとき、シュウが目を覚ましてむくりと起き上がった。

「シュウ…！」と、心配したレオンがシュウのところに駆け寄る。
「大丈夫？　具合悪いとかない？」

「レオ兄…」

とシュウがレオンの顔見ると同時に、マナがどこからともなくデジタルビデオカメラを取り出した。
液晶モニターにシュウが映される。

次の瞬間。

「あぁん、レオ兄ってばいつ見てもス・テ・キ（ハート）」

ぶっちゅうううううううううううっっっ！！

と、レオンの唇にシュウがキス。

「――！！？」

被害者であるレオンはもちろんのこと、一同が仰天する。
ミラが咄嗟にジュリの目を塞ぎ、リーナの目をミーナが塞ぐ。

「ぎっ、ぎゃあああああ！！」と、サラが動転しながらシュウを突き飛ばした。「なっ、何してんの兄貴ィィィィィィィィィィっっっ！！！」

「きゃっ！　あんたこそ何するのよ！？　妹のクセに生意気よ！邪魔してないで引っ込んでなさいよ！」

と、シュウがサラを突き飛ばし返す。

サラの身体を受け止めたリュウが、青ざめながら携帯電話を取り出した。

「ま、待て、待ってくれシュウ。お、落ち着け。い、今、作者に電話して警告カテゴリーにＢＬを入れさせ――」

「やーね、あたし心は女よっ？」

と、今度はシュウの瞳がリュウを捉える。

「お、女？　お、おい、シュ――」

「パパぁぁんっ！」

シュウがリュウが飛び掛り、サラが瞬時にリュウのところから避けた。

シュウにしがみ付かれ、リュウの顔が引きつる。

「パ、パパっ……！？」

「ねぇん、パパぁ。あたしぃ、パパが憧れなのよぉん？　カッコ良くてぇー、強くてぇー、男らしくてぇー、セクスィーガイでぇー、エッチ何回もできてぇー、もうママに焼いちゃうなぁ、あたしぃー」

「シュ、シュウ――」

「ねぇん、パパぁ。シュウ、お願いがあるなぁ？　あのねぇ……？」

ごくりとリュウが唾を飲み込む。

シュウがリュウを上目遣いで見上げ、

「今夜はママじゃなくてあたしを、お・か・し・てっ……（ハート）」

「…っ……！！！」頭から爪先まで総毛立ったリュウ。「よっ…、よっ、よっ、寄るんじゃねえええええええええええええええええええ！！！」

バキィっっっ！！！

とシュウの顔面を拳で殴打。

「きゃあああああああんっ！！」

シュウの身体が料理のたくさん並べられたガラステーブルの上に飛び、料理を床にぶちまけながら滑っていく。

その向かっている先は、

「げっ…！？」

リンクのところだった。

リンクが仰向けの状態でシュウに下敷きにされ、潰れた声を出す。

「グっ、グエエェェェ……！！」

「きゃっ、ヤダ、いけないっ……！！」

リンクを背に当ててクッションにしてしまったシュウが、慌てて体勢を変えた。

仰向けに倒れているリンクを四つんばいになって跨ぐ。

「ごっ、ごめんなさいっ、リンクさんっ…！　大丈夫っ……！？」

「ゴホゴホゲフッ…！」リンクはむせ込んだあと笑顔を作った。「だ、大丈夫やでシュウ。悪いのはおまえやなくてリュウやから、気にせんといてや。おれよりおまえこそ大丈夫か？　リュウに殴られて、めっさ痛いやろ？　あああ、可哀相になあ。口の端から血ぃ出てんでっ……」

「リンクさん、なんて優しいのっ…！」瞳を潤ませ、リンクの顔に顔を近づけるシュウ。「はい、どーぞっ」

「は？　な、なにがやねん、シュウ？」眉を寄せるリンク。「早くどいてくれへんか――」

「血が出てるとこ、な・め・てっ（ハート）」

「ハァっ！？」リンクの声が裏返った。「ちょ、シュウ、おまっ、な、なんの薬飲まされて……！？」

「うふふ、リンクさんてば照れちゃってかーわいいんっ。人前だからって照れてないで早くぅぅぅん」

「ちょ、ちょちょちょちょちょちょ……！！！」

リュウに続き総毛立つリンク。
必死にリュウに手を伸ばす。

「リュ、リュウ、助けっ……！！」

「おまえだと楽しいぜ、リンク」

「ちょ、おま……！？」

「――と、言いたいところだがシュウの顔が俺と同じなだけに見てて気持ち悪くて仕方ねえっ……！　かと言って、俺も近寄りたくねえ……！　レオンなんか一番哀れなことにキスされて真っ青だぜ……！　……つーわけで」

と、リュウとリンクがグレルを見て声をそろえる。

「師匠、お願いっす！！」

「おおーっ？　オレの出番かぁー？」と、張り切ったように立ち上がったグレル。「よーしよし、いい子だからこっち来いなシュウ～っ♪」

「えっ！？」シュウが顔を輝かせながらグレルを見た。「グ、グレルおじさま、あたしを可愛がってくださるのっ……！？」

「おうよっ♪　ほーら来いっ！」

両腕を広げるグレルの胸に、シュウが歓喜に声をあげながら飛び込む。

「きゃあああああっ！！　グレルおじさまあああああああああっ！！」

「おー、シュウ。可愛い奴だぜ、がっはっは♪」

「あぁん…！　この強靭な肉体、クマさんのように全身を覆う黒く艶めいた体毛、そして下半身に輝く金メダル……！　もうたまらなあああああああい！　グレルおじさま、あたしを抱き締めてえええええええええええっ！！」

「どーれどれっ♪」

ぎゅううううっ

と、グレルに抱き締められたシュウ。

「あっ…あああああああっ……、め、目の前に死がちらつく感じがたまらなあぁぁぁぃ……！！」

「なんだぁ？　もっとかぁ？　おりゃっ♪」

ぎゅうう…メキっ…！
メキメキメキっ……！！

「あああああっ！　グレルおじさまダメェェェェェェ！　逝っちゃうううううううう！！」

思わずシュウとグレルから遠巻きになる一同。

そんな中、マナは遠ざかる気配なく、にやにやとしながらビデオカメラでシュウを撮り続けていた。

「こっ、こんな兄上嫌なのだっ…！」と、リン・ランが困惑しながら声をあげた。「マナ、兄上に何を飲ませたのだ！？」

「ふふ…」

「笑ってないで答えるのだ！」

そうリン・ランが眉を吊り上げると、マナがビデオカメラをシュウに向けたままリン・ランの顔を見た。

リン・ランがもう一度声をそろえてマナに訊く。

「兄上にどんな薬を飲ませたのだ！？」

シュウとグレルを除く一同を見回したマナ。

一同の視線を浴びながら、その質問に答えた。

「『ニューハーフになる薬・ハーフ用』…」

第５１話　六女の仕返し　～中編～

先日、シュウからみっちりと説教されたマナ。
どうやらとても腹が立ったらしく、仕返しにとシュウにとある薬を飲ませた。
すると、リンクの誕生日パーティーでシュウとその家族、カレン、リンク一家、レオンとグレルが集まっている中、シュウの中身が別人のように変わってしまった。

そんなシュウをデジタルビデオカメラで撮っているマナ。
シュウに何を飲ませたのかと問われ、一同の注目を浴びる中でこう答えた。

「『ニューハーフになる薬・ハーフ用』…」

「で、ではっ…」と、リン・ランが困惑しながら声をそろえる。「兄上はニューハーフになってしまったのかっ…？」

マナが頷いて言う。

「でも安心して…。明日の朝には元に戻るはずだから…」

「そ、そうかっ…」

とリン・ランはとりあえず安堵したようである。
同時に一同も安堵した。

サラが笑い出す。

「こりゃ楽しいわ！　マナ、しっかりビデオ撮っておくんだよ！」

「ラジャ…」

「仕返しとはいえ、すごい薬飲ませたね…」

そのせいでシュウにキスされるという被害を被ったレオンが苦笑した。

シュウの身体を抱き締めているグレルを見て言う。

「ちょっとグレル、いい加減にシュウを放して」

「えー？　だってシュウが喜ぶからよー」

「それ以上締めたら死ぬから」

「そうかあ？」

とグレルがシュウを放すと、シュウがへなへなと床に座り込んだ。

決して細くはないのだが、グレルの異常な怪力に折られそうになった己の身体にシュウは治癒魔法を掛ける。

「ふぅ、色々興奮して汗かいちゃったわっ…！　あたしお風呂入ってこようかしら。えーと…」

と、小さなジュリを除く男たち――リュウとリンク、レオン、グレルの顔を見回し、シュウが頬を染めながら身体をくねらせる。

「あん、でもシュウちょっと恥ずかしいっ」

「誰がおまえと一緒に風呂入るか」リュウが顔を引きつらせて言う。

「風呂入りたきゃ一匹で入ってこい、バカが」

「パパひどぉぉいっ！」

ぽかぽかとリュウの胸を殴るシュウ。

「よっ、寄るんじゃねえって言ってんだろうがっ！！」

バキィっ！！

と容赦なくリュウに殴り飛ばされた。

床に落ちたシュウが泣き出す。

「わあああああん、パパったらひどいわあああああああああっ！！

あたしだって背中流しっこしたいのよおおおおおおおおっ！！」

レオンが溜め息を吐き、リュウの肩を叩いた。

「ちょっとひどいんじゃない？　リュウ」

「あ？　哀れむならおまえがシュウと風呂入ってやれよ」

「え！？　…え、えと……」とレオンが顔を引きつらせながらリンクに顔を向ける。「…リ、リンクお願い……」

「え！？　おれ！？　いっ、嫌や！　絶対嫌やっ！！」

必死に首を横に振るリンク。
リュウとリンク、レオンの顔を見回したあとにグレルが言う。
「仕方ねーなあ、んじゃあオレがシュウと風呂入ってくっか♪」
「――――!?」
待ってくれ!
リュウとリンク、レオンは必死にグレルを押さえつけた。
「いやいやいやいや!!　やめてくださいっす師匠は!!　俺の息子の貞操が本気で危ねえっ!!」
「せ、せやで師匠っ!!　あんたシュウに求められたら喜んで応えるやろ!!　昔おれにも熱いキスしたしっ!!」
「駄目だからね、グレル!!　絶対に駄目だからね!!　シュウはあくまでも今だけニューハーフなんだからね!?　分かった!?」
「分かったよ、うるせーなあ」
と口を尖らせ、承諾したグレル。
リンとランが顔を見合わせたあと、頬を染めながら手を上げた。
「はいはいはい!　わたしたちが兄上とお風呂に入るのだ!」
「嫌よ!」とシュウが即答。「あなたたち、あたしのおっぱいを見

てバカにする気なんでしょうっ!?」

「ちっ、違うのだ兄上っ!」と、リン。「そんなことさっぱり考えてなかったのだ!」

「じゃあ何を考えていたのよ!?」

「なっ、何をって決まっているではないかっ!」と、ラン。「わたしたちは、兄上のお身体を超・隅々まで洗おうと思っただけなのだ!」

「フン! そんなのどうでもいいけど、あたしはあなたたちとは入らないわ! えーと、男性たちが駄目ならー…」

とシュウが女たちを見回し、カレンに目を留めた。

カレンのところへと跳ねてきて両手を取り、

「カレン、一緒にお風呂入りましょっ♪」

「え!?」カレン、驚倒。「あっ、あたくしですの!?」

「ええ。あたし、あなたのことは好きよ? だって、親近感が湧いちゃうんだもの。こ・の・へ・ん・がっ♪」

つんっ♪

とシュウが指で押したのはカレンの胸である。

「……。そう…」

「それじゃ、1階の大きいお風呂行きましょっ♪」

ぐいぐいとシュウに引っ張られていき、カレンは狼狽して声をあげる。

「えっ、ちょっ、えええええ!?　シュ、シュウ待って!」

「何よう、カレン?　女同士で恥ずかしがることなんかないわ」

「お、女同士って――」

「カレンちゃん…」

マナがカレンの声を遮った。
ビデオカメラを回したまま言う。

「大丈夫、兄ちゃん元に戻ったら今の記憶なくなってるから…」

「そ、そう…。でも――」

「カレンちゃん…」マナが再びカレンの声を遮った。「兄ちゃんとお風呂入って…」

「え、ええっ?」

「見たいんだよね、あたし…」

「な、何をかしら?」

「元に戻ったとき…」

「う、うん？」

「このビデオ見た兄ちゃんが、必死にカレンちゃんに土下座する姿を…」

「……」

この子、本気で末恐ろしいのですわ。

カレンはシュウに一階の大きなバスルームまで引っ張られていった。

一階にある大きなバスルームの脱衣所に入ると、シュウがカレンとマナに背を向けて服を脱ぎ始めた。

カレンはカメラに映らないところで服を脱ぎながら、マナに言う。

「ね、ねえ、マナちゃん。撮るなら脱衣所から音声だけでお願い…」

「分かった…。カレンちゃんの裸映すわけにはいかないしね…」

「よかった、ありがとう」

服を脱ぎ終わったシュウが、胸からタオルを巻きカレンの方に振り返って言う。

「それじゃ、あたし先に中に入ってお湯を作っているわね」

「え、ええ、分かったのですわ」

シュウが脱衣所から浴室の中に入って行く。

カレンも服を脱ぐと、胸からタオルを巻いた。

シュウが今ニューハーフになっていて心が女でも、今の記憶がシュウの中に残らないとしても、カレンの中のシュウは男には変わりはない。

恥じらいを捨てることはできなくて、タオルをしっかりと巻く。

「そ、それじゃあ、マナちゃん。ここから音声だけでお願いね」

「ラジャ…」

と、マナが承諾したのを確認すると、カレンは浴室の中に入った。

シュウが空中に水魔法で水を起こし、炎魔法で熱して湯を作っているところだった。

バスタブに水道から水を溜めて沸かすよりもずっと早い。

湯はあっという間に出来上がり、それはバスタブの中に入れられた。

「さっ、入りましょカレンっ♪」

「え、ええ…」

カレンは、長い脚を伸ばしてバスタブに浸かるシュウの足元からさらに遠く離れ、膝を抱えて入った。

シュウがおかしそうに笑う。

「やーね、カレンったら。そんなに離れなくてもいいじゃない。取って食いやしないわよ、女なんて」

「そ、そのへんは安心しているのだけれどっ…。そのっ…、や、やっぱり恥ずかしくてっ……」

「まー、カレンったら乙女ねえ。女同士で恥ずかしがることないわ。ほら、もっとこっち来なさいよ」

「きゃっ…！」

シュウに腕を引かれ、その勢いでシュウの膝の上に跨ったカレン。見る見るうちに顔が赤くなっていく。

慌てて避けようとするカレンの肩を、シュウが両手で掴む。

「はぁ…、あなたはいいわねぇ、本物の女の子で。羨ましいわ、この小さな肩」

「あ、あのシュ――」

「それに」と、シュウがカレンの肩から二の腕に手をずらす。「いいわねぇ、柔らかい二の腕で。ここって、おっぱいと同じ感触って言うわよねぇ」

シュウが自分の二の腕を掴んだあとに、自分の胸を揉む。

「あーら本当だわ。どっちも硬くてやんなっちゃうー」

「…そ、そ、そ、そうっ…」

シュウが自分の身体を触っているうちにシュウの上から避け、背を向けたカレン。

「ねぇ、カレンは？」

と、腰に回ってきたシュウの片腕に引っ張られ、カレンは再びシュウの膝の上に。

背中がシュウの胸に密着してカレンの身体が硬直してしまう中、シュウがカレンのタオルを取った。

「きゃっ！」

「あーんた、本当におっぱいないわねー。あたし嬉しくなっちゃうっ♪」

シュウがそう言いながら、両手でカレンの胸に触れる。

「えっ…ちょっ、シュ……！？」

顔を通り越し、カレンの耳や首まで赤くなっていく。

そんなカレンなんてお構いなしに、シュウはカレンの胸を揉んでいる。

「あらぁ、本当だわぁ」

もみもみもみ…

「貧乳でも柔らかさは二の腕と同じだわぁ」

もみもみもみもみ…

「あたしもせめてこの柔らかさがほしいわぁ」

もみもみもみもみもみ…

「あっ…やっ、ちょ、シュ、シュウっ！！」カレンは必死にシュウの手を避け、胸を両腕で押さえた。「さっ、さっ、触っちゃダメなのですわっ……！！」

カレンの耳に、自分の動悸が響いている。

シュウが口を尖らせて言う。

「何よう、減るもんじゃあるまいしぃー。むしろ揉めば増えるっていうかー」

と、自分の胸を揉み始めたシュウ。

ふと動作を止めてカレンの顔を見、眉を寄せる。

「やだ、カレンってば何を心配したわけ？　あたし女相手にアレ大きくなっちゃったりしないわよ」

「…だ、だからその辺のことは安心しているのですわっ…！　だっ、だけど……！」

「何よう？　…あ、もしかして感じちゃったわけぇ？」

「！？　ちっ、ちがっ……！！」

「んもぅ、カレンったら！　サービスでもうちょっといじってやるから腕避けなさいよ」

「え！？　ちょっ、シュ――」

「そーらそらそら、大きくなーれっ♪」

「ちょっ、やっ、やだっ、シュ――」

カレンの言葉を遮るように、バスルームのドアが開く。

バンっ！！

「兄上っ！！」

と、姿を見せたのは、全裸のリンとランだった。

第５１話　六女の仕返し　～中編～（後書き）

ネット小説ランキングからお越しの読者さまへ。
ついに「小説家になろう」からの登録が正式に拒否されてしまったようです。
よって、ネット小説ランキング様からこの『ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ』と前作『ＮＹＡＮＫＯ』を１２月２日いっぱいで削除することに……ｏｒｚ

今まで投票してくださった皆さま、本当にありがとうございました。
とっても執筆の励みになってました。感謝、感謝です（´；ω；｀）ウッ

本日２時５３分ごろメールくださった読者さまへ。
うーん…、その予想……。
微妙に当たってるよーな、当たっていないよーな……（笑）
ていうか予想禁止ですっ！　当てられたら凹むんだよ……ｏｒｚ

今日の夜晴れたらオリオン座見ますｂｂ

第５２話　六女の仕返し　～後編～

ただいまマナに『ニューハーフになる薬』を飲まされ、心がすっかり女になっているシュウ。
一階にある大きなバスルームでカレンと入浴している最中に、リンとランが全裸で浴室に入ってきた。

「リ、リンちゃ…、ランちゃ…！」

シュウの膝の上、顔を真っ赤にして必死に胸を隠しているカレンにリンとランが言う。

「カレンちゃん、今のうちに逃げるのだ！」

「え、ええ……！」

カレンは外されたタオルを胸から巻きつけると、逃げるように浴室から脱衣所へと出た。
リンとランが浴室へと入り、カレンはそこと脱衣所を遮るドアを閉める。

「大丈夫…？　カレンちゃん…」

「え、ええ…」

とカレンはマナの質問に答えながら、カメラに映らない位置に移動した。
浴室に耳を傾ける。

（だ…、大丈夫かしら、リンちゃんランちゃん……）

シュウの声が聞こえてくる。

「ちょっとあんたたち！！　あたしはカレンとお風呂に入っていたのよ！？　カレンを押し出して、あんたたちが入ってくるってどういうことよ！？」

「兄上、わたしたちっ…」リン・ランのそろった声が聞こえてくる。
「兄上がどんな中身でも、兄上を愛しているのだっ……！！」

「えっ…！？　リン…ラン……！！」

「というわけで、兄上っ！！」と、リン・ランの張り切った声。「お背中流しますなのだっ！！」

カレンの頭の中にリン・ランのにやけた顔が浮かんできた。
なかなか激しいブラコンのリン・ランは、シュウの背中を流すどころじゃないだろうとカレンは察する。

「そうねっ…！　ありがとう、リン・ラン……！」と感涙したシュウの声。「あたし、あなたたちを誤解していたわっ……！　さっきあたしとお風呂に入りたいって言ったとき、決してあたしのおっぱいをバカにするためじゃなくて、ただ単にあたくしのことが大好きだからなのよねっ……！」

「もちろんなのだ、兄上っ！　ささっ、どうぞこちらへなのだっ！」

「ええ、ありがとうっ」

とシュウがバスタブから上がり、風呂椅子に腰掛けたのが分かった。
リンとランがバススポンジにボディーソープをつけ、泡立てている音まで聞こえてくる。
「では、お背中失礼しますなのだ！」
「ええ、お願い」
というシュウの声のあと、身体を擦る音が聞こえてきた。
「どう？　兄上」
「ええ、気持ちいいわ」
少しの間会話が途切れ、
「兄上、次は腕を洗いますなのだ」
「あら、ありがとう」
また少し間会話が途切れ、
「兄上、次は首と胸元を洗いますなのだ」
「前の方は自分で洗えるから大丈夫――」
「いやいや兄上、ご遠慮無用ですなのだ」
「あ、そ、そう？」

「兄上、次はお腹を洗いますなのだ」

「え？　あ、ありがとう？」

少し困惑したようなシュウの声。

リンとランの声が交互に聞こえてくる。

「兄上、次は足を洗いますなのだ」

「兄上、次はふくらはぎを洗いますなのだ」

「兄上、次は太股を洗いますなのだ」

「兄上、膝広げてくれないと太股ちゃんと洗えないのだ」

「――きゃっ、きゃあああああっ」と、シュウの声。「なっ、何するのよ！？　膝広げさせないでよ恥ずかしいわっ！！」

「はぁっ…はぁっ……あっ、兄上っ、ま、丸見えなのだっ……」

「ちょ、ちょっとドコ凝視してんのよ！？　しかも何興奮してんのよあんたたち…！？」

「こっ、ここは素手で洗わせていただきますなのだっ…！」

「はっ！？　え、ちょ、なっ、何あんたたちまさか……！？」

脱衣所にいるカレンは苦笑した。

次の瞬間、シュウの悲鳴が響き渡ってきた。

「きゃあああああああああああああああっ！！　あんたたちどこ触ってんのよおおおおおおおおおおっ！！　乙女が恥じらいなくそんなとこ巧みに洗ってんじゃないわよ！！　あああああんっ、やめてえええええええっ！！　いやあああああああ！！　…そっ、そんなにいじられたらっ……ああっ……ちょっ、やっ、やめっ……！！」

「おおーっ」

「おおーっ、じゃないわよ！！　コレどうしてくれるのよ！？」

「兄上やっぱりすごいのだーっ」

「ちょっ、やだっ、それ以上触らないで！！　やっ、やめっ、やめてっ……！！！　……ああもう、いーーー加減にしなさいよ……！？」

と、シュウの声色が変わった。
リンとランの動揺した声が聞こえてくる。

「あっ、兄上っ……！？」

「もおおおおおう怒ったわよ、あたしはあぁぁぁ……！！！　あんたたちっ！！！」

「はっ、はいっ……！！」

「責任持ってさっさとケツの穴出しなさいよおおおおおおおおお

おおおおおおおおおっっっ！！！」

「――ふっ、ふにゃあああああああああああああああっっっ！！！」と、今度はリン・ランの叫び声。「あっ、兄上そっちは嫌なのだあああああああああああっっっ！！！　っていうか無理なのだあああああああああああああああああああああああっっっ！！！」

浴室の中、泣きながら逃げ回るリン・ランと、それを追い掛け回しているらしいシュウ。

カレンは脱衣所のドアを開け、慌ててリュウを呼んだ。

「リュ、リュウさまあああああああああああああああっっっ！！たっ、大変なのですわあああああああああああああああっっっ！！！」

そんなカレンの只ならぬ叫びを聞き、リュウがリビングから駆けて来た。

「どうしたカレン！？」

「シュ、シュウとリンちゃんランちゃんが浴室で……！！」

リュウが慌てて浴室のドアを開ける。

「おい、どうした！？」

「ちっ、父上えええええっ！！」

リュウの姿を見たリンとランが、慌ててリュウの背に隠れた。
シュウを見たリュウの顔が引きつる。

「てーめえ、シュウ……！！　カマヤロウだと思って油断してりゃあ……！！　妹に欲情してんじゃねえぞコラァ！！！」

「ちっ、違うわパパ！」シュウが必死に首を横に振る。「あたしはニューハーフ！　女なんかに興味なんかないわ！」

「だったらその股間のモノはどう説明すんだ！？　あぁ！？」

「こっ、これはリンとランにいじられたから大きくなっちゃっただけでっ……！！　あっ、あぁぁぁぁん、パパ見ないでえええぇぇぇぇぇぇっ！！！　シュウ恥ずかしいいいいいいいいいいいいっ！！！」

タオルで股間を隠し内股になって声をあげるシュウを、リュウの拳が殴り飛ばす。

バキィッ！！！

「きゃあああああんっ！！」

飛んだシュウの身体は、浴室の窓を突き破って裏庭の芝生の上を滑っていった。

カレンの部屋の中。

ベッドに腰掛けるカレンの膝に、胸からバスタオルを巻いたシュウが突っ伏して泣いている。
そして相変わらずマナはシュウにビデオを回している。

「ひどいわひどいわ！　みんなひどいわ！　サラはあたしを指差して笑うし、リン・ランは泣きながら逃げるし、レオ兄は遠巻きになるし、パパなんかすぐあたしのことを殴るのよ！」

何て言ってやれば良いものかと、カレンはシュウの頭を撫でてやりながら苦笑する。

「あたしだって好きで男に産まれたわけじゃないのに！　何よっ、みんなしてあたしのこと変な目で見て！」

「そ、そんなことないのですわ、シュウ？　ただ、あなたが今までと違うからみんな戸惑っているだけなのですわ。慣れの問題ですわ、慣れの」

「慣れの…」シュウが鸚鵡返しに呟き、顔を上げてカレンの顔を見た。「じゃあ、しばらくすればみんなあたしと普通に接してくれるっ？」

「ええ、きっとね」

でもその前に、あなたは元に戻ってしまうけれど。

とカレンは心の中でだけで続けた。

「カレン…！」シュウの瞳が潤む。「あなたなんて優しい子なの…！　前のあたしがあなたに恋をしていたからというのもあるのかし

ら…。あたし、あなたとはとても良いお友達になれる気がするの…！」

「そ、そう。ありがとう。今のあなたになる前のこと、覚えているのね」

「ええ、覚えているわ。前のあたし、本当にあなたのことが好きだったわ。1日中、あなたのことばかりを考えてた」

「…そ…そう……」カレンの頬が少し染まる。「あ、ありが――」

「でも今のあたしの頭の中は男性でいっぱいっ（ハート）」

「……。そう…」

「もうシュウの周りの男性、素敵な人ばかりで迷っちゃうっ。パパとレオ兄とリンクさんとグレルおじさま、どれがいいと思う？」

「…そ、それ以外がよろしいと思われますわ」

「えー？　じゃあ探さなくっちゃ♪」

「…が、がんばって」

カレンは言いながら、部屋の時計に顔を向ける。
時刻はＰＭ１０時過ぎだった。

「ね、ねえ、シュウ。あたくしそろそろ寝るわね」

「え？　もう？」

「ええ…、妙に疲れて……」

「そう。それじゃあ、あたしもそろそろ寝ようかしら。ねえ、可愛い寝巻き貸してくれない？」

「…す、好きなの選んで行ってよろしくてよ」

「えっ、本当っ！？」

シュウがカレンの出した寝巻きを見回し、パイル地でピンク色のキャミソールワンピースを選んで着た。

カレンが着ると膝丈のものなのだが、シュウが着ると尻が見えそうなくらいのミニスカート状態。

しかも生地が破れそう。

「どう？　カレン」

「…か…可愛いわ、とても……」

「あ・り・が・とっ（ハート）　それじゃ、おやすみなさいっ♪」

「お、おやすみなさい…」

カレンが苦笑しながら言うと、シュウがカレンの部屋から出て行った。

マナがビデオ撮影を止める。

「仕返し終了…」

「ね、ねえ、マナちゃん。明日の朝にはシュウは元通りになっているのよね？」

と、何だか不安になってマナに確認したカレン。

マナが頷いた。

「そのはず…」

「そう…、良かった」

「それじゃ、おやすみカレンちゃん…」

「ええ、おやすみなさいマナちゃん」

マナも部屋から出て行くと、カレンは電気を消してベッドに入った。

（はぁ…、やっと解放してもらえたのですわ…。今のシュウも悪い子ではないけれど…。でもやっぱり……）

カレンの頭の中に、普段のシュウが浮かぶ。

（…元に戻ったら、また1日中あたくしのこと考えたりするのかしら……）

軽い動悸の中、カレンは瞼を閉じた。

この日見た夢は、普段のシュウと一緒にいる夢だった。

翌朝6時、カレンは目覚まし時計が鳴って目を覚ました。
部屋に備え付けてあるバスルームの洗面所で顔を洗って歯を磨いてから部屋を出る。

同時に、斜め向かいの部屋のミラも出てきたところだった。

「おはよう、ミラちゃん」

「おはよう、カレンちゃん」

そう笑顔で挨拶を交わしたあと、カレンとミラが注目するのはシュウの部屋のドア。

「ねえ、カレンちゃん。お兄ちゃん元に戻ったはずよね？」

「そのはずですわ。…でも、何だか無反応ですわね。あたくしの寝巻きを着て眠ったはずなのに」

「どうしたのかしら、お兄ちゃん」

カレンとミラが顔を合わせて眉を寄せていると、いつもはまだ起きて来ないマナが部屋から出てきた。

「ミラ姉ちゃん、カレンちゃん…。兄ちゃんは…？」

「それが」と、カレンは再びシュウの部屋に顔を向けて言った。「まだ出てこなくて…」

それを聞き、シュウの部屋のドアを開けたマナ。

中へと入っていく。
カレンとミラも続いて中へと入った。

きょろきょろと部屋の中を見回すが、シュウの姿はない。
どうやらバスルームの洗面所にいるらしい。

バスルームに向かってマナが言う。

「おはよう、兄ちゃん…」

それにミラ、カレンと続いた。

「お、おはよ、お兄ちゃん」

「お、おはよう、シュウっ…」

「あらぁ？」

と、バスルームからシュウの声。

カレンとミラは眉を寄せた。
何か変だ。

バスルームのドアが開き、カレンから借りた寝巻き姿のままでシュウが顔を出した。

「おはよう。ねえ、ミラ、カレン。ちょうど良かったわ、お化粧道具がなくて困っていたのよ。貸してくれない？」

「――！？」

カレンとミラは手を取り合って後ずさった。

普段のシュウとは思えないこの口調。

普段のシュウとは思えないこの台詞。

まさか……！

と、カレンとミラがマナに顔を向けると、マナがシュウを見たまま口を開いた。

「兄ちゃん戻らないね…。薬、失敗作だったみたい…」

「――と、いうことは……！？」

「困った…」

と、溜め息を吐いたマナ。

カレンとミラの方に振り返って訊いた。

「元に戻す方法教えて…」

「――しっ…」

知らねえええええええええええええええっっっ！！！

第５２話　六女の仕返し　～後編～（後書き）

前話の後書きにより、もしかしなくても結構な数の読者さまの誤解を招いてしまった姫百合です。

この小説「ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ」の連載が打ち切りになってしまうのではございません！

今後もバリバリ連載ですよ、ええもうバリバリ！！

この小説「ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ」と前作「ＮＹＡＮＫＯ」は、「小説家になろう」様にて執筆させて頂いております。

それでこのＮＹＡＮＫＯシリーズを「ネット小説ランキング」様でも公開させてもらっていたわけですが、「ネット小説ランキング」様がこの度「小説家になろう」全体の小説を拒否することになさったのです。

よって、私の小説もやむを得ず「ネット小説ランキング」様から削除することになりました。

ただ「ネット小説ランキング」様という、ネット小説のランキングサイトから私の小説が消えるだけのことです。

この「小説家になろう」では、もちろん今まで通りにバリバリ連載続けます。「小説家になろう」または「小説を読もう」で検索すれば普通に出てきちゃいます。「ＨＯＮなび」様でも公開させていただいているので、もちろんそちらでも検索すれば出てきちゃいます。

この「ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ」が打ち切りになってしまうと誤解させてしまった読者さまたち、本当に申し訳ございませんでした＞＜

しつこいようですが、私の現在執筆している「ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮ

ＫＯ」は、これからも連載を続けます。打ち切りなんかじゃあ、ございませんよ！

今まで「ネット小説ランキング」様からお越しくださっていた読者さまは、お手数ですがこれからは「小説家になろう」または「小説を読もう」、「ＨＯＮなび」様から検索お願いいたします。

ちなみにＰＣ版のトップページと目次とこの後書きの←に「ネット小説ランキング＞異世界ＦＴコミカル部門＞「ＨＡＬＦ・ＮＹＡＮＫＯ」に投票」と書いていると思いますが、そこを投票のためポチッといていただくことにより「ネット小説ランキング」様に飛びます。１２月２日（明日）いっぱいで削除することになりますが……。それにも関わらずまだ投票してくださった読者さま、本当にありがとうございます（感涙）

それにしても後書きがこんなにも長くなってしまい申し訳ございません（汗）

これからも連載張り切ってレッツゴオォォォォォォ！！！　な、姫百合でした！

第５３話　長男が元に戻りません

ほぼ毎月行われる誰かの誕生日パーティーの日、シュウとその家族宅に集まった者たちは大抵泊まっていく。
昨日はリンクの誕生日だったが故に、今朝は昨日のままのメンバーがキッチンにそろっていた。

シュウとその家族、居候のカレン、リンク一家、レオンとグレルの合計４人と１３匹。
シュウを除く一同の顔は、爽やかな外の空気とはまるで違っていた。

「…な、なんだって？　マナ、もう一度言ってくれ」

と、強張った顔で訊いたリュウ。
マナが言う。

「薬失敗して、兄ちゃんがニューハーフから戻らなくなった…。誰か戻す方法教えて…」

と、言われても、誰一人知らない。
シュウに『ニューハーフになる薬』を作って飲ませたのはマナなのだから。

ニューハーフのままのシュウが、皆の顔を見回して言う。

「何よぅ、今のあたしじゃ嫌なのぉ？　あんもう、ひど――」

「おい、リンク」

「なんや、リュウ」

「鎖とガムテープ持って来い」

「お、おう」

シュウの身体を鎖で縛り、シュウの口にガムテープを張ったリュウ。

そのあと話を続けた。

「マナ。戻せる薬は作れねえのか？」

「作り方がわからない…」

「う、うーん」キラが唸った。「これはちょっと困ったぞ」

「パパ…ママ…みんな…」マナの瞳に涙が浮かぶ。「困らせてごめんなさい…」

「大丈夫だ、マナ。大丈夫だ」と、キラがマナを抱き締めた。「時間が経てば、きっとシュウは元に戻るぞ」

マナを励ますように、それに同意した一同。

リュウはキッチンの時計に目をやって言った。

「そろそろ朝飯食おうぜ。俺やシュウ、サラ、カレン、リンク、レオン、師匠は仕事だし、リン・ラン、ユナ・マナ・レナは夏休み終わって今日から魔法学校だろ」

そうだったと、仕事や学校へ行く者たちは慌てて目の前に置かれている朝食を口に運ぶ。

リュウはシュウの鎖を外し、口に張っているガムテープをはがした。

ビリッ！！

「――いったぁぁい！」と口を押さえて涙目になるシュウ。「んもうっ、パパってば優しくしてっ！」

「気持ちわりぃ声出してねーでさっさと朝飯食って仕事行く準備しろ」

「パパ、あたしハンター辞めてニューハーフ専門のお店に勤めたいん――」

ゴスっ！！

リュウの拳骨を食らい、シュウが泣きながら朝食を食べ始める。

（お、お仕事大丈夫かしらっ……）

とカレンが心配していると、リュウが訊いた。

「カレン、おまえ仕事どうする。いつも通りシュウに着いて行くか？　それとも俺にするか？」

「えと…」カレンは少しの間戸惑ったのち、答えた。「い、いつも

通りシュウの弟子として着いて行きますわ」

その理由としては、リュウに着いて行って迷惑を掛けたくないから。

それから、この状態のシュウを一匹で仕事に行かせるのが何だか不安だから。

「そうか。何かあったら俺に電話しろ」

「はい、リュウさま」

シュウの本日の仕事1本目。

（さ…、さっそくリュウさまに電話しようかしら……）

いつも通り、シュウから少し離れたところで仕事の様子を見ているカレン。

巨大なコウモリ型モンスターと向き合っているシュウを見て、はらはらとしてしまう。

「あぁーん、シュウこーわーいーーっ」と、剣を両手で持って内股になっているシュウ。「モンスターさん、あっち行ってぇ～」

「ちょ、ちょっとシュウっ…！　は、早く倒してっ！　そのモンスター、もう3人も人間食い殺しちゃってるのよっ…！　くっ、くねくねしてないで早くっ……！」

「だってシュウか弱いしぃー。あぁん、もうっ、どうすれば――」

「シュウ危ないっ！！」

モンスターがシュウに飛び掛り、カレンは叫んだ。

「きゃあああんっ！！」

と慌てて避けたシュウ。

頬にモンスターの爪が当たり、シュウの顔から血が流れ出す。

「あっ…あたしの顔っ……！　ああぁ…！　あたしの顔があぁぁ……！！」衝撃で真っ青になるシュウの顔。「許さないわ…！　もおおお、許さないわあぁぁぁぁ……！！」

次の瞬間。

「ニューハーフ舐めんじゃないわよおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ！！！」

それはもうドスの利いた声と共に、見事な剣さばきでモンスターをみじん切りに。

「……。だ…、大丈夫そうですわね」

カレンはバッグから出しかけていた携帯電話をしまった。

「ふぅ、怖かったぁ」とシュウが頬に治癒魔法を掛け、カレンのところへとやってくる。「さっ、次のお仕事に行きましょっ♪」

「え、ええ、行きましょう」

シュウが修行のときに魔法書を読んで覚えてきた足の速くなる魔法を自分とカレンに掛け、次の仕事へと向かって歩き出した。

というか、スキップし出した。

普段のシュウならカレンの歩くスピードに合わせてくれたものだが、今のシュウが相手だと逆にカレンがシュウに合わせなければならないようだった。

小走りになってシュウに着いて行きながら、カレンは願う。

（明日の朝には、普段のシュウに戻っていますように……）

翌朝。

6時に起きてシュウの部屋へと向かったカレン。

（お願い、戻っていて…）

そう願ってシュウの部屋のドアを開けた。

――が、しかし。

「どう？　見て見てカーレンっ♪　久しぶりに着たのよっ♪」

と、カレンが今年のシュウの誕生日にプレゼントした甘ロリワンピースにヘッドドレス、鈴つきリボンチョーカー、おまけにチョーカーとおそろいのリボンを尾っぽに付けたシュウ。

「……。か、可愛いわ、シュウ。でも、お仕事には向かないからや

めた方がいいのですわ。ほら、早く着替えて」

とカレンはシュウに今すぐそれを脱ぐよう催促した。

それをプレゼントしたのは他の誰でもないこのカレンであるが、今さらになってプレゼントを間違ってしまったと後悔する。

「そっかぁ。お仕事ハードだから、お洋服がぼろぼろになってしまうわよね。お化粧も崩れるからできないし、外へ出るのが恥ずかしいわぁ。はぁ…、ニューハーフ専門の夜のお店に勤めたいー」

「……」

シュウはまるで元に戻っていなかった。

さらに3日後。

書斎にいるリュウを訪ねたシュウ。

「パパ…」

「なんだ、シュウ」

「あたし…、あたしねっ……！」

「駄目だ」

「まっ、まだ何も言ってないじゃない！」

「今のおまえじゃロクなこと言わねーんだろ」

「んもうっ！　聞くだけ聞いてくれたっていいじゃないっ！」

「うるせーな。んじゃ言うだけ言ってみろ」

「おっぱいほしいから女性ホルモンを摂取――」

「失せろ」

バキィっ！！

とリュウの拳を食らい、書斎のドアを突き破って廊下の壁にぶつかったシュウ。

「ドアの修理代おまえの報酬から引いておくからな」

「あんっ！　パパひどぉぉいっ！！」

シュウはまだ戻っていなかった。

さらに一週間後。

再び書斎にて。

「分かったわ、パパ」

回転椅子に座っているリュウが、背を向けたまま溜め息を吐いて

訊く。

「何がだ、シュウ」

「あたし、もうおっぱい大きくしたいなんて言わない！」

「…お？」と、椅子を回転させてシュウに振り返ったリュウ。「もしかしておまえ、元に戻りかけて――」

「その代わり性転換手術させてほし――」

「エスカレートしてんじゃねーか！！」

ドカっ！！

とリュウの蹴りを食らったシュウは、再び書斎のドアを突き破り廊下の壁にめり込んだ。

「おまえ今月報酬よく引かれんなあ」

「いやあああん、パパひどおぉぉぉいっ！！」

シュウはまだ戻っていなかった。

さらに一週間後。

気付けばほぼ毎日シュウとバスタイムを過ごしているカレン。

最初は恥じて胸からタオルを巻いていたシュウは、今やカレンの前で堂々全裸になっている。

「カレン、背中お願いっ♪」

「ええ」

とカレンは慣れた手付きでシュウの背中をスポンジで擦る。

「次は交代ねっ♪」

「ええ」

そして当たり前のように背中を擦られるカレン。

（最初は恥ずかしかったけど…、もうすっかり慣れたのですわ…。だって日課みたいなことになっているんだもの。長い間付き合っている恋人同士でもないのに、どうなのかしらこの恥じらいのなさ…）

小さく溜め息を吐き、振り返ってシュウの顔を見る。

「ん？　なぁに？」

とシュウが首を傾げる中、カレンはシュウの股間に目を落とす。

そしてもう一度小さく溜め息。

（本当、慣れたのですわ…、銅メダル……）

シュウはまだ戻っていなかった。

そして、さらに１０日後のこと。
シュウがニューハーフになってしまってから約一ヶ月が経ち、９月末になった。
今日はミーナの誕生日パーティーで、いつも通りシュウ宅のリビングにシュウとその家族、居候のカレン、リンク一家、レオンとグレルが集まっていた。

リンクとレオンに遠巻きにされられ、リュウに近寄ると容赦なく殴られるシュウが、キラと向かい合って立っている。
わんわんと泣きながらシュウが言う。

「ひどいわひどいわ！　ママ、ひどいわ！」

「えっ…！？」と、困惑するキラ。「ど、どうしたのだシュウ…！？　母上が何かしたかっ…！？」

「ママ、どうしてあたしを男に産んだのよ！　女に産まれてくれば、こんなに冷たい目で見られなかったのに！！」

「えっ…！？　はっ…、母上はっ…、母上はっ……！！」

キラの黄金の瞳に浮かぶ涙。

「ママのバカ！！」

「……ふっ……ふにゃあああああああん！！」

と堪えきれずに泣き出してしまったキラ。

一同に衝撃が走る。

「――にっ、兄ちゃんママのこと泣かせるなあああああああ！！」

とユナの炎魔法を食らい、レナの光魔法を食らったシュウ。

さらに、

「お兄ちゃん何してるのよ！！」

とミラの往復ビンタを食らい、

「ママ泣かせてんじゃないよ！！」

とサラのドロップキックを食らい、

「なっ、なんて親不孝なこと言う息子なのだおまえはあああああああ！！　キラに謝れえええええええええええええええ！！」

とミーナの爪で引っかかれ、

「兄上、ママを泣かせるのは駄目なのだっ！！」

とブラコンであるリン・ランの魔法で作った巨大な氷に押しつぶされ、

「大丈夫か、シュウ」

とリュウがその巨大な氷を避けて助けてくれたと思ったら大間違いで、

「――なぁーんて言ってやると思ったかコラ！！　何てこと言いやがるんだおまえはよ！？　え！？　キラのせいにしてんじゃねーぞ！！　おまえが俺ん中から飛び出して真っ先にキラの腹の中に辿り着いたんじゃねーかバーカ！！　恨むなら自分を恨みやがれってんだ！！　大体、キラに産んでもらっておいてその態度は何だよ！？　あぁ！？　キラ泣かせやがって許さねーぞコラァ！！！」

と、いくつもリュウに技を掛けられ、シュウは泣きながら床をばんばんと叩いて降参した。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！　あたしが悪かったわあああああああっっっ！！　パパ許してえええええええっっっ！！」

「俺に許してほしかったらキラに謝りやがれ！！」

「ごめんなさいっ…！！　ごめんなさいママァァァァァァァァァァァァ！！　あたし男に産まれて良かったわあああああああああっっっ！！　産んでくれてありがとおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ！！」

「――だ、そうだキラ」と、リュウがキラに顔を向ける。「どうする、このバカ息子。許してやるか？」

「う、うむ。泣いてごめんなのだっ。リュウ、シュウのこと許してあげてくれ」

とキラが涙を拭うのを確認したあと、リュウはシュウを解放してやった。
キラのところへと向かい、キラを左腕に抱っこして頭を撫でながら言う。
「さぁて……、本気で考えねーといけねーな」
「そうだね」と、レオンが同意。「考えないとね、シュウが元に戻る方法」
一同は同意した。
時間が経てばシュウは元に戻るだろうと思っていたが、戻らないままもう約一ヶ月が経ってしまっている。
カレンは強く思う。
（いつものシュウに会いたい……）
リュウが一同の顔を見回して言った。
「幼いジュリとリーナを除く一同に命ずる。明日の夜8時までにそれぞれシュウを元に戻す方法を考えよ」
一同はリュウの命令を承諾した。

第５３話　長男が元に戻りません（後書き）

「ネット小説ランキング」様からお越しの読者さまへ。

お伝えしていた通り、本日いっぱいでこの小説を「ネット小説ランキング」様から削除します。

これからは「小説家になろう」または「小説を読もう」、「ＨＯＮなび」様から検索お願いします。

前話の後書きに続きもう一度お伝えしておきますが、この『ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ』は打ち切りなんかじゃございませんよ！

これからもご愛読してくださると嬉しいです。

また、今まで「ネット小説ランキング」様に私の小説を投票してくださった皆さま、本当にありがとうございました。

「ネット小説ランキング」様でなくとも、「ＨＯＮなび」様、ケータイ版の「携帯小説Ｒａｎｋｉｎｇ」様に投票してくださっている皆さまも、本当にありがとうございます。

もう励みになりまくってます！

ではでは、これからも連載張り切ってレッツゴオォォォォ！！　な、姫百合でした！

第５４話　長男を元に戻す方法

マナの薬により、ニューハーフになってしまったシュウを元に戻す方法。
それを明日のＰＭ８時までに考えなければいけない。

就寝前の、ベッドの枕元の電気だけが点けられているカレンの部屋の中。
ベッドにサラと一緒に寝ているカレン。
天井を見つめながら、その方法をあれやこれやと考えていた。

だが、これと言ったものが思いつかない。

「うーん…、どれもシュウが元に戻る気がしないのですわ……」

「アタシはもう考えてあるよ」

と、サラ。

「もうっ？」とカレンは驚いてサラに顔を傾けた。「それは何ですのっ？」

「普段の兄貴の大好きなカレンの白ビキニ姿写真を見せまくる」

「え…」カレンの顔が少し熱くなる。「そ、そんな方法で戻るのかしら……」

「結構効果的だと思うよ。普段の兄貴が好きだったものだし。なんかこうさ、ニューハーフの兄貴を押しのけて、普段の兄貴が出て来

そうな気がしない？」

「あー…、何となく分かるわ。で、でも、あたくし最近シュウと一緒にお風呂入っているのよ？」

「白ビキニの効果はでかいよ。普段の兄貴、本当好きだったし。カレンの白ビキニ姿」

「そ、そう……」

「んで、アタシさ」と、サラがカレンの方を向いて横臥した。「カレンが兄貴を戻す方法も考えてあるんだけど」

「えっ？」と、カレンもサラの方を向いて横臥する。「なになにっ？　教えてほしいのですわっ」

「さっきも言ったさ、ニューハーフの兄貴を押しのけて普段の兄貴が出て来そうなこと、なんだけど」

「う、うん？」

「アタシさ、普段の兄貴に戻すには絶対カレンが必要だと思うんだよね。普段の兄貴はカレンが好きで好きで仕方なかったわけだから、ここはカレンの愛の力で戻るんじゃないかと思って。こう、ニューハーフの兄貴をどーんと押しのけてね！」

「ちょ…」カレンは赤面した。「あ、愛の力っ…？　って、な、何をしろと…？」

「兄貴とエッチしてくんない？」

「むっ…、むむむっ、無理無理無理無理なのですわあああああっ！！」

「やっぱか。初めてだしね。んじゃあ、キスでいいや」

「キ…、キスなら、まあ良いけれど…」

「んでも、キスはキスでも軽いキスじゃなくて、もっとこう濃厚なのをぶちゅーっとカマしてほしいんだけど」

「えっ…、えええ！？」

「兄貴、濃厚なキスしたがってる気配なかった？」

「えっ？　……あっ…た……」

と、カレンはシュウがニューハーフになる数日前のことを思い出した。

あのときは驚いて思わずシュウの舌を噛んでしまったが。

「ほぉーら、効果的！　今の兄貴がニューハーフのままでいたいってなると、やっぱり戻すのって難しいと思うけど……、普段の兄貴が大好きだったカレンの愛の力があれば大丈夫！　キスって一番愛情を伝えやすいと思うし。だからまあ、カレンの愛がなきゃ意味ないんだけどさ」

「な、何だか責任重大って感じですわっ…」

「みんなもいろいろ戻す方法考えてくるから、それで戻らなかった

らの場合でいいからさ。……ねえ、カレン。兄貴、今上空何メートルにいるの？」

「……」

「……ま、兄貴に愛のあるディープキスしてくれること期待しとく。おっやすみー」

とサラが枕元の電気を消した。

「……サ、サラ」

「んー？」

「ディ、ディープキスってどういう風にすればよろしいのかしらっ？」

「どれ、レッスンするか。はい、次女・サラの上手なディープキス講座～♪」

「サ、サラっ？」

「ああ…、女もいけるアタシってやっぱりオールマイティー…。いい？　ディープキスっていうのは、こう……」

「えっ、ちょっ！？　サ――」

カレン、サラに唇を塞がれる。

翌日ＰＭ８時。
シュウ宅のリビングに、シュウの家族と居候のカレン、リンク一家、レオンとグレルが集まった。
そのうちの２匹――ジュリとリーナは別の部屋で遊んでいる。
鎖でソファーに縛り付けられているシュウは、一同の顔を見回して狼狽していた。
「なっ…、何!?　あなたたち、あたしに何をする気なの…!?」
「何って、おまえを元に戻してやろうとしてんだ。ありがたく思え」
と、リュウ。
「そんなの嫌よパパっ！　あたし元に戻りたくない！」
「元のおまえはニューハーフじゃねえ。急に変貌したおまえに振り回されるこっちの身にもなってみろ」
「パパ、今のあたしを愛して！」
「無理」
「ちょっ、即答しな――」
「んじゃ、誰が考えてきた方法から試す?」
真っ先に手を上げたのはマナだった。

マナが薬の入った瓶を皆に見せて言う。
「あたし徹夜でいろいろ研究して、元に戻せるかもしれない薬作ってみた…」
「おお」
一同は期待に胸を膨らませた。
マナが薬の蓋を開け、シュウに差し出す。
「兄ちゃん飲んで…」
「嫌っ！　嫌よ、そんなもの飲まないわ！」
「飲んで…」
「嫌ったら嫌！」
「仕方ねーな」
と言ったのはリュウ。
グレルに言う。
「師匠、口移しで頼むわ」
「おうよっ！」

と、マナの手から薬を取って口に含むグレルを見て、シュウが頬を染める。

「えっ…!?　グレルおじさまの口移し…!?　きゃあああっ、シュウ嬉しいいいいいいいっ！　グレルおじさま、早く飲ませてええええええええええっ!!」

グレルが寄せた唇に噛み付くように唇を這わせたシュウ。
しっかりと薬を飲み込む。

その途端、ニューハーフになる薬を飲んだときのように気を失った。

「おおっ…!?」

これはもしかして、とさらに期待に胸を膨らませる一同。

シュウが少しして目を覚ます。

「グレルおじさま、もう1回っ（ハート）」

「……」

マナの薬作戦、失敗。

「兄ちゃん…戻らない…」

マナの瞳に涙が浮かび、ユナとレナが慌ててフォローを入れる。

「だっ、大丈夫だよう、マナ！　兄ちゃんきっと戻るよ！」

「そうよ、マナ」と、ミラも続いた。「今度は私とユナ・レナで考えた方法をやってみましょう！　ユナ・レナ、持って来てくれる？」

「はい、ミラ姉ちゃん！」

とユナとレナがリビングから出て行く。

そしてキッチンから持ってきたらしいものたちがガラステーブルの上に並べられる。

「お兄ちゃんの好きな食べ物ベスト１０！」と、ミラ。「１位：ハンバーグ、２位：醤油ラーメン、３位：カレーライス、４位：餃子、５位：チャーハン、６位：から揚げ、７位：スパゲッティ・ナポリタン、８位：焼きソバ、９位：お好み焼き、１０位：牛丼！　これだけ作るのって、３匹でも苦労したわ」

「ミラ姉上ー」と、リン・ラン。「９位と１０位反対だぞー」

「そうだったかしら。まあ、そんなのいいじゃない？　というわけでお兄ちゃん」

「な、何よミラ？」

「これ全部食べて」

「えっ、えええ！？　こっ、こんなに！？」

「ここまで好きなものばっかり食べれば元に戻るかと思って。はい、食べて」

「いっ、嫌よ！　こんなに高カロリーなものばかりたくさん食べたら太っちゃうじゃ――」

「よーし、皆シュウの口に詰め込めー」

とのリュウの命令で、無理矢理口の中に１０種類の料理を詰め込まれるシュウ。

１時間後、食べすぎのシュウが吐き出すだけで失敗に終わった。

シュウが口をゆすいでリビングに戻ってくると、シュウが座るところの両脇にレオンとグレルが腰掛けていた。

シュウが座るところをレオンが手でぽんぽんと叩き、

「おいで、シュウ」

シュウは飛び跳ねてそこに座った。

「なぁにっ、レオ兄、グレルおじさまっ？」

「僕たちが、シュウが産まれたときどれほどリュウとキラが喜んだか話してあげるからね」

「えっ…？　あたしが産まれたとき、パパも喜んでくれたのっ？」

「当たり前じゃねーかよ、シュウ♪」と、グレルが笑う。「もうリュウってばな、泣いて喜んだんだぜ？」

「ちょ、師匠、やめ――」

「そうなんだよ、シュウ」と、レオンがリュウの言葉を遮って続ける。「リュウが一番喜んだんだから。シュウが産まれる前から、シュウが産まれたらシュウを超一流ハンターにするって夢を見ていてね……」

とレオンとグレルに昔のこと色々と語られ、恥ずかしくて仕方がないリュウがシュウに背を向けて話が終わるのを待つ。

３０分かかってレオンとグレルが語り終わった結果、

「パパ…！　ありがとう、パパ…！　あたし嬉しいっ…！」

シュウは決して戻ろうとは思わず、感動して泣いて終わっただけだった。

そして次に立ち上がったのはリンとラン。

「父上の兄上に対する愛情話でもダメならコレぞ！」

どさどさっとガラステーブルの上に置かれたのは、家族の思い出写真アルバム。

シュウそれらを見て懐かしそうに笑う。

「そうそう、こんなときもあったのよね、あたし。うふふ、パパやっぱり今と変わってなーいっ！　いつまで経ってもス・テ・キ（ハート）　あっ、これ家族旅行のときの写真～っ！　あんっ、もう、これ見てたらまた家族で写真撮りたくなっちゃった♪　リンクさん、リンクさん、撮って撮って！」

「お、おう。携帯でええか？　あとで画像送るから。ほな、皆並んでやー。いくでー。……はい、マヨネーズっ」

と携帯電話のカメラでシュウとその家族写真を撮ったリンク。
苦笑する。

「思い出の一枚が増えただけやん……」

つまり失敗に終わった。

次に立ち上がったのはサラ。

「家族写真がダメでも、これならいけるってもんよ。ほーら、兄貴」

とサラが、シュウにカレンの白ビキニ写真集を渡す。
それに目を通したシュウが大笑いする。

「あーっはっはっは！　あのときの写真ね～っ！　あのときも密かに思ってたけど、カレンあんた胸にパッド何枚入れてたのよ？　3枚は入ってるわよね、これ！　女同士から見たらバレバレよぉ～っ！　もうバラしちゃいなさいよ！　あーっはっはっは！」

「……。5枚よ…」

カレンが傷付いて終わっただけだった。

今度はキラとミーナが立ち上がる。

「さて…、私たちの出番ぞミーナ」

「うむ…、わたしたちの出番ぞキラ」

「みんな、見るのだコレを！」

とキラが取り出したものは、穴の空いているコインに紐をつけたもの。

「もしかして…」と、リンクが眉を寄せた。「それで催眠術でもかける気か？」

「おおーっ、よく分かったな。リンク鋭いぞーっ」と、キラとミーナが感心したように声をそろえる。「意外と」

「うっさいわ！　そんなん成功するわけないけど、一応やってみろや」

とリンクが言うと、キラがシュウの前に立った。

「良いか、シュウ。揺れるこのコインに注目するのだぞ」

「え、ええ。分かったわ、ママ」

「では」と、キラが咳払いをして紐で吊らしたコインを揺らしながら、「おまえはだんだん戻りたくなーる、戻りたくなーる、戻りたくなーる……」

と真剣な顔をしてシュウに催眠術をかけた結果。

「…おっ…おぎゃあああああっ！　おぎゃあああああっ！」

「おおーっ！　シュウが赤ん坊のときに戻ってしまったぞ！」

「なっ、何してんねんこのバカキラ！　バカミーナ！　はよ17のシュウに戻せや！」

「戻し方知らないぞリンク！」

「なっ、何やてえぇぇぇ！？」

キラとミーナの催眠術作戦、失敗。

1時間かかり、一同で何とかシュウの精神年齢を17歳に戻すが、相変わらずニューハーフのまま。

リンクがげんなりとしながら、一枚の板を取り出した。

「次、おれの番な。単純にコレや」

「ああ、コレな」とリュウがリンクの手から板を取った。「昔ゲールがキラを記憶喪失から戻した方法な」

「シュウは記憶喪失やないけど、衝撃を与えることによって効果あるんちゃうかと思ってな」

「だな。やってみる価値はあるぜ」

「でもリュウ、優しく――」

「おい、シュウ」

とリンクの言葉を遮り、シュウに振り返ったリュウ。

「何？　パ――」

バァンっ！！！

板をシュウの頭に叩き付けた。

板は真っ二つになり、シュウは失神してソファーに倒れる。

「――やっ、優しくしろやリュウゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」リンク、顔面蒼白して狼狽。「おいっ、大丈夫か！？　大丈夫かシュウ！？」

「慌てんな、リンク」

「慌てるわアホ！！　おまえの息子とはいえ、シュウはおまえよりまだずっとか弱いんやで！？　なんってことすんねん！！」

「キラはこれで一度気ぃ失って、目が覚めたときに戻っただろ。シュウもそうかもしれねーよ」

「ま…、まあ、せやな。可能性はあるわ」

「つーわけで、さっさと起きろシュウ」

と、リュウが水魔法で水を起こし、シュウの顔面にぶちまけた。

ばしゃーーんっ！

そして目を覚ましたシュウ。

「しっ、信じられないっ、パパったらっ…！　あんもうっ、水が鼻に入ったぁっ！」

この口調からして、どうやらリンクの作戦も失敗に終わった。

リュウが溜め息を吐く。

「まだ戻らねーか。んじゃあ、俺の番だな」と、ぼきぼきと指を鳴らすリュウ。「いいか、皆よく聞け。今のシュウはこの世に居たがっている。だから戻らねえんだわ、きっと」

「パ、パパ…！？」

嫌な予感がし、ソファーから立って後ずさるシュウ。

リュウがシュウを目で追いながら続ける。

「つまりここは単純に、この世に居たくないと思わせちまえばいいってもんだ。こんなひでえ世の中になんか居たくねえって思わせちまえばいいんだ。ああ、そういや、この方法で昔リンクの身体に憑依した霊を成仏させたっけか」

じりじりとシュウに近寄っていくリュウ。

シュウは冷や汗をだらだらと垂らしながらリュウの歩数に合わせて後ずさる。

「シュウ…、今俺がおまえを元に戻してやるからな」

「パっ、パパパパパっ、やめてっ…！」

「待ってろー、シュウ。頑張るぜー、お父上様は」

「がっ、ががっ、頑張っちゃ嫌ぁっ…！」

「ああ…、それにしても大切な息子にこんなことをしなきゃいけねーとは…、お父上様は心が痛いぜ」

「じゃ、じゃあやめっ…やめてっ…！」

「シュウ、おまえそんなに…」

「な、なななに、おパパ様っ…！？」

「イイ表情（かお）すんなよ」

「――！？」

シュウが、リュウのダークな笑みに全身総毛立った次の瞬間。

「きっ…きゃあああああああああああああああああああああああああっっっ！！！」

シュウの断末魔のような声が、屋敷を通り越して外まで響き渡っていった。

３０分後。

リュウにぼろぼろにされたシュウは、自分に何度も治癒魔法を掛けて怪我を治した。

ソファーに這いつくばって泣き喚く。

「もう嫌っ！！　もう嫌よこんなパパなんて！！　ひどすぎるわ！

！　これが前作の主人公だなんて信じられないわっ！！　もう嫌っ…！　もう嫌よ！！　ここまでひどいことされるなら、あたし前に戻りたい！！」

「よし、よく言ったなシュウ」と、リュウがぽんとシュウの肩を叩いた。「さあ、戻れ。遠慮しなくていいぜ、早く戻れ」

「ど…、どうやって……？」

リュウの顔が引きつる。

「シュウ、てーめえ……！！　もう一回死に掛けてえか！？　あぁ！？」

「待って親父！」と、サラが割って入った。「これチャンス…！　超チャンス…！　ヘイ、カレン！！」

とサラがカレンに振り返ると、一同もカレンに振り返った。

サラがシュウの手を引っ張って立たせ、カレンの手を握って言う。

「今が絶好のチャンスだよ、カレン！　兄貴は前に戻りたいって言ってるんだから、あとはカレンの力で戻るはず！　昨日レッスンしたあの作戦できっと戻る！！」

「……わ……」カレンの頬が染まった。「…分かったわっ…！　あたくし、がんばってみるのですわっ……！」

カレンはシュウの顔を見た。

「シュウ」

「な、何？　カレン」

「前に戻るつもりで、あたくしのすることに応えてほしいのっ……」

「わ、わかったわっ…！　それで――」

それで何をするの？

とシュウが訊く前に、シュウはカレンと共にサラに引っ張られて行った。

リビングを出て、２階へと続く階段を上り、シュウの部屋の中に放り投げられる。

「それじゃ、がんばって！」

とサラが真剣な顔で言ったあとドアを閉めて去っていく。

２人きりになった空間で、カレンはどきどきとしながらシュウと向き合った。

自分よりも３０ｃｍも背の高いシュウの顔を見上げて言う。

「キ…、キスしましょっ……？」

第５５話　長男が元に戻りました

マナの薬によりニューハーフから戻らなくなってしまったシュウ。
皆で色々な方法を試してみたが、なかなか戻らず。

だが、リュウの取った方法により、シュウがニューハーフから元に戻りたいと願った。
これはチャンスだと察したサラが、シュウと一緒にカレンをシュウの部屋の中に放り投げた。
あとはカレンの力でシュウは元に戻ると信じて。

そしてシュウの部屋の中。
シュウと向き合い、シュウの顔を見上げたカレン。

「キ…、キスしましょっ……？」

どきどきとしながら言った。

「キス…？　それであたし、元に戻るの？」

「え、えと…、キ、キスはキスでも濃厚な……」

「えっ、ディープキス！？」

「だっ、だだだ、だってっ…！」と、カレンは顔の頬が染まる。「いっ、いつものあなたは、したがっていたのだものっ……！」

「え、ええ、思っていたわ。それどころかもう、あなたとエッチしたくてしたくてしたくて――」

「そ、それが無理だからディープキスまでなのですわっ！」

「あ、ああ、なるほどね。前のあたしがしたかったことをすれば戻るかもしれないっていう作戦？」

カレンは頷いた。

「……あたくし、決して今のあなたが嫌いというわけじゃないの。一緒にいて楽しかったことだってたくさんあったのですわ。…でも、でも…、もうそろそろいつものシュウに会いたいのですわっ……！」

「…わかったわ、カレン。前のあたしに戻るよう努力して、あなたのキスに応えるわ。あたし皆に迷惑かけてしまったし、本当にもう戻らなければ……」

シュウがベッドに腰掛ける。

「シュウっ…！　あたくし、今のあなたのこと絶対に忘れないのですわっ…！　ていうか、（強烈すぎて）忘れられないのですわっ……！」

「ありがとう、カレン」そう言ってシュウが微笑み、カレンに手を伸ばした。「さあ…、来て、カレン」

カレンは頷き、シュウのところへと歩いて行った。

シュウに顔を近づけていき、顔と顔の間１０ｃｍの距離で止まる。

「どうしたの、カレン？」

「そのっ…、いざとなるとやっぱりちょっと恥ずかしくてっ…」

「んもぅ、可愛いわねえ。ちゃんと応えるからしてよ、ホラ」

と、シュウが口を開けて舌先を見せる。

「ちょっ…」カレンの顔が赤くなる。「そっ、そんなことされたら余計にしづらいのですわっ……！」

「だってディープキスでしょ？」

「そっ、そうだけれどっ……！」

「そんなに恥ずかしがらなくたっていいじゃない。前のあたしに会いたいんでしょ？　口閉じるから頑張ってよ、ホラ」

そう言ってシュウは、目を閉じて待っている。

（がっ…、がんばるのよ…！　がんばるのよ、あたくしっ…！　シュウを戻せるのは、もうあたくししかいないのだからっ……！）

カレンは一度深呼吸をし、思い切ってシュウの唇に唇を重ねた。

「――うっ…」とシュウが唇を離す。「やだっ、あたし女とキスしてるっ…！」

「ちょっ、ちょっと!?　今すっごくがんばったのよあたくし!?」

「ご、ごめんなさい、思わず…」

「もうっ…！」

気を取り直し、カレンはもう一度シュウの唇に唇を重ねた。
カレンの舌が唇に触れたのを合図に、シュウが口を開く。
舌と舌が少し触れ、

「――うっ…」と、再びシュウが唇を離す。「やだっ、あたし女と――」

「ちょっと…！？」

「…ごっ、ごめんなさいっ、ついっ……！」

「まったくっ…！」

もう一度気を取り直し、カレンはシュウの唇に唇を重ねた。

が、シュウがまた唇を離した。
今度はずいぶんと慌てた様子だ。

「あたしさっきゲロ吐いた！！」

「…く、口ゆすいだんでしょ？」

「５０回くらい！」

「じゃあ大丈夫ですわ。臭わないし」

「そ、そう？　良かった…」

「っていうか、いい加減にしないと舌噛みますわよ…！？」

「ごっ、ごっ、ごめんなさいっ…！　もうちゃんとキスに集中するわっ…！」

「約束ですわよ！？」

「すっ、するわっ！　や、約束するっ…！　もうちゃんと集中するわっ……、元に戻れるように」

「……」

カレンはシュウの真剣な顔を見つめたあと、もう一度深呼吸した。

再びシュウの唇に唇を重ねる。

舌と舌が絡む。

サラにレッスンしてもらったとはいえ、まだ上手くできないカレン。

でも、

（シュウ…、元に戻って…。いつものあなたに会いたいわ。お願い、元に戻って…！）

そんな必死なカレンの想いはシュウに伝わっている。

ぎこちないキスでも、ちゃんと伝わっている。

（待ってて、カレン…）

シュウはカレンの身体をぎゅっと抱き寄せ、カレンの想いに応える。
ぎこちないカレンの舌をしっかりと捕らえる。
そうやって以前の自分を呼び戻す。

（今、戻るからね……）

どれくらいの間キスをしていたか。
5分くらいだろうか。

カレンの呼吸が熱い。
自分の動悸がカレンの耳に響いてくる。

（シュウ、会いたいわ……！）

カレンがもう一度そう強く願ったとき、シュウがそっと顔を離した。

「シュウ…？」

シュウが微笑む。

「……元気でね、カレン」

「――えっ…！？」

気を失い、後方へと倒れていったシュウ。

カレンは慌てて支えようとし、シュウの首に腕を回した。
だが、支えきれずにシュウの身体の上に寝そべる形で倒れた。

「シュ…、シュウっ…？」

シュウの顔を見ながら、カレンは期待に胸を膨らませる。

（これでシュウが目を覚ましたら…、目を覚ましたら……！）

カレンはシュウの上に寝そべったまま、シュウが目を覚ますのを待った。

１０分後。

シュウがゆっくりと瞼を開ける。

「あっ…、シュウっ…！？」

「……あれ……？　オレ…もしかして……」

カレンの顔を見ながら呟くように口を開いたシュウ。

腹の上に乗っているカレンを抱き締め、

「さっ、誘われてるうぅ！？　オイまーじかあああああああああああああ！！」

ぐるんっと回ってカレンの上になり、カレンに口付けた。

カレンの唇を奪って奪って奪いまくる。

ちゅっ、ちゅっ、ちゅうっ、ちゅうううっ、ちゅうううううう

ううううっ！！

（…こっ…、この貪り食われる感じといい、嬉しそうに振られているシュウの尾っぽといい……！）

カレンは確信する。

（普段のシュウに戻ったのですわ！）

カレンは力いっぱいシュウの胸を押して唇を離した。

「シュウ！？」

「ごちそうさまっ…！」と、シュウがカレンの傍らに寝転がる。「ううーん…、デリシャスだぜベイベっ……☆」

「戻ったのよね！？　普段のシュウよね！？　ねえ、そうよね！？」

「へっ？」シュウがぱちぱちと瞬きをしてカレンを見る。「戻ったって？　…あれっ！？」

と、シュウは自分の服を見て驚いた。

「オレ着てる服が変わってる…！？　っていうかオレ、リビングでマナの薬飲んだら眩暈がして……。…あれっ！？　何かいきなり涼しくなってね！？」

シュウの様子を見て、カレンはシュウに抱きついた。

「きゃあああああっ！！　戻ったのですわあああああああ！！

普段のシュウですわあああああああああああっっっ！！　あなた、マナちゃんの薬で一ヶ月もニューハーフになっていたのよ！？」

「は？　何だって？　オレが一ヶ月もニューハ――」

「みなさまあああああああああああああああ！！」

とカレンがシュウの言葉を遮り、部屋の戸口へと駆けて行った。ドアを開けて叫ぶ。

「シュウが元に戻ったのですわあああああああああああああああっっっ！！！」

それを聞いた一同が、ばたばたとシュウの部屋まで駆けて来た。

真っ先にやってきたリン・ランが泣きながらシュウに飛びつく。

「あっ、兄上えええええええええええええええええっっっ！！」

次に駆けて来たサラが、カレンを抱き締めて飛び跳ねる。

「カレン、やったじゃあああああああああああんっ！！」

続いてミラとユナ・レナが入ってきてリン・ランと一緒になってシュウに飛びついて喜び、大人たち――リュウとキラ、リンク、ミーナ、レオン、グレルがシュウを見てほっと安堵する。

ジュリとリーナも駆けてきてシュウの足元で喜び、最後にマナが入ってきた。

マナがじっとシュウを見上げて口を開く。

「兄ちゃん…」

「マナっ…、なあオレおまえの薬飲んでから――」

「ごめんなさいっ…」マナの瞳からぽろぽろと涙が零れる。「ごめんなさい兄ちゃんっ…。ごめんなさいっ…！」

「え…？」

シュウは困惑しながらまとわりついている妹たちをはがした。

マナのところへと行って、マナの頭を撫でながら訊く。

「お、おい、どうしたんだよマナ…？　オレ、何が何だかさっぱり分かんなくて……」

「あのねー」と、サラが説明する。「兄貴、マナの薬で一ヶ月もニューハーフになってたんだわ」

「はぁ？」シュウは眉を寄せた。「カレンも言ってたけど、そんな話なんて信じらんねーよ。長い間、暗いところに閉じ込められてたような感じの夢は見たけど…」

「とりあえず、ほら」とリュウがシュウに見せたのは本日の新聞。

「日付見てみろ」

新聞を手に取って日付を確認したシュウ、驚愕。

「うわ…！　まっ、まじで一ヶ月経ってる……！！」

「んで、本当にニューハーフになってたかどうかはコレで確認を」

と、サラが出したのは、マナがビデオで撮影したシュウのニューハーフ初日のＤＶＤ。

シュウの部屋のＤＶＤレコーダーにそれをセットし、テレビをつけて再生開始。

終わりまでの数時間、シュウの叫び声が屋敷中に響きっぱなしだったのは言うまでもない。

全て見終わったあと、シュウがカレンに土下座する。

「ごめんなさいごめんなさいっ！！　なっ、なんてことしたんだよオレェェェェェェ！！　まじ羨まし――じゃなくてっ…！　まじごめんなさいごめんなさいっ！！」

「怒ってないのですわ、別に」

とカレンが言うと、シュウが驚愕した様子で頭を上げた。

「えっ！？　一緒に風呂入れられた挙句に乳触られたのに怒ってねーの！？　おまけにオレおまえのお気に入りの寝巻き着て破きそうになってたのに！？」

「あなたの中身が変わってしまっていたのだもの、仕方ないのですわ」

「…そ、そかっ」とシュウの顔が安堵した。「サンキュっ…！」

と言ったあとに、シュウははっとした。
カレンの手を取り、自分の部屋を出て皆から離れ、カレンの部屋に入る。

そしてごくりと唾を飲み込み、恐る恐る訊く。

「な、なあ、カレン？」

「何かしら？」

「オ、オオオ、オレっ…！　オレ、今上空何メートル…！？　もしかして、またスゲエェェ落下した……！？」

シュウはそんな不安に駆られてしまう。
あんなビデオを見せられたあとでは。

カレンが少しの間シュウの顔を見つめたあと口を開いた。

「あたくし、ずっとあなたに会いたかったわ。だから…、がんばってあなたのこと元に戻したし…。本当、会いたくて会いたくて……、会いたかったわ」

「…カ…、カレンっ…？」

シュウの頬が染まった。
期待に胸がどきどきとしてしまう。

「離れてみるとよく分かるものですわね。あなたは今、上空――」

カレンの言葉を遮るように、ドアがどんどんと叩かれた。
リンとランの声が聞こえてくる。

「兄上ーっ、早く遊んでなのだーっ」

「兄上ーっ、早く構ってなのだーっ」

「…お、おうっ…！」

とシュウはドアの方に顔を向けて返事したあと、再びカレンに顔を向けた。
カレンが言う。

「先にリンちゃんランちゃんの相手してあげて」

「きっ、気になるじゃねーかっ…！　オレ今、上空何メートルにいるんだよっ…？」

カレンがシュウに背を向けた。

「明日から１０月ですわね」

「そ、そうみたいだなっ…」

「リュウさまにお願いして、また舞踏会に連れて行ってもらいたいのですわ」

「わ、わかった、親父に頼んどく。んで、オレって今――」

「そこで今度こそ」

と、カレンがシュウの言葉を遮った。

「こ、今度こそ、何…？」

「今度こそっ…、あたくしと踊ってくださるかしら？」

そう訊きながら、カレンが頬を染めて振り返った。

「――もっ、もももっ、もちろんっス！！」

ていうか、なんかオレ…！

シュウの顔が輝いていった。

上空５０００ｍ近くねえええええええええええっ！？

第５５話　長男が元に戻りました（後書き）

昨日の１７時頃メールくださった読者さまへ。

ほうほうほう。今回ゲールと予想した方結構いますな。

ていうか写真撮るとき、「はい、マヨネーズ！」ってもしかしてあんまり普通じゃないの……！？

第５６話　不幸のあとの幸福

――１０月。

月の初めに行われる葉月島ヒマワリ城の舞踏会にて。

舞踏会全体の警護の仕事に毎回来ているリュウとレオンに着いて、今日はシュウとカレン、サラもやってきた。

ふと王子の方を見ると、ちゃんと傍らにペットのマリアの姿が見えた。

シュウはご婦人たちのダンスパートナーを務めるのも忘れ、カレンと踊ってばかりいる。

（ああ…、ワルツって素晴らしいぜ。この身体の密着加減が……）

腕の中のカレンを見つめながら、シュウは恍惚としてしまう。

（可愛すぎる…。今日の昼間親父と出掛けてたみたいだけど、この新しいドレス買ってたのかな。オレのために。……なぁーんて、自惚れんなよオレ。でもオレ…、もうちょっとで上空５０００ｍの気が……）

カレンがシュウの顔を見上げて言う。

「顔がキラさまを見つめるときのリュウさまみたいになってますわよ？」

「えっ…！？」

シュウは慌てて表情を引き締めた。
リュウがキラを見つめるときの恍惚とした表情ときたら、傍から見るとバカでしかない。

カレンが言う。

「それにしても不思議なのですわ。あなたの身体が変わっていたわけでもないのに、なんだかあなたのこの腕の中がとても久しぶりに感じるわ」

「嬉しかったりすんの？」

「ええ」

「――えっ!?　嬉しいの!?　まじで!?」シュウ、頬を染めながら仰天。「自惚れちゃうよオレ!?」

「自惚れるにはまだ早いレベルなのですわ」

「ゴメンナサイ」と苦笑したあと、シュウははっとしてカレンの顔を見た。「そうだっ、サラから聞いたんだけどっ……！」

「何かしら？」

「オ、オオオ、オレっ…！」と、シュウの頬が再び染まる。「カレンの濃厚なキスで元に戻ったって本当!?」

「…ほ…」カレンの頬も染まる。「…ほ、本当ですわよっ…？」

「おっ…おおおっ…おおおおっ……!!　スゲエェェェ…!!

何ソレ愛の力っ!?　ねえ、愛の力!?　おまえやっぱりオレのこと好きなんじゃ……!?」

「うっ…、自惚れには早いと言っているでしょうっ！」

「はいゴメンナサイ」

と口を閉ざしたシュウ。
少ししてから再び口を開く。

「……あ、あとでまたしてもらっちゃダメっすか」

「……」

「ゴメンナサイもう言いません」

「考えておきますわ」

「そうですよねダメですよね所詮オレなんか――って、え!?」シュウ、耳を疑う。「何!?　今なんて言った!?　ハイもう一度ハッキリと、さんハイっ!!」

「かーんーがーえーてーおーきーまーすーわーーー」

「――まっ、ま・じ・でえええええええええええええええええええええ!!」

「考えておくって言っただけで、まだするなんて――」

「不幸のあとの幸福ヒャッホオォォォォォォォォォォォォイっ

っっ！！」

と、いつかのリュウのように超高速回転で回るシュウ。
カレンはぐるんぐるんと回されながら、慌てて声をあげた。

「シュ、シュウ止まって！！」

「オレのハッピーターンはノンストップだぜ！！（謎）」

「みっ、見られてる！！　見られてますわよ！？」

「――ハッ！」

として超高速回転を止めたシュウ。
周りを見ると、舞踏会の招待客たちが目を丸くしてこちらに注目している。

「…すっ…、すっ、すっ、すみませぬっ……！」

シュウは顔を真っ赤にして、カレンと一緒に小さくなりながらダンスを再開した。

それをダンスホール脇で見ていたサラと、ご婦人たちのダンスパートナー休憩中のレオンも思わず赤面してしまう。

「兄貴まじ勘弁して……」

「か、可愛いね、まったくシュウは……」

「ていうかバカだね、バカ。兄貴のダンスパートナー望んだご婦人

たちが踊ってもらえないからって、ぜーんぶ親父に詰め寄ってるのも知らないで……」

と、サラはリュウに顔を向けた。

そのリュウの顔は、遠くで踊るシュウを見つめながら怒りで引きつっている。

レオンが苦笑する。

「ああ…、舞踏会が終わったあとのシュウが心配だね……」

「まあ、とりあえず殴られるのは確定だよね。それより、そろそろくっ付きそうじゃない？」

「シュウとカレンちゃん？」

「うん。兄貴が元に戻ったのってさ、カレンの愛の力なんだよ、きっと。兄貴、そろそろカレンに手が届く……と、いいな」

「そうだね」

と、レオンがシュウを見て微笑む。

「ところでレオ兄？」

「ん？」

レオンはサラに顔を戻した。

「そろそろ休憩終わりでしょ？」

「あ、そうだね」

「次はどのレディの手ぇ取って踊るんデスカー」と、むくれた顔のサラ。「ここに一匹、さっきからずーっと紳士の誘いを断ってるが故に壁の花になってるレディがいるんだけどなー。目に入らないのかなー」

レオンがおかしそうに笑う。

「僕の彼女も可愛いね、まったく。…一曲お相手願えますか？　レディ？」

と、差し出されたレオンの手。

サラは嬉しそうに笑うと、それを握ってダンスホールに出た。

（うーん……）

と、ダンスホールにいるシュウとリュウ、レオンを見ながら心の中で唸っているのは王子である。

ブロンドのウェーブがかった長い髪の毛に、ブルーの瞳、甘いマスクの彼は、昔と変わらず絵本に出てきそうな王子だ。

（以前から思っていたが……。おまえたち、レディに恵まれてないか？　シュウ、何だその愛らしい弟子は!?　しかも共に暮らしているそうだな!?　レオン、おまえそんなにも美しく育ったサラを恋人にしただと!?　そしてリュウ、おまえキラを嫁にしただけで

も贅沢だというのに、加えて美しい娘たちに囲まれて暮らしているのか！？　もうしばらくおまえの娘たちには会っていないが、小さい頃からそうだったように美少女ぞろいに違いないのだろう！？　それはハーレムというやつではないのか……！？）

王子の視線はリュウ一点に。

（リュウ、おまえはつくづく羨ましい奴だな…！　私もそこで一度で良いから暮らしてみたいぞ…！　よし、仕事の依頼を出すか。…ああ駄目だ、マリアを飼ってからというものの、キラに顔を合わせづらいぞ…！　というかリュウがそう簡単に依頼を受けてくれるとは思えぬな…。ああでも、見てみたい…！　見てみたいぞ、リュウの美しい娘たちを…！　そして囲まれて過ごしてみたいぞ…！　しかしこういった内容の依頼ではリュウを説得するのが至難だ…。う、うーん……）

と眉を寄せ、心の中で唸る王子。

（あっ、リュウが駄目でも……）

王子の視線はシュウに置かれた。

舞踏会が行われているヒマワリ城の2階から1階へと続く、外に作られた階段。

招待客はまだダンスを楽しんでいるため、そこは人気がなかった。

（そんなところにカレンを引っ張ってきたのはオレ…、シュウです）

階段の手擦りに両手をつくシュウ。
その腕の間には、シュウのタキシードのジャケットを羽織らされたカレンがいた。

「お嬢さん」

「何かしら、こんなところまで連れて来て」

「家に帰るまで待てませんでした」

「何をかしら」

「不幸のあとの幸福くださいっす……！！」

期待に興奮して、シュウの黒猫の尾っぽがパタパタと振られている。

カレンは溜め息を吐いた。

「あたくしは考えるって言っただけで――」

「くださいっす！」

「ほしいっす！」

「だからあたくしは考え――」

「だからあたくしは――」

「お願いっす！」

「だから――」

「不幸な主人公（オレ）に幸福をくれよ頼むからっ！！　一ヶ月もニューハーフにさせられてたんだぜオレ！！　なんってひでーんだよおおおおおおおっ！！」

「…わ…分かったから泣きそうな声出さないでちょうだい。あたくしがいじめたみたいじゃない。もう…」

カレンは苦笑した。

シュウの首に両腕を伸ばす。

「ほら…」

「あざーーすっ！！」

シュウの腕にぎゅっと抱き締められ、抱き上げられてカレンの足が地から浮く。

唇を重ねて、カレンの舌を捕らえて、シュウは幸福を味わう。

（ううーん、デリシャスっ……☆）

その様子をダンスホールとの境を作るドアのところから見ていた王子。

ここで声を掛けたら無粋になってしまうからと、とりあえず3分待った。

が、終わらない。

（貪り食っているところを悪いがシュウ…、あまり長い間リュウの前から姿を消すと怪しまれるから邪魔させてもらうぞ）

王子が咳払いをすると、シュウとカレンの身体がびくついた。
驚いた反動でカレンに舌を噛まれてしまったシュウが声をあげる。

「いでっ！」

「ごっ、ごめんなさいっ、ワザとじゃないのよっ…！」

「お、おう」

シュウとカレンが王子の方に振り返る。
そして赤面して狼狽。

「おっ、王子様っ！？」

シュウとカレンは声を裏返しながら、慌てて離れた。
王子がシュウとカレンに近寄っていきながら言う。

「無粋ですまないな、シュウ。それからカレン」

「いっ、いえっ…！」と、シュウは首を横に振った。「ど、どうされたんですか王子様っ…！？」

「うむ…。その、おまえに仕事の依頼を頼もうと思ってな」

「仕事の依頼？」とシュウは鸚鵡返しに訊いてぱちぱちと瞬きをしたあと、顔が驚愕していった。「って、オ、オオオ、オレにですか！？　親父じゃなくてオレにですか！？　とっ、とんでもネエェェ

エェでござるでありましっ！」

「大丈夫だ、難しい仕事ではない。リュウにこの手の依頼を出すとなかなか引き受けてくれなくてな」

「え！？　親父、王子様の依頼断ったりしてるんですか！？」

「依頼にもよるがな。昔はまだ引き受けてくれたものだが、最近は引き受けさせるのに苦労する。依頼の内容によっては、よっぽどの条件を出さないと引き受けないぞ、奴は」

「なっ……」

何様だよ親父……！！

シュウの顔が引きつった。

王子が続ける。

「それでおまえに依頼というわけだ、シュウ。リュウが快く受けてくれない内容なのでな」

「は、はあ、なるほど。それでそれはどういった仕事で…？」

「おまえの屋敷に一度住んでみたいのだ」

「へ？」

「以上だ」

王子の言葉を理解するまでに数秒。
そのあと、シュウの顔が見る見るうちに狼狽していった。

「なっ、なっ、なっ、なりません王子様！！　そんな粗末なところに連れて行くわけにはっ…！！」

「粗末？　何をいうのだ、シュウ」

「えっ？」

「ハーレムではないか！」

「ハー…？」

「美しいレディばかりで！　もうしばらくおまえの妹たちを見ていないが、皆美少女なのだろうっ？　サラを見ただけで驚いたぞ、私は…！　ああ、住んでみたい…！　一度で良いから住んでみたいぞ…！」

「……」

この人、本当に根っからの女好きなんだな…。

シュウは苦笑した。

「あ、あの、王子様。王子様がオレに依頼を持ってきた理由はよく分かりました。その内容だとあの親父が引き受けるわけないし…」

「だろう？　だから頼んだぞ、シュウ」

「いや、あのですね…、オレに頼んだところで家には親父がいるから親父にバレるわけで――」

「ああ、そうならないようにリュウを外泊させておいてくれ。なぁに、1日で良い」

「1日だけとはいえ、それは難し――」

「そ、それからキラもリュウと一緒にっ…！　その、ほ、本当はキラの顔が一番見たいのだが、マリアを飼って以来、か、顔を合わせづらくて…だな……」

「は、はあ…。しかし――」

「では、頼んだぞシュウ！」

「え!?　あのっ、お待ちください王子――」

「シュウ」と、王子が威厳を漂わせて言う。「この私の依頼が受けれぬとは申さぬであろう…？」

「うっ……！」王子の威厳に押されたシュウ。「も…、申せませぬ……」

としか答えられなかった。

「よし、良い子だな。リュウとは大違いだ」と王子が笑った。「報酬はいかほどだ？　シュウ？」

「親父の5分の1ほどで…」

「そうか。欲がないな、おまえは」

「いえ、まだ一流ハンターですから…」

「そうか。では頼んだぞ、シュウ」

「ぎょ、御意…」

そう言ったシュウを確認したあと、王子はダンスホールへと戻っていった。

シュウの顔を見上げ、カレンが興奮したように言う。

「王子様がお泊りになられるなんてすごいのですわっ！」

「す、すごすぎて困るわ……」

シュウは苦笑した。

（まず、どうやって親父と母さんを外泊させりゃいいんだよ……）

第57話　大仕事の準備

王子からハンターの仕事の依頼をされたシュウ。
その依頼内容は『1日シュウの家に泊まりたい』というもの。
何でも、シュウの妹たちに囲まれてハーレムを味わいたいらしい。

そんな依頼を娘バカであるシュウの父親・リュウが許すわけがなく、リュウには内緒にしておくことに。
よって、リュウを1日外泊させなければならない。
王子がどうやら顔を合わせづらいらしい、シュウの母親・キラと共に。

「――というわけで、どうやって親父と母さんを外泊させりゃいいと思う、サラ」

と、シュウは舞踏会から帰ったあと、自分の部屋で同じハンターである妹の次女・サラに相談した。

「んなの簡単だよ。アタシに任せて」

と、サラ。
リビングにいるだろうリュウのところへと向かっていく。

（簡単って…、どう説得すんだろ）

気になったシュウもサラについてリビングへと向かった。
リビングの入り口のところでリュウに見えないように立つ。

「親父、親父、最新耳寄り情報」

「ん？　なんだ、サラ」

「葉月町４丁目にさ、新しいラブホできんじゃん？」

「ああ、今週の土曜にオープンだな」

父娘の会話じゃねえし…。

シュウは苦笑した。

サラが続ける。

「そこ猫モンスターが喜ぶようにできてんだってよ？」

「おお、まじか」

「まじまじ。猫モンスター大喜びのあーんなものや、こーんなものも置いてるって」

「おおお…！」と、輝くリュウの瞳。「キラ連れて行きてえ…！」

「だから今週の土曜日にママと一緒に行って丸１日楽しんで来れば？」

「おう、そうするぜ！」

と、あっさり決定したリュウ。

（サ、サラすーげえぇぇ…！）

とシュウが驚愕していると、リュウがこちらへとやってくる足音が聞こえた。
たった今やってきたフリしてシュウがリビングに入ると、リュウが立ち止まった。

「おっ、シュウ、ちょうど良かったぜ。今おまえの部屋行こうと思ってたとこ」

「ふ、ふーん？　どうし――」

ゴスッ！！

といきなりリュウの拳骨を食らい、シュウは頭を抱えてうずくまった。

「す、すげー不意打ちだなオイ…！　い、今殴られるとはまったく予想できなかったぜっ…！オ、オレが何したってんだよ親父！？」

「うるせえ！　おまえが舞踏会でカレンと踊ってばっかいやがったから、おまえに踊ってもらえねーおまえのファンが全部俺んとこに来てたんだよ！！」

「そ、そうだったのか…。ご、ごめん。んで、オレの部屋に来ようとしてたって？」

「おう。おまえに話がある」

「何？」

「今週の土曜の分の仕事、前日までに終わらせておけ。んで、今週の土曜は俺とキラ丸1日いねーから、しっかり家と弟妹を守ってろ」

「ふ、ふーん？　オレたち置いて外泊か。めずらしいな。よっぽどの用事なんだ」

「おう！　そりゃもう、すーげー大事な用事……！」とリュウが恍惚とした顔をしたあと、リビングから駆けて出て行った。「おい、キラぁぁぁぁぁぁぁぁ!?　俺と次の土曜丸1日イイ場所でイイコトしねえええええええええええ!?」

と、キラのいる寝室へと向かって叫びながら。

サラが言う。

「ほらね、簡単でしょ」

「いや、うん…。さすが親父似なだけあって親父のことは丸分かりだね、おまえ…」

「まあね。てかさ、兄貴。王子が依頼主となったら、さすがにアタシたち妹も頑張らないわけにはいかないじゃん？　頑張るから報酬分けてね」

「おう、ちゃんと分けるから安心しろよ。…それよりさ」

「ん？」

「あの王子様…、おまえたちだけじゃなく、カレンにも何かさせる気かな」

「だろうね、女好きだし」
「う…」
嫌な予感にシュウは顔を引きつらせた。

そしてやってきた土曜日。
ＡＭ９時。
リュウとキラを1泊2日のプチ旅行へと見送ったあとのリビングの中。
シュウは弟妹と居候のカレンの顔をリビングで見回していた。
「というわけで、親父と母さんには内緒で王子様を今日1日うちに泊めるわけだが…。はっきり言って、超・大仕事だ。分かってるとは思うけど、決して無礼のないようにな」
「まかせるのだ、兄上っ！」と、リン・ランが声をあげた。「兄上のハンターとしての格が下がるようなことは決してしないのだ！」
「そうよ！」とミラが続く。「お兄ちゃんの格が下がるということは、同時にパパの格が下がるということ！　そんなこと絶対にさせないわ！」
「加えて！」と、サラも続いた。「レオ兄の格も下がることになるよーな気がするし！　アタシたち、絶対王子を満足させてみるっ！！」

とヤル気満々の妹たち。

「ところで兄ちゃん」と、レナ。「王子さまは、ハーレムを望んでるんだよねえ？　兄ちゃん居ていいの？」

「ああ、1匹だけ男のオレは召使いの役だから」

「ジュリも男の子だよ？」

サラが言う。

「ジュリは女の子より可愛いからいいじゃん。王子に気に入られるよ、たぶん」

「そうそう」

うんうんと同意して頷きながら、シュウは一枚のメモを取り出した。

そこに書かれてある文を声に出して読む。

「えぇーと、よく聞いてくれよ、王子様の希望だから。まず1つ目は『レディの肌は露出多めが良い』だそうだ…」

それを聞いたシュウの妹たちとカレンはすぐさま着替えに向かった。

シュウはタキシードに着替える。

王子が相手だと思うと、普段着ではひどく無礼にあたってしまう気がして。

ちなみにジュリには女の子の服を着させてみた。

「可愛いぞジュリィィィィィ！」

とシュウが悶えながら一家のアイドル・ジュリを抱き締めていると、三つ子がリビングに戻ってきた。

「兄ちゃん、これでいいかなあ」

と、ユナ。

ユナ・マナ・レナは、おそろいのキャミソールとミニスカートに着替えてきた。

いつもはスカートの下にレギンス愛用だが、露出度を高めるために穿かず。

「おう、いいんじゃね。可愛い可愛い。ていうか、おまえたちはまだ子供だし何でも良かったかもな」

次にリビングに戻ってきたのはリンとラン。

「兄上ーっ、これでいい？」

リン・ランもおそろいのブラトップとショートパンツに着替えてきた。

「……。頑張ったね、おまえたち…」

「今すぐ襲っても構わないぞ兄上ーっ」

「構え…」シュウ、苦笑。「それより、カレンとミラとサラはまだか？」

「姉上たちとカレンちゃんなら、一緒に着替えてるみたいだったぞー」

「ふーん？」

少ししてカレンとミラ、サラもリビングにやってきた。
姿を見せるなりシュウはぎょっとする。

「うちはキャバクラかっ！！」

と思わず突っ込んでしまうドレスで登場のカレンとミラ、サラ。
しっかりと化粧もして、髪型も派手に整えている。

「あの王子、絶対大喜びじゃん」

と、サラ。
ミラも続く。

「そうよ、お兄ちゃん。パパのためにこのくらいは当たり前よ」

「そりゃっ、オレが仕事成功させないと親父の名が汚れちまうから、頑張ってくれるのは有難いけど……」

と、シュウはカレンを見た。
膝丈のドレスとはいえ、丸出しの肩がどうしても納得いかない。

「…カ、カレンは頑張ってくれなくて良かったっていうか……」

「あら、あたくしだって頑張りますわ！」と、カレンが胸を張る。

「あたくしだって、あなたの弟子で、そしてハンターですもの！いつもは足手まといになっているだけだけれど、今回は頑張りますわ！」

あなたの名を汚さないためにも。

と、カレンは心の中でだけ続けた。

ミラが催促する。

「いいからお兄ちゃん、王子さまの次の希望は？」

「やべっ、もうこんな時間かっ…！」シュウはリビングの時計を見て焦りながら、メモに目を落とした。「えーと、王子様の希望2つ目は『私と一緒に入浴してくれると嬉しいな』だそうだ…。どうするよ、これ…」

「はいはいはい！」とサラが手を上げた。「アタシが王子と一緒に入るよ！　んで何メダルか確認する！」

「ど、どんな大きさのモノがついてても金メダルを差し上げろ。いや、プラチナメダルをっ…！　んで、王子様の希望3つ目！　これで最後な」と、シュウは再びメモに目を落とし、「『私の腕枕を借りて甘い夢を見たいのはどのレディかな？』…って、つまり誰か夜伽をしてくれってことだよな」

「それはアタシ無理だわ」と、サラ。「レオ兄以外の男となんかエッチできないし」

「わ、私も無理よ！」と、ミラも続く。「私のバージンはパパにあげるって決めてるんだからっ！」

「ミラ姉上、それでは一生バージンだぞー」と、リン・ラン。「わたしたちは兄上にバージン奪われるけど」

「なっ、何でだよっ！！　オレは――」

「ねえ、シュウ」と、カレンがシュウの言葉を遮った。「この問題はあとで考えることにした方がよろしいのではないかしら。時間ないのでしょう？」

シュウははっとして再びリビングの時計に顔を向けた。

「うわ、やっべ！　王子様迎えに行かねえとっ…！」

シュウは携帯電話を手に取った。

瞬間移動を頼んであるミーナに電話を掛ける。

「もしもしミーナ姉っ！？　準備できた！」

電話を切らないうちに、ミーナが瞬間移動でリビングに現れた。

「来たぞ、シュウ」

「ミーナ姉、もう一度言っておくけど、この仕事のこと親父には内緒ね……！？」

「わかってるぞ。ミーナ姉を信じるのだ、シュウ」

「う、うん、サンキュっ…！　そ、それじゃあ」

と、シュウはカレンと妹たちに振り返った。
真剣な顔をして言う。

「いいか、おまえたち…！　玄関で待ってろよ…！　そして王子様が入ってきた瞬間、満開の笑顔でお迎えしろ…！」

「ラジャっ！」

と声をそろえた女たちを確認したあと、シュウがミーナの瞬間移動でリビングから姿を消して行った。

女たちとジュリは急いで玄関へと向かう。
その途中、カレンが疑問を口にする。

「何て言って王子さまをお迎えすればよろしいのかしら？」

そういえば王子への第一声は何にしようかと、女たちは思案顔になって考える。

マナが最初に口を開いた。

「あの王子さま、メイド喫茶風とか喜びそう…」

シュウが王子を迎えに行くのはＡＭ１０時。
ミーナの瞬間移動でやってきたシュウは、ぎりぎりのＡＭ９時５９分にヒマワリ城の門に着いた。

が、王子はもうすでに門のところで待っていた。

「もっ、申し訳ございません王子様っ！」

シュウが慌てて頭を下げる傍らで、ミーナの頬に王子の唇が重なった。

「久しぶりだな、ミーナ。元気にしていたか？」

「うむ、元気だぞ」

「そうか。ならば良い。……ん？　シュウ、頭を上げて良いぞ」

「あっ、はいっ…！」シュウは頭を上げると、王子に両手を差し出した。「おっ、王子様っ！　おっ、お荷物お持ちいたしまするっ…！」

王子が荷物をシュウに渡しながら言う。

「そんなに緊張しなくても良いぞ、シュウ」

と、言われても…。

シュウはリュウとは違って、王子相手に緊張せずにはいられない。

（こ、この大仕事失敗しませんようにっ……！）

あまり心地良くない動悸がする中、シュウは必死に笑顔を作った。

「で、では王子様、我が家へご案内致します」

自宅玄関前。
ミーナの瞬間移動で戻ってきたシュウは、立ち止まってごくりと唾を飲み込んだ。

（た、頼んだぞミラ、サラ、リン・ラン、ユナ・マナ・レナ…！
あと一応カレンもっ…！）

王子がわくわくとした様子で言う。

「どうしたのだ、シュウ。早く中に入れてくれ」

「はっ、はい！　ただいまっ！」

シュウは声を裏返して言い、玄関の大きなドアに手を掛けた。

（頼んだぞ…！）

ともう一度心の中で妹たちとカレンに言い、シュウはドアを開いた。

王子がすぐさま中に入ると、そこには予定通りの満開の笑顔たち。

「おかえりなさいませ、ご主人さま♪」

王子の顔が輝くと同時に、シュウは心の中で突っ込んだ。

（――って、メイド服いねーだろっ！！）

第５７話　大仕事の準備（後書き）

５日の２１時１５分頃メールくださった読者さまへ。

基本的にこの小説のキャラはおかしいです（笑）　どんなキャラが出てきても驚いてはイケマセン。

あ、私が普通キャラ書くのが苦手なのは秘密です。

ていうか、私あなた様の文才には負けます。

ＰＳ．

カモオォォォォン！　は、もう少し待って（笑）

第５８話　大仕事　～前編～

シュウ宅の玄関。

これから1泊していく王子が、出迎えてくれた女たち――シュウの妹の長女・ミラ、次女・サラ、三女・リン、四女・ラン、五女・ユナ、六女・マナ、七女・レナと居候のカレン、加えて女の子を服を着せられた幼い次男・ジュリの顔を見回して顔を輝かせる。

「おかえりなさいませ、ご主人さま♪」

女たちのそんなそろった声が、王子をさらに上機嫌にさせた。

「なんと美しいのだ…！　なんっっっとハーレムなのだ、ここはっ……！」

「え、えと、お喜びいただけたようで光栄です」

と、シュウはとりあえず安堵した。

女たちが順番に自己紹介していく。

「お久しぶりです、王子さま。長女のミラです」

「先日の舞踏会ではどうも。次女のサラです」

「兄上がお世話になってますなのだ。三女のリンですなのだ」

「兄上に依頼をしていただきありがとうございますなのだ。四女のランですなのだ」

「五女のユナですっ♪」

「六女のマナです…」

「七女のレナでーすっ！」

「あ…、えと、居候のカレンです」

王子が女たちを見回して恍惚とする。

ジュリが王子の足元に歩いていって、王子を見上げてにっこりと笑った。

「おうじさま、はじめまして。じなんのジュリです」

「――なっ…!?」王子、驚愕。「なっ…、なんとキラそっくりな愛らしい子なのだ!!　まことに男の子なのか!?」

「まことですよ、王子様」と、シュウはちょっと自慢げに言ってみる。「可愛いでしょう。うちのアイドルです」

「ああ、可愛い！　可愛いぞジュリ！」

と王子がジュリを抱っこしたところで、リンとランが王子の両脇に並んだ。

「リビングへご案内しますなのだ、ご主人さまっ♪」

「うむ、では頼もうかなリン・ラン」

一同リビングへと向かうと、まず王子をソファーに座らせた。

その左隣にミラ、右隣にサラがくっ付いて腰掛ける。

「シュウ、私の荷物を貸せ」

「はっ」

とシュウはすぐさま手に持っていた王子の荷物を王子に渡した。

王子が中から取り出したのは女たちへの贈り物。

「美しい宝石ばかりを選んできた。好きなものを選ぶと良い」

きらきらと輝く宝石に女たちの瞳も輝く。

(うっわ)

シュウの瞳は丸くなった。

(1つでブランド物のバッグ何十個も買えそうだな、オイ…)

カレンが1つのネックレスを取る。

「あたくしこれが良いのですわ！　ルビーですもの」

「そうか。カレンはルビーが好きなのだな。こちらへ参れ、カレン」

と王子が言うと、カレンが王子に近づいていった。

王子にネックレスをつけてもらい、カレンが王子に笑顔を向ける。

「ありがとうございます、王子さま」

「ああ。愛らしい笑顔だな、カレン。ルビーの輝きはそなたにぴったりだ」

と、王子がカレンの手を取ってキスし、思わず少しシュウの腹が立つ。

が、仕事を成功させるために堪えなければならない。

女たち全員の手にプレゼントが渡ったあと、シュウは口を開いた。

「王子様、お飲み物は何になさいますか」

この日のために、シュウは最高級の紅茶を何種類もそろえておいた。

のだが、

「うむ、ビールを大ジョッキで頼むぞ！」

「へ？」意表を突かれたシュウは、ぱちぱちと瞬きをして訊く。「申し訳ございませんが、もう一度……」

「ビールだ。ビールを大ジョッキで頼むぞ、シュウ」

「……なっ」シュウ、驚愕。「なっ、何でビールなんすか！？　乙女が夢に描きそうな王子様とあろうものが、午前中から大ジョッキのビールをゴクゴクぷはぁーってするんすか！？」

「うむ。昔、城の庭でキラとそうやって飲んだものだ。キラとそっくりなジュリを見たらそれを思い出してな」

王子様に何させてんだよ、母さん…！

さらにシュウが驚愕してしまう中、王子が催促する。

「早く持ってこい、シュウ。レディたちの分もだぞ」

「はっ、はいっ…！」

シュウは急いでキッチンへと向かい、食器棚から王子と妹たちの大ジョッキを用意した。

飲酒できないカレンとジュリにはジュース用のグラス。

（予定外だな、オイ…！　ミラたちも飲むってなれば、買い足しに行った方がいいかも…）

注いだビールとジュースの入ったグラスを、零さぬように急いで持っていったシュウ。

すぐ無くなるだろうことを察して、冷蔵庫の中のビールもリビングに持っていった。

王子の隣に座っているミラとサラが酌をしやすいように、近くに置いておいてやる。

王子が言う。

「おい、シュウ。レディたちの好きな食べ物を持ってこい」

「えっ!?　王子様の好きなものでいいんすよ!?」

「私はレディたちの好きなものを食べたいのだ」と、王子が女たちを見回して訊く。「そなたたち、何が食べたいのかな?」

「はいはいはい！」と真っ先に手をあげたのは大食いのレナ。「あたしハンバーグ５ｋｇね、兄ちゃん！」

ちょっ、おまっ、多いよ…！

王子の前ということで、シュウは口に出さず心の中で突っ込む。

「はーい」と次に手をあげたのは偏食気味のユナ。「エビフライのエビ抜き」

衣じゃねーかっ！

「はい…」とその次に手をあげたのはゲテモノ好きのマナ。「秋の味覚イナゴの佃煮…」

おまえ王子様に虫食わせる気！？

「兄上、兄上」と次はリン・ラン。「ショートケーキ砂糖多目で」

ツマミになるもん言えっ！

「あんたたち、兄貴が作るの楽なの言ってやんなよ…」と呟き、呆れたように溜め息を吐いたサラ。「兄貴、スルメ持って来て」

おっ、オッサンくせえええええええっ！

顔が引きつるシュウ。

それを見たカレンとミラが顔を合わせて苦笑した。

シュウがこの日のために用意しておいたものを言ってやる。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と、ミラ。「私、キャビアが食べたいわ」

「シュウ」と、カレンも続く。「あたくしはトリュフのたくさんかかったサラダを前菜に頂きたいのですわ」

「おっ、おうっ！」

シュウはカレンとミラのおかげでなんとか笑顔で承諾し、再びキッチンへと向かって走って行った。

足りない材料はミーナに電話して頼み、シュウは料理を作り始める。

リビングの方からは楽しそうな声が聞こえてくる。

女たちが頑張ってくれている証拠だ。

（今のところ王子様は満足そうだな。良かった。……が）

と、シュウは苦笑する。

（誰か料理作るの手伝ってくれ…！　料理が遅くて王子様が機嫌損ねちまうかも……！）

シュウが慌てて料理していると、ミラがやってきてくれた。

エプロンをつけながら言う。

「手伝うね、お兄ちゃん」

「おお、サンキュ、ミラ。助かるぜ。でもおまえ、王子様の隣で酌

してたんだろ？」

「うん。でも大丈夫よ、カレンちゃんに代わってもらったから」

と言ったあとに、ミラはしまったと思って苦笑した。

シュウの顔を恐る恐る覗き込んで見る。

「ご、ごめんねお兄ちゃんっ？　お兄ちゃんにとったら、全然大丈夫じゃないよねっ…」

「…だ…大丈夫だぜっ？」とシュウは無理に笑顔を作る。「たかが酌だろ、酌。王子はカレンに酒を注がせるだけだろっ…？　だ、大丈夫大丈夫、余裕だぜオレっ…！」

そう、大丈夫だ大丈夫。

オレは余裕のよっちゃんだぜ！

そう自分に言い聞かせながら、急いで仕上げた前菜をリビングへと持っていったシュウ。

「お待たせしま――」

笑顔が引きつる。

王子の手がサラの腰と、そしてカレンの丸出しになっている肩を抱き寄せていて。

「おお、シュウ。前菜か」

と、えらくご機嫌な様子の王子。

「は、はい。お待たせいたしました」

シュウはそう言いながら前菜をガラステーブルの上に置いた。

リン・ランが王子に取り分け、サラが王子のジョッキにビールを追加。

「食わせてくれ、カレン」

そして前菜を王子に食べさせてやるカレン。

「王子様、ハイあーん」

あーんと口を開けてカレンに食べさせてもらう王子に、シュウの笑顔が笑顔とは言えないくらいに引きつる。

（王子様、あんた1人で食えるでしょ…！？　何してんすか…！？つーか、そのカレンに触れてる手いい加減離してくれませんかね…！？　このセクハラ王子っ！！）

と、口に出して言えたらどんなに楽だろうとシュウは思う。

そしてカレンに目をやって、シュウの顔中の筋肉が強張っていく。

（笑顔満開だな、カレン。そんなに頑張らなくていーんだよおまえはよ…！？　王子様とはいえ、おまえが怯えてる男には変わりねーんだからよ…！？　しかも女好きなんだから気をつけろよおまえはよ…！？　あああああ、もうダメだ。ダメだオレ。ここにいられねえ……！！）

シュウはキッチンへと踵を返して行った。

リュウに似てもキラに似ても、決して気は長くない。

もう少しでブチ切れそうだった。

キッチンにどかどかと足音を立てて戻ってきたシュウに、ミラが苦笑する。

「…お、お料理は私がリビングに持っていくね」

「ああ、頼む」

ズドドドドド！

と不機嫌露わなシュウの包丁さばきが、とてもではないが軽やかとは言えない音を立てる。

まな板まで切れてしまいそうだ。

（機嫌悪いなあ、お兄ちゃん…）

ミラは恐る恐るシュウの顔を見上げた。

（わあ…、怒ってる怒ってる…。お兄ちゃんのこういうときの表情って、何だか少し……）

ぽっと染まるミラの頬。

「パパみたぁぁぁいっ（ハート）」

「――うっわ！」ミラに飛びつかれ、シュウは慌てて包丁を止める。

「なっ、何すんだよミラ！　あっぶねーなっ！」

「だってお兄ちゃん一瞬パパみたいだったあああああっ！」

「おっ、オレあんなにやべえオーラ醸し出してねえっ！！」

「あの周りを圧倒させるようなオーラがたまらないのよおおおおっ！　加えてパパってばセクスィィィィィィィィィっっっ！！」

「お、おいミラ、鼻血吹くならあとにしろよ！？」

「ああん、パパあぁぁっん！　私のこともママみたいにラブホで犯してえええええええっ！！」

「おまえ病院行けっ！！！」

「あのー…」

と背後の方から声がして振り返ると、そこにはカレンの姿。

苦笑しながら訊く。

「何を騒いでいるのかしら？」

「…なっ、なんでもねえよっ…」

とシュウはカレンに背を向けて再び包丁を動かし、ミラははっとして出来上がった料理が盛られた皿を持つ。

「私ってば、妄想で鼻血吹きそうになるのはあとにしなくっちゃダメじゃないっ」

と、ミラが慌ててリビングに料理を運んでいく。

シュウがカレンに背を向けたまま訊いた。

「何の用だよ」

「王子様にそろそろ用意していたワインをお出ししようと思って取りにきたのだけれど…」と、カレンがシュウの顔を覗き込んだ。「何だかご機嫌ナナメなのねえ？」

「別に」とシュウはカレンから顔を逸らす。「早くワイン持って行けよ」

「悪いじゃない、機嫌。どうなさったのかしら？」

「別に」

「別に、じゃないクセに。まあ、とりあえず今は頑張ってお仕事に集中した方がよろしいのではないかしら。あたくしは頑張っていますわよ？」

「……頑張らなくていい」

「え？」

シュウがカレンの顔を睨むように見下ろして言う。

「おまえは頑張らなくていいって言ってんの」

カレンが溜め息を吐いた。

「嫉妬してたの」

「…そっ、そんなんじゃねえよっ」

「でもあたくし、あなたが何て言おうと頑張るのですわ」

「何でだよ」

「何でって――」

「迷惑」と、シュウは声を大きくしてカレンの言葉を遮った。「オレにとっちゃ、すげー迷惑!!」

「なっ…」カレンの眉が吊りあがる。「何よそれ！　あたくしは、あなたの名を汚さないために頑張っているというのに！」

「いつもの仕事のように今回も役立たずで結構っ!!」

「なっ、何ですって!?　そっ、そりゃいつもは役立たずだけれどっ、今回はあたくしだって役に立ちたいのですわっ!!」

「うるせえっ!!　弟子なんだからおとなしく師匠（オレ）の言うこと聞けよ!!　可愛くねえっ!!」

「なっ…!?　だっ、だったら他の女の子を好きになってなさいよ!!」

「ああ、そうするよ!!　さっさと王子んとこ行っちまえっ!!」

「言われなくても行くわよ!!」

カレンがワインとグラスを腕に抱え、王子のいるリビングへと戻

っていく。

苛々としながら料理を再開するシュウ。

1、

2、

3、

4、

5…。

冷や汗だらーり。

カレンがキッチンから出て行ってから5秒後、シュウもキッチンから飛び出す。

カレンの背を追いながら、真っ青になって叫んだ。

「うっ…、うっそピョオォォォォォォォォォォォォォォン！！！」

第５８話　大仕事　～前編～（後書き）

昨日の２０時２０分頃メールくださった読者さまへ。

ちょ…！

だっ、大丈夫ですかあああああああああっΣ（ﾟﾛﾟ；lll）

第５９話　大仕事　～後編～

カレンとキッチンで喧嘩になってしまい、王子のいるリビングへと戻っていくカレンを焦って追いかけたシュウ。

「まっ、待ってくれカレン！！　嘘です嘘なんです、他の女の子なんて好きにならないっすううううううう！！」

「触らないでっ！」

べちんっ！

「――ハゥッ！」

とカレンの小さな手にビンタされたのは3時間前のこと。

ようやく注文された料理を全て作り終えたシュウは、キッチンの椅子に座ってしょげ返っていた。

王子や女たち、ジュリのいるリビングに行きたいところだが、このシュウが姿を見せるとカレンの笑顔が消えてしまうが故に行きづらい。

（なあああああにしてんだよオレっ！　カレンはオレの名を汚さないために頑張ってくれただけなんじゃねえかっ…！　カレンのいる上空５０００ｍまで順調に駆け上がれてたのに、オレの大バカヤロォォォォォォォォ！　ああもう、オレどこまで落下したんだろ…。まさかまた地上…!?　あああ…、誰かヘルプミーっ……！）

シュウがショックのあまり椅子からずり落ちそうになったとき、キッチンにカレンとミラ、サラが食べ終わった皿を持ってきた。

「王子様、今度はジュリに付き合ってお庭に鬼ごっこしに行ったわよ」と、ミラ。「リン・ラン、ユナ・マナ・レナも一緒に」

「おっ、鬼ごっこぉ!?」シュウの声が思わず裏返った。「ちょ、待て！　王子様に何をさせて――」

「大丈夫ですわよ」と、カレンがシュウの言葉を遮った。「王子様、張り切った様子でお庭へ出て行きましたもの」

「…あ…、そ、そう」

シュウは言いながら、機嫌を窺うようにカレンの顔を見た。
カレンに顔を背けられ、がっくりと肩を落とす。

（ああオレ…、やっぱり地上にいる……）

シュウは立ち上がってキッチンの戸口へと向かった。
サラが訊く。

「兄貴どこ行くの？　王子が外で遊んでるうちに休んでおけば？」

「汗かいたら風呂入りたがるだろ、王子」

「ああ、そうか！　アタシも準備しないと！」

とサラもシュウのあとを着いて1階にある大きなバスルームへとやってきた。
洗面所の引き出しから入浴剤を取り出す。

シュウはバスタブが汚れていないことを確認したあと、水魔法と炎魔法でお湯を作って中に入れた。

「もうお湯作ったら、王子が入る頃には冷めるんじゃないの、兄貴」

「熱めに作っておいたから大丈夫」

「ふーん」

サラはシュウの背に目を向けた。
明らかに元気のない様子が伝わってくる。

「兄貴、カレンと喧嘩したの？」

「オレまた、地上まで落下したっぽい…」

「まさか。夜になればカレン怒ってないよ。それよりさ、兄貴」

とサラが入浴剤を手に持ってシュウのところにやってきた。
シュウに顔を近づけ、小声になって言う。

「さっき、問題の王子の夜伽の相手の話になったんだけど」

「お、おう…？」

「アタシは聞き逃さなかったよ」

「な、何を？」

「王子が、『万が一リュウにバレたことを考えると面倒だな…』っ

てポロッと呟いたのを」

シュウは眉を寄せた。

「それって、つまりどういうことだ？」

「ずばりアタシの予想としては、王子は夜伽にカレンを選ぶ！」

「なっ…」シュウ、驚愕。「なぬぁーーーっっ！？　えっ、ちょっ、何でっ！？」

「だって、王子は親父にバレたら面倒とか言ってたんだよ？　それってつまり、親父の娘であるアタシたちに手を出したら面倒なことになるっていう意味でしょ」

「あああ、そうかっ！　面倒にならねえのは親父の娘じゃねえカレンだけなのかっ…！」

「どうするよ、兄貴」

「どっ…どうしようっ…！？」

狼狽するシュウ。

サラが入浴剤をバスタブに入れながら言う。

「まあ、予想外れるかもしれないけどさ…」

「そ、そうなることを願うっ…！」

王子が夜伽の相手にカレンを選びませんようにと、シュウは願っ

た。
かと言って妹たちのどれかを選ばれても困るのだが、シュウは願った。
カレンが王子の夜伽になりませんようにと、必死に願った。

王子のバスタイムのお供をしたサラ。
ふらふらになってバスルームから出てきて、夕食の支度のためキッチンにいたシュウのところへとやってきた。

「あっ…兄貴っ……！」

「おっ、おいサラっ!?」とシュウはよろけたサラの身体を慌てて支えた。「どうした!?」

「おっ…王子にっ…！」

「王子様に!?　まさかおまえっ……!?」

「そのまさかだよ兄貴っ…！　もう信じらんないっ……！」

「なっ…！」シュウ、驚愕。「なっ、なんって王子なんだよ…！サラが嫌がってるっていうのに無理矢理――」

「まさかレオ兄の鉄メダル奪取されるなんてっ!!」

「は?」

「レオ兄がアルミメダルになってしまったあああああああ！！」

「…ちょ、おま……」シュウは脱力しながら苦笑した。「そんなことかよ…。っていうかどんなモノがついててもプラチナメダルを差し上げろと言ったじゃねーか…。んで、王子様はリビング？」

「うん。風呂上りのビール取りに来たんだった、アタシ」と、サラが冷蔵庫を開けてビールを取り出す。「結構飲めるんだなあ、あの王子。…んでさ、兄貴」

「ん？」

サラが強張った顔をして振り返った。

「王子やっぱりカレンを夜伽にしようとしてるみたい」

「――！？」

「カレンの腰抱き寄せて何か口説いてたっぽいもん」

「…ま、ま、ま、待て。あ、焦るな、サラっ…！　だ、大丈夫だ。王子がカレンを夜伽に選びませんようにって、オレ必死に願ってるしっ…！」

「アタシも願ってるよ。だけどさあ、兄貴」

「お、おう？」

「この世（小説）はそんなに甘くないと思う」

（ウン、ソウダネ）

就寝前、シュウの顔が引きつる。

（必死に、そりゃもう必死に願ったのに…！　主人公（オレ）の願い叶えてくれたっていいじゃねーかっ！！）

カレンの部屋の前、王子がカレンの手にキスして言う。

「愛らしいカレンよ。私はそなたに恋をしてしまったようだ。今夜はそなたの部屋にお邪魔してもいいかな？」

「王子様」

と思わず声を大きくして割り込んだのはシュウである。

王子が振り返った。

「何だ、シュウ」

「そ、そのっ……、王子様はどうぞ広い客間でお休みください。そしてどんな者が襲ってきても大丈夫なように、オレが徹夜で護衛しましょう」

「そんなことしなくても良い。このリュウの屋敷を襲う者などなかなかおらぬのではないか？」

「いやいや、親父が出掛けてるのをいいことに襲ってくるかもしれ

ませんし」

「大丈夫だ」

「いやいやいや、オレはもう心配で心配で」

「案ずるな、シュウ。私は大丈夫だから――」

「いやいやいやいや！　危ないです、王子様！　もう危なくて危なくてデンジャラスもいいとこですぜ！」

王子が溜め息を吐いた。

「そんなにカレンに私の相手をさせるのが嫌か、シュウ」

「うっ…」

「カレンから聞いたところ、カレンはおまえの弟子なだけであって恋人ではないそうではないか」

「…そっ…そうですけどっ……」

「ならばおとなしく引っ込んでおれ。私の邪魔をするでない」

「……も、申し訳ございませんでしたっ……」

と王子にくるりと背を向けたシュウ。

カレンの向かいにある自分の部屋のドアノブに手を掛けて立ち止まる。

（なぁーんて、このままカレンを王子様の夜伽にさせるわけにはいかねえっ…！　ええいっ、こうなったらっ……！！）

シュウは再び王子に振り返った。

（壊れろオレっ！！！）

シュウは王子に飛びついた。

「王子様っ！！」

「なっ、何だシュウ！？」

「オレもう告白しますっ！！」

「なっ、何をだシュウ！！」

「オレ、カレンのことも好きだけどっ…！　そ、それ以上に王子様のこと、す、すすすっ、好きなんですっ！！」

「なっ…！？」王子、驚愕。「何を言い出すのだおまえはっ！？」

「こっ、こここっ、今夜はオレに夜伽をさせてくださいっす！！」

「きっ、気色悪いことを申すでないっ！！　い、今、私の身体中に寒気が走ったぞっ！！」

「そんなひどいこと言わずに、さあっ！！　オレをぜひ夜伽に！！」

「ふっ、ふざけるなっ！！」

「大丈夫です王子様！！　どこかの島のイイ男は、女よりも男を好むらしいですし！！」

「わっ、私はレディしか好まぬっ！！」

「王子様たる者、食わず嫌いなどなりませんっ！！」

「くっ、食わず嫌いって――」

「さあっ、お召し上がりください王子様っ！！　オレまじピッチピチっ！！」

「よっ、よっ、寄るなあああああっ！！」

必死ね、シュウ…。

と、シュウをじっと見ていたカレンは苦笑した。
その場を離れ、ジュリの部屋へと向かっていく。

少しして、カレンはシュウと王子のところにジュリを抱っこして連れて来た。

「王子さま」

とカレンの声が聞こえ、騒いでいたシュウと王子がぴたりと止まった。
カレンに顔を向ける。

「どうしたのかな、カレン？」

「ジュリちゃんが…」

とカレンがジュリに目を落とすと、シュウと王子もジュリに目を落とした。

カレンの腕の中、ついさっきまで眠っていたという顔をしているジュリが王子に両手を伸ばす。

そしてにっこりと笑って言った。

「おうじさま、いっしょにねんねしてください」

「――うっ！」

ずきゅーん！

と、ジュリに胸を貫かれた王子。

カレンの腕からジュリを受け取って抱っこする。

「そーかそーか、ジュリは私と共に眠りたかったのだな！　よしよし、今夜は私と一緒に眠ろうな～っ♪」

「ありがとうございます、おうじさま」

「ああ、たまらん！　たまらんぞジュリの可愛さは！　シュウ、カレン、私は客間で休むとするぞ！」

と緩やかな螺旋階段を降り、1階にある客間へと向かっていく王子。

（そ、そうかっ…！　ジュリという手があったんじゃねーかっ…！
そ、それなのにオレときたら……）

シュウは赤面しながら、傍らのカレンに目を落とした。
カレンがシュウの顔を見上げて溜め息を吐く。

「必死とはいえ、すごいこと言いましたわね、あなた」

「…わっ、忘れてくれっ！」

「本当に王子さまの相手をすることになってたらどうしてたのかしら？　おとなしく相手を務めてたわけ？」

「う…。…そ、それでもおまえが王子様…いや、他の男の相手するよりマシなんだよっ…！」

そう言ったあと、カレンに背を向けたシュウ。
恐る恐る訊く。

「…ま、まだ怒ってる？」

「怒ってないのですわ、もう」

「…で、でもオレまた地上まで落下したよなっ？」

「してませんわよ、別に」

「――え！？」シュウが勢い良くカレンに振り返る。「落下してねーのオレ！？　もしかして少しも落ちてねえとか！？」

「落ちてませんわよ、少しも」

「まーじでえええええええええええええっ！！」

カレンを腕に抱え、自分の部屋に入ったシュウ。

カレンをベッドに押し倒して黒猫の尾っぽを興奮にぶんぶんと振る。

「おっ、お嬢さんっ！」

「お、押し倒さないでちょうだい」

「ええ、すみません。しかし放しません」

「は、放しなさいよ」

「もう一度訊くっす。オレ、少しも落下してないんすよね…！？」

「し、してませんわよ？」

「…おお…！　おおお…！」じーんと感動が込み上げてきて、シュウの瞳が輝く。「オレすーげーハッピーボーイ……！！　さあっ、お嬢さんっ！！」

「は、はい？」

「オレを誘ってくださいっす！！　さあ、あの台詞と共に！！」

「……ま、まったく仕方ないわね」とカレンは頬を染めながら呟いた。「…でも、その前にあたくしも訊きたいことがあるのですわ」

「何？」

「あたくし、今回のお仕事役に立てたかしら……？」

そう、不安そうな顔をしながら訊いたカレン。

シュウが微笑んだ。

「もちろん、すげえ役に立った。おまえのおかげで、きっとこの仕事は大成功だな」

「…まあねっ…！」

と嬉しそうに笑ったカレン。

シュウの顔をじっと見つめて誘った。

「ヘイ、カモオォォォォン！！」

「あざーーーっす！！」

と、シュウはカレンの唇に吸い付いた。

閉まり切っていなかったドアの隙間に、２つの黄金の瞳が光っていることも知らずに。

翌朝、王子はリュウとキラが帰ってくる前に屋敷の外へと出た。

すぐにミーナの瞬間移動で城へ帰ると思いきや、王子は庭の木の

陰に身を隠した。
一緒になって身を隠したシュウとミーナが首を傾げていると、王子が言った。

「キラの姿だけでも見せてくれ」

リュウとキラが帰って来たのは、木の陰に身を隠してから10分後のこと。

（ああ…、相変わらず美しいな…キラ）

リュウの腕に抱っこされて帰って来たキラを、王子は愛おしそうに見つめる。
でも少し切なそうだ。

そんな王子の横顔を見ながらシュウは思う。

（この王子様、未だに母さんのこと好きなんだ…）

リュウとキラが屋敷の中に入って姿が見えなくなると、王子がシュウに振り返った。

「シュウ」

「はい、王子様」

「おまえの母上は幸せそうか？」

「え…？」

ぱちぱちと瞬きをし、考えたシュウ。
笑って答えた。

「はい。あの親父が旦那なもんだから色々と大変だと思うけど…、でも母さんは幸せそうです」

「…そうか。ならば良い」と、王子が微笑んだ。「シュウ、仕事ご苦労であった。私は満足したぞ。仕事は大成功だ」

「あっ…」シュウが王子に頭を下げる。「ありがとうございますっ！」

「報酬は今日にでもおまえの銀行に振り込ませておく。では城へと瞬間移動を頼むぞ、ミーナ」

ミーナの瞬間移動でやってきたヒマワリ城の門の前。
王子はシュウとミーナに見送られながら、城へと帰って行った。

王子の姿が見えなくなるなり、シュウは舞い上がった。

「大仕事、大成功だぜヒャッホオォォォォォォォォォイ！！」

この日の午後、王子からの報酬を確認するために銀行へと向かったシュウ。
その報酬金額は、リュウの5分の1という約束。

なのだが、

（なっ、なんじゃこりゃあああああああああ！？）

とてもではないが5分の1とは思えぬ多額の報酬に、シュウは目玉が飛び出そうになった。

シュウに振り込まれていた報酬は２０００万。

ということは、リュウは王子から依頼を受けるたびに1億をもらっているということだった。

（お、親父あんたっ…！）

シュウ、改めて驚愕。

（何様だよ……！？）

何はともあれ、シュウの大仕事は無事に大成功だった。

第６０話　毎年恒例秋のギルドイベントは…

シュウが王子からの依頼という、大仕事を無事に大成功で終えたのは今朝のこと。
頑張ってくれたカレンや妹たちに報酬を分け与えても、シュウには多額の報酬が残った。

本日の仕事終え、カレンと共に夜に帰宅し、晩ご飯を食べて自分の部屋でシャワーを浴び、電気を消してベッドに入ったシュウは考える。

（これだけ報酬があれば、今月のカレンの誕生日は約束通り盛大に祝えるな）

その約束をしたのは半年前の４月――三つ子の誕生日パーティーのときのこと（第９話参照）。

（カレン、何がほしいのかな。王子と同じようにオレがルビーのネックレス贈ったら、オレがあげた方を愛用してくれちゃったりして。…いや、うん、王子の方だよな。桁外れに高そうだったし…。自惚れんなよ、オレ……）

シュウは苦笑したあと、欠伸をした。

（それにしても眠いな。昨日カレンが一緒に寝てくれたんだけど、以前のオレとは違ってそりゃもう眠れねーのなんのって。今日の仕事中に欠伸連発してたら、危うくモンスターに切り裂かれるところだったぜ。ああ…、恋ってちょっと恐ろしい…。今夜はぐっすり寝よう……）

シュウは目を閉じた。

（カレンの誕生日プレゼント、何がいいかな……）

そんなことを考えながら、夢へと誘われて行った。

のだが。

「…ぐ……」

急にベッドが狭苦しくなり、シュウは眉を寄せながら目を開けた。

リンとランに挟まれている。

「な、なんだ？　おまえたち、どうかしたのか？」

「兄上」と、リン・ランが声をそろえる。「わたしたち、昨日見てたのだ」

「？　何を」

「兄上がカレンちゃんとキスしてたのを」

「――えっ！？」シュウの声が裏返った。「き、ききき、気のせいじゃねーかっ？」

「しかもディープキスだったぞ」

「――えっ！？　そ、そそそ、そんなバカなっ…！」

シュウは冷や汗をかきはじめた。

（き、昨日のキスがまさか見られているとはっ…！　しかもよりによってリン・ランかよっ…！）

極度のブラコンであるリン・ランに、シュウが他の女とキスしているところを見られるということは、いろいろと恐ろしいものがあった。

リン、ランの順に言う。

「兄上、わたしたちうっすらと以前から思っていたのだが」

「兄上、わたしたち昨日で確信に近いものを得たのだが」

「…お、おう…！？」

「兄上」と、リン・ランがシュウの顔を見つめた。「カレンちゃんのこと、好きなのではないか？」

「えっ…！？　い、いや、そのっ……！」

や、やべえ、何て言えばいいのオレ…！？

シュウは狼狽しながら必死に考える。

リン・ランの痛い視線を感じながら。

そこへ助けに現れたのは、シュウの部屋のドアの前で聞き耳を立てていたサラ。

シュウの部屋へと入ってきて、部屋の電気をつける。

「こーら、あんたたち」

「サラ姉上」

と、リン・ランがサラの顔を見た。

「兄貴疲れてんだから自分の部屋で寝なよ」

「わたしたち兄上に訊きたいことが――」

「早くしな」

「…は…はいなのだ、サラ姉上」

リン・ランがしぶしぶと承諾し、シュウの部屋から出て自分たちの部屋へと入っていく。

それを確認したあと、サラはシュウの部屋に入って電気を消した。

シュウのベッドに入る。

「――って、今度はおまえがオレと一緒に寝る気かよ」

「兄貴えらく眠そうだったから、寝ながら用件聞いてよ」

「寝たら用件分からねーよ」

「それもそうか」

と、サラが笑った。

そのあと呆れたように言う。

「っていうか、兄貴何してんのさ…。家にいるときにカレンといちゃつくのは気をつけなきゃダメじゃん。あーあ、リン・ランに見つかっちゃって……」

「…た…、助けてくれてサンキュ。だけどこれからどうすればいいものか…。カレンのこと好きじゃないって嘘吐いたところで、あいつらもう完全に疑ってるから信じないだろうし…」

「だろうね。まあ、いつかはバレることだったから、もう白状しちゃえば？　ずばっと、兄ちゃんはカレンのことが好きなんだってさ」

「……。あいつら、荒れないかな」

「大丈夫、荒れないよ」

「おお、そうか。荒れな――」

「5％の確立で」

「……つまりほぼ荒れること決定なんだな？」

「うん」

「どこが大丈夫なんだよ。白状しづらいじゃねーかよ…」

シュウは苦笑した。

「大丈夫だって。結婚するわけじゃないから、リン・ランも何とか落ち着くっしょ。それより」と、サラは話を切り替える。「用件言

うよ」

「おう、どうした」

「今月カレンの誕生日だけどさ」

「そうだな」

「その前に毎年恒例この時期のギルドイベントあるの忘れてない？」

「うん、忘れてた」

毎年秋になるとギルドイベント――ギルドで開催されるイベントがあるのだ。

大抵は『スポーツの秋』をテーマにしたもので、全島のギルドが名誉と賞金のために戦う。

サラが続ける。

「今年のスポーツ決まったって、さっき親父から聞いてさ」

「おう、何だって？」

「バスケだってさ」

「へえ、バスケか。んじゃあ、各島から代表で5人ずつ？」

「ううん。２０歳未満のジュニアの部と、２０歳以上のアダルトの部に分かれるんだって。ジュニアとアダルトから各5人と、あとベンチに１２人まで。参加していいのはハンターとそのモンスターの

ペット、それから各ギルドのギルド長の許可をもらった者」

「オレたちジュニアの部の代表って決まってんだろ？」

「うん。今年はカレンが見てるし、兄貴かっこいいとこ見せないとねっ！」

「おうよっ！」

「んじゃ、おやすみっ」

「おやすみっ」

と、目を閉じたシュウとサラ。

数秒後、シュウは苦笑しながら呟いた。

「……でも、絶対通常のバスケのルールとは違うよな」

それから3日後。

シュウは家族と居候のカレン、リンク一家、レオンとグレルの集まったリビングで、そのギルドイベントで行われるバスケットボールのルール説明をリュウから話されていた。

「開催日は次の日曜、今年はバスケ大会。場所は楽なことにここ葉月島。各島２０歳未満のジュニアの部と２０歳以上のアダルトの部に分かれ、トーナメント形式で試合を行う。参加できるのはハンターの他に、ハンターの人間に近いモンスターのペット、各ギルドの

ギルド長に参加の許可を得た者だ。ってことで、うちの家族とおまけにリーナを参加ＯＫとした。ここまでいいか？」

一同が頷いた。

リュウが続ける。

「んで、葉月島のギルドの代表は、ジュニアの部にシュウ、ミラ、サラ、リン・ラン、ユナ・マナ・レナ、ジュリ、カレン、リーナ。んでそのうちスタメンにシュウとサラを入れれば、あとは適当に決めりゃあいいだろ」

ジュニアの部に参加する一同が頷いた。

リュウが続ける。

「次、葉月島のギルドのアダルトの部の代表な。俺とキラ、リンク、ミーナ、レオン、グレル師匠。ベンチは１人または１匹だが充分だ。俺、ベンチはリンクでいいと思うんだけど、どうよ？」

「いや、強すぎるだろオイっ！」と突っ込んだのはシュウだ。「純猫モンスター３匹に加えてバケモノ２人かよっ！」

「張り合いなくてつまんねーか。んじゃあ、ベンチに師匠で」

「エー」とグレルが口を尖らせた。「オレ見てるだけかよー」

「あんたゴールぶっ壊すかもしれないしその方がいいっす」

「アレ壊しちゃいけねーんだっけ？」

「壊したら試合できねーでしょ」

「ああ、そうか」

「んで次」と、リュウが話を戻す。「敵味方の判断はハチマキでするから、服装は何でもいいぜ。コートの広さは通常の倍の５６ｍ×３０ｍな」

「めっさ広…」リンクが苦笑した。「どんだけ疲れんねん。あれは？　倍のコートの広さに合わせて、３ポイントラインとかも倍になってるん？　そうやったら、おれゴールにボール届かへんで」

「いや、それは通常と同じ。だが、５ポイントラインというものがある。３ポイントラインよりもさらにゴールから遠いから、まあリンクにゃ無理だろな。おまえにそこからのシュートは期待しねえ、絶対外すし」

「おまえは外さへんのかい、リュウ」

「当然だバーカ」

「バカをつけんなやっ！　んで!?　あとのルールとかは!?」

リンクが催促すると、リュウが続けた。

「ボールを持って3歩以上歩くとトラベリングとなるところは通常と一緒。だが、いくら相手の選手を殴ろうが蹴ろうが吹っ飛ばそうが反則にならねーから、気をつけると同時に思いっきり行けよー。でもあんまり醜いことはしねえように」

「うっわ」シュウの顔が引きつった。「ハンターとはいえ危ねえな、

オイ。ファウルなしかよっ…！」

「安心しろ、シュウ。俺がコート脇から相手の選手に殺気を送って守ってやるぜ」

「そ、そうか。それなら安心――」

「女たちを」

「――って、オイ！！　おっ、オレは！？　守ってくれねーのかよ！？」

「甘ったれんな。自分の身は自分で守れ」

「ひっ、ひでえええええっ！！」

「でもまあ、俺が殺気送らずとも、俺の娘たちを傷つける度胸のある奴は早々いねーだろうなあ」

「そうだね」と、レオンが同意して苦笑した。「リュウの娘を傷つける＝自殺行為……だし」

「だな。だが、おまえにゃ荒々しく突っ込んでくる奴もいるから頑張れよシュウ」

ぽんとシュウの肩を叩いたリュウ。

「ちょ、ちょっと待っ――」

「んで、あと言っておくことといえば」とシュウの言葉を遮って話

を戻した。「試合時間のことか。１回戦から準決勝までは、前半２０分、後半２０分の計４０分。決勝は前半３０分、後半３０分の計６０分な。それからジュニアとアダルト交互に試合。昼飯タイムは準々決勝と準決勝の間。午後から準決勝と決勝。俺たちアダルトは優勝確実だから、ジュニアも頑張って優勝するように。以上」

リュウが話を終えると、子供たち――シュウとミラ、サラ、リン・ラン、ユナ・マナ・レナ、ジュリ、カレン、リーナは試合の作戦を立てるためにシュウの部屋へと向かった。

ベッドやソファー、床にそれぞれ座ってあれやこれやと思いついた作戦を口にする。

シュウはそれらを聞きながら苦笑した。

（マトモな作戦ねーな、オイ…。まあいいか、ルールもマトモじゃねーし…。それより）

と、シュウはカレンに目を向けた。

どうやらバスケ大会が楽しみなのか、うきうきとした様子だ。

（かっこいいとこカレンに見せて、一気に上空５０００mだぜオレ！！）

シュウのカレンの間に、リン・ランが割り込む。

（た……たぶんな）

第６０話　毎年恒例秋のギルドイベントは…（後書き）

作者の都合により更新遅れます、申し訳ございません。
人生いつ何が起こるか分からないですね…（´；ω；`）

第６１話　バスケットボール大会　～前編～

毎年恒例秋のギルドイベント。
今年は『全島ギルド・バスケットボール大会ＩＮ葉月島』ということで、シュウの暮らす葉月島へと各島のハンターたちが集まった。
選手から応援団、おまけに一般の観客。

試合はトーナメント方式。
選手として参加可能な者はハンターとそのモンスターのペット、各ギルドのギルド長から参加の許可をもらった者。

ここ葉月島ギルド・ジュニアの部の代表は、シュウとその７匹の妹と一匹の弟。
それからシュウの弟子で居候のカレンと、リンク・ミーナ夫妻の娘であるリーナ。
以上の１人と１１匹。

葉月島ギルド・アダルトの部の代表は、シュウの父親で葉月ギルド・ギルド長のリュウと、シュウの母親であるブラックキャットのキラ。
リュウの親友で葉月ギルド・副ギルド長のリンクとその妻であるホワイトキャットのミーナ。
リュウとリンクの師である超一流ハンター兼猫モンスターとそのハーフ専門雑誌編集長・グレルと、そのペットでミックスキャットの超一流ハンター・レオン。
以上の３人と３匹。

葉月島のジュニア・アダルトチーム共に優勝候補とされる。
特にアダルトチームは反則なくらい強すぎる。

只今ＡＭ７時３０分。
３０分後にジュニアの部の１回戦が行われる。
その広さは通常の倍の５６ｍ×３０ｍ。
（本当広いな、コート…）
と、シュウは野外に作られた６つのコートを見渡した。
通常にはない５ポイントラインあり。
見た限り、ゴールまで１０ｍはありそうだ。
（そしてルールが荒々しすぎる…）
と、シュウは苦笑してしまう。
だって、いくら殴ろうが蹴ろうが吹っ飛ばそうが、ファウルはなしだというのだ。
（うちのチームの女たちを狙う相手の選手は、コート脇から親父に殺気送られて怯んじまうだろうが……、オレは親父に守られねえみたいだし。オレも親父の息子だからまだマシなんだろうけど、それでも殴られたりするだろうな）
あまり明るくないシュウの顔を、チアガール姿のカレンが笑顔で覗き込んだ。
敵味方はハチマキの色で判断するため、服装は自由。
サラが何かを企み、カレンとミラの服装をチアガールにした。
「がんばりましょうね、シュウ？」

「……」

カレンの顔を見たシュウ、頬がぽっと染まる。

（か、かーわいいんっ…！　チアガールなのはオレの応援のためか!?　オイ、まーじかあああああ!!）

そして張り切る。

「おう！　頑張るぜオレ！」

カレンにかっこいいとこ見せて、オレ一気に上空５０００ｍ!!

と気合を入れたシュウのところに、リンとランがやってきた。

シュウとカレンの間に割り込む。

「がんばってなのだ、兄上」と、リン・ランがシュウににっこりと笑顔を向ける。「かっこいいとこ見せてなのだ、わたしたちのために」

「…う…うん……」

シュウは苦笑しながら頷いた。

最近カレンと話していると、リン・ランが必ず割り込んでくる。

そのたびにカレンはリン・ランに気を遣っているのか、離れていってしまう。

「あっ、カレンっ…！」

と、思わずカレンに伸ばしてしまったシュウの手を、リン・ランが掴んで下ろした。
顔は笑っていても、決して笑っていない2匹の瞳。
「今わたしたちと話しているのだ、兄上」
「…お…おう……」
ていうかその前にオレ、カレンと話してたんだけどなー…。
とは恐ろしくて言えないシュウだった。
試合10分前。
葉月島ジュニアチームのシュウとその弟妹、カレン、リーナはコート脇のベンチのところに集まった。
「1回戦のスタメンはオレとサラと…」と、シュウは皆の顔を見回しながら訊く。「あとどうする?」
「うーん、そうだなあ…」
サラが、くじ引きで決められた1回戦の相手――文月島ジュニアチームに目を向けた。
皆も向ける。
「結構数はいるけど、男と女半々ってとこかあ。1回戦のスタメンはどうくるんだろ。まあ、見た限り純粋なモンスターはいないし、犬のハーフが2匹だけであとは人間だから苦戦しないっしょ。ハーフの2匹、女だしさ」

「かな。まあ、念のためにジュリとリーナはベンチで、あとは誰でもいいか」

とシュウが言うと、レナが張り切った様子で手をあげた。

「はいはいはい！　１回戦はあたしとユナとマナが出る！」

そういうことになった。

ジュニアの部１回戦の時間がやってきて、６つのコート――Ａ～Ｆコートに各島のジュニアチームの選手たちが並ぶ。

シュウたち葉月島ジュニアチームはＡコートで文月島ジュニアチームと対戦。

相手のスタメンは女の犬モンスター・ハーフが２匹に、人間の男が３人だった。

比べて、猫モンスター・ハーフ５匹で結成されたシュウたち葉月島ジュニアチーム。

そのうち４匹が女であるとはいえ、その体内に流れている半分の血は、最強を謳われるブラックキャットの中でも特に並外れた強さと身体能力を持ったキラを受け継いだもの。

相手からすれば、純猫モンスター５匹と対戦するようなものと言っても過言ではなかった。

おまけにコート脇からリュウの殺気を送られ、文月島ジュニアチームはかちんこちんになっている。

一応ポジションは、センターがシュウ、パワーフォワードがサラ、スモールフォワードがレナ、シューティングガードがマナ、ポイン

トガードがユナと決めておいた。
だが全員がどのポジションも可能ということで、結局はその場その場の己の判断でそれぞれ自由に動くことに。

ジャンプボールはシュウ。
相手は女の犬モンスター・ハーフ。
もともと犬よりもジャンプ力のある猫の上に、キラの血を受け継いでいるとなれば結果は当然。

シュウがボールを叩いて試合が始まった。

ベンチやファンからの歓声の中、シュウは張り切る。

（おっしゃあ！　行くぜオレ！！　ここはまずオレがかっこよくシュートを決めるっ！！）

と、思ったのだが。
シュウからボールを受け取ったサラが見事なドリブルでゴール目掛けて駆けて行く。

「いっくぜ〜〜〜いっ♪」

3ポイント地点、サラがぴょーんと高くジャンプし、

「とりゃあっ！」

ドカンっ！

とダンクシュート。
当然のごとく沸き起こる驚きの歓声。

（サラおまえ…、かっこいいな……）

と呆然としながら思ってしまったシュウ。

はっとしてぶんぶんと首を横に振る。

（なーに感心してんだオレ！　男な分、オレの方がもっとすごいことできるじゃねーかっ！　オレもいっくぜぃっ！！）

と、シュウは気合を入れなおして敵からボールを奪った。

が。

「兄ちゃん、兄ちゃん！」と、瞳を輝かせるレナ。「あたしもゴール決めたいからボールちょーだいっ！」

「お、おう」

レナにパスしてやった。

「ていやあっ！」

と、ゴール下から、サラに続いてレナもダンクシュート。

（つ、次こそオレが……）

再びボールを手にしたシュウ。

が。

「兄ちゃん…」と、マナがシュウの脇に寄ってきた。「ちょーだい…」

「い、いや今度は――」

マナに奪い取られたボールは、5ポイントラインから綺麗な弧を描いてゴールのネットを通過。

（こ…、今度こそオレがっ……！）

と再びシュウはボールを手にする。

が。

「うわあああああん、兄ちゃあああああああん！」と、泣き虫のユナが泣きながらシュウに手を伸ばす。「あたしにもパスちょーだいよおおおおおおお！」

「…わ、わ、わ、分かったよっ……」

と今度はユナにパスしてやるハメに。

「ありがと、兄ちゃん！」

泣きやんだユナが、マナに続いて5ポイントラインからシュート。が、それは綺麗な弧を描かなかった。

（おっ、ここはナイスフォローと行けオレっ！！）

と飛び出したシュウ。

ゴールの淵に当たって跳ね返ったボールを手にしてそのままダ～ンク！

――したのはサラ。

ベンチのカレンが黄色い声をあげている。

「きゃあああああっ！！　サラかっこいいのですわあああああああああっ！！」

「イエイっ♪」

とカレンに向かってウィンクをしながら親指を立てたあと、サラがシュウのところへと駆け寄ってきた。

「あーにきっ！　もっと派手にがんがんシュート決めると思いきや、ガードに回ったんだ？」

「……」

「？　なんか兄貴暗くない？」

「オレ、好きでパス回してたわけじゃ――」

「おおーっと！」とサラが走り出す。「行くよ兄貴っ！　ガードよろしくねっ！」

「……」

もういいや。

次の準々決勝でシュート決めまくれば…。

シュウはボール運びとパスに専念した。

リュウの殺気を感じては思うように動けなかった文月島ジュニアチーム。

結果は、３２０対３５で葉月島ジュニアチームが勝利した。

（でもオレ、結局シュートにいけなかったんだぜ…）

と、思わず暗くなってしまうシュウに、カレンが駆け寄ってきた。

「すごいのね、シュウ！　あなたが上手くチームを動かしてるって、リンクさんが感心してたのですわっ！」

「…お…おうっ…？」

あれ？

オレ、なんだかんだでポイントアップ？

カレンの笑顔にシュウの頬が染まる。

「カ、カレンっ…」

「何かしら？」

「オレ、次の準々決勝ではシュート決めるからっ…！」

「ええ、たくさん決めてね。次の準々決勝を無事に勝利で終えたら、次は一気に決勝みたいだし、がんばってねシュウ！」

がんばってね。

そんなカレンの言葉でシュウの気合アップ再び。

（頑張るぜオレェェェェェェェ！！）

だが、その前に。

次はアダルトの部1回戦である。

葉月島アダルトチーム――リュウとキラ、リンク、ミーナ、レオンと対戦するのは、ジュニアと同じ対戦相手になるので文月島アダルトチーム。

ジャンプボールはリュウ。

リュウが叩いたボールはキラの手に渡ったのだが…。

「ふっ、ふにゃあああああああああん！！」

キラ、泣きながら走る。

いや、逃げる。

トラベリングにならぬよう、ドリブルしながら逃げる。

逃げまくる。

文月島アダルトチームの中の1人――文月島ギルド・ギルド長兼、超一流ハンター兼、超一流変態・ゲールから。

この世一、苦手な男から。

「こっち来るなあああああああっ！！」

「…はぁっ…はぁっ…！　…ま、待ってくれキラっ…！」

「待たぬのだあああああっ！！」

「…逃げないで私をその爪でっ…！　…そう、その爪で私を切り裂いてくれっ…！」

「ふにゃあああああん！　怖いのだあああああああっ！」

「…怖くないっ…怖くなどないよキラっ…！　…だからっ…さあっ…！　…私を血まみれにしてくれえぇぇぇっ…！」

「たっ、助けてリュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！！」

リュウの判断で選手交代。
キラがベンチに下がり、グレルがコートに出てきた。

「よっしゃあ！　オレの出番だなーっと♪」

「師匠」

「ん？　なんだ、リュウ」

「師匠はコートの端の方でゲールの相手お願いっす」

「おうっ、任せろいっ！」

とグレルがゲールを引っ張り、コートの端の方に行くと同時に試合再開。

「…お…おおお…！　…超一流ハンター・グレル…！　…今年の春の障害物マラソンのときのように、私に心地良いバックドロップを…！」

「またかあ？　仕方ねーな、おまえはよっと。そーれいっ♪」

ドカッ！！

「…ぐあぁ…！　…はぁっ…はぁっ…たまらんっ…！」

グレルがゲールの相手をしているうちに、試合はリュウとレオンを中心に得点を稼いでいく。

純猫モンスターのレオンはともかく、リュウの身体能力はやっぱりバケモノだ。

結果、４５０対２２で葉月島アダルトチームの勝ち。

４５０点のうち、３００点はリュウが稼いだもの。

リュウのファンから歓声が鳴り止まず、ミラからは鼻血が噴射。

ミラだけではなく、カレンとシュウの妹たちも黄色い声を上げっぱなしだった。

（や…やっぱり親父って、オレよりずっとかっこいいんだな…。…なぁーんて、ヘコんでる場合じゃないぜ、オレ！　バケモノとはいえ親父は人間、オレはハーフ！　ジャンプ力はオレの方があるんだぜ！　それを生かして派手に行くんだオレっ！　そしてっ……）

シュウは傍らにいたカレンに目を落とした。

（カレンのハートを鷲掴みにして一気に上空５０００mだぜっ！！）

第６１話　バスケットボール大会　～前編～（後書き）

な…なんとか更新っ…！
つ、つ、つ、次の更新も遅れますっ……ｏｒｚ

昨日の２１時３分頃メールくださった読者さまへ。

エロゲ化かよｗｗｗ

ていうか、ていうか、ていうか…！
じゅ、受験生でござりますたかっ！Σ（ ロ| lll）
そんな３０分もかけて感想くださっていたなんてっ…！　ありがとです（´；ω；`）ウッ
でもその時間をお勉強にっ！！

お勉強＞ごはん＞おやつ＞睡眠＞姫百合小説　ってな感じで頑張ってください！

姫百合も正直今相当忙しいけど、ぶっ倒れない程度に執筆頑張ります。いつもお気遣いありがとです＞＜

ああ、あと…。
姫百合の塔↑これだけで充分笑いました……ｗ

第６２話　バスケットボール大会　～後編～

毎年恒例秋のギルドイベント。
今年は『全島ギルド・バスケットボール大会ＩＮ葉月島』。
葉月島チームはジュニア・アダルト共に、１回戦を余裕で突破した。

次は準々決勝。
１回戦のときはボール運びとパスに専念してシュートは決められなかったシュウだが、次はがんがんシュートを決めて派手に行きたいところ。

（そしてカレンの目を引こうとしてるオレ、上空５０００ｍまで駆け上がろうと必死だぜ…）

次の対戦相手は水無月島ジュニアチーム。
試合１０分前、シュウ率いる葉月島ジュニアチームは、離れたところにいる水無月島ジュニアチームに顔を向けてぱちぱちと瞬きをした。

全員が人間の女だ。

「まあ、うちもオレとジュリ以外は女だけど…。うちはカレン以外ハーフだから勝てるよーなもんだし…」シュウが感心したように言う。「よく人間の女の子だけで１回戦突破したなあ」

「人間の女だけだからこそ、１回戦突破したんでしょ。あそこのチーム、１回戦は皐月島の男だけのチームと戦ったみたいだし、勝た

せてもらったっていうかさ」と、サラ。「兄貴、今回は思うように動けないんじゃないの」

「へ？」

とサラの顔を見たあと、再び水無月島ジュニアチームに顔を向けたシュウ。

水無月島ジュニアチームの女たちが、シュウに向かってにっこりと笑いながら声をそろえる。

「お手柔らかにお願いしまぁーす（ハート）」

「……は…、はぁーいっ……」

うわ、何この勝たせてやらなきゃいけねー雰囲気。

シュウの顔が引きつった。

シュウの顔を見て、サラが溜め息を吐く。

「やっぱりね。兄貴、今回はベンチね」

「ええっ！？　オレなしで大丈夫かよ！？」

「今回は兄貴いると邪魔になる」

「ひっ、ひでえっ…！　おいサラ――」

「んじゃ今回は」と、サラがシュウを無視してチームを見回す。「アタシとリン・ラン、それからジュリとリーナね」

「合点しょーちやで、サラちゃん！」と、リーナが張り切った声を出した。「めっさかわええうちとジュリちゃんで、相手の女どもにムネきゅんさせてボールうばいまくんで～っ！」

「頼んだよ、チビ2匹。子供作戦は男にも女にも有利。どうしても甘くなっちゃうからね。子供嫌いでも、これだけ観客いればその目が気になるもんだし」

「ああ、つまり…、オレの水無月島の女の子チームに対する心境と一緒にさせるってことだな？」と、シュウが苦笑した。「こう、手加減して勝たせてやらなきゃいけねーみたいな……」

「そゆこと。というわけで、ジュリとリーナが相手チームの動きを封じて、アタシとリン・ランで点取りね」

そういうことになった。

つまり次の準々決勝はシュウの出番なし。

サラの作戦通り水無月島ジュニアチームはジュリとリーナにボールをあげてばかりで思うように動くことはできず、サラとリン・ランで次から次へと得点を稼いでいく。

特にサラのプレイは観客の目を引きつける。

カレンの目も。

「きゃあああああっ！　サラ素敵いいいいいいいいっ！！」

目がハート状態になっているカレンを傍らに、シュウは苦笑する。

（つ…、次こそオレがカレンの目をハートにっ……！）

葉月島チームの準々決勝はジュニアが３４０対５２で、アダルトが５０３対４０で勝利した。
準々決勝で勝利したら、葉月島はジュニア・アダルト共に決勝まで試合はない。

昼食タイムに入り、シュウはカレンとキラ、ミラお手製の弁当を食べてパワーと気合をチャージ。
シュウは一番の好物であるハンバーグを一口食べてみて分かる。

「こっ、これはカレンのハンバーグっ…！」

「ええ、あたくしが作ったのですわ」とカレンがシュウに笑顔を向ける。「たくさん食べて、決勝戦がんばってね！」

「すーげー頑張っちゃう、オレ…！」

「ああ、頑張れよシュウ」と、リュウ。「俺、昼飯食ったあとアダルトの部の決勝戦来るまでいねーんだわ。だから妹たちに怪我させねーようにな」

「へ？　どこ行くわけ、親父？」

ぱちぱちと瞬きをして訊いたシュウ。

「どこって……何、おまえ気付かなかったわけ？」と、リュウが呆れたように溜め息を吐いた。「ここの近くにラブホあんだぜ？　こりゃ行かなきゃだぜ」

シュウの顔が引きつる。

「なっ、何で行かなきゃいけねーのか訊きてえっ！！」

「食後はセックス。これ常識。知らねーのかよ」

「しっ、知らねえええええええええええええっ！！」

シュウがいくら喚こうが、とにかくジュニアの部の決勝戦にはいないらしいリュウ。

シュウを嫌な動悸が襲う。

（親父がコート脇にいねえってことは、もしかしてオレ…、堂々殴られたり蹴られたりの可能性あり？　ていうかあるよな、ファウルにならねーんだし）

シュウは妹たちに顔を向けた。

（親父の娘であるオレの妹たちを殴る奴はなかなかいねーと思うが…、一応気をつけねーと……）

ジュニアの部決勝戦前。

コートの周りに多くの観客たちが集まる。

葉月島ジュニアチームは、準決勝を勝ち抜いた師走島ジュニアチームに顔を向けた。

師走島に多く生息するコウモリ型のモンスターが２匹と、そのハーフが２匹、あとは人間。

どういうスタメンで来るのかは分からないが、全員が男だということは見れば分かった。

師走島ジュニアチーム全体を見て、シュウは苦笑する。

（こりゃ強いぜ…。コウモリの羽がある時点で飛べるわけだし、皆ゴツイし……）

サラが言う。

「うーん…。コウモリの羽つきが４匹かあ。スタメンにいれてくるんだろうな」

「なあ、おまえたち」と、リンクが割り込んできた。「相手、気ぃつけや。おれジュニア・アダルト共に準決勝見とったけど、ファウルにならんとはいえ醜いプレイしよんで。師走島のジュニアもアダルトも。今回リュウの殺気作戦はないからな、ほんまに気ぃつけや」

シュウたちが承諾すると、リンクが下がって行った。

シュウが言う。

「スタメンにオレとサラは決定だとして、あとはリン・ランと、三つ子から１匹じゃねーの」

「いーや」とサラが首を横に振った。「兄貴とアタシ、双子から１匹、それからお姉ちゃんとカレンだね」

「ミラとカレンっ？」シュウの声が裏返った。「って、試合に出すつもりだったのかよサラ？」

「もちろん。ちゃんと選手だよ。お姉ちゃんとカレンの服をチアガールにさせたのは応援のためと、それからもう1つあるんだなー」

ふふん、と笑うサラ。

一体どんな作戦かと、シュウは眉を寄せた。

カレンとミラを見てみると、顔を見合わせて苦笑している。

しかも何だか恥ずかしそうだ。

（サラの奴、どんな作戦立てたんだ…？　カレンとミラなんて、ドリブルすら上手くできねーのに……）

サラがシュウに言う。

「今回はアタシがガードやるから、兄貴はシュート頼んだよ。がんがん行ってね」

「お、おう。まかせろ」

決勝戦のスタメンはシュウとサラ、カレン、ミラ、それからレナとなった。

決勝戦は前半３０分、後半３０分の計６０分。

ジャンプボールはシュウ。

相手と同時にジャンプしてボールに届くか寸前、早々に相手の膝蹴りを腹に食らい、シュウはボールを叩けず腹を抱えて地に足をつけた。

「いってえぇ…！」

サラが相手からボールを奪い、狼狽したように訊く。

「兄貴、大丈夫!?」

「お、おう、大丈夫だ。気にすんな」

「ったく、醜いプレイしてんじゃないよアンタたち!!」サラが相手チームに怒鳴りながら、ミラにパスした。「お姉ちゃん、頼んだよ!!」

「え、ええっ…？　ほ、本当にするのっ…!?」

「するの！」

「わ、分かったわよ、もうっ……」

頬を染めながら、寄ってきた相手選手の顔をじっと見つめたミラ。

（何すんだ…？）

シュウが首をかしげる中、ミラがジャンプしながらカレンにボールをパスした。

ミラが宙から地に降りるとき、ミラの前にいた相手選手の動きが止まる。

（お、おい、待て……）

シュウの動きも止まった。

（い…、今、スカートの下にアンダースコートじゃなくてパンツ見えなかったか…！？）

シュウがサラに目を向けると、サラがミラに向かって笑顔で親指を立てている。

（ま、ま、ま、まさか……！？）

シュウがサラの作戦を察してカレンに顔を向けたときにはもう遅い。

相手選手の目の前、カレンもミラのようにジャンプしながらレナにパス。

カレンが着地する際に一瞬めくれたミニスカート。

シュウは見た。

ばっちり見た。

（今日のカレン、白パンツっ……！）

と、鼻血吹きそうになっている場合ではない。

シュウは赤面しながらサラを見た。

「ちょっ、待てサラ！！　おまえ、なんっっって作戦立てやがる！！」

「えー？　ちょー有効じゃん。ホラ」

とサラがレナに顔を向け、シュウもそちらに顔を向けた。

レナが難なく5ポイントラインからシュートを決める。

「ね？」と笑い、サラが再びシュウの顔を見る。「相手、硬直して動けないでやんの～」

「オレまで硬直したわっ！！」

「しないでよ」

「するわっ！！」

「えー？　じゃあダメじゃん、この作戦」

「当たり前だっ！！　ええいっ、選手交代っ！！　カレンとミラは下がってろ！！」

ということで、カレンとミラは結局ベンチに。
代わりにリン・ランが出てきて試合を再開。

（気を取り直して行くぜぃっ！！）

と思って張り切ったシュウだったが、ボールを受け取るたびに殴られたり蹴られたり。

「あああっ！！」リン・ランが声を上げ、相手選手を指差して言う。
「いい加減にするのだ、おまえたちっ！！　どこまで兄上を傷つければ済むのだ！！」

「いい、リン・ラン。ファウルにならねーんだから仕方ねーよ」

「でっ、でも兄上っ…！」

「大丈夫、親父殴られるのに比べたらどうってことねーし。気にすんな」

そう言って笑ったシュウ。

「――うっ…！」

とサラの声が聞こえて振り返った。

サラの身体が飛んできて、慌てて受け止める。

「サラ！？」

「サラ姉上っ！？」

リン・ランが慌ててサラに駆け寄り、レナが相手選手を指差して声を上げる。

「あっ、あいつ今サラ姉ちゃんのこと殴ったあああああああ！！」

「――なっ…！」

ブチッ

とシュウの中で何かが切れた音。

「てっ…、てめえら、いいいいいいいいい加減にしやがれ…！」

相手選手を見るシュウの顔が怒りで引きつる。「女にまで手ぇ上げてんじゃねえぞゴルァァァァァ！！！」

びくついた相手選手たち。

ベンチから女たちやリンクの声が聞こえてくる。

「おっ、落ち着いてっ！」

「おっ、落ち着くんやっ…！！」

「落ち着けねえっ！！」

とベンチに振り返ったシュウも、相手選手と同様にびくついた。
顔面蒼白する。

女たちやリンクが落ち着かせようとしているのはシュウでない。
そして相手選手が怯えた相手もシュウではない。

それは、

（れっ…、レオ兄怖えぇぇっ……！！）

サラが殴られたことによりブチ切れたレオンだった。

腕組みして試合を立ちながら見ていたレオン。
いつもは優しい赤い瞳から放たれる、リュウにも劣らない殺気。
いつもの穏やかな表情からは想像もできない恐ろしい形相。
逆立っている柔らかいはずの青い髪。
爪がぎりぎりと腕に食い込んで血が流れ出ている。

（れっ、レオ兄が切れたのって初めて見たよオレ……！！）

ミラに慌てて治癒魔法を掛けられながら、レオンがシュウを見て言う。

「シュウ」

「はっ、はいレオ兄様っ！？」

「ぼうっとしているんじゃない。早くサラに治癒魔法」

「はっ、はいただいまっ！！」

シュウは慌ててサラが殴られた頬に治癒魔法をかけた。
王子を相手にしたときよりも畏まってしまう。

（怖えぇ…！　レオ兄って切れるとまじ怖えぇぇぇぇ……！！）

そのことを肝に銘じながら、シュウは試合を再開した。

レオンの殺気により、すっかり畏縮してしまった師走島ジュニアチームの選手たち。
ボールはシュウを中心に集められ、試合はシュウの独壇場に。

5ポイントラインから飛んで宙返り1回転付きのダンクシュートや、センターラインからのロングシュートなど派手なプレイで観客を目を釘付けにする。

ばっちりカレンの目も。

「きゃあああああっ！　シュウかっこいいのですわあああああああっ！！」

「イエイっ！」

とカレンに親指を立てながら、シュウは心の中でにやける。

（ああ…、オレ今、上空５０００ｍまで駆け上がってる感いっぱいだぜ…！）

試合は５２０対６３で、葉月島ジュニアチームが優勝した。

ベンチに戻ってカレンや妹たち、観客と一緒に舞い上がりながら、シュウはレオンに顔を向けた。

「レオ兄、ありが――」

ありがとう、おかげでオレ活躍で出来ちゃったぜ！

と言おうとしたシュウは言葉を切った。

レオンがサラと話したあと、ようやく戻ってきたリュウとキラのところへと歩いていく。

（レオ兄、親父と母さんに何話してんだろ？）

との疑問は、リュウの変化した表情をすぐ見ればわかった。

（ああ…、言っちゃったのね、サラ殴られたこと……）

シュウは苦笑した。

まだ落ち着いていないレオンに加え、ブチ切れたリュウ。

次のアダルトの部の決勝戦も師走島が相手。

男のコウモリ型のモンスター５匹と戦うようだ。

リュウやレオンが相手を殴ったり蹴ったりなど醜いプレイに行くことはないだろうが、シュウは何だか血を見るような気がした。

（そしてそんなオレの予想、的中だぜ）

ダンクに行こうとしたリュウを止めようと、3匹で殴りかかろうとした相手選手たちが逆にリュウに吹っ飛ばされ、ゴール下で顔面から血を流して倒れる。

同様にレオンにも吹っ飛ばされ、レオンの足元に相手選手たちがうずくまる。

（あー、怖っ…！　…っていうかよー）

シュウの顔が引きつる。

（オレよりすげープレイをしないでくれっ！！！）

ジュニアの部決勝戦のときに、5ポイントラインから宙返り1回転付きでダンクシュートを決めたシュウだったが、

「にゃあああああんっ♪」

ドカンッ！！

と、キラに5ポイントラインから宙返り7回転付きでダンクシュートを決められ…。

ジュニアの部決勝戦のときに、センターラインからロングシュートを決めたシュウだったが、

「いよっと」

と、リュウに相手ゴール下から軽々と超ロングシュートを決められ…。

（観客もカレンも、オレのときより騒いでんじゃねーかっ！！　うううっ…、なんて可哀相なんだ主人公（オレ）っ……！）

沸いている周りとは裏腹に、重く沈んでいるシュウ。

アダルトの部は、７５０対１０で葉月島チームが優勝した。

表彰台の一番高いところに上るシュウから、少し離れたところにある表彰台の一番高いところ。

そこにはリュウの姿。

（親父と並ぶと全くかっこよくねーよ、オレ……）

笑うことなく優勝カップと賞金を受け取り、シュウは表彰台から降りた。

これにて『全島ギルド・バスケットボール大会ＩＮ葉月島』は終了。

シュウのところへと妹たちが駆け寄ってきて、優勝カップや賞金を手にしてはしゃぐ。

暗いシュウの顔を覗き込んで、カレンが首をかしげた。

「どうかしたのかしら？　優勝したのに嬉しそうじゃないのね」

「優勝したのは嬉しいけどよ…、オレかっこわりーんだもん」

「どうしてっ？」

と、カレンが驚いたように訊いた。

「どうしてって、親父や母さんたちの方がかっこ良かっただろ」

「そりゃ、リュウさまやキラさまはとても格好良かったけれど…」

カレンが笑って言う。「シュウも、とっても格好良かったのですわ！」

「え…」

オイ、まじか…！

シュウの頬が染まった。

「カ、カレン」

「何かしら？」

「オレ今、上空何mっ…！？」

「えっ…？　えと……」

カレンの頬も染まる。

カレンの返答を待ってシュウがごくりと唾を飲み込んだとき、リ

ン・ランが割り込んできた。

「兄上～っ、今日とってもかっこよかったのだっ♪」

「兄上～っ、今日とっても素敵でしたなのだっ♪」

「早く帰ろうなのだっ♪」

「わたしたちと帰ろうなのだっ♪」

リン・ラン両腕を力いっぱい引かれ、帰路へと着くシュウ。

「ちょ、ちょっと待っ……！」

ずるずると引っ張られながら、シュウは後方をサラと共に歩いているカレンの顔を見た。

（さ、さっきのカレンの反応…！）

もう一度ごくりと唾を飲み込む。

（オレもしかして、上空５０００ｍ一歩手前……！？）

第63話　カレンへの誕生日プレゼント

毎年恒例秋のギルドイベントのあとは、カレンの誕生日がやって来る。

見事バスケットボール大会で葉月島がジュニア・アダルト共に優勝を掻っ攫ってから一週間。

カレンの誕生日パーティーまではあと3日。

仕事の休憩中、シュウはカレンに訊いた。

「なあ、カレン。誕生日プレゼント何がいい？」

家にいるときに訊こうとしたのだが、ここ最近はカレンと2人（1人と1匹）で話しているとほとんどと言って良いほどリン・ランが割り込んでくるのだ。

その度にカレンもリン・ランに気を遣っているらしく、シュウの前から離れていってしまう。

よって、カレンと2人だけで落ち着いて会話ができるのは、仕事と仕事の間の短い休憩中だけだった。

カレンが答える。

「何でもよろしくてよ」

「何でも？」

「ええ」

「ふーん…」

ルビーのネックレスがシュウの頭の中に思い浮かんだ。

(王子からもらったルビーのネックレスより、オレの方を愛用してくれたりして…)

と密かにシュウは期待する。

「なあ、カレン」

「何かしら?」

「おまえ、明日と明後日は仕事着いてこなくていいから」

「どうしてかしら?」

「オレの都合」

「って、何かしら?」

「明日の仕事の合間におまえのプレゼントを買いに行って、明後日の仕事の合間におまえの誕生日パーティーのご馳走を作るための最高級食材を調達に行くから。そんなとこ見ちまったら、誕生日のときのワクワクドキドキが半減するだろ」

カレンが苦笑した。

「別にいつも通りの食材でお料理してくれればよろしくてよ?」

「今年のおまえの誕生日は盛大に祝うって約束しただろ。覚えてねーのかよ」

「覚えてるのですわ、もちろん。ユナちゃんマナちゃんレナちゃんの誕生日のときに約束してくれたのよね」

「ああ。盛大って言っても、いい材料を使っておまえの好きな料理作ったり、部屋の飾りつけ派手にすることくらいしかできねーけど…」

「充分なのですわ。3日後のあたくしの誕生日会、とっても楽しみにして待っているわね」

とカレンが、シュウに笑顔を向ける。

（うっ、可愛い…）

思わず頬を染めてしまいながら、シュウは訊いた。

「な…、なあ、カレン？　おまえの誕生日の日、訊いていい？」

「何をかしら？」

「オレ今、上空何mにいるのか。…って、今訊いちまってるか、ごめんっ…」

と、シュウはカレンから顔を逸らす。

「そうね…、その答えはあたくしの誕生日の日に教えるわ。楽しみに待っていてね」

そう言ってカレンが頬を染めた。

その日の夜、シュウはこっそりとサラの部屋を訪ねた。
シュウが言った言葉を、サラが鸚鵡返しに訊く。

「カレンの誕生日にあげるルビーのネックレスは、どういうものがいいかって？」

「う、うん」とシュウは頷きながら、戸口の方を気にして小声になった。「も、もう少し小さな声で頼むわ、サラっ…！　カレンにはまだ秘密にしてえし、最近のリン・ランに聞かれたら面倒なことになるっ…！」

「ああ、たしかに最近のリン・ランはピリピリしてるしね。兄貴がカレンのこと好きだって気付いて」

「お、おう。やっぱり完璧に気付かれてるっぽいからな」シュウは苦笑したあと、話を戻した。「んで、どんなのがいいと思う？」

「うーん。そうだなあ」と、サラが数秒考えた。「ルビーのネックレスをプレゼントしたいなんて、王子に対抗してんでしょ？」

「え？　…う、うん、なんていうか、まあ…うん。カレン、王子からのプレゼント喜んでたからさ…」

「あれはさ、王子から云々じゃなくて、カレンが好きなルビーだっ

たからなんだよ。ただそれだけ。どんなに安物でも、兄貴からのプレゼントならカレンは喜ぶから安心しなよ」

「それって、オレ期待していいんすか…！？」とシュウは驚愕してしまいながら訊く。「今日の昼間もカレンがオレのこと好きかなーなんて、オレがすーげー自惚れちゃうよーな態度見せてくれたんだけど、オレ期待していいんすか……！？」

サラが呆れたように溜め息を吐いた。

「もう少し自信持ちなっての」

「…お…おおおっ…！」シュウの瞳が輝く。「オレ、自惚れてもいいレベルに達してるのかオイっ……！」

「んで、カレンへのプレゼントのことなんだけど」

「おうっ？」

「王子からもらったやつみたいに、やたらゴージャスで煌びやかなのもいいけどさ…。アタシは、普段使いできるものがいいと思うけど？」

「…な…なるほどっ…！　王子からもらったやつは、パーティーとか舞踏会とかそういうときしか使えなさそうなゴージャスさだったしなっ…！」

「うん。それでもって、可愛いもの。カレンは可愛いもの大好きだからさ。アクセならハートやフラワーモチーフが好きだよ」

「おお、そうか！　サンキュ、サラ！　オレ明日、カレンが好きでなお且つカレンに似合うもの探してくる！」

と戸口へと向かうシュウに、サラが言う。

「アタシも付き合うよ、兄貴」

「え」と、シュウは再びサラに振り返った。「そりゃすげー助かるけど、明日の仕事放ったらかしにしていいのかよ？」

「レオ兄がそんなことで怒ると思う？」

「怒らねーな、うん。バスケ大会のときのレオ兄はスーゲエェェェ怖かったけど…。おまえ、レオ兄に愛されてるなあ」

「まーねっ！」そう言ってサラが嬉しそうに笑ったあと、シュウのところへと歩いてきた。「宝石店に行くならさ、親父が詳しいから親父に連れて行ってもらうのがいいと思うよ？」

「親父が詳しい？」

とシュウは鸚鵡返しに訊いたあと、すぐに納得した。

キラは子供のおもちゃから宝石まで、少しでも気に入ったものがあればすぐにリュウに買ってもらう。

それが誕生日やクリスマスのような、イベントの近い日でなくても。

実はその合計の数や値段、あの王子のペットとするしかなかったマリア以上。

よってリュウは子供のおもちゃから宝石まで、専門の店はとにか

く詳しい。
サラが頼んだこともあって、明日リュウがシュウをおススメの宝石専門店に連れて行ってくれることになった。

翌日。
リュウに連れて来てもらった宝石専門店の前、シュウの顔が引きつる。

「うっわあぁぁ…。外観からして、スゲエェェ高そう……」

「そりゃ安くはないはな」と、何ら驚いた様子もなくサラ。「親父がママに宝石をプレゼントしたいときに来るお店だっていうし」

「ああ、安くはねーな」と、リュウ。「ここの宝石は全てが最高品質だからな。ああ、そういや王子も気に入ってる店だったな」

「え」

それってもしかして、王子がカレンにプレゼントしたルビーのネックレスもここで買った可能性もアリってこと?

とシュウがさらに顔を引きつらせてしまう中、リュウとサラがさっさと店内に入っていく。

「さあああて、レッツゴオォォォ！　ねね、親父っ?」

「なんだ、サラ」

「ほしいものあったら買ってね♪」

「おう。ほしいものあったら買っていいぞー」

と、あっさり言うリュウ。

（な、なんだ…、もしかして思ったより大したことないのかもっ…）

なんて安堵しながらシュウは店内に入った。

が、すぐに目に飛び込んできた宝石を見て目玉が飛び出そうになる。

（たっっっっっけ！！！）

すっかり常連らしいリュウに店員に近寄って接客をする中、シュウは店内を回って驚愕せずにはいられない。

（おっ、親父、いっつもこんなところで母さんにプレゼント買ってんのかよ…！？　さ、さすが王子様から依頼を受けるたびに1億もらってるだけあるぜっ…！　普段の仕事も、1本1本の報酬と数を合わせればオレの１０倍以上稼いでるだろうしっ……！！）

リュウやサラはのんびりと落ち着いた様子で店内を回るが、シュウは商品から商品へと目を移すたびに顔に動揺が表れてしまう。

そんなシュウを見て、1人の若い女性店員がおかしそうに笑いながら寄ってきて訊いた。

「フィアンセへのプレゼントでございますか？」

「えっ!?　フィアンセ!?」シュウの声が裏返った。「とっ、とんでもネェェでございます!　まっ、まだ全然そんなレベルじゃっ…!　言うならば、ガールフレンドってレベルでっ……!」

また女性店員がおかしそうに笑った。

「どのようなものをお探しですか、シュウ様?」

「え、えと……」

何で名前を知られているのかと一瞬考えたシュウだったが、そんなのはこのリュウと同じ顔により愚問である。

女性店員の声が聞こえたのか、サラが駆け寄ってきて言った。

「ルビーで、普段使いできそうな感じの可愛いネックレスがほしいんだけど」

サラの言葉を女性店員がうんうんと頷きながら聞いたあと、シュウとサラをとあるショーケースの前へと案内して言った。

「このネックレスなんていかがでございましょう?」

「おお」

と、シュウとサラは同時に声を高くした。

ハート型にカットされたルビーがついたそのネックレスは、カレンが気に入ること間違いなし。

それに、

「カレンに似合いそうだな、これ」

「だね」とサラが同意して頷いた。「赤に見えるくらいの綺麗な濃いピンクだなあ。しかもピンクダイヤもついてキラキラしてるし、これでカレンの瞳もキラキラだわ」

「邪魔にならない大きさだし、普段使いできるよな。よし、これに――」

「兄貴」

「ん？」

女性店員に顔を向きかけたシュウは、サラに顔を向きなおした。サラがルビーのネックレスの値段のところを見ながら訊く。

「予算いくらで来たわけ？」

「えと、この間の王子からの報酬とバスケ大会のときの賞金があるから太っ腹に――」

予算２００万！

と言おうとしながら、ネックレスの値段に目を落としたシュウ。

「たっ、足りねえええええええっ！！」愕然としてショーケースに張り付く。「オイおまえ、なあああんでそんなに高いんだよ！？　え！？　怖がらずにお兄さんに話してごらん！！　さんハイっ！！」

「ちょ…、兄貴っ」サラは赤面しながら、シュウをショーケースからはがした。「石に話しかけないでよ、恥ずかしいっ…！　天然ルビーに天然ピンクダイヤ、あとブランド料で高いんでしょっ…！」

「何騒いでんだ、シュウ。静かにしろ」

と、リュウが顔をしかめながらやってきた。

「おっ、親父っ…！」シュウは小声になってリュウに顔を近づけた。「よっ、予算足りねえええええええんだけどっ！！」

「どれ」

「これこれっ」

とシュウがルビーのネックレスを指差すと、リュウがそちらに顔を向けた。

「ふーん。いくら足りねーの」

「２００万も！」

「それくらい俺が出してやる」

「えっ！？　親父に半分も出してもらったら意味が――」

「おまえまた俺に借金だな」

「借金かよっ！」

「当然だろうが。甘ったれんな。利子はトイチな」

「ひっ、ひでえええええっ！！」

「嫌なら諦めて別のもんにしろ」

「うっ…！」

シュウはネックレスに顔を向けた。

（た…高い…。でもカレンに似合うよな、絶対。それに……）

シュウの頭の中に、カレンの喜ぶ顔が浮かぶ。

数秒考えたのち、シュウは決めた。

（やっぱりこれにしよう）

シュウがリュウに振り返ると、サラがリュウにおねだり中。

「親父っ、親父っ！　アタシこのネックレスほしいなっ♪」

「どれ」

「これこれっ♪　２００万だって」

「おー、買っていいぞー」

シュウの顔が引きつる。

「オイ親父…！？」

「何だ、シュウ」

「ちょっと娘に甘すぎるんじゃねえかな…！？　サラだってハンターやってんだからその２００万を借金させろよ、え…！？」

「ばっ、おま……！？」リュウの顔が驚愕する。「むっ、娘に借金させろだと…！？　しかも２００万も…！？　なっ、何て鬼畜なこと言いやがるんだおまえ…！！　まっ、まじ信じらんねえっ…！！　おまえ誰に似たの……！？」

「あっ、あんただろうがっ！！」

驚愕のあまり、思わず大声をあげてしまったシュウ。
気を落ち着かせ、リュウをルビーのネックレスの前まで引っ張って行って言う。

「オレ、やっぱりこれをカレンの誕生日プレゼントにする」

「俺に借金ってことでいいんだな」

「ああ。オレだって一流ハンターなんだから、２００万なんてすぐ返せる。…でもオレの仕事増やしてね、再来月にはクリスマスだから金溜めねーと」

「いーけどぶっ倒れんなよ」

「おう」

リュウがルビーのネックレスと、サラがほしいと言ったネックレ

ス、それからキラへの土産だという桁違いのネックレスをカードで一括払いで買った。

店員がラッピングを済ませている間、シュウがリュウに２００万ゴールドを渡しながら言う。

「なあ、親父」

「何だ」

「オレからプレゼントもらったとき、カレンどういう反応するかな」

リュウはシュウの顔を見た。

期待しているけど、少し不安。

そんな目をしている。

「んなの、喜ぶに決まってんだろ」

そう言ってリュウが呆れたように溜め息を吐くと、シュウから安堵の笑みが零れた。

再びシュウの頭の中に浮かぶ、カレンの喜んだ顔。

シュウは頬を染めて飛び跳ねた。

「早く来い来い、カレンの誕生日いいいいいいいいいいっ！！」

第６４話　カレンの誕生日

カレン１６歳の誕生日まであと１０秒。
シュウの心の中でカウントダウン開始。
９、
８、
シュウは自分の部屋から出た。
７、
６、
自分の向かいの部屋――カレンの部屋の前に辿り着く。
５、
４、
カレンの部屋のドアノブを握り、
３、
２、
１…。

シュウはドアを開けた。

「カレン、誕生日おめで――」

「きゃあああああっ！！」

「ぶっ！？　ご、ごめんっ！！」

シュウは慌ててカレンの部屋に入り、カレンに背を向ける。

誰よりも真っ先に「おめでとう」を言おうと思いカレンの部屋にやってきたシュウだったが、カレンはちょうど風呂上りでバスタオル一枚という姿だった。

「た、誕生日おめでとうっ…」

「あ、ありがとうっ。それを言いにきてくれたのかしら？」

「お、おう。あ、あと、プレゼント渡そうと思って…」

「えっ？　もうっ？」

カレンは少し驚いた。

誕生日パーティーのときに渡されるものだと思っていたから。

「う、うん。パーティーのとき渡そうと思ったんだけど、なんか皆の前で渡すの恥ずかしくてさっ…。だ、だから今いい？」

「…わ、わかったわっ、ちょっと待ってっ！」

カレンは急いで寝巻きを身につけた。

手櫛で手早く髪を整えてから言う。

「よ、よろしくてよっ？」

シュウは振り返った。

カレンから目を逸らす。

「…ま…前から思ってたけど、おまえの寝巻きってバスタオル一枚とほとんど変わらなくねえ？」

「そ、そうかしらっ？」

「その肩紐なけりゃ胸からバスタオル一枚巻いただけなよーなもんじゃんっ…」

「…な、なんか困るの？」

「……。よ…」

「よ？」

「……よ、欲情する」

「……」

カレン、赤面。

「…ご、ごめん」とシュウも赤面しながら咳払いをしたあと、手に持っていたプレゼントをカレンに差し出した。「は、はい、これ。プレゼント」

「ありがとうっ…！」

カレンはわくわくとしながらそれを受け取った。

長方形の箱の形から察する。

「ネックレスかしら？」

「う、うん」

「開けてみてもよろしいかしらっ？」

「お、おうっ」

カレンが椅子に座り、テーブルにプレゼントの箱を置いた。

プレゼントの包みを開けるカレンを、シュウはどきどきとしながら見つめる。

（どんな反応するかな）

カレンがルビーの入ったネックレスのケースの蓋を開けた。

その瞬間、カレンの頬が染まった。

「わあ…！　可愛いっ…！」

顔中から零れた笑顔は、シュウが知っている中で一番明るく輝いて見えた。

いや、一番明るく輝いた。

（――自惚れじゃねえ）

増した動悸を感じながら、シュウは確信する。

（オレ、上空５０００ｍにいる）

カレンが立ち上がり、はしゃいだ様子でシュウのところへとやってきてネックレスを差し出した。

「シュウ、シュウ、つけてほしいのですわっ」

「こ、これから寝るのに？」

「よろしいのですわっ」

カレンがシュウに背を向け、後ろ髪を手で持ち上げてうなじを見せる。

シュウがネックレスをつけてやると、カレンが全身鏡の前に駆けて行った。

鏡に映る自分を見たあと、くるりとシュウに振り返る。

「ねえ、シュウっ？　似合うかしらっ？」

「おう、すげー似合う…、想像通り」

カレンが再び頬を染めて笑った。

「ありがとう、シュウ。とっても嬉しいのですわ」

「おう」

シュウは微笑んだ。

リュウに借金をしてまで買って良かったと思う。

お返しにもらったカレンの笑顔は、シュウにとって何よりも求めるもの。

いつも傍にあってほしいと願うもの。

あげたネックレスの値段なんか比べ物にならないほど、高価なもの。

「カレン」

「何かしら？」

「充分知ってるだろうけど、オレおまえのこと好きだよ。おまえの中でも、オレ今――」

上空５０００ｍにいるよな？

と確信しながら訊こうとしたシュウの後頭部に、勢い良く開かれたドアがぶつかる。

ゴスッ！！

「――ゴフッ！！」

「ふっ、ふにゃあああっ！？」と狼狽した顔を見せたのは、リン・ランだった。「ごっ、ごめんなさいなのだ兄上えええええっ！　まっ、まさかドアの後ろにいるとは思わなかったのだあああああ

っ！」

「お、お、おう、全然痛くねえから気にすんなっ…！」

とシュウは苦笑しながら言った。

本当は物凄く痛かったが。

首につけたネックレスやそれが入っていた箱、包装紙を隠すようにしてカレンがリン・ランに背を向けて立つ。

シュウもリン・ランの目にそれらが映らないように、リン・ランの頭を自分の胸元に抱いた。

「さ、さぁーて、寝るぞおまえらーっ！　おやすみ、カレン！」

とシュウはリン・ランと共にカレンの部屋から出て、向かいの自分の部屋へと戻った。

そこでシュウがリン・ランの頭から手を離すと、リン・ランがむくれた顔をしてシュウの顔を見上げた。

「兄上っ！」

「な、何だ、リン・ラン」

「わたしたち、聞いていたのだ！」

「な、何をだ？」

「兄上、やっぱりカレンちゃんのことが好きなのではないか！」

「えっ！？」

シュウの声が裏返った。
咄嗟に否定しようと思ったシュウだったが考え直す。
（リン・ランにいつまでもバレずに黙っていられるわけねえよな…。もう本当のこと言わねえと……）
シュウが覚悟を決めて口を開こうとしたとき、リン・ランが先に口を開いた。
「わたしたち、認めないのだ！」
「え？」
「兄上がカレンちゃんのこと好きだなんて、絶対に認めないのだ！」
「い、いや、おまえたちオレがまだ何も言ってねえにも関わらず、ついさっき認めて――」
「認めないのだっ！」シュウの言葉を遮ったリン・ランの瞳にじわじわと涙が込み上げる。「兄上は、わたしたち以外の女なんて好きにならないのだ！　認めないのだ！　絶対に認めないのだ…！　認めないのだあっ……！」
リン・ランがシュウの胸にしがみ付き、わんわんと泣き出した。
シュウは苦笑するしかない。
（んなこと言われたってオレ、もうノンストップよ……？）

翌日。
カレンの誕生日当日。

午前中に届けられた最高級食材らを使って、シュウは昼下がりからカレンの好きな料理を作り始めた。
誕生日パーティーの準備ができるまで、カレンはリンクとミーナ、リーナ宅にいる。
パーティーの準備ができたらシュウがカレンに電話をし、そしてカレンはミーナの瞬間移動でやってくる。

（カレン、喜んでくれるかな）

そんなことを期待しながら、シュウは料理を作った。

誕生日パーティー全ての準備ができあがったのはＰＭ５時。
シュウがカレンに電話をしてそれを知らせると、カレンはすぐにミーナと共に瞬間移動でリビングに現れた。

「ハッピーバスデ～～～～イっ！！」

リビングにやってきた瞬間にそんな声たちと大きな音のクラッカーに迎えられ、思わず驚いてしまったカレン。
だけどすぐに笑顔が溢れた。

「ありがとうっ！」

カレンの笑顔を見て微笑んだシュウ。
そのあと、カレンの胸元を見て気付いた。

（オレがプレゼントしたネックレスしてるっ…）

シュウがカレンをじっと見つめていると、カレンがシュウを見て微笑んだ。

頬を染めながら。

動悸を感じながら、シュウは改めて確信する。

（オレ上空５０００ｍにいる）

シュウとカレン。

お互いを見つめる視界が、リン・ランにより遮られる。

「パーティー始めましょうなのだっ♪」

そう言いながら、リン・ランがガラステーブルの前にシュウを挟んで座った。

ランの右隣にカレン、カレンの右隣にはサラが座った。

シュウの背にあるソファーに腰掛けたリュウが、グラスに注いだウィスキーを１口飲んでから口を開く。

「んじゃあ、今年から仲間入りしたカレンの誕生日パーティー始めんぞー。プレゼント渡せー」

シュウを除く一同がカレンに誕生日プレゼントを渡した。

「よし、食え」

とのリュウの命令で、一同は好きな飲み物片手にシュウがカレンのために作った料理を口にする。
いつもとは一味も二味も違うその料理に、一同が絶賛する。

シュウはカレンの反応を待った。
それぞれ一口ずつ料理を口にしたあと、カレンがシュウに笑顔を向ける。

「とってもおいしいのですわ、シュウ！」

「…おうっ」

カレンの笑顔に、シュウからも笑顔が溢れる。

サラがシュウとカレンの顔を交互に見たあと、にやにやと笑いながらカレンに訊く。

「カレン、今日はずいぶんと可愛いネックレスしてんねえ？　それどーしったの～っ？」

「えっ…！？」と、頬を染めたカレン。「たっ…、大切な人からもらったのですわっ」

そう言って笑った。

リン・ランがカレンのネックレスを凝視する傍ら、シュウは動悸が止まない。

（やばい…。嬉しすぎる……）

シュウの首に、リュウの腕が回った。

「――グエっ！？」

とシュウはそのまま引っ張られ、リュウの腕に掴まりながら背後のソファーに腰掛けた。

咳き込んでいるシュウに、リュウが耳打ちをする。

「ゴム何個いる？」

「はっ！？」

と声を裏返してリュウの顔を見たシュウ。

リュウが続ける。

「今夜こそカレンのこと抱くんだろ？」

「えっ！？」

再び声が裏返ったシュウ。

赤面してしまいながら、声を小さくして言った。

「そっ、そりゃカレンが好きだって気付いてから、ずっとカレンのこと抱きたくて抱きたくて仕方なかったけど…！　きょ、今日は考えてなかったよオレっ…！」

「何で」

「何でって、んないきなり襲ったら抵抗されるに決まってんだろっ…！」

「俺だったら、『俺のこと好きだったら抵抗すんな』って言って抵抗させねーけど？」

「なっ、なんって俺様なんだよ親父っ…！」

「それくらい強引に行けよ、おまえも。なぁに、大丈夫だ。嫌よ嫌よも好きのうちってな」

「……親父ってやっぱり見た目老けなくてもオッサンなん――」

ゴスッ！！

とシュウの言葉を拳で遮ったあと、リュウは続けた。

「それに、本気で嫌なときの抵抗は分かるもんだ。カレンが本気で嫌がってる様だったら止めてやれ。そうでなかったら今夜はカレンと朝まで――」

「そっ、そんなに出来ねえよっ…！」

「ハァ？　情けねーな、おまえ」

「あんたみてえなバケモノと一緒にすんなっ！！」

シュウとリュウの傍ら。

サラもカレンに耳打ちする。

「心の準備はいーい？　カーレンっ♪」

「えっ！？」

とカレンが赤面しながらサラの顔を見た。
小声になって訊く。

「なっ、何のことかしらっ…！？」

「何って、もちろん今夜兄貴に抱かれる心の準備」

「えぇっ…！？」

「あとで兄貴に好きだって伝えるんでしょ？」

「…え、ええっ…、伝えるのですわっ…！」

「大喜びした兄貴に求められる可能性ナイとは言えないと思うなー」

「えええっ…！？　やだっ、ちょっ……！」

あたふたとするカレン。
耳まで真っ赤になりながら、サラにしがみ付いた。

「どっ、どうしましょうっ、サラっ…！　そっ、そんな急にっ…！
あああっ、どうしましょうっ！」

「大丈夫だよ、カレン。兄貴はきっと優しくしてくれるか――」

「勝負下着っ！」

「そっちかーい」

誕生日パーティーが終わったのは２３時過ぎ。
それぞれが自分の部屋に戻ったり、客間に向かったり。

カレンは自分の部屋に戻ると、鏡の前に立った。
胸元に輝いているルビーのネックレスを見つめる。

（シュウがあたくしのために選んでくれたネックレス。シュウがあたくしのために作ってくれたお料理。とても嬉しくて楽しい誕生日だったわ。……今まで生きてきた中で、１番）

どきどきとカレンの胸が動悸をあげる。

（シュウ、きっとバスタイムを終えたらあたくしのお部屋に来るわよね。そうしたらあたくしはシュウに好きだということを伝えて…。今夜はもしかしたら、あたくしシュウに……）

顔中が熱くなっていくのを感じながら、カレンは宝石箱が置いてある棚の前まで歩いて行った。
シュウからもらったルビーのネックレスを外し、それを宝石箱の中にしまう。
１番の宝物を、大切に大切にしまう。

（さてっ…、あたくしも覚悟を決めてバスタイムを終えましょうっ…！）

とカレンが部屋に備え付けてあるバスルームに向かおうとしたと

きのこと。

部屋のドアがノックされた。

シュウかと思って一瞬どきっとしたカレン。

でも、姿を見せたのはリンとランだった。

バスタイムを終え、シュウはカレンの部屋へと向かった。

（オレは上空５０００ｍまで来たって、言ってくれるんだろうな）

そう期待に胸を膨らませながら、カレンの部屋の部屋のドアをノックする。

コンコンコン、と3回。

でも、カレンの返事がない。

シュウは首をかしげた。

「おい、カレン？」

ドアノブに手を当ててみると、鍵が閉まっているようでドアは開かない。

シュウはもう一度ドアをノックした。

それから少しして、カレンの声が聞こえてきた。

「…ごめんなさい」

その声はとても小さくて聞き取れず、シュウはドアに耳を近づける。

「何だって？　カレン」

「…ごめんなさい、シュウ。あたくし、はしゃぎすぎちゃったみたいで、もう眠くって……」

「うおーいっ…」シュウは苦笑した。「寝てたのかようっ……！」

「…ご、ごめんなさい」

「…い、いや、いいよ、うん。今夜はゆっくり寝てくれ。おやすみ」

シュウはがっくりと肩を落とし、自分の部屋へと戻っていった。

カレンの耳に、シュウの部屋のドアが閉まる音が聞こえてくる。

カレンはベッドに腰掛けていた。

本当は寝てなんかいない。

眠くなんかない。

次から次へと零れてくる涙を小さな手で拭いながら、声を殺して泣いていた。

拭いきれない涙がカレンの膝に置かれた宝石箱の上に落ちる。

カレンはその中に、シュウからもらったネックレスを大切にしまった。

1番の宝物を、大切に大切にしまった。

でもそれは、そこからなくなってしまっていた。

第６５話　奪われた宝物

カレンの誕生日パーティーが終わったあとのこと。
リン・ランがカレンの部屋を訪ねた。

バスルームへと向かおうとしていたカレンは、身体の向きを変えてリン・ランの方を見た。

「リンちゃんランちゃん、どうかしたのかしら？」

「カレンちゃんっ…」

と声をそろえて戸惑ったような顔をしたあと、リン・ランがカレンに手を差し出した。

「さ、さっきしてたネックレス見せてなのだ」

「え？　…ああ、ルビーのネックレスねっ…！」

カレンはそれをしまったばかりの宝石箱の蓋に手をかけた。
中からそれを取り出し、リン・ランに渡す。

それを手にしたリン・ランがあまり上手く作れていない笑顔で言う。

「とっても可愛いのだ」

「あ、ありがとう」

「これ、どうしたのだ？」

「えっ…？　えと…」

カレンは困惑した。

シュウからのプレゼントだと言ったら、極度のブラコンであるリン・ランはどうするだろう。

とりあえず分かったことは、このカレンにとって良くない反応をするだろうということ。

カレンの様子を見てリン・ランが訊く。

「兄上からもらったのだな？」

「そのっ……」

カレンは返答に戸惑ったのち、ぎこちなく頷いた。

「そうか、兄上から…」リン・ランがネックレスに目を落とす。「カレンちゃん…、これ、わたしたちにちょうだいなのだ」

「えっ…！？」カレンは驚いてリン・ランの顔を見た。「だっ、ダメよ、それはダメなのですわっ……！」

「それは何故なのだ？」

とリン・ランがカレンの顔を見た。

その瞳には涙が浮かんでいる。

「カレンちゃん、兄上のこと好きなのか？　わたしたちから、兄上

を奪うのか？」

「えっ…？」

「兄上のこと、好きにならないでなのだっ…！　兄上のこと、わたしたちから奪わないでなのだっ…！」そう言って、リン・ランが泣き出した。「兄上はわたしたちのものなのだっ！　兄上は誰にもあげないのだっ！　絶対に絶対にあげないのだあっ…！」

しゃくり上げて泣くリン・ランに、カレンの胸が痛んだ。

ずきずきと痛んで、思ってもいない言葉が出る。

「…な、何を言っているのかしら、リンちゃんランちゃん？　あたくし、別にシュウのこと好きじゃなくってよっ？」

「えっ…？」

リン・ランがカレンの顔を見た。

カレンは笑顔を作って続ける。

「ほら、そのネックレス、ルビーでしょう？　あたくしルビーが好きなものだから、さっきはついダメだなんて言っちゃって…、ご、ごめんねっ？」

「…じゃ、じゃあこれ」と、リン・ランが手の中のネックレスを見たあと、カレンの顔を見た。「わたしたちにくれるかっ？」

あげたくない。

それはこのカレンにとって1番の宝物。

シュウからもらった宝物。

でも、そんな思いとは裏腹の言葉がカレンの口から出てしまう。

「…え、ええ、リンちゃんランちゃんにあげるのですわっ…！　よく考えればルビーのジュエリーなんて他にも持っているし、先日なんて王子さまからとても素敵なものをいただいたのですものっ…！　だ…、だからリンちゃんランちゃんにあげるのですわ、そのネックレスっ……！　だ、だから、ほらっ…、もう泣かないでっ……」

リン・ランが涙を拭い、カレンに笑顔を向けた。

「ありがとうなのだ、カレンちゃん！」

カレンは引きつった笑顔で2匹が部屋から出て行く姿を見送った。

（なくなってしまったわ）

宝石箱を手に取り、カレンはベッドに腰掛けた。
蓋を開けると、そこにもう1番の宝物はない。

（なくなってしまったわ）

カレンは声を殺して泣いた。

カレンの誕生日の翌日。
シュウの仕事の休憩中。

カレンと岩の上に並んで座りながら、シュウはカレンの胸元を見て少ししょんぼりとしながら言う。

「カレン、今日はしねーんだ…」

「何をかしら？」

「何をって、昨日オレがあげたネックレス」

「だって」とカレンがシュウから顔を背けて言う。「壊してしまいそうで怖いのですもの」

「おまえは戦わないから大丈夫だろ」

「もったいないから特別な日につけるのですわ」

「ふーん…。普段使いできるもの買ったのに…。まあいいか。んで」と、シュウはカレンの顔を覗き込んだ。「昨日、聞きそびれたんですけどね、お嬢さん。教えてくれないっすかね」

「何をかしら？」

「何をって、おまえの誕生日に教えてくれるって約束したじゃねーかよ。オレが今上空何mにいるのかっ…」

「そうだったかしら？」と、カレンがぴょんと岩から降りた。「さて、次のお仕事に向かいましょう」

「こら方向音痴。そっちじゃねーよ」

「しっ、知ってるのですわっ…！」

カレンがシュウの傍らを歩き出す。

「んで、お嬢さんよ」

「何かしら？」

「早く教えてく――」

「あら大変、もうこんな時間なのですわ。早く次のお仕事へ向かわないと！」

「ちょ…、ちょっとおまえどういうつもり？　焦らしプレイか！？　…おい、カレン！？」

カレンはこの日、シュウとの約束を果たしてくれなかった。

というか、この日どころじゃなかった。

カレンの誕生日から3日経っても、５日経っても、１０日経っても。

シュウは毎日約束のことを口にするのに、カレンは必ず話を逸らす。

そして相変わらずシュウからもらったネックレスを身につけない。

そのまま、ついに１１月になった。

カレンがシュウからもらったルビーのネックレスを『特別な日につける』と言っていたものだから、シュウはリュウに頼んで舞踏会に連れて来てもらった。

（舞踏会なら特別な日だし、つけてくれるよな）

そんなことを期待しながら。

でも、カレンは身につけて来なかった。

カレンがまたリュウから買ってもらっただろう、新しいドレス。

シュウに褒められたら、カレンは嬉しそうに笑った。

でも、その胸元に輝いているのは王子からもらったルビーのネックレス。

（何でだよ…）

シュウの腹が立った。

同時に、

（オレ、もしかしたら上空５０００mじゃねえんじゃ……？）

自信もなくなった。

ダンスホールにいるシュウとカレンから離れて、ダンスホール脇で休憩中のリュウと、その傍らで料理を堪能していたサラは顔を見合わせた。

そのあと、シュウとカレンを見ながら言う。

「なあ、サラ」

「ねえ、親父」

「やっぱりおかしいよな」

「やっぱりおかしいよね」

「シュウがよ、いつまで経っても俺のところにゴム取りに来ねえんだよ」

「カレンがさ、いつまで経ってもアタシのところに勝負下着の相談しに来ないんだよ」

「カレン、シュウからもらったネックレスしてねーみたいだしな」

「カレン、兄貴に気持ち伝えてないみたいだしね」

「カレンの誕生日の夜に何かあったよな、絶対」

「カレンの誕生日の夜に何かあったよね、絶対」

「俺の予想」

「アタシの予想」

リュウとサラは、再び顔を見合わせて声をそろえた。

「リン・ランが関わってる」

これから就寝しようと、部屋の電気を消したリン・ランの部屋。

ノックなしに開けられたドアから光が差し込み、再び電気がつけられた。

「サラ姉上」と、ベッドに入っていたリン・ランは入ってきた者の名を呼んだ。「おかえりなさいなのだ。舞踏会お疲れ様ですなのだ」

「んー」

帰って来たばかりでドレス姿のサラが、適当に返事をしながら双子の宝石箱のところへと向かっていく。

「サラ姉上？」

リン・ランが首をかしげる中、サラは宝石箱をあさり出した。そして見つける。

シュウがカレンにあげたルビーのネックレスを。

「可愛いねえ、これ」

サラがそれを手に取りながらリン・ランに振り返ると、リン・ランが戸惑ったように顔を逸らした。

「か…、可愛いでしょなのだっ…」

「ああ、可愛いね。可愛いよ、すごく。でもあんたたちには似合わないね」

「えっ…？」

リン・ランが再びサラの顔を見ると、サラが続けた。

「当たり前じゃん？　これは、兄貴がカレンのために買ったネックレスなんだから。あんたたちに似合うものを買ったんじゃない。兄貴がカレンに似合うものを買ったんだ。これ、カレンに返すからね」

そう言うなり戸口へと向かっていくサラを、リン・ランはベッドから飛び出して慌てて追いかけた。

「ま、待ってなのだサラ姉上っ！」

「そ、それはカレンちゃんがわたしたちにくれたのだ！」

サラとリン・ランが廊下に出ると、ちょうどシュウとカレンが二階へと上ってきたところだった。

シュウが眉を寄せる。

「おい、何騒いでんだよ」

「兄貴、見てこれ」と、サラはシュウにネックレスを見せた。「何かおかしいと思ったら、リン・ランがカレンから奪ってたんだよ」

「――えっ…！？」

シュウが驚いてリン・ランの顔を見ると、リン・ランがシュウから目を逸らした。

「…そうなのか、リン・ラン」

「……」

「…カレンから奪ったんだな？」

「…あっ…兄上っ…、わ、わたしたち……」

目に涙を溜めているリン・ランを見て、カレンは慌てて声をあげた。

「ちっ…、違うのよシュウ！」

「え？」シュウが傍らにいたカレンに目を落とす。「違うって、何がだよ。おまえ奪われたんだろ？」

「違うのですわっ…！　あたくしがリンちゃんランちゃんにあげたのですわっ…！」

「え…？」シュウは眉を寄せた。「何で…？」

「…な、何でって、何でかしらっ？」カレンがシュウから顔を背けた。「あたくしには、王子さまからいただいたネックレスがありますものっ…！　王子さまからいただいたネックレスの方が、ずっとずっと素敵ですものっ…！」

思ってもいないことを言わなければいけないのは苦痛だ。

カレンの胸がずきずきと痛む。

「……な…んだよ」と、シュウが不自然に笑った。「それならそうと、言ってくれて構わなかったのに。あんなに喜んだフリしてくれなくても良かったのに……」

シュウが自分の部屋へと向かって行く。

すれ違いざまにリン・ランの瞳に映ったシュウの表情。

とても傷付いた瞳をしていた。

「――あっ、兄上っ…！」

シュウが自分の部屋に入って行ったあと、カレンがリン・ランの脇を小走りで通過した。

そのときにリン・ランの横目に映ったカレンの涙。

「――カっ、カレンちゃっ…！」

カレンが自分の部屋に入る。

「あっ…、兄上っ、カレンちゃっ……！」じわじわとリン・ランの瞳に涙が込み上げ、「ふにゃあああああああん！」

2匹は声を上げて泣き出した。

サラが小さく溜め息を吐き、リン・ランの頭に手を乗せる。

「ほら、あんたたち。ごめんなさいしなね。何も兄貴が結婚するわけじゃないんだしさ、あんまり暗く考えないの」

「そうだぜ、リン・ラン」と現れたのはリュウ。「それに父上がおまえたちに似合うネックレスを買ってやるから泣くな」

「ちっ…、父上っ…」と、リン・ランがリュウを見る。「父上に買ってもらっても意味ないですなのだっ」

「……」

リュウ、傷心。

「ご愁傷様、親父」と、サラは短く笑ったあと、リン・ランにネックレスを渡した。「ほら、行ってきな」

リン・ランは承諾すると、シュウの部屋へと向かって行った。

（結局自惚れだったのかよ、オレ…。だっせ……）

タキシード姿のままベッドに寝転がりながら、シュウは深く溜め息を吐いた。

（ああもう…、上空何mにいるんだろオレ……）

シュウは目を閉じた。

何だかもう、シャワーを浴びるのも面倒くさい。

少しして、ドアが開く音が聞こえてきてシュウは再び目を開ける。

入ってきたのはリン・ランだった。

「あ…、兄上っ……」

と、リン・ランが泣きじゃくりながらシュウにルビーのネックレスを差し出した。
シュウはルビーのネックレスを見たあと、再び目を閉じた。
「やるよ、おまえたちに。カレンはいらねーみたいだし、それ」
「ちっ、違うのだっ…！　カレンちゃんは、カレンちゃんは、わたしたちのために気を遣ってくれただけなのだっ…！」
シュウはまた目を開けてリン・ランを見た。
「気を遣った…って…？」
リン、ランと交互に言う。
「わたしたちが泣いてたからっ…！」
「この間もさっきも、わたしたちが泣いてたからっ…！」
「カレンちゃんはわたしたちのために嘘吐いてくれただけなのだっ…！」
「わたしたちがカレンちゃんからネックレスを奪ったのだっ…！」
「カレンちゃんも兄上のこと好きなのだっ…！」
「カレンちゃんと兄上は両思いなのだっ…！」
「兄上っ」と、リン・ランが声をそろえた。「ごめんなさいっ…！
ごめんなさいなのだあああああっ！」

声をあげてわんわんと泣くリン・ラン。
少しの間、シュウの部屋の中にはリン・ランの泣き声だけが響いていた。

シュウはゆっくりとベッドから起き上がると、戸口にいるリン・ランのところへと向かった。

「正直に話してくれてサンキュ」

そう言って微笑み、2匹を抱き締めてやる。

「兄上からカレンちゃんにネックレス返してあげてなのだっ…！」

「兄上、早くカレンちゃんのところに行ってあげてなのだっ…！」

シュウはリン・ランからネックレスを受け取った。

「ああ。リン・ラン、何も兄ちゃんがおまえたちのこと忘れるわけじゃないんだぜ？　おまえたちは兄ちゃんの大切な妹には変わりねえんだから」

リン・ランが涙を拭い、シュウに笑顔を見せる。
シュウはリン・ランの額にキスしたあと、自分の部屋から出た。

カレンの部屋の前、シュウは立ち止まる。

（リン・ランの言っていたことが本当なら、オレまた自惚れていいってことだよな…）

動悸を感じながら、カレンの部屋のドアノブを握る。

（上空５０００ｍにいると信じて…！　いざっ！）

ドアノブを捻り、

（レッツゴオォォォォォっ！！！）

シュウはカレンの部屋のドアを開けた。

第６６話　上空５０００ｍに辿り着きました

１１月の舞踏会のあと。
カレンの部屋の中。
シュウが入ると、カレンがベッドにうつ伏せに寝てしゃくり上げていた。

部屋に入って早々、シュウは戸惑ってしまう。

「な…、泣かないでくださいっすっ…」そう言いながら、シュウはカレンに歩み寄った。「お、おまえ、本当のこと言ってくれたっていーじゃねーかよっ…！」

カレンが顔をあげ、シュウの顔を見た。

「ほ…、本当のこと？」

「本当のこと」

「ほ、本当のことって？」

カレンが身体を起こした。
シュウがカレンの手を取り、そこにルビーのネックレスを置く。

カレンが驚いたように手の平のネックレスに目を落とし、そのあとシュウの顔を見上げた。

「こ…、これ、どうしてシュウがっ…？」

「リンとランが正直に話してくれたよ。おまえ、それ奪われただけだったんだろ？」

「……」

カレンはネックレスに目を落とした。
失ってしまったと思った宝物が、また自分の手元にある。
涙は止まるどころか、さらにあふれ出した。

「良かった…！　良かったぁ……！」

さらに泣かれたとなっては、シュウはさらに戸惑ってしまう。
ベッドに腰掛けながら、カレンの頭に手を乗せる。

「な…、泣くなよ、頼むからっ…」

カレンが頷き、涙を拭った。
シュウはどきどきとしながら訊く。

「あ…のさ、カレン。…それオレからもらったとき、本当に喜んでくれたんだよな…？」

「ええ」と、カレンが微笑んだ。「もちろんですわ。あたくし、本当に嬉しかったのですわ」

「…王子様からもらったやつより？」

「ええ」と、カレンがまた微笑む。「あたくしこれがあれば、王子さまからもらったネックレスなんていりませんもの」

シュウの動悸が増す。

（――やばいぜ、オレ）

本気でそう思った。

「カ…、カレン」

「何かしら？」

「親父みてーな言い方になっちまうけど…、オレがもし上空５０００mにいるなら抵抗しないで」

「えっ――」

カレンの言葉を遮るように、シュウの唇がカレンの唇を塞いだ。

半ば強引にカレンの舌を捕らえる。

押し倒されたカレンの瞳に、真剣な様子のシュウが映る。

カレンはシュウの胸を押して突き放した。

「ま、待って、シュウっ！」

「はいゴメンナサイ、オレまだ上空５０００mなんかじゃありませんよね、ええ知ってます本当ゴメンナサイもう自惚れません――」

「シャワー浴びてからなのですわっ…！」

そう顔を真っ赤にしながら言ったカレン。

「…あ…、ごめんっ……」

とシュウがカレンを解放すると、カレンが宝石箱にネックレスを大切そうにしまった。

そのあとシュウの顔を見てもう一度赤面し、備え付けのバスルームへと駆けて行った。

（え…、何。カレン、シャワー浴びてからって言った？　シャワー浴びてからって言ったよな？　うん、言った。…え、何…。シャワー浴びてから…、だ、だだだ、抱いてもＯＫってことすか！？　え！？　うそ！？　オレ、も、ももも、もももしかして、ま、まままままままじでっ……！！）

シュウ、赤面しながら驚愕。

（上空５０００ｍキタァァァァァァァァァァァァっっっっ！！！）

シュウはカレンの部屋を飛び出した。

２階の廊下を慌ただしく駆け、緩やかな螺旋階段を3段抜かしで下り、１階にある両親の寝室へと向かう。

「親父いいいいいいいいいいっっっ！！」

バァンっ！！

とシュウが両親の寝室を興奮のあまり蹴り開けると、夜の営みを始めていたリュウが顔を引きつらせて振り返った。

「てーめえ、シュウ…！　真っ最中に入って来るなと何度言えば分

か――」

「た、たたた、大変だ親父っ！！」とシュウはリュウの言葉を遮り、ベッドにいるリュウのところへと駆け寄った。「オ、オオオっ、オレっ…、オレ今、じょ、じょじょじょじょじょじょ、上空５０００ｍキタァァァァァァァァァ！！　なんだぜオイ！！」

「は…？」

と眉を寄せたリュウ。

数秒考えてから気付く。

「ああ…、カレンのところまで手が届いたってことな」

「おっ、おうっ！！　ってわけで、親父っ！！」

「ゴムか。ほら」と、リュウがベッド脇にあった大きなダンボールを指差した。「好きなだけ持ってけ。全部特注だぜ」

「おうっ、サンキュ！　おおっ、すげーいっぱいあるぅ！　さっすが親父ぃっ！　――って、あんたゴム特注してんの！？」

「んだって、俺やおまえのサイズじゃあ、この辺に良いの売ってねーんだぜ？」

「ああ、なるほど納得…」

「分かったら早く好きなの選んで出てけよ、こっちは真っ最中なんだからよ。ちなみにその白いパッケージのやつススメとく」

「おうっ、そうかっ！」

シュウはリュウがおススメしてくれた避妊具を3つ選ぶと、戸口へと向かった。

「んじゃ、邪魔したな親父――」

「おい、シュウ」

と、リュウがシュウの言葉を遮った。

シュウに振り返り、親指を立てて言う。

「グッドラック」

「おっ、おうよおおおおおおおおおっ！！」

シュウは両親の寝室から出て、2階の自分の部屋へと駆けて行った。

3つの避妊具をこっそりとベッド下の引き出しに入れる。

「オっ…、オオオ、オオオオオオレ、オレ今夜まじフィーバァァアアアアアアアアっっっ！！！」

シュウは着ていたタキシードをぽいぽいと脱ぎ捨てながら、備え付けのバスルームへと飛び込んだ。

自分の部屋に備え付けられているバスルームのバスタブに、カレ

ンはどきどきとしながら膝を抱えて浸かっていた。
そのどきどきが半端ない。

（あああっ、どうしましょうっ、どうしましょうっ…！）

カレンは声を上げた。

「サっ、サラァァァァァ！！」

「はいはーいっと」

全裸でサラ登場。
サラがバスタブに浸かると、すぐにカレンはサラにしがみ付いた。

「どっ、どどどっ、どうしましょうサラァァァァァ！！」

「勝負下着？」

「ええ！」とカレンは頷き、真剣な顔をしてサラの顔を見た。「前にシュウが可愛い系か清純系が好きだと言っていたのだけれど、どどど、どれにすれば良いのかしらっ！？」

「じゃあ可愛く且つ清純系のヒモパンで」

「ヒっ、ヒモパ…！？　…わ、わ、わ、分かったのですわっ！」

入浴後。
カレンはサラおススメの下着を身につけた。
さらにお気に入りのパイル地のキャミソールワンピース型の寝巻きを身につけ、シュウの部屋へと入る。

バスルームからシャワーの音が聞こえてくることから、シュウはシャワー中のようだ。

緊張でカチコチになっているカレンを見て、一緒に着いてきたサラが笑った。

「そんなに緊張しなくてもいいじゃん、カレン」

「だ、だだだ、だって、あああ、あたくしっ、あたくし今夜シュウにっ……！　シュウにっ……！」

「うん、そうだね。抱かれるね」

カレンが赤面した。

サラが続ける。

「何だか、ずいぶんと時間掛かっちゃったよね。でも、言った通りでしょ？　アタシの兄貴はちゃんと上空５０００ｍまで駆け上がった」

「ええ…、そうね。あたくし、一時は本当にシュウから気持ちが離れて…、再びシュウのことを好きになれるのか分からなかったのだけれど……。また好きになってしまったのですわ」

「うん…、ありがとカレン」そう言って、サラがカレンを抱き締めた。「アタシは兄貴のことも、今や親友のカレンのことも大好きでさ。２人の幸せは見てて嬉しいよ……、本当に」

「サラ…」

「それじゃ、アタシはもう寝るね。おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

サラが戸口へと向かっていく。

部屋から出て行く前に、カレンに振り返って親指を立てた。

「グッドラック」

「えっ、ええっ…」

カレンが赤面しながら返事をするのを見たあと、サラはシュウの部屋から出て行った。

それとほぼ同時に、シャワーの音が止まった。

シュウが脱衣所に出たのが分かって、カレンはあたふたとしながらベッドに入る。

それから少しして、バスルームのドアが勢い良く開いた。

「フィーバァァァァァァァァァっっっ！！！」

という台詞と共にシュウが全裸で飛び出してきて、カレンの目が丸くなる。

一方のシュウは、はっとした後に首まで真っ赤になって声を上げる。

「うっ…、うわあああああああああっ！！」シュウは再びバスルームに飛び込んだ。「なっ、ななな、何でいるんすかお嬢さん！？　オ、オレから行こうと思ってたのにっ！！」

「は…、張り切ってるわね、シュウ」

「えっ！？　そ、そそそ、そんなことネエェェェよ！？　っていうか、変なもん見せてごめんネエェェェェ！？」

「そんなに焦らなくても大丈夫ですわよ。あなたがニューハーフになっているときに見慣れましたもの」

「そ、そうか、そりゃ良かったぜ！　――って、な、何！？　み、見慣れた…！？」

「だってほぼ毎日一緒にお風呂入っていたのですもの」

「きっ…、聞いてネエェェェ！！」

「今言ったのですもの」

「なっ、何て羨ましいことしてたんだニューハーフのオレ…！　カレンの裸見放題だったのかよっ……！！」

「…い…今のあなただって、これから見るじゃない？」

「そうだけどっ…！　――って……！？」

再びバスルームのドアが開いた。

腰にタオルを巻いたシュウが、驚愕した顔をしながら訊く。

「い、いいい、いいんすかお嬢さん！？　いいんすねお嬢さん！？　逃げるならオレがここからそっちに行くまでの間にハイどーぞっ

！！」

と言われても、わずか1秒後にはシュウがベッド脇に来ていて逃げられなかったカレンである。

「時間切れですぜお嬢さんっ！！」

「ね、ねえ、今瞬間移動しなかった？」

「そりゃ無理ですぜお嬢さんっ！！　んなホワイトキャットじゃあるまいしっ！！」

「そ、そうですわよね」

「お、おおお、お隣失礼しますっす……！！」

と、シュウがベッドに入っているカレンの隣に寝転がった。

「……」

「……」

会話が途切れる。

シュウの耳に聞こえるのは己の動悸。
カレンの耳に聞こえるのも己の動悸。

カレンが先に口を切った。

「…や…約束が遅れてしまってごめんなさい」

その約束を果たしてもらうために、シュウはカレンに訊く。

「…オレのこと好き？」

カレンが頬を染めて微笑んだ。

「好きよ、シュウ」

やっと果たされた約束。

「――上空５０００ｍっ…」胸がきゅんと熱くなると同時に、シュウはカレンを抱き締めた。「キタァァァァァァァァァァっっっ！！！」

カレンの身体を下にして、シュウは黒猫の尾っぽをぐるんぐるんと回しながら訊く。

「オレも好きっすお嬢さんっ！！　よ、よって、だ、だだだ、抱かせてもらってもいいっすか！？」

「そ、その前に電気消してちょうだいっ……！」

「うすっ！！」

シュウは手を伸ばしてリモコンを取り、部屋の電気を消した。

部屋を暗くしたところで、夜目が利くシュウには何もかも見えているが。

それを忘れてしまっていたカレンは部屋が暗くなって少し安堵す

る。
尾っぽを振りながら待っているシュウの胸に顔を埋めて、カレンは小さな声で答えた。
「…カ…、カモオォォォンっ…」
「あざーーーっす！！」
シュウとカレンが出会ってから約7ヶ月。
色々あったけれど、ついに相思相愛。
（――ブハっ！　ヒモパンやべえっ…！）
シュウの鼻から噴射した鮮血によりシーツの一部が赤く染まったが、シュウはカレンと無事に結ばれた。
（デ…、デリシャスっ…！）

第６６話　上空５０００ｍに辿り着きました（後書き）

最近、本当更新が遅くなってしまって申し訳ございません…。

１９日の２３時４６分頃メールくださった読者さまへ。

そんな面白い間違いをするなんてお疲れなんですね、ええ分かります。

体調に気をつけながらお勉強がんばってください！

第67話　双子へ

シュウの部屋の中。
早朝6時に、一斉に鳴り出す10個の目覚まし時計。

ジリリリリリリリリっ！！

いつものごとく片手で鮮やかに叩き止め、シュウはぱちりと目を開けた。
自分の胸元に目を落として微笑む。

「オッス、カレン」

目覚まし時計の音で目を覚ましたカレンが、恥ずかしそうに頬を染めた。
シュウに背を向けて横臥する。

「…お、おはようっ…」

「照れてんのかよ。可愛いな、オイ」カレンを背中から抱き締めつつ、シュウはにやけてしまう。「くすぐったい朝とはこのことだな。ああ、大変だ…」

「どっ、どうしたのかしらっ？」

「朝っぱらから欲情してしまう親父の気持ちが分かってしまうオレがいる」

「へっ…！？」

「というわけでデリシャスなお嬢さん、寝起きにフィーバーといっていっすか」

「え!?　ちょっ、ダ、ダメなのですわ！　明るくて恥ずかしいのですわっ！」

「お嬢さん、オレの目には暗かろうが明るかろうが丸見えだということをお忘れっすか」

「――わっ…」カレンの顔が耳が、首が真っ赤に染まっていく。「わわわ、忘れていたのですわあああああああっ!!　じゃ、じゃあ何!?　き、きき、昨日の夜は丸見えでしたの!?」

「もちろんすよ、お嬢さん。そりゃもう、隅々まで――」

「いっ、いやあああああああっ!!」

「たまらんかったですばいっ…!」

部屋のドアが開く。

「はいはいはい、朝っぱらからいちゃついてないのー」とにやにやとしながら顔を出したのはサラである。「もう気になって気になって、めずらしくも早起きしちゃったんだけど。お2人さん、昨夜はどうだった?」

「そっ、そんなこと教えねー―」

「カレンのお味を一言で言うと?」

とシュウの言葉を遮ったサラ。

「デリシャスっ…！」

なんて言葉を思わずぽろりと出してしまった口を、シュウは手で塞ぐ。

笑いながらベッドまでやってきたサラ。

シーツの一部を見て眉を寄せる。

「え…？」がばっと布団をめくり、驚愕する。「うっわ、何この激しく飛び散った血…！　兄貴最低っ！　アタシもっとカレンに優しくしてやるものかと――」

「オレの鼻血だよっ！！」

と顔を真っ赤にして言ったシュウを見て、サラはぱちぱちと瞬きをした。

「え？　…ああ、兄貴の鼻血かコレ」と安堵して笑う。「あれでしょ、カレンのヒモパン見たときでしょ」

「うっ、うるせっ…！」

「カレンからは血ぃ出なかった？」

「すぐに止めたよ、治癒魔法で」

「は？」

「カレンが痛がったらすぐに治癒魔法かけてた」

「――ぶはっ！」と笑いを吹き出したサラ。「あーーーっはっはっはっ！　なっ、何!?　カレンが痛がるたびに治癒魔法かけてたわけ!?　治癒魔法かけながらエッチしてたわけ!?　アタシじゃ思いつきもしなかった！　そ、そーか、そんな方法があったのかっ！　あーーっはっはっはっ！　兄貴スゲエェ!!」

何がそんなにおかしいのか、サラは腹を抱えて笑っている。
そこへミラがやって来た。

「朝からどうしたのよ、サラ」

「おっ、お姉ちゃっ、き、聞いてよっ！　兄貴がさ――」

「言わんでいい!!」

とシュウは赤面しながらサラの言葉を遮り、身体を起こした。
カレンの身体も抱いて起こす。

「あれ?」

と、ミラはシュウとカレンを交互に見た。
カレンはキャミソールワンピース型の寝巻きを着ているが、シュウは裸のようだ。
シュウとカレンの間に流れる雰囲気から昨夜何があったのか察する。

「あっ…」とミラは頬を染めた。「お、おめでとうっ」

シュウとカレンの頬も染まる。

「お…おう…」

「あ、ありがとう、ミラちゃん…」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん」とサラが相変わらず笑いながら、シーツについた血を指差した。「見てよこの激しく飛び散った血っ！」

「――やっ…！」ミラの顔が驚愕する。「やっ、ヤダお兄ちゃん最低っ！　何で優しくしてあげなかっ――」

「オレの鼻血だよっ！！」

とシュウはもう一度同じ台詞を、再び赤面しながら吐いた。

「え？　ああ、お兄ちゃんの鼻血ね、良かった。カレンちゃんからは大丈夫だった？」

「おっ、お姉ちゃん、そのことなんだけど！　兄貴が――」

「あああああっ、もうっ！！」シュウはサラを引っ張り、その口を慌てて塞いだ。「言わんでいいって言ってんだろうがっ！！　兄ちゃんの言うことが聞けねーかよおまえはよ！？　え！？」

サラがシュウの手を離そうと、じたばたと暴れる。

「言わねえなら離してやる。言わねえな、サラ！？」

サラがうんうんと頷くのを確認したあと、シュウはサラから手を離した。

「さて…」と、シュウはカレンダーに顔を向ける。「今日からまた仕事増やさねーとなあ」

「えっ？」とカレンが狼狽したようにシュウの顔を見た。「この間からお仕事の量増えたのに、また増やすのっ？」

「うん、今日また親父に借金するから」

「へ？」と、サラがぱちぱちと瞬きをしてシュウの顔を見た。「また？　今度は何買うわけ？」

「というか」と、カレンもぱちぱちと瞬きをする。「リュウさまに借金していたの？　…あっ、だからお仕事の量を増やしてたのね。でもどうして借金――」

「いや、おまえは気にしなくていいから」とシュウはカレンの言葉を遮ったあと、サラの質問に答えた。「リン・ランにもさ…、買ってやりたいんだよ。あいつらに似合うやつ」

「え？　ああ、宝石！」サラが笑顔になる。「そうだね、兄貴。リン・ラン喜ぶから買ってあげなよ。…あっ、でも、カレンが気ぃ悪くしないならだけどっ……」

とサラがカレンの顔を見ると、カレンが微笑んで言った。

「リンちゃんとランちゃんにも素敵なものを買ってあげてほしいのですわ」

魔法学校の屋上。
リンとランはシュウが作ってくれた弁当を食べていた。
いつもなら嬉しくて、自然と笑顔になる。
でも今日の2匹の笑顔は不自然に作られていた。
「今日もおいしいのだ、兄上が作ってくれたお弁当」
「今日もおいしいのだ、兄上が作ってくれたお弁当」
でも、なかなか喉を通らない。
同時に零れてきた一粒の涙を手の甲で拭う。
「暗くなっちゃダメなのだ」
「兄上は今、とっても幸せなのだ」
「カレンちゃんと両思いになれて幸せなのだ」
「カレンちゃんと結ばれて幸せなのだ」
「兄上が幸せなら良いのだ」
「兄上が幸せなら、わたしたち構わないのだ」
「それなのにっ…」と、リン・ランの瞳から次から次へと涙が零れ

だす。「どうして涙が出てくるのだあっ……！」

抱き合って、リン・ランはお互いの肩に顔をつけて泣く。

「兄上、わたしたちのこと忘れてしまうと思うかっ？」とリン・ランは声をそろえてお互いに訊いた。「そんなわけないのだっ！　兄上はわたしたちのこと忘れるわけじゃないって言ってたのだ！　でもっ……」

でも、不安と寂しさにリン・ランの涙が止まらなかった。

（あいつら、あのとき無理して笑ったんだろうな）

先日カレンへの誕生日プレゼントを買った宝石店の中、シュウはそんなことを思う。

あいつらというのは、リンとランのこと。

あのときというのは、シュウからカレンへの誕生日プレゼントであるルビーのネックレスを、リン・ランがシュウのところへ泣きながら持ってきたときのこと――昨夜のこと。

シュウがカレンの部屋へ行く前、リン・ランはシュウに笑顔を見せた。

（オレがおまえたちのことを忘れるわけじゃないって、安心させてやらねーと…）

とあるショーケースの前、シュウの足が立ち止まった。

「お、コレいいな」

とシュウが言うと、一緒に来ていたカレンとリュウが寄ってきた。

カレンが笑顔になっていう。

「まあ、可愛いのですわ！　普段使いできるし、あたくしもいいと思いますわ！」

「ああ。それに」とシュウは微笑んで続けた。「この石、あいつらのイメージ」

シュウが選んだのは、ダイヤモンドのクロスモチーフペンダント。

リン・ランの純粋無垢で明るい笑顔はダイヤモンドを思わせた。

リュウが訊く。

「これを2つでいいのか、シュウ」

「うん」

「５００万＋トイチの利子だがいいんだな」

「うん…」シュウは苦笑した。「し、仕事の量を増やしたし大丈夫……」

「その仕事の量のことなんだけどよ。おまえが求める量に合わせてたら、変な依頼も入ることになるぜ？」

「変な依頼？」シュウはぱちぱちと瞬きをしてリュウの顔を見た。
「って、たとえば？」

「先日は、『３０分間シュウ（おまえ）を好きに扱わせてほしい』っていう人が来たみてえだな。そういった変な依頼は断るようリンクに言ってあるが、請ければ急速に金が増えるぜ。報酬多く持ってくる人が多いから」

「な、何ソレ…」シュウの顔が引きつった。「３０分間オレをどうしようっていうんだ」

「ファンの女だったみてーだし、脱がされてあちこちいじくられて犯されるんじゃねえ？」

「ちょっ…！　何なのですのソレっ！」

とカレンが声を上げた。
眉を吊り上げてシュウの顔を見る。

「ダメですわよ、そういう依頼を請けちゃ！」

「う、請けねーよ、そんな依頼っ…！　っていうか、何だよ？」カレンの頬を指で突き、シュウはにやける。「オレがそういう依頼請けると腹立つわけ？　そりゃそーだよな、オレおまえの彼氏デビューだもんな。フフフ…、怒った顔も可愛いぜハニーっ…！　こおぉぉぉんな可愛い女なかなかいねーよな。ううーん、オレって、し・あ・わ・せ☆」

「おまえ痛々しいな」

リュウはそう突っ込んだあと、店員を呼んで会計を済ませた。

シュウが作ってくれた昼食の弁当は、無理矢理胃に押し込んだ。
夕食は半分以上残した。
机に向かっているものの、宿題がまるで捗らない。

リン・ランの部屋の中、溜め息ばかりが響く。

そこへドアをノックする音が聞こえて、リン・ランは戸口に顔を向けた。

「はいなのだ」

とリン・ランが返事をすると、ドアが開いた。

顔を見せたのは仕事から帰ったシュウだ。

「ただいま」

「お…、おかえりなさいなのだっ…」とリン・ランは不自然な笑顔で言ったあと、再び宿題をやり始めた。「い、今、宿題中なのだっ…」

「そうか。んじゃ、邪魔にならないように土産だけ置いていくか」

シュウはリン・ランの部屋の中に入ると、2匹の頭の上にぽんと

プレゼントの箱を置いた。

「え…？」

リン・ランが自分の頭の上から箱を取る。
箱を見て、そのあとシュウの顔を見る。

「可愛いおまえたちにプレゼント」

「えっ…？」リン・ランが再び箱に目を落とし、またシュウの顔を見た。「あっ…、開けていいですかなのだっ」

「おう」

リン・ランが同じ手付きで包装紙をはがし、箱の蓋を開ける。
箱の中のダイヤモンドのクロスモチーフペンダントを見つめ、シュウの顔を見つめる。

「あっ…、兄上、これっ…！」

「貸してみ」とシュウはリン・ランからダイヤモンドのペンダントを受け取ると、2匹の首につけてやった。「おまえたちにはさ、ルビーでも他の石でもなくて、純粋無垢な色をしたダイヤモンドが似合うと思って」

シュウは2匹の胸元に目をやって笑った。

「うん、似合うな！」

「――あっ……」リン・ランの瞳からぽろぽろと涙が零れだす。「

兄うっ…！　ふにゃあああん！　兄上えええええええっ！」

リン・ランはシュウにしがみ付き、わんわんと泣き出した。

不安になんかなってバカだったと、リン・ランは思う。

（兄上がわたしたちのこと、忘れるわけがないのだっ…！）

シュウの腕の中で泣きじゃくったあと、リン・ランはシュウの顔を見上げて笑った。

「ありがとうなのだ、兄上っ！」

「おうよ」

シュウは微笑んだ。

リン・ランの純粋無垢な笑顔には、やっぱりダイヤモンドが似合う。

リン・ランが元気を取り戻したところで、部屋の外に立っていたカレンが顔を覗かせた。

「シュウ、リュウさまがお仕事のお話あるって」

「おう、分かった」

シュウはリン・ランの頭を撫でたあと、リュウがいるだろう書斎へと向かって行った。

そのあと、カレンがリン・ランを見て微笑んだ。

「あら、とっても素敵なペンダントね。リンちゃんランちゃんにぴったりなのですわ、ダイヤモンド」

リンとランが嬉しそうに笑った。

「カレンちゃんも、そのルビーのネックレスがとっても似合ってるのだ」

シュウが書斎に入ると、リュウは回転椅子に座っていた。
くるりと椅子を回転させて、シュウの方に身体を向ける。

「なあ、シュウ」

と、リュウが手に握っている仕事の依頼内容の書かれた紙を見ながら口を開いた。

「ん？」

「報酬１０００万の依頼来てんぞ」

それは通常の５０倍の報酬額だった。

第67話　双子へ（後書き）

メリー　＊＜（　≧≡▽≦≡）／□☆□＼（≧≡▽≦≡　）＞＊　クリスマス！

皆様、素敵なクリスマスをお過ごしください♪

姫百合はクリスマスもお正月もあったもんじゃネェですが……ｏｒｚ

次の更新、ほんっと遅れそうです。申し訳ございませぬ・。・（つД､）・。・

第６８話　睦月島へいってきます

自宅の書斎の中、シュウはリュウの台詞を鸚鵡返しに訊く。

「報酬１０００万の依頼？」

それはシュウが普段請ける仕事の、約５０倍の報酬額。

当然のことながら、シュウは驚愕した。

「――って、どんな人が依頼してきたんだよ！？　ま、まさか王子様とかじゃねーよなっ？」

「ああ、王子じゃねーよ。今日の昼に話した変な依頼……に、入れてもいいか。睦月島ギルドのギルド長からだ」

「へ？」

シュウはぱちぱちと瞬きをした。

睦月島ギルドのギルド長なんて、シュウは顔すら思い出せない。

睦月島ギルド長は、ギルドイベントに顔を出したことがないから。

リュウが続ける。

「睦月島がハンター少ねーのは知ってんだろ？　カレン集団リンチ事件の犯人ハンターたちも睦月島に送ったんだが、それでもまーったく足りねーらしくてよ。まあ、俺やキラたちが２０歳くらいんときからハンター足りねーんだけどよ、睦月島は。昔、血も涙もないほど働かせられたことがあったんたぜ、俺たち…」

と、リュウが顔を引きつらせる。

「へ、へえ？　それで？」

「睦月島ギルド長ってのはよ、俺たちが２０歳くらいんときから変わってなくてよ。女ギルド長なんだが……、昔見たときに４０歳くらいだったから、今は６０歳くらいなんじゃねえかなあ？　昔の記憶だと美人といえば美人なんだが…、ド派手な化粧にド派手な頭、ド派手なファッションでよ。何よりギルド長室の中に甘ったるい香水の臭いが充満しててクセーの何のって。当時キラとミーナがいたんだが、もう卒倒寸前だったな。まあ、俺たちもしばらく会ってねーから今はどうか知らねえが」

「へ、へえ？」シュウの顔が引きつった。「んで、その睦月島ギルド長がオレにどんな依頼を？」

「まあ、今まで俺やキラたちに来てた依頼なんだが……」

「うん？」

「俺たちが引き受けなかったら、ついにおまえに来たな」

「だ、だからどんな依頼？」

「睦月島ギルドにハンターを集めるため、おまえに『睦月島ギルド宣伝のためのテレビＣＭに出てほしい』っていう…」

「テレビＣＭっ？」シュウの声が裏返った。「睦月島ギルドって、テレビＣＭで宣伝してんのっ？」

「みたいだぜ。睦月島内でもうしばらく宣伝してんだが、ハンターの集まりがイマイチなんだってよ。んで、そのＣＭに俺たちが出演すりゃあとりあえずハンター増えるだろうって考えててな、睦月島ギルド長は」

「そ…、そんなにオレたちって有名なのか」

「まあなあ。今や誰もが知るハンターの俺に加えて、この世を救った英雄のキラとその周りじゃあ当然だろうな。おまえなんて俺とキラの子供なんだし、リンク一家やレオン、師匠より注目浴びてんだろ」

「そ、そりゃまあ、分かってたけどさ……」シュウは苦笑した。「テレビＣＭってどういうのやるんだろ？」

「戦闘シーンを撮るんじゃねーの、ハンターらしく。ちなみに地元のテレビ局に撮影の協力頼むらしいぜ」

「せ、台詞とかあんのかな」

「少しはあるんじゃね」

「む、難しそうだな…」

「あとそれから、睦月島に行くなら少し滞在して来い。一流ハンター用の仕事も溜まってて困ってんだそうだ」

「そ、そうなんだ。睦月島ギルド、大変だなあ…」

シュウは少しの間考えたあと、睦月島ギルド長からの依頼を請けることにした。

リュウが言う。

「そうだな…、滞在期間は一週間だな。ＣＭの撮影は順調に行けば1日で終わるそうだ。残りの日でできるだけ仕事こなして来い」

「分かった。でも睦月島の地理なんて知らねーし、移動に時間かかりそうだな」

「瞬間移動で何とかなる」

「瞬間移動？」シュウは鸚鵡返しに訊いた。「って、ミーナ姉も連れてくってこと？」

「ミーナ…だったらいいね、おまえ」

「へ？」

シュウがぱちぱちと瞬きをすると、リュウが携帯電話を手に取った。

受信メールを見せて言う。

「うるせーんだよ、こいつ」

シュウがリュウの携帯電話の画面を見ると、そこにはリーナからのメール。

『うち今、しゅん間移動の練習してんねん！　しゅん間移動するキ

カイがあったら、おかんやなくてうちをよんでな！』

と書いてある。

リュウが溜め息を吐いた。

「リーナの奴、ここんとこ毎日同じ内容のメール送ってくんだよ」

「まあ…、瞬間移動できんならリーナでもいいけどさ。変なとこに飛んだりしねーかな」

「するだろ」

「すんのかよ」シュウは苦笑した。「大丈夫かよ、オイ…」

「昔のミーナよりはマシだってリンクが言ってたから大丈夫だろ」

「ふ、ふーん？　それならまあ、大丈夫か…」と思うことにして、シュウは話を戻した。「それで、いつから行けばいいの？」

「おまえの明日と明後日の仕事は外せねーから、3日後からだな」

シュウは承諾して、書斎から出た。

3日後。

シュウ宅のリビングに、これから睦月島に向かおうシュウとカレン、リンク夫妻の娘であるリーナが集まっていた。

リン・ラン、ユナ・マナ・レナはもう学校へ行ってしまったが、見送りにはリュウとキラ、ミラ、サラ、ジュリ、リンク、ミーナ、レオン、グレルが集まっている。

土産やら注意ごとやら何やかんやと言われたことを、シュウは脳内にインプットした。

睦月島までリーナの瞬間移動で届くわけがないので、飛行機で行くことになっている。

よって、葉月島の空港までリーナの瞬間移動で行くことになったのだが、

「――うぉいっ！！」

いきなり失敗して、空港の屋根の上に瞬間移動。

「ちょっとしたお茶目やで」

と笑い、リーナが空港の中に瞬間移動し直す。

「お、おまえ大丈夫かよ、リーナ」

「何いってんねん、シュウくん。うち、おかんよりもしゅん間移動の才能あんねんで？」

とリーナは胸を張るが、シュウは今から心配で仕方がない。

葉月島から睦月島までは、飛行機で約８時間。

睦月島の季節は初夏だった。

睦月島の空港に降りるなり、シュウとカレン、リーナはコートを脱いで夏物のファッションになった。

睦月島の地図をリーナに見せながら、シュウは言う。

「えーと、オレたち今ここな。この辺が睦月ギルドだから、この辺に瞬間移動してくれ」

「ふむふむ」とリーナは頷くと、自信満々に笑った。「お安い御用やで！　ほな、シュウくんカレンちゃん、うちに掴まってや！」

言われた通りシュウとカレンがリーナに掴まると、リーナが睦月ギルドに向かって瞬間移動をした。

――が、睦月町を走るトラックの荷台の上に。

「……こら、リーナ。おまえやっぱり大丈夫じゃねーじゃねーかよ」

「お、お茶目ゆーてるやろシュウくん！　何度言わせんねん！」

「まだ2度目――」

「しつこい男はレディに嫌われんで！　まったく呆れるわー」

「おま……」

シュウが顔を引きつらせると同時に、リーナが睦月ギルドの前に瞬間移動し直した。

睦月ギルドの前には巨大な番犬がいた。
その番犬に唸られながら、シュウはギルドの中へと入っていこうとするカレンとリーナの手を引っ張る。

「待て、おまえたち。飛行機の中でも話したが、睦月ギルド長がどんな人でも…、ギルド長室がどんなに臭くても、顔や言葉に出さないようにな！」

「分かってますわ」

「分かってんで」

とカレンとリーナが承諾したあと、シュウは番犬に噛まれる寸前に睦月ギルドへと入った。
ギルド長室へと続く廊下のドアを開け、ギルド長室へと向かう。

ギルド長室のドアをノックすると、睦月ギルド長かと思われる女の声が返ってきた。

「ハンター・シュウね？　どうぞお入りになって」

シュウは、カレンとリーナと顔を合わせたあと、ギルド長室のドアを開けた。
その瞬間、リュウの言っていた通り、ド派手な化粧にド派手なヘアスタイル、ド派手なファッションをしたおばさん――いや、どちらかと言ったらおばあさんの睦月ギルド長が目に入った。

（――くっっっせ！！）

と、シュウは驚愕する。

リュウが言っていた通り、部屋に甘ったるい香水の香りが充満している。

（まじくっっっせ！！）

人間のカレンは何とか笑顔を作れるが、人間よりも鼻が利くハーフのシュウの笑顔は強張る。

同じくハーフのリーナは、言葉を発する間もなく卒倒した。

シュウが慌ててリーナを支えると同時に、睦月ギルド長が立ち上がる。

「あら、どうなさったのかしらっ？」

「…す、すみません、貧血気味で」

とシュウは咄嗟に嘘を吐いた。

「あら、そうなの？　それでは早めにお話を終わらせなくてはね」

と睦月ギルド長が心配したように言ったあと、シュウたちにソファーに座るよう促した。

シュウがリーナを抱っこしながらソファーに座り、その傍らにカレンが座る。

「ハンター・リュウから依頼内容は聞いているとおもうけど…」と、睦月ギルド長がデスクの上に置いておいた薄い冊子をシュウに渡した。「ハンター・シュウ、あなたには睦月島ギルド宣伝のためのテレビＣＭに出ていただくわ。これ、台本ね」

「分かりました」

シュウは早口で言い、その台本をぺらぺらとめくった。

が、内容はほとんど見ていない。

「大丈夫かしら？」

との睦月ギルド長の質問に、シュウは即答する。

「ええ、大丈夫ですお任せください」

早く出なければ、リーナに続いて卒倒しそうだった。

（は、早くここから出ねえと……！）

シュウは早口で続けた。

「それで睦月ギルド長」

「何かし――」

「オレたちＣＭの依頼の他に仕事をこなしていこうと思うのですが」

「あら、それは嬉し――」

「分かりましたこれから一週間頑張ります」

「ええ、頑張っ――」

「ＣＭの撮影はいつからでしょうか」

「一応、明日と予定――」

「明日ですね分かりました明日の朝に再びお訪ねします」

「あとそれから、これ宿泊先の地図――」

「ありがとうございますそれでは失礼致します」

シュウは台本と宿泊先の住所などを書かれたメモをカレンに持たせると、カレンとリーナを脇に抱えてギルド長室を飛び出した。

そのまま走ってギルドを飛び出し、番犬からも離れたところでカレンを地に降ろす。

リーナには治癒魔法をかけた。

「――くっっさ！」とリーナが目を覚ます。「めっさ臭かったで、あのおばさんっ！！」

「ああもう、オレもびびったぜ…！」

シュウはリーナを地に降ろすと、己にも治癒魔法を掛けた。

あと少しでリーナに続いて卒倒するところだった。

「だ、大丈夫？　シュウ？　リーナちゃん？」とカレンが苦笑したあと、宿泊先の住所などを書かれたメモに目を落とした。「とりあえずここへ向かって、荷物を置きましょう」

「そうだな」とシュウは同意しながら、カレンの手からメモを取った。「…ん？　ホテルじゃなくて旅館か」

リーナが訊く。

「みんな一緒の部屋なん？」

「ああ、そうみてえ」

「ほんまー？　ごめんなあ」とリーナが笑う。「シュウくんとカレンちゃん、これから一週間夜のイトナミできへんなあ」

まったくだぜ…！

と思いながら、シュウは苦笑した。

まだ9歳のクセに、どこからそんな言葉を覚えたのだろうと思う。

睦月町にある宿泊先の旅館まで、リーナが瞬間移動した。

――が、やっぱり失敗した。

「あれ？　またお茶目さんやってしもうたで、うち」

「ばっ、おまっ……！！」

「でもラッキーやな、シュウくん」

あはは、とリーナが笑う。

シュウの声が睦月町に響き渡って行った。

「おっ…、女風呂に瞬間移動してんじゃねえええええええええ

「えええええっっっ！！」

第６８話　睦月島へいってきます（後書き）

ああ…、やっと更新っ！　しかもめずらしい時間（２３時３０分頃）っ！

次の更新はきっと２００９年……です。

皆さま年越し蕎麦ウマーーーっ！　してください♪

第６９話　ただいま睦月島です

睦月島ギルドにハンターを集めるため、睦月島ギルドのテレビＣＭに出演してほしいという仕事を請けたシュウ。
恋人であり弟子のカレンと、瞬間移動用にリンク夫妻の娘であるリーナと共に睦月島へとやってきた。
テレビＣＭに出演という仕事の他にも、ハンターが少ないが故に仕事が溜まっているらしい睦月ギルドの仕事をこなしていかなければならないようだった。

ちなみに、依頼主は強烈な印象の睦月島ギルドのお婆さんギルド長。
ド派手な化粧にド派手なヘアスタイル、ド派手なファッション。
甘ったるい香水の香りが充満したギルド長室に入ったときには、ハーフのシュウは卒倒寸前。
同様にハーフのリーナは堪えきれずに卒倒してしまった。

睦月ギルド長が用意してくれた旅館へと、リーナの瞬間移動で移動。
が、女風呂に移動してしまい、シュウはカレンとリーナを脇に抱え、慌てて女風呂を飛び出した。

どうやら待っていてくれたらしい旅館の美人女将に部屋まで案内してもらい、シュウは畳みの上に敷かれた座布団の上に胡坐を掻いて座った。
まだ何もしていないのに、疲れが襲い掛かる。

「リーナに加え、あのギルド長かよ……」

「うちに加えって何やねん」とリーナが眉を吊り上げる。「しゅん間移動してもらえるだけありがたく思いやー」

「まあ、うん…。サンキュ、リーナ。でも…」シュウは苦笑した。

「本当、マトモなとこに瞬間移動頼むわ」

「そんなん当たり前やんかー。うちをダレやと思ってんねーん♪」

と言ってリーナは自信満々に胸を張って笑うが、恐らくマトモなところに瞬間移動する数は数えられるほどだろう。

睦月ギルド長から渡されたＣＭの台本を読みながらカレンが口を開いた。

「ねえ、シュウ。何だか台詞多いですわよ。ＣＭなのに」

「え？　…ああ、そうか。睦月島のテレビＣＭって長いらしいからな。1分から2分あるらしいぜ？」

「ちょっとしたドラマできそうやな」

とリーナが言うと、カレンが頷いた。

「ええ。台本見てるとそんな感じですわ。モンスターではなくて、誘拐犯と戦うのだけれど…」

「ふーん？」

シュウはカレンから台本を取った。

全体にざっと目を通していって、眉を寄せる。

「…突っ込みどころ満載だな、オイ。誘拐犯を追い詰めて戦って攫われた女の子救うとこはいいとして…、こんなことできるハンターなんて親父やグレルおじさんみてーなバケモノだけだ」

リーナが台本を覗き込んだ。
その内容を見ながらシュウに訊く。

「マンションの5階から飛び降りれるん?」

「足折れるかもな…」

「海の上走れるん?」

「足が速くなる魔法を持ってるとはいえ走れるかどーか…」

「マシンガンのタマ当たらずに剣で切り捨てられるん?」

「絶対何発か食らうぜ…」

「昨夜のイトナミは何回したん?」

「朝に1回したのを含めると3回――って、おま…!」シュウ、赤面。「9歳のガキがそんなこと訊いてんじゃねえっ!!」

「昨日は3回したんか。おさかんやなあ、さっすが17のオスやで」

「オっ、オス言うなっ!!」

「カレンちゃんが好きなん分かるけど、ちょっとひかえた方がええ

んちゃうん？　『愛は小出しにせよ』って言うやろ？　そのチョーシやったらはよ冷めてもうて、別れてまうことになんで」

「そっ、そういう言葉どっから覚えてくるんだよ…！？」

「でもまあ、夜のイトナミの話については今夜お好み焼き食べながら聞かせてや」

「どこのおばさんだおまえはっ！！」

「ぴっちぴちの9歳の美少女に向かってオバハンやて？　うちは周りとちがって大人の女なだけやで。それが分からんのかいな？　まだまだやなあ」と、リーナが溜め息を吐く。「大体、せっかくうちが気ぃきかせてやったんに……」

「な、何だよ、気を利かせてって…」

「夜のイトナミ話、語りたくて仕方あらへんのやろ？」

「なっ、何でだよ！？　何でオレが9歳のガキにそんなこと語ってやらなきゃ――」

「何テレとんねん、かわええわー」リーナが笑う。「ちゃんと最初から仕舞いまで聞いたるから、はじとらんで今夜話してみぃやー。ほら、特別うちのアメちゃんやるから」

「いらねーからその口を閉じ――」

「ハッカ味嫌いなん？　子供やなあ、シュウくん。ほな、こっちのイチゴミルク味やんで」

「だから――」

「んで」と、リーナがシュウの耳元に口を寄せた。「カレンちゃんは何味なん？」

「……」

プチっ。

と、シュウの中で何かが切れる音。

「――んぐっ…！？　んんっ…！？　んんんん～～～っ！！」

シュウにタオルで口を塞がれ、リーナがじたばたと暴れる。

「さてと、撮影は明日だったな」

シュウは気を取り直して、台詞を覚え始めた。

翌朝８時。

シュウとカレン、リーナは睦月町の一角にいた。

昨夜ははしゃいで、シュウとカレンと一緒になって夜中まで起きていたリーナ。

今朝は当然のごとく寝坊した。

寝ぼけていたせいか、旅館から睦月ギルドまでの瞬間移動を7回

も繰り返し、睦月ギルドからここまで来るのに13回もの瞬間移動を繰り返した。

CMの撮影に協力してくれるらしい睦月島のテレビ局の人たちに、監督を務める睦月ギルド長。

誘拐犯役の男と、その誘拐犯に攫われる女の子。

他、多数の脇役。

CMの撮影は、女の子が攫われるところから入るらしいのだが。

（あっ…、あの人っ…！）

攫われる女の子役の人物を見て、カレンははっとしてシュウの背に隠れた。

カレンの頭の中にあの人物はインプットされている。

カレン集団リンチ事件のときの犯人ハンターの1人だ。

（そ…、そうよね、睦月島（ここ）にいてもおかしくないのですわよね。リュウさまがあの時の彼女たちを睦月島（ここ）に送ったのだから……）

背に隠れたカレンを見て、シュウは首をかしげた。

「どうしたんだよ、カレン？」

シュウはあの事件の犯人たちの顔を知らない。

「な…、なんでもないですわ、シュウっ…！　そ、それよりあたくし、睦月町を回ってみていても良いかしらっ？　あたくしはCMに出ないことだしっ…」

もうあの事件のときの犯人は襲ってこないだろう。
それでも、カレンは犯人の1人だった彼女と目を合わせることすら怖かった。

「はぁ？　何言ってんだよ、方向音痴が」

「大丈夫やで、シュウくん」とリーナが欠伸をしながら口を挟んだ。
「うちがカレンちゃんと一緒に着いてくから」

「あ、ありがとう、リーナちゃん」とカレンはリーナに笑顔を向けたあと、シュウの横顔を後ろから見上げて続けた。「今日でCMの撮影を終えたら、明日からは1日中お仕事になるのでしょう？　そうしたら睦月町を回れる時間なんてないでしょうし、みんなへのお土産は今日のうちに買ってしまおうかと思ってっ…」

「ああ…、そうか。たしかに明日からじゃ皆に頼まれた土産は買うヒマねーかもな」

と納得したシュウ。
だが、やっぱり心配で仕方がない。

「うーん、でもなあ…。カレンとリーナだけじゃなあ…」

「大丈夫やっちゅーねん」と、リーナが溜め息を吐いた。「変なのがよって来よったらしゅん間移動でにげるし、ケータイだってあんのやで？　心配性やなあ、シュウくん」

「う、うーん……」

と悩んで眉を寄せるシュウ。

（カレンは逆に葉月島にいるより狙われないだろうし、リーナの瞬間移動あるし大丈夫……だよな）

そう思って、カレンとリーナに許可を出した。

カレンが安堵したように笑う。

「ありがとう、シュウ。それじゃ、撮影がんばってね」

「おう。…あっ、リーナ！　瞬間移動する際には充分気をつけろよ！？」

カレンとリーナが瞬間移動でどこかへ行ったあと、ＣＭの撮影が開始された。

睦月町にあるハンターご用達の武器屋の中、リーナがカレンに訊く。

「ここではダレへのお土産買うん？」

「サラよ」

「サラちゃんか。サラちゃんはほんまに武器とか防具とや好きやなあ。美人やしかっこええから、どんな武器持ってもめっさ似合うし」

「ええ、そうですわね。…あっ、これですわ、サラがほしがってい

た弓！　ついでに矢も買って行きましょう。…わっ、この弓、結構な重さですわねっ……」

弓矢を抱えてレジへと向かうカレン。

会計を終えて戻ってきたカレンに、リーナが訊く。

「なあ、カレンちゃん？」

「何かしら？」

「さっきどうしたん？」

「え？」

とカレンがリーナの顔を見ると、リーナがもう一度訊いた。

「さっきどうしたん？　急に睦月町を回りたいなんて、みんなへのお土産買うためだけやないんちゃうん？」

「あ…、えと……」

カレンは戸惑ってリーナから顔をそらした。

「ＣＭの出演者に、イヤな人でもおったん？」

そういえばリーナも、カレン集団リンチ事件のときの犯人たちの顔を知らないはずだ。

カレンが返答に困っていると、リーナが続けた。

「ユーカイ犯にさらわれる女の子役の人見てからやんな？　カレン

ちゃんがおかしくなったんは」

「よ…、よく見てるのね、リーナちゃん」

「うちをナメたらあかんで～っ！」と、リーナが胸を張る。「うちの前にいる以上、うちにかくしごとはムリやで、カレンちゃん！　ほら、言ってみぃ。…って、ああ～、なるほどな！　安心せえや、カレンちゃん！　あの女の子よりカレンちゃんの方がかわええで！」

「そ、そうではなくて…」

「チチのサイズ負けたこと気にしたらあかん！」

「そ、そうでもなくて…」カレンは苦笑した。「その…、女ハンターって苦手で……」

「ふぅん？」

「あ…あと、男の人もちょっと…。あ、もちろんシュウとその周りの男の人は大丈夫だけれどっ…」

「そうやったんか」とリーナが声を高くした。「知らんかったわ。カレンちゃんかわええから、色んな目におうてるんやな。あかん…、うちの将来を見てるようやでっ…！　なんってかわいそーなんやっ……！　シュウくんからはなれてる今、うちがカレンちゃんを守ったるからな！」

「ありがとう、リーナちゃ――」

「あっ、店ん中に男が入ってきたで！　カレンちゃん、危なあああ

あああああああいっ！」

リーナはカレンに抱きつくと同時に、その場を瞬間移動で離れた。
咄嗟のことに、距離と場所をまるで考えていなかった。

「――！？」

目の前の光景に、カレンとリーナの目が見開かれる。

「リ、リリリ、リーナちゃ…！？」

「カ、カカカ、カレンちゃ…！？」

蒼白しながら抱き合うカレンとリーナ。

「ど、どどど、どこに瞬間移動したのかしらっ？」

「さ、ささささ、撮影現場かもしれんっ」

でもそこにシュウの姿はない。
睦月ギルド長も、テレビ局の人も、誘拐犯役も、誘拐犯に攫われる女の子役も、脇役も、皆いない。

カレンとリーナの目の前には、銃を持った数人の人物が立っていた。
突然カレンとリーナが現れたものだから、仰天した顔で遠巻きになっている。

「――だっ…、誰だてめえらっ！！」

1人の男がそう怒鳴ると同時に、カレンとリーナの目の前にいる人物たちが一斉に銃を構えた。

（あかんっ！　ここははよ逃げな！）

慌てて瞬間移動をしようとしたリーナ。

だが、

「あ…れ……？」

「リ、リーナちゃんっ！？　は、早くこの場からっ…！」

「け…、今朝にたくさんしゅん間移動してせいか、ここがさっきの場所からめっさ遠いのか知らんけど……」

「ど、どうしたの！？」

「あ…あれや。ゲームで言うとマジックポイント――ＭＰが切れたん…」

「さ、さっぱり意味が分からないのですわっ！」

「せ、せやからな？　つ、つまり……」

リーナが顔を強張らせて、ごくりと唾を飲み込んだ。

「きょ…、今日はもうしゅん間移動できへん……！」

「――なっ」

何ですってえええええええ！？

カレンが驚愕した次の瞬間。

カレンとリーナの足元目掛けて銃弾が飛んだ――。

第６９話　ただいま睦月島です（後書き）

あけましておめでとうございます。
今年もどうぞよろしくお願い致します。

それから…。
受験生の皆さまにサクラサケェェェェェっっっ！！！

第７０話　追われてます

足元の地面に撃たれた銃弾。
抱き合っていたカレンとリーナは飛び跳ねた。

一体ここはどこなのか。
廃墟となったビルの中のように見える。

一体目の前にいる人物たちは何者なのか。
数えてみると銃を持った男が５人いる。

「う、うちらがダレかて？」と、リーナが１人の男の質問に対して口を開いた。「このおかんそっくりなキュートフェイス見て分からんのかい、このどあほう共っ！！」

「アァ…！？」

５人の男たちが眉を寄せてリーナの顔を凝視する。
それから数秒後、１人の男が気付いた。

「こっ、こいつ、超一流ハンター・リュウの親友だか何だかのガキじゃねえかっ…！」

「……。さすがおとん。名前も覚えられてへんわ…」リーナは顔を引きつらせたあと続けた。「うちに加えて、この赤毛の美少女はその超一流ハンター・リュウ兄ちゃんとこの世の英雄・キラ姉ちゃんの息子のコレやねんからな！」

コレというと同時に小指を立てるリーナ。

男たちがカレンの顔を見、リーナの顔を見る。

フン、とリーナが笑う。

「分かったらさっさとうちらを放し――」

「よっ、余計に逃がせねえっ！！　おいっ、ひっ捕らえろ！！」

カレンとリーナに飛び掛る男たち。

カレンとリーナは慌てて逃げ出した。

部屋から出て廊下を走り、階段を駆け下りる。

鳴り響く銃声にパニックになりながら、カレンとリーナは建物から飛び出した。

走りながら辺りを見回すと、今はもう人が住んでおらず廃墟となった建物ばかりだ。

「カっ、カレンちゃん、ここどこやと思う！？」

「む、睦月島だとは思うのだけれどっ…！」

「はよ睦月町にいかな！　…あっ、チャリあったで！」リーナはカレンを引っ張ると、道端に置いてあった自転車のところへと連れて行った。「めっさボロいけど何とかなるやろ！　カレンちゃん、運転してや！」

「え、ええっ！」

カレンが自転車の椅子に座り、リーナがその後ろに立ち乗り。

カレンはバッグを自転車のカゴに入れると、弓矢をリーナに渡して自転車をこぎ出した。

「そ、それでリーナちゃん、どっちへ行けば！？」

「こんなとこの地図持ってへんから、テキトーにガーーッ進んでや！」

「わ、分かったのですわ！　ガーーッ進めばいいのねっ！　あっ、それからリーナちゃんっ…！」

カレンはバッグの中から携帯電話を取り出すと、リーナに手渡した。

ただいまＣＭの撮影中のシュウは。

「はい、カット。はい、やり直し」

「…は…はい、スミマセン……」

ＮＧ連発で苦笑するしかなかった。

監督は睦月ギルド長なのだが、これがえらく厳しい。

「しっかりしなさい、ハンター・シュウ。マシンガンの弾丸くらい剣でさらっと切り捨てられるでしょう」

「さらっとって、さらっと言わんでください…」

「あなた、海を走らせれば沈んでいくばかりだし」

「オレ、バケモノじゃありませんから…」

「仕方ないわねえ。ビルの5階から飛び降りるシーンを先に撮りましょう。簡単だし」

「あ…あの……」

簡単じゃありません。

と言う前に、シュウはロケバスの中に押し込まれた。

（ああ…オレ…、このCMの撮影だけで何日かかるんだろ……）

早くも襲い掛かってくる疲れに、シュウは溜め息を吐く。

（オレの癒し、早く戻ってこないかあ……）

と思ったとき、シュウの携帯電話が鳴った。

そこに出ている癒し――カレンの名前を見て、シュウから笑顔が零れた。

すぐさま電話に出る。

「もしもし、カっレン～っ？　え、何？　早く迎えに来て？　よし分かったすぐ迎えに――」

「うちや」

というリーナの声と失笑に、シュウは赤面する。

「お、おまえかよ…！」

「シュウくんほんまカレンちゃんバカやな。何きゃっきゃしとんねん。失笑すると同時に鼻水出てもうたで」

「き、きゃっきゃなんかしてねえっ！！　で、オレのカレンはどうした！？」

「チャリをガーーッこいでんで」

「は…？」シュウは眉を寄せた。「チャリ…？　おまえらどこで何してんの？」

「うちらな、今めっさ――」

銃声にリーナの声が遮られた。

「――なっ…！？　お、おいリーナ！？　どうした！？」

リーナと、それからカレンの声が聞こえてくる。

「わ、わあああああっ！　あ、あいつら車で追ってきよったで！」

「きゃあああああっ！　ど、どうすれば良いのかしらあああああっ！」

「カっ、カレンちゃん、次の角を右にカックーン曲がってや！」

「わ、分かったのですわ！　カックーンと右に曲がればいいのねっ！」

一体何が起こっているのか。

カレンとリーナの声に混じって、銃声がいくつも聞こえてくる。

シュウは狼狽しながらもう一度訊いた。

「お、おいリーナ、どうしたんだよ！？」

「うちら今やばいことになってんねん、シュウくん！」

「や、やばいって！？」

「変なとこにしゅん間移動してもうてな、そしたら変な男たち５人がおってな」

「へ、変なってどんな！？」

「ハイキョになった町っぽいとこに、いかにも犯罪者ですーみたいな男が５人や！　ダレも住んでへんビルに銃持って隠れておって、めっさアヤしいで！　うちらの正体知ったら必死に追ってくるし！」

「犯罪者らしき男が５人…！？」

とシュウが言うと、睦月ギルド長がはっとしてシュウから携帯電話を取った。

「もしもし、リーナちゃんかしら？」

「ん？　その声は睦月ギルド長やんな」

「ええ、そうよ。リーナちゃんたち、今犯罪者らしき男たち5人に追われているの？」

「せやで！」

「場所は分かるかしら？」

「わからへん！　でもハイキョの町や！」

「廃墟の町…」と睦月ギルド長は鸚鵡返しに呟いた。「そこから東へ向かって逃げていくと、睦月町に出るはずよ。私たちもすぐに向かうわ、それまで頑張っていて！」

「わかったで！　東やな、東！」

睦月ギルド長は電話を切ると、すぐに警察へと連絡した。
その電話が終わったあと、シュウは訊く。

「睦月ギルド長！？　その犯罪者らしき男たちって…！？」

「おそらく、今うちのギルドと警察で追っている強盗犯たちよ。殺人も犯しているわ」

「なっ…」

なぬぁーーー！？

シュウは足の速くなる魔法を己にかけると、走っている車から飛び降りた。

「カレンちゃん、東やて東！　東に行けば睦月町に着くで！　東に向かって走ってや！」

「方向音痴にそんなこと言われてもおぉ……！　ええと、ええとっ」カレンはパニックになった頭で必死に考える。「た、太陽は西から昇って東に沈むのですわあああ！　だから――」

「バカ○ンか」とリーナはカレンの頭をどつき、西の方角を指差した。「太陽は東から昇って西に沈む！　ただいま午前１０時！　東は大体あっちや！　あっちに向かってシャーーッ進んでや！」

「わ、分かったのですわ！　あっちに向かってシャーーッ進めばよろしいのね！　――って…！？」

自転車の周りに銃弾が飛んできて、カレンはますますパニックに陥る。

「きゃっ、きゃあああああああっ！！　シャーーッ進めないのですわあああああっ！！」

「おお、カレンちゃんやるやん。見事にタマかわしてんで。その調子で頑張ってや～」

とカレンに言うと、リーナは斜め後ろへと迫ってきた車目掛けて

弓矢を構えた。

狙うは車の前輪。

「うちをナメたらあかんで！」

ヒュン！

と放たれた矢は、

プスっ！

と見事車の前輪へ突き刺さった。

パンクした車の前輪を見て、カレンが驚きに声をあげる。

「きゃあ！　リーナちゃんすごいのですわ！」

「うちの将来はジュリちゃんの嫁とハンターやからな。これくらい当然やで」

「ジュリちゃんのお嫁さん？　姉さん女房っていうやつですわね！」

「せやで！　女房とミソは古いほどええんや…」と、リーナは弓矢を構え、「でっ！」

矢を放った。

今度は車の後輪へと突き刺さり、車が真っ直ぐ走れず近くの廃家に衝突する。

「きゃあっ！　リーナちゃんすごい！　すごいすごいすごいのですわあああああっ！」

「カレンちゃん、このまま睦月町へ向かってレッツゴオォォォォォやで！」

「ええ！　レッツゴオォォォォですわあああああ♪」

と、安心して自転車を走らせていたのも束の間。

再び聞こえてきた銃声に、カレンとリーナは振り返った。

「なっ…！？」

と、カレンとリーナの目が丸くなる。

「あっ、あいつらもチャリで追ってきよったで！」

「きっ、きゃあああああっ！」

カレンは泣き叫びながら、死に物狂いで自転車をこぎ始めた。

たぶん１６年間生きてきて一番の速さだ。

「カレンちゃん、スカートなんにガニ股でチャリこいでええん？そんな可憐な美少女ヒロインが…」

「そんなこと気にしてる場合じゃないのですわあああああっ！！」

「せやなあ」

うんうんと頷きながら、リーナが再び弓矢を構えたとき。

ガッ！！

と、カレンの運転する自転車の前輪が障害物に衝突。

「――わっ…！？」

後輪が浮き、前方へと倒れていく自転車。

それと同時に、ぽーんと前方へとカレンとリーナの身体が逆さまになって飛んでいく。

宙で身体が仰向けになり、カレンとリーナの視界に空が映る。

（雲一つない快晴です）

なんて、読者さまに本日の天気を伝えている場合ではない。

（――落ちるっ…！）

カレンとリーナはぎゅっと瞼を閉じた。

２つの小さな背が地面に叩きつけられる寸前、

「うおぉりゃあぁぁぁぁっっっ！！」

ずささささーーーっ！！

と、カレン・リーナと地面の間に、シュウの身体が足から仰向けに滑り込んだ。

第７０話　追われてます（後書き）

１月３日の０時４０分ごろメールくださった読者さまへ。

新年早々シャレ言ってるよ、さっすがー♪　アハハヾ（＊´∀`＊）
ノ〃と思ったんだけど違ったんですな。
ネットカフェ難民じゃないですよ、私（笑）
あの日は１日お休みが入ったので執筆が早く進んだわけでござりまし。

あとＭＰについて…。
なーんて書こうか迷ったんですが、リーナに分かりやすく説明してもらったらああなったんです（笑）

あっ！　それから！
もう一度！

サクラサケェェェェェェェっっっ！！！

偏差値タリルヨ。

第７１話　ＣＭ撮影終わりました

飛んでいるカレン・リーナの身体と地面の間を目掛けて、シュウの身体が足から滑り込む。

ずささささーーーっ！！

シュウは胸元にしっかりとカレンとリーナをキャッチした。

「セっ…、セーフっ…！」

カレンがシュウの顔を見て安堵する。

「シュウっ…！」

「おまえら怪我は！？」

「大丈夫、ないのですわ」

「危なかったけどな！」と言ったあと、リーナが追ってきた男たちを指差した。「シュウくん、あいつら捕まえてや！」

「あいつらが強盗犯か！」

「強盗犯っ？」カレンが鸚鵡返しに訊いた。「あの人たち、強盗犯なんですの！？」

「ああ、たぶんな。睦月ギルドと警察が今追ってるんだそうだ」

シュウが後方に振り返ると、睦月ギルド長の乗ったロケバスと3台のパトカーがこちらに向かってやってきていた。

強盗犯たちの動きが止まる。

リュウそっくりなシュウの顔を見てぎょっとし、パトカーを見てギクっとする。

「にっ…逃げろ！」

と、ばらばらの方向へ散らばって逃げ出す強盗犯5人。

「カレン、リーナはロケバスの中に入ってろ」シュウはそう言うなり己に足の速くなる魔法を掛けなおし、強盗犯たちを追いかけ始めた。「おいっ、待て強盗犯共っ！！」

1台のパトカーがシュウのあとを追い、2台のパトカーが別の方向へと逃げていった強盗犯を追う。

ロケバスはカレンとリーナの脇で急停止。

睦月ギルド長がドアを開けて言う。

「2人とも早く乗って！」

カレンとリーナが急いで中に乗り込むと、ロケバスはシュウを追って発進。

睦月ギルド長がカメラマンの膝を叩いて興奮した様子で言う。

「あなた早くカメラ回して！　ハンター・シュウを撮ってえええええ！」

と急かされ、窓からシュウを撮るカメラマン。

睦月ギルド長の様子を見たカレンとリーナは顔を見合わせた。

「なあ、カレンちゃん」

「何かしら、リーナちゃん」

「睦月ギルド長、このシュウくんと強盗犯のリアルな鬼ごっこを撮ってどうする気やと思う？」

「ＣＭ用に編集するのではないかしら」

「せやろか」

「そうだと思われますわ」

「せやな」

ロケバスの外、シュウがとりあえず1人を捕まえる。

捕まえられた強盗犯に警察官が手錠をかけてパトカーに押し込むと、シュウは次の強盗犯のところへと向かって走り出した。

シュウを見ながらリーナが呟く。

「うーん…。ＣＭ用となると、もうちょっと熱くてもええやろか」

「え？」

とカレンが首をかしげたとき、リーナがロケバスの窓から顔を出

した。

「シュウくん、シュウくん！」

とリーナが斜め前を走っているシュウに話しかける。

シュウが振り返ると、リーナが見えてきた強盗犯を指して言った。

「あいつ、カレンちゃんの尻触ったんやで！」

「へっ？」

とカレンがぱちぱちと瞬きをすると同時に、シュウの顔が驚愕した。

「なっ…、ななな、何だって……！？」

「カレンちゃんの尻触ってな、『ゲヘヘ、姉ちゃんええケツしてまんなあ』って鼻の下のばしとった！」

「んなっ…！？」

ブチっ。

と、シュウの中で何かが切れた音。

「まっ、待ちやがれゴルアァァァァァァァァァァっっ！！」

シュウの速度アップ。

睦月ギルド長は興奮度アップ。

「いいっ！　いいわよハンター・シュウ！　その調子よっ！」

「せやろ？　ええやろ？　ＣＭ用なんやから、こう熱くあらへんとな！」

とリーナは満足そうにうんうんと頷き、カレンは苦笑。

「ね、ねえ、リーナちゃん？　あたくし、痴漢された記憶ないのだけれど…」

「ウソも方便やで」

「そ…そう……」

カレンはロケバスの外に目をやった。

「てーめえ、カレンの尻触ってんじゃねーぞゴルァ！！」

「なっ、なんのこ……いでっ、いでででででっ！！」

強盗犯が身に覚えのないことでシュウにシメられている。

（ご…、ごめんなさい……）

と思わず強盗犯に謝ってしまうカレン。

一方のシュウは次の強盗犯の元へ。

次の強盗犯が見えてきたころ、リーナが再びシュウに話しかける。

「シュウくん、シュウくん！　あいつな、カレンちゃんのチチもんどったで！」

「なっ…！？」

「カレンちゃんのチチもみながらな、『姉ちゃん、チチ小さいなあ。オレがでかくしてやんで～、ゲヘヘ』って！」

「なっ、なっ、なっ、なんだとゴルァァァァァァァァァっっっ！！」

ますますブチ切れるシュウ。
強盗犯のマシンガンの銃弾を剣で切り捨てながら突き進む。

「そうっ！　それよハンター・シュウ！　すごいわあああ！」

ＣＭの台本通りの展開に、睦月ギルド長の興奮はさらに増し。

シュウが強盗犯を捕まえ、カレンは見ていられずシュウから顔を逸らす。
カレンの耳に聞こえてくる強盗犯の悶え声。

「グエェェ…！」

「てーめえ、カレンの乳触ってんじゃねーぞコラ！！　あぁ！？」

「しっ、知らね――」

「カレンの乳でかくすんのはオレの役目なんだよおおおおおおおっ！！」

「ガハァッ！！」

シュウにぼろぼろにされた後、パトカーの中へと押し込まれた強盗犯。

（ご…ごめんなさいごめんなさい）

カレンが再び謝ってしまう中、シュウは次の強盗犯のところへ。

そしてリーナが再びロケバスの中からシュウに話しかける。

「シュウくん、シュウくん！　次の奴なんてな、カレンちゃんのこと犯そうとしたんやで！」

次の奴といっても、まだ次の強盗犯の姿は見えていないが。

頭に血が上っているシュウには何の疑問も浮かんでこない。

「なっ、何ぃ！？」

「うちが必死に止めなかったら危なかったで！　『姉ちゃんかわええなあ。オレが可愛がってやんでー、ゲヘヘ』って！」

「ぶっ…、ぶち殺してやらあああああああああああっっっ！！！」

目を皿にして次の強盗犯を探すシュウ。

狭い路地を探し、廃家の中を探し、マンションの階段を駆け上る。

シュウが5階まで駆け上がったとき、警察官がマンションの1階から叫んだ。

「いました！　シュウさん、下です！　下っ――」

強盗犯が警察官の脚を撃ち、警察官の言葉が途切れる。

５階から地上を見つめるシュウ。

「まさかこの展開は…！」

と睦月ギルド長が期待に顔を輝かせた次の瞬間、シュウが躊躇うことなく飛び降りた。

「きゃっ…！」

とカレンは蒼白して口を塞ぐが、シュウは見事着地。

平常のときだったら足に激痛を感じているだろう。

睦月ギルド長の興奮は頂点へ。

「これよ、これ！　これなのよおおおお！　ねえっ、撮った！？　ちゃんと撮ったカメラさん！？　撮ったあああああああ！？」

睦月ギルド長がカメラマンの肩をビシバシと叩く中、シュウは撃たれた警察官に治癒魔法を掛けて逃げた強盗犯を追う。

フェンスを越えようとしていた強盗犯はシュウのドロップキックを食らい、地に落下。

シュウの形相を見て硬直する。

まるでリュウのように恐ろしい。

「てえぇぇめえぇぇぇぇ…！　カレンを可愛がらせていただけちゃうのはオレだけだあああああああっっっ！！」

「ぎっ…、ぎゃあああああああああああっっっ！！」

辺りに響く強盗犯の断末魔のような声。
カレンは耳を塞ぎながら顔を引きつらせる。

（ご…、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ…！）

残りの強盗犯はあと1人。
それを追っていた警察官が遠くから叫んだ。

「シュウさん！　あっちです！　海の方！」

「よし、次ぃっ！！」

最後の強盗犯を追いかけるシュウを見ながら、リーナがにやりと笑う。

「次で最後やんな？」

「り、リーナちゃん、もう――」

もう何も言わないで。

と言おうとしたカレンの言葉を、リーナが遮った。

「シュウくん、シュウくん！　最後の奴が主犯やで！　ボスやボス！　あいつが1番悪いんやっ！！」

「おう、そうか！！　わかっ――」

「カレンちゃんのこと嫁にする言っとったし！！」

「なっ…、ななっ、何だって…！？」

「嫁やて、嫁！　カレンちゃんのこと嫁にするって！！」

「なっ、なっ、なっ……！！」

「カレンちゃんと結婚するんやってえええええええっ！！」

「そっ、それはオレじゃボケェェェェェェェェェェェェェェっっっ！！！」

「え」

とカレンが赤面すると同時に、シュウは海へと向かって全速力。
ロケバスとパトカーも全速力で追いかける。

浜に置いてあるホバークラフト。
どうやら強盗犯たちのものらしい。

最後の強盗犯はそれに乗り込むと、海へと向かって走り出した。
浜から大分離れたところで、シュウたちを嘲笑うかのようにくるくると円を描いてゆっくりと走っている。

「ふん、オレを誰だと思ってやがる…！」

と靴を脱ぎ捨てるシュウを見て、睦月ギルド長がロケバスから降りた。
カメラマンもロケバスから引きずり出し、カメラをシュウに固定させる。

「ハンター・シュウ！　さあっ、台本通りにお願いねっ！」

きらきらと期待に瞳を輝かせる睦月ギルド長。
カレンとリーナもロケバスから降りる。

「こ、これはっ…！」

ごくりと唾を飲み込むリーナ。

「き、気をつけてシュウ…！」

はらはらとするカレン。

「親父の血を引いても…、母さんの血を引いても…！」

最後の強盗犯が乗ったホバークラフト目掛け、構えるシュウ。
一同が注目する中、

「海面走行可能なんじゃボケェェェェェェェェェェっっっ！！！」

シュタタタタターーーっ！！

と海の上を走り出した。

次の瞬間、睦月ギルド長は歓喜に声をあげ、カメラマンや警察官

は目を丸くする。
カレンはシュウが海にドボンしないよう見守り、リーナは腹を抱えて笑う。

「あーーーっはっはっはっは!!　シュウくん、ついにデビューやっ!!　ついにバケモノデビューしよったで!!」

強盗犯もまさかここまで追いかけてくるとは思わなかっただろう。
慌てて全速力でホバークラフトを走らせた。

が、呆気なくシュウに掴まり。

「ゆっ、許してくれえええええええええええっ!!!」

許されることなくシュウにしばかれ、パトカーに乗せられて睦月町の警察まで送られていったのだった。
そしてCMの撮影も無事に成功となった。

その夜、睦月町の旅館にて。

「嘘だったぁっ?」

シュウの声が裏返った。

「せやで、ウソや。全部!」とリーナが笑う。「シュウくんの強盗犯とのリアル鬼ごっこをCMにしようとしてみたみたいやからな、うちがいいCMになるよう手伝ってあげたん!　そのかいがあって、

シュウくん通常以上のことできたやろ？　さっすがうちやで！」

「なっ…んだよ、もう……」シュウは脱力し、へなへなとカレンの膝に頭をつけた。「オレ本気にして、ないことで強盗犯シメちまったじゃん……」

「あ…、あたくしも、ちょっと強盗犯さんたちに申し訳なくて…」

とカレンが苦笑する。

「でも…」とシュウが溜め息を吐いた。「カレンが何もされてなくて良かった……」

「シュウ…」

少し染まるカレンの頬。

「ん？」とリーナはシュウとカレンの顔を交互に見ると、笑いながら立ち上がった。「ああ、ごめんなあ、うち気ぃきかへんかったな。うち温泉入ってくるから、その間にイトナミ終わらせてな」

「え」

赤面するシュウとカレン。

「のぼせてしまうから、３０分以内で頼むわ」

リーナはそういうと部屋から出て温泉へと向かった。

ポケットの中、携帯電話が鳴る。

そこにはリンクの名が出ていた。
リーナよりも先にリンクが声を出す。

「もっ、もしもしリーナ！？　た、たった今、睦月ギルド長から電話きたで！　ぶっ、無事か！？　無事なんか！？」

「落ち着きや、おとん。うちは無事やで」

「そ、そうか。良かったわあ…」と、電話の向こうでリンクが安堵の溜め息を吐いた。「めっさ心配したで、もう…。怖かったやろ？」

父親（リンク）の声を聞きながら、リーナのライトグリーンの瞳に涙がじわじわと浮かんでいく。

「こ、怖くなんかあらへんわっ…！　怖くなんかっ…！」ぽろぽろと零れるリーナの涙。「弱っちーおとんと一緒にすんなやアフォオオオオオオオオ！！」

電話の向こう、リンクが苦笑する。

「素直に怖かった言ったらどうやねん…。おまえ、かわええんやか、かわいくないんやか……」

「かわええに決まっとるやろ！」

「はいはい、そうや――」

リンクの声が途切れ、

「おう、リーナ」リュウの声が聞こえてきた。「無事か」

「リュウ兄ちゃんっ！」とリーナの白猫の耳がぴんと立つ。「なんや、うちのこと心配してくれたんっ？」

「まーな」

「ほんまー？　ありがとう、ええ男に心配されんのは嬉しー――」

「ついでに、電話でいいから俺の出番を作ろうと思ってな」

「……。ついでにやなくて、それが真の目的やろ」

「3話ぶっ続けで俺の出番ねえのは耐えられー――」

「前作の主人公はすっこんでてやー」

リーナは電話を切ると、再び温泉へと向かって歩き出した。

あと約一週間ほど睦月島で仕事をしたあと、葉月島へと帰る。

葉月島へと帰ったら、

「ミラちゃんとレオン兄ちゃん、グレルじっちゃんの誕生日パーティーやなあ」

第７１話　ＣＭ撮影終わりました（後書き）

昨日徹夜したので久々に２日連続更新っ！
ときどき不眠になってしまう姫百合どす…。

昨日の２２時１８分ごろにメールくださった読者さまへ。

笑ったｗｗｗ
そうですかい、リーナはおばあさまに！
私も感動した…（笑）

第７２話　睦月島から帰りました

睦月島から葉月島へと向かう飛行機の中、シュウとカレン、リーナはぐったりとしていた。

「親父や母さんたちも昔そうだったらしいが…」とシュウの顔が引きつる。「血も涙もねえくらい働かされたな、オレたち…」

「ほ、ほんまやで」とリーナも顔を引きつらせて同意する。「まっさかこんなに働かされると思ってへんかったわ。イヤでもしゅん間移動うまーなるわ」

「だ、大丈夫？　シュウ、リーナちゃん…」カレンは苦笑した。「あたくしはただ着いて行っているだけだからずっとマシだけれど、シュウとリーナちゃんは大変でしたわよね」

「ま、まあな」

とシュウとリーナが頷いた。

「でもまあ、良かったよ」と、シュウは溜め息を吐く。「ＣＭ撮影だけで１０００万もらって親父への借金なくなったし、すげー働いたもんだから報酬もたくさんもらったし、おまえたちに怪我もなかった」

「せやなあ。でも、アレやんなあ、シュウくん」と、リーナ。「その報酬、とりあえず８時間後に葉月島に着いたらミラちゃんとレオン兄ちゃん、グレルじっちゃんへの誕生日プレゼントで飛んで、来月のクリスマスでまた飛んで、再来月のお正月でまた飛ぶなあ」

「だな…」シュウ、苦笑。「いやまあ、ミラとレオ兄、グレルおじさんへの誕生日プレゼントはもう睦月島で買ってあるんだけど。クリスマスに親父と共にサンタクロースのオレはカレンと妹たち、リーナにプレゼントで、そして正月にはお年玉やらなきゃなんだもんなあ、オレ…」

「期待してんでー、来年のお年玉。今年のシュウくんからのお年玉はしょぼかったからなあ」

「まだ親父の弟子ハンターだったんだから仕方ねーだろ。来年は今年より期待していいけど、それでもあんま期待すんなよ…」

「なんやねん、またしょぼいんか」

「わり…。――って、オレに期待すんなよ、オレに。オレ、まだ17の少年だぜ!?　オレにお年玉求める時点で間違ってんだよ」

「何甘えてんねん。働き始めたらお年玉あげる方にならなあかんのやで」

「んじゃー、おまえカレンやサラからもお年玉もらうのか」

「んなアホな。うちそんな可哀相なことせえへん」

「って、オレからは奪うのにか!?」

「あはは」

「あはは、じゃねえそコラ！　あぁ!?」

「いだだだだっ！　乙女の柔肌つねんなや、どあほう！」

「いでででででっ！　引っ掻くんじゃねえっ！　これだからメス猫はよ！？」

シュウとリーナの喧嘩が始まり、カレンは慌てて口を挟んだ。

「お、落ち着いて2人ともっ…。ほ、ほらここ、飛行機の中だからっ…！」

「ん？」

と周りの乗客の視線を浴びてることに気付き、シュウとリーナは咳払いをしておとなしくなった。

カレンは続ける。

「え、えと、シュウ？　あたくしクリスマスプレゼントいらないからっ…」

「えええぇ…！？」シュウが驚愕した顔をしてカレンの顔を見る。「お、おま…！　オレからのプレゼントいらねえの…！？　うーわー、すーげーまじショック……！」

「そ、そうじゃないのですわ。…た、大変でしょうっ？　あなたが苦労するところはあまり見たくないのですわっ…」

「カ…カレン…！」シュウの瞳が潤む。「なんっっっっっって、優しい彼女を持ったんだオレ……！」

「ここでイトナミはあかんで、シュウく――」

「しねーよっ！！」とシュウはリーナに突っ込んだあと、再びカレンを見た。「でもオレ、絶対何かプレゼントするから！　あ…、あんまり高価なものは買えないかもしれないけどっ…」

「充分なのですわ」とカレンが笑う。「ありがとう、シュウ」

「よっしゃ。これで来年のお年玉期待できるな」とリーナはにやけたあと、シュウから突っ込まれる前に続けた。「ときにシュウくん、カレンちゃん？　葉月島に着いたらミラちゃんとレオン兄ちゃん、グレルじっちゃんの誕生日やけど、プレゼントは何に？　シュウくんはもう買ったんやろ？」

「おう。皆への土産選んでるとき、ついでに買ってきた。レオ兄には仕事用の戦闘服で、グレルおじさんには特大ナイフ&フォークセット。この間ステーキ食ってるときに力加減間違って折っちまったらしいからな…」

「あたくしも買ったのですわ」と、カレンが続いた。「レオンさんには仕事用の靴で、グレルおじさまには特大サイズのお箸を買ってきましたわ。先日、つるつる滑るサトイモの煮っ転がしをお箸で追いかけているうちに折れてしまったそうだから…」

「あのおっちゃん、ほんまに怪力やなあ。うちは新しいマナ板やんで。この間キュウリ切っとったらマナ板まっ二つになってもうたらしいからな。レオン兄ちゃんにはスッポンの生き血」

「スッポンの生き血ぃ？」シュウは眉を寄せた。「何でレオ兄にそ

んなもの…」

「せやかて、レオン兄ちゃん精力つけな。こっそり毎日サラちゃんの相手してるんやろ？　純モンスターやから心配あらへんのやろうけど、３０過ぎやし一応な。ええでー、スッポンの生き血。精力ゼツリンや！」

「……。リーナおまえ、すげー尊敬するわ。どうやったら9歳のガキがそんなもんを思いつくん――」

「シュウくんもいるか？　まったく若いのにだらしな――」

「いらねーよっ！！」

「素直やないなあ、ほしいくせに」

「違――」

「んで話を戻すんやけど…」と、リーナが顔を強張らせて唾を飲み込んだ。「ミ…、ミラちゃんの誕生日プレゼントは何に……？」

「……」

シュウとカレンの顔も強張る。

「高級写真アルバム」と、シュウ。「…に、ミラの希望で今年の夏の親父の水着姿写真を貼りまくったもの……」

「あたくしからは、睦月島で買った手触りの良いファー生地でテディベアを作ってプレゼントするわ」と、カレン。「…ミラちゃんの

希望で、リュ、リュウさまの髪の毛入りの……」

「う、うちは…」リーナがもう一度ごくりと唾を飲み込んだ。「と、盗聴器ほしい言われたんやけど、どうすれば――」

「やめとけ」シュウがリーナの言葉を遮った。「別の普通の物にしとけ。お、親父が哀れすぎる…」

「せ、せやな。せめてうちだけでも普通のもんをミラちゃんにプレゼントせな。物によっては、リュウ兄ちゃんが苦労することになるからな…。ここ近年のミラちゃんの誕生日のリュウ兄ちゃんは、めっさ苦労しとるからな……マナちゃんの薬で」

「マ、マナちゃんの薬っ？」カレンが鸚鵡返しに訊いた。「マナちゃんがミラちゃんにプレゼントした薬でってこと？」

シュウとリーナが頷いた。

シュウ、リーナと交互に言う。

「一昨年は『飲ませた相手の抱き枕にされちゃう薬』…」

「これはまだ良かったで。飲まされたリュウ兄ちゃんがその晩ミラちゃん抱き枕にして眠っただけやから。もうミラちゃん大喜びやったらしいな」

「母さんも一緒に抱き枕にされてなきゃ、もっと喜んでただろうな」

「せやな」

「そして去年は『飲ませた相手にキスされちゃう薬』なんだが…」

「これはめっさやばかった。リュウ兄ちゃんにキスされて、ミラちゃん鼻血まきちらすし…」

「親父は汗だくになりながら必死に堪えてるのに、身体が言うことをきかないらしくて…」

「ちゅっちゅ、ちゅっちゅしとったな…」

「んでそれ見てるうちに母さんが怒り出して夫婦喧嘩勃発…」

「うち離婚すんのかと思たで、ほんまに…」

「母さんの怒り半端なかったしな…」

「口では必死にキラ姉ちゃんに弁解しとるのに、身体が言うことをきかないリュウ兄ちゃんがめっさ哀れやったで…」

「そ、そう…」

と、カレンの顔が引きつる。

シュウとリーナが深く溜め息を吐き、苦笑しながら声をそろえた。

「今年は一体、どうなるのかな……」

その頃の葉月島。
時刻は0時ちょっと過ぎ。

シュウ宅の書斎。
回転椅子に腰掛けるリュウの左手にはウィスキーの入ったグラス。
それがカタカタと小刻みに揺れている。

右手には携帯電話。
只今リュウは、リンクと電話中だ。

「明日やな、リュウ。シュウたち帰って来るの」

「おう。明日の朝には着くだろうな」

「せやな。…そ、それから」と、電話の向こうでリンクが唾を飲み込む。「あ、明日の夕方からやな、レオンと師匠……と、ミ、ミラの誕生日パーティー」

「お、お、おう」

ますますリュウの左手の中で揺れるウィスキーの入ったグラス。

「お、おまえさっきから声震えてるけど大丈夫かいな、リュウ」

「…な、なあ、リンク」

「な、なんや?」

「…ミ、ミラ、今年はマナからどんな薬もらうと思う」

「お、一昨年と去年を考えると、エスカレートしてきとるからな。一昨年は抱き枕にされちゃう、去年はキスされちゃう…。最近ますますファザコンのミラを考えると、こ、今年は、ま、まま、まさかっ……！？」

「…ま、まままままさかっ……！？」

途切れる会話。

間の後、リンクが口を開いた。

「お…、親友（おまえ）の貞操は、おれが守ったる」

翌朝7時過ぎ。
シュウとカレン、リーナ帰宅。

シュウとカレンが屋敷の中に入ると、朝食後の雰囲気だった。
仕事や学校へ行く準備でばたばたとしている。

「おお、おかえり、シュウ、カレン」

とキラに出迎えられたあと、シュウとカレンは2階へと上って行った。

自分の部屋へと向かう途中、ミラが三つ子の部屋へと入って行くのが見えて一度立ち止まる。
シュウとカレンは顔を見合わせたあと、三つ子の部屋の前で耳を

済ませた。

ミラのはしゃいだような声が聞こえてくる。

「ねね、マナ。私への誕生日プレゼントの薬、ちゃんとできたっ？」

続いてマナの声。

「できたよ、ミラ姉ちゃん…。パーティーのときに渡すから楽しみにしてて…」

「きゃあっ！　ありがとう、マナ！　お姉ちゃん嬉しい～～っ！」

一体どんな薬をもらうのだろう？

と、シュウとカレンは苦笑しながらあれやこれやと考える。

「でもミラ姉ちゃん…」とマナの声が聞こえてきた。「大丈夫なの…？　そんな薬パパに飲ませて…」

だから、そんな薬ってどんな薬？

と気になって、さらにドアに耳を寄せるシュウとカレン。

ミラが笑いながら答えた。

「大丈夫よお、パパが1日くらい私と浮気したって♪」

ソレ、大丈夫じゃないと思います。

三つ子の部屋のドアの前、シュウとカレンの顔が驚愕した。

第７３話　長女の誕生日にて…　～前編～

三つ子の部屋の前、シュウとカレンの顔が驚愕する。

「それじゃ、マナ。今夜の私とレオ兄、グレルおじさんの誕生日パーティーのときを楽しみに待ってるわね」

そんなミラの声が三つ子の部屋の中から聞こえた。

（出てくる…！）

と察したシュウとカレン。

顔を見合わせたあと、シュウがカレンを脇に抱えて自分の部屋へと飛び込んだ。

聞こえてくるスリッパの音から、ミラが１階まで行ったのを確認。

そのあと、シュウはカレンを床に降ろして口を開いた。

「お、おい、聞いたかカレン」

「き、聞いたのですわ、シュウ。ミラちゃん、たしかに『大丈夫よお、パパが１日くらい私と浮気したって♪』と言ったのですわ！」

「そ、それってつまり、今日の誕生日パーティーでミラはマナからどういう薬をプレゼントされるってことだ…！？」

「『飲ませた相手の浮気相手にされちゃう薬』とか…！？」

「『飲ませた相手に欲情されちゃう薬』とか…！？」

「と、とにかくリュウさまとミラちゃんが親子の一線を越えてしまうかもしれない危機なのですわっ…！」

「お、おう…！　睦月島への出張疲れで休んでる場合じゃねえっ…！　今日のミラとレオ兄、グレルおじさんの誕生日パーティーは目を光らせてねーとっ…！」シュウは冷や汗を掻きそうになりながら、ごくりと唾を飲み込んだ。「い、いいか、カレン。今日オレたちは、ミラが親父に薬飲ませないようにするんだ！　親父をミラから守るんだ！　あと、ミラが親父にヤバイ薬飲ませようとしてること、母さんには言わないようにっ！　一昨年、去年に引き続き今年もミラがそういうことしようと考えてるとなると、さすがに母さんとミラの母娘関係にヒビが入るかもしれねーしっ…！」

「が、合点承知なのですわ師匠っ！」

「って言っても、オレたちだけじゃ守れるか不安だから協力を……」

シュウは携帯電話を手に取った。

夕方。

シュウとカレン、キラが作ったご馳走がリビングのガラステーブルの上に並ぶ。

リビングの入り口から向かって左側の3人掛けソファーの上。

左からカレン、シュウ、リュウ、リンク、ミーナがぎゅうぎゅう詰めになって座っている。

そしてリュウの膝の上にはキラ、その足元――ガラステーブルの前にはユナ・マナ・レナ。

（よし。これだけ親父の周りに集まってりゃ、ミラの奴、親父に近づけねーから大丈夫だよな）

と判断したシュウ。

キラがぱちぱちと瞬きをして言う。

「今日のリュウは人気者だな。みんなどうかしたのか？」

「ど、どうもしねーよ母さん」とシュウがリュウの肩を組み、「オレ息子なんだから、親父が好きでも何にもおかしくねーだろっ？」

「そそ。ど、どうもしてへんで、キラ？」とリンクもリュウの肩を組み、「おれリュウの親友なんやから、リュウの隣にくっ付いて座ったっておかしくあらへんやろっ？」

「そ、それに、あたくしが恋人のシュウの隣に座りたいのは当たり前ですしっ…？」

とカレンが続き、

「わ、わたしも旦那の隣に座りたくて仕方ないぞーっ」

とミーナも続いた。

シュウが協力を頼んだのはカレンに加えてリンクとミーナ。

それからカレンがサラにも協力を頼んだ。

また、シュウとリンクという男にべったりと引っ付かれておきながら、リュウが何1つ言わないのは、前もって伝えられているから。

今日のパーティーで、ミラから護衛すると。

それはリュウにとって、正直有難い。

（悪いな、ミラ。でもパパは父娘の一線を越えられねえんだぜっ…！）

リュウの足元に座らされた三つ子のうちの、レナが眉を寄せて言う。

「あたしたちがここに座らされた理由が分かんないよ、兄ちゃん」

「いいじゃん、理由なんか」と言い、ユナが甘えてリュウの膝に凭れ掛かった。「あたしパパ大好きだからここでいーもん♪」

「あたしは何となく分かるけどね…」と、マナ。「兄ちゃんたちの考えてること…」

「ほお、それは一体何――」

「そ、それじゃあっ」とシュウは慌ててキラの言葉を遮った。「サラ、リン・ラン、本日の主役たちを呼んでくれ」

「はいなのだ、兄上！」

とリン・ランがミラの待つ2階へと向かい、サラはレオンに電話

をかける。

「もしもしレオ兄？　パーティーの準備できたよー」

電話を切って数秒後、リビングの中にリーナの瞬間移動でレオンとグレルが現れた。

「瞬間移動上手になったね、リーナ」とレオンがリーナの頭を撫でたあと、シュウたちに顔を向けてぱちぱちと瞬きをした。「どうしたの？　そんなに密集して…」

「き、気にしないでいいから本日の主役はパーティーを楽しんでくれ、レオ兄。それからグレルおじさんも」

とシュウが言うと、リビングの入り口から向かって右側の3人掛けソファーにグレルが腰掛けた。

その隣にレオンが腰掛け、またその隣にサラが腰掛ける。

リーナは、ガラステーブルを挟んで三つ子と向かい合って座っていたジュリの隣に腰掛けた。

「レオ兄、もっとグレルおじさんの方に詰めて」

と、サラ。

自分の隣にもう1人分のスペースを作る。

（お姉ちゃんはココ、アタシの隣っと…。んで見張ってないとね、親父のとこ行かないように…）

少しして、リン・ランがミラを連れて戻ってきた。

「わあ、すごいご馳走！　ありがとう、ママ、お兄ちゃん、カレンちゃん！」

と笑顔になったミラだったが。

リュウとその周りを見て、眉を寄せた。

「どうしてお兄ちゃんたち、パパにくっ付いて座ってるの…？　それじゃ私がパパの近くに座れな――」

「まあまあ、お姉ちゃん」

サラがミラの言葉を遮った。

自分の隣に作ったスペースを手でぽんぽんと叩きながら言う。

「お姉ちゃんはココだよ。アタシのとーなーりっ♪」

ミラの手をぐいっと引き、サラが半ば強引にミラを自分の隣に座らせた。

「リン・ランはそこ座ってな」

とサラが空いていた自分の足元――リーナの隣を指すと、リン・ランがそれに従った。

全員が席に着いたところで、いつも通りリュウが口を開く。

今日は緊張した面持ちだ。

「んじゃあ、ミ、ミラとレオン、師匠の誕生日始めんぞ。プ、プレゼント渡せー」

との命令で、皆がミラとレオン、グレルに誕生日プレゼントを渡す。

「全員渡したな？　よし、く、食え」

皆が乾杯をして料理を食べ始める。

だが、ミラだけはもらったプレゼントたちに目を落とした。

そしてマナからのプレゼントを手に取る。

隣に座るサラが横目に見つめる中、ミラがそれをわくわくとした様子で開けた。

箱の蓋を開けてまず目に入るのは一枚の紙。

マナの字で祝いのメッセージが書かれてある。

『ミラ姉ちゃん17歳のお誕生日おめでとう』

サラが注目したのはその下に書かれてあるメッセージ。

『約束の「飲ませた相手にこの世一愛されちゃう薬（人間相手用）」を贈ります。今年はいつもより強力に出来上がりました』

ビールを飲んでいたサラは、噴出しそうになりながらリュウの顔を見た。

心の中で叫ぶ。

（や、やばいよ親父ぃぃぃぃっ！）

サラの驚愕した表情を見たリュウ。

顔には出さないが、心の中で動揺する。

（オ、オイ、どうしたサラ…！？　どんな薬を見たんだ、オイ…！？）

（いつも以上に強力って、やばすぎるよ親父っ！　マナの薬、タダでさえ強力だってのにっ！）

（オ、オイ、サラ！？　口に出してくれねえと分からねえよ…！）

（あああっ、大変だ！　こんな薬飲ませたら大変だよ！　ママぶち切れるよ！　離婚までは行かなくても家庭内別居が始まっちゃうかも！）

（オ、オ、オ、オイ、サラ！？　おまえ顔真っ青だぞ！？　大丈夫か！？　な、何を見た！？　ど、どんな薬を見た！？　な、なあオイ、サラ…！？）

驚愕したサラの顔。
動揺が隠し切れないリュウの瞳。

シュウは2人を交互に見たあと、ビールを飲みながらさりげなく背筋を伸ばした。
首も限界まで伸ばし、ミラの手の中にあるマナからのプレゼントを斜め上から覗き込む。

（――ちょ、待っ…！）

ブハっ！

と、シュウの口からビール噴射。
それが足元に座っていたレナの頭に掛かる。

「うっわあ！　なっ、何すんの兄ちゃあああああああああん！」

「ごっ、ごめん、レナっ…！」

シュウは慌ててレナの頭を布巾で拭きつつ、隣のリュウの顔を見た。

（や、やべえよ親父っ…！）

サラに続いて驚愕したシュウの顔を見て、リュウの動揺が増す。

（オ、オイ、シュウどうした…！？）

（やべえ、やべえよ親父っ！　想像してた『飲ませた相手の浮気相手にされちゃう薬』や『飲ませた相手に欲情されちゃう薬』より、もっとやべえよ親父っ！）

（な、ななな、なんだよシュウ…！？　心の中で喋れられたって伝わらねえって…！）

そんなリュウの胸中を察したシュウ。

「てっ、手が滑ったあああああああっ！」

とリュウの膝の上にいるキラの黒猫の耳を両手で塞ぎ、リュウの耳元に口を寄せた。
キラを聴力を継いで良く利いてしまうミラの黒猫の耳に聞こえな

いくらい、小さな声を出す。

「（ミラから薬飲まされたら）家庭内別居の危機っ…！」

「――！？」

シュウに続いてビールを噴出しそうになるリュウ。

恐る恐る斜め向かいに顔を向けた。

そこには、

「うふふ…、ふふふふ。やだぁん、パパってばぁん…（ハート）」

これから起こるだろうことを想像して陶酔しているミラの姿。

リュウと目が合い、ミラがにっこりと笑って立ち上がった。

「パパ、私がお酌するわっ♪」

ミラの左手にしっかりと握られている『飲ませた相手にこの世一愛される薬』の入った小瓶。

それを見たリンクが慌てたように口を開いた。

「いやいやいや！　ミラはええから座っててや！　今日の主役やねんからな！」

「そそっ、座っててよお姉ちゃんは！」

とリンクに続いて言い、ミラを座らせようとしたサラだったが。

「サラ、から揚げ食べる？」

と愛するレオンの声が聞こえて振り返った。

「食べるうっ！」

「ハイ、あーん」

「あーん♪」

なんてやっているうちに、ミラはサラの傍らからリュウの背後へ。

（しっ…、しまったあっ！）

とサラがから揚げをあまり噛まないうちに飲み込んでしまうと同時に、サラの向かいのソファーに座ってる一同――シュウとリュウ、カレン、リンク、ミーナの顔が強張った。

（しっ、しまった…！）

今さらになって気付く。

（ソファーの後ろガラ空きっ！！）

と焦ってももう遅い。

ミラがソファーの後ろへと向かい、リュウの首に巻きついた。

「うふふ、パぁパ♪　私たちもサラとレオ兄に倣ってぇ…」と、リュウの口に薬の入った小瓶を近づけるミラ。「ハイ、あーん♪」

「む？」と、キラが不審そうな顔をしてミラを見た。「それは何だ、ミラ」

「変な薬じゃないわ、ママ♪」

「そう…か……」

まだ不審に思いながらも、ミラを信じて顔を逸らすキラ。

ミラの目は再びリュウへ。

「はい、パぁパ♪　のーんーでっ♪」

「…っ……！」

リュウの体内から冷や汗が滲み出す。

（や、やべえ…！　こ、断るんだ俺っ…！　なるべくミラが泣かないようにっ…！）

リュウは薬の入った小瓶を持っているミラの手をぎゅっと握ると、無理矢理作った笑顔をミラに向けた。

「わ…、悪いな、ミラ。パパはから揚げを先に食いてえんだ」

「こっちを先にお願い、パぁパ♪」

「…いっ…、いや、そのっ…パ、パパパパパは、か、から揚げが食いた――」

「パパ」とリュウの声を遮り、ミラが瞳を潤ませる。「私のお願い、聞いてくれないのっ……？」

「うっ…」

やべえ、泣かれる…！

リュウが引きつったとき、リンクがミラの手から薬の入った小瓶を奪った。

「あっ…！　か、返して、リンクさんっ」

「あ、あかんわ。リュウ嫌がってるやろ、ミラ」

「そんなことないわっ」

「いっ、嫌がっとんの！　リュウは嫌がっとんの！　親友のおれにはよう分かんの！　せやからやめえや、ミラ！」

「パパは嫌がってなんかないわ！　娘の私にはよーく分かるんだから！　だから返して、リンクさんっ！」

「嫌がっとるったら嫌がっとる！　あかんったら、あかん！　大人の言うこと聞きぃやミラ！」

「嫌よっ！　返してったら返してっ！」

ミラとリンクの間で奪い合いになる薬の入った小瓶。

「あかん言うてんのが分からんのかミラ！　ええかげんにせんと怒るでおれ！」

「リンクさんこそいい加減にしてほしいわ！　それ、私がマナからもらったプレゼントなのよ！？」

「せやから何やねん！？　リュウは嫌がっとんやで！？　何で無理矢理飲ませようとすんねん！　あかんったら、あかんからな！　絶対あかんからな！」

「もうっ！　返してったら、返してっ！　かぁぁえぇぇしぃぃてえぇぇぇぇぇぇっ！！」

興奮したミラにより、リンクの手から強引に奪われた小瓶。

その瞬間、宙に飛び散った中の液体――『飲ませた相手にこの世一愛されちゃう薬』。

「あっ」

零れた…！

と液体を目で追い、顔を上げたリュウ。

その口の中に一滴…。

そしてリュウと同時に、

「げっ」

と声を上げていたシュウ。

その口の中にも、薬が一滴舞い込んだ。

第７３話　長女の誕生日にて…　～前編～（後書き）

９日の２３時５４分にメールくださった読者さまへ。

うん…ｗ

ボスだって分かってたよ（笑）

第７４話　長女の誕生日にて…　～後編～

ミラの手の中の小瓶から宙へと飛び散った液体――『飲ませた相手にこの世一愛されちゃう薬』。

それがシュウとリュウの口の中へと一滴ずつ舞い込んだ。

（――やべっ…！）

と驚いた反動で、それをごくりと飲み込んでしまったシュウとリュウ。

「うっ…」シュウは慌てて声をあげた。「うわあああああっ！　やっ、やべえええええっ！　飲んじゃったよオレェェェェっ！！」

「お、落ち着いてシュウ」

「おっ、落ち着けねーよカレンっ！　おまえいいのかよ、短い間とはいえオレがミラのことこの世一愛してもっ！！」

「そ、その薬、人間相手用でしょう？　シュウは大丈夫なんじゃ？」

「…あ」

そうだった。

人間用の薬なんだから大丈夫だよな。

オレ、ハーフだし。

とシュウが落ち着きを取り戻したのは、ほんの一瞬。

はっとして傍らにいるリュウの顔を見る。

「おっ、親父!?　まさか今、親父も――」

薬飲んだのか!?

と訊こうとしたシュウの言葉が遮られる。

「ミっ」とリュウが膝の上のキラの腰を持ち、「ラァァァァァァっっ!」

ポーンと、キラを投げ（捨て）た。

「ふにゃあっ!?」

急に投げられて驚きに声をあげたキラ。

向かいのソファーに座っていたレオンにキャッチされた。

「――あっ…ぶないなあっ!　キっ、キラ大丈夫っ…!?　…ちょっとリュウ、いきなり何てことすんの!?」

そんなレオンの問いは無視され。

リュウが背後にいたミラの身体を抱き上げてソファーの上まで引っ張り、そして自分の膝の上に乗せた。

「ミラ…、そろそろパパと結婚するか。親子で結婚できるよう、王に願い出てくるから」

と、リュウ。

（ああ…、つまり薬飲んじゃったのね…）

シュウとカレン、サラ、リンク、ミーナが苦笑する一方、キラとレオンが驚倒した。

「なっ…何を言ってるのだリュウ！？」

「そうだよ、いきなり何言って――」と、レオンは言葉を切り、そのあと察して苦笑した。「…ミラ、今年はリュウにどんな薬飲ませたの…」

「くっ、薬っ…！」はっとしたキラ。「そ、そうか、マナからミラへの誕生日プレゼントの薬のせいかっ！　…って、さっき（前話）母上がそれは何だと訊いたとき、変な薬ではないと答えたではないかミラっ！」

「怒らないで、ママ。本当に変な薬なんかじゃないわ」

と、ミラ。

「でも明らかにリュウの様子がおかしいではないか！　どんな薬か言うのだ、ミラ！」

「この薬はぁ」とミラがにっこりと笑い、「ただの『飲ませた相手にこの世一愛されちゃう薬』よ♪」

「なっ…！？」キラ、驚愕。「じゅっ、充分変な薬ではないかっ！　何を考えているのだミラっ！」

「何って、パパにこの世一愛されてみたいんだもん♪　いーじゃない、1日くらい。ママはいっつもパパにこの世一愛されてるんだから」

「でっ、でもリュウは母上の飼い主でっ…、夫でっ……！」

「今日は私の誕生日なのよ、ママ？　1日だけパパを貸してほしいな」

「でっ、でも――」

「私だって、パパにこの世一愛されてみたいわ！　ママばっかりずるい！　ずるいずるいずるっ！！」

「うっ…」ミラに押されたキラ。「…わ…分かったのだ……」

ぐっと堪え、そう呟いた。
レオンとグレルの間に小さくなって座る。

「ありがと、ママ大好き♪」

とミラがキラに笑顔を向けたあと、リュウの首に抱き付いてはしゃぐ。

「す、少しの間の辛抱だよ、キラ。リュウは一滴しか飲んでないんだから、ほんの少しの間だけだよ」

「分かってるのだ、レオン…」

「で、でもさ…」

と、サラが口を挟んだ。
薬に添えられていた紙を手に取って言う。
「こ…、今回はいつも以上に強力にできたらしいよ、薬…」と、マナを見、「そうなんでしょ？」
マナが頷いて言う。
「一滴飲んだなら…、うーん…、3時間くらいは効いてるかな…」
「長っ…」
思わず顔を引きつらせてしまうシュウたち。
一方、ミラは不服そうに声をあげた。
「えー？　ヤダ、3時間だけ？　もうちょっと…」
とリュウに再び薬を飲ませようとするミラの手から、すかさずリンクが薬を奪い取った。
「これ以上は絶対にあかん！　ミーナ、残りの薬トイレに流してきてやっ！」
「分かったぞリンク！」
と、リンクから薬を受け取り、急いでトイレへと駆けて行くミーナ。

「あっ！　ミーナ姉っ、待っ――」

待って！

とミーナへと伸ばしたミラの手を、リュウが握った。

「他はいいから俺を見てろ、ミラ」

「んもうっ、パパってばぁん」ミラがリュウの首にしがみ付く。「心配しなくても私にはパパしか見えてないわっ♪」

「俺もおまえしか見えねーぜ、ミラ」

キラの左手の中、タンブラーが震える。

「ねえ、パぁパ？　私のこと、この世一愛してる？」

「当たり前だろ、ミラ」

バリンっ

と割れたキラの左手の中のタンブラー。

「本当にこの世一私を愛してる？　ママよりも？」

「ああ、キラよりもだ」

グニャっ

とキラの右手の中で曲がったフォーク。

「本当っ？　嬉しい、パパ！　ママよりも私のこと愛してるなんて！」

「キラには飽きた」

カタカタカタ…

小さく揺れだした屋敷。

（や、やばい）

蒼白し始めるシュウたちの顔。

リュウが続ける。

「キラと永遠の愛を誓ったことが今になると謎だぜ。俺、今までよく天然バカ黒猫（キラ）と続いたな」

ガタガタガタ…！

増して行く震動。

「キ、キラ、落ち着いて！」

レオンが慌ててキラを抱き締め、

「おっ、親父もう何も言うなっ！！」

とシュウがリュウの口を手で塞ぐ。

が、リュウがシュウの手を離して続けた。

「ま、ミラを産んでくれたことは感謝してるぜ、キラ。俺もうおまえいなくてもいいから、おまえ好きにしていいぞ。野生に戻るなり、王子のペットになるなりすれば？」

ガタガタガタ！！

大きく揺れだした屋敷。

バリリリリリーン！！

とリビングの照明に加え、いつだったかのように全室の窓ガラス粉砕。

真っ暗になったリビングで悲鳴があがる中、キラが立ち上がった。

「リュウ！　おまえは忘れたのか！？　私に言ったではないか！今から約１８年前、私に言ったではないか！　骨になっても一緒にいようって…、言ったではないかっ！！」

「男心と秋の空って言うだろ」と溜め息を吐いたリュウ。「おまえ、また窓ガラス割りやがって…。ガラス屋に電話しとけよ」

そう言いながら、魔法で光の玉を作って浮かべた。

灯りが点され再び明るくなったリビング。

一同の瞳にキラの涙が映る。

「――！？」

リュウを覗く一同、衝撃。

真っ先にリュウに飛び掛ったのは、トイレから戻ってきたミーナ。
リュウの頬を引っ掻く。

「おのれっ！　おのれリュウっ！　たった一滴飲んだだけで、おまえはキラへの想いを忘れてしまったというのか！？」

「いってーな、ミーナ。何しやがる」

「うるさいっ！　黙れ黙れ黙れっ！　わたしの愛する姉を泣かせよって、許さぬぞっ！！　たかが一滴飲んだだけだというのに、何て情けないのだっ！！」

「そうだそうだっ！！」シュウが続く。「見損なったぜ親父っ！！　親父の母さんに対する愛のでかさは異常だろオイって思う反面、尊敬してたのによっ！！　たかが一滴飲んだだけで、ああー情けねえっ！！　所詮タダの人間だなっ！！　オレが殴って元に戻してやらあああああああっ！！」

キラの涙を見た衝撃で、完全に頭に血が上ったシュウ。
リュウの胸倉を掴む。

「兄ちゃん…、落ち着いて…」

と、マナがシュウの膝に手を乗せた。

「落ち着けねえよマナっ！！　この親父最低最悪だっ！！　5、6

発殴らねえと気が済まねえっ！！」

「あんまり言わない方がいいよ、兄ちゃん…」

「はあ？　なん――」

「兄ちゃんもこれから薬効いちゃうんだから人のこと言えなくなる…」

「おう、そうか！　オレもこれから薬効いてミラをこの世一愛しちゃうのか！　――て…？」シュウは眉を寄せてマナの顔を見た。「な、何だって？」

マナがもう一度言う。

「兄ちゃんもこれから薬効いてくるよ…」

「…そ、そんなバカな。だって人間用に作った薬なんだろ？　オレ、ハーフなんだから効くわけが……って、あ、あれ……？」

身体がおかしい…？

突然シュウに襲い掛かってきた異常。

どくんどくんと強い動悸がする。

マナが続ける。

「そう、人間用の薬…。でも、ハーフにまったく効かないわけじゃないよ…」

「…ミ…ラ……」

シュウの瞳がミラに奪われる。

「だって、あたしたちハーフはモンスターと人間の間にできた子…」

「ミ、ミラ……！」

熱くなるシュウの胸。

「あたしたちに流れる半分の血は、パパの血――人間の血…」

「あ…、あああっ、ミラっ……！」

ミラに伸びるシュウの手。

「人間より速効性はないものの、じわじわと効いてくるんだよね…」

「ミっ、ミラ好きだあああああああっっっ！！」

と、襲い掛かるようにミラを抱き締めたシュウ。

「――なっ！？」

とカレンとリン・ランが衝撃を受けると同時に、ミラが悲鳴をあげる。

「きゃっ、きゃあああああっ！　ちょ、おっ、お兄ちゃん何！？」

「好きだ、ミラ！　愛してる、ミラ！！　この世一だっ！！」

「は、はぁ!?　やっ、やだっ、ちょっと離して!!」

「嫌だっ!!　離さねえっ!!　今夜はオレとフィーバァァァァァァァァァァっっっ!!」

「ふっ、ふざけないでお兄ちゃんっ!!　嫌よお兄ちゃんに抱かれるのなんかっ!!」

「えっ!?　い、嫌!?　嫌なのか!?　銅メダル嫌なのか…!?」

「お兄ちゃんじゃ嫌っ!!　銅メダルも嫌っ!!　私はパパと銀メダルがいいのっ!!」

「なっ、なぬぁーーー!?」

「ふ」とリュウが短く笑い、ミラからシュウを引き剥がす。「ご愁傷様だな、シュウ。物足りねえ銅メダルはすっこんでろ。ミラを抱けるのはこの俺だけだ」

「なっ、なんだと!?　父親のクセしてミラに手ぇ出すんじゃねえっ!!」

「てめえこそ兄貴のクセしてミラに手ぇ出すんじゃねえよ」

「なん――」

「ド変態が」

「そっ…、そっくりそのままお返しするわあああああああああ

あっっっ！！！」

「あぁ？　やんのかコラ」

「上っっっ等だゴルァァァァァァァァっっっ！！！」

ソファーから立ち上がり、始まるシュウとリュウの殴り合い。

シュウＶＳリュウとなれば、結果は見え見え。

「オラオラオラオラァっ！！　この俺に喧嘩売っておきながら早々にくたばってんじゃねーぞコラァっ！！」

「ガハァッ！！　ちょ、おっ、親父、し、死ぬっ……！！」

と、リュウに半殺しにされるシュウ。

そんなことをしているうちに、

「シュウのバカっ…！」

カレンは自分の部屋へと駆けていってしまった。

そして、キラは屋敷の外へと出て行ってしまった。

――3時間後。

シュウとリュウ、ミラも、それを必死に押さえつける一同からも息が切れていた。

ガラステーブルの上の料理はぐちゃぐちゃ。
ガラスのなくなった窓から入ってくる冷たい空気が、汗だくになった一同の肌に心地良い。

「お…、治まったっ……！」

と、シュウとリュウ。
ぐったりしている場合ではない。

「キラっ…！」

リュウは慌ててキラを探しに外へ飛び出し、シュウは真っ青になって2階へと駆け上った。

「カっ、カレェェェェェェェェェェンっ！！」

カレンの部屋のドアをどんどんと叩くシュウ。

「あっ、開けてくれカレンっ！！　許してくれカレンっ！！　マナの薬が強烈すぎたんだっ！！　許してくれえええええええええっっっ！！」

「嫌っ！　許してあげないのですわっ！」

「ゆっ、許してくれっ！！　いえ、許してくださいお嬢様っ！！このとーりっ！！」

と、カレンの部屋のドアの前で土下座するシュウ。

が、カレンの声は変わらず怒ったまま。

「許さないったら許さないのですわっ！」

「ゆっ…、許してくれよっ！　頼むからっ…！　オレがこの世一愛してんのはカレンっすっ…！　本当なんすっ…！」

「どうかしら」

「ほっ…、本当だよ、本当にっ…！　信じてくれよっ…！」シュウ、頭を下げたまま半泣き。「許してくれよ、カレン…！　お願いだからっ…！」

「……」

返ってこないカレンの返事。

シュウは必死になって声をあげた。

「オっ、オレがこの世一愛してんのはカレンっ！！　コレまじ超すーげー本当っ！！　それからオレが抱きたいのはカレンだけっ！！　今夜も明日からもオレはカレンとフィーバーしてえのっ！！　おまえとフィーバーっ！！　フィーバァァァァァァァァァっっっ！！！」

「ちょ…」

「フィーーーバァァァァァァァァァァァァァっっっ！！！

さ・せ・てえええええええええええええええええっっっ！！！」

と、叫びながら激しく頭をぶんぶんと上下に振って土下座するシュウに、カレンが溜まらず赤面しながらドアを開けた。

「や、やめてちょうだいっ、恥ずかしいっ…！」

「カレンっ…！」と顔をあげ、笑顔になったシュウ。「許してくれるのかっ？」

「ゆ、許してあげるからっ…」とカレンは廊下をきょろきょろと見回し、シュウを部屋の中に入れてドアを閉めた。「フィーバーフィーバー叫ばないでっ…！」

「うぃーすっ！！　お許しいただきオレ超感激っすううううううっ！！」

とカレンを抱き上げてベッドに向かうシュウ。
カレンがじたばたとして暴れる。

「やっ、やだっ！　まだシャワー浴びてないのですわっ！」

「それじゃ今夜は風呂場でフィーバーってことっすねお嬢さん！？」

「ちっ、ちが――」

「いつもより燃えるぜヒャッホオォォォォォォォォイっ！！」

「いっ、いやあああああああっ！！」

――30分後。

カレンの部屋のバスルームの、バスタブの中。
カレンを膝の上に抱っこしているシュウの顔がにやけている。

「ぐふふ…、いつもに増してデリシャスだったぜっ…！　…ところで」

と、シュウの顔は顔を強張らせた。
ごくりと唾を飲み込む。

「お…、親父の方は大丈夫かなっ……」

第７５話　思い出のあの場所

屋敷から飛び出していってしまったキラ。
それから約３時間後、平常に戻ったリュウも屋敷を飛び出した。
キラを探しに。

（あそこだろうな）

リュウには分かっている。
キラの居場所が。

足の速くなる魔法をかけ、リュウはそこへと向かって走る。

（キラはきっと、あの場所にいる）

――とあるマンションの７階。

広めのテラス。
錆付いてきた手擦り。

リビングにある、もう大分古くなった２つの３人掛けソファー。
屋敷のリビングにあるものよりも、一回り小さいガラステーブル。
壁に掛けられた一見謎の絵と、ダイニングキッチン。

以前は武器だらけだった部屋と、洋服だらけだった部屋。

寝室にある、長身の持ち主の背丈に合わせて作られたベッド。
思い出のそのベッドに突っ伏して、キラは泣きじゃくっていた。

ここはリュウとキラが結婚前に暮らしていたマンション。
現在暮らしている屋敷を建てるときにこの部屋を買い、当時の家具などはそのままになっている。

たまに掃除に来るときの他に、キラはときどきここに来たくなる。
今日のように。

（分かっている…！　リュウは薬を飲ませられただけだって、分かっている…！　でも…！）

でも傷付いた。
リュウの言葉に、態度に、とても傷付いた。

インターホンが3回連続で鳴る。

キラは咄嗟に寝室に鍵を掛けた。
誰がやって来たのかなんて分かっている。

玄関の外からの声が、キラのよく利く黒猫の耳に聞こえてくる。

「開けろ、キラ」

それは主命令。
でもキラはむくれたまま開けようとはしない。

「開けろ」

2度目の主命令。
キラは開けない。

「開けろ」

3度目のその声は強かった。
でも、キラは戸惑いながらも開けなかった。

「仕方ねーな…」

玄関の外から聞こえてきた溜め息。
その次の瞬間、

ガチャガチャ…、バキィっ！

玄関の鍵が呆気なく破壊された。

（おっ…、おまえはグレル師匠かっ！）

キラは驚倒したあと、あたふたとしながら寝室のあちこちを見回した。
主が玄関のドアを開けて入ってくる。
慌てて隠れる場所を探した。

（あああっ、どっ、どこに隠れてもすぐ見つかるぞっ…！）

主の足音が寝室の前で止まる。

「そこにいるのは分かっている。観念して開けろ、キラ」

――って、それでは私が悪いことをして逃げ隠れしているみたいではないかっ！

と口に出して突っ込みたくなる中、キラは寝室の中央で主に見つからない方法を考える。

（どっ、どうすれば良いのだ！　かっ、考えるのだ私っ！　考えるのだ賢い私っ…！）

寝室の外から聞こえてくる溜め息。

「寝室のドアまで壊したくねえ。だから開けろ、キラ。あと１０秒だけ待ってやる」

――って、つまり１０秒後には破壊する気満々なんだな、私の主よ…。

と思わず顔が引きつってしまいながら、キラは引き続き主に見つからない方法を考える。

そして、

（あっ、そーだ！）

思いついた。

（どこに隠れても見つかってしまうなら、コレしかないぞ！）

心の中、キラはふふふ、と笑う。

（コレしかない、コレしか。コレならば大丈夫だ！　マネキンのフリならば！　さすが私っ！　己の賢さには惚れ惚れしてしまうぞーっ）

と、誇らしげに胸を張るキラだったが。

（…で、でもマネキンってどういうポーズ取っていた…！？　ポーズ…、ポーズ…、ポージングっ…！）

必死に考えるキラ。
はっと頭に思い浮かぶ。

（そういえば昔、グレル師匠が月刊・ＮＹＡＮＫＯに載ったときに何かポーズを…！　ええーと、両腕を横に真っ直ぐ伸ばして、肘から先は上に折り曲げ、手はぎゅっと拳を作って顔の方に向かって折り曲げてたな…。それで力を込めて上腕二等筋をムキムキっとさせて……）

つまり、ポージングはポージングでもボディービルのポージングを取るキラ。

（よし、このままこのまま…。ハイっ、マヨネーズ♪　…って、それは写真撮るときだぞ私。ええーと、このままこのまま…、笑顔でハイっ、ポーズっ♪）

にかっと笑って動きを止め、瞬きをしないで視線を一点に集中。

寝室のドアの外から再び声が聞こえてくる。

「１０秒経った。入るぞ」

ふふふ、どんと来るのだ！

と、見つからない自身満々のキラ。

玄関のドアに続き、

バキっ！

と呆気なく寝室の鍵が壊される。

そしてドアを開け、姿を見せたキラの主――リュウ。

「捕まえたぜ、キ……？」

固まった。

（…な…、何してんだ、キラ）

と眉を寄せたリュウだったが、飼い主と夫を長年やっていれば察するもので。

（…も、もしかしてマネキンのつもりか、キラ…！？　す、すげえ、さすがキラだぜ…！）

リュウ、驚愕。

（よりによってボディービルのポージングが思いつき、そしてそれをおかしいと疑わず実行へと移すおまえの頭…！）

ごくりと唾を飲み込み、リュウの喉が音を立てた。

（わ、分かってはいたが、やっぱり只者じゃねえ…！　おまえ、甚だしい最強天然バカ黒猫だ…！）

感動して揺れ動くリュウの黒々とした瞳。

（ああ、キラ…！　俺はおまえを心底尊敬している…！）

リュウが固まってから数秒。

（な、なんだ…!?　怪しまれてるのか、私…!?）

と心の中で焦るキラの傍ら、リュウが寝室の中をきょろきょろと見回し始めた。

「おっかしいな、キラがいねえ…」

安堵するキラ。

（良かった、リュウは私に気付いていないぞ…）

リュウが寝室の中を歩いて回る。

「どこ行ったんだ、キラ。ここにいると思ったんだがな」

心の中、キラは笑った。

（ふふふ、分からないだろうリュウ！　何たって今の私は、どこからどう見ても完璧なマネキンだからなっ♪）

リュウが部屋の中央――キラのところへとやって来る。

「あれ？　こんなところにイイ女のマネキンがあるぜ。こんなもん買ったっけかな、俺」

ギクっとしてしまい、一瞬身体が動いたキラ。
リュウは気づいていないフリをして続ける。

「ま、キラが買い物行ったときに買ってきたんだろうな」

安堵するキラ。
リュウの手がキラの身体に触れる。

「にしてもキラそっくりなマネキンだな」

再びギクっとするキラ。

「すげーな最近のマネキンは。本物みてえ。ケツ柔らけーぞ」

さらにギクっとなり、

「おお、今日のキラと同じパンツはいてるぜ」

冷や汗をかき始め、

「すげえ、乳の感触までキラと一緒かよ。たまんねーなあ」

ぴくぴくと顔の筋肉が引きつり、

「どれ、一発ヤってくか」

リュウの身体を突き飛ばした。

「おっ、おまえはマネキンと浮気するつもりか、リュウ！」

「いよう、キラ」

「――ハっ！」

しまった！

と慌てて再びマネキンのフリをするキラに、リュウがデコピンした。

「ふにゃっ！」と、キラが額をさする。「マっ、マネキンに何をする！」

「ほお、最近のマネキンは喋るのか」

「うっ…！」

「いつまでも遊んでねーで帰るぞ」

伸びてきたリュウの手を、キラが振り払った。

「嫌だ！　帰らぬ！」

ベッドの枕を引っ掴み、キラがリュウに向かって投げる。

それを片手で受け止めながら、リュウは溜め息を吐いた。

「まだ怒ってんのかよ」

「当たり前だ！　おまえはミラをこの世一愛していると言った！　私よりもミラを愛していると言った！」

「仕方ねーだろ、薬飲まされたんだからよ」

「おまえは私に飽きたと言った！　私と永遠の愛を誓ったことが謎だと己に疑問を持った！　天然バカの私とよく続いたなって己に感心していた！」キラの瞳から涙が零れだす。「もう私がいなくて良いと言った！　野生に戻るなり、王子のペットになるなりすればと言った！」

「謝ってやるよ、うるせーな」

「うっ、うるせーとは何だ！　大体、謝ってやるだと！？　おまえが悪いのだから謝るのは当然ではないか！　帰らないからな、私は！　帰ってやらぬ！」

「ったく、おまえは…」と、深く溜め息を吐くリュウ。「俺の何が気に食わねえんだよ！？」

「――そっ…」キラの中で、ブチっと切れた何かの音。「その態度だあああああああああああああっっっ！！」

近くにある物をリュウに向かって、手当たり次第に投げつけるキラ。

それらをひょいひょいと避けながら、リュウが言う。

「俺のこの性格は今に始まったことじゃねーんだから、今さらゴチャゴチャ言うなよおまえ」

「直せっ！　今すぐ直せっ！」

「俺がおまえに上から目線で言うのは当然だろ。おまえの飼い主なんだから」

「私はおまえのペットだが、おまえの妻でもあるのだぞ！？」

「なおさら俺の命令聞け」

「なっ、何だと！？　亭主関白な奴だなおまえは！　そんなの今時流行らぬぞ！」

「世間の流行なんて知ったことかよ」

「少しは知れ！　そして倣えええええええええええええええええええっ！！」

最後にベッドをリュウに投げつけ、キラが肩で息をする。

ベッドを受け止め、それを床に置いたリュウ。

キラのところへと歩いて行って腕を引く。

「もう気ぃ済んだだろ。帰るぞ」

「嫌だっ！」

キラがリュウの腕を振り払う。

リュウの顔が強張った。
怒声を上げる。
「いい加減にしろ！！」
「おっ…」キラ、驚愕。「おまえがいい加減にせぬかっ！　こっ、これだけ言ったのにまるで反省なしなのか！？」
「うるせえっ！　俺はおまえの飼い主だ！　おまえの旦那だ！　おとなしく俺の言うことを聞けっ！！」
「なっ――」
「俺がっ…」リュウが手を伸ばし、キラの腕を強引に掴んだ。「俺が、おまえがいないと駄目だってことくらい分かってんだろうがっ……！！」
「――」
吊りあがっていたキラの眉が下がる。
怒りが消えていく。
（そうだ、そうだった…。忘れるところだった…。リュウは薬を飲まされただけだったというのに…、何をしているのだ私は……）
キラは両腕を伸ばし、リュウの首を抱き締めた。
（私の飼い主は…、私の旦那は、とても弱い。自惚れているわけじゃないが…、リュウは私なしでは生きていけない）

リュウが安堵したように小さく溜め息を吐いた。
キラの小さな身体に抱きつく。

「不安にさせてしまったな、リュウ。ごめん」

「ふん…」

「私はおまえが死ぬまで傍にいる。おまえが墓に入ったら、そう遠くないうちにまた傍へ行く」

「…当然だ。おまえは、骨になっても俺と一緒にいるって約束したんだからな」

「ああ…」キラは微笑んだ。「そうだな、リュウ…」

キラの顔を見てリュウも微笑んだ。

いつも通り、キラを左腕に抱っこする。

「さて…」

帰るか。

と言うと思いきや、

「一発ヤってくか」

「――はっ!?」キラの声が裏返る。「かっ、帰るのではなかったのか!?」

「喧嘩のあとはセックス。これ基本」

「みっ、皆が心配するぞっ！」

「あとでシュウに電話入れときゃいーだろ」

リュウが携帯電話の電源を切る。

「あ、あとでっ？」

「だってあいつも今カレンと真っ最中だろ」と言いながら、リュウがキラをベッドに寝かせた。「バカ全開で『ううーん、デリシャス…！』とか言いながらカレン抱いてるあいつが目に浮かぶぜ」

「……。そうだな」

キラの唇にリュウの唇が重なった。

カレンの部屋の中、カレンと入浴後のシュウはそわそわとしていた。

「あああ、もうっ…！」と手に握っている携帯電話を見つめる。「何で連絡してこねーんだよ、親父っ…！　電話しても電源オフになってるしっ…！　…まっ、まさか母さんとヤバイことなってんのか……！？」

「大丈夫よ、シュウ」

カラーはピンクと白、装飾は薔薇やリボンなどで出来たやたら乙女な鏡台の前。

カレンがその赤い髪を櫛で整えながら口を開いた。

「リュウさまとキラさまの絆は、そう簡単に壊れたりなどしないのですわ」

「そ、そうだけど…」

「本当、リュウさまとキラさまはあたくしの理想の夫婦ですわ」

「…ふーん…？」

カレンはオレと結婚する気あったりすんのかな…。

鏡に映るカレンの顔を見ながら、そんなことをシュウは考える。

ふと鏡のカレンと目が合って、シュウはどきっとして目を逸らした。

「ねえ、シュウ？」

「な、何？」

「来月のクリスマスのことだけど」

「う、うん？」

「あたくしやっぱり、何もいりませんわ。だからお仕事無理しないで」

「…ん、分かった」

と言いつつ、シュウはカレンへクリスマスプレゼントを用意するつもりだが。

（カレンの誕生日のときみたいに何百万もするものは買えねえけど…、何か喜んでくれるものあげてえな……）

シュウの携帯電話が鳴る。

そこに出ている名前を見て、シュウは咄嗟に出た。

「もっ、もしもし親父!?」

「おう。今夜のカレンはどうだった」

「ううーん、デリシャス…！　今日は風呂場でフィーバーしちゃってさあ、オレ～♪　――って…」シュウ、赤面。「なっ、何言わせんだよ親父っ!!」

「そこまで訊いてねーし、俺。それよりよ、シュウ」

「な、何だよ?」

「俺とキラ、今日帰らねーことにしたから頼んだぞ」

「へっ?」シュウは眉を寄せた。「親父たち今どこいんの?　まさかラブホ?」

「いや。俺やキラたちにとっての思い出の場所」

「それって――」

何処だよ？

とシュウが訊く前に、リュウが続けた。

「んじゃ俺とキラ、これから2回戦だから切るぜ」

「えっ！？」と、聞こえてきたキラの声。「にっ、2回戦！？　さっ、さっき一発って言ったではないかあああああ――」

切れた電話。

カレンがぱちぱちと瞬きをして訊く。

「リュウさまとキラさま、何ですって？」

「えと…、今日は帰らないって」

「どこに泊まるんですって？」

「親父や母さんたちの思い出の場所らしいんだけど…」と言いながら、シュウは察した。「…ああ、あそこか。親父と母さんが、結婚前に住んでたマンション」

「まあっ」とカレンが声を高くした。「思い出のお部屋でロマンチックに仲直りなさったのね！」

「ロマンチック…か、どうかは危ういが、とりあえず仲直りしたっぽい」

「素敵なのですわあああああっ！」とカレンがベッドに寝転がる。

「ああ…、脳裏に浮かぶわ…。思い出のお部屋でダイヤモンドのような涙を流されるキラさまと、それを見つけて後ろから優しく抱き締めるリュウさま…！　そしてっ…、ああそしてっ……！」

実際はボディービルのポージングでマネキンのフリをしていたキラと、それに痴漢をしていたリュウなのだが。

一体どんな妄想に浸っているのか、カレンの瞳が恍惚としてしまっている。

「乙女だなあ、おまえの脳内…」

と苦笑しながら、シュウは電気を消してカレンの隣に寝転がった。

窓ガラスをキラに粉砕されたが故に、外から冷たい風が舞い込んでくる室内。

シュウはカレンの肩まで布団をかけた。

さらにカレンの小さな身体をしっかりと抱き締める。

「寒くねえ？」

「ええ、大丈夫よ」とカレンがシュウの胸に抱きついた。「おやすみなさい、シュウ」

「おう、おやすみ」

おやすみのキスをしたあと、カレンがシュウの胸に顔を埋めて瞼を閉じた。

（さて…、カレンのクリスマスプレゼントは何がいいかな…。喜んでくれるもの、何かな……）

そんなことを考えているうちに、シュウも夢の中に誘われていった。

第７５話　思い出のあの場所（後書き）

今回は少し前作ＮＹＡＮＫＯに戻った気分でした。

第７６話　サンタクロースは準備を始めます

――１２月の半ば。
もうすぐクリスマス。

カレンが入浴中で暇なシュウは、部屋に妹たちを集めた。
クリスマスプレゼントの希望を訊くために。

ちなみにサンタクロースを信じているジュリからは、自然に会話しながらほしいものを聞き出しておいた。
クリスマス当日、サンタクロースに化けたシュウからそれを受け取ることになる。

シュウの部屋に集まった妹たち。
メモ用に携帯電話を取り出しながら、シュウは訊いた。

「で、おまえたちは何がほしいんだ」

妹たちが一斉に声を出すものだから、シュウは言いなおした。

「上から順番に希望を訊く。よって、まずミラは何がほしいんだ」

「私っ？　先月の誕生日に続いて、『飲ませた相手にこの世一愛されちゃう薬』がいいわ♪　あ、でもてっとり早く『飲ませた相手に抱かれちゃう薬』の方が――」

「いい加減にしろよ、おまえ」シュウは苦笑した。「次その手の薬を親父に飲ませたら、おまえ母さんとまじで険悪になるぞ」

「えー？　んじゃあクリスマスはパパとお揃いの色や柄のパンツ」

「かっ、買いやすいものを言えっ！　男物のパンツだけならともかく、女物なんて――」

「はいはい、次アタシの希望～っ！」と、サラがシュウの言葉を遮った。「2丁目のラブホ・ソフィアのスウィート一泊無料券」

「オっ、オレにそこのラブホまで行って買って来いと!?　大体、そんなのレオ兄に頼めば泊まれるだろ!?」

「レオ兄、親父が心配するからって外泊はさせてくれないんだもん」

「そ、それで一泊無料券か…」

「買い辛いだろうけどさ、お願い兄貴」

「わ…、分かったよ。…んじゃ次、リン・ラン」

とシュウが双子のリン・ランを見ると、2匹の頬が染まった。

声を揃えて言う。

「あ…兄上の脱ぎたてホヤホヤ使用済みパンツが――」

「やらねえよっ!!」シュウ、驚愕。「どうっっっしてこう、うちには変態ばっかりなんだっ!?　マトモなもんを言ってくれっ!!」

「ごめんなさいなのだ…」しょんぼりとするリン・ラン。「兄上の洗濯済みパンツでいいのだ…」

「おっ、おまえらオレのパンツから離れ――」

「ちょっと兄ちゃーん」と、レナがシュウの袖を引っ張った。「早く次～。あたしたちの番でしょ？」

「お、おう…」シュウは三つ子の顔を見回した。「んじゃユナ・マナ・レナ、ほしいもの言って見ろ」

「札束」

と三つ子に声を揃えて即答され、シュウの顔が引きつった。

「おまえたちサンタさんからそんな夢のないものをもらう気か…！？」

「だって」と三つ子が再び声を揃える。「今月のお小遣い使っちゃったんだもん」

「ぜ、全部？」

「全部」

「う…うちの兄妹の親父からの小遣いは、１３歳だと毎月３０万なんだがな」

「使った」

ブチっと切れたシュウ。

三つ子の額にデコピンして訊く。

「世間一般の家庭を支えるオトーサンが汗水垂らして稼いでくる平均収入並の金を、１３のおまえたちが何に使ったって言うんだ！？　言ってみろっ！！」

ユナがデコピンされた額を擦って泣きながら言う。

「貧しい島の人たちに募金したんだもおおおおん！」

「そ、そうか。優しい子だな、おまえは。で、でも１３のおまえが何も小遣いの３０万全部募金してやらなくてもいいんじゃねえかな…！？」

マナが言う。

「より良い薬を作るためには、材料費にお金がかかるんだよ兄ちゃん…」

「そ、そ、そうか。マナは本当に（怪しい）薬を作るのが好きだな。で、でも１３のおまえがそんな大層な薬は作らなくていいんじゃねえかな…！？」

レナが言う。

「〇クドナルドのメガ〇ックセットがおいしくて」

「そ、そ、そ、そうか。せ、成長期だもんな、仕方ねーよな、うん。…なぁーんて」シュウの顔が引きつる。「言えるかあああああああっ！！　どおおおおおやったらたった半月で〇ックで３０万も使えるんだ！？　おまえ病院行ってその胃袋を手術で小さくして来い

っ！！」

「痛い痛い痛い痛いっ！　コメカミぐりぐりしないでよおおおっ！　今度からはビッグ○ックにしてポテトとドリンクはSにするよ兄ちゃあああああんっ！！」

妹たちが自分の部屋へと戻って行ったあと、シュウはベッドに腰掛けた。

携帯電話にメモした妹たちへのクリスマスプレゼントを見て、溜め息が出る。

「男と女のペアパンツにラブホ無料券、オレの洗濯済みパンツ、札束…。なんて可哀相なサンタクロースなんだ、オレ…。こんなどうかと思うプレゼントばっかりさせられる17の少年がこの世にどれくらいいるものか……」

そんなことを呟きながら、シュウはふと気付く。

（今さらだけど……、オレって年近い男の知り合いいなくね!?　っていうか友達いなくね!?　小さい頃から妹たちの世話で忙しいせいでっ!?　ハンターとして働き始めてからはさらに激しく忙しくなったせいでっ!?　レオ兄とかは年が離れてるせいで、やっぱり友達じゃなくて兄貴って感じだしっ!?　っていうか、あの親父でさえリンクさんという親友がいるのにっ……！）

シュウ、衝撃。

（大家族の中で育ったから今までこんなこと思わなかったけど…、オレってもしかして結構寂しい奴!?　友達いないとかって、すーげー寂しい奴!?　……いやいやいやっ！　何言ってんだオレっ！）

シュウは首を横にぶんぶんと振り、立ち上がった。

「オレにはカレンという、すんっっっっげえええええええ可愛い彼女がいるんだっ！！」

シュウはカレンの部屋へと向かった。

中に入ると、カレンは入浴を終えてバスルームから出ていた。

「みんなからクリスマスプレゼントの希望は聞き終わったのかしら？　シュウ」

「おう」

「そう、あたくしも買いに行くの付き合うわね」

とシュウと会話しているカレンだが、シュウの方を向いたのはほんの一瞬。

ベッドの上に座って、夢中になって趣味の１つである人形遊びをしている。

少しムッとしながら、シュウはカレンのベッドの上――カレンの斜め後ろ辺りに腰掛けた。

まるで振り向かないカレンの気を引こうと、黒猫の尾っぽでベッドの上をぱんぱんと音を立てて叩く。

が、振り向いてくれないカレン。

さらにムッとしながら、シュウはカレンの顔を覗き込んだ。

「オイ…！？」

「何かしら？」

と相変わらずシュウの方を向かないカレン。

その横顔はとても楽しそうだ。

（本当に人形遊びが好きなんだな…）

シュウは小さく溜め息を吐いた。

（…ま、いっか。あと３０分すりゃ、オレの相手するよな）

と思って、シュウはむくれかけていた顔を元に戻した。

カレンが大切にしている全長６０ｃｍほどの球体関節人形を見ながら言う。

「その服、見たことねえな。新しいの？」

「ええ、そうよ」

「いつ買ったの」

「つい先日、ネットオークションで落札したのよ」

そうだろうな、とシュウは思った。

今年の夏以来、カレンは葉月町にあるドールショップへは行きにくいだろうから。

（だって、そこに勤めてるミヅキっていうやたら女顔の男に襲われ

てんだから…。怖いんだろうな。行きたくても行けないって感じか）

カレンには数ヶ月に一度、最新の人形やその服や小物など載った冊子がドールショップから届けられる。

それをカレンの傍らにあるのを見つけ、シュウは手に取った。

ページの角が折られているところを開く。

そこにはカレンが好きそうなロリータファッションのドレスが載っていた。

（カレン口には出さないけど、ほしいんだろうな、これ。４万弱が３つに、３万弱が２つか…。人形の服のクセにたけーな、オイ。ブランドとコラボ？　だから高いのか。ん？　ああ、これカレンが好きな服のブランド……）

シュウは再びカレンの横顔に目を向けた。

人形の服を着せ替えてはしゃいでいる。

（……決ーめた、カレンへのクリスマスプレゼント）

クリスマスを3日後に迎えた日の夜。

シュウは書斎にいるだろうリュウのところへと向かった。

「なあ、親父――」

と、言葉を切る。

リュウはウィスキーの入ったグラス片手に、電話中だったから。

「おまえ冗談は顔だけにしろって。昔っから言ってんのに分かんねー奴だな」と電話の相手と話しながら、リュウがシュウに顔を向けた。「あ、何かシュウが俺に用あるみてーだから切るわ。じゃーな」

電話を切ったリュウ。

書斎の入り口のところにいるシュウに訊く。

「何だ、シュウ」

「あの――」

「ゴム切れたのか」

「そっ、そうじゃなくてっ…」とシュウの顔が赤くなる。「親父、どんなパンツなら穿ける？」

「は…？」

と眉を寄せるリュウ。

シュウは苦笑して続けた。

「去年から親父に加えてオレもサンタクロースじゃん？　ミラがさ、親父とのペアパンツがほしいって言うんだよ」

「……。く…黒のボクサーパンツタイプで…」

「り、了解」

と、くるりとドアの方に身体を向けたシュウ。
もう一度リュウの方に振り返った。

「ねえ、親父。あの――」

「まっ、間違っても白ブリーフ買ってくんなよ…！？」

「お、おう。んでさ――」

「あっ、あとミラの趣味に合わせた柄物とか勘弁してくれっ…！」

「わ、分かってるよ。んでさ――」

「よし、部屋戻っていいぞ」

「オレの話を聞けっ！！」

「はぁ？」

と、眉を寄せるリュウ。
ウィスキーを1口飲んでから訊いた。

「何だよ。まだ何かあんのか」

「…さっき電話してたのって、リンクさん？」

「ああ」

「よく電話してんの？」

「まあ、しょっちゅう掛けて来るな。あいつの方から」

「ふ、ふーん、仲良いね。…って、当たり前か、親友なんだからっ…」

「？　どうした、シュウ」

「…あのさ、親父、オレ――」

「ばっ、おまっ…！？」と、リュウが驚愕しながらシュウの言葉を遮った。「俺に恋するんじゃねえっ！！　リンクに嫉妬とかって――」

「ちっ、ちげえええええっ！！」シュウの顔も驚愕する。「んなわきゃねえだろ気持ちわりぃっ！！」

「ああ、驚いた」

「オレが驚いたわっ！！　このバカ親父――」

すっっっぱーーーんっ！！

とシュウの顔面に左足スリッパを投げつけたリュウ。

「一言多いぜ、バカ息子」気を取り直して訊く。「んで、どうしたんだよ」

「お…おう…」シュウはスリッパの当たった顔面を擦りながら言った。「オレさ、年近い男友達いねえなって思って……」

「それがどうした」

「…さ…寂しい…かも」

「……シュウ」

すっっっぱーーーんっ！！

と再びシュウの顔面へと飛んだ、リュウの右足スリッパ。

「このハーレムに文句あんのか、てめえっ！！」

「い、いってえぇ…！」

「絶世の美女の母親に、揃いも揃って超・美少女の7人の妹たち！！　おまけに世間の美少女顔負けのやーべー可愛さの弟を持ちながらおまえという奴はっ……！！　寂しい、だと！？　何て贅沢な奴なんだおまえはよ！？　え！？」

「だって――」

「ったく…」と苛々としながら溜め息を吐いたリュウ。「俺がこれからキラと弟作ってきてや――」

「いっ、いらねえよっ！！」シュウは慌ててリュウの言葉を遮った。「これ以上弟妹はいらねえっていつも言ってんだろ！？　オレがほしいのは弟じゃなくて、男友達なんだよ！　年の近い男友達っ！！」

「ヤロウ友達ぃ？」リュウの声が裏返った。「何で」

「リンクさんっていう親友がちゃんといる親父には、オレの気持ちなんか分からねえよっ…！」

「じゃあ言うなよ」

「…ご…ごもっともですた……」

と、シュウが苦笑して書斎から出て行った。

（男友達なんてほしかったのか、シュウの奴…）

ウィスキーのグラスを傾けるリュウの脳裏に、リンクの姿が浮かぶ。

（…ま、1人くらい居ても悪いもんじゃねえな）

翌日。

弟妹やリーナにとってサンタクロースのシュウは、プレゼントの準備を始めた。

カレンも着いてくると言ったのだが、シュウはカレンを屋敷に置いてきた。

「リン・ランへのクリスマスプレゼントを包んでおいてほしいから」

と適当に理由を作って。

カレンはきっと今頃、シュウの洗濯済みパンツを綺麗にラッピン

グしているだろう。

カレンを置いてきた本当の理由は、

（カレンのサンタクロースでもあるからな、オレ）

カレンは支出の激しいシュウに気を遣ってクリスマスプレゼントをいらないと言うが、シュウはどうしてもカレンにプレゼントしたくて。

カレンの喜ぶ顔が、どうしても見たくて。

カレンにも、こっそりとプレゼントを買うことにした。

――が、その前に。

まずは銀行で三つ子へのプレゼントである札束をおろし。

色んな下着屋を回り、ミラへのプレゼントであるリュウとのペアパンツを恥ずかしい思いをしながら買い。

サラへのプレゼントである、とあるラブホテルのスウィート一泊無料券を恥ずかしさと予想外の高額さに驚愕しながら買い。

そんなあとに幼い弟・ジュリと、リンク・ミーナ夫妻の娘であるリーナへのプレゼントを、玩具屋で癒されながら買い。

そして最後に、シュウはカレンへのプレゼントを買いに向かった。

アンティークなレンガ造りの店の前、シュウの足が止まる。

（下着屋やラブホも恥ずかしかったけど、人形屋（ここ）に入るのもすげー恥ずかしいじゃねえかっ…！　こんな乙女な空間に入るなんてっ…！）

シュウは周りをきょろきょろと見回したあと、被っていた帽子を深く被りなおした。
店のドアノブを握り、思い切って中に入る。

「いらっしゃいませ」

と、明るい声でシュウを出迎えたのは。

（うーわ、オレがこの世で一番友達にしたくねえヤロウかも……）

第７６話　サンタクロースは準備を始めます（後書き）

昨日の１７時１１分頃メールくださった読者さまへ。

ごめんなさいｗｗｗ
大切なお身体は大丈夫でしたでしょうか？（笑）

と、いうか…。
お受験まであと一週間切ったのでごぜぇますか！？
あわわわわっ！　ききき、緊張するううううううっ！！（おまえがすんなとかツッコミなしで）

お勉強ラストスパート頑張ってくださいっ！！＞＜

受験生にサクラサケェェェェェェェェェェっっっ！！！

第77話　サンタクロースの聖夜

カレンへのクリスマスプレゼントを買うため、以前はカレンがちょくちょく来ていたドールショップへとやって来たシュウ。

店内に入って早々、出迎えてくれた店員を見て顔が引きつる。

（まだ勤めてたのかよ、こいつ…）

同様に、相手の店員の顔も引きつった。

「い…いらっしゃいませ」

と、シュウに対して2度目の台詞を言う、男店員――ミヅキ。
栗色のショートカットに、小柄な身体。
美少年というよりは美少女顔の少年。
年齢は17歳のシュウとそう変わりはないだろう。

許可なしにカレンの人形を作ろうとした挙句カレンを強姦しようとしたこの少年が、正直シュウはとてもではないが好きになれない。

（そういやあ、居たな。オレにも年の近い同性の知り合いってやつがよ。でもオレ、こいつとは絶対友達になりたくねえ）

ミヅキがにっこりと笑って言う。

「お久しぶりです、シュウさん。妹のマナさんは相変わらずヤバイ薬を裏で売っておられるんですか？」

シュウの顔が強張った。
無理矢理に笑う。

「いやいや、うちのマナはもうそんなことしねえっすよ。あんたこそ相変わらず変態やってんすか？」

ミヅキの顔も強張る。
お互い弱みを握っている２人。
強く出れないものの、その間には火花が散る。

数秒して、ミヅキがシュウから目を逸らした。

「ヤバイ人と猫の息子のあなたとやり合うつもりはありません。今日はどんなご用件で」

「人形の服を買いに来たんだよ」

「どのドールサイズです？」

「え？　ええと…」

シュウは戸惑った。

（人形っていっても、色々サイズがあんのか……）

カレンの持っている人形を思い出しながら言う。

「６０ｃｍくらいの人形で…」

「ああ、カレンちゃんの持ってるドールのことです？」

「…カレンちゃん…だと…！？」

「これは失礼。カレンの持っているドールのことですね？」

「なっ、馴れ馴れしく呼び捨てにすん――」

「それならこちらの方に」

と、ミヅキがシュウの言葉を遮った。

シュウが苛々としながらミヅキに案内されたところに向かうと、カレンの持っている人形サイズに合うだろう服が並べられていた。

たくさんあるそれらをシュウが見渡していると、ミヅキが訊いた。

「で、どれです？」と、溜め息を吐く。「さっさとしてください。楽しいお客様との接客のはずが、あなただと気分悪いな」

「て、てめえ…！」シュウの顔が引きつる。「オっ、オレだってめえなんぞに接客されたく――」

「ま、あの子がほしがるドールの服なら」

と、再びミヅキがシュウの言葉を遮った。

一旦シュウから離れ、どこからか人形用のドレスを2つ取り出してきた。

それをシュウに見せて続ける。

「この辺りでしょうね」

「あっ、そうそうこれこれ」と、シュウは思い出す。「カレンが持ってた人形のカタログ？　に載ってた。あれ、でもあと他に４つくらいあったな…？」

「それって同じページ載ってたやつですよね？」

「おう」

「それならいらないかと。あの子がほしいのはこの２つでしょう」

「む…」眉を寄せ、ミヅキの顔を見たシュウ。「何でそこまでおまえに分かるんだよ」

「ロリータファッションはロリータファッションでも、あの子が好きなのはゴスロリじゃなくて甘ロリでしょう。あとの４つは黒を基調としたゴスロリのドレスです。あの子、ゴスロリのドレスなんて持ってないんじゃないんじゃないですか」

「え？　ああ…、そういえば……」

そうだったな。

とカレンが人形に着せている服を思い出し、頷いたシュウ。

ミヅキが訊く。

「で、この甘ロリドレス２つでいいんですか」

「お、おう…」

ミヅキが自分よりカレンのことを分かっている気がして、少し腹

が立ったシュウ。
でもおとなしくミヅキに着いてレジへと向かった。

（オレがプレゼントしたら、カレンはどんなものだって喜んでくれるんだろうけど…。オレはカレンが本当にほしいと思ってるものをあげたいからな）

シュウが会計を済ませると、ミヅキがシュウに背を向けてラッピングを始めた。

「クリスマスプレゼントですか」

「おう」

「おまけのドレスも入れておきますね」

「おまけ？」

「余ったドレスですよ」

「ふーん」

シュウはミヅキがラッピングを終えるまで、店の目立たないところへと移動した。
やっぱりこの乙女な空間にいるのが恥ずかしくて。

少しして、店の隅で小さくなっているシュウのところへとやってきたミヅキ。
眉を寄せた。

「…何してるんです？　変な人だな」

「う、うるせーな。こ、こういう女の子っぽいとこにいんのは恥ずかしいんだよ…」

「あなた可愛くないですもんね」

「可愛さなんていら――」

「無駄にデカいし」

「むっ、無駄とは何――」

「リュウさん似で目付き悪いし」

「うっ、うるせ――」

「だからといって、リュウさんみたいに格好良くないし」

「なっ、何だとこの――」

「決めなきゃいけない台詞噛むし」

「あっ、あのときは――」

「１０円玉ハゲウィッグ被ってたし」

「そっ、そのことは忘れ――」

「ま、強いて言えば黒猫の尻尾だけ可愛い？」

とミヅキに嘲笑され、ブチッと来たシュウ。
他に客がいないことを確認してから声をあげた。

「うるせーな、てめえはよっ!!　黙れっ!!　それが客に対する態度かっ!!」

「あー怖い、うるさい、耳が腐る。それが一般人に対するハンターの態度ですか」

「ぐっ…!」

「静かにしてくださいよ。何事かと思って店長が店の奥から出てくるじゃないですか」

と、ミヅキがシュウからカレンへのクリスマスプレゼントが入った紙袋を差し出す。
シュウはそれを奪うように取ると、どすどすと足音を立てて店の出入り口へと向かった。

店から出る前、もう一度ミヅキの方を見る。
小声になって訊いた。

「おい、おまえ、ちゃんと約束守ってんだろうな!?　守ってなかったら警察に突き出すからな!」

「守ってますよ、うるさいなあ」と、ミヅキが溜め息を吐いた。「あなたの妹のマナちゃんがお金を取って変な薬売ってたことも、カレンちゃんがあなたの弟子であることも誰にも言いふらしてません。強姦だってまったく考えてないし、相手の許可なしにドールだって

作ってません。それどころか…」

と、ミヅキの顔が曇った。

呟くように続ける。

「もうドール自体、作ってません」

「――…？」

シュウは首を傾げたあと、店を後にした。

翌日。

クリスマス・イヴ。

いつも通り早朝6時に起きたシュウ。

10個の目覚まし時計を叩き止めたあと、腕の中で目を覚ましたカレンに目を落とした。

「オッス、カレン」

「おはよう、シュウ」

カレンの愛らしい笑顔に「おはようのキス」をしたあと、シュウは昨夜訊いたことをもう一度訊く。

「なあ、今日本当に何もしなくていいわけ？」

「ええ」

「サラはレオ兄とデートだぜ？　オレからのクリスマスプレゼントであるラブホスウィート一泊無料券持って。親父と母さんもデートだし、クリスマススペシャルプランで…」

「ええ、そうね。素敵なのですわ」

「じゃー、何でおまえはオレとデート行かねえの？　オレだってクリスマスらしいデートくらいするっての」

「毎年クリスマスはご家族で過ごすと聞いたわ」

「クリスマスは明日だろ。今日はイヴ。イヴはそれぞれ自由に過ごすんだよ」

「シュウ、毎年イヴはリンちゃんランちゃんとデートだったのでしょう？」

「そうだけど…」

「それならせめて、お家の中で良いからリンちゃんランちゃんにあなたと過ごさせてあげたいのですわ。それに」と、カレンが呆れたように小さく溜め息を吐いた。「あなた、お正月には妹さんたちにあげるお年玉でまた大金が飛ぶんでしょう？」

「……」

シュウは苦笑した。

クリスマスのあとはすぐに正月、その間の大晦日にはリュウとキ

ラの誕生日パーティー。
この時期、シュウは特に支出が多かった。
「あたくしのために無理しないでほしいのですわ」
とカレンは言ってくれる。
が、ただ単にシュウ自身がカレンとデートしたいだけである。
（我慢するしかねーか…。欲張ったらまた親父に借金することになるし…）
しぶしぶカレンとのデートを諦めたあと、シュウはじっとカレンの顔を見つめた。
（…可愛いなオレの彼女）
じゃなくて、
（いつクリスマスプレゼント渡そうかな。今夜がいいかな。カレン喜ぶよなあ……）
カレンの喜ぶ姿を想像し、シュウの顔がにやけた。
（カレンにクリスマスプレゼントを渡すサンタクロースのオレ。はしゃぐカレン…。そして「ありがとう、サンタさん大好きっ！」とか何とか、すーげー可愛い笑顔で言われちゃったりして！？　おまけに「今夜は好きにしてっ（ハート）」とか言われちゃったりして！？　オイ、まーじかあああああああっ！！　オレ今夜はドキドキわくわくクリスマス・イヴスペシャルフィーバァァァァァァァ

ァァァァァァァァァァっっっ！！！）

そして夜。
世の中の夫婦・カップルが1年の中で最も盛り上がる日と言っても過言ではない聖夜。

（オレもクリスマス・イヴらしく盛り上がってみたいと思いまああああああああすっ！！）

シュウはバスタイムを終えたあと、カレンへのクリスマスプレゼントを持って自分の部屋から出た。
プレゼントを背に隠し持ち、カレンの部屋に入る。

「メリ～～～クリスマス・イ～～～～～ヴっ！！」

シュウ同様にバスタイムを終えたばかりのカレン。
鏡台から振り返って、シュウの何やら張り切った様子を見て首を傾げる。

「どうかしたのかしら、シュウ？」

「今のオレはサンタクロースだぜ」

「え？」

「ヘイ、ハニー」と背からプレゼントを出したシュウ。「クリスマスプレゼントをお届けに参ったぜ」

「えっ？」

と、驚いたカレン。
やって来たシュウからプレゼントを受け取る。

クリスマスを思わせるラッピングの箱。
それに目を落としたあと、カレンは戸惑いながらシュウの顔を見上げた。

「い…、いらないって言ったじゃないっ…」

「そう寂しいこと言ってねーで開けてみろよ。おまえの誕生日のときに比べたら、まーったく金かかってねーから心配すんな」

「そ、そう。ありがとう」

と困惑した顔で言ったカレン。
プレゼントの箱を開ける。

（さあ、どんな反応するかな）

シュウがわくわくとした次の瞬間。

「――きっ…」

カレンが頬を紅潮させ、

「きゃあああああああああああああああああっ！！」

何事だと思うくらい絶叫し、

「どっ、どどどっ、どうしてこのドレスたちが!?　これとこれは今月号のカタログに載ってたドレスっ！　これは１１月号、これは１０月号、これは9月号っ…！　ああ、何てこと…！　何てことなのっ…！　あたくし、もう買えないと諦めていたのにっ…！　すっ、すごいっ…！　すごいのですわあああああああああっ!!」

卒倒するのではないと思うくらい興奮し、

「あたくしがほしいものを全てそろえて来てくれるなんてっ…！　ダーリン愛してるのですわあああああああああああああああっっっ!!」

シュウの想像を絶するほど大喜びした。

（な…、なんか誕生日プレゼントあげたときより喜んでねえ?）

と思わず一瞬顔が引きつってしまうシュウだったが、

（ま、まあいいか。すげー喜んでくれて嬉しいんだぜオレはっ…！）

それはもうカレンの眩しいくらいに輝く笑顔を見て、うんうんと満足そうに笑った。

「その程度、いつだってプレゼントしてやるぜ。さて――」

今夜は好きにさせてくれベイベっ…！

と言おうとしたシュウの言葉を、カレンが遮る。

「今夜は夜更かししてドール遊びするのですわっ♪」

「――なっ…、なぬぁーーーっ!?」

何故だ！

何故だカレン！

何故なんだマイハニィィィィィィィっ!!

と衝撃を受けるシュウだったが。

そんなこと愚問である。

（ああ…、そういえばオレより人形遊び優先するよな、カレンって…。何でそのこと忘れてたんだろう、オレ…。新しい人形の服なんてやったら放置されるに決まってんじゃん……）

別のものをあげれば良かったかも、と後悔しても遅い。

（ああ…、オレのカレンとドキドキわくわくクリスマス・イヴスペシャルフィーバーという夢が、虚しくも遠い彼方へと飛んでいく……）

シュウ、意気消沈。

そんなことになど気付かず、カレンがベッドの上で人形遊びをしながら言う。

「それにしても、本当にすごいのねシュウ」

「何が…」

と、シュウはがっくりと肩を落としながらカレンの後ろあたりに腰掛けた。

「今月号に載ってた2着のドレスが手に入ったのはまだ分かるけど、先月号や先々月号、その前のカタログに載ってたドレスが手に入ったなんて信じられないのですわ」

「え…？」

シュウはカレンにプレゼントした人形のドレスに目を向けた。

シュウがカレンに買ってきたのは2着。

他に3着ものドレスが入っていた。

（ああ、ミヅキが入れた『おまけ』の服か。余った、売れ残りの服）

シュウがそのことをカレンに伝えようとしたとき、カレンが続けた。

「このブランドとコラボしたドレスって、とても人気なの。だからどれも発売された日に完売してしまうのですわ」

「え？」シュウは眉を寄せた。「売れ残ったりは？」

「まずないのですわ。本当、手に入ったのは奇跡に近いのですわ」

「……」

「きゃあああっ、可愛いのですわあああああああっ！」

カレンが人形遊びに夢中になってはしゃぐ一方、シュウの顔には眉が寄っていた。

（売れ残ることはまずない…？　どういうことだ…？）

カレンの手元にある６つの人形用のドレス。

それらを見ながらシュウは考える。

（まさか、ミヅキの奴が…）

と、シュウの目はカレンへ。

（カレンのために取って置いた……とか？）

第７８話　サンタクロースのクリスマス　～前編～

今日はクリスマス。

派手な飾りつけがされたシュウ宅のリビング。
角には大きなクリスマスツリー。
ガラステーブルの上には、シュウやカレン、キラ、ミラが作ったアイスケーキとご馳走。

それから、ほぼ毎月行われる誰かの誕生日パーティーメンバー一同が集結していた。

ＰＭ６時からクリスマスパーティー開始。
何故かやたらとハイテンションになるクリスマスパーティーでは、誰かの誕生日パーティーのときよりも早く酔っ払いが出てくる。

「真っ赤なおっはなのぉ～、トナカイはんは～っ♪」

と、パーティー開始から３０分後にはすっかり出来上がり気持ちよくなっているリンク。
ソファーの上、リュウの肩を組んで楽しそうに歌っている。

「いっつもみっんなのぉ～、わーらーいーもーのぉおおおおお♪」

「愉快だな、その歌」

「ん？」

「おまえみたいで」

「どっ、どういう意味やね――」

「ヤーイ、笑い者」

「ヤーイやないわっ！　子供かおまえは！？」

「おまえのレベルに合わせてやったんだぜ」

「なっ、何やて！？」

「優しいな、俺」

とやり取りをしているリュウとリンクを見て、シュウは思う。

（仲良いよなあ…。リンクさんみたいにいじられたくはねえけど、やっぱりちょっと羨ましかったりして……、男友達）

足元に座っていたシュウから視線を感じて、リュウはシュウに目を落とした。

小さく溜め息を吐いて言う。

「羨んでねーで、そろそろ」

準備してこい。

と、リュウは親指でリビングの戸口を指した。

シュウが頷いて立ち上がり、トイレへと行くフリをして自分の部屋へと向かう。

シュウがリビングから出て行ったあと、リンクは首をかしげてリュウの顔を見た。

「羨むって何やねん」

「羨ましがること」

「わかっとるわいっ！　そうやなくて、シュウが何を羨んだって？」

「俺とおまえの仲」

「へ？」と、ぱちぱちと瞬きをしたあと、リンクが笑った。「なんやねん、シュウの奴。おれに嫉妬かいな。かわええ息子やな、リュウ？」

「それじゃ俺とおまえがいちゃついてたみてーだろ。そうじゃねーんだよ、あいつが羨ましがってんのは」

「ほな、なんやねん」

「あいつ、年の近い男友達がほしいんだと」

「男友達…」と鸚鵡返しに言ったリンクが納得したようにうんうんと頷く。「あー、なるほどな。シュウ、年の近い男友達おらへんもんな。そろそろほしくなるわな」

「まあ、1人くらいいても悪いもんじゃねーけどよ」

「お？　なんや？」と、リンクがにやりと笑ってリュウの顔を覗き込んだ。「おまえ、おれという親友がおって嬉しいんか？」

「有難く思えよ」

「おうっ、サンキュ♪　――って、ゴルァ！　何でそういっつも上から目線やねんっ！　おまえ、おれのこと見下してるやろ！」

「俺は心の底から肯定する」

「ひっ、否定せんかあああああああああっ！！」

リンクがぎゃあぎゃあと騒ぎ始めてから数分。

コンコン…

と、リビングの窓をノックする音。

（来た）

何がって、サンタクロースを信じている幼いジュリのため、サンタクロースに変装したシュウが。

昔はリュウがしぶしぶサンタクロースに変装していたものだが、ここ近年はシュウにサンタクロースの変装をさせている。

その理由としては、

「この俺がサンタクロースのコスプレなんてダセェことといつまでもやってられるかよ」

ｂｙリュウ。

ノックの音を合図に、ジュリ以外の一同は演技モードへ。

「なんやっ？　ダレか来たみたいやでジュリちゃんっ！」と、リーナ。「こっ、これはもしかしてサンタクロースかもしれへんでっ！？」

「えっ、サンタさんっ？」瞳を輝かせるジュリ。「サンタさんがきてくれたのっ？」

「きっとそうだよ、ジュリ！　今年もジュリがいい子にしてたから来てくれたに違いないよ！」と、ジュリの頭を撫でながらサラ。「さあ、親父っ！　窓オープン！」

「どれ、父上が訪問客を確認してやろう。サンタクロースだといいな、ジュリ」

リビングの窓へと向かうリュウ。

わくわくとするジュリ。

リュウがカーテンを開け、窓を開ける。

「訪ねて来た者、顔を見せよ」

「メリークリス――」

「何だ変質者か。おい、警察に電話」

おいコラ親父っ！？

と、シュウが狼狽した顔を見て楽しんだリュウ。

ジュリの方を見て言い直した。

「ジュリ、サンタクロースが来たぞ」

「ほんとうっ？　ちちうえっ？」

「ああ。呼んでみろ」

「はいっ！」

と、立ち上がったジュリ。

どきどきとしながら窓に向かって叫ぶ。

「サンタさあああああああんっ！」

次の瞬間、

「メリークリスマ～～～スっ！！」

ピョーンと窓枠を飛び越え、リビングの中にサンタクロースに変装したシュウ登場。

「サンタさあああああああんっ！」

とはしゃいでシュウに飛びつくジュリ。

シュウは肩に担いでいた袋を降ろした。

その中には、皆からジュリへのクリスマスプレゼントが詰まっている。

「よしよし、今年も良い子にしてたジュリに、サンタさんからクリスマスプレゼントだよ～」

と言いながら、ジュリに皆からのプレゼントを渡すシュウ。

たくさんのプレゼントに囲まれ、ジュリに満開の笑顔が咲く。

「ありがとうございます、サンタさんっ！」

その笑顔、１００万ゴールドの愛らしさ。

（ああ、オレの弟は可愛いぜっ…！）

ジュリの笑顔に満足したシュウは、ジュリの頭を撫でて言った。

「来年も良い子にしてるんだよ、ジュリ。そうしたらまた来年もサンタさんは来るからね」

「はいっ、サンタさんっ！」

「それじゃ、また来年。アデュ～っ！」

と、入ってきたリビングの窓へと向かうシュウだったが。

「あれえ？　サンタさん、ひとつだけほしいものくれなかった」

そんなジュリの声が聞こえてきて、思わず足が止まった。

ジュリに振り返る。

「な…、なんのことかな、ジュリ？」

「マドをあけておねがいしたのに、きこえてなかったのですか？」

「え、えーと…？」

「きのう、ねんねするまえに『さいきょうぶたい・ファイブレンジャーにあいたいです』っていったのに、きこえてなかったのですか？」

最強部隊・ファイブレンジャー。

ジュリが好きな戦隊ものテレビである。

「サンタさんは、ジュリにファイブレンジャーをあわせてはくれないのですか？」

とジュリの瞳に涙が溜まったのを見て、一同は狼狽する。

（あかんっ、あかん…！　このままやったらジュリちゃんの夢がっ…！　うちの大切な将来のダンナさまの夢がっ…！　どうすればええんや、どうすれば…！　あああああっ、リュウ兄ちゃん何とやしてやっ！）

と、リーナがリュウを見ると、同様にリュウも考え中。

（や、やべえ…！　俺としたことが、ジュリの願いに気付いてやれなかったなんて…！　今からじゃいくら何でもファイブレンジャーに来てもらえねえしっ…！　や、やべえ…！　可愛いジュリの夢がっ……！　だっ、大体何でファイブレンジャーが好きなんだよジュリ…！？　最強部隊とかいってっけど、絶対俺のが強いだろっ…！　っていうか、シュウの1発でもお陀仏だろ…！　ああそうか、ま

だ小さいからそのへんのことが分からねえんだなジュリは。よし、ここはファイブレンジャーなんぞ弱いということを教えてやろう！
そうすりゃあ、会いたい気持ちなんて消え失せるだろ）

リュウがジュリに歩み寄り、ジュリを抱っこして言う。

「なあ、ジュリ」

「はい、ちちうえ」

「おまえはどうしてファイブレンジャーが好きなんだ？」

「つよいからです」

「そうか。でもな、この世にはファイブレンジャーより強い部隊がいるんだぜ？」

「えっ！？　ファイブレンジャーよりもっ！？」

「ああ、ファイブレンジャーよりもだ」

「わあ、すごいです！」ジュリがシュウに振り返り、「サンタさん、ファイブレンジャーよりもつよいぶたいのひとたちにあわせてくださいっ！」

「――！？」

なっ、なぬぁーーーっ！？
何してんだよ親父っ！？
どこにそんな部隊があんだよ！？

驚愕したシュウ。

一方、笑んだリュウ。
ジュリに言う。

「良かったな、ジュリ。サンタクロースはおまえの願いを叶えてくれるぞ」

「ちょっ」

ちょっと待てえええええっ！！
どうやってだよバカ親父っ！？
そんな存在しねえ奴ら、どっから連れて来いっていうんだよっ！？

シュウ、さらに驚愕。

「おい、サンタクロース」

と、リュウがリビングの窓を親指で指した。
その意味の命令に従い、とりあえずリビングの窓から外へと出たシュウ。

物音を立てないよう玄関に入ると、そこにはもうリュウが立って待っていた。

「おっ、おい親父っ！！」と、シュウは小声でリュウに食って掛かる。「どおおおすんだよ！？　ジュ、ジュリは！？　リビングで期待して待ってんのか！？」

「ジュリならミラと風呂に行かせた」と、シュウとは裏腹に落ち着いた様子のリュウ。「その間に超最強部隊を用意するから安心しろ」

「ちょ、超最強部隊っ？」

「そうだ。超最強部隊だ。実際はまあ、超最強とは言えねーんだが、ファイブレンジャーよりは明らかに強いからいいだろ」

「お、おおお…！　そんな戦隊ものテレビの役者の知り合いがいるなんて、さすが親父だぜっ！」

「最強の敵も用意するぜ」

「すげえっ、敵までいるのか！」

「ああ。ファイブレンジャーではどう考えても勝てねえ、マジすーげー強い敵だ。バケモノだ。超最強部隊がそれに勝つことによって、ジュリはファイブレンジャーなんぞ大したことねえんだと知る」

「おおっ！　そうすりゃあ、もうファイブレンジャーに会いたいなんて言わなくなるよなっ！」

「ああ。んで、そのすーげー強いバケモノみてーな敵の名をグレル」

「へえ、中の人はグレルっていうのか、グレル――……って？」

眉を寄せ、リュウの顔を見るシュウ。

リュウが続ける。

「そして超最強部隊5人の名を、サラ、リン、ラン、マナ、そしてシュウ」

「ちょっ――」

「今リンクとレオンがリビングを片付けてステージを作っている」

「待っ――」

「じゃ、あとは頼んだぜ、サンタクロース」

ぽん、とシュウの肩に手を置いたリュウ。

その顔からは、気持ち悪いくらいの満面の笑み＝「俺の命令に背いたらどうなるか分かってんなコラ」。

冷や汗を掻きそうになりながら、シュウはごくりと唾を飲み込んだ。

（こ…、こうなったらやるしかねえっ…！）

ジュリがバスタイムを終えるまで、きっとあと30分ほどしかない。

「サっ…、サラ、リン・ラン、マナァァァァァァァっ！！急げえええええええええええっっっ！！！」

シュウはサンタクロースの衣装を脱ぎ捨てながら、大慌てでリビングへと駆けて行った。

第７８話　サンタクロースのクリスマス　～前編～（後書き）

子供の夢を壊しては、イケマセン。

第７９話　サンタクロースのクリスマス　～中編～

次男で末っ子のジュリ（４歳）がサンタクロースにお願いしたこと。

それは、

『最強部隊・ファイブレンジャーより強い部隊の人たちに会わせてください』

というもの。

そしてサンタクロースのシュウはそれを叶えてやらなければならない。

自らファイブレンジャーを超える『超最強部隊』の一員に変装して。

（そうしねーと親父に殺されっからな…）

只今ミラとバスタイム中のジュリ。

リビングに戻ってくるまでの約３０分の間に準備しなければならない。

玄関から慌ててリビングへと戻って来るなりシュウは、リュウから『超最強部隊』のメンバーとして選ばれた妹たちの名を年齢順に上から呼んだ。

「サラ、リン、ラン、マナ！　今すぐ――」

準備だ！

と言おうとしたシュウは、途中で言葉を切った。

リンクとレオンが、ステージを作るために廊下へとソファーやテーブルなど邪魔になるものを運び。

カレンとユナ、レナが料理を一旦、安全なキッチンへと運んでいる。

そしてその傍ら。

シュウが呼んだサラとリン・ラン、マナに加えて、キラとミーナ、リーナ、超最強部隊の敵役のグレルが円を作っていた。

リーナが眉を吊り上げてシュウに振り返る。

「はよこっち来ぃや、シュウくん！　ジュリちゃんお風呂からあがってしまうやん！」

「おっ、おう、わりぃっ」

どうやらもう準備は始まっているらしい。

リーナが中心となって、あれやこれやと指揮を取っているようだ。

シュウは小走りでリーナの傍らに並んだ。

ミーナが言う。

「それで、リーナ。おかんはキラとどこで何を買ってくれば良いのだ？」

「おかんとキラ姉ちゃんは、今すぐドン◯キホーテのパーティーグッズコーナーでファイブレンジャーの衣装買ってきてや！　ファイブレンジャーと見た目かぶってしまうけど、時間あらへんから仕方ないわ！　それとグレルじっちゃん用には…、うーん…見た目もともとクマやから、リアルなクママスクでも買ってきてや！　グレルじっちゃんは服脱いでマスク被ればリッパなクマモンスターやで！　ほな、よろしくな！」

キラとミーナが承諾し、玄関へと駆けて行った。
靴を履き、ミーナの瞬間移動で屋敷から出て行く。

そのあと、リーナがリビングの戸口へと駆けて行った。
振り返り、シュウとサラ、リン・ラン、マナ、グレルに言う。

「はよう、うちに着いて来てや！　ここやったらジュリちゃんに見つかるかもしれへんから、シュウくんの部屋で準備すんで！」

と、いうわけで。

超最強部隊役の5匹と敵役のグレルは、リーナに着いてシュウの部屋へと向かった。
リーナが集まった役者一同の顔を見回しながら言う。

「ええか、みんな。ファイブレンジャーの衣装の色は、赤と青、黄、緑、桃や。まずはダレがどの色着るか決めんで！」

「アタシ赤ね」

と、サラ。
それに続いて、リン、ラン、マナの順に言う。

「わたし桃が良いぞ」
「わたしは黄色が良いぞ」
「じゃあ、あたしは緑で…」
そうなるとシュウは必然的に、
「青か、オレ」
リーナがうんうんと頷き、再び口を切った。
「ほな、次は名前を決めんで！」
「名前？　普通に『赤レンジャー』とか『青レンジャー』とかでいいんじゃねえの」
とシュウが言うと、リーナが呆れたように溜め息を吐いた。
「そんなんつまらんやん、シュウくん。ユーモアのカケラもあらへんわ」
「ユーモアなんていらねーよ…」
とシュウは苦笑するが、リーナは断固として首を横に振る。
「あかんあかん！　ちょっとひねった名前がええんや、うちは！」
「そうかよ…。じゃ、どうすんだよ」

「せやなあ、うーん…」と、思案顔で腕組みするリーナ。「アレやんな。やっぱ『ジャー』はつけへんとな」

「……。おい、リーナ。『レンジャー』と『ジャー』じゃ大分意味ちげーぞ。オレらはポットか。それとも炊飯器か？」

「うっさいわあ、シュウくん。うちが真剣に考えとんのに、気いちるやないかい。男が細かいこと気にすんなや」

「って、まったく細かくな――」

「あっ、せや！」と、リーナがシュウの言葉を遮り、ぱちんと指を鳴らした。「赤は『赤いんジャー』、青は『青いんジャー』、黄は『黄色いんジャー』、緑は『緑なんジャー』、桃は『桃なんジャー』！　これがええで！」

「……」

なんじゃそりゃ。

と思わず顔が引きつるシュウ。

リーナが続ける。

「5人そろって『超最強部隊・強いんジャー』やで！」

「……」

「なんやねん、シュウくん変な顔して。文句あるんかいな」

「……。…変えね？」

「もうこれでいいじゃん、兄貴」とサラが溜め息を吐いた。「本気で時間ないんだからさ」

たしかにそうなので、シュウはしぶしぶ承諾した。

それを確認したあと、リーナが続ける。

「ほな、次！　おとんとレオ兄ちゃんがステージ作ってくれてるんやから、ストーリー作ってハデに演じなあかんで！　ええか、まずは」と、リーナが一同の顔を見た。「グレルおっちゃんクマモンスターが、突然リビングに入ってくるところから始まんねん！　それで……」

とストーリーやそれぞれの台詞をぺらぺらと話すリーナ。

一同はそれを聞きながら覚えた。

そしてリーナが最後まで話し終えると、ジュリがバスタイムを終えるまであと10分だろう時間に。

そこでようやく、キラとミーナが衣装をそろえて戻ってきた。

役者一同は急いで衣装に着替える。

グレルはパンツ一丁になって熊のマスクを被り。

シュウとサラ、リン、ラン、マナはそれぞれ選んだ色の全身タイツみたいなスーツとマスク身につける。

「ほいで『強いんジャー』5人の並び方は、左から『黄色いんジャ

ー』、『緑なんジャー』、『青いんジャー』、『赤いんジャー』、『桃なんジャー』な。センターのシュウくんがリーダーで」

リーナの指示通りに並ぶ『超最強部隊・強いんジャー』の5匹。

それを見たキラとミーナが声をあげる。

「おおーっ！　すごいぞ、完璧だぞーっ！」

「おし、んじゃ――」

行くぜ！

と言おうとしたシュウの言葉をリーナが遮る。

「あかんわ。ファイブレンジャーと同じ見た目でユーモアがあらへん。それに、こういうのは赤がセンターのせいやろか。センターにいるにも関わらず、青のシュウくんがイマイチ目立たへん」

「おい、リーナ…」シュウは苦笑した。「この時間になって何を言い出すん――」

「それはいけないのだ！」と、リン・ラン。「兄上は誰よりも目立たせなければいけないのだ！」

「たしかにリーダー役の兄貴は目立たないとねえ」

とサラが続き、

「そうだね…。兄ちゃんにはインパクトのある他の色を…」

マナも続いた。

「はぁ？　おまえたちまで何を言い出すんだよ。もういいじゃねーかよ、これで」

げんなりとするシュウの傍らで、真剣な顔であれやこれやと考える妹たちとリーナ。

それから３０秒。

マナが静かに手を上げて口を開いた。

「スケルトン…」

「……」

スケルトン？

と、首を傾げた一同。

「マナ、おまえな…」シュウ、苦笑。「それって色じゃねえだろ。っていうかそれじゃ透け透け衣装じゃねーかよ」

「それやっ！」と、リーナが顔を輝かせた。「ナイスやで、マナちゃん！　シュウくんはスケルトンのスケルトンジャー…、いやっ！　スケルトン、スケルトン、スケトルン……。『超最強部隊・強いんジャー』のリーダー・シュウくんは……、ずばりっ！！」

と、リーナがビシっとシュウを指差し、

「『透けとるんジャー』やっ！！」

「おおっ」

と、シュウ以外の一同からあがった声。

「――はぁっ！？」シュウは声を裏返し、一同の顔を見回した。「おおって何だよ！？　嫌だぞオレはそんなのっ！」

「いやいや、兄貴」と、サラがシュウの肩を叩く。「これはいいよ。スケルトンの衣装なんてチョー目立つ」

「そっ、そのスケルトンの衣装はどうすんだよ！？」

「そういえばどうしようなあ」

と、思案顔になるリーナ。
シュウを除く一同も思案顔になる。

それから5秒。
キラが、ふふふ、と笑った。

「心配するな、おまえたち。私は思いついたぞ」

その時点で心配です。

と、苦笑するシュウ。
この天然バカ黒猫（キラ）がマトモな思いつきをするわけがないと思う。

「ちょっと待っていろ」

とシュウの部屋から出て行ったキラ。
ほんの1分ほどで戻ってきた。

その手には、

「良いか、シュウは服を脱いで身体にコレを巻き」

食品用ラップと、

「頭にコレを被れば完璧だぞ！」

ストッキング。

シュウの顔が強張った。

「か、かかか、母さん…！？　あ、あんたの頭やっぱすげえや……！！」

「そうだろう、そうだろう」と、自慢げに胸を張るキラ。「顔までラップ巻いてしまったら呼吸出来ないと読んで、ちゃーんとストッキングにしたのだぞっ♪　母上は賢いだろうっ？」

「で、でで、でも、ほ、ほら。ストッキング被っても透けてるし、ジュリにオレだってバレちゃうんじゃねえかな…！？」

「案ずるな、シュウ。良いか？　まずストッキングを首まで被るだろう？」と、手本に言葉通りのことを自らやってみせるキラ。「そうしたら、ストッキングを上に少しグイッと引っ張るのだ！　するとホラ、見てみろ！　まるで別人のような顔になっているだろうっ

？」

絶世の美女の顔が、お見せできないくらいヒドイことになっている。

ミーナが声をあげる。

「おおーっ！　すごいぞーっ！　さすがキラだぞーっ！　これなら完璧だぞーっ！」

「うんうん」とグレルが感心したように頷いた。「本当だぜ。おまえは昔っから賢いからな、キラ」

「母上すごいぞーっ！」と、瞳を輝かせるリン・ラン。「只ならぬ賢さだぞーっ！　この世の英雄はやっぱり違うぞーっ！」

「ママ、かっこいい…」と恍惚とするマナ。「あたしもママみたいになりたい…」

シュウの身体に冷や汗が滲み出した。

（や、やべえ…！　い、今この空間に……！）

ごくりと唾を飲み込んだシュウ。

（天然バカ集団勢揃いっ！！）

天然バカ＝キラとミーナ、グレル、それから（お忘れかもしれないが）リン・ランとマナ。

内、その度合いをシュウが判定すると。

最重度――キラとグレル（もう、本気で救いようがねえ…）。

重度――ミーナ（長年母さんを手本にしたが故にだろうな…）。

中度――リン・ラン（小さい頃から母さんよりもオレと過ごす時間が長かった分、まだマシに育ったのかも…）。

軽度――マナ（最近は親父の血が色濃く出て来た気がするんだよな。オレに容赦ないとことか特に…。はっきり言って末恐ろしい妹ナンバー1だぜ）。

重度だろうが軽度だろうが、どれも天然バカであることには変わりない。

昔はキラとミーナ、グレルで3バカ。

今はそれにリン・ラン、マナを加えて6バカ。

（ったく、『バカなんジャー』っていう、ある意味超最強な戦隊が作れそうだぜ。――っていうか、オレ……）

6バカの視線を浴び、一歩後ずさるシュウ。

（は、早くこの場から…）

さらに、ニヤニヤとニヤけたサラとリーナの視線を浴びて二歩後ずさり。

（逃げるんだっ！！）

背を向けて逃げ出そうとした瞬間、一同に一斉に飛び掛られて叫んだ。

「――ぎっ…、ぎゃあああああああああああああああっっっ！！！」

異常な怪力の持ち主・グレルに押さえつけられ。
その間に服を脱がされ。
パンツ一丁にされ。
食品用ラップで首から下をグルグル巻きにされ。
首までストッキングを被せられ。

仕上げにソレをグイッと少し上に引っ張り、父親似の凛々しく且つ整った顔を崩したら。

「ジュリちゃんが風呂から上がるまであと約3分！　ぎりぎり準備完了やっ！　ほな、みんな…」

と、気合の入った顔で一同を見回すリーナ。

それを合図に、（シュウを除く）一同は声をそろえた。

「レッツゴオォォォォっ♪」

第８０話　サンタクロースのクリスマス　～後編～

シュウ宅のリビング。

ソファーやテーブルなどが廊下に出され、ステージが作られている。

何のためのステージかというと、これから始まろう芝居――『超最強部隊ＶＳ超最強モンスター』のため。

全ては末っ子で次男のジュリ（４歳）の願いのため。

『最強部隊・ファイブレンジャーよりも強い部隊の人たちに会いたい』

と願う、可愛い可愛いアイドル的な存在のジュリのため。

サンタクロースであるシュウが、ファイブレンジャーを超える超最強部隊の一員として芝居をすることに。

加えて、シュウの妹のサラにリン・ラン、マナ。

敵のモンスター役にグレル。

ジュリはシュウたちが芝居をしているとは知らずに、シュウたちの芝居を見ることになる。

ミラと入浴を終えてリビングに戻ってきたジュリが、リビングの中をきょろきょろと見渡して言った。

「サンタさん、まだファイブレンジャーよりつよいぶたいのひとたちをつれてきてくれてないのですか？」

「今呼びに行ってくれてるぜ」

と、リュウ。

ソファーがないので床に座ってウィスキーを飲んでいる。

同様に床の上に座った観客一同――カレンとキラ、ミラ、ユナ、レナ、リンク一家、レオン。

ステージ近くに座ったリーナが、隣をぽんぽんと手で叩いて言う。

「ジュリちゃん、ここ座りや」

「はい」

と、まだ立っていたジュリが従ってリーナの隣に座った。

観客が全員、ステージの方を向いて座ったところで。

「ジュリちゃん、もうそろそろサンタさんが超強力部隊を連れて来てくれるからな」

と、リーナ。

ちらりとリビングの窓に目をやって、左眉を上げる。

それは芝居開始の合図だった。

次の瞬間、

ズガシャァァァン！！

と迫力いっぱいに窓を突き破り、

「泣ぐ子はいねがあああああっ！？」

明らかに間違った台詞で敵の熊モンスター役のグレルが、ステージ上に登場。

芝居開始早々、リンクが苦笑して呟いた。

「何してんねん、師匠は…。ナ○ハゲやあるまいし…」

「しかもあんなバケモノ現れたら余計に泣いちゃうよね」

とレオンも苦笑しながら呟いたあと。

その通り、ジュリが泣き出した。

「みゃあああああん！　こわいぃぃぃぃぃっ！」

「大丈夫やで、ジュリちゃん！」と、リーナ。「超最強部隊――その名を『強いんジャー』が、もうすぐ近くまで来てるハズや！　助けを呼んでみるんや、ジュリちゃん！」

リュウが眉を寄せた。

小声でリンクに話しかける。

「おい、もしかして『強いんジャー』っておまえんとこの娘のセンスか」

「お、おう。たぶんリーナで間違いないわ…」
「おまえよりセンスあんな」
「……」
ジュリが呼ぶ。
「たすけて、つよいんジャーーーっ！！」
そして1人1人現れる『超最強部隊・強いんジャー』の5人。
まずはサラ。
リビングの入り口から宙返りしてステージ上に立ち、グレルを指差しながら言う。
「そこまでだっ！　熊モンスターっ！」
「おっ？　赤い全身タイツのおまえは誰だぞっと♪」
「ふふふ。よくぞ訊いた！　アタシの名は『赤いんジャー』！」
続いてマナ、リン、ラン。
サラ同様、自分のポジション目掛けて宙返りで登場。
「『緑なんジャー』…」
「『桃なんジャー』っ」
「『黄色いんジャー』っ」

残りはセンターのシュウだ。
が、なかなか出てこないシュウに一同は首をかしげる。
レオンが小声で訊く。
「ねえ、キラ？」
「何だ、レオン」
「あとはシュウの『青いんジャー』？　だよね？」
「違うぞ」
「違う色にしたの？」
「うむ。シュウはスケルトンだぞ」
スケルトン？
と、首をかしげるシュウたち役者の準備に携わっていない、ジュリを除く一同――カレンとリュウ、ミラ、ユナ、レナ、リンク、レオン。
サラがリビングの戸口の方を見て、溜め息を吐いた。
「ったく、もう…」
と呟き、歩いて行ってリビングのドアの外に手を伸ばす。
そして引きずられるようにして、シュウ登場につき。

「――」

しぃーん…

と、起こった嵐の前の静けさ。

シュウを見つめる役者たちの準備に携わっていない一同の目が丸くなる。

パンツ一丁姿の上に、ミイラ男のようにグルグルと巻かれたラップ。

ストッキングを被されたことにより、別人のように崩れた顔。

サラに半ば無理矢理ポジションに立たされたシュウが、口を開いた。

「す、す、す、『透けとるんジャー』っ…」

そしてサラとリン・ラン、マナと共にポーズを取りながら、

「5人そろって『強いんジャー』っ！！」

嵐まで。

3、

2、

1…。

「――ぶはっ！」と、吹き出すユナとレナ。「あーーっはっはっはっはっはっ！！　にっ、兄ちゃっ……！！」

シュウを指差して大爆笑。

ストッキングを被っているシュウの顔が真っ赤に染まる。

（指差して笑ってんなおまえらっ！！）

レオンが驚倒した様子で口を開く。

「ちょっ、あのシュウの衣装考えたのってキラ!?」

「うむ、私だぞーっ♪　見事にスケルトンだろうっ？」

「誇らしげに胸張ってないでよキラっ！　なんってことさせてんの!?」

シュウの瞳に涙が込み上げてくる。

（助けてくれ、レオ兄っ…！！）

同様に驚倒したリンクが、慌てたようにリーナを引っ掴んだ。

「おっ、おまえも何てことさせてんねんっ…！　バカ黒猫（キラ）のアイデアなんか聞き入れんなやっ！！」

「スケルトンの『透けとるんジャー』にぴったりの衣装やで」

「いくらなんでも可哀相やないかいっ！！」

「めっちゃおいしいやん」

ストッキングの一箇所に滲むシュウの涙。

（リンクさん、あとでリーナをしばき倒してくれっ…！！）

突き刺さるミラの痛々しい視線。

「お兄ちゃ……？」

ストッキングに広がったシュウの涙。

（兄ちゃんを変態を見るような目で見てんなミラっ…！！）

さらに突き刺さるカレンの哀れみの視線。

「シュ…シュウ……」

ストッキングにさらに広がるシュウの涙。

（見ないでくれっ…！　見ないでくれカレンっ…！　こんなオレを見ないでくれえええええええええっっっ！！　――っていうか…）

シュウの顔が引きつる。

（プルプルしてんな親父っ！！）

床に突っ伏し、小刻みに震えているリュウ。

床をばんばんと叩き、必死に爆笑しそうなのを堪えている。

「こ…、これでリュウが爆笑したら、おれの人生で４度目の体験や」

と、リンク。

他の大人たちは３度目、シュウも３度目。

シュウの弟妹とリーナは、物心がついてなかったり、生まれてなかったりで、初めて味わうかもしれない。

今年から居候中のカレンも。

普段からは何とも想像しがたい『リュウの大爆笑』を見るという貴重な体験を。

グレルが演技を続ける。

「食らえぃ、透けとるんジャー！　クマクマキ～ック♪」

ドカッ！！

と、身長１９５ｃｍ体重１２０ｋｇ筋肉隆々超怪力バケモノ・グレルの、全体重を掛けたドロップキックを食らったシュウ。

「――ガハァっ！！」

見事な演技……ではなく、本気で吹っ飛んだ。

（よ、予想はしていたが……！）

シュウ、今度は顔面蒼白。

（こっ、この天然バカおっさん、演技じゃなくてマジで当ててきやがるっ！！）

さらに蹴り技を食らい。
投げ技を食らい。
寝技を掛けられ。

シュウは悶える。

「グエェェェェ！　しっ、死ぬううううううっ！」

「…こ、こりゃさすがにあかんわ」

と、呟いたリーナ。
慌ててグレルのところへと向かって耳打ちした。

「おっちゃん、おっちゃん。そろそろ透けとるんジャーにやられ始めてやっ！　やられる演技頼んだで！？」

「了解だぜっと♪」

と、グレルがシュウから離れたところで。

「がんばって、すけとるんジャー！　まけないで、すけとるんジャー！」

ジュリの必死な応援が耳に入り、シュウの瞳が感動に潤んだ。

（ジュリ、応援してくれるのか兄ちゃんを…！）

身体に治癒魔法を掛け、起き上がるシュウ。

（そうだ…！　サンタクロースのオレは、ジュリの願いのために頑張らなきゃだぜ…！）

だが、

（わ…技の名を口にしたくねえっ……！）

赤面するシュウ。

でも、それを口に出しながら演技しなければならない。

「こ、今度はこっちの番だ熊モンスター！　食らえっ！」と、拳でグレルを殴るフリをしながら、「す…、透けとるパーンチっ…！」

「――ぶはっ！」と、ここでついにリュウが耐えられず吹き出した。

「あーーっはっはっはっはっはっ！！　シュ、シュウっ、おま――」

「す、透けとるキーックっ…！」

「ぶあーーっはっはっはっはっはっ！！　やっ、やめろっ、やめてくれえええええええっ！！」

床に転がって大爆笑するリュウ。

その姿を始めて見たシュウの弟妹とリーナは激しく驚愕。

シュウとグレルの芝居が続く中、リーナが訊く。

「そ、そんなにツボったんかいな、リュウ兄ちゃん」

「リっ、リーナ！　おまえ、ナイスセンスだっ！！」

「う、うん、ありがとう」

「そっ、それからキラ！」

「な、何だリュウ。おまえのバカ笑いはやっぱり慣れないぞ」

「ラップとストッキングというおまえの発想は天才だっ！！」

「そうだろう、そうだろう。えっへん♪」

「そっ、そしてシュウ、おまえっ…！」

と、シュウを見るリュウ。

シュウが演技を続ける。

「透けとるチョーップ！」

ぶはっ！

と、再び吹きだすリュウ。

「すっ、透けてたら当たんねえええええええええええええっ！！」

「うっ、うる――」

うるせー親父っ！

オレに突っ込むなっ！

と、怒鳴りたかったところを堪え。
シュウはジュリのために演技を続けた。

「す…、透けとるエルボーっ！」

「あーーーっはっはっはっはっはっ！！」

床をばんばんと叩き。
目に涙を溜め。
顔を真っ赤にして、リュウが笑い転げる。

「てっ、てめえ、いい加減にしろシュウっ！　あとで覚えてとけよコラ！　娘たちの前で俺にこんなことさせやがってタダじゃ済まさ――」

「透けとる旋風脚っ！」

「あーーーっはっはっはっはっ！　やっ、やめろっ！　やめてくれっ！　なっ、何て俺の息子は面白れぇ奴なんだよオイ!?　おっ、おまえ最高だシュウっ！　お父上様は今、おまえを心から誇りに思ってるぜっ!!」

もはや言ってることが滅茶苦茶なリュウ。

（褒めるにしても、もっと他のことで褒めてくれよこのバカ親父っ!!）

と、シュウが顔を引きつらせてしまう傍らでは。

ジュリが相変わらず必死に『透けとるんジャー』を応援していた。

「がんばって！　まけないで！　すけとるんジャーっ！　がんばってっ…！」

「ありがとう、ジュリくん！　世のため君のため、透けとるんジャーは頑張るんジャーっ！」

ぶっちゃけてきたシュウ。

（そうだ、親父なんか気にすんなオレ！　ジュリのために頑張るんだオレっ…！　ジュリ、兄ちゃんは可愛い可愛いおまえのために頑張るからなっ……！！）

グレルに耳打ちする。

「グレルおじさんっ、そろそろジュリを人質にっ…！」

「おうよっ♪」と承諾したグレル。「ええいっ、透けとるんジャーめっ！　強いじゃねーかおまえはよっと♪　こうなったら、こうだぜ～っ！」

と、ステージ付近にいたジュリを抱っこする。

「がっはっは～！　どうだ透けとるんジャーっ！　これなら手出しできねーだろっと♪」

「ハッ！　しまった！　ジュリくんっ！」

ジュリに手を伸ばすシュウ。

「にっ…にゃあああああああん！　こわいいいいいいいいいいいっ！」

と泣き出すジュリの一方。

「ぶあーーーっはっはっはっはっ――ゴッホ！　ゴホゲハゴブファーッ……！　…あー、笑った笑った」

リュウの爆笑がようやく止まり。

そのあまりの光景に呆然としていたリーナが、はっとして言った。

「ジュリちゃんっ！　早く助けを呼ぶんや！　そのクマモンスターからジュリちゃんを救い出してくれる、ごっつ強い者の名を叫ぶんやっ！」

「たすけてっ！　たすけてぇっ…！」

よし、ジュリ！
透けとるんジャーを呼ぶんジャーっ！
そしてオレはカッコ良くそこのクマ倒すんジャーっ！

と、呼ばれる気満々で構えるシュウ。

そして、ジュリが必死な声で叫んだ。

「たすけてっ、ちちうえ～～～っっっ！！」

「――ちょっ」

エェェェェェェェェ！？

そんなのアリかよっ！！

とシュウが驚愕すると同時に、リュウがステージ上に飛び出した。

「今お父上が助けてやるぜ、ジュリ！　食らえっ、熊モンスター！　透けとらんパーンチ！」

グレルの顔面目掛け、飛んでいったリュウの拳。

当たったフリをするグレル。

ジュリを宙にぽーんと投げ、

「アデュ～～～～～～～っ♪」

ズガシャァァァァン！

と、割れてない窓をわざわざ頭から突き破って飛んでいった。

リュウの腕に受け止められたジュリが興奮したように声をあげた。

「ちちうえ、つよーい！」

「おうよ。『ファイブレンジャー』より『強いんジャー』が強く、そして『強いんジャー』より父上が強いんだぜ、ジュリ」

「わあ、ちちうえすごいーっ！」

「まーな。透けとるんジャーとか、あーんなバカなのには負けないぜ、あんなブワァーカなのには」

と、にやにやと笑いながらシュウに振り返ったリュウ。

愕然として立っているシュウの全身を改めて見、「ぷっ」と短く嘲笑した。

ジュリがリビングの中をきょろきょろと見渡す。

「ちちうえ、サンタさんは？」

「ああ、『強いんジャー』をうちに届けてから、次の家に向かったな」

「ぼく、サンタさんにおれいがいいたいです」

「そうか。窓に向かって叫んでみろ。ちゃんとサンタクロースに聞こえるハズだ」

「はいっ！」

と、窓の方を向いたジュリ。

大きな声でサンタクロースにお礼を言った。

「ぼくのおねがいきいてくれてありがとう、サンタさあああああん！」

そして謝罪もした。

「つよいんジャーにあいたいなんて、たいへんなことといってごめん

なさあああああああい！」

おまけに本音ぶちまけた。

「ちちうえはかっこよかったけど、すけとるんジャーはビミョ～～～～～っ！」

グサァっ！！

と、シュウの胸に突き刺さったジュリの言葉。

（そっ、そんなっ…！　ビミョーってジュリ、そんなっ…！　オレ頑張ったのにっ…！　スゲエェェ恥ずかしかったけど、頑張ったのにっ……！）

あまりの衝撃に立っていられず、四つんばいになったシュウ。

そんなシュウに、ジュリが１００万ゴールドの笑顔で振り返った。

「すけとるんジャーさん、おつかれさまでした。おうちにかえって、ステキなクリスマスをおすごしください♪」

「あっ、あの、ジュリく――」

「ずっとバイバイ♪」

とシュウに手を振り、きゃっきゃとリュウに甘えるジュリ。

「……。…うっ」

うわあああああんっ！！

と、シュウが泣きながらリビングから飛び出して行った。

そのあと、レオンがぽんとカレンの肩を叩いて苦笑する。

「な…、慰めてあげて……」

「はい……」

レオンと共に苦笑したあと、カレンもシュウを追ってリビングから出て行った。

カレンがシュウの部屋に入ると、床にラップやストッキングが散乱していた。

ラップを目で追っていくと、そこにはバスルーム。

シュウはその中にいるようだった。

「シュウ？」

とカレンがドアの外から声をかけると、シュウの泣き声が返ってきた。

「オレを見ないでくれカレン！　オレを見ないでくれえええええええええっ！」

カレンは苦笑した。
シュウの泣き声が続く。

「なんでオレばっかりこんなひでえ目に合うんだよおおおおっ！
こんなダセーヤロウなんか中々いねーよおおおおおおおっ！　オレカッコわりぃいいいいいいいいっ！！」

「か、格好悪くなどないわ、シュウ」

「どう見てもカッコ悪かったじゃねーかよおおおおおっ！！」

「本当よ、シュウ。大切なジュリちゃんのために頑張るあなたは、とても格好良かったのですわ」

「ウーソーだあああああっ！！　どーせオレなんかビミョーなんだあああああっ！！」

「嘘じゃないわ」

「嘘だ嘘だ！　なんちゃってウッソピョォォォォォォン♪　とか言うんだろおまえっ！！」

「間違いなく言わないわね」

「……」

「ドアの向こうで赤面してないで」と、カレンは溜め息を吐いた。
「早く出てきてちょうだい」

「いっ、嫌だ！　絶対に嫌だっ！！」

と、断固としてバスルームから出てこようとしないシュウ。

カレンはもう一度溜め息を吐き、シュウのベッドへと向かって行った。

「まったく、どこの子供かしら…」

「うっ、うるせーなっ！　嫌なもんは嫌だっ！　こんなオレ、おまえに見られたくねえっ！　おまえが部屋から出て行くまで、オレは絶対にここから出ないんだからなあああああああああっ！！」

「そうかしら？」

と、ベッドに寝転がるカレン。

「出ないったら出ないっ！　絶対に出な――」

「ヘイ、カモオォォォォン」

とのカレンの誘惑で、

「フィーバァァァァァァァァァっっ！！」

呆気なく飛び出て来たパンツ一丁のシュウ。

黒猫の尾っぽをぶんぶんと振り、わずか1秒後にはカレンに追い被さっていた。

「なあ、今誘った!?　オレ誘った!?　オレ誘惑されちゃった!?　マ～～ジかハニィィィィィィィィっっっ！！」

ぶっちゅううううううううっ（ハート×3）

と、カレンの唇に吸い付いたあとに、ようやくシュウははっとした。

「――しっ、しまった！」

「ふふ、ちょろいのですわ」

「ひっ、卑怯者おおおおおおおおおっ！！」

と再びバスルームへ逃げようとしたシュウ。
カレンに尾っぽを引っ張られて飛び上がった。

「フギャアァァっ！！」

「卑怯者って何かしら。意味不明なこと言わないでほしいのですわ」

「おっ、尾っぽを離せっ！」

「逃げないのなら離してあげるのですわ」

「逃げるっ！」

「じゃあ離さないのですわ」

「離せったら離せっ！　見られたくねえんだよ、おまえにっ…！！
カッコわりぃオレなんかっ……！！」

とカレンに背を向け、必死にカレンの視界から逃げようとするシュウ。

「……分かったのですわ、そこまで言うなら」

と、シュウの尾っぽから手を離し、カレンは寝返りを打ってシュウに背を向けた。

シュウが小走りでバスルームに向かう中、カレンは続ける。

「昨日のクリスマスプレゼントのお礼に、今夜は少しサービスしてあげようと思ったのに」

「――えぇっ…！？」

と、思わず振り返ったシュウ。

頬を紅潮させながら訊く。

「サ…、サササ、サービスって…！？」

「サラからあーんなことや、こーんなこと教えてもらったのに」

「あ、あああ、あーんなことや、こここ、こーんなことっ…！？」

「今夜実践しようと思ってたけれど、あなたがそういうつもりなら別にあたくしは構わな――」

「実践っ！」

ぴょーーん…

とカレン目掛けて飛んだシュウの身体は、

「プリィィィズっ！！」

再びカレンに負い被さったのだった。

「カっ、カカカ、カレンとドキドキわくわくクリスマススペシャルフィーバー、キタァァァァァァァァァっっっ！！！」

その頃。

さっきまでリビングで大いに楽しんでいたリュウ。

しかめっ面をしながら、書斎に入っていった。

鳴っている携帯電話に目を落とす。

（ったく、せっかく楽しい気分だったのによ。名前見るだけで害されるぜ）

リュウは深く溜め息を吐き、電話に出た。

「大した用じゃなかったら恐ろしいくらい優しく撫で回してやっかんな、この超一流変態」

第８０話　サンタクロースのクリスマス　～後編～（後書き）

２１時４５分ごろメールくださった読者さまへ。

いっ、いってらっしゃいませ！（遅っ）
そしてお疲れ様でしたっ！

結果は今日なんですよね！？
サ、サササ、サクラサケエェェェェェェェェ！！！

第８１話　優勝商品

クリスマスパーティーのあと。
書斎の中。

掛かって来た電話に出たリュウ。
動揺した相手の声が返ってきた。

「…え…えええ…！？　…ひ、ひどいじゃないかリュウ…！　…大した用件じゃなかったら私を恐ろしいくらいに優しく撫で回すなんてっ…！　…恐ろしいくらいにフルボッコしてくれっ…！」

「てめーをフルボッコしたら褒美与えることになるじゃねーか」

「…ハァハァハァ…！　…ほ、褒美をくれえぇぇっ…！」

「大した用だったら『透けとるんジャー』の攻撃食らわせてやらねえでもねえ」

「…すけっとジャ…？」

「何でもねえ、こっちの話だ。早く用件を言え、超一流変態」

電話の相手は文月島ギルド長兼、超一流ハンター兼、超一流変態・ゲール。
顔の半分を隠す長い前髪が特徴的。
が、前髪をあげればその顔立ち、まさに眉目秀麗。

ゲールが用件を切り出す。

「…毎年元旦恒例ギルドイベントのことなんだが…」

毎年元旦恒例ギルドイベント――毎年元旦（1月1日）に行われる、『全島ギルド雪合戦大会』。

「…悩みはないかい、リュウ…？」

「悩み？　雪合戦大会でか？　…ああ、あるな」

「…そうか…。…やっぱりリュウも――」

「元旦早々に面倒クセェんだよバカがって思うな」

「…ハァハァハァ…！　…そっ…、その罵声がたまらな――」

「早く用件の続きを言え」

「…おっと、そうだった…」と、電話の向こう、咳払いをしたゲール。「…他の参加者も、君と同じ気持ちなのだろうか…？」

「は？」

「…元旦早々に面倒だと思うのだろうか…」

「当然だろうが。何で休みたい元旦から雪合戦しなきゃならねーんだよ。優勝賞金も出ねえってのに。雪合戦するだけして、ランキングさえねーじゃねーか」

「…前・文月ギルド長が、賞金だのランキングだのなしにして、ギ

ルド同士の交流を図りたいと考え出したイベントなのだが…」

「元旦以外のギルドイベントのときは、自ギルドの名誉をかけて本気で争ってんだぜ？　それなのに元旦だけ仲良くしようとは思えねーんじゃねーの」

「…うーん…」

「何だよ」

「…毎年元旦恒例・雪合戦大会に、賑わいがほしい…。…そう、いつものギルドイベントのときような殺気漂う賑わいを…！」

「つまりその殺気を感じて快感を味わいてーんだな？」

「…ハァハァハァ…！　…そ、そうなのだ…！　…あの気迫…、あの殺気…！　…た、溜まらんっ…！」

「ま、賑わいがほしいならいつものギルドイベント同様、ランキングをつけて優勝賞金を用意すりゃいいんじゃね」

「…そうだね、ランキングはつけよう…。…でも…」

「何だよ」

「…元旦というお目出度い日だから、いつも以上の賑わいがほしい…。…そう、優勝賞金以上に手にしたいと思う優勝商品を用意して…！」

「何だよ、それ」

「…例えばキラのヌード写真しゅーー」

「優しく褒め称えられたいのか？」

「…じょ…冗談が通じないね…。…でも君たちに関する物だと賑わうと思うな…」

「じゃーシュウの写真にしてやる」

「…そう裏で普通に売買されているものじゃなくて…」

「普通に売買されてんのかよ。シュウの隠し撮り写真１枚いくら？」

「…２０００から４０００ゴールド…」

「高っ。たかがシュウの写真１枚ごときに無駄だな」

「…君の隠し撮り写真は１枚８０００から１００００ゴールド…」

「安っ。もっと取れよ」

「……。…話戻すけど…」

「おう」

「…どんな優勝商品にするか、君も考えておいてくれないかな…」

とのことで。

ゲールとの電話を切ったあと、リュウは書斎の回転椅子に座って

考える。

（俺たちに関するものだと賑わう…か。俺たちって言っても、リンクたちは入れない俺の家族ってことだろうな。…つってもなー、俺は商品にされたくねーし、キラや娘たち、ジュリは持ってのほかだぜ。変なことに使われそうだしな、絶対に駄目だ）

そうなると、

（やっぱ商品はシュウに関する物に決定だな）

シュウの部屋。
シュウのベッドの中。

シュウの腕枕に頭を着けているカレンが、シュウに鸚鵡返しに訊いた。

「明日の仕事、着いて来なくていい？」

「ああ。明日は家でのんびりしてていいから、おまえ」

「どうしてかしら？」

「いや、その……」と、シュウが目を逸らしながら言う。「…行くところがあって……」

カレンは眉を寄せた。

「あたくしと一緒じゃ行きづらいところってことかしら」

「えーと、そのぉ……」

「女の子と会うのかしら」

「ちっ、ちげーよっ！」シュウが狼狽した様子でカレンに目を戻す。

「なっ、何言ってんだよおまえ！？　オンリーユ～～～～～っ♪

だぜ、オレはっ…！」

「浮気じゃないなら教えてくれたっていいじゃないっ」

と、カレンの頬が膨れた。

「ぐふふ、かーわいぃんっ」

つんっ♪

とシュウが指でカレンの頬を突くと、カレンがシュウの手を振り払って眉を吊り上げた。

「ふざけないでちょうだいっ！」

「オっ、オレはいつだってマジだぜ」

「早くどこへ行くのか教えてっ！」

「う、うーん…」

と、シュウは苦笑する。

（ミヅキんとこ行くなんて言い辛いっての……）

カレンがシュウに顔を近づけて訊く。

「何かしら!?　やっぱり浮気なのかしら!?」

「ちっ、ちげーってば!　そのっ…、おまえの嫌いなヤロウに会いに行くんだよっ…!」

「え?」カレンは眉を寄せた。「あたくしの嫌いな男の子……?」

「き…嫌いっていうか、苦手?」

少しの間考えたカレン。

はっとする。

「ミヅキ…くん……?」

「う…うん……」

と頷き、カレンから目を逸らしたシュウ。

困惑したカレンの視線を感じながら続けた。

「そのさ…、オレがおまえにあげたクリスマスプレゼントあるだろっ?」

「ええ。なかなか手に入らないドール服ね」

「おう。じ、実はさ、それら全部ミヅキが取って置いてくれたみてーなんだよ」

「えっ？」

「2着は店の奥から出してきたし、3着はミヅキがオマケにって入れたやつなんだよ。あいつ売れ残った服とか言ってたけど、そんなこと有り得ねえんだろ？」

「え、ええ。とても人気のあるブランドとコラボしたドレスだから、売れ残ることはまずないのですわっ…。徹夜して並んで買う人もいるくらいだし……」

「だからさ、ミヅキがおまえのために取って置いたんじゃねーかと思って」

「……」

「どおおおおいう了見か訊こうと思ってよ!?　まだカレンのこと好きだからとか抜かしたらあいつマジしばき倒――」

「お、落ち着いて、シュウ」とカレンは興奮したシュウの言葉を遮り、話を続けた。「たしかに売れ残りなんて考えられないから、ミヅキちゃんが取って置いてくれたのだと思うのですわっ…！　シュウ、あたくしもミヅキくんのいるドールショップへ一緒に連れて行ってっ……！」

「えっ」と、シュウは驚いてカレンの顔を見た。「お、おまえあいつに会いたくねえだろっ…!?」

「に、苦手じゃないと言ったら嘘になるけれどっ…、お礼を言いたいのですわっ……！」

「そんなに嬉しかったのか」

「ええ、それはもう…」と、カレンの顔が恍惚とする。「まさかの奇跡でほしかったドレスが全て手に入ったのですものっ…！　ああ、もうダメ。今夜も夜更かししてドール遊――」

「ダーメーだっ！」

と起き掛けたカレンの身体を寝かせたシュウ。

さっきのカレンに続いて頬が膨れる。

「昨日充分人形遊びしたじゃねーかよ」

「そうだけれど」

「今日もオレ放置して人形遊びしたら、明日家に置いてくからな」

「じゃあ、明日あたくしもドールショップへ連れて行ってくれるのね？」

「おう。その代わり、オレの傍離れんなよ」

そういうことになった。

翌日。
朝食の席にて。

「なあ、『透けとるんジャー』」

「そ、その呼び方やめろ親父っ…」

とシュウが赤面しながらリュウを見ると、リュウが続けた。

「おまえ優勝商品ね」

「は？」

「来年の元旦の『全島ギルド雪合戦大会』の」

「あのギルドイベントに優勝商品つくようになったのか。っていうか」シュウは眉を寄せた。「オレが優勝商品て何だよ」

「そのまんま。おまえに関するものが優勝商品」

「な、何でオレなんだよ？」

「ゲールがいつものギルドイベント以上の賑わいがほしいんだと。で、俺たち家族に関するものならハンター集まるってんで、おまえに決定」

「な、何で！？」

「俺は商品にされるなんて嫌だし、キラや娘たち、ジュリを商品にするなんてふざけんなって話だろ。どんなものでもヤロウのオカズ

にされそうだぜ」

「オレはいいわけ!?」

「嫌なわけ?」

「嫌だ!」

「そうか。じゃ、それなりの商品用意しとけよ」

「なっ」シュウ、驚愕。「何でだよ!? 意味分かんねーよ! 嫌だって言ってんだろ!?」

「飯食ってるときに騒ぐな、うるせえ!」

ゴスッ!!

とリュウの拳骨を食らい、シュウは頭を抱える。

「いでえぇ…!」

「もう決定したんだ。ごちゃごちゃ言ってんな」

「だって――」

「俺の言うことが聞けねえってんなら」

「な、何だよ…!?」

「もう特注ゴムやらね」

「えっ――」

「セックス禁止」

「ちょっ――」

「カレン没収」

「なっ」

なんじゃそりゃあああああああああっ!?

葉月町にある、アンティークなレンガ造りのドールショップ。

ここ最近、その中によく溜め息が響いている。

「はぁ…」

その溜め息の主は店員のミヅキ。

客がいなくなると、溜め息ばかりが漏れる。

（何だかもう、自信がなくなってきたな…。ドール作りには自信があったのに……）

商品棚を整理して溜め息を吐き、床掃除をしながらまた溜め息を吐く。

（才能、ないのかも……）

店の出入り口のドアが開いた。

「あっ、いらっしゃいませっ！」

と慌ててドアへと小走りで向かったミヅキ。

同じ趣味を持つ客とのやり取りは楽しい。

自然と笑顔になれる。

が、客の顔を見上げたミヅキから笑顔が消え失せた。

おまけに、

「げ」

なんて言葉も出た。

「げ、とは何だコラ」

と、相手の客――シュウの顔が引きつる。

「これは失礼致しました、お客様」とミヅキがにっこりと笑い、「早急にお帰りください」

「てめっ――」

「シュ、シュウ、落ち着いて」

と、シュウの言葉を遮った、ミヅキの耳に聞き覚えのある声。

シュウの袖を握った小さな手。

シュウの背からおずおずと顔を出した少女の顔を見て、ミヅキの目が丸くなった。

「カ…、カレンちゃ……」

「こ、こんにちは、ミヅキちゃ…あ、ごめんなさいっ…。こんにちは、ミヅキくん」と、カレンはシュウの傍らに並んだ。「お久しぶりね」

「う、うん…、そうだね……」

とカレンから目を逸らすミヅキ。
笑顔が強張っている。

カレンは続けた。

「あ、あのね、ミヅキくん、今日はお礼を言いに来たの」

「お、お礼？」再びミヅキがカレンの顔を見た。「…って、ああ、ドレスのこと？」

「ええ。ありがとう」と、カレンが笑う。「あたくし、とっても嬉しかったのですわ」

「カレンちゃん…」

カレンの笑顔を見つめるミヅキ。
安堵したように微笑んだ。

「そっか、良かった」

「んで!?」と、シュウが不機嫌露わな声を出しながら割り込む。
「おまえ、カレンのために人形の服を取って置いたわけだな!?
その理由は!?」

「うるさいなあ、あんた」

と、ミヅキが溜め息。
カレンには笑顔を向けるのに、シュウにはしかめっ面を向ける。

「カレンちゃんへのお詫びだよ」

「カレンのことまだ好きとか言うんじゃねえだろうな!?」

「もうとっくに諦めてるよ」

「その言葉に偽りはねえんだろうな!?」

「ないよ」

「その言葉信じるからな!?」

「うるさいなあ。何、カレンちゃんあんたの彼女になったわけ?」

「まーなっ！　カレンはオレの――」

「うわ、もったいなー」

「んだとゴラァっ!!」

「ああもう、シュウ落ち着いて」

と、苦笑しながら割って入ったカレン。

ミヅキに訊く。

「ミヅキくん、ドール製作の方はどう？」

「えっ…？」

と、困惑したような顔になったミヅキを見て、カレンは首を傾げた。

「どうかしたのかしら？」

「…えと、その…、もう作ってないんだ」

「えっ？」

驚いたカレン。

シュウは思い出す。

（そういやクリスマスの3日前に来たときも、こいつそんなこと言ってたっけ…）

カレンが動揺しながら訊く。

「ど、どうしてミヅキちゃんっ？　あんなに上手なのにっ…！」

ミヅキが首を横に振った。

「ぼくなんか大したことないんだよ。ネットオークションに出してみたんだけどさ、まったく売れないんだ」

「高いんじゃねーの」

と、シュウ。

ミヅキが言う。

「１０万」

「高っ」

「ドール作りに励んでたら、生活苦しくなってきて…。それくらい取らないとやばいんだ」

「金欠で人形作り続けてねえってことか？」

「それもあるけど、それ以上に…」と、ミヅキが顔を曇らせて俯いた。「もう、自信がないんだ。上手く作れてたら、１０万なんて売れるはずなんだ。きっと、ぼくは才能がないんだ」

「そっ、そんなのことないのですわっ！」とカレンが声をあげた。

「ミヅキくん、とても素人とは思えないほど上手に作るじゃないっ…！　でも売れないのは当たり前と言ったら当たり前なのですわ、言った通り素人なのだから。あ、プロに劣るという意味じゃないのよ？　素人の作品となると、ドール会社が作ったものよりも手が出しにくいのよ」

「まあ、たしかにそうだよな」うんうん、と納得して頷いたシュウ。

「素人が作ったものには少し不安があるっつーか…」

と言いながら、美少女顔のミヅキを見下ろす。

（こいつには借りがあるんだよな…。こいつのおかげでカレンすげー喜んだし…。借りは返さねえとな……）

でも、

（どうやってだよ、オレ。こいつが作った人形が売れればいいんだろうけど……）

考えるシュウの傍ら、

「あっ」と思いついたらしいカレンが、パンと手を叩いた。「そういえば今朝、リュウさまが雪合戦大会の優勝商品にシュウに関するものを云々……」

ギクっ

としたシュウ。

嫌な予感が走る。

「そ、そ、それがどうしたカレン？」

「シュウ、何を優勝商品にするか決めたのかしら？」

「ま、まだ決めてねえけど？」

「じゃあ、決まりなのですわ♪」

「な、何が？」

「来年の元旦の『全島ギルド雪合戦大会』の優勝商品はシュウドール購入券よ♪」

「待っ――」

待ってくれ！

と言おうとしたシュウの言葉を、ミヅキが遮る。

「なるほど。それなら少しは売れそうだよ」

「そっ、そんなわけＮＥＥＥＥＥＥＥ！！」と狼狽のあまり声が裏返ったシュウ。「もらえるならまだしも、購入券だぞ！？　金払って買うんだぞ！？　優勝したにも関わらずっ！！　バカな考えはよせっ！！」

「あら、バカとは何かしらっ？」と、カレンがシュウの顔を見上げた。「優勝者には『現金１００万ゴールド、またはシュウドール購入券！』となっても、あたくしはシュウドール購入券の方が選ばれる自信あるのですわっ！　似てなかったら１００万ゴールドを選ばれるかもしれないけれど、ミヅキちゃんはクリソツに作ってしまうのだからっ！」

「いやいやいやいやいや――」

「シュウ！」

とシュウの言葉を遮ったカレン。
上目遣いで見上げ、
「お願いっ（ハート）」
「OKっ♪　――って」
しまったあああああっ！！
と焦ってももう遅い。
「きゃあああああっ！　ありがとう、シュウっ！」
と、カレンが舞い上がってしまった。
（可愛いからってついOKしちゃったオレ、すーげーバカ親父似っ…！）
愕然としてしまうシュウの傍ら。
カレンがミヅキに笑顔を向けた。
「ドレスのお礼よ、ミヅキくん」
「カレンちゃん……」
「さっそくリュウさまにお知らせしなくっちゃ♪　お店の中じゃ何だから、ちょっと外行ってくるのですわ」
と、カレンが携帯電話を取り出しながら店の外へと出て行った。

シュウとミヅキの間に流れる沈黙。
そのあと、シュウが溜め息を吐いて口を開いた。
「可愛いハニーの頼みだ。いいぜ、オレの人形作っても。それに、おまえには借り返さないといけねーから」
「借り？」
「クリスマスプレゼントでカレンが大喜びしたのは、おまえのおかげだからなっ…」
と、シュウがミヅキに背を向けた。
ミヅキはシュウの背を見つめる。
（似てなかったら売れない。似てたら売れる。売れなかったら、やっぱりぼくに才能がなかったということ。でも、もし売れたら……？）
ミヅキの胸が動悸をあげる。
（もう一度、ドール作ってみよう）
口を開かないミヅキに、シュウは背を向けたまま言う。
「おい、何か言え――」
「ねえ」

ぽんとミヅキに肩を叩かれたシュウ。
振り返るとそこには、
「脱いで♪」
「――!?」
瞳を輝かせたミヅキの笑顔があった。

第８１話　優勝商品（後書き）

昨日の２０時３４分ごろにメールくださった読者さまへ。
何度も返信したのですが、戻ってきてしまいます……ｏｒｚ
ミ○○さま、アドレスにお間違いがないかご確認お願いします＞＜

昨日の２３時２０分にメールくださった読者さまへ。
メールボックスをご確認くださいゞ（＊´∀｀＊）ノ〃

第８２話　主人公のお宅にお邪魔します

葉月町にあるドールショップの外。
カレンはリュウに電話していた。

「もしもし、リュウさま？　お忙しいところごめんなさい」

「おう、カレン。どうかしたか」

「雪合戦の優勝商品のことなのですが」

「おう。シュウの何を出すか決まったのか」

「はい。ドールです」

「ド……？」電話の向こう、眉を寄せたリュウ。「ばっ、おまっ……！」

驚愕した。

「ダッチかよ！？」

「へっ！？」

「ヤロウのダッチとかって止めてくれ気持ちわりぃっ！」

「ちょっ――」

「シュウの奴何考えてんだよ、すーげー思い切ったなダッチだなん

――」

「ちっ、違います違います違いますっ！」カレンは狼狽してリュウの言葉を遮った。「そんなのではないのですわっ！　あたくしが持ってるようなドールですわっ！」

「何だ。ああ、驚いた」

「それはあたくしですわっ…！　まったくもうっ、リュウさまったら……！」

と、赤面するカレン。
リュウが続ける。

「んで、話の続きだが」

「あ、はい。それで優勝商品は――」

「おまえどこでダッチ知ったの」

「……。…続きってそっちですか」

「意外なもん知ってんなーと思って」

「ネ…、ネットでドールについて調べているうちに偶然辿り着いたという感じですわ」

「へー」

「は、話を優勝商品のことに戻してください、恥ずかしいですわっ

…！」

と思わず周りを気にしながら言ったカレン。
リュウが話を戻す。

「おう。そのシュウ人形、どこで手に入れたんだよ」

「現物はまだないのですが」

「これから手に入れんのか」

「えと、シュウとあたくしの知り合いの男の子がドールを作っているのです。ミヅキくんというのですが、彼の作るドールは本当にとても上手で…」

「ふーん」

「そ、それでリュウさま？　訳あって優勝商品は『シュウのドール』ではなく、『シュウのドール購入券』がよろしいのですが……」

「つまり優勝した奴が、そのミヅキに金払ってシュウの人形買うってことか」

「は、はい」

「とりあえず優勝できなかった一部のシュウファンは阿鼻叫喚になりそうだな」

「そ、そうかも…。シュウに似てないドールだったらまだしも、ミヅキくんのことだからシュウそっくりに作るでしょうし」

と苦笑したカレン。
リュウが続ける。

「ふーん、そっくりに……か」と、リュウは数秒間を置き、「面白そうだから、オークションすっか」

「えっ？」

「ミヅキはそのシュウ人形いくらで売るって？」

「た、たぶん１０万くらいだと思いますが」

「んじゃ、開始価格１０万だな。んで、購入券をもらえるのは雪合戦ランキングトップ２０のハンターとする。んで、優勝者には加えて１００万ゴールド、準優勝者には５０万ゴールド」

「オークション…」

呟いたカレン。

（これでとても高い値がついたら、ミヅキくん自信を取り戻せるわよね。生活苦からも抜け出せるしっ…！）

リュウが続ける。

「ミヅキに伝えとけよ。んじゃ、俺仕事だから」

「あ、はいっ。ありがとうございます、リュウさま」

電話を切ったカレン。
急いで店の中へと戻る。

「シュウ、ミヅキくん！　聞い――」

カレンは眉を寄せて言葉を切った。

「たっ、助けてくれカレェェェェェェェンっ！！」

と、シュウ。
ミヅキに服を剥ぎ取られようとしている。

「おとなしく脱いでよ！」と、携帯電話のカメラをシュウに向けながらミヅキが声をあげた。「細かく撮らないと、そっくりに作れないんだから！　ああもう、ハサミ持って来て切るよ！？」

カレンは苦笑し、ミヅキのところへと歩いて行った。

「ミヅキくん、ここではちょっとまずいのではないかしら」

「その雪合戦大会？　って、元旦なんでしょ？　今日から取り掛からないと作り終わらないよ」

「あ…、そうですわよね。やっぱりあれなのかしら？　写真より実物見ながらの方が作りやすいのかしら？」

「そうだね。実物あった方が作りやすいよ。ぼく男ドールは初めて作るし尚更ね」

「そう……」

カレンは考える。

（時間がないし、なるべく頻繁にシュウに会わないといけないわよね…。それなら……）

と、シュウの顔を見上げるカレン。

「ねえ、シュウ」

「なっ、何だカレ――ぎゃあああっ！　ミっ、ミヅキてめっ…！」

「これから約一週間のことなのだけれど」

「お、おう？　――って、ちょ、おまっ、ドコ撮ってんの!?」

「ミヅキくんをお屋敷に泊めてあげられないかしら」

「ああ、なるほどな。それなら製作捗るな――って」

シュウは眉を寄せた。

カレンの顔を見る。

「何だって？」

「これから一週間、ミヅキくんをお屋敷に泊めてあげられないかしら」

「なっ…!?」シュウ、驚愕。「ほっ、本気で言ってんのおまえ!?　こんな羊の皮被ったオオカミと一つ屋根の下に暮らす気か!?」

「何もしないって言ってんでしょ」

と、ぐりぐりとシュウの靴を踏みつけるミヅキ。

「いでででっ！　なっ、何すんだてめえっ！」

「ぼくもその方が都合いいんだけど？」

「うちの親父が許さねーよ。初対面のヤロウを泊めるなんて」

「そんなことないと思うのですわ、シュウ」と、カレン。「さっき、リュウさまにお電話したのだけれど、ミヅキくんの作ったシュウドールをオークションにかけることになったのですわ」

「オークション？」

と鸚鵡返しに訊いたシュウとミヅキに、カレンはリュウから言われたことをそのまま伝えた。

「それで、オークションで高値をつけるためには、なるべくシュウそっくりに作ることが大切でしょう？　面白そうだからってオークションを提案したのはリュウさまだし、優勝商品のためとなればミヅキくんの宿泊許可を頂けるのではないかしら」

「えぇ…？」と眉を寄せたシュウ。「うちの親父がそう簡単に行くかなあ」

「大丈夫なのですわ、シュウ」とカレンがにっこりと笑う。「リュウさまの愛するキラさまさえ味方につけてしまえば、あとは余裕で

こっちのものなのですわ♪」

「……」

シュウ、苦笑。

（オレも親父も、愛する女の手の内デス…）

PM7時。

仕事が終わったシュウは、カレンと共にミヅキのアパートへと向かった。

ミヅキの一週間分の着替えなどが入ったバッグと、ドール作りに必要なものが入ったバッグ。

2つの大きなバッグのうち、シュウは大きな方を持った。

ミヅキが小さな方を持ち、シュウの屋敷へと向かって歩き出す。

「ねえ、あんたさ」と、ミヅキがシュウの顔を見上げた。「妹が7人いるんだっけ？」

「おう。あと4歳の弟が1人。ジュリっていうんだけど、すーげー可愛いんだぜ！　女の子みたいだけど、女の子より可愛いんだなコレがっ！」

「…そういうのって自慢に思うわけ」

「おう、思うぜ！」

はっきりと笑顔で答えたシュウの顔を見たあと、ミヅキは前を向いて続けた。

「妹さんたちも、皆そう思ってんの」

「思ってるぜ。それどころか、親父も母さんもリンクさん一家もレオ兄もグレルおじさんも、みぃーんな思ってっけど？」

「あと、あたくしもですわ」

と、カレン。

ミヅキの不安そうな横顔を見て言う。

「大丈夫よ、ミヅキくん。みんな、ミヅキくんのお姉さまやミヅキくんの彼女だった子たちとは違うのですわ」

「？　何の話だよ」

とシュウが首をかしげると、ミヅキが「ふん」と鼻を鳴らした。

「あんたには関係ないよ」

「うわ、ムカつく。ま、おまえのことなんてどーでもいいけどよ」

とミヅキ同様「ふん」と鼻を鳴らしたシュウ。

ミヅキの横顔を斜め上から見下ろす。

カレンに大丈夫と言われても、なんだかやっぱり不安そうだ。

（そういえばカレンが、ミヅキは姉にいじめられてきたって言ってたっけ。オレも皆にいじられまくってときどき泣くけど、それとはまた違うんだろうな…）

屋敷の前まで来ると、シュウは鼻をくんくんとさせた。

「うわ、今日カレーかよ」

「あらヤダ、本当だわ。もっと早く帰ってくるべきでしたわね」

と、カレン。

ミヅキが首をかしげる。

「カレーだと何かあんの？」

「うち、カレーはスパイスから調合して作るんだけどよ。それぞれの好みに合わせて超甘口と甘口、中辛、辛口、激辛を作るから大変なんだよ。さらにすげー食うのもいるし、変な具を入れたのを食いたがるのもいるしで、カレーのときが一番調理に時間かかんの」

とシュウが答えながら屋敷に入ると、そこに仁王立ちで待っていた者が一匹。

ミヅキをじろりと見下ろしながら口を開く。

「おかえり、兄貴、カレン」

「た、ただいま……、サラ」

と苦笑したシュウとカレン。

以前ミヅキがカレンに何をしようとしたか知っているサラ。

「アタシ、あんたが嫌いなんだよね」

と、それはもう、ずばっと言い退けた。

自分よりも数ｃｍ背の高いサラの目を見て、ミヅキが言う。

「ぼくはもう、何もしない」

「……」

髪の毛と同じ栗色をしたミヅキの瞳。

心の内を見抜くように、じっと見つめて１０秒。

サラが安堵したように小さく溜め息を吐いた。

「っそ、分かった。信じる」

「ありがとう」

「うん。でさ」と、小声になるサラ。「兄貴のダッチ作んでしょ…！？」

「――ちっ」シュウ、驚愕。「ちげえええええええっ！！　んなわきゃねえだろバカっ！！」

「何だ、違うのか。あはは」

「本当リュウさまそっくりね、サラ…」

と恥ずかしそうに苦笑するカレン。

その傍ら、

（前にいきなりパンツの中見られたときも思ったけど…。サラちゃんて女の子っぽくないよな……、行動も、思考も）

とミヅキが確信していると。

奥からキラがやってきた。

「おかえり、シュウ、カレン」

ミヅキの目が丸くなる。

（うわあ…、キラさんだ。近くで見ると本当に綺麗だなあ。髪の毛とかガラスみたいだ）

キラの黄金の瞳がミヅキに移り、ミヅキが慌てたように口を開いた。

「あっ…！　は、初めまして、ぼくミヅキといいますっ…！」

「うむ。電話で話は聞いている。2階の余っている部屋を自由に使って良いぞ」

「あっ、ありがとうございますっ…！」

と頭を下げるミヅキ。

胸がどきどきとする。

（す、すごい人（猫）と話しちゃった……！）

キラがシュウを見て言う。

「シュウ、ミヅキを部屋へ案内してやれ。もうすぐご飯だぞ」

承諾し、カレンと共にミヅキを連れて2階へ続く階段を昇るシュウ。

感動した様子のミヅキを見て苦笑する。

「言っておくけど、うちの母さんときどき超天然バカだから……」

「バカ？」とぱちぱちと瞬きをしたミヅキ。「あのキラさんがっ？まさか」

「いや、うん…、そのうち分かる」

「ふ、ふーん？」

2階の廊下へと着くと、カレンは自分の部屋へ。

シュウはミヅキを連れて、空いているジュリの隣の部屋へと向かった。

「この部屋好きに使っていいぜ」

「分かった」

「じゃ、ちょっとオレ着替えて来るから」

と、シュウが出て行ったあと、ミヅキは部屋の中を見渡した。

（広いなあ…。ぼくのアパートの全室を繋げても敵わなかったりして）

部屋の中を歩き、扉などを開けてみる。

（でっかいクローゼットだなあ。…わ、バスルームあるよ。しかもぼくの家よりバスタブ大きいし。…こっちのドアは何だろ。もしかしてトイレかな）

と、そのドアを開けたミヅキ。

「――うっ、うわあっ！」

仰天して思わず声を上げた。

「入ってます…」

「ごっ、ごめんなさいっ！」

慌ててドアを閉める。

便器にマナが座っていた。

（なっ、何で入ってんの！？）

面食らって赤面するミヅキ。

ドアを閉めてから数秒してマナが出て来た。

ミヅキと向かい合う。

「…マ、マナちゃん…かなっ？　な、流さないの？」

「座ってただけ…」

「そ、そう」

「かくれんぼ中だから隠れてた…」

「そ、そかっ…」

「この間は…」と、ミヅキに頭を下げるマナ。「お買い上げありがとうございました…」

「えっ？　…あ、ああ、痺れ薬ね。あ、あのときはどうもっ…。ぼ、ぼくの顔、覚えてくれてたんだっ？」

マナがこくんと頷き、無言でミヅキの顔を見つめ始めた。

（な、何っ…？　ぼくの顔を見て、何を思ってるんだろうっ…？　やっぱり女みたい、とか……？）

マナが長い間動かず喋らずなものだから、ミヅキは困惑しながら口を開いた。

「え…、えと、マナちゃん？　何…してるのかなっ？」

「接待…」

「……」

ミヅキは思う。

（この子って絶対変わってる気がする……）

そこへミヅキの耳に、泣き声が聞こえてきた。

「うわあああああん！　みんなどこに隠れてんの～っ！？」

と、部屋のドアを開けて顔を覗かせたのは。

「あっ、マナ見っけ！」

ユナだった。

ミヅキの姿に気付き、ぱちぱちと瞬きをする。

「あれ？　お客さんっ？」

「は、初めまして。ミヅキです」

「あっ、兄ちゃんのお人形作る人！　初めまして、ユナです！　うわあっ、男の子なのにとっても可愛いんだねえ～っ！　すごーいっ、ジュリ以外でこんなに可愛い男の子初めて見たよ！　女の子みたーいっ！」

女みたい。

その言葉でミヅキの胸が痛んだ。

痛い記憶が蘇る。

（やっぱりぼくのこと、バカにするのかな…。ぼくの姉たちみたいに……）

ミヅキに興味津々と寄るユナ。
その瞳はキラキラと輝いていた。

バカにした様子など、まるで感じられない。

（…バカに…しないんだ……）

それはミヅキにとって驚きのこと。

ミヅキはポケットからハンカチを取り出した。
ついさっきまで泣いていたユナの瞼が濡れている。

「はい、ユナちゃん。これで涙拭いて」

「ありがとう、ミヅキくん。あたしすぐ泣くんだ」

「そうなんだ。かくれんぼで皆がなかなか見つからなかったのかな？」

「うん、1分も」

「……」

どうやったら泣けるんだろう。

ミヅキが本気で疑問に思っていると、今度はドタバタと騒がしい足音が近づいてきた。

「みっんなあああああああああああっ！！」

と、ハイテンションでドアを蹴り開けて飛び込んできたのは。

「かくれんぼ中断してご飯だよ～～～～～んっ♪」

レナだった。

ミヅキの目が丸くなる。

（か、可愛い女の子がドアを蹴った…）

同時にミヅキを見たレナの目も丸くなる。

「わわ、知らない美少女がいる」

「男の子だよ、レナ」と、ユナ。「ほら、兄ちゃんのお人形作るっていうミヅキくん」

「えっ…！？　ウッソ、男の子なの！？」

と、驚愕しながら改めてミヅキの顔を見るレナ。

「初めまして、レナちゃん」

と笑顔を作ったミヅキ。

（すごい驚きようだな。何だろ…、この子には女みたいで気持ち悪いって思われたのかな……）

そんなことを不安に思う。

目を丸くしてミヅキの顔を見つめるレナ。

その胸中は。

（こっ、こんな可愛い男の子、ジュリ以外にもいたんだっ…！　うっわあぁ…、お人形さんみたいっ…！　お肌つやつや、おめめクリクリ、髪の毛サラつやっ…！　すっごいよおぉ……！）

レナの頬が赤く染まった。

（あれ、意外な反応）

と、ミヅキは首をかしげる。

「レナちゃん？」

「えっ！？」と、声を裏返すレナ。「あっ、えとっ、ご、ごごごごご飯できましたっ！　え、えええぇ遠慮なく食してくださいっ！」

「あ、ありがとう」

「ご、ごごごごごごごごごごご趣味は！？」

「へ？」

ぱちぱちと瞬きをするミヅキ。

（とりあえずこの子に好かれたのは分かった）

マナが言う。

「お見合いみたいだね…」

「えっ!?　そっ、そんなんじゃっ……!!」

と顔を真っ赤にするレナを見たあと、マナがベッドに向かって行った。

布団をがばっとめくる。

「ご飯だよ…」

「――ハッ!」

と、慌てて何かを背の下に隠したのはリンとラン。

(リンちゃんとランちゃん?　そ、そんなところに居たのか、気付かなかった…。ていうか…)

ミヅキはしかと見た。

(男物のパンツ嗅いでたよ…!?)

リン・ランが慌てたように声をそろえる。

「あっ、あああ、兄上のパンツなんかじゃないのだっ!」

ミヅキ、驚愕。

（し、しかも兄（シュウ）のパンツなの…！？）

リン・ランが興奮した様子でミヅキを見る。

「とっ、等身大兄上人形にこのパンツを穿かせて、わわわ、わたしたちにくださいなのだっ……！」

「…と、等身大っ…！？」

「ハァ、ハァ、ハァっ…！　と、等身大兄上ぇぇ…！　細部まで作られた等身大兄上ぇぇ…！」

「いや、えと、そのっ……」

この子たち、ぼくよりヤバイっ…！

と、ミヅキがさらに驚愕していると。

「ほーら、ご飯だって言ってるでしょう？」

と、今度はミラが姿を見せた。

（ミラちゃん…だよね？　妹さんの中じゃ一番キラさんに似てるかな？　わあ…、可愛いなあ……）

と感嘆しているミヅキに、ミラが笑顔を向ける。

「初めまして、ミヅキくん。私、長女のミラです」

「あ、初めましてっ…」

「お人形さん作れるなんて、すごいんですね。しかもモデルと瓜二つに作れちゃうなんて」

と、ミラがミヅキに寄ってきた。

（他の妹さんの中で、一番しっかりしてそう…ていうか、マトモそう）

と思ったミヅキだったが。

「あ、あの、ミヅキくん。えとっ、そのっ…」と、ミラがもじもじとしながら訊く。「パパのお人形も作れちゃうのっ…？」

「リュウさんですか？　…それはまあ、許可を頂けるのなら」

「ええっ…！？　そっ、そんな、パ、パパのお人形だなんてっ…！　ああっ、そんなっ…、ああんっ、そんなっ……！」と、ミラが頬を紅潮させ、「ダメエエエエエエエエエエエエっ！！」

ブハッ！！

と鼻血をミヅキの服に浴びせてぶっ倒れた。

ミヅキ、前言撤回。

（マトモじゃないマトモじゃないマトモじゃない）

のち、血に染まった己の服を見ながらパニックに陥りそうになる。

（ねえ、何この家族…！？　色々と思ってたのと違うよっ……！？）

そして確信する。

（ぼく、やばいところに来ちゃったよ）

でも、

（決してぼくを変な目で見ないんだな。バカにした様子も、気持ち悪いって思ってる様子もない）

その理由は、

（ぼくを上回ったものを持つ家族だから……と見た）

第８２話　主人公のお宅にお邪魔します（後書き）

昨日の２１時４９分ごろメールくださった読者さまへ。
やっぱりメールが届きませんでした…ｏｒｚ　諦めてここにお返事書きます。

先日は応援メッセージありがとうございました。
ご姉妹でご愛読いただいてるなんて、とっても嬉しかったです。本当に励みになります、ありがとうございます＞＜

あ、それから…。
強いんジャーに関しては、ツボった方が多かった模様でございます……（笑）

執筆頑張りますので、これからもご愛読のほどよろしくお願い致しますゞ（＊´∀｀＊）ノ〃

第８３話　宿泊許可をください

着替えてカレンと共にミヅキが寝泊りする部屋へと戻ってきたシュウは、入るなり顔をを引きつらせた。

「ちょ、おま……」

ミラが鼻血を吹いてぶっ倒れている。
しかもミヅキの服にはべっとりと大量の血がついている。

「あ…、洗うわ、ミヅキくん」

と、苦笑しながらカレン。
ミヅキが服を脱ぎ、カレンに手渡す。

カレンが部屋から出て行ったあと、シュウがミラの鼻に治癒魔法をかけながら言った。

「わ…、悪かったな、ミヅキ」

「…う…うん……」

「う、うちの家族おかしいのばっかだから」

そうだね。

と、シュウの妹たちの前だから、あえて心の中で同意したミヅキ。
こんな変な家族、滅多にお目にかかれないと思う。

ご飯だからとカレンに続いて皆が部屋から出ると、1階からキラの声が聞こえてきた。

「む？　それはミヅキの服か。すごい血の量だな、ミラの鼻血か」

続いてカレンの声。

「はい、キラさま。早く洗わないとっ…！」

「うーん、これはひどいな。完全に落ちないかもだぞ」

「こ、ここまでべっとりとついてしまったら、綺麗にならないかしらっ……」

「案ずるな、カレン」

「えっ？」

「ふふふ、私がとぉーっても賢いブラックキャットだということくらい、知っているだろう？」

「えっ？　ええーとぉ……」

と返答に困っているカレンの声。

キラが続けた。

「良いか、カレン。覚えておくのだ。こういう場合はな…」

「こ、こういう場合は…？」

「ぜーんぶ血で染めてしまえば良いのだぞっ♪」

――って、えええええええ!?

ミヅキ、驚愕。

シュウが慌てて階段を駆け下りた。

「かっ、母さん普通に洗濯して、普通に！　本当に落ちなくなる前に早く！」

「む？　母上は染めてしまった方が良いと――」

「いーーーから早くっ！！　今すぐ洗濯機に入れれば落ちるからっ！！」

「そうか？　わかったぞ」

と、キラがミヅキの服を持って洗濯機のところへと向かって行った。

（あんなことを本気で思いつくなんて…！　キ…、キラさんてっ…、キラさんてっ……！）

ミヅキ、大衝撃。

絶世の美女でなお且つこの世の英雄の真の姿が、まさか天然（こんなの）バカだったなんて。

シュウが強張った顔をして、ミヅキの顔を見る。

「だ…、だから言っただろっ？（母さん天然バカだって…）」

「う…、うん（マジだったんだ…）」

ミヅキは皆に連れられてキッチンへと向かった。
リュウはまだ帰ってきていないらしく、その姿は見えなかった。

（泊めてもらうにはリュウさんの許可を頂かなきゃいけないんだっけ…。緊張するなあ、リュウさんに会うのって。い、いつ帰ってくるんだろう…）

ミヅキは緊張した面持ちで指定された椅子に座った。
ふと気付く。

「――かっ」

可愛い子がいるっ！！
すっっごい可愛い子がいるっ！！

と、ミヅキの目が見開かれた。

テーブルの一角に用意された子供用の椅子に、ちょこんと座っているジュリ。
ミヅキを見て、にこっと笑った。

「はじめまして、じなんのジュリです」

「は、初めまして、ミヅキですっ…！」

ジュリに思わず見惚れてしまうミヅキ。

（うーわー、何だろう、この反則的な可愛さ。キラさんそっくり。ぼくより女の子みたいだ。っていうか女の子より可愛いよ。でも…、本当にバカにされたことはないのかな……）

少し曇ったミヅキの顔。

シュウが訊く。

「おい、ミヅキ？」

「え？　何？」

「おまえカレーの辛さはどれがいいの。今日はチキンカレーらしんだけど、好き嫌いとかは？　あと量は？」

「中辛がいいかな。好き嫌いは特にないよ。量は普通に1人前で」

「ん」

シュウが承諾し、カレンとキラ、ミラと共に皿にカレーライスを盛り始める。

少ししてテーブルの上に並べられたカレーライスとデザート。

一口食べてみて、ミヅキは驚いた。

「うわあ、おいしいや。こんなにおいしいカレー食べたの初め――」

「いっただっきまあああああす！」

と、スプーンを天井に掲げて言ったレナ。

レナの皿に顔を向けたミヅキ、驚愕。

（ちょ、何人前あんのそれ！？）

レナの傍ら、静かにスプーンを動かして食べ始めるマナ。

「おいしい…」

ミヅキは首を傾げた。

（マナちゃんのカレーだけ違う具が入って……？）

何が入っているのだろうと、マナの皿を目を凝らしてじっと見つめるミヅキ。

（え…？　な、何……？　…むっ、虫！？　芋虫いいいいいいいいい！？）

身体中にトリハダが立った。

そのマナの傍ら。

「わーい、おいしそーう♪」

と、ユナ。

ミヅキは眉を寄せた。

（――って、具が入ってないよユナちゃんっ…？　具なしカレーが

好きなの……！？）

ユナがミヅキの視線に気付いて言う。

「ああ、あたしね、好き嫌い多いんだぁ～」

「へ、へえ、そうなんだ。玉ねぎもニンジンもジャガイモも鶏肉も嫌いなんだっ？」

「うんっ♪」

「……」

多すぎだろ、オイ。

思わず手を止め、三つ子を呆然と見つめてしまうミヅキ。

「ゴルァッ！！」

とシュウが突然怒声をあげて立ち上がったものだから、ぎょっとしてスプーンを皿の上に落とした。

「な、何なの、いきなりっ！？」

というミヅキの声はまるで聞こえていないらしい。

シュウが大声で続ける。

「母さんとリン・ラン！！　デザートは飯を食い終わってからと何度言えば分かるんだ！？　そんなんだからいっつもいっつも飯残してんじゃねーかっ！！　今日残したら説教だからなあああああ

!?　…んっ？　どうしたジュリ、熱かったか？　よしよし兄ちゃんが、フーフーしてやろうなー♪　フーフーフーフー――」

「兄貴、ビールおかわり」

「自分で持って来いサラっ！！　あっ、こらカレンっ！！　サラを甘やかすなっ！！　ビール取りに行かなくていいから座って――って、ばっ…！　ジュリに芋虫食わしてんじゃねえ、マナっ！！　気持ちわりぃぃぃぃぃもん食わされたな、ジュリー。ほら、ティッシュにペッてしろ、ペッって――」

「兄ちゃん、カレーおかわりー」

「おまえはその腹病院行って診てもらえ、レナっ！！　兄ちゃんさっきおまえの皿に5人前盛ったんだぞ！？　どんなでっけー胃袋してんだよおまえはよ！？　ってコラコラコラコラコラ！！　わ、分かった、分かったから兄ちゃんのを取るなっ！！　悪い、ミラ。レナにおかわり持って来てやって。…んで、またどうして泣いてるんだユナは！？」

「たっ、玉ねぎが一切れだけ下の方に隠れてたあっ！」

「それくらい食えっ！！　食ったって死なねえよ、アレルギーじゃあるまいしっ！！　おまえその好き嫌いいい加減にしねえと――って、あああああああもうっ！！　よしよしよしよし、泣くな～～。どうなってんだよおまえの涙腺はよ～～～～～～っ！！」

う、うるさすぎるっ…！

とまるで黙る気配のないシュウに呆然としてしまうミヅキ。

サラが溜め息を吐いて言う。

「悪いね、ミヅキ。うちの兄貴、いっつもこうなんだわ」

「い、いっつも？」

「うん、いっつも。親父がいれば拳骨で黙らせられるんだけど、いないときはもう、うるさいの何のって」

「へ、へえ。リュウさんがいれば――」と、言葉を切ったミヅキ。

「あ」

と、シュウの背後を見る。

ミヅキの視線を追い、

「あ」

と一同が声をそろえた次の瞬間。

ゴスッ！！

とシュウの頭に拳骨が一発。

「ゴフッ！？」

ベチャッ！

と前のめりに倒れたシュウの顔は、

とカレーライスの中へ。

「――あっ、あぢぢぢぢぢっ！！」慌てて顔を上げるシュウ。「なっ、なにすんだ親父っ！！」

「うるせえ、バカが。黙って食ってろ」

リュウ、帰宅。

（いや、降臨）

ミヅキは目を丸くしてリュウを見つめた。

（すっごい痛そうな拳骨だったよ、今。容赦ないなあ。っていうか、シュウと同じ顔なのに、まるでオーラが違うや。すごい威圧感だ……！）

ごくりと唾を飲み込むミヅキ。

シュウが顔を洗いにリビングから出て行く一方、リュウが席に着いた。

ミラがすぐさま持ってきたビールを、一気飲みして飲み干す。

そのあと、眉を寄せた。

「あれ、何か1匹多い……？」

と、ミヅキを捕らえる黒々とした鋭い瞳。

「あっ…」ミヅキは慌てて立ち上がり、頭をさげた。「は、初めまして、リュウさんっ…！　ミヅキですっ…！」

「ミヅキ？」と鸚鵡返しに訊いたリュウ。「ああ、優勝商品作るっていう奴か」

ミヅキの頭の先から爪先まで見つめたあと、嘲笑するように短く笑った。

ミヅキの胸が痛んだ。

（今、リュウさんぼくのことバカにした…？　女みたいだって、バカにした…？　そりゃ、バカにされてもおかしくない。リュウさんはこんなに男らしくて格好良くて……、ぼくのことなんかバカにするよね）

と、ミヅキがリュウから顔を伏せたとき。

「てめーがこの世一可愛い男だと思ったら大間違いだぜ」

とのリュウの声が聞こえて、ミヅキはぱちぱちと瞬きをしてリュウの顔を見た。

今、思いも寄らぬ言葉が聞こえた気がした。

「は…、はい？」

「聞こえなかったのか？　てめーがこの世一可愛いヤロウだなんて思ってんじゃねーよバーカって言ったんだよ」

「い、いや、あのぼくは――」

「いいか、覚えておけ。まあ、もう重々感じてっかもしれねーけど

？」

「は、はい…？」

「この世一可愛い男……、それはっ！！」ビシッとジュリを指差すリュウ。「うちの次男・ジュリだ！！」

「…そ、そうですね……」

リュウがジュリを抱っこして続ける。

「見ろよおまえ、この可愛さを！　只ならねえ可愛さをっ！　もうたまんねーだろ！？」と顔を恍惚とさせ、「俺の黒猫（キラ）そっくりでっ……！！！」

「……。…そうですね」

この人、すごいバカ。

バカ夫婦だ。
バカ親父だ。
バカ決定だ。

ていうかこの家、バカばっか…。

ミヅキは愕然としてしまう。

（リュウさんて、もっとクールな人かと思ってたのに。何だろう、このバカ面…）

そのバカ面――恍惚としてしまっている顔を元に戻し、リュウが訊く。

「で、ミヅキ。おまえ、飯食ったら帰んの？」

「えっ？　いえ…」

「ああ、そうか。飯食ったあと、シュウ見ながら人形作りか」

「は、はい…。そうなんですがっ……」

「？　なんだよ」

「えとっ……」

ミヅキはリュウから目を逸らした。

（言わなきゃっ…！　これから約一週間泊めてくださいって、お願いしなきゃ…！　泊り込みじゃないと、雪合戦大会までにドール製作終わらないんだからっ……！）

ミヅキが思い切って口を開こうとしたとき、カレンが言った。

「リュウさま、ドール製作というものはとても時間を要するものです」

「ふーん？」

「それにシュウそっくりに作るためには、なるべくシュウを見ながら作らなければなりませんわ。つまり、ミヅキくんとシュウが一緒

にいる時間をなるべく多く作らなければなりませんわ」

「まあ、そうだろうな」

「よって、リュウさま？」

「なんだ」

「これから約一週間、ミヅキくんをここに泊めてあげたいのですが」

「は…？」と、寄ったリュウの眉。「何言ってんだ、カレン。こいつ俺の知らねえヤロウだぞ。うちにはおまえも含め、女ばっかりなんだぞ？」

カレンが続ける。

「大丈夫ですわ、リュウさま。ミヅキくんはリュウさまの心配しているようなことなど、絶対にしないのですわ。それに、そうしなければとてもではないけれど雪合戦までに間に合いませんわ」

「……」

カレンからミヅキの方へと、ゆっくりと動くリュウの顔。

怒りにピクピクと引きつったリュウの恐ろしい形相に、ミヅキの身体がびくっと揺れた。

（こっ、殺されるっ…！　ぼく殺されるっ…！　絶対殺されるっ！）

でも、

（泊めてくださいって、お願いしなきゃっ！　ぼくはもう一度やってみるって決めたんだ！　自信を取り戻せるチャンスなんだっ……！！）

ミヅキは覚悟を決め、リュウに向かって頭を下げた。

「お願いです、リュウさんっ！　ぼくに宿泊許可をくださいっ！！」

第８４話　優勝商品製作頑張ります

シュウ宅のキッチン。

リュウに頭を下げているミヅキ。

怒りに顔を引きつらせているリュウが、ミヅキの言葉を鸚鵡返しに訊く。

「宿泊許可をくれ……だと？」

「はいっ…」

「何で俺が初対面のヤロウを泊めてやらなきゃならねえ。うちにはか弱い羊ばっかりなんだよ」

「……」

いや、カレンちゃんはともかく皆ぼくより強いですよね。

と、ミヅキは心の中で突っ込んだ。

今口に出したら殺されそうである。

ミヅキは頭を下げたまま続けた。

「お願いです、リュウさん。ぼくはリュウさんが心配しているようなことは決してしません。本当です。お願いです、リュウさん。泊り込みじゃないと、とても雪合戦大会には間に合わなくて……！」

「だったら別のもんを優勝商品にすっから心配すんな」

「えっ…！？」

ミヅキは狼狽してリュウの顔を見た。
カレンが声をあげる。

「それはひどいですわ、リュウさまっ！」

「何で」

「ミヅキくんが作ったシュウのドールを優勝商品にすると仰ったではありませんかっ！」

「うちに泊まってまでとなりゃー、話は別だ」

「そんなっ…！」

「た…ただいま」

と、洗面所から戻ってきたシュウは苦笑しながら言った。
揉めている原因を察する。

「おい、シュウ」

「な、何だよ、親父」

「おまえ優勝商品に別のもんを用意しろ」

「えっ…？」

シュウは困惑した。
ミヅキを見、再びリュウを見る。

「それはできねえよ、親父…」

「できねえじゃねえ。用意しろって言ってんだ、俺は」

「…ごめん。できない」

「あぁ…？」

不機嫌そうに寄ったリュウの眉。
シュウは続けた。

「ミヅキ（こいつ）、生活苦しいみたいでさ。雪合戦大会のあとのオークションで人形売れればそれから抜け出せるし…。オレ、こいつには借りがあるから返さねえと……」

「借りがあんなら別のことで返せ。生活が苦しいってなら金やっからさっさと失せろ」

「お金じゃないんです！」とミヅキが声をあげた。「生活が苦しいのは本当だけど、でもっ…！　ぼくが作ったドールをオークションに出したい真の理由はっ……！」

「話してみろ、ミヅキ」

と言ったのはキラだった。
ミヅキは承諾して、キラに従った。

うんうんと頷きながら、ミヅキの話を黙って聞いてたキラ。
ミヅキが話し終えたあと、再び口を開いた。

「そうか。おまえは己の才能に自信をなくしてしまったのか。そうだな…、たしかにオークションに出せばその才能がどれほどのものなのか分かるな。そして高値で売れれば、おまえは自信を取り戻せるな」

「はい…。だからっ…」と、ミヅキが頭を下げた。「お願いしますっ…！　宿泊許可をください！」

「うむ。良いぞ」

と答えたのはもちろんリュウではなくキラ。
当然のごとく、リュウが反論する。

「勝手なこと言ってんじゃねえ、キラ！　俺は許さねえぞ！」

「困っている人を見捨てるのはハンターとして良くないぞ、リュウ」

「俺は妻(おまえ)と娘と次男を守ることが優先だ！」

「――って、長男(オレ)は！？」

「甘えんな」

「ひっ、ひでえええええっ！！　何だよそれは！？　なあ、親父ぃっ！！」

「ああもう、うるせえ！」

ゴスッ！！

と拳骨を食らわせてシュウをおとなしくさせたあと。
リュウは再びキラを見て口を開いた。

「こんな初対面の信用も何もねえヤロウなんて、ぜってーうちに泊めねえからな！」

「パっ、パパっ…！」と、レナがリュウの服の袖を引っ張った。「ミヅキくんのこと、泊めてあげようよっ、可哀相だよっ…！　ねっ？　お願い、パパっ！」

「駄目だ、レナ」

「そんなこと言わないで、パパおーねーがーいーーーっ！」

「駄目ったら駄目だ」

「お願いお願いお願いっ！！　パパお願いっ！！」

まるで引き下がろうとしないレナ。
リュウは溜め息を吐いた。

「あのなあ、レナ――」

「あたしのお願い聞いてくれなきゃ」

ギクっ

としたリュウ。
嫌な予感がしながら訊く。

「な…、何だ？」

「パパなんか」

「パ、パパなんか？」

「嫌いになるんだからねえええええええええっ！！」

「――！？」

リュウ、大衝撃。
思わず身体がふらつく。

「レっ、レナっ、おまっ……！」

「超一流ハンターのクセに、困ってる人を助けようとしないパパなんて大嫌いっ！！」

「だっ、だだだだ大嫌いっ…！？」

よろけてテーブルに手を着くリュウ。
さらに、

「大嫌いっ！！」

肘ががくがくと震え、

「大嫌い大嫌い大嫌いっ！！」

身体を支えられず床にがくんと膝を着き、

「パパなんか、大っっっっっっ嫌あああああああああああいっ！！！」

バタっ…

と、ついに倒れた。

カレン、キラに耳打ち。

「キラさま、ここでトドメの一言を」

頷いて承諾したキラ。

仁王立ちでリュウを見下ろして言った。

「3日間お預け食らわすぞ」

「――ちょっ、おま…！？」リュウ、愕然としてキラを見上げる。

「みっ、3日間も抱かせてくれねえとかって、何て鬼畜なこと言うんだよおまえ……！？　いつからそういう女になったんだよ！？　マジ信じら――」

「よし、お預けだな」

「ま、待て！　困る！　すげえええええ困るっ…！　病気になるぜ俺っ……！！」

「では、ミヅキに宿泊許可を出すな？」

数秒の間困惑したあと、リュウがうな垂れて言った。

「わ…、分かった、好きにしろ……」

カレンとミヅキ、それからレナも一緒になって舞い上がった。

晩ご飯終了後のミヅキが泊まる部屋の中。

パンツ一丁のシュウがいる。

それから、早速シュウの人形作りに取り掛かっているミヅキ。

まずはシュウの身体のあちらこちらをメジャーで測っていた。

「あ。ねえ、あんた身長は？」

「伸びてなけりゃ１８２ｃｍ」

「じゃあ９１ｃｍのドールになるなあ」

「でかっ！　２分の１サイズで作んのかよ」

「大きい分大変っていったら大変だけど、細かい部分とかは逆に作りやすくていいよ。指とかね」

「ふーん…」

シュウはミヅキの顔を見下ろした。
とても生き生きとした顔をしている。

シュウの採寸をし終わったあと、ミヅキが大きな紙を用意しながら言う。

「ねえ、パンツ脱いで」

「はっ？」

と、裏返ったシュウの声。

「細部までそっくりに作るんだから。ほら、大体の設計図書くんだから早く。細かいとこはあんた見ながら作るけどさ」

「いっ、嫌だっ！　一部は適当に作ってくれよっ…！」

溜め息を吐くミヅキ。

「こっちは本気なんだからさー、もったいぶらずにさっさと脱いでくんない？」

「ふっ、ふざけんなっ！　こんなところまでそっくりに作られて溜まるかっ…！」

「いーから、さっさと脱げってのっ！」

と、シュウのパンツをずり下ろしたミヅキ。

「――うわ」

目が丸くなる。
一方、
「ぎっ、ぎゃあああああああっ！！」慌てて股間を隠すシュウ。
「なっ、何すんだおまえっ！！」
「うん、ごめん。ぼくが悪かったよ」と、強張るミヅキの顔。「ら…落札者さまが腰抜かさないようなサイズに作っておく……」
「…お…おうっ……」
「でも書きづらいから手ぇ離して、直立してて。正面からと横から、後ろからを書くからさ」
「……わ…、分かった」
と、ミヅキに言われた通り、股間から手を離して直立するシュウ。ミヅキが大体の設計図を作りながら言う。
「えげつな……」
「うっ、うるせっ！　親父やグレルおじさんより可愛いぜっ！」
「うわ、マジで？」
「マジだ。あの2人はバケモノだからなっ…」
「本当だね。でもあんたもソコは充分バケモノっていうか。カレンちゃんエッチのとき嫌がらない？」

「そっ、そういう話題を出すなっ…！　っていうか、カレンはそんなことっ…」と、恍惚とするシュウの顔。「ないんだぜっ……！」

「……。その表情（カオ）、リュウさんそっくりだね」

「それを言うな…」

と、苦笑したシュウ。
ミヅキの手元に目を落とす。

「……上手いなあ」

「まだ設計図じゃん」

「そうだけど。…おまえさ、人形作りと3人の姉が嫌いなこと、何か関係あったりすんの？」

「……」

ミヅキが手を止めた。
シュウの顔を見る。

「…わ、わり、なんでもない」

シュウはミヅキから目を逸らした。

ミヅキが再び手を動かしながら言う。

「ドールが好きになったきっかけは3人の姉が嫌いになったことか

な」

「…へ、へえ？」

とミヅキに目を戻したシュウ。

ミヅキが続ける。

「ぼくさ、小さい頃から3人の姉にバカにされて育ったんだ。女みたいだって。さんざん笑われたし、貶された。比べてドールは傷付くことなんか言わないでしょ」

「…な…なんだか、オレには想像できない家庭だな」

「だろうね。この家、変わってる」

「まぁな」

シュウ、苦笑。

「あのさ、ジュリくんて本当にバカにされたことないの？」

そんな質問にシュウが答えようとしたとき。

噂をすれば何とならでジュリが姿を見せた。

「あにうえ、ミヅキくん、おやすみなさい」

「おー、おやすみジュリー」

と綻ぶシュウの顔。

ミヅキが訊いた。

「ねえ、ジュリくん。お兄ちゃんたちのこと好き？」

「だいすきです」

そう言って満開の笑顔を見せたジュリ。

質問の答えなんて一目瞭然だった。

「そっか。おやすみ、ジュリくん」

ジュリが出て行き、部屋のドアが閉まる。

ふとミヅキが顔を上げると、そこにはすっかり恍惚としたシュウの顔。

「ぐふふ。大好きです、だって。なあ、聞いたかおまえ？　ジュリがさ、兄上大好きですっ（ハート）って言ったの。かっわいーなあ、オレの弟。婿にやりたくねえ」

「はいはい、分かったからそのバカ面直して。っていうか横向いて、横」

「え？」

「次横からの設計図書くんだから、早く」

「お、おう」

と、言われた通りにするシュウ。

ミヅキが続けた。

「この家って変だけど」

「う、うん」

「本っっっ当に変だけど」

「お、おう…」

「ちょっと羨ましいな。こんな兄弟姉妹だったら持ってみたかったかも」

「……ミヅ――」

「ヤバイくらい変だけど」

「…う、うるせえな」

と苦笑するシュウの一方、ミヅキはおかしそうに笑っていた。

「…なあ、ミヅキ」

「ん」

「その…、人形作り頑張ろうな」

「はぁ？」と、眉を寄せたミヅキ。「頑張って、の間違いじゃないの。作んのはぼくなんだしー」

「わっ、分かってんよ！　でっ、でもオレだってモデル務めるんだからよっ…！」

「ぼーっとしてればいいだけじゃん」

「そっ、そうかもしれないけどっ…！　…ああもう、素直じゃねえなっ！　可愛くねえっ！」

「別にあんたに好かれなくてもいいし」

「そうかよっ！」

と口を尖らせるシュウ。

少し間を置いて、ミヅキが呟いた。

「…でも、ま……、ありがと」

「…お？」と、ミヅキの顔を見たシュウ。「何だ、可愛いじゃん」

「何こっち見てんの。あっち向いて」

「ふふふ。照れんなよ」

「バカじゃないの。横からの設計図書いてるって言ってんでしょ。横顔見せてくんなきゃ困るっての」

「ああ、そうか」

と、再びミヅキに横顔を見せたシュウ。

少し間を置いてから、もう一度言う。

「人形作り頑張ろうな」

一瞬シュウの顔を見上げたミヅキ。
小さな声で答えた。

「うん…、頑張ろうね」

第８４話　優勝商品製作頑張ります（後書き）

先ほど突っ込みくださった読者さま、ありがとうございます。
というか、気が利かなくて申し訳ございませぬ＞＜
ＨＯＮなびの投票は１日１回で、ＮＥＷＶＥＬの投票は月１回のようです。
書き直しておきました。
それから携帯版の方は……、分かりませんですたｏｒｚ

第85話　七女の初恋

ミヅキがシュウ宅に泊まり始めてから3日。
晩ご飯の後片付けをしながら、カレンが訊いた。

「ねえ、シュウ。今日はドールのモデルやらなくて良いのかしら？
やるなら後片付けはあたくしたちに任せて、ミヅキくんのお部屋に行ってよろしくってよ？」

「いや、オレの大体の仕事はもう終わりなんだってさ」と、シュウはミヅキに言われたことを思い出しながら言う。「原型？　を作り終わったんだって。あとは仕上げするときの最終チェックだけとか何とか」

「原型って、粘土で作ってたのかしら？」

「おう。あいつすげーよ。オレの顔から足の先まで、気持ち悪いくらいそっくりに作りやがる」

「でしょうね。あたくしの顔を作ったときもそっくりでしたもの。ミヅキくん、これからその原型を使って型作りなのね」

「おう。シリコンで型作って、出来たらそこにレジンキャストだか何だか流し込んで、１０回に1回か2回くらいの割合で成功作ができる云々……。とにかくすげー大変そうだぜ」

「そうね、大変なのですわ。雪合戦までに間に合うかしら…」

「大丈夫。あいつはきっと、雪合戦までに間に合わせてみせる」

そう言ったシュウの顔を、カレンは見上げた。
微笑んで訊く。

「何だか、ミヅキくんと仲良くなったのね。お友達になったのかしら？」

「そっ…、そんなんじゃねえよっ…！」

「ふふ、そう」

「な、何だよ？　ほ、本当にそんなんじゃねえからなっ…！」

「はいはい、分かったのですわ。それより、レナちゃんのことなのだけれど」

「レナ？」

と鸚鵡返しに訊いたシュウ。
はっとしながら言う。

「あっ、あいつ、スゲエェェェ変なんだけどっ！　今日の朝も昼も夜も、昨日の朝と昼と夜も、一昨日の朝と昼と夜も、１人前しか食わないってどういうことだ、オイ！　どっか悪いのか！？」

「もう、鈍いわね」

「え？」

「恋よ、恋」

「えっ、鯉!?　鯉食って当たったのかあいつ!?　そうか、そうだったのか！　腹イタだったのかっ！　あああっ、レナ気付いてやれなくてごめんっ！　兄ちゃんが今すぐ治癒魔法をかけ――」

「ちーがーうーわーよー」と、呆れながらシュウの言葉を遮ったカレン。「レナちゃんは今、恋をしているのよ。恋する女の子なの」

「こっ、恋する女の子ぉっ?」と、裏返ったシュウの声。「あのレナが?　色気より食い気のレナが?　花より団子のレナが?　んなバカな」

「言いすぎよ…」カレンは苦笑した。「レナちゃんだってもう13よ?　恋したっておかしくないのですわ」

「ふ、ふーん?　でも恋って、誰にだよ」

「今の本気で訊いたの?」

「おう。誰?」

「本当に鈍いわね……」と溜め息を吐いたあと、カレンは言った。「ミヅキくんに決まっているでしょう」

「えぇっ!?」と、仰天したシュウ。「マジで!?」

「何をそんなに驚いているのかしら」

「気付けよ、オレっ…!」

「ああ、自分に驚いたのね」

「お、おう。オレってある意味すげえ…。…それにしても…」と、シュウは微笑んだ。「あのレナも、ついに初恋かあ……」

バスタイムを終えた三つ子の部屋の中。

冬休みの宿題に取り掛かる五女・ユナ。

（怪しい）薬の調合に取り掛かる六女・マナ。

そして、バスタイム後からずっと洗面所にいる七女・レナ。

自分の姿を鏡に映し、母親譲り（キラ）のガラスのような銀髪を櫛で入念に整えている。

（髪、伸ばしてみようかな）

姉妹の中で、一番髪の毛の短いレナ。

顎の先に来る毛先を指で摘む。

（サラ姉ちゃんが、ミヅキくんは昔カレンちゃんのことが好きだったって言ってた。ミヅキくん、カレンちゃんみたいに女の子っぽい子が好きなんだろうし）

櫛を置き、黒猫の耳の毛を手で整える。

そのあと洗面所から出て、ユナとレナに訊く。

「ね、ねえ。あたしの髪の毛、ＯＫ？」

「ＯＫ」

と、声をそろえるユナとマナ。

「猫耳は？」

「ＯＫ」

「顔は？」

「変」

「……」

マナが言う。

「緊張で強張りすぎ…」

「だっ、だってっ…！」と、染まるレナの頬。「だ、だって、だってさっ……！」

「レナってば、すっかり恋する女の子なの」と、ユナが笑った。「急にお家の中駆け回らなくなったし、ご飯も１人前しか食べないし。ミヅキくんて、兄ちゃんやミラ姉ちゃんと同じ１７歳なんでしょ？　１７歳から見た１３歳なんてまだまだ子供かもしれないけど、がんばってねレナ♪」

「う、うんっ……」

「その強張った顔直して…」

と、マナがレナの頬を引っ張った。

「いにゃにゃにゃにゃっ！」

「はい、いってらっしゃい…」

「い、いってきますっ…！」

自分の部屋を出たレナ。

ジュリの部屋の前を通り、ミヅキが泊まっている部屋の前で立ち止まる。

深呼吸をして、ドアをノックする。

「レっ、レナですっ…！」

反応なし。

「…あれ？　お風呂中かな」

首をかしげ、そっとドアを開けたレナ。

ベッドのところに、横になって眠っているミヅキの姿が見えた。

その手にはシュウの人形に着せると思われる、作りかけの服が握られていた。

（ミヅキくん、疲れてるんだ…）

レナは中に入ってドアを閉めると、ミヅキのところへと歩いて行

った。

（うわあぁ…）

と、頬が染まる。

（何コレ天使っ…！？　わわ、睫毛長ーいっ…！　本当、こうして見ると男の子とは思えないや……。って）

レナははっとした。

（見惚れてる場合じゃないよ、あたしっ…！）

と、ミヅキの身体を揺する。

「ミヅキくん、ちゃんとお布団かけないと風邪引いちゃうよっ…、ミヅキくんっ」

「…うー…ん……」

静かに瞼を開けたミヅキ。

その栗色の瞳に映ったレナの顔が、ぼっと赤くなった。

レナが狼狽したように後方に飛び退る。

「わ、わあああああっ！　ごっ、ごごごごめんなさいっ！」

「レナちゃん…。あれ、ぼく寝ちゃったのか」と、ミヅキが瞼を擦りながら身体を起こした。「シリコンの硬化待ちの間に服作っちゃおうと思ってたのに、いけないいけない。起こしてくれてありがと

う、レナちゃん」

とミヅキに笑顔を向けられ、さらに真っ赤になりながら首を横にぶんぶんと振るレナ。

「おっ、おおおおおおお身体の方は、だ、だだだだだ大丈夫でありますかっ！？」

「うん、大丈夫だよ」

「に、にににににに兄ちゃんのお人形は、ゆ、ゆゆゆゆゆゆ雪合戦までに、ま、まままままま間に合うでありますかっ！？」

「うん、何とか間に合いそうだよ。レナちゃんがリュウさんを一生懸命説得してくれたお陰でね」

そんなミヅキの言葉を聞いて、レナが嬉しそうに笑った。

「よ…、良かったっ」

「ここ座って、レナちゃん」

と、ベッドを指して立ち上がりながらミヅキが言った。

レナは毎晩ミヅキのところへとやってくる。

レナが頷いてベッドに腰掛け、ミヅキはミシンの置いてある台の前に座る。

「ミヅキくんて、お裁縫も出来ちゃうんだね」

「プロみたいには上手くいかないけどね」

ミヅキがミシンを使い始める。

ズドドドドド！

と高速で音を鳴らすミシンに、レナの目が丸くなった。

「す、すごい音出すねソレ」

「え？　何？」と、レナに耳を傾けるミヅキ。「ごめん、これ職業用ミシンなんだけど、古いから音うるさいんだ。大きい声で言ってくれる？」

「わ、分かった…」

「え？　分かった？」

「わ、分かったっ」と、大きな声でもう一度言ったレナ。「でもミヅキくんは普通に喋っていいよ。あたし耳はよく利くから」

「さすが猫耳だね。分かったよ」

と承諾し、ミヅキが作業を続ける。

レナはミヅキのことを毎日少しずつ教えてもらっている。

今日もレナは、どきどきとしながら問う。

「ミ、ミヅキくんて、今までどんなお人形作ってきたのっ？」

「んーと、最初は手縫いでカントリードール作ってたよ。それが６つくらいのときかな。で、１０歳くらいになったときにソフビ製の６分の１ドールを作り始めて、今みたいにレジンキャスト製の球体関節人形を作るようになったのは１４歳のときだったかな」

「へえ」と、声を高くしたレナ。「全部女の子のお人形？」

「うん、そうだね。男ドールなんて可愛くないし」

「そうだね。兄ちゃん人形なんて、その代表だよね」

「まあね」と、ミヅキが笑う。「デカいし」

「ゴツいし」

「一部えげつないし」

「ソコ縮小したんでしょ？」

「大分ね」

「良かった、落札者さまが驚かないで済むよ」とレナは笑ったあと、話を戻した。「そ…、それで、どんな女の子のお人形作ってるのっ…？」

「……好きな…女の子…とか」

「えっ？」

と疑問符をくっ付けたレナだったが、聞こえていないわけじゃな

い。
戸惑いながら訊く。
「…カ…、カレンちゃんのお人形とか作ったのっ…？」
ミヅキの手が止まった。
レナの顔を見て言う。
「…ぼくがカレンちゃんのこと好きだったこと、知ってたんだ」
「あっ、えと、サラ姉ちゃんが、ミヅキくんは昔カレンちゃんのこと好きだったって言ってて……」
「それだけ？」
「う、うん、それしか聞いてないっ…」
「そう」
と、再びミシンを動かすミヅキ。
間を置いてから話を続けた。
「ぼくさ、好きになった女の子のドール作るクセがあって。カレンちゃんのドールも作ろうとしたんだ…、それもたくさん。でも途中でシュウやサラちゃんに見つかって止められてさ。まあ、カレンちゃんに許可取らなかったぼくが悪いから当然なんだけど」
「……」
「ごめん、引いちゃったか」

「ひっ、引いてないよっ！」と、声をあげて首を横に振るレナ。「引いてないよっ、全然っ！　引いてないからねっ！」

「そ？　ありがと、レナちゃん」

と笑い、作業を続けるミヅキ。

その微笑んだ横顔を見つめながら、レナは軽い嫉妬を覚える。

（いいな、カレンちゃん。昔とはいえ、本当にミヅキくんに好きになってもらってたんだ。それも、たくさんお人形作りたいと思われるくらい。いいな…、カレンちゃん。いいな……）

急に黙り込んだレナに、ミヅキが再び手を止めた。

レナのあまり明るくない顔を見て言う。

「あ…、えと、もう少しも持ってないよ、カレンちゃんドール。全部処分したから」

「うん…」と笑顔を作ったレナ。「ほら、お洋服作り続けて続けてっ！」

「あ、うん」

とミヅキがレナから顔を逸らしてミシンを動かす。

ズドドドドド！

と、うるさいその音が再び部屋中に鳴り響く。

そんな中で、レナが呟いた。

「あたしのお人形、いつか作ってくれないかなあ…」

もちろんこんな部屋の中じゃ、その声はミヅキの耳には聞こえていない。

（――って、何言ってんのあたしっ！）

レナは顔を真っ赤にして立ち上がった。

「あ、あああああああたし、そろそろ部屋戻るねっ！」

「えっ？　あ、うん、分かっ――」

「おおおおおおおおおおおやすみぃいいいいいいいいいいっ！！」

と慌てて部屋から出て行ったレナ。

「お…、おやすみ」

と、ミヅキ。

ぽかーんとしながら、ドアの方を向いて小さく手を振った。

ミヅキの部屋から飛び出したレナは、自分の部屋へと向かって走っていた。

（何言ってんのあたしっ、何言ってんのおおおおおおっ！！）

顔が熱い。

（つっ、作られるのは嬉しいけどっ、そしたらあたしミヅキくんの前でマッパにならなきゃじゃんっ！？　マッパだよ、マッパ！？）

バンッ！

と自分の部屋のドアを開け、

「マッパパパパパパパパパパパパパパパパパアァァーーーっっっ！！！」

と叫びながら戻ってきたレナ。

マナが薬の調合を続けながら訊く。

「なったの…？」

ユナが続く。

「えっ、レナ、ミヅキくんの前で裸になってきたの！？」

「なっ、なれるわけないじゃんっ、なれるわけっ…！」と顔を真っ赤にしながら言ったあと、レナは自分のベッドに寝転がった。「ミヅキくんがあたしのお人形作るときが来たら、あたしマッパになる覚悟しなきゃいけないんだなぁーと思ってさ…」

「え、何」と、ぱちぱちと瞬きをするユナ。「ミヅキくん、レナのお人形作るの？」

「つ、作らないよ、今はっ…！　いつかそうなったらの話っ…！」

「何それ…」と眉を寄せたあと、ユナはマナに振り返った。「ねえマナ、薬できた？」

「もうそろそろ…」

レナはマナに顔を向けた。

「マナ、そういえばさっきから…、いや、一週間くらい前からか。何の薬作ってんの？」

「明後日のための薬…」

「明後日？」

と鸚鵡返しに訊いたレナ。

はっとする。

「あっ、パパとママの誕生日じゃん！　あたしすっかり忘れてたよ」

「ミヅキくんのことで頭いっぱいだもんね…」

「えっ？　い、いや、えと、その……」なんてゴニョゴニョと言って咳払いをして誤魔化したあと、レナは訊いた。「こ、今年はパパとママにどんな薬あげるの、マナっ？」

「ママにはコレ…」と、赤い液体の入った小瓶を見せるマナ。「『美味しいネズミがわんさか寄ってくる薬・モンスター用』を…」

「わー、ママ大喜びするねえ。片っぱしから食べていくんだろうなあ」

「そしてパパにはコレ…」

と、緑色の液体の入った小瓶を見せるマナ。

それに仕上げの魔法をかけてから続ける。

「パパがね、兄ちゃんの現在の力を詳しく知りたいんだって…」

「何のために？」

と、声をそろえるユナとレナ。

「兄ちゃんが超一流ハンターに達する力だったら、来年すぐにでも超一流ハンターに昇格する試験受けさせたいんだって…」

「あー、なるほど」

「だからパパにはコレ、『外見は変わらずに兄ちゃんの能力になれる薬・人間用』…」

「なるほど～っ」と、レナが声を高くした。「身を持って兄ちゃんの現在の力を知るわけだね、パパ」

「っていうか」と、ユナがぱちぱちと瞬きをしながら訊く。「兄ちゃんと入れ替わる薬じゃダメなの？　ほら、兄ちゃんとサラ姉ちゃんが入れ替わったときみたいにさ。マナ、新しい薬作るの大変だったでしょ？　以前に作ったことのある薬だったらすぐできるのに」

「外見がそのままなだけで、ほぼ入れ替わったも同然になるから『入れ替わり薬』でも良さそうだと思ったんだけど…。パパがね、兄ちゃんの身体になると色々不便なんだって、夜とか…」

「ああ、夜の営みとかねえ……」

と、納得したユナとレナ。

「それからついでに、パパを超えることを目標とする兄ちゃんにはコレ…。今パパとどの程度力の差があるか、知っておいた方がいいと思って…」

と、黄色い液体の入った小瓶を見せるマナ
それにも仕上げの魔法をかける。

「もしかして、その薬も？」

とユナとレナが訊くと、マナが頷いて答えた。

「パパが『外見は変わらずに兄ちゃんの能力になれる薬・人間用』なら…。兄ちゃんはもちろん『外見は変わらずにパパの能力になれる薬・ハーフ用』…」

第８６話　飲んでみました

大晦日はリュウとキラの誕生日。

その前日の夜。
シュウの部屋の中。

これから目を閉じて眠ろうというときに、カレンが訊いた。

「ねえ、シュウ。リュウさまとキラさま、お出掛けしたまま帰ってきませんわね」

「ああ…、うん。明日の０時過ぎれば帰ってくる。毎年この日は、親父と母さん、それからリンクさんとミーナ姉、レオ兄、グレルおじさんは一緒にいるんだよ」

カレンが首をかしげる。

「一緒にいるって、どこにいるの？」

「親父と母さんが昔住んでたマンション」

「そう。何か特別な日なのかしら？」

「…オレが知ってるのは、オレが産まれる前年の今日の夜、母さんが文月島タナバタ山で『破滅の呪文』を唱えたってことだけ」

カレンも両親から聞いたことを思い出した。
キラが破滅の呪文を使ったのは、大晦日になる寸前だったと。

シュウが続ける。

「…なあ、カレン。知ってるか？」

「何をかしら？」

「ブラックキャットが滅多に破滅の呪文を使わねえ理由」

「いいえ、知らないのですわ」

「自分の身も滅ぼす恐れがあるからなんだよ。魔力が強ければ強いほどそう。だから母さんが破滅の呪文を使ったとき、本当は生きてるはずがなかったんだよ。爆発の中で消滅してたはずなんだ」

「えっ…！？」カレンが驚いた声を出し、ベッドに両肘を付いてシュウの顔を見た。「そ…、それ、本当なのっ……！？」

「ああ」

「…キっ、キラさまはどうして無事にっ……！？」

「一時は死んだものと思われて、葉月町の銅像と一緒に墓も並べられてたんだって。でも、崩れたタナバタ山の中から生きてる母さんが見つかったんだって。…親父が言ってた。母さんを助けてくれたのは、死んだ母さんの親父……つまりオレのじーちゃんが、爆発の中で母さんを守ってくれたんだって」

「……」

「親父、今頃すげー恐怖に襲われてるんだろうなって思う。母さんが破滅の呪文を唱えた日のことを思い出してさ。マンションの一室で母さんにしがみ付いて声殺して泣いてる親父がいて、それを宥めるリンクさんたちが頭に浮かぶ。…なあ、カレン」

「な、何かしら？」

「オレさ、親父が母さんに対してああなもんだから、小さい頃から『親父は母さんなしじゃ生きていけない』って口では言ってたんだ」

「ええ」

「でも、本当にそうなんだって分かったのは今年なんだよ。親父によく似た性格のサラがさ、『レオ兄なしの生き方なんて分からない』なんて弱々しいこと言ったことがあって。何だかまるで、親父の母さんに対する想いを聞いてるようだって思った」

「たしかに…、そんな気がしないでもないのですわ」

「毎年この日になると親父たちが必ず出掛けるのは、親父がオレたち子供に見せられないような弱い姿になるからなんだ、きっと」

「そ、そう……」

と戸惑ったような声を出したカレン。

「でもま、明日の0時過ぎりゃあ、いつも通りの様子で帰ってくるけどな。んでさ、じーちゃんの話に戻すんだけど…」と、苦笑するシュウ。「親父の奴、じーちゃんは神だって言うんだぜ？　って言っても、一般家庭がご先祖様を神様仏様～って祀るのとは違うぜ？

本気でじーちゃんはこの世の神、みたいなさ…。小さい頃しつこく言い聞かされたオレたち子供は、しばらくそれを信じてたっての。おお～、オレたち神様の孫か～、みたいな。あー、恥ずかし……」

「あら。リュウさまの仰る通り、キラさまのお父さまは神さまなのですわ」

「何をおまえまでバカなことを……」

「だってキラさまのお父さまがキラさまを助けてくれたから、あなたとあたくしが出会うことが出来たのですわ」

「そうだけど…」

「ほら」と声を高くしたカレン。「神さまでしょうっ？」

「えー…？」

「神さまったら神さまっ！　神さまなのですわっ！」

と、まったく譲らない様子のカレン。

「……ま、そうだなっ」そう言って笑い、シュウはカレンを抱き締めた。「なあ、おまえも初詣行く？」

「初詣？」

「おう。毎年うちの家族とリンクさん一家、レオ兄とグレルおじさんで行くんだ。大晦日の夜１１時頃から準備始めて、０時回って元旦が来たら、ミーナ姉の瞬間移動でタナバタ山の麓にあるじーちゃ

んの墓に。つまり…」とやっぱりシュウは苦笑してしまいながら、
「うちの神のところに……」

「もちろん行くのですわっ」

そう言ってカレンが、嬉しそうにシュウの胸に抱きついた。

翌日。
大晦日――リュウとキラの誕生日。
いつも通りリビングで行われるパーティーはＰＭ６時から。
ご馳走をいつもの一同（シュウとその家族、カレン、リンク一家、レオン、グレル）と宿泊中のミヅキで囲み、時間が来たらパーティー開始。

（親父、本当にいつも通りの様子で帰ってくるなあ…）

そんなことを思っているシュウの傍ら。

皆からプレゼントを渡されたリュウが、真っ先にマナからのプレゼントを手に取った。

「ありがとな、マナ。どれ、さっそく…」

とプレゼントの包装紙を剥がして行くリュウ。
それと同時に、マナが黄色い液体の入った小瓶をシュウに渡した。

「はい、兄ちゃんにも…」

「シュウにもあんのか。それってもしかして……？」

と、リュウ。

マナが頷く。

シュウは首を傾げた。

「何の薬だよ、これ」

「パパには『外見は変わらず兄ちゃんの能力になれる薬・人間用』…」と、マナ。「そして兄ちゃんには『外見は変わらずパパの能力になれる薬・ハーフ用』…」

「へ？　見た目はオレのままで、親父の能力になる薬？」

「それで、リュウさまは逆にシュウの能力になる薬…ですの？」と、カレンが続いた。「それはシュウとサラのときのように『入れ替わり薬』ではダメだったのかしら？」

「いやー、ダメでしょ」と、サラ。「入れ替わっちゃったら、親父、兄貴の身体でママとエッチすることになっちゃうしね」

「そういうことだ。そんなの絶対に出来ねーだろ」

と言いながらリュウが箱の中から緑色の液体――『外見は変わらずシュウの能力になれる薬・人間用』の入った小瓶を取り出した。

マナが言う。

「外見は魔法の力でそのままにしてあるけど、ほぼ入れ替わったと思っていいから…」

「ふーん…？」

シュウは手の中の黄色い液体――『外見は変わらずリュウの能力になれる薬・ハーフ用』に目を落とした。

（親父の能力になれるのか…。今オレとどれくらい力の差があるか分かるんだよな……。最近マナの作った薬飲むのコエェェけど、気になるから飲んでみるか）

と、思い切って黄色い液体を飲み干すシュウ。

同時に、リュウも緑色の液体を飲み干した。

「――あ」

と、声をそろえたシュウとリュウ。

身体が魔法に包まれた感じがし、自分の手足を見てみる。

リュウが言う。

「よし、俺の身体のままだな」

シュウが頷いて続く。

「うん…、オレの身体のままだ」

シュウとリュウは顔を見合わせた。

「親父、なんか変わった気する？」

「よく分かんねえ」

「オレも」

「よし、んじゃ、ちと軽く身体能力……腕力でも試してみるか」

と、リュウ。

立ち上がってキラを手招きする。

リュウが何をするのか察したシュウも、立ち上がってカレンを手招きした。

そしていつもそうしているように、リュウがキラを左腕に抱っこし、シュウがカレンを両腕で姫抱っこする。

「あれ…、キラおまえ随分と太った？」

「失礼だぞ、リュウ」

つまりいつもより重く感じた。

その傍ら、シュウが驚愕する。

「ぎっ、ぎゃあああああ！？　なっ、ななっ、何だコレ！？　カっ、カレンおまえ中身何で出来てんのっ！？　綿っ！？」

「わ、綿って……」

つまり異常なほど軽く感じた。

「ふむふむ」と、シュウとリュウの顔を交互に見たキラ。「つまり成功なのだな？　見目は変わらぬものの、リュウとシュウは入れ替わったようなものになったのだな？」

マナが頷いた。

「完全に…とは言わないけどね…。ほぼ入れ替わった…」

「そうか。んじゃ、俺ちと出掛けてくるわ」と、リュウ。「リンク、おまえも来い」

「んー」

「私も行くぞ」

少し心配なことがあるからな。

と、心の中で続けたキラ。

キラが行くとなると、

「じゃあ、わたしも行くぞ」

とミーナも行くことに。

シュウは眉を寄せてリュウを見た。

「出掛けるってどこへ？　オレの能力になって、何を？」

「あとで教えてやる」

そう言って武器倉庫にしている部屋へと向かって行ったリュウ。

愛用の剣を手に取って驚愕する。

「おっ…重てえっ…！　シュウの奴、どんなか弱い腕力なんだよっ……！」

リュウは仕方なく愛用の剣よりも軽い剣を手にすると、リビングへと戻った。

「んじゃー、ちょっくら行って来る。ミーナ、適当に人気ねえとこに瞬間移動頼む」

「分かったぞ」

と、ミーナ。

数秒の間考えたあと、リュウとキラ、リンクを連れて瞬間移動をした。

2人と2匹が消えたリビングの中、シュウは苦笑する。

「って、本日の主役がそろって消えてんじゃねーよ……」

「本当に……」

とカレンとレオンも同意して苦笑。

その傍らでリーナが笑った。

「なんやねん、シュウくん！　そんな顔しとらんで、リュウ兄ちゃんの能力を楽しみぃや！」

「まあ、そうするけど。まずは親父の何から試してみるかなー」

考えるシュウ。

ビールを一口飲もうと、テーブルの方へと手を伸ばした。

そしてその手に持たれたグラスは、

バリンっ！

と割れ。

ガラスの破片とビールをテーブルや床の上に飛び散らした。

「――！？」

一瞬、しぃーんと静まり返るリビング内。

そのあと、驚愕したシュウの叫び声が響き渡って行った。

「――なっ…、なんっじゃこりゃあああああああああああああああああああっ！！」

第８６話　飲んでみました（後書き）

２月ですねぇ…。バレンタインですねぇ…。
女性の皆さま頑張ってくださいっＯ（≧∇≦）Ｏ
いやー、姫百合はとっても楽しみでございます！
翌日に安く売られてるチョコ買いに行くのがっΣ（ノ∀、＊）ペチ

あっ、先月投票してくださった皆さまありがとうございました。
励みにして今月も頑張るであります！

１月３１日の１時１７分ごろメールくださった読者さまへ。
今度は遊びすぎでお疲れになりませんように（笑）
てか、メール送っておいたのでヒマなときにでも見ておいてくださ
い♪

第87話　長男の能力

リュウがマナから『外見は変わらずシュウの能力になれる薬・人間用』を誕生日にプレゼントしてもらった理由は『現在のシュウの力を身を持って知るため』である。

プレゼントしてもらって早々に薬を飲んだリュウ。

見目は変わらぬものの、現在その能力はシュウのものになっていた。

（超一流ハンターへの昇格試験。その試験官はリンク。リンクとどの程度力の差があるか俺が見てやる）

そのためにはリンクと刃を交えなければならないため、家の中でするわけにはいかず。

リュウはリンクと共に家から出て来た。

おまけに、着いて来たキラとミーナも。

（これである程度敵うようだったら、明日の雪合戦とオークション終了後、すぐに超一流ハンターへの昇格試験を受けさせる）

オリーブ山の麓。

ミーナの瞬間移動でやって来るなり、リュウは目を丸くした。

「夜なのにすげー明るいぜ。さすが半分猫だな」そう言ったあと、リュウは辺りを見渡した。「ここなら存分に暴れても大丈夫か…」

オリーブ山にはモンスターが多く生息しており、一般人が近寄ることはあまりない。

まずは軽くジャンプしてみるリュウ。

「おっ」

と、短く声を上げる。

いつもの倍は高く宙に舞った。

「さすがキラの血を引いてるぜ。キラの半分とはいえ、大した跳躍力だ」

とリュウが感心していると、リンクが同意して頷いた。

「せやなあ。人間には無理なジャンプ力や。ほいでリュウ？　シュウの走力はどうなん？」

「どれ」と辺りを走ってみるリュウ。「――おっ、おせえぇぇぇぇえええぇぇぇぇぇぇぇ！！」

急ブレーキを掛け、己の足を驚愕しながら見た。

「なんっっっだコレ！？　大丈夫かシュウ！？」

「リュウがバケモノなだけやっちゅーねん」リンク、苦笑。「睦月島に流されてる睦月ギルドＣＭのシュウ見たやろ？　海面走ってたやん。足の速くなる魔法掛けてたとはいえ、おれより速いで」

「それもそうか…。よし、リンク。超一流ハンター昇格試験の試験官はおまえだ」と、片手で剣を構えるリュウ。「シュウの力を見るため、手合わせ頼むぜ」

「おうよっ」

とリュウに続き、片手で剣を構えるリンク。

2人の真ん中、剣と剣が十字を作る。

リュウの顔が驚愕した。

「なっ、何故だっ…！　リ、リンクがつえぇ…！」

リンクの腕力に押され、リュウの足がずるずると後方へと下がっていく。

「おれが弱いみたいな言い方すんなや…」と苦笑するリンク。「おれやて、超一流ハンター歴もう10年以上なんやで？　シュウより強くて当たり前やん。両手でやってみぃな、リュウ」

「リンク相手に両手とは……屈辱だぜ」

「うっさいわ。はよやらんかい」

「おう」

と剣を両手で持ち直し、リュウがリンクに挑む。

「おおっ」と笑顔になったリンク。「シュウ、超一流ハンターとして充分な力やで！」

「そうか。じゃーあとはシュウがどの程度の剣術かによるな」

「せやなあ、あとは剣術の巧みさやなっ。テクニックや、テクニック」

「たしかめてみるか、テク」

「――えっ!?　ちょ、ちょ、ちょ、ちょい待ちぃやリュウ!」

と、リンクは狼狽した。
だって、

「テクなんてシュウやなくてリュウのまんまやん!」

「安心しろ、リンク。この身体じゃあ、俺の実力をまるで出し切れねえよ」

「いっ、いやいやいやいや――」

「んじゃ、行くぜー」

「――どっ、どわあああああああっ!!」

慌てて剣を構えなおすリンク。
リュウが容赦なく飛び掛り、辺りに激しく刃を交える音が響き渡る。
少ししたら魔法も混じり、炎魔法や光魔法が辺りを明るく照らし出している。

リュウとリンクを離れたところから見ているキラとミーナ。
キラはリュウの様子を見ながら感じる。

（良かった…、リュウはシュウの隠された能力に気付いていない）

キラの傍ら、ミーナが感心したように声をあげた。

「おおっ、結局リュウが押してるぞっ」

「経験や技術の差だ。シュウがリンクとやるときは、まだああも行かまい」キラがそう言って、ミーナの手を引いた。「ここにいては流れ弾を食らうぞ、ミーナ」

と、リュウとリンクからさらに離れる。

リュウとリンクの耳――人間の耳に会話を聞き取られない距離に来ると、キラが足を止めた。

「ミーナ」

「何だ、キラ？」

とミーナが笑顔でキラの顔を覗き込むと、そこにはキラの真剣な顔があった。

「私はリュウにも子供たちにも言っていないことがある」

「え…？」ミーナは一度リュウを見、再びキラを見た。「い、言ってないことっ？」

「リュウはシュウの能力に1つ気付いていない。シュウ自身も気付いていないのだから、当然なのだろうが…。それで良い…、それで良いのだ。シュウの能力になったことによって気付かれないか心配で着いて来たが……、良かった」

「キ、キラ…？　どうしたのだっ……？」

ミーナのライトグリーンの瞳が、心配そうに揺れ動く。

キラが笑顔になって言う。

「さて、ミーナ」

「な、何だキラっ？」

「クイズを出すぞ」

「おおっ、クイズかっ！　どんと来いだぞっ！」

と、張り切りだすミーナ。

「第1問。ミラは私とリュウからどんな能力を受け継いだのか答えよ」

「ミラ？　ミラならリュウの治癒魔法だけ受け継いだぞーっ」

「当たりだぞーっ♪」

「やったぞーっ♪」

と、ミーナがキラに頭を撫でてもらって喜んだあとは。

「次、第2問。同様にサラはどんな力を受け継いだ？」

「サラはリュウから風魔法を受け継いだぞーっ。あとリュウの物理

的な力と、キラの敏捷さを受け継いだ気がするぞ」

「当たりだぞーっ♪」

「やったぞーっ♪」

「では、第3問。リン・ランはどんな力を受け継いだ?」

「リン・ランはリュウから水魔法を受け継いだぞ。それからちゃんとキラの敏捷さも受け継いだぞ。加えて、キラの賢さを受け継いだぞーっ♪」

「当たりだぞーっ♪」

「やったぞーっ♪」

「よしよし、では第4問だぞ。ユナ・マナ・レナはどんな力を受け継いだ?」

「ユナは炎魔法、マナは大地魔法、レナは光魔法をリュウから受け継いだぞ。この三つ子の中でもマナはよくキラとリュウの魔力を継いだと思うぞーっ。あ、それからマナはそこそこキラの賢さも受け継いだなっ♪」

「当たりだぞーっ♪」

「やったぞーっ♪」

「では、第5問。ジュリはどんな力を受け継いだ?」

「ジュ…、ジュリ？」ミーナの顔が困惑する。「な…、何も受け継がなかったのではないか？」

「はずれだぞ」

「はずれたぞ…」

「落ち込むな、ミーナ」と、キラはよしよしとミーナの頭を撫で、「続けて第7問。シュウはどんな力を受け継いだ？」

「これは分かるぞーっ！」ミーナが自信満々に言う。「シュウはリュウの物理的な力だけではなく、リュウが持っている火・水・地・風・光魔法を、見事ぜーんぶ受け継いだのだぞっ！　しかも治癒魔法まで受け継いだぞーっ！　年が年だからまだまだなものの、キラの身体能力も受け継いでいるぞーっ！」

「あとは？」

「えっ…？　あ、あと…？」ミーナの顔が再び困惑した。「ま…、まだ何かあるのかっ？　な、何だ？　シュウはキラの賢さを継がなかったから、ときどき見ててバカだし…。な、何だ？　まっ…、まさかっ……！？」

と、驚愕するミーナの顔。

「リュ、リュウの性的能力？　を、受け継いでしまったのか！？」

「そ…それは恐ろしすぎるぞミーナっ…！」キラ、顔面蒼白。「リュウの性的能力なんて本気でバケモノ以外の何でもないぞっ……！」

「まったくだぞっ…！　あ、あれだなっ？　そのへんシュウは受け継いでいないのだなっ？」

「う、うむ。たぶんだが」

「良かったぞ…」

「良かったぞ…」

と、2匹揃って安堵の溜め息。
そのあとミーナが話を戻した。

「それで、キラ？　シュウはあと何を受け継いでいるのだ？」

「うむ…」と、頷いたキラ。「子供たちの受け継いだ能力を見て、何か疑問に思わぬか、ミーナ」

「疑問…？」

「そうだ、疑問だ」

考え始めるミーナ。
だが、難しい顔をしたまま思いつかず。

それを見たキラが続けた。

「一匹も私の闇魔法を受け継いでいない。私の子供全てが闇の力を持って産まれてくることは難しいだろう。同様に、闇の力を1匹も持たないで産まれて来ることだって難しいのだ」

「――あっ」ミーナが短く声をあげた。「そ、そういえばそうだぞっ…！　どうして1匹もキラの闇の力を受け継いでいないのだっ？」

「いや…」と、キラが首を横に振った。「私が黙っていただけで…、受け継いでいるのだ、本当は。私の子供の中で、2匹が受け継いでいるのだ」

ミーナが少し考えたあとに訊く。

「そ…、それはシュウとジュリかっ？」

「うむ。ブラックキャットは闇属性のモンスター。ブラックキャットの闇魔法といえば『破滅の呪文』だけ。他の炎魔法や水魔法、大地魔法、風魔法、光魔法は色々な種類があるが、闇魔法はたった1つ『破滅の呪文』だけ。普段使うことのない『破滅の呪文』だけ。それ以外には持っていないのだから、普段闇魔法を使うことはない。だから、己が闇魔法を持っていることに気付かなくてもおかしいことではない」

「そ、それに、暗い部屋を明るくするために光魔法を使おうと思うことは何度もあるだろうが、明るい部屋を暗くするために闇魔法を使おうと思う機会はあまりないだろうしなっ…。日常で使わぬ力は気付かなくてもおかしくないぞっ……」

キラが頷いた。

まだリンクとやり合っている遠くのリュウを見つめて続ける。

「私がリュウにも、子供たち――シュウやジュリにも言わなかったのは、リュウのためなのだ。愛する子供たちが闇魔法を持っていると知ったら、きっとまたリュウに恐ろしい想いをさせてしまう。私

はもう、『破滅の呪文』を使えなくなってしまったが……」

ようやく、はっとしたミーナ。

動揺しながら訊く。

「そ、そうかっ…！　や、闇魔法を持っているということは、シュウとジュリは『破滅の呪文』を使えるということなのだなっ……！？」

キラが頷いた。

「私が『破滅の呪文』をシュウとジュリに教え、それをシュウとジュリが唱えたそのときは……」

「……」

困惑するミーナの顔。

キラが『破滅の呪文』を唱えたときを思い出したのか、そのライトグリーンの瞳に涙が浮ぶ。

キラがミーナを安堵させるように笑った。

「でもシュウもジュリも純粋なブラックキャットではない。あくまでもハーフ。半分は人間だ。『破滅の呪文』を唱えたところで、己の身が滅びることはない。いやまあ、やはり己も傷を負ってしまうのだが。でも、どうあがいても私ほど強力な闇の力を持てるわけがないのだ。どんなに成長しても私の半分にも満たないだろう。つまり死ぬことはない。だからそうだな…、うーん。ハーフの場合は『破滅の呪文』とは言わないかもだぞ」

「ほお。では何だ？」と、首をかしげるミーナ。「破滅ではないのならー…、うーん…、破滅…、滅…滅……。あっ、『族滅の呪文』かっ？」

「シュウに一族滅せられても困るぞ。それならせめて『自滅の呪文』の方がマシだぞ」

「シュウ自爆するのか？」

「バカだぞ。えーと、滅…滅……、『幻滅の呪文』か？」

「シュウ人生に幻滅するのか？」

「非行に走ってしまうぞ。うーん…、あと滅といえば……『点滅の呪文』なんてどうだ？」

「おおーっ！　シュウぴかぴか光るぞーっ、眩しいぞーっ！」

「つるっ禿げみたいだぞ。ってことは『つるっ禿げの呪文』か？」

「うーん。つるっ禿げ……」

「何だ？　腑に落ちないか？　では『若禿の呪文』なんてどうだ？」

「おおーっ！　若いのに禿げる！　まさに『若禿の呪文』だぞーっ！　さすがキラだぞーっ！　賢いぞーっ！　シュウは呪文を唱えると禿げるぞーっ！」

「面白いぞーっ！」

「リーナ風に言うと”おいしい”呪文だぞーっ！」

「おい、何の話？」

と、突然割り込んできたリュウとリンクの声。

「――ふっ、ふにゃあっ！？」

驚倒してキラとミーナが振り返ると、そこには眉を寄せた主たちの顔。

慌てて声をそろえる。

「シュ、シュウは決して『若禿の呪文』なんて持ってないぞっ！」

「は…？」

「だっ、だから安心するのだリュウっ！」

「？？？」

さらに眉を寄せ、首をかしげるリュウ。

その傍ら、リンクが苦笑した。

「何をまた意味のわからんことを…。これやから天然バカは……」

と呟いたあと、リンクがオリーブ山を登りだした。「リュウ、行くで。キラとミーナも。リュウがな、この辺にいる超一流ハンター用の指名手配モンスターと戦ってみるんやって」

「そ、そうかっ…」

と、リュウとリンクの後方５ｍを歩くキラとミーナ。

前方を歩く主たちの耳に聞こえないよう、小声でぼそぼそと会話を続ける

「い、いつの間にか『破滅の呪文』からズレてしまったが……」

「う、うむ。な、何で『破滅』から『若禿』になったのだキラ？」

「な、謎だぞ。これは迷宮入りだぞミーナっ…！」

「う、うむ。まるで分からぬぞっ…！」

「だからそのことは置いておくぞ」

「うむ。置いておくぞ」

キラが一度リュウの方を気にしたあと、さらに声を小さくして続ける。

「とにかく、リュウにはシュウとジュリが闇の力を持っていることを言わないでほしい」

「分かったぞ、キラ。リュウだけではなく、わたしは誰にも言わないぞ。だが…」と、ミーナもさらに声を小さくする。「シュウとジュリには教えぬのか、キラ？　おまえたちは闇魔法を使えると、教えぬのか？」

「私は親として本当は教えなければいけないのだ。だが……」

と、キラがリュウの背を見つめる。

「そうだな…、キラ。主（リュウ）を想うとどうしても辛いな」

頷いたキラ。

間を置いてから続ける。

「だが…、シュウは来年でもう１８になる。幼いジュリはまだしも、シュウはそろそろ子供と言えなくなる年齢だ。己の身を犠牲にしてでも守りたいと思うものがあるだろう」

「それはカレンのことか？」

キラが頷いた。

「シュウは年を重ねて大人になる度に、闇の力を少しずつ増大してきた。そう、あくまでも少しずつだ。だが、カレンと出会ってからは急激な速度で増大している。今現在もだ。大切な者を守ろうとする本能から来るのだろうな」

「…も、もしかして、シュウはリュウを超えられるのかっ？　ええと、その『若禿の呪文』…、ではなくて、ええと……」

「もう、とりあえずハーフの場合は『微妙な破滅の呪文』にしようぞ」

「ださいぞ。でも実際微妙だしな」

「うむ」

「その『微妙な破滅の呪文』で、シュウはリュウを超えられるのかっ？　つまりシュウはリュウを倒せるのかっ？」

「いや。もっと魔力が強くなれば可能だが、今のシュウの力では無理だ。なんせリュウはバケモノだからな」と、苦笑するキラ。「今シュウが『微妙な破滅の呪文』を唱えたところで、リュウはたぶん擦り傷で終わるぞ。で、そのあとシュウは半殺しにされるのがオチだぞ」

「さ、さすがリュウだぞ。バケモノだぞ。鬼だぞ。人間とは思えぬぞ…」

キラに続き、苦笑するミーナ。

「…私は」と、真顔になってキラが続ける。「いつかはシュウとジュリに教えてやらなねばならない…、呪文を。ハーフとはいえ、私の血を継いでいるのだ。普通から見ればその力はやはり強力。いつかは必要になる日が来るだろう。特にシュウにはそう遠くないうちに教えることになるかもしれないな。呪文は大切な者を守ることが出来る。シュウがもっと大人になって魔力が強くなれば、リュウを超えることだって出来る。その他のことにだって役に立つことが出来る。シュウが現在の力だけではどうしようも出来なくなってしまったとき、私は呪文を教えなければならない。ブラックキャットの証となるあの呪文は、必ず親から子へと伝えられてきたもの。ハーフとはいえブラックキャットの血を引き、そして闇の力を持って産まれてきたのだ。教えてやらなければならない。それに何より、困り果てた息子を見過ごすわけにはいかぬからな」

「うむ…、そうだな。だが、あくまでもシュウが己の力に困り果てたときに教えるのだな」

「うむ…。あくまでも困り果ててどうようもなくなったときの最終手段として教えるのだ。シュウには悪いが、リュウを想うとそう簡単に教えてやるわけにはいかない。『微妙な破滅の呪文』で己が死ぬことはないとはいえ、リュウが恐怖を感じることには変わりはないのだから」

と、キラは前方を歩いているリュウの背を見つめた。

リュウが眉を寄せて振り返る。

「おい、おまえたち。何をさっきからヒソヒソと話してんだよ？」

「なんでもないぞ」

と声をそろえるキラとミーナ。

嘘こけ、とリュウが言おうとしたときリンクが声をあげた。

「あっ、リュウ！　いたで、指名手配モンスター！」

「おっ、あいつか！」

と、モンスター目掛けて突進していくリュウの傍ら。

キラが再び口を開く。

「ときにミーナ？」

「何だ、キラ？」

「また話が戻るのだが」

「うん？」

「リュウの性的能力…」

「そこに戻るのか」

「…に、なっているわけだろう？　今のシュウは」

「うむ」と頷いたあと、ミーナは立ち止まった。「――って、それって……」

「うむ」

と頷き、ミーナに続いて立ち止まるキラ。

今年最後の月を見上げ、苦笑しながら呟いた。

「頑張ってくれ、カレン……」

第８８話　父親の能力　～前編～

リュウが『外見は変わらずシュウの能力になれる薬・人間用』を飲んだ一方。

シュウは『外見は変わらずリュウの能力になれる薬・ハーフ用』を飲んだ。

カレンをいつも通り抱っこしてみたら、まるで綿のように軽かった。

いつもの調子でビールグラスを持ったら手の中で砕け散った。

リビングのソファーの上、シュウは驚愕せずにはいられない。

「なんっだ、コレ…！　なんっっだよこの身体っ……！？　――うっわ、箸折れたっ！」

グラスどころか、箸さえ普通に持てない。

「おっ、親父普段どうやってグラス持ってんの…！？　っていうか、どうやって箸持って飯食ってんの……！？」

グレルが首をかしげて言う。

「オレもしょっちゅうグラス割ったり箸折ったりすっけど？　何だぁ？　普通じゃねーのか？」

「あっ、当たり前だっつのっ…！」とグレルを見て突っ込んだあと、シュウは相変わらず驚愕しながら己の両手を見る。「飯食うだけな

のに、なんって繊細な力加減で指先を扱わねえといけねえんだ……！」

「リュウ兄ちゃん、そこまで怪力やったんか」とリーナ。「ほんまに人間とは思えへんな」

「だ、だね……」

と同意したミヅキ。

シュウ宅に宿泊して数日のミヅキは特に驚いただろう。

顔が蒼白している。

シュウはレオンを見た。

（親父の能力になったってことは、親父の身体能力になった。親父の筋力になったってことは、レオ兄より力あるってことだよなオレ……！？）

シュウはガラステーブルの上の料理を脇に避けると、そこに右肘をついて言った。

「レオ兄、腕相撲の相手して」

「うん、いいよ」

と承諾したレオン。

まさしく猫のようにしなやかな体つきをしているレオンは、一見そんなに強そうには見えない。

だが、リンクを上回る超一流ハンターで、純粋な猫モンスター。

普段のシュウならば、腕力なんてまだまだ敵わない。
レオンがシュウと向かい合い、ガラステーブルに肘をついた。
シュウと手を組んで言う。
「リュウの能力になってるなら、僕は一瞬で負けちゃうね」
「一瞬？　まっさかあ」
と、笑ったシュウは、
「レディィィ、ゴオォォォォっ！」
とのサラの声で思いっきり力を込めた。
次の瞬間、レオンの手の甲が呆気なくガラステーブルに到達。
おまけに、
ガシャーン！
と勢い余ってガラステーブル破壊。
「――なっ」
と同時に短く声をあげたのはシュウとサラ。
その次の発声は、サラの方が早かった。
「…に、すんのさ兄貴いいいいいいいっ！！」

ドカッ！！

とシュウに両足でドロップキックを食らわしたあと、サラがレオンの手を取った。

「だっ、大丈夫レオ兄っ！？　け、怪我はしてない！？」

「大丈夫だよ、サラ。落ち着いて。ほら、何ともないでしょ？」

とサラを安心させるように笑うレオン。

その傍ら、シュウは再び驚愕している。

「か、か、か、勝っちゃったよオレっ…！　レオ兄に勝っちゃったよっ…！　っていうか、いつもは結構イテエェェはずのサラのドロップキックが、まるでネズミにでも蹴られたようだった……！」

「よーし、次はオレとやろうぜシューウっ♪　テーブルなくなっちまったから床だな」と今度はグレルが床に寝そべって右肘をついた。

「腕相撲には自信があっちゃうんだぞっ、オーレっ♪」

「……」

グレルの顔を見るシュウ。

（まさかバケモノのグレルおじさんに敵うわけないよな…。いやでも、親父もバケモノだし…。腕力はどっちが強いんだろう……？）

気になり、床に寝そべって右肘をつきグレルの手を握った。

「おっ？　やる気だな、シュウ？　んじゃオレは本気でいっちゃうぞーっと♪」

「じゃ、じゃあオレも本気でいくっ……！」

と、ごくりと唾を飲み込んだシュウ。

冷や汗を掻き出す。

正直、勇気がいる。

いつもの己ならば、グレルに腕を折られてもおかしくないのだから。

サラがまだレオンの手の具合を気にしているものだから、ミラが審判になった。

シュウとグレルが握り合った手に、その華奢な手を当てて言う。

「それじゃあ、お兄ちゃん、グレルおじさん、いくわよ？　レディ～っ！」

ぎゅっと、シュウの手に力が篭る。

「ゴオォォッ！」

とミラの手が、シュウとグレルの手から離れた次の瞬間。

「うおおぉぉおりゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁあああぁぁあ！！」

シュウが雄叫びをあげた。

「とりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ

同時にグレルも楽しげに雄叫びをあげた。
シュウもグレルも腕に渾身の力を込める。
結果、
ググググググッ…！
と、組んだ手は左右どちらにも動かない。
「――すっ、すげえっ…！」
シュウにさらに訪れる驚愕。
（オっ、オレ…！　オレっ、このグレル（バケモノ）と互角にやり合ってる……！）
それは本当に互角で。
（にっ…、２０分経つのに勝敗がつかねえっ……！）
シュウとグレルの肌が汗ばもうが。
息が切れようが。
組んだ手は、まるで中央から動こうとしない。
「ふあぁ…」と欠伸をするリーナ。「はよ決着つけんかい。見てて飽きてきたで」

「う、うーむ。ここは兄上に勝利をっ……！」

と、リン・ランがティッシュを1枚ずつ手に取った。

それの角の辺りを指先で捻り、こよりを作る。

それをリンがグレルの左の鼻の穴へ入れ。

ランがグレルの右の鼻の穴へ入れ。

「ほーれほれ♪」

グレルの鼻の奥をくすぐる。

「おっ？」

と、むずむずとする鼻を動かすと同時に、腕の力が少し抜けたグレル。

組んだ手が傾き、

「お、お、お、クシャミ出るぜ～っと」

さらに傾き、

「キタキタキタキタぜ～っと！」

またさらに傾き、

「ふがっ…っ……！」

またまたさらに傾き、

「ぶえっっっくしょおおおおおおおおおおおおおおおいっ！！」

勝敗がついた。

「お？　負けちまったぜ、オーレっ♪　やるじゃねーかよ、シューウっ♪」

「……」

グレルの唾液を顔全面に浴びたシュウ。

たしかに床についているグレルの手の甲を呆然として見つめる。

（か、かかか、かかかかかかか勝っちまった…！？　オ、オオオオオオオレ、こっ、このバケモノに勝っちまったっ……！？）

そんな現実をじわじわと実感し。

身体が小刻みに震え出し。

顔面蒼白し。

シュウは溜まらず叫んだ。

「こっ…、こえええええええええええええええええええええええええええっ！！！」

がしっとレオンの肩を掴み、シュウは泣きそうになりながら言う。

「たっ、たたた、助けてくれレオ兄っ！！　オレ、自分がすーげー怖いっ！！」

「う、うん、そうだろうね。バケモノになっちゃったんだから。ていうか」レオンは苦笑する。「シュウ、痛い……」

「うっわあっ！　ご、ごめんっ！」と慌ててレオンから手を離したシュウ。「き、気をつけねえといけねえなっ…！　いつもの調子で物掴んだら破壊しちまうし、人には怪我させちまうよっ…！　ああ、こえぇ……！」

「怖い怖い言っとらんで」と、リーナが溜め息を吐いた。「外でもっとリュウ兄ちゃんの能力試してきたらどうやねん」

「お、お、おうっ。そうだなっ…。どれ裏庭で……」

と玄関へ行き、外に出て裏庭へと向かって行ったシュウ。

驚愕したの声が屋敷の中にまで聞こえてくる。

「ぎっ、ぎゃあああああっ！！　足はえぇぇえええぇぇぇぇぇっ！！　魔法つえぇぇえええぇぇえええっ！！　オレすーげえぇぇぇえええぇぇぇぇぇえええっっっ！！！」

しばらくは止みそうにないシュウの叫び声。

「うちらはご飯でも食べよか」

と、リーナ。

そういうことになった。

いつもの誰かの誕生日パーティーのときは皆就寝時間まで食っちゃ飲みして騒ぐのだが、本日は主役――リュウとキラの姿がない。

よって、何のためにパーティーをしているのか分からず。

食事を終えたあと、それぞれ別行動に移った。

カレンは入浴をしに自分の部屋へ。

双子と三つ子も冬休みの宿題をするため、自分の部屋へ。

ミラは空いた皿を片付け始め、サラとレオンはガラステーブルを買いに外へ。

ジュリとリーナは屋敷内を駆け回って遊び出し、リビングに残っているグレルは食事続行。

明日の雪合戦後のオークションにシュウの人形を出すミヅキは、まだ作り終わっていないからと焦った様子で宿泊している部屋へと戻った。

屋敷の裏へと回ってから1時間。

シュウは息を切らして立っていた。

「さ…、叫びすぎて疲れたっ…！　…それにしても」

と、シュウはうな垂れる。

（オレ…、こんなにも親父と力の差があったのかよ）

そのリュウと己の差は、天と地ほど掛け離れているように思えた。

落胆しながら屋敷の中へと戻る。

リビングへ行くとリュウとキラ、リンク、ミーナが戻ってきていた。

食事中だ。

「あ…、おかえり」

シュウが言うと、リュウたちが声をそろえた。

「ただいま」

「どこ行ってたの？」

「オリーブ山だぞ」と、キラ。「シュウ、ご飯は食べたのか？」

「いや…。箸持つと折れるから食いづらいし、自分の身体に戻るまでいらねーや」

というか、落胆のあまり食欲がない。

自分の部屋へと戻ろうとしたシュウだが、

「待てコラ」リュウに呼び止められた。「いつもちゃんと食えっつってんだろうが。こっち来い」

「……」

しぶしぶリビングの中へと戻るシュウ。

リュウがシュウの口の中に、半ば強引に料理を詰め込む。

「何してんだ、ちゃんと食え。ほら早くしろ」

「……」

あまり飲み込もうとしないシュウを見て、リュウは眉を寄せた。

「何だよ。俺の舌で食うとマズイとでも言うのか」

首を横に振るシュウ。

リュウが溜め息を吐く。

「じゃあ何だよ」

シュウは口の中の物を飲み込むと、口を開いた。

「……オレ、弱い」

「そうだな」

「って、即答すんなっ！」

「さっきは超一流ハンター用の指名手配モンスター倒すのに苦労したぜ」

「あれが普通や」とリンクが苦笑した。「いつものリュウやったら瞬殺やけど、普通の超一流ハンターはあれくらい掛かるで。っていうか、普通より早かったっちゅーねん」

「えっ…？」

シュウはリュウとリンクの顔を交互に見た。

「普通より早いのは俺の巧みな剣術のおかげだな」とリュウは言ったあと、シュウの顔を見た。「つーわけで、シュウ。おまえ明日の雪合戦とオークション終わったら、すぐに超一流ハンター昇格試験

な」

「えっ…！？」

驚いたシュウ。

声が裏返る。

「ちょ、超一流ハンター昇格試験っ！？　オレがっ！？」

「おう。力は足りてる。あとはおまえ次第。ヘッタクソな剣術だったら受からねーからな」

「……」

超一流ハンター昇格試験。

超一流ハンター昇格試験。

超一流ハンター昇格試験。

頭の中、シュウは繰り返す。

（オレ…、オレもう超一流ハンターになれるかもしれねえのっ…？超一流ハンターにっ……？）

まだ実感の湧いていないシュウに、リュウが溜め息を吐く。

「何、呆然としてんだ。まだ試験さえ受けてねえってのに。そういう反応はせめて受かってからにしろってんだバーカ」

「バっ、バカは余計だっ！」

と突っ込んだあと、シュウの胸が鼓動をあげる。

（そうか…！　オレっ…、オレもうそこまで来てたんだっ！　親父には程遠いけど、超一流ハンターになれる力は持ってたんだっ……！）

そう思った途端、蘇った食欲。

「いっただっきまあああああす！」

箸を3回折り、リュウの拳骨を食らったシュウ。

「い…、痛くねえっ…！」

ちょっと感動した。

リュウが舌打ちをしていう。

「おまえの弱い力じゃ痒い程度か」

「うっ、うるせっ…！」

「ほら、フォークで食え。箸よりは力加減楽だろ」

「おう」

と、フォークを持ったシュウ。

やっぱりちょっと曲げてしまったが、何とか食事をする。

「ところでよ、シュウ」

「何、親父」

「飯食い終わったら互いの性的能力を知る時間だな」

「え」

と、リュウの顔を見たシュウ。

数秒考えたあと、顔面蒼白した。

（カっ…、カレン大ピーンチ……！？）

第８８話　父親の能力　～前編～（後書き）

昨日長々と保存しないで執筆してる最中にいきなりＰＣ強制終了して、しかも買って１年も経ってないのに壊れたらしく立ち上がらなくなって泣き叫んだ後に３時間ほど寝込んだ姫百合です……ｏｒｚ

見兼ねた家族がＰＣ貸してくれたのでそれで執筆しましたが、いつものＰＣと違うってだけで執筆が思うように進みません…。

あぁ…、作者側の皆様。執筆中小説はこまめに保存しましょう…。

え？　当たり前だろ？　ええ、そうですねゴメンナサイ…。でもお気をつけくださされ……。

第89話　父親の能力　～後編～

自宅リビングの中。
シュウは顔面蒼白してごくりと唾を飲み込んだ。

「カ…、カレンピンチ…！？　ってか、下手すりゃ嫌われるオレ！？」

「かもしれん」とシュウに続いて顔面蒼白したのはキラである。「マナの説明だと、見目は変わらぬものの、ほぼリュウと入れ替わったと言っていた。オスの子孫を残そうとする本能なのか何なのかよく分からぬが、リュウは私を抱き始めると本気で止まらぬぞ。よって、カレンに泣かれること間違いなしだ」

「ちょ、待っ――」

「飯食い終わったら8時くらいか」と、リュウ。「11時には初詣行く準備すっから、3時間しかできねーな。大丈夫だ、シュウ。3時間くらいおまえの好き勝手してもカレンにゃ嫌われねーよ」

「な、何を根拠に…！？」と引きつるシュウの顔。「それより、あんた3時間できちゃうんだ…！？　いや、うん、知ってたけど！？　ってか、1回と1回の間の休憩はどれくらいで……！？」

「5分」

「あっ、あんた5分で回復すんの！？」

「おう」

「本当に３９の人間のオッサンかオイ！？」

「おまえにゃ負けねーぜ」

「かっ、勝てねーよ…！」

「さあ、シュウ」と、ぽんとシュウの肩を叩いたリュウ。「薬はちゃんと１１時ごろに効果が切れるようにしてもらってある。それまで俺の素晴らしい性的能力を味わって来い」

「……」

リュウとキラの誕生日パーティーのご馳走で晩ご飯を終えたあと、シュウは自分の部屋へと向かって歩き出した。

（味わって来いったって…。カレンにとっちゃきついだろうよ……）

と苦笑しながら2回へと続く螺旋階段を上る。

（今日は我慢してカレン抱かないことにしよ……）

そう決めたシュウだったのだが。

自分の部屋のドアを開けてぎょっとする。

「カっ…、カレンっ……！？」

「おかえりなさい、シュウ。リュウさまの能力はどうだったのかしら？」

と、どうやらバスタイム後らしいカレン。
お気に入りのパイル地で出来たキャミソールワンピース型のバスローブを身にまとい、シュウのベッドの上に寝転がっている。

「おっ…、おう。バケモノだったっ……」

カレンの露出している肩を見、腕を見、脚を見。
シュウは動揺しながらカレンから顔を逸らした。

（すっ…、すげームラムラするっ！！）

そのムラムラ度。
いつもの5倍。

（そんなに子孫を残したいのか親父っ…！！　あんたサルじゃねーのっ！？）

シュウはカレンから顔を背けたまま備え付けのバスルームに向かい、

「オっ…、オレがシャワー浴び終わるまでに、オレの部屋から出て行くことっ！」

とカレンに命令して、その中に逃げ込んだ。

「えぇっ？　ちょ、シュウっ…！？　…な…、何よっ……」

と、むくれるカレンの顔。

（絶対に出て行ってあげないのですわっ！）

シャワーを止め、脱衣所に出たシュウ。

（さて…、薬が切れるまで一匹おとなしく部屋にこもってるしかねーな）

小さく溜め息を吐いた。

「早く自分に戻りてえ……」

思わずそんなことを呟いてしまいながら、パンツ一丁で脱衣所から部屋へと出、

「――なっ」

そして戻る。

脱衣所のドアを閉め、カギを閉め。

シュウは狼狽しながら言った。

「なっんでいるんだよカレン！？　オレの部屋から出てろって言っただろ！？」

カレンの不機嫌そうな声が返ってくる。

「あたくしがいたら悪いのかしら」

「悪いから言ってんだっ！」

「なっ、なんですって！？」

「悪いったら悪いっ！　今日はすーげー悪いっ！　早く出てけっ！！」

シュウのベッドの上。
頬を膨らますカレン。

「出て行かないのですわっ！」

「出てけった出てけっ！　恋人以前に師匠であるオレの命令が聞けないのかっ！」

「聞かないのですわっ！」

「なっ、何だと！？　お尻ペンペンするぞおまえっ！！」

「じゃー、そこから出てきてすればよろしいのですわっ！」

「バっ、バカ言うなっ！　おまえの尻見るだけでムラムラするわっ！！」

「は…」カレン、赤面。「はぁ……？」

「ああもうっ！」と、脱衣所の中、しゃがみ込んで頭を抱えるシュウ。「オレ今、ほぼ親父と入れ替わってんだよっ！！」

「そ、そうね」

「いつも以上に欲情してんのっ！！　すーげームラムラしてんのっ！！　おまえ見たらやべーのっ！！　それくらい分かれよっ！！」

「……」

さ…、さすがリュウさまなのですわ。

と苦笑しながら尊敬したあと。

カレンは続ける。

「な…、何で出てこないのかしら」

「だからっ！」と、脱衣所の中で声をあげるシュウ。「ついさっき言ったばかりじゃ――」

「別に気にしないで出てくればよろしいのですわっ…」と、染まったカレンの頬。「あ、あたくしはあなたの恋人なのだからっ……」

「え…」

と言ってから固まって数秒。

シュウが再び声をあげた。

「えっ、えええええええ！？　おっ、おまえオレに犯されてえってこと！？」

「そ、その言い方やめてちょーだい…」

「だっ、だだだ、だって今のオレじゃ、おまえを抱くっていうより

犯す感じだしっ！」

「そ、そんなことないのですわ、きっとっ…！　何だかすごくガツガツしてそうだけれどっ…、それでも抱かれてる感じがするに決まってるのですわっ……！」

「な、なんで？」

「…シュ…シュウだからなのですわっ…！　好きな人になら、どんな抱かれ方されても平気なのですわっ…！」

と言ったカレンだったが。
慌てて付け足した。

「ＳＭとか以外ならっ……！」

冷や汗を掻きそうになる。
シュウがリュウになっているというのなら、縛られても何らおかしくはない。

カチャ…

と、脱衣所のカギが開く音。

続いて、

「ま…、まじでいいの？」

と、シュウの声。

「ま…、まじなのですわ」

とカレンが答えると、脱衣所のドアが少し開いた。
そこからシュウの片目が見える。

「こ…、これから11時までの約3時間抱かれることになっても？」

「――！？　な…、長いですわねっ…！　で、でも平気なのですわっ……」

「い…、1回と1回の間の休憩が5分しかなくても？」

「――！？　ちょ、短っ…！　…へ…平気なのですわっ……」

「ほ…、本当っすか」

「ほ、本当っすなのですわっ……」

「そ…、そっち行っていいっすか」

それはもう、色んな意味の動悸を感じるカレン。
勇気を振り絞って答えた。

「…カ…、カモオォォォンっ…」

次の瞬間。

「フィーバァァァァァァァァァァァっっ！！」

といつものようにカレンのところへと飛んできたシュウ。

その速さ、瞬間移動並。

黒猫の尾っぽをぶんぶんと振り、カレンに負い被さる。

「い、いいいい、いいんすね、お嬢さん!?」

「…っ…」

カレンはごくりと唾を飲み込んだ。

シュウの鼻息の荒さが只ならない。

（あ、愛するダーリンのため、がんばるのよあたくしっ……！）

シュウの気迫に押されながら、カレンはうんうんと2回頷いた。

「おおおう、まーじかあああああっ！　キタキタキターっ！　ムラムラキターーーっ!!」

と、シュウはパンツをポーイっと脱ぎ捨て、

「いっただっきまあああああああああすっ!!」

カレンの身体に吸い（噛み）付いた。

シュウ、1回戦目。

まあ、いつも通り。

「…デ…、デリシャスっ…!」

2回戦目。

驚愕。

「ほっ…、本当に5分で回復しやがったっ…！」

3回戦目。

さらに驚愕。

「オレいっつも3回戦でダウンだってのに、まだまだ元気なのかよっ…！」

ついでに、1階の両親の寝室からリュウの叫び声。

「おっ、俺の身体を返せえええええええええええええええええええええっ！！」

4回戦目。

カレンがギブアップ。

「ぜっ…、前言撤回なのですわっ…！　もっ、もう無理なのですわっ…！」

「ごめん、止まんないっ…」

5回戦目。

カレンが泣き出す。

「もう嫌なのですわあああああああっ！！」

「ご、ごめん、カレンっ…！　あぁぁ…、泣き声がたまらんっ……！」

「そっ、そんなところまでリュウさまにならないでっ！」

「オっ、オレに言われてもっ…！」

「もう嫌ったら嫌っ…！　嫌あああああああっ！！」

「あぁぁ…、ゾクゾクするうぅっ……！」

「この、変態ィィィィィっ！」

最後、６回戦目。
カレン、死んだようにぐったり。

「…ま…、まだ終わらないの？」

一方のシュウは、

「お…終わんねえっ…！　ま、まだまだムラムラ、まだまだデリシャスっ…！　ど、どうなってんだよこの身体っ…！　どうなってんだよ、どうなってんだよ……！？」

恐怖に襲われていた。
そしてついに叫ぶ。

「オっ、オレの身体を返せえええええええええええええええええええええええ！！」

そして終了した６回戦。

時計の針が、ＰＭ１１時を差した。
身体を包み込んでいた魔法が取れたのを感じ、シュウはぐったりとしてベッドに横たわった。

「…や…、やった、戻ったっ…！」

「よ…、良かったのですわっ…」

と、もう身体を起こすことすら難しいカレン。

「あっ、ごめんっ……！」

シュウは慌ててカレンに治癒魔法をかけた。
何度もかけた。
己にもかけた。

一方、１階の両親の寝室から聞こえてくるリュウの元気な声。

「よっしゃあああああああああああっ！！　戻ってきたぜ俺の身体あああああああああああああっ！！　おいキラ、４回戦っ！！」

続いてキラの声が聞こえてくる。

「なっ、何を言っているのだリュウっ！！　時計を見るのだっ！！」

その次に聞こえてきたのは、２階の階段を駆け上がってくる足音。
足音はシュウの弟妹たちの部屋の前を通り越し、最初にシュウの部屋の前へとやってきた。

「おい、シュウっ！！」

とドアを蹴り開けて登場したのはリュウ。

「はいはい、分かってんよ」

と言いながら、シュウはカレンの肩まで布団をかける。

そのあとリュウの顔を見て続けた。

「初詣に行く準備をしろ、だろ？」

第９０話　初詣の準備

シュウのベッドの中。
カレンはぱちぱちと瞬きをしながら訊いた。
「初詣の準備……って、何をすれば？」
シュウの部屋の戸口にいるリュウが答える。
「男はビシっとスーツ、女は可愛ければＯＫ」
「か…、可愛く…ですかっ？」
「おまえが一番可愛いと思ってる服でいい」
「わ、分かりました、リュウさま」
リュウがシュウの部屋から出て行ったあと、カレンが向かいにある自分の部屋へと向かって行った。
シュウはクローゼットを開け、１年に１度か２度しか着ることのないスーツとワイシャツ、ネクタイを取り出す。
「なぁーんで、わざわざ毎年正装しなきゃならねーんだか……」
と苦笑しながらワイシャツを身に着け、スーツを身に着けるシュウ。
去年は袴で行ったから２年ぶりに着た。

そしてほとんど着ることのないものだから、ネクタイの結び方を忘れて両親の寝室へと向かう。

「なあ、親父ぃっ！　ネクタイってどうやって結ぶんだっけえ！？」

とシュウが両親の寝室へ入ると、キラが目の前にいた。

「ほう、ネクタイの結び方が分からぬのかシュウ」

「う、うん」

とシュウが頷くと、キラがシュウのネクタイを見た。

「なるほど。スーツを見るといつも思うが、変わったネクタイだぞ」

「へ？　オレ普通のネクタイを――」

「良いか、シュウ。ネクタイというものはだな」

と、シュウの首にかけていたネクタイを掴み、結び始めるキラ。

（や…、やっぱり）

とシュウは顔を引きつらせる。

ネクタイを結び終わったキラが、母の威厳を漂わせて言う。

「こうやるのだぞっ♪　覚えたかっ？」

「いや、うん、あのさー…」

蝶結びにすんな……

とシュウが苦笑していると。

リュウが洗面所から顔を出した。

「こら、キラ」と溜め息を吐く。「おかしいだろ、ソレ」

「む？　おかしいのか？　リュウは舞踏会でタキシードや燕尾服を着るとき、こんな感じのネクタイをしているではないか」

「ありゃ蝶ネクタイだ」

「何か違うのか」

「見るからに違うだろ」

「ほう。１つ利口になったぞーっ♪」

「あー、よしよし」

とキラの頭を撫でたあと、リュウがシュウのところへとやってきた。

再び溜め息を吐きながらシュウのネクタイを結び直す。

「おまえもネクタイの結び方くらいさっさと覚えろっつーの」

「だ、だってスーツなんてほとんど着ることねえしっ…」

「まあ、職が職だからな。…って、おまえ」とリュウがシュウの足

元を見て眉を寄せた。「ダッセー」

「は？」と己の足元に目を落としたシュウは驚いた。「あれっ！？裾みじけっ！」

「うーむ、たしか一昨年に買ったスーツだからな」

と、キラ。

クローゼットへと向かって行った。

「シュウ、リュウのスーツに着替えるのだ」

「う、うん」

リュウのスーツに着替えたシュウ。

裾は少し長いし、肩幅も少し大きい。

（でも、サイズ的にそんなに違和感はねーや…）

鏡の前、リュウと並んだシュウ。

鏡の中のリュウと目を合わせる。

「なあ、親父」

「何だよ」

「オレ、なんだかんだで親父に近づいてる？」

「はぁ？」リュウが眉を寄せた。「…ま、あと数年で身長は並んでもおかしくねーな。でも力の差を埋めるにはまだまだだっつの」

「そっ…、それは分かってるけどさっ…！」と、シュウはリュウに背を向ける。「…で、でも、明日の午後にはオレ、超一流ハンターの試験受けるんだぜっ？」

「そうだな」

「う…、受かったら、その……」

誉めてくれたりすんの？

と訊こうとして、シュウは口を閉ざした。

シュウの目標は『親父を超えること』。

それからもう1つ、『親父に誉めてもらうこと』。

ハンターとして必要な力の面で、シュウはまだ1度もリュウに誉められていない。

たった一言で良いから、「強くなった」と誉められてみたい。

ちなみにこれを訴えるのは第1話ぶりになるが、

（オレはファザコンじゃねえっすよ！？）

リュウが言う。

「おい、シュウ」

「な、何、親父」

「落ちたらカレン没収な」

「――ひっ、ひでえええええっ！」シュウは驚愕してリュウに振り返った。「受かったら誉めるとかじゃなくて、落ちたらカレン没収っ！？　脅しかよっ！」

「心配すんな。脅しじゃなくて本気だ」

だよね、あんた鬼だしっ…！

シュウは冷や汗を掻きそうになりながら、両親の寝室を後にした。

（明日の超一流ハンター昇格試験、絶対に落ちれねえじゃねえかよっ…！）

両親の寝室から出て数歩。

２階から下りてきたカレンの声が聞こえてくる。

「ねえシュウ、どこっ？　あたくしのお洋服これで良いかし――」

シュウの姿を見つけるなり、カレンが止まった。

そのあと頬を染める。

「シュウ、かっこいいのですわっ…！」

「え？」思わず笑顔になるシュウ。「まーじでぇー？　おまえもかわ――」

「準備できたか、カレン」

とシュウの言葉を遮ってリュウ登場につき。

カレン、絶叫。

「――きっ、きゃあああああああっ！　リュウさま素敵いいいいいいいいいいっ！！」

「ちょ、おま……」

思わず顔が引きつってしまうシュウ。

（同じ顔なのに何が違うってんだよ）

と、思わずむくれてしまいながらリュウの顔を見た。

「？　何だよ、シュウ」

「……フン、初老のクセに」

ゴスッ！！

とリュウの拳骨を食らい、うずくまるシュウ。

「いでえぇ…！」

「俺はまだ３０代だ、バカが。殴るぞ」

「な、殴ってから言うなっ！　ああーっ、いでえっ…！」

「まあ、今のはシュウがバカだったぞ」

と言いながら寝室から出てきたキラ。
続いてシュウの弟妹たちも続々と2階から下りてきた。
ミヅキはシュウの人形作りで死んだように眠っている模様。

自宅へと着替えに行っていた一同もミーナの瞬間移動で戻ってきたら。

「よし、んじゃあ練習始めんぞ。リビングに並べ」

とのリュウの言葉に、カレンが首をかしげた。
シュウが苦笑しながら言う。

「0時になるまで参拝の練習すんだよ、うち…」

「そ、そうなのっ……」

カレンはリュウの顔を見た。
リュウが真剣な顔をして言う。

「いいか、まずうちの神――義父上（ちちうえ）の墓がこのソファーだと想定し」と、ソファーの背と向き合うリュウ。「まず前列と後列に分けて並ぶ。前列はうちの家族、後列は他。んで並び方は――」

「分かっておる、毎年のことだ」とキラが溜め息を吐いた。「前列は父上の墓から向かって右からリュウ、私、シュウ、ミラ、サラ、リン、ラン、ユナ、マナ、レナ、ジュリだろう？」

「それで」とレオンも溜め息を吐きながら続いた。「後列は向かって右からリンク、ミーナ、リーナ、グレル、僕でしょ？　それから

新入りのカレンちゃんは僕の隣かな」

「おうよ。さあ並べ」

とのリュウの命令で動き出す一同。

初めてのカレンはあたふたとしてしまう。

「ええっと、あたくしはっ……」

「こっちだよ、カレンちゃん。僕の隣」

とレオン。

カレンがレオンの隣に並び、一同が整列。

それを確認したあとリュウが続ける。

「んじゃ次。いいか、ちゃんと動きを揃えろよ。まずは軽く礼。角度は４５度だ」

と、言葉通りに身体を４５度に折り曲げるリュウ。

一同もそれに続いたところで、

「次は『二礼二拍手一礼』の、『二礼』の部分だ。深々と身体を９０度に曲げろ。いいか、９０度だぞ、９０度。……９０度だっつってんだろうが、シュウ！　直角だ、直角！　ちゃんと身体を曲げろ！　それが神に対する態度かっ！」

「いって！」

とシュウがリュウに殴られ、９０度に身体を曲げたら、

「次、『二拍手』だ。まず手を胸の前で合わせ、右手を少し下げる。そして２回拍手し、右手を戻して両手の指先をきちんと揃える。んで神に願い事を聞いてもらえ。１人ずつ口に出して言うように」

「く、口に出してですかっ？」

とカレンが訊いた。

「ああ、口に出してだ。順番は前列からキラ、シュウ、ミラ、サラ、リン、ラン、ユナ、マナ、レナ、ジュリ。そのあと後列のリンク、ミーナ、リーナ、師匠、レオン、カレン。そして最後に俺」

「わ、分かりましたリュウさま。で、でもどうして口に出して願い事を…？」

「俺の都合だ」

「そ、そうですかっ…」

とカレンが苦笑したら。

「次は『一礼』。もう一度身体を９０度に曲げて、深々と礼をするように。…こら、９０度だって言ってんだろうがキラ。相手は偉大なおまえのお父上様なんだぞ？　ほら、しゃんとしろ」

と、キラの尻を叩かず撫でるリュウ。

キラ、苦笑。

「……痴漢をするな、リュウ」

「――ハッ！　やべっ！　俺が普段こんなことしてること義父上に言うなよっ！？」

「はいはい…」

とカレンを除く一同が呆れて溜め息を吐いたところで、

「最後にもう一度軽く礼。角度は４５度な。んで、参拝終了だ。分かったな？　んじゃ、０時来るまでみっちり練習なー」

０時まで約あと３０分。

本当にリュウにみっちりと練習させられた一同。

途中から、つけているテレビから除夜の鐘が聞こえた。

そしてテレビで年が明けたことを確認すると、リュウが一同に向かってすっと右腕を伸ばした。

「良し、止め」

「あけおめー、ことよろー」

と、サラ。

それに続いて、一同が軽く新年の挨拶を交わす。

玄関の方へと歩き出しながら。

「今年もよろしくね、シュウ」

「おう、よろしくなカレン」

「これからミーナさまの瞬間移動で文月島に行くのよね？」

「うん。文月島のタナバタ山の麓。そこにうちの神――オレたちのじーちゃんの墓があるからな」

「何だかちょっとドキドキするのですわっ…！」

と、胸を両手で押さえながら玄関へとやってきたカレン。

目を丸くした。

「わぁ…！　すごいのですわ…！」

リンクたちが持ってきたのか、そこにはいつの間にか大量の白薔薇の花束が置いてあった。

シュウが言う。

「じーちゃんの墓に行くときは、花屋にある白薔薇を全部買って持っていくんだよ」

「どうして白薔薇なのかしら？」

「純猫モンスターにとっちゃ一番美味い花なんだと」

「……。そう…」

一同それぞれ白薔薇の花束を腕に抱え、靴を履いたら準備完了。

リュウが一同の顔を見回して口を開く。

「んじゃ今年もうちの神のところへ…」

一同、声を揃え、

「レッツゴオォォォォ！」

第９０話　初詣の準備（後書き）

７日の０時１１分ごろメールくださった読者様へ。

分かりました。マナにしびれ薬と能力転換薬を送らせておきます。
あとは上手くやってくださｂｂ
ってか、鉄鉱石てｗｗｗ

第９１話　初詣

０時を回り、年が明け。
葉月島の隣の島――文月島のタナバタ山の麓。
シュウとその家族、カレン、リンク一家、グレルとレオンは初詣にやってきた。

初詣だというのに、そこには神社ではなく王様を思わせる大きな墓――キラの父の墓がある。

シュウたち子供は、父・リュウから「おまえたちの祖父様は神だ」と言われて育ってきた。
その理由は昔、母・キラの父がキラの命を救ってくれたからしい。

よって初詣＝キラの父の墓に参拝、である。

「義父上（ちちうえ）…」

と呟き、キラの父の墓を見つめるリュウ。
手に持っていた白薔薇の花束をキラに渡し、墓の周りをせっせと掃除し始めた。

（今年も親父が自ら掃除……か）

その姿は、普段俺様のリュウからは想像し難いもの。
毎年この日、リュウは子供たちの前だろうとお構いなしにそんな姿を見せる。

そして毎年この日、リュウの姿を見ながらシュウは思う。

（じーちゃんて、本当に偉大なんだな）

シュウは持っていた花束をレオンに渡すと、リュウに続いて掃除を始めた。

それが終わったら大量の白薔薇を墓の前に置き。

きりっと表情を引き締めたリュウが、一同を見回した。

「よし、整列しろ」

一同が承諾し、練習通りに整列する。

前列向かって右からリュウ、キラ、シュウ、ミラ、サラ、リン、ラン、ユナ、マナ、レナ、ジュリ。

後列同じく向かって右からリンク、ミーナ、リーナ、グレル、レオン、カレン。

リュウの言う神――キラの父の墓と向き合った一同。

「参拝始め」

と、リュウ。

まずは揃って軽く礼。

その角度、ぴたりと４５度。

「次、二礼」

ぺこり、ぺこり…

と、揃って2回深々と礼。
その角度、見事に９０度。

「次、二拍手」

揃って胸の前で手を合わせ。
右手を少し下げたら、

ぱん、ぱん！

と2回拍手をし。
右手を戻してきちんと両手の指先を合わせたら、

「よし、神への願い事を口に出して言え。神に…、義父上に、よく聞こえるように言うんだぞ」

まずはキラから。

「うーん、そうだな…。今年は父上に何を願おうか。うーん…」

と、目を閉じたまま思案顔になるキラ。
少しして、苦笑しながら口を開いた。

「ち…、父上、その…、リュウの夜の営みの回数を減らしてほしいぞっ……」

（義父上、今の却下で）

と、リュウは心の中でキラの父に訴える。
リュウが一同に「願い事を口に出して言え」と言ったのは、他ならぬこのためである。

（義父上、俺は決っっっして、娘さんを毎晩疲れさせてなどおりません。それに嫌よ嫌よも好きのうちです。よって却下で、却下）

キラの次は、長男・シュウ。

「今日の超一流ハンター昇格試験受からせてくれ、じーちゃんっ！」

（実力で受かれバカ）

「あぁ、あとそれからっ…、と…、年の近い男友達…ほしい……」

（……。シュウ、おまえそこまでヤロウ友達がほしかったのか…）

「あっ！　あともう1つ聞いて、じーちゃん」

（おまえまだあんのかよ）

「あいつ…ミヅキ、疲れて爆睡して来れなかったからオレが代わりに。今日の雪合戦後のオークションで、あいつの作ったオレの人形が高く売れますよーにっ！」

（義父上、シュウの男友達の件ですが。ここは楽に身近にいるミヅキでお済ませください）

シュウの次は、長女・ミラ。

「あのね、おじーちゃん。私、今年はパパとぉー……」

（…こ、こらミラっ…！　パパとなんだ!?　パパは口に出して願い事を言えと――）

「それからぁー……うふふっ」

（ま、待て、ミラ…！　お、おまえ何を義父上に…!?）

「あんもう、パパもっとぉっ（ハート）」

（何が!?）

「ヤダ、私ったら思わずトリップしちゃった♪　おじーちゃん、私のお願いは以上よ♪」

（ちっ、ちちち、義父上っ…！　すーげー可愛い孫娘の願いなのは分かりますが、キラに泣かれるようなことだけはご勘弁をっ……！）

ミラの次は、次女・サラ。

「じーちゃん、アタシさ、去年からレオ兄と付き合ってるんだけど」

（そうなんすよ、義父上。レオンがサラに手ぇ出しやがって…）

「レオ兄と結婚したいな」

（はいはい、却下却下。義父上、今の却下で）

「今親父が心の中で言ったこと却下で」

（――!?　…さ、さすがサラ…！　俺似と言われるだけあるぜ…！　よ、読んでたかっ…！　ちっ、義父上、今のサラの言葉却下で！）

「今の親父の言葉も却下で」

（今のも却下で！）

「それも却下ね」

（却下！）

「はい、却下」

（却下却下却下！）

「全て却下」

（却下却下却下却下却下却下――）

キリがないので次。

サラの次は、三女・リン。
それから四女・ラン。
声をそろえる。

「今年も兄上に可愛がってもらえますよーに、なのだっ♪」

（義父上、今の兄上じゃなくて父上で）

「今年もわたしたちは兄上大好きですなのだっ♪」

（いーや義父上、今年こそリン・ランはファザコンで。つか、今年で絶対そうさせるし）

「以上なのだ♪」

（ざまーみろシュウ。今年こそリン・ランは「父上大好きなのだっ♪」だぜ！）

双子の次は、三つ子の番へ。
まずは五女・ユナから。

「うーん、そうだなあ。おじーちゃん、あたしの夢は『パパよりかっこいい人と結婚すること』なんだけどね」

（よし、結婚しねーな）

「（レナも好きな人できたことだし）そろそろそういう人登場させてくれないかな」

（無理を言って申し訳ございません、義父上。そんなに気に病まず、さらりと却下で）

ユナの次は、六女・マナ。

「おじいちゃん…。薬を作るときのことなんだけど…」

（ああ、薬のことか）

「最後の仕上げにかける魔法がもっとも重要で、それが失敗すると副作用が起きるから…」

（シュウがニューハーフから戻らなかったりな）

「もう失敗しないようにしてほしい…」

（義父上、これは承諾で。シュウがニューハーフから戻らなかったときは、俺一瞬本気でシュウをあの世に送って戻してやろうかと……）

マナの次は、七女・レナ。

「あっ、あのねっ、おじいちゃんっ！？」

（…？　何だかずいぶんと声が上ずってんな、レナ）

「あたし（ミヅキくんのこと）が（好きだから）、その…（両想いにさせてくれると嬉しいな）」

（あたしが、その…？　なんだ？）

「以上っ！」

（ねっ、願い終わったのかよ！　あ、怪しいぜレナ…！　義父上、却下却下却下！）

レナの次は、次男・ジュリ。

「ぼくも、ちちうえのように、かっこよくなりたいです」

（おう、そうかジュリ…！　父上は格好良いか！　やったぜ俺…！）

「おじいちゃん、ぼくのおねがいを、きいてくれますか」

（うーん…、難しいですね義父上。何分、ジュリはキラ似で桁外れの可愛さ…。俺に似ちまったら可愛くねぇー……。んなのシュウだけで充分だぜ。義父上、これも却下で）

ジュリの次は、後列へ。
まずはリンクから。

「…か…金下さいっ…」

（リンクおまえ、また金欠なのかよ…）

「ほんまに今月やばっ…！　このままやったら餓死するかもっ…！」

（ったく、仕方ねーな）

「お願いです、金下さいっ！」

（親友（おまえ）のためだ。俺が貸してやるよ、リンク。…ああ、義父上、見てください。俺はこんなにも人情味溢れる男で――）

「金は金でも、リュウからの金＝トイチの借金だけは勘弁です」

（んじゃ死ね）

リンクの次は、ミーナ。

「わたし、キラと一緒に暮らしたいぞ」

（はぁ？）

「キラのお屋敷で一緒に暮らしたいぞ」

（おまえがうちに来たらリーナも来て、それから絶対リンクも来るじゃねーかよ。邪魔だ、邪魔。却下却下）

ミーナの次は、リーナ。

「安心せえや、おかん」

（は？　リーナおまえ、何考えてんだ）

「うちが将来、絶対リュウ兄ちゃんたちの屋敷に住まわせてやんで」

（どうやってだよ）

「将来、うちとジュリちゃんが結婚できますよーにっ！」

（お、おまえやっぱりうちのジュリ狙ってたのか。うーん…、顔はミーナ似で申し分ねえんだけどな。おまえの中身考えるとちょっとな…。でもジュリとリーナ仲良いしな…。ちと考えてやっか）

「うちがジュリちゃんと結婚したら、リュウ兄ちゃんの屋敷に住むことになるやろ？　そしたらついでにおかんとおとんも着いて来ればええやん」

（じゃ、邪魔だっつの！　リーナおまえ、やっぱ駄目だ！　却下だ却下！）

リーナの次は、グレル。

「オレも嫁さんほしいぜーっと♪」

（ギク…）

「マナがオレの嫁さんになってくれますよーにっ♪」

（や、やっぱりかよ！　師匠、あんたまだ言ってたのかよ！　ふざけんじゃねーよ金メダル！）

「あ、その際にお義父さんに好かれますよーにっ♪」

（俺よりおっさんにオトーサン言われたくねえ！　却下却下却下！　一生却下！！）

グレルの次は、レオン。

苦笑している。

「え、えーと…、言いづらいな……」

（サラとのことか）

「さっきサラが望んだことを叶えてください」

（はい却下）

レオンの次は、カレンの番。
カレンがどぎまぎとしながら口を開く。

「あっ、えとっ、初めまして…！」

（シュウの女です、義父上）

「あたくし、カレンと申しますっ…」

（顔は合格でしょう）

「あたくしの願い事は、ええと…」

（貧乳だけど）

「こ…、今年もここにいる皆様と一緒に過ごせたらって…思いますわ」

（ああ、おまえ今年の4月になったらシュウの弟子終わりだからな。居候終わりだもんな。実家に帰ったら、おまえはまた危ない目に合うかもしれねえな。でも安心しろ、カレン。そうはさせねえからよ。おまえの居候が決まった日、俺はすでに1年後の計画も考えてあると言ったはずだぜ）

シュウがリュウに顔を向けた。

「おい、最後は親父だぞ」

「分かってんよ」

とリュウ。
咳払いをしてから、再び口を開いた。
「では、義父上。最後に俺の願いを……」
そして口を閉ざし、目を瞑り。
心の中で願う。
（毎年しつこいようですが…、義父上。ここにいる俺の大切な家族や仲間たちを、俺がどうしても守ってやれなかったとき…。そのときはどうか、お助けください……）
頭にふわりと感じた、キラの父の優しい手。
リュウは微笑んだ。
（ありがとうございます）
リュウが目を開けると、シュウが眉を寄せた。
「なぁーんで、いっつも親父だけ口に出して言わねーんだよ」
「気にすんな、シュウ。おまえのバカが治りますようにって言っただけだ」
「なっ、なんだよソレ――」
「願い事終わったら次、一礼」
一同揃って深々と礼。

その角度、またもや見事に９０度。

最後にもう一度４５度の角度で軽く礼をしたら。

シュウとその家族、カレン、リンク一家、グレル、レオンの初詣終了。

「よし、帰るぞ。ミーナ、瞬間移動頼む」

「分かったぞリュウ」

ミーナの瞬間移動で、一同は葉月島にあるシュウとその家族の屋敷の前へ。

リュウが言う。

「今日の雪合戦だが、長月島で行われっからミーナの瞬間移動で行く。俺たちは８時までに向こうに行くからな。分かってはいるだろうが、優勝商品が優勝商品なんで俺らは雪合戦に参加しねーんだが…、その代わり俺らは選手の雪玉を作るっていう面倒な役割だ。ゲールいわく、すーげーシュウのファンハンターが集まるみてえだから、大量の雪玉を作らないといけねえ。つーことで、寝坊して出発遅れないように。以上、解散」

一同は承諾したあと、それぞれ自分の家へと帰って行った。

シュウはカレンや弟妹たちと屋敷の２階へと上っていくと、自分の部屋に行く前にミヅキの部屋へと向かった。

ドアをノックすると、すぐにミヅキの声が返ってきた。

「早く入って、シュウ」

「おう？」

シュウが中に入ると、ミヅキが慌てた様子で何やら準備していた。

「疲れて寝ちゃったよ、もう。まだヘッドのメイクが終わってないのにっ…！」

「メイク？」

「塗装のこと。ね、早くそこ座って」

シュウは承諾し、ミヅキが指したベッドの淵に腰掛けた。

ミヅキがシュウの人形の顔の部分を持ち、シュウの顔を見ながら塗装を始める。

「焦って失敗すんなよ？」

「大丈夫だよ、そこは」

「おまえ本当器用だしな」

「……それよりさ」と、曇ったミヅキの顔。「今日の午後には、これをオークションに出すことになるんだよねっ…」

「おう。絶対売れるから安心しろよ」

「値段、いくらまで上がるんだろう。ほとんど上がらなかったら、やっぱりぼくには才能が――」

「上がる」と、シュウはミヅキの言葉を遮った。「絶対に上がる。すげー上がる。だから心配すんな」

そう言ったシュウの真剣な顔を見つめたミヅキ。

「あ…ありがと」

と小さく呟いた。

「おう」

と笑ったシュウ。

（値段が上がらないわけがない）

と思う。

（こいつはこんなに頑張ってきたんだし、才能がある。上がらないわけがない）

それに、

（うちの神――じーちゃんに、オレがちゃーんとお願いしてきたしなっ！）

第９１話　初詣（後書き）

昨日の２１時５８分ごろメールくださった読者様へ。

いつもごめんなさい、そしてありがとうございます。
見直しはしてるんですけどね…。
それでも誤字脱字が出てしまいます……ｏｒｚ

第９２話　雪合戦大会とオークション

毎年元旦に行われるギルドイベント――雪合戦大会。

今年は『全島ギルド雪合戦大会ＩＮ長月島』。

去年まではギルド同士の交流を深めるため、賞金や商品はなしで行われてきた。

が、今年は優勝者には１００万ゴールド。

準優勝者には５０万ゴールド。

そして、ランキングトップ２０全員にミヅキの作った『シュウの人形』をオークションで競り落とすための資格が与えられる。

午前８時。

長月島に着いたシュウとその家族、カレン、リンク一家、グレル、レオン、そしてミヅキ。

野外に作られた雪合戦会場を見渡した。

「おー、いい具合に積もっとるやん」と、リンク。「おれらは雪合戦に参加せえへん代わりに雪玉作りの係りやからな。はよう始めんで。ああ、でもミヅキくんはステージに商品飾っててや。言われた通り、ＵＶカットのケース用意しておいたから」

承諾したミヅキ。

会場の一角に作られたステージに上り、腕に抱えて持ってきた箱の中からシュウの人形を取り出す。

それを用意されていたショーケースの中に飾ると、まだ見ていな

かったシュウ以外の一同が声をあげた。

「おおーっ！」ともっとも声を高くあげたのはリンとラン。「す、すすすっ、すごいのだっ！　兄上そっくりなのだあああああああっ！！」

ステージにぴょーんと跳ねて上り、ショーケースにへばり付く。シュウが狼狽しながら言う。

「こっ、こらリン・ラン！　ショーケースに指紋付くだろっ…！」

「ごっ、ごめんなさいなのだっ！」

「いいよ、大丈夫」

とミヅキがリン・ランに笑顔を向け、ショーケースを専用の布でピカピカに磨き上げる。

続いてカレンとサラ、レナがステージに上ってきた。

「本当、すごいよミヅキくんっ！」と、レナ。「見れば見るほど兄ちゃんそっくりぃぃぃぃぃぃっ！」

「だねえ」うんうんと、サラが感心しながら頷いた。「ところでミヅキ、兄貴の下半身の一部はどうした？」

「縮めた」

「良かった」

「えげつないからね」
「本当にね」
「う、うるせーぞおまえらっ…！」
とステージの下で赤面するシュウの傍ら。
カレンがシュウの人形をじっと見つめている。
「ねえ、ミヅキくん」
「何？　カレンちゃん」
「シュウの剣も付いているのね、すごいわ」
「うん、ハンターらしくしようと思って」
「そう。それで、剣を持てるオプションハンドは付いているのかしら？　それから他にお洋服は？　一着だけでは楽しめないのですわ。それに今着せているお洋服は色が濃いから、長い間着せていては色移りの心配があるのですわ」
「さすがカレンちゃん。言うことが違うね」と、ミヅキがおかしそうに笑った。「大丈夫、ちゃーんとオプションハンドも他の服も、セットで付いてるよ。色移りさせないように、注意書きの紙も付けておいたし」
「まあ、さすがはミヅキくんなのですわ。それなら大丈夫ね」とミヅキを見て安堵したように笑うと、カレンは再びシュウの人形に目

を移した。「それにしても、本当……シュウそっくり。あたくしも少しほしくなってしまったわ」

「え」と、にやけたシュウの顔。「何、カレンおまえ…、オレの人形抱いて寝たりすんの？」

「――バっ、バカなこと言わないでちょうだいっ！」と驚愕したカレンの顔。「そんなことをしたらウィッグが乱れてしまうのですわっ！　それにメイクも崩れてしまうかもっ！　そしてお洋服にはシワが……！　あああっ、考えるだけで恐ろしいのですわあぁぁっ！」

「……。えと、うん…、ごめん」

シュウ、苦笑。
そのあとミヅキの顔を見た。

ミヅキもシュウの顔を見る。

「…いくらで売れると思う、シュウ」

「最低でも５０万」

「まさか」と目を丸くしたミヅキ。「２０万行けばいい方だよ」

「モデルがオレだから？」

「そうじゃなくてさ…、ぼくが作ったものだから……」

シュウが溜め息を吐いた。

「自身持てよ、ミヅキ。おまえの腕はやっぱすげえよ。オレが見ても、オレそっくりだって思うし」

「う…ん……」

ミヅキは俯いた。

まだ雪合戦すら始まる前だというのに動悸がする。

（オークションで付けられた値がぼくの才能の価値…。ぼくの才能は一体どれくらいなんだろう……）

雪合戦に出場する選手はＡＭ９時までに集まる。

集まった選手を見渡し、司会者兼、審判を務めるゲールは瞳を輝かせた。

「…おお…おおおお…！　…す…素晴らしい…！　…なんという数だ…！」

この毎年元旦恒例の雪合戦に集まった選手――ハンターの数は、見るからに最多。

優勝商品のシュウ人形を確認しようと、ステージの前に群がっている。

ショーケース脇にいるミヅキはシュウ人形について質問攻めに合っているようだ。

ステージ脇でその様子を見ているシュウとその家族、カレン、リンク一家、グレル、レオン。

カレンが小声で言った。

「すごい数ですわね。全部シュウのファンかしら」

「せやろうなあ」と、リンクが頷いた。「この商品のために、緊急でハンターの資格取りに来た人もおんのやで」

「へえ、すごいね」と、サラが声を高くした。「親父ほどじゃないものの兄貴のファンってこんなに多いんだ。見てよ、女だけかと思ったのに男もいるよ」

「それに、みんな驚いてるね」と、レナが続いた。「そりゃそうだよね、兄ちゃんに本当そっくりだもん。これはきっと、高値で売れること間違いなしだよ。そうしたら…」

と、レナがミヅキを見つめる。

「ミヅキくん自信を取り戻せるよね…、きっと」

カレンとサラが微笑んで頷いた。

「ミヅキが自信取り戻したらー」と、にやりと笑ってレナを見るサラ。「ミヅキが『次は君のドールを作りたい』とか言って来るかもよ、レナ?」

「えぇっ!?　ちょ、やっ、サラ姉ちゃんやめてよっ…!」

顔を真っ赤にするレナを見て、カレンとサラが笑う。

それから少しして、

「…では…雪合戦の開始を…！」

と辺りに響き渡ったゲールの声。

時刻はＡＭ９時３０分。

雪合戦大会開始。

ルールは単純に、雪玉に当てられた者はコートから退場して行き、残った２０人にオークション参加資格が与えられる。

加えて、最後まで勝ち残った優勝者には１００万ゴールド、その次に勝ち残った順優勝者には５０万ゴールド。

予想以上にシュウのファンハンターが集まったため、１つしか用意されていなかったコートは急遽４つに。

それに合わせて、各コートの審判も急遽用意された。

コートＡの審判は元々の予定通りゲール。

コートＢの審判はリュウ。

コートＣの審判はリンク。

コートＤの審判はレオン。

まずは一斉に、各コート５人になるまで試合が行われる。

各コートに残った５人――合計すると２０人が、オークション参加資格をもらえる。

それからさらに新たに試合を行い、優勝者と準優勝者を決める。

予定としては、雪合戦自体はＡＭ１１時までに終了。

そしてＰＭ１２時にオークション開始だ。

「うーわぁ……」

オークションの商品落札者に、商品を手渡すシュウ。
専用に用意されていたゴージャスな椅子に座りながら、雪合戦に参加している選手を見渡して苦笑した。

「本来はギルド同士の交流を図るイベントのはずが、すげーことになってんな…」

シュウの傍らに立っているカレンとキラ、シュウの弟妹、ミーナ、リーナ、グレルが同意して頷いた。

カレンが言う。

「ハンターの皆さま、物凄い気迫ですわ。なんというか殺気が…」

「せやなあ」と、うんうんと頷いたリーナ。「コートAは男ハンターやけど、コートB～Dは全部女ハンターやな。同じギルドも他のギルドも関係なしに乱闘起きてんで」

シュウの後方で、シュウの人形を箱に詰めて包装していたミヅキ。
手を止めて振り返った。
雪合戦の様子を見る。

(ほ…、本当にすごいことになってるな)

ミヅキの耳に入ってくる女たちの甲高い声。

「シュウくんのお人形は私のものおおおおおっ！」

「何言ってんのよアンタ！　あたしのものよっ！」

「アンタすっこんでないさいよっ！　前々から気に入らなかったのよ、このブスっ！」

「何よ寸胴っ！　アンタこそすっこんでなさいよっ！」

「きっ…、きゃあああああああ！　雪玉に当たってしまったわあああ！　いやあああぁぁあああ、私のシュウくうううううううううんっ！！」

引きつるミヅキの顔。

（あ…阿鼻叫喚……）

リーナがコートAを指して言う。

「見てや。男ハンターもすごいことになってんで」

「おおーっ」と声をあげたリン・ラン。「男なだけあって物凄い豪速球だぞーっ。兄上は男にもモテモテだぞーっ」

ミヅキはリーナの指したところを見た。

男たちが熱く争っている。

「シュウドールは俺の物っ！　ＹＵ☆ＫＩ☆ＤＡ☆ＭＡ☆スクランブルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」

「――ガハァっ！　てめっ…、当てやがったな！」

「オラオラオラオラァ！　ぶっ飛べオラアアアアアアアアアアっ！！　…あっ」

「――ゴフッ！」

「ごめん、審判…ゲールさん！」

「…ハァハァハァ…！　…た、たまらん…！　…な、何と気持ち良い雪玉だ…！　…そこの君、もう一度私に当ててくれえぇぇ…！」

「――！？　こっち来んなあああああああああああああああああっ！！」

ミヅキの眉が寄る。

（何してるんだろう…）

ミヅキは手元の箱に顔を戻した。

（とりあえず売れそうだから安心……かな。オークション…、どれくらいまで上がるんだろう）

綺麗に包装を済ませ、さらに落札者が持ち帰りやすいように袋に入れる。

オークションが近づくにつれ、増していくミヅキの動悸。

勝ち残った２０人の試合をじっと見つめるミヅキの横顔を見ながら、シュウは顔を微笑ませた。

（自信持てって言ったのに、なーに不安そうな顔してんだか。大丈夫だっつーの。…なっ、じーちゃんっ？）

予定より１０分ほど長引いて雪合戦は終了した。
オークションに入る前に、優勝者と準優勝者にシュウが賞金を手渡している。

「優勝者は男だったね、カレン」

「そうね、サラ。ゲールさんに追われながらも見事に勝ち抜きましたわね」

「オークションどうなるんだろうね。賞金もらった優勝者と準優勝者はかなり有利だよね」

「でも分からないのですわ。皆さまきっと大金を用意しているのですわ」

「だろうねえ」

と言いながら、サラは携帯電話を取り出した。

時刻を確認するとＡＭ１１時３０分。
オークションまであと３０分だ。

「覚悟はいい？　ミヅキ」

「…う…うん……」

ぎこちなく頷いたミヅキ。

緊張した面持ちをしている。

その傍らでカレンがはしゃいだ。

「オークション、とぉーっても楽しみなのですわっ♪」

そして腹が減りだすＰＭ１２時。

オークションタイム。

結果が気になるのか、オークション参加資格をもらえなかったハンターたちも帰らず残っていた。

ステージの上にはシュウとミヅキ、綺麗に包装された優勝商品――ミヅキが作ったシュウの人形。

そして司会者にはリュウ。

「あら、リュウさま？」と、カレンがぱちぱちと瞬きをした。「ゲールさんが司会者ではなかったの？」

「ゲールは雪合戦荒らしたからな」と、リンクが苦笑しながら答える。「リュウに会場から締め出されたんや」

「そ、そうでしたのっ…」

とカレンが苦笑したとき。

リュウがマイクを握った。

「んじゃ始めろ」

といきなり始まったオークション。
開始価格は１０万ゴールド。

１人が戸惑い気味に手を上げて言う。

「え、えと…、１０万２千っ…！」

「他は？」とオークション参加者をステージの上から見下ろして言うリュウ。「腹減ってんだよ俺は。早くしろ。１０万２千で決定すんぞ」

オークション参加者たちが、慌てて手と声をあげた。

「じゅ、１０万５千っ！」

「１０万６千っ！」

「１０万６千５百っ！」

と、地味に始まったオークション。

シュウの傍らに立っているミヅキが俯いた。

（この調子だと２０万も行かずに終わりそうだな。こんなもんだよね…、ぼくの才能なんか）

と、溜め息を吐いたとき。

「お、優勝者が手ぇあげた」

と、小さな声でシュウ。

ミヅキは顔を上げた。

それと同時に辺りに響き渡った声。

「１００まあああああああああああんっ！！」

「――えっ…？」

耳を疑うミヅキ。

（１００万っ…？）

呆然としてしまう。

その一方、白熱し出したオークション。

「ちょっ、シュウくんのお人形は譲らないんだからねっ！　はいはいはい！　１２０万！」

「じゃあ俺１５０万っ！」

「１７０万っ！」

「１９０万っ！」

「ええいっ、２５０万っ！」

見る見るうちに上がっていく価格。
シュウが口笛を吹いた。

「すっげぇ～！　だーから言っただろ？　ミヅキ！」

とミヅキの華奢な背を軽く叩いたシュウ。
ミヅキの横顔を見ながら、ぱちぱちと瞬きをした。

呆然としてオークションの様子を見ているミヅキ。
その唇は小刻みに揺れ、栗色の瞳からは涙が次から次へと零れていた。

「……良かったな」

そう言ってシュウが微笑むと、ミヅキが頷いてしゃくりあげた。

オークションの値が止まったところで、リュウが再びマイクを握る。

「５２０万でいいな？　他にいねーな？　んじゃ決定。落札したおまえ、ステージに上がれ」

「うぃーっす！」

落札者は雪合戦の優勝者。
喜々とした様子でステージの階段を駆け上がり、シュウの前に立った。

「えと…、おめでとうございます」

とシュウが落札者に商品を渡すと同時に、ミヅキが深々と頭を下げた。

「ありがとう…ございます……！」

落札価格の５２０万を受け取るミヅキ。

（これが…ぼくの才能の価値……！）

その大きさは予想を遥かに越えていた。
止まらない涙。
じわじわと戻ってきた自信。

一方、ステージ下では。

「いやあああああああああっ！」

「あたしのシュウくん人形がああああああああああっ！」

「頑張ったのにいいいいいいいいいいっ！」

阿鼻叫喚の嵐。

ブチっときたリュウが再びマイクを握る。

「うるせえっ！！　静まれっ！！」

鶴の一声で静かになった。
と、思ったのだが、それはほんの一瞬で。

「だってリュウさまあああああああっ！」

「わたしたちもほしいいいいいいいいっ！」

「何で1つしかないんですかあああああああっ！」

まるで止まない泣き声に、深く溜め息を吐くリュウ。

「ったく、分かったようるせーな…」とオークション参加者や、参加できなかった者たちを見渡し、「これから月に一度、シュウ人形のオークションを葉月島で行ってやる」

勝手に決めた。

「――へっ!?」驚きのあまり、引っ込んだミヅキの涙。「ちょっ、リュウさんっ……!?」

リュウの鋭い黒々とした瞳がミヅキの顔をじろりと見つめる。

「文句はねーな、ミヅキ。こいつらうるさくて仕方ねえ」

「あっ、えとっ……！」

あたふたとするミヅキに、リュウがマイクを投げ渡した。

ミヅキに痛いくらいに突き刺さる期待の視線たち。

ミヅキは会場に集まった者たちを見渡しながらマイクを握り、頭を下げながらその期待に応えた。

「らっ…、来月からもよろしくお願いしますっ……！」

歓声と共に沸き踊った会場。
ステージの上まで伝わってくる地響き。
シュウが笑いながらミヅキを肘で突付いた。
「こーの人気者っ！」
「それはあんたでしょ、シュウ」
「いやあ、それほどでも――」
「まーったく何がそんなにいいんだか！」と笑いながらシュウの言葉を遮ったミヅキ。「リュウさんなら分かるけど、シュウ(これ)の何がいいのかサッパリワカメだね、ぼくは」
「てめっ、ミヅキっ…！　自信取り戻した途端、可愛くなくなりやがってっ……！」
「自信？　最初からありまくってたに決まってんじゃん。ぼくの作ったドールが高く売れないわけがないよ」
「へっ！　何言ってんだ、さっきまでピーピー泣いてた奴がよっ！」
「はぁ？　何のことだか。知らないね」
「泣いてた。オレはしかと見た」
「眼科いってら」

「んだとゴルァっ！」

とやりとりをしているシュウとミヅキを見て、リュウは2人に近寄っていった。

「おい、シュウ。おまえもう義父上に願い叶えてもらったのか」

「何のことだよ、親父」

「『年の近い男友達ほしい』ってやつ」

「そっ、そんなんじゃねえっ…！」

「ふーん？」と、ミヅキが口を挟んだ。「シュウっていないんだ、友達。ぷっ、寂しいねー」

「うっ、うるせ――」

「ま、ぼくもいないけど」

「じゃっ、じゃあ言うなあああああああああああああっ！」

と叫んでいるシュウの尻に、

ドカッ！

「おまえちょっと慰めにファンサービスしてこい」

とリュウの蹴り。

「――うっわあああああああ！」とステージ下に落ちたシュウはファンにキャッチされ、「ぎっ、ぎゃあああああああっ！　へっ、変なとこ触らねえでくださあああああああああああああああいっ！」

ファンサービス開始。

それをおかしそうに見ているミヅキに、リュウが言った。

「シュウ、初詣行ったときに願ってたぞ」

「え？」

とリュウの顔を見上げたミヅキ。

リュウが続ける。

「おまえが作った人形が高値で売れるようにって、願ってたぞ」

「えっ……？」

と、ミヅキが再びシュウに顔を向ける。

「シュウ、すげーバカなとこあっけど絶対に裏切ったりしねえから……、ダチになってやって」

「リュウさん…」ミヅキが呟くように言う。「ぼくなんかでいいんでしょうか……」

「ミヅキ、俺な」

「はい」

「さっきのシュウとおまえのやり取りを見ていて深く思ったんだぜ」

「何をですか？」

「シュウのダチは、おまえがいいってな」

「えっ？」と驚いてリュウの顔を見たミヅキ。「そ、それはどうしてですかっ？」

「だってよ」と、にやけたリュウの顔。「おまえにいじられてるときのシュウがすーげー面白いんだぜ」

「……。一瞬リュウさんて息子想いな優しいお父さんだなって思ったんですけど、もしかして間違ってましたか」

「何言ってんだ、ミヅキ。俺はすーげー優しいお父上様だぜ」

「……。そうですか」

「おうよ。んじゃ、腹減ったから帰るぞ。おーい、ミーナ瞬間移動頼むー」

とステージから飛び降り、家族や仲間のところへと向かっていくリュウ。

ミヅキもステージから階段を下って降りると、ファンに揉みくちゃにされているシュウのところへと向かった。

「ねえ、シュウ。帰るってよ」

「えっ！？　ちょ、待ってくれっ！！」

何とかファンの間から抜け出したシュウ。
ミヅキの腕を引きながら慌ててリュウのところへと駆けて行く。

「おっ、置いていかないでくれ親父いいいいいいいいいいっ！！」

「シュウ」

「何だよミヅキっ！　おまえ早く走れよ、置いていかれるぞ！」

「なってあげてもいいよ」

「え！？　何に！？」

「…と……ち……」

「え、何！？　はっきり言えよ聞こえねーなっ！」

「……友達、なってあげてもいいよ」

「おう、そうか！　――って…？」

シュウは立ち止まった。

（友達…？）

振り返ってミヅキの顔を見る。

ミヅキがシュウから顔を逸らし、もう一度言った。

「友達になってあげてもいいって言ってんの。これからしばらくはあんたのドール作らなきゃいけないし、その方が都合いいからね」

「……」

「い…、嫌なら別にいいけど」

「……」

シュウが何も言わないものだから、ミヅキは再びシュウに顔を戻した。

「…ぷっ」と短く笑う。「何テレてんの」

「てっ…、テレてなんかねえっ！」

と顔を赤くしながら言い、ミヅキを引っ張って再び走り出したシュウ。

その黒猫の尾っぽは嬉しそうにぶんぶんと振られている。

（じーちゃん、ありがとっ…！　ありがとっ…！　オレっ……）

ミヅキの腕を引っ張ったまま、ぴょーんとジャンプしたシュウ。

「友達でっきたあああああああああああああああああっ！！」

高く舞い上がったその身体は、リュウたちがいるところを目掛け

て落ちていき、

「イヤッホオォォォォォォォォォ――」

「よし、ミーナ瞬間移動」

「え」

置いて行かれたのだった。

「――こっ、このバカ親父いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいっっっ！！！」

第９２話　雪合戦大会とオークション（後書き）

雪合戦優勝者は…。
このハーニャン（笑）の評価・感想欄の常連様でございます。友情出演ってやつですね。

昨日の２３時１０分ごろメールくださった読者様へ。
応援ありがとうございます＞＜
それから、ええと……、バレンタインが近いから恋人と友達にしたいハーニャンのキャラトップ３をコメントつきで、ですか（笑）
あれ、恋人はともかく友達はどうしてでしょうｗｗｗ
ではハイ、恋人にしたいトップ３をコメントつきでどーぞｗ←

１位　レオン（だって１番マトモ♪）
２位　リュウ（抱っこして♪）
３位　王子（でっかいお屋敷買って♪）

続いて友達にしたいトップ３です←

１位　カレン（膝枕して♪）
２位　ミラ（おいしいご飯作って♪）
３位　シュウとリンク（いじり倒す）

以上です（笑）

第９３話　超一流ハンター昇格試験

雪合戦大会とオークション終了後。
ミヅキと共に長月島に置いて行かれたシュウは、慌ててミーナに電話して迎えに来てもらった。

ミーナの瞬間移動で、葉月島の自宅前に戻ってきたシュウ。
それからミヅキ。

顔を見合わせる。
友達になったと思うと少し照れくさい。

「お…、おまえ今日帰んの？　ミヅキ」

「う、うん。荷物まとめたらすぐに帰るよ」

「そか。でも昼飯くらい食っていけば」

「じゃあそうする。…わ、悪いねっ…」

「き、気にすんなっ…」

シュウとミヅキが屋敷の中に入ると、リュウが玄関に仁王立ちしていた。

「おい、おせーぞシュウ」

「――って、親父がオレのこと置いてったからだろ！？」

「おまえが来るのおせーから悪いんだろ。それよりおまえ、昼飯食ったら分かってんだろうな」

「わっ…、分かってんよ。忘れるわけねーだろっ…！」と、真剣な顔になるシュウ。「超一流ハンター昇格試験をっ……！」

シュウの顔を見つめ、

「そうか」

と一言言ったリュウ。

くるりと背を向け、キッチンの方へと向かって行った。

一番緊張しているのはシュウのようで、リュウの方かもしれなかった。

リュウの夢の1つは『シュウが生まれたら俺を継ぐ超一流ハンターにすること』。

（シュウが超一流ハンターになったら俺の夢に一歩近づく。まだまだ俺を継ぐには程遠いが……）

リュウがキッチンに着くと、テーブルにおせち料理を並べていたリンクが顔を覗き込んできた。

「ちょっと不安か？　リュウ」

「……ま、シュウが絶対に受かるとは言えねーからな。リンク、おまえが試験官なわけだが、甘やかさなくていいからな」

「分かってんで。ちゃーんとシュウが超一流ハンターとしてやって

いけるか見極めて合否決めるから安心してや」

「分かった」と、席に着いたリュウ。「俺も行く」

「は？」とリンクが眉を寄せた。「シュウの試験の様子見に来るん？　おまえ仕事あるやろ？　ってか、おれの目がそんなに信用ないんかい」

「そうじゃねえよ。そうじゃねえんだが……」

そう呟くように言って黙ったリュウ。

リンクは再びおせち料理をテーブルに並べながら笑った。

（愛する息子の成長を己の目で確認したいんやな、リュウ）

2階に上ったシュウとミヅキ。

ミヅキは荷物をまとめに宿泊していた部屋へ、シュウはカレンの部屋へと向かった。

カレンの部屋へ入るなり、シュウはぱちぱちと瞬きをした。

「あれ？　何してんの？」

カレンがベッドの上に大きなバッグを出して、その中に衣類などを詰め込んでいた。

カレンが手を動かしながら答える。

「今日から3日間、実家に帰るのですわ」

「ああ、そうか。正月だもんな」

「その間お仕事には行けないと思うのだけれど…」

「おう、気にすんな。ゆっくりして来いよ」

と、ベッドに腰掛けたシュウ。

その傍らでバッグに衣類を詰め込んでいるカレンの顔をちらりと見る。

「……3日間？」

「ええ、3日間よ」と言って、カレンが手を止めてシュウの顔を見た。「それが何かしら？」

「いや…、その…、久しぶりに離れ離れだなあと思って」

「寂しいのかしら？」

「えっ？」

と裏返ったシュウの声。

シュウはカレンから顔を逸らした。

「いやっ……うん、その……さ、寂しいっす」

「そう」とカレンが笑った。「あたくしも寂しいのですわ」

「え」とにやけてカレンに顔を戻すシュウ。「オ、オレに3日間も会えないの寂しいのっ？」

「ええ、寂しいわ」

「まーじでえぇぇぇ？」

と黒猫の尾っぽの先を思わず振ってしまいながら、シュウがカレンを抱っこした。

シュウの膝の上、カレンが再び手を動かしながら言う。

「今日の超一流ハンター昇格試験がんばってね、シュウ」

「おうよっ！　オレすーげー頑張っちゃう！」

「あなたなら受かるわよね、きっと……って」カレンの頬が染まった。「真昼間からどーこ触っているのかしらっ…！」

「だって3日もいないって思うとつい…。あぁ…、最近少し乳がでかくなった気が……」

「ちょっ、荷物まとめられないのですわっ」

「ぐーふーふーふー」と笑いながらカレンを押し倒しかけたシュウ。

「――ハッ！」

としてカレンから手を離す。

「も、ももも、申し訳ございませんっ、オトーサンっ！！」

「は…」カレンが眉を寄せた。「はぁ…？　何かしらいきなり」

「オレ今、すーげー親父がじーちゃんの墓の前で畏まっちゃう気持ちが分かるっ…！　お、おまえ今から実家に帰るってことは、お父さんお母さんと会うんだよなっ？　オレおまえを迎えに行くときにお父さんお母さんに会うかもしれないんだよなっ？　っていうか、ちゃんと挨拶行けよオレっ…！　あぁぁぁぁぁあぁぁあ、オトーサン僕は決して娘さんに、て、てててて、てててて手出しなんかしておりませぬうううううううううっ！！」

「落ち着きなさい、大丈夫だから」とカレンが苦笑した。「あたくしの家で厳しいのはお父さまではなく、おじいさまだし」

「そっ、そうか！　オジーサマか！　あぁオジーサマ、ぼ、僕は決してお孫さんに手出しなど――」

「してるじゃない」

「ハイ、してますううううっ！　――って」シュウの顔が蒼白した。「お、おおお、おまえそういうことをオジーサマに言うなよ!?　オ、オオオ、オレ殺されるかもおぉぉぉぉ！！」

「そんな、リュウさまじゃあるまいし…。大丈夫よ、リュウさまほど厳しいわけではないから」

「……あれ」と、ぱちぱちと瞬きをし、カレンの顔を見たシュウ。

「そうなのっ？」

「そうよ」

「…そ、そうかっ、そうだよなっ…！」と安堵し、シュウが溜め息を吐いた。「で、でも変なこと言うなよ？」

「分かってますわ」

「で、手土産は何がいい？」

「え？」

「オジーサマとオトーサンオカーサンに、おまえを迎えに行く際にご挨拶を…！　ちゃんとスーツで行くぜ、オレっ……！」

「い、いいわよ普通でっ…！　手土産なんていらないしっ…！」

「ダメだ、そうはいかねえ！」

「い、いいってばっ！」

「ダメったらダメだ！」

「いいったらいいの！」

「ダメったらダメ！　ダメダメダメダメ！　オレはっ…！」と拳を握って気合を入れるシュウ。「絶っっっっっっ対、スーツと高級手土産でオジーサマとオトーサンオカーサンに挨拶に行くっ！！」

と、まるで譲る気配がない。

カレンは溜め息を吐いた。

「もう勝手にすれば…」

昼食後。

シュウは超一流ハンター昇格試験に向かうということで、サラがカレンを実家まで送っていった。

ミヅキも一人暮らしをしているアパートへと戻り、シュウはリュウ・リンクと共に葉月ギルドの裏の方へと歩いていく。

葉月ギルドの裏には大きな試験会場あり、そこでハンターの昇格試験が行われるのだ。

会場の壁は全面が魔法に耐えられる特殊素材で出来ている。

かと言って、リュウのような異常に強い者が魔法を本気で放てば天井が吹っ飛んでしまうが。

「おい、シュウ。おまえ昼飯のとき言ってたけど、3日後にカレンの親御さんに挨拶すんだって？」と、リュウ。「ま、おまえカレンのこと貰い食ってんだし――」

「そっ、その言い方止めてくれ…」

「カレンと付き合ってんだし、挨拶くらいしておかねーとな」

「う、うん。カレンが居候してから挨拶行くまで大分遅くなっちまったけど、大丈夫かなっ……」

「大丈夫やで、シュウ」とリンクが笑った。「せやかて、リュウが

葉月病院の院長室まで挨拶行ってんのやから。たまーに、仕事と仕事の合間にな」

「あれっ、そうなのっ？」

とシュウが驚いてリュウの顔を見ると、リュウが顔をしかめた。

「当たり前だろーが。向こうの大切なお嬢預かってんだぞ、俺は。何もしねーわけにはいかねーだろ」

「カレンの様子伝えるために、よく電話もしてるしな」

とリンクが続いた。

「へ…、へえぇ」と、さも意外そうな声を出したシュウ。「親父がねえ。何かちょっと……」

「どうした、見直したかお父上様を」

「想像すると気持ち悪――」

ゴスッ！！

とリュウは拳でシュウの言葉を遮り、ギルド裏にある試験会場の扉を開けた。

シュウがリュウ、リンクに続いて中に入ってみると、数人のハンターが昇格試験の最中だった。

その実力の様子からすると、三流から二流への昇格試験といったところ。

「終わるまで待つか」

リュウが言うと、リンクが同意した。

（あれ、何でわざわざ待つんだ？）

と一瞬考えたシュウだったが、すぐに分かった。

（ああ、そうか…。オレ、超一流ハンター昇格試験受けるんだもんな）

超一流ハンター昇格試験ともなれば、会場全体を使うほど派手な戦闘が行われる。

周りにいる者に、いつ魔法の流れ弾を食らわせてしまうか分からない。

「緊張してるか？　シュウ？」

リンクがそう聞きながらシュウの顔を覗き込んだ。

「え？　いや、何ていうか、その……」

シュウはちらりとリュウを見た。

（今日親父が見に来るとは思わなかったんだよな…。どうしたんだよ、仕事はっ……！）

シュウから少し離れたところ。

壁に背を預け、腕組みして立っているリュウ。

ついさっきまでは普通に喋っていたのに、今はもう口を開く気配がない。

リュウの黒々とした鋭い視線に捕らえられ、シュウはリュウから目を逸らした。

（な…、なんだろ。何を思ってるんだろ、親父。おっかなくて緊張するじゃねーかオイっ…！）

リュウとシュウの顔を交互に見て、リンクが苦笑した。

リュウに耳打ちする。

「プレッシャーかけんなや、リュウ。シュウめっさ緊張してしまってんで」

「……ふん」

とリュウがシュウから目を逸らす。

重苦しい沈黙が３０分。

昇格試験を終了したハンターたちが出て行き、会場の中にはシュウとリュウ、リンクが残った。

「ほな、始めよか」と言って、リンクが剣を構える。「シュウ、緊張せんでええから」

「う、うん」

と頷くものの、緊張でがちがちになっているシュウの身体。

（い…痛いぜ親父っ……）

シュウの身体に突き刺さるリュウの視線。

リュウが溜め息を吐いた。

「何がちがちになってんだ、シュウ。小心者だな」

「だっ…だって――」

「大丈夫だ、おまえなら」

「えっ…？」

シュウはリュウの顔を見た。

そこには真剣な顔がある。

「大丈夫だ、シュウ。おまえは絶対に受かる」

「親父…」

と呟いたシュウ。

身体から緊張が取れていった。

「…よっしゃあっ！　リンクさんっ、お願いしますっ！！」と剣を構え、元気良くリンクに飛び掛るシュウ。「うおおぉぉおぉりゃあああぁぁぁぁぁ――」

「だって」とリュウが続けた。「落ちたらカレン没収だし」

「――！？」

リンクと刃を交え、目を見開いてリュウを見つめたシュウ。
会場中にその声が響き渡る。

「おっ…、落ちれねえええええええええええええええええっ！！」

シュウは死に物狂いで剣を振り回した。

一方、その頃。
シュウ宅の三つ子の部屋。

「あーあ、ミヅキくん帰っちゃってつまんないなぁ」

と、レナ。
ベッドの上をごろんごろんと数回転がったあと、ぴたりと止まってマナを見た。

「ところでマナ、今度は何の薬作ってんの？」

薬の調合中のマナ。
冬休みの宿題中だったユナも注目すると、口を開いた。

「兄ちゃんが心配で…」

「心配って」と、ユナとレナが声をそろえる。「超一流ハンター昇

格試験に受かるか？」

マナが首を横に振って言う。

「それは受かるよ、兄ちゃん…。あたしが心配してるのは…」

「うん？」

「カレンちゃんの家に挨拶に行ったとき、ちゃんと出来るかってこと…」

「ああー」

と声をあげたユナとレナ。

マナに同意する。

「兄ちゃんって、いざっていうときに噛むしね。ちゃんと挨拶できなさそう」

「やっぱり彼女のご家族からは好かれないとね…」

マナがそう言いながら、小瓶を2つ用意した。

1つにはほんのりオレンジ色の薬を、もう1つにはほんのり黄色の薬を注ぐ。

小瓶の蓋を閉め、その上から仕上げの魔法をかけたら、

「これで兄ちゃんは安心してカレンちゃん宅へレッツゴオォォォ…」

第９３話　超一流ハンター昇格試験（後書き）

本日０時２３分ごろメールくださった読者様へ。
メールボックスをご確認ください♪

第９４話　試験の結果

葉月ギルドの裏にある、ハンター昇格試験のための会場の中。

「ぐっ…！」

リンクの剣先が、シュウの鼻の先すれすれにあった。

勝負あり。

シュウの超一流ハンター昇格試験終了。

床に尻を着き、肩で呼吸しているシュウ。

剣は後方に弾き飛ばされていた。

（親父と並ぶとリンクさんて弱く見えるけど、やっぱつえーやっ…！　超一流ハンター歴長いだけあるぜっ……！）

リンクが剣を腰に収めると、黙って試験の様子を見ていたリュウが口を開いた。

「まだまだだな、シュウ。リンクごときにこの程度とはよ」

そう言って溜め息を吐いたリュウ。

（――オレ、試験落ちたんだ）

シュウはそう思った。

リュウが仕事だからと、会場の出入り口へと向かっていく。

その大きな背を見つめられずに、シュウはがっくりと肩を落として立ち上がった。

（親父の期待に背いちまったんだ、オレ…。――っていうか）

シュウ、顔面蒼白。

「カっ、カレン没収っ！？」

「へ？」

とぱちぱちと瞬きをしたリンク。

そのあと笑った。

「何言ってんねん、シュウ。おまえ合格やで」

「――へっ！？」シュウの声が裏返った。「オっ、オレ落ちたんじゃ……！？」

「いや、合格やで。リュウはああいう男やから分かり辛いかもしれへんけど、おまえ超一流ハンターとしてやっていけるだけの力はあんで？」と、リンクがぽんとシュウの肩を叩く。「おめでとう、超一流ハンター・シュウ！」

「……」

実感の湧いていない頭の中、シュウは考える。

（今リンクさん、何ていった？　超一流ハンターしゅう？　あ、超一流ハンター集？　ちょっと売ってそうだな。でも違うか。んじゃ

あ、超一流ハンター州か？　って、ドコにあんだよ。聞いたことねーよ。じゃあ、なんだろ？　超一流ハンター臭か？　……何かクサっ！）

リンクが首をかしげる。

「どしたん？　シュウ。喜ばないん？　超一流ハンターになったんやで？　シュウ？」

「え？」

超一流ハンターになった？
超一流ハンターになった？
超一流ハンターになった？

と頭の中で何度も繰り返すシュウ。
じわじわと沸いてくる実感。

（そ、そ、そうかっ…！　リンクさんさっき、超一流ハンター・シュウって言ったのかっ……！）

超一流ハンターになった。
超一流ハンターになった。
超一流ハンターになった。

と、今度は疑問符を取って繰り返す。

（オレ、超一流ハンターになった！）

実感した途端、急激に込み上げて来た喜び。

シュウは舞い上がった。

「イヤッホオオォォオオオオオオオオオイっ！！」

ぴょーんと高く飛んだシュウを見ながら、リンクが微笑んでもう一度言う。

「おめでとう、超一流ハンター・シュウ！」

「ありがとうっ、リンクさんっ！　――って、あれぇ！？」

と声を裏返し、シュウは地に足をつけた。

「どしたん、シュウ」

「オレ、超一流ハンターになったのに親父が誉めてくれねえっ！」

「ああ」と、リンクが笑った。「リュウは心の中で誉めてんで、きっと」

「そ、そうかな」

「もちろんやで。『おまえ強くなったな』って、リュウは心の中で言ったに違いないで」

「そ、そか…。でも……」

その台詞、親父の口から聞きたかった。

とシュウは心の中で続けた。

そのあと首を横に振る。

（って、気にすんなオレ！　いつか絶対に言わせてみせるぜ！　そんなファザコン疑われること考えてねーで、今はー……）

携帯電話を取り出し、電話を掛けるシュウ。

（ハニーに報告をっ！）

ハイテンションのあまり、相手の声を待たずに喋りだす。

「もっしもしー？　オレオレ！　オレだけど！」

「詐欺かしら」

「なーにボケてんだよ、カーレン！」

「あの――」

「オレ受かったよ、試験！　超一流ハンターになったんだぜ、超一流ハンターにっ！　もう嬉しくってさーオレ！　うちの屋敷に戻ってきたらご褒美よろしくなっ♪」

「ええと――」

「え？　褒美は何がよろしいのかしらって？　そのデリシャスな身体で頼むぜベイベっ…！」

「わたくし――」

「オレまじフィーバァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

「カレンの母ですが」

「ああそう、お母さんでしたか、お母さん！　いやいや娘さんと声そっくりですね～！　――ってえぇぇぇぇ！？」

シュウ、驚愕。

（カっ、カレンのお母さん！？）

後、茹ダコになりながら周章狼狽。

「オ、オオオオオオオ、オカーーーサン！？　オカーーーサンでしたかあああああああっ！！　も、ももももも申し訳ございましぇん（やべ、噛んだっ）！！　も、ももも申し訳ごじゃいません（また噛んだっ）！！　も、申す訳ございません（何を！？）！！　オ、オオオ、オレっ、超一流ハンター・シュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！！」

電話の向こう、カレンの母がおかしそうに笑った。

そのあと、カレンそっくりなその声で言う。

「今、カレンに代わりますわね」

「はっ、はいぃ……！」

数秒して、聞こえてきたカレンの声。

「ちょっとシュウ？　あなたお母さまに何を言ったのよ…」

と、カレンが苦笑しているのが分かった。

カレンの声の後ろのほうで、くすくすと笑っている声が聞こえてくる。

「ご、ごめん…、すーげー恥ずかしいこと言っちゃったよオレっ…！」

「そ、そのようですわね…」

「きっ、嫌われたオレェェェ！？」

「そんな感じではないから大丈夫よ」

「お、おう、そうかっ…、良かったっ…！」

「それで」とカレンの声が明るくなった。「超一流ハンターになれたのですわよねっ？」

「おうっ！」とカレンに続いて明るくなるシュウの声。「オレ、超一流ハンターになったぜ！」

「おめでとう、シュウ！　嬉しいのですわ！」

「おう、サンキュ！　そ、それでその…」咳払いをして小声になるシュウ。「ご、ご褒美にデリシャスなハニーを期待してるぜっ…！」

「……。もしかしてそれをさっきお母さまに言ったのかしら」

「……。ご、ごめん…」

「……」電話の向こう、カレンが赤面する。「…ま…まったくもうっ…！　あたくしの声も分からなかったのっ？」

「だ、だって似ててっ…！　ご、ごめんっ…！　あっ、それでさ」

「ええ？」

「3日後にオレ高級手土産を持ってスーツで迎えに行くから、オトーサンオカーサンそしてオジーサマによろしく言っておいてくれよっ！」

「はいはい、分かってるのですわ」と、カレンが小さく溜め息を吐いた。「今度は恥ずかしいこと言わないでちょうだいよ？」

「おうっ、任せてくれ！」

と言って、シュウは電話を切った。

その頃のシュウ宅のリビングでは。

リュウやサラ、レオンは仕事へ向かったが、正月ということで宴会が行われていた。

キラとミラ、リン・ラン、ユナ・マナ・レナ、ジュリ。

ミーナとリーナに、グレル。

さっき昼食を食べたというのに食っちゃ飲みしている。
リン・ランがビール片手に、そわそわとした様子で声をそろえる。
「兄上の試験、そろそろ終わったはずなのだっ…！」
「うむ、そうだな」
とキラが同意して頷いたとき。
リュウから電話が掛かってきた。
「もしもし、リュウか」
「おうよ、キラ」
リュウからの電話と聞き、一同が寄って集ってキラの携帯電話に耳を近づけた。
リュウが続ける。
「やったぜ、あいつ。やった」
落ち着いているものの、喜びが溢れているリュウの声。
キラが微笑む。
「そうか…、やったかシュウは。超一流ハンターになったか」
「ああ。シュウは超一流ハンターだ」
とのリュウの声を確認したあと、電話中のキラを除く一同が小躍

りし始めた。

キラは続ける。

「おまえの夢に一歩近づいたな、リュウ」

「ああ…、近づいた」

「良かったな」

「ああ…。おい、俺の可愛い黒猫」

「何だ」

「そう思うなら今夜はゾクゾクするよーなイイ声出せよ」

「いっ、意味わか――」

「ああ、今夜の俺は激しいぜ……！」

「いっ、いつも激しいではないかあああああ――」

ブツッ

と切れた電話。

「あっ…！　ま、まったく私の主はっ…！」

キラは苦笑すると、携帯電話をガラステーブルの上に置いた。

ミラがキラの顔を覗き込む。

「ねえ、ママ？　お兄ちゃんが超一流ハンターになって、パパ喜んでたっ？」

「喜びすぎて母上は今夜寝かせてもらえぬぞ」

「あぁんもうっ！　ママってば羨ましい～っ！」

「よおーしっ！」と立ち上がったリン・ラン。「兄上の超一流ハンター昇格を祝して、宴会盛り上がって行こうなのだ！　カンパーイっ！！」

「カンパーイっ！！」

と盛り上がる一同。

その中からマナが抜け出した。

ちらりとユナとレナと目を合わせてから、自分の部屋へと向かっていく。

ユナとレナも顔を見合わせたあと、マナを追っていった。

3匹が自分たちの部屋に入ると、ユナが口を切った。

「やったね、兄ちゃん！」

レナが続く。

「うん、やったね、兄ちゃん！」

「とりあえずおめでとう、兄ちゃん…」

と言いながら、マナは先ほど作り終えた薬が入った小瓶を手に持った。

ほんのりオレンジ色の液体と、ほんのり黄色の液体。

「次はカレンちゃんのご家族の前で恥をかかないように頑張ってもらわないと…」

ユナとレナが声をそろえて訊く。

「ソレ、どういう薬なの？」

「それを教えようと思って…。まずこっちが…」と、ほんのりオレンジ色の液体の入った小瓶を開けるマナ。「兄ちゃんに飲ませる方…A液…。指出して…」

ユナとレナが言われた通り指を出すと、マナがそこにそのA液を一滴垂らした。

ユナとレナがそれをぺろりと舐める。

「うえ、苦っ！」

「それでこっちが…」と、ほんのり黄色の液体の入った小瓶を開けるマナ。「B液…。兄ちゃん意外の誰かに飲んでもらう…」

マナはそのB液を自分の指に一滴垂らすと、ユナとレナに続いてぺろりと舐めた。

「うえ…」

「こんなの飲めないよ、マナ」

「大丈夫、他の飲み物に混ぜるから…」

「ああ、なるほど」

「効果が表れるまで約15分…」

ということで、15分待っている間に自分の好きなことをする三つ子。

15分後。

マナがユナとレナを見た。

「それじゃあ、いくよ…」

と、マナ。

それから2秒置いたあとのこと。

「それじゃあ、いくよ…」とユナとレナの口からマナと同じ台詞が出た。「あれっ!?　口が勝手にっ…!?」

「このように…」

「このように…」

と、再びマナと同じ台詞を吐いてしまうユナとレナ。

「A液を飲んだ者は…」
「A液を飲んだ者は…」
「B液を飲んだ者と…」
「B液を飲んだ者と…」
「同じことを言ってしまーう…」
「同じことを言ってしまーう…」
「名づけて…」
「名づけて…」

と、一滴しか飲まなかったが故に、ここで薬の効果が切れた。

「うーん…。『鸚鵡返しの薬』かな…」
「おおーっ」

と声をあげたユナとレナ。
ユナ、レナの順に言う。

「なーるほど！　A液を兄ちゃんに飲ませて、B液を…うーん…レオ兄に飲ませるのがいいかな？　そうすれば兄ちゃん噛むこともパニックになることもなく、ちゃーんとカレンちゃんのご家族にご挨拶できるよね！」

「A液はハーフ用だよね。B液は？」

「一応ハーフにもモンスターにも人間にも効くように作ってみたけど…」と、コメカミの辺りをぽりぽりと掻くマナ。「そういうのは初めてだから、ちゃんと作れたのか分かんない…」

「とりあえずさっきの実験でハーフに効いたことはたしかだよね」

と、ユナ。

レナが同意する。

「うん、ハーフには効くね。ってか、大丈夫じゃないの？　人間にもモンスターにも効くよ。だってほら、マナ初詣でじーちゃんにお願いしたし。成功だよ、きっと♪」

「そうだね…」

と、頷いたマナ。

そう思うことにした。

「ところで」とレナが続ける。「これ飲んだところで、カレンちゃんの家の中の様子とか見えなきゃ困るよね。カレンちゃんのご家族と会話しようにも…ねえ……」

「大丈夫、超小型無線カメラをコッソリ兄ちゃんのスーツに仕掛けておくから…」

「おお、なるほど」

「兄ちゃん…」と、窓の外に顔を向けるマナ。「超一流ハンターに

昇格おめでとう…」

それから、

「カレンちゃんのご家族からも合格もらえるよう、頑張って…」

シュウがカレンの実家へと向かうのは、3日後だ。

第９４話　試験の結果（後書き）

ハッピーバレンタイ～～～～ン♪
皆さま頑張ってください！

明日は安くなったチョコ買ってウマーーー。

第９５話　彼女の家族に挨拶を…　～前編～

超一流ハンター昇格試験を受けてから3日。
無事に超一流ハンターとなることが出来たシュウに、次に待っているのは…。

「ス、ススス、スーツ良し、て、てて、手土産良し、か、かかか、顔良し――」

「どこが？」と突っ込んだ三つ子。「兄ちゃん、顔すっごく変」

３０分後、カレンを迎えに行くシュウ。
よってシュウは初めてカレンの家族に会うが故に、挨拶をしてくることに。

超一流ハンター昇格試験に続いて、カレンの家族からも合格をもらいたいものである。

「ひ、ひどいなおまえらっ…」

「緊張しすぎ」

「そ、そそそ、そんなことねえよ…！？」と、自分の部屋の洗面所で、もう一度自分の顔を確認するシュウ。「ほ、ほほほ、ほら、いつも通り穏やかな顔つきの兄ちゃんがいるぞっ……！」

洗面所の入り口から覗いている三つ子が、そろって溜め息を吐いた。

（薬作って正解だった…）

としみじみ思う。

マナが訊く。

「兄ちゃん、あたしが作った薬飲んでいく…？」

「く、薬って？」

「上手く喋れる薬…。兄ちゃん、いざっていうとき噛むでしょ…」

「な、ななな、何言ってんだっ…！　に、ににに、兄ちゃんはそんな薬なくたって大丈夫だぜっ…！」

「そう、分かった…」

でも飲ませるけどね…。

とマナは心の中で続けた。

今からこんな状態なのに、上手く喋れるわけがないと思う。

マナがシュウのために作った薬は、『鸚鵡返しの薬』。

A液とB液があり、A液を飲んだ者はB液を飲んだ者が発した言葉を鸚鵡返しに言ってしまうというもの。

A液をシュウに飲ませ、B液をレオンに飲んでもらうことに。

そのためレオンは本日仕事へ行くわけにもいかず、本日の分の仕事を昨日までに終わらせてくれた。

現在1階のリビングで、仕事に行っているリュウを除く皆と一緒に正月の宴会を楽しんでいる。

（レオ兄ならちゃんとご挨拶できるし、これで兄ちゃんはカレンちゃんのご家族から合格を…）

マナは自分の服のポケットを上から触った。

（良し…。ちゃんとA液とB液がある…）

それからシュウのスーツの胸ポケットを見て、

（超小型無線カメラも良し…）

と、確認。

マナはシュウの部屋の戸口へと歩いて行きながら言った。

「兄ちゃん、リビングでみんなと一緒に楽しもうよ…。まだ出かけるまで30分もあるんだから…」

「そうだよ、兄ちゃん！　みんなと騒げば緊張ほぐれるかもだし、リビングに行こう！」

と、ユナとレナ。

シュウの手を引っ張ってリビングへと向かう。

リビングのドアの前。

シュウは苦笑した。

（うーるせー…。こりゃ今年も皆そろって酔っ払ってんな。オレが

これから3日前の試験より、ある意味すーげー緊張するところに行くっていうのによ。気楽だな、オイ…）

マナ、ユナ、レナ、そしてシュウの順にリビングへと入る。
シュウの視界に入ったのは、レオンとリーナ、ジュリを除く見事な酔っ払い集団。

そろって頬を赤く染めている。
アルコール分解能力の高いモンスターも、バケモノのグレルも。

（なんっじゃこりゃ…。こりゃ昨日から飲みっぱなしだな…）

毎年のことではあるが、シュウは顔を引きつらせずにはいられない。
今年は全くの素面のせいもあって、いつも以上に顔が引きつってしまう。

猫モンスターやそのハーフが大好きなビールの空き缶は、ソファーの脇にざっと６００本。
その傍らには、ウィスキーやワイン、ウォッカ、焼酎などの空き瓶がざっと４００本。

ソファーの上に寝転がり、トリップしているミラ。

「うふふ、やぁだパパってばぁぁんっ（ハート）　もっとおぉぉぉおおっ…♪」

床の上、レオンを押し倒して跨っているサラ。

「ヘイヘイ、そこのカッコイーお兄〜〜さんっ♪　アタシの部屋で

マッパでイイコトしなぁい？　今夜のゴム製じゃないゴムは特注したアルヨ。その厚さ驚愕の０．０１ミリネ！　今夜は楽しむ一体か～～～んっ☆」

そしてその傍らにはうるささの原因。

舞踏会で流れる曲の一種に合わせて踊り狂っている天然バカトップ５――上からキラ、グレル、ミーナ、リン・ラン。

ミュージック音量全開・高速自転しつつソファーの周りをぐるぐると回っている。

「良いか、グレル師匠にミーナ、リン・ラン！　何かの童話では木だか何だかの周りを駆け回ることによって猫科の動物がバターになっていたが……、加えて自転することによって早くバターになれるのだぞ！」

「おおーっ！　知らなかったぜ～っと！　オレはバターになるぜ～っと♪」

「わたしも美味～～～いバターになるのだあああああ！」

「わたしたちはマーガリンが良いぞー、母上」

「そうか、リン・ラン！　マーガリンは曲ーがりながら回れば良いのだぞ♪」

その会話。

もはや意味不明、理解不能。

おまけにその傍らには、今にも酔いつぶれそうなリンク。

「あぁぁぁぁああ、目ぇぇぇが回るっちゅーねえぇぇぇぇぇぇぇん。リュウたぁぁぁすけてえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ」

と助けを求めたところで、仕事中のリュウの姿はない。

（ほんっと気楽だな、まったく…）

と、シュウはガラステーブルの前に正座した。

「兄ちゃんビール飲む？」

とマナに勧められたが、シュウは断る。

「愛するカレンのご家族にお会いするのに、酒臭くなるわけにゃいかねーよ」

「じゃあ、何飲む…？」

「いらね」

それでは困るのである。

シュウの飲み物の中に、『鸚鵡返しの薬・A液』を入れなければならないのだから。

（困ったな…。仕方ないから兄ちゃんは後回しにして、レオ兄のグラスにB液を…）

B液を持った手を伸ばしたマナ。

レオンの席だろう近くにいたレナに、B液をこっそりと手渡す。

（分かった、B液（これ）をレオ兄のグラスの中に入れればいいんだね、マナ！）

と、承諾したレナ。

シュウや酔っ払い集団に気付かれずに、レオンのビールの入ったグラスの中に『鸚鵡返しの薬・B液』を混入成功。

それを確認したレオン。

うん、と頷きB液入りビールを飲もうとしたのだが。

そのとき、

「あっ…」

と声をあげたマナの方を見た。

いつも無表情で感情が読みにくいマナであるが、焦っていることは分かった。

マナがA液をユナにこっそりと手渡し、リビングから出ていく。

（マナ、どうしたんだろうっ…？）

B液入りビールに伸ばしかけた手を引っ込め、マナを追うレオン。

マナは自分の部屋へと向かって行った。

レオンが部屋に入ってくるなり、マナがノートパソコンを立ち上げながら言う。

「兄ちゃんのスーツの胸ポケットには超小型無線カメラ仕掛けたけ

ど…」

「うん？」

「受信機をパソコンにセットするの忘れてた…」

それではシュウがカレン宅を訪ねた際、中の様子を見ることが出来ない＝レオンは何を喋ればよいのか分からない。

「僕も手伝うよ…」

レオンは苦笑しながら、急いでマナのノートパソコンに超小型無線カメラの受信機をセットし始めた。

一方、リビングの中。

シュウが立ち上がる。

「オ、オオオ、オレ、そろそろ行くわっ…！　何事も２５分前行動だぜっ…！」

「えっ、いくら何でもまだ早いんじゃないっ？」

とのユナ・レナの声が聞こえているのか聞こえていないのか。

シュウが右手と右足、左手と左足を同時に動かしながら玄関へと向かっていく。

ユナは慌ててジュリとリーナ用に用意されていたオレンジジュースをグラスに注ぐと、その中に『鸚鵡返しの薬・Ａ液』を混入した。

それを持って、レナと共にシュウを追って玄関へと駈けて行く。

「にっ、兄ちゃんっ！」

と、玄関のところでユナとレナがシュウを呼び止めると、緊張でかちんこちんになっているシュウが振り返った。

「な、ななな、何だユナ、レナっ？」

「お、落ち着いて兄ちゃんっ！」

と、ユナとレナ。

ユナがＡ液入りオレンジジュースをシュウに差し出しながら続ける。

「ほら、これを飲んで兄ちゃん！　葉月島産天然オレンジ１００％ジュース！」

レナが続く。

「これを飲めば落ち着くよ兄ちゃんっ！」

「お、お、おう、そうかっ…！　サンキュっ…！」

と、一気にＡ液入りオレンジジュースを飲み干したシュウ。

冷静な状態で飲んだなら味に異変を感じただろうが、緊張のあまりそれに気付かない。

それどころか、何を飲んだのかさえ分からない。

（よし、兄ちゃんはＡ液を飲んだ！　これでレオ兄がリビングに戻

ってきてB液入りのビールを飲めば、もう完璧だよね！）

心の中、安堵したユナとレナ。

足の速くなる魔法を掛け、相変わらず右手と右足、左手と左足を揃えながら出て行ったシュウを笑顔で見送る。

一方、その頃のリビングでは。

「あれぇ？　アタシのビールないや…」と、空になった自分のグラスを見ながらサラ。「レオ兄のもーらいっ」

と、レオンのグラスに入ったB液入りビールを1口飲んだ。

そして顔をしかめる。

「あれ？　なんか変な味…？」

「え？　変な味？」と、トリップを中断してサラに手を伸ばし、グラスを受け取って1口飲んだミラ。「あら…、変な味ね」

「変な味？」と、それまでしていた自転を止めて振り返ったリン・ランも、1口ずつ飲む。「む？　変な味だぞー」

「変な味ぃ？　どれ、貸してみぃや」と、今度はリンクがリン・ランからグラスを受け取り、1口飲んだ。「…うわ、たしかに変やな」

「んー？　どうしたおまえたち？　ビールが変な味するって？」

と、グレルも自転を中断し。

リンクの手からグラスをぶん取り、残りの1口をごくりと飲んだ。

「ん？　美味いぞ？」

とのグレルの言葉を聞いて、Ｂ液入りビールを飲んだ酔っ払い集団が笑う。

「なーんだ、おいしいの間違いだったか！」

と、サラ。

それに同意する酔っ払い集団。

酔っ払った頭ではそういうことにされた。

「おっと、レオ兄のグラスにビール注いでおかないとね」

サラがリビングをきょろきょろと見回し、空いていないビールの缶を探して手に取った。

レオンのグラスにビールを注ぎなおし、ついでに皆のグラスにもビールを注ぐ。

そして何事もなかったかのように、酔っ払い集団はまた騒ぎ始めるのだった。

そこへ駆けながら戻ってきたユナとレナ。

レオンのグラスを手に持ち、自分たちの部屋へと向かう。

そして中に入るなり、レオンにグラスを差し出した。

「レオ兄、レオ兄！　早く飲んで！　Ｂ液入りビール！　兄ちゃんもうＡ液飲んで行っちゃったよ！」

「ん、分かった」

と落ち着いた様子のレオン。

ちょうどマナのノートパソコンに超小型無線カメラの受信機をセットし終え、そのモニターにシュウのスーツに仕掛けた超小型無線カメラの映像が映し出される。

「シュウ、まだそんなに遠くまで行ってないね」

と言いながら、レオンがユナとレナからグラスを受け取る。

そしてもうB液が入っていないとは知らず、グラスに入ったその単なるビールを飲み干した。

「あれ、普通の味だね」

「あれ、そうだった？」と首をかしげるユナとレナ。「あ、ビールの苦味で薬の苦味が消えたのかも」

「あっ…」

と、ノートパソコンのモニターを見ていたマナが短く声をあげた。

ユナとレナ、レオンもモニターに目を向けると、

「あっ」

と声をあげた。

映像が途切れてしまっている。

マナがノートパソコンを持って立ち上がる。

「受信できる距離は５００ｍまでだから…」

「じゃあ映像届くところまで行かないとね」

と、レオン。

携帯電話で現在の時刻を確認した。

「薬が効くのは飲んでから約１５分後だよね」

マナが頷き、急いだ様子で部屋から出て行く。

レオンもそれに続き、ユナとレナも続く。

そして４匹で屋敷を後にした。

屋敷を出てから１２分。

カレン宅の前へとやってきたシュウ。

ここに来るまで、その右手と右足、左手と左足がばらけて歩くことはなかった。

（ス、ススス、スーツ良しっ…！　て、てて、手土産良しっ…！　か、かかか、顔良しっ…！　た、たぶんっ……）

カレン宅の玄関前、咳払いをしたシュウ。

小刻みに震える人差し指で、インターフォンを押した。

ピ、ピピピピピピピピピンポーーーン…

（ふ、震えすぎだろオレっ…！）

そしてインターフォンから聞こえてくる声。

「普通に押してちょうだい…」

「オ、オオオ、オカーーーサンですかあぁ！？」

「カレンよ」

「お、おう、そうかっ…！　カ、カレンか、カレンっ…！」

「ちょっと大丈夫なの、シュウ？」

「だ、だだだ、大丈夫だぜオレはっ？　ハ、ハハハ、ハニーのご家族に、ちゃ、ちゃちゃちゃんと、ご、ごごごご挨拶できちゃうんだぜっ？」

「……。今開けるわね」

「ど、どどど、どんと来いっ！」

カレン宅のドアの向こうから、パタパタとスリッパで駆けてくる音がする。

1人じゃない。

2人分のスリッパの音だ。

どっくんどっくんと波打つシュウの心臓。

（カ、カレンと誰だ…！？　オ、オオオ、オカーサンか！？）

カチャっ…

とカギを外す音に、シュウの心臓は爆発寸前。

（く、くくく、来るっ…！　か、かかか、覚悟はいいかオレっ…！）

そして開く玄関のドア。

（キ、キキキ、キタァァァァァァァっ！！）

がばっと頭を下げたシュウ。

手土産を差し出しながら、近所迷惑なほど大きな声をあげた。

「はっ、ははは っ、初めましてオカーーーサンっ！！　オっ、オオオ、オレ、超一流ハンター・シュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥでっすっ！！！」

「ちょ、シュウ……」

と赤面しながら手土産を取るカレンの傍ら。

「面白いのね、シュウくん」

と、カレンとそっくりな声が聞こえた。

くすくすと笑われ、シュウは赤面しながら顔をあげる。

「も、申す訳ごじゃいましぇんっ」

と思いっきり噛んだシュウ。
カレンの傍らにいる女性――カレンの母を見て目を丸くする。
「――うっわ、可愛い…」
なんて思わず出てしまった。
カレンの母は、カレンと声もそっくりならば顔もそっくりだったから。
「あっ、すみませんっ…！　つい本音がっ…！」
「あら、ありがとう。お上手ね」
そう言ってにっこりと笑ったカレンの母を見て、シュウはほっと安堵した。
（よ、よし、とりあえずオカーサンからの好感度は取れたかなオレっ…！）
カレンが言う。
「あがって、シュウ。今あたくしとお母さまでご飯を作っていたのよ。おせち料理はもうたくさん食べたでしょうから、別のものを作っていたのだけれど…。よかったかしら？」
「う、うんっ…、ありがとカレン」
とシュウは靴を脱ぎながら、カレンに笑顔を向けて言ったあと。
顔をキリッと引き締め、カレンの母を見た。

「ありがとうございます、オカーサン」

「うふふ、カレンの彼氏が来るっていうから、張り切っちゃったのよ。お口に合うとよろしいのだけれど」

と、キッチンの方へと向かっていくカレンの母。

カレンと一緒に、シュウがそのあとを着いて行ったときのこと。

「ねえママ、ビール持ってきて～。はーやくー」

と、シュウの口から漏れた台詞。

「――えっ…！？」

シュウは手で口をふさいだ。

（何だ、今の…！？　口が勝手にサラを思わせる台詞を…！？）

カレンの母が驚いたように振り返る。

「えっ…？　マ、ママって、わたくしのことかしら？」

慌てて首を横に振るシュウ。

「いえっ、あの――あぁん、パパどこぉ～っ？　――って……！？」

シュウはもう一度口を手でふさいだ。

（な、な、何だオイ！？　今度はミラを思わせる台詞をオレの口が

勝手に……！！）

パニック寸前のシュウ。

シュウが『鸚鵡返しの薬・Ａ液』を、ミラとサラ、リン・ラン、リンク、グレルが『鸚鵡返しの薬・Ｂ液』を飲んでから約１５分が経過していた。

第９６話　彼女の家族に挨拶を…　～中編～

「シュウ、足の速くなる魔法かけてるから歩くの早いね」

と、マナのノートパソコンのモニターを見ながらレオンが言った。

レオンと共に歩いているユナ・マナ・レナが同意して頷く。

シュウの着ていったスーツの胸ポケットに超小型無線カメラを仕掛けておいたのだが、受信機をセットしたパソコンのモニターに映像が映し出されない。

マナが言う。

「あたしたちより５００m以上先にいるってことだね、兄ちゃん…」

正月ということで、実家に3日ほど帰ったカレンを迎えに行く際に、カレンの家族に会うことになったシュウ。

カレンの家族と上手く話せるか心配した三つ子が、シュウに『鸚鵡返しの薬』を飲ませた。

その薬にはA液とB液があり、A液を飲んだ者は、B液を飲んだ者が発した言葉を鸚鵡返しに言ってしまうというもの。

A液を知らずに飲まされ、カレン宅へと向かっているシュウ。

そして三つ子に協力してB液を飲んだと思っているレオン。

それから、レオンがB液を飲んだものだと思っている三つ子。

実際にB液を飲んだのは、シュウ宅リビングで酔っ払っているミ

ラとサラ、リン・ラン、リンク、グレル。
そのことに三つ子とレオンはまるで気付いていなかった。

「あ、僕そろそろ口を閉ざすね」

と、レオンが携帯電話で時刻を確認しながら言った。

薬は飲んでから約１５分後に効果が出る。
レオンがＢ液を飲んだと思ってから、そろそろ１５分が経とうとしていた。

結局、足の速くなる魔法を掛けたシュウの足には追いつけず。
モニターに映像が映し出されたときは、もうシュウはカレン宅の中にいるようだった。

「わわっ、大変！」と、ユナとレナ。「兄ちゃん上手く喋れてないんじゃ…！？」

「静かに…」とマナが人差し指を口に当てた。「会話が聞こえない…」

ユナとレナが慌てて口を閉ざす。

パソコンに耳を傾け、シュウとカレンの家族の会話を聞き取る三つ子とレオン。

（え…？）

そろって眉を寄せた。

そして会話を聞きつづけているうちに驚愕した。

「――!?」

カレン宅へとやってきたシュウは、己の口を手でふさいでいた。

（ま、待て…！　何で口が勝手に動くんだ……!?）

頭が混乱する。

カレン宅に上がって早々、カレンとその母の前でおかしな台詞を己の口が勝手に吐いた。

一言目はサラを思わせる台詞。

二言目はミラを思わせる台詞。

カレンとその母が目を丸くしてシュウの顔を見ている。

カレンが言う。

「も…、もっと普通にしていいのよ？　シュウ…」

「お、おうっ…」

「リビングにおじいさまとお父さまがいるわ。こっちよ」

と、カレンに連れられながら、シュウはカレン宅のリビングへと向かう。

（何かおかしい。何かおかしいぞ、オイ。何で口が勝手に動いて喋るんだ…！？　そんなおかしなことなんて、マナの薬でも飲まない限り――って…！？）

シュウははっとした。

自宅から出る際、ユナとレナからオレンジジュースを飲まされたことを思い出す。

（あ・の・と・き・かあああああ！！）

シュウ、カレンの後ろを着いて行きながら狼狽。

（ま、待て、どんな薬だ！？　どんな薬を飲まされたんだオレ！？　さっき吐いたミラとサラを思わせる台詞は、あいつらがごく自然に吐いたような台詞だったよな…！？　そう、今もやってるだろうオレん家のリビングでの宴会でっ！）

そして察する。

（そ、そうかっ！　オレ、あいつらが喋った台詞と同じこと言っちまうんだ…！　なんてことだ、オイ……！）

冷や汗を掻き始めるシュウ。

リビングの中に入ると、カレンが言った。

「あたくしとお母さま、お料理の続きしてくるわね。できたら持ってくるから待っててちょうだい」

「お、おうっ…！」

とシュウが承諾すると、カレンとその母がキッチンへと向かって行った。

（サラとミラの他に誰と同じ台詞を吐いちまうんだ、オレ……！？）

嫌な動悸を感じながら、シュウはリビングの中にあるソファーに顔を向けた。

そこにはカレンの父だろう人と、カレンの祖父だろう人が微笑んで立っていた。

「はっ、ははは、初めましてっ！」

と、慌てて頭を下げるシュウ。

カレンの祖父だろう人が、向かいのソファーを指して言う。

「初めまして、シュウくん。リュウさんやカレンから色々と話は聞いているよ。どうぞお掛けください」

「あっ、ありがとうございますオジーサマっ！」

と、シュウ。

頭を上げ、ここへやってきたときのように右手と右足、左手と左足をそろえてソファーのところへと歩いていく。

カレンの父だろう人が笑った。

「そんなに緊張しないで、シュウくん」

「はっ、はいぃ、オトーサンっ！」

声が裏返るシュウ。

（頼む、変なこと言わせないでくれよっ…！）

と、心の中で願ったのに。

ソファーに腰掛けた途端、

「――おっ？　尻破れたぞーっと」

シュウ、首まで赤面。

（グっ、グレルおじさんの台詞も吐いちまうのかよっ！！　最悪じゃねーかっ！！　しかも、なんちゅータイミングでなんちゅー台詞吐きやがるっ……！！）

さらにシュウは、

「――あっはっは～！　師匠何してんねん！」

リンクと同じ台詞も吐いてしまうことを知る。

そしてまたさらに、

「――見事にズボンもパンツも破れてるぞーっ。兄上のが破れたなら見惚れてたところだぞーっ」

リン・ランと同じ台詞も吐いてしまうことを知った。

カレンの父と祖父が目を丸くする。

「え、ええと…、代わりの衣類を貸そうかシュウくん」

「いっ、いえ、ズボン破れてませんからオトーサン！」

「はっはっは。面白いね、シュウくん」

「はっ、はいぃ、オジーサマっ！　オレお笑いでご飯食べることを夢見てたことありましてえぇっ！」

スーツの下、冷や汗をだらだらと掻くシュウ。

（ど、どうやらミラとサラ、リン・ラン、リンクさん、グレルおじさんと同じ台詞を吐いちまうようだなっ…！　そしてやっぱり、現在オレん家で行われている宴会での会話だぜっ……！）

そこへカレンの母がビールを注いだグラスと、ビール瓶を持ってきた。

ビール瓶はテーブルの脇に置き、カレンの母がカレンの父と祖父、そしてシュウにビールの入ったグラスを渡す。

「はい、シュウくん」

「あっ、あああっ、ありがとうございますオカーサンっ！」

と、グラスを受け取ったシュウ。

カレンの父、祖父とカチンとグラスを鳴らしたときのこと。

「――イッキ、イッキ♪」

と、口がそんな台詞を吐いた。
なんとなくグレルだと察する。
（グレル（オッサン）ふざけんなっ！！）
戸惑ったようにシュウを見るカレンの父と祖父。
「えっ…？　で、では……」
と、シュウの声に合わせてビールを一気飲み。
（も、申し訳ございません、オトーサン、オジーサマ！）
と思うのに、シュウの口は止まらない。
「――そ～れイッキ、イッキ、イッキ♪　イッキだぜ～～～っと♪
（や、やめろ、この天然バカグレル（オッサン）っ…！）」
「ぷはぁーっ」
「――ヒュ～～～っ！　カッコイイぜ～～～っと♪　そのカッコ良さ7丁目で1番♪（って、狭っ）」
「あ、ありがとう…」
「――しかも下から数えてだぞーっと♪（ビリじゃねーかっ！！）」
「は、ははは…」

と苦笑するカレンの父と祖父と同時に、顔が引きつるシュウ。

（かっ、勘弁してくれ、オイ…！）

只ならぬ冷や汗と動悸。

カレンの父と祖父のグラスにビールを注ぎながら泣きそうになる。

（なっ、何故せめてレオ兄の台詞を吐かせてくれないんだっ…！
レオ兄なら変なこと言わないのにっ…！　たっ、助けてくれレオ兄っ…！　オレ、カレンの家族に嫌われちゃうよっ……！！）

その頃の三つ子とレオン。

カレン宅から約５００m地点、シュウのスーツに仕掛けた超小型無線カメラの映像を見ながら狼狽していた。

「ちょ、僕の言った言葉、まるで鸚鵡返しにしないよ！」

と、レオン。

マナが頷いて続く。

「そうだね…。今の会話を聞いている限り、うちのリビングにいる酔っ払い集団がB液を飲んだみたい…」

「わあああああっ、大変だよおおおお！」と、ユナとレナが声をあげた。「これじゃあ兄ちゃん、カレンちゃんのご家族から嫌われちゃうよおおおおおおっ！！」

「どうやらB液の入ったビールを分けて飲んだみたいだから…」と、マナ。「その分持続時間は短くなるけど…。早く皆の口ふさがないと大変なことになるかも…」

「そ、そうだねっ…！」

と同意したレオン。
慌ててグレルに電話した。

RRRRR…
RRRRR……
RRRRR……

が、まるで出る気配なし。
キラにかけても、ミーナにかけても、リンクにかけても、サラにかけても、ミラにかけても、双子にかけても、ジュリにかけても、リーナにかけても、まるで出る気配なし。

あのひどくうるさいリビングの中では、当然といえば当然だった。

「ま、まずいな。このままじゃシュウがっ…！　ごめん、ユナ・マナ・レナ！　僕、先に帰ってるね！」

レオンは全速力でシュウ宅へと踵を返した。

レオンが必死にシュウ宅へと向かう一方。

カレン宅にいるシュウの前には、カレンとその母が作ったご馳走が並べられ始めていた。

（勘弁してくれ、もう勘弁してくれっ……！！）

勝手に喋ってしまう己の口を、いっそ針と頑丈な糸で縫ってしまいたいと思うシュウ。

あまりにもおかしいシュウの様子を見ながら、カレンは首をかしげた。

（ど、どうしたのかしら、シュウ…。すごい汗なのですわ。さっきも変なことを言っていたし…。どうもおかしいわね……）

シュウがカレンの顔を見る。

（たっ、助けてくれ、カレンっ…！　助けてくれぇっ……！）

カレンはますます困惑した。

シュウが助けを求めていることだけはよく分かる。

（どうしたのよ、シュウ…！？　どうしたの……！？）

一体何の助けを求めているのか。

カレンはシュウの必死な顔を見ながら、必死に考える。

（どうしたのかしらっ…、どうしたのかしらっ…！？　ねえっ、シュウっ……！？）

そのとき、シュウが言葉を発した。

「――あぁーあー、カレン早く戻ってこないかなあー」

「えっ？」

と声をそろえたカレンと、その父と母、祖父。

「――アタシ寂しいなー（ちょ、ちょっと待ってろサラ…）。ああ、もおおおおおっ（叫ぶなっ）！　カレンの膝枕が恋しいっ（ず、ずるいぞおまえ…）、カレンの手作りおやつが食べたいっ（オレもっ）、カレンと遊びたいっ！（おまえのせいでときどきオレは放置される…）　っていうか服のボタン取れたから縫ってよカレェェェェンっ！（自分で縫えっ、この甘ったれがっ）」

カレン、困惑。

（ど、どうしたのかしらシュウ？　今のはまるで、サラのようだったのですわっ…。…そ、そういえばさっき玄関の近くでもサラみたいな口調で…！　それからミラちゃんみたいな口調でも何か言っていましたわよね…！？　どういうことっ？　どういうことなのかしらっ……！？　――あっ、まさか！）

そして察した。

（シュウ、もしかしなくてもマナちゃんに変な薬飲まされたのですわね……！？）

第９７話　彼女の家族に挨拶を…　～後編～（前書き）

お食事中の方、ご…ご注意デス。

第97話　彼女の家族に挨拶を…　～後編～

カレンは自宅のリビングから出ると、慌ててマナに電話をかけた。

「もしもし、マナちゃん!?」

「カレンちゃん…」

「シュウにどんな薬を飲ませたの!?　あたくしの家でシュウが大変なことになっているのだけれどっ…!」

「『鸚鵡返しの薬』飲ませた…。兄ちゃんはレオ兄の言った通りに喋るはずだったんだけど…。兄ちゃんのスーツの胸ポケットに仕掛けたカメラの映像を見る限り、どうやらうちのリビングにいる酔っ払い集団の台詞を吐くことになっちゃったみたいだね…」

「お、鸚鵡返し…?　ど、どうしてシュウにそんなものを飲ませたのかしらっ?」

「あたし、兄ちゃんが心配で…。兄ちゃんいざっていうとき噛むから、カレンちゃんのご家族の前で上手く喋れないと思って…」と、マナの声に涙がまじった。「…どうしよう、兄ちゃんカレンちゃんのご家族から嫌われちゃうよ…」

「だ、大丈夫よマナちゃん!　あたくしが、おじいさまたちに事情を話すから。そうすれば嫌われたりなんかしないのですわっ!」

「うん…。ありがとう、カレンちゃん…。今レオ兄が全速力でうちまで走って皆の口ふさぎに行ったから、その間がんばって…」

カレンは承諾すると、電話を切った。
そしてリビングへと戻り、シュウがおかしな台詞を吐いてしまう理由を話す。

「ほお、そういうことだったのかね」

と、カレンの祖父。
カレンの父と母が笑う。

「道理で面白いことを言うと思ったわ」

「シュウくんの周りは楽しい方たちばかりだね」

「すっ、すみませんっ！　すみませんっ！」

と頭を下げるシュウ。

（と、とりあえずオレは助かったが…。もうこれ以上変なこと言わせないでくれよ、ミラ、サラ、リン・ラン、リンクさん、グレルおじさん…！？　よりによってオレの愛するハニーのご家族の前で、オレたちのとんでもネエェェェ醜態をさらさないでくれっ！！）

と願っても、シュウの口は黙ってはくれない。

「――うふふふふ♪　洗濯物畳まなくっちゃ♪（おいミラ、それだけのことなのに何故そんなに楽しそうなんだ…！？）」

そう、黙ってくれない。

「――洗濯物なんて後にして飲めばいいのに、お姉ちゃん。って、何その洗濯物……（ど、どうしたサラ！？）」

黙ってくれない。

「――何って、パパのパンティーよぉん♪（パっ、パンティー言うな気持ちわりぃっ！！）」

黙ってくれない。

「――ミラ姉上、どうしてパンツって言わないのだ？（そうだそうだ！　リン・ランの言う通りだ！）」

黙ってくれない。

「――あら、いいこと？　リン・ラン。パンツは穿くもの、パンティーは脱がすものだからよ♪（なんっじゃそりゃっ！）」

黙ってくれない。

「――おおーっ！　わ、わわわ、わたしたちも兄上の、パ、パパパ、パンティー畳むぞーっ！（こっ、こらリン・ラン！　ミラの真似すんなっ！！）」

黙ってくれない。

「――あ。オレちょっと脱糞してくるぞーっと♪（黙ってトイレ行けグレル（オッサン）！）　さっきズボンとパンツ破れたから、裂け目から脱糞できるぞーっと（パンツ下ろして普通にしろっ！！）」

黙ってくれないのだ。

「――何バカなこと言ってんねん、師匠（言ってやれリンクさんっ！）。パンツとズボンにウン〇つくで（お食事中の方すみませんっ！！）」

シュウだけではなく、カレンまで赤面してしまう。

カレンは咳払いをすると、手早く料理をテーブルの上に並べた。
シュウの隣に座って言う。

「さあ、お料理いただきましょ？」

承諾したシュウと、カレンの家族。
夕食を食べ始める。

「んっ？」と、笑顔になったシュウ。「おいしいです、オカーサン！」

「あらそう？　良かったわ。たくさん食べていってね、シュウくん？」

「はいっ、オカーサンっ！」

「ふふ」

と小さく笑い、カレンの母がカレンの耳に口を寄せた。

「彼、合格よ。可愛いじゃない？」

「そ…、そう、お母さまっ…。良かったのですわっ…！」と、カレンはシュウを見た。「シュウっ…！」

呼ばれてカレンの顔を見たシュウ。

カレンのウィンクで察した。

（お…おおおっ…！　オレ、オカーサンには認められたぜっ……！）

と、安堵した直後。

シュウの口が再び勝手に動く。

「――あ…、あかん。さっき師匠にウィスキー一気飲みさせられたせいやろかっ…。こ、込み上げて来たわっ……」

と、リンクだろう台詞。

（こっ…、込み上げて来たって…！？）

同時に嫌な予感を感じたシュウとカレン。

「――あっ…あかん…！　胃から込み上げてくるうぅぅ！」

嫌な予感的中。

動揺する。

（やばいっ…！）

と思う。

「――あかんっ…！　キタっ…キタキタキタっ…！（ちょっ、待っ、リンクさんっ…！）　――ん？　おい、リンクー。どーせならコメディにゲ○吐けよなっ♪（ハァ！？）　つまんない吐き方だったらもう一本ウィスキー一気飲みさせるぞーっと♪（いー加減にしろ、この天然バカじじぃっ！！）　――きゃあああっ！　まっ、待ってリンクさんカーペットの上は嫌よおおおおおっ！（つまり何だミラ！？　リンクさんリビングで吐く気か！？）　――ちょ、ちょっと待ってリンクさん！　リン・ラン、バケツか洗面器持ってきて！（ってことはマジでリビングなんだなサラ！？）　――はっ、はいなのだサラ姉上ええぇぇっ！！（急げリン・ラン！　リビングの白い高級カーペットの上は止めてくれリンクさあああああんっ）」

激しく狼狽するシュウとカレン、それからシュウ宅のリビングにいる一同。

（っていうか、リンクさんっ…！）

と、口の中の物をごくりと飲み込んだシュウ。

（たっ、頼むからなるべく声を発さずに、静かに吐いてくれよっ…！　コメディに吐かないでくれよ、コメディに…！　頼むからっ…！）

再び冷や汗を掻き始める。

「――おい、リンク。バケツきたぞーっと。コメディにだからな、コメディに♪（も、もうそれ以上言わないでくれえぇえええ！！）」

カレンが慌てたように言う。

「おっ、おじいさまお父さまお母さま、早く耳をふさ――」

「――コメディにぃ？」と遮られたカレンの声。「――コメディにゲ〇…、コメディにゲ〇…？（いーーーから静かに吐いてくれリンクさんっ！！）　え？　なんやリーナ？　某お笑い芸人風にゲ〇吐いたら、おとんのこと見直すて？（リっ…、リーナ何言ってんだおまえ…！？　そ、そんなこと言ったらリンクさん……！）　…うぷっ…、キ、キタ……！（やっ、やばい…！）　キタっ…、キタでっ…キタキタキタキタキタアァァァ！」

思わず止まってシュウに注目してしまうカレンの父と母、祖父。

「――うっ…お……！（頼むっ、静かに吐いてくれ静かにっ！）」

必死に願うシュウ。

が、

「――オっ…、オロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロっっっ！！」

ド派手に吐かれた。

（ぎっ…ぎゃあああああああああああああああああああっ！！）

シュウ、心の中で絶叫。

「――オロロロロロロロっ！！（やっ、やめてくれリンクさんっ！！）」

「…っ…」

「――オロロロロロロロっ！！（…あれっ！？　ど、どうしましたオトーサン！？）」

と、向かいに座っているカレンの父の顔を覗き込むシュウ。
カレンの父が俯き、必死に口を手で押さえている。

「――オロロロロロロロっ！！（プルプルしてますよオトーサン！？）」

「…っ…！」

「――オロロロロロロロっ！！（ご気分を悪くされてしまいましたかオトーサン！？）」

「…っ…！！」

「――オロロロロロロロっ！！（申し訳ございませんオトーサン！）」

「…っ…！！！」

「――オロロロロロロロっ！！（お許しくださいオトーサァァァァァァァン！）」

「ぶほっ！」

と堪え切れず、吹き出したカレンの父。
シュウに背を向け、ソファーの背もたれに突っ伏して大爆笑。

「あーーーっはっはっはっはっは！　やっ、やめてくれシュウくん

っ！　私の方を見てオロロロロ言わないでくれっ！」

「もっ、申し訳ございま――オロロロロロロロっ！！（ちょ、リンクさんっ……！）」

「はっ、腹の皮がよじれっ……！！」

「だっ、大丈夫っすかオト――オロロロロロロロっ！！（まだ出んのかよっ！）」

「しっ、死ぬっ……！！」

「いっ、生きてくだ――オロロロロロロロっ！！（どんだけ胃に入ってんだよ！？）」

「リュ、リュウさんから聞いている通りだねシュウくん！」

「えっ？　お、親父から何を――オロロロロロロロっ！！（リンクさん、あんたワザと！？）」

「はっ、話通り面白すぎるよ君っ！」

「い、いや、決してオレが面白いわけでは――オロロロロロロロっ！！（いい加減にしてくれっ！）」

「あーーっはっはっはっは！　もっ、もう駄目だ私はっ！　合格っ！　君、合格っ！　カレンのことよろしくねっ！」

「えっ！？　まじっす――オロロロロロロロっ！！（前言撤回！　リンクさんゲ〇ありがとおぉぉおおぉぉおおっ！）」

「カレンを嫁にもらってほしいくらいだよ、私は！」

「えぇっ！？　オトーサン、いいんで――オロロロロロロロっ！！（ウッソ！　よ、よよよ、嫁えぇぇぇぇぇ！？　ちょっ…！　リンクさん、オレ今あなたのことすげー愛してるっ！！）」

そして止まったらしいリンクの嘔吐。

「オトーサン、ありがとうございますっ！！　それからオカーサンもっ！！　オレ嬉しいっす！！」

と喜々として頭を下げるシュウ。

（オレ、オトーサンオカーサンに認められたっ…！　あとはっ……）

と、カレンの祖父を見る。

カレンが言っていた。

カレンの家族で厳しいのは父でも母でもなく、祖父なのだと。

カレンの父とは違って、笑う気配のないカレンの祖父。

「止まったかね、シュウくん」

「はっ、はいぃっ…！」

やばい。

と、シュウは思った。

（オジーサマの機嫌損ねちまった…！？）

シュウは再び頭を下げた。

「お…、お見苦しいところをお見せしてしまい、申し訳ございませんでした。オレの周りは正直、変なのばっかりでっ…！　でもオレ――あっ！　レオ兄～っ！　おっかえりー！」

レオンと聞いて、カレンは安堵した。

これでやっとシュウの口が止まる。

「――どこ行ってたの？　レオ兄？　…え？　何……？　え…えぇぇぇぇ！？　兄貴、アタシたちが喋ったこと、カレンの家で鸚鵡返しにしちゃってんの！？　――たっ、大変なのだあああああっ！　あっ、兄上、わたしたち兄上の、パパパ、パンティー畳んでなんかないですなのだあああああっ！　――リン・ラン、そうじゃないでしょう！？　カレンちゃんのご家族の皆さま、大変お見苦しいところをお見せしてしまって申し訳ございません！　――マジかいなっ…！　おれゲ〇吐きまくってたで…！　カレンちゃんのご家族の皆さま、ごめんなさいっ！　ごめんなさいごめんなさいっ！　――がっはっは！　リンクおまえ、シュウにひでーことさせたなあ。　――誰のせいやねん！　このバカ師匠っ！　あんたやって尻破ってたやろ！？　あああもうっ、シュウごめんなあああああああ！」

分かったなら早く黙ってくれ…。

シュウ、苦笑。

「――こんにちは、カレンのオトーサンオカーサン、オジーサン、

それからオニーサン……は、今日仕事だってカレンが言ってったっけ。先日ぶりの次女・サラです。カレンから聞いているでしょうが、アタシはカレンの親友をやってます。――初めまして、長女のミラと申します。先ほどは本当にお見苦しいところをお見せいたしました。申し訳ございません。カレンちゃんには大変仲良くしていただいております。――はっ、初めましてですなのだ！　三女のリンですなのだ！　四女のランですなのだ！　わたしたちの兄上はとってもカッコイイですなのだ！　本当ですなのだ！　――申し送れました。おれ、葉月ギルド・副ギルド長のリンクです。先ほどは醜態をお見せしてしまい申し訳ありませんでした。カレンちゃんの周りはこんな変わり者ばかりですが、皆カレンちゃんのことを大切な仲間だと思ってま――オレ、グレルだぞ～っと♪　――師匠はすっこんでろや！　――早く戻って来いよな、カーレンっ♪　――ああもうっ！　申し訳ございません、申し訳ございま――」

リンクだろう言葉が途切れた。

そして、

（……。あ…）

シュウの口が勝手に動かなくなった。

（やっと薬切れたのか……）

と分かったところで。

シュウは真剣な顔でカレンの祖父を見た。

さっき言いかけたことを続ける。

「オレ、カレンのこと…あっ、いえ、カレンさんのこと、精一杯大

切にしていますから！　カレンさんの親友をやらせて頂いているサラだって、父だって母だって、弟妹たちだって、オレの家族の周りにいる皆だって、カレンさんのこと大切な仲間だと思って日々共に過ごしています。こんな変なのばっかりがいるところに、カレンさんを戻したいだなんて思えないかもしれませんが……」がばっと頭を下げるシュウ。「お願いしますオジーサマ！　おっ…、おおおっ、おおおおお孫さんをオレにくださいっ！！」

――って、オレなんか違っ…！

シュウ、赤面。

カレンの祖父がシュウを見つめ、カレンを見つめる。

「カレン」

「は、はい、おじいさま」

「彼のことは好きか」

「えっ…？」

と頬を染めたカレン。

微笑んだ。

「はい、大好きですわ、おじいさま。優しくて真っ直ぐで、あたくしのこと大切にしてくれて…。シュウだけじゃないわ。親友のサラのことも、リュウさまとキラさまのことも、ミラちゃんのことも、リンちゃんランちゃんのことも、ユナちゃんマナちゃんレナちゃんのことも、ジュリちゃんのことも、リンクさん一家のことも、グレ

ルおじさまのことも、レオンさんのことも、みーんな大好きなのですわ」

「……そうか」

カレンの祖父の目が、シュウに移る。

「シュウくん」

「はっ、はい…」

「私も息子夫婦も、カレンの兄も……、カレンに寂しい想いばかりをさせてしまった」

「……」

顔を上げたシュウの瞳に映ったのは、

「これからもカレンをよろしくお願い致します」

優しい笑顔だった。

自宅へと戻るシュウ。

その右手にはカレンの荷物。

左手には、カレンの小さな手。

カレンはシュウの横顔を見上げた。
満面の笑みだ。

「……嬉しそうね、シュウ？」

「おうよっ！　だってオレ、オトーサンにもオカーサンにも、そしてオジーサマにも合格もらっちゃったんだぜっ？」

「そうね」と、カレンも笑った。「あたくしも嬉しいのですわっ！」

「あ、でもオニーサンには会えなかったから合否の判定もらってねーな」

「お兄さまは今日お仕事だったから」

「3日前にサラがカレンを送ったときは、サラはオニーサンに会ってんのか？」

「ええ、少しだけだけれど」

「ふーん。オレはいつ会えんのかなー。いっそ葉月病院まで会いに行くかなー」

「そのうち会うことになるでしょうし、そんなことしなくていいのですわ」

嫌な予感するから。

と、カレンは心の中で続けた。
シュウから顔を逸らして苦笑する。

（まあ、シュウとお兄さまが会うのはまだ先のことだから、そんなに気に病まなくても大丈夫ですわよね）

と、カレンは再びシュウの横顔を見上げた。

「ねえ、シュウ？」

「ん？」

「おじいさまに、『お孫さんをオレにください』って――」

「ちょ、それ忘れて…」そう言ってシュウが赤面した。「オレ、すーげー恥ずかしい……」

「忘れて、ですって？」カレンの口が尖る。「口から出任せに言っただけってことなのかしら」

「そ、そーじゃねえけどさっ…！」

「あたくし、嬉しかったのに」

「…え」と漏れたシュウの笑顔。「何、おまえ、オレの嫁になりたいのかよーう！」

つんっ♪

とカレンの柔らかい頬を突いたシュウ。

無言で俯いたカレンの顔を覗き込んだ。

（――オレ、幸せ）

そして鼻から流血。

そこには顔を真っ赤にしているカレンがいた。

「あっ…あなたなら嫌じゃないと思っただけですわっ…！　…って、何鼻血たらしてんのよっ…！」

「ご、ごめっ、可愛くてっ…！」

鼻に治癒魔法を掛けまくるシュウ。

血が垂れてこなくなったところで、再び口を開いた。

「いっ…、いつか、いつかっ…プププっ、プププププププププププロポーズとやらをしても、いいいいいいいいっすか」

「…っ……ひ…左手の薬指のサイズは7号よっ……」

「りょ、りょりょりょ、了解っす……！！」

再び垂れてきたシュウの鼻血。

（カレンがオレの嫁、カレンがオレの嫁、カレンがオレの嫁…！
いつかカレンはオレの嫁にっ……！？　えっ、何…、結婚したら朝っぱらから裸エプロンでカモオォォォォン！？　まっ、まーじかああああああああああっ！！）

今夜のシュウ。

もちろん、

「フィーバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアっっっ！！！」

第９７話　彼女の家族に挨拶を…　～後編～（後書き）

後書きにてもう一度…。
お食事中の方、申し訳ございませんでした……。

１７日の２１時３５分ごろメールくださった読者さまへ。
今週えらく忙しいですなっΣ（ ゜□゜；）
頑張ってください＞＜
あ、メールの返信なんていつでもいいですよー＾＾

第９８話　参加します

ほぼ毎月誰かの誕生日パーティーを行うシュウたち。
今月からはいつものメンバーに加えてミヅキもいる。
今月――１月に誕生日を迎えるのはリーナだ。
いつものようにシュウ宅のリビングの中、リンクがリーナの頭を撫でる。
「おめでとう、リーナ。おまえももう１０歳かあ。早いなあ」
「せやで、おとん！　うち、もうすっかり大人の女やで！」
「うんうん、そうだよなリーナ♪」と、にこにこと笑いながらシュウ。「すっかり大人の女性だよなっ♪　はっはっは～！」
「…う…、うん、ありがとう」とシュウに言ったあと、リーナはリュウに耳打ちした。「なあ、リュウ兄ちゃん」
「何だ、リーナ。乳とケツが出てから大人の女を名乗れ」
「うっさいわ。それより、シュウくん正月辺りからめっさ機嫌ええなあ。ちょっとキモいんやけど」
「心から同意するぜ」
「やっぱアレなん？　超一流ハンターになったからなん？」

「加えて、カレンの家族から合格もらったからだろ。あいつここ最近、ずっとにやけてやんの」

「にやけっぱなしなん？」

「おう」

「どつきたくなるんやけど」

「思いっきり行け」

と、リュウの許可（命令）をもらい、シュウのところへと歩いていくリーナ。

「なあ、シュウくん」

「何だ、リーナっ？」

「キモいっちゅーねん」

ドスっ！

とシュウの腹に拳を食らわせたリーナ。

「――ぐおっ…！」

とシュウが腹を抱えながらリーナを見下ろす。

びしっとデコピンをされるのかと思いきや、

「んも～～う、いたずらっ子だな、お・ま・え・はっ♪」

と頭を撫でくり回された。

「キモっ…！」

思わず顔が引きつってしまうリーナ。

はっとした。

（もしかして、こんなに機嫌がええなら……）

ポケットの中から折りたたんでいる紙を取り出す。

そしてリンクを見た。

「…ん？　なんや、リーナ」と、リンクはリーナが手に持っている紙に目を落とした。「……いや、無理やろ」

と、苦笑する。

「今ならＯＫくれるかもしれへんやん。家の家計は火の車なんやで。なあ、おかん？」

「まったくだぞーっ」

「せやけどぉ……」とシュウを見るリンク。「嫌がるやろ、シュウ。カレンちゃんも……」

シュウとカレンが首をかしげた。

「相変わらず金ねえなあ、リンクん家（おまえ）。つか、何の話だ」

とリュウが訊くと、一同もリンク一家に注目した。

リンクが言う。

「いや…その…、まずリュウは嫌がること確実やから言わへんかったんやけど……」

「んじゃ言うな」

「聞けやっ！」

「言ってくれ、リンクさん…！」

と、シュウ。

リンクに駆け寄り、リンクの手を両手で握る。

「オレ、あなたのゲ○のおかげでカレンのオトーサンに気に入られたんだ…！」

「か、変わったオトーサンやな…」

「さあ、言ってくれっ…！　オレ、リンクさんにお礼がしたいんだっ……！」

「そ、そうか？　ほな……」

リンクがリーナの手から折り畳まれている紙を取った。

それを広げながら言う。

「これ、昨日の新聞に入っとった広告なんやけど…、見てや。おれとミーナやったら、すぐ失格になって終わりそうやから……」

「うちもジュリちゃんと考えたけど、ちょっと無理やわ」

と、リーナ。

一同、リンクの持っている広告に注目。

シュウが眉を寄せながら読む。

「は…？　『ベストバカップルコンテストＩＮ文月島文月町４丁目の文月公園』……？」

「毎年バレンタインが近くなると、文月島から広告きてんの知らん？」と、リーナ。「バレンタインの日に、毎年イベント行われてんのやで。恋人同士、または夫婦で参加すんねん。去年までは単なるベストカップルコンテストやったんやけど、今年は『バ』がついとるな」

「バカップル……」

と呟いたシュウとリュウ。

お互いの顔を見、

「頑張れよ。――って…！？」そろって驚愕した。「なっ、何でだよ！？　バカップルだろ！？」

「どっちもバカップルだから安心しなよ」

と、サラ。

広告を手に取り、詳細を見る。

「なになに？　参加資格は全島のバカップルまたはバカ夫婦。年齢不問。参加カップルが既定の数を越えている場合は審査あり。彼氏・彼女、または旦那様・奥様に関する全１００問のクイズを出すので、１番多くのクイズに正解したカップルが優勝……だって」

「ふーん？　割と普通そうだね」と、レオンがサラから広告を取った。「…あ、大賞は５００万ももらえるんだ」

「すごい大金だね」

と、ミヅキが声を高くした。

シュウの方を見て訊く。

「ハンターのギルドイベントじゃないんでしょ？」

「おう、違う」と、シュウがレオンから広告を取る。「大賞は５００万かあ。でもバカップルって…。いや、でも、うーん…。これだけあれば、リンクさんとりあえず助かるよな……、ミーナ姉が無駄遣いしなければ」

「おう……」リンクが苦笑した。「おれやてでっかい葉月ギルドの副ギルド長なんやから、本当は金持ちでええはずなんやけど…。ミーナがな……」

「だって」とミーナがむくれて俯く。「キラと同じものがほしいのだっ…。これに出て大賞取れれば――」

リュウがミーナの口をふさいだ。

「い…、言うなミーナ。言うなっ…」

と言いながら、恐る恐るキラを見るリュウ。

キラがシュウの手から広告を取り、それに目を通す。

「そうか…。これに出て大賞を取れば、私の可愛いミーナはほしいものが買えるのか」と、リュウに向けられるキラの視線。「なあ、私の愛する旦那よ」

ギクっ…

としたリュウの身体。

「な…、何だ俺の可愛い黒猫」

「私、このコンテストに出た――」

「あー、今日はいい天気だぜ」

「雪降ってるぞ。私、このコンテストに――」

「さてウィスキーでも飲むか」

「もう飲んでるではないか。私、このコンテス――」

「キラ、つまみ」

「目の前にいくらでもあるではないか。私、このコン――」

「おー、やべ。眠くなってきたぜ」

「よし、今夜は営み無しか」

「!?　ふっ、ふざけん――」

「私、このコンテストに出たいぞ」

「うっ……！」

と、顔を引きつらせたリュウ。

キラから広告をぶん取り、キラの目の前にかざす。

「何言ってんだよおまえ!?　よく見てみろ！　ベストカップルならまだしも、ベストバカップルだぞ!?　タダでさえこんなくだんねえ一般人のイベントに出るなんてダリーのに…！　こんなん、単なる恥さらしじゃねーか！　絶対出ねーからな、俺は！」

「ああ、やっぱり……」と苦笑するリンク。「ああ…、ほんまにおれん家、一家そろって餓死しそ……」

と、肩を落とす。

そんなリンクを見て、シュウは意を決して言う。

「オレ、出る」

「えっ？　ほんまっ？　シュウっ…！」

「うん。いい？　カレン。…って、マズイかっ…！　おまえオレの彼女だってこと、まだ知られてないんだよなっ？」

「ええ、そうですわね。あたくしがシュウの弟子だってことは、ハンターの皆さまには知れ渡っているようだけれど…。彼女だってことはハンターの皆さまも一般人の皆さまも知らないわね」

「……まっ、マズイかっ…、やっぱっ…！」

「大丈夫じゃないの」サラが口を挟んだ。「仕事で外出てるときは兄貴といるし、そうでなくてもうちの家族の誰かしらと一緒だし。兄貴のファンにカレンが彼女だってバレたところで、何か悪さできる隙なんてないよ。っていうかさー」

と、溜め息を吐いたサラ。

「もうさ、堂々としない？　カレンは列記とした兄貴の弟子で彼女なんだからさ。それに、いつまでも黙ってられるわけじゃないじゃん。ファンは兄貴にのことに関して特に鋭いんだし、もうとっくに感付いてるのもいると思うよ」

「ああ、カレンの身は安全だ。居候期間が過ぎても安全だ。俺がもうカレンを危険な目に合わせねえからな」と、リュウ。「ってわけでカレン。おまえシュウとバカップルコンテスト参加してこい。そして俺とキラはその滑稽な姿をステージ下から嘲笑しながら見物している」

「はい、リュウさま……」

と苦笑しながら承諾したカレン。

シュウに明るい笑顔を向けた。
「いいわ、出ましょ？　シュウ」
「おお、サンキュ！　カレンっ」
「アタシもレオ兄と出るー」
と、サラ。
再び広告を手にした。
「何かいろいろ賞あるけど、アタシこの賞狙いたい。『おしゃれで賞』！　クイズとは別に、オシャレなカップル３組に送られるんだってさ。賞金は１０万だから、あんまりリンクさんたちの助けにならないかもしれないけど…」
「そんなことないで、サラ！」とリンクが声をあげた。「おれ、めっさ嬉しいわ！　ありがとう、シュウにサラ、カレンちゃんっ……！　ほんまリュウの子とは思えへんわっ！」
「へー。『おしゃれで賞』かぁ……」
と呟くように言ったレナ。
レナの顔を覗き込んで、ミヅキが言った。
「ぼくと一緒に参加してくれる？　レナちゃん。そういう賞ならぼくも取りたいよ」
「えっ？　本当っ？　ミヅキくんっ…！」

「うん、レナちゃんが良ければだけど」

そう言ったミヅキの笑顔を見て、レナの頬が染まった。

「わぁい！　あたしミヅキくんとコンテストに参加する！」

顔が引きつるリュウ。

がしっとミヅキの頭を掴む。

「くおおぉぉぉぉら、ミヅキぃ…！？　てめー、レナに何する気だ…！？　アァ…！？」

「なっ、何もしませんよリュウさんっ…！　ただコンテストに出て賞取ったら、リンクさんご一家に賞金あげようと……！」

「おぉぉお…！」と声をあげ、リンクが瞳を潤ませる。「ミヅキくんまで、なんってええ子なんやっ……！」

「うーん。よし、オレも出るぞーっと♪」と、膝の上にマナを抱っこしたグレル。「可愛い弟子のリンクのため、マナと出ちゃうんだぞ、オーレっ♪」

「何で！？」リュウが慌ててマナを奪い返した。「なんっっっっで、アンタと俺の可愛い娘をカップルで参加のコンテストに出さなきゃならねえっ！！」

「何でって、マナは将来オレの嫁だからだぞーっと♪」

「いつまでもバカなこと言ってんじゃ――」

「パパ…」とリュウの声を遮り、マナがリュウの膝の上から顔を見上げた。「あたしグレルおじさんと出る…」

「――なっ…！？」リュウ、驚愕。「何故だマナっ！　パパはこんなバケモノで天然バカで熊でオッサンで金メダルなんか絶対に認めねーぞ！？」

「リンクさんたちのためだよ…。お金がなくて可哀相だもん…」

「マっ、マナっ…！」と、さらに潤んだリンクの瞳。「あっかんわ…！　おれもう…、もうっ……！」

「うんうん、私の子供はみんな良い子だな」

と、誇らしげに頷くキラ。
そのあとリュウを見た。

「さて…、あとは私とリュウだけ……か」

「なっ、何だよキラ…！？」と、キラから目を逸らすリュウ。「俺は絶対にでねーからな、絶対に！」

「そう…か……」

と俯くキラ。
ミーナから目薬を受け取り、目に差した。

「リュウは私の願いを聞いてくれぬのだなっ…！」

「……。キラおまえ、ピンクの涙流すのか」

「――ハッ！　しっ、しまった！」と、愕然とするキラ。「ロー○・リ○ではないかっ…！」

「女子高生かおまえは」

「先日、ここぞというとき涙を流せぬ場合は目薬を差すのだと教えたのは私だが、リ○は駄目だぞミーナ、リ○は……！」

「おお、そうかリ○は駄目だったのか！　次からはサン○・F○・ネ○にするぞーっ」

「うーん、F○・ネ○か…。その場合は差したら『キターーーッ！』って叫ばないとだからな…。ちょっと恥ずかしいぞ…」

「でも今はもう違う人間がCMやってるぞ」

「何、いつの間にっ！　知らなかっ――」

「んで」と口を挟むリュウ。「俺は出ねーからな、キラ」

「おとなしく出ろよ、優勝候補」

と、シュウが溜め息を吐いた。

「優勝候補はおまえだろーが、シュウ。おまえのバカっぷりは見てて痛々しいぜ」

「あっ、あんたに言われたくねえっ！」

「ねえ、パパー」

とリュウのところへとやってきて、リュウの隣に座ったユナ。

リュウの腕を取り、にっこりと笑ってリュウの顔を見る。

「あたし、大賞かっ攫うかっこいいパパが見たいなっ♪」

「な、何……」

ちょっと揺れ動くリュウ。

レナが続く。

「あたしもあたしも～！　大賞をダントツでかっ攫うパパ見たーい♪」

「う……」

さらに揺れ動くリュウ。

マナが続く。

「パパ…、コンテストに参加してくれたらイイ薬作ってあげるよ…」

「イっ、イイ薬……！？」

またさらに揺れ動くリュウ。

サラが続く。

「コンテストに参加したらママが大喜びして、バレンタインの夜は『ねえ、もっとぉ（ハート）』の連発だね」

「マっ、マジかオイ……！？」

またまたさらに揺れ動くリュウ。

キラが赤面しながら咳払いをした。

「こ、子供たちよ、ちょっと耳をふさいでいろ…」

言う通りにする子供たち――シュウとその弟妹、カレン、リーナ、ミヅキ。

「リュウ」

「な、なんだキラ」

「トドメだ！」

「ふ、ふん、俺は絶対に――」

「コンテストに参加してくれたら、その夜〇〇〇を□□□□で、△△△△△の、☆☆☆☆☆☆☆っ！」

「…お…、おおおお…！？」

輝いていくリュウの瞳。

真っ赤なキラの顔。

「さっ、さらに、○☆▼□●△★☆◇■▲○★◆～～～っっ！！」

「おっ、おおぉぉおおおおぉぉぉぉぉぉおおっ！！」

そのキラの甘い誘惑に、歓喜の雄叫びを上げたリュウ。

そして、

「よっしゃあ！　俺はキラとコンテストに参加するぜ！！」

そういうことになった。

リンクが舞い上がる。

「ありがとうっ、リュウ！　それからキラっ！　おまえ、めっさ頑張ったな…。っていうか、バレンタインの夜、が、頑張ってやーっ……」

「う、うむ。ミーナのため、私はがんばるぞっ…」

熱くなった顔をパタパタと手を扇いで冷ましながら、キラは己の水着姿写真ばかりが印刷されている壁のカレンダー（リュウ作）に目を向けた。

（コンテストはバレンタインデーか……）

それまで、あと約2週間だ。

第９８話　参加します（後書き）

プロローグ込みだと次回で１００話……！Σ（ □ ｌｌｌ）
プロローグ除くと次の次で１００話……！Σ（ □ ｌｌｌ）

ビックリでごわす！
何が驚いたって、まだこのハーニャンの全体のプロット（あらすじ）の半分も行ってないのです。
ハーニャン完結したとき、一体何話で何千（？）文字になっているんでしょう…。

あっ、ミス…。
４８万文字越えてた……。

第９９話　コンテストはもうすぐです

シュウ宅のリビング。
バレンタイン前日の今日は、チョコレートの甘ったるい香りがキッチンから漂ってきていた。

甘いものが苦手なリュウはあまり気分が良くなさそうだ。

「あ…青い顔して飯食ってっけど大丈夫か、親父……」

と、リュウの向かいのソファーに座り、共に晩ご飯中のシュウ。

「お、お、おう…。毎年のことだ、気にすんなっ……」

「キッチンで飯食ってたら卒倒してそうだな、オイ」

と、シュウは苦笑した。

毎年バレンタインの前日になると、キラとシュウの妹たち、加えてミーナとリーナがやってきて一斉にチョコレート菓子を作る。
リュウへのバレンタインは別のものが用意されるが、その他の男たち――シュウとジュリ、リンク、レオン、グレルへはチョコレート菓子を贈るが故に。

今年のシュウはいつもよりワクワクとしていた。

（カレンから、どんなチョコもらえっかなー）

今年からはカレンも一緒になって、キッチンでチョコレート菓子

を作っている。

（より美味ーく感じるために、一番最初に食っちゃおーっと。んで甘ーいチョコを食ったあとは、甘ーいカレンをっ…！　ぐふふふふ）

リュウがシュウの顔を見て溜め息を吐いた。

「そのバカ面やめろっての。ま、明日のバカップルコンテストにはピッタリの面だがな」

「うっ、うるせーなっ…！　親父だって母さんを見るとき似たような面になってんだろっ…！」

「俺の場合はバカに見えねーの。おまえだからバカ面になんの」

「なっ、なん――」

「んで」とリュウがシュウの言葉を遮った。「おまえとカレン、大賞取る自信あんの？」

「そ、それなりに。ここんとこ、カレンと一緒に出されるクイズ予想してっからさ…」

「ふーん？　んじゃ、俺が絶対出されるだろうクイズを出してやる」

「お、おう」

「彼女のブラのカップは？」

「B」

「はい、失格」と失笑したリュウ。「Aじゃねーか」

「い、いいんだよこれでっ！　そう答え合わせることになってんだからっ…！」

「ほう。カレン乳に詰め物して行くのか」

「…う…うん……」と小さく答えたあと、今度はシュウが訊く。「じゃ、じゃあ、奥さんの今一番ほしいものは！？」

「俺の銀メダル」

「……。親父、オレあんたと母さん優勝候補だと思ったけど」

「俺はキラのことで分からねえことなんてねえ」

「あんたバカすぎて失格にな――」

ドカッ！！

と向かいの席からのリュウの蹴りを顔面に食らったシュウ。

「――ガハッ…！」

顔に治癒魔法を掛けまくる。

そこへ、キラが溜め息を吐きながら入ってきた。

空になった皿を重ねながら言う。

「大丈夫だ、シュウ」

「い、いやオレ今、まじで気絶仕掛け――」

「コンテストでは」

「ああ、そっち…」

「私がリュウの回答を予想して答える」

「まあ、そうしねーと即失格になりそうだよな」と苦笑したシュウ。

「頑張って、母さん…」

「う、うむ……」

とキラも続いて苦笑したとき、カレンがパタパタと駆けて来た。

「キラさま、あたくしもお皿下げるの手伝いますわ」

「あっ、カレンっ」と、明るくなるシュウの顔。「チョコできたっ？　チョコっ！」

「ええ、できたわ」

「まーじでぇー？」

カレンの手を引っ張り、カレンを抱っこするシュウ。

黒猫の尾っぽをぱたぱたと振りながら言う。

「早くちょーだい」

「バレンタインデーは明日よ？　明日の夜に渡すのですわ」
「エー」
シュウとカレンの向かいでは。
「おい、俺の可愛い黒猫」
「何だ、私の愛する主」
「リボン巻いた？」と、キラの服の中を覗き込むリュウ。「ちっ、まだか……」
「バっ、バレンタインは明日ではないかっ…！」
「――って、親父母（あんた）さんに何させてんの！？」
シュウ、赤面。
カレンも赤面。
「クリスマスと誕生日とバレンタインの恒例だぜ。いいぜー、裸リボン。燃えるぜー」
「えぇっ……！？」
と膝の上のカレンに目を落とすシュウ。
シュウの視線を頭に感じたカレンが慌てたように言う。
「ちょっ…！　やっ、やりませんわよ、あたくしはっ……！」

「だ、だだだ、駄目っすか…！？」

「ダメっ…！」

「ちょ、ちょちょちょちょちょっとだけっ…！」

「ダっ、ダメっ！　ダメったらダメなのですわっ！」

「ピ、ピピピ、ピンクのリボンがいいなオレっ…！　なあ、カレ―」

キラが咳払いをし、シュウの言葉を遮った。

「リュウの真似をするでない、シュウっ…！」

「は…、はい、ゴメンナサイ。ついっ…」

「鼻血を拭け」

「う、うん」

とシュウがティッシュを取って垂れた鼻血を拭く一方。

キラがリュウの顔を見た。

「リュウは、もう用意してくれたのか？」

「おう」

「え？」とカレンがリュウの顔を見た。「逆バレンタインですか？　リュウさま」

「いや、バレンタインが俺たちの結婚記念日でよ」

「まあ！」とカレンが声を高くした。「そうでしたの！　素敵なのですわ！　ええと…、今年で１８年目くらいですか？」

「ああ、１８周年。だから今年はガーネット」

「そうですわよね、結婚１８周年にはガーネットを贈るのですものね！」

シュウが感心したように言う。

「親父って、そういうとこすーげー意外とマメだよなあ。記念日とかイベントのときは、プレゼント用意して母さんを喜ばすこと忘れないっていうか……」

「当たり前だ」

「なあ、リュウ？」

と、キラがリュウの顔を覗き込んだ。

「何だ、キラ」

「今年はガーネット、去年はアメシスト、一昨年はトパーズ。では、来年の宝石は何だ？」

「次に宝石送んのはたしか２３周年目の――」
「サファイヤですわ♪」
と、カレン。
「そう、サファイヤ」
「ほう、次はサファイヤか。では、リュウ？」
「何だ、キラ」
「ダイヤはたしか６０周年目。そのときは」と、リュウが笑った。
「俺８２で、おまえ８１かよ」
「ダイヤモンドはいつだ？」
「おおーっ。すっかり爺さんと婆さんだぞーっ」
「６０周年はまだいいぜ。７５周年目にもダイヤ送るんだが、そんときゃ俺９７でおまえ９６だぜ」
「は…はたして生きているのか……」
「とりあえず７５のシュウは死んでっかもな」
「有り得るぞーっ」
「オイ…」シュウ、苦笑。「あんたたち息子（オレ）より長生きする気か。って、まじでしそーだなオイ……」

カレンがおかしそうに笑った。
そのあとリュウを見て言う。

「たくさん長生きして、７５周年目のダイヤモンドもキラさまに送らないとですわね、リュウさま？」

「ああ…」

そう短く答えて、リュウが微笑んだ。

「やっぱり素敵なのですわ、リュウさま……」

シュウのベッドの中。
シュウの隣に寝ているカレンが恍惚としている。

「結婚から７５年経っても、キラさまを愛されるのね…！　きっと結婚７５周年目には、それまでで一番大きなダイヤモンドをキラさまに贈られるのですわっ…！　そしてそれまでで一番お喜びになられるキラさまっ…！　そしてそしてっ、『キラ、愛してる』、『私もだ、リュウ』、『逝く前にもう一度、愛の結晶を作ろうぜ』…！　きゃあああああっ！　リュウさまってばそんなお年でダメエェエェエェエっ！！」

頬を染めてはしゃぐカレン。
それを見ながらシュウの顔が引きつる。

「オイ、オレ７５になってから弟妹なんていらねーぞ。まるでヒ孫じゃねーか。おまえの脳内、本当乙女だな。っていうか、オレは親父が母さんに結婚７５周年のダイヤを贈ってるとき、まじで墓ん中いそうでこえーよ……」

「あら、親不孝は良くないわよ、シュウ？」

「だってあの人たち、冗談抜きでオレより長生きしそう…」

「そうね」

「…フォロー頼むぜハニー」

カレンが笑った。

「冗談よ、シュウ」

「嫌な冗談だぜ、まったく…」と溜め息を吐いたシュウ。「…でも、親父がきっと墓に入る寸前で母さんにダイヤ贈ってるとき、オレは何してんのかな」

カレン、隣にいてくれてるのかな。

と心の中で続けて、シュウはカレンの顔を見た。

カレンも同じことを考えたのか、シュウの顔を見つめた。

お互いの顔が赤く染まる。

のち、カレンの顔が蒼白していった。

（シュウが７５のとき、あたくし７４！？　シュウはハーフだからまだまだ若いでしょうけど、あたくしシワシワのおばーさんじゃなくって！？　いっ、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！）

カレンの顔を見て、シュウが眉を寄せた。

「どうしたよ、いきなり青くなっ――」

「話を変えるのですわ！　コンテストに備えて最後の最終チェックをしましょう、シュウ！　ああもうっ、恐ろしいのですわぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」

「？　お、おうっ…」

「あたくしのブラのカップは！？」

「え、えとＢ…」

「やっぱりＣにしてちょうだい」

「……。う、うん、分かった…」

「よって、スリーサイズを訊かれたときのバストもちゃんと増すの忘れないでちょうだいよ！？　バストは８０よ、８０！　はい、あたくしのスリーサイズは！？」

「え、えと上から８０・５８・８３…」

「やっぱりウエスト５７にしてちょうだい。あたくしより１７ｃｍも背が高いサラが５８ｃｍなのよ」

「……。う、うん、分かった…」

「あたくしの身長と体重は！？」

「え、えと１５２ｃｍ、４３ｋｇ…」

「やっぱりせめて４０ｋｇにしてちょうだい。キラさまあたくしより３ｃｍ背が高いのに、４０ｋｇなのよ。それなのにＦカップだなんて羨ましいわ。いい？　４０ｋｇよ、４０ｋｇ！　間違えないでちょうだいよ！？」

「……。う、うん、分かった…。にしても変更多いね、ハニー。頭がこんがらがって来たヨ…」

なんかオレ、大賞取れる気がなくなってきた…。

とシュウはカレンの真剣な顔を見ながら苦笑した。

翌日。

毎年バレンタインデーに行われる、『ベストバカップルコンテストＩＮ文月島文月町４丁目の文月公園』。

去年までは『ベストカップル』だったのだが、今年は『ベストバカップル』になっていた。

参加資格は全島のカップルまたは夫婦。

年齢制限はなし。

彼氏・彼女、または夫・妻に関するクイズが全１００問出され、より多く答えたペアが大賞を掻っ攫うこととなる。

そんなイベントに参加するため、文月公園にミーナの瞬間移動でやってきたシュウとその一同。

シュウとカレン、リュウとキラ、サラとレオン、マナとグレル、レナとミヅキはコンテストに参加するために。

その他の一同は、応援のために。

そして何故コンテストに参加することになったのかというと、金欠のリンク一家のために。

何らか賞を取り、賞金をもらって、それでリンク一家を助けようというわけだった。

リュウが金を出せば丸く収まるだろうと突っ込みもあったが、リュウはトイチ（十日で一割の利子）という鬼以外の何でもない利子でしかリンクに金を貸さない。

それを分かっているリンクはリュウから金を借りようとはしないし、リュウはトイチ以外でリンクに金を貸してやる気はない。

「よって、こんなイベントにリュウたちに参加してもらった、おれら一家です。……ていうか何やねん、これ」と、リンクが集まったカップルたちを見渡して苦笑した。「めっさ参加カップル多いやん。こりゃコンテストに入る前に審査やな。大丈夫やろか……」

「うーん、審査ありかぁ」とシュウも苦笑。「審査で通るのは『バカップル』と呼ぶにふさわしいカップルだろ？　オレとカレン、審査で落ちっかも（親父の方は大丈夫だけど）」

「こりゃ難関だぜ。まずいな」と、腕組みをするリュウ。「俺とキラ、落ちる危険大有りだぜ（シュウは余裕だが）」

シュウとリュウの顔を交互に見たサラ。

レオンに耳打ちした。

「ねえ、レオ兄。この2人、何を心配してんだろ。審査余裕で突破じゃん。超バカなんだから」

「ああ、自覚ないんだよ」

「まったくだね。アタシたちの方が審査落ちそうで心配しちゃうよね」

「あー、ぼくとレナちゃんも」と、脇で会話を聞いていたミヅキが苦笑した。「つまり審査員からバカップルに認定されなきゃいけないってことでしょ？　どうやったら認定されるんだろう。『おしゃれで賞』取るために衣装張り切ってきたし、コンテストに参加する前に審査で落ちたら嫌だなあ」

「そういえば、その衣装どうしたわけ？」

と、サラはレナとミヅキの衣装に目を落とした。

レナはサラの見たことのない白いロリータドレスを、ミヅキはそれに合わせた衣装を着ている。

「レナちゃんの服のサイズ聞いて、ぼくが作ってきたんだよ」

「手作りっ？」

とサラとレオンが声を高くした。
もう一度レナとミヅキの衣装を見て、目を丸くしてしまう。

「うっわ、すっごいじゃんミヅキ。素人とは思えないよ」

「だね」

とサラに同意して頷くレオン。

「ありがとう」とミヅキが嬉しそうに笑った。「でも、インパクトならサラちゃんとレオンさんの衣装には負けるよ」

「あー、やっぱり？」とレオンが苦笑。「僕もサラに衣装見せられたときビックリしたんだけど……」

「レオンさん、口の端から垂れてるのって血糊（ちのり）？」

「うん」

「良かった、本物じゃなくて。なんていうか、サラちゃんてリュウさんと同じものを感じるよね」

サラとレオンの衣装。
女王様と奴隷。

サラが笑った。

「いやあ、アタシいつもはこんなことしてないよ？　でもコレ」と、レオンの首輪に繋いでいる鎖を掲げてサラがにやりと笑った。「ぞくぞくしちゃーうっ……！」

「……。そう、良かったね…」

そんなことを会話しているうちに、コンテスト参加のための審査の時間がやってきた。

「みんな頑張ってやあああああっ！」

「キラ、大賞頼んだのだーっ！」

「うちとおとん・おかんの命はみんなに掛かってんでーっ！」

とリンク一家の声援に送られながら、カップルたち――シュウとカレン、リュウとキラ、サラとレオン、マナとグレル、レナとミヅキは審査の行われる場所まで歩いて行く。

シュウたちが参加するなんて、他の参加者たちは想像していなかったのだろう。

シュウたちの姿を見て仰天した様子だ。

その後、ファンからの声が飛んできた。

「きゃあああ！　リュウさまあああ！　キラさまあああ！　素敵いいいいいいいいっ！！」

完全シカトのリュウと、笑顔を返すキラ。

「レオンさまこっち向いてえええええええっ！」

キラと同様に、笑顔を返すレオン。

「サラちゃん、マナちゃん・レナちゃん！　はい、マヨネーズっ！」

パシャっ！

とポーズを取ったところを写真に撮られるサラとマナ、レナ。

「グレルさまぁ！　抱き締めてくださあああああい！」

「お？　んじゃー、軽くなっと♪」

メキメキメキっ…！！

「いっ、逝っちゃうううううううううう！」

一般人女性を殺しかけるグレル。

そして、

「きゃあああ！　シュウくん、その女ダレよおおおおおおおおおおっ！！」

「シュウくんから離れなさいよ赤毛女あああああああああっ！！」

「チビっ！　ブスゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！！」

罵声を浴びせられ、俯いて歩くカレン。

カレンの肩を抱き、シュウはぐっと堪えながら言う。

「気にすんな、カレン」

「え、ええ、大丈夫よ。こ、これくらいのことは分かっていたもの…」

罵声にかき消されそうなカレンの声。

だが、

（――あれっ？　何事だっ？　いきなりシーンとしたぞ、オイ？）

シュウは辺りをきょろきょろと見回した。

急に静まり返った原因を、後方に振り返ったときに知る。

（――さすがだぜ、親父）

シュウ、顔面蒼白。

カレンに罵声を浴びせる輩を、リュウがじろりと一睨み。

それだけで辺り全体が凍りついたのだった。

静まり返ったところでリュウが言う。

「バカは放っておけ、カレン。ちんたら歩いてねーでさっさと行くぞ、おまえら」

承諾し、リュウを先頭にして早歩きになる一同。

カレンの顔を覗き込んで、シュウは顔を引きつらせる。

「お、おい、カレン……！？」

「ああ…、やっぱりリュウさま素敵っ……！」

「なっ、何うっとりしてんだよ！？　ステキって、んなわきゃねーだろっ！　こんなバカ親父なん――」

ゴスっ！！

とリュウの拳により、シュウの言葉が途切れた。

シュウが頭を抱えて蹲る。

「いでえぇ…！」

「聞こえてんだよ、バカ息子が」

「こっ、公衆の面前で殴らなくたって――」

「おい、審査員。早く始めろ」

「え？」

と顔をあげたシュウ。

どうやら審査の場所まで来ていたらしく、目の前には審査員と思われる男性が立っていた。

リュウに見下ろされて、おどおどとしている。

「はっ、はいぃ、リュウさまあぁっ…！　で、では――」

「あ、ちょっと待て」

と、審査員の顔の前に手をかざしたリュウ。

眉を寄せ、５つ作られたステージのうちの１つに目を向けた。

そこには、夫婦または恋人同士だろう２人の後姿。

いや、よく見ると女の方はレッドドッグ――文月島で最強を歌われる犬モンスターだ。

「おい、審査員。あいつらも参加すんのか？　それなら何でもう偉そうにステージの上にいる」

「えっ？　ああ、あのお二方なら、このコンテストが始まって以来ずっと優勝しているご夫婦でして。１００問出されるクイズのうち、最後の２０問はあのお二方がいるステージ――１番大きなステージで行われるのですが――」

「最後のそれまで出番はねえってことか、あの人間と赤犬」

「ですです。去年の優勝カップルは、最後の２０問のときまであそこで待っているんです。…あっ、もしかしなくてもリュウさまたち、あのお二方をご存知なのでは？」

「え？」

と、リュウに続き、審査員の指す二方――１番大きなステージの上にいる人間の男とレッドドッグの女の背に顔を向けた、シュウとその一同。

「……俺は今年から『ベストカップル』ではなく、『ベストバカッ

プル』になった理由を全て理解した。あれが毎年優勝してたら、嫌でもそうなるだろうよ」

と、リュウ。

「え？」

と、一度リュウの顔を見。

もう一度人間の男とレッドドッグの女に顔を向けた、シュウとその一同。

こちらの視線を感じてか、人間の男がゆっくりと振り返った。

「――――！？」

リュウを除く一同、驚愕。

そしてリュウに続いて理解した。

「た…、たしかにあの人が毎年優勝してたら『ベストバカップル』にしたくなるかも…」

と、苦笑するレオン。

ミヅキがシュウを見て訊く。

「ね、ねえ、あの人ってさ、雪合戦のときにもいた変な人だよねえ？」

「お、おう、いた。…途中から親父に締め出されたけど。っていうか……」

一同、声をそろえ、

「結婚してたのかっ……！」

あの、文月ギルド・ギルド長兼、超一流ハンター兼、超一流変態の、

「ゲール……！」

第９９話　コンテストはもうすぐです（後書き）

ああ…、プロローグ込みでついに１００話っ…！

２０日の２３時５１分ごろメールくださった読者さまへ。
メール返信しときますた♪

→と同日の２３時５７分ごろメールくださった読者さまへ。
う、うーん…。新連載…ですか。この小説の更新でさえ以前に比べて遅くなってしまっているので、きついですね；；
でも、出来なくはないです……ハイ。
といっても、このＮＹＡＮＫＯシリーズよりも前に書いたものになります。最近ようやっと前のＰＣからデータを移したんですよ。
新連載ができるとしたら、前のＰＣで書いてた小説をコピペして、読みやすいよう編集した程度のものになりますが…。
しかも、単なるコピペ＋編集でもメインのこのハーニャンより更新遅れます。絶対遅れます。おっそいです。

それでも良いと申されるのならばっ…！
ハイ、選んで（笑）←

１、コメディ且つ趣味丸出し（ハーニャンでもちょろっと出てますが）小説。
２、ハーニャンからは程遠い度シリアス小説（１５禁）。
３、姫百合にしちゃあ、普通……かもしれない小説。

ご希望通り全部現代ものを選びますた。

最後にもう一度言いますが、更新はおっっっそいです＞＜

第１００話　ベストバカップルコンテスト　～前編～

毎年バレンタインデー恒例らしい『ベストバカップルコンテストＩＮ文月島文月町４丁目の文月公園』。
といっても、去年までは『ベストバカップル』ではなく、『ベストカップル』だったらしいのだが。

参加希望カップルが規定の数を越えていたため、審査が行われることに。
審査員の前へとやってきたシュウとカレン、リュウ、キラ、サラ、マナ、レナ、レオン、グレル、ミヅキ。

５つ作られたステージのうちの１つに顔を向けている。
そこにはどうやらこのコンテストの優勝をずっと掻っ攫っているらしい夫婦。
女の方はレッドドッグ――文月島で最強を歌われる犬モンスター。

そして男の方は、文月ギルドのギルド長兼、超一流ハンター兼、超一流変態の、ゲールだった。

それを見た一同は『ベストカップル』から『ベストバカップル』になった理由を理解し。

そして驚愕。

「な、なあ親父、ゲールさんて結婚してたのかよ！？」

と、シュウ。

リュウが顔をしかめて言う。

「そんなの知らねーぞ、俺」

「あれじゃないの、リュウ」と、レオンが溜め息を吐いた。「あの人からの電話、仕事以外の用事なら即切るからじゃないの」

「あー、それでか」と納得したリュウ。「で、ドMのゲールの妻ってことは、あの赤犬……」

ドSか…。

とゲールの隣にいるレッドドッグの女を見つめる一同。

ゲールに続き、彼女がこちらに振り返った。

笑顔で頭を下げる。

それに続いてシュウたちも頭をさげた。

「美人じゃん」と、驚いたようにサラ。「スタイルもいいし。ドSには見えないけどドSなんだろうね、あの赤犬」

「ああ、間違いねえ」

と、リュウ。

ゲールの妻の声が人間の耳には微かに、猫耳にははっきりと聞こえてくる。

「お世話になってんだから頭くらい下げなアンタっ！！」

バリィっ！！

と犬の爪で頬を引っかかれ、ゲールが妻に返り血を浴びせながらステージの上に横たわった。

その表情（カオ）、恍惚。

「ほらな、ドSだろ」

と、リュウ。

一同、同意。

「ん…？」

リュウは眉を寄せた。

ゲールが誰かに向かって手を振っている。

その視線を追っていくと、

「――オイ、ゲール娘（あいつ）もいんのかよ」

リュウの目が丸くなると同時に、一同驚愕。

「お、おい親父!?　どこ娘は!?」

「アレだよ、アレ。赤犬の耳の生えたやつ」と、リュウが指を差す。

「間違いねえ。前髪あげたときに見えるゲールの目にそっくりだぜ」

リュウの指した方向へと顔を向ける一同。

さらに驚愕。

「うっわ！　美少女かよ！　オレのカレンには劣るけど！」

「ゲールも前髪をあげると整った顔立ちをしているからな」

「あ、ああそういえばそうなんだっけ、母さんっ…！」

「うむ。驚きかもしれないが事実だぞ」

「つか、結構でけーぞ。うちのサラやリン・ランと同じくらいじゃねーの」

「たしかにそうですわね、リュウさま」とカレンが頷いた。「あたくしやサラと同じ１６歳くらいに見えますわ。…あっ、こっち向いた！」

ゲールの娘だろう赤犬ハーフの美少女が、にっこりと笑って頭を下げる。

シュウたちも続いて頭を下げる。

（中身はどっち似なんだろう…）

そんなことを考えながら。

そこでようやく、待っていた審査員が苦笑しながら口を開いた。

「ええーと、そろそろ審査に入っても大丈夫でしょうかね？」

「おっと」

そうだった。

と、審査員の方を向いたシュウとリュウ。

（落ちちまうよな、バカップルの審査なんて…）

そんな心配を感じながら続ける。

「どうぞ」

「では審査を始めますね。審査の質問は男性の方にさせていただきます。それで私に『バカップル』だと認められれば合格となります。結構厳しいですよ、私は。頑張って下さいね、皆さん」

うんうんと頷くシュウとリュウ。

（ああ…、落ちる……）

と確信した。

――のだが。

「リュウさまは奥様、シュウくんは彼女の、どんなところに惚れましたか？」

「全部っ……！」

シュウとリュウ、それはもう顔を恍惚とさせながら即答した。

リュウ、シュウの順に続ける。

「愚問だぜ審査員。こんな絶世の美女で中身も可愛くて巨乳で夜には俺がゾクゾクするよーなイイ声出す女なんて他にいねえ。ちなみに最大の萌えポイントは猫耳とつやっつやの尾っぽだ。おまえこんな美しい尾っぽ他に見たことあっかー？　キラの尾っぽのブラッシングが俺の日々楽しみにしている日課だぜ。ああでも、それ以上に楽しみにしてる日課は1日最低5発ヤることだ。5発目あたりからの泣き声なんて、もうたまんねーの」

「あはは！　なーに面白いこと訊いてんすか審査員さーん！　カレンのどこに惚れたかなんて、ちょっと見れば分かることじゃーん！　こおおぉぉぉぉんな可愛い女の子、他にはいないでしょ？　見てくださいよ、このプニプニほっぺ！　気持ちいーんだコレが！　それから二の腕と太股も！　赤い髪も可愛いでしょ、赤毛の○ンみたいで！　ああでも、もちろん○ンよりカレンの方が何百倍も可愛いっすけど！　え？　見りゃ分かる？　そうですよねすみません、あはははは。あとあと！　オレ的最大萌えポイントはこのカレンの小さな手！　子供みたいな小さな手！　ああもう、かぁ～～～わいいん……（ハート）」

シュウとリュウの審査の結果は。

「はい、お2人とも文句なしの合格で～す！」

「――何ィっ！？」

シュウとリュウ、驚愕。

「なっ、何故だ…！　シュウは惚れた欲目でバカもろ出しだったが、

俺は正直に答えただけだというのにっ……！」

「なっ、何故だ…！　親父の合格は誰が見ても分かったことだけど、オレは決してバカなことは言ってねーぞっ……！」

「――って…！？」

「――って…！？」

お互いの顔をみたシュウとリュウ。

「んだと！？　バカはそっちじゃねーかっ！！」

喧嘩の開始。

「……。ねえ、レオ兄」

「……。何？　サラ」

「バカすぎて突っ込めないんだけど」

「うん、僕もだよ。でもとりあえず…」と、レオンが苦笑した。「リュウとシュウに倣って、『全部っ……！』って答えれば僕たちも何とか受かりそうで安心したよ」

「えっ！？」と声をあげたミヅキ。「それはあのバカ面付きでですか！？　レオンさん！？」

「いや、うん…。僕も気が進まないんだけど、そうしないと落とされそうじゃない？」

「……た、たしかに」

ごくりと唾を飲み込み、覚悟を決めたレオンとミヅキ。

審査員が近づいてくると、同時に口を開いた。

「サラ、ちょっと後ろ向いてて」

「レナちゃん、ちょっと後ろ向いてて」

そしてサラとレナが背を向けると、レオンとミヅキは審査員の質問に答えた。

「全部っ……！」

とシュウとリュウに倣って、顔を限界までウットリとさせながら。

正直、恥ずかしかった。

ちなみにグレルは何の恥ずかしげもなく、レオンとミヅキに続いた。

「ぜ～～んぶっ♪」

そしてシュウとカレン、リュウとキラに続いて、サラとレオン、マナとグレル、レナとミヅキも無事に合格することができた。

そして始まった『ベストバカップルコンテストＩＮ文月島文月町

４丁目の文月公園』。
審査を通ることが出来たカップルは全１００組。

ゲール夫妻のいる大きなステージの左右に２つずつ並ぶ、小さめのステージ。
まずはそれらに２５組ずつ分けてクイズが出される。

エントリーナンバー１番のリュウとキラ、２番のシュウとカレン、３番のサラとレオン、４番のマナとグレル、５番のレナとミヅキは、ステージＡにいた。
女は用意されている椅子に座り、その後方に男が立つ形で、全２５組のカップルが横一列に並ぶ。

その下の観客席には、ミラとリン・ラン、ユナ、ジュリ、リンク一家が応援として最前列に座っていた。

「皆まかせたでえぇぇ！　おれら一家を救っとくれやあああぁぁぁあ！」

「キラァァァァァァ！　がんばるのだあああああああっ！」

「リュウ兄ちゃんとシュウくんにめっさ期待しとるからなあああぁぁぁあっ！」

必死なリンク一家。
それを見てリュウが溜め息を吐いた。

「うるせーなあ、あいつら。静かにしろっつの」

「オレはそんなことより、リンクさんの隣に座ってる子が気になる

……」

と、眉を寄せながらシュウ。

リュウもそちらに顔を向け、眉を寄せた。

「何でゲールの娘が観客席の最前列にいんだ？」

「ゲールさんがこのステージにいるわけじゃねーのに、あの子何でいるんだろ。このステージAに人がいっぱい集まってるから、ヤジウマ気分でかな」

「俺たちの中に目当てでもいたりしてな」

「ゲールさん似でドMだったら親父が目当てだろうな」

「師匠でもいいだろ、天然バカだが怪力だし。母親似でドSだったらシュウか？」

「なっ、何でオレなんだよ!?　オレMじゃねーよっ！」

「だってホラ、おまえいじると楽しいだろ？」

「ひっ、ひでえええええっ！」

カレンが溜め息を吐きながら振り返った。

「何を騒いでいるのよ、シュウ。そろそろ始まるみたいですわよ？」

「えっ？　あっ、本当だっ……」

ステージに司会者の男性が上ってきたのを見て、シュウは慌てて口を閉ざした。

司会者がこほんと咳払いをしてからマイクを握る。

「それでは始めましょう！　ベストバカップルコンテストＩＮ文月島文月町文月４丁目の文月公園～～～～～～っ！！」

パァーーーン！

とステージ脇から巨大なクラッカーが発射すると同時に、盛り上がる観客席。

ゲールの娘は胸の前で小さく拍手している。

どうしてもゲールの娘が気になって目が行ってしまうシュウ。

（本当、何でソコにいるんだろ。にしてもＳには見えねーから、Ｍか？　じゃあ親父かグレルおじさん目当てかな）

ゲールの娘と目が合った。

にっこりと微笑むゲールの娘。

シュウも軽く笑顔を返した。

（まじで可愛い子だよなあ、カレンには劣るけど）

リュウが小声でぼそりと言う。

「やっぱシュウ目当てじゃねーの」

「まさか」

とシュウも小声で返したとき。

司会者が再び口を開く。

「では簡単にルール説明をしたいと思います。このステージでは、彼氏・彼女、または旦那様・奥様に関するクイズを７９問出します。彼女または奥様に関するクイズの場合は、彼氏または旦那様にマイクを向けるので口でお答えください。一方、彼女または奥様は正解をボードに書いてくださいね。クイズは徐々に難易度が上がっていき、間違えたカップルは失格となります。７９問目を正解することのできたカップルだけが最終ステージに進出できるので、見事審査を突破してきたバカップルの皆さま！　頑張って下さい！」

そして始まるクイズ。

「では第１問！　まずは基本的なことから！　彼女・奥様の身長は？　はい、彼女・奥様ボードに正解をお書きくださ～い」

女たちがマジックペンを動かしている間。

シュウは再びちらりとゲールの娘を見た。

（……何でオレの方見てんだろ）

シュウと目が合い、まだゲールの娘が微笑む。

リュウが溜め息を吐いた。

「おまえ浮気すんなよ、シュウ」

「しっ、しねえ――」

「はい、女性の皆さん正解を書き終わりましたね！」

と、司会者。

シュウは慌てて口を閉ざした。

「ではエントリーナンバー1番！　もはや知らない者はいない！　リュウさま・キラさまご夫妻から聞いていきましょう！」

観客席から飛んでくる声援。

リュウの口元に近づけられるマイク。

「はい、リュウさま。お答えをどうぞ！」

「155」

「正解！」

沸き起こる歓声。

シュウ、苦笑。

（何でこれしきのことで歓声が……）

シュウの方へと近づいてくるマイク。

「では2番の美少年シュウくん・美少女カレンちゃんカップルに行

きましょう！　シュウくん、お答えをどうぞ！」

「あ…、はい。１５２」

「正解！」

飛び跳ねるリンク一家の傍ら。

ゲールの娘が拍手した。

（あれ……？）

シュウ、心の中で首をかしげる。

「次、３番のまるでモデル同士のようなレオンさん・サラちゃんカップル！　レオンさん、お答えをどうぞ！」

「１６９です」

「正解！」

ゲールの娘は拍手しない。

「次、４番・驚きの年の差、グレルさん・マナちゃんカップル！　グレルさん、お答えをどうぞ！」

「１５８だぜ～っと♪」

「正解！」

拍手しない。

「次、５番のなんとも可愛らしいミヅキくん・レナちゃんカップル！　ミヅキくん、お答えをどうぞ！」

「１５８です」

「正解！」

拍手しない。

６番以降のどのカップルが正解しても、拍手しない。

リュウが言う。

「やっぱりおまえ目当てじゃねーか」

「んなわけねーよ」

「おまえ本当ニブいな。次の第２問のときも見てろよ。ゲールの娘、ぜってーおまえが正解したときだけ拍手すんぞ」

「んなバカな」

と、思うシュウだったのだが。

「では第２問のお答えをどうぞ！　リュウさま、奥様のブラのカップは？」

「Ｆ」

「正解！」

拍手しない。

「シュウくん、お答えをどうぞ」

「え、えと、C…」

「正解！」

拍手した。

「レオンさん、お答えをどうぞ」

「Eです」

「正解！」

拍手しない。

「グレルさん、お答えをどうぞ」

「Bだぞ～っと♪」

「正解！」

拍手しない…。

「ミヅキくん、お答えをどうぞ」

「Bです」

「正解！」

拍手しない……。

（な…なんで？？？）

心底疑問に思うシュウ。

じっとゲールの娘を見つめる。

ゲールの娘が微笑む。

そして小さくシュウに手を振った。

首をかしげながら、とりあえず手を振り返すシュウ。

リュウが深く溜め息を吐いた。

「変なのに好かれやがって……」

「へ、変なのって――」

「変だろ、ドMとドSの間の娘なんだから」

「じゃ、中間取ってドN……ド・ノーマルかもっ…！」

「ねーな」と、リュウがもう一度溜め息。「ったく、厄介なことになりそうだぜ」

「な、なんだよソレ…？」

ぼそぼそと喋っているシュウとリュウ。

カレンが顔を傾けて、ちらりと見た。

シュウのまだ振っていた手を見て首をかしげる。

(誰に振ってるのかしら)

と、観客席に顔を向けたカレン。

最前列で小さく手を振っているゲールの娘を見つける。

(何…？　あの子、シュウのファン……？)

カレンの隣に座っているサラが溜め息を吐いた。

「はぁ…。ライバル出現だね、カレン」

「えっ？」

と、サラに振り返ったカレン。

「一応、うちの親父が世話になってるとも言えるゲールさんの娘…。普通のファン相手とは違って、兄貴シカト出来ないだろうし…。あの子、親が親だから色々すごそうだし…。いやーな予感するなあ……」

「……」

カレンは戸惑いながらゲールの娘に目を戻した。

ゲールの娘の目もシュウからカレンに移る。

そして、カレンににっこりと笑顔を向けた。

その笑顔の意味は。

（ライバル宣言……ですわ！）

第１００話　ベストバカップルコンテスト　～前編～（後書き）

新連載の件に関してメールくださった読者さまへ。
そう言ってくださると助かります。今は本当にきついのですよ（´；ω；`）

１番希望ですね、分かりました！
連載始められるようになったら後書きでお知らせしますね！

昨日の２１時１２分ごろメールくださった読者さまへ。
１００あり！ヾ（＊´∀`＊）ノ〃

血糊（ちのり）です。
ルビふっときま！

てか、メールがコナイヨ……ｏｒｚ

第１０１話　ベストバカップルコンテスト　～中編～

続く『ベストバカップルコンテストＩＮ文月島文月町４丁目の文月公園』。

それは５問目のこと。

「はい、グレルさんお答えください！　彼女の体重は！？」

「んー、マナの体重かあ。抱っこしたときの重さを考えるとー……５gだぞーっと♪」

「ご、５ぐら……？　５gでよろしいのですか？」

「おうっ♪」

「え、えと……、ざ、残念！　不正解です！」

マナ・グレル組、早くも失格。

シュウ、苦笑。

（さすが天然バカおっさん…。その脳内、一度見てみたいぜ……）

それから２３問目のこと。

「はい、ではレナちゃん！　彼氏はレナちゃんのどんなところに惚れたと思うかな？」

「え、えーとぉ……」と戸惑うレナ。「い…胃袋が小さいところっ？」

「う～～ん、残ね～～～んっ！　正解は『可愛いところ』でした～～～っ！」

レナ・ミヅキ組、失格。

シュウ、またもや苦笑。

（仕方ねーよ、レナ。実際は付き合ってねーんだから…。でもおまえ、ミヅキが初めてうちに来たときに大皿の山盛りカレー食ってんだから、胃袋でかいことなんてバレてんぞ……）

そして現在５０問目。
もう結構な難易度だ。
シュウたちのいるステージＡは、２５組のカップルのうち、マナとグレル、レナとミヅキを含めて１４組が失格となっていた。

「はい、ではカレンちゃん！　彼氏・シュウくんの８番目に好きな料理は！？」

「焼きソバですわ」

「正解！　いや～、キラさまに続いて余裕ですね～！」

シュウは安堵の溜め息を吐いた。

（あー、良かった。まさか８番目なんて訊かれるなんて…。お互いの好きな料理トップ２０を必死に覚えたかいがあったぜ……）

ちらりと斜め前のサラを見るシュウ。

（ま、次のサラも余裕だろうな。サラがガキの頃から超すーげー愛するレオ兄の、たかが8番目に好きな料理ごとき間違えるわけがねえ）

と思ったのだが。

「次、サラちゃん！　はい、お答えくださーい」

「きりたんぽ鍋」

「あーっ、残念！　不正解です！　ステージから降りてくださーい」

「えっ…！？」

と意外なことに思わず声をあげたシュウとカレンの前。

サラがレオンの手を引っ張って通り過ぎ、ステージの階段を下りていく。

「どうしたの？　サラ。きりたんぽ鍋は――」

「４６番目に好きな料理だよね、分かってる。ごめん、アタシわざと間違えたんだレオ兄」

「えっ？」

観客席のリンク一家の前へとやってきたサラが言う。

「にしても喉渇いちゃった、アタシ」

「あ、僕が出店で飲み物買ってくるよ。ビールでいい？」

「うん、ありがとレオ兄」

リンク一家、ミラ、リン・ラン、ユナ・マナ・レナ、ジュリ、グレルと続く。

「あー、レオン。おれもビール」

「わたしもビールが良いぞーっ」

「うちファン◯グレープな」

「レオ兄、私もビールがいいわ♪」

「わたしたちはビールとリンゴ飴がいいぞーっ」

「レオ兄〜、あたしもビールね」

「あたしも…」

「あたしもー」

「ぼくオレンジジュース」

「オレはビールとたこ焼きと焼きソバとお好み焼きとチョコバナナと――」

「はいはい」と、レオンが苦笑しながらグレルの言葉を遮った。「持ちきれないからグレルも来て」

「ぼくも手伝うよ、レオンさん…」

と苦笑しながらミヅキ。

レオンとグレル、ミヅキが去っていくと、サラがリンクに言った。

「詰めて、座れないんだけど」

「お、おう、ごめん。って、おまえが端っこに座ればええやんかサラ」

「いーから早く。アタシはここがいいの」

「まったくもう、ワガママやなあ。みんなー、1つずつ席向こうにズレてやー」

サラは空けられた席――リンクとゲールの娘の間に座った。

リンクが訊く。

「ところで、どうしたんサラ？　おまえが50問目で間違えるとは思ってへんかったで」

「ごめん、リンクさん。でも『おしゃれで賞』は取れると思うから」

「謝らんでええけど。リュウたちかシュウたちが大賞取ってくれる

やろうし……っていうか、ゲールが去年までの優勝者っていうのは驚きやったわ。そしてあいつが結婚してたのがもっと驚きやったわ。子供とかおるんやろか」

「いるよー、ここに」

とサラがゲールの娘に目を向けると、まだそのことを知らなかった一同が仰天して振り返った。

「ええっ！？」

と、椅子から立ち上がってゲールの娘を見る。

仰天している一同の顔を見ながら、ゲールの娘がにっこりと笑った。

「初めまして。わたし、キャロルと申します」

――うそ、可愛い……！

衝撃を受ける一同。

サラが溜め息を吐いた。

「早くおとなしく席に着きなよ。そんなにガン見してたら失礼だってば」

慌てて席に着く一同。

キャロルがステージの方を向いて小さく拍手する。

「シュウさん、すごいです」

「……」

ゲールの娘――キャロルの顔を、サラは覗き込むような体制で凝視する。

赤犬の耳。

胸まである焦げ茶色のさらさらとした髪の毛。

垂れ目がちで、気の弱そうな顔つき。

細い首から発せられる声は小さい。

リンクが苦笑しながら、軽くサラの頭を叩いた。

「くぉら、サラ。ガン見しとんのはおまえやないかい」

頭を擦りながら体制を戻したサラ。

ステージの方を見ながら口を開く。

「…あんた、キャロルっていったね」

「はい、サラさん」

「年は」

「16です」

「ふーん。アタシやカレンと一緒か。職は」

「普通の学生です」

「ふーん、一般人か。道理でギルドイベントのときに見ないわけだ」

「はい。このたび皆さまにお会いできて光栄です」

「あそ。それよりアタシ、クイズわざと外して来たんだけどさ。うちの親父、終わったらそっこー帰るだろうから、あんたと話する暇ないと思って」

「はい…？」

「ねえキャロル。あんたさ、いつから兄貴のこと好きなわけ」

「えっ！？」と声を上げて、立ち上がったリンとラン。「キャ、キャキャキャ、キャロットさんっ！」

「わたしニンジンではありません」

「キャ、キャロブさん！」

「マメ科イナゴマメ属でもありません」

「キャ、キャ、キャ……」

「キャロルです」

「キャロルさんっ！」

「はい、リンさんランさん」

「兄上のこと好きですかあああああ!?　なのだ！」

「はい」

と、にっこりと笑って答えたキャロル。

「――リ、リアリィ!?　なのだっ……！」

リン・ラン、大衝撃。

「うるさいよ、リン・ラン。おとなしく座ってな」

「…はっ…、はいですなのだっ、サラ姉上っ…！」

しぶしぶと席に着くリン・ラン。

それを確認したあと、サラがもう一度キャロルに訊いた。

「で、いつから兄貴のこと好きなわけ」

「今日からです」と、またにっこりと笑ったキャロル。「一目惚れしました」

「っそ。言っておくけど、兄貴と親父は遠くから見てんのが一番いい男だよ」

「そんなことないです。わたし、とても感じるんです」

「ドコが？」

「――って、おま…」

リンクがサラの頭を軽く叩いた。

顔を赤くしながら突っ込む。

「そこ、『何を？』って訊くとこやっちゅーねん」

サラが後頭部を擦りながら訊きなおす。

「何を感じんの？　『運命の赤い糸』とかバカなことほざいたらこの場でその首へし折ってや――」

「こっ、こらサラっ！」

慌ててサラの口を塞ぐリンク。

たった今戻ってきたレオンに言う。

「レオン、おまえの彼女何とかしてやっ！　ゲールの娘さんに絡んで絡んで！　しかも一般人やっちゅーのにっ…！」

「えぇ？　…まったくもう、サラ？」と眉を吊り上げるレオン。「そんなことしちゃ駄目でしょ？」

「だって……」

と口を尖らせるサラ。

「だってじゃないよ。サラ、君はハンターなんだからね？　一般の方を助けることが仕事なんだからね？　何があっても一般の方に手

をあげちゃいけないよ？」

「まだあげてないもん」

「まだって何？　これからあげようっていうなら怒るからね僕は」

「……」

レオンの顔を上目遣いで見上げるサラ。
すでに怒っているレオンの顔を見て、俯いた。

「…ごめんなさい……」

「よし、良い子だね」

そう言って笑顔に戻ったレオン。
サラの頭を撫で、キャロルに謝る。

キャロルに頭を下げているレオン、それに続いたリンク。
それを見ながら、ぎゅっと奥歯を噛み締めるサラ。

（アタシたちハンターは一般人よりもとても強い。でも、一般人を相手にしたらとても弱い…。レオ兄、リンクさん、頭下げさせてごめん……）

ステージの上のカレンを見つめる。

（アタシの親友が、泣くことなんてありませんように……）

シュウとカレン、リュウとキラ、見事７９問のクイズを全て正解。
ゲール夫妻の待つ最終ステージへと進むことに。

「ま、余裕だったな」

と、リュウ。
シュウとキラが溜め息を吐いた。

「母さんが親父の答えを予想して合わせてくれたからだっての…」

「まったくだぞ…」

「はらはらしましたわ、リュウさま」

と苦笑するカレン。
リュウ、キラ、シュウに続いてゲール夫妻の待つステージの階段を上る。

ふと観客席の最前列に目を向けると、またリンクの隣にキャロルの姿が見えた。
シュウを目で追いながら微笑んでいる。

（あの子の名前はついさっきサラから聞いたわ。キャロルちゃんて、どういう子なのかしら。おとなしそうな感じがするけれど、マリアちゃんみたいに積極的な子だったりするのかしら……）

不安に駆られたカレン。
シュウの傍らに並び、シュウの手をぎゅっと握る。

「ん？」と、シュウはカレンに目を落とした。「なーんだよ、カーレン？」

と笑いながら、繋いだ手をぶんぶんと振る。

「オレの手ぇ握ってたいのかよっ？　まったく、かぁーわいいやつめっ♪　ぐふふふふ」

「シュウおまえ、本当このコンテストにふさわしいバカだな」

「う、うるせーよ親父っ…！」

赤面しながら咳払いをしたシュウ。

「はい、では最終ステージまで勝ち抜いたカップルの皆さま、エントリーナンバー順に並んでくださーい！」

との女性司会者の声が聞こえて、カレンの手を引っ張って指定の位置へと向かった。

ゲール夫妻を含めて、最終ステージに参加するカップルはわずか6組。

並んだ位置から判断すると、ゲール夫妻は最後にクイズに答えるようだった。

「はい、皆さん並びましたね！」と司会者が続ける。「では最終ステージ始めまあ～～～～～～すっ！！」

さっきよりもさらに盛り上がる観客席。

余裕だと言わんばかりに欠伸をしているリュウ。
その傍らにいるシュウは、責任感から来る緊張と動悸に襲われていた。

（どんな問題出されんだろ…。ここまで来りゃあ、すーげー難易度たっかそうだぜ…！　大賞の５００万もらって、リンクさんたちを助けないとっ……！）

そして始まる残りのクイズ２０問。

「第８０問！　９日前の１７時３０分、彼女・奥様は何をしていた？」

シュウ、とりあえず安堵。

（９日前のことなんて普通はすぐ思い出せねーけど……。あー良かった。オレとカレン、師と弟子の関係で…。親父も大丈夫だろうな。その時間、母さんは決まって同じことしてるし）

と思ったのだが。

「ではリュウさま、お答えくださ～い！　９日前の１７時３０分、キラさまは何をされていましたか？」

「その晩どういう風に俺に抱かれるか想像して胸を膨らませてた」

と自信満々に堂々と答えたリュウ。

「残念！　不正解ですリュウさま～～～っ！」

「――なっ、何ぃ!?　おい、キラおまえ正解何て書いたんだ!?」

「夕飯の支度だぞ…」

「俺に抱かれること考えながらだろ!?」

「……。…失格になってしまった、ステージから降りるぞリュウ」

「お、おいキラ!?　おまえ四六時中俺に抱かれることで頭いっぱいなんじゃねーの!?　なぁ、そうだろ!?　何、答え書き間違ってんだよオイ!?　人前だからって恥じてんじゃねーぞ!」

苦笑しながら階段を降りていくキラと、騒がしく階段を降りていくリュウ。

シュウ、赤面。

穴があったら入りたいと思う。

（親父、あんた……このコンテストにふさわしすぎるぜ。見ろ、観客からの受けはバッチリだ……）

司会者がシュウの口元にマイクを寄せる。

「ではシュウくん、お答えをどーぞ!」

「あ、はいっ…。一緒に仕事してました」

「正解!　シュウくんとカレンちゃんは恋人同士で、なお且つハンターの師と弟子の関係だそうです!　仲がよろしくて羨ましいです

ね～～～っ！」

「ども…」

司会者が次のカップルへと移動すると、カレンが顔を強張らせながら振り返った。

「ど、どうしましょうシュウ…！　最終ステージの1問目からあたくしたちだけになってしまいましたわよ……！？」

「お、おう。責任重大だぜっ…！　難易度たけーのに、ゲールさん夫妻よく毎年大賞取ってんなっ……！」

と、ゲール夫妻に顔を向けたシュウ。

他のカップルに比べて、どちらも落ち着きを払っていた。

そしてその解答は。

「はい、ではもう皆さんご存知、王者・ゲールさんケリーさんご夫妻の番です！　ケリーさんはボードに大変細かく正解を書いておりますが……、全部言い当てなければ正解にはなりません！　でも毎年のごとく余裕でしょうね、ゲールさん！　お答えをどうぞ！」

「…9日前の17時30分のケリーなら…、私が自宅玄関の外でこっそりと『最強モンスターの牙と爪写真集』を見ながらハァハァしているのを見つけてブチ切れ…、私の腹を爪で割いて返り血を浴び…、快感でますますハァハァしてしまう私から『最強モンスターの牙と爪写真集』を取り上げて廃品回収のトラックの荷台に放り投げ…、泣き叫ぶ私に『近所迷惑だから喚くんじゃないよ！』と言いな

がらメガトンパンチを食らわせて５０ｍ先のマイケルさん宅の犬小屋の前まで吹っ飛ばし…、『あと１０分で夕飯だからそれまでに帰って来んだよ！』と大声で怒鳴り…、そして家の中に入って『変態夫を持つと苦労するよ…』と深い溜め息を吐いていた…。…あれは１７時３０分０３秒から１７時３０分５８秒までの出来事だった…」

「大・大・大・正か～～～いっ！！　ゲールさん、見事全て言い当てました～～～っ！！」

シュウとカレン、驚愕。

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっとシュウ！？　あ、あああ、あのお方すごくってよ！？　何故そこまで細かいことまで言い当てられるのかしら…！？」

「お、お、お、おう！　しかも何で奥さん…、えと、ケリーさん？が、家の中に入ってからの台詞と行動まで分かるんだあの人……！？」

「細かい時刻まで分かってましたわよ……！？」

「おまけにその内容がバカップルにふさわしいぜ……！」

「ね、ねえ、シュウ？　あたくしたち…」

「な、なあ、カレン？　オレたち…」

シュウとカレンは手を取り合い、ごくりと唾を飲み込んだ。

（大賞奪取、（かなり）危うしっ……！！）

第１０１話　ベストバカップルコンテスト　～中編～（後書き）

２４日の２２時１０分にメールくださった読者さまへ。
ちょっと今回のメールの内容は色々と私とカブってて驚きました…
…ｗ
毎日牛乳１リットル飲むの私も昔やってましたけどー、あれ効果な
かったよ？ｗ　まーったく身長伸びなかった（笑）

それからゴメンナサイ。
私、赤毛の○ンは『懐かしのアニメ特集』とかで少ししか見たこと
ないｗ　本文に○ンが出て来たのはね、シュウが勝手に喋ったんで
すｗ
キャラって結構勝手に喋ったり動いたりするんですよ、まじで。

それからゲールの娘――キャロル…。
ちょ、すーごいキャラ想像しましたねｗ　そしてそれにゾクゾクす
るあなたは私と一緒……（笑）
でもキャロルのキャラはちょっと違うかなー……、ヤバイことはヤ
バイんだけどｗ

そして…。
マダ、メールがコナイヨ……。

第１０２話　ベストバカップルコンテスト　～後編～

観客席の最前列。
失格になってステージから降りてきたリュウの胸を、リーナがぽかぽかと殴っている。

「何しとんねん！　何しとんねんリュウ兄ちゃん！　めっさ期待しとったのに！　最終ステージの１問目から何ボケかましとんねん！　バカップルコンテストやからってバカ晒して笑い取らんでええっちゅーねん！　賞金取ってこいって話やねん！　まったく！　ドタマかち割って脳ミソチューチュー吸ったろかっ！」

「何言ってんだ、ボケかましたのはキラの方だぜ」

「自分、ほんまにバカちゃうか！？　バカップルコンテストでバカすぎて失格になるなんて、失笑して鼻水出たわ！」

「拭けよ」

「拭いたわ！　大人の女が鼻水たらしたまま歩くかい！」

「ハン」

「何やねん、その失笑！」

「まだ乳もケツもねーのに何が大人の女だ」

「うっさいーー」

「片腹痛いわ」

「なっ、なんやてゴルアァァァァァァァァァっ！！」

ボカカカカカカカカカっ！！

とリュウの胸を思いっきり殴るリーナだが、リュウにとっては痛くも痒くもない。

「あーもー、うるせーなあ。おいリンク、おまえんとこのガキ黙らせろよ」

「……なあ、リュウ」

と言いながら、ステージの方を見て顔を強張らせているリンク。

「あ？」

「ゲール夫妻、めっさ強い……」

「は？」

とステージの上にいるゲール・ケリー夫妻に顔を向けたリュウ。

司会者が声をあげている。

「大・大・大・正か～～～いっ！！　ゲールさん、見事全て言い当てました～～～っ！！」

リュウは正解の書かれているケリーのボードに目を向けた。

そこにはやたらと長い文章。

「……。おい、ゲール（あいつ）、あれ全部言い当てたのか」

「おう…」

「す…、すげーな…。解答の内容も見事にバカだぜ」

「知っとったけど、只者やないわ…」

「シュウもバカだが、こりゃ敵わねーだろうな」

「やっぱそうやろか…」

「あかんっ…！　あかんわっ……！」

と狼狽するリーナ。

ステージに駆け寄り、ステージの床を両腕でバンバンと叩いて声をあげた。

「シュウくん、カレンちゃん!!　うちら一家の命預けたでええぇぇぇぇえええっ!!」

ステージの上のシュウとカレン。

そろって苦笑。

「あぁ…、大層なもんを預けられちまったなオレたち……」

「大賞取ってあげたいのは山々なのだけれど……」

アレが相手じゃ…。

と、ゲール・ケリー夫妻に顔を向けるシュウとカレン。
諦めモード。

「……なあ、カレン。せめて準優勝の『流石で賞』は取ろうな…」

「……そうね、頑張りましょうシュウ。賞金は大賞の半分になってしまうけど…」

「おう…。本当はオレたちと親父たちで『ベストバカップル大賞』と『流石で賞』取ろうと思ってたから申し訳ねえけど……」

「何も取らないよりはマシなのですわ…」

「おう…」

そして続くクイズ。

「う～ん！　最終ステージ第1問目から3組のカップルが失格になってしまいましたね！　優勝候補かと思われたリュウさま・キラさまご夫妻も、リュウさまの思いもよらぬ珍解答で脱落！　いや～っ、残念でした！」

珍解答…。

シュウとカレン、同意して赤面。

「では張り切って参りましょう！　第８１問！　５日前の昼食で、彼氏・旦那様が1口目に食べたものは!?　彼氏・旦那の皆さん、ボードに正解をお書きくださーい！」

シュウの顔が引きつる。

（こ、今度は5日前のことかよ…！　5日前の昼食って、何食ったっけ……!?）

記憶を巻き戻して思い出そうとするシュウ。

ふとゲールを見ると、何ら悩んだ様子なくすらすらとボードに正解を書いている。

ケリーも落ち着いた様子だ。

（やっぱすげーな、オイ…）

何とか思い出し、正解をボードに書くシュウ。

（オ…オレの方が間違ってたらごめん、カレン……）

司会者がカレンの傍らに並んだ。

「はい、ではカレンちゃん、お答えをどうぞ！」

「え、ええと……、醤油ラーメン……の、お汁？」

「はい、正解です！」

シュウとカレン、そろって安堵の溜め息。

リーナがまたステージの床を両腕でばんばんと叩いて声をあげる。

「シュウくん、カレンちゃん！　最終ステージはココ最近の過去か

らクイズ出されると見たでうちは！　ココ最近一ヶ月の一日一日を細かく思い出すんや！　どうでもええようなことも全部！」

と、言われても。

どうでも良いことまで思い出すのは難しい。

「…お、思い出せるかカレン」

「…む、難しいわシュウ」

「ま、まあ、まさか全てココ最近の過去から問題出されるわけねーよなっ？」

「え、ええ、そうですわよねっ…」

と、思ったのだが。

続いて出された問題。

第８２問目・４日前の彼女・妻の就寝時間（シュウとカレンはほぼ一緒に寝るので、何とか正解）。

第８３問目・１０日前の彼氏・夫の起床時間（シュウは１０個の目覚まし時計により、必ず早朝６時に起こされるので余裕で正解）。

第８４問目・１５日前の夜の営みで、彼氏・夫が求めてきた回数（シュウもカレンもまるで思い出せなかったので日々の平均回数を書いたら答えが一致してくれて正解。ちなみに２回）。

第８５問目・７日前の彼女・妻の着ていた服（暗黙の了解で大雑

把に『仕事用の服』で正解）。

ここに来てカップルが一組脱落し。

残りはシュウとカレン、ゲールとケリーの２組に。

「お…、おおおおっ！　カレン、『流石で賞』は確定だぞ！」

「ええ、シュウ！　やったのですわ！」

ステージ下から、再び飛んでくるリーナの声。

「何、『流石で賞』ごときで喜んでんねん！　ちゃんと大賞取ってや！」

興奮したリンク、ミーナと続く。

「すごいで～！　シュウ、カレンちゃん！　大賞いけるかもしれへんわ！」

「がっ、がんばるのだシュウ、カレェェェェェェェェェンっ！」

「と、言われても――」

「シュウ、カレン頼んだぞ！」と、シュウとカレンの言葉を遮ったキラ。「私はミーナに賞金を取ってやれなかった…！　可愛い可愛いミーナのため、おまえたちが大賞を取ってくれ！」

さらにサラとレオン、グレル、マナ、レナ、ミヅキと続く。

「兄貴、カレン！　アタシとレオ兄『おしゃれで賞』の１０万しか

取れないし頑張って！」

「この調子だと行けるかもしれないよ、シュウ、カレンちゃん！」

「おまえら頑張れよ～っと！　大賞ゲットだぜ～っと！」

「兄ちゃん、カレンちゃん…。リンクさんたちのためにがんばって…！」

「そうだよ！　兄ちゃんカレンちゃん、がんばってえええええええええっ！」

「ここまで来たら大賞取ってきてよ、シュウ、カレンちゃん」

と皆で応援するが。

無理と言わんばかりに苦笑しているシュウとカレン。

リーナがリュウに振り返って声をあげた。

「リュウ兄ちゃん、シュウくんとカレンちゃんのこと何とかしてや！」

「ったく、仕方ねーなあ」

と、リュウが溜め息を吐いた。

シュウの顔を見る。

「おい、シュウ」

「な、なんだよ親父」

「大賞取れなかったら一ヶ月カレン没収な」

「――!?」シュウ、大衝撃。「（ゲール夫妻に）負けられねええええええええええっ!!」

続いてカレンを見るリュウ。

「おい、カレン」

「は、はいリュウさま」

「大賞取れなかったら…、うーん…、そうだな。おまえの場合は……、人形破壊」

「――!?」カレン、大衝撃。「いっ…いやあああああああああああっ!! 絶対に負けられないのですわあああああああああああああああっ!!」

シュウとカレン、顔面蒼白。
おまけにちょっと涙目。

そして引き続き出されるここ最近からのクイズ。
頭の中、シュウとカレンは死に物狂いで記憶を巻き戻す。

大賞を取れなかったらと思うと、もう気が気じゃない。
リュウの言葉は冗談とは思えなくて。

第８６問、

「正解！」

第８７問、

「また正解！」

第８８問、

「またまた正解！」

第８９問、

「またまたまた正解！」

第９０問、第９１問、第９２問……。

そして第９９問、

「キタコレ！　シュウくんカレンちゃんカップル、正解です！　すごいっ！　これはすごいですっ！　まさに最終ステージにふさわしい戦いぶりです！」

リンク一家が興奮して飛び跳ねている。

「いよっしゃあああああっ！　シュウくん、カレンちゃん行っけえええぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

「すごいっ！　すごいでっ！　シュウ、カレンちゃん！　このまま大賞掻っ攫ってきてやあぁぁああああああっ！！」

「シュウ、カレン、頼んだのだあああぁぁぁぁあああああぁぁあっ！！」

言われなくたって大賞を掻っ攫う気のシュウとカレン。
もう目がギラギラしている。

「来るぞ、カレン…！」

「ええ、シュウ…！」

「ついに…！」

「ついに…！」

第１００問が……！

「はい、では…！　ついに、第１００問です！　すごいです！　ゲールさんケリーさんご夫妻とここまで戦ったカップルは初めてです！　初めてです！　初めてなんです！　ドキドキわくわくキャッキャウフフむらむらの初体け～～～～～～んっ！！」

と、司会者。
観客と同様にえらく興奮している様子。

「どちらのカップルも外した場合、または正解した場合は延長戦となります！　では行っちゃいましょう！」

緊張しているシュウとカレン。
自分の耳に自分の動悸が聞こえる。

その傍らでは、相変わらず落ち着いているゲールとケリー。

「カレンちゃん、ケリーさんボードとペンをご用意ください！」

どうやら第１００問は彼女・妻に関するクイズのよう。

カレンとケリーがマジックペンの蓋を抜く。

「はい、準備はよろしいですね…！？」

ごくりと唾を飲み込み、頷いたシュウとカレン。

軽く頷いたゲールとケリー。

「では第１００問っ！　１４日…」

１４日前…！

記憶を巻き戻し始めるシュウとカレン。

「…後の、彼女・奥さんの下着の色は！？」

――！？

驚愕。

（じゅっ、じゅうよっかご……！？）

激しく狼狽するシュウとカレン。

（みっ、未来からクイズ出してんじゃねえっ！！　んなの知るかってんだよっ！！）

（2週間後の下着まで決めてないわよ、あたくしっ！！）

ゲールとケリーに目を向けてみる。

何ら慌てた様子もなく、すらすらとボードに正解を書いているケリー。

同様に何ら慌てた様子もなく、答えるときを待っているゲール。

その姿から察するに、正解するのは余裕のようだ。

（こうなったら一か八か……！）

覚悟を決めたシュウとカレン。

（オレの希望を答えるっ！！）

（あたくしが一番持っている色を書くわっ！！）

ケリーに続いて正解をボードに書くカレン。

書き終わったら観客に見えるよう、ボードを膝の上に立てる。

それを見て司会者が再び口を開いた。

「はい、カレンちゃんとケリーさん、正解を書き終えたようですね！　ではシュウくんとゲールさんにお答えを聞きましょう！」

シュウの口元に近づいてくるマイク。

シュウとカレンどころか、観客席中に走る緊張。

「シュウくん、お答えをどうぞ！　カレンちゃんの１４日後の下着の色は！？」

「…っ……じゅっ、じゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅ純白ぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！」

「――いっ、いやあああぁぁぁぁああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」

と、響き渡ったカレンの絶叫。

椅子から転げ落ちそうになったカレンを、シュウが慌てて支える。

「おっ、おいカレン！？　どうし――」

「シュウくん、不正解ですっ！！」

「――！？」

シュウ、大衝撃。

カレンに続いて絶叫する。

「いっ…、いやだあああぁぁぁぁぁぁぁああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ステージに近寄り、シュウの顔を見て口を開く。

「大丈夫ですよ、シュウさん」

「えっ…？」

シュウはキャロルの顔を見た。

微笑んでいる。

「わたしの父と母も不正解なら、延長戦になります」

「でもっ……！」

と、シュウはゲールとケリーに顔を向けた。

余裕綽々としているこの夫婦が、クイズを間違えるわけがないと思う。

司会者がゲールの口元にマイクを近づける。

「これで見事正解すれば、またもや大賞を掻っ攫うことになりますね、ゲールさん！　ではお答えをどうぞ！　１４日後のケリーさんの下着の色は！？」

ケリーがボードに書いた正解は『ボルドー』。

ゲールが口を開く。

「…１４日後のケリーの下着の色は…、ずばりボ――」

ゲールが言葉を切った。
ゲールの視線の先にはキャロル。
小さく首を横に振っている。
「…違うのか…」
と小さく呟いたゲール。
言い直す。
「…黒かな…」
「あ～～っ！　残念ですゲールさん！　不正解です！」
「…え…？」
と首をかしげるゲール。
それと同時に、復活したリンク一家。
「いよっしゃあああああっ！　あの変態外しよったで！　シュウくん、カレンちゃん、延長戦や！」
「がんばってやシュウ、カレンちゃんっ！！」
「今度こそ頼むぞおおおおおおおおっ！！」
シュウとカレンも復活。
「おお…！　おおお…！　カレンっ……！」

「ええ、シュウ…！　奇跡の延長戦なのですわっ……！」

そして気を取り直して挑戦する第１０１問。

が、

「残念っ！　不正解です！」

「――！？」

シュウとカレン、再び絶叫。

リンク一家、再び瀕死。

だが、

「残念っ！　ゲールさんケリーさんも不正解につき、引き続き延長戦です！」

「――えっ…！？」

驚いてゲールとケリーを見たシュウ。

２問連続で外して困惑しているようだった。

そしてキャロルに目を向けたシュウ。

微笑んでいる。

「大丈夫ですよ、シュウさん」

「……」

ゲールとケリーを見、もう一度キャロルを見たシュウ。

（まさか、この子がゲールさんたちに外させて……？）

再び延長戦に挑みながら、キャロルの様子を見つめる。

第１０２問、シュウ・カレン、不正解。
そしてゲール・ケリーも不正解。

（やっぱり…）

第１０３問、シュウ・カレン、不正解。
そしてまたゲール・ケリーも不正解。

（この子、ゲールさんたちが正解しようとすると首を横に振って…）

第１０４問、シュウ・カレン、やっと正解。

そして……、

「あああああああっ！　残念！　王者敗れたり！　『ベストバカップル大賞』はシュウくん、カレンちゃんに決定で～～～～～～すっ！！」

舞い上がるカレン、リンク一家、シュウの家族、レオン、グレル。

（オレたちが大賞を取れるようにしてくれてたんだ……）

シュウの瞳に映る、キャロルの笑顔。

「おめでとうございます、シュウさん」

「…ど……も……」

とシュウは複雑な気持ちで軽く頭を下げた。

素直に喜べない。

正当な勝ち方ではなかった。

本当ならゲール・ケリー夫妻が大賞を取っていたのだから。

でも、

「はい、リーナちゃん！　約束の５００万ですわあああああっ！」

「ありがとカレンちゃあああああああああんっ！」

「これでおれら食いつなげるわあああああああああっ！」

「シュウ、カレン、ありがとなのだあああああああああっ！」

リンク一家を助けることができた。

でも正当な勝ち方じゃなかった。

でもリンク一家を助けることができた。

でも……。

「シュウ？」と、カレンがシュウの顔を覗き込んだ。「どうしたの

かしらっ？　喜ばないのかしらっ？　あたくしたち、大賞取れたのよっ？」

「…お、おう……、まだ実感がわいてなくてさっ…」

「んもう、鈍いんだから！」

とカレンが笑ったあと、ステージの上にやってきたサラと抱き合って小躍りを始めた。

シュウの視線は再びキャロルに。

戸惑いながら声をかける。

「あの…、キャロルさん」

「キャロルでいいです。わたし、シュウさんよりも１つ年下ですから」

「じゃあ、あの…、キャロルちゃん。どうしてオレたちを助けて…？」

「シュウさんたちではありません」

「え…？」

「シュウさんを助けたかったのです」

「オレを…？」

「はい」と、頷いたキャロル。「あの…、シュウさん。覚えておい

ていただけますか…？」

「はい…？」

首をかしげるシュウ。

キャロルがにっこりと微笑んで言う。

「キャロルは、シュウさんのことが好きです。とってもとっても、好きなんです」

次の瞬間。

サラの右ストレートがキャロル目掛けて発射した。

第１０２話　ベストバカップルコンテスト　～後編～（後書き）

昨日の２１時３９分ごろメールくださった読者さまへ。
ちょ…！？Σ（゜ロ゜ｌｌｌ）
お勉強がんばって下さいっ！＞＜
メールはスゲエェェェ遅れてもＯＫです！

第１０３話　それぞれのバレンタイン　～次女＆レオン編～

文月島で行われた『ベストバカップルコンテスト』から、ミーナの瞬間移動で戻ってきたシュウとその一同。

リンク一家のために獲得できた賞金は、シュウとカレンの『ベストバカップル大賞』の５００万ゴールド。

サラとレオン、レナとミヅキがそれぞれ取った『おしゃれで賞』の１０万ゴールド。

それから、あまりの年の差に驚かれたマナとグレルが取った『ビックリで賞』の２０万ゴールド。

そして、リュウの珍解答のおかげで取れたらしい『審査員特別賞』の５０万ゴールド。

と、何だかんだで苦労しながらも合計５９０万ゴールドがリンク一家の手に。

シュウ宅のリビングの中、リンク一家が大金を目の前に瞳を輝かせている。

「見や、おとん、おかん…！　５９０万やで……！」

「おお…おおおお…！　すごい…、すごいで…！」

「すごいぞーっ！　これでキラと同じもの買えるぞーっ♪」

「あかんっ！　あかんからな、ミーナ！？　絶対にあかんからな！

？　おまえが金使うからうちは貧乏なんやからな！？」

サラが笑った。

「少しくらいならいいんじゃない？　リンクさん。ね、レオ兄？」

とレオンの顔を見たサラ。

笑顔が消える。

「いいんじゃない？　リンク。少しならね」

そうサラに同意したレオンの顔は、いつものように優しくない。

本当は同意していないからとか、そんなことを思っているからではない。

理由は、

（アタシが、キャロルに殴りかかったから……）

シュウとカレンの大賞が決定してから、少し経ったときのこと。

カレンと小躍りして喜びながらも、シュウとキャロルの会話を聞いていたサラ。

キャロルの発した台詞を聞いて、思わず右ストレートがキャロル目掛けて発射してしまった。

「目ぇ開けて寝言言ってんじゃないよ！」

そんな台詞を吐きながら。

だが、キャロルに命中する寸前。

パシっ！

とサラの右拳をレオンが片手で止めた。

そこで我に返ったサラ。

「あっ…！　レオ兄っ……」

と戸惑いながらレオンの顔を見上げた。

ついさっきサラに『一般人に手をあげるな』と注意したばかりのこともあって、そのときのレオン表情は怒りで強張っていた。

今もその表情のままだ。

「サラ」と呼んで、レオンがリビングの戸口へと向かっていく。「来なさい」

「…は…はい……」

サラがレオンの後を着いて行く。

「おい、レオ――」

「親父っ！」

と、シュウはリュウの声を遮った。

サラを連れて行くレオンを引きとめようとしたリュウの腕を引っ張る。

「レオ兄に任せろよ。親父は娘に甘いからな。サラのしたこと、説教できねーろ」

「うるせー、注意くらいはできる」

「注意したところで甘いんだよ、親父は。大体、サラはオレや親父より、レオ兄の言うことをよく聞くんだ。サラのことはレオ兄に任せろよ」

「任せたくねえ！　レオンの奴、普段が普段なだけに怒ると怖ぇんだぞ！」

「…し、知ってる。あれはバスケ大会のときだったか…。キレたレオ兄はまるでサイ○人のようだった……！」

顔面蒼白するシュウ。

それからカレン。

「そ、そうですわね。レオンさん怒るととても怖いのですわ…。でも、リュウさま？　大丈夫だと思いますわ」

「何がだ、カレン」

「サラはみっちりお説教されると思いますが…、レオンさんにとって可愛い可愛いサラ相手ですもの。大丈夫ですわ」

「……ま、そうだけどよ」

そんなリュウの返事を聞いて笑ったあと、カレンはリュウに包装紙に包まれた箱を渡した。

「はい、リュウさま。バレンタインチョ……いえ、甘いものが苦手なリュウさまにはバレンタインウィスキーですわ♪」

「おー、サンキュ。そういやバレンタインといえば……」

毎年、リュウとシュウ、ジュリ、さらに逆バレンタインでキラやシュウの妹宛のバレンタインチョコやらプレゼントやらが、全島のファンから宅配便で届く。

個々に送られては大変なため、まずは各島のギルドに送られ、それらを各島のギルドが大きなダンボールにまとめてシュウ宅へと送ってくる。

しかも、大型トラック2台以上で。

電話で再配達を頼んでいたキラが、涎を垂らしながらリュウのところへとやってきた。

「今年はざっと5万個あるらしいぞーっ」

毎年大量に届くバレンタインチョコや、その他の食べ物。

それはほぼキラやシュウの妹、ミーナとリーナ、グレルが一週間以内に食べ尽くしてしまう。

「そう、じゃあ2万個くらいがパパ宛ね」とにっこりと笑うミラ。

「本命っぽいのは私が片っぱしから牙をフル活用して食べてあげなくっちゃ♪」

「では、1万個くらいが兄上宛なのだな」と、ミラと同様ににっこりと笑うリン・ラン。「去年は立体テディベアチョコを頭からバリバリと噛み砕くのが楽しかったぞーっ♪　今年はわたしたちが笑顔

満開で粉砕してやるぞーっ♪」

「ほな、5千個くらいがジュリちゃん宛やろか」と、指をぼきぼきとならしながらリーナ。「本命と思われるものはうちが全部ウン○にしてやんで」

シュウ、苦笑。

（毎年バレンタインデーは、オレの周りの女たちが怖いデス……）

サラの部屋へと入ったレオン。

後ろをついて来たサラがドアを閉めると、背を向けたまま口を開いた。

「…サラ」

「…は…はい」

サラの声が震えた。

（た…、助けて…！　レオ兄がサイ○人になってる……！）

レオンの柔らかい青髪。

怒りのあまり、ゆらゆらと揺れながら逆立っている。

「約束したばかりだったよね。一般人には手をあげないって」

「…だ…だって――」

「だってじゃない！」

そう声をあげて、レオンが振り返った。

レオンの怒りに満ちた赤い瞳がサラに突き刺さる。

「さっきも僕は言ったよね？　ハンターである以上、絶対に一般人に手をあげてはいけない。さっき言ったばかりだっていうのに、もう忘れたわけ？」

首を横に振るサラ。

「なら、反省してなかったってわけ？」

再び首を横に振るサラ。

「じゃあ、何で！　黙ってたら分からないだろうが！」

レオンの怒声に、サラの身体がびくついた。

恐る恐る口を開く。

「な…、殴っちゃダメだって、わ…、分かってるんだけど、つい手が出ちゃっ……」

俯いたサラ。

母親譲りの黄金の瞳から、涙が零れ落ちる。

十数秒の沈黙の末、レオンが小さく溜め息を吐いた。

逆立っていた青髪が、気の抜けたように元へと戻っていく。

サラの頭に手を乗せて言う。

「サラ…、君はとても兄想いで、とても友達想いだね。そしてとても臆病だ。シュウとカレンちゃんが傷付くかもしれないと思うと怖い？」

サラが涙をぽろぽろと零しながら頷いた。

声を張り上げる。

「邪魔者なんかっ…！　キャロルなんか、アタシの右ストレートでダウンさせちゃえば良かったんだ！　それでも足りないようなら左フックフックフックで正確な距離はかって、再び右ストレートっ！　さらにボディ連打でアゴ落ちたところにアッパァァァァァっ！　そこへトドメの右ストレーートっ！　カンカンカンカーン！　オー、イエっ！　1ラウンド7秒でK．Oアルネ！　ヘイ、キャロル！　そのまま遠慮しないで冥界へレッツゴオォォォォ――」

ピシっ

と、レオンのデコピンがサラの言葉を遮った。

「そういうことを言うもんじゃないよ、サラ」

サラが額を擦る。

「…ごめんなさい、レオ兄…。…でも、でもアタシ――」

「サラ」優しい声で呼んで、レオンがサラを抱き締めた。「もう少

し、大人になろうか。大人はすぐに暴力を振るったりはしないよ。…ね？」

「……」

サラがレオンの肩に瞼を押し当てた。

レオンの服にサラの涙が滲んでいく。

「ねえ、サラ？　大人になるって約束してくれたら、ホワイトデーに渡したいものがあるんだ。って、まだ僕バレンタインチョコもらってないけど」

と、レオンが笑った。

サラがはっとして顔をあげた。

レオンから離れ、ベッド下の引き出しを引く。

「はい、レオ兄、これバレンタインチョ――あれ、間違った。これ特注仕立てのゴムだった。ごめんごめん」

「ワザと間違ったでしょ」

「そんなことないけどぉー、これも一緒に、ハイ、バレンタインチョコ」

と、サラがレオンに2つの箱を渡した。

1つ目はチョコレート。

2つ目はコンドーム。

レオンが笑う。

「ありがとう、サラ。チョコの方、開けていい？」

「うん」

ということで、バレンタインチョコが入った箱を開けるレオン。
開けるなり、おかしそうに笑った。

サラが言う。

「今年はデコチョコに挑戦してみた。ちゃーんと、本命だよ？」

「うん、こんなにはっきり書いてくれなくても分かってるよ」

派手にデコレーションされたビッグサイズの板チョコ。
ビッグに『Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ』と書かれてあった。

「何だか食べるの勿体ないね」

「え？　何？　口移しじゃないと食べる気起きない？　んもう～」

と、さも仕方なさそうに言ったサラ。
板チョコの端を割り、口にくわえた。

「ん」

と、レオンの首にしがみ付き、唇をレオンに近づける。

レオンがもう一度おかしそうに笑い、唇でチョコを受け取った。

長年の片思いの末、去年の5月にレオンと恋人同士になったサラ。
未だに唇が触れると熱くなる。

（アタシ、一生レオ兄に恋してんのかな。ママに一生恋してる親父と同じように）

サラはレオンの顔を覗き込んで訊く。

「ウマー？」

「ウマー」

と笑ったレオン。
数分間のキスの後、２つ目の箱に手をかけた。

「さて、そろそろこっちも開けようかな」

「あ、レオ兄。それ開けてベッドにダイブする前にさ」

「うん？」

「アタシが大人になるって約束したら、ホワイトデーに何くれるの？」

「秘密」

「エー。気になってエッチできないー」

とか言いながら、レオンをベッドまで引っ張って行っているサラ

である。
レオンをベッドに押し倒して、頬を膨らませながら言う。
「教えてよ。約束するから」
「ホワイトデーまで楽しみに待ってなさい」
「エー。何その焦らしプレイ。ああもう、エッチする気おきないなぁ」
とか言いながら、レオンの服を脱がし始めているサラである。
頬を膨らませているサラの顔を見ながら、レオンが訊く。
「ねえ、サラ？」
「んー」
「念のために確認するけど」
「んー？」
「左手の薬指、7号で良いんだよね？」
「うん、右も左も7ご……」
サラの動きが止まった。
黄金の瞳を動かして、レオンの顔を見る。
「…えっ…？」

レオンが微笑んでもう一度訊く。

「左手の薬指、7号で良いんだよね？」

ぎこちなく、うんうんと2回頷いたサラ。

「ん、分かった」

レオンがそう言い、サラの上になった。

レオンの唇を首や胸元に感じながら、呆然としてしまうサラ。

でもシュウとは違い、すぐに実感する。

（皆さま聞いてアルネ。アタシ、ホワイトデーにレオ兄からプロポーズされちゃうアルヨ。羨ましいアルカ？）

染まるサラの頬。

キュンとした胸。

込み上げて来る動悸。

（兄貴、キャラパクってごめん）

今日のサラは、

「――まじ、フィーバァァァァァァァァァァァァァァァっ！！！」

レオンの首にしがみ付き、ぐるんと回ってレオンの上になろうとしたサラだったが。

「おわぁっ！？」

ドサっ！

勢い余って、レオンもろとも床に転げ落ちたのだった。

（ワォ！　床の上で抱かれるのも燃えるアルネ！）

１５分後。

前言撤回。

（せっ、背骨いたあぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁあいっ！！）

第１０３話　それぞれのバレンタイン　～次女＆レオン編～（後書き）

もう３月ですか。春ですねぇ……（＊´∀`＊）

先月投票してくださった皆さま、ありがとうございました！

今月も励みにして頑張ります（＊`・ω・´＊）ゝ

第１０４話　それぞれのバレンタイン　～次男＆リーナ、七女＆ミヅキ編～

シュウ宅のリビング。
バレンタインデーの、ちょっと遅めの昼食が出来る前。

ソファーに座っているリュウとリンクの足元に、ジュリとリーナが座っている。
先月１０歳の誕生日を迎えたリーナが、来月で５歳の誕生日を迎えるジュリに、キャラクター柄の包装紙で可愛くラッピングされた箱を手渡した。

「はい、ジュリちゃん。うちから本命チョコやで」

「わぁ、ありがとリーナちゃん！」

ジュリが受け取ったソレを見て、リュウとリンクが眉を寄せた。
小声でひそひそと話す。

「おい、リンク。リーナのやつ、俺には煎餅一枚だったぞ。何だよこのジュリとの差はよ」

「煎餅一枚ならまだええやん。おれなんてリーナのおとんやのに、板チョコ一欠けらやで」

「ナイスじゃねーかリーナ」

「ひどっ！」

ジュリが箱を開け、中に入っているリーナの手作りチョコを食べ

始める。

「おいしいか？　ジュリちゃん。今年はトリュフに挑戦したんやで」

「おいしい～っ」

「ほんまっ？　よかったわぁ」

と安堵して笑ったリーナ。

本当においしそうに食べるジュリの顔を、嬉しそうに見ていた。

「ごちそうさまでした、リーナちゃん」

「はい、おそまつさまでしたー」と言いながら、チョコレートがついたジュリの口の周りを拭くリーナ。「はぁ…、うちは１０歳。ジュリちゃんは来月で５歳。もうすっかり大人のカップルやんなぁ」

「ぷっ」

と短く笑ったリュウとリンクの腹に、

ドスっ！

と拳を食らわせ、リーナは続ける。

「ジュリちゃん、そろそろ大人の男を勉強せなあかんで？」

「おとなのおとこのひと？」

「せや。ええか、ジュリちゃん。大人の男の座右の銘はな、『据え

膳食わぬは男の恥』やで」

リンク、苦笑。

「リーナおまえ、どっからその言葉覚えてきたん。てか、5歳児に何教えてんねん」

「うっさいでおとん。うちはジュリちゃんと話しとんねん。ヘタレはすっこんでろや」

「おま……」

ジュリが首をかしげる。

「す…ぬ…はじ……？」

「『据え膳食わぬは男の恥』や、ジュリちゃん」

「すえぜん？」

「うちのことや」

「リーナちゃんのこと？」

「…おい、リーナ」と口を挟んだリュウ。「随分と限られた据え膳だな」

「しっ！　黙っとってやリュウ兄ちゃんっ！」

と、口に人差し指を当てながら、じろりとリュウを睨んだあと。

リーナはまだ首をかしげているジュリを見て続けた。

「つまりな、ジュリちゃん。うちが誘惑してきたら、それに応えなきゃ男の子として恥なんやで？」

「ゆうわく？」

「せや、誘惑や。たとえばな、うちが『キスしてや』って言ったら、うちにキスせなあかんのやで？　分かったか？」

「はい」

と、素直に頷くジュリ。

（よっしゃ）

リーナ、にやりと笑う。

「ほな、ジュリちゃん」と咳払いをし、「早速うちにキスしてや～」

「え…」

ぎくっとしたリンクの目の前。

ジュリが、ちゅっとリーナの唇にキスした。

「あぁっ！」

と声をあげたリンクに、リュウが言う。

「いいじゃねーか。うちのアイドル相手だぜ？」

「せっ、せやけど、おとんとしてはっ…！」

「ついにやったで」と、リーナ。「ジュリちゃんのファーストキスごちそうさまやっ…」

「どっ、どこのオッサンやおまえは！」

「しかもファーストキスじゃねーし」

と、リュウ。

リーナが眉を寄せた。

「へ？　ジュリちゃんのファーストキス、うちやろ？」

「いーや、キラだ。で、その次に俺」

「え」

「んで、その次から順に、シュウ、ミラ、サラ、双子、三つ子だな」

「えぇぇえええぇえ！？　ジュ、ジュリちゃん、んなプレイボーイなっ！　うちは初めてやったのにっ！」

「何言ってんだ。おまえもファーストキスじゃねえはずだぞ」

「はぁ？」

と、さらに眉を寄せたリーナ。

リュウがリンクに顔を向ける。

「な、リンク？」

「えっ？　…えぇーとぉ……」と、顔を引きつらせながらリーナから目を逸らすリンク。「た…たしかリーナが2つくらいのときやったかなー……」

「なんやねん、おとん。うちのファーストキス誰やっちゅーねん」

「んっ？　え、えと…、その……。…お…おとん…やったかなっ？」

「は…？」

リーナ、リンクの言葉を理解するまでに5秒。

その後、

「そっ…、そんなっ…！　そんな、おとん……！　…うっ…！」

と口元を手で塞いだ。

リンク、狼狽。

「ごっ、ごめんリーナっ！　小さい頃のおまえがめっさ可愛くてっ…！　ああもうっ、泣かんとい――」

「ウエェェエエェっ！　あかん、まじキモ……うっ、おっ、オエェェエエエェエっ！」

「……」

リンク、傷心。

そんなリンクの肩を、リュウがぽんと叩いた。

「元気出せ、リンク」

「リュウ…！」と、潤むリンクの瞳。「やっぱおまえ親友やんなっ…！　こんな哀れなおれを慰めてくれるん――」

「もっともな反応じゃねーか、仕方ねーよ。――と、フォローしてやる俺ってやっさしー」

「フォっ、フォローになってへんわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

と叫んだあと。

リンクは半泣きになって屋敷を飛び出して行った。

「どーせっ…！　どーせおれなんかあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

シュウ宅で昼食後。

ミヅキはカレンやキラ、シュウの妹、ミーナ、リーナからのチョコレートが入った紙袋を右手にぶら下げて帰路に着いていた。

本当はもう少しお邪魔していたかったが、仕事の関係でそうも行かない。
家に帰って着替えて紙袋を置いたら、すぐに働いているドールショップへと向かう。

シュウ宅を出てから約2分後。
葉月町へと続く道を歩いていたミヅキは、呼び止められて振り返った。

「待って！　ミヅキくん！」

レナだった。
慌てて走ってくる。

「送るよ、ミヅキくんっ…！」

「そんな、いいのに」

と言ったミヅキだったが。
それを聞いたレナの表情がしょ気たのを見て言い直した。

「やっぱり送ってくれる？」

「…う、うんっ！」

と顔を輝かせたレナ。
ミヅキの隣を歩く。

背にあるレナの両手。

そこにはミヅキが持ち帰る用の紙袋に、まだ入れてなかったバレンタインチョコが握られていた。

（ちょ…、直接渡すのって緊張するっ……）

どきまぎとしてしまうレナ。

本当は、皆のチョコレートと一緒に紙袋に入れて渡すつもりだったから予定外だ。

ミヅキが言う。

「バカップルコンテストで、『おしゃれで賞』取れて良かったよ」

「あっ…」

と短く声をあげたレナ。

まだ着ていたミヅキの手作りワンピースに目を落とし、狼狽しながら言う。

「こっ、このお洋服、ちゃんとクリーニングして返すねっ！」

「え？　いいよ」と、笑ったミヅキ。「それ、レナちゃんのために作ったから。良かったらもらってくれる？」

「えっ？　いっ、いいのっ！？　こんなに可愛いのにっ！？」

「ぼくが持ってるより、レナちゃんが持ってる方が服も喜ぶよ」

「…あっ…ありがとうミヅキくんっ！　大切にするねっ！」

「うん」

とミヅキに頭を撫でられ、レナの頬が染まる。

「あっ、あっ、あのっ、ミヅキくんっ…？」

「ん？」

「これから一旦お家帰ったら、そのあとお仕事行くのっ？」

「うん、そうだよ。店長から早く来いってメールも来てて…」と、ミヅキが苦笑した。「どうやらお客様を何人か待たせてしまってるみたいなんだ」

「え？　ミヅキくんを待ってるお客さん？」

「うん」

「ミヅキくんに直接用があるってこと？　なん――」

なんで？

と訊こうとして、レナははっとして言葉を切った。

「…そ、そっか。今日、バレンタインだもんねっ……」

レナの笑顔が引きつる。

（お…、お客さん、ミヅキくんにどんなチョコ渡すんだろっ…。ぎ、義理かな。ま…、まさか本命…とかっ……？）

ミヅキに俯いた横顔を見せるレナ。
髪の毛で目元が隠れているが、動揺していることが分かる。

ミヅキはレナの背に目を向けた。
そのあと、手に持っている紙袋を掲げて言う。

「チョコありがとね、レナちゃん」

「えっ？」と、顔をあげてミヅキの顔を見たレナ。「あっ…！　そ、その紙袋の中にあたしからのチョコ入ってないからっ…！」

「あれ、そうなの？　残念だな。レナちゃんからのチョコ1番楽しみにしてたんだけど」

「えっ！？」

「そっか、ぼくにはくれないのか」

「えっ！？　う、ううんっ！　あっ、あるよもちろんっ！」

と、慌てて言ったレナ。
立ち止まり、背に隠していたバレンタインチョコをミヅキに差し出す。

「は、ははははい、これっ…！　う、うううううう受け取ってくださいっ……！」

顔を真っ赤にしているレナから、ミヅキが笑顔で受け取った。

「ありがとう、レナちゃん。嬉しいよ」

「…マっ…ママやお姉ちゃんたちからのチョコより嬉しいっ？」

「うん」

「カ、カレンちゃんからのよりっ？」

「うん」

「お、お客さんからのよりっ？」

「うん」ミヅキがおかしそうに笑う。「レナちゃんからのが1番嬉しいよ」

「……」

レナの顔が綻んだ。

期待に胸が膨らむ。

ミヅキが携帯電話で時刻を確認して言う。

「レナちゃん、見送りありがとう。ここまででいいよ」

「あっ、うん、分かった…！」

「ホワイトデーにお返ししたいんだけど、何か希望ある？」

「えっ？　い、いらないよお返しなんてっ！」

「そうはいかないよ」

「…じゃ…じゃあ、じゃあ、ねっ？」

「うん？」

「あ、あたしのことっ…」

「うん？」

「レ、レレレレ

それを見つめながら、レナは心の中で繰り返す。

（またね、レナ。またね、レナ。またね、レナ）

ミヅキの背が見えなくなると、レナは踵を返した。

自宅へと向かって駆け出す。

（またね、レナ。またね、レナ。またね、レナ…！　レナ、レナ、レナ……！）

込み上げてきた喜び。

それが溢れ出したかのように、レナの身体がぴょーんと宙高くに舞った。

「またね、ミヅキィィィィィィィィィっ！　なぁーんちゃって、きゃあああああああああああああっ！！」

おまけ。

その晩のリンク宅。

リビングの中。

「もーっ、今日いきなりキラの家から飛び出してどうしたのだリンクーっ」

「ミーナ…、おれ、可哀相なんや」

「な、なんだ？　悲しんでいるのかっ？」

と、リンクの顔を心配そうに覗き込むミーナ。
５０ｃｍ四方の箱を持って来て、リンクの目の前のテーブルに置く。

「ほら、元気出すのだ、リンク！　わたしからのバレンタインチョコだぞ！」

「お…おお……！」と、瞳を輝かせるリンク。「こ、こんな大きな箱で…！　リーナとは大違いや……！」

「わたし、３段チョコケーキ頑張って作ったのだぞ？」

「ありがとう、ありがとう、ミーナ…！」と、潤むリンクの瞳。「やっぱおれにはおまえだけやっ…！　ミーナ、愛しとる……！」

「ちゃーんと残さず食べるのだぞ？」

うんうんと大きく頷き、箱の蓋に手を掛けるリンク。

「ミーナ、ほんまにありが――」

「キラの食べ残し♪」

「え」

開けられた箱。

そこには、

「……」

一口サイズのチョコレートケーキと、キラが使っていたと思われるフォーク。

入浴していたリーナがバスルームから出て来て言う。

「ん？　そのケーキ、最後の一口なん？」

そしてフォークを握り、

「もーらい」

パクっ

と一口サイズのチョコレートケーキを一口で食べてしまい。

「――どっ、どーせおれなんかぁぁぁ

第１０４話　それぞれのバレンタイン　～次男＆リーナ、七女＆ミヅキ編～（後

昨日の２２時４５分ごろにメールくださった読者さまへ。
そーかぁ、春なのは私の脳内だけだったかぁーΣ（ノ∀、＊）ペチ
でも最高気温３度って、私が今住んでるところからしたら暖かいで
すｗ
冬は普通に最高・最低共に氷点下ダヨ…。引っ越してきた年はその
寒さに死ぬかと思タ……。

で、あれ、やっぱり最近○多いですか？ｗ
ギクっとして今回の話の一部修正したのは秘密です。
リーナからリュウへのバレンタインは最初カッ○えびせんだったと
かね。
リンクへはチロ○チョコだったとかね…。

メールの件了解です。
あ、毎回面白くしてくれなくても大丈夫ですからｗｗｗ

第１０５話　それぞれのバレンタイン　～父&母編～

バレンタインデーの夜。

リュウとキラの寝室。

そこに備え付けている、シュウたち子供の部屋よりも少し大きなバスルーム。

そこの脱衣所の鏡の前。

キラ、赤面中。

（こ、これを一番最初にやらされたのはシュウが産まれる前の年のクリスマス・イヴだったか…。あのときも下着の上からとはいえ死ぬほど恥ずかしかったが……。マッパにリボンとなっている現在はもっと恥ずかしいぞ私の主っ……！）

クリスマスとリュウの誕生日、それからバレンタインデー。

キラは決まってリュウの命令で身体にリボンを巻かせられる。

もう５０回以上やらされているわけだが、その恥ずかしさにはまるで慣れそうもない。

だが、

（いつからか巻き方やリボンにもこだわってしまう私がいるっ…！

今年は何と赤とピンクと白の３色使いだぞっ……！）

手鏡を持って合わせ鏡にしながら、脱衣所の鏡の前を一周くるりと回るキラ。

全身をチェックする。

（……上手いな、私。さすがだぞ）

ふふん、と満足そうに笑うキラ。

脱衣所の外から、リュウの声が聞こえてくる。

「おい、キラ」

「ふにゃあっ！」驚いて飛び跳ねたキラ。「ま、待ってなのだリュウ！　まだそっちに行く覚悟が――」

「ミ、ミラからのバレンタイン開けたんだが」

「…そ、そうか。今年のパンツは何だったのだ？」

ミラからリュウへのバレンタインは、毎年ご馳走とパンツである。

「…お…俺のキャラにはそぐわねえんだけ…ど……、は、穿かなかったらミラ泣くだろうか……。そ、そういやリン・ランはこれのトランクスバージョンをシュウにあげるとか何とか言ってたが、シュウはいいよなシュウは。バカなんだからお似合いだ。しかし俺は……。しかも何でTバックバージョン……」

「Tバ……？　…ど、どんなパンツもらったのだ、リュウ」

「…ゾ…ゾウ……？」

「ゾウっ？」

「…鼻がパォーンてなるやつ……」

「……」

「…な、なあ、キラ？　俺、この、ゾ、ゾ、ゾ、ゾウパンツ穿かなきゃやべえ？　ミ、ミ、ミ、ミラ泣くかっ…？」

「……。…む、無理するな、リュウ。あんまり見たくないぞ…。ミラに訊かれたら、穿いたことにしておく…」

「お、おう、そうか」

と、安堵の溜め息を吐いたリュウ。

数秒後。

にやりと笑い、バスルームの戸をノックする。

「おい、キラ。まだか、俺へのバレンタインは」

「えっ!?」キラの声が裏返った。「ま、待ってなのだっ…！　こ、心の準備があぁっ……！」

「おまえ今年は裸リボンに加えて、今夜〇〇〇を□□□□で、△△△△△の、☆☆☆☆☆☆☆だったよな？」

「うっ…」

「んでさらに、〇☆▼□●△★☆◇■▲〇★◆って言ったよな？　俺ちゃんとバカップルコンテストに参加したんだから、もーちーろ

ーん、約束守ってくれるよなあ？」

「…わっ、私のバカっ…！　せめて○☆▼□●△★☆◇■▲○★◆は言うんじゃなかったっ……！」

脱衣所の中、顔を真っ赤にしながら狼狽するキラ。
顔をきょろきょろとして辺りを見る。

（や、やばい…！　逃げたいぞっ…！　で、でもどこにも逃げ隠れできないぞっ…！　マネキン作戦はもう使えぬしっ……！　あああああっ、どうすれば――）

バキっ！

と音がして、

「ふっ、ふぎゃあああああああああっ！」咄嗟にドアノブを押さえたキラ。「かっ、鍵を壊すなリュウっ！」

「おまえが遅いから」

「だっ、だって……！」

ドアを開けられぬよう、必死にドアノブを引くキラ。
一方のリュウもドアを開けようと、反対側のドアノブを引く。

「おいキラ、何のつもりだ」

「ま、ま、ま、待ってくれリュウ！」

「待たねーよ」

「いっ、今、だな…、そのっ…！　バ、バスタブで我が家のペットであるタロウが気持ち良さそうに泳いでるからもうちょっと待ってくれっ……！」

「何だ、タロウって」

「なっ、なんだとリュウっ…！　えっ、えと、ゾ、ゾウパンツ…じゃなくてっ……！　ゾ、ゾウガメのタロウを忘れてしまったのか！？」

「あれリクガメだから水に入っても泳ぎはしねーと思ったが」

「ギクっ…！」

「まー、とにかく、いくらうちのバスタブがでけーとはいえゾウガメにゃ狭くて哀れだぜ。俺が元いた場所に放してきてやるからドアを開けろ」

「だっ、駄目だっ！　まっ、ままま、待ってくれリュウ！」

「何だよ、キラ」

「タ…、タロウ食われたあぁぁぁあぁぁぁぁあ！」

「誰に」

「ね、猫友達がバスルームの窓からやって来て…！」

「トラかよ。今ならまだタロウ助かるかもしれねーから開けろ」

「だ、駄目だ！　丸呑みされたっ！」

「甲羅が１ｍ以上あるゾウガメを丸呑みとは、えらくでけートラだな」

「タ、タタタ、タロウは子供だから小さかったのだっ！　あああ、タロウ消化されてるうぅぅぅ！」

「そうか、もう間に合わねーか。早くドア開けろ」

「だ、駄目だ！　猫友達が入浴中だ！　メスだから覗くな！」

バスルームの前、リュウは深い溜め息を吐く。

「おい、キラ――」

「あっ、タロウが尻から出て来たぞ！」

「…キラ――」

「おおーっ、元気良く泳いでるぞーっ！」

「……キ――」

「あぁーっ！　また食われたあぁぁぁ！」

「……」

「おぉっ、また尻から出て来たぞーっ！」

「……」

「そしてまた食われたぞーっ！」

「……」

「そしてまた出て来たぞーっ！」

「……」

「永久ループだぞーっ！　これではバスルームから出て来れないぞーっ！　あっはっは～」

「……」

プチっ

と、リュウの中で何かが切れた音。

「結婚記念日の指輪やーらねぇーーー！！」

「――！？」

キラ、衝撃。

本日はバレンタインデーで、そして結婚記念日だ。

身体にバスタオルを巻き、慌てて脱衣所から飛び出る。

「ねっ、ねねね、猫友達帰ったあぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」

と、ベッドの方へと歩いていくリュウの背にぴょーんとしがみ付いたキラ。

リュウが左手に持って高く掲げている小さな箱に手を伸ばす。

「ほ、ほしいのだあぁぁぁぁぁあああぁぁぁあ！」

「もうやらね」

「ごっ…、ごめんなさいいいいいいいいい！」

「絶対やらね」

「もう悪あがきしたりしないのだあぁぁぁぁぁぁぁあ！」

「一生やらね」

「…ふっ…、ふにゃあああああああああん！」と泣き出したキラ。

「ちゃっ、ちゃんと○○○○を□□□□で、△△△△△の、☆☆☆☆☆☆☆、さらに○☆▼□●△★☆◇■▲○★◆の約束守るのだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！」

「よし」

と、リュウ。

ベッドにキラを降ろし、結婚記念日のプレゼントをキラに渡す。

結婚１８年目に贈る宝石はガーネットだ。

「ほら、キラ。結婚記念日」

キラが涙を手の甲で拭い、はしゃいだ様子でプレゼントの箱を開けた。

赤いガーネットの指輪を見て、瞳を輝かせる。

キラはリュウからもらう宝石の中で、結婚記念日にもらうものが一番嬉しかった。

「ありがとう、リュウ…！」

「……おう」

キラの笑顔を見て、微笑んだリュウ。

ガーネットの指輪を取り、キラの指にはめてやった。

キラの白魚のような手に、赤いその輝きがとても良く映える。

それから結婚記念日にはプレゼントの他に、リュウからキラへともう1つ。

それは、

「おい、俺の可愛い黒猫」

「何だ、私の愛する主」

「結婚18周年の今年も俺はこの世一おまえを愛してるから」

普段はあまり言わない愛の言葉。

いや、

「おまえも絶対何が何でもこの世一この俺を愛するように」

命令。

キラが笑った。

「毎年思うが、そんなこと当たり前だぞリュ――」

「ああ、それから」とキラの言葉を遮ったリュウ。「今年も俺に抱かれるときイイ声出すように」

「……」

「まあ、嫌でも出させるんだが」

「……」

「こう、俺の獣欲を掻き立てるよーな？」

「……」

「ああ、イイ…！」

と、ゾクゾクしてしまっているらしいリュウ。

キラ、苦笑。

リュウが言う。

「さて、始めるかキラ」

「えっ…！？」

「結婚１８周年の今年は１８発か」

「――！？　ま、待ってくれリュウっ…！　ちょ、ちょっと多す――ふにゃあっ！」

急に胸から巻いていたバスタオルを取られ、キラは声をあげた。顔を真っ赤にしながら、両腕でリボンの巻いた身体を隠す。

が、すぐさま腕をリュウに外される。

「上手ーく巻いてんじゃねーかよ、え？」と、キラの身体を見てにやりと笑うリュウ。「今回はリボン３色使いかよ。おまえ年々巻き方がプロになるな」

「なっ、何のプロだっ…！」

「裸リボンの」

「ああ、エロい」

「そっ、そんなものあるかっ…！」

「あっ、あんまり見るなっ…！」

「んじゃ」

いただきます。

と、リュウがキラを押し倒したとき。

コ…、コンコン……

寝室のドアがノックされた。

何というか、戸惑い気味に。

「ふっ、ふにゃ…！？」

慌てて再び身体にバスタオルを巻くキラ。

リュウが顔を怒りに引きつらせながら戸口に目をやった。

「シュウ、てーめえ昨日ゴムやったばかりだろうが…！　これから気合入れて１８発ってときに邪魔してんじゃねーぞコラ……！！」

と、シュウが来たと思って言ったリュウだったのだが。

「ご、ごめんなさいリュウさまっ…！　あたくしですっ……！」

どうやらカレンのようだった。

「カレン？」と眉を寄せたリュウ。「どうした」

「あのっ…」

「昨日やったゴム良くなかったのか？　自慢の厚さ０．０１ミリだったんだが…」

「そっ、そうではなくてっ…！」

「早く言え」

「ピ…、ピンクのリボンありますかっ？」

「は？」

と、キラと顔を見合わせたリュウ。
カレンがあたふたとした様子で続ける。

「いえっ、あのっ、べ、べべべ別に変なことに使うのではありませんわよっ？」

「おい、キラ。カレンが裸リボンやるってよ」

とのリュウの声が聞こえて、カレンがドアの外で声をあげる。

「きゃっ、きゃあああああああっ！　ちっ、違いますっ！　ちちちっ、違うのですわリュウさまあああああああっ！」

「反応と台詞が合ってねーぞ、カレン」

「うっ…！」

キラが言う。

「ピンクのリボンなら余ってる。カレン、入れ」

「は、はいキラさま」

と承諾したカレン。

リュウとキラの寝室の中へと入る。

顔が真っ赤になっていた。

「あ…、あのっ…、そのっ…、訳あって裸リボン？　を、やらなければいけないことになってしまってっ……！」

「大変だな、おまえも……」

と苦笑したあと、キラがバスルームへと向かって行った。

脱衣所に置いておいた残ったピンクのリボンを取り、カレンのところへと戻ってくる。

「ほら、カレン。これで良いか？」

「あっ、ありがとうございますキラさまっ…。では、お邪魔しましたっ……」

と去ろうとしたカレンの腕を、リュウが引いた。

キラに顔を向けて言う。

「おい、裸リボンのプロ。巻いてやれ」

「へっ！？」と声を裏返してリュウの顔を見上げたカレン。「いっ、いえリュウさま結構で――」

「うーん、そうだな」と、うんうんと頷くキラ。「素人には少し難

しいかもしれないしな。よし、脱ぐのだカレン」

「えっ、えぇっ！？　けっ、結構ですわキラさまっ！」

「遠慮は無用だぞ、カレン♪」

あはは、と笑ったキラ。

カレンは狼狽して、嫌だと首を横に振る。

が、

「ほらさっさと脱げよ」

と着ていたキャミソールワンピース型の寝巻きを、リュウにポーイと投げ捨てられ。

「きゃっ、きゃあああああああっ！　リュウさま何をぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」

寝巻きの下に何も身に着けていなかったカレンは胸を押さえて蹲る。

「うるせーな、騒ぐんじゃねーよ。キラ以外の女どうこうしようなんて思わねーよ。にしてもおまえ、本当乳ねーな」

「ほっ、放っておいてくださいっ！！」

「おい、キラ。早く巻いてやれ」

承諾したキラ。
カレンの手からピンクのリボンを取り返して首をかしげる。
「どういう巻き方が良いものか」
「一番エロいの」と答えたのは、もちろんカレンではなくリュウである。「いつだったか、俺がすーげー興奮したやつ。シュウも大喜びだろ」
「ああ…、あれか」
「乳ねえ分、色気に欠けるがまあいいだろ」
「うむ、分かったぞ」
カレンは半ばパニックになりながら、リュウとキラの顔を交互に見た。
「リュ、リュウさま…!?　キラさま…!?」
胸を押さえたまま尻を突き、ずりずりと後ずさるカレン。
にやにやと笑っているリュウ。
「遠慮いらねーって言ってんだろ、カレン」
にこにこと笑っているキラ。
「そうだぞ、カレン♪」

ドン…

とカレンの背がドアにぶつかった、次の瞬間。

「――きゃっ、きゃあああぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」

リュウに万歳の体勢で押さえつけられ。

裸リボンのプロ（？）であるキラの目にも留まらぬ早業により。

カレン、裸リボンデビュー☆

第１０６話　それぞれのバレンタイン　～長男&カレン編～

バレンタインデーの夜。
カレンがシュウへのバレンタインを持って、シュウの部屋へ行こうとしたときのこと。

シュウの部屋の前で、リンとランが待っていた。

「カ、カカカ、カレンちゃん、コレを兄上にっ…！」

と、顔を赤くしながら、カレンに小さな紙袋を渡したリン・ラン。

「あら？　リンちゃんランちゃん、シュウにまだチョコ渡してなかったの？」

「チョコは渡したのだ、チョコはっ…」

「そう。チョコともう１つプレゼントがあったのね」

「カ、カレンちゃん」と、小声になってカレンに顔を近づけるリン・ラン。「きょ、今日それ穿いてもらってなのだ、兄上にっ…！」

「穿いて？　衣類なのね」

「ミラ姉上と一緒に買いに行ったのだが…、ちょっと父上とおそろいのパンツなのだっ！」

「ちょ、ちょっとリュウさまとおそろい？」

「兄上はトランクスバージョン、父上はTバックバージョンなのだっ…！」

「…そ、そう……」

「頼んだのだ、カレンちゃん！　絶対だぞ、カレンちゃん…！　絶対に兄上に穿いてもらってなのだカレンちゃんっ……！」

「わ、分かったわっ……！」

リン・ランに押されながら承諾したカレン。

リン・ランが自分たちの部屋へと戻っていくと、シュウの部屋へと入った。

すると目に入ったのは、

「ヘイ！」

と用意したらしいミニテーブルの上を手で叩いているシュウ。

わくわくとした表情と、パタパタと振られている黒猫の尾っぽ。

「はーやーくっ！」

「はいはい」

くすくすと笑ったカレン。

シュウのところへと歩いていくと、ミニテーブルの上にシュウへのバレンタインであるチョコケーキの箱を置いた。

「はい、シュウ」

「おぉおぉお」と瞳を輝かせるシュウ。「すげえ、これケーキ？」

「ザッハトルテよ」

「ああ、あのチョコチョコしてるチョコケーキな！　もしかして本命？」

「何よ、それ」とカレンが笑った。「もしかしなくても本命ですわ」

「だよな、サンキュ」

ちょっと照れくさそうに笑ったシュウが、箱の蓋を開ける。
そしてさらに輝く瞳。

「おぉおぉおお！　すげー美味そうっ…！」

「一緒に食べましょ」

と、カレンが一緒に持ってきた皿にケーキを切り分ける。
シュウの分は大きめにして。

シュウが1口食べて声をあげる。

「うめえぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！　オレ生きてて良かったあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「大袈裟ねぇ」

と呆れたように溜め息を吐いたカレン。

だがその顔は嬉しそうに笑っている。

「あ…、ねえシュウ？」

「ん？」

「あたくしちょっと気になってることがあるのだけれど…」

とカレンの笑顔が少し薄れた。

「ん、何？」

「その…、今日のバカップルコンテストが終わったとき、キャロルちゃんから何て言われたのかしら？」

「え？」と、ぱちぱちと瞬きをしたシュウ。「ああ、あのときな。あの子あんなおとなしそうな顔して、すげー冗談言うんだぜ？」

と笑った。

「冗談って？」

「オレのこと好きだってさ」

「……」

それ、絶対冗談じゃないわ。

と心の中で突っ込んだカレン。

シュウの鈍感さには呆れを通り越して尊敬してしまう。

それと同時に、サラがキャロルに殴りかかった理由も分かった。

「サラがあの子の冗談も分からねーで右ストレート発射したときは、オレ一瞬すーげーヒヤっとしたぜ。レオ兄に感謝だな」

「……」

「ん？　何だカレン、オレの顔じっと見て」

「……。いえ、別に」

「？」

「あ、そうだったわ、シュウ」

と話を逸らすカレン。

リン・ランから渡された小さな紙袋をシュウに差し出す。

「はい、リンちゃんランちゃんからよ」

「リンとランから？　何だ、チョコ以外にもあったのか」

紙袋の中を覗き込んだシュウ。

折りたたまれたピンク色の布が目に入る。

ウエストのゴムの部分から察した。

「トランクスか。…な、何でピンクを選んできたんだ、ピンクをっ…！」

シュウは苦笑しながら、それを取り出した。
広げて眉を寄せる。
シュウが最初に見たのはトランクスの後面。
「何だ、これ…」
両サイドに半円型の布がひらひらとついている。
トランクスの前面を覗き込んで見たカレンが、突然声を上げた。
「きゃあ、可愛いっ！」
「はぁ？」
とトランクスの前面を見たシュウ。
驚愕。
「――なっ…、なんっじゃこりゃあああああああああああああ！！」
そこにはにこにこと笑っているゾウの顔。
そして筒状に縫い付けられている鼻。
両サイドにつけられている半円型の布の部分は耳だった。
「うふふ、こんなものがあるのね♪」
「よ、喜んでんじゃねーよおまえっ…！　こんなの穿けねーぞオレ

はっ……！」

「今夜穿いて、シュウ（リンちゃんランちゃんと約束したし）」

「ばっ、おま…！　ゾウの鼻パォォォォンてなんぞ!?　オレそんなバカなことしたくねえっ！」

「あら、可愛いじゃない？　ピンクのゾウさん♪」と、カレンがゾウパンツを取り、広げて前面をシュウに見せる。「ね？」

「……」

シュウ、困惑。

（よ…、喜んでいる…！　オレの可愛いハニーが喜んでいる…！　ここは思い切って穿いてゾウの鼻パォォォォンでハニーを喜ばせるべきなのかオレ…!?　い、いや何言ってんだオレっ…！　そんなキャラになりたくねえっ…！　いやしかし、オレのかぁーわいぃぃぃんカレンが望んでいるっ…！　あああ、でもおぉぉおぉぉぉぉお!!）

本気で悩んでしまうシュウ。

カレンが言う。

「リュウさまにはミラちゃんが、これのTバックバージョンをプレゼントしたそうですわよ」

「お、親父がTバックのゾウパンツ…!?」想像して顔が引きつるシュウ。「…み、見たくねえっ…！　マジ見たくねえっ…！　そん

な親父すーげー見たくねえ…！　母さんは裸リボンやらされてるし、マジすーげーバカップルっていう――」

シュウははっとして言葉を切った。

目を見開いてカレンを見る。

（はっ…裸リボン…！　カレンの裸リボン……！？）

想像して鼻血が噴出そうになるシュウ。

カレンが眉を寄せた。

「顔を赤くしてどうしたのかしら、シュウ？　エッチなことでも考えたのかしら」

「えっ？　えと、そのっ……カ、カレン？」

「何かしら？」

「そ、その…、オ、オオオ、オレに何が何でもゾウパンツ穿かせたいっ？」

「え？　ええ…、そうね（約束したから）」

「じゃ…、じゃじゃじゃ、じゃあさっ？」

「ええ」

「ははははははははは」

「何を笑ってるのかしら？」

「ははははははははは裸リボンやってくれたら、オレもゾウパンツ穿くっ…！」

「――！？」

カレン、驚愕。

のち、赤面。

「はぁっ！？」と、声が裏返るカレンの声。「な、何を言っているのかしらっ！？　は、裸リボンですって！？」

「う、うんっ…！」と、シュウも赤面。「や、やってくれたらオレ、ゾウパンツ穿くからっ…！」

「え、ええ…！？」

「じゃ、じゃなきゃゾウパンツ穿かねっ…！　ゾウの鼻パォォォォォンってやらねっ……！」

「そ、そんなっ…！」

カレン、困惑。

（ああ、どうしましょう…！　どうしましょう！　リンちゃんランちゃんと約束したから、シュウには何が何でもゾウさんパンツを穿いてもらわなければなりませんわ…！　で、でも、裸リボン…！？　裸になって身体にリボンを巻けですって……！？　きゃあああ

ああ！　恥ずかしいのですわあぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁあっ！）

真っ赤なカレンの顔を、真っ赤な顔をして見つめるシュウ。

「…い…嫌かっ？　カレンっ……」

そりゃ嫌だ。

只ならぬ恥ずかしさなのだから。

でも、

（あ、あたくしが裸リボンをやらなければ、シュウはゾウさんパンツを穿いてくれないのですわっ…！　リンちゃんランちゃんとの約束を守れないのですわっ……！）

覚悟を決めたカレン。

シュウから顔を逸らし、小さな声で言う。

「…や…やるわっ……！」

「――エ…、エエェェエエェェエエ！？」

カレンの声を聞き取ったシュウ、驚愕。

（やってくれんの！？　マジでやってくれんの！？　は、ははは、裸リボン！？　ウッソ、マジで！？　身体にリボン巻いて「あたくしを食べて（ハート）」！？　…や、やべぇ…！　ゾウパンツ穿く前だってのに、ちょっと鼻がパォォォォン……！）

カレンが立ち上がった。

「…あ…あたくし、ちゃんと、は、裸にリボン巻くから、シュウもゾウさんパンツ穿いてちょうだいねっ……！」

首を数回振って頷いたシュウ。

カレンがシュウの部屋に備え付けてあるバスルームへと向かう。

「あ…、あたくしが先にシャワーを終えて、シュウがその後にシャワーを終えてちょうだい…、ゾウさん穿いて。あたくし、シュウがシャワーを終える間にリボンを巻き終えているからっ……！」

「ピ、ピピピピピピンクのリボン希望っすっ！！！」

と、シュウ。

頷いて承諾したカレン。

（ま…、まさかこんなことになるなんてっ…！）

と、脱衣所に入りドアを閉め。

火が吹きそうな顔を膝に埋める。

（裸リボンってことは、下着は身につけないのよね…？　裸の上にリボンってことよね！？）

正直、死ぬほど恥ずかしい。

だが、やらなければいけない。

（シャワーを終えたら、キラさまにリボンをもらいに行かなきゃ…）

カレンとシャワーを交代したシュウ。

バスルームの中で頭からシャワーを浴びている。

2月だというのに、身も凍るような冷水を。

（落ち着け、落ち着けオレェェェ…！）

まるで冷めそうにない顔の火照り。

裸にリボンを巻いたカレンを想像するだけで、下半身に血が集中しかける。

（こ、こらっ…！　まだパォォォォンすんじゃないよオマエっ……！）

おまけに鼻から流血。

（た、頼むよ鼻の穴の毛細血管っ…！　頻繁に破れすぎだよオマエっ……！）

苦笑しながら鼻に治癒魔法を掛けるシュウ。

その頃のシュウの部屋の中には。

「兄上はシャワー中のようだな」

「うむ。カレンちゃんは父上と母上の部屋で何やら叫んでるぞ」

「今のうちなのだっ…！」

「うむ、今のうちに隠れるのだっ…！」

リンとランがいた。

首からデジ一眼レフカメラをぶら下げて。

シュウの部屋の中をきょろきょろと見回し。

リンはクローゼットの中へ。

ランはトイレの中へ。

扉をちょっと開けて隙間を作ったら。

（隠し撮りの準備完了！　なのだっ♪）

脱衣所へと出て身体を拭いたシュウ。

ゾウパンツを顔の前で広げて見つめる。

「……頑張るんだ、オレ」

と、苦笑しながらゾウパンツを身につけ、鏡で己の姿を確認。

結構な衝撃を受けた。

「ちょ…、ちょっと似合うぜオレっ…！　親父だと絶対似合わねえ

のに何故だ…！　同じ顔なのにっ……！」

と、いつまでも己の姿に目を疑っている場合ではない。

（おっと、カレンもう準備できて待ってるかなっ…）

いきなりゾウパンツで出るのは恥ずかしいので、その上にタオルを巻き。

（ははははははは裸リボンっ…！）

ドキドキとしながら脱衣所から出たシュウ。

それと同時に、シュウの部屋へと戻ってきたカレン。

「あっ」

と声をそろえた。

シュウ、早速鼻から流血。

カレンはキャミソールワンピース型の寝巻きを身につけているのだが、その下に巻いているピンクのリボンが胸元から少し見えている。

（ま、ままま、巻いてるっ…！　リボン巻いてるっ…！　マジで巻いてるっ……！）

鼻を手で押さえて治癒魔法をかけるシュウ。

驚いたカレンが訊く。

「ちょ…、だ、大丈夫？　シュウ…」

シュウはうんうんと頷いて返事をし、部屋の中央へと向かって歩いて行った。

カレンも部屋の中央の方へと歩いていく。

１ｍほど距離を置いて向かい合い。

赤面。

「…っ…ゾ…ゾウさん穿いてるのっ…？」

「…はっ…穿いてるっ…」

「…そ、そうっ…。あ…あたくしも、そのっ…リボン巻……かれてきたっ…」

「ま、巻かれっ…？　か、母さんにっ…？」

「え、えええっ…」

「そ、そかっ…」

「え、えええっ…」

「……」

「……」

途切れた会話。

１０秒ほどして、シュウは再び口を開いた。

「ど、どうする？」

「ど、どうしましょう？」

「さ、最初背中向け合ってるっ？」

「え、ええ、そうしましょうっ…」

「ん、んで、せーので向き合うかっ…」

「え、ええ、そうねっ…」

と、いうわけで。

背を向け合うシュウとカレン。

シュウは腰のタオルを外してゾウパンツ一丁になり。

カレンは寝巻きを脱いで裸リボン姿になり。

「い…、いい？　カレンっ…」

「え…、ええ、シュウっ…」

「そ、それじゃあ…」

「そ、それじゃあ…」

覚悟を決め、

「せっ、せーのっ！」

クルっ！

と、向き合った。

シュウのゾウパンツに目をやり、笑ったカレン。

「きゃあ、可愛いので――」

ブハっ！！

と、カレンの言葉を遮ったシュウの鼻血。

あまりにも勢い良く噴射したものだから、カレンが仰天して声をあげる。

「きゃっ、きゃあああああ！　ちょ、シュウ！？　大丈夫！？」

「……っ……！！！」

鼻を両手で押さえながら首を横にぶんぶんと振るシュウ。

まるで大丈夫じゃない。

（ちょ、待っ、助けっ……！）

目がこれ以上開かないというくらいにまで開いて、裸リボン姿の

カレンを凝視する。

（カっ、カレンおまえエロすぎるだろっ……！！）

治癒魔法を掛けまくっているのに、垂れまくってくる鼻血。

そして反応し始めるゾウの鼻。

パ…

（やべっ…！　これ以上カレン見てらんねえっ……！）

とカレンに背を向けるシュウ。

それと同時に、

（待ってましたなのだあああああああああっ！）

リン・ランがデジ一眼レフカメラのピントをシュウに合わせた。

相変わらず両手で鼻に治癒魔法をかけまくりながら、ゾウの鼻に目を落とすシュウ。

ゾウの鼻がむくむくと起き上がってくる。

パォ…

（あ…あああ…！　や、やめてくれっ…！　やっぱこんなバカすぎんの見られたくねえっ…！）

パォォ…

（た、頼むカレンっ…！）

パォォォ…

（み、見ないでくれっ……！！）

と、願ったのに。

「シュウ、大丈夫！？」

カレンがシュウの前へと回ってきた。

次の瞬間。

「――！！？」

パォォォォォォォン！！

と、ゾウの鼻が完全に起き上がってしまい。

（ぎっ、ぎゃあああああああああああああっ！！！）

シュウ、心の中で絶叫。

「まあ、ゾウさんが」

とカレンの目が丸くなると同時に、

（キタァァァァァァァァァァァァっ！！）

カシャシャシャシャ！！

リン・ランに切られまくったカメラのシャッター。

その音に驚愕して、シュウは部屋の中を目を白黒とさせて見た。

「なっ、なんだ!?　誰だ!?」

「まずいっ！　ずらかるのだっ！」

と、リン・ランの声。

「リっ…、リン・ラン!?」

とシュウが声を裏返した次の瞬間。

リンはクローゼットから、ランはトイレから飛び出し、

「おっ、おまっ…、おまえらあああああああああああああっ！！！」

と首まで赤面しながら寄って来たシュウの腕を間一髪のところで避け。

シュウの部屋から逃げ出した。

「コラ待てっ!!　待てって言ってんだろおまえらあああああああっ!!」

とリン・ランに続き、部屋を飛び出したシュウ。

ちょうどサラの部屋から出て来た、サラ・レオンと鉢合わせ。

「――！？」

目を真ん丸くしてシュウのゾウパンツを見つめるサラとレオン。

シュウ、これ以上でないくらいの声で絶叫。

「――ぎっ…、ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！」

慌てて自分の部屋に飛び込み、さらにベッドの中に潜り込む。

廊下から聞こえてくるサラの爆笑。

「あーーーっはっはっはっはっはっ！！　あっ、兄貴っ…！！　兄貴サイコーっ！！　アタシの兄貴サイコ～～～～～～っ！！　あーーーっはっはっはっはっはっはっ！！　おっ、お腹がっ…！！　もっ、もうダメっ！！　死ぬっ……！！」

ベッドの中、シュウは必死に耳を塞ぐ
あまりの恥ずかしさに泣きそうになる。

「黙れっ！！　黙れサラァァァァァァァっ！！　見なかったことにしてくれえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！　オレはゾウパンツなんか穿いてないっ！！　ゾウの鼻パォォォンなんてしてないんだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

カレン、苦笑。

廊下に顔だけ出し、

「サラ、笑っちゃダメよ」

と言ってシュウの部屋に鍵を閉めた。

頭まで布団を被っているシュウに近寄る。

「な、泣かないで、シュウ。ゾウさん可愛かったわよ?」

「単なるバカだったじゃねーかよっ!!」

「そ、そんなことないわ」

「嘘だっ!　もうオレを見るなっ…!　見ないでくれえぇぇぇえええぇぇえぇえっ!!」

「見るわよ」

と溜め息を吐き、シュウに続いてカレンがベッドに潜り込んだ。

「みっ、見るなって言ってんだろっ!?　じっ、自分の部屋に戻れよおまえっ!」

「嫌よ。裸リボンまでやらせておいて戻れって何かしら」

「戻れったら戻れっ!　戻れ戻れ戻れっ!」

「ふざけないでっ!」

頭まで被った布団の中で、喧嘩を始めるシュウとカレン。

「戻れったら戻れよっ！　あああああ、もうっ…！　エ、エロすぎるわおまえっ……！！」

「ちょっと、背を向けないでちょうだいっ！　失礼なのですわっ！」

「向けるわっ！　萎えてきた鼻がまたパォォォォンてなるじゃねーかよっ！」

「カっ…、カモオォォォンだからいいのですわっ…！　カっ…カモオォォォンったらカモオォォォンなのですわっ……！」

「そっ、そんなに誘うな今日はっ…！　――って、こ、こらっ！　おまっ、引っ付くなっ！」

「レディをこんな姿にさせておいて放置なんて許さないのですわっ！」

「だ、だって…！　――って、わあああああっ！　えっ!?　ちょっ、ウソっ…！　おまっ…、えぇっ…!?　ばっ、マジやめっ…！　やめてくださっ…！　おっ、お嬢さんっ…！　あわわ、そんなっ…！　エエェェエエェェエエっ……!?」

その喧嘩。

パォォォォォォン!!

カレンが勝利した。

「ヘイ、カモオォォォォン」

「うす……」

その頃。
文月島文月町にあるゲール一家宅。

「ねえ、パパ」

「…なんだい、キャロル…」

「今日のバカップルコンテストで、嘘を吐いてごめんなさい」

「…ああ…、気にしてないよ…」

「あのね、パパ。キャロルお願いがあるの」

「…なんだい…？」

「来週の週末、葉月島へ行って来ていいかな」

「…うーん…、離れたところとなるとケリーが心配するから駄目じゃ――」

バリっ！

と、ゲールの言葉を遮ったキャロルの爪。

「いいよね？　パぁパ♪」

「…ゆ、許しちゃうっ…！」

「ありがと♪　これで彼は」と、不敵な笑みを浮かべたキャロル。

「わたしのもの……！」

バリっ！

とゲールの顔面にもう一撃をプレゼントした。

「…たっ、たまらんっ…！」

第１０６話　それぞれのバレンタイン　～長男&カレン編～（後書き）

あぁ…、あれは5、6年前のバレンタインの夜のことでございます。
兄にチョコを渡そうと、私は兄の部屋へと向かいました。
兄の部屋のドアをノックすると、

「見てコレ。もらったんだけど」

と、兄の声が返ってきました。
何だろうと思いながら私がドアを開けると、

「ねえ、どう？」

兄ちゃんゾウさんパンツ一丁で（自慢げに）仁王立ちしーてたあああああああああああ！！Σ（ ﾛ| lll）

第１０７話　双子の始末

赤犬の耳。
胸まである焦げ茶色のさらさらとした髪の毛。
垂れ目がちで、気の弱そうな顔つき。
小さな声が発せられるその首は細い。

「あの…、リュウさまご一家のお宅はどちらへ……？」

「リュウさまのお宅ですか。それならあそこの道を真っ直ぐと進むと辿り着きますよ」

「ありがとうございます」

と文月ギルド・ギルド長兼、超一流ハンター兼、超一流変態ゲールと、文月島で最強を謳われるモンスター・レッドドッグの間に生まれた、ハーフの少女――キャロルは微笑んだ。

道を教えてくれた男性にぺこりと頭を下げ、教えられた道を歩いていく。

「リュウさまのお宅は地図に頼らなくても、葉月島の人々はみんな知っているから楽ね。調べたところによると、今日はブラコンのリンさんランさんのお誕生日…。みなさまでお祝いしているのかしら？」

ふふ、と笑ったキャロル。
持っているバッグの中を覗き込む。

「まずは双子さんから始末……と」

シュウ宅のリビング。
バレンタインデーから一週間目の今日は、リンとランの誕生日パーティーが行われていた。

「リン・ラン！　い～～～～加減に例の写真よこせえぇえええぇえええぇえっ！！」

「あっ、兄上のゾウさんの鼻パォォォォォン写真はわたしたちへの誕生日プレゼントなのだあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあっ！！」

「ふっ、ふざけんなあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあっ！！」

リン・ランを追い掛け回しているシュウに、シュウから逃げ回っているリン・ラン。

そんな騒がしいリビングの中、サラはリュウのグラスにウィスキーを注いでいた。

「はい、親父♪」

「おう、ありがとなサラ」

と、嬉しそうに言ってウィスキーのグラスを傾けるリュウ。
ここ最近、機嫌が良い。
バレンタインデーの次の日からサラがよく寄ってくるから。

（レオ兄からホワイトデーに婚約指輪をもらったあとに待ってるのは、親父っていう難関だからね。今のうちに機嫌取っておかないと）

と、サラは心の中で苦笑する。

サラがレオンから婚約指輪をもらえるかもしれないということを知っているカレンも、リュウの機嫌を取っている。

「リュウさまったら、サラにとぉーっても愛されてますわね♪」

「おうよ」

「サラはきっとお嫁にいっても、リュウさまを一番愛されるのでしょうね♪」

「まーな。つか、嫁にやらねーけどな」

「あら、それはいけませんわよリュウさま？　だってサラは一番リュウさまの性格を継いでいるのですもの。ぜひともサラにリュウさまの子孫を残してもらわなければ！」

「うーん…、まあそれも…、うーん……」

と悩んだ表情を見せるリュウを見て、カレンとサラはちらりと目を合わせて心の中で笑う。

（この調子だと、アタシの方は何とかなりそうかも。心配なのは…）

と、走り回っているシュウと、傍らにいるカレンを見つめたサラ。

（キャロルが余計なことしてこなければいいけど……）

曇ったサラの顔を見て、リュウがサラを膝の上に抱っこした。
サラの顔を覗き込んで訊く。

「どうした、サラ？　父上に話してみろ」

「……ねえ、親父。レッドドッグってさ、どんな魔法使うんだっけ」

「レッドドッグなら、癒し中心だぞ？」

と、口を挟んだのはグレルである。
リュウの隣に座っていたグレルの顔を見て、サラは鸚鵡返しに訊いた。

「癒し？」

「おう、癒し」

「攻撃魔法は？」

「ねーぞ？　戦うときは爪と牙だ」

「ちなみにゲールさんは？」

「ああ、あいつなら」とリュウが口を挟んだ。「魔法使ってんの見たことねーな。でも魔法に対する防御たけーし、魔力あるから魔法も一応持ってんだろうな。攻撃魔法じゃねーやつ」

それを聞いて、サラは少し安堵した。

（ってことは、キャロルは攻撃魔法なし、見た目も弱そう。とりあえずカレンが危ない目に合うことはないかもっ…）

ついにシュウに掴まったリン・ランが泣き出す。

「ふっ、ふにゃあああああん！　ごめんなさいなのだ兄上えええええええええっ！」

「兄ちゃんに例の写真全部返すな！？」

「かっ、返しますなのだあぁぁぁ

「はいですなのだー？」

「こんにちは」

「――！？」

そこに立っている客の顔を見るなり、ドアを閉めたリン・ラン。

（な、何故キャロットさんが…！？）

困惑する。

（違うぞ、キャロブさんだぞ…！）

ドアの外からキャロルの声が聞こえてくる。

「わたしの名前はキャロルですよ？」

「！？　わ、分かってますなのだ…！（ま、間違ってたぞ…）」

「リンさんランさん、お誕生日おめでとうございます」

「な、何故それを…！？」

「有名なリュウさまご一家のことなど、文月島まで伝わっているものです」

「そ、そうでしたかなのだっ……」

「わたし用があって今日と明日、葉月島にいるのですが…。どうせ

ならと思ってご挨拶に来ました。リンさんランさんにお誕生日プレゼントも買ってきたのですが…。…あの…、開けてくれませんか？」

「…え…ええと…」

リンとランは困惑しながら顔を見合わせた。

小声で相談する。

「ど、どうしようなのだラン」

「ど、どうしようなのだリン」

「キャロットさんのこと、兄上に会わせたくないぞ…！」

「キャロブさんが来たこと、兄上に教えたくないぞ…！」

「どうすればキャロットさん帰るのだっ？」

「どうすればキャロットさん引き返すのだっ？」

キャロルが言う。

「あの…、わたし時間がないので…。良かったらプレゼントだけでも受け取っていただけませんか？」

「えっ？」と、声をそろえたリン・ラン。「そ、そうでしたかなのだっ…！　時間がなかったでしたかなのだっ…！　すみませんでしたなのだっ…！」

と、ドアを開ける。

すると、キャロルがプレゼントを出して待っていた。
小さな袋だ。

リン・ランに差し出す。

「お誕生日、おめでとうございます」

「あ、ありがとうなのだっ…」と、戸惑い気味にプレゼントを受け取るリン・ラン。「こ、これは……？」

「文月島で流行ってるキャンディーです。目を瞑って好きな人の顔を思い浮かべながら食べると、好きな人と結ばれると言われているのですよ？」

「お…おおーっ」と、思わずリン・ランの声が高くなった。「本当だったらすごいぞーっ」

「単なるおまじないですけどね。でも中には本当に好きな人と結ばれたという方もいるので、運の良さがかかっているのかもしれませんね」

「おおーっ」と、さらに高くなったリン・ランの声。「願いが叶った人もいるのですかなのだーっ」

「はい。わたしの友人なのですが」

「おおーっ、すごいですなのだーっ」

「はい、羨ましいです。わたしは…」と、悲しそうに顔を伏せたキャロル。「願いが叶いませんでしたから…」

「……」

リンとランは顔を見合わせた。

キャロルがシュウのことを好きだということは知っている。
だからきっとシュウの顔を思い浮かべながらキャンディーを食べたのだろう。

（ちょ、ちょっと可哀相なのだっ…。な、何て言ってあげればいいのだっ…！）

キャロルへの慰めの言葉を、あれやこれやと慌てて考えるリン・ラン。

そんな2匹に向かって、キャロルが微笑んだ。

「リンさんランさんに、ご幸運が舞い降りますように」

「…あっ…ありがとうなのだっ…」

「では、わたし用がありますのでこれで…」

と頭を下げ、去っていくキャロル。
その背を見送ったあと、リン・ランは玄関のドアを閉めた。

手元のキャロルからのプレゼントに目を落とす。

「…わ…わたしたちの願いは叶うと思うかっ？　ラン…」

「…わ…わたしたちの願い、叶いますようになのだっ、リン…」

顔を見合わせ、うんと頷いたリン・ラン。

プレゼントをポケットの中へとしまい、リビングへと駆けて行く。

「兄上～っ！」

「どうしたリン・ラン。遅かったな」

「新聞の勧誘だったのだ。断るのに苦労したぞーっ」

「そ、そうか大変だったな。親父がいるうちにしつこく勧誘とは何とチャレンジャーな…」

「それじゃわたしたち、学校の宿題があるから部屋に戻るのだ」

「へ？」

とシュウがぱちぱちと瞬きをしているうちに、自分たちの部屋へと駆けて行ったリン・ラン。

本日の主役がいなくなったリビングで、シュウは苦笑する。

「おーい、兄ちゃん誰のために料理頑張って作ったと思ってんだー…」

「めずらしいわね、リンちゃんランちゃん」と、カレン。「そんなに宿題がたくさん出されたのかしら」

「それでも…」マナが口を挟んだ。「リン姉ちゃんラン姉ちゃんなら、時間かからないはずだけど…」

「アレじゃないのー？」とサラがにやりと笑う。「兄貴のゾウパンツ写真を見つからないところに隠してるとか」

「なっ、何ィ！？」

声を裏返して立ち上がったシュウ。

リン・ランの部屋へと向かって駆けて行き、

「ゴルァァァァァァァっ！　リン・ラァァァァァァァァァァァァァンっ！！」

バンっ！

とリン・ランの部屋のドアを開けた。

「おまえら兄ちゃんの鼻パォォォォン写真を隠――」

シュウは言葉を切った。

困惑する。

「なっ…、何泣いてんだよおまえらっ？」

呆然として立っているリン・ラン。

黄金の瞳から、大粒の涙がいくつも伝っている。

「ど、どうした？　おい、リン・ランっ？　な、なんだっ？　そん

なにゾウの鼻パォォォン写真を持ってたいのかっ！？　う、うーん…、でも流石にあれは兄ちゃんの一世一代の赤っ恥かもしれなくてっ…！　そ、そうだリン・ランっ！　ゾウパンツ穿いてないバージョンの写真なんてどうだっ？　脱いだらパォォォンじゃなくなるけど！　――って、ぎゃあああああっ！　今の忘れて今のっ！　ノーパンでモロ出しは駄目だろオレっ……！！」

「兄上っ…！」

「んっ？　なん――」

ズドドドドドっ！

とシュウの身体目掛けて、マシンガンのようにぶっ放された氷の結晶。

「いでででででででっ！？」

と廊下まで吹っ飛ばされたシュウ。

閉められたドアを見ながら、仰天して声をあげる。

「おっ…、おまえら急に何しやがるっ！　家の中で魔法を使うんじゃないっ！　っていうか、兄～～～～～ちゃんがそんなに憎いのか！？」

「…きっ…！」

「えっ？」

「嘘吐きっ…！　兄上の嘘吐きぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！」

とドアの向こうでわんわんと泣くリンとラン。

シュウ、狼狽。

「うっ、嘘吐きって…！　だ、だっておま…！　兄ちゃんマッパでしかも一部に異変起きてたら変態じゃねえかよっ……！？」

「嘘吐き嘘吐き嘘吐き！　兄上なんかっ…！　兄上なんか、もう信じられないのだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「え…えぇっ！？」シュウ、衝撃。「お、おい、リン・ラン…！兄ちゃんさっきは嘘吐いたわけじゃっ……！」

「大嫌いっ…！　兄上なんか、大嫌いっ！！　大っ嫌いなのだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――」

「わ、分かった！　分かった落ち着けリン・ラン！　いっ…、今脱ぐからっ……！」

と、2階の廊下をきょろきょろと見渡して誰もいないことを確認するシュウ。

急いで服を脱いでいき、

「…う…」パンツ一丁になったところで躊躇する。「…あ…あの…、パンツは遠慮していただきたい…んすけど……？」

「うっ、嘘吐きぃぃぃ――」

「あああああ、はいはいスミマセン～っ！」

と、慌ててパンツも脱ぎ捨てたシュウ。

ごくりと唾を飲み込む。

「…そ…それで、あの…、一部に異変起きさせないと駄目っすか…？」

「ふにゃあああぁぁあああぁぁあああん！」

「ええスミマセン駄目ですよねハイ。……で、でも、ちょ…、ど、どうしよ…。こ、こうなったら裸リボンのカレンを思い浮か……。…うっ、エロっ……！」

「何してんの兄貴」

「――って、ぎゃあぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあっ！？」

シュウ、絶叫して股間を両手で隠す。

振り返るとそこには目を丸くしているサラ。

そしてカレン。

「ちょ…、シュウ……？」

「カっ、カレンこれはあぁぁ…！」

と、慌てて服を身に着けながら状況を説明したシュウ。

話を聞き終わったサラが腹を抱えて笑う。

「あーーーっはっはっはっは！　あっ、兄貴っ、それ絶対違うって！」

「えぇっ！？」

「マッパで何してるかと思いきやっ……！　あーーーっはっはっはっは！　もうちょっと遅く来れば面白いもんが見れたねっ！！」

「うっ、うるせえうるせえうるせえっ！！」

と首まで赤面し、シュウが顔を隠すようにして蹲った。

「ああもう、おっかし～～～っ！！」

と、サラは廊下で笑い転げ。

カレンは苦笑しながらリン・ランの部屋のドアをノックした。

「リンちゃん、ランちゃん？　どうしたの？」

「嫌いなのだっ…！」

「え？」

「兄上なんか、大嫌いなのだっ！　ずっとずっとわたしたちに嘘を吐いていたのだっ！」

「嘘？」カレンは眉を寄せた。「シュウがリンちゃんとランちゃんに？」

「本当はわたしたちのこと、大切になんか思ってなかったのだっ！」

カレンがさらに眉を寄せると同時に、シュウが顔をあげ、サラの笑い声が止まった。

3人顔を見合わせる。

今、リン・ランがとてもおかしいことを言った。

シュウは立ち上がると、ドアに近づいた。

戸惑いながら訊く。

「おい、リン・ラン？　今の何だよ？　兄ちゃんがいつそんなこと言ったよ…？」

「聞いたのだっ…！」

「聞いた？」

「兄上の心の中の声、聞いたのだっ…！」

「は…？」

「兄上の本心を聞いたのだっ！　兄上なんかっ…！　兄上なんか、大嫌いっ！　大っ嫌いなのだぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああっ！！」

部屋の中で、大声で泣き喚くリン・ラン。

シュウとカレン、サラの3人は再び顔を見合わせる。

互いの困惑した顔を見ながら声をそろえた。

「何が…起きて……？」

葉月町を歩いているキャロル。

猫モンスターやそのハーフばかりのこの町で、犬耳は人目を引く。

本来、猫モンスターと犬モンスターは犬猿の仲。

度々威嚇されるが、キャロルはどうでも良さそうだ。

牙を向き尾っぽの毛を逆立てている猫モンスターの脇を通りすぎ、キャロルは短く笑った。

「ふふ。そろそろ双子さんの始末は完了…かしら。次は……」

キャロルの頭にカレンが浮んだ。

だが、首を横に振る。

（その前に、もう一匹邪魔な猫がいるわ。彼女はライバルというわけではないけど、始末しておいた方が良さそう。まあ、次に葉月島に来たときになってしまうけど…。ってなると次は来月ね……）

と、苦笑するキャロル。

（テスト前はママがうるさくて困るわ…。明日買い物を終えたら、すぐに文月島帰らなくちゃ）

地図を取り出して宿泊先に向かって行った。

「ええと、大切な薬の材料が売ってるお店の近くにあるホテルだからー……」

第１０７話　双子の始末（後書き）

7日の2時23分ごろメールくださった読者さまへ。

え、兄のゾウさんパンツですか？ｗ

イラストじゃなくて、もち！　鼻起き上がりシステム！ｗ

私の兄もなかなかとんでもネェですが、あなた様の通っていた塾の先生もとんでもネェですなｗｗｗ

第１０８話　出ました

リン・ランの誕生日の次の日。

働いているドールショップの床をモップで掃除しているミヅキ。

「何があったんだろう…」

と小さく呟いた。

昨日のシュウ宅でのリン・ランの誕生日パーティーは途中で中断された。

リビングにいた皆にまで届いてきたリン・ランの泣き声。

一体何事かと、リビングにいた一同は2階へと駆けて行った。

リン・ランの部屋の前、困惑した顔で立っていたシュウとカレン、サラ。

リン・ランの部屋の中からは、「兄上の嘘吐き」だの「兄上なんか大嫌い」だのそんな罵声が響いていた。

誰が何を訊いても、同じ言葉を繰り返して泣きじゃくっていたリン・ラン。

そのうちシュウは深い溜め息を吐いて、自分の部屋へと入っていってしまった。

（傷付いてたよなあ…、シュウ。カレンちゃんには心配かけないようにするのは分かるけど、ぼくにまで「大丈夫」だなんて作り笑顔向けんなっての……友達なんだから）

もう一度溜め息を吐いたミヅキ。
ふと顔をあげたときに、開けていた出入り口のドアの外を通って行った少女が目に入る。

（ん？　犬耳？　めずらしいな。……って、あれっ？）

ミヅキはモップを投げ出すと、戸口まで駆けて行った。
ドアから顔を出し、今通り過ぎて行った犬耳の少女を見つめる。

少女はミヅキの働くドールショップから少し離れたところにある店――マナがよく薬の材料を買いに行く店へと入っていった。

「間違いない。あの子、キャロルちゃんだ」

仕事から帰ってきて真っ直ぐ向かったリン・ランの部屋の前。
ただいまを言ったあと、シュウは深い溜め息を吐く。

「リン、ラン…。兄ちゃん、おまえたちのこと本当に大切に思ってるよ。嘘なんかじゃねえよ」

といくら弁解をしても、リン・ランの返事は泣き声だけ。
昨日のあれ依頼、リン・ランは泣きっぱなしだ。

「シュウ…、今は何を言ってもダメなのかもしれないわ」

そう言ってカレンは、シュウの手を引っ張ってシュウの部屋へと向かって行く。

（何かがおかしいわ、何かが…。どうしてリンちゃんランちゃんがいきなり…。きっと昨日、あたくしたちが見ていないところで何かがあったのですわ。そうとしか考えられないもの……）

シュウの部屋の中、カレンがそう思ったとき。

一階から二階へと慌ただしく掛けて来る足音が聞こえた。
その足音はこちらへと向かってくる。

そして、

「兄貴、カレンっ！」

ドカッ！

とドアを蹴り開けて現れたのはサラだった。
それからレオンと、ミヅキの姿もある。

「ど、どうしたの？　サラっ…。そんなに慌てて」

カレンが訊くと、サラがレオンとミヅキを引っ張って部屋の中に入れ、ドアを閉めた。
そして言う。

「ミヅキが今日の昼間、葉月町でキャロル目撃したって！」

「えっ…！？」

どきっと嫌な動悸がしたカレン。

それと同時に、シュウがきょとんとして訊く。

「それが？」

「それがって…。ああもう、予想通りの反応」とミヅキが溜め息を吐いた。「いやまあ、シュウじゃ話進まないと思ってサラちゃんにキャロルちゃん目撃メールしたんだけど？」

シュウが眉を寄せる。

「は？　何？　どういう意味？」

サラが苛々とした様子で言う。

「だーかーらぁー、キャロルは兄貴のこと好きなんだってば！　直接告られてるってのに、まだ分かってないわけ！？　どんな鈍感頭してんだよ兄貴！？」

「はぁ？　何言ってんの？」

と声を裏返し、そんなことあるわけがないというような顔をしているシュウ。

あまりにも予想通りな反応で、ミヅキが再び溜め息を吐いた。

シュウを放置して話を続ける。

「ぼくさ、一瞬思ったんだよ。リンちゃんランちゃんをおかしくさせたのはキャロルちゃんじゃないかって。昨日のパーティーのときの来客は新聞の勧誘じゃなくて、キャロルちゃんだったんじゃない

かと思うんだ。キャロルちゃんを疑ってるわけじゃないけど…、いや疑ってるからこんなこと思ってるんだけど……」

「アタシもミヅキに同意だよ」と、サラ。「リン・ランがおかしくなったのは、昨日の来客のあと。そして葉月町にキャロルがいた。となると、リン・ランをおかしくさせた犯人はキャロルだとアタシは確信する！」

「こらこら君たち…」と苦笑したレオン。「そんな証拠、まだどこにもないでしょ？　ただキャロルちゃんが葉月町にいたってだけじゃない…。リンとランから話が聞ければいいんだけど、あの様子じゃ聞けそうにもないね」

困惑しているカレン。
確認するために訊く。

「ミ…、ミヅキくん、キャロルちゃんが葉月町にいたのは本当なのね？」

「うん。ぼくが見間違えていなければだけど、あれはきっとキャロルちゃんだよ。マナちゃんが薬の材料を買いに行く店あるでしょ？　あそこに入って行ったんだ」

「だからさだからさ」と、サラが続いた。「キャロルもきっと、マナみたいに薬を作るんだよ。魔力さえあれば、薬の本見て魔法かけられるらしいし。キャロルには攻撃魔法ないと思って油断してたよ、アタシ」

「……」

俯いたカレン。

まるで話についていけないシュウだったが、カレンの不安そうな横顔を覗き込んで言う。

「お、おい？　誰がオレのこと好きだろうと何だろうと、オレはカレンのことが好きなんだからなっ？　忘れんなよっ？」

カレンがシュウの顔を見る。

（そうよね…、大丈夫よね。シュウがこう言ってくれてるんだから、不安になることなんてないのですわ）

カレンが笑って頷いたのを確認すると、シュウも安堵したように笑った。

そしてサラが、何やら気合の入った様子で声をあげた。

「ずえっっっったい！　兄貴とカレンには指一本触れさせないんだからねキャロルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！！」

「――と、叫んで1週間が経ち、2週間が経ち、ついに3月がやってきて3週間が経ったのにキャロルは姿を現さず、いい加減気が抜けてきたサラです…」

とレオンの部屋の中のベッドで溜め息を吐くサラ。

レオンの腕枕に頬を擦り付けながら訊く。

「ねー、レオ兄ー。何でだと思うー？　キャロル来なーい」

「この間はちょっと葉月町に用があっただけだったんだよ、きっと」

「そーおーかーなぁ…」

「キャロルちゃんのこと疑いすぎだよ、サラ」

サラの動きが止まった。

「だって、キャロルが兄貴のこと好きだってことに違いはないもん。キャロルがカレンのこと良く思ってるわけがないもん。リン・ランは部屋にこもりっ放しで相変わらず話は聞けないけど……、絶対キャロルに何かされたんだ。絶対キャロルの仕業だもん」

「だから」とレオンが溜め息を吐く。「そんな証拠、どこにもないでしょ？」

「ないけどキャロルだもん」

「何それ…」

「キャロルったらキャロルだもん。絶対キャロルだもん」

「はいはい…」と、もう一度溜め息を吐いたレオン。「でもさ、サラ。もしキャロルちゃんが現れたらどうする気？　僕との約束、忘れてないよね？」

「忘れてないよ！」

とサラが声をあげた。

レオンの顔を見て続ける。

「アタシはキャロルが現れても、絶対に暴力だけは振るわない！

ホワイトデーは来週だからね、レオ兄っ！　忘れてないよねっ！？」

「忘れるわけないでしょ」

とレオンが笑った。

それを見て、サラも笑顔になる。

「ねね、レオ兄？　なーんて言ってくれるのっ？」

「まだ秘密」

「いーじゃん、ちょっとくらい」

「ダメダメ。ホワイトデーに渡すものとセットにして言う言葉でしょ」

と、レオンがベッドから起き上がった。

サラの身体も左腕で抱いて起こす。

「さて、帰ろうかサラ」

「エー、何で」と膨れたサラ。「まだ早いじゃん。ちょっともう1発」

とレオンの身体を押し倒す。
が、レオンが再び身体を起こす。

「今日はもうダーメ」

「えぇっ!?　レオ兄、４発でバテるようになっちゃったの!?
純モンスターなのに!?」

「いや、違うよ…」

と、苦笑したレオン。
ベッドから出て衣類を身につけながら言う。

「今日これからちょっと用事があってね」

「――!?」サラ、大衝撃。「レっ…、レオっ…レオ兄のブワァァァァァカァァァァァァァァァァァァっ!!」

「へっ?」

「そんなことならゴムに穴開けときゃ良かったあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

「ちょ、サラ――」

「そしたら『レオ兄に孕ませられちゃった♪　もち責任取ってくれるよね?（ハート）』ってできたのにいいいいいいいいいいいいいっ!!」

「あぁもう――」

「うわぁぁぁぁあああぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――」

「コラっ！」

ピシっ！

とサラの言葉を遮ったレオンのデコピン。

「バカなこと言ってんじゃないよ、サラ。僕が浮気するわけないでしょ」

サラが額を擦りながら笑う。

「だよね、ごめんなさーい」

「まったくもう…」

「で、用って？」

「秘密」

「やっぱ浮――」

「怒るよ」

「ゴメンナサイ。で、用って？」

「秘密だってば」

「分かった。で、用って？」
「……」
「ねえ、用って？」
「……しつこいね」
と、苦笑したレオン。
溜め息を吐いて言う。
「宝石店で注文してたあるものが出来上がったらしいから、それをこれから取りに行くんだ」
「宝石店で注文してたあるもの…？」
と鸚鵡返しに言い、首を傾げたサラ。
はっとしてにやける。
「ふーん？　そっか、何だろうな～。まったく分からないな～、アタシ！　でも超すごく大切な用みたいだから、早く帰ってあげなくっちゃ♪」
と、いそいそと衣類を身につけるサラ。
レオンの手を引っ張って、レオン・グレル宅を後にする。
「ねえ、レオ兄。今日送らなくていいよ」
「どうして？」

「アタシもちょっと行くところがあって」

「どこ？」

「薬局」

「薬局？」

キャロルが現れることなく、さらに約一週間が経ち。

何だかもうカレンもサラも、キャロルのことを忘れかけていた。

今はキャロルのことより、２人は明日のホワイトデーのことで頭が一杯だ。

一緒に入浴したあとのカレンの部屋の中、カレンが言う。

「いよいよ明日ね、サラ？」

「うん」

と、わくわくとした様子でハンドクリームを手に塗りこんでいるサラ。

約一週間前に薬局で一番高いものを買ってきた。

そしてその日から、一日３回かかすことなく塗りこんでいる。

カレンが笑う。

「そんなことしなくたって綺麗な手してるじゃない、サラ。水仕事しないんだし」

「最後の余計だしー」

「ふふ、ごめんなさい。でも、ハーフなんだから手荒れなんて無縁じゃないのかしら？」

「ハーフだから気をつけてるの。半分人間だし。ママみたいな純モンスターは、いくら水仕事しても荒れないけどね」

カレンがサラの左手を取った。

「まあ、美しい手だこと。ネイルも綺麗に整えてあるし。明日ここに……」と、サラの左手の薬指を握るカレン。「エンゲージリングが輝くのね」

「うん…、レオ兄からのエンゲージリング」

「……」

「……」

数秒の沈黙は嵐の前の静けさ。

「きゃあああああああああああっ！　レオンさん何てプロポーズするのかしらあああああああああああああああっ！！」

「何て言われちゃうの！？　何て言われちゃうのアタシィィィィ

ィィィィィィィっ！！　『君を一生あいらーびゅー（Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ）』とかあああああああああああああっ！？」

「あんもう素敵いいいいいいいいいいいいっ！！」

「アタシも一生あいらーびゅうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！」

カレンとサラ、抱き合ってベッドの上をごろんごろんと転がって大暴れ。

しばらく黄色い声をあげてはしゃいだあと、２人はぴたりと止まった。

「おめでとう、サラ…！」

「ありがと、カレン。って、まだアタシプロポーズされてないけど」と、サラが笑った。「でもアタシ……」

「ええ」

「明日、レオ兄からエンゲージリングもらって、そしてプロポーズされる……んだよね？」

「ええ、そうよサラ」

「……」

仰向けに寝転がり、サラが左手を顔の前にかざして微笑む。

（明日、この薬指にレオ兄からのエンゲージリングが……）

翌日。
ホワイトデー。

リュウとキラは朝からデートへと向かい。
レナも正午ちょっと前からミヅキとの初デートに向かい。

シュウとレオンは夕方までに本日分の仕事を終わらせに行っている。
シュウとレオンも、デートのために。

部屋の全身鏡の前、サラと並んで立っているカレンは頬を染めた。

「ああ…、素敵よサラ」

鏡越しにカレンの瞳に映るサラ。
今日のデートでレオンと高級ホテルのレストランへと向かうため、ドレスアップしている。

今日のサラは誰よりも輝いて見えた。
同性であるカレンも、思わず見惚れてしまうくらい。

「これからレオンさんという素敵な王子さまと会って…！　それでそれでっ……！」

サラが笑った。

「始まったよ、カレンの乙女なトリップが」

はっと我に返ったカレン。

「あらヤダ、いけないわ」と、時計に顔を向ける。「もう準備できたし、行こうかしら？　でもちょっと早すぎるかしら」

カレンとサラは本日のデートで、葉月町の中央――キラの銅像前でシュウとレオンと落ち合うことになっている。

「ううん、早く行こうっ！　レオ兄早めに待ってるかもしれないし」

と、うずうずとした様子のサラ。

カレンの手を取り、廊下に出る。

玄関へと向かう途中、リン・ランの部屋のドアをノックした。

「リン・ラン？　アタシとカレン、出掛けてくるからね？　親父もママも兄貴もいないから、誰が来ても出ちゃダメだよ？」

「…いってらっしゃいなのだ……」

そんなか細いリン・ランの声を聞いたあと、サラは階段を下りていった。

玄関にミラが見送りに来る。

「いってらっしゃい、サラ、カレンちゃん」

「ねえ、お姉ちゃん。誰が来ても開けちゃダメだからね？　お姉ちゃんは弱いしリン・ランは弱ってるし、三つ子の力はまだ心配だし」

「分かってるわよ」

「って、あれ？　レナはデートだよね。ユナとマナとジュリは？」

「ユナはジュリの相手してるわ。マナはお部屋にこもって何かしてるみたいだけど…」

「ふーん？　それじゃいってきます、お姉ちゃん」

「いってきます、ミラちゃん」

と、屋敷を後にしたカレンとサラ。

葉月町へと続く一本道を歩いていく。

「レオンさん、ちゃんとスーツに着替えてくるのかしら？」

「うん、そう言ってた」

「はぁ…、素敵だわレオンさん」と再び染まったカレンの頬。「シュウは仕事帰りだから戦闘服のままなのよね…。いえ、うん、いいのだけれど。わざわざ帰ってきて着替えるの大変だと思って、そのままでいいって言ったのはあたくしだから」

「でもちょっと萎えるよねー。カレンはお洒落したのに、兄貴は薄汚れた戦闘服ってさ」

「……」カレン、苦笑。「あ…あたくしたちのことはいいのよ、あたくしたちのことはっ！」

と気を取り直し、サラの腕を取る。

「サラ、フィアンセのところへ向かってレッツゴォォォォよっ！」

「よし、レッツゴォォォォっ！」

と腕を組み、スキップして待ち合わせ場所へと向かっていくカレンとサラ。

「へイへイへイへ～～～イ♪」

「へイへイへイへ～～～イ♪」

「与作～は木～を切るぅ～♪」

「へイへイホー♪　――って、サラ渋っ！　ソレあたくしのおじーさまの十八番じゃないっ！　せめてキ〇シにしてちょうだいっ！」

ハイテンションで道をスキップしていって数分。

「サ、サラ、つ、疲れたのですわぁ～っ…！」

と、カレンの息が切れてきた頃。

突然サラが立ち止まった。

「はぁっ…、はぁっ…、やっと止まったのですわ」

膝に両手をつき、呼吸を整えるカレン。

サラの横顔を見上げ、首をかしげる。

「サラ…？」

緊迫しているサラの表情。

カレンはその理由を、サラの目線を追って知った。

「――出た」

と、顔が引きつる。

「出たよ、カレン」

「やっぱり出たわ、サラ」

「やっぱり出たよ、カレン」

何が出たかって、

「ごきげんよう、カレンさん、サラさん」

キャロルが……。

第１０８話　出ました（後書き）

変なサブタイトル……ｏｒｚ

昨日の２１時２６分ごろメールくださった読者さまへ。
メール返信しておきますたーゞ（＊´∀｀＊）ノ゛

第１０９話　次女の始末　～前編～

（久しぶりの葉月町ね…）

と、キャロルは夕方の葉月町を歩きながら苦笑する。

（ママってばテスト前とテスト期間は絶対に外に出してくれないんだもの。テストで間違ったところは復習させられるし。結局春休みになっちゃったわ…）

一ヶ月前に来た時のように、キャロルの犬耳は人目を引く。

相変わらず猫モンスターやそのハーフに威嚇されながら、キャロルはシュウ宅の方へと歩いていく。

途中、遠く――キラの銅像前にレオンの姿を見かけた。

スーツに身をまとい、腕時計を見て時刻を気にしている。

「あらあら、素敵な猫さんがいると思ったら…」

ふふ、と短く笑ったキャロル。

レオンの目に入らぬよう、さらに遠のいた道を歩いてシュウ宅へと向かっていく。

「これからデートなのね、サラさん。今日はホワイトデーだものね。レオンさんと素敵なデートをする予定なのかしら？」

キャロルがもう一度短く、ふふ、と短く笑った。

（ざぁーんねん…）

「あれっ？　レオ兄、早いね」

と、仕事帰りに葉月町の中央にあるキラの銅像前にやってきたシュウ。

携帯電話で時刻を確認して続ける。

「オレも待ち合わせ時間より早く来たのに。しかも……」と、シュウはレオンの全身を見渡した。「ちょっとホワイトデーだからってカッコイイんじゃねーの？　オレなんて戦闘服のままだぜ？」

「うん…、今日はとても大切な日だからね」

と、微笑むレオン。

シュウは首をかしげた。

「え、何？」

「サラから何も聞いてない？」

「うん。…あ、何かカレンは知ってる風だったけど」

「そう。実はね、シュウ。今日、僕はサラにプロポーズするんだ」

そんなレオンの言葉を聞いたシュウ。

「……へ？　プロ…ポ……？」

理解するまでに１０秒もの時間がかかり。
その後、驚愕して絶叫した。

葉月町へと続く一本道。
シュウ宅と葉月町を繋いでいるためにだけあるこの道は、人の気配が少なかった。
シュウ宅と、葉月町入り口のちょうど中央あたり。
カレンとサラの顔が引きつっている。

「やっぱり出たわ、サラ」

「やっぱり出たよ、カレン」

２人の前方、約５メートルのところ。

「ごきげんよう、カレンさん、サラさん」

キャロルが微笑んで立っている。
ぺこりと頭を下げてから続ける。

「出た、だなんてわたしをバケモノやオバケみたいに言わないでほしいです」

「あー、ごめんごめん。バケモノやオバケと一緒で見たくない顔なもんだからさ、醜くて」

と言って、ふんと笑ったサラ。

キャロルを睨みつける。

「この道の先にあるのはウチだけ。何の用だ、赤犬。その耳も面も犬の匂いも、虫唾が走るんだよ。さっさと失せな」

「それは申し訳ございませんでした。失礼します」

とキャロルが深々と頭をさげた。

(良かった…、おとなしく引き返すのね)

と安堵したのはカレンだけ。

サラの黄金の瞳は逃していない。

キャロルが手にぶら下げているバッグの中に、右手を入れたのを。

(何か出す…!)

それはキャロルが不敵な笑顔を浮かべた顔をあげると同時に、サラの視界に飛び込んだ。

(――麻酔銃!)

咄嗟の判断でカレンを抱き締め、歩道から車道へと飛び出したサラ。

カレンの身体がアスファルトに打ち付けられないようにと、己の

背を犠牲にする。

サラの細い背がアスファルトの上を滑っていく。
止まるか止まらないかのうちにカレンがサラの腕の中から叫んだ。

「サラっ！」

一方、サラが車道に飛び出すとほぼ同時に銃の引き金を引いていたキャロル。
放たれた針は、宙を舞ったサラのストールを通過していった。

それを見てキャロルが、ふふ、と短く笑う。

「すごいです、サラさん。さぁーすが、リュウさまとキラさまの娘といったところでしょうか」

「加えて、アタシはレオ兄の弟子ハンターだからね」

ふん、と笑い返したサラ。
カレンを起こさせて立ち上がり、カレンを背に庇ってから続ける。

「舐めんじゃないよ、クソ犬が。アタシの親友には指一本触れさせないよ」

サラの背にいるカレンが震えた。

明るい茶色の髪の毛をアップにしてまとめているサラ。
水色のミディアムドレスから露出している、細い背と肩。
擦り剥けて血が滲んでいた。

（ああ、大変っ…！　シュウ、レオンさんっ…！　助けてっ……！）

助けを求めようと、携帯電話の入っているバッグを探してきょろきょろと辺りを見渡したカレン。

バッグはさっき飛んだ際に、遠くまで飛んでいってしまった。

同様にサラのバッグもカレンの手の届かないところに飛んでしまっている。

（どうしましょう…！　携帯は届かない、他に人も見当たらない…！　このままじゃ……！）

もう一度サラの背を見たカレン。

ドレスにまで血が染み渡っていた。

（ああ…！　サラっ……！）

サラの背、カレンは覚悟を決める。

「サラ、待ってて…！　今あたくしがバッグの中の――」

「ダメ、カレン」

小声のカレンの台詞を、サラが小声で遮った。

キャロルを睨み付けたまま続ける。

「絶対にアタシの背から出ちゃダメだよ、カレン。絶対に。大丈夫、この程度の傷なんて痛くないよ」

「でもっ――」

「ふふ」と、カレンの言葉を遮るかのように響いたキャロルの笑い声。「サラさん、そんなにカレンさんを庇わなくても大丈夫です。今日のわたしの狙いはカレンさんではなく、あなたなのですから」

サラは眉を寄せた。

「アタシ…だって？」

「ええ、あなたです。サラさん」と、キャロルがサラに向かって銃を構えた。「この銃、どんな銃だとお思いですか？」

「それは麻酔銃だ。モンスター狩の輩が使う、拳銃型の麻酔銃だ」

「正解です。でも、ざぁーんねん。この銃の中に入っているのは麻酔薬ではありません」

だったら何だと考えたサラ。

すぐに分かった。

「…なるほどね。あんたが作った薬が含まれてるってか」

「あら、わたしが薬を作っていることをご存知で？」

「あんたが先月葉月町をうろついてたことなんてバレてんだよ。うちのリン・ランをおかしくしたのもあんただね？」

「別に？」ふふ、とキャロルが短く笑う。「わたしはただ、リンさんランさんにシュウさんの本音を聞かせてあげただけですよ？」

「本音…だって？」

「はい。彼女たちには、想い人の心の声が聞こえる薬が入ったキャンディーをプレゼントしたのです」

「じゃあ、何。リン・ランは兄貴の心の声を聞いておかしくなったってわけ」

「はい」

と、にっこりと笑ったキャロル。

銃の引き金にかかっている指に力が入る。

「サラさん、あなたにも愛するレオンさんの本音を」

「――サラ避けてっ！」

と蒼白して叫んだカレン。

（んなこと出来るわけないじゃん、カレン）

心の中、サラは笑った。

キャロルが放った銃の針が、かざしたサラの手に突き刺さる。

（アタシが避けたら、あんたに当たっちゃうよ）

サラの背後から顔を出し、カレンが涙の混じった声で叫ぶ。

「きゃっ、きゃあああああっ！　サラぁっ！」

「あーあぁ、アタシもまだまだだなあ。親父なら指で摘んで折って

たところなのに、アタシときたらもろに手の平に刺さってんじゃん」

と笑い、手の平からサラが針を引っこ抜く。

そして、身体が前へと出掛けていたカレンを背に押しやった。

「出てきちゃダメだって、カレン。アタシは大丈夫だから」とカレンに笑顔を向けたあと、再びキャロルに顔を向けたサラ。「で？針刺さったけど、まだ何ともないよ？」

ふふ、とキャロルがまた笑う。

「さぁーすが、サラさん。本当、感嘆の溜め息が出てしまいそうです。薬の即効性をあなたの魔力が遅らせているのですね」

「アタシを舐めるなって言ったでしょ。それより、気になるんだけど」

「はい？」

「あんたは兄貴が好き。リン・ランが邪魔なのは理解ができる。その次にあんたが消すのはカレンだと、アタシは思ってた。それなのに、どうしてアタシを狙う」

「邪魔だからです」そうキャロルが即答した。「わたしが一番始末したいのはもちろん、シュウさんの恋人であるカレンさん。でも、サラさんあなたはそれを阻止しようとするのです」

「あー、なるほど納得。そりゃアタシが邪魔だわな」ふん、とサラが笑う。「同様に、アタシもあんたが邪魔だ。アタシの大切な親友と兄貴の幸せ……、壊そうとしてんじゃないよ！！」

サラの怒りに満ちた黄金の瞳。

それを見ながらキャロルがまた、ふふ、と笑う。

「そんなに怒ったところで、あなたは何が出来ます？　一般人であるわたしに、ハンターであるあなたが」

「…っ…！」

サラは奥歯をぎゅっと噛み締めた。

約束した。

レオンと約束した。

一般人に手をあげないと、サラは約束した。

（その約束を守れたらアタシはレオ兄からもらえるんだ…、婚約指輪（エンゲージリング）を……！）

だから奥歯を噛み締めて堪える。

歯軋りがした。

必死に押さえつける。

大切な親友と兄の幸せを壊そうとするキャロルを、今すぐこの場で八つ裂きにしてしまいたい感情を。

（レオ兄っ…！）

サラの脳裏に浮ぶ愛しい男の顔。

小さい頃からずっと好きだった。
いつかこの男と結婚できたらと、ずっと夢見ていた。
それがもうすぐで叶えられようしている。
このチャンスを逃すわけにはいかない。

（レオ兄…、アタシ約束守るからね。そしたら…、そしたらプロポーズと一緒にエンゲージリング――）

心の中、サラは言葉を切った。

「…えっ…？」

と、きょろきょろと当たりを見回す。
今、レオンの声が聞こえた気がして。

キャロルが言う。

「おやまあ、薬が効いてきたようですね」

「何…」

「レオンさんの心の声が、あなただけに聞こえてきますよ。そう、本音が」

「――」

レオンの声が、サラの頭の中に響いてきた。

自分の部屋の中、マナは分厚い本と睨めっこしていた。
その本は、魔法を加えた薬――魔法薬について書かれてるもの。
これでもう、２５冊目だ。

（キャロルさんが葉月町の、魔法薬の材料が売っているお店へと入っていった…）

マナはざっと目を通しながら、ページを次から次へとめくっていく。
１ページを見る時間はほんの一瞬であるが、ちゃんと読めている。

（それはつまり、キャロルさんは薬を作るということ…。あたしと同じ、魔法薬を…）

もうしばらく泣いているリン・ランの声が、マナの頭の中から離れない。

（リン姉ちゃんラン姉ちゃんは、「兄上の嘘吐き」って言っていた…。「兄上は本当はわたしたちのこと大切に思ってなかった」って言っていた…。そして「兄上の心の中の声を聞いた」と言っていた…）

そんなバカなと、マナは思う。

（兄ちゃんがあたしたち妹を大切に思っていないわけがない…。たとえ兄ちゃんの心の中の声が聞こえたとしても、あたしたちが悲し

むようなことを言うわけがない…）

とあるページでマナの手が止まった。

そのページに書かれている薬を見て眉を寄せる。

「…『思い浮かべた相手の心の声が聞こえる薬』…？　キャロルさん…まさかこれを…？」

そう口にしてから、マナは首を横に振った。

（そんなわけがない…。兄ちゃんはあたしたちを大切に思ってくれてる…）

次のページをめくったマナ。

また手が止まる。

一瞬息を呑んだ。

「――これだ…！　『思い浮かべた相手の思ってもいない心の声が聞こえる薬』…！」

マナは部屋を飛び出した。

隣のリン・ランの部屋へと飛び込む。

「リン姉ちゃん、ラン姉ちゃん…！」

「マナ……？」

ベッドに突っ伏して泣いていたリン・ランが、顔を上げてマナの顔を見た。

マナが続ける。

「いい加減に話してくれるよね…？」

「え？」

「ね…！？」

と、目を見開いたマナ。

リン・ランの身体の上に隕石を召喚して浮かべる。

「――！？　ふっ、ふにゃあああああ！」リン・ラン、今までとは別の意味で涙目になる。「な、なななななななにをなのだマナっ！？」

「リン姉ちゃんラン姉ちゃん、誕生日パーティーのときキャロルさんが訪ねて来たんでしょ…？」

何度も縦に頷くリン・ラン。

それを確認したあと、続ける。

「そのときキャロルさんに何をもらったの…？」

「キキキキキキキキキ」

「サルのモノマネしてなんて言ってない…！」

じりじりと隕石が近寄ってきて、リン・ランは慌てて声を上げた。

「キャっ、キャンディィィィィィィィィィィィィっ！！」

「キャンディ…？」

「好きな人の顔を思い浮かべながら食べると、好きな人と結ばれるかもしれない、おまじないキャディもらいましたなのだあああああああああっ！！」

間違いない。

と、判断したマナ。

「リン姉ちゃんラン姉ちゃんが飲まされたのは『思い浮かべた相手の思ってもいない心の声が聞こえる薬』…」

「えっ…！？」

「あたしがこれから本当の『思い浮かべた相手の心の声が聞こえる薬』を作る…。１５分以内に…。リン姉ちゃんラン姉ちゃん、手伝って…」

「えっ…！？」

「嫌な予感がする…。次に犠牲に合うのはカレンちゃんか…、それともカレンちゃんや兄ちゃんを守ろうとするサラ姉ちゃんか…」

「えっ…！？」

「ねえ早くして…！」

と、困惑しているリン・ランに、さらに隕石を近づけるマナ。
リン・ランが顔面蒼白しながら泣き叫ぶ。

「はっ、早くしますなのだあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああっ！！」

マナはリン・ランの上から隕石を消すと、自分の部屋へと急いで戻っていった。
リン・ランも泣きながらマナのあとを着いて行く。

マナは魔法薬の本を手に取り、『思い浮かべた相手の心の声が聞こえる薬』のページを開いた。
普段から豊富にそろえている材料のおかげで足りないものはない。

マナはリン・ランを助手に、すぐさま薬の調合に取り掛かった。

（カレンちゃん、サラ姉ちゃん…！　間に合って…！）

第１１０話　次女の始末　～後編～

葉月町の中央。
キラの銅像前。

「――えっ、えええぇぇえええぇぇえええぇぇえええぇぇえええぇぇえええぇぇえ！！？」

シュウの絶叫が響いていた。

レオンが周りの目を気にしながら苦笑した。

「シュウ、静かにして…」

「だ、だだだだだって！　ププププロポーズ！？　レオ兄、サラにプロポーーーズっ！？」

「うん」

「プ、ププププ、プロポーズっ…！　プロポーズ、プロポーズ、プロポーズ、プロポーズ、ポロポーズっ！」

「シュウ、落ち着い――」

「ハイ、ポーズっ！」

「こう？」

ピロピロリン♪

と、音が鳴ったシュウの携帯電話のカメラ。

「……」

「……」

シュウとレオン、赤面。

「…お…思わず乗っちゃったじゃない。や、やめてよシュウ。僕ときどき月刊『ＮＹＡＮＫＯ』のモデル務めてるんだからさ……」

「ご、ご、ごめんレオ兄っ…。でもカッコ良かったからあとで画像送っておく……。そ、それで」と咳払いをし、シュウは冷静になってもう一度訊く。「レオ兄、サラにプロポーズすんのっ？」

「うん」

と、微笑んだレオン。
ポケットの中から小箱を取り出した。

「うわあ」とシュウの目が丸くなった。「それ、婚約指輪っ？」

「そう」

「すげー…。レオ兄、マジなんだ」

「そうだよ？」

「なんで？」

「なんでって…」

と、きょとんとした顔になったレオン。

シュウ自身も愚問だと思ったが、

「愛してるから」

そんな当然のレオンの言葉を聞いて赤面した。

「？　何でシュウが赤くなるの」

「つ、ついっ…。レオ兄があまりにもさらっと言うからさっ……」

もう一度咳払いをし、シュウはレオンが手に握っている小箱に目を落とした。

サラの顔を思い浮かべて微笑む。

（あいつ、すーげー喜ぶんだろうなあ…。ガキのころから大好きだったレオ兄からプロポーズされるなんて……）

サラの背に庇われているカレン。

サラに異変を感じ、サラの顔を覗き込んだ。

「サ…サラっ？　ど、どうしたのっ？　サラっ……！？」

「…レ…レオ兄っ……？」

呆然として立っているサラ。
唇が小刻みに震えていた。

前方5メートルのところにいるキャロルが言う。

「どうですか？　愛する男性の心の声は」

「えっ…！？」

と一度キャロルを見たカレン。
再びサラを見る。

「サラっ！？　どうしたのっ！？　サラっ！？」

「…あ…やっ……」

サラが首を横に振る。

響いてくる。
サラの頭の中に。

レオンの声が。

――僕もいよいよサラと結婚か、ダルイな。

サラの声が震える。

「…レ…レオ兄…？」

――何で僕が。

「レ…レオ…兄っ…？」

――こんな我侭で横暴で生意気な子供なんかと。

「…レオ兄っ…！」

――愛してもいないのに。

「それがっ…、本心っ……？」

――愛してなんか、いないのに。

「…ちっ…、違う違う違うっ！　レオ兄の本心なんかじゃないっ！」

サラが叫ぶと同時に、その黄金の瞳から涙が零れ落ちた。

カレンが狼狽して声をあげる。

「サラっ！？　サラ、どうしたの！？　レオンさんが、何だっていうの！？」

ふふ、とキャロルが笑った。

「なぁーんだ、もう泣いちゃった。あなた、強がってても結構弱いんだ」

俯きがちになっていたサラは顔をあげた。

キャロルがバッグの中に銃を戻し、バッグを足元にトサっと落とす。

そして己の首の後ろへと右手を持っていった。

「こんなもの用意してこなくても、充分に始末できちゃったかな…」

キャロルが羽織っていたスプリングコートの中から真っ直ぐ上に引き出したものを見て、サラはカレンの身体を脇に突き飛ばした。

（――仕込み杖！）

背に隠し持っていたソレから刃を抜き出すなり、サラに飛び掛ったキャロル。

振るった刃が空を切った。

「さぁーすが猫さん。すばしっこいこと」

宙から地へと下りてくるサラを目で追いながら、キャロルがまた、ふふ、と笑う。

たん、と身軽な音を立てて地に足を着けたサラ。

その目は落ち着きを払っていなかった。

（違うっ…！　レオ兄の本心なんかじゃないっ……！）

頭の中から消えてくれないレオンの声。

――愛してなんか、いないのに。

それはレオンの本心なんかではない。
そう思うのに、サラの胸が潰されそうになる。

サラの様子を見てキャロルがまた、ふふ、と笑った。

「そんなにぼーっとしてると、斬られちゃいますよ?」

サラに向かって刃を振るうキャロル。
普段の修行と両親から継いだ身体能力のおかげで、サラの身体はそれを反射的に避けてくれる。

だが、混乱している頭。
呼吸が止まりそうなほど痛い胸。
涙でぼやける視界。

精神的ダメージは、徐々にサラの動きを鈍らせていく。

ついにサラの頬を刃が掠めたとき、キャロルが犬の牙を見せて笑んだ。

「あぁ、気持ちいい……」

「この変態っ…！　…サラっ、サラっ！」カレンが声をあげた。「手を出して！　正当防衛よ！　手を出してっ！」

サラが首を横に振る。

「約束…した…！」

「そんなこと言ってる場合じゃ――」

「約束した！」サラが叫んでカレンの声を遮った。「一般人に手をあげないって、レオ兄と約束した！」

サラの肩を刃が掠める。

「約束守れたら、今日プロポーズと一緒にエンゲージリングくれるって言った！」

サラの腕を、腰を刃が掠める。

「だからアタシは絶対に、約束を守る！」

サラの頭の中に響く声。

――愛してなんか、いないのに。

「今さらレオ兄なしの生き方なんて分からないっ！」

――愛してなんか、いないのに。

「たとえレオ兄がアタシのこと愛してなくてもっ…！」

――愛してなんか、いないのに。

「傍にっ…、いてくれるならっ……！」

「ふぅーん？」

キャロルの左手がサラの首にかかった。

後方に倒れていくサラの身体。

地に叩きつけられた衝撃で、サラの髪の毛をまとめていたコームが外れた。

飛び散ったコームの装飾。

ほどけたサラの明るい茶色の髪の毛。

「…うっ…！」

首からキャロルの手を離そうと、サラが両手でキャロルの手を掴む。

だが、キャロルだって超一流ハンターと最強モンスターのハーフ。

見目は弱そうに見えても、舐めてはいけなかった。

全体重を掛けられて押さえつけられては、なかなかその手は外れない。

サラの身体の上に跨っているキャロル。

ぞっとするような不気味な笑顔を浮かべていた。

「いいこと聞いーちゃった。サラさん、あなた今日のデートでエンゲージリングもらう予定だったんです？」

カレンに嫌な予感が走った。

（この子、何をする気なの…！？）

ふふ、と笑ってキャロルが続ける。

「仕込み杖って切れ味最悪で困りますよね、サラさん。でも、あなたの細い指切り落とすくらいは出来ちゃいますよ？」

「――！」

カレンは咄嗟に近くにあった石を取った。

キャロルに向かって投げつける。

それはキャロルの横顔に当たった。

「はっ…、放しなさい！　今すぐサラを放しなさい！」

「……」

キャロルの顔がゆっくりとカレンの方を向いていく。

次から次へとキャロルに石を投げつけるカレン。

「放しなさいっ！　放しなさいっ！　サラを放しなさいっ！　放してっ！！」

「うるさいこと…」

キャロルが右手に持っている刀を持ち上げ、刀尖をカレンの方へと向ける。

カレンが笑った。

「そ…、そうよ、それでいいわ。あたくしに向かってその刀を投げ

なさい」

「あなた…死にますよ…？」

「ふ、ふん…、舐めないでちょうだい。あたくしだってハンター歴もうすぐ1年が経つのよ。あなたごときの刀を避けることくらい造作もないのですわ」

そんなわけがない。

カレンがキャロルの攻撃を避けられるわけがない。

サラは蒼白して声をあげる。

押さえつけられた首から無理矢理に声を振り絞る。

「…っ…ダメっ…！　ダメっ…カレンっ……！！」

「待ってて、サラ。今あたくしが助けるからっ…！」

そういうカレンの膝はがたがたと震えていた。

キャロルに向かって叫ぶ。

「さっさと投げなさいよ、このド変態赤犬っ！！」

ふふ、とキャロルが笑った。

「りょーかーい…」

と、キャロルがカレンに向かって刀を投げる構えになったとき。

（サラっ、今あたくしが……！）

覚悟してぎゅっと目を閉じたカレン。

同時に、

（――カレンっ！！）

キャロルの右手目掛け、首元から左手を伸ばしたサラ。
刀を投げられないよう、キャロルの右手首を掴む。

そのときだった。

「なぁーんちゃって…」

そんな台詞のあとに、ふふ、ともう聞きなれたキャロルの笑い声。
キャロルの視線がサラを捕らえる。

「――サラっ…！？」

はっとして目を開けたカレンの目の前。

キャロルがサラの首から左手を離し、右手首にしがみ付いている
サラの左手を握った。

ダンっ！

と手の平が地につく形で、アスファルトに押さえつけられたサラ
の左手。
キャロルの右手に振り上げられる刀。

「――やっ…やめてっ！！」

顔面蒼白してキャロルに向かって駆け出したカレン。

でも、間に合わない――。

「ふふ」

と、キャロルが犬の牙を剥き出しにして笑った次の瞬間。

「サ――」

キャロルがサラの薬指目掛けて、刀を突き下ろした。

「――えっ……！？」

呆気なく骨ごと断ち切られてしまった、サラの細い指。

己の左手を目を疑って見つめるサラ。

薬指の付け根と薬指の間に刃が突き刺さっている。

あまりに衝撃的な光景のせいか、本来ならば悶え苦しみそうな痛みを感じない。

その代わりサラの身体中を戦慄が襲う。

「ア…アタ…、アタシの…指っ……？」

「…サっ…！　サラァっ！！」

カレンが泣き叫び、サラの上からキャロルを突き飛ばした。
地から刀尖が離れると同時に、少し飛んだサラの左手の薬指。
「サラっ…！　サラっ！　サラっ！！」
サラの上半身を抱き締めて泣きじゃくるカレン。
サラの左手を取り、止血しようと必死に傷口を手で押さえる。
サラの身体が震えている。
「ど…、どうしよう…カレンっ……」
次から次へと溢れ出す涙でぼやけるサラの視界。
それでも見える。
カレンの手に押さえられていても、左手の薬指の根元から流れ出てくる真っ赤な鮮血。
たしかに切り離されている左手の薬指。
今日のために、一生懸命綺麗にしておいた左手の薬指。
「これじゃっ…、これじゃアタシはめられないっ……」
まだサラの頭の中に響いてくる。
――愛してなんか、いないのに。
愛しい男の声。

「はめられないよ、エンゲージリングっ…」

――愛してなんか、いないのに。

「レオ兄からのエンゲージリングがっ…」

――愛してなんか、いないのに。

「そっ、それがなきゃっ……！」

――愛してなんか、いないのに。
――愛してなんか、いないのに。
――愛してなんか、いないのに。

サラの頭の中、愛しい男の声が木霊する。

「レオ兄…お願いっ…！」大量に溢れ出した、サラの涙。「…傍に…いて……！　アタシのことっ……」

愛してなくても、いいから……――。

カレンの腕の中、ふっとサラが気を失った。

カレンが狼狽してサラの身体を揺する。

「サラっ…！？　サラっ！？」

「ふふ」響いたキャロルの笑い声。「ふふ…！　あはははははははは！」

カレンの耳に酷く心地悪い声。

カレンが涙に塗れた顔でキャロルを睨み上げる。

「黙りなさいっ！　黙りなさい赤犬っ！！」

キャロルがサラを見下ろして声を震わせる。

「あぁ…、気持ちいい…！　泣き顔も、血の匂いも、たまらなぁーい……！」

再び響くキャロルの笑い声。

「黙りなさいと言っているのよ！！　耳が腐るわっ！！　黙りなさいっ！！」

「やぁーだ、怖ぁーい……」

と、キャロルがカレンに背を向けて歩いていく。

向かう先は、薬の仕込まれている銃が入ったバッグのところ。

「リンさんランさんは前菜。一番手こずりそうだったサラさんはメインディッシュ…。そして次は、いよいよキャロルの大好きな甘ぁーいデザート……」

カレンは大きく息を吸い込んだ。

（お願い、レオンさんの耳に届いて……！）

そして絶叫する。

「レオンさんっ！！　サラがっ…！！　レオンさんっ！！　レオンさん助けてっ！！　レオンさんっ！！　レオ――」

カレンの声が途切れた。

「ふふ、呼んじゃダーメ」

「…っ……！」

己の首元へと手を持っていくカレン。

キャロルが放った銃の針が突き刺さっている。

犬の牙を見せて、キャロルが不気味に笑った。

「わたしの甘ぁーいデザート、逃がさなぁーい…」

第１１１話　捕まったキャロル

葉月町中央のキラの銅像前。
レオンが腕時計で時刻を確認する。

「そろそろ待ち合わせ時間だね」

「うん」と携帯電話で時刻を確認して頷いたシュウ。「サラ、気合入れて来るんだろうなあ」

レオンが微笑んだ。

「そうだね…、今までのデートで一番気合入れていくから楽しみに待っててって言われたよ。僕から見た今日のサラは誰よりも綺麗なんだろうな。なんていうか、絶世の美女って言われるキラに劣らないくらい？」

「レオ兄も意外と結構バカップルだな」

とシュウが笑う。
そのとき、シュウの手の中で携帯電話が鳴った。

レオンがシュウの携帯電話を覗き込んで言う。

「あれ、マナだね」

「うん…」と、頷いて電話に出たシュウ。「もしもし？　どうした、マー――」

「兄ちゃんっ…」

言葉を遮られた。

普段は冷静なマナだが、そんな様子を感じさせない。

狼狽した声をしている。

「兄ちゃん、カレンちゃんとサラ姉ちゃんと落ち合ったっ…！？」

「いや、まだだけど」

「まだ…！？」と、鸚鵡返しに訊いたマナ。「カレンちゃんとサラ姉ちゃんの声が玄関の辺りから消えてから、もう結構経つのに…！」

「えっ、マジで？」

とシュウが言い終わるか終わらないかのうちに、レオンがシュウの手から携帯電話を取った。

シュウも慌てて取られた携帯電話に耳を近づける。

「もしもし、マナ？　今のは本当なんだね？」

「うん、レオ兄…。やばいよ…、キャロルさんかもしれない…！」

「キャロルちゃん…！？」

「キャロルさんはリン姉ちゃんラン姉ちゃんに『思い浮かべた相手の思ってもいない心の声が聞こえる薬』を飲ませた…」

「それでおかしかったんだね、リンとランは」

「今あたしが『思い浮かべた相手の心の声が聞こえる薬』を作ってる…。次に犠牲になるのはキャロルさんのライバルであるカレンちゃんか、もしくはカレンちゃんと兄ちゃんの幸せを守ろうとするサラ姉ちゃんか…！」

「分かった、マナ。これからそっちに向かって歩いて――」

レオンは言葉を切った。

携帯電話をシュウに突っ返し、辺りを見回す。

（今、僕を呼ぶ声が……！）

目を閉じ、葉月町の雑踏の中で猫耳を済ませるレオン。

「レオンさんっ！！」

そんなカレンの声を、僅かにレオンの猫耳が聞き取った。

（――サラっ……！？）

目を見開き、レオンが突然走り出す。

「レっ、レオ兄っ！？」足の速くなる魔法をかけ、慌ててレオンを追うシュウ。「も、もしもしマナ！？　なんかやばいっぽいから電話切るな！」

と携帯電話を切り、ポケットにしまったシュウ。

足の速くなる魔法をかけているのに、遠退いていくレオンの背を見て驚愕する。

（はっ、はえぇっ…！　もしかして、サラに何か……！？）

首に針が刺さったとほぼ同時に、カレンの頭の中にシュウの声が響いてきた。

「――…シュウっ…！？」

ふふ、とキャロルが笑う。

「あなたにはすぐ効いてしまうでしょうね、カレンさん。サラさん用に特別に効力を強めて作ったのですから」

カレンの頭に響く。
シュウの声。
カレンへの罵声ともいえるその言葉たち。

俯いたカレンの肩が小刻みに震える。

それを見てキャロルが笑った。

「あらあら、あなたも弱いこと。泣いちゃったの？」

「……笑っているのよ」

「何…」

キャロルが眉を寄せた。

カレンが首から針を抜き、顔をあげる。

キャロルを見るその表情は、明らかに嘲笑していた。

「舐められたものだわ。何なのかしら、これ。これがシュウの本音？　冗談はそのイカれた頭だけにしてちょうだい」

「強気…」

「ええ、そうよ。あたくし、シュウに愛されているもの。あなたと違って」

カレンは思い出す。

約一ヶ月前、シュウは言った。

『誰がオレのこと好きだろうと何だろうと、オレはカレンのことが好きなんだからな』

そう、はっきり言った。

（あたくしはその言葉を信じるわ）

キャロルの顔が歪む。

「なぁーに、この全然甘くないデザート…。おいしくなぁーい」

「あなたにおいしいだなんて思われたくもないのですわ」短く失笑

し、カレンは続ける。「いいこと？　覚えておきなさい」

「はい…？」

「シュウはあなたを愛さないわ」

「……」

「あなたみたいにイカれた子…！　シュウは絶対に愛したりなんかしないわ！」

「……」

「サラにこんなことしてシュウに愛される！？　そんなことでも思っているわけ！？　だとしたら大バカね！　あのキラさまもグレルさんも（シュウもかも…）敵わないほどのバカだわ！　これがどういうことか分かる！？　正真正銘・本気で死んでも治らない根っからの純粋な救いようのない超ミラクルバカってことよ！！（ご、ごめんなさいキラさまグレルさん、あと一応シュウ……）」

「…あなた…うるさぁーい」

キャロルが刀尖をカレンに向けた。

「あたくしをどうする気？　サラみたいなことにするの？」

「殺しちゃーう」

「本当、バカな子」

と、カレンが再び失笑したとき、キャロルの目の色が変わった。

「その嘲笑ムカつくのよ！」

「痛々しいバカだわ」

「うるさいっ！　うるさいうるさいうるさいっ！」

「可哀相ね」

3度目のカレンの嘲笑。

それと同時に、キャロルが犬の牙を剥き出しにした。

刀を構え、カレンに飛び掛る。

「あんた…消えてっ！」

キャロルを見るカレンの目は冷静だった。

ほっと安堵の溜め息を小さく吐く。

「消えるのはどちらかというと」

突然、キャロルの足が浮いた。

「あなたの方かしら」

バキっ！

と音がし、真っ二つに折られたキャロルの刀。

「――えっ…！？」

キャロルは刀を見たあと、自分の浮いている足元を見た。
首が苦しい。

はっとして顔を後ろに傾けると、赤い瞳が目に入った。
怪しくゆらゆらと揺れる青い髪。
灰色の猫耳。

「レっ…レオンさんっ…！」

キャロルの顔が引きつった。

キャロルの襟の後ろを掴んで持ち上げていたのは、カレンの叫び声を聞いて駆けつけてきたレオン。

レオンの顔を見て、カレンが涙に声を詰まらせる。

「レオンさん…！　サラがっ…サラがぁっ……！」

レオンはカレンの腕に抱かれているサラに目をやった。

身体のあちこちに出来ている切り傷。
カレンが必死に止血しようと押さえているサラの左手。

そして、切り離されたサラの左手の薬指。

レオンから歯軋りが聞こえた。

「カレンっ！　サラっ！」

と遅れて駆けて来たシュウに、レオンが言う。

「シュウ、すぐにカレンちゃんの首とサラに治癒魔法。でもサラの左手には掛けないで」

「えっ…！？」

と、カレンとサラを見たシュウ。
気を失っている妹の姿を見て叫んだ。

「――…サっ…サラっ！！」

顔色失い、サラに駆け寄る。
カレンの首に、サラの身体のあちこちに慌てて治癒魔法を掛ける。

「おいサラっ…！　サラっ……！」

カレンの腕からサラを取り、目に涙を溜めながら抱き締めるシュウに、レオンがもう一度言う。

「サラの左手に治癒魔法を掛けちゃダメだよ、シュウ。清潔なハンカチか何かで傷口をしっかりと押さえていて」

ハンカチと聞き、カレンが飛ばされたバッグのところに駆けて行った。
ハンカチを取り出し、それをサラの左手の傷口に当ててしっかりと押さえる。

シュウが訊く。

「で、でもどうしてレオ兄っ…？」

「指が取れた状態で治癒魔法を掛けたら、もう指は繋がらなくなってしまう」

「えっ…！？　ってことは、まだ繋がる方法がっ……！？」

「シュウの治癒魔法では駄目だ。リュウでも駄目。サラの指を再び繋げることが出来るのは、優れた治癒力を持つレッドドッグ――この子の母親だよ」

と、キャロルに目を落とすレオン。

キャロルが狼狽し出す。

「わ、わたしのママをっ…！？　そんなっ…えとっ…！　リュ、リュウさまでも大丈夫だと思いますっ……！」

「じゃあリュウを呼んで試してみるかい？　リュウがここに来たら間違いなく君の一家全員惨殺されるけど」

「まっ、まさかっ…！　葉月島ハンターを代表するリュウさまがそんなこと――」

「するよ？」

ずばっとハッキリと、レオンがキャロルの言葉を遮った。

動揺して一瞬息を呑んだキャロル。

だがリュウよりも母であるケリーが恐ろしいのか、相変わらず狼狽しながら続ける。

「…でっ、でっ、でもっ…！　わたしのママを呼ぶのはちょっとっ……！」

「子供がした悪さに親が頭を下げるのは当然のことだ」

と、スーツのポケットの中から携帯電話を取り出したレオン。

掛けた相手はミーナ。

「もしもしミーナ？　ちょっとこれから瞬間移動で文月島に行って、ゲールとケリーさん連れて来てくれないかな。場所はリュウの家と葉月町を繋ぐ道の、真ん中あたりで。ゲールの家ならリンクに聞けば分かるから。なるべく急いで。それからくれぐれもリュウには内緒で。…え？　ちょっと本気でリュウが殺人を犯しかねなくてね。それじゃ、よろしくね」

と、電話を切ったレオン。

まだ宙ぶらりんにされているキャロルがじたばたと暴れる。

「いっ、いい加減離してくださいっ！　シュ…、シュウさんっ、助けてっ……！！」

とシュウに手を伸ばすキャロル。

だが、シュウはキャロルを助けようとはしない。

ひどく不快な目をしてキャロルを見つめている。

「どうしてサラにこんなことっ……」

「え……？」

と首を傾げたキャロル。

シュウが溜まらずといったように声を上げる。

「オレの妹にどうしてこんなことしたかって訊いてんだよっ！！」

「…だ…だって……！」と、キャロルの瞳から涙が零れた。「わっ…、わたしはシュウさんが好きでっ…！　リンさんランさんも、サラさんも、カレンさんも……、わたしにとっては邪魔者でしかないっ！」

「だからって――」

「邪魔者は始末する！　わたしの目の前に立ちはだかる邪魔者は何だって始末する！　そしてあなたに愛されるのは、このキャロルです！」

「オレは――」

「わたしはっ…！　醜い邪魔者の泣き顔も、返り血も浴びるのも大好きです！　だって大嫌いなんですものっ…！　あなたを想っているというだけで、憎いんですものっ…！　邪魔者の泣き顔を見るのも、返り血を浴びるのも、快感以外の何ものでもないわ！　わたしはあなたがほしいっ…！　あなたを手に入れて、あなたに愛されたいっ…！　それを阻む邪魔者なんて、みんな消えればいいのよっ！！」

辺りに流れる静寂。

しばらくして、シュウがキャロルから顔を逸らした。

「……悪いけどオレ、君みたいな子は好きになれそうもねえから」

「――」

暴れていたキャロルの身体が動かなくなった。

手足をぶらんとさせ、涙を流しながら呆然としてシュウを見つめている。

それを見て、レオンが小さく溜め息を吐いた。

「…君は一般人とはいえ、親は文月島を代表する超一流ハンター。超一流ともなれば、多くの人々の命を預かっていると言っても過言ではない。それなのに君のしていることは……。…いいかい、もう二度と親の顔に泥を塗るようなことをするんじゃないよ？」

「……」

「分かった？」

「……離して…ください……」

「離したらどうするの？　逃げたりしない？」

「しません。離してください、苦しいです…」

生気を失っているようなキャロルを見つめて数秒。
レオンがキャロルから手を離した。

とん、とキャロルが両足をそろえて地に足をつける。
それから数秒後のこと。

スパっ！

と、レオンの足首目掛けて振られた刃。
レオンのスーツのズボンを割いた。

「レオ兄っ！」

と叫んだシュウ。
キャロルのブーツの踵を見る。

靴底にナイフが仕込まれていた。

レオンが徐に己の足元に目をやる。

（今のうち！　ママに捕まる前にっ！）

と逃げ出そうとしたキャロルだったのだが。

ガシっ！

と頭の上に圧し掛かった重み。
顔をあげると、それはレオンの手。

さらに顔をあげ、

「――…っ…！！？」

キャロル、顔面蒼白。

怒髪衝天のレオン様こんにちは。

ゆらゆらと揺れていたレオンの柔らかな青い髪はついに逆立ち。
普段穏やかな赤い瞳は冷淡な光を放ち。
ぎりぎりと歯軋りをする音はキャロルの犬耳に響き。

「――レっ…レオンさっ……！」

絶体絶命のキャロルに走る戦慄。

コメカミの血管を浮かせながら、レオンが口を開いた。

「おーしーおーきーだーべえぇぇぇぇぇ……！！」

「――って、レオ兄キャラ違っ！」

と、思わず突っ込んだシュウ。

そのあと、ごくりと唾を飲み込んだ。
やっぱりブチ切れたレオンは恐ろしい。

（キャ…キャロルちゃんの運命やいかに……）

第１１１話　捕まったキャロル（後書き）

前話でどうやら結構な数の読者さまにショックを与えてしまい、サラの指はケリーが治せるんですよおおおおお！　と安心してもらおうと目を血走らせて執筆して約半日で更新した姫百合です。

前話で辛い思いをさせてしまった読者様、申し訳ございません。
そしてこのドシリアスに萌えたとメールくださった読者様も申し訳ございません。次回コメディモードです。

第１１２話　お仕置き

「おーしーおーきーだーべえぇぇぇぇぇ……！！」

アンタ誰。

と突っ込みたくなるような台詞を吐いたレオン。
よっぽどキャロルに頭が来たらしい。

柔らかい青髪は逆立ち。
普段穏やかな赤い瞳は冷淡な光を放ち。
歯軋りのする口元からは、牙が見えている。

思わず遠巻きになってしまうシュウとカレン。

カレンが恐る恐るという風に訊いた。

「レ、レオンさんっ？　お仕置きって何をっ…？」

「まっ、まさかっ…！」と狼狽しながら続くシュウ。「ボコボコにしたり…とか！？」

「まさか」と、レオン。「一般人を殴るなんてことはしないよ。僕はハンターなんだから」

「じゃ、じゃあ何を…！？」

シュウとカレンが声をそろえて訊いた。

レオンがキャロルに目を落とす。

「…キャロルちゃん、君の自慢は？」

「えっ…！？」

ビクっとしたキャロル。

レオンの赤い瞳にじろりと見下ろされ、慌てて答える。

「わ、わたし美少女で――」

「そういうことじゃなくて。赤犬ハーフが故に優れているものはないの」

「あっ、赤犬ハーフが故にっ…！？　…あっ、えとっ、こう見えても結構力ありま――」

「あとは」

「あっ、あとっ…！？　…あっ、ママの嗅覚も継いでますっ！　なのでとっても匂いには敏感ですっ！」

「そう」

と言うなり、携帯電話を取り出したレオン。

さっきはミーナに掛けたが、今度はリーナに掛ける。

「もしもしリーナ？　ちょっと頼みごとがあるんだけどいいかな。あのさ、今すぐ瞬間移動でグレル連れて来てくれないかな。場所はリュウの家と葉月町を繋ぐ道の真ん中あたり。あとそれから、ビニ

ール袋を忘れずに」

グレルとビニール袋？

と、首をかしげたシュウとカレン。

レオンが電話を切ったあとに訊く。

「一体何を…？」

「まぁ、リーナがグレルを連れて来るの待って」

とレオンが言うので、承諾したシュウとカレン。

約3分後。

リーナとグレルが、シュウたちの近くに瞬間移動で現れた。

リーナの手にはちゃんとスーパーのビニール袋が握られている。

「急に何やねん、レオ兄ちゃん」と、リーナ。「――って、ちょちょちょ…！？」

レオンを見、シュウを見、カレンを見、そして気を失っているサラを見て声をあげる。

「なっ、なんやあぁぁぁあああぁぁぁぁぁあああぁぁぁあっ！！　サっ、サラちゃんっ！？　どうしたんサラちゃんっ！？」

「サラ…？」

と、一瞬目を丸くしたグレル。

サラの左手を見、そのあとゆっくりとキャロルを見た。

「…お嬢ちゃん、感心できねーな」

キャロルがグレルから顔を逸らす。

一見クマみたいな外見とはいえ、グレルはいつも笑っているイメージだった。

それが真顔でそこにいる。

正直、クマに睨まれているようで身の毛がよだちそうだ。

リーナとグレルが来る間、黙ってキャロルを見張っていたレオンが口を開いた。

「さて…、お仕置き始めようか」

「お仕置きて何すんねん？」

「うん、あのねリーナ。ちょっと手伝ってくれないかな」

「うん、ええけど。レオ兄ちゃん赤犬捕まえてないといけへんしな。うち、何すればええん？」

「グレルのお尻にビニール袋当てて」

「は？」

「早く」

レオンに急かされ、グレルの尻にビニール袋を当てるリーナ。

レオンから声が飛ぶ。

「そうじゃない！　グレルのお尻の穴にビニール袋の口をすぼめてくっ付けて！」

「う、うんっ…！」

と、慌ててレオンに従うリーナ。

片手でビニール袋の口を持ち、指で作った円にグレルの尻の穴だろうところをくっ付ける。

それを確認したあと、レオンが言った。

「んじゃグレル」

「ん？」

「オナラして」

は？

一瞬きょとんとした一同。

だがレオンは真顔だ。

「どうせだから連発で」

シュウの顔が引きつる。

「ちょ、レオ兄っ……！？」

カレンの顔も引きつる。

「レ、レオンさんそんないきなりコメディィなっ……！」

リーナは爆笑。

「あーっはっはっはっ！　レオ兄ちゃん、ナイスお仕置きや！　犬の鼻にはキッツイやろ！」

グレルは少し困った様子だ。

「おい、レオン。いきなり屁ぇこけって言われてもよぉ。そんなすぐに出るもんじゃ――」

ブフォっ

「お？　出たぞーっと」

リーナがさらに笑う。

「あーーっはっはっはっ！　ちょお、グレルおっちゃんオナラで歌たのむわ！」

「歌ぁ？　そんなこと言ったってよ、リーナ。屁で歌は高度な技術が――って、んっ？　…おっ？　おっ、おっ、おっ、おっ、おぉぉぉぉぉおっ？　来た来た来たぞーっと！」

「おっちゃんおっちゃん！　簡単なかえるの歌でええで！」

「よし、挑戦してみるぞ～っと♪」

ぷりんと尻を突きだすグレル。

その尻、見事な曲線。
見事な丸み。

いざ、

「行くぜ～っと！」

腹に力を入れ、

「さんハイっ♪」

ブ（か）、ブ（え）、ブ（る）、ブ（の）、ブ（う）、ブ（た）、
ブフォ～ン（が～）♪

「いよっ！」

プリ（き）、プリ（こ）、プリ（え）、プリ（て）、プリ（く）、
プリ（る）、プリリリリ～っ（よぉ～～～）♪

「はっ！」

ブフォ（クワっ）、ブフォ（クワっ）、ブフォ（クワっ）、ブフ
ォっ（クワっ）♪

「せやっ！」

ブリリリリリっ（ゲロゲロゲロゲロ）♪

ブフォ（クワっ）、ブフォ（クワっ）……

「ん？　最後の一発が――」

パンっ（クワっ）♪

「お？　出たぞ～っと」

グレル、オナラで歌唱終了。
その歌声、華麗に音痴。

ビニール袋の口を手でしっかりと閉じたリーナ。
パンパンに膨らんだそれを見て、腹を抱える。

「あーっはっはっはっ！　オナラでビニール袋ふくらましたの初めて見たで！」

「いや、うん…、オレたちも……」

と言い、カレンと顔を見合わせて苦笑するシュウ。
こんなバカなかなかお目にかかれるものじゃないと思う。

一方、相変わらず真顔のレオン。
がっちりとキャロルを押さえつけて言う。

「んじゃリーナ、この子にそれ嗅がせて」

「合点承知やで、レオ兄ちゃん！」

にやにやと笑いながらキャロルに近寄っていくリーナ。
キャロルの顔が引きつった。

「ちょっ…、ちょっと待ってくださっ…！　ちょ、ちょ、ちょっ…！　きゃっ、きゃあああああっ！　いやあぁぁぁぁあああぁぁぁぁあああっ！！」

ビニール袋の口がぴったりと鼻にくっ付けられたことにより、

「――！！？」

キャロル、卒倒。
レオンに腕を支えられた状態で地にぺたんと尻を突く。

「おおーっ！」と声を上げたリーナ。「さすがおっちゃん！　オナラまでバケモノやで！」

「猫の僕でさえときどき失神しかけるんだから、犬なら当然だろうね」

と、鼻をふんと鳴らしたレオン。
キャロルから手を離し、まだ気を失っているサラのところへと歩いていく。

サラの傍らに膝をつき、シュウの腕からサラを受け取って抱き締めた。

「サラ……」

サラをとても大切そうに抱き締めるレオンの顔が苦痛に歪む。

「レオ兄……」

と、シュウの胸も痛んだとき。

「なあ、シュウ」グレルがシュウの肩をぽんと叩いた。「ケツから実が出た」

「は？」

「さっき踏ん張りすぎたんだぜーっと」

「もっ、漏らしてんじゃねえっ！！」

「そんなこと言われたって漏れちまったもんは仕方ないぞーっと」

「アンタいくつだよっ！！」

「なあ、便所貸してくんねえ？」

「ああもう…、なんかすげー臭ってきた……。トイレまで瞬間移動してやって、リーナ」

「分かったでシュウくん」

と承諾したリーナ。

グレルのところへと駆け寄る前に、シュウのところへと駆けて行った。

「シュウくん、シュウくん」
「ん？　何だ、リ――」
「残り嗅いでみてや」
ペタッと鼻にビニール袋の口をつけられたシュウ。
「――ガハァっ！！！」
大ダメージを食らい、サラの傍らに仰向けになってぶっ倒れた。
カレンが慌ててシュウの身体を揺する。
「きゃあああああっ！　シュ、シュウ大丈夫！？」
「ピクピクしてんでシュウくん。ほな、行ってくるわ」
あはは、と笑い、リーナがグレルを連れて瞬間移動でその場から消える。
そのあとなって、ようやく現れた。
瞬間移動でミーナが。
ゲールとケリーを連れて。
「ゲールの家探すのに苦労して、遅くなってしまったぞーっ」
と、ミーナ。
はっとしてサラを見る。

「ふっ、ふにゃあああ!?　ど、どうしたのだサラっ!?　あわわわわっ、キラの大切なサラがあぁあああぁぁあああぁぁあっ!!」

ゲールとケリーもはっとする。

サラの左手を見て。

「…お…おおお…!」

何を思ったのか、超一流変態ゲールは瞳を輝かせ。

「なっ…!　なんってことだいキャロル!　アンタって子は!!」

ケリーは失神しているキャロルの胸倉を掴み、「お仕置きだよっ!!」

スパパパパパパ!!

キャロルの顔面に高速往復ビンタ開始。

「お母さんはあんたをそんな子に育てた覚えはないよっ!!」

スパパパパパパ!!

「人様の大切な娘さんに、なんってことをするんだいっ!!」

スパパパパパパ!!

「今度こんなことしたらアンタの指もぶっちぎってやるからねっ!!」

スパパパパパパ!!

「こらキャロルっ！！」

スパパパパパパパ！！

「いつまでも気ぃ失ってんじゃないよおおおおおおおおおおおおっ！！」

スパパっ！！

スパパパパっ！！

スパパパパパパパパパパーーーンっっっ！！！

カレン、顔面蒼白。

（こっ…怖っ……！！）

カレンの目にはケリーの手が速すぎてまるで見えなかった。

だが、見る見るうちにキャロルの顔がぱんぱんに腫れ上がっていった。

レオンが言う。

「ケリーさん、娘さんのお仕置きは後にしてください」

はっとしたケリー。

キャロルの胸倉を放し、慌ててサラのところへと駆け寄っていった。

レオンから手渡されたサラの指を両手で受け取る。

「ああ…！　なんてことだい……！」

と、ケリーが目に涙を溜めた。

（あっ…）

カレンの目が丸くなる。

ケリーの両手の中、光に包まれたサラの指がふわりと浮く。

ケリーがそっとサラの左手に近づけると、指が元の位置へと戻っていく。

（すごいっ……！）

少しもずれることなく、元あった場所に再び繋がったサラの指。

今日家を出たときのままの、サラの美しい左手が再びそこにある。

「サラっ…！」

笑顔になったカレン。

「ああ…、良かった……」

安堵の溜め息を吐いたレオン。

「…う…ぐ……！」

大ダメージから回復せず、まだピクピクしてるシュウ。

ケリーがゲールの顔を見る。
ゲールが頷いてケリーの傍らに並ぶと、そろって深々と頭をさげた。

「申し訳…ございませんでした……！」

ケリーの顔と向き合っているアスファルトに、雫がぽたりぽたりと滲んでいく。

流れる静寂。

しばらくして、レオンが小さく溜め息を吐いた。

「…頭をあげてください。こうしてサラの指を治してもらった。もう……いいです」

「うむ、サラの指が治ったなら大丈夫だぞ」と、ミーナが続いた。
「リュウにバレたら殺されるが、キラならば許してくれるぞ。だから大丈夫だぞ。でもリュウにバレたらやっぱり殺されるぞ」

「…えぇっ…!?」と頬を染めるゲール。「…ハァハァハァっ…！…こ、殺されてみたいぃぃっ…！　…想像するだけで快楽があぁっ…！」

引きつるレオンの顔。

「…ミーナ、さっさと瞬間移動で文月島に送ってやって」

「分かったぞ。ゲール、ケリー、くれぐれもリュウには内緒にしておくのだぞ？　それから子供の教育はしっかりするのだ！」

承諾し、まだ気を失っているキャロルの髪を引っ掴んだケリー。
ミーナのところまでずるずると引っ張ってキャロルを持ってきた。
そして再び深々と頭を下げて謝罪し、その態勢のまま瞬間移動で去って行った。

ゲール一家が居たところを黙って見つめているカレンとレオン。
少しして視界に、戻ってきたリーナとグレル、それからマナが飛び込んだ。
サラの姿を見るなり、マナの瞳が動揺して揺れ動く。

「サラ姉ちゃんっ…！」

「もう大丈夫だよ、マナ」

とレオンが言うと、マナが少し安堵したようだった。

そしてレオンのところへと駆けて来て、桃色の液体の入った小瓶を渡して言った。

「早くこれを…。サラ姉ちゃんに『思い浮かべた相手の心の声が聞こえる薬』を…！」

第１１２話　お仕置き（後書き）

ビニール袋にオナラを溜めて嗅いではイケマセン。
失神まではいかないものの、昔父にやられた私はシュウみたいなことになりました……。

あ、次回サラ復活です！

第113話　心の声

マナが急いで作ってきた『思い浮かべた相手の心の声が聞こえる薬』。

レオンはしかと受け取った。

マナが言う。

「サラ姉ちゃんはきっと、『思い浮かべた相手の思ってもいない心の声が聞こえる薬』を飲まされた…」

「ええ、そのようですわ」

と、カレン。

マナはカレンの顔を覗きこむように見た。

「カレンちゃんは…、大丈夫そうだね…？」

「ええ」と、カレンが笑った。「だって、有り得ない言葉ばかりが聞こえてきたのだもの。笑っちゃったわ」

「そう…」

と安堵したように微笑んだマナ。

眉を寄せてシュウを見る。

「兄ちゃんピクピクしてるけどどうしたの…？」

「ええ、ちょっと…」

カレン、苦笑。
マナがシュウの身体を揺する。
「兄ちゃん、起きて…」
「うぐぅぅ…？」
「兄ちゃん、早く…。リン姉ちゃんラン姉ちゃん、今頃薬を飲んでるはずだから…」
「うぅ……」
と、大ダメージを食らった身体を起こすシュウ。
マナが続ける。
「兄ちゃん、リン姉ちゃんラン姉ちゃんに語りかけてあげて…。心の中で…」
「え？」
「リン姉ちゃんラン姉ちゃんに聞こえるから…」
「…お…、おうっ…！」
と承諾したシュウ。
目を閉じて心の中でリン・ランに語りかけ始める。
（リン、ラン。聞こえるか？　兄ちゃん、おまえたちのこと大切に想ってるからな。嘘なんかじゃねーぞ？）

その傍ら。
レオンが薬の入った小瓶の蓋を開けた。
カレンが言う。
「レオンさん。サラ、レオンさんとの約束守ったのですわ。少しもキャロルちゃんに手をあげなかった」
「うん…」微笑んだレオン。「分かってるよ」
薬を口に含み、それをサラに口移しで飲ませた。
そしてサラを抱き締め、目を閉じて語りかける。
気を失っているサラ。
それでもレオンの声が聞こえてきた。
――サラ、目を覚まして。サラ…。
レオンも薬を口の中に含んだせいか。
レオンの頭の中にもサラの声が聞こえてくる。
――レオ兄、行かないでっ…！
泣いていた。
――今さらレオ兄なしの生き方なんて分かんないよっ…！　お願い…、傍にいて……！
悲痛な泣き声。

――アタシのこと、愛してなくてもいいから……！

そんな声のあとに、サラの閉じた瞳から涙が零れ落ちた。

レオンの胸が強く痛む。

サラは決して強くはない。

本当はとても脆くて弱い父親（リュウ）そっくりだ。

それなのに、このレオンの声でどんな辛い言葉を聞いたのか。

どんな思ってもいない台詞を聞かされてしまったのか。

――サラ、いいかい？　これから僕が言うことは、僕の本心だ。

本当の気持ちだよ。

心の中、レオンはサラに伝える。

――サラ、僕は君を愛してる。

サラが気を失う前に聞いた言葉は、その反対の言葉だった。

レオンは何度も伝える。

サラの不安も悲しみも吹き飛ばすように。

――愛してる。

――愛してる。

――愛してる。

サラの閉じた瞳から、もう一粒涙が零れ落ちた。
それはさっきとは違う意味の涙。

――サラ、僕は君を愛してる。だから…

ぴくんと動いたサラの手。

――ずっと君の傍にいさせてください。

それは心からのレオンの願い。

それから数秒後のこと。
サラの瞼がゆっくりと開いていく。

母親譲りの黄金の瞳に最初に映ったのは愛しい男の顔。
出来るなら一日中見つめていたいほど大好きな、優しい微笑み。

次に映ったのは、華奢だけど大きな手に乗せられている己の左手。

その薬指に光っている。
一度は失った薬指に、たしかに輝いている。

永遠の絆を意味する石――ダイヤモンドが。

(ああ…、アタシもらえた……)

サラの瞳から涙が溢れ出した。

(婚約指輪(エンゲージリング)……!)

涙に声を詰まらせ、サラは答える。
レオンからのプロポーズに。

「…っ…はい……！」

微笑むと同時に、サラがレオンの胸にしがみ付いた。
子供みたいにわんわんと泣きじゃくる。

（アタシ、レオ兄に愛されてた…！　愛されてたよっ……！）

そんな安堵感と喜びでいっぱいだった。

カレンが目に涙を溜めて微笑む。
心の中、サラがレオンにプロポーズをされたことなんて見れば分かった。

「おめでとう、サラ。おめでとう…！」

「ありがとう、カレンっ…！　って、わあああぁぁあああぁぁあっ！」と突然狼狽し出したサラ。「カっ、カレン大丈夫!?　おのれキャロルゥゥゥゥゥっ!!　って、アレェっ!?」

辺りをきょろきょろと見回すサラ。

「いっ…、いないっ！　キャロルがいないっ！」

「ええ、キャロルちゃんなら帰って行ったのですわ」

そう言ったカレンの顔をサラが見た。

「帰ったって、何がどうなって帰ることに？」

「えっ？　ええと…」と一瞬レオンを見、サラに目を戻したカレン。

「レオンさんがサラのためにキャロルちゃんを撃退…し……て？」

目が泳いでしまう。

一方、レオンが微笑んで言う。

「そう、必殺技を使ったんだ」

「えっ？」と、声を高くしたサラ。「アタシのために、レオ兄が必殺技をっ？」

「うん、そうだよ」

「レオ兄っ…！」とサラの頬が染まる。「どんな必殺技だったんだろう…！　きっと無茶苦茶カッコイイやつだよねっ……！」

「…えっ…、ええ、とっても」

と言ったカレン。

サラから顔を逸らす。

グレルのオナラ嗅がせてたなんて絶対に言えない。

「それで」と、サラが己の左手に目を落とした。「何でアタシまた指生えて…」

「いやいや生えない生えない」と片手を振って突っ込んだレオン。

「それはね、ケリーさんに治してもらったんだ。レッドドッグは治癒魔法が優れているから」

「キャロル・母にっ？」と一度驚いてレオンの顔を見、サラが再び左手に目を落とす。「…そ…そっかぁ…。なんか複雑だけど…。良かった…、アタシの指」

「ええ、そうねサラ」と、カレンが微笑んでサラの左手を手に取った。「まぁ綺麗…」

「今日のために一生懸命ハンドクリームで――」

「ダイヤモンド」

「そっちかーい」

「もちろんサラの手も綺麗だけれど」と、カレンが笑う。「ダイヤモンドがあまりにも綺麗で。とぉーってもお似合いよ、サラ？」

「まーねっ」

と照れくさそうに笑って、サラはエンゲージリングをまじまじと見つめてみる。

大粒のダイヤモンドが、陽の光できらきらと輝いている。

動悸がした。

（アタシ…、ついにレオ兄と結婚す――）

サラ、硬直。

一瞬忘れてた。

「おっ、親父にいつ言おうっ！？　レオ兄と結婚すること！」

「う…」カレンの顔が引きつる。「…タ…タイミング間違ったらレオンさん殺される気がするのですわっ……」

「いや、殺されはしないと思うよ。５、６００発殴られるけど、それはいいんだ、それは…」と、苦笑したレオン。「僕が心配してしまうのはキラとリュウの夫婦喧嘩だよ…。サラが結婚となったら、もうリュウが……」

「……」

カレンとサラ、リュウとキラの本気の夫婦喧嘩を想像して顔面蒼白。

屋敷どころか、葉月町やヒマワリ城まで破壊されると思う。

「ああもう、眩暈してきた…」と、サラがレオンの身体に凭れ掛かる。「ダメだ、最近親父の機嫌取ってたけど、逆効果だった気がしてきた。何てゆーか、余計にお嫁にいかせてくれなさそうっていうか…」

カレンが同意する。

「最近のリュウさま、以前に増してサラが可愛くて仕方なさそうだったものね…」

顔を見合わせるカレンとサラ、レオン。

そろって苦笑したあと、深く溜め息を吐いた。

そこへ、鳴り響いたシュウの携帯電話。

「いたんだ兄貴」

「いたわっ！」

とサラに突っ込んだあと、シュウは携帯電話を手に取った。
リンの名前が出ているのを見て微笑む。

「もしもーし、兄ちゃんだぞーう」

「兄上っ…！」

と、リン。

「兄上っ…！」

と、リンの傍らにいるだろうラン。

2匹ともしゃくり上げていた。

「は、早く帰ってきてなのだっ」

「は、早く兄上に会いたいのだっ」

シュウはカレンを見た。
電話の内容を察したカレンがウィンクする。

それを確認したあと、シュウは言った。

「おう、今すぐ兄ちゃん帰るから待ってろよ」

シュウの電話が終わるのを待ったあと、レオンが口を開いた。

「僕たちはどうする？　サラ」

「もー何だかすんごい疲れたから帰る。ドレスも台無しになっちゃったし」

「僕のスーツも台無しだしね」

「帰ってシャワー浴びて、それでー」

「寝る？」

「エッチしてからね」

「元気だし」

「今日のゴム新製品アルヨ」

「そう」

とレオンが笑い、サラを抱いて立ち上がった。

あちこちに散らばっているカレンやサラの荷物をシュウが持ち、リーナの瞬間移動でシュウ宅の玄関へ。

グレルはまたすぐに瞬間移動で仕事へ向かう。

玄関ではリンとランがうろうろとしながら待っていた。

シュウが姿を現すなり、シュウにしがみ付く。

「あっ、兄上えええええぇぇぇえええぇぇぇえええぇぇぇえっ！！」

「疑ってごめんなさいなのだあぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあっ！！」

復活したリン・ランを見て、カレンとサラは微笑んだ。

2匹に2階へと引きずられていくシュウの背を見送る。

そのあとサラはレオンと共に自分の部屋へと入っていき。

（さて、あたくしは何をしようかしら）

と、カレンも自分の部屋へと行こうとしたとき、マナに呼び止められた。

「カレンちゃん…」と、マナが薬の入った小瓶をカレンに手渡す。

「大丈夫そうだけど、一応…」

「『思い浮かべた相手の心の声が聞こえる薬』？」

マナが頷いた。

「カレンちゃんの分も作っちゃったからもらって…」

「ええ、それじゃあいただくわ。ありがとう、マナちゃん」

とカレンは笑顔で薬を受け取り、自分の部屋へと入った。

それから数時間が経ち。
只今約ＰＭ１０時。

カレンは自分の部屋のバスルームで入浴していた。

（サラ疲れてたみたいだし、レオンさんと一緒にもう眠ったかしら。リュウさまとキラさまはまだデートから帰ってこないわね。そういえばレナちゃんとミヅキくんもデートだったのよね。どうだったのかしら。っていうか、シュウはまだリンちゃんランちゃんの相手してるのかしら？）

帰ってきてからリン・ランに引きずられていき、まだカレンの前に姿を現さないシュウ。

人形遊びやテディベア作り、一人ファッションショーなど趣味で時間を潰していたカレンだが、シュウに構われないと少しヒマだった。

「お風呂あがったら何しようかしら…」

と呟いたカレンの目に、バスタブの淵に置いている『思い浮かべた相手の心の声が聞こえる薬』が入った。

飲もうか飲まないか迷っていたら、浴室まで持って来てしまった。

（今日キャロルちゃんの薬で聞いたシュウの言葉は嘘だってことくらい、分かっているのですわ。でも、シュウの本当の心の声が聞こえるって思うと……）

何だか少し怖かった。
シュウのことを疑っているわけではない。
だけど少し不安だった。

薬をじっと見つめたまま、１０分が経過。

「せっかくマナちゃんが作ってくれたんですものっ…！　飲んでみるのですわっ！」

ざぱっと音を立て、湯船から立ち上がったカレン。
薬の小瓶の蓋を開け、思い切って飲み干した。

そしてバスタブを跨いだ途端、

――カレン、今日どのパンツかな～っ♪

なんてシュウの声が聞こえてきて、転びそうになる。

「ちょ、シュウ……」

――ホワイトデーだからホワイトパンツがいーなっ♪

「はいはい、白ね…。分かったわよ…」

――ヒ…、ヒモのやつっ…！

「細かいわね…」

――おぉぉぉぉお、純白ヒモパンやべえぇぇっ…！　ああっ、鼻

血がっ……！

「……」

カレンは苦笑しながら浴室から出た。

バスタオルで身体を拭き、脱衣所を出る。

そして白のヒモパンツを穿き、その上にパイル地で出来たキャミソールワンピース型の寝巻きを身に着けた。

その間もシュウの声は続いている。

――カレンもそろそろ風呂タイム終わったかな。

どうやらシュウもついさっきまで入浴中だったらしい。

――ホワイトデーのプレゼント持ってー…。よしっ、レッツゴオオオオオっ！

それから数秒。

シュウがカレンの部屋へと飛び込んできた。

「ヘイ、マイハニィィィィィィっ！」

シュウに背を向ける形で、窓際に立っているカレン。

シュウの声を少し黙って聞いてみることにした。

「…カレン？」

と、カレンが振り向いてくれないものだから首をかしげたシュウ。

カレンがゆっくりと振り向くと、黒猫の尾っぽをぱたぱたと振った。

――お、こっち見たっ…！　うぅーん、風呂上りのちゅるちゅる卵肌っ！　可愛いぜオレのハニーっ！

じっとシュウを見つめるカレン。

少しシュウの頬が染まった。

――な、なんだカレンっ…!?　さ、ささささ、誘われる!?　早速誘われちゃうオレっ!?

さらに染まるシュウの頬。

――「シュウ、早くカモォォォォン（ハート）」って誘われる!?　オイ、まーじかあぁぁぁぁあああぁぁぁぁあっ!!

ぶんぶんと勢い良く振られるシュウの尾っぽ。

――しかも何だ!?　もももしかして純白ヒモパンかっ!?　しゅるっと解いてオレまじフィーバァァァァァァァァァァっ!!

止まらないシュウの心の声。

――ニャンニャンのオレ、カレンとニャンニャンでイニャ～～～ン♪　イニャニャ、イニャニャも好きのうちニャンっ♪　ニャンだニャンだのニャンダフルゥゥゥゥゥゥっ!!

その声、激しく謎。

――あああああっ、たまんねーっ！　はぁぁぁぁやく誘ってくれハニィィィィィィィィィィっ！！　早くっ！　早くっ！　は・や・くっ！！

呆れて溜め息を吐いたカレン。

ベッドに腰掛けてシュウの願いを叶えてやった。

「ヘイ、カモオォォォン」

「イエッサアアアアアアアアアアアアっ！！」

と、叫んだシュウ。

僅か0．2秒でカレンのところへ。

ホワイトデーのプレゼントをベッドの脇に落とし、カレンを押し倒す。

「ねえシュウ、そのプレゼント――」

「ああ～っ、コレはいーからあとで！」

カレンの手の届かないところまでプレゼントをぽいっと投げたシュウ。

中身は人形の服なので壊れはしない。

「で、ハニー！？　きょ、今日の、ぱ、ぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱんちゅはっ！？」

と訊いておきながら、カレンの寝巻きの裾をめくって確認したシュウ。

――マ・ジ・じゅ・ん・ぱ・く・ヒ・モ・パ・ン……！

鼻血が垂れ、鼻に治癒魔法を掛けまくる。

そんなシュウを見て、カレンが再び溜め息を吐いた。

「良かったわね、お望み通りの白ヒモパンで」

「う、うんっ…！」と頷いたシュウ。「――って、えぇっ!?　何でオレが今日のカレンパンツは純白のヒモがいいって思ってたこと分かったの!?」

驚愕した。

「だって、さっきからぜーんぶ聞いてたもの」

「は!?」

「これで」

と、薬の入っていた小瓶を見せるカレン。

「なっ……!?」みるみるうちに、シュウの顔が赤面していった。

「ひっ、人の心の声を聞いてんじゃねえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」

「だってマナちゃんが作ってくれたんですもの」

「だっ、だっ、だからって、おまっ…！」

「あなた、心の中もそのまんまなのねえ？　なーんていうか、あたくしのことばっかりで」

「うっ…、うるせーなっ……！」

と、カレンからシュウが顔を逸らす。

「嬉しかったのですわ」

「――えっ…！？」

と、再びシュウがカレンに顔を戻す。

そこには、頬を染めて微笑んでいるカレンがいた。

――オレ、今夜まじフィーバーデス。

「そう」

と笑ったカレン。

「あっ」と思わず口を塞いだシュウだったが、そんなことをしたところで心の声は塞げない。「ったくもう、いつまで薬効いてんだよっ…」

「あたくしは楽しいからいつまで効いててもいいのですわっ♪」

「オ、オレがよくねえよ、恥ずかしいっ…！　ああもうっ、薬切れるまで抱かねえっ！」

と、シュウがカレンの上から避けた。

が、カレンが言う。

「それができるのかしら？」

「３０分くらいで切れるだろ。それくらい我慢できー―」

「カモオォォォン、ダーリン♪」

「うっ…」顔が引きつったシュウ。「ちょ、ちょっとの間くらい我慢するぜオレはっ…！」

という気満々だったのだが。

カレン、連発。

「カモオォォォン、カモオォォォン、カモオォォォン♪　ヘイ、カモオォォォン♪」

そして結局、

――ヤラレタゼ。

カレンの勝利。

尾っぽをぱたぱたと振りながら、シュウがカレンに負い被さった。

（ちょっと気になるのよね…。あたくしを抱いてるとき、シュウって何を思っているのかしら？）

そんなカレンの疑問の答えは。

――お…おぉおぉうっ…！　デっ…デリシャスっ…！　まじデリシャスっ…！　すーげーデリシャスっ…！　ど、どんなデリシャスだよハニーっ…！　デっ、デリシャスフィーバーっ…！？　あぁあぁ、もう無理ぽ……。

何というか、そのまんまだった。

第１１３話　心の声（後書き）

サラもリン・ランも復活であります。
改めて、辛い思いをさせてしまった皆様方、申し訳ございませんでした。

昨日の２１時３６分ごろメールくださった読者さまへ。
お久しぶりです！　というか、大変なことになってたんですね；
いつも感想やメールなどドキドキワクワクしながら読んでいますが、大変でしょうから無理して送ってくださらなくても大丈夫ですｂｂ

ダカラ気ニシナーイ！
ゴメンナサイイラナーイ！
むしろお忙しい中いつもありがとです（´；ω；、）ウッ

第１１４話　父親の企み

ホワイトデーは一週間前のこと。

本日、次男で末っ子のジュリの５歳の誕生日。
シュウ宅のリビングに、いつもの一同。
いつも通り食っちゃ飲みして騒いでいる。

その中に、明らかにいつもと様子の違う者が数人。

まずはサラとレオン。
小声でひそひそと話している。

「ど、どうしようレオ兄っ…！　親父に結婚のこと言うタイミングが分かんないよっ…！」

サラはリュウの目に入るところに行くとき、レオンからもらったエンゲージリングを首から下げて服の中に隠していた。

「キラにもまだ言ってないんだよね？」

「っていうか、あのときあの場にいたみんなしか知らない。これ以上誰かの耳に入ったら、親父にバレそうで怖くってさ…」

「は、早く言うタイミング見つけないとね…。こう…、キラとリュウが本気の夫婦喧嘩にならずに済むタイミング？」

と言うものの、そのタイミングが見つからないから困っているのである。

その傍ら、そわそわとしているシュウとカレン。
ちらりちらりと、何度もリュウを見る。

（サラたちのことも心配だけど…、カレンのことはどうするんだろう親父っ……）

（サラたちのことも心配だけれど…、あたくしの居候あと１０日ほどで終わりなのよね。リュウさまは心配いらないと言っていたけれど……）

あと約１０日で、カレンはハンター歴一年になる。
つまり、シュウの弟子終了＝居候終了ということだった。

カレンがシュウ宅に居候していたのは安全のため。
シュウのファンから狙われるカレンを、シュウとその家族で守るため。

カレンが実家に戻った途端、隙を狙われてまた危険な目に合うかもしれない。

（そんなの嫌だわ、もう）

と、カレンは集団リンチされたときのことを思い出して顔を歪める。

だけど、

（今さらシュウと離れて暮らすなんて嫌なのですわ）

そんな気持ちの方が大きかった。

（実家に帰ったってまた一人なだけだもの。ここでみんなと一緒に暮らしていたいわ。…リュウさま……）

と、リュウを不安そうな顔をして見つめるカレン。

約一年前、リュウは言った。

「1年後のことは、すでに俺の頭の中に計画してある」

つまり、カレンの居候期間が終了したときのことを計画してあるらしいのだが。

カレンと目が合ったリュウが微笑んだ。

カレンの頭に手を乗せて言う。

「心配すんな」

本日明らかに様子が違う者の一人・リュウ。

妙に機嫌が良いのだ。

ドキドキわくわくしてるというか、何というか。

リュウの膝に抱っこされているキラが溜め息を吐いた。

「そう上手く行くとは思わぬぞ、リュウ…」

どうやらキラは、リュウが考えていることを知っているらしい。

リュウが言う。

「いーや、上手く行くぜ。そして……、ふっふっふっ」

「うわ、リュウきもっ」

と言ったリンクには拳をお見舞いし。

リュウは引き続きにやにやと笑う。

（ああ…、俺って何てお優しいお父上様だ。もうすぐ離れ離れになっちまうことに心を痛めている長男とその女の愛のキューピッドだぜ…！）

愛のキューピッド。

俺様で我侭で自分勝手で横暴で鬼なリュウにはそぐわない台詞である。

少しして、メールを受信したリュウの携帯電話が鳴った。

（お、来た来た）

と、すぐさま携帯電話を手に取ったリュウ。

メールをチェックし、

『父と妻の説得完了です』

と書いているのを見て、にやりと笑った。

そのメールの相手、カレンの父。

だが、スクロールして続きを読んだときに眉が寄る。

『しかし、息子の説得は未完了です』

カレンの父が言う息子＝カレンの兄。

カレンの祖父と父、母と同じく葉月病院の医者だ。

『一度シュウくんに会わせてほしいと言っているのですが…』

リュウはシュウの顔を見た。

（カレンの兄にゃ俺も会ったことねーが…。そうか、シュウもこの間カレン宅を訪ねた際、会わなかったのか）

シュウが首をかしげる。

「何だよ、親父？　オレの顔見て…」

「……シュウ。それからカレン」と、リュウが膝の上からキラを避けて立ち上がった。「ちょっと来い」

そう真剣な顔をして言って、リュウがリビングから出て行く。

シュウとカレンが顔を見合わせて困惑する。

その傍ら、キラが溜め息を吐いて立ち上がった。

リュウに続いてリビングから出て行く。

「シュウ、カレン、来い」

と言って。

シュウとカレンがリュウとキラのあとを着いて行くと、書斎に辿り着いた。

シュウが書斎のドアを閉めるなり、背を向けて立っているリュウが口を開く。

「カレン、おまえの兄はどういう人物だ」

「えっ…？」と、困惑して声をあげたカレン。「あ、あたくしのお兄さまですかっ…？」

シュウも続いて訊く。

「そういえばオレ、カレンのオニーサンには会ったことねーや。どういう人なの？」

「え…ええとぉ…」と引きつるカレンの顔。「ま、まず名前はヒースといって…」

「へえ。オニーサン、ヒースさんていうのか」

「え、ええ。そ、それで、年齢は２８歳で、あたくしと同じ髪の色をしていて、眼鏡を掛けていて、いつも真顔で…」

「い、いつも真顔って怖そうだな、ちょっと」

「っていっても、いつもリュウさまのお顔見てるんだから大丈夫よ、シュウ」

「おまえ失礼だな」と突っ込んだあと、リュウは訊く。「で、中身は」

兄の中身。

カレンの顔がますます引きつった。

「か……変わってますわ」

リュウが眉を寄せた。

「変わってるって、どう変わってんだ」

「そ、その…、寒～い…」

「寒い？」

「ダジャレやギャグがお好きでっ…！　あ、あと死語もよく使ってますわっ……」

「……」

しぃーんと静まり返る書斎の中。

カレンが苦笑して続ける。

「あ、あたくしのお兄さま、あたくしが物心ついたときから言っていましたわ。将来結婚するならユーモアのある男性を選べって…」

「…そのユーモアが、寒いダジャレやギャグ、死語なのか」

「は、はい、リュウさま」

「……」

再び、しぃーんと静まり返る書斎の中。

少しして、リュウがシュウの肩を叩いた。

「シュウ、おまえカレンの兄さんに挨拶しなきゃだろ」

「う、うん。オニーサンに会って合格もらってこないとっ…」

「よし、ちょっと寒いダジャレ言ってみ」

「はっ!?　オレ寒いダジャレなんて言わねーから知らねーよっ!」

「何か1つくらい知ってるだろ」

「じゃ、じゃあ親父が手本見せてくれよ!?」

「ばっ…!　この俺が寒いダジャレなんて言えるかよっ!」

「オレだって言えねーよっ!」

「おまえはいいんだよ、おまえは!　バカなんだからよ!」

「なっ、何だよそれ!　そういう親父だってバカじゃねーかっ!」

「偉大なお父上様に向かってバカとは何だコラ！」

ぎゃあぎゃあと騒ぎ出すシュウとリュウ。

その傍らでキラが、ふふんと笑った。

「心配するな、シュウ。母上はすごいダジャレを知っているぞ。そう…！　これこそ世界三大ダジャレだ！」

「世界三大ダジャレっ？」

と鸚鵡返しに訊いたシュウ。

笑顔になって訊く。

「なになにっ？　教えてくれ母さんっ！　オニーサンに合格もらえそうなやつ！」

「よしよし、教えてやろう」

「ありがとう、母さん！」

「まずその１は！」

「その１は！？」

「アルミカンの上にあるミカン！　だぞっ♪」

待て。

シュウの顔が引きつる。

「続いてその2！　ネコが寝込んだ♪」

コラ。

「そしてその3！　布団がふっとんだ～っ♪」

オイ。

「どーだっ？　母上はすごいだろうっ？　これでカレンの兄はイチコロだぞ～っ！」

この天然バカ猫が。

シュウ、愕然。

（何故、そんな誰もが知るダジャレを世界三大だと誇らしげに言えるんだ母さんっ…！　そんなんでオニーサンから合格もらえるわきゃねーだろっ！！）

シュウの傍ら、リュウが袖をまくった。

己の腕にぶつぶつとトリハダが立っているのを見て言う。

「……合格できるんじゃね？」

「んっ、んなわきゃねーだろ親父っ！」

「だってすげー寒いぜ？」

「たっ、たしかにすーげー寒いけどっ…！　そんなんで合格できた

ら苦労しねえよっ……！」

「ま、近々カレンの兄さんに会いに行って、何が何でも合格してくるよーに。もし不合格だったら…」

ぐわしっ！

と、シュウの頭を掴んだリュウ。

「どうなるか分かってんな……！？」

「――！！？」

リュウの形相に総毛立ったシュウの身体。

（ふ、不合格だったら絶対の死がオレを待っている…！）

キラが苦笑した。

「必死だな、リュウ…」

「なっ、何なんだよ親父っ…！　何でそんなに必死になってオレに合格させようとしてんだよっ……！」と、恐怖で涙目のシュウ。「そっ、そりゃっ、オレだってカレンのオニーサンから合格ほしいけどっ……！」

「……」

無言で回転椅子に座ったリュウ。

ゆっくりとシュウに背を向ける。

そして口を開いた。

「シュウ…、おまえ再来月でいくつになる」

「えっ？」

再来月――5月はシュウの誕生日だ。

「じゅ、18だけど」

「18になれば」と、シュウが言い切るか言い切らないかのうちに続けたリュウ。「車の免許が取れる。パチ屋に入れる。18禁エロ関係を白昼堂々公衆の面前で見放題」

「み、見放題でも見れねーっつうの…」

「そして」

「…そして？」

「18になったヤロウは、結婚ができる」

「まあ、そう――」

そうだな、と言おうとして言葉を切ったシュウ。

（ま、まさか…）

と、察してどきっとした。

そして少しして聞こえてきたリュウの言葉は、

「おまえ18になったらカレンと結婚しろ」

シュウの予想通りだった。

「えっ…！？」と短く声をあげ、頬を染めたカレン。「リュ、リュウさま、今なんと……！？」

「カレン、おまえ再来月シュウと結婚な」

「…えっ、えぇぇえええぇぇえええぇぇえええぇぇえええぇぇえっ！？」

と、カレンは仰天のあまり絶叫する。

「良かったな、これでおまえは居候期間が過ぎてもウチで暮らせるぞ。しかも一生。おまけにもれなくこんなにお優しいお義父さまがついて来る。さあ喜べ」

「たっ、たしかにそれならカレンの居候終わってもカレンはウチに居れるけどよっ…！」と、どきまぎとして言うシュウ。「そっ、そんないきなりっ……！」

「安心しろ、シュウ」

と、何やら机の引き出しからゴソゴソと取り出すリュウ。

椅子を回転させて振り返ったその両手には、

「おまえたちは未成年だからな。オレとキラ、カレンの両親の署名・押印済みだ。それから証人のところもオレとカレンの父でバッチリだぜ」

何と、婚姻届が広げられていた。

それを手に取って確認するシュウとカレン。

知らない間に親同士の間で話が進んでいて、戸惑わずにはいられない。

キラが苦笑しながら溜め息を吐く。

「何だか悪いな、シュウ、カレン。全てはリュウの企みで…」

「た、企みっ？」

と声をそろえたシュウとカレン。

リュウを見る。

リュウが言う。

「企みとは人聞きが悪いぜ、キラ」

「企みではないか、リュウ」とキラがもう一度溜め息を吐いた。「おまえはシュウやカレンのためより、己のためにこの2人を結婚させるのだからな」

シュウが顔を引きつらせる。

「おい親父、アンタの利益のための政略結婚なのかよ…！？」

「まーな」

と、認めたリュウ。

椅子をくるりと回転させてシュウたちに背を向け、にやにやと笑って続ける。

「なあ、シュウ。おまえが結婚となったらリン・ランはどうなると思う」

「ど、どうって――」

「俺の予定では『兄上なんか大嫌い！』とリン・ランは泣きじゃくり。そこを優しく慰める俺。するとリン・ランは『父上大好き（ハート）』となる。そう、念願の『父上大好き（ハート）』…！　『兄上よりやっぱり父上なのだ♪』、『そうだろう、そうだろう、リン・ラン。やっぱりこのお父上が好きか…！』、『はいですなのだ♪　父上、大・大・大・大好きですなのだ♪　もう兄上なんかいらない♪』となるに違いねえ！　まあ実はこの間リン・ランの様子がおかしかったときも狙ったんだが、ホワイトデー過ぎたらいつの間にかまたブラコンになってて結構な衝撃だったぜ。…だが！　今度こそついにリン・ランをファザコン化させ、念願の『父上大好き（ハート）』計画は大成功だぜっ！！　ざまーみやがれってんだシュウっ！　悔しいかブワーカっ！！　リン・ランをもうおまえの独り占めになんかさせねーぞ！！」

「……」

そ…、そんなに羨ましかったのか。

唖然としてしまうシュウ。

カレンは苦笑。

「リュ、リュウさま？　リンちゃんランちゃんをファザコンにするために、シュウとあたくしを結婚させようと企んでおられる、ということでよろしいのですわね？」

「そうだ」と、キッパリと答えたリュウ。「俺はこの計画を、カレンおまえがウチに居候を始めたときからずっと考えていた」

ふっふっふ、と（怪しく）笑い。

にやにやとして崩れかけていた顔をキリっと元に戻し。

椅子を回転させて振り返り、シュウとカレンをその黒々とした鋭い瞳で捉えた。

「だから頼んだぜ、おまえたち。この俺の願いのために、な」

ジュリの誕生日パーティーが終わったあと。

シュウの部屋に備え付けられているバスルームの中。

シュウとカレンは一緒に入浴していた。

バスタブの中に向かい合って座ったまま、５分。

会話がなかった。

お互い目が合っては逸らす。

そのお互いの頬が染まっているのは、湯に浸かっているからという理由だけではなさそうだった。

「…ほ…本当自分勝手だよな、親父っ…。何を企んでるかと思いきや、政略結婚だなんてよっ…」とシュウの方が先に口を切った。「…そのっ…、おまえ無理しなくていいからなっ…？」

「…な…何かしらそれ」

とカレンの顔がむくれた。

シュウから顔を逸らして言う。

「前、あたくしにいつかプロポーズしてもいいかって訊いたクセにっ…！　あれは嘘だったのかしらっ…！？」

「そっ、そうじゃねーよ、そうじゃっ…！　そうじゃねえ…けどさっ……」

再び会話が途切れた。

数分して、カレンが口を開く。

「…い…嫌なの？」

「えっ…！？　ま、まさかっ…！」と、首を横にぶんぶんと振ったシュウ。「おまえが嫌なんじゃないかって思ってっ……！」

「嫌だったら教えないのですわっ…！　左手の薬指のサイズっ！」

「おっ…おうっ、7号っ…！」

再び途切れる会話。

また数分が経ち、シュウが恐る恐ると言う風に口を訊く。

「…お…おまえ本当にいいの？」

「ちゃんと」と、カレンがシュウから顔を逸らした。「ちゃんと言ってちょうだい、指輪と一緒に……プロポーズ……」

「…うっ、うんっ…！」

と、大きく頷いたシュウ。

カレンの顔がぼっと熱くなる。

（再来月にはシュウのお嫁さんシュウのお嫁さんシュウのお嫁さんっ…！？　きゃあああああっ！　あたくしウェディングドレス着るのおぉぉおおおぉぉおおおぉぉおおおぉぉおおっ！？）

同時にシュウの顔も負けないくらい熱くなる。

（再来月にはカレンの裸エプロン裸エプロン裸エプロンっ…！？うっそマジで！？　それで朝っぱらからカモオォォンでオレフィーバァァァァァァァァァァっ！？）

カレンが再びシュウに顔を戻し、2人の目が合う。

お互い顔が真っ赤だ。

「……」

「……」

数秒の沈黙の後。

そろって湯の中で暴れ出した。

「あっ、あたくし、ウェディングドレスは特注がいいのですわぁぁぁあああぁぁぁああああぁぁっ！！」

「オっ、オレ、裸エプロンのエプロンの胸の部分はハートのやつがいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！」

「それでそれでっ、憧れのバージンロードを歩くのですわあぁぁぁあああぁぁぁああああぁっ！！」

「それでそれでっ、朝っぱらから生でフィーバァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

「あんもう嬉しいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！」

「あああもう天国ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！」

さんざん暴れて、バスタブの湯を半分以下にしたシュウとカレン。

抱き合っておとなしくなる。

夢膨らむ結婚のため、

「まずはオレがカレンのオニーサンから合格をもらわなくっちゃな

！」

と、シュウ。

張り切って言った。

のだが、すぐにカレンとそろって苦笑した。

「寒〜いダジャレやギャグ、おまけに死語って何だよぉ〜……」

3月の末、シュウはカレンの兄――ヒースと会うことになった。

第１１４話　父親の企み（後書き）

次話をお読みになる際は、お身体を冷やさぬよう温かい格好でどうぞデス……ｗ

昨日０時１０分ごろメールくださった読者さまへ。
残念！　サラの結婚の際、薬は使いませんｗ
薬しょっちゅう出てくるけど薬がメインの話じゃありませんからねｗ

そしてまたメール来ないっていう…。
あぁ、何故……ｏｒｚ

第１１５話　ボクに妹さんをください

３月末。
スーツを身にまとったシュウ。
カレンと共に、カレン宅の前に立っていた。

父親の押し付けられた政略結婚とはいえ、愛するカレンとの結婚のため。
カレンの兄・ヒース（２８歳）から是非とも合格をもらうために。

カレンは物心ついたときから、『将来結婚するならユーモアのある男性を選べ』とヒースに言われていたのだと言う。

そしてそのユーモアが、

（何故、寒いダジャレやギャグ、死語なんですかオニーサン…）

そんなものシュウの頭ではほとんど思い浮かばなくて、何となく一番知っていそうなグレルに協力してもらい教えてもらった。
加えて、事情を聞いたサラとレオンも協力してくれた。

「兄貴とカレンの結婚が決まって親父がはしゃいでるときに、アタシとレオ兄も結婚のこと親父に切り出すよ！　そうすればもう勢いと機嫌の良さでＯＫくれるかもしれないし！」

なんてサラは言っていたが。
結構なプレッシャーである。

（グレルおじさんやサラ、レオ兄から教えてもらったダジャレだの

ギャグだの死語だの、ぜーんぶ紙に書いて覚えてきたけど…。だ、大丈夫かなオレ……）

カレンがシュウの顔を覗き込んだ。

「…大分緊張しているようだけど大丈夫かしら？」

「お、お、おうっ！　へーきへーきっ！」

と言ったシュウだったが。

ピっ、ピピピピピピピピピンポーン…

なんて、以前カレン宅を訪ねたときのように緊張で指が震えていた。

以前の緊張に加えて、今回はいろんな意味の緊張で。

少しして聞こえてくるカレンの兄――ヒースの声。

「いらっしゃ～～～い」

初っ端からギャグ来た…！

思わず顔が引きつってしまうシュウの傍ら、カレンが恥ずかしそうに咳払いをした。

「お、お兄さま？　そ、それは新婚さんになってから言ってちょうだいっ…！」

「我が妹・可憐なカレンよ」

「……。はい、お兄さま？」

「おひさしブリーフ」

「……。相変わらず寒いのですわ、お兄さま」

「あったけーシャレって、あったっけ？」

「……。早く開けてちょうだい」

「ちょっとマッチョれ」

「……」

カレンが深い溜め息を吐く傍ら、シュウは動揺していた。

（オニーサン只者じゃねえっ…！　何でそんなに連発できるんだ…！？）

シュウの耳に聞こえてくるスリッパの音。

落ち着いた歩き方だ。

カチャっ…

と鍵が開き。

玄関のドアがゆっくりと開いていく。

（うわぁ…）

とヒースを見て目を丸くしたシュウ。

身長は１７５ｃｍくらいだろうか。
年齢の割には幼い顔に、黒縁メガネ。
カレンと同じ赤い髪はきっちりと七三分けだ。
これがまた、似合わない…。

（カ、カレンが言ってたけど、オニーサンて本当に真顔だな…。まったく笑いそうにないっていうか…。わ、笑い取れんのかオレ！？）

なんて心配になっているシュウに、両手を突き出したヒース。

そして、

「やーーーっ！」

とっ、登場シーンもギャグ忘れねえっ…！

引きつるシュウの笑顔。

「ふ、普通に出てちょうだいお兄さまっ…！」

とカレンが顔を赤くし、シュウを引っ張って玄関の中に入った。

靴を脱ぐ前、シュウはヒースに手土産を差し出しながら頭をさげる。

「は、初めましてオニーサンっ！　こ、これっ、つまらないものですがっ…！」

「ありがとさ～ん」

とシュウから手土産を受け取るヒース。

シュウが顔をあげると、シュウの頭の先から爪先までじっくりと見つめた。

思わず身体の脇に両手をくっ付けて姿勢を正してしまうシュウ。

「…シャレたシュウくん」

「はっ、はいオニーサンっ！」

「早速シャレたシャレを言ってみなシャレ」

「えっ！？」

いきなり！？

と、狼狽してしまうシュウ。

何か言おうとするが、まるで出てこない。

１０秒ほど黙ってシュウを見つめていたヒースが溜め息を吐く。

「可憐なカレンが彼氏を連れて来るというものだからドキをムネムネさせて待っていたというのに……、超ホワイトキック」

「は……？」

シュウ、困惑。

（ホ…ホワイトキックってなんだ……！？）

カレンがシュウに耳打ちする。

「む、昔のギャル語らしいわよ。意味は『白ける』」

「し、白け……！？」

オニーサン白けちゃったのか！？

シュウ、再び狼狽。

ヒースの背をあれやこれやと考えながら着いて行く。

（む、向かってる先はリビングじゃないみてーだなっ…！　カレンが食事作る的なこと言ってたし、キッチンかっ…！？　ええと、キッチン…キッチン……、あっ！　キチンとしたキッチン！　これをまず言おう！）

と、思ったシュウだったのだが。

「我が家のキチンとしたキッチンへようこそ」

とっ、取られたあああああっ！

シュウ、驚愕。

（何だこの人、何だこの人、何だこの人っ…！　つっ、つえぇぇっ…！　ボケっとしてたら全部言われちまうっ……！）

カレンがテーブルを指して言う。

「シュウ、そこの椅子に座って待っててちょうだい」

「う、うんっ」

よし、行けオレ！

と、テーブルの方へと歩いて行き、イスに手を掛けたシュウ。

ちょっと赤面しながら言う。

「…こっ…、このイス、イイッスね」

「ナイスなイスでしょう」

「――！？」

なっ、なんって切り返しの速さだオイっ…！

愕然としてしまうシュウ。

一方、変わらず真顔で冷静沈着といった感じのヒース。

シュウの向かいの椅子に座り、冷蔵庫の前に立っているカレンに顔を向けた。

「可憐なカレンよ」

「いちいち可憐をつけなくていいわ、お兄さま」

「何故朝から来てくれなかった」

「朝は色々忙しーー」

「朝食がなくて超ショック」

「……。えーと、何を作ろうかしら」

「しかとシカトか」

「鶏肉が丸ごと1匹あるからこれを使いましょう」

「鶏肉の皮は取りにくいぞ」

「お汁か何かほしいわよね」

「汁なんか知るもんか」

「あ、スープを作りましょう。この貝で」

「貝かいっ！」

「……お兄さま？」と、顔を引きつらせてヒースに振り返ったカレン。「お酒でも飲んでおとなしく待っててちょうだい。大好きな焼酎でよろしいかしら!?」

「焼酎はしょっちゅう飲むが、本日は月曜日だから飲マンデー。酒は避けるとしよう。シュウくん、飲みすぎは肝臓にいかんぞう？」

なっ、何このオンパレード……！！

シュウ、もはや半泣き。

（や、やべえ！　オレももっと何か言わなきゃっ、何か言わなきゃっ…！　合格もらえねえよっ……！）

そんなシュウを見てカレンが苦笑した。

「シュウ、とりあえずビールでも飲んで落ち着いて」

「う、う、うん…。え、えと……、い、いただきマンモス」

と、シュウ。

カレンが持って来てくれたビールをごくごくと飲む。

「可憐なカレンよ」

「何よお兄さま」

「兄には焼酎お湯割り梅入りで」

「あら、お兄さまはお酒はいらないのでしょう!?」

「冗談はよし子さん」

「いるならいるで最初からそう言ってちょうだい！」

「アイムソーリーヒゲソーリージョリジョーリー」

「…はい、梅入り焼酎お湯割り！　これでしばらくおとなしくしててちょうだいよ!?」

「ありがとーさん。ずずずっ…ごくっ。ふぅ…、梅はうめぇ」

カレンが溜め息を吐き、料理を開始する。

シュウは落ち着こうとビールをごくごくと飲み続けている。

（何か言わなきゃ…！　オニーサン笑わせること何か言わなきゃっ！　早く何か言えよオレっ……！！）

焦りのあまり冷や汗を掻きそうになっているシュウの傍ら。

よっぽど妹が可愛いのか、ヒースはまたカレンを見ながらダジャレのオンパレード。

「あら？」

「どうした可憐なカレン」

「このキャベツ腐りかけね」

「キャ！　ベツのにしてっ」

「あっ、ジャガイモ落としちゃった」

「ポテッと？」

「うーん、パイナップルも入れようかしら」

「そのパイン、すっパイン？」

「やだ、ショウガがないわ」
「しょうがないな」
「デザートを先にお皿に盛っておきましょう」
「それはサラダの皿だ」
「あっ、シュウビールおかわり？　待って、今持って行くわ」
「板前はソコにいたまえーーーっ！！」
「……お・に・い・さ・ま！？」と、引きつるカレンの顔。「おとなしくしててって言ったでしょうっ！？　うるさいのですわっ！」
「すんまそん」
「まったくもうっ！　ごめんね、シュウ、今ビール持って――」
「い、いや、オレが取りに行くからいいよ」
と立ち上がったシュウ。
（カレンが作る料理を察してダジャレを考えるんだオレっ…！）
と、カレンのところにビールを取りに行った際に、料理の材料をチェックすると、カレンがグラタン皿に米を詰めているところだった。
脇には鶏肉やチーズがある。

（チキンドリアと見た。チキンドリア…、チキンドリア……。よし、1つ思い浮かんだ）

ビールを受け取り、再び席に戻るシュウ。

ヒースがシュウを見て言う。

「シュウくん、少し真面目な話をしようか」

「は、はいオニーサンっ！」

真面目な話と言われ、ちょっとドキっとしたシュウ。

だが、その方が楽そうだった。

「シュウくんは超一流ハンターだそうだね」

「は、はい。まだなったばかりですけどっ…」

「シュウくん…、私はね」

「はい」

「ハンターにはんたーい」

「えっ…！？（オニーサンてハンター嫌いなのか！？）」

「うっそぴょーん」

「…は…ははは…（シャレ言いたかっただけかよ！）」

「超一流ということは、金銭面などは安心していいんだね？」

「あのっ…、オレどうも借金ができやすいんですけどっ」

「かねがね金がねぇのかね」

「でっ、でもカレンさんには絶対に苦労かけませんからっ！」

「気をつけなさい、シュウくん。お金はおっかねーよ？」

「き、肝に銘じておきます（真面目な話な気がしねえ…）」

なおも続くヒースのダジャレ。
シュウの知らないギャグ。
聞いたこともない死語。

己が言えたダジャレやギャグ、死語なんて数えるほどのシュウだったが、ビールを飲んでいるうちにようやく緊張がほぐれてきた。

（よし、落ち着いて頑張ろうオレ）

やがて料理が出来上がり、カレンが運んできた。
テーブルにならべたそれらを指で差しながら言う。

「これが貝のスープね。これはグラタンじゃなくてチキンドリアよ、ライス詰まってるから」

「ライスを食べるのはつらいっす」

やっぱりヒースが口を挟んだ。

「それで前菜に棒々鶏（バンバンジー）で、これが――」

「メインでしゅか……」

「メインディッシュの鶏肉の酢豚風よ♪」

「すぶたべなさい……」

カレンが席に付いたら手を合わせ。

カレン、シュウ、ヒースの順に言う。

「いただきます」

「いただきマンモス」

「いただきサマー」

ヒースに鶏肉の酢豚風をすぶたべろ（すぐ食べろ）といわれたシュウ。

まずはそれを一口、口に入れた。

カレンが訊く。

「どう？　シュウ？」

「うん！　まいうー」

「良かったのですわ。お兄さまは？」

「マジでまじぃ」

「……。じゃあ食べないでちょうだい」

「なんでそ～～なるのっ！」

「まずいって言ったのはお兄さまでしょう！？　何かしら！？　食べるの！？」

「あたり前田のクラッカー」

「まったくもうっ…！　どう！？　おいしい！？」

「チョベリグ」

って、何だろう…。

と疑問に思ったシュウだったが、気にしないことにした。

チキンドリアを見る。

（よし、行くぜオレ）

心の中、うんと頷いたシュウ。

ヒースと目が合ったところで、

「チキーン！」とフォークを持ち、「ドリアァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

とチキンドリアを掻き込んだ。

（迫力でオニーサンを笑わせろオレっ！）

はっきり言ってあつあつのドリアで舌は大変なことになっていたが、シュウは気合で掻き込む。

「ドリアァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

「……シュウくん」

ヒースが口を挟む。

「ドリアァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

「そんなにドリアばっかり食べてないで」

「ドリアァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

「棒々鶏を食べてバンバン自慰しなさい」

「――ぶっほ！？」

なっ、なんちゅーこと言うんだこの人っ！！

思わずむせたシュウ。

ビールを飲んでから返す。

「…べ…ベッドがベットベットにならないように気をつけます」

「ちゃんとティッシュの中に出すんだよ」

「は、はい…（もうずっとゴムの中に出してますとは言えねえ…）」

カレンが赤面して咳払いをする。

「や、やめてちょうだい、お食事中にっ…！」

承諾したシュウとヒース。
口を閉ざして食事を再開。

と言っても、３０秒後にはやっぱりヒースが一人で喋り出したが。

デザートのプリンを食べながらヒースが言う。

「プリンには栄養がたっプリン。ちゃんと食べるんだよ、シュウくん」

「はい、オニーサン」

と言い、プリンを食べるシュウ。
ちらりと向かいのヒースを見る。

（飯食い終わったらオレ、カレンを連れて帰るわけだけど…。はたしてオニーサンに合格はもらえたんだろうか…）

その答えは、

「さてシュウくん。プリンを食べ終わったら、そろそろ私を笑わせてもらおうか」

まだもらえていなかった。

口に入れたプリンを噛まずにゴクリと飲み込んだシュウ。

再び狼狽してしまう。

（ご、合格まだだったのかよオレっ…！　オニーサンを笑わせなきゃっ、オニーサンを笑わせなきゃっ…！　オレにはあと何が残っている!?　…あっ、グレルおじさんから教えてもらったアクション付きのギャグ集っ！）

プリンを食べ終わったあと、カレンは後片付けを始め。

シュウは立ち上がる。

そして椅子に座っているヒースを見つめ、アクションつきのギャグ開始。

「ぴっ…、びっくりくりくりくりっくり！」

しぃーん…。

ヒース、無反応。

シュウは慌てて続ける。

「アイーーーン！」

しぃーーん。

「ガチョ〜〜〜ン！」

しぃーーーん。

「ゲッツ！」

しぃーーーん。

「…ア、アンド・ターン！」

しぃーーーーん。

「コっ…、コマネチっ！」

しぃーーーーーん。

「コマネチ、コマネチ、コマネチィィィィィィィィィィっ！！」

しぃーーーーーん。

と、静まり返りまくるカレン宅のキッチン内。

聞こえたのは、ヒースの深〜い溜め息。

（お願いオニーサン、笑って…！）

シュウ、再び半泣き。

（オレこんなに頑張ってんのにっ…！　すーげー恥ずかしいこと頑張ってんのにっ…！　あとオレに残されてるのなんて、母さんの世

界三大ダジャレしかっ……！！）

ヒースが徐に首を横に振った。

「シュウくん、君はこの程度だったか。残念だ…」

「…まっ、待ってくださいオニーサンっ！！」

と、慌てて叫んだシュウ。

（こうなったら一か八かっ……！！）

テーブルの端に置いてあるカゴの中に入っていたミカンを取った。

それをビールの缶の上に置き、

「アっ…、アルミ缶の上にあるミカン！！」

「――！？」

見開いたヒースの瞳。

続いてシュウは床の上に倒れ、

「ネコが寝込んだっ！！

「――…っ…！！」

震えるヒースの身体。

そしてシュウは近くにあった座布団をぶん投げ、

「（座）布団がふっとんだあぁぁぁあああぁぁぁ

さまでした」

「うむ」

「そ、それでっ、あのっ…、オニーサンっ」

がばっと頭をさげたシュウ。

大声で続ける。

「妹さんをボクにくださいっ！！　絶対っ…、絶対一生大切にしますからっ！！」

「……」

数秒の無言。

そのあと、ヒースがぽんとシュウの肩を叩いた。

シュウが顔を上げると、真顔のヒースの顔が綻んでいた。

「オッケー牧場」

「おっやじ～～～っ！！　ただいマンゴスチ～～～ン！！」

シュウ、カレンと共にハイテンションで帰宅。

リュウがギルド長としての仕事をやっているだろう書斎に飛び込んだ。

シュウの想像通り書斎にいたリュウが、椅子をくるりと回転させて振り返る。

「お？　その様子じゃ、カレンの兄さんから合格もらったかシュウ」

「あたり前田のクラッカァァァァァァァァっ！！」

「ついでに寒くなって帰ってきたか」

「親父もたまにはユーモア見せろよなっ♪　おススメするぜ、寒い言葉っ♪」

「いや、遠慮する」

と、リュウ。

シュウの傍らで苦笑しているカレンを見た。

「うちの息子ますますバカになっちまって苦労かけるな、カレン」

「いえ、リュウさま…。あたくしのお兄さまのせいみたいなものですし……」

「おまえ、いいんだよな？」

と、確認したリュウの顔を、カレンは見つめた。

何がいいのか訊かなくても分かる。

シュウとの結婚だ。

「はい、リュウさま」

と、頬を染めて微笑んだカレン。
その顔を数秒の間じっと見つめたあと、リュウが椅子を回転させて背を向けた。

「そうか」

と言って。
中断していた仕事を再開しながら続ける。

「シュウ」

「ん？」

「おまえももう超一流ハンターだ」

「おう」

「3ヶ月分の報酬でいいエンゲージリング買ってやれよ」

「おうっ！　もちろんだぜっ！」と、笑ったシュウ。「んじゃ親父、いい夢見ろよ！　バイナラ♪」

と言い残して、カレンと共に書斎を後にした。

一方、袖をまくったリュウ。

「……今夜はずいぶんと冷えるぜ」

ぶつぶつとトリハダが立っていた。

袖を戻し、仕事を再開するリュウ。

（シュウ、カレンの家族全員から合格…か。よくやったぜ。あとはシュウがカレンにエンゲージリング渡して一応ちゃんと婚約すれば……）

と、たまらずにやりと笑った。

（リン・ランファザコン化で『父上大好き♪』計画大成功だぜ！）

第１１５話　ボクに妹さんをください（後書き）

真夏に読んだら涼を得られそうな話でございましたね。
あぁ、また変なキャラが一人…。

昨日の２１時５６分ごろメールくださった読者さまへ。
キラの世界三大ダジャレもろに出てきましたねｗ
そしてメール……、違う人に送ってないこと祈りますｗｗｗ

第116話　これから約一年間

4月の頭。

これから約一年間。

シュウはハンター歴3年目を過ごし。

「オレももうハンターになって3年になんのかあ。はえーなあ。…あれっ？　もう超一流ハンターのオレって結構すごくね？」

カレンとサラは弟子期間を終了したということで、一応一人前ハンターとして活躍できることになったのだが。

「ねえ、カレンどうすんの？　兄貴と一緒に仕事する？　それとも一人で仕事……できるわけないか」

「え、ええ。でもそろそろ武器を持って修行してみようと思ってるのよ……、シュウのところで。なんていうか、キャロルちゃんのことがあってから…。サラはどうするのかしら？」

「アタシもレオ兄のところで修行続けるよ。ちょっと一匹で仕事始めてもいーかなあって思ったんだけどさ…、なんていうかキャロルのことがあってからアタシもまだまだだなあって思ってさ。っていうか、カレン武器なんて使えるわけ？」

「つ、使えるようになるのですわ、絶対っ…！　もうこれ以上大切な人が目の前でひどい目に合わされるのなんて嫌なのですわっ！」

双子のリン・ランは魔法学校水学部の4年生として過ごし。

「わたし４年１組だったぞ、ラン」
「わたし４年１組だったぞ、リン」
「おおーっ」
「おおーっ」
「また一緒だぞーっ」
「すごいぞーっ」
三つ子のユナ・マナ・レナは魔法学校の２年生として過ごす。
ユナは炎学部、マナは大地学部、レナは光学部。
「うえぇぇん、マナとレナと違う校舎なんて嫌だよぅ」
「もう、泣かないでよユナ！　大丈夫だよ！」
「レナの言うとおりだよ、ユナ…。校舎違うって言ったって、同じ敷地内なんだし…」
ハンター歴１５年目を過ごすレオンは、リンクと同じく副ギルド長に昇格し。
「って、僕も副ギルド長になっていいの？　リュウ」
「ああ。おまえは単なる超一流ハンターの器じゃねーしな。つーか、俺に代わってギルド長の仕事こなしてるリンクがぶっ倒れそうなん

だよ、忙しくて。もちろんおまえには今まで通り超一流ハンターの仕事もやってもらうが、余った時間でリンクを手伝ってもらおうと思ってな」

「分かったよ、リュウ。特に忙しいうちのギルドの副ギルド長が今まで一人しかいなかったことが不思議なくらいだしね」

「本来は俺の仕事なんだが、悪いな」

「仕方ないよ。リュウへの依頼の多さは異常だし…」

「おう…」

なんてリュウとレオンが話しているのは、葉月ギルドのギルド長室の中。

部屋の隅で小声でひそひそと話しているカレンとサラ、疲労のあまりソファーで爆睡中のリンク、一応超一流ハンターのグレルの姿などもあった。

それから、唸っているシュウ。

2枚の紙を見比べていた。

「うぅーん…、うぅーん……」

本日は葉月ギルドに務めるハンターの身体測定および健康診断だった。

シュウは自分のデータとリュウのデータを見比べながら唸っている。

「おいシュウ、さっきからうるせーぞ」

「だってよ、親父」

「何だよ」

「オレ去年から身長が１．５ｃｍ伸びたみたいで、１８３．５ｃｍになってたんだ」

「そうか」

「で、親父の身長は変わらず１８５ｃｍなんだ」

「だな」

「つまりオレと親父、身長１．５ｃｍしか変わらねーんだよ」

「それがなんだ」

「オレの体重７５ｋｇに対して、親父の体重は８２ｋｇ！．何で７ｋｇも差があるんだよ！？」

「華奢だよなあ、おまえ」

「うっ、うるせえっ！」

とリュウに背を向けたシュウ。

決して華奢な身体をしているわけではないが、リュウと並ぶとやっぱり華奢だ。

ちなみに１９５ｃｍ１２０ｋｇのグレルと並ぶと、さすがのリュウも華奢に見えるが。

むっとしたシュウは、ちょっと憎まれ口を叩いてみる。

「親父のデーブ！」

「おいレオン、俺とシュウの体脂肪率どっちが多かったか見たか」

「え？　ええとぉ」とレオンが苦笑した。「どっちも一桁だけど、２％ほどシュウの方が多かったかな？」

それを聞いたリュウに、

「デーブ、ブータ」

と失笑しながら言い返されたシュウ。

頬が膨らんだ。

「しっ、脂肪はクッションになって内蔵守ってくれるしいいんだよっ！」

「でもおまえ明らかに俺より防御力ないよな」

「そっ、そんなことねーよ！　オレだって強くなってきてるんだ…！　グレルおじさんの一撃食らったって平気だっ！」

と言ったシュウの肩を、グレルが笑いながら叩いた。

「がっはっは！　オレのメガトンパンチ食らって見るか？　シュー

ウっ♪」

「ゴメンナサイ嘘です死んじゃいますオレもう言いません」

「だろうな、今のおまえじゃ。ところで」と、リュウの視線がカレンとサラを捕らえる。「おまえたち、さっきから何をひそひそ話してんだ？」

カレンとサラがリュウを見た。

サラ、カレンの順に言う。

「ねえ、親父。ちょっと相談あるんだけど」

「あたくしが武器を使うとしたら、何がよろしいと思いますか？リュウさまっ…！」

「へ？　カレンが武器ぃ？」と声を裏返したのはシュウである。「いきなり何言うんだよ、おまえ？」

「あ、あたくしだってハンターよ！？　ちょっとくらい戦えるようになりたいのですわっ…！」

「カレン…」

呟いたシュウ。

カレンがそんなことを言い出した理由を察した。

（目の前で親友のサラがやられちまったのを見たんだもんな。自分の非力さを嘆くのも無理ねえか…）

でも、

（あのときはオレもバカだったんだ。きっとレオ兄も思ってる。仕事帰りだろうがなんだろうが、ちゃんとカレンとサラを家まで迎えに行けば良かったんだ）

明るくないシュウとカレン、サラ、レオンの顔を、リュウが見回す。

「どうした、おまえら」

ギクっとしたシュウたち。

慌てて笑顔を作る。

「な、なんでもないのですわリュウさま」とカレン。「それより、あたくしが武器を使うとしたら何がよろしいと思いますか？」

「ああ…、戦闘時のおまえのあまりの役立たずさにおいては俺もまったく気になっていなかったわけじゃねえ。せめて自分の身を守れるくらいにはなれ」

「ねね、親父」と、サラ。「剣よりは槍がいいよね、カレンには」

「まあ、そうだな。剣で槍に勝つには3倍の技量が必要っていうのは嘘じゃねーからな。槍の方が有利だな。だがそれより飛び道具を進めとくぜ、カレンには」

カレンが首をかしげた。

「飛び道具…ですか？」

「ああ。弓矢とか銃とか、飛び道具全般を教えてやるよ…、俺が。つっても忙しいもんだからよ、カレンについてやれんのはせいぜい1日1時間程度だろうが」

「へ？」

と、耳を疑ったシュウとカレン。
シュウが少し狼狽しながら言う。

「カっ、カレンはオレの弟子だぜっ？　何で親父が教えるんだよ」

「弟子はもう終わったろ」

「で、でもこれからだって仕事は一緒に――」

「ああ、そのことだが」

「な、なんだよ？」

「おまえ一匹で仕事行け、シュウ」

「は？」

「おまえ一匹なら、3時間は早く仕事を終えられるはずだ」

「あっ…」

とカレンが小さく声を上げた。
俯いて同意する。

「そ、そうですわよね、リュウさま…。あたくしがいるせいで、シュウのお仕事の時間が余分に掛かってしまっているのですものっ…」

「そ、そんなことねえよカレ――」

「んで」と、リュウがシュウの言葉を遮って続ける。「仕事を早く終えられるようになったら、今度は時間が余る。その時間を利用しておまえには修行をしてもらう」

「修行っ？」

とシュウが鸚鵡返しに訊くと同時に、リュウの視線がグレルを捕らえた。

それを見てギクっとしたシュウ。
唾をごくりと飲み込んで訊く。

「ま、まさか、グレルおじさんに鍛えてもらうって言うんじゃあ…！？」

「なーんだよ、シューウっ？」と、グレルが笑いながら口を挟んだ。
「おまえがオレに鍛えてほしいって言うならオレはＯＫだぞーっと♪」

「心から遠慮するわ」

と早口で返したシュウ。
リュウを見て訊く。

「グレルおじさんじゃないなら、オレを鍛えるのって誰なんだよ？
あ、親父かっ？」

「いや。本当なら俺が直々に容赦なくビシバシ鍛えてやりてーんだが、忙しくて時間がねえ」

「そうだよな。毎日数時間もオレの相手してらんねーよな。…って、母さんとのイトナミ時間減らせばいいんじゃねえすかね…！？」

「嫌だね。俺おまえの修行よりキラ抱いてる方が好きだし」

「好きな女見るだけでムラムラ止まんねーしな、アンタ」

と、顔を引きつらせるシュウ。
ふとリュウと能力が入れ替わったときのことを思い出した。

「おう。そこで、だ」

「う、うん？」

「有難いことに俺のマジすーげー可愛い黒猫がおまえの相手してくれるぜ？」

つまりキラである。

「ま、待ってくれ…！」と引きつったシュウの顔。「かっ、母さんがオレを鍛えるって……！」

「何だ、不服なのか」

「だ、だってあの猫すーげー天然バカだから、何かすーげー怖いし…！　っていうか、母さんに怪我させたら親父絶対オレのことしばくだろ！？　嫌だ、そんなの！」

リュウが溜め息を吐いた。

「バカか、おまえ。ああバカだったな、悪い」

「うっ、うるせーなっ！　オレなんか間違ったこと言ったか！？」

「そりゃキラが怪我したら俺はおまえを絞めるが」

「ほら見ろ！」

「おまえごときがキラに怪我させられるかって話なんだよ、バーカ」

「え？」

きょとんとしたシュウの顔を見て、リュウが再び溜め息を吐いた。

「おまえずいぶんとキラの力を舐めてんな」

「そっ…、そんなことねえよ！　オレは母さんが破滅の呪文を失ったって最強のブラックキャットなんだってこと、ちゃんと分かってるしっ…！」

「そうだ、キラは最強のブラックキャットだ。ほとんど戦うことがなくたって、モンスターは年を重ねるたびに連れて力が増す。おまえごときの攻撃食らったところで掠り傷１つ負わねえよ」

「えっ…？」

シュウの瞳が困惑した。

リュウが続ける。

「それどころか物理攻撃は全て避けられて当たらねえし、魔法はキラに当たる前に掻き消される」

「そ…、そんなカバな！」

「おまえカレン・兄に会ってからときどき言葉おかしいぞ」

「オレだって超一流ハンターになったんだ！　た、たしかに物理攻撃は当たらねえかもだけど、魔法くらい当てられる！　そしたらいくら母さんだって掠り傷くらい負って……」

リュウが3度目の溜め息を吐いた。

「俺の魔法食らって手足に切り傷程度のキラが…、か？」

「へっ…！？」

「いつだったか、一度だけキラに風魔法当たっちまったことがあったんだよ。俺あんときゃ一瞬本気で心臓止まりそうになったが……、キラは倒れることもなく手足に切り傷一本負っただけ。キラより魔力がある者が居るとしたら、亡くなった義父上くらいだろうな」

「……」

驚愕のあまり言葉を失うシュウ。

レオンが微笑んで言った。

「シュウ、君はリュウの力もキラの力も本当によく継いでいるよ？
リュウの力に加えてキラの力なんだから、いつかは絶対に目標を達成することができる。出来ないわけがない」

シュウの目標――リュウを超えること。

リュウが続ける。

「これから一年間キラの元でちゃんと修行しろよ、シュウ。そうすれば俺に一撃与えることだってそう遠くない夢だ」

シュウの顔から笑みが零れた。

「う、うん！　オレがんばー――」

「死ななければな」

「は？」

「だってキラだし。力加減は上手くやってくれるんだろうがキラだし。あの天然バカ頭を持つキラだし。いつ何が起こってもおかしくねえだろ？」

「……や」シュウ、顔面蒼白。「やっぱり母さんは止めてくれっ！
オレ死にたくねえええぇぇえええぇぇえええぇぇえっ！！」

と喚くシュウを無視し。
リュウが立ち上がりながら言う。
「んじゃ俺仕事行くわ。師匠もシュウ連れて早くキラのとこ行って」
「な、何のためにグレルおじさんも？」
とシュウが訊くと、グレルが答えた。
「キラのちょこっとばかし鈍っちまった戦いの感覚を戻すためだぞーっと♪」
「は！？」
「シュウの相手する前にオレと準備運動するんだぜ、キラ♪」
「…かっ、母さんＶＳグレルおじさん……！？」
それを想像したシュウ。
冷や汗が背中を伝った。
リュウがギルド長室の戸口へと向かいながら言う。
「師匠、あんたの魔法もキラにはほとんど利かないが、さすがにあんたの物理攻撃食らったらキラも痛ぇだろうから力加減よろしく」
「分かってるぞーっと♪」
「いやたぶん分かってねーから、キラに治癒魔法かける準備しておけよ、シュウ」

「お、おうっ……」

「あ」と、ドアを開ける前に立ち止まったリュウ。「おい、カレン来い。今日はとりあえずおまえの武器買いに行く」

「あっ、はい！　リュウさまっ…」

と慌ててリュウに駆け寄るカレンに、シュウの手が伸びる。

「あっ、カレンっ…！」

リュウがにやりと笑った。
カレンを左腕に抱っこする。

「あぁあぁあっ！！」

と思わず叫んだシュウ。
リュウがドアを開ける。

「じゃ、おまえも早く師匠と一緒にキラのとこ行けよ、シュウ」

「カっ、カレンを離せ親父っ！！　何で抱っこする必要があんだよ！？」

「カレンが俺の足に追いつけるわけねーだろ？」

「だっ、だからって人の嫁をっ……！！」

「エンゲージリング渡してから言え」

「こっ、今夜渡――」

「じゃーな」

と、リュウがカレンを抱っこしたままギルド長室を後にする。

シュウの叫び声を聞きながら、カレンが苦笑した。

「リュウさまって、本当シュウで遊ぶのお好きですわね…」

「まーな」と、足取りの軽いリュウ。「で、おまえ今夜プロポーズされんのか」

「は、はいっ…！」

と、カレンの頬が染まった。

「そうか」

「は、はいっ…！　と、ところでリュウさま？　そろそろ降ろしてくださいっ…」

「キラより3kg重いからって気にすんなカレン」

「！？　どっ、どうしてそれを…！」

「だって俺ギルド長だし」

「あっ！　身体測定っ…！」

「おまえ乳ねえのに体脂肪率が――」

「きゃっ、きゃあああああああっ！　言わないでくださいっ！」

と顔を真っ赤にして喚くカレンを見て、リュウがにやりと笑う。

「おまえ来月にはシュウと結婚…か。ってことは……」

ギクっとしたカレン。

（あたくしシュウと結婚したらもしかして……！？）

嫌な予感を感じた。

そしてそれは、

「俺の玩具がもう1匹増えるってことだな」

的中のようだった。

ギルドの外に出て、カレンを地に降ろしたリュウ。

己に足の速くなる魔法をかけ、にやにやと笑いながら続ける。

「ああー、楽しみだぜ。シュウの嫁になっちまえば遊ぶのに遠慮も何もいらねえ。シュウの嫁ってところがまた楽しすぎて仕方ねえ」

「おっ、玩具にしないでくだ――」

リュウの脇に抱えられたカレン。

バケモノとしか言いようがない俊足を持つリュウが突然走り出し

たものだから、絶叫した。

「さあああああああ

（まるでミエマセン）

第１１６話　これから約一年間（後書き）

２０日の２１時２８分ごろメールくださった読者さまへ。
道理で前話書いてるとき寒くなったわけだ…ｗ　リュウみたいにトリハダ立ってますたｗ
（・・・）が抜けてるって、「マジでまじぃ」のとこですよね？
あそこだけ何度やっても上手くできなかったので、結局つけなかったんです…ごめんなさい。

Ｐ．Ｓ
アニソンおつｗ

第１１７話　改めて誓います

ミーナの瞬間移動で、自宅屋敷の裏庭へとやってきたシュウ。
これから約一年間、キラの元で修行をすることになったのだが。

（なんだこりゃ…）

シュウの相手をする前に、準備運動中のキラ。
鈍っている戦闘の感覚を戻すだか何だかのために、グレルと戦っている。

（全然見えねえ…）

呆然としているシュウ。
キラとグレルの姿は確認できるが、その攻撃一発一発が速すぎて見えない。

（し、しかも…！）

シュウぎゅっと拳を握った。

（なんで…だよ…！）

目の前で繰り広げられる光景に目が丸くなり。

（何でだよ、母さん、グレルおじさん…！）

身体が震え出し。

（なんでっ…、なんでっ……！）

そして溜まらず声を上げた。

「なあぁぁぁんで、だんだん鬼ごっこになってんだゴルアァァァアアァァアアアァァァァアっ！！」

裏庭を駆け回り。

木の枝に飛び上がり。

ついには屋敷の外壁を駆け上り始めたキラとグレル。

シュウの耳に楽しそうな声が聞こえてくる。

「おっ？　掴まっちまったぞーっと♪」

「にゃはははははは！　今度はグレル師匠が鬼なのだあ～っ♪」

シュウはプルプルと震えながらもう一度怒声を上げる。

「イイ～～～～～年して鬼ごっこではしゃいでんじゃねえっ！！母さんの準備運動はどうしたんだよ、準備運動は！？」

「ん？」

と、シュウを見たキラとグレル。

ぱちぱちと瞬きをしたあと訊く。

「混ざる？」

「混ざらねえっ！！」

シュウの傍らにいるミーナが笑った。

「遠慮するな、シュウ。おまえがキラと追いかけっこしたいことなんてお見通しだぞっ？」

「ひっ、人をマザコンみたいに言うんじゃねえっ！！」

「まったく照れ屋だぞーっ」

とまたミーナが笑い、キラも笑い、グレルも笑う。

顔が引きつるシュウ。

（ああ～、そうか、そうだよな。オレ今天然バカトップ3に囲まれてんだもんな。いちいち怒ってたらキリがねーよな。堪えるんだ、オレェェェ…！）

と、深呼吸をし。

心を落ち着かせ。

「じゅ…、準備運動は終わったんすか？」

と（不自然な）笑顔で訊いた。

「準備運動？」と、シュウを見て鸚鵡返しに訊いたキラとグレル。

「…あ」

そうだった。

と、顔を見合わせた。

（忘れてんじゃねーぞコラっ…！）

と心の中で突っ込みつつ、シュウは（すげー不自然な）笑顔で言う。

「しゅ…、修行したいんで早くお願いします」

あはは、と笑ったキラ。

グレルと２ｍほど距離を置いて向き合った。

「せっかちだな、シュウ。カレンに嫌われるぞ♪」

「は…ははは…（堪えろオレ堪えろオレ堪えろオレ）」

「ではグレル師匠、準備運動の続き頼むぞ」

と言ったときのキラの顔は真剣そのもの。

靴を脱ぎ捨てて裸足になる。

（良かった、母さんオレの修行ちゃんとしてくれるつもりなんだ。だけど…なんか……）

シュウの背筋に寒気が走った。

（今の母さん…、母さんじゃないみてえだ……）

ミーナが言う。

「野生の頃に戻りつつあるな、キラ」

「や、野生っ？」

と鸚鵡返しに訊いたシュウ。

一瞬忘れていたが、キラもミーナも、ついでにレオンも、元野生の猫モンスターだった。

ミーナが続ける。

「キラが一番戦っていたときは野生の頃だからな。キラはその頃の勘を思い出そうとしているのだ、きっと」

「や…野生の勘…ってなんかすげー怖いんすけど！」

「すごいぞ、養殖と違って♪」

「養殖言うなよ…」

と苦笑して突っ込んだあと、シュウは再びキラに顔を向けた。

いつもは温かくて無邪気なキラの黄金の瞳。

それが冷然として光っている。

きっとあの瞳は、何一つグレルの行動を見逃さない。

「んじゃ続き始めるか、キラ」

「うむ」

キラとグレルの間に流れる沈黙。

一番緊張しているシュウが唾をごくりと飲んだ瞬間。

キラとグレルが同時に飛び出した。

シュウにはやっぱりまるで攻撃が見えない。

かろうじて分かったのは、グレルよりもキラの方が敏捷だということ。

（す、すげえ…！　何でグレルおじさんの攻撃を全て避けられるんだ……！？）

キラの身体が無傷なのに対して、グレルの身体のあちこちに赤い線ができていく。

これまた、シュウにとっては驚愕である。

（な、何であれだけ母さんの爪食らっておきながらその程度の傷で済むんだよ、グレルおじさん……！？）

シュウだったらとっくに真っ二つになっているところである。

突然、キラが後方に飛び退った。

「な、何だ…！？」

と言ったシュウに、ミーナが言う。

「野生の勘だぞ」

「き、危険を察知したのかっ？」

「うむ」

「でも危険って何の――」

「く、来るぞ」

とミーナがシュウにしがみ付いたときのこと。

「そーれいっ♪」

ゴオォォォォォォォっ!!

と、グレルが風魔法で巨大な台風を起こした。

「――うっわぁ!?」

と、飛ばされたのはグレルから離れているところにいるシュウの身体。

幸い、柔らかい芝生の上に叩きつけられた。

ミーナの身体を抱きかかえてゴロンゴロンと転がりながら、シュウはキラに顔を向ける。

巨大な台風は轟々と音を立てながら、キラへと突進していく。

「母さんっ!」

と叫びながら、シュウは顔面蒼白した。

だって、グレルの風魔法と水魔法はリュウをも上回ると聞かされ

ていたから。

防御の態勢を取ったキラ。
足の爪を芝生に突き立て、飛ばされないよう堪える。

そしてキラを包み込んだ台風。
キラを突き抜けずにその場で停止している。

「なっ…！」

シュウは驚愕してグレルを見た。

そこではグレルが人差し指をくるくると回している。

「ほーれほれほれ♪　ねるねる〇～るねだぞーっと♪」

グレルの指に合わせてますます速く、強く、大きくなっていく台風。

シュウは溜まらず叫ぶ。

「グレル（おっさん）止めろっ！！」

「む、キラが出てくるぞ」

と、ミーナ。
シュウははっとしてキラに顔を向けた。

踏ん張り切れなかったのか、地から浮いたキラの小柄な身体。
あっという間に台風に巻き上げられ、空高くへと舞った。

「母さんっ！」

ともう一度叫んだシュウ。

キラがくるくると宙返りをしながら地へと降りて来る。

「ね、ねるねる〇～るねぇぇぇぇ～……」

なんて台詞を吐きながら。

地に足を着いたキラがよろけて尻を着く。

「め、目が回ったぞーっ。グ、グレル師匠、ねるねる〇～るねはそんなマッハで回さないぞーっ…」

「ん？　どっちかというと洗濯機だったか？」

「う、うむー…」

キラの様子を見て、安堵の溜め息を着いたシュウ。

だが、それは一瞬のこと。

ミーナが声を上げる。

「ふにゃあっ！？　キラ怪我してるぞっ！」

キラの腕と足、腰、そして顔に出来た赤い線。

シュウはぎょっとして辺りを見回した。

「おっ、親父いねーよな、親父！？　よし、いねーな！？　見てね

ーな！？」

思わず狼狽してしまう。

キラに怪我をさせたグレルではなく、己がリュウに絞められる気がして。

ふらふらと立ち上がったキラに向かって、グレルが駆けて行く。

「んじゃキラ、行くぜ～っと♪」

「げっ！？」と声を上げたのはシュウ。「まっ、待ってくれグレルおじさんっ！　母さんに治癒魔法掛けねーと――」

オレが親父に絞められる！！

とシュウが言う前に。

「とりゃあっ♪」

ボカァァァン！

と、まだふらふらとしていたキラの腹に、グレルのアッパーが直撃した。

再び空高くに舞ったキラを見て、シュウは抱きかかえていたミーナを放り投げて駆け出した。

「グレルおじさん、もう止めてくれっ！！」

落ちてくるキラを見ながら、グレルが再び拳を構える。

「もう一発いっちゃうぜ～っと♪」

「止めてくれグレルおじさんっ！！　止めてくれっ！！　グレルおじさんっ！！」

必死に叫びながら、グレルへと駆け寄るシュウ。

シュウがグレルのところへと到達する寸前。

「んー？」

と振り返ったグレルの裏拳が、

ドカァっ！！

「――ガハァっ！！？」

シュウの顔面に大ヒット。

シュウの身体が超高速で飛んでいく。

一方、たん、と身軽な音を立てて地に着地したキラ。

「大丈夫だ、シュウ。今ので回っていた目が元に――って？　あれ？」辺りをきょろきょろと見回した。「シュウはどこだ？　今、声が聞こえた気がしたのだが」

「オレもそう思って振り返ったんだが」と、同様に辺りを見回すグレル。「おかしーな、いねーぞ。おい、ミーナぁ？　シュウどこ行ったんだぁ？」

「シュウなら物凄い勢いであっちに向かって行ったぞ」

と、ミーナが屋敷の脇にある森の方を差した。

そちらを向いたキラとグレルが笑う。

「何だ、立ちションかシュウ♪」

「何だ、野糞かシュウ♪」

そういうことにされたシュウは。

爽快すぎるほどの風を浴びながら自宅屋敷の敷地内を通り越し。

動物・モンスターわんさか森の中へと入り。

ドゴゴゴゴゴゴっ！！

と、５本の木を着き抜け。

ドガァっ！！

と、大木に叩きつけられてようやく止まり。

ドサっ…！

と、そのとき大木の下で眠っていたキラの猫友達――トラの背に落ち。

「がはっ……！」

吐血しながらポケットから携帯電話を取り出してリュウに電話をかけ。

「…も、もしもし親父…」

「おまえ、何か死にかけの声してねえ？」

「た…助け…て……」

ぱたりと気を失い。

どうやら慌てたらしいキラの猫友達に、誤った力加減で首を咥えられながら帰還し。

瀕死の重傷のところを、急いで帰宅したリュウに治癒魔法をかけてもらって目を覚まし。

「あぁオレ…、まだまだか弱いな……」

そんなことを深く実感したら涙が込み上げ。

「オレ…、絶対に強くなってやらぁっ……！」

零れてきた一粒の涙を拭い、改めてそう心に誓ったのだった。

だって、

「こんな奴らに囲まれて暮らしてたら、命がいくつあっても足りねえんだよおおぉぉおおぉぉおおぉぉおおぉぉおおっ！！」

死んでなんかいられない。
リュウを超えるという目標を達成するまでは。

いや、

（親父を超えたってオレは死ねないよな。すげー強くなるんだ…、絶対に）

と、リュウと一緒に帰ってきたカレンの顔を見るシュウ。
心配して泣きそうになっているカレンの頬に、そっと手を当てる。

（こいつのこと一生守るって、決めたんだから……）

今夜シュウは、カレンにプロポーズをする。

第１１８話　プロポーズ　～前編～

ＰＭ６時。
シュウの部屋の中。

リュウが溜め息を吐く。

「いつまで寝てんだ、おめーは」

ドスっ！！

と、ベッドで仰向けに寝ているシュウの腹目掛けて振り落とされたリュウのカカト落とし。

「――ガハァっ！！」

と、頭と足が浮き、シュウの身体が「く」の字に折れ曲がった。

激痛の走る腹を両腕で抱え、シュウはリュウの顔を睨み上げる。

「なっ、何しやがるんだ親父っ！！」

「おまえが起きねえから起こしてやったんだろ」

「だっ、誰のせいでまた気ぃ失ったと思ってんだよ！？」

本日の昼間、グレルの一撃のせいで重傷を負い一度気を失ったシュウ。
瀕死のところをリュウに助けられたが、そのあとリュウに絞めら

れてまた気を失った。

「おまえがキラに怪我させたのが悪いんだろうが」

「あれはオレじゃなくてグレルおじさんが――」

「いいから」と、シュウの言葉を遮り、リュウが壁に掛けてあったスーツを親指で差して言う。「早く準備しろよ。カレンは2時間前から準備始めてんぞ」

はっとして時計を見たシュウ。
慌ててベッドから飛び起きる。

「うわ、やっべ！　高級レストランの予約、7時なのにっ！」

今夜シュウは、カレンにプロポーズをする。
よって、今までのデートで一番気合が入っていた。

急いでスーツに着替えているシュウを見ながら、リュウは訊く。

「高級レストランでプロポーズすんのか」

「いや。ここは格好良く」と、自慢げにリュウに振り返ったシュウ。
「ナイトクルーズ予約したんだぜ、オレっ！」

「船？」

「ヘリ！」

「ぷっ」

「なっ、何だよ、その失笑は!?」

と顔を赤くするシュウに、リュウが言う。

「ガキがヘリクルージングで葉月町の夜景見渡しながらプロポーズ？　鼻水出るわ」

「うっ、うるせーなっ！　昔、母さんが親父とのデートで喜んでたからっ…！」

「そういうのは俺とキラだから似合うわけ。おまえらガキがやったところで…。ぷっ」

「うっ、うるせーなっ！　きらきらの夜景見て『コンペイトウみたいで美味そう』とか言って涎垂らしてそうな母さんと、『おまえの方が美味そうだぜ』とか返して痴漢してそうな親父よりは、絶対オレとカレンの方が似合うっ！」

「はいはい」

「ああもうムカつくなっ！　からかいに来たなら出てってくれよっ！」

と頬を膨らませ、鏡と向き合ってネクタイを結び始めるシュウ。

3分後。

顔を引きつらせながらリュウに振り返る。

「…む…結べない……」

「で？」

「む、結んで」

「結んでください偉大なお父上様、だろ？」

「むっ…、結んでください偉大なお父上様っ！！」

「嫌」

「なっ、何でそういうこと言うんだよおおおおおおおおおおおおおおおお――」

「ああもう、うるせーな」

と、シュウの叫び声を遮り、溜め息を吐いたリュウ。
シュウのネクタイを結んでやる。

「さっさと覚えろってんだバカ」

「ご、ごめん…」

「で、ナイトクルーズでプロポーズしたあとはどうすんの」

「最初に行くレストランって、ホテルのレストランなんだけどさ」

「ふーん。そのホテルに泊まるのか」

「うん」

「スイート？」

「もち！　オレだって超一流ハンターだからな。スイートルームだって余裕～っ♪」

「んなことはどうでもいいが」

「じゃあ訊くなっ！」

「間違っても」と、ネクタイを持っている手に力を入れたリュウ。

「振られてくんじゃねえぞ……！？」

ググググっ…！

とネクタイの結び目を引き上げてシュウの首を絞める。

「グエェェェェェっ…！」

「分かってんだろうな、シュウ…！？　おまえがここで振られたら、俺のリン・ランファザコン計画が失敗に終わっちまうんだからな…！？」

「わっ…、わかっ…分かってるから放してくれっ……！」

「良し」

と、リュウ。

ネクタイの結び目を適正な位置に戻してやった。

髪型をセットしたあと、鏡の前で己の姿を確認するシュウ。

「よし、なかなかだなオレ！」

と満足そうに笑った。

「それは俺と同じ顔のおかげ。そしておまえは喋るとバカ丸出し」

「うっ、うるせーなっ！」

「見た目それだけ決めておいて、忘れて行くんじゃねーぞ」

「忘れて行くわけないだろ、エンゲージリン――」

「ゴム」

「……。ゴムかよ…」

「当たり前だバカ！」と顔を強張らせたリュウ。「おまえが生で楽しんでガキが出来た日にゃあ、俺祖父さんになんじゃねーか！」

「じーさん…」

と呟いたシュウ。

リュウを指差して大爆笑。

「ぎゃはははははははっ！！　そっ、そうかっ！　オレに子供できたら親父、じーちゃんになんのかっ、じーちゃんにっ！！」

「うっ、うるせえ！　んなのまだまだご免だ！　だからちゃんとゴ

ム持っ――」

「じーちゃん!!　親父が、じ・い・ちゃ・ん!!　あーーーっはっはっはっはっはっ!!」

「……」

「じーちゃん、じーちゃん、リュウじーちゃあああああああああんっ!!」

「……」

「ぶあーーーっはっはっはっはっ!!　しっ、死ぬっ!!　助けてっ!!　楽しすぎるうううううううっ!!」

「……」

「こりゃ子供作ってみても――」

シュウははっとして言葉を切った。

リュウの顔が怒りでピクピクと引きつっている。

「てーめえ、シュウゥゥゥゥゥゥゥ……!!」

やっ、やべえっ…!

と顔面蒼白してももう遅い。

リュウの振り上げた拳が、

ゴスっ！！

と頭に振り下ろされ。

シュウは勢い余って、

ズゴォォォォォォン！！

と、床に熱い接吻をかました。

その頃のカレンの部屋の中。

「ん？」

と、戸口に顔を向けたカレンとサラ。

「なんだかずいぶんと元気だねえ、兄貴。親父に殴られたっぽいけど」

「ええ、目を覚ましたようね。良かった…」

と、カレンが安堵の表情を見せた。

サラが微笑む。

「ねえ、カレン？」

「ん？」

「兄貴にプロポーズされるの、嬉し？」

「えっ…？」と、少し頬を染めたカレン。「ええ、とっても嬉しいのですわ」

そう言って微笑んだ。

去年の誕生日にシュウからもらったルビーのネックレスを身に着け、鏡の前に立つ。

淡いピンク色のドレスを身にまとっているカレン。

小柄なその身体に、２段のティアードミニスカートが可愛らしい。

「うぅーん、可愛いねカレン！　アタシが男だったらこの場で押し倒しちゃいそうなほど！」と、後ろからカレンを抱き締めたサラ。

「兄貴、なぁーんてプロポーズするかなあ」

と考えたあと、シュウの口調になって言う。

「カ、カカカカカカカカカカレン、オ、オレと、けけけけけけけけけけけけ結婚してくらしゃいっ……！！」

カレンが笑った。

「緊張しすぎだわ」

「だって兄貴だし。真っ赤な顔した兄貴に、こんな感じでプロポーズされるんじゃない？」

「そうね。そうかもしれないけれど」

「かっこわるー」

「あたくしはどんなプロポーズでも嬉しいのですわ」

「ま、そうだよね。どんなにカッコ悪くても好きな男からのプロポーズだしね」と言ったあと、サラがにやりと笑った。「でもすぐにプロポーズの返事しないで、意地悪に焦らしてみて。1時間くらい」

「まったくもう、サラったら…」カレン、苦笑。「本当、リュウさま似ね」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてるわけじゃないわ」

「マジでー？」

と、サラが笑ったとき。

コンコンコン…

と、ドアをノックする音が聞こえた。

続いて、シュウの声。

「迎えに来たぜ……チビ姫」

「ぷっ」と、サラが吹き出した。「兄貴、去年のダブルデートのときから成長してないの」

「ええ、本当ね…」

とカレンの顔が引きつる。

そのあと、ドアに向かって眉を吊り上げながら声をあげた。

「チビ言わないでちょうだいっ！」

「う、うるせーな。やっぱりレオ兄に倣うのは恥ずかしいんだよっ…！」

「まったくもうっ！　まだまだなのですわっ…！」

と、ドアを開けたカレン。

どきっとした。

（か、かっこいいのですわっ…！）

一方のシュウ。

鼻から流血。

（可愛すぎるぜハニーっ…！）

サラが呆れたように溜め息を吐き、ティッシュを一枚持ってシュウのところへと行く。

「早く鼻に治癒魔法かけろっての…、バカ兄貴」

「バ、バカ言うなっ…！」

と、シュウが鼻に治癒魔法をかけ、サラからティッシュを受け取

って垂れた血を拭いた。

サラが訊く。

「兄貴、初っ端からこんなんで大丈夫なわけ？」

「だ、大丈夫っ…！」

「忘れ物はない？　エンゲージリングは持った？」

「もちろん」

「ゴムは？」

「……。持った」

「良かった。まだ生で楽しまないでよね？　兄貴に子供ができたら、アタシ叔母さんになっちゃうんだからね！？　この年で叔母さんとかって絶対嫌っ！！」

「……。おまえ、本当親父似だね」

「で、まずはどこ行くの？　食事？」

「うん」

「歩いてくの？」

「いや。親父が車で送ってくれるって。もう玄関の外で待ってると思う」

そう言ったあと、咳払いをしたシュウ。
カレンに手を差し出した。

「つーわけで、行こうぜ……オレのチビ姫」

「チっ、チビ言わないでちょうだいって言ってるでしょうっ！」

と口を尖らせたカレン。
頬を染めながら、シュウの手の上にその小さな手を乗せた。

2階の廊下を歩き、1階へと続く緩やかな螺旋階段を下りていく。
サラも見送りとして車に乗ることにした。

玄関を出ると、そこには高級車が待っている。

「おっせーな、さっさと乗れよ」

やたらと偉そうな運転手付きで。

「う、運転手のクセに態度でけーなっ…！」

と呟いて文句を言ったシュウ。
後部座席のドアを開けた。

「ほーら、チビ姫」

「もうっ…！」

カレンが頬を膨らませながら乗ったらドアを閉め。

シュウは反対側のドアから後部座席に、サラは助手席に乗り込んだ。

シュウが運転手――リュウに目的地を言い、車が発進。

シュウとカレンの胸が動悸をあげる。

（オレ、カレンにプロポーズするんだよな）

（あたくし、シュウにプロポーズされるのよね）

ちらりとお互いの顔を見て、すぐに逸らす。

頬が少し熱い。

リュウが言う。

「頼んだぜ、シュウ、カレン。俺の夢はおまえらにかかっている」

サラが言う。

「頼んだよ、兄貴、カレン。（アタシとレオ兄の結婚がかかってるし）」

「？　頼んだって、何をだサラ」

「何でもないよ親父」

２０分後。

車は目的地――葉月町にある高級ホテルの前に到着し。

「ありがと、親父。じゃ、じゃあ行ってくる」

と、車から降りたシュウ。

反対側のドアへと向かい、カレンを降ろす。

カレンをエスコートしながらホテルの中へと入っていくシュウを見つめながら、サラが言った。

「ねえ、親父。兄貴ちょっと緊張してるね」

「だな」

「振られる心配なんてないんだろうけど、何か心配になるよね」

「だな」

「かと言って、レストランまで様子見に行ったら兄貴怒るよね」

「だな」

「見つからないように遠くの席に座れば大丈夫かもなんて一瞬思ったけど、そしたら会話聞こえないよね」

「だな」

「どうしよう？」

と、リュウを見たサラ。

リュウが言う。

「シュウの奴、ここで飯食ったあとナイトクルーズに行くらしいんだが」

「へえ、そこでプロポーズかあ。船だって？」

「いや、ヘリクルージング」

「ヘリ…」

と呟いたサラ。

数秒後、リュウと同時ににやりと笑った。

「さぁて、行こうか親父」

「おう、行こうぜサラ」

次の目的地へと向かって、再び車が発進した。

第１１９話　プロポーズ　～中編～

葉月町のとある高級ホテルのレストラン。
そこの一角にシュウとカレンの姿があった。

プロポーズという大イベントが用意されている今夜のデート。
プロポーズされる側のカレンも緊張しているが、する側のシュウはその倍近く緊張している。

フルコースを堪能しつつ、緊張を解そうとワインをがぶ飲みするシュウ。

（落ち着けオレ、落ち着けオレ、落ち着けオレ）

カレンが苦笑した。

「シュウ…、こういうお上品なお店でそういう飲み方しないでちょうだい」

「ごぶっ」

「汚いわね…」

「ご、ごめんっ…！」

「そんなに緊張されたら、あたくしもさらに緊張しちゃうじゃないっ…」

そんなカレンの言葉を聞いて、シュウははっとする。

（何やってんだ、オレ…！　ハニーの緊張解いてやれよっ…！　しかし、どういう会話で…！？）

シュウはあれやこれやと考える。

（ここはアレか！？　女ったらしの王子のように甘い言葉でか！？）

それを想像したシュウ、赤面。

（恥ずかしいわボケっ！　んなの言えるかってんだっ！　いや、しかし！　乙女な脳内のカレンは甘い言葉で大喜びか…！？　よし、頑張るんだオレっ……！）

覚悟を決めたシュウ。

咳払いをし、

「きっ…、君の瞳に乾杯」

「……」

「トっ、トリハダ立ってんじゃねえっ！！」

と、人目を気にせず声をあげたシュウ。

顔が真っ赤になる。

「ご、ごめんなさい、シュウ。あ、あれよ？　気持ち悪いとか思ったんじゃないのよ？　何だかシュウが言うと違和感っていうか…」

「どっ、どーせ王子みたいにはなれねーよ、オレはっ！　乙女なお

まえが喜ぶと思って言ったのにっ！」

「もっと普通でいいのよ、普通で。あたくしは普段のあなたを好きになったんだから」

「え」なんて、思わず笑みが零れたシュウ。「あ…、そう？　オレも好きだぜハニーっ。ぐふふふふ」

緊張が取れていつも通りになった。
同時にカレンの緊張も取れる。

「まぁーったく、単純なのですわ」

「うるせーよ」

結局逆にカレンに緊張を取ってもらったシュウ。
普通の会話をすることにした。

「なあ、カレン」

「何かしら？」

「今日どのパンツ？　…じゃなくて」と、シュウは周りの目を気にしながら咳払いをする。「今日…ええと…、あっ、そーだそーだ。今日の昼間、親父と武器買いに行ったんだよな？」

「ええ。でも、選んでる途中にリュウさまに電話が掛かって来て…あなたから」

「え？　ああ、死に掛けのオレからな…」

「ええ。それで結局買わずに帰っちゃったわ。でもあたくしの武器は銃になるっぽいのですわ」

「へえ、銃か。また明日買いに行くって？」

「ええ。明日のお昼過ぎにもう一度買いに行くってリュウさまが言ってたわ」

「そっか。んじゃあ、それまでに帰らないとな」

カレンが少し頬を染めて訊く。

「こ、今夜ここのホテルに泊まるのよねっ？」

「おうよ」と自慢げに笑ったシュウ。「ちゃーんとスイートだぜ？」

「まあ、素敵っ！」と輝いたカレンの顔。「早くお部屋に行ってみたいのですわっ♪」

「そーのーまーえーにー」

「あら、どこか行くの？」

「おうっ！」

「どこ？」

「行ってからのお楽しみー」

「えー？」

と、口を尖らせたカレンだったが、

（どこへ連れて行ってもらえるのかしらっ？）

そんなことをわくわくとしながら考えた。

あれやこれやと素敵だと思うところが頭に浮かぶ。

（きっとそこであたくしにプロポーズしてくれるのね、シュウ）

カレンの目が丸くなる。

「まあ…！」

目の前にはヘリコプター。

回っているローターの風に吹き飛ばされないよう、シュウの腕に掴まりながらカレンが声をあげる。

「もしかして、ナイトクルーズっ！？　きゃあああああ！　素敵なのですわあああああああっ！　あたくし、船はあってもヘリのナイトクルーズは初めてよっ！」

「そりゃ良かった」

と、シュウ。

強風と騒音の中、カレンをエスコートしてヘリコプターのキャビ

ンに乗り込んだ。

貸切なので、他に乗客はいない。
よってプロポーズしやすい。

が、１つ誤算だった。
ドアを閉めると騒音はマシになったものの、普通の声のトーンで会話していたらまるで聞こえないだろう。

（こりゃ大声でプロポーズしなきゃだぜ）

そう思うと恥ずかしかったが、恥ずかしがっている場合ではない。
一世一代のプロポーズをするのだから。

やがて流れてきたアナウンス。

「えー、ワタクシ、副機長のモリと申します」

シュウは眉を寄せた。

モリと名乗った副機長の声が、変に高い。
まるで、ヘリウムガスでも吸ったような。

しかも、

プシューーーッ

なんて僅かながらスプレー音も聞こえた。
アナウンスが続く。

「機長はシンイチです。合わせてモリシンイチです」

そのあと、また、

プシューーーッ

とスプレー音。

（この副機長、明らかにヘリウムガス吸ってねえ？　何か怪しいな…）

と不審に思うシュウの傍らで、はしゃいだ様子のカレンは気にしていないようだった。

モリのアナウンスが続く。

「それではレッツゴオォォォォでございまぁーす」

エンジン音が高くなり、ローターの音が増す。

機体がふわりと浮いて、カレンがますますはしゃぐ。

「きゃあっ！　浮いたのですわあああああああっ！」

が、その傍ら。

シュウはますます不審に思う。

（普通、「離陸します」とか言うだろ。「レッツゴオォォォォ」ってておかしいだろ、モリ…）

葉月町の上空へと飛びながら続くモリのアナウンス。

台詞と台詞の間には必ず、

プシューーーッ

とスプレー音。

「えぇーと、たぶん只今高度３００ｍ…」

プシューーーッ

「じゃなかった。高度４００ｍでございまぁーす」

プシューーーッ

「おおーっ、すっごい夜景キレーっ！」

「……」

引きつったシュウの顔。

（待てモリ。おまえすーげー怪しいぞ…）

一方、輝いているカレンの顔。

「きゃあああああっ！　すごいっ、すごいのですわあああああああっ！　葉月町の夜景って、上から見下ろすとこんなにすごかったのねっ！　ねえ、シュウ！？　ちゃんと見てるっ！？」

「お、おう、見てる見てるっ！」

「あんもう綺麗なのですわあああああああああああああっ！！」

「…か、可愛いなオレのハニー」

とシュウの顔がにやけたとき。

プシューーーッ

とスプレー音のあとに、再びモリのアナウンス。

「ではでは、ラブラブなお客様のために」

プシューーーッ

「ここでいっちょ、ムードたっぷりな曲をプレゼント！」

プシューーーッ

「副機長・モリの自慢の美声をお聴きくださぁ～い♪」

再び寄るシュウの眉。

（そんなサービス頼んだ覚えはねーぞ、モリ…）

騒音の中、僅かに聞こえてくる某演歌の曲。

「ちょ、渋すぎるわっ！」

とシュウが突っ込んだ直後、

プシューーーッ

とスプレー音。

そしてアナウンスから聞こえてくるモリの歌声。

「おふくろさんよ、おふくろさんっ♪」

プシューーーッ

「空を～見上～げりゃあぁぁ、空にあるうぅぅぅ～♪」

プシューーーッ

「雨～が降る日はあぁ、傘～にぃなりぃぃぃ～♪」

プシューーーッ

「おまえもぉ、いつかはあぁ、世の～中のおぉぉ～♪」

プシューーーッ

「傘になれよとおぉ、教えて～くれたあぁ――」

「もういいわっ！！」

と、大声で突っ込んだシュウ。

プシューーーッ

「ではワタクシの美声、終了にしたいと思いまぁ～す」

「モリさん、アンタしばらく黙っててくれねえっすかね……！？」

「了解でぇす」

と、モリが黙ったあと。

シュウは３０秒ほど口を閉ざした。

その間に深呼吸をする。

（よし、プロポーズ行けオレ！）

シュウの手がカレンの手に重なる。

夜景に見惚れていたカレンがシュウの方に振り返った。

「な…、何かしら、シュウっ……？」

葉月町のネオンで割と明るくなっているキャビン。

揺れているカレンの赤茶色の瞳や、少し染まった頬が良く見えた。

「あ…、あのさ、カレン」

「えっ？」

と、シュウに耳を近づけるカレン。

騒音に邪魔されてよく聞こえていないようだった。

（や、やっぱり大声で言わなきゃ聞こえないよなっ…）

操縦席の方が気になってしまうシュウ。

（大声で言ったらさすがに操縦席まで聞こえちまうだろうか…。って、恥ずかしがってる場合じゃないよな。一世一代のプロポーズなんだっ…！）

覚悟を決め。

ポケットの中からエンゲージリングを取り出し。

大きく息を吸い込み。

思い切って絶叫した。

「オっ、オレ、おまえのこと絶対一生守ってみせるから、けっ、けけけけけけけけけけ結婚してくれえぇぇぇえええぇぇぇえええぇぇぇえええぇぇぇえええっ！！！」

ぼっと顔が熱くなったカレン。

同時に、目頭も熱くなった。

聴力は人間並のシュウに聞こえるよう、声を大きくして返事をする。

「あたくしで…、よろしければっ……！」

微笑んだ際に、一粒の涙がカレンの頬を伝った。

喜びに顔を輝かせたシュウ。

カレンの左手を取った。

その薬指に、今『永遠の絆』を意味する宝石のついたエンゲージリングを――、

「おめでとぉぉおおぉぉおおぉぉおおぉぉおおぉぉおおっ！！」

ズドーーーンっ！！

はめられずに落とした。

「なっ……！？」

アナウンスからの大きな声と、まるで爆発でもしたんじゃないかという音。

それらに驚くと同時に、顔面に何かが命中したシュウ。

何が起こったのか、目を白黒とさせて確認してみる。

顔面に当たったのはキラキラとしたいくつもの紙テープ。

その紙テープを放ったのはバズーカ型のクラッカー。

そしてそのバズーカ型のクラッカーを持っているのは、

「ハァイ♪　副機長のモリでぇす♪」

サラだった。

「――！！？」

シュウとカレン、驚愕。

操縦席から顔を覗かせてキャビンにいるシュウとカレンの驚いた

顔を見つめ、サラがけらけらと笑う。

「おっどろいたぁ～？」

「あっ、あっ、あっ、当たり前だっ！！」声をあげるシュウ。「何でおまえがいるんだよっ！？　って、ことはもしかして……！？」

と、キャビンから身を乗り出して操縦席を覗いた。

副機長席にはサラ。

その周りにはヘリウムガスの缶がごろごろと。

そして機長席には、

「いよう、シンイチだ」

リュウがいた。

「おっ、親父っ！？　なっ、なんでいるんだよ！？」

「だって俺ヘリ操縦できるし」

「んなことは知ってら！！　オレが訊いてるのはそうじゃなくて――」

「ああ、ついにおまえらの婚約成立…！」と、にやりと笑ったリュウ。「これでリン・ランはファザコンに……！」

「おい――」

「ふっふっふ。『兄上なんか嫌い！』、そして『父上大好きっ♪』。ふっふっふ、『父上大好きっ♪』、『父上大好きっ♪』、『父上大好きっ♪』…！　ふっふっふっふっふっ……！」

「…お…親父っ……？」

どうやら歓喜のあまり狂い始めたらしいリュウ。

「ああ、もう駄目だ…、堪え切れん……！」と身体を震わせ、「サラ、外を見ながら耳を塞げ！」

そう言った直後、

「ぶあーーーっはっはっは

「なんだシュウ!?　リン・ラン取られて悔しいか!?」

「い、いや、あのさ…」

「ざまーみやがれってんだバーカ!」

「マジこえーから落ち着いて…」

「あーーっはっはっはっはっはっ!!」

「……」

「ゆ、愉快すぎて止まんねえぇ!!　ぶあーーっはっはっはっはっはーー」

バキっ!

「はっはっはーーって、今変な音がしなかったか?」と、音と振動を感じた己の手元に目を落としたリュウ。「…あ、やべ。興奮のあまり折っちまった」

「は?」

と、リュウの手元を覗き込んだシュウとカレン、サラ。

「ーーー!!?」

驚愕。

折れている。

ヘリのことなんてさっぱり分からないが、折れている。
何となく操縦に必要だろうと思われる部分が、リュウの怪力によって折られている。

証拠に、安定して飛んでいた機体が変な飛び方を始めた。

「わっ、わあああああああああああああっ！！」

と狼狽して叫ぶシュウとカレン、サラ。

「落ち着け、おまえたち。サラ、そっちで操縦するから――」

俺と席変われ。

と言おうとしたリュウの言葉を、サラが遮る。

「なっ、何やってんのさ親父いいいいいいいいいっ！！」

と副機長席で操縦を試みたサラ。
当然、操縦などできるわけがなく。

機体は縦に揺れ、横に揺れ、ぐるんぐるんと旋回し。
結構なスピードでデンジャラスに落ちて行き。

おまけに突風で機体は大きく横に飛ばされ。

「わっ、わあああああああああああああ

唯一冷静なリュウが言う。

「幸い海に落ちるな」

「あわわわっ！　もうダメだ、逃げないとおぉぉっ！」

とサラがキャビンへ飛び込み、カレンをしっかりと抱っこ。

続いてリュウがサラとカレンをまとめて抱っこし、

「よし、逃げるか」

と言いながらドアを開けたら。

「んじゃ」と、シュウに振り返り、「グッドラック」

「――！！？」シュウ、驚愕。「ちょっ、ちょっと待てえぇぇぇえええぇぇぇぇぇえええっ！！」

と、叫んだところで、この状況の中リュウが待ってくれるわけもなく。

砂浜に着地するだろうところでリュウが機内から飛び降り、シュウの前から姿を消して行った。

その直後。

機体はますます飛ばされ。

回転しまくり。

「わあああああああああああっ！？　ゆっ、指輪っ！　指輪どこだ

ああぁぁぁぁあああぁぁぁあっ！？　あっ、あった！」

シュウが大切なエンゲージリングを見つけた瞬間、

「よし、逃げ――」

バッシャアァァアアァァァンっ！！

海に墜落したのだった。

第１１９話　プロポーズ　～中編～（後書き）

昨日の２１時１０分ごろメールくださった読者さまへ。
前作ＮＹＡＮＫＯを初投稿したときのアクセス数…ですか。
ＮＹＡＮＫＯ第一話を投稿した日のユニークアクセスですよね？
えーと…、３６人です。それまで自分の小説を周りの１人か２人にしか読んでもらってなかったので、とても感動した記憶がございますね。

昨日の２２時４６分ごろメールくださった読者さまへ。
脱字報告ありがとです＞＜
それから、もちろんヘリの物凄い騒音について忘れているわけじゃございませんよｗ
むしろ、この絶叫しなきゃ声が聞こえないほどの騒音は、シュウに海にドボンしてもらうための大事なポイントでございますｗ
あと本文には出てきてませんが、当然耳栓してますｗ

ご実家でごゆっくりゞ（＊´∀`＊）ノ゛

第１２０話　プロポーズ　～後編～

葉月町のとある高級ホテルのスイートルームのバスルームにて。
大きな円状のバスタブの中、只今ご機嫌斜めのシュウ。

２時間ほど前、乗っていたヘリコプターごと海に落ちた。
というか、落とされたようなものだ。

「あー、死ぬかと思った。まったく親父の奴、オレも一緒に連れて逃げろってんだ。昼間も死に掛けたし、今日のオレは厄日かよっ…」

「リュウさまはきっと、シュウなら助けなくても大丈夫だと思ったのよ」と、向かいにいるカレン。「あなた、もうそんなに弱くないでしょう？」

「…そ、そうか、それで親父っ……。…オレももう、親父に助けてもらおうなんて考えは持たないようにしないとな」

シュウはじっとカレンを見つめる。

（かぁ～～わいい嫁もらうんだし）

カレンが首をかしげた。

「何かしら？」

「…あとでもう１回、ちゃんとプロポーズしてもいい？」

「えっ？」

と、カレンの頬が染まる。

まだカレンの左手の薬指にエンゲージリングがはまっていなかった。

はめる前に、落としてしまったから。

「ヘリが墜落したあと、それだけは無くさないように持って帰ってきたんだ。さっきのプロポーズは何だかずいぶんと邪魔されちまったけど…。あとでもう1回ちゃんとプロポーズするから、受け取ってくれるか？　エンゲージリング…」

シュウを見つめるカレンの瞳が揺れる。

少しの間のあと、カレンが微笑んだ。

「早くはめてほしいのですわ」

「じゃあ――」

「ちょ、ちょっと待った！！」

と声をハモらせながら浴室に飛び込んできたのは、リュウとサラである。

シュウがぎょっとしてカレンを背に隠す。

「はっ、入ってくんじゃねーよっ！！　てか、まだ帰ってなかったのかよっ！？」

「きゃっ、きゃあああああっ！　リュウさま覗かないでくださあ

あぁぁあああぁぁあいっ！」

と、カレンがぶん投げたシャンプーの容器を、リュウが片手で受け止めながら言う。

「待て、おまえたち！　まだハメるな！」

と、ポケットから財布を取り出す。

サラも財布を取り出しながら言う。

「大事なもん忘れてるよ兄貴、カレンっ！」

「は…？」

と首をかしげるシュウとカレン。

リュウとサラが己の財布をごそごそとあさって取り出したものは。

「ほら、ゴム」

「へ…？　な、何で今……？」

とますます首をかしげるカレンの傍ら、シュウの顔が引きつった。

「はっ…、はめるの意味間違ってんじゃねえっ！！」

「は？」

と眉を寄せるリュウとサラ。

「指輪だよ、指輪っ！！　カレンは婚約指輪をはめてほしいって言ったんだよっ！！」

「指輪……」

と呟いたリュウとサラ。

数秒後、ようやく理解した。

「何だよ、指輪かよ。俺、祖父さんになる危機かと思ったじゃねーか。ああ、驚いた…」

「指輪ね、指輪。アタシ叔母さんになるのかと思ったじゃん。ああ、焦った…」

「え、ええとぉ…」と、苦笑するカレン。「ご、ごめんなさ…い……？」

「謝る必要ねえよ、カレン。ったく…」と、溜め息を吐くシュウ。

「この父娘、どんな頭してんだか……」

呆れ顔になってしまう。

リュウがバスルームから出て行きながら言う。

「んじゃ俺たち帰るわ。さっきおまえたちにイイモノ買って来たから今夜使えよー」

続いてサラがリュウの後を追いながら言う。

「ヘリウムガス買うついでに買って来たんだよね、可愛いやつ。おススメだよー。じゃね」

とリュウとサラが帰って行ったあと。

シュウとカレンは顔を見合わせて首をかしげた。

「イイモノ……？」

入浴後のリビングルーム。

用意されていたバスローブを身につけているシュウとカレンは、向かい合って座っていた。

顔を傾けると、夜の葉月町を彩るネオンが見える。

（ヘリクルージングの意味なかったくらい綺麗だな、オイ。最初からここでプロポーズで良かったんじゃねーの、オレ…）

とサービスのシャンパンを飲みながら苦笑してしまうシュウ。

右手にはカレンへのエンゲージリングが握られていた。

そこへカレンの手がグラスに伸びてきて声をあげる。

「あっ！　コラ未成年っ！」

ぺちんと手を叩かれ、カレンが口を尖らせた。

「シュウだって未成年なのですわっ」

「ハーフの飲酒は１２歳から、人間の飲酒は２０歳から！　おまえはおとなしくジュースを飲んでなサイ」

「いいじゃない、ちょっとくらいっ！　それじゃあたくしが子供みたいなのですわっ！」

「子供じゃねーか。大体、ビール一口でぶっ倒れるやつが……」

「うっ、うるさいのですわっ！」

と、再びシャンパンの入ったグラスに手を伸ばすカレン。
その手に届かぬよう、シュウがグラスを持ち上げて言う。

「ああもう、ダメだって言ってんだろうがっ！　師匠の言うことを聞けっ！」

「あたくし、もうあなたの弟子じゃないものっ！」

「う…、そうだった…。じゃ、じゃあ」と、咳払いをするシュウ。
「か…、彼氏……い、いや、夫の言うことを聞きなサイ」

と言ってみたら頬が染まった。

「…な…なに…何を言っているのかしらっ…！」と言ったカレンの頬も染まる。「あたくし、まだエンゲージリング受け取ってなくってよっ……」

「お、おうっ……」

流れる数秒の沈黙。

シュウが口を切る。

「…手、出して」

緊張してぎこちなく頷いたカレン。

左手をそっとテーブルの真ん中あたりまで伸ばす。

「もう一度言うけどさ」

と、シュウがカレンの左手を取った。

シュウの右手の人差し指と親指に持たれているエンゲージリング。

温かい色をしたリビングのライトに照らされ、ダイヤモンドがきらきらと輝いている。

「オレ、おまえのこと絶対一生守ってみせるから…。そ、その…、えと…、だからさっ……？　オ、オレのこと夫にしてくれねえっ？」

カレンが吹き出した。

「何かしら、そのプロポーズ」

「わ、笑うなよ」

「まったくもう、仕方ないわね」と、微笑むカレン。「あなたのお嫁さんになってあげるのですわ」

「あざーすっ！」

と笑ったシュウ。

カレンの左手の薬指に、今度こそエンゲージリングをはめた。

己の左手の薬指で輝いている、永遠の絆を意味する石――ダイヤモンド。

それを見つめて微笑むカレンの赤茶色の瞳が揺れる。

「すごい…、とても綺麗なのですわ。あたくしが持っているダイヤモンドの中でも、一際輝いて見えるのですわ」

「もっちろん！　頑張って最高品質のものを選んだからな」

「あたくしの持っているダイヤモンドもほぼそうだけれど」

「ですよねそうですよねお嬢様ですもんねエエ分かってますハイ…」

シュウ、苦笑しながらシャンパンがぶ飲み。

カレンが続ける。

「たとえこれが品質の悪いものでも、きっとあたくしには一番輝いて見えたのですわ。……あなたからもらったものだから」

「――マ、ママママママ、マジンガーゼッツ（訳：マジで）！？」

胸がきゅんとなったシュウ。

シャンパングラスを置き、着ていたバスローブの紐をほどいた。

「マ、ママ、マイ・ワイフよ！　ベッドルームにレッツゴオォォォ、オッケエエエエエエイっ！？」

「えっ？　えとっ…、オ…、オッケー…ですのよっ……！」

「リ、リ、リ、リ・ア、リィィィィィィィィィ！？」

と立ち上がったシュウ。
バスローブを脱ぎ捨て、向かいのカレンに両手を伸ばして抱っこ。

リビングからベッドルームへと向かっていく。

カレンの唇を奪いつつ、カレンのバスローブの紐をほどき。
カレンのバスローブを剥ぎ取り。
下着もポイっと投げ捨て。

「フィーバァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！！」

と、絶叫しながらベッドに豪快にダ～～～～～～イブ！

……しようと思ったのだが、

「うっわぁ！？」

ベッドの上に何かが置いてあることに気付いて、ダイブする寸前で急停止。
勢い余ってよろけ、ベッドの淵に腰掛ける。

シュウの膝の上に跨っている状態のカレンが、ベッドの上に置い

てあるものを見てぱちぱちと瞬きをした。

「な、何かしら？　ビニール袋ね」

「ああ、もしかして」と、シュウが続く。「これが、親父とサラの言ってたイイモノ」

と、そのビニール袋を手に取ったシュウ。

ビニール袋を逆さまにして中身をベッドの上にぶちまけ、眉を寄せる。

「は……？」

「まあ」と声を高くしたカレン。「何かしらコレ、手錠とアイマスクっ？」

「なっ、なっ、なっ…！」と、顔が引きつるシュウ。「何考えてんだ親父とサラのやつっ！！　これじゃソフトＳＭじゃ――」

「可愛いのですわっ」

「って、喜んでんのかよおまえ！？」

「だって見て見て、シュウっ？」と、手錠とアイマスクを手に持つカレン。「手錠にも、アイマスクの淵にもピンクのファーが付いているのだものっ♪　ふわふわで可愛いのですわっ♪」

「…じゃ…じゃあ何だよおまえ……！？」と、赤面するシュウ。「おまえ目隠しされて手錠かけられたいのかっ！？」

「え…えええっ……？」と、シュウに続いて赤面したカレン。「そっ、そういうわけじゃっ…！　で、でも…、こんなに可愛かったら嫌じゃないっていうかっ…そのっ……」

「え…えぇぇえええぇぇえぇぇえぇっ！？」シュウ、驚愕。「い、いいいいいい、嫌じゃねえのっ……！？」

「そ、そ、そのっ、えとっ……、あ、あなたはしてみたいのかしらっ？　そういうことっ……」

「そっ、そんな親父じゃあるまいしっ！」

とか言いながら、カレンに手錠をかけ目隠しさせたところを想像したシュウ。

（……ちょ、ちょっとしてみたい…カモ……）

それが本音である。

シュウの顔を見つめているカレンが言う。

「…してみたいって顔してるわよ」

「えっ！？　いっ、いやいやいやいやっ！　オレそんなこと――」

「思っているのでしょう？」

「えっ！？　…ええとっ、そのっ……！」

と口ごもったシュウ。

（ダメだ、すっかり心の内を読まれてる…）

数秒後、カレンから顔を逸らして呟いた。

「…ちょ…ちょっとだけ……」

そんな言葉を聞いたカレンが、

「分かったのですわ」

そう言って自らアイマスクを装着した。

そのあと両手を背へと持っていく。

「シュウ」

「えっ！？」

「手錠」

「いっ、いいいいいいいいいいのっ！？」

「嫌じゃないのですわ。そりゃっ…、ちょっと戸惑いはあるけれどっ…！　あたくしは、もうすぐあなたの妻になるのだもの。できることならば何だってしたいのですわ」

「えっ！？」

「不思議ね。あなたが旦那さまになると思うだけで、今まで以上に愛しく感じるのはどうしてかしら…」と、カレンが微笑みながら頬

を染めた。「……ほら、シュウ？　早く手錠。……かけたいなら早くして」

「……」

シュウ、鼻から流血。

（なんかオレ、すーげー幸せ者じゃね？）

カレンが上半身を少し倒して、頬をシュウの肩に埋める。

「これなら背中、見えるでしょ？」

「う、う、う、うんっ…」

シュウが目を落とすと、そこにはカレンの小さな背。

腰の辺りに握られた両手がある。

「し、ししししししし失礼しやすっ、お嬢さんっ…！」

と、カレンの両手に手錠をかけたシュウ。

ぽたりと鼻血がカレンの背に垂れ、カレンの肩がびくっと小さく震えた。

「きゃっ…！　なっ、何っ！？」

「ご、ごめん、オレの鼻血…」

「び、びっくりしたのですわっ…！」

「ご、ごめんっ。でもそんなに驚かなくても…」

「だ、だって、何も見えな――きゃっ！」

「な、なんだよ？　肩に触れただけじゃねーかっ…！」

「だっ、だってぇっ…！」

なんて、どぎまぎしている2人を見つめている2組の瞳。

鋭く黒々とした瞳と、黄金の瞳。

その正体は、

「目隠しすると反応いいよな、女って」

「何も見えないとドキドキのビクビクで敏感になるからね。手錠なんてかけられたら、なお更」

帰ったフリして帰っていなかったリュウとサラである。

ベッドルームの隅からシュウとカレンを覗き見しつつ、超・小声で話している。

「あっ、見て見て親父っ！　兄貴が溜まらずカレン押し倒したよっ！」

「カレンまじで乳ねーなあ。シュウが頑張って育てても挟めねえだろうなあ」

「カレンと初めてエッチしたとき、カレンに治癒魔法かけまくって

たっていうの聞いたときも思ったけど、兄貴って優しいんだなあ…。常にカレンのこと気にしてるっていうか」

「もう少し強引に行けよ、アイツ。こうカレンが泣き声あげるような」

「もう少しって、少しじゃないじゃんソレ。にしても、いつ見ても兄貴の股間はえげつな…」

「俺のがでけーよ？」

「あんま自慢になんないわ、ソレ。女からすればキツイっての…」

「俺の可愛い黒猫（キラ）は日々喜んでいる」

「ハイハイ。…って、あれ？　兄貴もう後半行くんだ。カレンにあんな可愛い声出されちゃ溜まんないってかぁー？」

「よしよし、ゴムつけたな」

「そして後半」

「レッツゴォォォだぜ」

「おー」

「おー」

「行った行った」

「ハメてるハメてる」

「痛そー」

「良さそー」

「あー、でも兄貴やっぱ優しいや」

「あー、やっぱりカレンの乳揺れねえや」

と、シュウとカレンのイトナミを凝視しているリュウとサラ。

1回戦が終わったあと、顔を引っ込めた。

「んじゃ、帰ろっか親父」

「おう。俺もそろそろハメる時間だぜ」

とリュウがサラの肩を抱き、物音を立てずに部屋を後にする。

エレベーターでホテルの1階へと降りていきながら、サラはリュウの顔を見上げた。

機嫌が良さそうだ。

その一番の理由は、シュウの結婚が決まったことだろう。

「…ねえ、親父?」

「ん」

「リン・ランに、兄貴とカレンの結婚のこといつ言うの?」

「そうだな、帰ってすぐにでも言いたいんだが…。一週間後の三つ子の誕生日に皆集まるから、そのときに話すか」

「そう」

と、顔を戻したサラ。

（この機嫌の良さのままなら、アタシとレオ兄の結婚も許してくれるかも……だよね？）

リュウがサラの顔を覗き込む。

「それがどうかしたのか、サラ」

「ううん、聞いてみただけ」

「そうか」

「うん」

と頷いたサラ。

数秒後、再び口を開いた。

「ねえ、親父？」

「ん」

「何があってもアタシは親父の娘には変わりなくて、アタシはちゃーんと親父のこと好きだからね？」

「――」

リュウの目が丸くなる。

「何？　親父」

「いや…」と、リュウがサラに横顔を見せる。「ほんの1年前までは、おまえからそんな言葉を聞けるとは思わなかったからな」

そう言って、微笑んだリュウ。

一瞬首をかしげたサラだったが、すぐに分かった。

（そっか、そうだよね…。アタシが親父と仲良くなったのなんて、ほんの1年前からだ。アタシは小さい頃から親父に甘えるのがヘタクソで、お姉ちゃんや妹たちが親父に甘えるのをずっと遠くから眺めてたっけ……）

片手を伸ばしてリュウの腰を抱き、サラは笑って言う。

「だーい好きだよ、親父っ！」

「お…おおおっ」と輝いたリュウの瞳。「ちともう1回」

「大好きだよ、親父」

エレベーターが1階に付き、ホテルの出入り口へと向かうリュウとサラ。

「もう１回」
「大好きだよ、親父」
「もう１回」
「大好きだよ」
「もう１回」
「大好き」
「もう１回」
「大好き…」
「もう１回」
「大好きだって…」
「もう１回」
「大好きだってば、もう……」
「もう１回」

サラは溜め息を吐いた。
ホテルから出て、声を大きくして言う。

「大好きだってば、親父っ！　次女・サラは親父のことが大好きで

すっ！　大・大・大・大好きですっ！！」

だから、

（アタシとレオ兄の結婚を許して……くれるよね？）

第１２１話　婚約発表

シュウがカレンにプロポーズをしたのは一週間前のこと。
本日は三つ子――五女・ユナ、六女・マナ、七女・レナの誕生日パーティー。

いつも通りのメンバー――シュウとその家族、カレン、リンク一家、レオン、グレル、ミヅキが、シュウ宅のリビングに集まって食っちゃ飲みしている。

リビングの入り口から向かって左側のソファーの足元。
リン・ランがシュウを挟んで座っている。

「ビールどうぞなのだ兄上っ♪」

「から揚げもっと食べるか？　兄上っ♪」

「お、おう…、サンキュ、リン・ラン」

と２匹に笑顔を向けつつ、心の中では緊張しているシュウ。

（今日皆にオレとカレンが結婚することを言うわけだけど…。そのときリン・ランは……）

ガラステーブルを挟んだ向かいに座っているカレンをちらりと見る。
同様に、リン・ランを気にしながら少し緊張した様子だった。

（それにしても…、えらい寒気がするぜ）

と、身震いしたシュウ。
背後のソファーに恐る恐る顔を向けてみる。
そこには、
「い～～～ご身分じゃねーか、シュウ。かっわいい妹に酌させてよ…！？」
殺気ムンムン、お色気ムンムン（謎）のリュウがいた。
「お、落ち着け親父…」
「ま、おまえがそうやってリン・ランにいちゃいちゃされるのも今のうちだけどな」
「ん？」と、リュウに振り返ったリンとラン。「どういうことですかなのだ？　父上？」
「そういうことだ、リン・ラン」
とリン・ランの頭を撫でるリュウ。
シュウを見、カレンを見て言う。
「そろそろ切り出せ」
「お、おうっ…」
と、承諾して頷いたシュウ。

「は、はいっ…」

と、シュウに続いて頷いたカレン。

緊張が増し、正座している膝の上でぎゅっと拳を握った。

カレンの左隣にはサラ、右隣にはミラが座っている。

ミラがカレンの手元に目を落とし、声を高くした。

「えっ？　…あっ……えっ？　…ああっ、そういうことなのカレンちゃんとお兄ちゃんっ！」

「そそ」と、笑いながらサラ。「そういうことなんだよね」

「うん、そういうこと」

と、サラの左隣に座っているレオン。

シュウとカレンの結婚のことを知っているのは、リュウとサラ。

それからリュウから聞かされたキラとリンク、キラから聞かされたミーナ。

サラから聞かされたレオン、シュウから聞かされたミヅキ。

まだ知らないのは、たった今気付いたミラを含めた9人――ミラと双子、三つ子、ジュリ、リーナ、グレルである。

リュウがシュウの背を軽く蹴って言う。

「早く言えよ」

「お、おうっ…！　で、では発表しますっ！」

と、咳払いをしたシュウ。
左からはリンの、右からのランの視線を浴びながら深呼吸をした。
そして、
「オ、オレとカレン、結婚することになったからっ…！」
と思い切って婚約発表。
一番最初に声を上げて拍手をしたのはサラ。
「お・め・で・とおぉぉぉぉぉぉぉぉっ！　あー、めでたい、めでたいっ！」
次にレオン。
「おめでとう、シュウ、カレンちゃん！」
続いてキラ、リンク、ミーナ、ミヅキ。
「おめでとう、シュウ、カレン！　私は嬉しいぞ！」
「せやなあ、嬉しいわあ。今年で18と17の結婚なんて早い気もするけど、まぁシュウとカレンちゃんなら大丈夫やろ」
「うむっ！　キラに孫ができるとは嬉しいぞっ！」
「いやいや、まだカレンちゃんは妊娠してないですよミーナさん。シュウ、カレンちゃんのこと大切にしなよ？」

「おうっ！」

と、シュウが頷いたあと。

突然のことに驚いていた一同が声をあげる。

「どわあぁぁぁあ！？」と最初に声を上げたのはリーナ。「結婚するんのかいな、シュウくんとカレンちゃんっ！　そんなにラブラブやったんかっ！」

「うっわあぁぁぁあああぁぁぁぁ！」続いて、驚きのあまり引っくり返りそうになるレナ。「兄ちゃんとカレンちゃん、ついに結婚するの！？　うっそ、まじで！？」

「おめでとおぉぉおおおぉっ！」と、大きく拍手をしながらユナ。「あたしも嬉しいよぉ～っ！」

続いて、小さく拍手をするマナ。

「そう、兄ちゃんとカレンちゃんが結婚…。おめでとう…」

「マナはオレと結婚だぞーっと♪」

と言ったグレルと、リュウが口喧嘩を始め。

ジュリも拍手をしながら声を上げ。

「あにうえ、カレンちゃん、けっこんおめでとうございますっ！」

「おめでとう、お兄ちゃん！　カレンちゃん！」と、ミラが頬を染める。「あんもうっ、ウェディングドレス羨ましいわっ！　幸せになってね、２人ともっ！」

最後に視線が集まるのは、まだ無言でいるリンとラン。

シュウの横顔を見。

カレンを見。

またシュウを横顔を見て、呆然とする。

「…け…けっこん……？」

リン・ランの視線を痛いほど感じながら、シュウは頷く。

「…あ、ああ。オレ、カレンと結婚するから」

「…ち…血の痕っ……？」

「血痕って、それ意味分かんねーから。結婚だよ、結婚…。オレとカレン、夫婦になるんだよ」

「…ふ…夫婦……？」と呟くように言いながら、リン・ランの黄金の瞳が揺れ動く。「カ、カレンちゃん、左手見せてなのだ」

「え…、えええっ……」

と、恐る恐るエンゲージリングをはめた左手をあげたカレン。

リン・ランが凝視する。

カレンの指にたしかに輝いている、エンゲージリングを。

カレンが慌てたように声をあげる。

「で、でもあれよっ？　リンちゃん、ランちゃんっ…！　夫婦になるって言ったって、今までとあんまり変わりないわけだしっ……！」

「そそ」とサラが続く。「今までとなーんにも変わらないよ、リン・ラン。兄貴があんたたちの前からいなくなるわけじゃないし、兄貴があんたたちのことを忘れるわけじゃない。だから――」

「ふにゃっ」

と、サラの言葉を遮ったリン・ラン。

次の瞬間、リビング内に泣き声が響き渡る。

「ふにゃあああぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁあんっ！！」

誰もが予想したかもしれないこの反応。

シュウは半ば絞め殺される勢いでリン・ランから抱きつかれる。

「嫌なのだあっ！！」

「兄上はわたしたちのものなのだあっ！！」

「絶対嫌なのだあっ！！」

「兄上の結婚なんて認めないのだあっ！！」

ここで1人にやりと笑ったリュウ。

（さぁーて、リン・ランのファザコン計画開始だぜ）

グレルとの口喧嘩をぴたりと止め、シュウにしがみ付いているリン・ランに目を落とした。

「ほら…、リン・ラン」とリン・ランの頭を撫でるリュウ。「あんまり兄上を困らせるな」

（って、本当は『父上を困らせるな』のクセに）

と、シュウは呆れながら心の中で突っ込む。

リン・ランが声をあげる。

「父上っ！　父上も兄上を止めてくださいなのだっ！　早まるなと！」

（って、それじゃオレが自殺でもするみてーじゃねーか…）

と、リン・ランにも突っ込んでしまうシュウ。

「いや、父上はシュウの結婚を認める。シュウの幸せのために」

（いやいやいや！　全部自分の幸せのためじゃねーかアンタっ！）

「わたしたちの幸せはどうなるのですかなのだ！　小さい頃、兄上と結婚の約束したのにっ！」

（あ、あれ？　そ、そうだっけ…？）

「いいか、覚えておけリン・ラン。シュウを信じれば裏切られるんだ」

（ちょっ…！？　おっ、親父、てめっ……！！）

「兄上はわたしたちのこと裏切りませんなのだっ！　だから結婚しませんなのだっ！」

（えーと、その…ゴニョゴニョ……）

「いや、シュウはおまえたちを裏切って結婚する。そういう奴だ。散々弄ばれた挙句に捨てられたおまえたち、可哀相にな。父上が慰めてやろう」

（あぁあぁあぁ…！　オレが親父より強かったら、強かったらぁあぁぁあぁあぁあ……！！）

「ふっ…ふにゃっ…ふにゃっ…ふにゃあああぁぁあああぁぁぁあんっ！！　兄上のブワァァァァァカァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

と、大声で泣き喚き、リビングから自分たちの部屋へと向かって走って行ったリン・ラン。

リュウが「ちっ」と舌打ちをした。

「もう少しだったんだがな」

「おぉぉやぁぁじぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ……！？」

と顔を引きつらせ、リュウに顔を近づけるシュウ。

「何だよ、シュウ。俺おまえとキスしたくねえ」

「あっ、当たり前だ気持ち悪いっ！！」

「じゃあ寄ってくんなよ」

「オっ、オレが言いたいのは、あることないこと好き勝手言ってんじゃねえってことだよっ！　腹立つなっ！！」

「ハァ？」と、呆れたように溜め息を吐いたリュウ。「俺の幸せのためじゃねーか。それくらい我慢しろ」

「……」

ブチっ

ときたシュウ。

「なっ、殴り飛ばしてやらぁぁぁあああぁぁぁ

と蹴られて吹っ飛ばされ、

メキメキメキっ……！！

と、倒れているところに絞め技を食らい。

当然のごとくボロボロにやられ。

「ギ、ギブっ…！　ギブゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！！」

リビングの床をばんばんと叩いて降参。

「悔しかったらさっさと俺を超えること、だな」

と言って鼻で笑ったリュウ。

シュウの胴体を踏ん付け、リビングから出て行った。

「さぁーて、計画の続きっと」

とにやけながら。

2階へと向かっていくリュウのうきうきとした足音を聞きながら、キラが溜め息を吐いた。

「そう簡単にいくものか…」

「あの調子だと、上手くいくんじゃないっ？」と、わくわくとした様子のサラ。「上手くいくよね、きっと！　リン・ランファザコン化成功で親父の機嫌の良さはさらにアップ！　そしてぇー……」

と、レオンに抱きついてにやけた。

（アタシとレオ兄の結婚にも許可が降りるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！）

サラの頭を撫でながら、レオンが苦笑する。

「上手くいく……かなぁ？」

「いくいくっ！　親父のリン・ランファザコン化計画成功に１万ゴールド！」

「って、賭けるの？　じゃあ僕も上手く行ってほしいから、成功に１万ゴールド」

とキラを見たレオン。

キラがもう一度溜め息を吐いて言った。

「失敗に１００万ゴールド」

第１２２話　『父上大好きっ♪』と言ってくれ

シュウとカレンが婚約発表をしたのは昨日のこと。

山の中、レオンの助手ハンターとして働いているサラ。

凶悪モンスター退治をするレオンの傍らで、

「へイへイへイへ～～～イ♪」

ＭＰ３プレーヤーで音楽を聴きながら、槍を持って戦って――いや、舞っていた。

「こら、サラ…」

「へイへイへイへ～～～イ♪」

「踊ってないで…」

「へイへイへイへ～～～イ♪」

「真面目に戦か――」

「へイへイへイへ～～～イ♪　いよっ！　サラちゃん槍舞小町ぃぃぃぃぃっ♪」

「ああもうっ！！」

ピシっ！

と、レオンのデコピンを食らい、サラが額を擦る。

「あイタ」

サラの耳からイヤホンを抜き、レオンが続ける。

「僕はそんな戦い方教えた覚えはない！　槍舞じゃなくて槍術で戦いなさい！」

「はぁい」

と手をあげたサラ。

レオンにやられて瀕死になっている凶悪モンスターにトドメを刺す。

「とりゃあぁぁあぁぁっ！　いよっ、サラちゃん槍術小町ぃぃぃぃぃぃぃっ♪」

モンスターの息の根が止まったあと、レオンが溜め息を吐いた。

「まったくもう、戦闘中に気を抜くんじゃないよ。危な――」

「ねね、レオ兄～っ！　アタシ、モンスター倒したぁ～っ！　ほめてー♪」

「ハイハイ、えらいえらい…」

とサラの頭を撫でるレオン。

苦笑した。

「サラ、そんなに浮かれて戦ってたら怪我するでしょう？」

「浮かれるなって言われたって、浮かれちゃうよ。だってさ、レオ兄？　お昼に一度家に帰ったときの親父の様子見た？」

「見た。リン・ランの部屋から出て来たと思ったら、にやにやにやにやとして顔に締まりがなかったね。まったく、仕事までサボって……」

「きっともうちょっとでリン・ランのファザコン化計画が成功しそうなんだよ！　アタシが家に帰る頃にはリン・ランは親父の計画通りファザコンに！　そして親父のゴキゲンは最高潮っ！　アタシとレオ兄の結婚もすんなりオッケェェェェェェェェェェェェっ！！」

とぴょんぴょんと跳ねるサラ。

次の凶悪モンスターのところへと向かっていく。

「こら、待ちなさいサラ。僕より先に行くんじゃないよ、危ないな」

「はぁ～い♪」

とぴょんぴょんと跳ねながら戻ってきて、レオンの背に飛びついたサラ。

両腕でレオンの首にしがみ付き、両足をレオンの胴体に巻きつける。

レオンの青い髪に鼻を寄せると、同じシャンプーの香りがした。

それが少し嬉しい。

「レオ兄、アタシと同じ髪の匂い～」

「ん？　ああ、昨日泊まって行ったからね」

「もうすぐ、毎日同じ匂いまき散らすんだよね」

「ま、まき散らさなくても…」

「親父、夕方にはリン・ランの説得終わるかなぁ？」

「だといいね」

「今日は早めに帰ろうっと♪　もうちょっとで夫婦になれるね、レオ兄っ♪」

と、レオンの背ではしゃいでいるサラ。

レオンは苦笑した。

（そりゃ上手くいってほしいけど、そう簡単にはいかないんだろうなぁ……）

夕方。

リン・ランの部屋の中。

枕に顔を埋めて泣きじゃくっているリン・ランの傍らにいるリュウ。

昨日の夕方から泣きっぱなしのリン・ランに、食事や入浴のとき

以外は付きっきりだし徹夜したが、なんら苦痛ではなかった。

（もうすぐで『父上大好きっ♪』って言われるぜ俺…！）

念願のその言葉をリン・ランから言われたところを想像し、リュウはにやけてしまう。

そんな顔をキリっと引き締め、リン・ランの頭に手を乗せて説得を続ける。

「だからな、リン・ラン。シュウの結婚を許してやれ」

「いっ、嫌ですなのだあっ…！」としゃくり上げながら言うリンとラン。「兄上が結婚するなんて、絶対嫌ですなのだあっ……！」

「そんなことをいつまでも言っていたら駄目だぜ、リン・ラン。あいつの気持ちにもなってみろ」

「あっ、兄上の気持ちっ…？」

「ああ。あいつはカレンが好きで好きで仕方ねえんだ。そう…、おまえたちを裏切るほどに！」

「ふにゃっ…、ふにゃあああああん！」と、ますます泣き喚くリン・ラン。「兄上の裏切り者ぉおおおぉぉぉおおおぉぉぉおっ！！」

「そう、そうだぜリン・ラン。シュウは薄情な奴だからな、人情味溢れる父上と違って」

「兄上のブワァァァァカァァァァァァァァァァっ！！」

「もちろんだ。あいつは生まれたときからバカだった、父上と違って。さらに父上と違い、ガキで弱くて単純で口うるさくて短気でおまえ本当に主人公かよってくらい格好悪くて、まるで良いところなしと来たもんだ。さあ、リン・ラン、目を覚ましてブラコンを卒業しろ。シュウなんぞより、この父上から溢れ出る魅力に気付け…！　そしてファザコンになれ…！　ファザコンになればもう2度と泣くことはない…！　さあ、いざファザコンデビュー……！！」

と、両腕を広げるリュウ。

「ち、父上ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

と、リン・ランが胸に飛び込んできて、溜まらずにやけてしまう。

（よっしゃ来たぁ！　さあ、リン・ランよ！　『父上大好きっ♪』と言ってくれ…！）

と願ったリュウだったのだが、リン・ランの口から思いもよらぬ言葉が聞こえてくることに。

リン・ランと交互に言う。

「父上、ありがとうですなのだっ」

「わたしたちを元気付けてくれるために、ありがとうですなのだっ」

「とっても面白かったですなのだ」

「そこまで言うと、あまりにも有り得なくて面白かったですなのだ」

リュウは眉を寄せた。

（俺、笑いを取った覚えは……）

リン・ランがリュウの顔を見上げて笑う。

「父上が人情味溢れてるって、どこが？　ですなのだ」

「兄上は誰が見ても薄情には見せませんですなのだ」

「兄上はそんなにバカじゃないですなのだ」

「母上を見てるときの父上のバカオーラには、兄上も敵いませんですなのだ」

「わたしたちの面倒を良く見てくれる兄上はガキなんかじゃないですなのだ」

「17で超一流ハンターになった兄上は、普通に考えて強いですなのだ」

「単純は素直とも言えますなのだ」

「口うるさいのは愛情の表れですなのだ」

「父上も母上も短気なんだから、兄上が短気なのは仕方ないですなのだ」

「どんなことにも堪えてきた兄上は、とっても格好いい主人公ですなのだ」

「兄上は良いところだらけですなのだ」

リン・ランの顔を交互に見るリュウ。

困惑する。

（ま、待て。何かおかしな方向に向かってないか…？）

リン・ランが涙を拭って声をそろえる。

「父上、わたしたち目が覚めましたなのだ！」

「お、おう？」

「自分たちの口でこれだけ言い、改めて確信しましたなのだ！」

「か、確信？」

「兄上は、決してわたしたちを裏切ることはないと！」

「いっ、いやいやいや――」

「兄上は父上が言った通り、カレンちゃんのことが好きで好きで仕方ないですなのだ！　そう、ただそれだけのことですなのだ！」

と、リン・ランが窓の外の夕日を見つめる。

そして涙をぽろぽろと零しながら交互に続ける。

「ああ、兄上！　ごめんなさいですなのだ！」

「結婚しようと何しようと、兄上のわたしたちに対する愛情や態度は変わるわけがないのに！」

「つい先月、兄上の心の声を聞いたばかりだというのに！」

「わたしたち、兄上を困らせてしまったですなのだ！」

「兄上はわたしたちのことをこんなにも大切にしてくれているのに、わたしたちときたら…！」

「ああ、なんてことを…！」

「わたしたち、夕日に誓いますなのだ！」

「兄上の幸せを心から願いますと！」

そして声そろえるリンとラン。

「わたしたち、死んでもブラコンを貫き通します…なのだっ！　…こ、これからはちょっと不倫気分でますます燃えるしっ…なのだっ……！」

「――！！？」

リュウ、大衝撃。

予想だにしなかったカウンターの右ストレートを食らった気分で、ふらりとよろける。

「ま、待て、リン・ラン…！　ハ、ハードパンチャーだなっ……！」

「へ？」

「ファ、ファザコンは…！？」

「ファザコン？」

と鸚鵡返しに訊き、首をかしげたリン・ラン。

あはは、と笑い、次の台詞に合わせて2回手を振った。

「ないない」

「――！！？」

リュウ、さらに大衝撃。

ダメージが回復する前の2度目の右ストレートに、たまらず床の上に膝をつく。

（ま、待ってくれ…！　な、何故なんだ……！）

リン・ランがはしゃいだ様子でシュウに電話を掛ける中、立ち上がれず四つん這いになってリン・ランの部屋から出て行くリュウ。

（俺の夢の『父上大好きっ♪』は…！？　どこへ飛んでいった……！？）

1階へと続く階段の方へとよれよれと向かっていく。

その間、震えた肘が何度もガクっと折れ曲がった。

（わ、分からん…！　何故だ、何故なんだリン・ラン…！　なんでそんなにシュウが好きなんだ…！？　俺にはまるで理解不能だ……

！）

と混乱しながら、リュウが階段へと辿り着いたときのこと。
階段の下の玄関の扉が勢い良く開いた。

「次女、只今ご帰宅でぇーす！」

サラだ。
その後ろにレオンもいる。

リュウの姿に気付いたサラがひらひらと手を振りながら言う。

「ただいま、親父～っ！」

「お、おう、おかえ――」

「アタシ、レオ兄と結婚するね～っ！」

なんて婚約発表で言葉を遮られたリュウ。

「――！！？」

ふらっふらのところに、サラのそれはもう強力な3発目の右ストレートを食らったことにより。

ズルっ！

と手が滑り、

ゴロロロロロロロロ～っ！！

と階段を転がり落ちて行った。

「おっ、親父いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！」

リュウ、K・O。

第１２２話　『父上大好きっ♪』と言ってくれ（後書き）

あ、今回主人公とヒロイン出てないですね…。

先月、投票やメール、評価、感想をくださった読者さま、ありがとうございました！
今月も頑張ります！

昨日の２０時３分ごろメールくださった読者さまへ。
えーと、「もうすぐ学校が始まるんでハーニャンのお気に入りキャラトップ３をコメントつきで教えてください」とのことですが…。
バレンタイン近くにメールくださったときに続いて、最っっっ高意味が分かりません（笑）
でもハイ、作者にとっちゃ皆可愛いというのを前提に、３位から順にどうぞ←

第３位　シュウ（ごめん、主人公ｗｗｗ）

第２位　サラ（前作主人公似の彼女は書きやすいです）

第１位　リュウ（この人だけダントツです。前作の主人公ということもあって、抜群の書きやすさで作者を一切困らせませんｗ）

以上でございますｗ

第１２３話　父親の説得

シュウは慌てて仕事を切り上げて帰宅した。
両親の寝室に飛び込む。

「親父っ！！」

部屋の中には、家族とカレンの他に、リンクとレオン。
ベッドに寝かされているリュウを囲んでいた。

「おい、親父っ！！」

と、シュウは蒼白してベッドに駆け寄る。
レオンが言う。

「大丈夫だよ、シュウ。階段から転げ落ちたんだけど、バケモノだから無傷だし」

「で、でも気を失ったって…！」

「どうやら」と、リュウを見て苦笑するレオン。「精神的ダメージが大きかったらしくてね」

「あのな、シュウ。おれもリュウが倒れたって聞いて大慌てでやって来たんやけど…」と、リンクも苦笑しながら続いた。「リュウの奴、どうやらリン・ランのファザコン化計画が失敗に終わった挙句、サラの婚約発表聞かされたみたいなんや」

「そ、そうか、それで…！　――って、それだけかよ！？」

「と、思うかもしれないが」

と続いたのはリュウに膝枕をしてやっているキラだ。

リュウの頭を撫でている。

「リュウにとっては、それはもう大衝撃なのだぞ」

そんなことはシュウも分かった。

気を失っているリュウを見れば。

（でもちょっといくらなんでも大袈裟だろ親父……）

と、レオンやリンクに続いて苦笑せずにはいられないシュウ。

ベッドの脇にはサラが腰掛けて、リュウの手を握りながら溜め息を吐いている。

「ああ…。アタシとレオ兄の結婚許してもらえるかもと期待して帰ってきたのに、倒れちゃったよ親父……」

と、もう一度溜め息を吐いたサラだったが、ふと思う。

（でもま、ここまで弱っちゃったら逆に結婚のこと説得できそうかな）

それから3時間経っても目を覚まさないリュウ。

しばらく黙っていたサラが口を開いた。

「みんな、もう自分の好きなことしてなよ。親父はアタシが見てるからさ。それで起きたらアタシが説得する、結婚のこと。ああー、

ママは本当出てこなくていいからね？　親父と絶対（屋敷破壊するような）喧嘩になるからさ」

「うむ、分かったぞ。母上はおとなしく引っ込んでるぞ」

「僕も一緒にいるよ、サラ」

と、レオン。

サラが首を横に振った。

「親父とママの喧嘩ほど大変なことにはならないかもしれないけどさ、レオ兄は…。でも親父が目を覚ましてレオ兄の顔見たら、怒ることには違いないから。レオ兄も部屋の外で待ってて」

「…分かった」

と承諾したレオン。

皆と一緒に部屋から出て行った。

サラを気にした様子のレオンの顔を見ながら、シュウが言った。

「や、やっぱ心配だよな、レオ兄っ…。オレも心配だよ……、サラ1匹で親父を説得できるかどうか」

「は？」

と、きょとんとして振り返ったのはカレンである。

シュウとレオンを交互に見て言った。

「サラが今のリュウさまを説得するのなんて、ちょろいのですわ。

まあ、１年前のサラとリュウさまなら喧嘩して終わったでしょうけど」

「えー？」とシュウが眉を寄せる。「オレ、説得できないに１００万ゴールド賭けてもいいぜ？」

「って、また賭けるんだ。じゃあ、僕は3時間以内に説得できないに１００万ゴールド」

と、レオン。

続いてカレン。

余裕の笑みで言い放った。

「３０分以内に説得できるに５００万ゴールドですわ♪」

リュウが目を覚ましたのは、一同が部屋から出て行って数分後のことだった。

「あっ、親父っ…」

とリュウの顔を覗き込むサラ。

ゆっくりと瞼を開けたリュウが、ゆっくりと瞳を動かしてサラを見つめた。

「…サラ……」

「大丈夫？」

「…おまえのトドメの右ストレートは利いた…」

「は？」

「俺の娘はハードパンチャーだぜ…」

「そ、そう（変なとこ打ったんじゃないの、親父…）」

「空耳か夢か幻か…」

リュウは自分の手を握っている、サラの手に目を向けた。
やっぱり空耳でも夢でも幻でもなかった。

サラの左手の薬指に、レオンからのものだろうエンゲージリングが輝いている。

歪んだリュウの顔を見ながら、サラは開始する。
説得を。

「ねえ…、親父？（と優しい声で語りかけるアタシ）」

ギクっとしたリュウ。

「な、何だ、サラ（来たな、第2ラウンド…！）」

説得されまいと、身構える。
頭の中、リングに立ってガードを固める。

「この間も言ったけどさ。何があってもアタシは親父の娘には変わりなくて、アタシはちゃーんと親父のこと好きだからね？（と、まずはこのことをアピールしつつ、踏ん張ってる親父の心を揺らしてっと）」

「ふ…、ふーん（な、何ていうフックだサラ…！　第1ラウンドの傷が回復してねえのに、この強打はキツイ……！）」

「いつどこにいたって、親父のこと想ってるよ（と、親父の傷付いたハートに染み渡るホットな台詞を吐いてみる）」

「そ…、そうか（踏ん張れ俺、ガードを固めろ俺…！）」

「本当、アタシは親父が好きだよ（ほーれほれほれ、可愛い娘の甘い言葉を食らえ～♪）」

「お…、おう（こ、こら止めろサラ…！）」

「大好き（そーれもう一発～っ♪）」

「お、お、おう（ちょ、サラ、おま……！）」

堪えきれず、顔がにやけまくってしまったリュウ。
心の中でにやっと笑ったサラが続ける。

「親父はアタシのこと好き？（に、決まってるけどさ）」

「も、もちろんだぜ（可愛くねえ娘なんていねえ）」

「じゃあさ、親父？」

再びギクっとしたリュウ。

「な、何だサラ（まだフックすんの…！？）」

「アタシのために、アタシの結婚許してくれるよね？　このままじゃ可哀相じゃん？　アタシが（と言ったところで、親父が許してくれないのは分かってる）」

「ふ、ふん…（同情作戦に来たか、サラ）。レオンごときと一緒になって幸せになれるわけがねえ（フックにはジャブで応戦しろ俺！）」

「レオ兄ごときって、どうしてそういうこと言うのさ！（と、ワザと怒ったフリをして怒鳴るアタシ）」

「レオンなんぞ、ごときで充分だ！（ジャブ、ジャブ、ジャブ！）」

「なんっなのソレ！（そして予定通り怒鳴り返した親父は、その勢いに乗ってバレないようさりげな～くアタシの同情を誘う作戦に持っていく）」

「ごときはごときだ！（ジャブ、ジャブ、ジャブ！）　いいか、サラ！」と、リュウがサラの腕を掴んだ。「俺は絶対におまえたち娘を嫁にやらねえ！（ジャブ、ジャブ、ジャブ！）　増してや…」

リュウの手に力が入る。

「娘の中で一番一緒に過ごした時間が短いおまえを嫁にやるなんて、以っての他だ！（ジャブ、ジャブ、ジャブ！）　んな寂しいこと、

絶対に嫌だ！（と、勢いに乗ってさりげなーく同情作戦を返している俺ってさすが）」

「お…親父……（と同情したような顔をしてっと）」

「おまえが嫁に行っちまったら寂しいじゃねーか……（よし、たまらずサラのフックが止まった！　ふっふっふっ、おまえの大好きなお父上様のジャブは強烈だろう！）」

「…う…うん、ごめん……（ああ、心の中でにやけてる親父がいる）」

「だから行くな、嫁なんか……！（ジャブ、ジャブ、ジャブ！　ああ…にやけて隙を見せるな俺）」

「……（ここであっさり承諾しちゃ怪しまれるからね、無言で困惑顔っと）」

「頼む、サラ……！（よし、トドメだ！）」

「……（さらに困惑顔っと）」

「おまえの好きな…、そう、超マジすーげー大好きなお父上様のために！！（うらあぁぁぁあああぁぁぁあ！　渾身の右ストレーーーート！！）」

「ねえ、親父……？（超マジすーげー大好きって、最初のアピールですっかりその気になってら。さすが親父、ありがたい）」

「何だ、サラ！？（K．Oだろ！？）」

「アタシ…、やっぱりレオ兄との結婚考え直してみるね（親父、心の中で爆笑してるんだろうな、すっかり勝ち誇った気分で。これから逆に同情させられるとは知らず）」

「おお、そうか！　そうかサラ！（カンカンカンカン！　試合終了！　俺の勝利！　ざまーみろレオン！　ぶあーーーっはっはっはっはっは！！）」

と、サラを抱き締めるリュウ。
サラがリュウの胸に抱きつきながら言う。

「だから元気だしてよね、親父（あー、はしゃいでるはしゃいでる。どんだけ作戦通りな展開）」

「ああ、もう元気だぜ父上は！　――って、どこへ行く！？」

と、腕の中から離れていったサラに手を伸ばすリュウ。
サラが背を向けたまま言う。

「大丈夫、シャワー浴びてくるだけだよ（さぁーて、説得完了まであと１０分程度かな）」

「お、おう、そうか（俺の渾身の右ストレートから立ち上がったのかと思ったじゃねーか…）」

サラがリュウとキラの部屋のバスルームへと入っていく。
一方のリュウはにやける。

（俺似とはいえ、まだまだだなサラ。ま、当然か。俺のことが好き

で好きで大好きなんだもんな、つい俺に同情しちまうよな）

にやにやにやとして顔が締まらないリュウ。

サラがバスルームに入って5分経った頃、異変を感じて眉を寄せた。

まだシャワーの音が聞こえてこないのだ。

（…し…しまった！）

嫌な予感を感じ、ベッドから飛び出たリュウ。

慌ててバスルームの前へと駆けて行く。

（バスルームの窓から逃げて、今のうちにレオンとカケオチか！？）

とリュウがバスルームのドアノブを握ったとき、中からサラの声が聞こえてきた。

「えーん、レオ兄ぃぃ」

リュウ、ぎょっとする。

（な、泣いてんのかサラ…！？）

リュウはまだ気付いていなかった。

試合は続行されていることに。

サラの声が続く。

「ひくっ…親父が結婚許してくれないようぅ…！」

ノーガードのところにサラのボディ打ちが始まる。
リュウ、狼狽。

（ま、待て、俺が泣かしたのか…！？）

「親父はアタシの幸せを願って、レオ兄との結婚を絶対許してくれるって信じてたのにっ…！」

（って、サラおまえそんなにレオンが好きなのか…！？）

「親父、本当はアタシのこと愛してなんかないのかもっ…！」

（そ、そんなわけ――）

「だって、アタシのことを本当に愛してたら、この結婚許してくれたはずだもん…！」

（ち、違うんだ、サラ。おまえの結婚を許さないのはおまえが可愛くて可愛くて大切だからで…！）

「でもっ…でも、いいんだ…。さんざん親不孝してきたアタシをここまで育ててくれた親父に、恩返ししなきゃだもん……！」

（…サ…サラ……）

「アタシは、大好きなレオ兄と生涯結婚できないかもしれないけど…！　それでもアタシは超マジすーげー大好きな親父のためにっ…！　そう」と、声を大きくしてもう一度繰り返すサラ。「超マジすーげー大好きな親父のためにっ！！」

リュウの耳に聞こえてくるサラのすすり泣きの声。

ずきずきと痛むリュウの胸。

ボディ連打で折れ曲がった身体。

（…そ…そうか。いつだったかキラも言っていたが…、俺のしてることはサラを不幸にしているのか……）

拳を握り締め、覚悟を決めるリュウ。

（分かった…分かった、サラ。おまえの超マジすーげー大好きなお父上様は、おまえのために……！）

バスルームのドアをノックした。

「泣くな、サラ」

「親父っ…？」

「…ゆ……るすから」

「えっ？」

「…け、結婚、許すから」

「ほ、本当っ？」

と、高くなったサラの声。

「ああ…。本当はすげー嫁になんかやりたくねえが、おまえが幸せならそれでいい。本当はレオンが信頼のある奴だってことも分かってる」

「親父っ…！」

「そ…その代わり、しょっちゅう顔見せろよ。さっきも言ったが…、おまえと過ごした時間は短いんだ」

「うんっ…！」

とサラの嬉しそうな声が聞こえたあと、ドアノブが捻られた。
ドアを開け、

「親父、ありがとうっ…！　大好きっ……！　本当にもう」と顔を見せたサラ、「ちょろくって」

不敵な笑みで、トドメのアッパァァァァァァァァァァァァァァ！！

「――！！？」

驚愕したリュウ。

（試合は終わっていなかった…だと！？）

本日2度目のK．O。
試合終了のゴングの音と共に、マットに沈む己が脳裏に浮ぶ。

（なっ…なんて強さ…だ……！！）

リュウががくんと床に膝をついた瞬間、屋敷中にサラの笑い声が響き渡って行った。
サラがリュウの説得を開始してから、約２０分のことだった。

キッチンの中。
ただいま晩御飯中の、リュウとサラを除く一同。

サラの勝ち誇ったかのような笑い声を聞きながら、カレンが言う。

「ほらね、だから言ったでしょう、シュウ？　それからレオンさん？　リュウさまとサラは似ているけれど、リュウさまは娘に弱い分、サラの方が一枚上手ですもの」

シュウとレオンが顔を見合わせる。

「え、えええっ！？　うっそマジで親父説得したのサラの奴…！？な、なあレオ兄！？」

「…ぽ、ぽいね。お手柄だなあ、サラ」

驚愕しているシュウとレオンの傍ら、カレンが携帯電話を取り出した。
電話をかけた相手は、

「もしもしミヅキくん？」

シュウとレオンがカレンに顔を向けた。
カレンがうきうきとした様子で会話を続ける。

「無事サラの結婚にも許可が降りたから、先日相談した通りあたくしたちのウェディングドレスのデザインお願いね♪　…え？　そんなミヅキくんだって暇じゃないのだから、無料でなんて気が引けるのですわ。デザイン料に、２００万ゴールド払うわ。一生で一度しか着ることのないかもしれないウェディングドレスよ？　それくらい出すのですわ。…え？　ついこの間まで弟子ハンターだったのにそんな大金大丈夫かって？　ええ、大丈夫ですのよ♪」

と、うふふ、と笑ったカレン。
シュウとレオンの顔を見ながら続けた。

「シュウとレオンさんが、１００万ゴールドずつ出してくれるのですもの♪」

「――！？」

シュウとレオン、愕然。

カレンは決して賭けのことを忘れてはいなかった。

（じょ、冗談で賭けてたのに……）

その晩。
リュウとキラの寝室にて。

「何だか今日一日でずいぶんとやつれたのではないか、リュウ？」

「なあ、キラ…」

「どうした、相談事か？」

「サラが俺のことを大好きだと言ったのは、最後に俺の同情を誘って結婚の説得に持っていくための作戦の１つだったのだろうか…」

「リュウのことが大好きだというのに偽りはないと思うが、作戦ではあろうな」

「だから最初にあんなにアピールしてたのか…。そして説得させられまいと身構えていたにも関わらず、『大好き』だなんて言葉でまんまとサラに有頂天にさせられた俺は……」

「やられたな。見事だぞ、サラ」

「……。俺の娘…」

「うむ？」

「ひでぇ……」

「あはは、おまえ似なだけではないか♪」

「……（キラ、おまえもひどいぜ…）」

シュウとカレン、サラとレオンの結婚式は、約一ヵ月後だ。

2004

第１２３話　父親の説得（後書き）

本日の０時１６分ごろメールくださった読者さまへ。
おかえりなさいヾ（＊´∀｀＊）ノ゛
作文用紙が無事で良かったｗｗｗ

もうすぐで始まる学校、気合入れてがんばってください（ゝ・ω・´）
あ、疲れてたら勢いで感想書かなくて良いので眠ってくださいｗ

第１２４話　結婚式の準備

リュウが２度Ｋ．Ｏされた日から一週間。
昨日カレンの方、サラの方と共に結納を済ませた。

結婚式はリュウとキラ、リンクとミーナのときと同じ教会で、同じように最低限しか呼ばない地味婚になることに。

只今シュウの部屋の中。
スケッチブックと鉛筆を握っているミヅキを、シュウとカレン、サラ、レオンが囲んでいた。
ミヅキがカレンとサラの着るウェディングドレスのデザインを描いている最中だ。

正直、カレンとサラ、ミヅキの会話はシュウとレオンにはよく分からない。

「ミヅキくんミヅキくん、あたくし、ドールが着る様なたくさんのフリルが入ったドレスがいいのですわ♪」

と、カレン。

「ミヅキミヅキ、アタシはシンプルなんだけどゴージャスなやつがいいなー♪」

とサラ。
ミヅキがうんうん、と頷いて聞きながらスケッチブックにデザインを描いていく。

「カレンちゃんはウエストから広がったプリンセスラインがいいかな。スカートの部分全体がフリルっていうのも可愛いけど、バックだけフリルにするっていうのもオシャレだと思うよ？　フリルでロングトレーンなんかどう？」

「まあ素敵っ」とカレンの瞳が輝く。「そうするのですわ！　あ、それから胸元や前から見たスカート部分に薔薇のコサージュがほしいのですわ！」

「うん、分かった。それでサラちゃんはスタイルがいいから、膝まで身体に沿った形のマーメイドラインがいいんじゃないかな。膝から下の広がりには、沢山のレースで出来たフリルを入れるとゴージャスになるし」

「おお」とサラの瞳も輝く。「じゃあ、そうしてミヅキ！　それからアタシも薔薇のコサージュとかほしいなあ」

「わかった。じゃあ、カレンちゃんとサラちゃんのコサージュはお揃いにしよっか」

キャッキャウフフとはしゃぐカレンとサラの傍ら。
シュウとレオンは顔を見合わせる。

「レオ兄、話についていける？」

「あんまり…」

「だよな…」

「でもサラが楽しそうで良かった」

「オレもカレンが楽しそうで良かった」

「…で」とレオンが苦笑した。「リュウの様子はどう？」

「ああ、なんか…」とシュウも苦笑する。「『サラの家が遠い…』とか呟いてふらふら仕事向かったけど、今朝。レオ兄とサラの今建てる最中の家、別に遠くないよなあ？」

「うん、遠くないんだけどね。同じ家に住んでない限り、遠いって感じるんだろうねリュウは」

「困ったもんだな、親父は…」

「まったくだね…」

とそろって溜め息を吐くシュウとレオン。

しばらくしてミヅキがウェディングドレスのデザインを完了。ミヅキがシュウとレオンにスケッチブックを広げて見せる。

「そこの新郎のお二人さん、どう？　左側がカレンちゃん用、右側がサラちゃん用のウェディングドレスのデザインなんだけど。ＯＫもらったらあとはプロに作ってもらうだけ」

「うわ、すっげー」と丸くなるシュウの目。「ミヅキ、おまえ本当こういうの才能あるよな。こ、これをカレンが着ると思うと鼻血が……」

「本当、すごいね」と感心したように声を高くしたレオンが微笑む。

「サラにとても似合いそうだ」

「シュウもレオンさんもいいみたいだね。じゃあ」と、にっこり笑って手を出すミヅキ。「早く１００万ずつくれない？」

「……。うん…」

やっぱり？

と苦笑しながら、シュウとレオンは用意しておいた１００万ゴールドをミヅキに渡した。

そのあと、シュウはミヅキの手からスケッチブックを取った。もう一度カレンのウェディングドレスのデザインを見つめる。

（ああ…、鼻にティッシュ詰めて結婚式に出よう……）

と、早くもウェディングドレス姿のカレンを想像して鼻血が垂れそうになっているシュウに、ミヅキが立ち上がりながら言う。

「じゃあ、あとはそれをプロに作ってもらってね」

「おまえもう帰んの？　今日バイトねえんだろ？」

「うん、ないよ」

「んじゃあ、おまえも一緒に来ねえ？　オレたちこれから結婚式挙げる教会の下見に行くんだけど」

「いや、遠慮するよ。僕これからホワイトデーぶりに可愛い子とデ

ートだし」

「可愛い子とデート？」

と、シュウに加えてカレンとサラ、レオンが声をそろえたとき。

コンコン…

と控えめにドアをノックする音が聞こえた。

そして戸惑い気味の声が聞こえてくる。

「え…えとっ…あのっ……」

「もう終わったよ」と優しくなったミヅキの声。「レナ」

ミヅキが言った通り、レナが顔を覗かせる。

少し照れくさそうに頬を染めながら、シュウたちが見たことのないロリータワンピースを着ていた。

「きゃあああああ！」と思わず声をあげたのはカレンである。「レナちゃんそのお洋服どうしたの！？　どうしたのかしらあぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

とレナに駆け寄り、レナの周りをぐるりと一周してはしゃぐ。

「可愛い～っ！　可愛いのですわあぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁ！　これどこのブランドのお洋服なのっ？　ねえ教えて、レナちゃあああああああ――」

「落ち着いて、カレンちゃん」とミヅキがカレンの言葉を遮った。

「それ、ぼくが作ったんだよ」

「えっ？」と一度ミヅキの顔を見たあと、レナに顔を戻したカレン。

「そうなのっ？」

「う、うんっ…」とレナがはにかんだ。「この間のあたしの誕生日に、ミヅキくんがプレゼントしてくれたんだ」

「通りでミヅキの趣味なわけだ」と、サラが納得したようにうんうんと頷く。「似合ってるよ、レナ。まぁーったく、どんどんミヅキ色に染まっていっちゃって」

とサラがからかうように笑うと、レナが赤面した。

カレンはまだはしゃいでいる。

「ああんもう、あたくしも着たあぁぁぁ

さ」と、サラ。「付き合ってるってことはまだ聞かないけどさ。あの2人もいつか結婚まで行ったりして。――っていうか今回の話、アタシたちの結婚の準備とか言っておいてさー」

「ちょっと忘れられてるかもしれないレナとミヅキの進展の様子を、読者さまに知らせるための話の気がしないでもないよなー」

「だよねー、兄貴。結婚式の準備の話なんてなくてもいいしねー」

「なー」

「そんなことはいいからぁ」とカレンがシュウの腕を引く。「早く教会の下見に行きましょっ♪」

というわけで。

きゃっきゃとはしゃいでるカレンに連れられ、シュウとサラ、レオンは結婚式を挙げる教会へとやって来た。

教会の中に入るなり、レオンが懐かしそうに微笑む。

「ああ…、キラとミーナのウェディングドレス姿を思い出すよ」

「やっぱりママとミーナ姉、綺麗だった?」

と、サラがレオンの顔を覗き込んだ。

「うん、とても綺麗だったよ。ま、もちろん僕のお嫁さんも劣らな

いほど綺麗だけどね」

とレオンに頭を撫でられて、サラが嬉しそうに笑う。

「でもミーナ姉の結婚式のときは、アタシもうっすらと覚えてるよ。たしか途中で親父とママが消えたような…」

「ああ、そうそう。消えた消えた」と、シュウ。「んで、オレたち兄妹は王子さまに任せられて、大人はみーんな親父たちを探しに行ってたんだよな。レオ兄、あのとき親父と母さんどこ行ってたの？」

「ええとぉ…」と苦笑するレオン。「し、知らない読者さまは前作の番外編・リンクとミーナのお話の最終話をどうぞ…。なんというかリュウらしすぎます……」

ああ…、想像できた……。

と呆れて溜め息が出そうになっているシュウとサラの傍ら。

カレンがはしゃいでいる。

「あたくし、もう少しでここのバージンロードを歩くのねっ♪　ねえサラ？　これだけバージンロードの幅があれば、横に並んで入場できるわね！」

「うん、そうだね。スキップして入場するんだっけ？」

「しないわよ。左足を出して右足をそろえ、右足を出して左足をそろえる。これの繰り返しでバージンロードをお父さまと歩いていくのですわ」

「親父とかあ。一緒に歩いてくれるかなあ」

「さあ…」と苦笑するシュウ。「歩いてくれなかった場合を考えて、一応他の誰かにも頼んでおいた方がいいかもな……」

「じゃあ親父が一緒に歩いてくれなかったらお願いね、兄貴」

「おう、任せろ――って、オレ新郎じゃねーかっ！　おかしいだろ！」

「ま、グレルが牧師役って時点でおかしい結婚式になることは間違いなしだよね」

そう言ったレオンに、同意して深く頷くシュウとサラ。

カレンが教会の中を見て回りながら確認する。

「ねえ？　結婚式にはシュウのご家族とリンクさん一家、ミヅキくん、グレルさん、あたくしの家族とそれから王子さまが集まるのよねえ？」

「おう、その予定」と、シュウ。「でも王子さまはどうだろうなあ。母さんと顔合わせづらいみたいだし」

ゆっくりと歩いて教会の中を見回しながら、祭壇の前に辿り着いた。

（結婚式当日、オレはここでバージンロードを歩いてくるカレンを待ってるんだよな）

と、教会の扉の方へと身体を向ける。

ちょうど教会を一周したカレンが、扉の前に辿り着いたところだった。

「ふふ、ちょっと練習」

と少し頬を染めて笑ったカレン。
父親にエスコートされたつもりになって、バージンロードが敷かれる道を歩いてくる。

左足を出し、右足をそろえ。
右足を出し、左足をそろえ。
シュウのところへとやってくる。

シュウの頭の中に、ウェディングドレスを身にまとったカレンが浮ぶ。

（ああ…、鼻にティッシュ忘れんなよオレ……）

と再び自分に言い聞かせたシュウ。
カレンがやってくるなり、ぎゅっと抱き締めた。

「って、ちょっとシュウ？　結婚式当日、そんなことしないでちょうだいよ？」

「分かってる。分かってんだけど、辛抱たまらあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあんっ！！」

と叫び、カレンを抱き上げたシュウ。
カメラ目線（？）で次回予告。

2015

「というわけで、次回の『ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ』は『長男の可愛い嫁』で――」

「ハイハイ違う違う」

と突っ込んだサラ。

正しい次回予告をどうぞ。

「次回の『ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ』は『長男&カレン、次女&レオンの結婚式』です♪」

2016

第１２４話　結婚式の準備（後書き）

はい、というわけで今回の話ですが…。
結婚式の準備や結婚式当日のことをお知らせというのもありますが、単にレナとミヅキの進展の様子を書きたかっただけです……。
ええ、ごめんなさい。次回は寒い人や懐かしい人など出てきます。

３日の１７時３分ごろメールくださった読者さまへ。
お久しぶりです！ヾ（＊´∀`＊）ノ〃
リン・ランは生涯ブラコン発言してますからねえ…ｗ　なおらない可能性大でございますね！
本文の予告通り、次回は結婚式でございます。
えと…、き、期待しないで待っててください…ね？ｗ

2017

第１２５話　長男&カレン、次女&レオンの結婚式

――５月。
本日シュウ、１８歳の誕生日。
そして本日、シュウとカレン、サラとレオンの結婚式だ。

教会の中、参列者が待っている。
祭壇に向かって左側にカレンの家族（父除く）、右側にシュウの家族（リュウ除く）とリンク一家、ミヅキ、王子。
グレルは牧師役。

王子が来たとなれば、カレンの家族はえらく緊張し。

王子は王子で、顔が強張っている。

（き、来てしまった来てしまった…！　サラにカレンという美少女に招待状をもらってしまったが故に、断れず来てしまったぞ…！　キ、キラの顔が見れん…！　キラはマリアを飼った私をどう思っているのだろうか……！）

と、恐る恐るとキラを見る王子。

（ああ……、相変わらずこの世に並ぶ者がいないほど美しいな、キラ）

顔が恍惚とした。

（何故、リュウなんぞの嫁になってしまったのだキラ。あの男が相手では色々と大変であろうに、あの男では。…って、そういえばあ

の男…リュウはどこだ？）

と教会の中をきょろきょろと見回す王子。

（ああ、そうか。新婦のサラのエスコートをしなければならないからな。教会の外にいるのか。あれほど可愛がっている娘を嫁にだなんて、どんな顔をして出てくるのか楽しみだな）

と王子が小さく笑ったとき。

牧師役のグレルが欠伸をした。

祭壇から教会の出入り口に向かって大きな声で言う。

「おぉーい、ヒマだぞーい。そろそろ新郎入場しろーい」

教会の扉から、新郎であるシュウとレオンが顔を覗かせた。

さっそく滅茶苦茶な結婚式に、苦笑しながら祭壇の前まで歩いてくる。

「兄上かっこいいのだあぁぁあぁぁぁ

「当たり前ではないか、レオン！　おまえたち揃いも揃って美しいレディを嫁にもらうとは…！　羨ましいではないか！！」

「は、はあ、スミマセン…」

レオンと王子の傍ら。
ヒースがシュウに手を振っている。

「シュウくん、おひさしブリーフ」

「お、お久しぶりです（相変わらずだなこの人）」

「私も参列して良かったかな」

「あ…当たり前田のクラッカーっ…！」

「おい、シュウ。それはどこの言葉だ」

と王子に突っ込まれてシュウが赤面している頃。

教会の扉の外では、入場前の新婦であるカレンとサラ、その父であるリュウとカレン父が待っていた。
カレンもサラも、カレン父もリュウから遠巻きになってしまう。

（暗っ……）

サラの結婚式が近づくにつれ、重く沈んでいったリュウ。
結婚式である今日、そのオーラときたら近寄りたくないほど暗い。
3日前から眠っていないというような顔をしている。

「ちょ、ちょっと親父？」

「何だ、サラ…」

「そんなんでちゃんとアタシのエスコートできるわけ？」

「おう…。左足を出して左足を戻し、右足を出して右足を戻――」

「進まねーよ」

ドスッ

とリュウの胸にチョップをかましたあと、サラはリュウの腕を取った。

「ほら、しっかりしてよ親父。もうすぐ入場だよ。左足を出して右足を揃え、右足を出して左足を揃える。これの繰り返しだからね？」

「おう…」

と、肘に力を入れ、離さんと言わんばかりに脇腹にサラの手を挟むリュウ。

サラが溜め息を吐いた。

「しょっちゅう顔見せに行くってば…」

「……」

リュウの顔が晴れぬまま、新婦入場のときがやってきた。

扉が開き、結婚行進曲が流れる。

参列者の拍手の中、カレンとサラが父親にエスコートされながらゆっくりと向かっていく。

祭壇の前で待っている新郎のところへ。

愛おしそうにサラを見つめて微笑んでいるレオン。

鼻に詰め込んだティッシュを赤く染めるシュウ。

途中、一度リン・ランにティッシュを変えてもらった。

頬を染める王子。

「お…おおお…！　美しいっ…！　美しいぞサラ、カレン……！　というか」と、顔を引きつらせる。「リュ…リュウおまえ大丈夫か……」

大切な娘を取られたリュウがどんな顔で出てくるか楽しみだった王子だったが、想像以上に暗すぎて同情してしまう。

祭壇の前へとやって来たカレンの手を、シュウが取る。

「カレン…（か、可愛すぎる…！）」

「シュウ…（鼻のティッシュなんとかして…）」

その傍ら。

祭壇の前へとやって来たサラの手を、

「お・や・じ……！？」

ググググっ…！

とリュウが脇腹に挟んで離さない。

「離してよ…！？」

「抜いていいぜ」

「抜けないっつの…！」

「よ、よし、サラ。抜けねえのは嫁に行きたくねえ証拠だ。婚姻届まだ出してねーし、今からでも――」

「リュウ、いい加減諦めろ」

と深く溜め息を吐いたキラが、リュウの脇腹からサラの手を離させた。

レオンが苦笑しながらサラの手を取り、牧師役のグレルが咳払いをした。

「うおっほん！　んじゃ、始めるぞーっと♪　何か普通は変な歌（賛美歌）を歌って聖書を読むらしいけど、オレ知らねーから省略だぞーっと♪」

新郎新婦、苦笑。

グレルが牧師となれば、これくらいのことは想像できたが。

「えーと、汝（なんじ）――」

「13時だ」

「カレンの兄ちゃんは黙ってろよーっと」

「聞いてないよ～」

「汝シュウは…（中略）…誓えよーっと♪」

「え？（め、命令形かよ…）　も、もちろん誓います」

「汝カレンは…（中略）…誓えよーっと♪」

「ち、誓いますわ」

「汝レオンは…（中略）…誓えよーっと♪」

「誓います。グレル、そこは疑問系で…」

「ん？　汝サラは…（中略）…誓えよーっと？」

「誓うぞーっと♪」

と、新郎新婦が全員誓ったあとは指輪交換。
グレルが危うく指輪を曲げかけるが、何とか無事に済ませた。

そのあとは、

「んじゃ、誓いの接吻かませよーっと♪　ぶちゅーーーっとな♪」

「は、はははははははいっ！」とカチンコチンになって手を上げた

シュウ。「オ、オオオ、オトーサン、オジーサン、オニーサン、ししししししし失礼しましゅっ！！」

カレンのベールをめくり、目を閉じて待つカレンの唇に震えながらキスをした。

その傍ら。

誓いのキスと聞いた瞬間に、片足の靴を半分脱いだリュウ。

「え…えと、失礼します」

とリュウに向かって苦笑したレオンが、サラの唇にキスした瞬間、

すっっっぱーーーーーん！！！

とレオンの後頭部に靴を投げつけた。

「――…っ……！？」

痛みに頭を押さえるレオン。

サラが声をあげる。

「わっ、わあああぁぁぁぁああぁぁあ！？　レオ兄、大丈夫！？　ちょ、ちょっと親父！！　何考えてんの！？」

「ハ…ハエ止まってた」

と言って靴を履きなおしながら、フンと鼻を鳴らして顔を逸らすリュウ。

キラが再び深い溜め息を吐く。

「いい加減にするのだ、リュウ。次私の可愛い弟にそんなことしたら、私は本気で怒るからな」

「……」

ぎゅっと奥歯を噛み締めたリュウ。

やり直したサラとレオンのキスは見つめていられなかった。

グレルがぽりぽりとコメカミの辺りを指で掻きながら言う。

「えーと、次は何すんだ？　新郎新婦退場か？」

「ああー！　ちょっと待って！」とサラ。「ここで新婦から両親への手紙タ～イム！」

えっ？

と、驚いた顔になるリュウとキラ、カレンの両親。

そんなことは聞かされていなかった。

カレンが微笑んで続ける。

「披露宴をやらないから、ここで感謝の気持ちをお父さまお母さまに伝えようっていうことにしたのですわ。では、まずはあたくしから」

と、カレンが両親への手紙を読み始める。

思わずカレン父が涙をぽろりと零す。

続いては、サラの番。
動揺しているようなリュウの顔を見て、サラが微笑んだ。
手紙を取り出し、リュウとキラに向かって読み上げる。

「大好きな親父とママへ」

もうこの瞬間から、目頭が熱くなってしまうリュウ。

（サラ…！）

と拳を握り締める。

「今まで約17年間、ありがとうございました」

（嫌だ…！）

「アタシはたくさん親不孝をしちゃったね。特に親父には反抗ばかりでした」

（嫌だ、嫌だ、嫌だ…！）

「それでも大切に育ててくれてありがとう。素直になれなかったけど、本当はずっと親父のこと好きだったよ」

サラの言葉を聞きながら、キラがちらりと傍らにいるリュウの顔を見上げる。

「ハンカチいるか、リュウ？」

「な、泣いてねえっ…！」

と言いながら、零れてきた一粒の涙を腕で拭うリュウ。

そんなリュウを見ながら、サラが続ける。

「アタシは今日からレオ兄と生きていくけど、親父とママの娘で、兄貴やお姉ちゃんの妹、リン・ラン、ユナ・マナ・レナ、ジュリの姉であることには変わりません。大好きな親父とママが作ったこの温かい家庭を手本に、アタシもレオ兄と温かい家庭を作っていきたいと思います。これからは毎日会えるというわけではないけど、今からでも親孝行をたくさんしていきたと思ってます。サラはいつどこにいたって、親父とママのことを想ってるよ」

リュウ、サラに背を向けて号泣。

キラの手からハンカチを取って涙を拭きまくる。

（やっぱり嫁にやりたくねえ！　やりたくねえ！　やりたくねえ！　絶対やりたくねえ！）

もちろん感動もあるが、そんな気持ちの強いリュウ。

「最後にもう一度。親父、ママ…。今まで大切に育ててくれて、本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくね」

そしてサラからリュウ・キラへの手紙タイムは終わり。

新郎新婦、腕を組んでバージンロードを歩き、退場。

これから外でブーケ・トスでもしようかときのこと。

「待て！！」

とリュウが叫んだ。
一同がリュウに振り返ると、リュウがレオンの胸倉を掴んだところだった。

「リュウ!?」

「親父っ!?」

「パパ!?」

「父上!?」

「リュウさん!?」

と一同が騒然としてしまう中。

キラがもう一度深い溜め息を吐いた。
レオンの胸倉を掴んでいるリュウの腕に、手を乗せる。

「やめるのだ、リュウ。やっぱりサラの結婚は取り止めということには出来ないぞ?」

「…と…取り止めにはしねえ、取り止めにはっ……!」

「じゃあ、華の新郎の顔面でも殴り飛ばす気か? さっきも言ったが、次そんなことをレオンにしたら怒るぞ、私は」

「な、殴らねえよ…」

「じゃあ、どうする気なのだ」

とキラが訊き、一同がハラハラとしてリュウを見つめる。

そしてその注目を浴びているリュウは、携帯電話を取り出した。

とあるところに電話を掛ける。

「あー、もしもし。葉月島ギルド・ギルド長のリュウすけど。あんたうちのサラとレオンの家建築中の建築家っすよねえ」

何をする気なのかと、眉を寄せる一同。

「今すぐその家破壊して」

「――!!?」

驚愕。

「え？　急いで作ってほしいって言われたからもう完成間近？　気にすんな、この俺の命令だ。全部破壊しろ」

一同が慌てて止めようとする中、

「んじゃよろしく」

リュウが電話を切った。

「なっ、何考えてんのさ親父いいいいいいいいいいいいい!?　親父がそんなこと言っちゃったら、本当に壊しちゃうじゃあああぁぁぁぁあああんっ!!」

とぼかぼかと殴りかかってくるサラも、ぎゃあぎゃあと騒いでいる一同も無視し。

リュウは再びレオンの胸倉を掴んだ。

「おい、レオン」

「な、何、リュウ」

「俺は心優しい男だから、サラと結婚するなとは言わねえ」

「いや、心優しかったら出来上がり掛けの家を破壊しな――」

「だがな、てめえは…！」

とレオンの言葉を遮ったリュウ。

大きく息を吸い込んで絶叫した。

「てめえは、婿養子だあああぁぁぁああぁぁぁ

の荷物。

まとめていた自分の荷物もダンボールの中から再び出し、サラがぷんすかと怒っている。

「マジもう信じらんない、親父の奴っ！！」

「ま、まあまあ、サラ」

「何？　レオ兄は腹立たないわけ！？」

「僕は別に婿養子でも構わないしさ」

「でもさあ、家まで壊しちゃうなんて最低だよ！　やっぱり最悪だ、親父の奴！！」

「そういうこと言わないの、サラ。リュウはサラと離れて暮らすことが出来ないほど、サラが可愛いんだよ。それに嫁にやるより婿養子をもらった方が、気分的に楽なんだろうね」

「だからって――」

レオンがサラの口塞いだ。

戸口の方を見る。

少し開いているドアの外に感じる気配。

サラがどすどすと歩いて行き、ドアを蹴り開けた。

「立ち聞きしてんなっつの、このバカ親父」

「…と…通りかかっただけだ」

と、ドアの後ろに立っているリュウ。

サラがドアの後ろに顔をやると、リュウがブーケを2つ持ちながら立っていた。

昨日の結婚式でのブーケ・トスの際、これ以上娘を結婚させまいと、誰よりも高くジャンプして奪い取ったものだ。

「ブーケ持って何してんの」

「も、持ってないと他の娘が持って行っちまう」

「枯れるまで持ってる気？」

「持ってる」

サラが呆れて溜め息を吐いた。

「邪魔。さっさとどっか行って」

「……」

1年前のように冷たくなってしまったサラの態度に、リュウが落ち込んだ様子で階段へと向かっていく。

サラに最低と言われ、最悪と言われ、バカと言われ、邪魔と言われ、大ダメージを食らったらしいその身体は今にも倒れそうだった。

大きな背のはずが、小さく見えてしまう。

（まったくもう、アタシの親父は……）

と、もう一度溜め息を吐いたサラ。

「親父」

と、リュウを呼び止めた。

リュウが恐る恐るというように振り返る。

「親父って本当、自分勝手だよね」

「…わ…悪い……」

と俯いたリュウ。

「…でもま、結婚許してくれてありがと」

そんなサラの言葉に顔をあげた。

「この賑やかな家庭から離れて暮らすのもちょっと寂しいかなって思ってたし、ここにはカレンもいることだし……、いいよもう。でもその代わり、新婚生活を邪魔するようなことはしないでよね？」

「…お、おうっ……！」

とリュウの顔がぱっと明るくなったときのこと。

「おぉーい、リュウ」

と1階からグレルの声。

リュウが顔を向けると、グレルがダンボールを持って玄関に立っていた。

「あれ、師匠。今日仕事大丈夫なんすか」
「おう、引越しだから休み取った。これ1階に運ぶなー」
「いや、レオンはサラと一緒の部屋だから2階に運んで」
「そんな無粋なことできねーぞーっと♪」
「は…？」
リュウは眉を寄せた。
サラが言う。
「何、親父…。分かってたんじゃないの？」
「は？」
と一度サラに振り返り、もう一度グレルを見たリュウ。
グレルのダンボールを指して訊く。
「ソレ誰の荷物？」
「オレのだぞーっと♪」
「――は！？」リュウ、驚愕。「ちょ、ちょっと待て！　師匠、何であんたまでウチに来んだよ！？」
「何でって、ペットと飼い主は1セットだろーっと♪」

「ふ、ふざけんな！！」

「仕方ないって、親父」とサラ。「アタシとレオ兄の新しく出来るはずの家でだって、グレルおじさんと同居の予定だったし」

「んなこと言ったって、おまえ…！」とリュウはサラを見ながら、グレルを指差す。「あんなむさ苦しくて役立たずなデケー熊、邪魔なだけじゃねーか！　レオンはシュウに続いて召使いって感じだからいいけどよ！　あんなのが来たら俺のハーレムが――」

「んじゃ、今日からオレも家族ってことでよろしくな♪」

なんて声に言葉を遮られ、ぎょっとしてグレルに振り返ったリュウ。

グレルの指示で、引越し屋がダンボールを抱えて次から次へと家の中に入ってくる。

それを見ながら、昨日に続いて絶叫した。

「でっ、出て行けえええええええ

第１２６話　新婚さんなんです

家族が増えてから一週間。
食卓はますます賑やかに。

只今朝食タイムだ。

「くぉら！　リン・ラン！　デザートは最後に食えと何度言えば分かるんだよ！？」

なんて相変わらず騒がしいのシュウの傍ら、

「カレン、味噌汁おかわり」

「はい、お義父(とう)さま」

「私が持ってくるから良いぞ、カレン」

「いいえ、お義母(かあ)さまは座っていてくださいな♪」

リュウとキラ、カレンはすっかり舅・姑&嫁関係。
一年前から居候していたカレン故に、『お義父さま』『お義母さま』と呼ばれてもそんなに違和感はなかった。

違和感があるのは、新しく増えたもう1人の家族の方。

「あの、お義父さ――」

「絞めるぞレオン」

「……。ねえ、お義母さ――」

「レオン。わ、私も『お義母さん』と言われるのは変な感じがするぞ。私はおまえを弟のように思っているからな」

「や、やっぱり？」

レオン、苦笑。

今まで通り『リュウ』と『キラ』と呼ぶことにした。

そして一番その存在に違和感があるのは、

「おぉーい、カレン。オレも味噌汁おかわり～。あと卵焼きと魚7匹もな♪」

レオンに着いてきた同居人のグレルである。

「ああもう！　俺のハーレムはどこへ行った！！」

「なーんだよ、リュウ？」

「何でたった1人でこんなにもむさ苦しい食卓になるんだよ！？」

「んー？」と食卓を見回すグレル。「美しい食卓だぞーっと♪　リュウ、おまえ誰見て言ってんだあ？」

「あ・ん・た・だ・よ……！？」

バキっ

とリュウの手の中で折れた箸。

「オレぇ？」

「他に誰がいるんだよ！？　え！？　この熊が！！」

「リ○ックマ可愛いじゃねーかよー？」

「リアル熊に近いあんたは可愛くねえ！！」

「がっはっは！　オレの弟子はツンデレツンデレっとな♪」

怒りで引きつるリュウの顔。
リュウが再び声を上げようとしたとき、シュウが口を挟んだ。

「もういいじゃねーかよ、親父。親父がレオ兄を婿養子にした結果なんだから自業自得だろ？」

「るせえ！！」

ビシっ

とシュウの額に折れた箸を投げつけたリュウ。

「はい、お義父さま。新しいお箸」

「おう」とカレンから新しい箸を受け取り、気を取り直して食事を再開する。「んで、シュウ」

「ん？」

「裸エプロンどうだった」

「ぶ！？」シュウ、味噌汁噴射。「な、ななな、なんの話っ？」

同時にカレンは箸を床に落とした。

「おまえらが今朝早くキッチンにこそこそ向かって行ったのなんて知ってんだよ」

「み、見てたのかよ！？」

「見てねーよ。俺、キラと寝起きの3発目の最中だったし」

「アンタ5時からそんなことしてんの！？」

「5時からじゃねーよ、4時からだ。おまえらだって似たようなもんだろ」

「う……」

と顔を見合わせ、赤面するシュウとカレン。

キラとミラが納得したように言う。

「それで今朝、私がキッチンへやって来たときには全て朝食が出来上がっていたのだな」

「それで今朝、双子と三つ子のお弁当まで出来上がっていたのね」

「裸エプロン…」

と頷きながら、ぼそっと呟いたリン・ラン。

カレンが慌てて言う。

「だ、大丈夫よリンちゃんランちゃん!?　あたくし、は、裸エプロンなんてやってな――」

「ハァハァハァ…！　あっ、兄上の裸エプロン～～～っ……！！」

「ぶ!?」シュウ、2度目の味噌汁噴射。「オっ、オレを想像するなあぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁああああっ！！」

「がっはっは！」と大口開けて笑い、食べかすをシュウの顔面に飛ばしたグレル。「シュウおまえ、裸エプロンやったのかぁ？」

「やっ、やってねえっ！！　ってか、食べかす飛ばさな――」

「可愛いぞ～っと♪」

「キモいわっ！！」

「おい、シュウ」と強張った顔で口を挟んだリュウ。「おまえちゃんとゴムつけたんだろうな…!?　しつこいようだが俺は祖父さんになるなんてまだ嫌だからな……!?」

「つ、つけたよ…」

「俺はキラに裸エプロンやらせたとき思わず生で突っ込んだからおまえもそうに違いない」

「つ、つけたって言ってんだろ！」

「今朝カレンに裸エプロンやらせたが、おまえはちゃんとゴムをつけたと！？」

「つけたったら、つけた！　ちゃんとつけてからやったよオレはっ！」

「そうか」と、安堵したように味噌汁をすするリュウ。「おまえら今朝、裸エプロンやったのか」

「――！！？」

し、しまった！！

シュウとカレン、赤面。

「よし、誰かキッチンのゴミ箱チェックしろ」

「ハイですなのだ父上っ！！」

とリン・ランが立ち上がり、シュウとカレンは顔を真っ赤にして2匹を押さえつける。

「ぎっ、ぎゃあああああ！　おっ、おまえらやめろ！！」

「リンちゃんランちゃんやめてえぇぇぇぇえええぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

「ハァハァハァ…！　くまなく探すのだ、ラン……！」

「ハァハァハァ…！　ティッシュに包んで捨てるそうだぞ、リン……！」

「なっ、何でそう変態なんだよおまえらはっ！？　ああもうっ！！」とレオンに顔を向けるシュウ。「頼むレオ兄、ゴミ捨ててきてくれっ！！」

「分かった分かった」

と苦笑し、レオンが立ち上がった。

キッチンのゴミを持ち、燃えるゴミの袋の中に入れて玄関へと向かっていく。

「ったく、新婚は熱いぜ」とリュウが短く笑う。「きっと昨日もやったんだな、裸エプロン。昨日の味噌汁の具なんて、カレン上手く切れないでやんの」

「あはは。親父」

「何だ、サラ」

「それアタシ」

「は」

「やっぱエッチしながらじゃ切りにくくってさあ、ごめんごめん」

「……」

「さぁーて、アタシもレオ兄とゴミ捨て行ってこようっと♪」

と立ち上がったサラよりも早く、

「レオンてーめえ、待ちやがれぇぇぇ

朝食タイムが終わり、部屋へと戻ってきたシュウとカレン。
カレンが使っていた向かいの部屋のものも運んできて、今までシュウの部屋だったところはシュウとカレンの夫婦部屋に。
それまで普通の男の子を思わせていたシュウの部屋は、もうすっかりカレンの手により乙女な趣味に変わり果てていた。

正直、落ち着かないシュウである。

「……。なあ、カレン」

「何かしら？」

「せ、せめてピンクの花柄カーテンはやめねえ？」

「あら、嫌なの？」

「お、落ち着かねえよ…」

「そう。じゃあ、新しいカーテン買いに行こうかしら？」

「そうしてくれると有難い。な、なるべく無地で頼むわ…」

「分かったわ、ピンクの無地ね♪」

と、るんるんとした様子でクローゼットへと向かっていくカレンを見ながら、シュウは苦笑する。

（ピンクっていう色にも抵抗あんだけど…。…ま、いいか）

とシュウは思う。

（オレのかっわいい嫁さんがそうしたいって言ってるんだしな）

カレンがクローゼットを開けながら訊く。

「ねえ、シュウ？　今日のお洋服はどれがいいかしら？」

「もう着替えんの？」

「ダメなの？」

「今朝弁当作りもしておいたから、まだ大分時間余ってるだろ」

「だから？」

「だ、だだだからっ…」

と、赤面しながらベッドに顔を向けたシュウ。

そこには今朝使ったエプロンが置いてある。

シュウの視線を追っていったカレンも赤面する。

「ま、またするのっ？」

うんうんとシュウが2回頷きながら鼻にティッシュを詰め込む。

「も、もうっ、シュウったら…！」

と、さも仕方なさそうに言って、寝巻きのパイル地キャミソールワンピースを脱ぐカレン。
裸になり、いそいそとエプロンをつける様は乗り気充分である。

「これでいいかしら？」

「…っ……！！！」

イイィィィィィィっ！！

とヘッドバンキング並に頭を縦にぶんぶんと振り、親指を立てるシュウ。
鼻の穴の中のティッシュが赤く染まっていく。

「それで、今度は何をするのかしら？」

「…サ、サラ…」

「サラ？」

「サラ…リーマンと団地妻ごっこ……！」

シュウ、鼻の穴のティッシュ交換。

「そ、それってつまり、一般家庭のご夫婦がやってそうなことをやればいいの？」

「おうっ…！」

と、いうわけで。

サラリーマンと団地妻ごっこ（？）開始。

クローゼットを開け、ワイシャツとスーツのズボンを身にまとうシュウ。

カレンがネクタイを取り出す。

「今日はこのネクタイね、アナタ」

「おう、サンキュ……、オ、オマエ」

と、にやにやと笑ってしまいながらネクタイを結ぶシュウ。

「今日は何時頃に帰るのかしら？」

「今日は飲み会があるから遅くなる」

「アナタの課長昇進祝いですものね。でもあまり遅くならないでね？　寂しいわ」

「分かった、なるべく早く帰ってくる」と言いながら、スーツのジャケットを着るシュウ。「それじゃ――」

「あっ、待ってアナタ！　ネクタイ曲がってる」

「あれ」

「はい、ＯＫよ」

「おう、サンキュ」

と部屋のドアが玄関のつもりで、戸口へと向かうシュウ。
その後ろをカバンを持って着いて行くカレン。

「はい、アナタ。カバン」

「おう」とカバンを受け取り、カレンに顔を近づけるシュウ。「ちゅーーーっ…」

「アナタってばそんな、子供たちの前でっ…！」

「こらこら見るんじゃないよ、おまえたち」

なんて、子供がいるつもりになってカバンで顔を隠しながら『いってきますのキス』をしてみちゃったりして。

「それじゃ、行って来る。戸締まりしっかりな」

「ええ。あなたも気をつけてね。いってらっしゃい」

ガチャっ

とドアを開け、廊下に出て行ったシュウ。

バタン

と扉を閉めてから1秒で帰宅。

「ただいま、オマエ」

「おかえりなさい、アナタ。ええと、ご飯はいらないわよね。じゃ

あ、お風呂にする？　それともっ…」

と、カレンの頬が染まる。

「そ、それともっ？」

「あっ…えとっ……」

「そ、そそそそそそそそそそれとも…！？」

と興奮気味に訊きながら、ネクタイを緩め、ジャケットのボタンを外すシュウ。

「…カっ…カカカ…カモオォォォンっ……！？」

とのカレンの誘惑にシュウの鼻の穴のティッシュが、

スポォォォォォン！！

と発射。

「イエッッッサァァァァァァァァァァっ！！」と悶えながらネクタイとジャケットをポイっと脱ぎ捨て、「本日2度目のフィーバァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！！」

シュウ、カレンを抱っこしてベッドにダイブ。

黒猫の尾っぽをぐるんぐるんと回しながらカレンの身体のあちこちに吸い付く。

「あんもう、さっきもしたばかりなのにっ……！　アナタってばダメなのですわっ……！」

「い、いいいいいいいいいじゃねーかオマエっ……！　だってオレたち！」

「新・婚・サン」

「いらっしゃあぁぁぁ

んなに薄いゴムでもやっぱり生には敵わねえもんな」

「こ、こら――」

「あんまりでけー声出すなよ、オマエ。子供たちにバレちまう。特に長男にバレたらうるさくて仕方ね――」

バァンっ！

と、シュウに蹴り開けられたドア。

戸口の脇でキラを壁に押し付けているリュウを見ながら、シュウが声をあげる。

「バレてんだよ、このエロ親父がっ！！」

「チッ、気付きやがった」

「生ですんな、生で！　これ以上弟妹はいらねえって言ってんだろ！？　朝飯前に何度もやったクセに、マジ信じらんねえっ！！」

「人のこと言えねーだろ、おまえ。大体、わざわざスーツに着替えてまで何バカなことしてんだ。思わず失笑したぜ」

「母上も失笑したときに鼻水出たぞ、シュウ」

「なっ、なっ、なっ…！」と顔が真っ赤になっていくシュウ。「何で聞いてんだよっ！！」

「何で俺たちがいることに気付かねーんだ。さっきおまえが一度部屋から出て来たとき近くにいたぜ？」

「だっ、だったら言えよっ！！」

「おまえらのあまりのバカさに固まっちまってよ」

と言いながらリュウがシュウの部屋の中を覗き込む。

「きゃっ！」

とカレンが声をあげ、布団を顎の下まで被った。

「おい、カレン。課長昇進祝いだの細かい演技にゃ少々感心したが…、シュウと一緒にいるが故におまえもバカになったんじゃねえ？」

「ほっ、放っておいてくださいお義父さまっ！！　新婚さんなんてこんなものなのですわっ！！」

「なかなかいねえと思うが」

「……っ……！！」

真っ赤に染まっていくカレンの顔と首。

「んで」とリュウが続ける。「シュウの相手は後にして早く着替えろ、カレン。銃の使い方がマシになってきたおまえに初仕事を与える」

「えっ！？」

とシュウとカレンが同時に声をあげた。

「カ、カカカ、カレンが初仕事!?　1人で!?」シュウ、狼狽。
「危ない危ない危ないっ!!　ダっ、ダメだそんなのっ!!」
「安心しろ。手出しはしねえが、俺も着いて行く」
「オっ、オレも着いて行くっ!!」
「バカ言ってんじゃねえ。おまえは自分の仕事してろ。で、帰ってきたら休まずキラの元で修行だ」
「で、でもやっぱり心配だか――」
「シュウ」とシュウの言葉を遮り、溜め息を吐いたリュウ。「安心しろって言ってんだろ。今んところ、間違いなくおまえより俺の方がカレンのこと守れんだからよ」
「う、うるせーなっ…!　わ、分かったよ、もうっ……!」
と言いながら、ちらりとカレンを見たシュウ。
不安そうな顔をしている。
（やっぱりこっそり着いて行こう）
と思った途端、
ガシっ!
と頭に乗ってきたリュウの手。
シュウの髪を引っ掴む。

「あでででででで!?」

「おまえ今、心の中で前言撤回しただろ」

「えっ!?　してねーよっ!?（バ、バレてるぅ!）」

「そんなにお父上様が信用ねえのか!?　あ!?」

「いでででで〜っ!　ちょ、親父っ、そんなに引っ張ったらハゲるぅ!　し、信用してるからあぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁあっ!!」

「だったらおまえは自分の目標に向かって修行してりゃいいんだよ」

ふん、と鼻を鳴らしてリュウがシュウから手を離した。

シュウの目標は『親父を超えること』。

決して忘れてるわけではない。

だが、

（カレンが心配で仕方ねえよ…）

よって、

（やっぱり仕事の合間に、こっそり様子見に行こうっと……）

第１２７話　カレンの初仕事

シュウ宅の書斎の中。
葉月ギルドのギルド長であるリュウが、回転椅子に座って数枚の紙を眺めていた。
依頼内容の書かれている紙だ。

リュウの脇に立っているカレンが訊く。

「お義父さま、決まりましたか？」

リュウはカレンの初仕事用の依頼を探していた。
数秒後、リュウが口を開く。

「決まった。これにする」

と、リュウがカレンに渡した紙に書かれているのは。

『依頼内容：うちの子に噛み付いたスライムを退治して！
依頼者：タナカ
住所：葉月町６丁目３２－９
連絡先：０９０－△△△－□□□□
報酬金額：１万ゴールド』

リュウが続ける。

「リンクが電話で依頼者から詳細を聞かされたところ、まん丸太った赤ん坊の美味そうな足に噛み付いたスライムがいるんだと。依頼

者がちょっと目を離した隙に」

「まあ、危険ですわ」

「おまえも頬とか腕とか太股とか美味そうなんだから噛まれっかもな」

「しっ、失礼ですわお義父さまっ！！」

「スライムは珍しく虹色してるっつーし、すぐに分かるだろ。場所は俺の仕事で行くところの近くにある平原。だから途中で寄ってやる。早く武器持ってこい。行くぞ」

「はい、お義父さまっ」

と小走りで書斎の戸口へと向かって行くカレン。

そのとき書斎のドアに耳をへばりつけていたシュウは、慌ててドアの後ろに隠れた。

武器である銃を部屋に取りに行ったカレンの背を見つめる。

（よしよし、平原だな。カレンが心配だから仕事の合間にこっそり見に行くぜ、オレ。あれ、でも）

シュウは眉を寄せた。

（どこの平原だよ）

葉月島のとある平原。
カレンの前方５０ｍのところに虹色のゼリー状のモンスター――スライムが春の日差しの下で堂々昼寝している。

「特徴からいってアイツで間違いねーな」と、カレンの傍らにいるリュウ。「さあ、殺(や)れ」

「そ、そんなこと言われても怖いのですわっ……」

と、手にリボルバーを持ちながらも後ずさるカレン。

「寝てっから大丈夫だ」

「で、でもぉ……きゃっ！」とカレンがリュウの背に隠れた。「うっ、動きましたわっ！」

「寝返りだろ。そのリボルバーの１発でも当たれば死ぬ。早くしろよ」

「は、はいぃっ……」

と恐る恐るリュウの背から出るカレン。
この距離からでは銃弾がスライムに当たる自信がないので、音を立てないようにして２０ｍほど進む。

「え、ええとぉ…、弾は入ってるから、銃を構えて撃鉄を引き起こしてぇ……」

「もう少し素早くできねーのか、おまえは」

「て、手が震えるのですわっ！　…コ、コッキング完了っ……！」

「よし、撃て」

「は、ははは、はいっ！」

とスライムに銃口を向け、引き金を引いたカレン。
手が震えて狙いが定まらなかった。

ズキューーーン！

と飛んでいった弾丸は、スライムに掠りもせず遠くへと飛んでいく。

「あっ！」

しまった！

と思ったカレン。
銃声でスライムが昼寝から目を覚ましてしまった。
カレン目掛けて突進してくる。

「きゃっ、きゃあああああああああああああああああ！」

と絶叫しながらスライムから逃げ回るカレンに、リュウの顔が引きつった。

「俺を怒らせてえのか、おまえは」

「お義父さま助けてくださあああああああああいっ！」

「甘えんな」

「きゃあああああああああああ！　こっち来ないでえええええええええええ！」

いつまでも逃げ回っているカレン。

リュウが溜め息を吐く。

「おまえはハンターになるって決めたんだろうが。いつまでも逃げてねえで根性見せろよ」

「だ、だって――」

「そんな」とカレンの言葉を遮ったリュウが、短く嘲笑する。「男らしい胸元してんだからよ」

ズキューーーン！！

とリュウ目掛けて放たれた弾丸。

それを顔の前で摘んだリュウ。

正直、びびった。

「おま……」

「黙っていてくださいな、お義父さま…！？」

「…お、おう（こいつ、乳に関して冗談が通じねえレベルに達して

やがる…）」

今ので妙に冷静になったカレン。

後ずさって逃げながらも、スライムに銃口を向ける。

シュウがこの場へと辿り着いたのはこのとき。

（こ、ここの平原だったか…！）

他にここから離れたところにある2つの平原へと行ってきたシュウは、近くの岩に身を隠した。

顔を覗かせ、カレンの様子を見つめる。

（おお、がんばってるじゃねーか、カレン）

カレンがリボルバーの撃鉄を起こし、スライムに狙いを定め、引き金を引く。

辺りに響いた銃声。

弾丸はスライムの急所に命中し、見事スライムを退治したカレンにシュウの目が丸くなる。

（お、おおおおおおおおおっ！！　カ、カレンがスライム倒したあぁぁぁあああぁぁっぁあああぁぁぁあっ！！）

とシュウが心の中で驚きに声を上げると同時に、カレンが舞い上がった。

「きゃあああああああああ！　やったのですわあああああああああっ！　ねえ、お義父さまっ！？　見てましたっ！？　あたくし、

モンスターを倒したのですわあああああああああああああああっ！！」

とカレンはぴょんぴょんと跳ねながらリュウに駆け寄っていく。

そして思わずと言ったようにリュウに抱きついたカレンを見て、シュウはムッとし。

「おう、よくやった」

とカレンの頭を撫でてやるリュウを見て、さらにムッとする。

（なんか、仲良くねえ？）

約一ヵ月半前から、カレンと仕事を共にしていないシュウ。

今やカレンの師匠状態になっているリュウに、ときどき嫉妬してしまう。

決して2人を疑っているわけではないし、舅と嫁の仲を上手くやってくれているのは良いことだと思う。

だけどやっぱり腹が立つ。

そして少し凹む。

（仕事行こ……）

とシュウが去って行ったあと。

リュウが財布から一万ゴールドを取り出してカレンに渡す。

「ほら、おまえが初めて1人で稼いだ報酬だ」

「ありがとうございますっ！」

と、１万ゴールドを両手で握ったカレン。

お嬢様育ちのカレンにとって、決して大金ではない。

だけど、初めて自分１人で稼いだと思うととてつもなく嬉しかった。

「その初報酬、どうすんだ」

「両親にご馳走とも考えたけれど、やっぱりまずは――」

「俺か」

「……。シュウに何かプレゼントを…」

「おい」

「だって、お義父さま？　ハンターになりたてのあたくしの面倒を見てくれたのは、シュウなのですわ」

「銃教えたの俺じゃねーか」

「お義父さまはまた今度っ！　まずはシュウからなのですわっ！」

「ふん」とカレンから顔を逸らしたリュウ。「貧乳」

カチっ

とリボルバーの撃鉄を起こした音が聞こえ、早口で言葉を続けた。

「落ち着け」

カレンがリュウと一緒に帰宅すると、シュウは裏庭で修行中だった。

部屋に戻ってシュウを待つ。

ベッドに仰向けに寝転がっているカレンの手には、シュウへのプレゼントが握られていた。

（ふふ、シュウ喜んでくれるかしら）

それから1時間。

初仕事で疲れているせいか、カレンがうとうとと眠りかけた頃にシュウが部屋へと戻ってきた。

「…こらカレン、布団もかけねーで風邪引くぞ」

とシュウがカレンの肩に手を置くと、カレンが目を覚ました。

シュウの顔を見てぱっと笑顔になり、むくりと起き上がる。

「お疲れさま、シュウっ」

「おう。おまえもお疲れ。初仕事どうだった（見てたけど）」

「聞いてよ、シュウ！」と、誇らしげな様子のカレン。「あたくし、初仕事見事成功させたのですわっ♪」

「へえ、おまえが？（知ってるけど）　すげーじゃん（ついでに親父と仲が良いことも知ってるけど）」

そう言うなり立ち上がったシュウ。

バスルームへと向かっていく。

カレンが慌てて追いかけてきて、シュウの顔を覗き込んだ。

「どうしたの？　ちょっと素っ気ないのですわ…」

「別に、疲れてるだけ（凹んでんだよ…）」

「そ、そう。…あっ、シュウこれっ！」

とカレンがシュウにプレゼントを差し出した。

足を止め、ぱちぱちと瞬きをするシュウ。

「え…？」

「初報酬で、シュウにプレゼント買って来たのですわ」

そう言って頬を染めて笑うカレンを数秒の間見つめたあと、シュウは背を向けた。

熱いものが込み上げてきて目元を押さえる。

「な、何てことだオイっ…！　カっ、カレンが初報酬でオレに贈り物をっ…！　初報酬でオレにっ…！　オレにっ…！　うっそ、オレに……！？」

「ちょ…。大袈裟なのですわ、シュウ」

と、何だか恥ずかしくなって苦笑するカレン。
シュウが零れてきた涙を袖で拭い、再びカレンの方を向いた。

「ありがとな、カレン！」

と、カレンの手からプレゼントを受け取るシュウ。
すっかり元気を取り戻した。

「中身、何？」

「お義父さまのお仕事からお仕事への移動中に、新しく出来た下着屋さんがあったのよ。そこでおそろいのルームウェアを買って来たのですわ♪」

「へえ、ルームウェアか。んじゃ、オレこれからシャワー浴びるから着てくる」

そう言ってワクワクとしながらバスルームに入っていったシュウ。
カレンはベッドに座って待った。

「ふふ、シュウ喜んでくれるかしら。ハート柄のルームウェア♪」

それから１０分後。
シャワーの音が止まり、シュウが脱衣所へと出たのが分かった。

カレンは小走りでバスルームのドアの前へと向かう。

「ねえ、シュウっ？　もう着たっ？」

返事のないシュウ。
カレンは首をかしげた。
（あらヤダ、気に入らなかったとか？　ハート柄は可愛すぎたのかしら…）
数秒して、シュウの困惑した声が聞こえてた。
「…カ…カレン？」
「どうしたの、シュウ？」
「どうしたも何もおまえ、こ…これは一体どういう……」
「き、気に入らなかった？」
と、戸惑い気味にカレンがバスルームのドアを開けると、
「――！？」
困惑顔のシュウが、モモヒキ一枚で立っていた。
（な、何このお爺さんが穿いてそうな白いモモヒキ…！　ど、どうして…！？　あたくしは可愛いハート柄のルームウェアをっ…！
…って、ああっ！　「おまえ疲れてるだろうから座ってろ」とか言ってレジへと持って行ったのは、あたくしではなくて……！）
カレン、絶叫。
「おっ、おっ、おっ、お義父さまあああああああああああああ

ああああああああっ！！！」

リュウとキラの寝室。
一緒にバスタイムを終え、バスルームから出て来たリュウとキラ。
キラの黒猫の耳がぴくぴくと動く。

「ん？　カレンに呼ばれてるぞ、リュウ？」

「気のせいだぜ」

「そうか。ところでカレンといえば、今日は初仕事だったな。どうだったのだ？」

「ああ、成功させた。で、カレンが初報酬で俺にプレゼントしたいっていうからよ」

「ほお、リュウに！　何かプレゼントしてもらったのか？」

「おうよ。ほら、あれだ」

と、ベッドの上を指すリュウ。
キラが顔を向けると、そこには綺麗な包装紙に包まれた箱が置いてあった。

「おお。開けないのか？」

「おまえが開けていいぜ、キラ。中身はおまえ用だ」

「何だ、結局私がプレゼントされたようなものだな。あとでカレンに礼を言わねば」

と、包装紙を剥がし、箱の蓋を開けたキラ。

中身を取り出し、眉を寄せる。

「は…？」

「どうだ」

「これは…」

「エロパンツ。価格９千ゴールド」

「間違いなくカレンではなく、おまえが選んだだろう、リュウ…」

「おう」

「……」

「さあ、穿け」

「……」

シュウ用のルームウェアを、キラ用の下着に摩り替えてレジへと持って行った犯人はコイツ、

「ああ…、エロパンツ最高似合うぜキラ」

リュウだ。

三つ子の部屋。

宿題中のユナと、薬の調合中のマナの黒猫の耳がぴくぴくと動く。

「どうしたんだろうね、カレンちゃん。なんか叫んでるけど」

「さあ…」

と首をかしげるユナとマナの傍ら。

レナ、電話中。

「う、うん、分かった来週の土曜日ねっ…！　うん…うん……。…それじゃ、また明日」

と電話を切ったレナに、ユナが宿題の手を止めて振り返った。

「またミヅキくん？」

「うんっ」

「ここんとこ、毎日電話してるね」

「へへっ」

とレナが嬉しそうに笑った。
マナが訊く。

「来週の土曜、デート…？」

「う、う、うんっ…」

「どこ行くの…？」

「えっ…！？」

と裏返ったレナの声。
みるみるうちに赤く染まっていくレナの顔を見て、マナがもう一度訊いた。

「どこ行くの…？」

ユナも興味津々とレナの返答に耳を傾ける。
もう首まで真っ赤になっているレナは、声を裏返しながら答えた。

「ミ、ミミミ

第１２８話　七女のデート　～前編～

５月末のとある夜。
シュウとカレンの夫婦部屋にて。

「ア…アナタっ…」

「オ、オ、オマエっ…」

「…カ…カモォォォンっ…！」

「イエッサァァァァァァァァァァァ」

ガチャ

「ねえ兄ちゃ――」

「アァァァァァァーーーっ！！？」

これから夜のイトナミをしようと、妻であるカレンに飛び掛った長男・シュウ。
振り返って仰天。

七女・レナがドアを開けて立っていた。

「うっわあああああああ！？」と顔真っ赤にし、シュウは慌ててカレンの上から避けた。「に、にににににに兄ちゃん別にカレンに襲い掛かってたわけじゃねーよ！？　そ、それでレナっ！？　ど、どうしたっ！？」

「ご…ごめん、邪魔して……」と、レナの顔も恥ずかしそうに赤くなる。「あ、あとででいいやっ…！」

とドアを閉めて去ろうとするレナ。

カレンがベッドから起き上がり、乱れかけの寝巻きを調えながら言う。

「待って、レナちゃん。気にしなくていいのですわ。どうしたの？」

「…そ、そのっ……」

レナが部屋の中に入る。

「ほら、レナ」

と、ベッドに座っているシュウが、自分とカレンの間をぽんぽんと手で叩く。

レナは頷いてそこに座ると、話を切り出した。

「あっ、あのねっ、兄ちゃん、カレンちゃんっ…！」

「うん？」

と声をそろえたシュウとカレン。

レナの顔を覗き込むようにして見る。

「あっ、あたっ、あたしっ、明日ミヅキくんとデートなんだけどっ…」

「知ってる」と、シュウ。「ミヅキからさっきメール来た」

「まあ、そうなの？」と声を高くしたカレン。「デートってどこへ行くのかしら？」

「そのっ…えとっ……」

戸惑っているレナに、シュウも訊く。

どこでデートするかまではミヅキから聞いていなかったから。

「どこでデート？」

レナが顔を赤く染めながら答える。

「そっ、そのっ…ミヅキくんのお家にお邪魔するんだけどっ…！」

とシュウにしがみ付き、真っ赤になった顔をシュウの胸に顔を埋めるレナ。「きっ、ききき、緊張するよぉ、兄ちゃんっ……！」

「大丈夫だ、レナ。兄ちゃんがミヅキに何もしないよう言っ――」

「ミヅキくん、今度こそあたしに何かしてくれるかな！？」

「へ？」

と眉を寄せたシュウ。

胸にしがみ付いているレナに目を落とすと、レナが続けた。

「あっ、あたっ、あたしっ、ミヅキくんに手は繋いでもらってるんだけどっ…！」

「おう、知ってる。この間見たし」
「キスはまだでっ…！」
「そうなのか」
「以外ねえ」と、カレン。「ミヅキくん、手が早いイメージあるけど」
そんなカレンの言葉に、レナが反応した。
カレンに顔を向けて訊く。
「カレンちゃん、ミヅキくんに何かされたことあるの？」
「えっ？」
と声を裏返したカレンとシュウ。
「な、無いですわよっ？」
「お、おう、ないぜっ？」
と言ってレナを安心させる。
カレンがミヅキにキスされたり、痺れ薬を飲まされて危うくミヅキに犯されるところだったとは絶対に言えない。
「でも、ミヅキくんにドール作られそうになったことはあるよね」
ギクっとしたシュウとカレン。
カレンが慌てて言う。

「で、でもあれよっ？　結局あたくしのドールは完成前に処分したみたいだしっ…！」

シュウも続く。

「そ、そうそうっ…！　ミヅキ、カレン人形は最後まで作らなかったぜ…！？」

「知ってる、ミヅキくんから聞いた」とレナ。「兄ちゃんとサラ姉ちゃんが止めたんでしょ？」

「……う、うん」

と頷いたシュウとカレン。

レナが訊く。

「兄ちゃん、ミヅキくんのドールのモデルになったとき全裸になったんだよね？」

「え？　ああ、うん、そうだな」

「カレンちゃん、ミヅキくんにドール作られそうになったとき、全裸になったの？」

「いっ、いいえ！　なる前にシュウたちが止めたものっ！」

「そう…」と呟くように言い、レナが俯いた。「でも、顔だけじゃなくて身体も作られるところだったんだ、カレンちゃん……ミヅキくんに」

否定しようと思ったカレンだったが、もう遅い。
それが事実であるということが、もうすっかりレナにバレてしまっているようだ。

「それってさ、それほどまでにミヅキくんに想われてたってことだよね、カレンちゃん。いいな…、いいな……」

俯きながらそう言ったレナ。
母親譲りの銀髪から覗く口元は引きつっていた。
笑いたくても笑えない、というような。

「…な、な、な、何を言っているのかしら、レナちゃん!?」カレンは声をあげた。「レナちゃん、ミヅキくんにとっても大切にされているじゃないっ！　自信を持って！」

「う、うん……」と頷いた割には、まるで自信のないような顔をしているレナ。「そ、それじゃ、邪魔してごめんねっ…！　おやすみ兄ちゃん、カレンちゃんっ……！」

そう言って、シュウとカレンの部屋から出て行った。
ドアが静かに閉まる音を聞いたあと、カレンがシュウの顔を見た。

「いけないわっ！　いけないのですわっ！」

「な、何がだよカレン？」

「レナちゃん自信がなくなりかけてるのですわっ！　っていうか、あんなに可愛いにも関わらず最初から自身がないようにも思えるのですわっ！　たまに思うけど、この家の住人って自分がどれだけ美

しいのか分かっていないんじゃないのかしら!?」

「い、いや、別に――」

「シュウ!」と、カレンが真剣な顔をしてシュウの言葉を遮った。
「今すぐミヅキくんにメールしてちょうだい!」

「な、なんて?」

「明日のデートでレナちゃんがこれ以上自信がなくならないように、それなりのことをミヅキくんにメールして!」

「って言われてもなあ……」

と苦笑したシュウ。
携帯電話を取り出し、何てメールしようかあれやこれやと考える。

(ああもう、ストレートでいっか)

ということになり、シュウはミヅキにメールしたのだが。

『オレの妹に手を出してくれ』

何だかちょっと、複雑な気分だった。

翌日。
昨夜はバイトと、毎月葉月町で行われるオークションに出すシュ

ウ人形制作からくる疲れのため、早く就寝したミヅキ。
ＡＭ１１時３０分と遅くに目を覚まし、ベッドに寝たまま携帯電話を取ってシュウからのメールを見る。
そして寝ぼけ眼を手の甲で擦り、眉を寄せる。

「は…？　妹に手を出してくれ……？」

ミヅキはシュウに電話を掛けた。
シュウよりも先に口を開く。

「いいの？」

「は？」と言ったあと、シュウが何のことか考え中らしく数秒の間黙った。「…ああ、オレが昨日送ったメールのことな」

「レナに手出していいんだね？」

「オ、オレとしては複雑な気分なんだけどさ…。レナがさ……」

「ぼくにキスされたいって？」

「っぽい…」

「分かった」

「す、すんの？」

「する」

「…そ、それ以上のことはまだすんなよ…！？」

「レナが望まないならしない。望むならする」そう言いながら、時計に顔を向けて時刻を確認したミヅキ。「んじゃね」

と、シュウの返事を待たずに電話を切った。

レナとの待ち合わせ時間まで、３０分もない。

顔を洗って歯を磨き、着替えて寝グセを直し、家から飛び出す。

待ち合わせ5分前。

小走りだったミヅキは、少し息を切らしながら足を止めた。

待ち合わせ場所――キラの銅像前に、先にやって来ていたレナが立っている。

きょろきょろと辺りを見回して、ミヅキの姿を探している。

そんなレナを見てミヅキが微笑んだとき、レナがミヅキの姿に気付いた。

はっとして手を身体の脇にくっつけ、びしっと直立する。

「待った？　レナ」

「だ、だだだ、大丈夫！　４０分しか待ってない！」

「って、そんなに？」と驚いてミヅキの声が高くなる。「ごめん、待たせちゃって」

「き、気にしないでミヅキくんっ！　あ、あたしが早く来ただけだからっ…！」

「そ？」

うんうんうんうんと何度も頷くレナ。

「じゃ、ぼくのアパートに行こっか」

とミヅキに手を取られ、レナは頬を染めた。

ミヅキの傍らを歩きながら、あまりの動悸に眩暈が起きそうになる。

（お、おおお、落ち着くんだあたしっ…！　え、ええとまずはミヅキくんの家に着いたら一緒にお昼ご飯作って、一緒に食べて……。…そ、そのあとは!?　そのあとは何すんの!?　キ、キキキキキキキキスとかぁっ!?）

頭の中を妄想がぐるぐると駆け巡り、ぶっ倒れそうになるレナ。

後方にふらりとよろけたレナの身体を、ミヅキが慌てて腕で支える。

「レ、レナ!?　大丈夫!?」

「う、うん、大丈夫っ…！　ありがと、ミヅキくん」

と言いながら、レナは思う。

（ミヅキくんて、華奢でもやっぱり男の子だなぁ）

細いミヅキの腕は、しっかりとレナの身体を支えている。

（このままお姫様抱っこ…なんて……）

とレナがにやけたとき、足が地面から浮いた。

「――って」レナ、仰天。「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!?」

ミヅキの腕が当たっているのはレナの背と膝の裏。

（まっ、まさかのお姫様抱っこデスカァァァァァァァァァァァァっ!?）

レナの顔や首が真っ赤に染まっていく一方、ミヅキは慌てた様子で自分のアパートへと向かっていく。

レナは近くにあるミヅキの顔を見上げながら、パニック状態に。

「ミ、ミミミ

「しょ、しょしょしょしょしょ昇天するうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！」

「何それ」

「て、てて、天使さん来た、天使さん来た、天使さん来た、天使さん来た、天使さん来た、天使さん来たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「あはは」

「あっ、あああっ…！　もっ、もうダメだよっ…！　パ○ラッ…シュ……」

「……レナ？」

「……」

「……どうかした？」

「……」

「……へ？」

と、前を向いて走っていたミヅキは足を止めた。
レナに目を落として仰天し、思わず空を見渡す。
だって、

「――て、天使来た……！？」

レナが気絶していたものだから。

第１２８話　七女のデート　～前編～（後書き）

１１日の２２時３５分くらいにメールくださった読者さまへ。
うーわあぁ、宿題すんごいですな……；；
気合入れて頑張って下さい！（。＋・、ω・´）シャキーン☆　私も連載頑張ります！　いつも応援ありがとです（´；ω；、）ウッ

昨日の２２時３３分ごろメールくださった読者さまへ。
ええハイ、マナのことはグレルがしっかりと狙っておりますｗ
それでユナの恋の相手が気になりますか！　忘れられがちかもしれませんが、ユナは一応ファザコンなんですよ。
だから、ユナが誰かに恋する→ファザコンじゃなくなったユナをリュウが怪しむ→相手の男の子をリュウが見つけ出す→てーめえコラァ！→男の子アンギャアァァァ……なんて恐ろしい想像が私の頭の中にΣ（゜ロ゜ｌｌｌ）
なのでユナの恋についてはこの先どうなるか……ｗ

それから余談ですが。
女性からメールをもらうとドキドキします（＊／∇＼＊）　あ、変な意味じゃなくてｗ　珍しいんですよ、ハイｗ

第１２９話　七女のデート　～後編～

レナが目を覚ますと、知らない天井が目に入った。

「あれ…、ここどこ……？」

と考えたのはほんの一瞬。
すぐに気付いた。

（ミ、ミヅキくんのアパートだっ…！）

がばっと起き上がり、部屋の中を見回す。
割と小ざっぱりとしている。
ベッドに寝かされていることから、どうやら寝室らしい。

（ええっ…！？　ミヅキくんのベッド…！？　これ、ミヅキくんのベッド…！？　こ、ここでいつも毎日寝てんの……！？）

そう思ったら急に顔が熱くなり、レナはベッドから飛び出した。

「あたしってば何てラッキーなっ…！」

そこへやってきたミヅキ。
ドアを開け、中を覗き込む。

「あ、良かった。目覚ましたね」

「ミ、ミヅキくんっ！」と小さく飛び跳ね、ミヅキに向き直ったレナ。「あ、あああああありがとう、ベッドに寝かせてくれ――」

ぐーぎゅるるる…

と鳴ったレナの腹の虫。

ますますレナの顔が熱くなる一方、ミヅキがおかしそうに笑った。

「お昼ご飯できたから食べよう」

はっとしたレナ。

くんくんと鼻を利かせると、おいしそうな良い香りが漂ってきた。

「わ、わああ、ごめんミヅキくんっ！　1人で作らせちゃってっ…！」

「いいのいいの。ほら、早くこっちおいで。冷める前に食べよう」

「う、うんっ…！」

とレナはミヅキのあとを小走りで着いていった。

リビングに出ると、ミヅキの作った昼食がテーブルに並べられていた。

「うわぁ、おいしそう」とレナの目が丸くなる。「ミヅキくん、あたしよりずっと上手だねえ」

「一人暮らししてるからね。って、味の保証はできないけどね」

と言ったミヅキだったが、一口食べるなりレナの口の中に広がるその美味っぷり。

「お、おいしい～っ！」

どんなに好きな異性の前だからと少食のフリをしても、やっぱり食いしん坊で大食いのレナ。

ミヅキの料理を次から次へと頬張ってしまう。

「――ハッ！」

しまった！

と思ってミヅキを恐る恐る見たレナ。

ぱちぱちと瞬きをする。

引かれたと思いきや、ミヅキはレナを見て微笑んでいる。

「おいしい？　レナ」

「うっ、うんっ…！　だからあたし、つい口に詰め込んじゃってっ……！」

「良かった。まだまだあるからさ、たくさん食べていってよ」

そう言ってミヅキがレナの皿を持って立ち上がり、おかわりを盛りながら言う。

「ぼくはさ、せっかく作った料理を遠慮して食べない子より、たくさん食べてくれる子の方が好きなんだよね」

「そ、そうなのっ？」

「うん。やっぱり自分の作った料理をおいしそうに食べてくれるのは嬉しいからね」

それを聞いたレナの緊張が少し解けた。

ミヅキの料理を堪能しつつ、寝室とは逆の方向にある部屋のドアを見ながら聞いてみる。

「あそこのお部屋で、ドール作ってるの？」

「うん、あそこはドール工房」

「兄ちゃんのドール作り中とか？」

「うん。来月のオークションの分」

「へえ～、相変わらず高く売れるんだろうね」

「まあ、一番最初に比べて値段が落ちてきてるとはいえ、それはそうなんだけどさ。シュウのドールばっか作ってても飽きるんだよね。可愛い女の子ドールが作りたいよ、ぼくは」

レナの手が止まった。

「カ…、カレンちゃんみたいなっ……？」

「え？」

とミヅキがレナを見ると、レナが慌てたように再び箸を動かし始めた。

「う、ううん、なんでもないっ…！」

「レナ――」

「そ、それにしてもミヅキくんのお料理、本当においしいねっ……！」

そう言ってミヅキの言葉を遮り、ミヅキに横顔を見せて料理を口に詰め込むレナ。

笑顔が引きつっている。

「ねえ、レナ」

「こ、このエビおいしいねミヅキくんっ！」

「聞いて」

「こ、このアボカドもおいしいっ！」

「レナ」

「す、すごいなあ、ミヅキく――」

「聞けって」と、ミヅキの手が箸を持っているレナの手を引いた。

「言ってんだけど、ぼくは」

「……」

眉を吊り上げているミヅキの顔を見る、レナの淡い紫色の瞳。

じわじわと涙が溜まっていく。

ミヅキは溜め息を吐いた。

「レナの言い方聞いてると、ぼくがまだカレンちゃんのこと好きみたいなんだけど」

「…カ、カレンちゃんのドール作ろうとしたんでしょっ？　顔も身体も、全部そっくりにっ…！」

「そうだけど、それは過去の話でしょ？」

「か、過去のことだけど、それほどまでにカレンちゃんのこと好きだったんでしょっ…？」

「そうだよ」

と、ずばっと言ったミヅキ。

それを分かっていても衝撃を受けたレナ。

涙が一粒零れた。

ミヅキが続ける。

「だけど、今のぼくはレナのことが好きなんだけど？」

「……う」レナの目が丸くなる。「嘘吐いた！」

「な」ミヅキの目も丸くなる。「何でそうなるのか訊きたい」

「だってっ…！　だって、あたしなんかっ…！」レナの頬を涙がぽ

ろぽろと零れ落ちていく。「姉妹の中で一番大食いだしっ！」

「だから、ぼくはたくさん食べてくれる子の方が好きだって」

「あたしなんか、姉妹の中で一番女の子らしくないしっ！」

「サラちゃんには負けちゃうじゃない」

「勝気だしっ！」

「それもサラちゃんには負ける」

「色気もないしっ！」

「はぁ？　１４歳にそんなの求めないし」

「胸だって姉ちゃんたちに比べて小さいしっ！」

「カレンちゃんよりあるよ」

「頭だって良くないしっ！」

「ああ、バカなの？　家族とその周りが色んな意味でバカばっかなんだから仕方ないじゃん」

「……。ミヅキくんて、可愛い顔して結構毒舌だよね」

あはは、とミヅキが笑う。

「でも今の本人たちに言わないでね、怖いから」

「う、うん」

ミヅキがティッシュを取り、レナの涙を拭きながら続ける。

「ともかく、ぼくにとってレナは一番可愛いよ。ドールだって、レナが作っていいって言うなら今すぐにだって作りたい」

「……」

ミヅキを見つめるレナの瞳が揺れ動く。

「それくらい、ぼくはレナのこと好きだよ」

これは夢か現実か。

レナは考える。

レナの後頭部に回ってきたミヅキの手。

引き寄せられて、目の前数ｃｍの距離にミヅキの栗色の瞳がくる。

ミヅキが瞼を閉じ、

（あ、やっぱり睫毛長い）

レナがそんなことを思ったとき、ミヅキの唇が重なってきた。

「――！？」

え、何事っ…！？

と驚き、唇を離したレナ。
再び唇を奪われながら、ようやく実感する。
（ああ…。あたし、ミヅキくんとキスしてるんだ）
そして、
（あたし、ミヅキくんに好きって言われたんだ）
込み上げてきた嬉しさに、レナの胸が熱くなる。
（唇も熱いや…）
離さんと言わんばかりに、ミヅキに唇を奪われているレナ。
どれくらい経ったのだろう。
長い間キスされているうちに、
（あたし…やばい……）
と本気で思った。
（ねえ、ミヅキくんっ…）
ボーっとしてきた頭。
（そんなキスしちゃダメだよっ…）
軽い眩暈。

（あたしっ…あたしっ……）

頭の中、流れ始めるスーパー閉店ソング。

（マジ酸欠っ……！！）

ほーたーるのー、ひーかぁーり♪

（た、助けてえぇぇっ！　いつ息していいのか分かんないよおぉぉぉぉっ！！）

まーどーのー、ゆぅーきぃ～♪

（うあぁぁあぁぁぁ、く、苦しいぃぃぃぃっ…！）

ふーみーよむ、つーきぃーひ♪

（おっ、お願いぃっ！　脳に酸素がほしいのぉぉぉっ…！）

かーさねつぅーつ～♪

（シャッター開けてえぇぇぇぇっ…！）

いーつしか、とーしぃーも、すーぎぃーのとを～♪

（閉店しちゃ……ダ……メェっ……！！）

あーけーてぞ、けーさぁーは、わーかーれゆぅーくぅ～～～♪

バタ…

レナ、失神。

「――へっ！？　えっ、ちょっ、また昇天したあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！？」

チーン。

シュウとカレンの部屋の中。

「ちょ、ちょっと、兄ちゃん、カレンちゃん……！？」

顔を赤くし、眉を吊り上げるレナ。
今日のデートのことを報告しなければ良かったと思う。

床に突っ伏しているシュウ。
ベッドに突っ伏しているカレン。
ぷるぷると震えている。

必死に笑いを堪えている。

「しっ、仕方ないでしょっ！！　キス初めてだったんだからね、あたしっ！！」

シュウとカレンが顔をあげた。
２人とも涙目だ。

「うんうん、そうだなレナ！　ファーストキスだったんだもんな！」

「そうよね、呼吸のタイミング分からないが故に酸欠になって失神してもおかしいことじゃないわよね！」

と言っている2人の顔は、今にも爆笑し出しそうだ。

「かっわいいなぁ、オレの妹」

「可愛いのですわぁ、あたくしの義妹」

と2人に頭を撫でられて、レナの頬が膨れる。

「もうっ、あたしのこと子供扱いしてっ……！」

「それで」と、カレンがレナの顔を覗き込んだ。「キスしたってことは、ミヅキくんと両想いになったのよね？」

「う、うんっ…！」

「良かったわね、レナちゃん」

とカレンが微笑み、

「良かったな、レナ」

とシュウも微笑む。

レナも2人の顔を交互に見たあと、頬を染めて微笑んだ。

「うんっ……！」

もう寝るからと、ドアへとレナが向かっていく。
ドアノブに手を当て、一度振り返った。
「あ、ねえ。兄ちゃん、カレンちゃん」
「ん？」
「あっ…、あたしっ、ミヅキくんにドール作ってもらえるんだっ…
…！」
「へえ」と高くなったシュウの声。「本気で惚れられてんな、おまえ」
「まあ」と高くなったカレンの声。「恥ずかしいかもしれないけど頑張ってね、レナちゃん」
「う、うんっ…！　それじゃ、おやすみっ！」
とドアを開けて出て行こうとしたレナ。
再び振り返った。
「あ、それから訊きたいことがあったんだ」
「何？」
「恋人になったり夫婦になったりしても、不安になったり嫉妬したりする？」
「する」

と即答したのはシュウだ。
続いてカレンも答えた。

「まあ、するわね。やっぱり」

そっか、と頷いたあと、今度こそレナがシュウとカレンの部屋を後にした。
それを確認したあと、カレンがベッドの上で人形遊びを始める。

「ふふ、レナちゃんドールが完成したら見てみたいのですわ。とっても可愛いもの♪」

「…なあ、カレ――」

「さぁーてと、今日はどのドレスに着せ替えしようかしら♪」

「なあ――」

「あん、これ可愛いのですわあああああああああっ！」

「……」

シュウ、苦笑。
結婚しても、カレンは人形遊び中はシュウを放置するところは相変わらずだ。

「何か言った？　シュウ」

「いや、いい…」

シュウはそう言って、カレンの背後に腰掛けた。

（喧嘩になるような気がしないでもないし、ちょっとしたオレの嫉妬なだけだし、言わない方がいいよな）

とカレンの背を見つめる。

（おまえ親父と仲良くねーか、なんて……）

第１３０話　悪戯してたら…

そろそろ梅雨に入ろうか６月の夕方。
シュウとカレン、サラとレオンが結婚してから約一ヶ月が経つ。
自宅屋敷の裏庭で、キラを相手に修行しているシュウ。

「明日はサラ１７歳の誕生日だな、シュウ」

「うん、そうだね母さ――フギャアァァ！」

爪では誤って身体を切り裂いてしまうからと、木刀を持ったキラに腕の骨を折られていた。
慌てて腕の骨を正しい位置に戻し、治癒魔法を掛ける。
昨日は足の骨を折られ、一昨日は肋骨を５本折られた。

（た、たしかに母さんの爪を食らうよりはずっとマシだが…、当たり所悪かったら間違いなく死ぬよな、オレ……）

顔面蒼白してしまうシュウ。
ふと離れたところにいる、カレンに目を向ける。

（カレンは大丈夫かな、修行……）

そのカレンがいる所――裏庭の端っこの方では。
的に向かってリボルバーを構えているカレンと、その傍らに立っているリュウ。

「なあ、今作ヒロインのカレン」

「何ですの、前作主人公のお義父さま」

「おまえ、哀れだな」

「何がですの」

「前作ヒロインが絶世の美女が故に、一般的に見たらすげー可愛い方だろう今作ヒロインのおまえがブスに見える」

「……。お義母さまと比べられたら世の中のレディはほぼ全員ブスになってしまいますわ、お義父さま」

「そうだな」

「そんなことより修行の方を――」

「おお、見ろカレン！」

「何ですの、お義父さ――」

「動くたびにキラの乳が揺れてるぜ！」

「ハイハイ、そうで――」

「おまえと違って」

とリュウが言った瞬間、

ズキューーーンっ！

とリュウに向かって撃たれた銃弾。
それを胸の前で摘みながら、リュウは顔を引きつらせる。

「カレン、てーめえコラ…！　今、俺の心臓狙っただろ……！」

「お義父さまが悪いのではなくって？」

「俺が死んだらどうしてくれんだ」

「銃弾を一発食らったところでお義父さまが死ぬとでも仰るのですか？　大体、マシンガン連射したって当たらないだろうに……。失笑させないでくださいな。鼻水が出てしまいますわ」

「んだとコラ」

と顔を歪め、カレンの両頬をびろーんと引っ張るリュウ。
カレンが声をあげる。

「ひゃあああああああっ！　いっ、痛いのれすわお義父しゃまあああぁぁあぁぁぁ

（やっぱり仲良いよな、親父とカレン）

シュウから見た2人は、まるでじゃれ合っているようにしか見えなかった。

膨れたシュウの顔を見て、キラが首をかしげる。

「どうした、シュウ？」

「なあ、母さん」

「む？」

「オレってやっぱり、どこを見ても親父には劣ってるのかな」

「えっ…？」

キラ、困惑。

（な、何だ急に…？　どうしたのだ、シュウ…！？　そうか、落ち込んでいるのだな……！？）

と判断したキラ。

（よし、母上が褒め称えて元気付けてやるぞ！）

優しく微笑み、シュウの股間に目を落とした。

「おまえはリュウより若干、小さいぞ？」

「――！？」

シュウ、衝撃。

「そして、リュウとおまえの能力が入れ替わったときに母上は知ったのだ」と、相変わらず優しく微笑みながら続けるキラ。「おまえはイトナミから次のイトナミまでの回復が、リュウよりも遥かに時間を要し」

「！？」

「イトナミは最低5回はやらねば気が済まないリュウに比べ、おまえは最高3回しか出来ず」

「！！？」

「極めつけに、おまえの方が早い！」

「！！！？」

「ふふふ、どうだシュウ？」

と、すっかり褒め称えたつもりになっている天然バカ黒猫・キラ。シュウの瞳が潤んでいることに気付き、首をかしげた。

「どうしたのだ、シュ――」

「うっ、うわあああああああああああああああああああああああああ
ああんっ！！」

と目を腕で押さえ、屋敷の玄関の方へと駆けて行ったシュウ。
離れたところにいるリュウが声を大きくして訊く。

「おいキラ、あいつどうかしたのか」

「どうやら、あまりにも褒められて嬉し泣きしたみたいだぞ♪」

あはは、と笑うキラを見て、リュウとカレンは思う。

（たぶん違う）

夕食を食べず、ずっと部屋にこもり布団にもぐっていたシュウ。
リン・ランには昼間おやつを食べ過ぎて腹が一杯なのだと言い訳した。

だがそうではないことなど分かっているリュウやカレン、サラ、レオンはキラに問いただした。
シュウに何を言ったのかと。

「――と、言って私はシュウに嬉し泣きさせたのだぞ♪」

なんて自慢げに言うキラを見ながら、顔を引きつらせたリュウとカレン、サラ、レオン。
流石のリュウもシュウを哀れんでしまいながら、そろってシュウ・カレンの夫婦部屋へと向かった。

布団にもぐっているシュウを見て顔を見合わせたあと。

リュウが最初に口を開いた。

「おい、シュウ」

「…何、親父…」

「飯はちゃんと食えって」

「食欲な――」

「言ってんだろーがっ！！」

ドスっ！！

とリュウのカカト落としがシュウの腹に命中。

シュウの頭と足が浮く。

が、無反応。

「親父」

「何だ、サラ」

「兄貴死んだんじゃないの」

「かな」

「どれ、次はアタシがカカト落としを――」

「こらっ！」とレオンがサラの言葉を遮り、慌てて布団をめくる。

「シュウ!?　大丈夫!?」

「レオ兄っ…!」と、シュウの瞳が潤む。「オレっ…オレっ……!」

「大丈夫だよ、シュウ。グレルは金メダル、リュウは銀メダル、そしてシュウは銅メダルなんだから僕より大きいじゃないか。ていうか、リュウみたいなバケモノと比べられて凹むことないよ」

「それにさー、兄貴」と、サラが続く。「デカさよりカタさ派が多いから安心しなって。以前アタシと入れ替わったから知ってるけど、兄貴のデカいクセにカタかったから大丈夫だよ。よく血ぃ集まるね」

「そ、そ、そ、そうよシュウっ…!」とカレンも赤面しながら続く。「あたくし3回以上はさすがにきついし、あなたが早ぁ〜いだなんて思ったことはないのですわっ……!」

「カレン…!　でもっ、でもっ……!!」

なんて言って涙目になっているシュウを見ているうちに、ブチッと切れた短気なリュウ。

「いつまでもメソメソしてんじゃねえ!」と思わず声をあげた。「本当のことなんだから仕方ねえだろうが!　大体、カレンに言われたわけじゃねーのによ!」

「うっ、うるせーなっ!　オレがこんなに凹むのは、親父に責任があんだっ!」

「あ?」

「親父がカレンと仲良いからあぁぁぁ

バンっ！

と元カレンの部屋のドアを閉められ、

「――へブっ！？」

顔面を強打したシュウ。

顔に治癒魔法を掛けながら、ドンドンとドアを叩く。

「おっ、おい、親父！？　鍵掛けて何してんだよ！？」

そんなシュウの狼狽した声を聞きながら、リュウはにやりと笑う。

カレンはリュウの顔を見ながら苦笑した。

「お義父さま、あなたという人は……」

「カレン、おまえちょっと黙ってろ」

と小声で言ってカレンの口を手で塞ぐリュウ。

ドアの方に顔を向け、声を大きくして言う。

「急に泣き出してどうした、カレン」

「カ、カレン……！？」

と、ドアの外からシュウの声。

「そうかそうか、シュウに疑われて悲しいのか」

「ちっ、違うんだカレンっ！」

「可哀相にな、お義父上さまが慰めてやろう」

「なっ、慰めるって――」

「身体で」

「かっ、身体でえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

シュウの叫び声を訊きながら、ますますにやけてしまうリュウ。

（ああ、楽しい）

思わず悪戯はエスカレートしてしまう。

「大丈夫だカレン、おまえの乳は俺がでかくしてやる」

「ちょっ、親父っ！？」

「おまえ太股気持ちいいな、カレン」

「おっ、親父っ！　やめろっ、親父っ！」

「今日のパンツはピンクのヒモか」

「親父っ！　おい、親父ってばっ！　親――」

途切れたシュウの言葉。

それに気付かず、リュウは続ける。

「ヒモパンは脱がしやすくていいな」

「おっ、おやっ、親父っ…！？」

と、今度は裏返っているシュウの声。

「恥じてねーでイイ声出せ、カレン」

「親父っ…、ちょ、やばいっ…！　親父っ……！！」

と、震え始めたシュウの声。

続いて、サラとレオンの声。

「おっ、親父ストップ…！　マジストップしてっ……！！」

「リュ、リュウ、シュウで遊ぶのはそこまでにしてっ…！　ま、まずいよっ……！！」

心の中、笑ったリュウ。

（シュウだけじゃなく、サラとレオンまで本気にさせちまったか。さすが俺）

さらに声を大きくして続けた。

「俺のシュウよりデカいけど我慢しろよ」

次の瞬間。

「わあああああああああああっ！！　落ち着いてえええええええええええっ！！」

とシュウとサラ、レオンの絶叫。

そして、

ズガアアアアアアンっ！！

と部屋の中に吹っ飛んできたドアとシュウ、サラ、レオン。

それらは、

「――なっ…！？」

と目を丸くするリュウとカレンの脇を通り過ぎ、

ガシャアアアアアンっ！！

と窓を突き破って屋敷の外へ。

「――サ、サラっ！！」

と慌てて窓に駆け寄り、庭を見下ろしたリュウ。

暗くて分かりづらかったが、サラのことはレオンがしっかりと守ったようだった。

それより、

「お、お、お、お義父さまっ……！！」

と明らかに戦慄が走っているカレンの声を聞き、振り返ったリュウ。

（――や、やべえっ……！！）

顔面蒼白。

一気に全身の血の気が失せる。

背を伝っていく冷や汗。

ごくりと唾を飲み込み、やっとの思いで口を開く。

「…ごっ…誤解だぜ……！？」

戸口のところ。

怪しくゆらゆらと揺れるガラスのような銀色の髪。

リュウを見据える大きな黄金の瞳。

剥き出しになった牙。

そう、いつの間にか、

「リュウ、貴様というやつはあぁぁぁぁぁあぁぁぁぁ……！！」

キラが降臨していた。

「ま、待て、俺は何も――」

「切り裂いてくれるわあぁぁぁぁぁ

第１３０話　悪戯してたら…（後書き）

いつだったか、リュウＶＳキラが見たいとメールくださった読者さま。
次回、一応見れます……一応ｗ
一応ね、一応ｗ

第１３１話　骨肉争いに発展し…

シュウ宅の２階。
元カレンの部屋。

破壊されたドアと窓。
ガラスが床に飛び散っている。

「切り裂いてくれるわあぁぁあぁぁぁ

リュウとキラはシュウの頭上で言い争っている。
シュウの頭から向かって左側にリュウ、右側にキラ。

「俺がおまえ以外の女とどうこうするわけねーだろ！？」

「ふん、どうだかな。おい、カレン」と顔を上げ、2階の窓からおろおろとしているカレンに顔を向けたキラ。「おまえ、今日のパンツはピンクのヒモか」

「えっ！？」

と声を裏返し、慌てて寝巻きの中を覗いて確認するカレン。
リュウは安堵する。

（カレンのパンツがピンクのヒモだなんて、適当に言ったことだしな）

これでキラの誤解が解ける。
と、思ったのだが。

「ええとぉ…、は、はい、そうですわ」

とのカレンの返答に、リュウ驚愕。

「ハっ…！？　カレンおま……！！」

「ほ、本当にピンクのヒモでしたわ、お義父さま」

「だっ、だったら気を利かせて嘘吐きやがれ！！」

「きゃあああ、ごめんなさいっ！　お義母さま落ち着いてくださいっ！　あたくし、よく見たらピンクのＴバックゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！！」

と焦って言い直しても、もう遅かった。

「貴様という奴はっ…！　貴様という奴はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

と再びリュウに飛び掛るキラ。

リュウはキラの攻撃を避けながら、必死に弁解する。

その傍ら、仰向けに倒れているシュウをレオンが慌てて遠くへと引きずっていく。

「シュウ、大丈夫！？」

「だ、大丈夫…！」と踏まれた腹に治癒魔法をかけまくり、シュウは何とか起き上がる。「そ、それよりやべーことになっちまったっ……！！」

「だねえ」

とサラとレオンが苦笑したとき、あまりの騒ぎにシュウの妹たちとグレルが裏庭へとやって来た。

「パ、パパとママ、どうしたのお兄ちゃん？」

と戸惑いながら訊いたミラ。

シュウが答える前に、突然絶叫した。

「って、きゃあああああああああっ！！　パパの綺麗なお顔に傷があぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

とリュウのところへと駆けて行ったミラ。

キラがはっとして後方に飛び退る。

「あっ、危ないではないかミラっ！　離れていろ！」

キラの言葉をまるで聞かず、ミラが泣きながらリュウの切れた頬に治癒魔法を掛ける。

「パパっ…！　パパっ、大丈夫っ！？」

「ああ、大丈夫だミラ。こんなの掠り傷だぜ」

「良かったっ…！」

「ほら、泣くな」

リュウに抱きつくミラと、ミラを抱き締めるリュウ。

（あんたら間が悪すぎるっ……！）

シュウとサラ、レオンの顔が恐怖で強張る。

見つめる先はキラ。

タダでさえリュウの浮気を疑って気が立っていたというのに。

日々リュウに抱かれることを夢見る超・ファザコンのミラと目の前でいちゃつかれたとなっちゃあ、怒りは治まるどころか増大し。

おまけに、

「ママひどいわっ！　パパにこんなことするなんてっ…！　パパのこと大切にしないなら、私がパパもらっちゃうからねっ！！」

なんてミラが言いやがり。

ブチブチブチィっ……！！

とキラの中で何かが切れる音がし。

「ぬうぅぅうおおおおおりゃあぁぁあああぁぁぁ

ぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁあっ！！！」

完全に頭に血が上ったキラ。

リュウを睨みつける大きな黄金の瞳からは、涙が次から次へと零れている。

（ああ、俺すげー愛されてるな…）

なんて喜んでいる場合ではない。

キラの涙。

それは時に骨肉の争いを巻き起こす。

「落ち着け、キ――」

落ち着け、キラ。

と言おうとしたリュウの言葉を、サラの絶叫が遮った。

「マっ、ママァァァァァァァァァァァっ！！」とサラがキラに駆け寄り、キラの涙を必死に袖で拭う。「ママ大丈夫っ！？　ママっ！？　……こぉぉんのぉぉぉぉぉ」

と、リュウを捕らえるサラの鋭い瞳。

「バカ親父があぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「お、おい、サラっ！！」

とリュウに飛びかかろうとするサラをシュウが押さえつけたもの

の、大変なことになった。

（ああ、もうダメだ）

とシュウは思った。

サラに続いてリン・ランがブチ切れ、マナとレナもブチ切れる。

「父上のブワァァカァァァァァァァァァァァァっ！！」

「パパ、許さない…！」

「ママを泣かせるなあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

リン・ランは水魔法、マナは大地魔法、レナは光魔法をリュウにぶつける。

それはもちろんリュウにとって痛くも痒くもない。

が、心配したユナがリュウのところへと駆けて行って、キラの周りにいる一同に炎魔法で反撃する。

「パパだって反省してるよ！　もう止めて！！」

「そうだぜ、おまえら」とユナに続いてリュウを庇いに行ったグレル。「オレの可愛い弟子をあんまり苛めるんじゃねえ！！」

と、大きな声でビシッと言ってやった。

のだが。

「グレルおじさん…」

「ん？　何だ、マナ」

「こっちの味方して…」

「分かったぞーっと♪」

あっさりとキラ側へと向かった。

引きつるリュウの顔。

「し、師匠！？」

「未来の嫁さんに誘われちまったから、オレキラの方に行くぞーっと♪」

「なっ――」

「じゃーな、リュウ♪」

「さぁーて、アタシも」と、シュウの腹に肘打ちし、キラのところへと向かっていくサラ。「ママ軍っと」

「ぐ、軍って…オイっ……！」

シュウは狼狽しながらリュウの方に集まる一同と、キラの方に集まる一同を交互に見た。

すっかりリュウ軍とキラ軍に分かれ、戦う気満々になってしまっている。

「レ、レオ兄っ、どうしようっ…！」

とシュウがレオンの顔を見ると、レオンは苦笑していた。

「僕たちはどっちの味方っていうわけじゃないけど…、とりあえずリュウ側に行こう。キラたちの興奮を止めるために」そう言い、レオンが2階の窓から顔を出しているカレンに顔を向けた。「カレンちゃん、悪いけどリュウとシュウ、僕の武器を持って来てくれないかな。キラの爪やグレルを相手にするのに、丸腰じゃきついからね」

「あとアタシの武器もね」

と、サラ。

カレンはサラとレオンの顔を交互に見たあと、慌てたように言われた武器を取りに駆けて行った。

シュウとリュウ、サラ、レオンの武器を抱え、その重みにふらふらとよろけながら裏庭へと持っていく。

そしてカレンが武器を渡し終えると、シュウがすぐにカレンを後方に下がらせた。

「カレン、おまえは屋敷の中でジュリと待ってろ」

「え、ええ、分かったのですわっ…！」

と、屋敷の中へと駆けて行ったカレン。

一方、沈黙の流れている裏庭。

リュウ軍――リュウとシュウ、ミラ、ユナ、レオン。

キラ軍――キラとサラ、リン・ラン、マナ、レナ、グレル。

１０ｍほど距離を開け、向き合っていた。
妹たちはともかく、キラやグレルを見てたじろいでしまうシュウ。
リュウが小声で言う。
「まずはこの場から離れるぞ。屋敷破壊するわけにはいかねーからな」
と、リュウがこっそりと自軍の一同にまとめて足の速くなる魔法をかけた。
こくんと頷いたリュウ軍一同。
リュウがミラを左腕に抱っこし、レオンが背にユナをおんぶする。
「あっ、逃げる気だ！」
とサラが声を上げた瞬間、リュウとレオンが敷地の外に広がる森目掛けて駆け出した。
「あああっ、ちょっと待ってえぇぇぇぇぇぇぇっ！！」
とシュウも慌てて後を追いかける。
リュウの足の速くなる魔法は、魔力が高い分えらく俊足になる。
「オレ、足はえええええええええええええっ！！」
なんて仰天するシュウ。
（これならいくら母さんやグレルおじさんでも追いつけねーよな）

と安心したのは一瞬だけ。
はっとする。

（ま、待て！　オレ、足の速くなる魔法何で覚えたっけ！？）

答えは、双子や三つ子が通っている魔法学校の魔法書。

（ってことはつまり……！？）

恐る恐る振り返ったシュウ。
絶叫する。

「ぎっ、ぎゃあああああああああああああああああああっ！！」

リュウよりもずっと魔力が弱いとはいえ、向こうにだって足の速くなる魔法はある。

邪魔な木を爪で切り倒しながら駆けて来るキラとグレルの姿が、だんだんとシュウの視界に映ってきた。
ついでにグレルの背にはマナ。

「おっ、親父っ！　親父いいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！」

「うるせーな、何だよ」

とシュウよりもずっと前を走っていたリュウが振り返る。

「かっ、母さんとバケモノ来たあぁぁぁ

「まだ追いつかれんなよ」

「そっ、そんなこと言ったってえぇえええええええええええっ！！　うあぁっ、母さん鬼の形相で来たあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「おい、上」

「あぁぁあああぁぁぁぁぁぁ――って、上？」と上を見上げたシュウ。

「げっ！？」

と顔を引きつらせて思わず立ち止まった。

そこにはマナが召喚しただろう隕石さんこんばんは。

ズドォォォン…！

と落ちてきた隕石を腕で支えようとしたシュウだったが、

「――グエェェェ……！！」

仰向けの形で潰された。

その間にシュウの脇を通り過ぎていくキラ軍。

「兄ちゃん、ちょっとじっとしてて…」

なんてマナの声が聞こえ。

「オレ置いてけぼりぃぃぃぃぃぃ！？」とシュウが思っていたら、

少しして消えてくれた隕石。「おお、サンキュ、マナ！」

と、起き上がろうとしたシュウの身体に

ドサっ…！

と再び圧し掛かってきたものは。

「ハァハァハァっ…！　兄上えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……！」

リン・ランだった。

鼻息の荒い双子に、シュウの顔が引きつる。

「お、おい、おまえたち…！？　は、走ったが故にハァハァしてんだよな……！？」

「も、もちろんですなのだ、兄上えぇぇっ…！」

「カ、カレンちゃんがいない今が不倫のチャンスだとか思ってないですなのだ、兄上えぇぇっ…！」

嘘こけ。

心の中で突っ込んだシュウ。

キラを継いで夜目が利くことと、月明かりがとても明るいことでよく見えた。

リン・ランの異常なまでに興奮している顔が。

「ハァハァハァ…！　カ、カレンちゃんはいないな、ラン……！？」

「ハァハァハァ…！　だ、誰も見てないな、リン……！？」

「ま、まままままま待て、おまえたち！」シュウ、狼狽。「何か違うぞ…！？　オレたちは今、親父ＶＳ母さんの――」

「よし」と、声を揃え、シュウの服に手を掛けたリン・ラン。「兄上の身包み…！」

「おい、ちょ――」

「剥がすのだあああぁぁぁ

第１３１話　骨肉争いに発展し…（後書き）

昨日の後書きで今話にてリュウＶＳキラ見れますとか書いておきながら、まだほとんど戦ってないですね、ごめんなさい（汗）
長いので分割しますた…。

第１３２話　破壊しちゃったんです

シュウ宅の屋敷の中。
ジュリの部屋にいるカレンは狼狽していた。

「た、大変だわっ…！　大変なのですわあぁぁぁっ……！」

と部屋の中でうろうろとしているカレンの顔を、騒ぎですっかり目を覚ましたジュリが覗き込む。

「カレンちゃん？　どうしたの？」

「な、なんでもないのよ、ジュリちゃん。さあ、気にしないでおやすみ」

「はい、おやすみなさい」

と、にこっと笑って再び眠りにつくジュリ。
規則正しい寝息が聞こえてきたあと、ジュリを起こさぬようカレンは部屋から出た。

携帯電話を取り出し、リンクに電話を掛ける。

「はいはーい、リンクやけどー」

「も、もしもしリンクさんっ！？」

「どうしたん、カレンちゃん。めっさ慌ててるみたいやけど」

「たっ、大変なのですわあぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」

「えっ？　何……、ま、まさかおれの親友（リュウ）の危機なんかあぁぁぁぁぁぁあっ！？」

「そ、そそそ、そんな感じなのですわあぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！」

「まーじでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

とリンクの叫びが聞こえてから数秒後。
リンク一家が瞬間移動でシュウ宅の玄関に現れた。

「リュウ、今おれが行くでえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

シュウの自宅屋敷の敷地内から、５００ｍ離れた森の中。
シュウが狼狽して絶叫している。

「うっ、うわあああああっ！　待てっ！　待て、リン・ランっ！
兄妹で不倫なんてやべえっ！　っていうかカレンに見られたらオレもう生きていけなあああああああああああああいっ！！」

リン・ランにより、あっという間にパンツ一丁にされてしまったシュウ。
男といえど、身の危険を感じて胸元を両腕で隠してしまう。

「ハァハァハァ…！　か、隠しちゃダメなのだ兄上えぇぇ……！」

「ハァハァハァ…！　み、見せてくださいなのだ兄上えぇぇ……！」

「ハァハァハァ…！　ち、父上に比べて色気がないもののぉ……！」

「ハァハァハァ…！　ピ、ピチピチボデー溜まらないですなのだぁ……！」

「どっ、どこのオバサンだおまえらはっ……！！」

と突っ込んだシュウ。

リン・ランを突き飛ばし、半ば死に物狂いで逃げ出す。

それを鼻息荒く追うリン・ラン。

もうリュウ軍だのキラ軍だのどうでも良くなり、シュウとリン・ラン、バトル開始早々に戦線離脱。

その頃。

背負っていたユナをリュウに預け、立ち止まって振り返ったレオン。

「キラ！　我に返って！　キラ！」

必死に叫んだが、頭に血が上っているキラの耳には届かない。

「どけ！　レオン！」

とキラがいとも簡単にレオンを突き飛ばし、そのままリュウ目掛けて突進していく。

マナを背負ったグレルも、レナもそれに着いて行く。

飛ばされたレオンは、

「はい、キャ～ッチ♪」

愛する妻――サラの腕の中へ。

サラが支えきれず後方に倒れる。

「サ、サラ！？　大丈夫！？」

とレオンがサラを跨いで四つん這いになった。

「へーきへーき」と笑ったサラ。「ヘイヘイ、そこの優男サン、アタシと月明かりの下でイイコトしなぁーい？」

と、レオンの首に腕を回す。

「ちょ、ちょっとサラ？　僕たちは今、リュウとキラの争いの助手…いや、リュウとキラを止めるためにっ……！」

「なんか愛するダーリンに飛び込まれてきたら、一瞬にしてどうでも良くなっちゃったっていうかー」

あはは、と笑い、サラがレオンにキスする。

「ど、どうでも良いって、リュウとキラの喧嘩は止めないとマズイことになるよ！？」

「大丈夫だよ。ママは本気でも、親父はママ相手に本気の喧嘩できないもん。そりゃ、親父まで本気になっちゃったら葉月島消滅の危機かもしれないけどさ？」

「で、でも――」

「いーから、いーから。親父たちには後で追いつこうよ、レオ兄。それより今は生でイトナミ楽しむアルヨ」

「ま、まったくもう……。1回だけだからね？」

というわけで、サラ・レオンも戦線離脱。

夜の森の中でサラとレオンがイトナミを開始した頃。

ミラとユナを腕に抱えて走るリュウを追う、鬼の形相のキラ。

そのあとをマナを背負って走るグレルと、置いていかれないよう一生懸命着いて行っているレナ。

途中、マナが口を開いた。

「グレルおじさん、止まって…」

「お？」と、背のマナに顔を向けたグレル。「ストップだぜーっと」

急停止したが故に、後ろを駆けてきたレナが激突。

「わあっ！！」と尻餅をつき、レナが眉を吊り上げる。「もうっ、どうしたの！？」

マナがグレルの背から降りて言う。

「最高級の薬の材料みーつけ…」

「おお」

と声を高くしたレナとグレル。

「すごい、天然じゃん！　これは良い薬できるよね！」

「持って帰らなきゃだぞーっと♪」

と薬の材料を摘み始め。

マナとレナ、グレル、戦線離脱。

まだ全力疾走しているのはリュウとキラ。

リュウの左腕にはミラ、右腕にはユナが抱かれている。

リュウの後方に小さく映るキラに、ミラが必死に叫ぶ。

「ママっ！　ママもう止めてっ！　みんな戦線離脱したわっ！」

キラはまるで止まる気配がない。

よって、眉を吊り上げて続けるミラ。

「止めてってば、ママっ！　聞こえないの!?　パパを傷つけないで、パパをっ！　私のパパをっ！！」

一言多かった。

よって、さらにキラは怒り狂ってしまい。

「ぬぅおぉおうあぁぁあぁりゃあぁぁぁぁあああぁぁぁぁ

爪で伐った大木を、逃げるリュウに向かってぶん投げた。

それをリュウがひょいと避けて走り続ける。

ユナが溜まらず泣き出した。

「パ、パパパパパパパパパっ！！　マっ、ママ怖いよおぉぉぉぉぉぉおおおおぉぉぉぉぉぉおおおおっ！！」

走りながら木を避けつつ、一瞬ちらりと後方に顔を向けたリュウ。

（おう…、パパも怖い）

同感。

もはや殺気ムンムン。

（色気もムンムン（謎））

娘を両腕に抱いているが故に抜刀できないこの状態で、あのキラを相手にするのはリュウとてきつい。

このまま追いつかれたら、ミラとユナごと切り裂かれてしまう。

だが、

（ぎりぎり辿り着けるか、戦闘に適した場所に）

自宅屋敷の裏庭は広いが、リュウとキラの戦闘には狭すぎて屋敷破壊は免れない。

森の中は木が邪魔だし、夜でも多くの人々が行き交う葉月町は以ての外。

よって、リュウが選んだ場所は。

「ヒっ、ヒマワリ城！？」

と、森を抜けて高い崖を駆け上り、辿り着いたその場所を見て、目を丸くしたミラとユナ。

正しくはヒマワリ城の庭。

さすがは城の庭なだけあって、無意味に思えるほど広い。

リュウの屋敷の裏庭の２０倍はあろうか広さだ。

「だっ、誰だおまえたちはっ！！」

と仰天した警備兵が寄ってきて、武器を構える。

が、リュウの姿を見てぱちぱちと瞬きをした。

「って、リュウさん？」

「警備ご苦労。ちと庭借りっから下がってろ」

「か、借りるって一体――」

「うるせーな、単なる夫婦喧嘩だよ。早くすっこんでろ。おまえキラの爪に真っ二つにされんぞ」

それを聞いた警備兵。

慌てて逃げていき、王に知らせに行く。

リュウが地にミラとユナを降ろすと、ミラとユナはすぐさま安全

だろうところまで駆けて行く。

「ああもう、ミラ姉ちゃん、早く！」

「ま、待ってよ、ユナっ…！」

家族の中で一番身体能力の優れていないミラ。

ヒマワリ城の庭の角に逃げ込んだユナに、やっとの思いで追いつく。

息を切らしながら振り返ると、リュウとキラの戦闘が始まっていた。

リンクはリーナをカレンに預けると、ミーナと共にシュウ宅の外へと出た。

裏庭へと向かい、辺りをきょろきょろと見渡す。

すぐに分かった、リュウたちが駆けて行った方向が。

屋敷の敷地外にある森の木が切り倒され、道が出来ている。

「この道、キラが爪でやったっぽいぞリンク」

「せやな。それより、嫌な予感すんで……」

「む？」

と、ミーナがリンクの顔を覗き込むと、リンクが続けた。

「リュウ、屋敷を壊さんようにと戦いに向いてる場所へと向かったと思うんやけど…」

「だろうな」

「この森抜けたところにある崖上ると――」

「おお、ヒマワリ城だぞ！」

とミーナが言ったとき、リンクの携帯電話が鳴った。

誰からか確認したリンク、嫌な予感が的中した気がして苦笑した。

「も、もしもし王子でっかー？」

「おい、リンクっ！！　城の庭が騒がしいと思って庭を見たら、リュウとキラが戦っているではないかっ！！」

リンクの嫌な予感は的中してしまい。

声を裏返しながら、慌てて叫んだ。

「お、王子っ、城の皆はんと共に城の外へぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

ヒマワリ城の庭。

キラがリュウに向かって爪を振り回している。

「この浮気者っ！！　万年発情期っ！！　女なら誰でも良いと言うのかおまえはあぁぁぁぁぁぁああぁぁぁぁぁあっ！！」

リュウは剣でキラの爪を防御しながら言う。

「落ち着け、キラ。誤解だって言ってんだろ」

「私というものがありながらあぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」

リュウがいくら弁解しようと、まるで聞こえていないようなキラ。
リュウの周りに纏わりつき、矢鱈滅多に爪を振るっている。
その爪がときどきリュウの身体を掠めた。

「ったく…、俺の話を聞け！」

とリュウが剣を横に振るう。
キラが避けられる程度に、軽く。

その際、起こった風が城を直撃しているのだが、そのことにリュウもキラも気付いていなかった。

案の定、機敏なキラが刃を避け後方に宙返り。
たん、と身軽な音を立てて地に足を着いたキラ。

リュウの目が丸くなる。

（こ、この乳の揺れ方は風呂上り後のノーブラ…！）

一方のキラ。

「リュウ、おまえという奴はぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」

と泣き叫びながら、再びリュウに飛び掛かる。

（ああ…、よく揺れる……）

なんて剣を振るってキラと戦いつつも、にやけてしまうリュウ。

「リュウ、おまえの妻は私だけだっ…！」

（泣き顔も可愛いな、俺の黒猫（キラ）…）

恍惚とし。

「リュウ、おまえのペットは私だけだっ…！」

（おお、今日エロパンツか…）

興奮し始め。

「リュウ、おまえはっ…、おまえはっ……！！」

（ああ、待ってくれ尻っ…！）

キラが視界から消えぬよう、必死に目で追い。

「私だけを見ていれば良いのだあぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」

（触らせてくれ！）

ガキンっ！

とキラの鋭い爪を剣で切り捨て。

（乳いいいい

「さて一発っと」

「脱がすなぁぁぁ

「なあ、リュウ？　何で城が突然壊れたのだ？」

「……（あれ？）」

「しかも、あちこち今にも崩れそうになってないか？」

「……（もしかして…）」

「む？　いつの間にか城の者たちが宝を抱えて外に出てるぞ。って、何故かミーナが瞬間移動で手伝ってるみたいだぞ」

「……（俺の…）」

「どうやら全員外に出たみたいだな。…って、お？　おっ、おっ、おっ、おっ、城がっ！　おっ…おおおおおおおおおおお～～～っ！！？」

「……（剣圧のせいか？）」

今頃気付いても遅い。

リュウが剣を振るう度に起こった風で、ダメージを食らってしまったヒマワリ城。

もろもろと崩れ始め、

ズドドドドォォォォォォォォンっ……！！！

と物凄い音を立てて全壊してしまった。

（や、やべえ……）

第１３３話　流刑になりました

リュウとキラ、ミラ、ユナから遅れること３０分。
森を抜けたところにある崖の上から物凄い音がし、シュウとサラ、リン・ラン、マナ、レナ、レオン、グレルは何事かと慌てて崖を上った。

そしてヒマワリ城の庭へと出るなり、シュウは驚愕して絶叫する。

「しっ、城がねえぇぇぇ

「なあ」と、レオンの方へと顔を向けたリュウ。「どうやら俺の剣圧で破壊しちまったみてーなんだけど」

これはヤバイと顔を強張らせながら、キラの胸を揉んでいる。

「――って、いつまで私の乳を揉んでいるのだリュウっ！」

「挟みてー」

「ああもう、あとで挟んでなよ！」と、リュウの手をキラから離し、レオンが続ける。「ヒマワリ城破壊したなんて、やばいよリュウ…！　どうやら怪我人はいないっぽいけど、刑罰は免れないよっ…！」

「ど、どどど、どうすんだよ親父いいいいいいいいいいいっ！！」

と、あまりのことに声を裏返しながら駆け寄ってきたシュウ。妹たちやグレル、城にいる者を避難させていたリンクとミーナも駆け寄ってくる。

「ちょ、リュ、おま、何しっ……！！」

「落ち着けリンク」

「落ち着けへんっちゅーにっ！！　王子なんてカンカンになって怒ってんで！？」

とリンクが言うので、王子に顔を向けた一同。

駆け寄ってくる王子の顔が、明るい月明かりでよく見えた。

夜目の利くキラやシュウ、シュウの妹たち、レオン、ミーナには

その顔色まで良く見える。

真っ赤になって眉を吊り上げている王子。

立ち上がったリュウに、剣を振り下ろす。

「この愚か者があぁぁぁぁあぁぁぁあっ！！」

「王子」と、王子の剣を指で挟んで受け止めながら、リュウが訊く。

「お怪我は」

「ない！」

「チッ」

「おまえ今、舌打ちしなかったか……！？」

「空耳っす」

「それよりリュウ！　おまえは何ということをしてくれたのだ！！」

「ワザとじゃないっす」

「ワザとこんなことされて溜まるか！！　父は妙に落ち着きを払っているが、私は許さぬからな！！」

「さすが王」と、こちらへとゆっくりと歩いて来る王に目を向けたリュウ。「王子とは器の大きさがちげえ」

「なっ、なんだと！？　それはどういう意味だリュウっ！！」

喚いている王子を無視し、リュウが王の前に膝を着く。
他の一同もそれに倣う。

すっかり白くなったアゴ髭を撫でる王。
王子と同じ青い瞳で、リュウを見つめながら口を開いた。

「リュウよ…」

「申し訳ございません」

「良い。いつかはやると思っていた…」と、苦笑しながら、王が深い溜め息を吐いた。「そなたとキラの屋敷が、この城の近くに建てられたときからな……」

「父上！」と、王子が口を挟んだ。「リュウに刑罰を！」

「しかしな、リュウにはもう長い間この命を守ってもらって――」

「父上！　城が破壊されたのですよ！？　このまま何も刑罰を与えずに許すわけには行きませぬ！　リュウに刑罰を！　死刑とは言わずとも、無人島に流刑にしましょう父上！」

流刑。

その言葉を聞き、衝撃を受けたリュウ一同。

（そ、そんな…！　親父が流罪だなんてっ……！）

と、今にも震え出しそうなシュウの傍ら。

「ふっ…、ふにゃあああああん！」と、キラが泣き出した。「私が悪いのだ！　私が我を失って逆上してしまったから悪いのだ！　リュウは悪くないのだ！　罰は私が受けるのだあああああああ！！」

続いてユナ、ミラと泣き出す。

「うわあぁぁぁあぁぁんっ！　パパは悪くないもんっ！　あたしがパパとママの喧嘩止められなかったから悪いんだもんっ！　王子さまごめんなさあぁぁぁあぁぁぁあああいっ！！」

「私が悪いのです、王子さまっ…！　私がママの怒りをさらに煽っちゃったからっ…！　お願いです、パパを流罪にしないでっ……！！」

王子、激しく狼狽。

「キっ、キラ！？　ミラ、ユナ！？　な、泣くでないっ…！　わ、私はそのっ……！」

「俺の可愛い妻と娘泣かさねーでください、王子」

「すっ、すまぬリュウ！　――って、貴様あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」とさらに怒り、リュウを指差す王子。「もう決めたぞ！やっぱり貴様は無人島に流刑だ！！」」

「まっ、待ってくださいっ！！」

と、王子とリュウの間に立ちふさがったのはシュウだ。

両腕を広げ、必死にリュウを守る。

「待ってください、王子様っ！　親父を流刑にされたらっ…オレたち家族はっ……！！」

「案ずるな、シュウ。おまえのことはともかく、私がキラやキラの可愛い娘たちに苦労をかけさせるようなことなどすると思うか？」

「思いませんっ！　でもっ…、でもオレは親父が流刑だなんてっ…！　そんなっ……！！」

と涙目になってしまうシュウ。

己がリュウを必死に庇ったところで、王子の怒りが治まらないことは分かっている。

だけど庇わずにはいられなかった。

「親父は流刑にされるほど、悪いことはしていないはずです！　城破壊したのだって、ワザとじゃないんです！　知っての通り、親父はバケモノなだけであってっ…！　一家の大黒柱である親父が流刑にされるくらいなら、オレが罪を受けますっ！！」

「シュウ」

と、シュウの肩を叩いたリュウ。

今にも瞳から涙が零れ落ちそうなシュウが振り返ると、自若とした様子で続けた。

「仕方ねえよ」

「おっ、親父っ…！？」

「罪は罪だ」

「るっ、流罪にされる気かよ！？」

「ああ」

「そんなっ…！」と、大衝撃を食らったシュウ。「嫌だっ！　親父だって一応人間なんだっ！　何も持たされずに無人島に送られたら、きっと死んじまうよおぉぉおおぉぉぉぉぉおおおっ！！」

と泣き叫んだ。

リュウがぽんとシュウの頭を撫で、続ける。

「心配すんなシュウ。この時期、それなりに食料はあるってもんだ」

「でもっ…！　でもっ、無人島なんてっ……！！」

「大丈夫だ、シュウ。大丈夫だ」

リュウの優しい声。

シュウの瞳から涙が零れ落ちる。

「親父っ…！　嫌だよ親父ぃっ……！！」

「泣くな、シュウ。おまえは長男だ、しっかりしろ。…ほら、涙を拭え」

とリュウに言われ、シュウが涙を袖で拭った。

「よし…、もう大丈夫だな、シュウ？」

「う、うんっ…！」

「それじゃ、あとは頼んだからな」

「わ、分かったよ、親父…！　オレっ…、頑張るからっ……！」

「ああ、頑張ってくれ」

「うんっ…！」

「流刑」

「うんっ…！　――って、は…？」

眉を寄せ、リュウを見たシュウ。

リュウが続ける。

「カレンも連れて行けば、ハネムーン気分だろ？」

「――！！？」

驚愕したシュウ。

絶叫した。

「ちょっ、ちょちょちょちょっと待てえぇぇぇ

「オレが流刑にされんの！？」

「おう」

「何で！？」

「おまえごときじゃうちの家族支えていけねーよ。俺が流刑にされてたらやばいだろ」

「そっ、そうだけどっ！」

「俺が仕事休んだら、俺の分の仕事やらなきゃならねーことになるだろうレオンが過労でぶっ倒れるかもしれねーし」

「そっ、そうだけどっ！」

「で、レオンまでぶっ倒れたら他の超一流ハンターに俺やレオンの仕事が回って、絶対いつか逆にやられて死ぬことになんぜ？」

「そっ、そうだけどっ！」

「ちなみにそのうちの1匹はおまえになるよな」

「そっ、そうだけどっ！」

「それにおまえ、俺が罪受けるくらいなら自分が受けるって言ったじゃねーか」

「そっ、そうだけどっ！」

「てか、俺が流刑頑張れよって言ったら、『うん』って言ったー」

「そっ、そ・う・だ・け・どぉおおお

「サっ、サラ、正気か！？」

「正気です、王子さま。ねえ、レオ兄も一緒に来るよね？」

「当たり前だよ。この子たちだけじゃ不安だからね」

と、レオンがシュウとサラの頭を撫でる。

一方のリュウと王子、相談開始。

「ちょ、ちょっと王子！」

「あ、ああリュウ！」

「む、無人島はやべえ、無人島は！」

「そ、そうだな！　どこか別の島を！」

「あ、あと食料持たせてやって！」

「あ、あああもちろんだ！　というか食料だけではなく、好きなものを持って行って良いことにするぞ！」

「そ、それから期間は短く！」

「と、当然だ！　美しいレディを2人も長々と流刑になど出来るか！」

と、いうわけで。

リュウと相談を終えたあと、王子がシュウたちに振り返った。

「良いか、シュウ、サラ、レオン。それから今ここにはいないが、カレン。おまえたちは、葉月島の離島へと流刑にする。葉月島から南へ行くとあるところなのだが」

「それは」と、レオンが口を挟んだ。「桂月村（かつらづき）があるところですか？」

「そうだ」リュウが答えた。「桂月村は貧しい村だ。困ってても金がなくてギルドに依頼できねえなんてこともしょっちゅうだろうよ。おまえたち、無料出血大サービスで働いて来い」

「それから」と王子が続ける。「好きな物を持って行って良いことにする。期間は１０日間。良いな？」

シュウとサラ、レオンは承諾した。

――と、いうわけで。

翌日。

サラ１７歳の誕生日に、葉月島本土から南へ８００ｋｍ地点に浮ぶ離島へと流刑にされたシュウとカレン、サラ、レオン。

そこはまるで葉月町の夏のような暑さだった。

大自然の中から、セミの鳴き声も聞こえてくる。

食料から遊ぶものまでたんまりと持ってきた大きなバッグをシュ

ウとレオンに預け、カレンとサラが早速はしゃぎ出す。

「きゃあああああっ！　海綺麗なのですわあああああああああああああっ！！」

「デジカメ、デジカメっと！　カレン、カレン！　ポーズ取って、ポーズ！　はい、マヨネーズ♪」

シュウとレオンは思う。

（本当にハネムーンのようだ…）

まったくもって流刑にされている気がしなくて、何だか苦笑してしまう2匹。

サラが近くの山を指差して言う。

「ねね、見て見て！　寺があるよ！　まずはあそこに行ってみない？」

シュウとレオンが承諾する前に、

「レッツゴォォォォ♪」

と、腕を組んでスキップしながら向かって行っているカレンとサラ。

シュウとレオンは顔を見合わせて笑った。

「ま、いっかレオ兄。まったく罪受けてる気がしねーけどさ」

「ハネムーン楽しもうか」

と、妻の背を追う夫たち。

寺へと続く階段のところへとやって来て、寺を見上げる。

「すげー長い階段だな、オイ。何段あるんだコレ」と目を丸くしたシュウ。「カレン、こっち来い。おまえ途中でバテるぞ」

階段を上っていたカレンを、手招きした。

そしてやって来たカレンを背負って階段を上り始める。

一方のサラは、そんな心配など無用。

「ぬぉおりゃあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあっ！！」

と、元気良く階段を駆け上っている。

「ミ、ミニスカでなんちゅーことすんだアイツは……」

と兄として恥ずかしくなってしまうシュウの傍ら、レオンはそんな妻の姿をおかしそうに笑っている。

あっという間に階段を上りきったサラが、のんびり階段を上っているシュウたちに手を振る。

「ねえ、はーやくーっ！　ハゲがいるからこの島のことでも訊いてみようよーっ！」

「ハ、ハゲ…？」

と眉を寄せたシュウとカレン、レオン。
シュウが己とレオンに足の速くなる魔法を掛け、階段を駆け上る。
シュウとレオンがやってくると、サラが寺の方を指差した。
「ほら、ハゲ」
「サ、サラ…」
とサラの指す者を見て苦笑したシュウとカレン、レオン。
ハゲではなく、頭を丸めているだけだった。
カレンが続ける。
「尼さんよ、サラ…」
聞いているのか、聞いていないのか。
サラが寺の掃除をしている尼らしき者のところへと向かっていく。
シュウが言う。
「それにしても、めずらしい尼さんだなあ。赤犬の耳生えてるよ」
「そうね」と、同意して頷いたカレン。「レッドドッグの尼さんなんているのね」
「いや、レッドドッグのハーフっぽいね。ていうか、頭丸めてるけど尼さんじゃないかもしれないよ。未成年な感じがするし、修行中の身じゃないかな」

と、レオンが言ったとき。

レッドドッグの耳の生えた尼らしき者に、サラが声をかけた。

「あのう、すみませーん」

「はい？」

と、少し眉を寄せて振り返ったレッドドッグの耳の生えた尼らしき者。

「え」

サラの目が丸くなり、

「げ」

尼らしき者の顔が引きつる。

数秒の沈黙の後。

サラの大爆笑があたりに響き渡った。

「あーーーっはっはっはっはっはっはっはっはっ！！！　あんたっ…あんたっ……！！」

何事かとシュウたちがサラのところへと駆け寄ると、サラが尼らしき者を指差して叫んだ。

「キャっ、キャロルゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウつ！！

第１３３話　流刑になりました（後書き）

今回はリアル世界と比べるとツッコミどころ満載ですね。でもツッコミなしで。
まあ、このハーニャン自体突っ込んでたらキリがないんですけどね…。

昨日の２１時２７分ごろメールくださった読者さまへ。
単にリュウがバケモノなだけですｗ
決してヒマワリ城が姉〇建築なわけじゃないよ…ｗ
あっ、学校と宿題頑張ってください！

第１３４話　神の友

葉月島本土から南に８００ｋｍほど離れたところにある離島。
ここへリュウに変わって流刑にされたシュウとカレン、サラ、レオン。

流刑と言っても、好きな物を持参可だし、期間はたったの１０日間。
海は美しいし、空気はおいしい。

正直、ハネムーン気分だった。

やって来てまず最初に向かったのは、近くにあった寺。
長い階段を上り、寺へとやって来るとレッドドッグの耳の生えた尼僧らしき者の姿があった。

彼女に声をかけ、振り返った彼女の顔を確認したサラ。
指差しをして大爆笑。

その原因は、

「あんたキャロルでしょっ！？　キャロルっ！！」

文月島ギルドのギルド長兼、超一流ハンター兼、超一流変態ゲールと、文月島で最強を歌われるモンスターであるレッドドッグのケリーとの間に出来たハーフの子――キャロル。

３ヶ月～４ヶ月前、リン・ランに魔法薬を飲ませておかしくさせたり、サラの指を切り落としたりと中々とんでもないことをやらか

してくれた。

そのときはさらさらとした焦げ茶色の髪の毛が胸まであったのだが、頭を丸めて坊主になっていた。

「サラさんっ！？　どうしてあなたがここに――」

と、キャロルが言葉を切った。

サラの背後へとやってきた者たちに目をやる。

今や恐ろしくなってしまったレオンに、一番憎かったカレン。

本当に好きだったシュウ。

（って、過去形で言ったら嘘になる気がするけど…）

キャロルがシュウから顔を逸らす。

キャロルを見つめ、目が丸くなるシュウとカレン、レオン。

シュウが訊く。

「な、何でキャロルちゃんがここに？」

キャロルが戸惑ったのち、口を開いた。

「…そ…その……、わたしはしばらく世間から離れてここで修行し、そして反省なさいって、ママが……」

「なるほどね」と、レオンが口を挟んだ。「厳しいでしょ、修行は」

「は、はい…。決まった時間に、決まったことしないといけません

し、食事は1日1回で……」

「そう。今は掃除の時間？」

「は、はい…」

「でも君」と、レオンが溜め息を吐いた。「ヤル気なさそうに掃除してるように見えたけど？」

「いっ、いえっ、そんなことはっ…！」

とキャロルが声を裏返したとき、寺の奥から怒声が聞こえてきた。

「キャロル！　おまえはまたサボっているのか！」

と、姿を現したのは男。

僧衣を身にまとい、頭を丸めていることから僧のようだった。

「げ、和尚さま…」

とキャロルが顔を引きつらせると同時に、シュウたちの目が丸くなる。

その僧には、黒猫の耳――ブラックキャットの耳が生えていたから。

（ハーフ…？）

と思うシュウやカレン、サラの傍らで、レオンが呟いた。

「純粋なブラックキャットだ…」

「えっ？」

とレオンに顔を向けたあと、再び僧に顔を戻したシュウとカレン、サラ。

僧がその灰色の瞳でシュウたち1人1人の顔を見回し、最後にゆっくりとシュウに視点を置いた。

「……そなたの母親の名は何と申す」

低く落ち着いた声だ。

「えっ？」と声をあげたあと、シュウは困惑気味に答えた。「キ、キラ…ですけど……」

「やはりそうか…、そなたが……」

と微笑んだ僧に、シュウは首をかしげる。

（葉月島本土じゃオレたち家族のこと知らねー人なんていないだろうけど…。こんなテレビも携帯もないほど貧しい村があるような離島にまで、オレたちの顔が知れ渡ってんのか……？）

サラが手をあげて言う。

「はいはいはーい。アタシ、シュウ（これ）の妹でーす。で、そっちのミックスキャットの優男がアタシの旦那様で、こっちの赤い髪の人間の美少女がアタシの親友兼、シュウ（これ）の嫁さんね」

「そうであったか。おお、たしかにそなたはキラと同じ黄金の瞳をしておるな」

「お坊さん、アタシたちのママのこと知ってんの？」

「ああ。こんな」と、己の片手を膝のあたりまで持って行く僧。「幼い頃に会ったのが最後であったがな」

「えっ！？」

と、驚いたシュウ一同。

サラが真っ先に訊く。

「お坊さん年いくつ！？」

「や、そうじゃなくて」と、レオン。「キラのそんな小さい頃を知っているなんて、あなたは一体――」

「年いくつ！？」

と、レオンの言葉を遮ってもう一度訊いたサラ。

僧が言う。

「６２だ」

「６２！？」

と、驚いて声をそろえたシュウとカレン、サラ。

彼の外見年齢は２５歳ほどだ。
純モンスターなのだからそれ以上は老けないのは分かっているが、何だか驚いてしまった。

比べて、同様に己も純モンスターのせいか驚いた様子のないレオンが訊く。

「何故キラを知っているのですか？」

「キラ自身覚えていないであろうが、キラは葉月島本土ではなくここで産まれたブラックキャットだ」

「えっ…！？」

今度はシュウたちと一緒に、レオンも驚いて声をあげた。
僧が続ける。

「ここで産まれるブラックキャットは、葉月島本土で産まれるブラックキャットよりも強いと言われている。その中で特に強かったのが、キラの父親で――」

「神様！？」

と思わず僧の言葉を遮ったシュウとカレン、サラ。

「神？」

と眉を寄せる僧に、レオンが催促する。

「気にしないでお話を」

承諾した僧が話を続ける。

「彼は桁外れに強く、優しく、時たま救いようのないバカで…」

なんて言葉を聞いていると、キラの姿を思い浮かべてしまうシュウ一同。

「私の友であった」

「かっ、神様の友!?」

と声をそろえて驚き、あたふたとするシュウとカレン、サラ。

「あわわわわっ！　たっ、大変だっ！　お、おおお、親父に電話をおおおおおおおおっ!!」

「って、ここ圏外だよ兄貴ぃぃぃぃぃぃぃぃっ!!　ていうか、神様の友は仏様あぁぁあぁぁぁぁあ!?」

「と、とりあえず拝みましょぉおおおおおおおおおっ!!　おっ、お供え物はビールがいいかしらあぁぁぁあああぁぁぁぁぁあっ!?」

「って、お供え物はいらねーだろカレンっ…!　とっ、とりあえず手を合わせろ、手をっ!」

と、半ばパニックに陥り、僧に向かって手を合わせるシュウとカレン、サラ。

僧がおかしそうに笑う。

「あやつが神、か」

「ええ、神です」とレオンが微笑む。「キラの命を2度も救ってくれた。1度目はキラが幼い頃に破滅の呪文を使って、2度目は破滅の呪文を使ったキラを守ってくれて…。本当、キラのお父上は神としか言いようがありません」

「そうか…」そう言って微笑んだ僧。「話が長くなりそうだ。中へお入りください。キャロル、彼らを案内し――って」

きょろきょろと境内を見回す。

いつの間にかキャロルの姿が消えていた。

「どこへ行った、キャロル！　まったく、また逃げよって……」

「彼女は修行を真面目にやられていないのですか？」

「うむ。困ったものだ。真面目に修行すれば、一月で文月島へ帰してやるものを…」

「反省してない証拠だね」

と、小さく溜め息を吐いたサラ。

寺の中へと向かっていく僧の背を追いながら訊いた。

「ねえ、お坊さん。名前なんていうの？」

一瞬動きの止まった僧。

「わ…、私の名など気にするでない」

「はーい」

「では中に――」

「で、名前なんていうの？」

「だ、だか――」

「なんていうの？　アタシはサラ、兄貴はシュウ、アタシの旦那様はレオン、アタシの親友はカレン。で、お坊さんは？」

「……し、しつこいな」

「なんていうの？　ねえねえ、なーまーえーはーーー？」

「……」

数秒の間黙ったのち、僧が再び口を開いた。

「…タ…」

「タ？」

「タマ…と申す」

一瞬目を丸くしたサラ。

ぷっと短く笑った。

「ネーコーだーねー」
「……ね、猫だもん」

その日の晩。
葉月島本土にある、シュウ宅の書斎。

リュウが回転椅子に座り、シュウたちの送られた離島について調べていた。
そこそこ知っているつもりだったのだが、知らなかった事実があれやこれやと出てくる。

「なあ、キラ」

「何だ、リュウ？」

と、リュウの膝の上に乗っているキラがリュウの顔を覗き込む。

「あそこの離島にもブラックキャットが生息してることは知ってたけどよ」

「うむ」

「んで、葉月島本土のブラックキャットより強いらしいっていうのも聞いたことあったけどよ」

「うむ」

「昔っから人間と仲が良いとは知らなかったな」

「仲が良い？」と、キラが声を高くした。「野生のブラックキャットと、人間がか？」

「おう。何でも桂月村に住む人々を、野生のブラックキャットが助けてるとか何とか」

「まさか」

「と、思うけどよ、俺も。…でも、そのまさかかもと俺は思う」

「何故だ」

と、さらに声を高くしたキラ。

「何つーか、義父上ってそこ出身の気がしねえ？　すげー強くて、最初から……初めて墓参り行った日から、俺に優しかったから」

「言われてみればツッコミ所だったぞ。野生のブラックキャットである父上が、人間であるリュウを気に入っただなんて。しかも、たった一度の墓参りだけで」

「だろ？　やっぱ父上の出身地かもしれねえ」

「うむ…」

と頷いたキラ。

数秒黙ったのち、口を開いた。

「な、なあ、リュウ…」

「ん」

「こ、ここ葉月島本土では、私とおまえの子供であるシュウに気安く声をかけるペットのブラックキャットはいないが…」

「そうだな。野生は野生で人間の血の混じったシュウに、声すら掛けねーしな」

「そ、そこの離島ではやはりブラックキャットに声をかけられ、会話をする機会があってもおかしくないと思うかっ…？」

「そうじゃね？　野生が人間と仲が良いってんなら、ハーフ見ても忌み嫌わねえだろうし。ペットになってるブラックキャットがいたとしても、俺たちの名は知ってても姿までは知らねえ可能性高いし。気安く声かけられっかもな」

「そ、そうか…」

と言ったあと、俯いて黙ったキラ。

心地の良くない動悸に襲われていた。

（純粋な野生のブラックキャットなら、きっと気付くだろう。力があるというなら尚更だ。シュウが私の闇の力を継いで産まれて来たことを…）

闇の力を持っている＝破滅の呪文が使える。

シュウが破滅の呪文を唱えたところで、どうあがいてもキラの破滅の呪文には敵わないし、己の身が滅んでしまうこともないが。
継いだのは他でもない、最強のブラックキャットであるキラの力。
当然、使えば強力だ。

シュウは己がそんな能力を持っていることを知らない。

キラが教えていないから。
シュウが闇の力を継いでいることも、一応破滅の呪文を使えることも、何も教えていないから。

（全てはリュウのため。私の破滅の呪文と違って己の身が滅ぶことがないものの、大切な子供が破滅の呪文を使えると知ったら、リュウは…）

だがキラは親として、闇の力を受け継いだことをシュウ本人に教えなければいけないことも分かっている。

だから、シュウが本当に己の力に困り果てたときに教えようと思っていた。
あくまでも、シュウが本当に困り果てたときにだけ。

（シュウも１８だ。教える日は近いだろうと、覚悟はしていた。でも、もっともっと先であることを願っていた。むしろ、教える日など来なければ良いと思っていた。だって私はもう…）

リュウの頭を、キラがぎゅっと抱き締める。

（主（リュウ）に恐怖や悲しみを与えたくない……）

リュウがキラを抱き締めて訊く。

「どうした、キラ…？」

「何でもない…、何でもないぞ、私の愛する主」

「おまえと何年夫婦やってると思ってんだ。嘘吐いてんじゃねえ」

どきっとしたキラ。

慌てて首を横に振る。

「う、嘘など吐いておらぬっ…！」

「いーや、嘘吐いてる。俺には分かる。ほら…、気ぃ遣ってねーで言ってみろ」

「そ、そんなんじゃっ…！」

「じゃあ、照れてねーで言ってみろ」

「は？　照れ……？」

と眉を寄せたキラ。

「抱かれたいんだろ、俺に」

「違うわっ！！」

と突っ込んだが。

そのあとリュウに容赦なく強引に好き勝手抱かれたのは言うまで

もない。

（ともかく、シュウが己の隠された力を知らされずに帰ってくることを願う……）

第１３４話　神の友（後書き）

１３４話にしてようやくタマちゃんが出てこようとは…。
話進むの遅くってすみません（汗）

第１３５話　神とその友の過去

寺の本堂の中。
ブラックキャットの住職――タマが、シュウとカレン、サラ、レオンと向き合って昔を語る。

「先ほども言ったが、キラの父親は私の友であった。そう……、一番の友であった」

うんうん、と頷きながらタマの話に耳を傾けるシュウたち。

「彼は時たま本当にバカであったが、その力は桁外れに強く、そしてとても心優しい男であった。その優しさは仲間であるブラックキャットだけではなく、他の種のモンスター、それから野生のモンスターほぼ全てが忌み嫌う人間にまで与えられた」

レオンが口を挟む。

「ここのブラックキャットは、人間を助けていると聞いたことがあります。それは……」

タマが頷いた。

「人間を助ける。それはこの島で、キラの父が最初に行ったこと。誰よりも強く、誰よりも慕われた彼がそうすることにより、次第にこの島のブラックキャットは人間に心を開き、彼に倣うようになった。若かりし頃は人間をひどく嫌っていた私が人間を助けるため、こうして僧侶となったのがその証拠だ」

「ふーん？　野生は葉月島本土のブラックキャットしか見たことなかったから、何だか変な感じぃ」

と、サラ。

喉が渇いたからと持ってきたクーラーボックスを開け、ビールの缶を取り出す。

だが戸惑った素振りを見せたあと、結局開封せずクーラーボックスの中にビールの缶を戻した。

そんなサラを見て、どうしたのかとカレンが首をかしげる。

その傍ら、シュウが口を開いた。

「あの、タマさん」

「な、名で呼ばないでくれ」

「し、失礼しました。えと…、和尚さん」

「何かな」

「うちの神……いえ、オレたちの祖父は、どうしてこの島を離れたんですか？」

「ああ…、そのことか……」

と、遠い目になるタマ。

少し間を置いた後に続けた。

「彼は私が追い出したようなものなのだ…」

「追い出した？」

「よくある話だ。いや、どうか知らぬが」

「はあ…（知らねーなら言うなよ…）」

「その昔、それはもう美しいブラックキャットの女がおってな。ひどく身体が弱かったのだが、男たちの憧れの的であった。私と彼もそのうちの１匹でな。それはもう毎日のように交際を申し込んだものだ」

「ふーん」と、サラ。「毎日のように交尾を申し込んだんだ」

引きつったタマの顔。

「…こ、交際だ」

「同じことじゃん」

「……。…ご、ごほん」と咳払いをし、タマが続ける。「そ、それで、彼女は私でも他の男たちでもなく、彼を選んだ。まあ、当然といえば当然であった。彼は時たま救いようのないバカとはいえ、誰よりも強く、優しく、慕われるような男であったからな。私も他の男たちも、彼ならば仕方ないと諦めた」

「へえ、美女と交尾したい想いはその程度だったんだ」

再び引きつったタマの顔。

「交尾、交尾って…。…サラ、おまえのその性格は誰似だ」

「え、えと、父親似です。すみません…」と苦笑したシュウ。「それで、話の続きは…？」

「う、うむ」と頷き、気を取り直して話を続けるタマ。「彼と彼女の交際は結婚にまで発展してな。ある日、彼女は彼の子を孕んだのだ」

「その子がキラですか？」

レオンが訊くと、タマが頷いた。

「彼は当然、私も産まれるのを楽しみにしていた。大切な一番の友と、想いを寄せていた女の子供であるからな。そして、無事にその子は――キラは産まれたのだが……」

悲しげに曇ったタマの顔。

それを見て、シュウはふと思い出す。

（母さんから聞いたことあったっけ。母さんの母さん…オレの祖母ちゃんは、母さんが産まれてからすぐに亡くなったって……）

タマが続ける。

「彼女…キラの母親は、キラを産んでから間もなく息を引き取ってしまった。先ほども述べたとおり、彼女はひどく身体が弱くてな。私は悲しみのあまり、彼を…キラの父親を、おまえが子供を産ませたせいで彼女は亡くなってしまったのだと非難してしまった。本当は分かっていたのだが……子を産もうが産むまいが、彼女の命はそ

う長くなかったことを」

「いくら身体が弱くてもモンスター。子供を産んだことが理由で死ぬことはないでしょうからね」

そんなレオンの言葉に、タマが頷く。

「分かっていたのに、私はひどく彼を責めてしまった。毎日のようにたくさんの罵声を浴びせてしまった。あれはキラが産まれて約一ヶ月の頃だったか。知っているだろうが、純モンスターは生まれて3日で立ち、一ヶ月も経てば元気に駆け回るのだが…」

「まあ」

と声を高くしたカレン。

初耳だった。

タマが続ける。

「飛行型のモンスターがこの島を通りかかるその季節、彼は無邪気に私の周りを駆け回って遊んでいたキラを突然腕に抱いた。そして私に一言残し、頭上を通った飛行型のモンスターの背に乗ってこの島を去って行ってしまった。それが私がこの目で最後に見た彼の姿だった…」

「ふーん…？　それで、その一言は何て？」

と訊きながら、クーラーボックスに手を掛けたサラ。

すぐに蓋を閉め、やっぱりビールに手をつけなかった。

タマが答える。

「『悲しませて済まなかった』と。彼は責められたが故の辛さにこの島を去ったのではない。優しい彼は、一番の友である私の悲しんだ顔を見ていることが出来なかったのだ。己が責められた辛さよりも、私を悲しませたことが辛くて仕方がなかったのだ」

そう声を詰まらせて言ったあと、タマが間を置いた。

呟くように続ける。

「それから約４年が経った頃だ。彼が破滅の呪文を唱え、この世から消滅したのは。ブラックキャット同士、誰かが破滅の呪文を使えば感じるもの。力のあるブラックキャットは特にそれを感じ、強い者が破滅の呪文を唱えたとなれば子供でもそれを感じる。だからこの島のブラックキャットでも力のある方だった私は、ここからでも彼が呪文を唱えたことを、嫌でも感じてしまった。とても…とても強く感じた。あれほどにまで強い破滅の呪文は彼しか起こせない。彼がキラのために破滅の呪文を唱えたのだと、私はすぐに分かった。そして泣いた。いつかは彼が戻ってきてくれるだろうと信じていた私も、仲間たちも、知らせを聞いた桂月村の人間たちも、皆が泣いた…悲しみに明け暮れる日々が続いた……」

サラが再びクーラーボックスに手を掛け、離す。

「そのあとだ…、人間嫌いだった私が、ようやく彼に倣って人間を助けようと思ったのは。彼への償いの意味も含め、彼が守ってきた人間たちを守るため、私はこうして僧侶となったのだ」

なるほど、とシュウが頷いた。

「この島にはハンターがいないから心配してきたけど…。そっか、和尚さんがちゃんと守ってたんだ。オレたちの仕事、結局なさそうだな」

「仕事？　ハンターの仕事でこの島へとやって来たのか」

「いや、流刑で」

と、クーラーボックスを凝視しながらサラ。
ビールが飲みたくて仕方がないようだ。

「流刑？　そなたたち、何か悪さをしたのか」

「え、ええとぉ…」と、苦笑しながら小声になってしまうシュウ。
「ほ、本当は親父が流刑になる予定だったんだけど、オレが変わりに行けって言われて……」

「は？」と、眉を寄せたタマ。「そなたたちの父親…キラの夫は、どんな男なのだ。名はリュウということだけは風の噂で聞いたことがあるが、一体どんな悪さをしたのだ」

「いえ、その、ワザとじゃないんす、ワザとじゃ…。その、夫婦喧嘩で誤ってヒマワリ城を破壊してしまいまして……」

「そ、そうか…。しかし、流刑と言う割にはまるで旅行のように見えるのだが」

と、シュウたちのたくさんの荷物を見て言ったタマ。

「は、はい。このカレンとサラが可哀相だと、女好きな王子の気遣

いで……」

「……。そんなことで大丈夫なのか、本土は」

「はい、たぶん…」と苦笑したレオン。「それで」

と話を戻した。

「キラも破滅の呪文を唱えたことは、お気づきに？」

「うむ。父に比べて小さい爆発を感じさせたものの、やはり巨大な爆発であった。キラだと分かった。だから一時は再び悲しみに暮れたこの島だったがな。少し経ったら、キラが生きていたという噂が耳に入ってきた。実際に目で確認したわけではなかったが、私たちはその噂を信じた。死んでしまったとはいえ、彼がそう簡単にキラを死なせるとは思えなかったからな。…そしてやはり彼は、キラを守ったのだな……」

その証拠となるシュウとサラ――キラの子供たち。

2匹の顔を愛おしそうに見つめ、タマが微笑んだ。

「そなたたち、泊まるところは決まっているのか？　無かったらこの寺に泊まっていけば良い。何、気にすることはない。この寺には私とキャロルだけだ」

「いや、アタシたちは野宿でいーよ。テントあるし」と言って立ち上がったのはサラだ。「あ、でも夜になったらお風呂くらいは借りに来ようかな」

「そうか、泊まらぬのか。風呂を貸すことなど当然、困ったことが

あったらいつでも来なさい」

「ありがと、タマちゃん」

「だ、だから名で呼ぶなと…」

「いーじゃん。何だかんだで、うちの神よりマシな名前だと思うけど。タマちゃんも、うちの神に気ぃ遣ってさっきから『彼』って呼んでんでしょ？」

「……。うむ…」

「偉大な分、そう簡単に口に出して言える名前じゃないよね」

「う、うむ。何と言うか、猫ではなく違う種を思い浮かべてしまうしな」

「ねー、マジ言えないよねー、うちの神の名前」

「うむ、言えな――」

「それが『ポチ』だなんて」

「……。言っておるぞ、サラ」

「あれ、本当だ。ま、いっか。じゃーねー」

と真っ先に外へと向かって歩いて行ったサラ。

続いてシュウたちも外へと出る。

境内から出る前に一度タマに振り返って頭を下げ、そのあと長い階段を降りていく。

そのときになって、カレンは気になっていたことを訊く。

クーラーボックスからビールを取り出して、飲み始めたサラに。

「ねえ、サラ？　どうしてお寺の中ではビール飲まなかったの？和尚さまに怒られると思ったのかしら？」

「いや、タマちゃんのこと気にしてたんじゃなくてさ……」

「？」

カレンが首をかしげる傍ら、レオンが微笑んでサラの頭に手を乗せた。

「キャロルちゃんのこと……だね？」

サラが頷く。

「厳しい修行の中で、当然アルコールなんて飲めないんだろうなあと思ったらさ、何だか飲めなくって…。あのキャロルの様子だと村に行って色々贅沢なもの食っちゃ飲みしてんのかなあとも思ったけど、桂月村は貧しいからそれはないだろうし。本当はテントで野宿なんかよりお寺に泊まりたかったけど、ハネムーン気分ではしゃいじゃうアタシたちが居る場所じゃないよ」

ぱちぱちと瞬きをしたカレン。

「まぁーったく、キャロルちゃんにあんなひどいことされておきな

がら、サラってば…」

そう呆れたように言って、サラの腕を取った。
サラの横顔を見上げ、微笑んでしまう。

「ふふ、大好きよサラ♪」

「えっ！？　オレよりいいいいいいいいいいいいっ！？」

と喚くシュウ。

その背をじっと見つめている瞳がある。

「…こら、どこへ行っておった」

と溜め息を吐き、タマが頭を軽く叩いた相手はキャロル。
門から少し顔を出し、階段を降りていくシュウをじっと見つめている。

「…和尚さま」

「何だ」

「…シュウさん、お元気そうでしたか？」

「うむ」

「ついでにどうでもいいけど、サラさんの左手の薬指はちゃんとあって、エンゲージリングらしきものがはまっていましたか？」

「婚約指輪……ではなく、結婚指輪だったな。あのレオンという青年が夫だそうな」

「そうですか」

と、安堵したように小さく溜め息を吐いたキャロル。

次のタマの言葉を聞いて、思わずその顔を見上げた。

「それから、シュウとカレンも夫婦だそうな」

「えっ…？」

ずきん、と痛んだキャロルの胸。

目を見開いてタマの顔を見つめる。

「シュウさんとカレンさん…、ご結婚なされたの…ですか……？」

「そのようだぞ。彼らの薬指には、しかと結婚指輪らしきものが確認できた」

「――そう…ですか……」

そう呟くように言い、キャロルがタマに背を向けて本堂の方へと向かっていく。

（シュウさんが結婚…、シュウさんが結婚…、シュウさんが結婚…？　カレンさんと……？）

タマの黒猫の耳に、キャロルの歯軋りの音が聞こえた。

第１３５話　神とその友の過去（後書き）

今日の昼間に更新する予定でしたが、出来なさそうなので今のうち（０時ちょっと過ぎ）に…。

第１３６話　気付きました

キャロルとタマがいる寺を後にしたシュウとカレン、サラ、レオン。
寺のある山の周りを周っていたら川を発見し、そこでこれから１０日間過ごすことにした。

「ここなら人気がないし、お寺も近いし、川で魚も獲れそうだし、ビールも冷やしやすそうだし、寝泊りしやすそうだよね」

と、サラ。
カレンが同意して頷く。

「お寺にお風呂借りに行っている間に荷物が盗まれる、なんてこともなさそうなのですわ。桂月村？　も、遠いみたいだし。ねえ、シュウ？」

と、レオンと共に川岸にテントを張ってテーブルやら何やらを設置しているシュウに顔を向けたカレン。
何か考え事をしているようなシュウの横顔を見て、首をかしげた。

「どうかしたの、シュウ？」

「いや、大したことじゃねーんだけどさ…」

うんと頷きながら、カレンとサラ、レオンがシュウの言葉に耳を傾ける。

「あの和尚さん、何でオレが母さんの子供だって分かったんだろう

と思って。オレの顔なんて親父と瓜二つだし、母さんに似てるわけじゃねーのに…」

「ああ、そういえばそうだよねえ」と続いたサラ。「タマちゃん、兄貴を見てママの子供だって察した感じだったよね。アタシの方がまだママの子供だって分かりそうなもんだけど、このママ譲りの黄金の瞳で」

「そう言われればそうですわね」と、カレンも続く。「和尚さま、どうしてシュウがお義母さまの子供だって分かったのかしら。シュウとそっくりなお義父さまの顔も知らないみたいなのに…」

「だよな、考えれば考えるほど不思議だよな。なあ、レオ兄どうして？」

と、レオンに顔を向けたシュウ。
カレンとサラもレオンに顔を向ける。

動きの止まっていたレオンが、再び手を動かしながら言う。

「さあ？　野良猫の勘じゃないかな」

それを聞いて笑ったシュウとカレン、サラ。
あまり深く考えず、納得したようだった。

表面上、シュウたちと一緒に笑っているレオン。
その胸中は、あまり穏やかではなかった。
タマがシュウに母親の名を訊き、その名がキラだと知ったときの反応を見て以来、ずっと。

（ミックスキャット――ブラックキャットとホワイトキャットの間に生まれた僕は、ブラックキャットの力を継がないで産まれてきたけど…。もし継いで生まれてきたら、感じることが出来ただろう、タマ和尚のように……）

何故タマは、シュウがキラの子供であることを察したのか。

その理由はただ1つ。

レオンは知っていた。

（シュウ、君はキラの闇の力を継いで生まれて来ていたんだね…。しかも、母親がキラだと分かるほどの大きな闇の力を……）

レオンの脳裏にリュウの顔が浮かぶ。

普段の最強で俺様な姿からは想像もできないような、恐怖に怯えたリュウの顔。

胸が痛むと同時に、キラがずっとシュウの力を黙っていた理由を察した。

（そうだね、キラ…。そうだね…、愛する主のそんな顔なんて、見たくないね……）

夕方。

境内からこそこそと出て行こうとするキャロルの右肩に衝撃が走った。

ビシィっ！

「きゃあっ！」と声を上げ、振り返ったキャロル。「なっ、何するんですか和尚さまっ！　座禅のときに使うやつじゃないですか、その変な棒っ！」

「棒ではない、警策（けいさく）だ」

「棒じゃないですか」

「そうだけど。自由時間は21時からだというのに、どこへ行くつもりだ？」

「ちょっと魚を獲りに行って来るだけです。すぐ戻ります」

そうにっこりと笑顔で言ったキャロルの右肩に、タマが警策でもう一撃。

ビシィっ！

「きゃっ！」

「おまえが守るべき十戒（じっかい）の1つである、不殺生戒を破る気か？」

「じゃ、じゃあ、明日の食事の山菜を採りに…」

ビシィっ！

「きゃあっ！　な、何ですかもうっ！」

「良からぬことを考えておるな？　キャロル」

「かっ、考えてませんっ！」

ビシィっ！

「きゃんっ！」

「不妄語戒（ふもうごかい）を破るでない、キャロル。もう一度訊く。おまえは良からぬことを考えておるな？」

「考えてませんっ！」

ビシィっ！

「いったぁ～いっ！」

「不妄語戒を破るな――嘘を吐くな、と言っておるのだ。キャロル、おまえは良からぬことを考えているな？」

「考えてませ――」

ビシィっ！

キャロルの言葉を容赦なく遮る、タマの警策。

「考えてませ――」

ビシィっ！

「考えてま――」

ビシィっ！

「考えて――」

ビシィっ！

「考え――」

ビシィっ！

「考――」

ビシィっ！

「いっっったあぁぁぁ…！　なっ、何度も何度も何するんですかっ！　この坊主頭っ！」

「坊主だもーん」

ビシィっ！

「６２のクセに何が、だもーん、ですかっ…！」

「そういうおまえだって坊主だもーん」

ビシィっ！

「ちょ、和尚さ――」

「私と揃いだもーん」

ビシィっ！

「やめ――」

「やめないもーん」

ビシィっ！
ビシィっ！！
ビシィっ！！！
ビシィっ！！！！

バキっ☆

「あ」

折れた。

と、真っ二つになった警策を見て眉を寄せるタマ。

その傍ら、キャロルがあまりの痛みに右肩を押さえて蹲る。

「……っ……！！！」

「キャロル、おまえという奴は…」と、深く溜め息を吐くタマ。「警策が折れるまで叩かせるとは、ある意味素晴らしい根性をしておるな……」

「折れるまで叩くなんて、どんな鬼師匠ですかっ……！！」

「おまえはレッドドッグのハーフ。大した痛みではなかろう」

「痛いですっ！　すっっっごく痛いですっ！！　この坊主頭っ！！
ハゲっ！！　じじいっ！！」

「警策ならばまだまだあるぞ？　次は背が良いか」

と、タマがキャロルの腕を引っ掴んで寺の中へと向かっていく。
じたばたと暴れるキャロルだが、タマのその力にはまるで敵わない。

「はっ、離してぇぇえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

右肩に続いて背をぱんぱんに腫れるまで叩かれたら、今夜は痛みで絶対に眠れない。
タマはまるで母親のケリーのように恐ろしい。
いや、それ以上かもしれない。

寺の中へと引きずられて行きながら、キャロルは慌てて言う。

「ごめんなさいっ！！　ごめんなさいっ、和尚さまっ！！　もう二度と悪いことなんて考えませんからあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあっ！！」

寺の中、タマがキャロルから手を離して訊いた。

「キャロルよ。その言葉は不妄語戒に反してはいないか？」

「反していませんっ！　嘘なんかじゃありませんっ！」

正座をし、そう訴えたキャロルの顔をじっと見つめるタマ。
その灰色の瞳で、キャロルの心の奥底を見抜く。

「…とりあえず、悪いことをしようとした心は無くなったようだな」

「はい…」

と頷いたキャロル。
右肩がひどく痛んで、顔を歪める。

タマが訊く。

「先ほどおまえは、どんな良からぬことを考えたのだ？　シュウたち……、いや、またサラに何かしようとしたのか？」

「サラさんではありません。彼女には、本当に悪いことをしたと思っております。わたしのママが言っていた通り指もちゃんと元に戻り、そして無事にレオンさんと結婚できたと知って安心しました」

「ではカレンだな。カレンに何をしようと思っていた？」

キャロルが間を置き、再び口を開く。

「……和尚さま、わたしが薬に詳しいのはご存知ですか」

「うむ。おまえの母のケリーがそんなことを言っておった」

「だから、このお寺の周りに生えている薬の材料は全て知っており

ます」

「しょっちゅう修行から逃げて境内の外へ行くからな、おまえは」

「その薬の材料の中にあったのです」

「それは察するに、猛毒の含まれている草の根のことか」

タマの顔を見上げたキャロル。

「ご存知でしたか、和尚さま」と声を高くした。「普通は知らぬ草を知っているとは、驚きました。感嘆の溜め息が出てしまいそうです」

「当然であろう」と、タマが呆れたような顔になった。「この島で生まれ育って62年。私を舐めるでない。あの根を食べたら最強を歌われるブラックキャットといえど5分で全身がしびれ、10分後には心臓が止まりそうになってしまうことなど知っておる。ああ、恐ろしい…」

「……。…もしかして、食べたんですか和尚さま」

「ギクっ」

「食べたんですね？」

「…ポ…ポチが美味そうに食べてたのを、ポチが見ていない隙に少し齧っただけだ。まさか毒が含まれているとは思わなかったぞ…。ポチは身体までバカなのか桁外れの強さ故にか知らぬが、毒がまるで効いていなかったが……」

「ポチさんから盗んで食べたということですか？　それは不偸盗戒（ふちゅうとうかい）に反しますよ、和尚さま」

「あ、あのときは僧ではなかったからいいのだ」

「そうでしょうか。というか、よく生きてましたね和尚さま」

「狼狽し混乱したポチの爪で腹を切り裂かれてな。ポチが胃から早々にそれを取り出してくれたが故に助かったぞ。もう少し長い間体内に入っていたら、きっと私はあの世にいっていた。本当にポチには心から感謝する」

「……。あの…、裂かれたお腹はどうやってくっ付けたんです？」

「ポチが続飯（そくい）でくっ付けた」

「何ですか、それ」

「米粒を潰して作った糊（のり）」

「は…？」

「その場で一週間おとなしくしていたらくっ付いたぞ、腹」

「……」

突っ込み所が満載過ぎて突っ込めないキャロル。

話を戻した。

「それで、わたしはその猛毒が含まれている草の根を採ってこようと思ったのです」

「…採ってきたそれを、どうするつもりだった」そう訊きながら、立ち上がったタマ。「カレンに食わせるつもりだった……とは言うまいな？」

新たな警策を手に握り、キャロルの周りをゆっくりと歩き始める。タマがちょうどキャロルの背後へと来たとき、キャロルが答えた。

「言いませ――」

「愚か者がぁっ！！」

ビシィっ！！！

と、キャロルの頭に振り下ろされた警策。

バキっ！

と折れたそれを見ながら、タマがはっとする。

（えっ、言いませんって言おうとした…！？）

キャロルが頭を抱え、猫の3倍はあろうか犬の牙をむき出しにしてタマに振り返る。

「和尚さま…！？　今、間違えましたね……！？」

「…う…ううん？」

「不妄語戒に反してます…！！」

「…に、忍辱（にんにく）の心を忘れたのか、キャロル？」

「いいえ、忘れてません。我慢し、耐え忍び、怒らず、かっとしない…でしたよね……！？」

「う、うむ。だ、だから怒るな（い、犬の牙こわーい…）」

「和尚さまが間違ったと謝ってくれるなら怒りません…！」

「…ま、間違いは誰にでもあるんだも――」

「謝ってください…！」

「…ご、ごめんちゃい……」

と言ったタマの顔を見、牙を引っ込めたキャロル。
溜め息を吐き、背後のタマから正面へと顔を戻した。

そして話を続ける。

「採ってきた草の根を、カレンさんに食べさせようとなんかしていません」

「そ、そうであったか。ではどうするつもりだったのだ」

「飲ませようとしたんです」

「おお、なるほど。煎じて茶にしてな――って、同じではないかっ！！」

ビシィっ！！

と、先ほど折れて短くなった警策で再びキャロルの頭を叩いたタマ。

警策はさらに折れて短くなった。

再び頭を抱えるキャロルに、猫の牙を剥き出しにして詰め寄る。

「キャァァロルゥゥゥゥゥゥゥ…！　おーまーえーとーいーうーやーつーはぁぁぁぁぁぁぁ……！！」

「に、忍辱の心を忘れてはいけません、和尚さま（ヤ、ヤダ、こわーい…）」

「謝るのだ、私に…！　謝るのだ、謝るのだ、謝れえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……！！」

「…ごっ、ごめんなさい……」

「…まったく、おまえというやつは……」

と溜め息を吐いたタマ。

キャロルと向き合って座り、話を続けた。

「そんな猛毒を飲まされたら、人間のカレンは一溜まりもない。もう考えていないとはいえ、何故おまえはそんなことをしようとした」

正座をしているキャロル。
膝の上で両手をぎゅっと握り締めて俯いた。
手の甲の上に、ぽたりぽたりと涙が落ちていく。

そして声をあげた。

「だって…だって、好きなんです！　わたしはやっぱり、シュウさんのことが好きなんです！　シュウさんがカレンさんと結婚したと知った瞬間、再びカレンさんへの憎しみが込み上げてきたんです！　だからわたしは、カレンさんに毒を飲ませようとしたんです！」

「…っ……」

顔を歪めるタマ。
キャロルが続ける。

「どうしてシュウさんに愛されるのはわたしじゃなかったんです…！？　どうしてっ…！？　わたしだって、わたしだってこんなにシュウさんのこと好きなのにっ…！　カレンさんに負けないくらい、シュウさんのこと好きなのにっ…！　好きなのにっ…好きなのに好きなのに好きなのにっ！！　カレンさんなんかっ…、カレンさんなんか消えればいいのよっ！！」

「…っ……！」

タマの顔がさらに歪む。

「カレンさんさえ消えてしまえば、シュウさんはきっとこのキャロルを見てくれるわっ！　このキャロルのこと、きっと愛してくれるわっ！　わたしにとってカレンさんは邪魔なだけっ！　消えればい

いっ！　カレンさんなんか、この世から消えてしまえばいいっ！
カレンさんなんか――」

「ヘブッ！！」

と、キャロルの言葉を遮ったタマのクシャミ。
キャロルの顔が引きつる。

「黙って聞いていると思ったら、クシャミ堪えてただけですか和尚さま……！？」

「シ、シリアスシーンでクシャミしたら悪いと思っ――ヘブッ！」

「しかも何ですか、その潰れたような変なクシャミ」

「こ、堪えようとするとこういうクシャミが出るん――ヘブッ！
ヘブッ！　ヘブッ！　ヘブンッ！　ヘブンッ！？　ウルトラヘブンッ！？　だっけ！？」

「ヘブンではなくセブンです」

「あ、止まった」

「鼻水がアゴの下まで垂れてますが」

「ふんっ！」

「と吸ってまた鼻の中に戻さないでください」

「ちーんしてくる」

と、立ち上がったタマ。
離れたところに置いてあったティッシュを取り、ちーんと鼻をかむ。

「うーむ、風邪かな…」

「純モンスターがですか」

「もしやついに花粉症…」

「花粉飛んでませんが」

「ハッ！　誰かが私の噂を…！」

「キラさまのお父さまと2匹合わせると『ポチタマじゃーん』とか笑われてんじゃないですか、サラさんあたりに」

「何だ、ポチタマって」

「そういうテレビがあるんです」

「そうか、そういうテレビジョンが。ウルトラヘブンの次に見てみたいぞ」

と、再びキャロルと向かい合って座ったタマ。
キャロルにティッシュを一枚渡す。

「涙を拭け」

キャロルが頷いて濡れた頬をティッシュで拭くと、タマが話を戻した。

「良いか、キャロル。私たち人というものは――」

「人じゃありませんけど」

「ひ、人に近いから良いのだ。揚げ足を取るな」と咳払いをし、タマは続ける。「本来私たちの心の中には、善と悪が共存しているもの。誰だってそうだ。だが、決して悪に負けてはならぬ」

「……」

「彼の――シュウの瞳を見たか、キャロル。純粋で、汚れのない美しい瞳をしておった。あれはポチの瞳と一緒だ。彼は決して悪に負けない、とても強い心を持っているということ。おまえがカレンを殺してみろ。おまえのその行動を、彼はまるで理解できないだろう。そして彼は、おまえの手の届かぬところに行ってしまうであろう」

「…じゃあ、じゃあ、どうすればいいんですか？　和尚さまっ…！　わたしはわたしのため、邪魔者を消すやり方しか知らないっ……！」

と、再び頬を濡らすキャロル。

タマが続ける。

「誰だって自分が一番可愛いもの。だから他人と自分の幸せどちらかを選択しなければいけないとき、他人の幸せよりも自分の幸せを優先してしまう。それは仕方のないことだ。私たちが生物である限り」

「ならっ…！　そういうこと言うなら、和尚さまだってわたしの気持ちが分かるでしょう！？」

「おまえが自分の幸せのため、必死になる気持ちは分かる。だが、カレンを殺したところで誰一人幸せになどなれぬ。待っているのは不幸だ。もう一度言うが、私たち生物は自分が一番可愛いもの。つまりそれは同様に他人もそうだと言うこと。私たちは自分の幸せと同じように、他人の幸せも考えられるようにならなければならぬのだ、キャロル。シュウのようにな」

「……シュウさんを諦めろ…と仰るのですか……？」

「彼はカレンを妻に迎えた。永久にカレンを愛することを誓った。彼はカレンを心から愛している。彼は今、とても幸せであろう。…キャロルよ、彼からその幸せを奪ってはならぬ。彼の幸せを願うのだ……、彼の幸せを」

シュウの幸せ。

それを聞いたとき、キャロルの頭の中にふとシュウの笑顔が浮かんだ。

バカップルコンテストのときに初めて見た、シュウの笑顔だ。

審査員の質問に長々答えていた様子のシュウ。

キャロルの耳には何を喋っているのか聞こえなかったが、シュウのすぐ傍らにいたカレンのことを話しているということだけは分かった。

（わたしはあの笑顔がほしい。傍にあの笑顔がほしい。毎日のよう

にあの笑顔が見れたら、どんなに幸せだろうって思うわ）

頭の中、想像するキャロル。

（そう…カレンさんの傍じゃなくて…、わたしの傍にあの笑顔が…って、えっ……！？）

動揺した。

カレンの傍から己の傍にシュウを置いた途端、シュウの笑顔が消えてしまった。

その理由を考える。

（どうして…！？　どうして消えてしまうの……！？）

答えはとても簡単だった。

（…ああ…そっか…。…バカじゃないの、わたし……）

と自嘲するほどに。

（あのシュウさんの笑顔は、カレンさんを想うが故にあったんじゃない）

そして、

（わたしは、その笑顔――カレンさんを想うシュウさんの笑顔を、好きになっていたということ…。カレンさんの傍にいるときのシュウさんを好きになっていたということ……）

頭の中、己に対して同じ言葉を繰り返す。

（バカだ、バカだ、バカだ…！　わたし、バカだ……！）

キャロルの頬がますます濡れていく。

（カレンさんを殺してしまったら、もうあの笑顔見れないじゃない…！　もう2度と、見れないじゃない…！　カレンさんを殺すということは、そういうことじゃない……！）

タマの言った通り、カレンを殺して待っているのは不幸だけだった。

己も含め、誰一人幸せになどなれなかった。

ようやくそのことに気付いた。

キャロルの頭に乗ったタマの手。

キャロルがタマの顔を見ると、タマが微笑んでいた。

「ここで修行をし、そして強い心を持て、キャロル。そう…、おまえの愛する彼のようにな……」

キャロルは嗚咽しながら頷いた。

ちなみに。

「神とその友の名前を合わせると『ポチタマ』じゃ～んっ！　あー

っはっはっは！　可愛い～っ！」

タマのクシャミの原因は、キャロルの予想通りだった。

第１３７話　共に修行します

シュウとカレン、サラ、レオンが葉月島本土から南に８００ｋｍ離れた離島へと流刑にされてから5日が経つ。
流刑の期間である１０日間のうち、半分を過ごしたことになる。
やっぱり、ハネムーンとも思える楽しい気分で。

昼間シュウたちは桂月村を訪ね、困ったようなことがあったなら出来る限り助けている。
でもタマに守られているその村は、大した問題などなかった。

そして夜になったらタマの寺を訪ねた。
夜といってもあまり遅くなっては迷惑なので、午後7時くらいに。
風呂やトイレを借りに行くのだが、その際に気になったことがあった。

「ねえ…」と、本日も風呂を借りた後、境内から出たあとの階段を降りながらサラが口を開いた。「キャロル、アタシたちに顔見せないね」

シュウとカレン、レオンは頷いた。
ここへ来てから毎晩寺を訪ねるのに、キャロルは姿を現さなかった。

カレンが心配そうな面持ちになって言う。

「どうしたのかしら、キャロルちゃん…」

「気になるよなあ…」

と、続いたシュウ。

レオンが言う。

「でもタマ和尚は言ってたよね。キャロルちゃんは、真面目に修行に励むようになったって。その疲れかもしれないし、そんなに気にすることはないんじゃないかな」

そんなレオンの言葉を聞いたシュウとカレン、サラ。

そうだったらいいな、と思いながら頷いた。

高僧のタマを師を持つ修行中のキャロル。

早朝に起きて決められたことを決められた時間にし、自由時間は21時から。

食事は1日1回で、正午以降からは水以外のものを口にしてはいけない。

しかもその1日1回の食事は精進料理。

キャロルが文月島にいた頃、普通に頬張っていた肉や魚は一切出てこない。

キャロルが真面目に修行に励むようになったのは、ここ数日のこと。

まだ慣れていなく、夜になったら腹の虫が鳴いた。

空腹で胃に穴が開くかも、なんて思ってしまう。

（あぁ、もうダメ…！）

と日付が変わろうか頃、耐え切れず布団から這い出たキャロル。

（お肉が…、せめてお魚が食べたいわっ……！）

タマに見つからないように部屋を出、外へ出、境内から出た。

向かった場所は近くに流れる川。

履物を脱ぎ捨て、川の中に入って両手を水の中へと入れる。

レッドドッグ――犬モンスターと人間のハーフであるキャロルは、俊敏に魚をその手に捕まえる。

「やった、大物っ…！」

とにやけたキャロルだったが。

ぴちぴちと暴れる手の中の魚を見て、瞳が揺れ動いた。

（このままこの魚を殺してしまったら、わたしはわたしが守らなければならない十戒の1つ、不殺生戒を破ってしまう…。そして食べてしまったら、正午から翌日の日の出まで固形物を食べないという不非時食戒（ふひじじきかい）をも破ってしまう……）

数秒後。

魚を再び川の中へと放したキャロル。

（何をやってんのかしら、わたし…。修行中だというのに……）

川から出て、履物を履く。

（ごめんなさい、和尚さま。すぐに戻ります）

と思ったときのこと。

やたらと気合の入った声が聞こえてくる。

「ほわちゃあぁぁぁあぁぁぁぁぁあっ！！」

声のした方へと顔を向けたキャロル。

（何してんですか……）

と思わず眉を寄せる。

そこにはサラの姿。

川に入って妙な声をあげて手を突っ込み、目にも留まらぬ速さで魚を次から次へと川岸へとあげていく。

（それにしても、さすが猫…といったところかしら……）

神がかったサラの手付きに、キャロルは思わず唖然としてしまう。

「はっ！　せやっ！　はいやあぁぁぁあぁぁぁぁぁあっ！！」

「ちょっとサラ、獲りすぎよ…」

とサラの近く、川岸に立っているカレンが突っ込んだ。

そこでようやくサラの手が止まる。

「ん？　あれ、本当だ。獲りすぎたね、ちょっと。つい夢中になっ

ちゃったよ。なんていうか、アタシってばママの子供って感じ」

あはは、と笑ったサラ。

岸にあがった際に気配を感じ、カレンを背に庇ってキャロルの方へと振り返る。

「誰っ…！？」

「えっ、誰かいるの…！？」

と、サラの背で咄嗟に銃を手にしたカレン。

よく利く夜目でキャロルの顔を確認し、サラが驚いたように声を高くした。

「って、キャロルじゃん」

「えっ、キャロルちゃんっ？」

とサラの背から顔を覗かせ、サラの見ている方を見たカレン。

カレンやサラと顔を合わせ辛くて避けていたが故に、一瞬ギクっとしたキャロル。

バレてしまったと、渋々2人の方へと近寄っていく。

ランプの光にキャロルの顔が照らし出されると、カレンが声を高くした。

「まあ、キャロルちゃん！　良かった、顔が見れないから心配していたのよ？」

「あ…、ごめんなさい……」

「キャロル、キャロル」と、サラ。「ちょっと座って行きなよ」

ここに座れと、椅子をぽんぽんと叩く。

キャロルが戸惑いながらそこに座ると、サラが捕まえた魚を手にしながら言った。

「今さ、夜食でも食べようと思ってたところなんだよねー。あんたも食べる？」

「いえっ、わたしはいりませんっ…」

と慌てて首を横に振ったキャロルを見て、カレンがはっとして言う。

「あっ、そっかっ…！　キャロルちゃんは精進料理よねっ……！」

「は、はい。それに正午以降から翌朝まで、水以外のものを口にしてはいけないんです」

それを聞いたサラ。

獲った魚を、川の中へと放し始めた。

「サ、サラさんっ？　何をして……？」

戸惑うキャロルの目の前、サラが再び川を泳いでいく魚を見送る。

カレンはグラスを3つ用意し、そこに水を注いだ。

テーブルを挟んだキャロルの向かいにはサラ。
その隣にはカレン。
それぞれの前には、水の入ったグラス。

（もしかしてカレンさんとサラさん、わたしに気を遣って…？）

キャロルがそう察したとき、サラが水を1口飲んで口を開いた。

「あー、兄貴とレオ兄がいないのは、桂月村に今日最後の警備に行ってるからだから。でもそろそろ帰ってくるんじゃないかな」

「そ、そうですか。大変ですね」

「いやあ、タマちゃんのおかげで仕事なんてほとんどないよ」

「それより」と、カレン。「キャロルちゃんこそ修行がんばっているみたいね？　とても厳しいみたいなのに、すごいのですわ」

「えっ…？」

と、返事に困惑したキャロル。
首をかしげたカレンとサラから目を逸らして言う。

「いえ…その…、そんなことないです。厳しい修行にまだ慣れてなくて、こうしてここに来てしまいましたから」

「そういえば、ここへはどうして？　もう遅いのに」

カレンが訊いた。

「お腹が減って減って、耐えられなくて…。もう少しで戒律を破ってしまうところでした。わたしの心が弱い証拠です……」

「……」

数秒の間、流れた沈黙。

カレンとサラが顔を見合わせたとき、キャロルが立ち上がった。

カレンが慌てて口を開く。

「もう戻るのかしらっ？」

頷いたキャロル。

「早朝４時には起床しないといけないので」

そう言って、寺の方へと踵を返して行った。

キャロルの姿が見えなくなったあと、カレンとサラが再び顔を見合わせた。

「ねえ、カレン……」

「ええ、サラ……」

翌朝４時。

欠伸をしながら部屋を出たキャロル。

ぎょっとして寝ぼけ眼が冷めた。

そこには、

「おっそぉぉぉぉぉい！！」

サラと、

「おはよう、キャロルちゃん」

カレンの姿があって。

「お2人とも、こんな早朝からどうしてここへっ？」

「これから4日間、あたくしたちもキャロルちゃんと一緒に修行するわ」

と、カレン。

「えっ？」

と耳を疑うキャロル。

サラが続ける。

「兄貴とレオ兄も付き合うって言ってくれたんだけどさ、あの超一流ハンター2匹はちゃんと1日3食食べなきゃいけないからね。兄貴なんか特に、1日1食で精進料理を食べてたなんて言ったら親父に絞められるし」

「ちょ、ちょっと待ってください！」と、狼狽して声をあげたキャ

ロル。「ど、どうしてカレンさんとサラさんは、わたしと一緒に修行をっ…！？」

「だってさ、1人より頑張れるでしょ、修行」

と、サラ。

カレンが笑顔で続く。

「あたくしたちが葉月島本土に帰るまでの4日間だけだけれど、一緒にがんばりましょうね、キャロルちゃん」

戸惑いながら目の前の2人を見つめるキャロル。

（わたし、あなたたちにとてもひどいことをしてしまったのに…）

そこへ、タマがやって来て言った。

「ほら、何をぼさっとしておるか、キャロル」

「だ、だって和尚さま…」

「これから4日間、カレンとサラはおまえと同じ修行僧ぞ。おまえたち、早く顔を洗ってこぬか」

承諾したカレンとサラ。

キャロルの後に着いて、顔を洗いに行く。

キャロルの隣で顔を洗ってタオルで拭きながらサラが訊く。

「ねえ、このあとは？」

キャロルが慌ただしく駆けて行きながら答える。

「大声で読経です！」

ということで、まずは本堂の中でお経を読むことに。

それはタマの低～い声から始まる。

「ま～か～はんにゃ～は～ら～み～た～しんぎょおおおおおぉぉぉぉぉぉぉお〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝お〝う」

「ぷっ…」

「こらカレン、何を笑っておる！」

「ご、ごめんなさい、和尚さまが面白くて…」

「こ、こういう読み方をするものなのだっ！　笑うでないっ…！」

「はい」

次に座禅を組み。

タマの振るう警策が肩や背に当たる。

ビシィっ！

「あイタ」

「何をにやけておる、サラ！」

「自由時間になったときに何回しようか考えてた」

「まったく、遊ぶことばかり考えてたのか！？」

「いや、新婚さんならではのことを」

「新婚ならではのこと？」

「交尾とか交尾とか交尾とか交尾とか交尾とか交尾とか交尾とか交尾とか交尾とか交尾とか交尾とか交尾とか交尾とか交尾と――」

ビシィっ！

「レオンが干乾びるわ！」

「ごめんなさーい」

その次は掃除。

今日は大掃除の日だとか。

「わたし、掃除って下手なんですよねぇ…」

と、溜め息を吐いたキャロル。

もしかして、とサラに顔を向ける。

「サラさんって、魔法は何を？」

「風だけど？」

「やった！」とにやけ、戸や窓を開けるキャロル。「じゃ、お願いしますサラさん♪」

「んもう、仕方ないなあ」

と、サラ。

魔法で風を起こして部屋中の塵や埃を巻き上げ、戸や窓からポイっと外へ。

「きゃあ！　すごいですサラさん！」

と褒められ、調子に乗って風魔法を操るサラ。

「まーねっ！　見て見て♪　こんなことも出来ちゃうんだよね、アタシ♪」

「ちょ、ちょっとサラっ…！」

「何？　カレン」

「戸が飛――」

戸が飛びそう！

と言おうとしたカレンだったが、遅かった。

ドカァァァンっ！

と飛んだ戸は、

バァンっ！

と外にいたタマの顔面に直撃。

「あっ」

やばい。

と冷や汗を掻きそうになるカレンとサラ、キャロル。

タマがぴくぴくと顔を引きつらせ駆け寄ってくると同時に、逃げ出した。

「こりゃあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあっ！！」

「ごめんなさあぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあいっ！！」

掃除が終わると時刻は正午近く。

ここでようやく1日1回の食事だった。

精進料理は質素ではあるものの、中々の美味。

タマが深く溜め息を吐いて言う。

「まったく、苦労が一気に3倍だぞ…」

「ごめんなさい、和尚さま」

と、キャロルがクスクスと笑う。

1人で修行をしていたときより、ずっと楽しそうだ。

そんなキャロルを見たタマ。

（修行は遊びではないが……まあ、良いか）

と微笑んだ。

その直後。

「おーい、オレのマイハニ～～～！」

「あっ、シュウだわ！」

「サラ、どこにいるの？」

「あっ、レオ兄だっ！」

箸を放り出して外へと駆けて行ったカレンとサラを見て、再び声をあげる。

「こっ、こりゃあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあっ！！」

「まあまあ、和尚さま」

とタマを宥め、キャロルも立ち上がった。

戸口へと向かっていき、そこからシュウに目を向ける。

（ああ…、やっぱり……）

と、微笑んだキャロル。

（カレンさんといるときのシュウの笑顔は格別だわ）

そう改めて思った。
それと同時に、

「あの笑顔、守らなきゃ…」

そう呟いた。

「ああ…、そうだな……」

と同意したタマ。
キャロルの頭に手を乗せて微笑んだ。

第１３８話　流刑最終日

あっという間にやって来た流刑最終日。

正午過ぎ、農作業をしているカレンとサラ、キャロル。
昨日までは騒がしかったものだが、今日は静まり返っていた。

それはシュウやレオン、タマが桂月村に行っているということだけが理由ではなさそうだった。

「……明日の朝には、葉月島本土へと戻るんですよね」

キャロルが口を開いた。
カレンとサラが顔を向けると、そこには寂しそうな笑顔があった。

「うん…」

と頷くカレンとサラも、同じ表情をしている。

「カレンさん、サラさん」と、立ち上がったキャロル。「ありがとうございました」

そう言って、頭を下げる。

「い、いいえキャロルちゃん！　あたくしたちも楽しかったし！　ねえ、サラっ？」

「そそ。お礼なんかいらないって」

「それから、ずっと言わなければいけなかったことが…」と、キャロルが頭を下げたまま続ける。「カレンさん、サラさん、それからリンさんやランさん、シュウさん、レオンさん…。わたしがしてしまったことで、悲しませたり傷つけてしまったりしてしまった方々……本当に、ごめんなさい」

キャロルの足元の次に、零れ落ちた涙が染み込んで行く。

「ごめんなさい…、ごめんなさい……！」

「ああもう、顔あげなっての」

とサラがキャロルに顔をあげさせ、袖でキャロルの涙を拭った。

カレンが微笑んで言う。

「あたくしたちが本土へと戻ったあとも、修行がんばってねキャロルちゃん」

「はい、頑張ります」

と微笑んだキャロル。

きっとキャロルはもう、以前のような悪さをすることはないだろうと、カレンとサラは思う。

「ところで」と、サラ。「タマちゃん、今日は一緒に兄貴とレオ兄と一緒に桂月村の見回りに行ったの？」

「ええと、モンスター退治らしいですよ」と、キャロル。「この島には、季節ごとに違った種の飛行型モンスターが上空を通るらしいのですが。今日は初夏に通るらしいモンスターが見られるので危な

いとか」

「つまり、何？　そのモンスターが人間を襲う危険があるとか？」

「はい。どうも、人間を餌にしようとするみたいです」

「まあ、大変」と声を高くしたカレン。「そのモンスターって、たとえばああいう、鳥型なのかしら？」

と、寺の門の方を指差した。

「え？」

と、サラとキャロルがカレンの指した方へと顔を向ける。

「そうそう」と、キャロル。「赤い鳥って言ってたし、きっとあの鳥――って、げっ！」

仰天した。

噂をすれば何とやらで。それかと思われる鳥型のモンスターが寺の門のところに1匹いる。

しかも人間を丸呑みしそうなほど巨大だ。

「何でいんの！？」

「うーわあ、やばいな」と言いながら、サラが背にカレンとキャロルを庇った。「あれ、超一流ハンター用のモンスターだよ。人間のカレンを食べに来たっぽいな」

「ええっ！？　あたくしを！？」

「わたしたちだけじゃどうにもなりません！」

と、キャロル。

カレンを背に庇った。

「サラさん、きっとあなたが一番俊足です！　早く和尚さまたちにお知らせを！」

そう言いながら首の後ろに手を持って行き、背から仕込み杖を取り出すキャロルを見てサラは目を丸くする。

「うわ、あんたその辺は相変わらずだね」

「護身用です！」

「モンスターとはいえ刃物で傷つけるのはやばいんじゃないの？」

「杖の中から刃を出さなければ大丈夫です！」

「ああなるほど、杖で殴るのね。んじゃアタシ、兄貴たちに知らせに桂月村まで一っ走りして来るから、頼んだよキャロル！」

「はい！」

と、杖を構えるキャロル。

サラがモンスターの上部をぴょんと飛んで通り過ぎ、桂月村へと向かっていく。

キャロルの背で、カレンが声を震わせる。

「あああもう、あたくしのバカぁ…！　お寺の修行だからって銃持って来てなかったのですわあぁっ……！」

「大丈夫です、カレンさん！　絶対っ…、絶対わたしが守って見せますから！」

キャロルがそう宣言してから数秒後のこと。
モンスターが飛びかかってきた。

桂月村。
シュウとレオン、タマは三ヶ所に散らばり、上空を通りかかる鳥型モンスターを目を凝らして見ていた。
だが、モンスターたちに人間を襲う気配はない。

「ふあぁ…」とタマの口から欠伸が出る。「どうやら大丈夫のようだな」

離れたところにいるレオンの猫耳が、タマの言葉を聞き取った。

「ええ、そのようですね。どこかで餌でも食べてきたのでしょうか」

同様にタマの猫耳も、レオンの言葉を聞き取る。

「しかし念のため、もう少し見張っていようぞ」

「そうですね、タマ和尚」

とレオンが言った直後、その耳とタマの耳が微かにサラの声を聞き取った。

「サラっ…！？」

と、声のした方に顔を向けるレオンとタマ。

シュウが訊く。

「ど、どうかしたのか、レオ兄と和尚さんっ…」

こちらへと向かって走って来ながら叫んでいるサラの声は、その姿が見えると同時にシュウの耳にも聞こえてきた。

「レオ兄っ！　兄貴っ！　タマちゃあぁぁあああぁぁあああぁぁあんっ！！　カレンがモンスターに食われるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！」

「――なっ、何ィっ！！？」と驚愕して叫んだシュウ。「レオ兄っ！　村の見張り頼んだっ！」

と寺へと向かって走り出す。

だかそれよりも先に、タマが走り出していた。

「待っていろ、カレンっ…、キャアアアアアロルゥゥゥ

「きゃっ！　…きゃああっ！」

鳥型モンスターが口ばしや爪でキャロルに襲い掛かるたび、カレンが声をあげる。

カレンを背に庇い、キャロルは必死に杖で防御している。

「大丈夫ですっ…！　大丈夫です、カレンさんっ！　和尚さまたちが助けに来てくれるまで、わたしが絶対に守って見せますっ！」

「む、無茶よキャロルちゃんっ！」

「大丈夫ですっ！　わたしだって、超一流ハンターと最強モンスターのハーフですからっ！」

「そ、そうだけど危ないのですわっ！　お寺の中へ逃げましょうっ！」

「そんなことをしたところで、お寺を破壊されるだけですっ！　面倒です、修理っ！」

「で、でも、このままではキャロルちゃんがっ…！」

「大丈夫です、だいじょ――」

大きな翼を羽ばたかせたモンスター。

その風でカレンとキャロルの身体が後方に数m飛ばされた。

背を打ち付ける。

「きゃあっ！」

「カレンさんっ！　大丈夫ですかっ！？」

「キャ、キャロルちゃんこそっ…！」

「わたしは大丈夫です！」

そう言うなり立ち上がり、再び杖を構えて防御するキャロル。
モンスターの攻撃で、杖は今にも折れてしまいそうだ。

「キャロルちゃん！　もういいわ、キャロルちゃんっ！　そのモンスターはあたくしが狙いなんでしょう！？　キャロルちゃんは逃げてっ！」

「バカなこと言わないでください！」

「だって――」

「あなたを死なせてしまったら、シュウさんが悲しんでしまう！」

「えっ…！？」

「あなたが死んでしまったら、シュウさんの笑顔がもう見れなくなってしまう…！　もうシュウさんのあの笑顔が、見れなくなってしまう……！」

キャロルの脳裏に、シュウの笑顔が浮ぶ。
カレンを想うが故の笑顔。
キャロルが愛した笑顔。

「だからわたしは、絶対にあなたを守りますっ！　この命に…変えたってっ……！！」

バキっ！！

と、折れた杖。

中に仕込まれている刀ごと真っ二つにされてしまった。

次の瞬間、モンスターがキャロルに向かって大きな口を開けて襲い掛かる。

「キャロルちゃんっ！！」

カレンが絶叫し、

「…っ……！」

キャロルがぎゅっと瞼を閉じたときのこと。

「キャァァァロルゥゥゥ

タマ本人はそのことにまるで気付いていない模様。
カレンとタマの顔が引きつる。

「あ、あの、和尚さま？」

「何だ、キャロル！？」

「な、何ともないんです？」

「桂月村ならば何ともなかったぞ！」

「い、いえ、そうではなく…、そのぉ……」

「何だ！？　早く言ってみ――」

「噛まれてますよ」

「え！？」

「頭」

「……」

タマ、キャロルの言葉を理解するまでに数秒。
その後、狼狽した。

「ぶにゃあぁぁぁあぁぁぁ

「可愛くない鳴き方ですね」

「なっ、何故そのことを早く言わぬのだキャロルっ！」

「何故気付かないんです？」

「ずっと可愛いと思って６２年過ごしてたっ！」

「って、鳴き声の方ですか」

「痛い痛い痛い痛いっ！　おのれっ、モンスターめっ！　背後を取りよってっ！」

「どちらかといえば和尚さまが突っ込んできたと思いますけど」

「食らえっ！　臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前っ！　そりゃあぁぁぁ

「武器はどうしたんです？」

「村に忘れてきたぞ！」

「……。何しに来たんですか」

「ぶにゃあああぁぁあああぁぁあっ！！　食・わ・れ・るぅぅぅ

「大丈夫よ、シュウ。あたくしは何ともないわ」

「よ、良かったぁ……って！」はっとしてキャロルに顔を向けたシュウ。「あわわわわわっ！　キャ、キャキャキャキャロルちゃん大丈夫！？」

「はい、大丈夫です。和尚さまが犠牲になってくれましたから。それより、カレンさんが無事で良かったです」

あなたの大切なカレンさんが。

と心の中で続けて、キャロルは微笑んだ。

その晩、２１時過ぎ。

境内でタマとキャロルも一緒にシュウたちが持ってきた花火を楽しんだ。

「カレン、カレン」

「何かしら、サラ？」

「ロケット花火の真の楽しみ方が書いてるよ」

「何ですって？」

「えーと、まずこうやって手に持って～、火を付けて～、そしてタ

マちゃんに向けるんだってよ」

「えっ、それ違うと思――」

「ていうわけで、いっくよー！　タマちゃーん！」

ピュ～～～

と音を立て、タマ目掛けて発射されたロケット花火。

タマが慌てて避ける。

「ぶにゃあぁぁあああぁぁあっ！！　なっ、何をするサラっ！！」

「へイへイへイへ～～～イ♪」

ピュ～～～

「こっ、こら止め――」

「へイへイへイへ～～～イ♪」

ピュ～～～
ピュ～～～
ピュ～～～

「ぶにゃあああ！　ぶにゃあああ！　ぶにゃあああああああああっ！！」

「あーっはっはっはっは！　タマちゃん面白～い！」

辺りに響くタマの絶叫とサラの笑い声。

離れたところからそれを見ているシュウの顔が引きつる。

「良い子の皆さんは真似しちゃイケマセン…。ったく、サラのやつ、レオ兄がスイカ切りに行ってるのをいいことに……」

「まあ、心配しなくても大丈夫ですよ。あの和尚さま、モンスターに噛まれたって気付かないくらいなんですから、ロケット花火ごときで怪我なんかしません」と、シュウの傍らにいるキャロル。「それより、はいシュウさん」

シュウに線香花火を渡した。

シュウが受けとり、キャロルと自分のそれに火を付ける。

先端にできた小さな火球の周りを、パチパチと音を鳴らしながら咲く火花。

それを見ながらシュウが口を開いた。

「線香花火って、儚くて切ない感じがするよなあ…」

「ぷっ」

「ちょ…、な、何で笑った?」

「シュウさんて、ドリーマーですね」

「ド、ドリーマーっ…!?」

と声を裏返し、シュウが赤面する。

「まあ、そうですよね。儚くて切ない恋って感じがしますよね」

と言いながらクスクスと笑っているキャロルを見て、シュウはますます赤面してしまう。

「バ、バカにすんなよっ…！」

「してませんよ、別に？」

「嘘こけっ…！」

「本当です、本当」

「…そ、そうか……」と咳払いをし、シュウが話を切り替える。「でさ、キャロルちゃん」

「はい？」

と、シュウの顔を見たキャロル。

シュウが続ける。

「カレンのこと助けてくれて、本当にありがとう」

「いえ」

と微笑んだキャロル。

嬉しい。

でも、少しだけ胸が痛い。

「オレたちは明日葉月島本土に帰るけどさ、キャロルちゃんも修行終えれば文月島に帰れるんだろ？　そしたらウチに遊びに来れば？　カレンとサラ、喜ぶだろうし」

「そのことですが…」

「うん？」

「わたし、文月島には帰らずにここに居ようと思います」

「えっ？」

「和尚さまの下で、尼としてこのお寺に居ようと思います。その方が、きっとわたしにとって良いですから」

「そっか…。じゃあ、オレたちの方から遊びに来るから」

「はい、楽しみに待ってます」

と笑い、線香花火に顔を戻したキャロル。
火球が大きくなり、もう少しで落ちそうだ。

「……シュウさん」

「ん？」

「カレンさんと、お幸せに……」

キャロルがそう微笑むと同時に、線香花火の火球がぽとんと地の上に落ちた。

第１３９話　流刑から帰りました

流刑を終えたシュウたちの目に、ヒマワリ城の船が迎えにやって来るのが映る。
しかも王子が乗っている。

「あ、王子さまだわ。手を振ってるわよ」

とカレンが手を振り、

「おーい、王子さま～」

サラも手を振り、

「本当に流刑って感じしないなあ」

とレオンも苦笑しながら王子に手を振り返す。
王子はカレンとサラだけに手を振っているだろうが。

その後方、シュウはキャロルとタマと向かい合っていた。

「それじゃ、お世話になりました和尚さん」

「うむ、元気でな」

「キャロルちゃん、修行頑張って」

「はい、頑張ります」

シュウは一度振り返って船を見た。
もうすぐで着きそうだ。

「そうだ、和尚さん」と、タマを見たシュウ。「野生の勘ってすごいですね」

「？　何のことだ」

「オレが母さんの子供だってこと、野生の勘で分かったんですよね？」

「は？」と、きょとんとするタマ。「何を言っている？　ペットの場合は知らぬが、純粋なブラックキャットは分かるものだぞ。お主がキラの力を――」

「タマ和尚！」

と、突然レオンがタマの言葉を遮った。
急に声をあげたレオンにシュウが驚いていると、レオンが笑顔になって続けた。

「１０日間、お世話になりました」

「う、うむ…？」

「シュウ、船が着くよ。行こう」

と、シュウの腕を引っ張っていくレオン。

カレンとサラがキャロルのところへとやって来て、キャロルと抱

拳を交わす。

「またね、キャロルちゃん。修行がんばって」

「元気でね、キャロル。ときどき遊びに来るからさ」

「はい」と、微笑んだキャロル。「カレンさんとサラさんもお元気で」

船が見えなくなるまで、シュウたちに手を振って見送った。

船が見えなくなった途端、キャロルがしゅんとする。

「あーあ…、行っちゃった……」

「ああ、行ってしまったな。だが、また遊びに来てくれるぞ?」

とタマがキャロルの頭を撫でると、キャロルがまた笑った。

「はい。次にシュウさんたちが遊びに来てくれるときまでに、一人前の尼になって見せます!」

「うむ、その意気だ」

「はい。…ところで和尚さま?」

「む?」

「さっき、シュウさんに何て言おうとしたのです?」

「ああ、そのことか。『お主がキラの力を受け継いでいることなん

て』と言おうとしたのだ」

「キラさまの力？」

「ああ。闇の力だ。シュウはハーフとは思えぬほど強い闇の力を持っている。あれは紛れも無く、キラの力を継いだのだと分かった」

「わあ、すごいですね」と、キャロルが声を高くした。「でも、シュウさんはそのこと知らなそうでしたね」

「たしかに…、そんな感じであったな」

「それに、レオンさんの様子見ると言っちゃいけないことのように思いましたけど」

「……」

「今頃レオンさん、シュウさんに問い詰められてたりして。和尚さまのせいで」

「えっ！？」と動揺して声を裏返したタマ。「…うおっほん！」

と咳払いをし、寺へと踵を返して行った。

「タ、タマ知ーらにゃいっ…」

キャロルとタマの姿が見えなくなると、王子がカレンとサラの腰

に手を当てた。

「疲れたであろう、カレン、サラ？　中で休むと良いぞ」

と、カレンとサラをキャビンへと連れて行く。

その後を着いて行こうとしたレオンを、シュウが呼び止めた。

「なあ、レオ兄。訊きたいことがあるんだけど」

レオンが振り返ると、シュウが困惑したような顔をしていた。

「……何？　シュウ」

「さっき和尚さん、オレに何て言おうとしたの？　オレが母さんの力を、何？」

「さあ？」

「惚けないでよ。知ってんだろ？　レオ兄は」

レオンはシュウの顔を見つめたあと、シュウの傍らに並んだ。

手擦りに手を掛け、シュウに横顔を見せる。

シュウが黙って返事を待って数分。

レオンが口を開いた。

「君はキラの闇の力を受け継いでいたんだよ、シュウ」

「――えっ…？」

耳を疑ったシュウ。
レオンが続ける。

「僕もタマ和尚がシュウのことキラの息子だって当てるまで、気付かなかった。僕はブラックキャットの闇の力を受け継がなかったから。純粋なブラックキャットとなれば、相手が闇の力を持っているか持っていないかなんて一目瞭然なんだ」

「ま、待ってレオ兄っ…！　頭が着いて行かねえっ…！」

頭の中、必死にレオンの言葉を受け入れようとするシュウ。
だが、そう簡単には行かなかった。
今まで18年間、そんなこと聞かされていなかったから。

間を置き、レオンが続ける。

「しかもタマ和尚は、何故シュウがキラの息子であることまで当てたと思う？」

「そ、そうだよ、何で？　オレの中の闇の力が、何で母さんから受け継いだって分かったの？」

「それほどまでに、君は強い闇の力を持っているから」

「えっ…！？」

「もちろん、それはまったくもってキラの闇の力には敵わないだろうけど。それでもキラの息子だって分かるほど、君は強い闇の力を持っているんだよ」

「そんな…カバなっ……！」

「ヒースさん風に言わなくてもいいし」

「オレがっ…、オレが闇の力を？　それって、破滅の呪文を使えるってことで…！　待ってくれよ、このオレがっ……！？」

「あくまでも君はハーフだから、破滅の呪文って言えるほど強力ではないと思うけどね。使えば怪我は負うものの、己の身が消滅してしまうことはないだろうし…。それにもしかしたら半端な分、１回だけじゃなく何度か使えるのかもしれないよ」

「……」

レオンの言葉を聞いているうちに、だんだんと現実が飲み込めてきたシュウ。

冷静になってきたら、疑問が浮んできた。

「母さんは、何でそのことオレに教えてくれなかったの！？」

「……全ては、愛する主のため」

キラの愛する主＝リュウ。

どういうことか、シュウは数分の間考えた。

そして答えが分かり、ぼそっと呟く。

「たまーに思うけど…、何だかんだでオレも親父に愛されてるよなあ……」

「とてもね」

そう言って、レオンが笑った。

その日の夜、葉月島本土へと帰ってきたシュウたち。
本土はすっかり梅雨真っ只中のようだった。

城の車で送ってもらって帰宅。
玄関の扉を開けるなり、

「おかえりなさいなのだあああああああああっ！！」

とシュウに飛びついたリン・ラン。
その傍らでは、リュウが両腕を広げている。

「おかえり、サラ。え、何？　父上がいなくて寂しかった？　そーかそーか、さあ父上の胸に飛び込んで来い」

「はいはい」

とリュウの胸に飛び込んでやるサラ。
カレンが眉を寄せる。

「お義父さまの目にはサラしか映ってないんですの？」

「ん？　おー、おまえもおかえり」

と、リュウがカレンの頭を撫でる。
レオンが苦笑した。

「あのー、リュウ？　僕たちには？」

「あ？」と、シュウとレオンに顔を向けたリュウ。「何だ、おまえらも帰ってきたのか」

「当たり前だっ！！」

とシュウが突っ込んだとき。
キラが奥から駆けて来た。

「おかえり、シュウ、サラ、レオン、カレンっ…！」

「ただいま」

と、声をそろえたシュウとカレン、サラ、レオン。

「流刑は楽しかったかっ？」

「えーとお」と、苦笑するレオン。「流刑とは思えないほど…ね…」

「そうか、良かったな」

「でさでさ」と、サラ。「結構すごいお知らせあんだけど！」

「すごい知らせ？」

と、リュウとキラが声をそろえた。

「離島にお寺があったんだけどさ――」まで言って、言葉を切ったサラ。「やっぱ後で言う。先にお風呂入りたいや」

「ああ、オレも」

とシュウが言うと、リン・ランが急いでシュウとカレンの部屋へと風呂を溜めに向かって行った。

サラとレオンも自分たちの部屋へと向かって行き、カレンもその後を着いて行く。

「んじゃ、リビングで待ってるか」

と、リュウもその場を去る。

玄関に残されたシュウとキラ。

キラがシュウの顔を見上げて口を開く。

「シュ、シュウ、そのっ、あのっ……」

シュウは頷いた。

「親父のために黙ってたんだろ？　母さん」

「えっ…？」と小さく声をあげたキラ。「……う、うむ」

と頷いた。

「…隠されていた力を知って…帰ってきたのか……」

「うん」

「たっ…、頼むシュウっ！」と声をあげたキラの瞳が潤んでいく。
「リュウにはっ…！　リュウには言わな――」

シュウはキラの口を手で塞いだ。

「そんなにでかい声出したら聞こえちまうよ。…大丈夫、親父には絶対に言わねーから。それに破滅の呪文、まだ訊かないから」

キラが安堵したように頷くのを見たあと、シュウは自分の部屋へと戻っていった。

久しぶりの自宅リビング。
両親や弟妹、グレルの顔を見回すシュウ。

（ああ…、やっぱ自分ん家はいいな）

なんてしみじみ思う。
グレルに抱っこされているレオンを見て苦笑してしまうが。

「ちょ、ちょっとグレル！　何で抱っこすんのさ！？」

「だって１０日間も愛猫がいなくて寂しかったんだぞーっと」

「だからって、僕もうイイ大人なんだから止めてよ恥ずかしいっ！」

「照れ屋だな、オレの愛猫は♪　可愛いぜーっと♪　ちゅっ、ちゅっ、ちゅうううう（ハート）」

「うっわあぁぁあああぁぁあ！　キスしないでえぇぇえええぇぇえええっ！！」

「おい、ＢＬは外でやってくれ」と、トリハダを立てながら言ったリュウ。「んで」

と、サラの方を向いた。

「離島に寺があって、どうしたって？」

「ああ、そうそう」と、久しぶりのビールを飲みながらサラ。「そこにさ、ブラックキャットの和尚さんがいたんだけど」

ちなみにキャロルがいたことは内緒にすることにしている。

キャロルがサラを傷つけたことがある、ということを知らないリュウには言わない方が良い気がして。

不審に思ったリュウがゲールに問い合わせたなんてことになったら、恐ろしくて仕方が無い。

シュウが続く。

「そのブラックキャットの和尚さんがさ、何とうちの神の友だったんだぜ！？」

「え」

と、きょとんとしながら声をそろえたシュウとカレン、サラ、レオン以外の一同。
数秒して、驚愕した。

「ええっ！！？」

急に騒然とするリビング。
リュウがソファーから立ち上がり、着ていたシャツを脱ぎ捨てる。

「おいキラ、俺のスーツ！」

「って、今から行くのかリュウっ！？」

「ええっ！？」

と、声をあげ、シュウとカレン、サラ、レオンが慌ててリュウを押さえつけた。
キャロルのことを黙っているのに、これじゃあ意味がない。

「なっ、何言ってんだよ親父っ！？　そのっ…、急に行ったら迷惑だろっ！？」

「そうですわ、お義父さまっ！　和尚さまにも都合というものがあるのですわっ！」

「シュウとカレンちゃんの言うとおりだよ、リュウ！　落ち着いて！」

「そそ、落ち着いてよ親父。そして早くシャツ着てくんない？」と、リュウの胸元に目をやるサラ。「お姉ちゃん痴女になってるからさ

あ」

自分の胸元に目を落としたリュウ。
ぎょっとする。

「ミ、ミラ…！？」

「この首筋、肩、大胸筋に腹筋…、どこを見てもパパってば、せくすぃぃぃぃぃぃぃぃぃんっ……！　あぁんもう、抱かれたあぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁいっ！！」

「…パ…パパも落ち着くからおまえも落ち着け、ミラ。出産のときは鼻からスイカ出てくるくらいイテェって言うし、パパに抱かれるときは鼻にメロン突っ込まれるくらいイテェよ？」

「ほお？」と、引きつったキラの顔。「約１９年前、そうと分かっていながら私を容赦なく抱いたのかおまえは」

「ああ、容赦なく突っ込んだな俺」

「わっ、私は本気で痛かったのだからなっ…！」

「俺は本気で気持ちよかったんだぜっ…！」

と顔を恍惚とさせたあと、再びシャツを着たリュウ。
顔を赤くするキラを抱っこし、再びソファーに腰掛ける。

「とりあえず、神のご友人を訪ねるのはまた今度にするか。たしかに向こうにも都合っていうもんがあるからな」

それを聞いたシュウとカレン、サラ、レオンは安堵した。

「んで」と、リュウが続ける。「神のご友人がそこにいるってことは、神もそこ出身だったってことか」

「おう、そうみたいだぜ」と、シュウ。「それから、母さんもそこで産まれたっぽい」

「ほお、そうなのか！」

とキラが声を高くする一方、リュウが納得したように言う。

「だろうな。そこの島のブラックキャットが本土よりも強いって話を聞いたとき、そうじゃねーかと思ったぜ」

「母さん、生後1ヶ月くらいまでそこにいたんだってさ。じーちゃんと、その友――あ、名前はタマさんね」

「タマ！」と、鸚鵡返しに言ったリュウ。「何て高貴なお名前だ…！」

「……。そ、そうかな…」

「神と合わせてポチタマだぜ……！！」

「……。そ、それで、昔じーちゃんとタマ和尚の間にいざこざみたいなのがあったみたいでさ。じーちゃんその島離れて、葉月島本土に母さん連れてやって来たみたい」

「ほお」と、キラ。「私が生まれて1ヶ月のときにか。道理で覚え

ていないわけだぞ」

「ねね」と、ユナがシュウを見た。「そのタマさんって、どんな猫だったのっ？」

「ええとお…」と、タマを思い浮かべるシュウ。「実年齢は６２でー」

「外見年齢は２５歳くらいで、瞳の色は灰色だったのですわ」

と、カレンが続いた。

うんうんと頷きながら、レオンも続く。

「それから、桂月村を守っている高僧でね」

最後にサラも続いた。

「それでいて案外ドジでマヌケで、ツッコミかと思いきやボケで、面白い黒猫だったよー」

興味津々とシュウたちの話を聞いていた一同。

一通り話が終わると、それぞれ自分の部屋へと戻って行った。

リュウがリビングから出て行く前、シュウが呼び止める。

「なあ、親父」

「何だ」

「あ…のさ……？」

と、言いづらそうに目を逸らしたシュウ。
それを見たリュウの顔が、見る見るうちに驚愕していく。

「バっ…、バカヤロウ！！」

すっっっぱーーーーんっ！！

と、リュウの投げたスリッパがシュウの顔面に命中。
シュウの身体がソファーの上に吹っ飛ぶ。

「いってえぇぇっ…！！　いきなり何すーーー」

「あれほどゴムつけろって言ったじゃねーか！！」

「は？　何言っーーー」

「それなのに生で楽しむったあ、どういう了見だ！！」

「そうじゃなーーー」

「ゴム５ダース持たせてやったっつーのに！！」

「ちょーーー」

「おまえ１０日で５ダースじゃ足りねえって言うのか！？」

「聞いーーー」

「俺も足りねーよ！！」

「どんなバケモ――」

「カレンはちゃんと安全日だったんだろうな！？」

「待っ――」

「といっても生理不順だったら危険日の可能性もあるんだからな！？」

「親父――」

「おまえ俺をもう祖父さんにする気か！？」

「だから――」

「そんなにお父上様をいじめてえのか！？」

「ねえ――」

「どんなひでー親不孝者だおまえは！！」

「おい――」

「マジ信じらんねえ！！」

「ちょっと――」

「涙が込み上げてきたぜお父上様は！！」

「あの――」

「おーーーいおいおいっ！！」

「泣かな――」

「じゃ、おやすみ」

「おう、おやすみ――って、待てえぇぇえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

と、くるりと背を向けたリュウに向かって叫んだシュウ。

リュウが眉を寄せながら振り返る。

「何だよ、うるせーな。俺キラとイトナミの時間なんだけど」

「オレの話を聞けっ！！」

「まだ何かあんのかよ、おまえ」

「まだ用件言ってねえっ！！」

「だったら早く言えよ」

「お、おうっ…！　そ、そのっ……」と、再びリュウから目を逸らすシュウ。「親父…さ？　オ…、オレのこと愛してるっ？」

ビシィっ！！

とシュウの頬に命中したリュウの平手。

再び吹っ飛んだシュウの身体は、

ドガァっ！！

と向かいのソファーへ。

「気色わりーこと訊いてんじゃねえ！　張り倒すぞ！！」

「はっ、張り倒してから言うなっ！！」

「ＢＬはレオンと師匠だけで充分だ！！」

と、どかどかと足音を立ててリビングの戸口へと向かっていくリュウ。

シュウの顔が膨れた。

（やっぱ親父に愛されてるなんて、大～～～間違いだった。オレの帰りなんか待ってなかったんだろうな）

と思ったとき。

リュウが戸口で立ち止まった。

「おい」

とシュウに背を向けたまま言う。

シュウはぶっきら棒に返事をする。

「何だよ」

「まだ言ってなかった」

「だから何」

「……おかえり」

「えっ？」

と短く声をあげたシュウ。
ちょっと照れくさそうに応えた。

「う、うんっ…！　…たっ…ただい――」

「俺の玩具」

「玩具かよっ！！」

リュウがリビングから去って行く。

シュウは溜め息を吐いて苦笑した。

（ああ…、すげー帰ってきたって感じ……）

その頃。
サラ・レオンの夫婦部屋にて。
カレンも一緒に3人で話していたとき、サラが突然口を押さえて立ち上がった。

「き、気持ち悪い…」

「えっ！？」

と、声をあげたカレンとレオン。

サラの顔色が悪い。

「やっ、やだっ、どうしたのよサラ！？」

「大丈夫！？　サラ！？」

カレンとレオンの心配そうな顔を見たサラ。

「ヤダな、そんな顔しないでよ。待ってて、今いつだったかのリンクさんのようにコメディに頑張るからさっ…」

と、トイレへと駆け込んでいく。

そして、

「オっ…、オロロっ！　オロロロロロっっ！！　オロロロロロ

第１３９話　流刑から帰りました（後書き）

先月、投票や評価・感想、メールなどくださった読者さま、ありがとうございました。
今月も頑張ります！

それからゴールデンウィーク中の更新ですが…。
連休となると益々忙しくなるので遅れるかもしれませんが……、出来るだけ通常のペースで更新できるよう頑張ります。

第１４０話　次女、懐妊です

サラ・レオンの夫婦部屋の中。
サラがトイレに駆け込み、滝のように嘔吐する。

「オロロロ

しっ……！」

「もしかして…！」と、レオンが声を高くする。「悪阻（つわり）っ……！？」

「え？」と、一瞬きょとんとしたサラ。「…あっ…、えっ…？　…ああっ！」

と突然声をあげた。

「流刑に行く前、森ん中で生で一発やった！」

「森の中でって、何してんのよ…」カレン、赤面。「それって約１０日前よね？　いくらなんでも悪阻は早すぎるわよ」

「いや、人間とは違うから」と、レオン。「人間同士の子は１０ヶ月で産まれ、猫モンスター同士の子は２ヶ月で産まれる。人間と猫モンスターのハーフは５ヶ月で産まれ、そしてハーフと猫モンスターの間の子は３ヶ月半ほどで産まれるんだ。人間と違ってお腹の中で成長が早い分、悪阻も人間より早く来るんだよ」

「そっ、それじゃあっ…！　サラはっ…サラはっ……！」と目を見開いていくカレン。「にっ、妊娠っ…！　ですの！？」

「――えっ！？」

と、声をあげたのは部屋の前を通りかかったシュウである。

転びそうな勢いで部屋の中に突っ込んでくる。

「にっ、妊娠！？　カレン妊娠したのか！？」

「あたくしじゃなくて、サラよシュウ！」

「サっ、サラっ！？」と、声を裏返したシュウが、トイレへと駆けて来て中を覗き込む。「サラおまえ、妊娠したのか！？」

「…っ……！！」俯き、肩を震わせているサラ。「レ…、レオ兄っ…！　カレン、兄貴っ…！　アタシ、こ、子供産むのっ……？」

サラの様子を見たシュウとカレン、レオン。
狼狽したように言う。

「大丈夫だよ、サラ…！　お産のとき、僕が立ち会うから……！」

「そうよ、サラ！　初めての出産は怖いかもしれないけれど、レオンさんが傍に居てくれるなら大丈夫よ…！」

「そうだぜ、サラ！　レオ兄がいるなら心強いだろ！？」

顔をあげたサラ。
次の瞬間、

「あーーーっはっはっは

「親父は祖父さん、兄貴は伯父さんデビュ～～～っ！！　あーーーっはっはっはっはっはっ！！　楽しすぎるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！」

「ちょ、サラ、おま……」シュウの顔が引きつる。「怖くて震えてたんじゃねえのかよ！？」

「怖い？　出産が？　ないない」と、手をぱたぱたと振ったサラ。「レオ兄の子供産めるなんて、幸せ以外の何ものでもないよ。それにアタシはハーフなんだし、人間みたいに出産苦労しないよ。あっさり出てくるって、きっとね♪」

そして再び響くサラの笑い声。

レオンが苦笑しながら言う。

「え、ええとぉ…、とにかく本当に妊娠してるのか、明日病院に行って確認してみよう」

そういうことになった。

翌日、夕方。

7月になった。

去年まではシュウたち家族や仲間の誰の誕生日でもない月だったが、今年からはミヅキの誕生日が入っている。

というわけで、シュウ宅のリビングで只今ミヅキ１８歳の誕生日パーティー中。
いつもの一同が集まっている。

それを見ながら、サラが言う。

「ちょうど良かったなあ」

「そうね、ちょうど良かったのですわ。皆さんにまとめてお知らせできるもの」

とカレン。
同意し、うんうんと頷くシュウとレオン。

首をかしげるシュウとカレン、サラ、レオン以外の一同。
キラ、リュウと訊く。

「何の知らせだ？」

「サラ、おまえ今日まったくビール飲んでねーんじゃねえ？　どうした、具合悪いのか？　何か顔も赤い気ぃするし」

とサラの返事を訊く前に、サラに治癒魔法を掛けまくるリュウ。

「いやまあ、具合良くはないんだけどさ。アルコールはしばらく飲まない方がいいし。てか、治癒魔法でも治るものじゃないっていうか」

というサラの言葉を聞いて、嫌な予感を感じたリュウ。

（む、むかーしキラからそんな言葉を聞いたことがあった気が…。
た、たしか三つ子を妊娠したときに珍しく悪阻がひどくて……！！）

強張ったリュウの顔を見たサラが、あはは、と笑う。

「気付いたみたいだね、親父♪」

「サ、サ、サ、サラっ…！？　ち、ち、ち、父上の予感は当たってたりすんのかな……！？」

「えーと、親父？」と、苦笑しながらシュウが口を挟んだ。「その様子見る限り当たってる……」

「…っ……！？」

ギギギっとロボットの動きでレオンに顔を向けたリュウ。
レオンがごくりと唾を飲み込み、口を開いた。

「お……お孫さんですよ、お義父さん」

「――！！？」

嫌な予感が的中したリュウ。
その左手に持っていたウィスキーの入ったグラスがぽろっと落ち、

ガシャンっ…

と、ソファー脇の床の上で破砕。

その後、リビング内は大騒ぎに。

「おおおっ！！　妊娠したのか、サラ！？」

「うん、ママ。カレンんとこの葉月病院で調べてもらったから間違いないよ」

「よって」と、シュウが苦笑する。「オレは伯父さんに…」

との言葉を聞いた瞬間、

ガシャンっ…

とリュウに続いてビールの入ったグラスを床に落としたのはミラ。

「あ、あれ、ちょっと待ってサラ？　ハ、ハーフと純猫モンスターの子は3ヶ月半で産まれるのよね？」

「うん」

「それで、さ、最後にあった生理の初日が妊娠0週0日とされるのよね？」

「そそ。だからあと約2ヵ月半もすれば産まれるよー」

「ってことは私、あとたった2ヵ月半で、お、おおお、おばっ…伯母さん！？」

「そういうことー」と、笑うサラ。「おめでとう、お姉ちゃん♪」

「いっ、嫌あぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁああぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」

と絶叫するミラ。
リン・ラン、ユナ、レナ、マナの順に続く。
「ということは、わ、わわわ、わたしたちもオバサンですかなのだあぁぁぁあぁぁぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁあ！？」
「えええ！？　あたしたちもうオバサンなのぉぉおぉぉぉおお！？」
「ちょっ、まだ１４なのにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！」
「みんなジュリよりマシだよ…」
とのマナの言葉に、ジュリに顔を向けた一同。
（た、たしかに……）
納得。
きょとんとして首をかしげているジュリは、５歳にて叔父デビューである。
「ジュリちゃん、なんて不憫なっ…！」
と、リーナ。
ジュリを見ながら瞳を潤ませたあと、にやにやとしながらリュウに顔を向けた。
「おめでとう、リュウ兄ちゃん」

「……」

あまりの衝撃に、グラスを手に持った態勢のまま硬直しているリュウ。

隣に座っているキラが、あはは、と笑って言った。

「私たち、ジージとバーバだなリュウ♪」

次の瞬間、立ち上がったリュウ。

頭を抱えて絶叫した。

「ぐあぁぁぁあああぁぁぁぁあああぁぁぁぁあああぁぁぁぁあああぁぁぁぁあああぁぁぁぁあっ！！！」

「だ、断末魔みたいな声出すなやリュウ」

「だってよ、リンク！？　祖父さんて何だよ、祖父さんて！？　じいいいいいいいいいいいいいいいいいいいさん、てえええぇぇぇえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！」

「お、落ち着きや…」

「落ち着けねえ！　俺はまだ３０代なんだぜ！？　しかもシュウの兄貴に見られるほどピチピチなんだぜ！？」

「ピ、ピチピチいうなや。子より孫いうし、ええやんか」

「良くねえ！！　ああもう、ちくしょう！！　俺の可愛い娘相手に生で楽しみやがって！！　こっの…」と、レオンの胸倉を掴んだリュウ。「バカヤロウがあああぁぁぁあああぁぁぁぁあああぁぁぁぁあああ

あぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああ！！！」

バキィっ！！！

と、レオンを殴り飛ばした。

ガシャーーーンっ！！

とリビングの窓を突き破ったレオン。

外へと飛ばされながら絶叫した。

「お義父さん、お許しをおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおーーーーーーー……」

と、だんだんと小さくなっていったレオンの声。

飛んで行った方向からすると、きっと葉月町の脇を通り越して海に辿り着くことだろう。

「レっ、レオ兄ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！」

と慌てて後を追いかけていこうとしたサラの腕を、リュウが引っ掴む。

「こら、妊婦はおとなしくしてろ！　流産したらどうすんだ！」

と再びソファーに座らせられ、サラが眉を寄せる。

「ちょっと親父。アタシの妊娠、賛成なの？　反対なの？　どっちなの！？」

「出来ちまったものは仕方ねえから産め…」

との言葉を聞いて、サラの顔が明るくなった。

「はーい。ありがと、お祖父ちゃん♪」

「……」

ソファーに腰掛け、深〜く溜め息を吐くリュウ。

（い、一気に老けたように見える…）

と、シュウが苦笑してしまう傍ら。

サラがキラを見て訊く。

「ねえ、ママ？　初めてのお産のとき、大変だった？」

「大変だったぞー」と言ったのはミーナだ。「リュウは仕事だったから、わたしが立ち会ったのだが」

「へえ、そうだったのか」と、シュウ。「モンスターの母さんでも大変だったの、やっぱ」

「ああもう、大変だったぞ……」

と、キラ。

シュウの出産のときを思い出しながら、語り始めた――。

――そう、あれは約18年前のことだ。

当時、私とリュウはまだマンションに住んでいたのだが。

シュウの出産予定日が近くなると、ミーナが寝泊りしていた。

万が一陣痛が起きた場合、すぐに葉月病院に私を連れて行けるようにな。

しかし、その陣痛の判断が難しくてな。

「ほ、ほおお」

「どうした、ミーナ？　雑誌の出産のとこなんて読んで」

「陣痛って、人によってはものすごーく痛いらしいぞ、キラ」

「ほう」

昼下がりのリビングのソファーで、私とミーナがそんな会話をしていたときのことだ。

突然パンツが濡れたものだから、私は驚いて立ち上がったのだ。

「ぬ！？　何故パンツが濡れるのだっ…！」

「おおーっ。スカートまで濡れてるぞキラ」

「な、何故なのだ…！　スケベなことなんか考えていないのにっ…！！」

「？　スケベなこと考えるとパンツが――」

「ゴ、ゴホン！　な、なんでもないぞミーナ。しかし、本当に何故いきなり……」

「…だ…大丈夫だぞ、キラ」

「ん？　何がだ、ミーナ？」

「２１歳でお漏らししたこと、誰にも言わないぞ……」

「！？　ち、違うのだミーナ！　わ、私はお漏らしなどしておらぬっ！」

「ほう、お漏らしではないのか。そういえば、しっこの臭いしないな」

「うむ。それに無色だぞ」

なんて話しているときに、賢く鋭い私はハッとしたのだ。

予定日にはまだ少し早かったが、これはお産の予兆であるアレだ…！　とな。

これは重大発表だと思い、私はすぐに長月島まで行って仕事をしていたリュウに電話を掛けたのだ。

「おう、俺の可愛い黒猫か？」

「ふふふ、そうだぞ私の愛する主」

「機嫌良さそうだな」

「うむ、聞いてくれ！」

「どうし――」

「破産したぞ♪」

「――はっ！？」

「ド派手にな♪」

「ちょ、待っ…！！　おまえ何買ったの！？」

「何買った？　午前中にビール買ったぞ」

「何億本！？」

「へ？　6缶セットを2つしか買ってないぞ？」

「あとは！？　何買ったんだ！？」

「何も？」

「……。…も、もしかしておまえ間違ってねーか？」

「む？」

「破産じゃねーんじゃ…」

「何を言っている、ちゃんと破産したのだ」

「おまえの言うその破産を詳しく説明してみろ」

「リビングでミーナと話していたらな、パンツが濡れたのだ」

「え、何。俺との子作り話してたのか？　バカおまえ、話したい気持ちは分かるがミーナにはちと早――」

「ち、違うっ！　そんな話などまったくしていないのに、パンツが濡れたのだ」

「は…？」

「こう、ド派手にドバーーーっとな♪」

「ドバーーーっと…？」

「うむ！　子宮からな♪」

「！！？　バっ…バカ！！　『破産』じゃなくて『破水』だ！！　のん気に電話してねーで病院行けえええええええええええ！！」

というわけで、私とミーナは葉月病院に向かったぞ。
手にはグレル師匠が「お産のときに聴け」と言って私にくれたＣＤを持ってな。

そして病院に着いて驚いたぞ。
どうやら陣痛はとうの昔に始まっていて、しかも、もう産まれる準備万端状態だったらしいのだ。

だから私はすぐに分娩室に運ばれたわけだが。

そこで待っていた助産師は院長――つまり、カレンの祖父さんであった。

まあ、私のお産のときは毎回だけどな。

そして持って行ったCDを掛けてもらったら、ロッ○ーのテーマが分娩室の中に流れ始め。

立会いのミーナと共に何だかやたらと気合が入ってしまう中、私の初産が開始したのだ。

そう、大変な。

何が大変だったかってな、

「いきんで下さい、キラさん！　一か月分の大便を出す感じで！」

と院長が言うものだから、私はいきんだのだ。

「ふんっ！！」

と、言われた通り一か月分のウン○を出す勢いでな。

そしたら次の瞬間、

スポォォォォォンっ！！

とシュウが院長目掛けて発射したのだ。

まぁ～ったく、母上は驚いたぞシュウ。

おまえときたら、ヘソの緒ぶっ千切って頭から突進し、

ドゴォっ！！

と院長の腹に突っ込んで３ｍほど飛んで行き、そして、

バァンっ！！

と院長を壁に激突させて脳震盪を起こさせたのだぞ？

院長に申し訳なくて済まなかったぞ、母上は。

しかも聞けば前代未聞だというではないか。

元気があることは良いことではあるが、母上はと～っても恥ずかしかったのだからな！

ああ～、大変だった……。

――と、最後に深い溜め息を吐いて語り終わったキラ。

呆れたような目でシュウを見つめる。

一方、シュウの顔はぴくぴくと引きつってしまう。

「母さん、アンタ（みたいな超天然バカは）お願いだから過去を一人称で語らねえでくれねえかな…！？　突っ込みたくても突っ込めないんすけどね……！？」

「シュウのお産の後からだぞ」と、キラの話は続く。「私のお産のとき、院長が警戒して離れるのようになったのは」

「うむ。シュウ以降、院長は３ｍ離れてキラの助産するようになったな」

と、ミーナ。

頷いて続けるキラ。

「兄が兄なら、その弟妹も弟妹でな」と、また溜め息。「ミラも院長目掛けてスポォォォォンっ！　同様にサラもスポォォォォンっ！　ジュリもスポォォォォンっ！」

意味が分かっていないジュリの傍ら、引きつるミラとサラの顔。

「双子はスポポォォォォォンっ！！」

続いて引きつるリン・ランの顔。

「三つ子に至っては、スポポポォォォォォォンっ！！！」

さらに続いて引きつるユナ・マナ・レナの顔。

「まったく機関銃か。三つ子までは院長が受け止められなかった分をリュウやミーナが受け止めていたが、いつか７つ子、８つ子…１０つ子が出来たらどうしようと、母上はハラハラしていたぞ。スポポポポポポポポォォォォォォォォォォォォォォンっ！！！！なんて連発したら、誰が受け止めるのかって話になるだろう？　まったく私の子供たちは手が掛かる……」

と、また深〜い溜め息を吐いたキラ。

それを見て、顔が引きつって、引きつって、引きつりまくるシュウとその妹たち。
これが産んでくれた母じゃなかったらハッキリ言って、
（ど、どつきたい……！！）
そんなシュウたちに代わってどついたのはリンクである。
「何言ってんねん、おまえ」
ドスっ
と、キラの額にチョップ。
そして、
「何すんだ、てめえ」
ビシィッ！！
すかさず返ってきたリュウのブッチャー。
「――ぎっ、ぎゃあぁあぁあっ！！　めっ、目があぁぁあああぁぁあっ！！」
「わああっ！　リンクさあああんっ！」
とシュウが慌ててリンクに治癒魔法を掛ける傍ら。
キラがサラを見た。

「というわけで、お産というものは大変なのだぞサラ？　特に初産のときはな。おまえも充分、気をつけ――」

「間違いなく大丈夫だから安心して」

と早口でキラの言葉を遮ったサラ。

（ママと違ってアタシはハーフだけど、難産ってことはなさそうだな）

まだ膨らんでいない腹を擦る。

（アタシもついに、親になるんだ。ママになるんだ…）

そう思うと、じーんと込み上げてくるものがあった。

「サラ」と、リュウが呼んだ。「母親として、しっかりな」

「うん」

リュウの顔を見て微笑んだサラ。

また腹部に目を落として、手で擦った。

（どんな子が産まれてくるのかなあ…）

そんな疑問の答えは約2ヵ月半後には分かる。

第１４１話　大人のお勉強

サラの妊娠が発覚したのは一週間前のこと。
あれ以来、シュウたちの間では新たに生まれてくる家族のことで話が盛り上がることもしばしば。

三つ子の部屋の中。

「サラ姉ちゃん似の子が産まれるかな、それともレオ兄似かな」

と、宿題をしながらユナ。

「どっちに似ても綺麗な顔した子…」

と、薬の調合をしながらマナ。

「だよね、だよね！　あたし、女の子がいーな♪」

「あたしは男の子かな…」

と言いながら、マナが薬を小瓶の中に注いだ。
ユナが首をかしげる。

「その薬、何の薬？」

「レナに…」

と言って、仕上げの魔法を掛けるマナ。

「レナに？」と、レナに顔を向けたユナ。「……ああ、そうだった。レナの頭は明日のことで一杯なんだった。うん…、物凄く薬の力が必要そうだね」

苦笑しながら納得した。

ユナとマナの傍ら、レナはベッドの上に直立して立っていた。

顔を真っ赤にしながら、全裸で。

「ユ、ユナ！？　マナ！？」と声を裏返しながら口を開いたレナ。

「あああああたし、変じゃない！？」

「……（変…）」

「あ、あああ、あたしの身体どう！？　モ、モモモ、モモ肉は！？　ム、ムムム、ムネ肉は！？　か、かかか、皮は！？　ボ、ボボボ、ボンジリは！？」

「焼き鳥か」

と突っ込んだユナとマナ。

ユナが苦笑しながら言う。

「緊張しすぎだよ、レナ。そりゃ、ミヅキくんの前でマッパになるのは緊張すると思うけどさあ」

明日ミヅキ宅へと行くレナ。

ミヅキへの誕生日プレゼントとして、ミヅキの作る人形のモデルになる。

つまり、ミヅキの前で全裸になるのだが。

「あああああっ！　やっぱり恥ずかしいよおおおおおおおおおおおおっ！！」

と叫び、レナが布団の中に潜り込んだ。

溜め息を吐いたマナ。

出来上がった薬を持って、レナのところへと歩いていく。

「ミヅキくんにお人形作ってもらいたいんでしょ、レナ…」

「そ、そうなんだけどおぉ！」

「だったら勇気を持って…」

がばっ！

とレナの布団をめくったマナ。

丸まっているレナに薬を渡す。

「ほら、薬作ったから…」

レナがそれを受け取って訊く。

「ど、どういう薬？」

「うーん…」と、ぽりぽりとコメカミを掻くマナ。「言うならば…、『大胆になれちゃう薬』…」

「だ、大胆に？　そ、そっかっ…！　大胆になれたら、脱ぐのなん

て恥ずかしくないよねっ……！」

マナが頷いて続ける。

「それから、徐々に興奮するように作ってあるから…」

「じょ、徐々に興奮？」

「彼氏と彼女が部屋の中に2人きり…。彼女はマッパ…。何も無いとは行かないらしいよ…」

「えっ、あっ…！」と、ユナが声をあげて頬を染めた。「そ、そうだよねっ…！　わあぁ、レナ大人になってくるんだあぁっ……！」

「えっ!?」と、レナがユナとマナの顔を交互に見る。「えっ、あっ、ええっ!?　や、やっぱりそういう展開になっちゃうの!?」

「なるって言ってた…、サラ姉ちゃんが…」と、マナ。「だから…」

ぽん、とレナの肩を叩いた。

「ミヅキくんがドールの設計図書き終わったあと、興奮して盛り上がってきて…」

「って、言われてもおぉ！」と、レナの顔が真っ赤に染まっていく。「ど、どどど、どうすればいいの!?　そ、そそそ、その、エエエエエエエエエエエエエエエッチのとき!?　こ、こ、こ、声とか!?　せ、せ、せ、台詞とか!?　こ、こ、こ、行動とか!?」

「そういうのは、サラ姉ちゃんかカレンちゃんに…」

と、いうことで。

レナは寝巻きを着て部屋を出ると、シュウ・カレンの夫婦部屋へと向かって行った。

学んだことを携帯電話にメモろうと思ったが、充電中。

よって、手にはメモ張とペン。

（一瞬サラ姉ちゃんに聞こうかと思ったけと、普通の女の子とは違いそうだしね）

コンコン、とシュウ・カレンの部屋のドアをノックしたレナ。

反応が無くて、首をかしげながらドアを開ける。

「…あ、兄ちゃんとカレンちゃん、お風呂中か」

レナは中に入ると、部屋の中を見回した。

そして、作り付けのクローゼットの中へと身を隠す。

（兄ちゃん、カレンちゃん、ごめん…。ここは実際のシーンをこの目で見て勉強するのが一番っ……！！）

と、メモの準備をするレナ。

そしてクローゼットの隙間から部屋の中を見た瞬間。

「フィーバァァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

ドカァァンっ！！

とバスルームからライダーキックで飛び出てきた真っ裸のシュウ。

レナ、思わず声をあげそうになる。

（あぁー、びっくりしたっ…！　に、兄ちゃんて、いつもこうなんだろうか……）

と少々兄の姿に衝撃を受けながら、その行動や台詞をメモる。

（役に立たないかもだけど、一応ね…）

続いて、バスルームの中からカレンの声。

「ねえ、シュウ？　最近修行の方はどうなの？」

「うん、だんだん母さんの攻撃見れるようになってきた」

と言いながら、全身鏡の前に立ったシュウ。

ボディービルのポージングを始めた。

「うーん…、まだまだ親父の筋肉には敵わねーけどオレも中々……」

レナ、眉を寄せながらメモる。

（テレビでお風呂上りにそういうことしてる男の人いるっていうの見たことあるけど、まさか兄ちゃんもやってたなんて…）

シュウがにやにやと笑いながら訊く。

「なあ、ハニー。まーだー？」

「何よ、もう。お風呂場でもしたのに、またするの？」

「するー」

という会話を聞いて、手にしっかりとペンを握ったレナ。

（おっ、始まるみたいだぞっ…！）

どきどきとしながら待っていると、カレンがバスタオル一枚で出て来た。

「んもーう、仕方ないわね、アナタってば…！」

と言いながら、ベッドへと向かっていくカレン。

シュウとカレンを見たままレナの手が動き始める。

カレンがベッドに寝転がり、頬を染めながら言う。

「ヘイ、カモォォォォンっ…♪」

「イエッサァァァァァァァァァァァァァっ！！」

と、絶叫しながらカレンに飛び掛ったシュウ。

カレンのバスタオルを剥ぎ取って床に投げ捨て、カレンに負い被さった。

濃厚なキスを始める2人にレナは顔がぼっと熱くなってしまうが、メモを取る手はしっかりと動いている。

（うわぁあぁあぁあぁ…！　お、大人って、あんなキスするのおぉおぉっ……！？）

ようやくキスが終わったと思ったら、カレンの身体に吸い付き始めるシュウ。
レナ、プチパニック。
（わわわわわっ…！　あたしもミヅキくんにあんなことされんの…！？）
カレンが恥ずかしそうに声をあげる。
「ダ…ダメェっ……！」
（あたしもダメェェェェェェ！！）
「そんなとこ嫌っ…！」
（いっ、いやあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあっ！！）
レナ、心の中で絶叫。
顔を通り越して首まで熱くなっていく。
（兄ちゃん何してんの兄ちゃん何してんの兄ちゃん何してんの！？って、わあああああっ！！　カレンちゃんそれ何してんの何してんの何してんの！？）
と目の前で繰り広げられる光景に驚愕しながらも、メモを取るレナの手は必死に動いている。
（に、兄ちゃんベッド下の引き出しに手を持っていったあああぁぁ

あぁぁあっ！！　あっ、あれがパパが一週間に１００個以上消費すると噂の、コ、コココ、コンドーームですかぁぁあああぁぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあ！？　っていうか、兄ちゃん何ソレ…！　何ソレ何ソレ何ソレっ！！　そ、そそそ、そんなの入るわけ……って、嘘ぉおおお

ぉぉおおぉぉぉおおおっ！！？」

レナは自分の部屋に飛び込んだ。

バンっ！！

とレナが勢い良くドアを開けて飛び込んできたものだから、ユナとマナがぎょっとして振り返る。

「た、たたた、ただいま！！」

「お、おかえり…」と声をそろえたユナとマナ。「どうだった？」

「す、すごかった……！！」

「メモは？」

「ばっちり！！」

と、メモに目を落としたレナ。

シュウとカレンを見たままペンを動かしていたことと、パニックになったことで書いたことが滅茶苦茶になっていた。

「あ、あれ？　ど、どこがどうで、どうだったんだっけ…！？」

「落ち着いて書き直してみれば…」

と、マナ。

レナは承諾すると、新たにメモに書き出した。

「でーきた！　よ、よし、これで明日は完璧っ！」

「どれ」

とレナに手を伸ばし、メモを受け取ったユナとマナ。

箇条書きで書かれているその内容。

一行目を見た瞬間から、衝撃を受ける。

（カレンちゃんがこんなことを…！？）

その一行目の内容。

『誘惑するときはボディービルのポージングで「ヘイ、カモォォォンっ！！」と絶叫』

レナが新たにメモに書き直したその内容は、全てが間違っていた。

「これで明日のミヅキくんとの初体験は完璧いいいいいいいいっ！！」

だったら凄い…。

と、ユナとマナは思った。

第１４２話　これで完璧？　七女の初体験　～前編～

7月上旬。
季節は梅雨。

本日魔法学校が休みの双子と三つ子。
外は雨が降ってるからと家の中で遊んでいる。

そんな中、朝起きて朝食を食べたあとから昼過ぎまで、ずっとそわそわしている子が一匹。

「シャワー完了っ…！　バッグの中に『大胆になれちゃう薬』よーしっ、昨日がんばって書いたメモもよーしっ…！」

三つ子の一番下の子である、七女・レナだ。

これから恋人であるミヅキ宅へと行き、ミヅキへの誕生日プレゼントしてミヅキの作る人形のモデルを務めてくる。
全裸になるが故に、昼食は食べなかった。

（お腹出ちゃったら恥ずかしいからねっ…！）

マナの作った『大胆になれちゃう薬』は、その名の通り大胆になれる他に、徐々に興奮作用が働いてくるとか何とか。

レナの中の予定としては、ミヅキ宅へと着いたらマナの作った『大胆になれちゃう薬』を飲み、大胆になれたところで服を脱ぎ、ミヅキに人形の設計図を書いてもらう。
そしてミヅキが設計図を書き終えたときには、きっと働いている

だろう興奮作用。
それに身を任せ、求めてくるだろうミヅキに抱かれてドキドキ初体験。

（あああ、緊張するよぉぉ…！）

自宅を出る前、玄関で真っ赤になって足を止めてしまうレナ。
バッグの中のメモを取り出す。

（だ、大丈夫だよね初体験っ…！　昨日、兄ちゃんとカレンちゃんのイトナミ見させてもらって勉強したし！）

メモの内容をもう一度読み直したあと、

「よし！　いってきまあああああす！」

とレナは傘を差してミヅキとの待ち合わせ場所――キラの銅像前に駆けて行った。
そのメモの内容はレナがパニクってしまったが故に、目で見たものと完全に違った内容になってしまっているのだが、レナはそのことにまるで気付いていなかった。

ミヅキとキラの銅像前で落ち合ったあと、レナはミヅキに手を引かれてミヅキ宅へと向かって行った。
ミヅキ宅へと来るのはこれで2度目だ。

（ひ、久しぶりだなあ）

とドキドキとしながらリビングの中を見回すレナ。
玄関から向かって左の方にあるドアがドール工房、右の方にあるドアが寝室だ。

（し、寝室…。あ、あああ、あそこ行くんだよね！？　ドールの設計図作り終わったら、あそこ行くんだよね！？　そ、そそそ、それで、ミ、ミミミ、ミヅキくんと、は、ははは、初体験っ……！！）

なんて考えていたら、顔が真っ赤に染まったレナ。

（お、落ち着けあたしぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！）

ミヅキが飲み物を用意している間に、バッグの中から『大胆になれちゃう薬』を取り出す。

（レ、レレレ、レナ１４歳っ！　マッパとその後の初体験、が、ががが、頑張りますっ！！）

と、薬をごくごくと飲み干したレナ。
効果はすぐにやってきた。

「――…んんっ！？」

それから３０秒後。
アイスティーを用意して戻ってきたミヅキ。

「お茶でも飲んで落ち着い――」

面食らってグラスを落としそうになる。

ミヅキに背を向けて立っているレナ。
いつの間にか全裸になっている。

「レ、レナ…！？」

「ミヅキくん！」

と顔を傾け、ミヅキに目を向けたレナ。

パァン！

と己の尻を叩いて訊く。

「どう！？　このボンジリ！」

「ボ……？」

くるっと周ってミヅキと向き合ったレナ。
今度は太股を叩いて訊く。

パァン！

「このモモ肉は！？」

「……」

パァン！

「ムネ肉足りる！？」

「……」

パァン！

「っていうか見てよこの皮――」

「焼き鳥か」

思わず突っ込んだミヅキ。
もしかして、と察して訊く。

「マナちゃんの薬でも飲んだ？」

「今のうちにドールの設計図を！」

「飲んだのね…」

ミヅキ、苦笑。
レナの緊張をほぐしてからドールの設計図を書こうと思っていたが、その必要はないようだった。

まずはレナの身体のあちこちのサイズをメジャーで測る。
部分によっては少し戸惑ってしまうミヅキに比べ、マナの薬を飲んだレナはまったくもって平気そうだ。

「ミヅキくんミヅキくん、あたしのムネ肉どれくらい！？」

「アンダーバスト６３ｃｍ、トップバスト７７ｃｍ…」

「おお、もうちょっとでCカップ！　さすがあたしママの子！」

「そうだね……（今のぼく、傍から見たら変態のようだ…）」

と、苦笑しながらレナのサイズを測り終えたら、ようやく設計図を書いていく。

リビングのソファーに座りながら、目の前のテーブルの上に紙やシャーペンなど必要なものを置いたミヅキ。

テーブルを挟んだ正面に、レナに直立してもらう。

「ここでいい！？　ミヅキくん！」

「もうちょっと後ろ下がって」

「このへん！？」

「うん、ＯＫ。ていうかそんな大声出さなくていいから」

「分かった！」

と大声で返事をしたレナを見て、また苦笑してしまったあと。

ミヅキはシャーペンを手にした。

レナの頭の先から爪先まで、改めてその栗色の瞳で見つめてみる。

（…綺麗だなあ……）

キラほどではないものの、白いその肌は少し眩しい。

「書かないの！？　ミヅキくん！？」

「…ごめん、見惚れてた」

「え！？　どこに！？」

「全身」

「あとでエッチするんでしょ！？」

「する気で来た？」

「来た！　お勉強もばっちりしてきた！」

「勉強？」

「兄ちゃんとカレンちゃんがしてるとこ覗いてお勉強してきた！」

「覗いたのか…」

「誘惑の仕方とかもうバッチリ！」

「ふーん？　それは楽しみだなあ」

と笑い、シャーペンを動かし始めたミヅキ。
レナの姿形をそっくりに書いていく。

（まだ成長中とはいえ充分ソノ気にさせられるね、まったく…）

動悸がした。

大人へと向かって成長中のレナの身体。
華奢な肩や鎖骨、細い腕。
膨らんできた胸。

（すでにカレンちゃんよりあるけど…）

両手の中に収められてしまいそうな腰。
まだまだ子供っぽいとはいえ真っ直ぐで美しい脚に、小さな尻。
細い背に浮き出た肩甲骨は、天使の羽のようにも見えた。

（これがぼくのドールになるなんて…）

そう思うと動悸が増す。
今日レナが帰ったあと、明日バイトがあることも忘れて眠らずに作ってしまいそうだった。

設計図の大きさは実際のレナの2分の1サイズ。
どこもかしこもレナそっくりに書き終えると、ミヅキはシャーペンを置いた。

背を向けて立っているレナに言う。

「お疲れ様、レナ。もういいよ」

「うんっ…！」

と、振り返ったレナの顔を見て、ミヅキはぱちぱちと瞬きをした。
レナの顔が赤い。

「どうかしたの、レナ？」

「興奮作用が働いてきたっ…！」

「興奮作用？　何…、薬の？」

「うんっ…！　マナが興奮して初体験盛り上がってきてってっ……！」

「へえ？」と、にやっと笑ったミヅキ。「んじゃ、盛り上がらせてもらおうかな。先にシャワー浴びてきていいよ」

「浴びてきたっ…！」

「そう、準備がいいね」

と笑い、立ち上がったミヅキ。
バスルームへと入っていく。

「寝室で待ってて」

と、言い残して。
シャワーの音が聞こえ始めると、レナはバッグの中からメモを取り出した。

「どきどき初体験のための最終確認っ…！」

と、最後にもう一度メモを見るレナ。
間違えまくりであることに、結局気付かなかった。

箇条書きで書いてあるそれを一行目からぶつぶつと声に出して読んだあと、寝室へと向かって行った。

（これで完璧、初体験っ！！）

シャワーを浴びるミヅキの脳裏に、レナの白い身体が浮ぶ。

（まだ少し子供を思わせるけど、綺麗だったなあ…）

と改めて思うと、再び動悸がした。

（ぼく何かが抱いちゃってもいいのかな…）

そんな罪悪感すら持ってしまう。

が、

（ああ…、ぼくってラッキー）

そんな嬉しい気持ちのが大きいミヅキ。

シャワーを止めて脱衣所に出る。

（可愛い反応するんだろうなあ、レナ）

軽く身体を拭き、バスタオルを腰に巻いて外へと出る。

リビングを通り、寝室の方へと向かっていく。

寝室の手前、ドアノブを握って一度立ち止まった。

（そういえば、シュウとカレンちゃんのイトナミ覗いて勉強してきたとか言ってたっけ）

くすっと笑ったミヅキ。

（さぁーて、どんな誘惑してくれるんだか）

と寝室のドアを開けた。

ミヅキに横顔を見せる形で、レナがベッドに腰掛けている。

「おまたせ」

とミヅキが言うと、ベッド脇にすっと立ち上がったレナ。
ゆっくりとミヅキの方へと身体を向ける。
頬が真っ赤だ。

「ベッドに入って待ってれば良かったのに」

と言ってレナのところへと歩き出そうとしたミヅキ。
レナに異変を感じて数歩で立ち止まる。

「ハァっ…ハァっ……」

と、興奮作用がさらに働いてきたのか、息切れしているレナ。
右肘を折り曲げ、身体の脇に「く」の字を作った。

「レナ？」

「ハァっ…ハァっ……」

さらに左肘も同様に折り曲げ。

「何し…？」

「ハァっ…ハァっ……」

腰の脇で、ぎゅっと拳を作り。

「は…？」

「ハァっ…ハァっ……」

「レ、レナ――」

「ふんぬぁーーーっ！！」

ムキムキムキっ…！

と、その細い腕に筋肉を浮き立たせたら。

大きく息を吸い込み。

レナ、絶叫。

「ヘイ、カモオオオ

メモその1。

『誘惑するときはボディービルのポージングで「ヘイ、カモォォォンっ！！」と絶叫』

完了。

第１４３話　これで完璧？　七女の初体験　～後編～

ミヅキのアパートの寝室の中。
ベッド脇、全裸でボディービルのポーズを取ったレナ。
マナの薬の効果で興奮状態だ。

そして絶叫してミヅキを誘惑。

「ヘイ、カモォォォ

「だ、だよね、エッチすんだよね？　だ、抱いていいんだよね…？」

と困惑しながら訊いたミヅキ。

レナのメモその２。

『逆に誘惑されたときは恥ずかしそうに「ダ…ダメェっ……！」と言いながらライダーキックをかましてベッドへＧＯ』

発動。

「ダ…ダメェェェっ……！！」

ドガァっ！！

「――ガハァっ！？」

とレナのライダーキックを腹に食らい、

バァンっ！！

と背を寝室のドアに叩きつけられたミヅキ。

「あっ、ベッドはこっちだったっ…！」

と焦ったレナに、

ドガァっ！！

と今度は背にライダーキックを食らう。
吹っ飛んだミヅキの身体は、うつ伏せの形でベッドの上へ。

悶えて身体を丸めるミヅキ。
最強人間と最強モンスターのハーフであるレナの攻撃を食らって、痛くないわけがない。
腹も背も激痛だ。

（な、何かおかしい…！　何かおかしい、何かおかしい！　たしかレナはシュウとカレンちゃんのエッチ見て勉強してきたって言ったよね…!?　ってことは、カレンちゃんを言動を参考にしてるハズだよね……!?）

それなのに何なんだ、このレナは。
明らかにカレンとは程遠いものを思わせる。

仰向けになり、困惑しながらレナを見たミヅキ。
レナがベッド脇にやってくる。

「ハァっ…ハァっ……！」

「レ、レナ、落ち着いて！」

「ミヅキくっ……！」

「な、何か違――」

ミヅキの言葉を遮るように、レナの手がミヅキの腰のタオルに掛かる。

レナのメモその3。

『さて始めようとなったとき、モジモジとしながら「んもーう、仕方ないわね、アナタってば…！」と言いながらミヅキくんの服を剥ぎ取って床に投げ捨ててあげる』

発動。

「ん…、んもーう、仕方ないわね、アナタってば……！　――うらぁっ！！」

ビシィっ！！

と床に投げ捨てられたミヅキのタオル。

当たってたら絶対腫れ上がりそうな勢いのそれを見ながら、ミヅキの顔が引きつる。

（こ、怖っ……！）

ミヅキが冷や汗を掻きながらレナに目を戻すと、今度は何やら両腕をあげて飛ぶ態勢になっている。

「ちょ、ちょちょちょ、レナ！？」

「ハァっ、ハァっ、ハァっ…！　ミヅキくんっ…！　ミヅキくんっ……！」

レナのメモその4。

『ミヅキくんを全裸にしてあげたら「フィーバァァァァァァァァ

っ！！」の台詞と共に気合を入れて飛び掛かる』

発動。

「フィーバァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！！」

「って、それシュウの――」

ドガァっ！！！

と、結果的にレナのボディプレスを腹に食らったミヅキ。

「――ガハァっ！！」

と頭と足が跳ね上がる。

それと同時に確信。

（レ、レナの言動、シュウとカレンちゃんがゴッチャになってる……！！）

ミヅキの上に負い被さったレナ。

息切れが激しい。

「ハァっ、ハァっ、ハァっ……！　ミヅキくんっ……！」

「レ、レレレ、レナ！？」

「上手くできなかったらごめんねっ……！」

「えっ！？」

レナのメモその５。

『ミヅキくんの身体に吸い付きながら言う言葉は「デリシャス♪」』

発動。

「ちゅうううう……！！！」

「いっ、痛い痛い痛い痛いっ！　レ、レナ吸いすぎっ！」

「デリシャスっ…♪」

「……（シュウ、そんなこと言ってんのか…）」

「ちゅうううう……！！！」

「痛い痛い痛い痛いっ！」

「デリシャスっ♪」

「…っ……！！」

狼狽したミヅキ。

（食われてる！　ぼく、食われてる！）

がしっとレナの肩を握った。

レナのメモその7。

『触られたときは「そんなとこ嫌っ…！」と言って頬を染める』

発動。

「ミヅキくん、そんなとこ嫌っ…！」

「は！？　肩じゃん！？」

「ちゅうううう…！！！」

「いたたたたた！」

「デリシャスっ…♪」

「レナ待っ――」

「そんなとこ嫌っ…！」

「腕じゃん！？」

「ちゅうううう…！！！」

「いたたたたた！」

「デリシャスっ…♪」

「ちょ、レナってば――」

「そんなとこ嫌っ…！」

「頭じゃん！？」

「ちゅうううう…！！！」

「ああもう、痛いってばあああああああああああああっ！！」

絶叫したミヅキ。

これじゃキリがない。

（ていうか犯される！！）

やばい。

と感じたミヅキは、死に物狂いでベッドの脇に転げ落ちた。

「あれっ、ミヅキくんっ…！？」

「お、お、お、落ち着こう、レナ…！　ね！？　落ち着こうっ…！
薬の効果が切れてからゆっくり続きしようっ…！　ね！？」

と言いながら、寝室の戸口の方へと向かっていくミヅキ。

「ええっ？　ミヅキくんっ？」

と慌てて追いかけてくるレナから、ミヅキは慌ててリビングの方へと逃げていく。

「レナ、落ち着いて！　レナっ！」

とレナの方を向きながら後ずさっていくミヅキと、

「ヘイ、カモォォォォンっ！！」

ボディービルのポージングを取りながら追いかけていくレナ。
それはミヅキがドール工房としている部屋へと逃げ込んだあとも続く。

部屋のドアの前、様々なボディービルのポージングを取るレナ。
絶叫している。

「カモォォォォンっ！！　カモォォォォンっ！！　ヘイ、カモォォォォンっ！！！」

「……」

薬の効果が切れたのは、それから1時間後のこと。
切れた途端、レナに襲い掛かってきたのは恥ずかしさだった。

（何してんだろう、あたしっ…！）

ミヅキがこもってしまった部屋のドアの前、真っ赤になって蹲る。
今になってようやく気付いた。

（兄ちゃんとカレンちゃん、あんなことしてないじゃん…！）

レナが急におとなしくなり、ドアを隔てて背をくっ付ける形で座っていたミヅキが口を開いた。

「レナ？　戻ったの？」

「うえぇぇん、穴があったら入りたいよおぉぉ」

と泣き出したレナ。

ミヅキがドアを開けると、逃げるように服を脱ぎ捨てたところへと駆けて行く。

「レナっ…！」

と、ミヅキがレナの腕を掴んで引っ張るが、レナは背を向けたまま俯いて泣きじゃくる。

（絶対ミヅキくんに嫌われたっ…！）

そう思って、ミヅキの顔を見ることが出来ない。

恥ずかしさのあまり、顔を見せることも出来ない。

「離して、帰るっ…！」

「見なかったことにするから」

「見たものを見なかったことになんか出来ないっ！」

「じゃあ、忘れるから」

「忘れられるような出来事じゃなかったっ！」

「そうだね」

「ほーらあぁぁぁぁっ！」と、さらに泣き出すレナ。「帰るったら帰るっ！　かーえーるぅぅぅ

（怒らせたっ…！）

ミヅキと付き合い始めて約一ヵ月半。
ミヅキが結構な短気であることは分かっていたのだが。

「ミ、ミヅキくんっ…！」

とレナが伸ばした手を、ミヅキが振り払って背を向ける。

「早く帰れって言ってんの」

「あっ、あのっ、ごめんなさいっ…！　ごめんなさいっ、ミヅキくんっ…！　ミヅキくっ……！　うえぇぇんっ！」

と背で狼狽して泣きじゃくるレナに、にやけてしまうミヅキ。

（焦ってる焦ってる。ああ、可愛い…）

そういう奴であることを、レナは振り返ったミヅキの顔を見たときに思い出す。

にやにやにやと笑っているミヅキの顔。
レナの顔が引きつってしまう。

「ちょ…ちょっとミヅキくん……！？」

「何？」

「今、あたしで遊んでたでしょ…！」

「人聞きが悪いな」

「もう、帰るっ！」

「何言ってんの、これからエッチってときに」

「す、すんのぉ！？」

「するって言ったじゃん」

とレナを抱き上げ、ミヅキが足取り軽く寝室へと向かう。

レナが顔を真っ赤にして騒ぎ出す。

「きゃあああああああああっ！　きゃあああああああああっ！！
ま、まままままま待ってミヅキくんっ！！」

「うん、分かった」

「良かっ――」

「待たないよ」

「――って、エエェェエエェェエェエエ！？」

「さっきまで人襲っといて今さらそれはないっていうか」

「あ、あああああれはあぁぁあぁぁああぁぁあっ！！」

レナをベッドの上に押し倒して、にやにやと笑っているミヅキが言う。

「ああ…、やっぱりレナはこうじゃなくっちゃ」

「ミ、ミヅキくんてちょっとパパみたいっ！！」

「やだな。リュウさんは鼻にメロンだけど、ぼくは鼻にミカンだから大したことないよ」

「そ、そういうところじゃなくて――」

「ああ、オトーサン。娘さんいただきます」

レナ、食われる。

ミヅキの感想をどうぞ。

（デリシャスっ…♪）

午後５時過ぎに帰宅したレナ。

（レナ１４歳、大人になりましたっ…♪）

玄関まで出迎えたキラが首をかしげる。

「どうした、レナ？　ぼーっとして…。頬も赤いし」

「な、なんでもないっ…！」

と言って、逃げるように2階へと駆け上っていったレナ。
その際レナのポケットから例のメモが落ちて、キラがそれを拾い上げる。

「何だ、これ…？」と、メモの内容を見たキラ。「――！！？」

衝撃。

（ま、待て、レナ…！　おまえ、まさかこんなことをしてきたのか…！？　普通こんなことしたら引かれることくらい、母上だって分かるぞっ…！　そうかレナ…、おまえ今日ミヅキの誘惑に失敗したのだな……！？）

と、娘を不憫に思い、目頭を押さえるキラ。
数秒後、はっとした。

（もしかして、私もこの方法でリュウを誘惑すれば、今夜はイトナミに休みをもらえるかも…！？）

なんて期待し。

その晩。
夫婦部屋の中、瞳を輝かせながらベッドの上に立ったキラ。
風呂上りのリュウを呼ぶ。

「リュウ、リュウ♪」

「何だ、キラ」

「私、今日はリュウを誘惑するのだ♪」

と言ったキラ。

ムキムキムキっ…！

とボディービルのポージングを取って絶叫。

「ヘイ、カモォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォンっ！！」

どうだ、萎えるだろう！

と心の中でにやけた次の瞬間、

「まーじでぇー？」

とリュウに押し倒されたキラ。

「――なっ、何故だあぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあっ！！！」

いつも以上に激しく食いつかれ、先ほど以上に絶叫した。

その絶叫は人間並の聴力であるシュウの耳にも達し。

バスルームの中、膝の上のカレンと共にぎょっとしてしまう。

「な、なんだあ？　母さん、すごい声だな…」

「きっとお義父さまに襲われてるのよ…」

「だ、だろうな…。ていうか、今日のレナの様子だと、あいつもミヅキと……」

「ええ、そうよねっ…！」と、カレンがはしゃぐ。「レナちゃんもついに大人になったのねっ…！　きゃあああああ！　どうだったのかしらあぁぁぁあああぁぁあああぁぁあっ！！」

「……さ、さあ」兄として何だか複雑なシュウ、苦笑。「とりあえず、ミヅキがレナに手ぇ出したこと親父にバレないことを祈る……」

「そ…そうね……」

と顔面蒼白しながら同意したカレン。

少し間を置き、シュウが話を切り替える。

「でさ…、カレン。オレが闇の力持ってたってこと、言っただろ？」

「ええ」

「知った瞬間はまるで実感なかったんだけどさ、だんだんと感じてきたせいかな…」

「ええ？」

「誰が闇の力持ってるとか、何となく分かるようになってきた」

「まあ」

「だから、オレの他にもう一匹、母さんの闇の力受け継いでることも知ったよ」

「えっ？」と驚き、カレンが振り返ってシュウの顔を見た。「だ、誰っ？　サラとかっ？」

「いや、ジュリ。小さいから、まだ闇の力も弱いけど…」

「ジュリちゃんが…！？」

「うん。そう思うとさ、怖いもんだな。親父の気持ちがよく分かる…」

「そ、そうね…、あたくしもあなたが持ってると思うと怖かったもの」と同意したあと、カレンが訊く。「ねえ…、シュウ？　自分が闇の力を持っていることは怖いと思わないの？」

「ん？　それは全然怖くねーよ」

と、笑ったシュウ。

決して偽りじゃない。

自分が闇の力――破滅の呪文を持っていることなんて怖くない。

むしろ嬉しい。

だって、

「破滅の呪文があれば大切な人守りきれるだろうし」

それに何より、

「オレが一番早く親父を超えられる方法だから」

第１４３話　これで完璧？　七女の初体験　～後編～（後書き）

昨日の２１時１３分ごろメールくださった読者さまへ。
ちょ、待ってください！　男性とはいえ待ってください！
レナの真似しちゃダメ！（笑）　彼女さん驚愕します（汗）

昨日の２２時３９分ごろメールくださった読者さまへ。
ああ…、腹筋ブレイカー…ｗ　私まだそんな異名が……ｗ
てか、お母様に言っちゃダメです、お母様に！！
恥ずかしいべえぇぇぇぇぇぇぇ＞＜
あ、腹筋もりもり割れて（笑）

第１４４話　次男に欲情？

梅雨が明けた7月後半。
昼過ぎ、遅い昼食を食べに仕事から一旦自宅へと戻ってきたシュウ。
キッチンの中、同様に遅く帰ってきたリュウ・レオンの間で共に食事をしていた。
向かいにはカレンとキラ、サラ。

シュウは、ふと、遊びに来たリーナと一緒に駆け回って遊んでいるジュリを見て箸を止めた。

（ジュリ……）

ジュリが闇の力を持っていると分かってから、ジュリを見る度に不安や恐怖でシュウの瞳が揺れ動く。
そんな息子を横目に、父であるリュウは困惑する。

（どうした、シュウ…。おまえ、何故そんな目でジュリを見ている……？）

リュウの視線を感じたシュウ。
振り返ってリュウの顔を見、ぎくっとした。

（やべ、親父にジュリの力のことバレた…！？）

慌てて通常を装い、再び箸を動かして昼食を食べる。

「きょ、今日の餃子カレンが作ったんだろ？　道理でうま――」

「おい、シュウ」

と、シュウの言葉を遮ったリュウ。

「な…、何？　親父っ……」

「言え」

シュウの手が止まった。

「…な、何をっ……？」

「とぼけんな。俺の目は誤魔化せねえ」

「べ、別に――」

「言え」

「オ、オレは何も――」

「言えって言ってんだ俺は」

「だ、だから――」

「言え！」

と響いたリュウの怒声に、一同の身体がびくついた。

リュウに胸倉を掴まれながら、シュウは必死に声をあげる。

「おっ、親父っ！　オレ、親父に隠してることなんかねえよっ！！」

「嘘吐いてんじゃねえ！！」

「うっ、嘘じゃねえよっ！！」

「バレてんだよ！！」

「ほっ、本当にオレ――」

「てめえがっ…！」

「嘘なんか――」

「ジュリに欲情したことなんてよ！！」

は？

と、静まり返るキッチン。

数秒後、シュウ驚愕。

「――しっ、してねえええぇえええぇえええぇえええぇえええぇえええぇえええぇえええっ！！！」

「あにうえー」

と、シュウのズボンを引っ張ったジュリ。

首をかしげながらシュウの顔を覗き込む。

「ぼくによくじょーしたの？」

「ばっ！？」シュウ、さらに驚愕。「ジュ、ちがっ、兄ちゃん欲情なんかして――」

「うーわ、あっかんわ」とリーナが顔を強張らせ、ジュリを手招きする。「ジュリちゃんあかんで、シュウくんに近寄ったら。こっち来いや。シュウくん変態やから犯されんで」

「リっ、リーナてめコラふざけん――」

「あにうえー？」

と、また首をかしげるジュリ。

「な、なんだジュリ？」

「ヘンタイさんなの？」

「――ばっ！？」

シュウ、加えて狼狽。

手を振り顔を振り、必死に否定する。

「違う違う違う違う違うっ！！　兄ちゃんは真人間……いや、真ハーフだっ！！」

「ぼく、おかされるの？」

「はあぁぁあぁぁあっ！？　ジュ、おまっ、何言っ――」

「ほーら図星や」とリーナ。「めっさ焦っとる」

「焦るわっ！！」

「シュウくんのヘンターイ」

「おまえいい加減に――」

「リーナの言うとおりだぜ！」とシュウの言葉を遮ったリュウ。「弟に欲情するなんざ、変態以外の何でもねえ！」

「ちょ、親父――」

「ああ、そうだなシュウ！　ジュリは可愛い！　たしかに可愛い！　有り得ねーくらい可愛い！　島が滅んじまいそうなほど可愛い！！　そう、俺の愛猫（キラ）そっっっっっっっくりで！！！　だからって、おまえって奴はっ……！！！」

「だから違――」

「何て最低最悪な兄貴なんだ！！　ジュリが不憫で仕方ねえ！！」

と、リュウがシュウの足元にいたジュリを抱っこした。

頭を撫でてやりながら続ける。

「ああ、可哀相になジュリ…！　欲情されちまうなんてよ！　よりによって、こんなバカ兄貴に！」

ジュリが首をかしげてシュウを見る。

「あにうえ、バカなの？」

「――！？」シュウ、衝撃。「ジュ、違っ、兄ちゃんは――」

「そうだ、バカなんだ！」とシュウの言葉を遮ってリュウが続ける。

「おまえの兄貴はバカなんだ！　さあ、言ってやれ…！」

「はい」

と、頷いたジュリ。

にこっと笑って、シュウに言ってやる。

「バカ」

「え！？」

「バカ」

「ちょ！？」

「バーカ」

「ジュリっ…！！」

シュウ、涙目。

たぶんバカの意味を理解してないとはいえ衝撃すぎる。

そして良いことをしたと思っているのか、にこにことしているジュリ。

リュウがその頭を撫でる。

「よしよし、よく言えたなジュリ。偉いぞ」

「はい、ちちうえ」

「そして本当に不憫な子だな、ジュリ…！」

と、目元を押さえるリュウ。

声を詰まらせる。

「こんなバカに欲情…！　欲情されちまうなんて……！！」

「ちちうえ？」

と、ジュリが心配そうな顔をしてリュウの顔を覗き込む。

「欲情っ…！　欲情だと……！？」

「どうし――」

「父上もしていい？」

と、ジュリの言葉を遮ったリュウ。

その顔、恍惚。

「――！！？」

ジュリを除く一同、大衝撃。

あまりにもくだらないやり取りに向かいの席で呆れていたカレンやキラ、サラの顔が強張り。
やれやれと苦笑しながら食事を続けていたレオンは箸を落とし。
リーナは顔面蒼白し、大慌てでリュウの腕の中からジュリを奪う。
「ぎゃあぁあああぁぁあぁぁあっ！！　ジュリちゃあぁぁあああぁぁあぁぁあああんっ！！」
「おい、リーナ。何すんだ」
「何すんだやないわっ！！　この変態っ！！」
「ま、待ってくださいなお義父さま！？　冗談に聞こえませんわよ！？」
「安心しろカレン。冗談じゃねえ」
「なお悪いわっ！！」
と突っ込んだのはサラ。
キラが衝撃のあまりに震えた手をリュウに伸ばす。
「リュ、リュウ…！」
「ああ悪い、キラ」
「お、おまえ…！」
「浮気するぜ俺は」

「ま、待ってくれ…！」

「いいよな？」

「お、おい…！」

「ジュリ男だし」

「……」

言葉を失うキラ。
シュウが突っ込む。

「そういう問題じゃねえっ！！」

「何だよ、シュウ」

「親父あんた何考えてんだよっ！！　ジュリは――」

「ああ、うるせー」と、シュウの胸倉を掴んだリュウ。「おまえはガラス屋でも呼んでおけ」

ぽいっと、窓に向かってシュウをぶん投げた。

「――ってことは壊すんだあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあっ！？」

と絶叫したシュウは。

ズガシャァァァン！

と窓ガラスを突き破り、庭の芝生の上を滑って行った。

一方、ジュリを連れて逃げ出そうとしたリーナ。

首根っこをリュウに掴まれる。

「おい、リーナ。ジュリをどこへ連れて行く気だ」

「ぎゃぁぁぁあぁぁぁあっ！　離してっ…！　離してやぁぁぁあぁぁあっ！」

「変態に掴まったみてーな声出すなよ」

「って変態やないかいっ！！」

「ひでーな。俺の小鳥のようなハートはボロボロだぜ」

「小鳥っ！？　笑わせんなやボケっ！！」

「笑ってねーよおまえ」

「揚げ足取んなっ！！」

「ああ、うるせー。いいからジュリを返せ」

「嫌やっ！！　こんな変態親父にジュリちゃん渡せるかいっ！！」

「ジュリは嫌がってねーよ」

「はぁっ…！？」

一同がジュリに注目する中。

リュウが訊く。

「なあ、ジュリ？　父上に欲情されたいよな？」

「？」

首をかしげ、ぱちぱちと瞬きをしたジュリ。

リュウの顔をじっと見つめ。

にこっと笑い。

頷いた。

「はい」

「――！！？」

一同、再び大衝撃。

リーナからジュリを取り返して抱っこしたリュウ。

その顔、再び恍惚。

「さあ、ジュリ…！　父上とキスして浮気しようぜっ……！」

意味を分かっていないジュリが、にこにこと笑いながら返事をする。

「はい」

「ああでも、父上からすると母上にコンクリート詰めにされる気がするな」

「はい」

「だからおまえからキスしてくれ、ジュリ」

「はい」

「父上香ばしいよ」

「はい」

「餃子食ったあとだから」

「はい」

「ヘイ、カモォォォン」

「はーー」

「きゃあああああああああああああああっ！！」

と、絶叫しながら立ち上がったカレン。

勢い良く立ち上がったものだから、椅子が後方でガタンと音を立てて倒れた。

慌ててリュウに駆け寄る。

「ちょ、ちょちょちょ、ちょっと待ってくださいなお義父さま！？」

「ああ、おまえの誘惑の台詞パクって悪い」

「は、早く歯を磨きましょう！？」

「俺がクセーみてーだな」

「ね！？　そして早くお家を出ましょう！」と言いながらジュリをリュウから奪うカレン。「今日はあたくしの新しい武器買って下さるって言ってたしっ！」

「やっぱ餃子のあとのキスは抵抗あるもんか？」

「ほ、ほーら早くですわお父さまぁぁぁ

子供がキスするのは珍しいことではないけれど、どうしてこうお義父さまだと危なく見えるのかしら……！　でも……）

と、鏡の中のリュウの顔をちらりと見たカレン。

鏡の中のリュウと目が合い、すぐに逸らす。

（その前はもっと焦ったけれど…。ジュリちゃんが闇の力持ってること、お義父さまにバレたんじゃないかって……）

カレンは一旦洗面所から出ると、リュウの剣をキッチンへ取りに行った。

えらく重たいが故に、両腕で抱えて持ってくる。

歯を磨き終わったリュウに渡す。

「はい、お義父さま」

「おう」

と剣を腰に装備したリュウを、カレンはすかさず玄関の方へと引っ張っていく。

「おい、俺まだジュリとキスしてな――」

「皆さまいってきますわ～っ」

とリュウの言葉を遮り、リュウを引っ張って外へと出たカレン。

庭ではシュウが電話中だった。

相手はきっとガラス屋だろう。

「い、いつもすみません…。今日はキッチンの窓を2枚ほど――」

と、リュウとカレンの姿に気付いて言葉を切ったシュウ。

指差して声を上げる。

「あぁぁぁぁぁっ！！　手ぇ繋ぐな、手っ！！」

「はいはい…」

と苦笑してカレンがリュウの手を離す傍ら、にやりと笑ったリュウ。

「そうか、手を繋ぐのは駄目なのか。仕方ねーな」

とカレンを抱っこした。

「あっ、あぁぁあああぁぁぁあっ！！　降ろせっ、降ろせえぇぇえええぇぇぇぇぇえっ！！」

とさらに声をあげるシュウを見てさらににやにやとし、リュウは足の速くなる魔法を掛けてその場を去る。

「じゃ、行ってくる。おまえも早く仕事行けよ」

「ちょっ、待っ！　カっ、カレェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェンっ！！」

なんてシュウの絶叫を聞きながら、カレンは苦笑する。

「お義父さま、玩具(シュウ)2号で遊ぶのはよしてくださいな…」

「おまえでも遊んでやるから寂しがるな、玩具(カレン)3号」

「……。玩具(リンク)1号さんがおススメですわ、お義父さま（ごめんなさい、リンクさん…）」

武器屋の前へとやって来ると、リュウがカレンを降ろした。

「今日はどんな銃を買ってくださるのですか？　お義父さま？」

と訊きながら、ドアの方へと歩いて行ったカレン。

ドアを開けようとしたとき、顔の脇を何かが通って動きを止める。

その何かはリュウの手。

カレンの目の前のドアに、リュウの大きな手が付けられている。

それは、待て、と訴えているようだ。

振り返ったカレン。

リュウを見上げて、小さく肩を振るわせた。

「お…お義父さまっ……？」

黒々とした鋭い瞳で、カレンを見下ろしているリュウ。

お気に入りの玩具で遊んでいたときの表情とはまるで違う。

「こ…怖いのですわっ……！」

とカレンがたじろいでしまうような剣幕のリュウ。

低い声で口を開く。

「吐け」

「な、何を――」

「ゲ〇じゃねーぞ」

「わ、分かってますわっ！」

「さあ、吐け」

と脅すようにカレンを見下ろすリュウ。

何を、とカレンがもう一度訊く前にリュウが続けた。

「おまえら、俺に何を隠してる？」

第１４５話　父親、離島へ

武器屋のドアに片手を付いているリュウ。
その手の傍らにはカレンの困惑した顔があった。
カレンを睨むように見下ろして、リュウが訊く。

「おまえら、俺に何を隠してる？」

「――えっ…？」

どきっとしたカレン。
平静を装って言う。

「な、何も隠してませんわよ、お義父さま？」

「目が動揺してんぞ」

「お、お義父さまが素敵だからですわ」

「おう、そう――」

「黙ってれば」

「どういう意味だ？　あ？」

と、顔を引きつらせたリュウに頬を引っ張られ、カレンが声をあげる。

「いたいのれすわおとーさまぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあっ！！」

「1年と少し前までは俺に惚れてたクセによ？　え？」

と、今度はリュウに唇の端と端をぶちゅっと指で摘まれ。

唇を鳥の口ばしのような形にされたカレンが、赤面して声をあげる。

「あっ、あめてくらはいいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！」

「生意気なんだよ、おまえはよ。たかがシュウごときの嫁の分際で……ぷっ…！」

「あに笑ってんれすかっ！」

「ピヨピヨすんなよ、ひな鳥みてーだな。エサいるか？」

「むきゅーーーっ！」

と声をあげ、リュウの手を両手で掴んで離したカレン。

小さな靴でリュウの大きな靴を踏みつける。

「やめてください、お義父さまっ！」

「イイ度胸だな」

「さっさと新しい銃買ってくださいなっ！」

と言って店の中へと入っていくカレン。
その辺にある銃を手に取った。

「あら、これ結構軽くて良い感じ――」

「おまえ俺の質問に答えてねーじゃねーか」

ぴくっと小さく震えて、カレンの動きが一瞬止まる。

（このまま話が逸れてしまえばいいと思ったのだけれど…）

そうも行かないようだ。
でもカレンは必死に話を逸らす。

「み、見てくださいなお義父さま？」

「聞いてねーな、俺の話」

「この銃、軽くて使いやすそうですわ」

「ったく…」

「これではダメなので――」

「俺の話を聞け！」と声をあげたリュウ。「この、貧乳が！！」

一言余計だった。

「店長さん、これ弾丸（タマ）入ってるのかしら？　試し撃ちをし――」

「店の中はやばいから落ち着け」

と早口でカレンの言葉を遮ったリュウ。

溜め息を吐き、もうすでにカレン用に改造してもらっておいた銃を受け取る。

「あら、２つあるのですねお義父さま」

「マシンガンとガス銃」

「ガス銃？」

「催涙ガス弾出るやつ。役に立つときもあっから一応持っておけ」

「はい。ありがとうございます、お義父さま」

店を出たあと、走らず歩くリュウ。

カレンは小走りで追いかけながら、リュウの傍らに並んで顔を見上げた。

（めずらしいのですわ、お義父さまが歩くなんて…）

何か考えているかのようなリュウの顔。

もう何を隠しているのかカレンに訊こうとしない。

それは有難いのだが、カレンは困惑してしまう。

（お義父さま、今何を考えているのかしら…）

自宅屋敷まで一本道のところまで来たとき、リュウが立ち止まって言う。

「ここまで来ればさすがに大丈夫だろ、方向音痴でも」

「は、はい、お義父さま…」

「じゃーな」

と、仕事へと向かって走り出すリュウ。

カレンの姿が見えないところまで来たとき、立ち止まって携帯電話を取り出した。

（シュウたちの様子が少し変に感じたのは、流刑から帰ってきてからだ。キラはシュウたちが流刑に行ったときあたりから…、ブラックキャットが葉月島のあの離島にいると知ったときから……）

電話を掛ける。

相手はグレルだ。

「おまえの師匠が出たぞーっと♪」

「あんたの携帯すから」

「どうしたんだ、リューウ♪」

「師匠、明日の仕事の予定はどうなってんすか。帰り、夜遅いっすか」

「明日なら夕方には帰れるぞーっと♪」

「そすか。…んじゃ、俺明日0時から丸1日いねーから留守頼みま

す」

「任せろよーっと♪」

「それじゃ」

と電話を切ったリュウ。

（おまえらがどうしても俺に言えねえってんなら、自ら調べに行ってやるよ。神のご友人がいるあの離島へ…）

その日のリュウは早めに帰宅。

カレンやキラ、娘たちと共に夕食を取ったあと、キラを引っ張って寝室へ直行。

5時間に渡ってイトナミ。

その後、キラと共に入浴。

「キラ」と、バスタブの中で膝の上に抱っこしているキラの胸を触っているリュウ。「俺1時間後には仕事行くから、ネズミの抱き枕抱いて眠ってろ」

キラはリュウがいないとき、お気に入りのネズミの抱き枕を抱いて眠っている。

リュウがいない場合、それがないと眠れないから。

「えっ…？」と、キラが困惑した声を出した。「明日の仕事、そんなに早くから行かなければならないのかっ？」

「ああ。俺丸1日いねーから、留守の間気をつけろ。師匠に頼んで

あっから大丈夫だと思うが」

「分かったぞ…。重要な仕事なのかっ？」

「ああ…」

と返事をしたリュウ。

呟くように続けた。

「そんな感じだな……」

シュウ・カレンの夫婦部屋の中。

ベッドの中、シュウの声が裏返る。

「親父の様子が変だってぇっ？」

狼狽した。

決してリュウは鈍くない。

「ま、まさかオレたちが必死に隠してること、見抜いたんじゃ…！？」

「ま、まだそんな感じはしなかったけれどっ…」

「じゃ、じゃあ、これから見抜こうとしてんのかも…！？」

「えっ、えぇっ！？」

「あわわわわっ！　まっ、まずいっ！！」

と真っ裸でベッドから飛び出したシュウ。

猛ダッシュで部屋の外に出る。

「ちょっとシュウ！　パンツ穿いて！」

狼狽したあまりにそんなカレンの声が聞こえなかった。

両親の部屋へと向かって行こうとした途中、

「騒々しいけどどうしたのですかなのだー？」

リン・ランに遭遇。

ぶつかりそうになって、シュウは急停止する。

「うあっと！　危――」

ドサっ

「ねえええええええええっ！！」

シュウ、絶叫。

右足にリンの、左足にランの足を引っ掛けられ、後方に押し倒された。

「ハァハァハァっ…！　どうしたのですかなのだ兄上っ……！？」

「ハァハァハァっ…！　マッパで何してますかなのだ兄上っ……！？」

「おっ、おまえら鼻息荒いよ――って、あぁぁぁぁぁぁっ！！
そこはダメェェェェェェェェェっ！！」

「ハァハァハァっ…！　兄上自慢の銅メダルぅ～っ……！」

「ハァハァハァっ…！　気分は鼻にパイナップルぅ～っ……！」

「レっ、レオ兄助けてえぇぇえぇぇぇぇぇぇえっ！！　おっ、おーかーさーれーるううぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！」

シュウのあまりの声にレオンが部屋から飛び出し。

「シュ、シュウ！？　って、うっわあっ！　こ、こらリン・ラン、何してんのっ！！」

なんて騒いでいるうちに、時刻は０時を回り。

「んじゃ、行って来るぜ俺の可愛い黒猫」

「いってらっしゃいだぞ、私の愛する主」

玄関先で愛する妻と熱い接吻をかましたあと、リュウは屋敷の外へと出て行ってしまった。

「――えっ！？　親父っ！？　親父いいいいいいいいいいっ！？」

三つ子の部屋の中。
三つ子の黒猫の耳がぴくぴくと動く。

「こんな時間にうるさいなあ、兄ちゃん」

と、レナ。
ユナが続く。

「いつものことだよ」

「パパはもう仕事行ったみたいだね…」

と、マナ。
グレルの膝の上に座らせられていた。

只今三つ子＋グレルで夜食タイム。
ビール片手にスナック菓子を食べていた。
いつもならばもう眠っている時間なのだが、明日から夏休みだからと夜更かししている。

「お？」

と時計に顔を向けながら、新しいスナック菓子の袋を開けるグレル。
いつものことなのだが、袋を勢い良く開けすぎて中身をテーブルの上にぶちまける。

「0時か。あいつ、今日これから丸1日いねーんだぞーっと」

「丸1日っ？」とユナが声を高くした。「パパ、今日そんなにお仕事あるんだ…」

「そっかぁ、丸1日も…。丸1日……」と呟いたレナ。「あ…明日ミヅキくん、バイト忙しいのかなぁ」

と、頬を染めた。

ユナがにやりと笑う。

「あー、レナ、明日夜遅くまでミヅキくんとデートしたいんでしょ」

「えっ！？」と、声を裏返したレナ。「いやっ…えとっ、そのっ……！！」

こくんと頷いた。

ユナがはしゃいだようにレナに抱きつく。

「あーもー、いーなあ、レナってば！　あたしの夢は『パパよりカッコイイ人と結婚すること』だから、そろそろそういう人現れてくれないかなぁっ♪」

「リュウよりカッコイイ人ぉ？」

と鸚鵡返しに訊いたグレル。

がっはっはと笑い、己を指差した。

「それならここにいるぞーっと♪」

「え…」と、引きつったユナの顔。「お、おじさん、あたし面食いなんだけど…」

「ほーら、おじちゃんがピッタリじゃねーかよ、ユ～ナっ♪」

「は…ははは……」

「おじちゃんと結婚するか～っ？」

「……（勘弁して…）」

とユナの顔が引きつりまくる一方。

いつも無表情のマナの左眉が、ぴくっと動いた。

「リュウは銀メダルだが、おじちゃんは金メダルっ！　カッコイイぜ～っと♪　なあ、ユナ？　おじちゃんと――」

コツンっ…

と、グレルの言葉を遮るように、グレルの頭の上に落ちてきたのは小石。

「お？」と、上を見てぱちぱちと瞬きをしたグレル。「なんか落ちてきた気がするぞーっと。でも何もないぞーっと」

再びユナに顔を向けた。

「なあ、どうだユナっ？　おじちゃんマナと結婚する予定だったが、ユナがそうしたいっていうならおじちゃんはそれでも――」

ゴツンっ…

と、グレルの頭の上に再び落ちてきたのは、さっきよりも一回り大きい石。

「お？　またなんか落ちてきた気がするぞーっと」

と、きょとんとするグレルの傍ら。

ユナとレナがビールを口に含んだまま硬直していた。
グレルに落ちた石は、間違いなくマナが召喚したもの。
2匹はマナに目をやって、顔を引きつらせる。

（マ、マナ…！？　まさか……！？）

ごくり、と口の中のビールを飲み込んだユナとレナ。
マナはいつもの無表情ではあるが、その周りに漂うオーラが穏やかではない。

（し、嫉妬してるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！？）

ユナとレナ、大衝撃。
ビールの缶をテーブルの上に置き、バスルームに駆け込んでお互いの肩を握り合う。
そしてお互いの狼狽した顔を見ながら、小声で口を開いた。

「ちょ、ちょちょちょ、ユナっ！」

「ちょ、ちょちょちょ、レナっ！」

「マ、マナのあの様子、見た…！？」

「み、見た…！　マナって…、マナってもしかして……！？」

ユナとレナ。

お互いの顔が蒼白していくのを見ながら、声をそろえた。

「グレルおじさんのこと好き…なの……！？」

第１４６話　六女の願い『おじさん、またあたしを見て』　～前編～

7月後半。
魔法学校へと通う双子と三つ子が夏休みへと入ったとある日。

本日シュウ宅には、一家の大黒柱であるリュウがいなかった。
いつもは皆が揃う朝の食卓。
空いているリュウの席を見ながら、シュウはそわそわとしてしまう。

（ど、どこ行ったんだろ、親父…。仕事…だよな……？）

シュウを含め、家族の誰もが知らなかった。
リュウが葉月島の離島――シュウたちが先日流刑で送られていた島へと行ったことは。

（そ、それにしても…）

と、マナに目をやったシュウ。

（なんか、機嫌悪くね……？）

苦笑した。

基本的にいつも無表情で、感情の分かりづらい三つ子の真ん中の子――六女・マナ。
魔法学校では大地学部の2年生で、成績はトップ。
三つ子の一番上の子――五女・ユナも炎学部で、三つ子の一番下の子――七女・レナも光学部でトップではあるが、マナは三つ子の

中でも飛び抜けて魔力が高かった。
趣味は魔法薬作りで、将来の夢は『（怪しい）薬屋さん』。
舌と胃袋はゲテモノを好む。

普段は冷静沈着として物静かなマナだが、今日はその周りに漂うオーラが穏やかではない。

「ど、どうかしたのか？　マナ…」

「別に…」

「そ、そうか…」

と言って、シュウは口を閉ざした。
どうやら教えてくれそうにない。

シュウの隣に座っているカレン。
マナよりも、その隣の人物の方が気になって仕方がない。

（グ、グレルおじさま…？　これは口説いているのかしら……？
ユナちゃんを）

ユナとマナの間に座っているグレル。
将来はマナと結婚すると言っていたのだが、今日はどういうわけかユナに気が傾いているようだ。

「なあなあ、ユーナっ♪」

「な、何？」

「見ろよこのおじちゃんの強靭な肉体っ！　これぞ男だぞーっと♪」

「そ、そう…」

「それから全身を覆う黒く艶めいた体毛っ！　クマさんみたいで可愛いぞーっと♪」

「そ、そうかな…」

「そして股間に輝く金メダルっ！　がっはっは！　見るか～？」

「わっ、わあああああああっ！　やっ、やめてえぇえぇえぇえぇえぇえっ！！」

と、ズボンを下ろしかけたグレルを慌てて止めるユナ。

グレルがにこにことしながら続ける。

「なあ、ユナ？　おじちゃんと結婚す――」

ズゴっ…！

と、グレルの頭に落ちた直径２０ｃｍの石。

「お？」

とグレルがきょとんとして上を見る一方、シュウが立ち上がる。

手を伸ばしてビシっとマナにデコピン。

「何してんだおまえっ！」

「最近調子悪くて…」

「ちょ、調子？　魔法のか？」

マナが頷く。

「そ、そうか…（ちょ、調子悪いからって勝手に魔法出るっけ…？）」

と疑問に思いながらも、席に着いて味噌汁をすするシュウ。

グレルがしつこくユナに迫る。

「なあなあ、ユーナっ♪　おじちゃんと結婚――」

ズゴっ…！

とまたグレルの頭の上に落ちた石を見て、シュウは味噌汁噴射。

「お、おい、マナ…！？」

「調子悪くって…」

頭に石が落ちたにもかかわらず、グレルはお構いなしにユナに迫り続ける。

「なあ、ユナ♪　おじちゃんと結婚――」

ズゴっ

とやっぱりグレルの頭に落ちる石。

「ユナ、おじちゃんと結婚――」

ズゴっ！

「なあ、おじちゃんと結婚――」

ズゴゴっ！

「おじちゃんと結婚――」

ズゴゴゴっ！

「おじちゃんと結――」

ズゴゴゴゴっ！

とグレルの頭に石が降り注いだのち、

バキっ！

とマナの手の中で折れた箸。

「――！？」

グレルを除く一同、顔面蒼白。

「あ…」とマナが己の手の中の箸を見て、徐に立ち上がる。「新しいの持ってくる…」

マナの姿を目で追いながら、昨夜のユナとレナに続いてシュウたちも気付いた。

（も、もしかして……！？）

朝食後、シュウとレオン、グレルは仕事へ。
カレンはリュウが居ない故に本日は修行なし。
妊娠中のサラも仕事へは行けなかった。
夏休みに入った双子と三つ子も家にいる。

シュウ・カレンの夫婦部屋の中。
テーブルを挟んで向かい合って座っているカレンとサラ。

紅茶のカップを持つ手が震えていた。

「ね、ね、ねえ、サラ？」

「な、な、何、カレン？」

「マ、マナちゃんのことだけれどっ…」

「う、うんっ…」

「しょ、正気かしらっ？」

「しょ、正気……じゃないと信じたいっ！！」

と声をあげ、テーブルの上にカップを置いたサラ。
少し紅茶が零れた。
頭を抱える。
「何であんなクマでバケモノが好きなのさマナァァァァァァっ！！　しかも超天然バカァァァァァァァァァっ！！」
「ま、まったくもって謎なのですわあぁぁあぁぁあっ！！」とサラに続いて頭を抱えるカレン。「あれこそ美女と…いえ、美少女と野獣よおぉぉおぉぉおおおおおっ！！」
「結婚したらアレがアタシの義弟ってことじゃあぁぁあぁぁあん！！　アタシよりも３０歳も上のオッサンにオネーサン言われたくないぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！」
「いやあぁぁあぁぁあっ！！　あんなのに抱かれたら気分は鼻にスイカぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
とのカレンの絶叫のあと、ぴたりと止まった２人。
頬を染めてにやける。
「アタシの旦那さまは鼻にデコポンっ…♪」
「あたくしの旦那さまは鼻にパイナポーっ…♪」
「妊娠中だからって最近もらってないな、デコポン…」
「あたくしは日々カモォォォォンでパイナポーフィーバーっ…♪」

「パイナポーはえげつないポー」

「シュウならいいポっ…♪」

「鼻にスイカだのメロンだのっちゅー奴らよりマシだしね」

「ええ」

「てか、話ズレてるよ」

「あらヤダ、朝っぱらから下ネタなんてっ…！」

と、咳払いをしたカレン。

サラが立ち上がる。

「とにかくここは止めよう、カレンっ！」

「ええ、そうねっ！」と、サラに続いてカレンも立ち上がる。「マナちゃんを止めましょう、サラっ！」

がしっと腕を組み、2人が戸口へと向かって行ったとき。

コンコン…

とドアをノックする音。

カレンが返事をすると、噂をすれば何とやらでマナが顔を見せた。

「サラ姉ちゃん、カレンちゃん…」

いつも無表情のマナだが、少し元気がなさそうに見えた。

カレンとサラは顔を見合わせたあと、マナに向かって手招きをした。

「こっちおいで、マナ」

と、サラ。

マナを椅子に座らせ、カレンとサラもさっき座っていたところに座る。

それから少し間を置き、マナが口を開いた。

「どうしよう…」

「何が？」

声をそろえて訊いたカレンとサラ。

「グレルおじさん、あたしと結婚するって言ったのに…」

と落ち込んでいる様子のマナ。

カレンとサラは衝撃を受ける。

（や、やっぱり惚れてる……！！）

ごくり、と唾を飲み込み。

カレンはマナの右肩に、サラはマナの左肩に手を置き、声をそろえた。

「鼻にスイカの勇気はある……！？」

「は…？」

カレン、サラと交互に続ける。

「いいこと？　マナちゃん！」

「グレルおじさんと結婚するってことは、グレルおじさんに抱かれるってことだよ！？」

「気分は鼻にスイカよ！？」

「鼻にデコポンでも痛かったのに！」

「鼻にパイナポーでもかなり痛かったのに！」

「鼻にスイカなんて、想像を絶する痛さだよ！？」

「それでもいいの！？　マナちゃんっ！！」

青い顔をしているカレンとサラの顔を、交互に見るマナ。

「鼻にスイカ…？」

と首をかしげ、考えて数秒後。

相変わらず青い2人の顔を見つめて答えた。

「子供産むとき少し楽になれそうで便利だね…」

「――！！？」

カレンとサラ、大衝撃。

（た、只者じゃないっ……！！）

と思う。

マナが兄弟姉妹の中で一番変わっているかもしれないと感じてはいたが。

「マ、マ、マ、マナ！？」

「何、サラ姉ちゃん…」

「あ、あああ、あんた、すごいね…！？」

「そう…？」

「そ、その勇気をギネスに報告してやりたいよお姉ちゃんはっ…！」

「と、ともかく！」とカレンが口を挟んだ。「マナちゃんの覚悟は、よーく分かったのですわっ…！　サラ、ここはあたくしたちが協力してあげましょうっ……！」

「そ、そ、そ、そうだね、カレンっ…！」

と、冷や汗を掻きながらサラも同意すると、マナの表情が少し明るくなった。

「ありがとう、サラ姉ちゃん、カレンちゃん…。それで、あたしはどうすれば…？　どうすればグレルおじさん、またあたしを見てくれる…？」

「う、うーん」

と頭を悩ませるカレンとサラ。

自分に置き換えて考えてみた。

（有り得ないけど、もしシュウが他の女の子に気が向いたら、あたくしは……）

と、カレンがマシンガンを手に持ち、

（有り得ないけど、もしレオ兄が他の女に気が向いたら、アタシは……）

と、サラが指をぼきぼきと鳴らして立ち上がり。

窓の方へと向かって歩いて行きながら言う。

「そうだね、マナ。アタシだったらまず、相手の女に…」と、拳を振り上げたサラ。「人の男といちゃついてんじゃねえぇぇえええぇぇえぇえええええええええっ！！」

ズガシャァァァン！！

窓ガラス、粉砕。

「――とまあ、こうした後に葉月湾に沈めて黙らせるかな♪」

「あーら、ダメよサラ」と言いながら、カレンが立ち上がる。「悪いのは気が向いた彼の方でしょう？」

「それもそうだけどー」

「いいこと？　マナちゃん。あたくしだったら、彼に…」と、窓の外へと向かってマシンガンを構えたカレン。「貧乳ナメんじゃないわよおぉぉぉ

サラ、カレンと頷きながら同意した。

「まあ、うん。ユナのことは殴れないさね。ていうかユナは何も悪くないよね。グレルおじさんに恋してるわけじゃないんだし。それどころか引いてる」

「まあ、そうね。グレルおじさまマシンガンごときで死なないとはいえ、ちょっと抵抗あるものかしらね」

マナが頷いて訊く。

「だから何か別の方法を…」

「う、うーん」

と再び頭を悩ませるカレンとサラ。

数秒後、カレン、サラの順に言う。

「そうね、あたくしがマナちゃんだったら、薬を利用するかしら」

「アタシだったら男の胃袋を掴む！　…と、言いたいところだけど料理できないから、いざとなったら身体で繋いでおくかな」

「って、ちょっと何言ってんのよサラ。マナちゃんはまだ１４歳なのよ？」

「レナがこの間ミヅキと体験してきたからいいかと思ってー」

「だからってそんな……」

と、カレンとサラが話している傍ら、ぴくっと左眉を動かしたマナ。

「薬と身体…」と呟き、「そーれだ…」

と立ち上がった。

第１４６話　六女の願い『おじさん、またあたしを見て』　～前編～（後書き）

次の更新夜中になると思います。
最近昼だったり夜だったり、落ち着かなくてすみません…。

第147話　六女の願い『おじさん、またあたしを見て』　～中編～

シュウ・カレンの夫婦部屋の中。
マナが立ち上がる。

「そーれだ…」

カレンとサラはぱちぱちと瞬きをした。

「そーれだって…」と、顔を見合わせたあと、マナの顔を見て訊く。
「今の、実行するの？」

マナが頷いた。
グレルを再び振り向かせるため、どうやらカレンの『薬を利用』作戦と、サラの『身体で繋ぐ』作戦を実行するらしい。

カレンが訊く。

「それって…、グレルおじさまに痺れ薬を飲ませるとか？（昔のミヅキくんみたいに…）」

サラが続く。

「で、グレルおじさんが動けないのをいいことに犯すとか？（昔のミヅキみたいに…。いや、未遂だったけど）」

マナが首を横に振る。

「そんなことをしたところで、身体で繋いでおけない気がする…。

こういうのはやっぱり同意の上で…」

「同意…」

と鸚鵡返しに呟いたカレンとサラ。

サラが訊く。

「つまり、何？　犯してもいいですか？　ってグレルおじさんに訊くの？」

「サラ…」と、カレンが苦笑。「抱いてください、とかの方がいいと思うわよ？　ねえ、マナちゃん？」

こくんと頷いたマナ。

「そして薬を飲ませる…。最初は平気かなって思ったんだけど…、よく考えてみるとやっぱりスイカを最初から受け入れるのは無理そうだから…」

「どんな薬？」

とカレンとサラが訊くと、マナが戸口へと向かいながら答えた。

「スイカをキンカンにしちゃう薬…」

今朝のあれ以来、部屋にこもって魔法薬の調合を行っているマナ。

夕方に帰ってくるらしいグレルに飲ませる気満々のようだ。

一旦昼に帰ってきたシュウとレオン。
キッチンでカレンとキラ、ミラ、サラに囲まれて昼食を食べていた。

「はぁっ？」

と、カレンたちの話を聞いていたシュウが声を裏返す。
同様にレオンも声を裏返して続く。

「な、何だって？」

「いや、うん、だからね？」と、サラはもう一度言う。「マナが今日、グレルおじさんの股間に生えてるスイカを薬でキンカンサイズまで縮めて犯す気……じゃなかった。抱かれる気満々なんだよね」

「ま、待て」と、顔を引きつらせたシュウ。「何で！？」

「何でって、最初からスイカじゃ――」

「そうじゃなくて！　マナのやつ、もしかしてマジでグレルおじさんに惚れてんのか！？」

「みたいよ…」と苦笑したカレン。「まあ、マナちゃんが好きだっていうならいいじゃない？　お義父さまがいない今日が進展のチャンスよ」

「そ、そりゃ親父がいない今が進展するチャンスだけどっ…！」と、頭を抱えたシュウ。「なっ、何であのバケモノなんだよマナァァァァァァァァァァァァっ！！」

と衝撃のあまり絶叫した。
その傍ら、衝撃のあまり蒼白しているグレルのペット・レオン。

「マ、マ、マ、マナ、正気…!?　グレルって…えぇ!?　グレルって……!!」

「お、おまえたちが焦る気持ちはよーく分かるぞ…」と、サラの隣で顔を強張らせているキラ。「し、しかしマナはグレル師匠と結婚したい模様…。キンカンサイズにしてしまうというし、私は生温かい目で見守るぞ……」

「わ、わ、わ、私も」と、カレンの隣で顔を強張らせているミラ。「マ、マ、マ、マナがそうしたいって言うなら、応援するわっ…。で、でも物凄く心配だから、今日のグレルおじさんとの初エッチは付き添わせてもらうわっ……!」

「つ、付き添うっ?」と、シュウの声がまた裏返った。「ちょ、ミラ、おま、それはどうかと…!」

「だ、だってお兄ちゃん!　心配じゃない!　マナが痛がったら私がすぐに治癒魔法をかけてあげるの!」

「私も母として心配だ。私も付き添うぞっ…!」

と、キラが続き、

「アタシもアタシもー。アドバイスのために付き添うー」

とサラも続き、

「えっ？　じゃ、じゃあ、あたくしもっ…！」

とカレンも赤面しながら続いた。

シュウが声をあげる。

「な、何でだよカレン！」

「だって皆が…。大丈夫よ、シュウ。えげつないモノじゃなくて、キンカンサイズの可愛いモノ見るんですもの」

「キ…キンカンの方がいいとか言いそうで嫌だっ！！」

「やーね、ダーリン。あたくしは日々パイナポーをカモォォォォンよっ…♪」

「パ、パイナポーって？」

「あなたの銅メダル（ハート）」

「……。オレ、そこまでえげつねーと思われてんの？」

「何を今さら」

と、失笑したサラ。

ミラが笑う。

「大丈夫よぉ、お兄ちゃん。銀メダルのパパなんて、メ・ロ・ン♪

いやぁぁぁぁぁぁぁぁん、私もほしいいい

ガシャンっ…

「自重しろミラ」

と、ミラの言葉を早口で遮ったキラの手の中で割れたグラスを見て、ミラの笑顔が引きつる。

「は、はーい、ママ（いやん、怖ーい…）」

そこへやって来たマナ。

「でーきた…」

その手には薬の入った小瓶が握られていた。

シュウの隣に座り、キラに昼食を持って来てもらって食べ始める。

莫久来（ばくらい）（ホヤとコノワタの塩辛）をご飯に掛けて食べる妹を見ながら、シュウは訊く。

「で、でーきたって、その…スイカがキンカンになる薬が？」

マナが頷く。

「しょ、正気!?」と訊いたのはレオンである。「マナ、本当にグレルでいいの!?　グレルだよ、グレル！　あのバケモノで天然バカのグレルだよ!?」

再びマナが頷いて言う。

「ユナに嫉妬する自分を見て、あたし気付いた…。グレルおじさん

のことといつの間にか好きになってた…。皆が言うようにグレルおじさんはたしかにバケモノで天然バカだけど…、すごく優しい人だってことも知ってるでしょ…？」

マナのそんな言葉に、同意して頷いた一同。

ペットであるレオンは、グレルの優しさを特に知っていた。

マナが続ける。

「グレルおじさんと結婚するのは、このあたし…。あたし最近パパに似てきたって言われるけど、本当にそうだと思った…。パパがママに対して、それからパパ似のサラ姉ちゃんがレオ兄に対してそうなように、あたしも何としてでも自分の傍にグレルおじさん置いておきたいや…」

と真剣な顔をして言うマナを見て、シュウとレオンはようやくその現実を実感。

グレルの優しさは充分に知っているから、マナの気持ちは分からなくもない。

が、しかし。

一部の読者さまも言っていたが、やっぱり、

「ゲ、ゲテモノ好きだねーっ…！」

と思う気持ちが何よりも濃かった。

夕方。
シュウ宅の裏庭ではユナとジュリが遊んでおり、レナはミヅキとのデートへ行っている。
リン・ランは自分たちの部屋で夏休みの宿題中。
一階にあるグレルの部屋の中では、キラとミラがベッドを整えていた。

そして玄関にはカレンとサラ、マナ。

少し開けたドアの隙間には、上からサラ、マナ、カレンと頭が並んでいる。
外の様子を見ていた。

「そろそろ帰って来るころだよね、グレルおじさん」

「ええ、そうね、サラ。マナちゃん、緊張してる？」

「大丈夫…」

と言いながら、マナはポケットの中に手を入れた。
ちゃんと薬があることを確認する。

数分後、スキップしながら帰って来るグレルの姿を確認。
カレンとサラが声をそろえた。

「あっ、来たっ！」

と、玄関のドアを閉め、３人何となく直立してしまいながらグレルを待つ。
――が、１分を過ぎても玄関のドアが開かれる気配はなく。

カレンとサラは眉を寄せると、再び外の様子をドアの隙間から覗いた。

「あれ…？」

「？　どうしたの、サラ姉ちゃん、カレンちゃん…」

と訊いたマナに、カレンとサラが振り返って言う。

「消えた…」

「消えた…？」

と鸚鵡返しに訊いたマナ。

外に出て辺りをきょろきょろと見回す。

するとマナの黒猫の耳に、裏庭の方から声が聞こえてきた。

「おじちゃーん、おかえりなさーい！」

とジュリの声。

続いてユナの声。

「あ、グレルおじさんおかえりなさい」

そしてグレルの声。

「ただいまだぞーっと♪　よーしよしよし、おじちゃんいなくて寂しかったかぁー？」

マナの頭の中に、グレルがユナやジュリを抱っこしてスキップする姿が浮かんできた。

左眉をぴくっと動かしたマナ。

早歩きで裏庭へと向かっていく。

「ど、どうしたのっ？」

とマナを慌てて追うカレンとサラ。

裏庭が近くなったとき2人にもグレルの声が聞こえてきた。

「ほーらほらほら、ただいまのチューだぞーっと♪」

「うっ、わあああああああああっ！　しっ、しなくていいよおぉぉおおおぉおおおおぉぉぉぉおおっ！！」

とユナの絶叫。

マナが裏庭に辿り着き、カレンとサラが眉を寄せて屋敷の角から裏庭を覗く。

するとそこには、グレルがユナを左腕に抱っこ、ジュリを右腕に抱っこ。

そしてユナの頬にキスしているシーンに遭遇。

（ま、まずい…）

とカレンとサラが顔を引きつらせたときのこと。

マナの周りに漂うピリピリとしたオーラ。

風も無いのに、マナの肩下まである銀髪の毛先がゆらゆらと動き始める。

「ちょ、マナちゃんやばくない？　サラっ…！」

「うん、やばいね」

「も、もしかして、また石を頭に落とすっていうんじゃあ…！　今度はかなり大きい石とかっ…！？」

「いや、そうかもだけど、でもさ？　グレルおじさんにマシンガンぶっ放せないって言ってたし、そんなひどいことはしないんじゃないかな」

「あ、ああ、そうね。じゃあ、大丈夫かしら――って、きゃあああぁあぁぁあ！？」

カレンはよろけてサラにしがみ付いた。

地面が揺れている。

「ああ…、マナの仕業だね」と、カレンを支えながら苦笑するサラ。

「きっと今、地の底から岩が突き上げてきてるよ……」

「えっ！？」

とカレンが声をあげた直後のこと。

ズガァァァァンっ！！

と、グレルの足元から突出した尖鋭な岩が、グレルを突き上げて

いく。
その際にグレルの腕からぽーんと飛んだユナとジュリ。
「わあぁぁあぁぁあっ！　ジュ、ジュリぃっ！」
とユナがジュリを腕に抱え、
「よいしょっと」
サラがユナをキャッチでセーフ。
一方。
３０ｍほど突き出た尖鋭な岩の先端に座り、きょとんとしているグレル。
「なんだあ？」と、目を落として己の尻を見、「おおーっと、浣腸されてるぞーっと！」
一応驚いているのか、声を高くした。
刺さっているところから少し下のところをバキっと折って地に飛び降り、尻から岩を引っこ抜く。
「危うく実が出ちまうところだったぞーっと」
と尻を擦るグレル。
ズボンも下着も見事に裂けている。
その上空の方を見上げたカレンとサラ。
顔がだんだん空から地へと下がっていく。

「…ねえ、サラ」

「何、カレン」

「マシンガンはぶっ放せないのに、マナちゃんは何故こんなこと出来ちゃうのかしら？」

「謎」

今度はグレル目掛けて、小石が豪雨のように降り注いだ。

「今日の天気は晴れのち小石だぞーっと♪」

第１４８話　六女の願い『おじさん、またあたしを見て』　～後編～

シュウ宅の裏庭。
グレル目掛けて、小石が豪雨のように降り注ぐ。
「今日の天気は晴れのち小石だぞーっと♪」
と、大量の小石を浴びながらも、何ともない様子のグレル。
（さ、さすがバケモノ…）
と屋敷の角から覗いているカレンやサラ、ユナは苦笑してしまう。
グレルが自分の左腕を見、右腕を見たあと、辺りをきょろきょろと見回す。
「あれぇ？　ユナぁ？　ジュリぃ？　どこ行ったぁ？　……お、いたぞーっと♪」
とユナとジュリの姿を見つけたグレルが、スキップしながら向かっていく。
ぴくっと左眉を動かしたマナ。
「グレルおじさん、あたしを見て…」
呟くように言って、今度はグレルに石を降らせる。
「おおーっ？　晴れのち小石のち石だぞーっと。おーい、ユナぁ♪
おじちゃんと――」

「あたしを見て…！」

と少し声を高くしたマナ。

石は岩へ。

「おおーっ？　晴れのち小石のち石のち岩だぞーっと。なあなあ、ユーナ♪　おじちゃんと――」

「あたしを見て！！」

と叫んだマナ。

（やばっ……！！）

と、カレンとサラ、ユナが顔面蒼白した瞬間、ついに岩は隕石へ。

「ん？」

とマナの声に気付き、振り返ったグレル。

その頭上に、

ズドォォォォン！

と落ちた隕石は、

パッカーーーンっ！

と真っ二つに。

（バ、バケモノにも程がある…）

と顔を引きつらせてしまうカレンとサラ、ユナ。
一方のマナ、グレル目掛けて隕石召喚連発。

ズドドっ！

「おおー？　なんだあ？」

グレルの身体が隕石に埋もれていく。

「今日は天気が変わりやすいなあ」

ズドドドドっ！

「晴れのち小石のち石のち岩のち隕石だぞーっと♪」

ズドドドドドっ！

「がっはっは～！　なかなかお目に掛かれない天気だぞーっと♪」

ズドドっ！
ズドドドドっ！！
ズドドドドドドドドドドドドっ！！！

地震じゃないかと思ってしまうような地響きに、山積みになった隕石。
グレルの身体は埋もれて見えなくなってしまったが、笑い声が聞こえてくるところからすると何ともない様子。

それよりまずいことになっているのはマナの方。

いつもの冷静沈着な様はどこへやら。

「あたしを見てっ！！　グレルおじさんっ！！」

と半ば発狂し、隕石に埋もれているグレル目掛け、

ズガァァァァァンっ！！

と地から岩を突き上げる。

隕石の山を崩し、現れた尖鋭な岩。

その先端に、またグレルがきょとんとして座っている。

「なんだあ？」と、また己の尻に目を落としたグレル。「おおーっと！　2度目の浣腸はやばいぜーっと！」

尻から岩を引っこ抜き、地に飛び降りて屋敷の玄関の方へと駆けて行く。

「実がもれちまうぞーっと！」

というか、完全にもらしながら。

それを顔を引きつらせながら見送ったカレンとサラ、ユナ。

グレルが駆けて行った方を指差しながら、声をそろえてマナに訊く。

「ねえ、本当にあれが好きなの！？」

「…ハァっ…ハァっ……！」

カレンたちに背を向けた状態で立っているマナ。
興奮のあまりにか、肩で息をしている。

「…お、落ち着いて」

とカレンたちが言うと、マナが散らばっている隕石や突き出た岩を消した。
崩れた地を均し、呼吸を整えてから振り返る。

（良かった落ち着いた…）

とマナの顔を見て思ったカレンたちだったのが。

グレルの後を追って行ったマナが、トイレから出てきたグレルにポケットの中の薬を突き出し、

「もう犯す…」

と一言。
カレンたちは驚愕しながら前言撤回。

（お、落ち着いてなかったぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあっ！）

一方のグレル。
ぱちぱちと瞬きをしながらきょとんとしている。

「お？　犯すっておじちゃんのことかあ？」

マナが頷き、さらにグレルに薬を突き出す。

「飲んで…」

グレルが首をかしげ、マナから薬を受け取った。

「何の薬だあ？」

と、訊いておきながら返答を待たずに薬を飲み干したグレル。

マナがにやりと笑う。

「これで良し…」

「どれっ！！」

と、グレルのパンツの中を覗いたのはサラである。

目を丸くする。

「うわ、マジでスイカがキンカンに…！」

「お？」と自分のパンツの中を覗いたグレル。「おおーっと！　おじちゃんの金メダルが可愛くなっちまったぞーっと！」

「よし、マナ！　犯(や)っちゃえ！」

とのサラの言葉に頷いたマナ。

サラと共にグレルを引きずっていく。

「おおーっ？　おじちゃん犯されるぞーっと！」

自分の部屋へとやって来たグレル。

「待ってたぞ、グレル師匠…！」

「待ってたわ、グレルおじさん…！」

とキラとミラに出迎えられながら、部屋の中を見回した。

「オレの部屋がいつの間にかラブホと化してるぞーっと」

「い、いよいよなのですわあぁぁあぁぁあっ！」

と、カレン。

部屋の中に入り、鍵を閉める。

それを確認したサラ。

お代官様ごっこの気分で、グレルの身包みを剥がしていく。

「良いではないか、良いではないか♪」

「お代官様お止めくださいだぞーっと！　あ～～れ～～～っ♪」

「げへへへへ――って、クサっ！！」

サラ、飛び退る。

キラが鼻を摘んで言う。

「ああ、臭うな…。グレル師匠、シャワー浴びてきてほしいぞ……」

「おー？　さっき実もらしちまったからなあ。どれ、尻洗って来るぞーっと♪」

と、備え付けのバスルームにグレルが入って行き、シャワーの音が聞こえ出す。
マナは服を脱ぎ、下着姿でベッドの中に入って準備。
「ところで…」
と口を開いたマナ。
「うん」
と、相槌を打ったカレンとキラ、ミラ、サラに訊いた。
「どうやって犯すの…？」
「……」
数秒の間、シャワーの音だけが響いた部屋の中。
しまった、とサラが頭を抱える。
「おっ、教えておくの忘れたあぁぁあぁぁあぁぁあっ！」
続いてキラがごほんと咳払いをし、赤面しながら言う。
「そ、その、だな、マナ？　は、母上は日々父上に犯される側だから、その、あれなんだが…」
「あんもう、ママ羨ましいっ」
「ミ、ミラは黙っていろ。そ、それでだな、マナ？　その、えーと

ぉ…、う、う、う、上に、の、の、の、乗ってしまえば良いのではないかっ……！？」

キラに続き、ごほんと咳払いをしたカレンも赤面して続く。

「そ、そ、そ、そんな感じよ、マナちゃんっ…？　で、でも長時間乗ってるのはちょっと疲れる…かしらっ……」

マナが首をかしげる。

「上に乗ってるだけなのに疲れるの…？」

「えっ！？」

と、裏返ったカレンとキラの声。

「やーねぇ、マナったら」

つんっ♪

と、マナの額を突いたミラが笑う。

「動くから疲れるのよーう」

マナが再び首をかしげる。

「どう動けばいいの…？」

「えっ！？」

と、再び裏返ったカレンとキラの声。
サラが声をあげる。

「ああもうっ！　時間がないっ！　いい！？　マナ！」と、マナをグレルと想定し、マナに跨ったサラ。「こう、動くの！　こうっ！　こうだよ、こうっ！　こうね、こうこうこうっ！！」

カレン、キラと同意して頷く。

「そ、そうそう、そんな感じよマナちゃんっ…！（サ、サラあなた、何て動きを…！）」

「う、うむ、サラの通りだぞっ…！（サラおまえ…、凄くないか？）」

サラの動きを良く見たあと、マナが頷いた。

「分かった…」

「じゃあ、練習始めっ！　ほら、アタシをグレルおじさんと思って乗って！」

「はい、サラ姉ちゃん…」

と、サラの上に跨ったマナ。
サラを真似て動いてみるものの、

「……違う！　もっと速く！」

早々からダメだしを食らう。

「は、はい…」

「もっと！」

「は、はいっ…」

「もっとだって！」

「は、はいぃっ…」

「犯す側なんだから精一杯楽しむ勢いでっ！！　――って、お姉ちゃんは練習しなくていいっ！！　枕返して、枕っ！！」

「あん、パパとするときのために枕で練習してたのにぃ」

「ミーーーラァァァァァァァァ……！？」

「きゃ、きゃあああああっ！　ママごめんなさあああああいっ！！」

なんて騒いでいるうちに、いつの間にか1時間が経過。

サラにビシビシと練習させられたマナが、ベッドに横たわって息を切らす。

（つ、疲れた…。でもこれで大丈夫かな……）

なんて思った数秒後、はっとしてバスルームのドアに顔を向ける。

「グレルおじさんまだ…！？」

そわそわとしながらカレンが言う。

「そうなのよ、まだなのよ。ずいぶんと遅いですわねえ…」

「なーんだ、もう…。のんびり入浴するなら言えっての。時間がないと思って焦ったじゃん」

と脱力してベッドに倒れたサラの一方、マナが立ち上がった。

焦ったようにバスルームの方へと駆けて行く。

キラが訊く。

「どうしたのだ？　マナ。おまえも今のうちに休んで――」

「あの薬、1時間から2時間で効果切れる…」

「――ええっ！？」

と声をあげたカレンとキラ、ミラ、サラ。

サラがベッドから飛び起き、バスルームへと駆けて行ってドアをどんどんと叩く。

「グレルおじさん！？　ねえ、グレルおじさん！？」

「今行くぞーっと」

と、グレルの声。

もう浴室から出て脱衣所にいるようだ。

「ねえ、グレルおじさん！？　（薬の効果は）大丈夫！？」

「余裕で大丈夫だぞーっと」

とのグレルの声を聞いて、安堵したカレンたち。

サラが続ける。

「じゃあ（薬の効果が切れる前に）早くしてよ、グレルおじさん」

「1分後に行くから待ってろよーっと♪」

ということで、サラとマナはバスルームの前からベッドの方へと戻っていった。

再びベッドに入り、グレルを待つマナ。

（グレルおじさん…）

いつもは動悸を感じることはあまりないのだが、今は少しそれを感じている。

（またあたしを見て…）

そして1分後。

バスルームのドアからカチャっと音がし、マナは布団をぎゅっと握る。

（来たっ…！）

とそこにいる女たちがバスルームのドアに顔を向けると同時に、全裸で姿を現したグレル。

「さあ、おじちゃん犯されるぞーっと♪」

「あはは、張り切ってるね～」と笑ったサラ。「――って…！？」

グレルの股間に目を落として硬直。

続いてカレンとキラ、ミラ、マナも硬直。

次の瞬間、声を揃え、

「ぎっ、ぎゃあぁぁあああぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあっ！！！」

絶叫した。

どうやら薬の効果は切れたらしい。

キンカンは元のスイカに。

半ばパニックに陥り、部屋の中を逃げ惑う女たち。

それを見たグレル。

「お～？　鬼ごっこかあ？」と勘違いし、「おじちゃんも混ざるぞーっと♪」

真っ裸のまま女たちを追いかけ始めた。

「ほーれほれほれ、カレン！　早く逃げねーとおじちゃんに捕まっちまうぞーっと♪」

「きゃあああああっ！　きゃあああああっ！」

「ほーれ、捕まえたぞーっと♪」

「いっ、嫌あああああああああああああああっ！　離してっ…！　離してくださいっ！　たっ、助けてシュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！！」

とグレルに捕まり、泣き叫ぶカレン。
その声を聞き、慌ててグレルに駆け寄ったサラ。

「ちょっ、ちょっとカレン離してよグレルおじさん――ってぇ！？」
カレンに続いてグレルに捕まった。「ぎゃあああああああああああああああっ！！」

「サラも捕まえたぞーっと♪」

「おっ、おじさんスイカっ…！　スイカ当たってるって！　うわぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁあっ！！　レっ…レオ兄、助けてえぇえええぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえっ！！」

とサラも泣き叫び。
キラが離れたところから顔を強張らせてグレルを指差す。

「おい、グレル師匠っ…！」

「どうした、キーラ♪」

「は、離すのだっ！　私の可愛い娘と息子の嫁を、今すぐ離――」

「なーんだ、おまえも捕まえてほしいのか？」

「は！？　違――」

「ほーれほれ、捕まえてやるぞーっと♪」

と左腕にカレンを、右腕にサラを抱っこしているグレルがキラを追い駆け回す。

キラ、大パニック。

「ふにゃあああああああああああああああああああっ！！」

「待てよーっと♪」

「来るなっ！　来るなあっ！！　ふっ…ふにゃあぁぁぁぁぁぁんっ！　リュウっ…！　リュウ助けてなのだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

とカレン・サラに続いて泣き叫ぶキラ。

寄って来るグレルに爪をぶんぶんと振り回す。

そんなもんだからカレンとサラに当たりそうになり、グレルが慌てて2人を庇う。

「危ねーぞーっと！」

その際、キラの爪が右腕に当たったグレル。

「お？」と、カレンとサラを降ろし、腕から流れ出る血を見たあと、

「なあ、治癒魔法掛けてくれねえ？」

と、今度はミラを追いかけ始めた。

もう泣いているミラ。

死に物狂いで逃げ回る。

「来ないでえぇえええぇえぇえぇえぇえぇえぇえぇえぇえっ！！」

「なあ、ミラってばよー」

「スイカなんて嫌よおぉおおおぉおおおぉおおおぉおおおっ！！」

「おじちゃんの傷、治してくれよー」

「私がほしいのはパパのメロンよ、メロンっ！　メロ――」

と、グレルに捕まったミラ。

顔面蒼白して絶叫する。

「メロっ、メロロロ

バァンっ！！

とドアが開かれて顔面を強打。

中からカレンとキラ、サラ、ミラが泣きながら出てくると同時に、後方へと倒れる。

「――ガハァっ……！！」

仰向けで床に転がったシュウの身体を、女たちが泣きながら揺する。

「シュウ助けてっ！　シュウっ！！」

「シュウっ、母上怖いのだぁぁぁあぁぁあっ！！」

「おっ、お兄ちゃぁぁあぁぁあぁぁん！！」

「あ、あああ、兄貴っ！　兄貴っ！　キンカンがスイカっ！！　ス、ススス、スイカっ！！」

事態がよく分からないシュウ。

「お、おい、落ち着いて何が起こったのか話せ」

と、困惑しながら身体を起こしたとしたところ、

「おーい、シュウ？　帰ったのかー？」

と全裸で登場したグレルの股間が突然目の前に。

女たちが慌てて逃げ出すと共に、絶叫した。

「ぎっ、ぎゃあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああっ！！！」

「おー、いたいた。なあシュ――」

「あっ、あああっ、あんた何してんだよっ！？　早くパンツ穿いてくれっ！！」

「えー？　でもオレ、これからマナに犯されなきゃなんだぞーっと」

「ふざけんなスイカっ！！　そんなのキンカンサイズでの話に決まってんだろ！？」

「そうなのかー？」

と、部屋の中に顔を向けたグレル。
その目線の先には、ベッドに潜っているマナがいる。

はっとした一同。
慌てて部屋の中を覗き込んだ。

「マナ！？」

「マナちゃん！？」

ゆっくりと布団の中から顔を出すマナ。
一同の驚愕した顔を見たあと、グレルの顔を見つめた。

（グレルおじさん…）

グレルの股間を見て激しく戸惑ったものの、ベッドから起き上がってグレルに手を伸ばす。

「あたしを、見て…！　あたしを……！」

必死な様子のマナを見て、シュウたちは必死に首と手を横に振って制止する。

「いっ、いやいやいやいやいやっ！！　裂ける裂ける裂ける裂ける裂けるっ！！」

と焦るシュウたちの一方、マナの方へと向かって行くグレル。

「誘惑されたぞーっと♪」

「ぎっ、ぎゃあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあっ！！」

とシュウとキラ、サラがグレルを背後から押さえつけ、

「ダっ、ダメェエエェエエエエエエエエエエエエっ！！」

と、カレンとミラが、マナを背に庇って両腕を広げる。

「どいて、ミラ姉ちゃん、カレンちゃんっ…！」

とグレルの方へと行こうとするマナを、カレンとミラが抱きすくめた。

カレン、ミラと真っ青になって首を横に振って言う。

「ダ、ダダダ、ダメよマナちゃんっ！！」

「そ、そそそ、そうよマナっ！！」

「嫌っ…！」と、マナが声をあげる。「身体でグレルおじさん繋いでおかなきゃっ…！　あたしから離れて行っちゃうっ……！」

「大丈夫よマナちゃん！　大丈夫っ！」とマナを宥めるように言ったあと、サラを見て眉を吊り上げるカレン。「あああもうっ、サラが変なこと言ったからよ！？」

「ごっめーん。大丈夫だから落ち着きなよ、マーナ。ねえ？　グレルおじさん？」

と、サラ。

一同、グレルに注目。

グレルがぱちぱちと瞬きをしながら訊く。

「何の話だあ？」

「グレルおじさんっ…！」

と、カレンとミラの腕からすり抜けたマナ。

グレルに駆け寄っていく。

「あたしを見てっ…！　グレルおじさんっ…！」

「お？　見てるぞ？」と、グレルが目を見開き、マナに顔を近づけ

る。「ほーれほれ、おじちゃんの愛らしい瞳にマナの顔が映って――」

「意味ちげーよ」

ドスっ

と、サラのチョップを背に食らい、グレルが首をかしげる。

「じゃ、どういう意味だあ？」

カレンが溜め息を吐いて訊く。

「グレルおじさま、どうして突然ユナちゃんを口説くようになったのかしら？　マナちゃんと結婚するって言っていたのに」

「お？　なーに言ってんだよ。口説かれたのはオレの方だぞーっと♪」

と笑うグレルに、眉を寄せて声をそろえる一同。

「ハァ？」

「だってよ、ユナがオレの前で面食いだって言うんだぜ？」

「それが？」

「オレ口説かれたよーなもんじゃねーかよーう♪」

「……」

一同、心底謎。

（何故そう思えるのか…）

グレルが続ける。

「ユナも女なんだからよ、ちったぁ乗ってやった振りしねーと可哀相だろ？　ユナの女のプライドを傷つけちまうっていうかよ。まぁーったく、何でそれが分かんねーかなあ、おまえたちは～」

と言って深い溜め息を吐いたグレルに、引きつりまくった一同の顔。

（張り倒したい……！！）

と心底思うが、このバケモノ相手では無理な願いである。

マナに目を落としたグレル。

マナの頭を撫でながら笑った。

「なーんだ、マナ？　おじちゃんが浮気すると思ったのか？　ん？」

「もうあたしのこと見てないのかと思った…」

「そんなわけないぜーっと！　おじちゃんの嫁さんはマナだけなんだぞーっと♪　それで必死におじちゃんのこと犯そうとしたわけか？」

こくんと頷いたマナ。

グレルがさらに笑い、マナを抱っこする。

「何もそんなに焦らなくても良いぞ？　おじちゃん、マナが大人になるまで待ってるからなっ♪」

「本当…？」

「ああ、本当だぞ♪」

「約束ね…」

と、グレルの唇にキスしたマナ。

「――！？」

一同、衝撃。

マナがクマに噛まれているという目の錯覚を起こした。

はしゃいだ様子のマナとグレルを交互に見て、シュウは脱力。

「あーもー、色々心配して損した。風呂入って疲れ取ろ…」

と、肩を落とし腕をだらんとさせて部屋の外へと出て行ったシュウ。

少ししてその耳に入ってきたのは、ドスドスという足音。

何だか近寄ってくる。

女たちがこんなに重たい足音のわけがなく。

シュウが振り返ると、

「おーい、だから傷治してくれよーう！」

グレルが追いかけてきていた。

「――ぎっ、ぎゃぁぁぁ

「シュウの今日のパンツはハート柄っ♪」

「バラすなっ！！」

「可愛いぜーっと♪」

「カレンが買って来たんだよっ！！」

「うんうん♪　ピッタリの可愛いパンツだな、この銅メダルには♪」

「オッサン触んなっ！！　うわあぁぁあぁぁあっ！！　たっ、たたたっ、助けてっ！　助けてレオ兄っ…！！」

恐怖でパニックに陥ったシュウ。

泣きながら絶叫した。

「助けてっ、親父いいいい

第１４９話　父親帰りました

予定よりも数時間早く葉月島本土に帰ってきたリュウ。
シュウたちが必死に隠していることを、タマから聞き出すのは簡単だった。

というか、タマが勝手に喋った。

神の友人というタマを目の前に一通り感動したあと、話を切り出したリュウ。

「タマ様、シュウのことなのですが…」

とリュウが言った途端、狼狽し出したタマ。

「シュ、シュウのこと!?　や、やっぱりダメであったのか!?
シュウに言ってはいけなかったのか!?　い、いや、言ってないが、シュウにバレてしまったのか!?　シュウが闇の力を持っているということをっ!!」

シュウが闇の力を持っている。

その言葉を聞いた瞬間、ぞくっとリュウの背筋に走った恐怖。
離島へと自家用クルーザーで辿り着いてからほんの１５分。
リュウは踵を返した。

途中キャロルとすれ違ったのだが、冷静さを失ったその瞳には映らなかった。
クルーザーに乗り込み、葉月島本土へと向かって全速力で走らせ

ながら察した。

（そうか…、シュウとそれからジュリも闇の力を……）

その途端、リュウの中で増した恐怖。

（キラはシュウとジュリの力のこと、産まれた瞬間から…いや、もしかしたら腹の中にいるときから分かってたはずだ。何故キラはずっと俺に黙っていた？　何故…！？）

困惑すると同時に、キラに対して怒りを覚えた。

帰宅してキラの顔見たら怒鳴ってしまいそうだと思った。

（何でだよ、キラ…！　そんな重要なこと、何で俺に言わなかった……！）

そんな疑問の答えは、ふと目を落としたときに解けた。

震えていた、舵を取る己の手。

（ああ…、そうか…。俺が、こうなっちまうから…。キラやシュウたちは……）

このリュウに隠そうと、必死になっていたキラや子供たちの姿を思い出す。

（情けねえな、俺…。キラはともかく、子供たちにまで心配されるなんてよ……）

深呼吸をして、気を落ち着かせたリュウ。

しっかりと舵を握って、葉月島本土へと帰った。

自宅屋敷へと向かって歩きながら考えた。

（キラ、今日1日何してたかな…。俺がどこ行ったのか心配してたかな……）

と思った後、にやけた。

（いや、『リュウ、早く帰ってきて抱いてなのだ（ハート）』かな。まったく仕方ねーな、俺の愛猫はよ。朝の分と昼の分もまとめて抱いてやっからちょっと待ってろ。って、ああ……俺の足が勝手に…）

と、足の速くなる魔法を掛けて走り出したリュウ。

もう少しで自宅に着くというときに考えた。

（そういや、シュウは何してたかな。俺のこと気にかけて仕事捗らなかった、なんてこともありそうだぜ）

なんて思ったときのこと。

自宅屋敷から響いてきたシュウの絶叫。

「助けてっ、親父いいいい

と叫んだ直後、硬直した。

（ま…、待て……）

リュウの目の前。

シャツとパンツ姿のシュウが、素っ裸のグレルに押し倒されている。

脇には脱がされたと思われるシュウのズボン。

（俺がいない間に何があった……！）

真っ青になっているシュウが、泣きながらリュウに手を伸ばす。

「助けて親父っ！！　助けてえぇえぇえぇえぇえぇえっ！！」

「……（って、言われてもな…）」

「助けてってば親父ぃっ！！　このグレル（オッサン）こえーよおぉぉおぉぉおっ！！」

「……（寄りたくねえ…）」

しかし、気持ち悪くて仕方がない。

シュウが自分と同じ顔なだけに。

「し、師匠…」

と、リュウがグレルに顔を向けると、グレルが己の右腕をリュウに差し出した。

「おお、リュウ。ちょうど良かった。ココ怪我してっから治癒魔法かけてくれねえ？」

「……」

リュウが離れたままグレルに治癒魔法をかけてやると、ようやくグレルがシュウの上から避けた。

「サンキュ、リューウっ♪」

「寄ってくんな。そして早く服着ろ」

「おおーっと、いつまでもこんな格好じゃ風邪引いちまうぞーっと！」

と、自分の部屋の方へと駆けて行ったグレルだが、バケモノにそんな心配は無用である。

「た…助かった……！」

と、涙を拭い、脱がされたズボンを穿きなおすシュウ。

リュウがごくりと唾を飲み込んで訊く。

「お、おい、シュウ。貞操は大丈夫だったか」

「お、お、おうっ…」

「そ、そうか。つか、おまえすげーパンツの趣味してんな。ハート柄かよ…」

「カっ、カレンが買って来たんだよっ！！」

と赤面して言ったあと、はっとしたシュウ。

リュウの顔を見つめる。

「おっ、親父っ…！？」

「何だ」

「ど…どこ行ってたの……！？」

「……」

リュウの返答を待つシュウの瞳が揺れ動く。

嫌な動悸がした。

（まさか、タマ和尚のいるところに行って来たなんて言うんじゃあ…！）

リュウが再び口を開きかけたとき、グレルと入れ違いにやってきたカレンとキラ、ミラ、サラ、マナ。

さっきまで脱いでいたマナは、リュウの声を聞いて慌てて服を身につけたようだ。

リュウの姿を見、キラとミラがリュウに飛びつく。

「おかえりなのだリュウゥゥゥゥゥゥゥゥっ！！」

「おかえりなさいパパァァァァァァっ！！」

「おう、ただいま」

とキラとミラを抱き締めたリュウ。
何だか怯えた様子の2匹に訊く。

「何かあったのか？」

ギクっとしたシュウとカレン、キラ、ミラ、サラ、マナ。
マナとグレルの間にあったことは、口が裂けてもリュウには言えない。

キラ、ミラと慌てて言う。

「べ、別に？　さ、寂しかっただけなのだっ…！」

「そ、そうよ、パパっ…！　とぉーっても寂しかったのっ！」

「おう、そうか」

とミラの頬には軽く、キラの唇には熱く接吻をかますリュウ。

終わるまで待とうと思ったシュウ。
1分後、耐えられず声をあげる。

「ああもうっ、なげえっ！！」

「なんだよ、うるせーな」と、眉を寄せ、キラから唇を離したリュウがシュウを見る。「俺とキラ、いつから離れ離れになってたと思ってんだバカヤロウ！！」

「２４時間も離れてねえと思うんすけどね…！？」

「俺とキラの１時間は通常の１日に値する。よって、約２０日も会ってなかった」

と言って、またキラに熱い接吻をかますリュウに、顔を引きつらせてしまうシュウだったが。

（まあ…、いっか）

と思った。

（親父、いつも通りだ。タマ和尚さんとこ行ってきたってわけでもなさそうだ…。オレが闇の力を持ってること、知って帰ってきたわけじゃなさそうだ……）

小さく安堵の溜め息を吐いたシュウ。

「んじゃ、オレ晩飯作るから」

カレンとその場にいた妹たちを連れ、キッチンへと向かっていく。

その途中、リュウに呼ばれる。

「おい、シュウ」

「ん？」

「俺とキラ、あとで食うから」

「これからイトナミすか！？」

「おう」

「ったくもう…」

と今度は呆れて溜め息を吐いたあと、シュウはキッチンへと向かって行った。

それを確認したあと、キラを引っ張って寝室へと連れて行ったリュウ。

キラをベッドに押し倒す。

キラ、苦笑。

「リュウ、おまえというやつは本当に――」

「教えるな、キラ」

「えっ…？」

「シュウとジュリに、破滅の呪文を教えるな」

「――」

一瞬痛いくらいに胸がドキっとしたと同時に、目を見開いたキラ。

リュウを見つめる大きな黄金の瞳が動揺して揺れ動く。

「リュウっ…！？　おまえ、おまえっ……！」

「大丈夫。大丈夫だ、キラ」と、リュウがキラの胸に顔を埋めた。

「俺は大丈夫だから、心配すんな」

大丈夫。

そんなわけがないと、キラは思う。

だってリュウの腕が震えている。

（子供たちの前だからと、無理をしたのか）

リュウが続ける。

「だが教えるな、キラ。シュウとジュリに、絶対に教えるな…破滅の呪文を。教えるな、キラ。教えるな、教えるな…！　…頼むからっ…」と、詰まったリュウの声。「…教え…ないで……！」

「…リュ、リュウ……」

キラは闇の力を継いだシュウとジュリに、本来は教えなければならない。

破滅の呪文を。

キラ自身、いつかは教える覚悟でいた。

教える日など来なければ良いと思いながらも、教える覚悟はしていた。

（だが…）

と戸惑う。

（やはり駄目か…、やはり…。リュウが、こんな状態では……）

でも闇の力を持っていると知った以上、シュウはいつか必ず訊いて来るだろう。
破滅の呪文を。

（そのとき私は教えなければならない、親として…。だが……）

やはり、

（駄目だ、リュウがこんな状態では…、駄目だ……！）

リュウはきっと今、このキラが破滅の呪文を唱えたときの記憶に苦しめられているのだろう。
身体が恐怖で震えている。
キラの胸元が濡れていく。

「教えるな、キラ…！」リュウが声をあげる。「主命令だ、教えるな…！　教えるな！　教えるな！！　教えるな教えるな教え――」

「大丈夫だ、リュウ」

リュウの言葉を遮ったキラ。
リュウの頭をぎゅっと抱き締める。

「私は教えぬ。シュウにもジュリにも、破滅の呪文を教えぬ。大丈夫だ、リュウ。大丈夫だ」

「……」

キラの腕の中、キラの言葉を聞いているうちに安堵して行ったリ

ュウ。
急に眠たくなり、ベッドに横臥する。
キラ身体を抱き締め、その胸に顔を埋める。
（シュウ、ジュリ…。破滅の呪文なんか、怖いものでしかねえんだ。だから……）
絶対に、唱えるなよ――。
心の中、そんなことを愛する息子たちに命令したあと、夢の中に誘われていった。
少しして規則正しい寝息を立て始めたリュウ。
キラは守るようにしかと抱き締めながら、胸を痛ませる。
（すまぬ…、シュウ、ジュリ。私はおまえたちに破滅の呪文を教えてやることは出来ぬ。親として失格だとしても、教えてやることは出来ぬ……）
１０分後。
「ハッ！」と目を覚ましたリュウ。「イトナミ！」
その額にビシっとキラのチョップが入った。
「おとなしく寝ていろ！！」

第１４９話　父親帰りました（後書き）

昨日の１９時４５分ごろメールくださった読者さまへ。
応援ありがとうございます！
もしかして作者さん側でしょうか？
私は文章を書く上で何よりも読みやすさを心がけてますよ。といっても、ＰＣ読者さまからしたら改行が多いと感じるかもしれませんが（汗）

第１５０話　長男、今年も修行へ

――８月。

仕事から帰ってきたあと晩ご飯を食べて裏庭でキラ相手に修行をし、リビングのソファーで食休みをしているうちに眠ってしまったシュウ。

その頭にそっと手を乗せたリュウが呟く。

「使うなよ、シュウ…。キラから受け継いだ力を…、破滅の呪文を使うなよ……」

手が小刻みに震えたリュウ。

寝息を立てている息子の寝顔を見ながら続ける。

「おまえは剣術と、俺から受け継いだ力で強くなれ……」

「…うー…ん……？」

半分目を覚ましたのか、己の頭の方へと手を持っていったシュウ。

目を閉じたままにやけたと思ったら、リュウの手を掴んだ。

「カレンーっ…？」

「はぁ？」

とリュウが眉を寄せた途端、

「フィーバァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ

ァァァァァァァァっ！！」

とリュウの手に己の頬を高速ですりすりさせたシュウ。

「…っ……！？」

リュウの顔が引きつる中、

「ちと待ってー、シャワー浴びるからぁ」

と、さらにリュウの手にキス。

次の瞬間、

「…っ……！！？」

全身にトリハダが立ったリュウのブッチャーを顔面に食らう。

ビシィっ！！！

「――ふぎゃあっ！！」

「カレンじゃねえ！　俺だ、俺！」

「えぇ？　親父ぃっ？」と、顔に治癒魔法を掛けながら瞼を開いたシュウ。「道理でなんかゴツイ手だと思っ――」

「気持ちわりぃことしてんじゃねえ！　このバカが！！」

ドカッ！！！

と今度はリュウのカカト落としを腹に食らい、頭と足を大きく跳ね上がらせる。

「――ガハァっ！！」

「さっさと起きて書斎に来い！！」

ゴスっ！！！

と、おまけにシュウに拳骨を食らわせたリュウ。

リビングから出て書斎へと向かっていく。

一方のシュウは、腹と頭に治癒魔法を必死に掛けまくる。

「ちょ、マジ、一瞬本気で死ぬかと思っ……！！」

腹と頭の痛みが無くなったあと、シュウは疲れた身体を伸ばしてから立ち上がった。

リュウの待つ書斎へと向かっていく。

（仕事の話かな。明日の仕事、まだ言われてねーし）

と思いながら書斎に入ったシュウだったが、そうではなかった。

回転椅子に座っているリュウと向き合い、立って話を聞きながらはっとした。

（ああ、そうだった！　オレこの時期は…）

この時期、シュウに待っているのは去年と同様、葉月島から島を2つ隔てたところにある霜月島にある山での修行。

期間も去年と同様に１０日間のようだ。

「いいか、シュウ。今年は現在おまえの師であるキラが付き添うからな」

といっても、朝ミーナの瞬間移動でやってきて、夜になったらまた葉月島に帰っていくらしい。

そうじゃないとイトナミ出来ない＆眠れないというリュウの都合で。

一通りリュウの話を聞き終わったあと、シュウが声をあげた。

「カレンも連れて行きたい！」

「駄目だ。カレンはカレンで修行あんだ」

「ミーナ姉が瞬間移動で朝晩母さんのこと送り迎えするなら、そのときカレンも一緒に頼むよ！　母さんとカレン交代する感じでさ！　そうすりゃ夜はカレンと一緒にいられるからオレっ！」

「はぁ？」とリュウが眉を寄せる。「おまえ修行に行くってこと分かってんのかよ」

「分かってるよ！　だからオレ夜以外は修行頑張るしっ！」

「しかしなあ」

「頼むよ、親父いいいいいいいいいいいいっ！！」

と、リュウの肩をぶんぶんと揺するシュウ。

「何すんだてめえ」

バキっ！

とリュウに殴り飛ばされ、背をドアに強打。

その後、倒れて床に這いつくばり、ガリガリと爪を立てながらリュウの方へと戻っていく。

唸りながら。

「イートーナーミィィィィィィィィィィィィィィィィィ……！！」

「リン○の貞○かおめーは」

「してぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇよおおお

ミしたいんだオレはっ…！　イトナミしたいんだよぅっ…！　うぅっ、親父のバカんっ……！」

「……」

シュウを見下ろし、リュウは思う。

（シュウおまえ、紛れもなく俺の息子だな……）

仕方ない、と溜め息を吐きリュウは言う。

「分かったよ、うるせーな。だが霜月島は秋だし、山の中は冬のような気温だ。テントなんかで楽しんでカレンに風邪引かせんなよ」

「うんっ」

と笑顔になり、シュウがぴょんと起き上がった。

リュウが話を続ける。

「去年と同様、初日だけ俺も一緒に行って修行のメニューを教える。そんときに分かるだろうが、今年は去年以上に厳しい修行になる。妊婦のサラはもちろん、リン・ランも連れては行けねえ。カレンもテント周辺以外には絶対行かせんな。ところどころに掛けてきた俺の魔法がマジ危ねえったら…」

シュウの顔が引きつる。

「あんた、本当長男（オレ）の身は案じてくれねーのな…！？」

「おまえがヤロウである以上甘えんな」

「じゃあ次男（ジュリ）は！？」

「ジュリはいーんだ、ジュリは。むしろ甘えてくれっ…！　だってすーげー可愛いからな」と、顔を恍惚とさせるリュウ。「キラそっっっっっくりでっ……！」

「はいはい…」

と呆れながら溜め息を吐いたシュウ。

話を戻す。

「去年と同じように、修行にレオ兄は着いて来てくれんの？」

「いや」

「え！？」

「仕方ねーだろ、あいつもう副ギルド長なんだからよ。以前に増して暇がねーんだ」

「そ…そか、そうだよな……」

「代わりにキラが行ってやんだから文句ねーだろ。キラにはいつも通りおまえの剣術の修行のときに手伝うよう言ってある。おまえが別の修行してる間は炊事等してくれっから安心しろ」

と言いながらシュウの足首目掛け、

ドカっ！

と蹴りを入れたリュウ。

「うっわっ！」とシュウは尻餅をつきながら、仰天する。「な、何でオレ今蹴られたの！？」

「朝・昼・晩とてめーのせいでキラの飯が食えねーんだよ、俺は！　１０日間も！！」

「ご、ごめん――って、母さんをオレの修行に付き添わせるって決めたのは親父だろ！？」

「あぁ！？」

ぐわしっとリュウがシュウの頭に手を乗せ、髪の毛を引っ掴む。

「いっ、痛い痛い痛い痛いっ！」

「シュウ、てめーの目標を言ってみろ…！！」

「おっ…、親父を超えること（＆親父に『強くなった』って褒められること）デスっ！！」

「ほらみろ、てめーのせいじゃねーかよ、あぁ！？　俺はてめーのためにキラを付き添わせてやってんだよ…！！」

「ごっ、ごめんなさいごめんなさいっ！！」シュウ、涙目になって狼狽する。「マ、マジ髪抜けるっ…！　ハゲるハゲるハゲるぅぅぅっ！　お、おおお、お願い放してえぇえぇえぇえぇっ……！！」

「フン」

とシュウから手を離し、リュウが椅子を回転させて背を向けた。
一方のシュウは己の頭に手を持って行き、髪の毛があることを確認して安堵の溜め息を吐く。

数秒後、リュウが再び口を開いた。

「おい、シュウ。おまえ、最近キラの攻撃が見えるのか」

「う、うん、大分見えるようになってきた」

「そうか…」

と呟くように言ったリュウ。

(ガキの成長はえーもんだ。俺とキラの子供だから当たり前だが。この調子なら、霜月島へと修行に行ってさらに鍛えたあと、今年の秋に行われるギルドイベントで…)

心の中で短く笑った。

(俺と戦って、俺に一撃与えられる……かもな)

シュウが首をかしげる。

「親父?」

「おい、シュウ。毎年秋に恒例のギルドイベントのことなんだが」

「うん？　今年も『スポーツの秋』をテーマにしたやつが行われる予定？」

「いや、今年は『全島ハンター・各階級別トーナメントバトル』」

「へ？　各階級ごとに誰が一番強いハンターか決めようってこと？」

「まあ、そんなところだな」

シュウが苦笑する。

「超一流ハンター級じゃ親父かグレルおじさんが優勝確定じゃねーか…」

「そうだが、そんなことはどうでもいい。シュウ、おまえそこで俺と戦ってみろ」

「ええっ…！？」と動揺して瞳を揺れ動かしたシュウ。「オっ…オレ死ぬぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！」

顔面蒼白しながら絶叫した。

「死なねー程度に加減してやっから安心しろ。そして与えてみろ、俺に」

「えっ？」

「一撃」

「――」

リュウが椅子を回転させて振り返る。

「あのキラの攻撃が見えるようになってきたってんなら、俺の攻撃も見えるはずだ」

「――そ…そっかっ……！」

「まあ、見えたからって一撃与えられるとは限らねーけどな。やれるだけやってみろ」

「う、うんっ！」

と笑顔になったシュウ。

リュウに夢の一撃を与えられるかもしれないと思うと、今から胸が高鳴った。

「ねねっ、親父っ！　霜月島での修行はいつからっ？　早く行――」

「明日」

「――って、はえええええええええええええええええええええええっ！！」

シュウ・カレンの夫婦部屋の中。

大きなバッグの中に急いで荷物をまとめているシュウを見て、風

呂上りのカレンがぱちぱちと瞬きをする。

「シュウっ？　どうしたのっ？」

「オレ、明日から霜月島へ修行なんだ」

「えっ、明日からっ？　何…、去年も行った山へ？」

「おうっ！」と張り切った様子で返事をしたあと、カレンを見たシュウ。「あ、おまえは夜だけオレのとこ来ることになってるからなっ♪」

と、にこにこと笑っているシュウを見ながら、

「え？　夜？」

首をかしげたカレン。
はっとして頬を染めた。

「んもーう、アナタってば！　修行だというのに夜はパイナポーフィーバーする気なのねっ…！」

「当たり前じゃねーかよーうっ！　だってオレたちっ！」

「新・婚・サン♪」

「いらっしゃあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあいっ！！」

とカレンを抱きかかえ、ベッドにダイブしたシュウ。

カレンの寝巻き――パイル地キャミソールワンピースの裾をめくる。

「あっ…、純白ヒモパンっ……！」

「うふふっ」

と笑ったカレン。

シュウに両腕を伸ばす。

「ヘイ、カモォォォンっ…♪」

「オレのパイナポーまじフィーバァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

と絶叫し、シャツを脱ぎ捨て、ズボンを脱ぎ捨てたシュウ。

カレンに吸い付いた際、甘いボディーソープの香りが鼻をくすぐり、はっとしてカレンの上から避ける。

「仕事と修行後の汗クセー身体でハニーは抱けねえぜっ…！」

「別にいいのに…」

「シャワー浴びてくるから10分待ってて。あ、それからそこらへんに散らばってる服とか修行に持っていくやつだから――」

「ええ、分かったわ」

と、シュウの言葉を察して、散らばっている服を畳んでバッグの中に詰めていくカレン。

それを見ながらシュウは幸せを感じたりする。

「ああオレ…、カレンの夫って感じっ……！」

バスルームに入ったシュウ。

頭からシャワーを浴び、マッハで全身を洗いながら思う。

（強くなりてえ）

カレンと結婚してからは、ますますその気持ちが強くなった。

同時にシュウの中で闇の力が急速に大きくなっていっている。

だが、

（破滅の呪文を覚えれば、親父に一気に近くなるんだけどな。オレの中の闇の力って、どれくらいなんだろう…）

シュウ本人、己の中の闇の力がどれ程なのかまでは感じられていなかった。

己の中に闇の力があるということは、もう充分に感じている。

そのおかげで、誰が闇の力を持っていて、それがどれ程のものなのかも感じることができる。

でも、己の中のそれがどれ程の大きさまでかは分からなかった。

（レオ兄はオレが母さんの子供だって分かるくらい強い闇の力持ってるって言ってたけど、まだ親父を超えるには程遠いのかなあ…）

全身を洗い終えたシュウ。

脱衣所に出て、身体を拭く。

（霜月島に修行に行ってる間、親父がいねーから安心して闇の力のこと話せるし、母さんに聞いてみよう。とりあえず今は…）

と、にやけたシュウ。

「フィーバァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

ドカァァァンっ！

とバスルームからライダーキックで飛び出し。

シュウの荷物をまとめ終わり、ベッドで待っていたカレンに食い付いた。

「…デ…デリシャスっ……！」

翌朝。

「んじゃ、いってきまあああああああああああああああああああっ！！」

シュウはリュウ・キラと共に、ミーナの瞬間移動で霜月島の山へと修行に向かって行った。

第１５０話　長男、今年も修行へ（後書き）

１９日の２０時３分ごろにメールくださった読者さまへ。
おー、やっぱり作者さん側でしたか！　お互い執筆頑張りましょうね（。＋・、ω・´）シャキーン☆
それで、執筆するときにおいての悩み…ですか。
うーん、色々ありますが……。
執筆のしすぎで疲れたときに金縛りに合って、その時に幻覚を見たり幻聴を聞いたりするのが結構怖いです。
あれ、そういうことじゃない（＊´Д`）？？

第１５１話　長男、修行中

葉月島から2つ島を隔てたところにある霜月島には、去年リュウがシュウの修行用にと買った山がある。
シュウは今年もそこで修行のため、ミーナの瞬間移動でやって来た。

去年はサラやリン・ラン、レオンなどが付き添っていたが、今年はキラ一匹だけが付き添いだ。
初日の今日はシュウに修行のメニューを教えるため、リュウの姿もあった。

夜になったらキラは帰り、カレンがやって来る。
朝になったらカレンは帰り、キラがやって来る。
カレンがやって来ている間以外、シュウは修行の時間になりそうだった。

去年と同様、広葉樹が葉を赤や黄に染めている。
葉月島は真夏だが、霜月島はすっかり秋だ。
山の中が故に、気温はまるで冬のような寒さ。

そして去年と同様、リュウの周りにオオカミ型モンスターが寄ってきた。

「おー、おまえら久しぶり～」

とリュウの周りにいるモンスターたちの頭を撫でるシュウ。
名を大きい方からギンタロー、ギンジロー、ギンサブロー、ギンシロー、ギンゴローという。

どうやらリュウをボスと思っているらしく、リュウによく懐いている。
彼らの役割は、きっと今年もウォーミングアップと体力作りを兼ねて険しい山道をジョギングするシュウに噛み付くことだろう。
（去年、少しでもオレのスピードが落ちようものならば噛まれたよな…）
と思い出して苦笑してしまうシュウ。
「んじゃ、早速ジョギング行くぞシュウ。今年は去年のコースを3周な」
「――はっ！？」
耳を疑って声を裏返し。
走り出したリュウの背が見えなくなるまで突っ立っていたら、早速ギンタローに尻を噛まれた。
「ふぎゃあああああっ！！」
と慌ててリュウを追い駆け走り出したシュウ。
（こ…今年も嫌でも強くなれそうだぜっ……！）
なんて思って、複雑な気分で苦笑した。

修行5日目。
視界が悪い真っ白な霧の中での剣術の修行中、シュウの叫び声が響く。

「ふぎゃあぁあっ！！」

「む！？　シュウっ…！？」

野生に戻った気分でシュウの修行に付き合っていたキラは、はっとして木刀を振るうのを止めた。
霧のないところへとシュウをずるずると引っ張っていく。

そして目を丸くする。

「おおっ、シュウの腕が有り得ない方向に曲がってるぞーっ！」

「ちょ、母さっ……！！」

「シュウおまえすごいぞーっ！　どうやって曲げたのだっ？」

「あっ、あんたに折られたんだよっ！！」

と突っ込んだシュウ。
腕を正しい位置に戻し、治癒魔法を掛けまくって治す。

（死ぬ…！　マジ死ぬっ……！！）

と思った。
どの修行よりも、この真っ白な霧で視界が遮られてしまう中での

剣術の修行が一番恐ろしかった。
最強の中の最強モンスターで、しかも天然バカのキラを相手にしているから。

「シュウ、おまえは私の攻撃が見えるようになってきたようだが…。このように相手の姿が見えないところでは滅法ダメダメだな。リュウならばどんなところでも相手の攻撃が読めているぞ？」

「わ、分かってるよ。オレだって、母さんの殺気とか肌で感じて少しずつ攻撃読めてきてたとこ…」

「そうか」

と笑い、また霧の方へと向かっていくキラ。
シュウが呼び止めた。

「ねえ、母さん。そういやオレ、訊きたいことがあったんだけど」

と、ふと思い出す。

「む？　なんだ？」

と、キラが振り返ると、シュウが続けた。

「オレさ、よく分からないんだよ、自分の闇の力が」

「まだ己がそれを持っているということを実感していないのか？」

「そうじゃないよ、オレが闇の力を持ってるってことはよく分かった。でもさ、その闇の力がどれ程の大きさなのかまでは分からねー

んだよ」

「…そうか」と、キラが再びシュウに背を向ける。「鈍いからな、おまえは」

「う…、放っておいてくれ」

シュウ、苦笑。

数秒間を置き、キラが訊く。

「……己の中の闇の力がどれ程の大きさなのか知って、どうする気だ？」

「いや、ただちょっと気になって…。オレがもし今、破滅の呪文を使ったとするだろ？　そしたらオレ、親父のこと超えられる？」

「無理だな」

「ああ、うん、やっぱりぃ～？」

と分かっていながらも、がっくりと肩を落としてしまうシュウ。

そんな息子を尻目に、キラは心の中で続ける。

（だが、おまえの闇の力はハーフとは思えぬほど急速に増大している。私の血を継いでいるが故に、まるで純粋なブラックキャット並だ。加えて、ここへ修行に来てからというものの魔力もだ。破滅の呪文を使うのならば、リュウが年々強くなっているとはいえ超えるのはそう遠くないだろう。だが……）

急に黙り込んだキラに、シュウが首をかしげた。

「母さん…？」

「…シュウ、おまえは剣術とリュウから受け継いだ、火・水・地・風・光の力で強くなれ」

「えっ…？」シュウは困惑した。「そ、それってどういう意味？」

「まんまだ」

「や…闇の力を…、破滅の呪文を使うなってこと？」

キラが数秒、間を置いてから答えた。

「そうだ。私はおまえに、破滅の呪文を教えぬ」

「――えっ…！？」

「…さあ、剣術の修行の続きを始めるぞ」

そう言って再び白い霧の中へと向かおうとしたキラの腕を、シュウが慌てて引っ掴む。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ母さんっ！！」

シュウに顔を見せようとせず、俯いているキラ。

声を低くして言う。

「私は教えぬ。おまえは破滅の呪文など覚えなくて良いのだ」

「今は訊こうとしねえよ、今はっ…！　だけどオレだっていつかは教えてもらう気でいた！　母さんだっていつかはそういう覚悟でいたんじゃねーのかよ！？」

首を必死に横に振るキラ。

声をあげる。

「教えぬったら教えぬ！　絶対に教えぬ！　私は親として失格かもしれぬ！　だが、絶対に教えぬ！　おまえにも、ジュリにもっ……！！」

「母さんが親父のこと気遣う気持ちは分かるよ！　でも――」

「私はっ…！」シュウの言葉を遮り、キラが続ける。「私はおまえたちの母親で、リュウの妻である以前に、リュウの飼っているブラックキャットだ！　リュウのペットだ！」

ブラックキャット――猫科モンスターで、最強を謳われるうちの一種。

野生の場合は懐き辛いものの、主と認めた者を生涯忠実に愛してしまうもの。

一部には例外もいるが（マリアなど）。

「もちろん私はおまえたち子供が大切だ！　とてもとても、大切だ！　かけがえのない宝物だ！」

「じゃあ――」

「だがっ…！」と、再びキラがシュウの言葉を遮った。「だがっ、だがっ…！　私にとって、主の――リュウの幸せが何よりも大切だ

！　それがっ…、それが私たち猫モンスターというものだ！！」

ペットとなった猫モンスターは基本的に、飼い主が何よりも大切。
そして主の幸せが、己の幸せに繋がる。

そのためならキラは命だって惜しまない。
シュウが産まれる前、キラが己の身が消滅すると分かっていても
リュウを守るために破滅の呪文を使ったのがその証拠だ。

キラが顔をあげ、シュウの顔を見つめる。

「私はよく、娘たちのことでリュウと揉めるな？　リュウの我侭で
身勝手さに、娘たちは不幸だと、私はリュウとよく喧嘩するな？
娘の幸せを考えてやれと、喧嘩するな？」

「う、うん…」

「それと同じように、私は息子のおまえを助けてやりたい…！　お
まえの幸せのため、おまえが困り果てたときは、助けてやりたいと
思っていた…！　だが…、ダメなのだ。ダメだったのだ！　これだ
けは訳が違ったのだ！　分かるか、シュウ……！？　分かるか！？」

キラの大きな黄金の瞳に涙が浮ぶ。
シュウの黒々とした瞳が困惑して揺れ動く中、キラが続けた。

「おまえとジュリは闇の力を持っているのだ！　生涯私には及ばな
いものの、破滅の呪文を持っているのだ…！　それを使ってしまっ
たら、リュウを恐怖のどん底に陥れるのだ！　また、恐ろしくて恐
ろしくて仕方のないところへと、リュウを陥れてしまうのだ！」

キラの手がシュウの胸倉を掴む。
その華奢な手からは想像も出来ないような力に、シュウの身体が引っ張られてよろめく。

「良いか、シュウ…！？　私は主（リュウ）の幸せを崩させぬ！　私はもう、主（リュウ）を恐怖のどん底に落としたりはせぬ！　もう、二度とだ……！！」

零れ落ちたキラの涙。
鋭くシュウを見つめるその黄金の瞳は訴えている。
主（リュウ）の幸せを阻もうとするならば、たとえこの息子（シュウ）でも許さぬと。
キラの頬を伝う涙を見ながら、シュウは小さく溜め息を吐いた。

「分かったよ…母さん、分かった…。オレ、破滅の呪文もう訊かねえから……」

そう言ったシュウの顔を数秒の間見つめたあと、キラが頷いた。

「…すまぬ、シュウ。こんな母親で……」

そう小さく呟き、シュウから手を離したキラ。
白い霧の中へと入って行った。

その細い背を見つめながら、シュウは心の中で続ける。

（もう訊かねえから、母さん…。訊かねえから……）

シュウは誓う。

（母さん…、あんたからは……。あんたからは訊かないよ、母さん）

シュウの頭の中に、タマの顔が思い浮かぶ。
純粋なブラックキャットであるタマの顔が。
破滅の呪文をもちろん知っているであろう、タマの姿が。

（でも…、母さん。オレ、絶対に破滅の呪文覚えたいんだ……）

それがあれば、目標である『親父を超えること』を近いうちに叶えられる気がして。
同時に、

（親父が初めてオレのこと『強くなった』って、絶対に褒めてくれるから）

リュウがいつ褒めてくれるのか、シュウはときどき考えていた。

超一流ハンターになったときは褒めてくれなかった。
期待していたのに。

今年の秋のギルドイベントで、もし一撃を与えられたときはどうなのだろう。

（もしかして、褒めてくれるのかも。でも…）

もし褒めてくれなかったら？

シュウは考える。

（そのとき褒めてくれなかったら、親父はオレが親父を超えたとき

しか褒めてくれねえってことだ…。そしたら、オレは……）

キラの声が、白い霧の中から聞こえてくる。

「シュウ、早く来い。リュウに一撃を与えたいのだろう？」

「うん、今行く」

と返事をして、シュウはキラに続いて白い霧の中へと入って行き、修行を再開した。

（とりあえずオレは、ここで鍛えて鍛えて鍛えまくって、今の力だけで親父に一撃を与えてみせる――！）

（あっ、でも夜はイトナミタイムね）

大自然の中、不自然に置かれた猫足バスタブで入浴を終えたシュウを、テントの中からカレンが呼ぶ。

「ヘイ、カモォォォォンっ…♪」

「フィーバァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！」

と素っ裸でカレンに飛び掛ったシュウ。

ドガァっ！

とテントに蹴りを入れてしまい、

「ぎゃあああぁぁあぁぁあっ！！　テント壊れたあぁぁあああぁぁああぁぁあぁぁあぁぁあっ！！」

イトナミどころじゃなかった。

第１５１話　長男、修行中（後書き）

一部の読者さまに勘付かれたので、お知らせしておこうかと思います。
このＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯの最終話そう遠くないです。
作者がぶっ倒れたり逝ったりしない限り、来月中には完結する予定です。

第１５２話　今年も無人島へ　～前編～

修行最終日。
去年と同様、朝からやって来て、シュウの修行の様子を見に来たリュウ。
キラとの剣術の修行がやってきたとき、あえて白い霧のないところでやらせた。
その成果を見るために。

修行前はキラの攻撃を目で見てから防御するが故に、間に合わずよく怪我をしていたシュウだが。
キラの攻撃を反射的に避けるようになっていた。

（まあ、そうなるわな）

とリュウは思う。

（この天然バカキラ相手じゃ、そうでもならねーといつ命落とすか分かんねーし）

つまり、生きようとするシュウの自己防衛本能が必死に働くようになったということだった。

それに、修行中は木刀だったが今回は真剣。
ますます過敏に反応してしまうことだろう。
本気で命の危機を感じているのか、少しシュウの顔が蒼白している。

（それにしても…）

と、リュウは心の中で微笑んだ。

（本当、ガキの成長は早いもんだぜ）

シュウが剣を振るい、キラが避ける。

シュウの剣圧――シュウが振るった際に起きた風は刃のように飛んで行き、十数メートルに渡って山の木々を倒していく。

おまけに、修行前はどんなに精一杯力を込めてもキラに届くことなく、掻き消されてしまっていた魔法が、今はキラの身体を包み込んでいる。

それは大幅に魔力が増加したことを意味していた。

とはいえ、キラは無傷だが。

それは仕方ないと、リュウは思う。

（この俺だって、魔法じゃキラに切り傷一本しか食らわせられねーんだから）

おまけに、モンスターというものは普段戦わなくたって年を取るたびに力が増す。

キラに魔力が敵う者がいるとすれば、亡くなったキラの父親――ポチだけだろう。

（だが、物理攻撃となれば違う。キラは物理的な力では俺や師匠に及ばない。義父上だったら話は違うが、キラは女だからな。よって、俺の血を引いているシュウは――）

リュウの目の前、刃と刃を交差させ、鍔迫り合いになるシュウとキラ。
修行前はやはりシュウが押されていた。

だが、十秒後。
キラの足がじわりじわりと後方に押されて行き、地に爪痕がついて行く。

両手で剣の柄をしっかりと握ったシュウ。

「ぬぅぅ…おぉおぉおぉおぉおりゃあぁぁあぁぁあああぁぁぁぁぁぁあぁぁあっ！！」

雄叫びを上げると共に、力いっぱい剣を振り切った。
その際に、キラの頬に出来た切り傷。

「ふにゃっ！」

とキラが後方に飛び退り、頬の血を手の甲で拭う。

（――うわ、ヤベっ！）

顔面蒼白したシュウ。
恐る恐るリュウに顔を向けた途端、

ゴスッ！！

と頭に拳骨を食らい、大地に熱い接吻をかました。

「うぐうぅっ…！」

「この、バカが！！」

とシュウに怒鳴り、キラを抱っこするリュウ。
その切れた頬に治癒魔法を掛けてやりながら、シュウに言う。

「おまえの力は分かった。さっさと荷物まとめろ。帰るぞ」

「う、うんっ…」

と承諾し、頭と顔に治癒魔法を掛けてからテントのある方へと向かっていくシュウ。
途中、リュウに振り返った。

「な…、なあ、親父っ……？」

「あ？」

「その…さ…、オレ……」

強くなった？

と心の中で訊いたシュウ。
リュウの返答が怖くて、口に出して訊けなかった。

「な…、なんでもない……」

と、再び背を向けたシュウに、キラが言う。

「１０日前より大分強くなったぞ、シュウ」

「えっ？」と、シュウが再び振り返る。「ほ、本当っ？」

「うむ。何よりも」

と、キラが笑った。

シュウから顔を背けているリュウの顔見ながら続ける。

「リュウのにやけた顔がそれを物語ってるぞ」

「うるせーよ」

と、リュウにデコピンされ、

「にゃっ！」

と声をあげたキラ。

額を擦りながらシュウに笑顔を向けた。

「良かったな、シュウ？」

「う、うんっ…！」と笑顔になったシュウ。「イヤッホォォォォォォォォイっ！！」

スキップしながらテントの方へと駆けて行った。

シュウの姿が見えなくなったあと、リュウが小さく溜め息を吐いた。

「どーもあいつって自信がねえよなあ。修行の成果なんて一目瞭然じゃねーか」

「おまえが自信家すぎるのだ…」キラ、苦笑。「というか、おまえが褒めてやらぬからだぞ、リュウ？」

「ふん、まだ褒めるに値しねーよ」

「にやけてたクセに」

「うるせ」と再びキラにデコピンしたあと、リュウが続ける。「あいつ、剣術、魔力の他に防御力や敏捷さも大幅に成長したな」

「うむ。海面走るのも余裕だと思うぞ」

「あいつはとうの昔に海面走れんだよ。キラの敏捷性継いでんだから。あいつ自身自信がねえもんだから、走れねえと思ってるかもしれねーが」

「うむ。睦月島ギルドのＣＭの際、必死になったが故に走っていたのが何よりの証拠だな」

「ああ」

と頷いたリュウ。

数秒後、ぱちぱちと瞬きをしながら訊いた。

「あれ、今年はいつ無人島に行くんだっけ？」

「明日だぞ」

翌日。
ミーナの瞬間移動で無人島へと遊びに来たシュウ一同。
今年はリンク４０歳の誕生日パーティーも兼ねて来た。

（そういえば、今年はまだ来てなかったな）

砂浜の上、その場でぐるりと回って辺りを見回すシュウ。
シュウが生まれる前にリュウが買ったらしいこの島へは、毎年遊びに来る。
海が美しく、ときどきイルカが姿を見せたりもする。

（いや、うん、去年はサメが現れてオレ食われかけたんだけどね）

と苦笑しているシュウの後頭部に、リュウのチョップが入った。

「いって！　な、何だよ、親父っ…！」

「早く服脱いで海パンになれ」

と、リュウ。
シュウが皆を見てみると、妊婦のサラを除いて水着姿になっていた。

続いてシュウも脱ぐと、リュウが続けた。

「今年はおまえも勝負すんぞ」

「は？　なんの？」

「毎年俺と師匠が勝負してるやつ」

「そ、それって…」シュウの顔が引きつる。「『かけっこ勝負ＩＮ海面上』のことすかね……！？」

つまり運動会の徒競走を海の上でやるようなものだ。

足の速くなる魔法を掛けるとはいえ、バケモノにしか出来ない勝負である。

「おう。おまえ、もう走れるだろ？　睦月島ギルドのＣＭに出たとき走ってたし」

「あ、あれはちょっと夢中になってて…」

「走ろうと思えば走れるってことだ。俺も師匠もおまえの足の速くなる魔法で勝負してやっからよ」

「みんなオレの？　親父の魔法かけられちゃ不利すぎるが、それならマシか…」と勝負を引き受けることにしたシュウ。「な、何か賭けたりすんの？」

と恐る恐る訊いてみた。

「そうだな…、今年は勝った奴にそれぞれ５００万ゴールド出すか」

「って、たけえええええええええっ！！」

「おまえだってもう超一流ハンターなんだからそれくらい余裕だろ」

「は、払えることは払えるけどっ…！　も、もうちょっと安くしてくんねえっ？」

「あぁ？　最初から負ける気満々だな、おめーは」

「だ、だってこんな――」

バケモノ相手じゃ無理。

と言おうとしたシュウの言葉を、リュウの溜め息が遮る。

「何でそう、おまえには自信が足りねーんだ。そんなんで２ヶ月後、この俺に挑む気か？」

２ヵ月後――１０月には、ギルドイベントで『全島ハンター・各階級別トーナメントバトル』が待っている。

シュウは超一流ハンター級クラスに参加し、リュウと戦うことに。

超一流ハンター級では、間違いなくリュウかグレルが優勝。

日々ハンターとして働いている分、リュウの方が優勝する可能性が高いが。

シュウにとって、そんなことはどうでも良かった。

そこでリュウと戦って、そしてリュウに一撃を与えるのが目標だ。

（どうしてオレって、すぐこう自信を無くしちまうんだろう。いやまあ、こんな親父を見て育ったから仕方ないよ、なんてマジすーげーフォローがほしいが…。自信を持て、オレ。自信をっ……！！）

と、気合を入れたシュウ。

（トーナメントでは親父に一撃をっ！　そして今は『かけっこ勝負ＩＮ海面上』でバケモノ２匹を負かしてやるっ！！）

リンクがどこからともなく出してきた赤いハチマキを、しかと頭に結んだ。

「お？　ヤル気じゃねーか」

と短く笑ったリュウ。

リンクから白いハチマキを受け取り、頭に結ぶ。

リュウの額の部分に来るところには、『キラ命』と文字が。

それを見たシュウ。

「うわ、何それ」

と言って己の頭からハチマキを外し、マジックで『カレン命』と書き、頬を染めながら再び頭に結んだ。

「パクリかよ」

「いーの」

ぐふふ、と笑ったシュウ。

にこにことしながらカレンに顔を向けた。

「見て見てカーレンっ♪　どう？」

「ど、どうって…（何か意味あるのかしら、それ…）」カレン、苦笑。「……頑張ってね、ダーリン？」

「おうっ！」

と張り切るシュウの傍ら、グレルも頭にハチマキを結ぶ。
そこに書かれている文字、『マナ命』。

リュウの顔が引きつる。

「ちょ、師匠…！？　何であんたマナの名前書いてんすかね……！？」

「何でって、マナは将来オレの嫁さんだからだぞーと♪」

「まだそんなこと言って――」

「ま、まあまあまあっ！　いーじゃねーかよ親父っ！」

とシュウは慌てて口を挟んだ。
リュウにマナとグレルのことを知られるのが恐ろしい。

「良くねえ！」

とリュウがグレルと口論になっていると、響いてきたマナの声。

「ねえ、まだ…？」

声のした方に振り返るシュウとリュウ、グレル。
すると、海の上にマナがぷかぷかと浮いていた。

普通のものよりも最高速度が速く作られているハンター用水上バイクに乗り、ハンド型メガホンを手に握っている。

操縦者はリンクのようだ。

リンクがマナの手からメガホンを取り、浜にいるシュウたちに向かって言う。

「これなら本気出るやろ～？　コースはおれたちが案内してやるから心配すんなや～」

「は…？」

と首をかしげたシュウだったが、すぐにどういうことが気付いた。

いつの間にかレオンの操縦する水上バイクの後ろにカレンが、ミーナの操縦する水上バイクの後ろにはキラが乗って、浜から遠く離れて行っている。

よく見ると、カレンとキラの手にもメガホンが。

サラがシュウたちに駆け寄ってきて言う。

「囮取られたら通常より数倍早くなると思ってさ♪」

「ああ、たしかにな」とキラの方を見てうずうずとした様子のリュウ。「あそこで俺の可愛い黒猫が俺を誘惑してると思うと、捕まえたくて仕方ねえ」

スタート地点として浜に引いた線のところに立った。

「オレも嫁さんの誘惑には答えなきゃだぞーっと♪」

と続いたグレルも、スタート地点に立つ。

「んな通常の数倍も速くなるかよ…」

と苦笑したシュウだったが、

「アナタがんばって～っ♪」

とメガホンを通して聞こえてきたカレンの声を聞いた瞬間、リュウとグレルの間に立っていたのだった。

第１５２話　今年も無人島へ　～前編～（後書き）

２２日の２２時１２分ごろにメールくださった読者さまへ。
ご、ご、ご、ごめんなさい、お返事遅れました…。
そしてメール届くの遅っｗ　何書いたやつだろう…ｗ
あ、ＰＣからでも携帯からでもどっちでもおｋですよ。

それから、え？　３００話くらいまで引き伸ばす？
ないです、ないないｗ　本当に来月で最終話迎えます。

第１５３話　今年も無人島へ　～後編～

８月後半。
今年も無人島へと遊びにやって来たシュウ一同。

砂浜に引かれた線のところに、左からリュウ、シュウ、グレルと並んでいた。
それぞれの頭に巻かれたハチマキには文字が書かれている。

シュウは『カレン命』。
リュウは『キラ命』。
グレルは『マナ命』。

バカ夫婦だったりバカップルであることを訴えたいのか何なのか知らないが、とりあえず最愛の者の名が書かれている。

これから行われるのは『かけっこ勝負ＩＮ海面上』。
つまりは徒競走を海の上で行うようなものだ。

浜から人間の肉眼で見える程度に離れた海の上には、通常のものよりも最高速度が速く作られているハンター用水上バイクが３つ浮いていた。
左から操縦者はミーナ、レオン、リンク。

その背にはシュウとリュウ、グレルの最愛の者が背をくっ付ける形で乗っていた。

ミーナの後ろにはキラ、レオンの後ろにはカレン、リンクの後ろにはマナ。

その手にはハンド型メガホン。

彼女らを囮にしてしまえばシュウたちの足はますます速くなるだろうと、サラが思いついてやらせたらしい。

「うん、速くなるなっ…！」

と納得したシュウ。

己とリュウ、グレルに足の速くなる魔法を掛ける。

それを確認したあと、サラがピストルを天に掲げた。

「よ～～～いっ」

気合を入れるシュウとリュウ、グレル。

パァンっ！

とピストルが鳴った瞬間、雄叫びをあげながら海へと向かって飛び出した。

「うおおぉぉおおおおおおおぉぉぉ

ちゃんと海面を駆けている。

今のところ、順位は上からリュウ、グレル、シュウ。

それを見たキラが、にこにことして言う。

「うんうん♪　さっすが私の主だぞーっ！　グレル師匠はどうか最後までわからぬが、シュウには余裕で勝つぞ♪」

メガホンを通して言ったその台詞は、隣を走るカレンの耳にもよく聞こえていた。

「ちょっと、お義母さま？」と、キラの顔を見て眉を吊り上げたカレン。「勝負は最後まで分からないのですわっ」

「おい、メガホンを通すなカレン。私の猫耳にはキンキンするぞ…。それに、やっぱりシュウはリュウに勝てぬと思うぞ」

「そんなことありませんわっ！！」

と声をあげたカレン。

キラが思わず猫耳を塞ぐ中、大きく息を吸い込んだ。

そしてシュウに向かって絶叫する。

「ヘイ、カモオオオ

ァァァァァァァァァァっ！！！」

まさかの加速。
グレルを抜かし、リュウの傍らに並ぶ。

それを見てむっとしたのはマナ。
メガホンを口に持っていく。

「グレルおじさん、早く来て…」

それを聞いたグレルも加速。

「嫁さんに誘われちまったぞーっと♪」

シュウとリュウを抜かしてトップに。
ここでむっとしたキラも、口にメガホンを持って行って声をあげる。

「おい、私の愛する主！」

返って来る返事は、キラの猫耳に届く。

「何だ、俺の可愛い黒猫！」

「そっ…そのっ……！」

「おう？」

「い、1位だったら、こ、今夜のイトナミ…」

「今夜のイトナミ…！？」

「そ、そのっ…！　あ、あああ、朝まで良いぞっ！」

「お…おおおっ！！」と目をきらきらと輝かせたリュウ。「まーじでええぇぇぇ

ふん、と鼻を鳴らしてカレンが答える。

「いいえ、大したことは言ってませんわよ。ただ、お義父さまが子供だと言っただけですもの♪」

「んだとコラ！　生意気なんだよ、てめーはよ！」

「あら、本当のことですも――」

「乳にパッド何枚も入れてんじゃねーぞ、この貧乳が！！」

それ禁句。

ふと背に手を持っていったカレン。

マシンガンを取り出し、リュウに向けていざ構え。

「なぁぁぁぁんですってえぇえぇえぇ

「カレンちゃんナイス…」

とマナがにやける一方、頭を抱えるキラ。

「ふっ、ふにゃあぁぁあぁぁあぁぁあっ！　リュウがあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあっ！　カっ、カレンっ！　何するのだっ！」

「うふふ♪　シュウ、がんばってぇ～っ♪」

「むうぅぅぅっ！」

と頬を膨らませたキラ。

むきになって声を上げる。

「リュウ！　優勝したら今夜のイトナミは生だぞっ！！」

「お…、おおおおおおお！！」

と再びシュウとグレルを抜かすリュウ。

「ああっ！」

と声をあげたカレン。

キラに続いてむきになる。

「シュウ！　優勝したら、あ、あたくしも今夜は避妊しないでしたいのですわっ！！」

「え…、えええええええ!?」

と、赤面しながらリュウに追いつくシュウ。

顔を見合わせるカレンとキラ。

その間に火花散る。

キラ、カレンと赤面しながら交互にメガホンで絶叫。

「リュウ！　こ、ここ、今夜好きなだけ挟んでやるぞ！」

「ちょ、お義母さま…!?　シュ、シュウ！　今夜好きなだけ挟…
…ゴホゴホっ！　な、何でもないのですわっ…！」

「リュウ！　今夜、な、な、中出ししても、よ、よ、よ、良いぞお
おおおおおおおおっ!!」」

「お、おおお、お義母さま!?　あ、あたくしだってぇっ…！　シ
ュウ、今夜、な、な、な、ななな、中に出してえぇぇえええぇぇぇぇ
ぇぇえぇぇぇぇ

息を切らして興奮している。
鼻の穴を広げて興奮しまくっている。
絶対かけっこ勝負だということを忘れている。

「ね、ねえ、お義母さまっ？」

「な、なんだ、カレンっ？」

「な、何だか、かけっこ勝負の雰囲気じゃないのですわっ…！」

「う、うむ。このままじゃ掴まって犯される雰囲気だぞっ…！」

「と、特にバケモノの中のバケモノであるお義父さまはすぐにでも追いついて来て――って、来ましたわよ、お義母さまあぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁぁっ！！」

だんだんと近づいてくるリュウに、顔面蒼白しながら絶叫したカレン。

「ふっ、ふにゃあああああああっ！」

このままじゃ掴まる！

と、水上バイクから飛び降りたキラ。
己の足で海面を走り出す。
その方が速いから。

リュウが興奮に息を切らし、にやけながら追いかけてくる。

「オイ、待てよ俺の可愛い黒猫！　なあ、さっき何て言ったっ？

なあなあなあ！」

「ふにゃあああああっ！　ふにゃあああああああっ！　お、おおお、犯されるうぅぅぅうぅぅぅうぅぅぅうぅぅぅうっ！！」

「今夜のイトナミこれから始めようぜっ？　なあ、生なんだろっ？　中出ししてほしいんだろっ？　朝までしてーんだろっ？　え！？」

「ふにゃあああああっ！　ふにゃあああああああっ！　や、ややや、やっぱりダメなのだあぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああっ！！」

折り返し地点を曲がったと思った途端、キラがコースから大きく外れて逃げ出す。

それを追っていくリュウ。

「まあ、戦線離脱っ…！？」と瞳を輝かせるカレン。「このままならシュウが優勝ねっ……！」

と確信した。

が、マナが口にメガホンを持っていく。

「させないよ、カレンちゃん…」

そう言うなり、シュウ目掛けて隕石を召喚するマナ。

振ってきた隕石を、

「ナ・マ・で・イ・ト・ナ・ミィィィ

そのイトナミ魂、本物。

じわじわじわじわとレオンが操縦する水上バイク――というかカレンに近づいて行く。

「シュウっ！　このままゴールよゴールっ！　浜まで戻って優勝よっ！　そしたら、さ、さ、さ、さっきあたくしが言ったこと、今夜していいからっ…！」

「ナマナマフィーバァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァっ！！！」

と、カレンとレオンの脇を通り過ぎ、浜へと猛ダッシュしていくシュウ。

マナが慌てたように言う。

「グレルおじさん、兄ちゃんよりも先にゴールしてっ…！」

「了解だぞーっと♪」

と、グレル。

今まで力を抜いていたのか何なのか。

人間の肉眼では確認出来ないような足の回転でシュウを追いかけていく。

あっという間に抜かされた水上バイク。

カレンが狼狽して絶叫する。

「きゃあああああっ！　きゃあああああああっ！！　シュウっ！！　早くゴールしてえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

ゴールの浜では、リンとランがテープを持って待っている。

シュウとグレル、どっちが先にゴールするのか。

カレンとマナは必死になって声援を送る。

「シュウっ！　がんばってえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

「グレルおじさん、がんばって…！！」

浜にいるリン・ランも声援を送る。

「兄上がんばってなのだあぁぁぁぁあああぁぁぁぁあああぁぁぁぁあぁぁぁあっ！！」

さらにミヅキ、リーナと続く。

「シュウっ！　優勝できるよ、優勝っ！」

「おおおおっ！　シュウくん、まさかの優勝すんでコレはっ！」

「うっそ、マジで兄貴だよ…！」

とサラが目を丸くした。

この時点で、グレルはシュウのたった１ｍ後ろにいた。

もうシュウは追いつかれる寸前だ。

だが、このときシュウはゴールテープの一歩手前にいた。

両腕をあげ、瞳を輝かせるシュウ。

（生っ……！！）

今、ゴールテープを――、

「中出しいいい

コースから大きく外れていたのに、シュウがゴールする寸前に脇の方から現れてゴールテープをぶっ千切って行ったリュウ。
止まることなく、キラを抱えたまま無人島の奥の方へと駆けて行って、まだ戻ってこない。

「まあ、いいじゃない？　シュウ。あなた、2位だったんだし！」

「そうだけどさ、カレン…」

「あのグレルおじさまより速かったのよ？　シュウ？　すごいじゃない！」

「そ、そうだけど……」

と口を尖らせ、ちらりとカレンの顔を見るシュウ。
シュウの胸中を察し、カレンは赤面した。

「も、もうっ…！　そんなに避妊しないでしたいのっ……！？」

「うん」

と、はっきりと頷くシュウ。

「わ、分かったわよっ…！　こ、今夜ねっ……！」

とカレンが言ってやると、ぱっと顔が明るくなった。

「まーじでぇぇぇぇ？」

ぐふふ、と笑いカレンを膝の上に抱っこする。
黒猫の尾っぽは嬉しそうにパタパタと振られている。

「まったくもう、シュウったら…！　やっぱりお義父さま似ねっ…
…！」

と呆れたように言うカレンだが、満更でもなさそうだ。

「それにしても」と、サラが溜め息を吐いた。「親父の奴、まさか無人島で朝までイトナミする気かね」

「ああ、まったく戻ってくる気配のないこの様子だとそうだな…」

と、苦笑したシュウ。
無人島を見渡しながら、ふと感じた。

（ここ、オレと親父が戦う場所になる気がする…）

人が居なくて広いこの場所は、思えばリュウとの戦闘に向いていた。

「兄貴？　どうかした？」

「いや、何でもねえ」

と、サラに顔を戻したシュウ。
もう大分大きくなっているサラの腹に目を落とした。

「来月だな、サラ。産まれるの」

「うん、来月だよ。兄貴がオジサンになるの」

「う、うるせーぞ…」

「あはは」

と笑ったサラ。

自分の腹を撫でて微笑む。

「ママになるんだよね、アタシ。どんな子が生まれて来るのかなあ…」

希望としては、

（レオ兄似の可愛い男の子がいーなっ♪）

第１５３話　今年も無人島へ　～後編～（後書き）

昨日の２１時３４分ごろにメールくださった読者さまへ。
例のメール確認しますたｗ　あのメール届いてなかったんですね（汗）

ほいでハーニャンですが。
本当に続編等は考えてないですよ。
『最終話』と、おまけとして『シュウたちのその後』を同時にＵＰしようと思ってます。

第１５４話　次女、出産

９月半ばの、とある昼下がり。
シュウとリュウ、レオン、グレルは仕事。
屋敷の中にはカレンとキラ、シュウの弟妹、ミーナとリーナ、それからミヅキが居た。

リビングに集まり、カレンが黄色い声をあげてはしゃいでいる。

「きゃあああぁあぁぁぁぁぁぁあっ！！　かぁぁぁぁぁぁぁわいいいいいいいいいいのですわあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあっ！！」

何が可愛いって、ミヅキ作・レナ人形が。
本物のレナをそのまんま小さくしたようなそれは、毎月オークションで売っているシュウ人形よりも力作だと、ミヅキは言う。

「だからシュウドールよりも完成までに時間掛かっちゃったんだけど」

「ほおぉ」と、キラが声を高くし、レナ人形を手に取った。「本当にレナそっくりだぞ。そのまんまだぞ」

「ぼくの持っているドールの中で、一番大切な子です」

「そうか」

と笑ったキラ。
レナに顔を向けた。

「良かったな、レナ？」

「う、うんっ…！」

とレナがはにかんだ。

「おまえの将来の夢は、ミヅキと結婚することか？」

「えっ？」と赤面したレナ。「…う…うんっ……！」

と頷いた。

ミヅキが微笑んで続ける。

「それから、いつかぼくが自分のドールショップを持ったら、そこで一緒に働くことなんだよね？　レナ？」

「えへへ」と笑ったレナ。「うんっ…！」

とまた頷いた。

「ええなあ、レナちゃん。もうそんなことミヅキくんと約束してるんや」と、リーナ。「ま、うちもジュリちゃんと結婚するけどな！」

「うむ！」と頷いたのはミーナだ。「おかんがキラと暮らせるように、頼んだぞリーナっ！」

「任せぇや、おかん！　うちがジュリちゃんと結婚して、絶対この屋敷に住まわせてやるからな！」

「おおーっ！」とキラが声をあげた。「ミーナと一緒に暮らせるなんて、楽しみだぞーっ♪」

「楽しみだぞーっ♪」

とはしゃぐキラとミーナ。

その傍ら、ユナが溜め息を吐いた。

「はあーあ、いいなあ。あたしの将来の夢は『パパよりかっこいい人と結婚すること』なのに、そういう人全然いないんだもん」

「それはそうよ、ユナ♪」と、ミラ。「だって、パパはこの世一かっこいい男性なんですものっ♪」

「じゃー、夢叶えられないね、あたし」

「残念ねえ、ユナ。私は『パパと結婚すること』が夢だから叶えられるけーー」

「や、無理だからお姉ちゃん」

と、ミラの言葉を遮ったのはサラだ。

腹を擦りながら続ける。

「レオ兄と結婚したアタシの次の夢は、『レオ兄似の可愛い男の子産むこと』かなあ」

「はいはいはい！」とリン・ランが手をあげた。「わたしたちの夢は、『兄上と不倫すること』ですなのだ♪」

「リンちゃん、ランちゃん？」

とにっこりと笑うカレンに、リン・ランは顔を引きつらせる。

「ご、ごめんなさいです…なのだっ…。じゃ、じゃあ、魔法学校出たら兄上と同じ『ハンターになること』にしますなのだっ……！」

「あら、素敵な夢ね♪」

「は…ははは……（カレンちゃん怖いのだ…）」

マナが口を開く。

「あたしの夢は『グレルおじさんと結婚』…」

「ねえ、正気？」

と、声をそろえたジュリ以外の一同。

正気であることは分かっているのだが、何度聞いても信じられなくて。

マナが頷いて続ける。

「それから、『（怪しい）薬屋さんになること』…。魔法学校出たあと、魔法薬の薬科大を出て、パパにお店建ててもらう…」

「そうね、マナちゃんの魔法薬はすごいものね！」

と声を高くしたカレン。

「あたくしの夢は」と続いた。「そうね…、シュウと結婚できて、そしてこのお家で皆さまと一緒に暮らせて、本当にもう今だけでも充分に幸せなのだけれど。あたくしもいつかは、シュウの子供を産みたいかしら」

サラが笑って言う。

「アタシ、カレン似の可愛い女の子がいーな」

「わ、わたしたちは」とリン・ランが手をあげて続く。「兄上似の男の子が良いぞ、カレンちゃんっ…！」

ふふ、と笑ったカレン。

「そうね…、あたくしは男の子でも女の子でも、見た目はシュウ似でもあたくし似でも構わないから、健康で元気な子が産まれて来てほしいわ。そして、そうね…、シュウのように心優しい子に育てたいかしら」

そう言ったあと、ジュリに顔を向けた。

床にぺたんと座り、玩具で遊んでいるジュリに訊く。

「ねえ、ジュリちゃんの将来の夢は何かしら？」

カレンに続いて一同が注目する中、ジュリが笑顔で答える。

「ちちうえのように、つよくなることです」

「うーん…」

可愛くない……。

と頭を悩ませてしまう一同。

カレンがもう一度訊く。

「そ、それがダメだったら、将来の夢は何かしら？」

「ダメだったら…？」

と首をかしげたジュリ。

数秒後、再び笑顔で答えた。

「カブトムシ」

「……」

ごめん、無理。

と、苦笑した一同。

サラが立ち上がりながら言う。

「そろそろ不可抗力って言葉でも教えようかね」

「サラ？　どこへ行くの？」

カレンが訊いた。

「トイレ」

「また？　ずいぶんと頻繁に行くのねえ」

「どうも昨日の夜から腹痛とゲリピーが続いててさあ」

「そう…」

とサラの背を見送ったカレン。

数秒後、はっとして立ち上がった。

「――って、サラ!?　ねえ、サラ!?」

とサラを追ってトイレの方へと慌てて駆けて行くカレンに、首をかしげた一同。

「サラ、それたぶん陣痛よっ！」

というカレンの言葉を聞いて仰天した。

キラが張り切ったように立ち上がる。

「おおおっ！　ついに孫が産まれるぞっ！　ミーナ、瞬間移動でサラを葉月病院へっ！」

そして葉月病院へとやって来た一同。

キラのシュウ出産のときと同様に、もう産まれる直前でサラはすぐ分娩室へと運ばれた。

立ち会いは連絡を受けてすぐにやってきたレオンと、それからカレン。

助産師もキラのときと同様、葉月病院の院長――カレンの祖父。

「お祖父さま、頼みましたわよ！」

「任せなさい、カレン」

と余裕の笑みを見せたカレンの祖父。

サラから１ｍ離れた。

「？」

カレンとサラ、レオンが眉を寄せる中、「もう少しかな…」と呟いてさらに１ｍ離れるカレンの祖父。

「あの…」と、レオンが訊く。「院長、何をして……？」

「サ…、サラさんはキラさんのお子さんだからね」

カレンの祖父はキラの助産をするとき、キラから３ｍ離れる。

キラが腹の中から子供を吹っ飛ばすものだから。

「ちょ、ちょっとお祖父さま！？」カレンが眉を吊り上げた。「サラはお義母さまとは違うのよ！？　それにサラは初産なんだから、真面目に助産してちょうだい！」

「わ、私は真面目だよカレン…」

「ねえ、院長…」とサラが苦笑した。「アタシをママと一緒にしないで。大丈夫だからさ……」

「そ、そうかい。悪かったね」

と、サラのところへと戻ってきた院長。
サラのお産が始まった。

カレンはサラの顔の汗をハンカチで拭き、レオンはサラの手を握り。
懸命になってサラに励ましの言葉を送る。

「がんばって、サラ！　がんばって！」

そして院長が言う。

「サラさん、いきんでください！　一か月分の大便を出す感じで！」

「了解っ！　一か月分のウン〇ね！」と承諾したサラ。「出て来い出て来い、レオ兄似の男の子おおおおおおおおおっ！！」

力一杯いきんだ。
その瞬間やっぱり、

スポォォォォォンっ！！

と飛び出した子は、ヘソの緒をぶっ千切り、

ドガァっ！！

とカレンの祖父の腹に突っ込んでそのまま２ｍ吹っ飛ばした。

「あれぇ？」

と裏返ったサラの声を聞きながら、踏ん張るカレンの祖父。
飛ばされた身体は、壁に当たるぎりぎり寸前で停止。

「……」

「ごっめーん、院長。お産って難しいねー」

とサラが笑う一方。

「にゃあああああっ！　にゃあああああっ！」

と、響いた赤ん坊の泣き声。
分娩室の外で待っていた者たちが、一斉に立ち上がった。

「おおっ！　産まれたぞ！　私、バーバになったぞ！」

「私たちはオバサンに…」

とミラが複雑な気持ちで苦笑したとき、慌ただしく駆けて来るシュウとリュウの姿が目に入った。

「あ、パパ、お兄ちゃん！」

今産まれた！

とミラが言おうとしたとき、分娩室の中から聞こえてきたサラの絶叫。

「ぎっ、ぎゃあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁ

ぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあっ！！！」

続いてカレンも。

「きゃあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあっ！！！　ど、どどど、どうしてですのおぉぉおおお

――!!?

猫モンスター同士の子供は生まれて3日で立ち。
人間と猫モンスターの間に生まれた子――ハーフは1ヶ月で立つ。

先日、サラ――ハーフと、レオン――純猫モンスターの間に生まれた長男。
シオンと名づけられたその子は、あっという間に大きくなっていった。

青い髪は父親譲りだが、顔は祖父――リュウ譲り。
伯父――シュウもリュウとそっくりではあるが、生まれた瞬間から只者ではないオーラを放っている様は、間違いなくリュウ譲りだった。
猫耳や尾っぽなどはなし。

そして生まれてから2週間。
ミーナの誕生日パーティー中のこと。

シオン、立ち上がる。

「うわ……」

リビングの中、立っている我が子を目の前に顔を引きつらせるサラ。
結構な衝撃だった。

「た、たった2週間で立ち上がるなんて……」

「え、ええ、す、すごいのですわっ…！」と、シオンから思わず引いてしまうカレン。「さ、さすがお義父さま似……！」

「あぁ？　俺似じゃなくても立つっつーの」

と、言いながら、リュウがシオンを抱っこする。

祖父が孫を抱っこしているのだが、まるで父親が子供を抱っこしているようにしか見えない。

「なあ、シオン？」

と言ったリュウの顔を見つめるシオン。

口を開いた。

「じじー」

「……」引きつったリュウの顔。「シオンてーめえ、絞め殺されてぇのか……！？」

「やっ、やめてよリュウっ！」

と、レオンが慌ててリュウの腕からシオンを奪い取る。

「フン、可愛くねえ！」

「見た目から中身まで自分そっくりなだけでしょ」

「まったくだぜ。ああ、可愛くねえ！」

「あんまりそういうこと言わないでよ。僕にとっちゃ、すごく可愛いんだから」

そう言い、幸せそうに微笑んでシオンをあやすレオン。
それを見つめて微笑むサラも幸せそうだ。

2匹の顔を交互に見たあと、続いて微笑んだシュウ。

（幸せそうだな…、サラとレオ兄……）

レオンからシオンを貸してもらい、小さなその子を腕に抱っこする。

「おー、よしよし。たしかに親父似だけど小さいからやっぱり、かわ――」

「おっさん」

「――いく、ねーなオイ……！？」

と、リュウに続いて顔を引きつらせたシュウだったが。
シオンの頬を突いた際に指をその小さな手に握られ、小さな感動に包まれると同時に前言撤回。

「か、可愛い…！」

「ええ、そうね」と同意したカレンが、シュウの腕からシオンを受け取って抱っこする。「とてもかわ――」

「ひんにゅー」

「――いく、ないのですわあぁぁ……！？」

と、シュウに続いてカレンも顔を引きつらせた。

サラが溜め息を吐いて、シオンを受け取る。

「まぁーったく、シオン。あんた、本当おじーちゃんそっくりだね」

「まぁま」

「いーけどさ、ママは」

「めし」

「はいはい、ご飯ね」

と、シオンの食事を用意しようとキッチンへと向かって行くサラ。

手伝おうと、カレンも着いて行く。

それを見送ったあと、シュウはリュウに顔を向けた。

「なあ、親父。来月カレンとサラも参加させんの？」

何の話かというと、来月に行われるギルドイベント『全島ハンター・各階級別トーナメントバトル』のことである。

場所はここ葉月島に隣接する島――文月島。

賞金等はなく、参加は自由だ。

「賞金がねえのに集まるのは己の力に誇りと自信を持った奴らばか

りだろうから、あまり参加させたくねーんだが…。参加するって言ってるな」

「普通に強いサラはともかく、カレンもっ？」

「ああ」

シュウの瞳が動揺して揺れ動く。

「だ…大丈夫なのかよっ？　ど、どの階級に参加っ？　新米ハンター級…は、ハンター歴1年未満までだから違うよな」

「ああ。だからカレンは四流ハンター級。サラは三流に参加…と言いたいところだが、相手にならなすぎる。だからサラは二流ハンター級に参加だな」

「17の少女にしてすでに二流ハンター級とは…。すげーな、サラのやつ……」

「んで」と、シュウの顔を見たリュウ。「俺とおまえは超一流ハンター級に参加…だな」

「おうよっ！」

と気合充分な返事を確認し、

（そうだ、シュウ。その意気だ。そして…）

心の中で笑った。

（この俺に、一撃与えてみろ）

シュウがはっとしたように言う。

「おっと！　だけどその前に！」

「あ？　何かあんのか？」

「オレのハニーの１７歳の誕生日っ♪」

第１５４話　次女、出産（後書き）

ハーニャン番外編や続編求ムとの内容で、昨日、一昨日、そして本日にメールくださった皆さまや、感想欄の一部の方…。
な、泣かないでください（汗）

「寂しいです」
更新を楽しみにしてくださっていたんだなあと思ってとても嬉しいのですが、その半面胸がえぐられるように痛いです。

「姫百合の馬鹿！」
だからハーニャン書けるんです。

「呪ってやる！」
本当に呪われるとは思いませんでした。昨日から熱出てベッドの中で執筆ですよ。もう限界。この後ぶっ倒れます。

「もう生きて行けないよおおおおおおおお」
わ、私が悪かったよおおおおおおおおおおお！

「続編書け！！」
わ、わ、わ、分かりました…。

エンドレスは良くないかなあと思って続編は書かないつもりでしたが…。
いや、はっきり『書く』とはまだ言えないのですが、続編…考えておきます……。

では、今月の更新はこれにて終了にございます。

しばしの間逝ってきます。
呪い早く解いてね……。

第１５５話　トーナメントバトル　～前編～

１０月。
本日はカレン１７歳の誕生日パーティーだった。
いつもの一同で食べて飲んで騒いだあとのシュウ・カレンの夫婦部屋の中。

まだ渡していなかった誕生日プレゼントを、シュウがカレンに渡す。

「ヘイ、ハニー！　誕生日おめでとう！」

「まあ、ありがとう」

と頬を染め、カレンがシュウからそれを受け取った。
手の平サイズの箱だ。

「指輪かしら？」

と訊きながら、カレンが包みを開けていく。

「うん。去年はルビーのネックレスだったから、今年は指輪にした」

箱の中のケースを取り出して蓋を開け、カレンの瞳が輝く。
カレンがいつも身に着けているネックレスと同じ赤い石の指輪。

「ありがとう、シュウっ…！　とっても嬉しいのですわっ……！」

「おう」

カレンの嬉しそうな笑顔を見て、それ以上に嬉しそうに笑ったシュウ。
カレンにキスしようと顔を近づけたとき。

「――って、あら？」

一瞬目を閉じたカレンが、再び目を開けた。
今シュウの背で、ガサっと音がして。

「シュウ、背中に何を持ってるのかしら？」

ギクっとしたシュウ。

「こ、これは後でっ…！」

と言って半ば強引にカレンにキスして口を塞ぐ。

気になったカレン。
キスしつつ手をシュウの背に持っていく。
そしてシュウが手に持っているものを触り、はっとして唇を離した。

「こっ、これはミヅキくんの働くドールショップの包装紙なのですわっ！」

「――！？」シュウ、驚愕。「ちょ、おま、手触りで当てんなよ…！　母さんがどのパンツ穿いてるのか手触りで当てる親父よりすげーよっ……！」

「ドールのお洋服なのねっ!?　そうなのね、シュウっ!?」

「ち、ちが――」

「いいえ、そうよ！　絶対そうよっ！　早くちょーだいっ！」

「だ、だから、あーとーでえええええええっ！」

「今ほーしーいーのおおおおおおおっ！」

とシュウの背に周り、シュウの手からそれを奪ったカレン。

シュウが苦笑する中、包みを開けて絶叫する。

「きゃあああぁぁあああぁぁあああぁぁあっ!!　こ、ここ、これは明日発売の限定５０着しかない超レアドレスなのですわあぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあっ!!」

興奮のあまりぶっ倒れそうなカレンの身体を支えて、シュウはさらに苦笑してしまう。

「よ、良かったな…」

「ダァァァァァァリンっ!!　１億と2千年あとも、あ・い・し・て・るううぅぅぅ

「あぁもう、だから嫌なんだよぉぉぉぉ……」

とがっくりと肩を落とし、カレンの背に寝転がったシュウ。
カレンの腰に腕を回して、ちょっと憎しみを込めながら着せ替えられていく人形を見つめる。

「そういえば、シュウ？」

とカレン。
決してシュウの方は向かず、人形遊びを続けながら言う。

「あなた、最近修行時間が増えたんじゃない？」

「おう、大分。トーナメントバトルで親父に一撃与えるからな」

「そうね。身体壊さないように頑張ってね」

「うん…」

と小さな声で言ったシュウの顔をちらりと見たあと、カレンが訊く。

「どうかした？」

「いや…さ、もしオレが親父に一撃与えたとするだろ？」

「ええ」

「そしたら、今度こそ親父…褒めてくれるかな」

「『強くなった』って？」

「うん…」

「もちろん」とカレンがシュウに笑顔を向けた。「褒めてくれるわよ、きっと！　あのお義父さまに一撃を与えるなんて、とてもすごいことだもの！　大丈夫よ、シュウ。大丈夫。お義父さまは褒めてくれるわ」

「…うん、そうだよな」

と笑ったシュウ。

（決してオレはファザコンじゃねーっすよ！？）

と読者さまに訴えてから、

（言ってくれるかな…、親父。『強くなった』って言ってくれるかな…）

とリュウに一撃を与えたときのことを考えて、胸を弾ませた。

（オレ、最強の男に『強くなった』って認めてもらえるかな……）

カレンの誕生日パーティーから一週間。

文月島で、これから6日間に渡ってギルドイベント『全島ハンタ

ー・各階級別トーナメントバトル』が行われる。

初日は新人ハンター級のバトル。

2日目は四流ハンター級、3日目は三流ハンター級、4日目は二流ハンター級、5日目は一流ハンター級。

そして最終日は超一流ハンター級。

シュウたちがミーナの瞬間移動で文月島へと向かうのは、トーナメントバトルの2日目と4日目、最終日だ。

四流ハンター級にカレンが、二流ハンター級にサラが、そして超一流ハンター級にはシュウとリュウ、レオン、グレルが参加するから。

優勝したところで賞金も何も出ないこのトーナメントバトルには、己の力に自信や誇りを持っている者ばかりが参加してきているようだ。

よって超一流ハンターとなれば多くが参加しそうなものだが、全島の超一流ハンターの半分も集まらないようだった。

「…どうやらリュウやグレルに恐れをなしたみたいなんだよね…」

と、超一流ハンター級の参加者の書かれた紙をリュウに手渡しながら言ったのは、文月ギルド長兼、超一流変態兼、超一流ハンターのゲールだ。

超一流変態の彼は身体を傷付けられるという快感を味わうため、超一流ハンター級に参加するらしい。

「情けねえ」

とリュウが溜め息を吐く傍ら、苦笑するシュウ。

当然といえば当然だと思う。

「下手すりゃ親父やグレルおじさんに当たった超一流ハンターは、一秒も経たずに決着つけられるじゃねーか…」

「何だ、シュウ。おまえ俺に一秒で俺に負ける気か」

「そ、そんなわけねえだろっ！　オレは必ず親父に一撃与えるんだからなっ！」

「おう、その気合で挑んで来い」

「おうよっ！！」

「とりあえず今は…」

と、カレンに顔を向けるリュウ。
シュウも向ける。

今日はトーナメントバトル2日目。
四流ハンターのバトルが行われる＝カレンが戦う。

様々な銃を身体のあちこちに装備しているカレン。
おろおろとしていた。

「怖いわぁぁあっ！　怖いのですわぁぁぁあぁぁあっ！」

シュウ、苦笑。

「やっぱおまえ参加しない方が――」

「するのですわっ！！」

とシュウの言葉を遮ったカレン。

師であるリュウの腹の辺りの服を引っ張って訊く。

「お、おおお、お義父さま、あ、あああ、あたくし、だだだ、大丈夫ですの！？」

「超一流となれば飛んでくる弾丸なんざ切捨てっから話にならんが、四流にゃそんな奴はいねえから大丈夫だ。それにおまえの銃は合計1億かけて威力高めてあっから余裕だろ」

「なあ、それって」とシュウが顔を引きつらせた。「相手が危ねーんじゃねーの？」

「危なくなったら審判が止めるから大丈夫だろ。それにハンター用に強力に作られた防具装備だし、ゲールんとこの妻…ケリーだったか？　治癒力の高い赤犬がいるから大丈夫だ」

「そ、そうか…」

「…ちなみに…」

とゲールが口を挟んだ。

カレンと、その傍らにいるサラの顔を見て言う。

「…二流・三流・四流は数が多いから、複数で戦ってもらうからね…」

「複数で？」

カレンとサラが鸚鵡返しに訊いた。

ゲールが頷いて続ける。

「…特に三流・四流は数が多くてね…。…初戦は５０人くらいずつ戦ってもらって、残った２名が次に進出ね…」

カレンが驚愕しながら声をあげる。

「た、たった２人しか次に進めないんですの！？　お、おおお、お義父さま、あたくしどうすればあぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあっ！？」

「いっぺんに倒せて便利じゃねーか」

「か、かかか、簡単に言わないでくださいいい

とマナを手招きし、トーナメントに参加する四流ハンターが集まっているところへと向かって行った。
マナの肩からは大きなバッグがぶら下げられている。

カレンが初戦で戦う集団――Aブロックに集まったハンターたちのところで立ち止まり、ハンター一人一人に何かを渡しているマナ。
ハンターたちの様子を見ると、薬を飲んでいるようだ。

それを見ながら、シュウが眉を寄せた。

「親父、何して…？　まさか弱くなる薬でも飲ませたんじゃ……」

「そ、そんな…！」

とカレンが困惑する傍ら。
リュウ自身も薬を飲んだのを見て、サラが否定した。

「いや。そんな薬じゃないよ」

「え？」

じゃあ、どんな薬？

とシュウとカレンがサラに振り返ったとき、ゲールがカレンの背を押して催促させた。

「…早くAブロックに行って…」

「は、はいっ…」

と慌ててAブロックのハンターたちが集まっているところへと駆けて行くカレン。
すれ違い様に、リュウが言う。

「余裕だ」

「えっ？」

一体何を飲ませたのか。

ますます困惑してしまいながら、Aブロックの集団の中に入って行ったカレン。
着いた途端、バトル開始だった。

（こ、怖いのですわっ…！　シュウ、サラ、お義父さまっ……！）

今にも泣き出してしまいそうな中、マシンガンを構えたカレン。

その瞬間、敵ハンター達が一斉に声をそろえた。

「おい、カレン」

「――へっ？」

声が裏返ったカレン。
声をはもらせたハンターたちの顔を見回して、一体何なのかと動揺する。

遠くからそれを見つめながら、マナが口を開いた。

「即効性が高められて1分後には効いちゃう『鸚鵡返しの薬・改（人間・モンスター・ハーフ用）』を飲ませた…」

「えっ？」

と、マナの顔を見たシュウ。

鸚鵡返しの薬といえば、シュウが今年の正月にカレン宅を訪れる際に飲んだものだ。

あのときは効果があるまでに15分掛かったものだが。

マナが続ける。

「A液を飲んだハンターたちは、B液を飲んだパパの言ったことを鸚鵡返しにしちゃうんだよね…」

「――！？」

シュウがリュウの顔を見ると、リュウがにやにやと笑っていた。

そして言う。

「やーい、貧乳」

その台詞を鸚鵡返しにしたAブロックのハンターたち。

次の瞬間、

ブチブチブチィっ…！！

と、カレンの中で何か切れる音がした。

第１５５話　トーナメントバトル　～前編～（後書き）

呪いが解けてきて（笑）復活してきた作者です。
先月、投票や評価、感想、メールをくださった読者さま、ありがとうございました。
特に最終話が近いとお知らせしてからは沢山いただきました。本当にありがとうございます。

そして今月でこのハーニャンことＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯは最終話を迎えるわけですが…。
本当はまったく考えてなかった続編……、じわりじわりと、やろうかなぁ～なんて方向に動いております。
その場合、最終話のあとにおまけとして書く予定だった『シュウたちのその後』は続編に回されると思います。

とりあえず、このハーニャンの最後までお付き合いしてくださっちゃうと嬉しいです。

先月２８日の２１時１６分ごろにメールくださった読者さまへ。
メールボックスへゴォォォォっ！　で、ございますｗ

第１５６話　トーナメントバトル　～中編～

１０月。
シュウたちはギルドイベントである『全島ハンター・各階級別トーナメントバトル』に参加する。
２日目の今日は、四流ハンター級のバトルだ。

それにはカレンが参加するのだが。

不安一杯で敵ハンターに囲まれたカレン。
バトル開始早々敵ハンター集団に、

「やーい、貧乳」

なんて声をそろえられ。

ブチブチィっ…！！

と己の中で何かが切れる音が聞こえた。
次の瞬間、肩からかけていたマシンガンを乱射。

「なんですってえぇぇぇ

蹲ったり、悶えたり、失神する敵ハンターたち。
意識があるハンターは一体どういうことかと困惑する。

己の口が勝手に喋ったものだから。

原因はバトル開始前にリュウに飲ませられた、マナ作『鸚鵡返しの薬・改（人間・モンスター・ハーフ用）』。
以前のものよりも即効性が高められ、A液を飲んだカレンの敵ハンターたちは、B液を飲んだリュウの言葉を、1分後には鸚鵡返しに言ってしまう。

そのことを敵ハンターたちは知らなかった。

弾丸が当たったハンターたちを審判が慌てて戦線離脱させ、ケリーが一斉に治癒魔法をかける。

「ちょっ、あんたたち大丈夫かい！？」

なんて訊いたケリーだったが、見るからに大丈夫じゃなさそうだった。

一方のカレン。
戦場に残っている者たちに、徐に顔を向けた。

「――！？」

カレンのあまりの形相にびくついた敵ハンターたち。

「あなたたち、さっきあたくしのこと何て言いましたのこと…！？

え…！？　たしか、たぁーしぃーかぁー、貧乳って、ひ・ん・にゅ・うって、言ったわよね……！？」

カレンの問いかけに、必死に首を横に振る。
言いたくて言ったんじゃないと、必死に首を横に振って伝える。

が、その口から出た台詞は、

「おまえ乳えぐれてんじゃねーの」

仰天して己の口を手で塞ぐ敵ハンターたち。

「なっ、なぁぁぁんですってえぇぇえぇぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえぇぇえっ！！」

と、さらにブチ切れてしまったカレン。
バズーカを肩に担いで構える。

それを見て慌てて逃げ出す敵ハンターたちだったが、

「ちゃんと出っ張ってるわよっ！！」

ボカァァァァァンっ！！

とバズーカの爆発に吹っ飛ばされ、戦線離脱。

一方、カレンの背後にじわりじわりと近づいていく影。
後ろから気付かれないように攻撃しようと試みようとした者たちであるが、その口は自ら宣告する。

「おい後ろだ、貧乳！」

「――！」

はっとすると同時に、完全に頭に血が上ってしまったカレン。
後方に催涙ガス弾発射。

足元にそれが着弾し、クモの子を散らしたように逃げていく敵ハンターたちだったが、

「人に貧乳ぬかしといて逃げてんじゃないわよっ！！」

ズキュキュキュキューーンっ！

と、カレンが両手にリボルバーを持って撃ち。
その弾丸に背をやられて倒れてしまい、ほとんど逃げられず。

3秒が経過し、辺りに響き渡った破裂音。

広範囲を煙と催涙ガスが包み込み、敵ハンターたちは目や鼻、喉に激痛を訴えたまらず戦線離脱。

「あとは残りっ！！」と手榴弾の紐を歯で噛んで引き、点火したカレン。「あんたたちも貧乳言ったわねえぇえぇえぇえぇえぇえぇえぇえ！？」

それを逃げていく残りの敵ハンター目掛け、投げまくり。

ボカァァァァンっ！
ボカァァァァンっ！！

ボカァァァンっ！！！
ボカァァァンっ！！！！

とあちこちで起こる爆発。
それに吹っ飛ばされて宙を舞う敵ハンター。
おまけに審判。

「ふん、いい様なのですわ！」

そんなこんなで、カレンは大暴れで初戦を勝ち抜いた。

続いての準々決勝でも、準決勝でも、そして決勝でも、薬を飲まされた敵ハンターたち。
リュウの言った言葉を鸚鵡返しにしてしまった瞬間、まるで断末魔のような声を響かせていた。

あっという間に優勝したカレンを見ながら、サラが声を高くする。

「カレン、すっごいなあ。優勝しちゃったよ！」

「すごいね…」

と、同意して頷くマナの傍ら。
顔面蒼白しているシュウ。

「マ…、マイハニーっ……！？」

弱いものばかりだと思っていた妻の姿に驚愕だった。
あはは、と笑ってサラが言う。

「兄貴、浮気したら穴だらけになるねー♪」

「……。…ウン」

ボク、絶対ニ浮気ナンカシナイヨ。

もともと浮気なんてするつもりはないシュウだったが、改めて心に誓い、肝に銘じた。

カレンのトーナメントバトルが無事に（？）終わったら、次は二流ハンター級に参加するサラの番。

2日後だ。

「というわけで、あれから2日後です。読者さまはたぶんあれから約1秒後でしょうか」と語りながら、長い戟（げき）をぶんぶんと振り回して準備運動をしているのは、「本日トーナメントバトルの二流ハンター級に参加するサラです」

「気合充分ね、サラ！　あたくしに続いて優勝よ！」

と張り切った様子のカレンの傍ら、進まぬ顔をしているのはリュウとレオン。

二流ハンターとなれば、女ハンターの数は極端に減る。

それほど危ない階級に参加するサラが心配で仕方なかった。

「お、おい、サラ、やっぱり三流ハンター級に…」

「今さら何言ってんの、親父。てか、三流ハンター級のトーナメントバトルは昨日だったんだからもう無理っていうか」

「ね、ねえ、サラ。危なくなったらすぐに逃げるんだよっ？」

「もー、大丈夫だよ、レオ兄」とサラが笑う。「アタシ、そんなにか弱くないしー」

たしかにそうなのだが。

たしかにサラは１７の少女とは思えぬほど強いのだが。

サラの父親と夫は、心配で居ても立っても居られない。

「んじゃ、そろそろ始まるからアタシ行ってくるねー」

と、二流ハンターの集まるところへと向かって行くサラ。

途中、苦笑して立ち止まり、振り返る。

「ちょっと、親父、レオ兄？　何で着いてくんのさ…」

「急遽審判を務めることにした」

と、声をそろえたリュウとレオンに溜め息を吐き、サラは再び歩き出した。

（大丈夫だって言ってんのに、もう…）

二流ハンター級の初戦は各ブロックごとに１０人ずつ戦い、１人が次に進出。

サラの参加するＣブロックの女ハンターはサラ１人だけだった。

戦場のすぐ脇でリュウとレオンに見守られながら、二流ハンター級の初戦開始。

９人の敵ハンターを見回すサラ。

「ああ、久しぶりの戦闘でぞくぞくしちゃうな、ア・タ・シ♪」

と振るわせる身体の回りには、小さく風が巻き起こっている。

警戒して構えた敵ハンターたち。

次の瞬間、

「行っくぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇいっ！！」

ゴオオオオオっ！！

と、サラの放った巨大なトルネードが突っ込んできて、吹っ飛ばされないよう踏ん張った。

が、数人が渦に巻き込まれ、ぐるんぐるんと空高く目掛けて飛んでいく。

再びぞくぞくっと身体を震わせたサラ。

妊娠していたが故に戦いというものからしばらく遠ざかってしまっていたが、その感覚が身体に戻ってくる。

「そうそう、これこれ…。これがハンターなんだよね」

と独り言を言いながら、

ガキンっ

と飛んできた剣を、戟で受け止めたサラ。
手に伝わってくる衝撃に、再びぞくぞくっと身体を震わせる。

「ああ、これこれ…。これなんだよ、これこれ……！」

と、にやにやと笑い出すサラ。
刃を交えている敵ハンターを押しやって間合いを取り、

「これなんだよねえぇえええぇえええぇえええぇえええぇえええぇえええぇえええっ！！」

と絶叫しながら、長戟をデンジャラスに振り回し始めた。
ぎょっとして思わず防御の態勢を取る敵ハンターたちに、サラがるんるんと向かってくる。

「サラちゃん、ふっかぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあつっ！！」

見るからに重そうな戟を片手で振り回しているサラ。

敵ハンターの武器を破壊し。
敵ハンターの盾も破壊し。
敵ハンターを一撃でぶっ飛ばし。

辺りに笑い声を響かせる。

「あーーーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ！！　オラオラオラァっ！！」

このままじゃやばい、と思った生き残り敵ハンター2人。
必死にサラの背後に回ったが、こんなにデンジャラスに長戟を振り回されちゃあ、近づくことが出来ない。

よって、魔法でサラに攻撃しようと思い、サラに手をかざしたその時のこと。

「――!?」

びくっと身体を震わせた。
背筋に寒気が走って。

恐る恐る後方に振り返ったら、

「――!!?」

身体が凍りついた。

2人に突き刺さっているのは、リュウとレオンのぎらぎらとした視線。
身体に穴が空きそうなほど痛いそれが訴えているのは、

『サラを傷付けたらどうなるか分かってるな?』

ごくり、と唾を飲み込んだ敵ハンター2人。
リュウとレオンの心の声が聞こえた。

おまけに、

『分かってるな…！？』

と、念を押して訴えるようにリュウとレオンが目を見開いたと思った途端、

「はぅあっ！！」

後方に吹っ飛んだ2人。

驚愕。

（めっ…、目からビーム出たっ……！！）

実際はそんなもの出ていないのだが、そう感じるほどリュウとレオンの視線が強烈だった。

「ん？」

と、戟を振り回すのを止めて振り返ったサラ。

尻を着いている敵ハンター2人を見つめたあと、顔をあげて遠くのリュウとレオンを見つめた。

そこには、

「おー、さっすが俺の娘だな。強いぜサラ」

「サラもうちょっとだよ。頑張って～」

にこにこと笑っているリュウとレオンの姿があった。

「うんー」

と、手を振って応えたサラ。
尻を着いている敵ハンター2人に顔を向ける。
その途端、豹変するリュウとレオンの顔。
ぎらぎらと敵ハンター2人を睨みつける。

「…っ…あっ…あっ……！」

とリュウとレオンの方を見てがくがくと震える敵ハンター2人。
サラが首をかしげて再びリュウとレオンに顔を向けると、

「ほらー、サラ。トドメ指しちまえー」

「サラ、今だよー」

やっぱりにこにこと笑っている。

「うんー…」

とまた手を振って返事をし、尻を着いている敵ハンター2人に目を落としたサラ。

（なんか変だな…）

と察し、素早くばっと顔を上げてリュウとレオンを見た。

再び顔を豹変させて敵ハンター2人を睨みつけていたリュウとレオン。
サラの視線を感じ、肩をびくっと跳ねさせた。

それを見てサラが眉を吊り上げる。

「あぁあああぁぁあぁあっ！　やっぱり脅してたっ！　ちょっと親父っ！　レオ兄っ！　邪魔しないでよねっ！！」

「な、なんのことだ？　サラ。お、俺たち何もしてねーよな、レオン？」

「う、うん。何もしてないよね、リュウ？」

と惚けるリュウとレオンに、呆れて溜め息を吐いたサラ。

「ごめん、あの2人のことは気にしなくていいから」と目を落として敵ハンター2人を見、「――って、ちょ……」

顔を引きつらせた。

残りの敵ハンター2人、失神と失禁につき。

サラ、初戦突破。

「おおーっ、さっすが俺の娘！」

「さっすが僕の奥さん！」

とぱちぱちと手を叩いているリュウとレオンに向かって、サラは声をあげる。

「もおぉおぉおぉおっ！！　次からはこんなことしないでよねっ！！」

こんなんじゃまともな戦闘ができない。
リュウとレオンが承諾したのを確認したあと、再び気合を入れるサラ。

「よおぉぉおし、準々決勝がんばるぞーっ！！」

が、先ほどのリュウとレオンの行動はほとんどの者が目にしており。

準々決勝戦。
相手はがたがたと震えてまるで戦える状態じゃなく、サラ不戦勝。

「……。つ、次の準決勝がんばるぞっ…！」

準決勝戦。
相手が逃げ出し、サラ不戦勝。

「……。つ、つ、次の決勝がんばるぞ……！」

そして決勝戦。
相手すら出て来ず、サラ不戦勝。

よって、サラ優勝。

「なっ…、なんっっっじゃそりゃあぁぁあぁぁあぁぁ

て行った。

それを遠くで聞きながら苦笑したシュウ。

リュウやサラ、レオンの家族であるが故に周りの視線をちらちらと感じ、何だか恥ずかしくなってゴホンと咳払いをした。

「え、えーと…、次は2日後――最終日の超一流ハンター級トーナメントバトルのときにやって来ればいいんだな」

そこでシュウは、

（必ず、親父に一撃を与えてみせるっ…！！）

第１５６話　トーナメントバトル　～中編～（後書き）

本日１時５５分ごろメールくださった読者さまへ。
了解です！　てか、いつでもおｋです。
追試がんばってくださ（。＋・、ω・´）シャキーン☆

第157話　トーナメントバトル　～後編～

サラが隣の文月島で『全島ハンター・階級別トーナメントバトル』の二流ハンター級に参加し、優勝したのは昨日のこと。
本日はシュウたち家族や仲間にトーナメントバトルに参加する者がいない故に、皆葉月島にいた。

シュウ・カレンの夫婦部屋の中。
カレンと向かい合って座り、サラが膝にシオンを抱っこしながら、これまでのトーナメントバトルの結果が書かれている紙を手にし、それを読み上げる。

「新人ハンター級は睦月ギルドのギルが優勝。重傷者などはなし」

「そう。良かったわね」

「四流ハンター級は葉月ギルドのカレンが優勝」

「ふふ」と笑い、紅茶をすするカレン。「あたくしもやれば出来るのですわ♪」

「審判を含め重傷者多数。特に葉月ギルドのユーキは瀕死だった…だって」

「ユーキ？　って、雪合戦大会の優勝者さんだわ。瀕死だなんて、どうしたのかしら」

「カレンを応援しようと変装して、Ａブロックの初戦に紛れ込んだが故に禁句言っちゃったもんだから、カレンのマシンガン食らった

あとにバズーカで吹っ飛ばされ、何とかカレンのところに戻ったんだけど、今度はいきなりリボルバーで撃たれて慌てて逃げてるところに手榴弾食らったらしいよ」

「あら、当然の結果だったのね」

ふん、と鼻をならしたカレン。

続きを催促する。

「それで、三流からの結果は？」

「三流ハンター級は文月ギルドのユウタが優勝。重傷者はなし。二流ハンター級はアタシ――葉月ギルドのサラが、初戦以外を不戦勝で勝ち進み優勝…」

と、昨日を思い出して顔を引きつらせるサラ。

「お、落ち着いてサラ」

とカレンが苦笑すると、サラが気を取り直して続けた。

「んで、今日の一流ハンター級の優勝者はリエ」

「え、女性？」

「――がダントツだったんだけど、いきなり他の小説からやってきてハンターの資格も持ってないのに勝手に参加したもんだから失格になって、優勝者は葉月ギルドのランタン。リエがボコボコにしちゃったもんだから、重傷者多数」

「まあ、今日の一流ハンター級荒れたのね」

「四流ハンター級よりマシだと思うけどね」と言い、紅茶をすすったサラ。「明日はトーナメントバトルの最終日…。いよいよ超一流ハンター級……か」

茜色に染まった窓の外に顔を向けて耳を済ませると、刃を交える金属音が聞こえてくる。

「…兄貴、今日は朝からずっとママ相手に修行してるね」

「ええ…、当然よ。明日はお義父さまに一撃を与えられるかもしれない機会なんですもの」

そう言ってカレンも窓の外に顔を向ける。

「うん…、物心付いたときからずっと『親父を超えること』を目標として来て、明日はやっと親父に一撃与えられるかもしれないんだもんね……」

「ええ」

「…ねえ、カレン」

「ん？」

「兄貴、明日親父に一撃与えられるかな」

「与えられるわ、きっと。だって、努力しているもの。与えられないわけがないのですわ。シュウはお義父さまに必ず一撃を与えるわ」

そして、

「最強のお義父さまに生まれて初めて『強くなった』って褒めて――認めてもらえるわ」

翌日。

シュウ一同は『全島ハンター・各階級別トーナメントバトル』の最終日にやって来ていた。

超一流ハンター級の本日は、シュウとリュウ、レオン、グレルが参加する。

リンクも超一流ハンターであるが、審判を務めることに。

四流～二流ハンター級までは数が多い故に初戦を複数で行ったが、一流ハンター級と超一流ハンター級は初戦から決勝戦まで一対一で行う。

「で、初戦の組み合わせなんやけど」と、リンク。「レオンは如月島のハンターと、師匠はゲールとな。んで、リュウとシュウや。レオンは初戦の最初で、師匠はその次やからもう準備に入ってや。リュウとシュウのバトルは初戦の最後やからまだまだやし、それまでゆっくりしててや。特に」

と、シュウの肩を叩いた。

「緊張しとるようならほぐしときや、シュウ」

「ん、大丈夫。緊張してないから」

と言ったシュウ。

昨日は一日中キラ相手に修行した。

今朝も早くに起きて修行した。

生まれて初めて、リュウへの一撃を与えるために。

もし与えることが出来たら、とシュウは考える。

（きっと親父は、オレのこと『強くなった』って褒めてくれる。認めてくれる）

シュウはちらりとリュウに目を向けた。

「今朝シャワー浴びたあと、ミントグリーンに白レースの付いたヒモパンに穿き替えたのか」

なんてキラの尻に手を回してスカートの中に手を突っ込み、にやにやとしながら手触りで下着を当てているリュウに、顔を引きつらせてしまうシュウ。

「ったく、エロ親父が…」と呆れて溜め息を吐いたあと、「…ね、ねえ、今日の夜どのぱんちゅ？」

と小声で傍らのカレンに訊いた。

カレンの頬が恥ずかしそうに染まる。

「ピ…、ピンクの水玉よっ……」

「みじゅたまっ…！」

と、にやにやと笑い鼻血を垂らしているシュウの顔を見上げ、カレンは小さく溜め息を吐いた。

「緊張してるんじゃないかと思って心配していたけれど…。大丈夫そうね、シュウ？」

「おう、大丈夫っ！」と言って鼻に治癒魔法をかけ、カレンの手を引いたシュウ。「もっと遠く行ってようぜ。超一流ハンターのバトルとなれば広範囲を要するから流れ弾食らっちまう」

と、戦場から遠く離れていく。

これから戦うレオンと審判のリンクを除き、他の一同もそれに続く。

シュウとカレンの後方を歩きながら、リュウが傍らを歩いているキラに訊いた。

「シュウ（あいつ）、最近どうだ」

「ああ…、目を見張るほど成長が早い。剣術も、魔力も」

と言ったキラ。

俯いて、リュウに聞こえぬように小さく続ける。

「闇の力も……」

嫌な動悸がした。

（シュウは普通のブラックキャットとのハーフとは違う。私の血を引いている。だからハーフとは思えぬほど、闇の力の成長が早い。それは当然だ）

だが、

（ここまでだとは思わなかった。闇の力の成長が早すぎる。まるで私の予想外だ。妻を娶り守るものが増えたためか、必死にリュウを超えようとするためにか……）

キラはシュウの背を見つめた。

今年の4月、キラの弟子になったばかりの頃よりも大きくなっている。

（シュウ…、もしおまえが今、破滅の呪文を唱えたとしよう。そしたら、おまえは間違いなく瀕死の重傷を負うだろう。そしてもしかしたら…、もしかしたらだが、リュウを超えられるかもしれないな……）

キラの視線を感じてか、シュウが振り返る。

何かと首をかしげているシュウの顔を見ながら、キラは心の中で続けた。

（まあ、そんな話はどうでも良いことだ。私はおまえに破滅の呪文を教えぬのだからな……何が何でも）

キラの鋭い視線に、シュウが苦笑した。

「か、母さん？　ど、どうかしたのか？」
「なんでもないぞ、シュウ」
と笑ったキラ。
小走りでシュウに駆け寄り、傍らに並んだ。
そして言う。
「シュウ、母上の言葉を覚えているか？」
「え？」
「おまえは剣術と、リュウから受け継いだ火・水・地・風・光の力で強くなれ」
「ああ、その話――」
「いいな、シュウ。いいな」
そう念を押して言うキラに、シュウは承諾の返事ができなかった。
約束できなかった。
黙りこくっているシュウの顔を見上げ、キラの黄金の瞳が困惑したように揺れ動く。
「シュウ…？」
「大丈夫」と、シュウは笑った。「オレ、母さんから破滅の呪文を聞き出そうとしたりしないから」

それを聞き、安堵したように笑ったキラ。
リュウに呼ばれ、リュウのところへと駆けて行く。

一方そのとき、シュウの頭にはキラではない純粋なブラックキャットの顔が浮んでいた。
破滅の呪文を当然知っているだろう、タマの顔が。

（オレが破滅の呪文を必要としたときは、あの人のところに行くしかない…よな）

レオンが何の苦も無くサラの黄色い声を聞きながら初戦を突破したあとは、グレルとゲールの番。
遠く離れているところからでも分かる。

ゲールが快楽に悶えている姿が。

「んじゃゲール、次いくぞーっと！　そーれいっ♪」

「がはぁっ！　…ハァ、ハァ、ハァ…！　…な、なんと素晴らしい旋風脚だ…！　…首がもげそうだっ…！　…ふ、ふふふ…」

「続いてバックドロップだぞーっと！　とーりゃあっ♪」

「がはあぁっ！！　…この、地にめり込んだ後頭部と肩に走るカ・イ・カ・ンっ…！　…イイっ…！　…イイィィィィィィっ…！　…あぁあぁあぁ、逝かせてくれグレルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」

「分かったぞーっと♪　んじゃ、トドメの――」

ピピピピピーーーっと笛を吹き、慌てて割り込む審判のリンク。

「ストップストップ！　師匠、これ以上はあかんっ！　死亡者出るわあぁあああぁあああぁあああぁあああっ！！」

というわけで、グレルも初戦突破。

刻々と迫ってくるシュウとリュウのバトル。

出番までにはまだ少し早かったが、シュウは剣を振るって準備運動をしていた。

素振りに合わせ、心の中で繰り返す。

（親父に一撃っ！　親父に一撃っ！　親父に一撃っ！　親父に一撃いっ！）

そして、

（親父に『強くなった』って認めてもらうんだっ！！）

キラが寄って来てシュウの手に、己の手を置く。

「こら、シュウ。準備運動からそんなに頑張っていてはバテるぞ？」

「お、おうっ…！」

と素振りを止めて剣を鞘に収めたシュウ。

キラが続ける。

「何、案ずるな。いつも通りにやれば、一撃くらいはリュウに与えられよう。おまえは私の剣を見切るようになったのだから」

「おうっ！」

と気合を入れたシュウ。

やがて出番がやってきて、リュウと共に戦場へと歩いていく。

少し離れたところを歩いているリュウ。

その横顔をちらりと見たあと、シュウは前を向いて口を開いた。

「なあ、親父」

「何だ」

「オレが親父に一撃を与えたら――」

オレのこと『強くなった』って褒めてくれる？

認めてくれる？

とシュウが訊く前に、リュウがシュウの言葉を遮った。

「与えてから言え」

「…そ、そうだな」

と頷き、シュウは戦場に辿り着いた。

そこで待っていたリンクがシュウの顔を覗き込むように見て訊く。

「シュウ？　大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

と言ったシュウ。

リュウと１０ｍほど距離を置いて向かい合って立ち、目を閉じて深呼吸をする。

（大丈夫。いける…！　オレは親父に一撃を与えられる……！）

リュウが徐に抜刀した音が、シュウの耳に微かに聞こえた。

（そして親父に『強くなった』って褒めてもらえるはず…！　認めてもらえるはずだ……！！）

腰の剣に手を持って行き、抜刀すると共に、シュウは目を開いた。

そしてその黒々とした瞳に、前方で悠然と片手に剣を構えている男――父親・リュウの姿が目に入る。

その瞬間、シュウの背筋にぞくっと寒気が走った――。

第157話　トーナメントバトル　～後編～（後書き）

後編とか書いておきながらトーナメントバトル終わってなーいじゃーーーん。
思ったより長くなったので分割しました、ごめんなさい（汗）
というわけで次回のハーニャンは『親父に一撃』というサブタイトルで投稿しようかと思います。

また、今話の序盤にトーナメント優勝者の名前など色々出てますが…。全員友情出演ってやつです。
重傷のユーキ（遊鬼）くんは雪合戦大会の優勝者ですね。神技さんのところのキャラです。
リエ（梨恵）ちゃんは正体不明さんの「金持ちはファンタジー」からすっ飛んできました。
他の優勝者等は名前迷ったんでお友達作者さんたちのお名前をちょこっとお借りしました。

第１５８話　『親父に一撃』

文月島で行われている『全島ハンター・各階級別トーナメントバトル』の最終日。
超一流ハンター級のバトル。

それにはシュウ一同からは、シュウとリュウ、レオン、グレルが参加していた。
レオンとグレルが初戦を突破したあとは、シュウＶＳリュウの番。

戦場の中央でリュウと向かい合い、背筋にぞくっと寒気が走ったシュウ。

刃を交える前なのに感じる。
重々分かってはいたが、改めて確信させられる。

目の前に悠然と剣を構えて立っている男――父親・リュウ。
それは、

（――この世で最強の男だ）

背筋に冷や汗が垂れる。
１０ｍも距離を置いているのに、その威圧感に押しつぶされそうだ。

（怯えんな！）

シュウは自分に言い聞かせる。

（怯えんな！　おまえはこれからこの男に一撃を与えるんだろうが！）

剣の柄を両手で握って構えたシュウ。
それを見たリンクがバトル開始の合図を出し、小走りで離れていく。

それから数秒後。
リュウが口を開いた。

「来い」

深呼吸をしたシュウ。

「うおおおおおおおおりゃあぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁあああぁあっ！！！」

雄叫びをあげると共にリュウに飛び掛った。

初太刀は、頭頂から下に向かって振り下ろす唐竹割り。
それは片手に剣を持っているリュウに軽々と受け止められた。

ガキィンっ！

と辺りに響いた金属音。
一度後方に身を引いて態勢を正したシュウに、リュウは容赦なく切りかかり、絶え間なくそれを響かせる。

後方に押されて行きながら、シュウの腕に強い衝撃が走る。

（すげえ力っ…！　やっぱ母さん相手みたいに行かねえかっ……）

でも、

（――見えるっ…！　親父の攻撃がっ……！！）

押されながらも、リュウの振るう刃をしっかりと受け止めているシュウ。

力はキラよりもリュウが圧倒的に強くても、俊敏さは人間のリュウよりもモンスターのキラの方が格段に上だった。

今までキラ相手に修行してきたシュウには、リュウの攻撃が良く見えた。

いかなる方向から刃が飛んできても受け止められる。

（でもやっぱり、とんでもねえ力だっ……！！）

リュウの左下段からの右切り上げを防御したシュウ。

耐え切れずリュウに剣を振り切られ、後方に飛ばされる。

宙返りして地に足を着けたとき、リンクが短く笛を吹いた。

「シュウっ！　大丈夫かっ！？」

「え？」

息を切らしながら、リンクの目線を追って自分の胴体に目を落とす。

ハンター用に作られた頑丈な防具。

超一流ハンター用は特に強力に作られている。
それが右腰から左肩に掛けて切られていた。
リュウの剣先が掠めたのだ。
それを見た途端、
「――うっ…！」
と顔を痛みに歪めたシュウ。
リュウに顔を向けると、その右手に持っている剣の切っ先が鮮血を滴らせていた。
「邪魔すんな、リンク。掠めただけだ。わざわざ切れ味わりぃ剣を使ってやってんだし、どうってことねえよ」
そう言い、リュウが血刀を地に向かって軽く振るう。
リュウの右足近くの地面に亀裂が入ると同時に、血がその付近に飛び散った。
「おい、シュウ」とシュウに左手をかざしたリュウ。「戦闘中にぼーっと突っ立ってんじゃねーぞ」
シュウに向かって炎魔法を放つ。
ゴオオオオオオオッ！！！
と、音を立てて突進していった炎はシュウの身体を通り抜け、遠くの山に激突。
山の半面を覆う木々が燃え上がって山火事になり、水魔法を使え

るハンターたちが絶叫しながら消火に向かっていく。

修行中に強力なモンスターの魔法をいくつも食らって耐性をつけてきたシュウだったが、リュウはやはり桁違いだった。

このままでは墨になる。

（ちっくしょうっ…！　親父に一撃与えられずに終わって溜まるかあぁっ……！！）

炎の中、地に剣を刺したシュウ。

片手じゃ無理だ。

両腕をリュウに向かってかざし、

「うおぉおりゃあぁぁあああぁぁぁ

「おい、次行くぞ」

と聞こえてきたリュウの声。

はっとしてシュウが地に刺していた剣を手にした、次の瞬間、

ズガァァァァァァン！！！

とシュウの足元から飛び出した岩。

「――ガハァっ！！」

先端がシュウの身体を「く」の字に折り曲げ、天に向かって突き上げていく。

天を仰がないと姿が見えないほどまでに突き上げられたシュウの身体。

宙を舞い、落ちてきたと思ったらまた地面から飛び出してきた岩に突き上げられる。

その繰り返しで弄ばれていた。

背に衝撃を食らい、腹に衝撃を食らい、肋骨を折られ、吐血するシュウ。

そんな中でも、心の中で繰り返していた。

（親父に一撃っ…！　親父に一撃っ…！！　親父に一撃っ……！！！）

一方地上では、リンクがリュウにしがみ付いて絶叫する。

「リュウっ！　やめぇやっ！　リュウっ！！　シュウ死ぬでっ！！　おい、リュウっ！！」

遠くからカレンやリン・ランの泣き声も聞こえてくる。

「お義父さまっ！！　もうやめてくださいっ！！　お義父さまっ！！」

「ふにゃあぁあああぁぁあああんっ！！　兄上死んじゃうのだあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあっ！！」

だが、リュウは止めなかった。

高く舞っているシュウの身体が、トルネードで巻き上げられ、さらに高くなっていく。

その様子が純猫モンスターには良く見えた。

シュウの身体のあちこちが風の刃に切り裂かれ、血が飛び散っている。

「シュウっ…！」

とミーナが衝撃に口を手で塞ぐと同時に、レオンが声をあげた。

「リュウっ！　まずいよ、リュウっ！！　もうダメだよ！！　リュ――」

リュウのところへと駆けて行こうとしたレオンの腕を、キラが引いた。

「キラっ…！？」

キラは落ち着いた様子でシュウを見つめながら言う。

「大丈夫だ、レオン、ミーナ。カレンにリン・ラン、皆も」

戸惑いながら再びシュウを見上げた一同。

地上から見てピンポン玉サイズになるまで高く巻き上げられたシュウの身体。

今度はそれが地上に向かって猛スピードで落とされて行く。

「――…っ……！！」

真っ青になり、ぎゅっと目を閉じたカレンやシュウの妹たち。

シュウの身体が背から地に叩きつけられる。

地をへこませるほど強く落ちたシュウの身体。

その手から剣が離れると同時に、砂埃が舞い上がり、その胴体を稲妻が貫く。

ズガァァァァァン！！！

と激しい落雷の音に、猫耳を持つ者も人間の耳を持つ者も思わず耳を塞いでしまう。

飛んだ剣は、シュウから３ｍほど離れたところに突き刺さった。

動かないシュウ。

この場にいる者で、冷静なのはリュウとキラだけだった。

あまりの光景にがたがたと震えたり、泣き出したりする女たちに、声を失っているレオンやグレル。

絶叫するリンク。

「もうあかんっ！！　あかんっ、リュウっ！！　もう決着ついたやろっ！？」

シュウを見つめるリュウ。

「いや…」とシュウを見ながら、短く笑った。「まだみてえだぜ」

「えっ…！？」

リュウの顔を見たあと、シュウに顔を向けたリンク。

シュウの指先がぴくりと動く。

「…う……」

と声を出したあと、咳き込んで吐血したシュウ。

満身創痍の身体を徐に起こし、四つん這いで歩きながら剣のところへと向かっていく。

「シュウっ…！？」狼狽してシュウに駆け寄るリンク。「もうあかんっ！　あかんで、シュウっ！！」

「……」

首を横に振り、剣の柄を両手で握ったシュウ。

剣を杖代わりにして立ち上がる。

「…一撃っ…！　親父に…一撃っ……！」

「何言ってねん、シュウっ！　もうあかんっ！　あか――」

「親父に一撃、与えるんだっ！！」

そう声をあげ、リンクの身体を脇に突き飛ばしたシュウ。

剣を構え、リュウに飛び掛る。

ガキィンっ！！

と、再び辺りに鳴り響く金属音。

片手で悠然として受けるリュウに、シュウは両手で必死に切りかかる。

頭頂から振り下ろす唐竹割り。

右上段からの袈裟斬りに、左上段からの逆袈裟斬り。

左下段からの右切り上げに、右下段からの左切り上げ。

真下からの切り上げに、左右からの胴斬り、中段突き。

それらを己の身体が出せる最大限の速さで乱撃し、時たま二段斬り・三段斬り・四段斬りと繋げて技を出すシュウ。

身体のあちこちの傷口から血が流れ出て危険な状態だったが、そんなことは目に入っていなかったし、どうでも良かった。

今、己の視界にあるのは、目の前に立っている最強の男だけ。

物心付いたときからずっと追いかけてきたこの男に一撃を与えることだけが、シュウの頭の中にあった。

（親父に一撃っ！）

刃を振るう度、シュウは頭の中で繰り返す。

（親父に一撃っ！　親父に一撃っ！　親父に一撃っ！）

激しさを増して行く金属音に、その度に散る火花。

シュウの身体にリュウの刃が当たる度、近くで見ているリンクは顔を背けてしまいたくなる。

だが、シュウは一歩も引かなかった。

（親父に一撃っ！！）

刃が身体に当たろうが、吹っ飛ばされようが、シュウはリュウに斬りかかる。

リュウはそんなシュウの必死な様子を見つめつつ、シュウの身体の状態に目を落とす。

（精神が肉体を凌駕するとはことのとだな）

と思った。

満身創痍だというのに、なおも俊敏に動くシュウ。

動きは鈍るどころか、素早くなっていく。

（親父に一撃っ！　親父に一撃っ！　親父に一撃っ！）

シュウの傷口から噴出した血が、リュウの身体を赤く染めた。

「シュウっ！」

とリンクが叫ぶと同時に、リュウがシュウを押しやる。
後方に飛ばされ、砂埃を立てながら踏ん張って止まったシュウ。
その足元の地には、ぽたりぽたりと血が滲んでいく。

一方、後方に飛び退ったリュウが、剣を構えなおして言う。

「リンク、ケリーを呼べ」

その台詞は決着の時を意味していた。

リンクが慌ててケリーがいるところまで駆けて行く一方、シュウも剣を構えなおした。

激しく息を切らしているシュウ。
その瞳はリュウを真っ直ぐに見つめていた。

「親父に一撃っ…！　オレは親父に一撃っ……与えるんだっ！！！」

そう絶叫するなり、リュウへと突進して行ったシュウ。
この最後の一太刀に、残りの力の全てを注ぎ込む。

同時にシュウへと向かって突進したリュウの目が、一瞬丸くなった。

（――速ぇっ…！）

中段に飛んできた刃を避けようと、腰を捻ったリュウ。

シュウの身体に一太刀浴びせた。

突進し合ってから、ほんの一秒後。

遠くから思わず口を塞いで見つめる一同の目に、２つの身体は背を向き合わせる形で立っていた。

２つの身体を包み込む砂埃。

その中、シュウが小さく口を開く。

「…お…親父に…一撃……与え…たら……、そしたら…、そしたら親父っ……――」

オレのこと『強くなった』って褒めてくれる…？

そう、認めてくれる……――？

リュウの最後の一太刀で出来た傷口から、大量の血を流したシュウ。

気を失い、うつ伏せの形で地に倒れ込んだ。

はっとして振り返り、リュウがこちらへと駆けていているケリーに向かって声をあげる。

「早くしろ！！」

「はいっ！！」

とケリーの返事を聞きながら、リュウはシュウに駆け寄る。

うつ伏せになっているシュウの身体を仰向けにし、その肩を抱く。

全身を見渡してみると、ケリーの治癒魔法でなければ完治しないほどの重傷だった。

数秒後、やって来たケリーがシュウの全身に治癒魔法を掛けた。

シュウはまだ目を覚まさないが、全身の傷が癒えたのを確認してリュウは小さく安堵の溜め息を吐く。

「リュウっ！！」

と、キラの声。

ケリーの後方を走ってやって来た一同が、慌ててシュウの様子を見る。

そして大丈夫であること確認して安堵し、リュウに続いて溜め息を吐いた。

「ところでリュウ、シュウは――」

おまえに一撃を与えられなかったのか？

と訊こうとして、キラはリュウの身体に目を落としてはっとし、言葉を切った。

リュウの右腰のところ。

防具が破壊されている。

そしてそこから見えるリュウの皮膚には、１０ｃｍほどの一本の赤い線が出来ていた。

シュウが目を覚ますと、カレンの顔が正面にあった。
一度瞬きをしたあと、カレンの膝枕で眠っていたのだと気付く。

「シュウっ！　良かった、目を覚ま――」

「親父っ！」

とカレンの言葉を遮り、危うくカレンに頭突きしそうになりながら身体を起こしたシュウ。
辺りを見渡し、リュウの姿を探す。

「あっ…、親父っ……！」

リュウは遠くでグレルと戦っていた。
バケモノ対決なものだから、このトーナメントバトル１の凄まじさだ。

シュウを挟んで座っていたリン・ランがシュウに抱きついて泣き声をあげる。

「ふにゃあぁああぁぁあぁぁあんっ！　良かったのだ兄上ぇぇえええぇえええぇぇえぇえぇえぇえっぇえぇえっ！！」

よしよしとリン・ランの頭を撫でながら、シュウはやって来たレオンの顔を見上げた。

「ね、ねえ、レオ兄、親父は――」

「今決勝戦中だよ」

「そ、そかっ…！　それで、オレは…そのっ……」

微笑んだレオン。

シュウが訊こうとしていることを察し、その答えを口にした。

「与えたよ、シュウ。リュウに一撃」

「――えっ？」

「リュウの防具を破壊して、見事にね」

「――ほ、本当っ！？」

とシュウが家族や仲間の顔を見回すと、皆が笑顔で頷いた。

それを確認したシュウに、とてつもない喜びが込み上げてくる。

「そっかオレ…、オレ、親父に一撃与えたんだ…！　与えられたんだっ……！！」

と、シュウは右拳をぎゅっと握り、

「イヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオイっ！！！」

ガッツポーズでぴょーんと舞い上がった。

超一流ハンター級の決勝戦は3時間もの時間を掛けたのち、リュウが勝利。

バケモノ対決だったが故にどちらも相当の重傷を負っていたが、

「腹減って目が回るぞーっと」

なんて言って腹からでかい音を出し、グレルの方が先に倒れたようだった。

ケリーに治癒魔法を掛けてもらったあと、リュウとグレルが一同のところへと歩いて戻ってくる。

（あっ、親父が戻ってくるっ…！）

と、指先をびしっと伸ばして直立したシュウ。

それを見ながらカレンが笑った。

「そんなに緊張しなくたって、お義父さまはきっと褒めてくれるわよ、シュウ」

「お、おうっ…！」

と胸を膨らませ、シュウはリュウを待つ。

（親父、オレのこと『強くなった』って…、『強くなった』って…！）

３０秒後、戻ってきたリュウ。

びっしょりと掻いた汗をキラから渡されたタオルで拭いながら、直立しているシュウに顔を向けた。

「おう、気がついたかシュウ」

「う、うんっ…！」

「んじゃ帰るぞ」

「え」

「早くイトナミしてえ」とリュウがキラを左腕に抱っこする。「ミーナ、瞬間移動頼む」

「い、いやいやいや！　ちょっと待って！」と、慌てて言うシュウ。

「そ、そりゃオレも、みじゅたまぱんちゅのカレンとイトナミしたいけどさっ？」

「だから早く帰ろうぜ」

「そ、その前にっ…！」

「何だよ」

「だ、だからっ…！」

「さっさと言え」

「そ、そのぉっ……」と口ごもったあと、シュウは思い切って訊いた。「オ…オレ、強くなった！？」

「……」

シュウの顔を無言で見つめるリュウ。

数秒後、ミーナに顔を向けた。

「おい、早く瞬間移動し――」

「な、なあ、おい親父っ！？」とリュウの言葉を遮り、シュウはもう一度訊く。「オレ、強くなった！？　なあなあなあっ！？」

「うるせーなあ」

と眉を寄せ、再びシュウの顔を見るリュウ。

シュウはどきどきとしながら待つ。

『強くなった』

他の誰からでもない、最強の男――父親・リュウからのその一言を待つ。

その口元に注目して待つ。

（早く、親父…！　早くっ……！）

心の中、催促するシュウ。

他の一同も皆、心の中で同じことを言っていた。

だが、リュウの口から出た言葉は思いもよらぬ言葉だった。

「たった一撃与えたくらいで笑わせんな、バーカ」

第１５９話　長男の決意

満身創痍ながら、リュウに一撃を与えたシュウ。
トーナメントバトルが終わり、リュウに思い切って訊いた。

「オレ、強くなった！？」

期待した。

『強くなった』

と褒めてくれることを期待した。
認めてくれることを期待した。

だが、リュウの口から出た言葉は思いも寄らぬ言葉だった。

「たった一撃与えたくらいで笑わせんな、バーカ」

「――えっ…？」

と、首をかしげる。
言葉を理解するまでに時間が掛かってしまう。

呆然としてしまったシュウの周りの一同。
カレンが最初に声をあげた。

「ちょ…ちょっとお義父さま！？　何なんですのそれ！？」

「まんまだろ」

「しっ、信じられないのですわっ！　お義父さまに一撃を与えるということが、どれほど凄いことか分からないんですの!?」

「そ、そうですなのだ父上っ!!」とリン・ランが続く。「兄上のこと褒めてあげてくださいなのだっ!!」

カレンとリン・ランの甲高い声が辺りに響く。

それを聞きながら、シュウの頭は徐々に理解していく。

（そうか…、オレ、親父に褒めてもらえなかったんだ。認めてもらえなかったんだ。そうか…、そうか……）

頭の上にシュウの手が乗って来て、カレンとリン・ランは振り返った。

シュウが言う。

「いいよ、カレン、リン・ラン。帰ろう」

「シュウっ…!?」

「兄上っ…!?」

「もう……、分かった」

結局のところ、

（親父は、オレが親父を超えたときしか褒めてくれないってことだ）

ミーナの瞬間移動で葉月島へと戻ってきたシュウ一同。
自宅屋敷の前、ドアに手を掛けたリュウをシュウが呼び止める。

「親父」

「あ？」と、振り返るリュウ。「何だ」

「今から母さんに頼みたいんだけど」

と、シュウはリュウの左腕に抱っこされているキラに目を向ける。

「キラに頼みたいって、何をだ」

「修行」

「い、今からか？」

と、キラが戸惑いながら声を高くした。
頷くシュウから顔を逸らし、リュウが家の中に入って行きながら言う。

「俺とキラはこれからイトナミだって言ってんだろ。邪魔すんな、バーカ」

「……」

リュウとキラの背を見送ったあと、無言で裏庭の方へと向かって

いくシュウ。
それを、
「あっ、シュウ！　今日は僕が相手するよ！」
と、レオンが慌てたように追いかけて行った。
夫婦の寝室に入ったリュウとキラ。
リュウの腕から降ろしてもらい、キラは訊く。
「こらリュウ。何故だ。何故シュウを褒めてやらなかったのだ」
「まだ褒めるに値しねーだろ」
「素直じゃないぞ」
と、溜め息を吐いたキラ。
その黒猫の耳に、少しして裏庭の方から刃を交える金属音が聞こえてきた。
いつもより荒々しく感じさせるその音。
今のシュウの姿が脳裏に浮かんでくる。
（必死だな、シュウ…。最強の父親…リュウに褒めてもらおうと、認めてもらおうと必死だな……）
キラはベッドに座ったリュウに顔を向けた。
「そう遠くないうちに、シュウはおまえを超えようと挑んでくるかもしれないぞ」

キラに横顔を見せているリュウ。
静かに口を開いた。

「……キラ」

「ん」

「……教えてないよな」

「む？」

「シュウにもジュリにも、破滅の呪文教えてないよな」

「あ…当たり前ではないかっ！」

キラは声をあげ、リュウに駆け寄った。

膝に肘をつき、手を組んでいるリュウ。
よく見るとその手が少し震えている。

「あいつの…シュウの中の闇の力がどれくらいあるかなんて俺には分からねえけど、あいつが今の魔力で破滅の呪文を唱えたら危ねえことくらいは分かる。あいつ、全身全霊の力を込めたからとはいえ、俺の魔法押し返しやがったからな。破滅の呪文を唱えて消滅することはないものの、相当の重傷を負うことも分かる。それで治癒が遅れたらシュウはそのまま死――」

「リュウっ！」

リュウの言葉を遮ったキラ。
胸元にリュウの頭を抱く。

「変なことは考えるな、リュウ！　私はシュウに、リュウから受け継いだ火・水・風・地・光魔法と剣術で強くなるよう言ってある！　それに何より、私はシュウに教えぬ！　破滅の呪文を、何が何でも絶対に教えぬっ…！」

「ああ…、そうだよな。そうだよな……、キラ」

キラの胸に顔を埋め、乱れかけた呼吸を整えるリュウ。

その人間の耳にも聞こえた。
裏庭から、刃を交えた際に起こる金属音。
シュウが必死にこのリュウを超えようとしていることを裏付けるかのような、激しく荒々しいその音。

（そうだ…、シュウ。おまえはその剣術と、俺から受け継いだ力だけで強くなれ。決して闇の力――破滅の呪文なんか使うなよ、シュウ。破滅の呪文なんか…、破滅の呪文なんか――）

恐ろしいものでしか、ないんだ――。

そろそろ日付が変わろうか時刻。
シュウはようやく本日の修行を終え、自分の部屋へと戻ってきてシャワーを浴びていた。

レオン相手に修行をした。
レオンはやはり強い。
だが、その力も俊敏さもキラには及ばない。
故に、レオンの身体を何度も傷つけてしまった。
（ごめん、レオ兄…）
だがそれは己が大きく成長したことを意味していた。
（オレは成長したんだ…、以前に比べて、凄く強くなったんだ。レオ兄に何度も攻撃を当てられたんだから、それに間違いない。オレは、たしかに強くなったんだ。だから親父に一撃当てられたんだ）
だけど、リュウは『強くなった』と褒めてくれなかった。
認めてくれなかった。
とても、とても期待していたのに。
（結局のところ親父は、オレが親父を超えたときにしか褒めてくれないってことだった）
だからトーナメントバトルで疲れた身体に鞭を打って、帰ってから修行をした。
死に物狂いになってした。
聞きたかった。
どうしても、聞きたかった。
（『強くなった』って…、親父から――最強の男から『強くなった』

って言葉を聞きたかった。言われたかった。褒められたかった。認められたかった……！）

ぎゅっと握り締められたシュウの右拳。
それが目の前の壁に直撃し、大理石のタイルにヒビが入って砕ける。

「親父っ…！　オレのこと、強くなったって言ってくれよっ……！」

そう願うシュウの奥歯が、折れそうなくらいに歯軋りを立てる。
視界がぼやける。

期待していた分、その言葉を聞けなかったことは辛かった。

（親父を超えられる方法…！）

シュウは必死になって考える。

（親父を超えられる方法…！　親父を超えられる方法…！　今のオレに、親父を超えられる方法っ……！）

それを知って、早く聞きたい。

リュウを超えて、早く『強くなった』と聞きたい。

褒められたい。

認められたい。

リュウから、早く――！

「――あっ…！」

ふと、シュウの脳裏に一匹の純粋なブラックキャットの姿が浮かんだ。

それは母親ではない。

（――タマ和尚っ…！）

葉月島の離島に暮らしている、キラの父の友人だったというタマ。

彼なら知らないわけが無い。

（破滅の呪文を…！）

それがあれば、

（オレは…オレはきっと親父を超えることができる…！　破滅の呪文さえあればっ……！）

そして、

（親父に、今度こそ『強くなった』って褒めてもらえる…！　認めてもらえる……！！）

そう確信した途端、シュウは脱衣所に出た。

タオルを腰に巻き、カレンが待っている部屋へ飛び出る。

「カレンっ！」

シュウが大きな声を出したものだから、ベッドでごろごろとして

いたカレンが驚いた顔をして振り返った。

「な、何かしらシュウっ？」

「オレ、破滅の呪文を教えてもらう！」

「――ええっ？」

と、声を裏返したカレン。

ベッドから飛び起きて、シュウのところへと駆けて行く。

「と、突然何を言うのっ？　シュウっ？　教えてもらうって、誰にっ？　お義母さまは教えてくれないのでしょうっ？」

「うん、母さんは教えてくれないよ。だから、タマ和尚に」

「タマ和尚さまにっ？」

シュウが頷き、続ける。

「破滅の呪文があれば、オレは親父のこと超えられるんだ…！」

「…そ、そうかもしれないわね。でも――」

そんなに焦らなくても良いんじゃない？

そう言おうとしたカレンの言葉を、シュウが遮る。

「そしたら親父、今度こそ…今度こそオレのこと『強くなった』って褒めてくれるんだ。そう、認めてくれるんだ……！」

そう、必死な表情で言うシュウ。
リュウから早く『強くなった』と言われたいと、強く訴えている。
それを見た瞬間、カレンは口から出かけたことをまた飲み込んでいた。

「そうねシュウ…、そうね。破滅の呪文を唱えてお義父さまを超えたら、お義父さまは今度こそシュウのこと『強くなった』って褒めてくれるわね…、認めてくれるわね。……でも」と、カレンは壁のカレンダーに顔を向けた。「タマ和尚さまのところへ行くって、いつ？」

はっとしたシュウ。
今すぐ訊きに行く勢いでバスルームから飛び出してきたが、よく考えればそういうわけには行かなかった。

「う、うーん…、親父にも、母さんにも知られない日。それからオレが破滅の呪文を覚えないよう願ってるだろうリンクさんやミーナ姉、レオ兄、グレルおじさん……、つまり、親父を心配して庇う大人たちに知られない日がいいんだけど」

眉を寄せ、もう一度訊くカレン。

「それっていつかしら？」その直後、はっとして思い出した。「年末――大晦日の前日っ…！」

去年のリュウとキラの誕生日――大晦日の前日、大人たちがこの屋敷にも個々の自宅にもいなかった。
そのとき、シュウは毎年そうなのだと言っていた。

毎年その日は、大人たちはリュウとキラが昔住んでいたマンションに行っているのだと行っていた。

キラが昔、破滅の呪文を唱えた、その日だけは。

それだ、と指を鳴らしたシュウ。

意を決して続けた。

「オレはその日、タマ和尚のところへ行って破滅の呪文を教えてもらう！」

そして、

「オレは親父を超える！」

第１５９話　長男の決意（後書き）

６日の８時４３分ごろメールくださった読者さまへ。
ゲフｗ　ありがとです。
まるで気付かなかった……ｏｒｚ

第１６０話　行く手を阻む者　～前編～

文月島でのギルドイベント『全島ハンター・各階級別トーナメントバトル』が終了したのは１０日前のこと。
自宅屋敷にいる大人たち――リュウとキラ、レオン、グレルが一斉にバスタイムへと入って行ったこの日、シュウとカレンは妹たちを自分たちの部屋に集めた。

「いいか、大きな声を出すなよ？　母さんやレオ兄の猫耳に聞こえちまうから」

と、シュウは口元に人差し指を立てながら、妹たちの顔を見渡した。
妹たちが承諾して、うんうんと頷くのを確認したあと、シュウは続ける。

「カレンにはもう話してあるんだけど…。…オレ、タマ和尚のところに破滅の呪文を教えてもらいに行く」

それを聞き、ぱちぱちと瞬きをしたシュウの妹たち。
サラを除いて絶叫しかけたが、シュウがリン・ランの口を、カレンがミラとユナの口を、サラがマナとレナの口を瞬時に塞いだ。

「大きな声出すなって言ってんだろ…！？」

ともう一度言うシュウの顔を見上げて頷き、承諾して再びうんうんと頷いたサラを除く妹たち。

驚いて当然だった。

サラを除く妹たちは、シュウが闇の力を持っているということをまだ知らされてなかったから。

サラが言う。

「近いうちにそうするんじゃないかって思ってたよ、兄貴。親父のこと、早く超えたいんでしょ？　それで、早く『強くなった』って褒められたいんでしょ？　認められたいんでしょ？」

「ああ…」

と頷いたシュウの胸元の服を、リンとランが握った。

その黄金の瞳が困惑したように揺れている。

「あ、兄上っ…？　は…破滅の呪文、と、唱えても、だ、大丈夫ですかなのだっ……？」

「おう」と笑い、リン・ランの頭の上に手を乗せるシュウ。「オレはハーフだから、母さんの闇の力には到底及ばねえ。だから破滅の呪文を唱えても消滅するなんてことはねーから安心しろよ」

「そ、そうでしたかなのだーっ…！」

と安堵して溜め息を吐いたリン・ラン。

同時にミラや三つ子も安堵したようだった。

シュウが続ける。

「だから、オレは大晦日の前日――大人たちがいない日にタマ和尚のところへと行くわけだけど、おまえたち言わないでくれるか？

大人たち――親父や母さん、リンクさん、ミーナ姉、レオ兄、グレルおじさんに」

リン・ラン、サラと承諾する。

「分かりましたなのだ、兄上っ」

「もちろんだよ、兄貴。リーナにも言っておく」

レナ、マナも続いた。

「分かったよ、兄ちゃん。兄ちゃんが破滅の呪文唱えると思うとちょっと怖いけどっ…！」

「兄ちゃんのためだもんね…。分かったよ、兄ちゃん…」

「サンキュ」

と、サラやリン・ラン、マナ、レナに笑顔を向けたシュウ。

戸惑っているミラとユナに顔を向けた。

ファザコンの2匹は、リュウのことを気にしているのだろう。

「お、お兄ちゃん、パパに内緒でなんて、そんな…。…ね、ねえ、ユナ？」

「う、うん……」

カレンが口を開いた。

「お願いよ、ミラちゃん、ユナちゃん。お義父さまやお義母さま、リンクさん、ミーナさん、レオンさん、グレルおじさまにバレてしまったら、シュウは破滅の呪文を覚えられないのよ」

「でもカレンちゃ――」

「お願いよ」と、ミラとユナの言葉を遮り、カレンは続ける。「シュウはお義父さまを超えて、お義父さまに『強くなった』って褒められたいのよ。そう認められたいのよ。それには破滅の呪文が必要なの。お願いよ、ミラちゃん、ユナちゃん…！　お願い……！」

とカレンに懇願され、ミラとユナは顔を見合わせて困惑する。

その頭の上に、シュウの手が乗った。

シュウがカレンに続く。

「頼むよ、ミラ、ユナ…！　今のオレには、破滅の呪文が必要なんだよ。だから頼むよ…！　オレ、親父を超えたいんだ……！」

必死なシュウの顔を見つめ、また困惑しながら顔を見合わせたミラとユナ。

数秒後、そろって頷いた。

ミラ、ユナと言う。

「わ…、分かったわ、お兄ちゃん。私たちもパパたちには内緒にしておくわ」

「だ、だから…、破滅の呪文、覚えてきてっ…！　そして、パパに『強くなった』って褒めてもらって……！」

「おう。ありがとな、おまえたち」

そう言って微笑み、シュウの腕がミラとユナを抱き締める。

カレンが時計を気にしながら言う。

「お義父さまたち、そろそろバスタイムを終えるかもしれないのですわ」

それを聞いた妹たち。

はっとして慌てたように各々の部屋へと向かっていく。

だが、戸口のところでサラとマナが足を止めていた。

「どうした？」

と、首をかしげたシュウ。

サラが俯きがちにシュウのところへと戻ってきて、シュウの肩に額をつけた。

「サラ…？」

「…ご、ごめん…、突然怖くなった……」サラの声が少し震えている。「あ…兄貴、本当に大丈夫だよね…？　は…破滅の呪文唱えて、死んだりしない…よね……？」

「大丈夫だって言ってんだろ」

と溜め息を吐いたシュウ。

サラの身体を抱き締めながら、改めてサラはリュウ似だなと思う。

「大丈夫よ、サラ。大丈夫」とサラを宥めたあと、カレンが戸口に立っているマナに顔を向けた。「マナちゃんはどうしたのかしら？あ、やっぱり怖いのっ…？」

「……」

首を横に振ったマナ。

シュウとカレンの顔を見て、口を開いた。

「…話ずれるけど、変なもの頼まれたなあと思って…」

「え？」

とシュウとカレンが声をそろえると、マナが続けた。

「今月、ミラ姉ちゃんとレオ兄、グレルおじさんの誕生日パーティーでしょ…？」

「うん？」

「レオ兄から変な薬頼まれたんだよね…」

「へ？」と眉を寄せて振り返ったのはサラだ。「変な薬って、どんな薬？」

「変な薬っていうか…、強めの睡眠薬を人間用で…。強めっていっても、もちろん死なない程度にだけど…」

サラに続き、シュウとカレンの眉も寄る。

シュウが言う。

「強めの睡眠薬・人間用？　レオ兄、誰に使う気なんだろ」

「人間用でしょう？」と、カレンが続く。「あたくしたちの中で人間て言ったら、あたくしとお義父さまとリンクさん、ミヅキくんよね」

「おい、カレン。グレルおじさん忘れてるぞ」

「あらいけない。グレルおじさま熊さんじゃなかったわ」

「うーん、うーん…」と唸るサラ。「レオ兄、何考えてるんだろう。アタシにも言わないなんて…。……って、あっ！」

ぱちんと指を鳴らした。

「大晦日の前日に、親父に飲ませるんだよ、きっと！　ほらさ、その日の親父は尋常じゃないだろうから、落ち着かせるために飲ませるんじゃないかな」

「ああ」と声を高くしたシュウとカレン。「なるほど」

と納得した。

続いて納得したらしいマナが、自分の部屋へと戻っていく。

「おやすみ…」

と言ってから。

「アタシも部屋戻るわ」

と言ったサラ。

戸口まで歩いて行って、またシュウに振り返った。

「あ…。ねえ、兄貴？　身体、大丈夫なわけ？」

「ん？」

「最近、また修行の量増えたから」

「おう。トーナメントバトルのときみたいに、破滅の呪文を唱える前にボロボロにされてられねーからな。それに、オレはほとんど親父に近寄れなかったから…。破滅の呪文って、全て唱え終わるまでどれくらいの時間を要するのか分からねえけど…、親父にくっ付いて唱えないとダメだと思うんだよ」

「たしかにね。ちょっとでも距離があったら親父は防御の態勢を取るか、瞬時にその場から逃げ出すからね。破滅の呪文を唱えるにしても、親父にしがみ付いて唱えないと倒せない……か」

「そういうこと」

と言ったシュウの顔を数秒の間見つめたあと、レオンの呼ぶ声が聞こえてきてサラは部屋へと戻って行った。

2人きりになった部屋の中。

カレンはシュウの首に手を伸ばして抱き締める。

「カレン？　…おまえも怖いのか？」

シュウに抱き締められながら、カレンは答える。

「まったく怖くないと言ったら嘘になるわ。消滅することはないものの、あなたはその呪文で傷付いてしまうのですもの。怖いに決まっているわ」

困惑するシュウ。

「ごめん…」

と呟いた。

「……でも」とカレンが続ける。「思うように行かなくて、苦しくて、もがいているあなたを見ていることの方がとても辛いわ。だから…、破滅の呪文をタマ和尚さまから教わってきて。そして、お義父さまを超えて、『強くなった』って褒めてもらって…。認めてもらって…、シュウ。あたくしは、あなたの喜んだ顔が見たいわ」

「…うん」と微笑んだシュウ。「ありがとう。オレ、カレンが嫁さんで良かった」

そう言って、妻に口付けた。

ついでに、

「フィーバァァァァァァァァァァァっ！！」

イトナミもした。

トーナメントバトル以来、さらに修行を増やしたシュウ。
修行は早朝5時から始まり、通常ならば8時間は掛かろう仕事をその半分で終わらせ、帰ってきて日付が変わる時刻までまた修行に励む。
そのあとしっかりとイトナミもしてから眠るが。

リュウとキラの誕生日――大晦日の2日前、つまりシュウがタマのところへと行く前日のこと。
大人たちが明日0時を回ったときから家を開けるということで、この日のシュウの修行はいつもより1時間ほど早く切り上げられた。

裏庭から玄関の方へと向かって歩いて行きながら、キラが傍らを歩くシュウに言う。

「トーナメントバトルのときから、またずいぶんと成長したものだなシュウ」

「そ？」

「ああ」

「そかっ…」

と笑ったシュウの顔を見ながら、キラが続ける。

「良いか、シュウ。おまえは剣術と、リュウから受け継いだ力で強くなれ」

その台詞を、キラはトーナメントバトル以来たびたび口にしてきた。

そのつど適当な返事をしてはぐらかすシュウ。

一度たりとも、承諾はしかなった。

闇の力――破滅の呪文は使わないと、約束しなかった。

（オレは明日、タマ和尚のところへと言って破滅の呪文を教えてもらう。そして、それを使って親父を超えるんだ）

日付が変わるまでに、あと約1時間。

大人たちがこの屋敷からいなくなったのを確認したあと、シュウは港へと向かう。

そして葉月島の離島――タマがいる島へと向かって出航する船に乗る予定だ。

（ごめん、母さん…。ごめん…、ごめん……）

胸が痛むのを感じながら心の中で何度もその言葉を繰り返し、シュウは屋敷の中に入り自分の部屋へと向かって行った。

汗だくになった服をカレンに渡し、備え付けのバスルームに入ってシャワーを浴び、部屋に出る。

するとカレンがクローゼットを開けて、シュウが新たに着る服を選びながら訊いた。

「お義父さまたちがミーナさんの瞬間移動でお屋敷から出て行ったあと、リーナちゃんがお屋敷に来て、そして瞬間移動でシュウを港

まで送ってくれるのよね？」

「うん。帰ってきてまたここ葉月島本土に着いたらリーナに電話して迎えに来てもらうよ」

「何時ごろに本土に戻ってくる予定？」

「大晦日になる前には、必ず戻ってくる」

そう言って、シュウはカレンが持ってきた服を身に着け、剣を腰に装備した。

やがて時刻は0時を回り。

耳を済ませるとミーナの声が聞こえてくる。

「ミーナとリンクが来たぞーっ！」

ここから隣の隣の部屋――サラ・レオンの部屋のドアが開いたのが分かった。

レオンのものだろうスリッパが1階へと下りて行く音が聞こえてくる。

少しして2階へと向かって言っただろうキラの声。

「では留守を頼んだぞ、おまえたち」

「うん、いってらっしゃい」

と、部屋にこもったまま声を大きくして言ったシュウ。

妹たちの部屋からもそんな声が聞こえた。

1階から大人たちの気配が消えたあと、シュウは部屋から出た。
同時に妹たちの部屋のドアも開く。

「行くのね…、お兄ちゃん」

と、ミラ。
シュウが頷くと、サラが携帯電話を手にした。

「もしもし、リーナ。いいよ、来て」

とサラが言い終わるか終わらないかのうちに、リーナが玄関先に瞬間移動で現れた。
そこから2階に向かって叫ぶ。

「行くで、シュウくん！　船が出るまでに、まだ少し時間あるけどな！　もう行っててもええやろ！」

「おう」

と返事をしたシュウ。
緩やかな螺旋階段を下りて玄関に辿り着いた。

靴を履き、妻や妹たちの顔を見回す。

「それじゃ、行ってくる。留守の間気をつけろよ」

「ん、任せて兄貴。アタシだってもうか弱くないしさ」

とのサラの言葉を確認したあと、シュウはリーナの瞬間移動で自

宅屋敷を後にした。

シュウとリーナがいなくなって数秒の間、屋敷の中が静まり返った。

玄関先に立ったままのシュウの妹たち。

リン・ランが最初に口を開いた。

「本当に行ってしまいました…なのだ……」

サラがリン・ランの頭の上に手を乗せる。

「大丈夫だよ。兄貴は破滅の呪文を唱えたって、死んだりしないから」

「……」

無言で頷き、部屋へ戻ろうと階段の方を向いたリン・ラン。

びくっと肩を振るわせた。

「――は、母上っ…！」

リン・ランのそんな言葉に、はっとして振り返ったカレンとシュウの妹たち。

2階へと続く階段の中間のところ。

キラとミーナが立っていた。

「お…お義母さまっ…！」と戸惑いながら声をあげたカレン。「ど、どうしてまた戻ってっ…!?　お義父さまと昔暮らしていたマンシ

ョンへ行ったのではなかったのですかっ……！？」

カレンとシュウの妹たちの顔を1人1人、無言で見つめるキラ。
いつもは無邪気で温かな黄金の瞳は、冷たく光っているようにも見える。

「玄関先（そんなところ）で何をしている？　おまえたち？」

そう訊きながら、ミーナと共にゆっくりと階段を下りてくるキラ。

マナが訊く。

「マ…ママ、パパはどうしたのっ…？」

「眠らせた。マナ、おまえがレオンの誕生日にやった睡眠薬を飲ませてな」

「――」

先月のレオンの誕生日、マナに強めの睡眠薬（人間用）を求めたレオンに、疑問を抱いたシュウとカレン、サラ、マナ。
そのときは、この日――大晦日の前日、尋常ではなくなってしまうだろうリュウを落ち着かせるために飲ませるのだろうと思い、その疑問は晴れた。
実際、それは外れてはいないのだろう。

だが、真の目的は違った。
リュウを眠らせ、その隙にこうやって確認するためだった。

シュウの様子がちゃんとここにあるか、確認するためだった。

シュウの考えていたことは何もかもキラにばれていたのだと、カレンや妹たちは気付く。

「…シュウの靴がないな」

と、玄関へと降りてきたキラ。

悪あがきだと分かっていても、カレンは必死に嘘をつく。

「シュ…、シュウはお買い物へ行ったのですわ、お義母さまっ！コンビニへっ！」

「そ、そうですなのだ母上っ！」と、リン・ランが続いた。「あ、兄上は、コンビニへわたしたちが頼んだプリンを買いに行きましたなのだっ！」

まるでカレンやリン・ランの言葉を聞いていないかのようなキラ。

ミーナに顔を向けた。

「ミーナ、港へ瞬間移動を頼む」

「マっ…、ママ待って！」と、サラがキラにしがみ付いた。「お願い、兄貴のこと行かせてあげてよっ！」

「離せ、サラ」

「兄貴は、破滅の呪文が必要なんだよっ！」

「……させぬ」そう呟いたキラ。「破滅の呪文など、覚えさせはせぬ！！」

そう声をあげ、サラの身体を突き飛ばした。
飛ばされたサラの身体は後方にいた三つ子に当たり、４匹まとめてドアの外へと吹っ飛ばされる。

シュウのところへと行かせまいと、続いてキラにしがみついたカレンとミラ、リン・ランだったが、

「私の子供たちにはっ…、リュウの愛する子供たちには、破滅の呪文など必要ないのだ!!」

やっぱりあっさりと突き飛ばされ、床に倒れこんだ。
その隙にキラは、

「ミーナ、港だ。急げ」

その場から姿を消してしまった。

リーナの瞬間移動で港へとやって来たシュウ。
船の出航までにまだ時間があった故に、外でリーナと立って話をしていた。

そこへ、後方から聞こえてきた声。

「こんなところで何をしている?」

生まれた時からずっと聞いてきたその声に、シュウの肩が小さく跳ね上がった。

リーナの足はぴょんと地から離れた。
恐る恐る振り返る。
「――か…母さんっ……！」
シュウとリーナの前方、約５ｍのところにキラと、それからミーナの姿があった。
「お、おかんっ…！　な、何でここにおんねんっ！」
とリーナがぎょっとしながら言うと、ミーナが眉を吊り上げた。
「おまえは何をしているのだ、リーナ！　おかんは許さぬぞ！」
「ゆ、許さぬって――」
「シュウ」
リーナの言葉を遮ったキラ。
突然、微笑んだ。
いつも見る優しいその微笑を、シュウはこの時だけは恐ろしいと感じた。
「…か…母さん？」
と、たじろぐシュウ。
リーナは逃げるようにシュウの背に回る。

変わらず微笑んでいるキラが言った。

「母上の言葉を忘れたとは言わせないぞ、シュウ？」

第１６１話　行く手を阻む者　～後編～

大晦日の前日０時ちょっと過ぎ。
シュウはタマから破滅の呪文を教えてもらうため、タマのいる離島へと出航する船に乗ろうとリーナの瞬間移動で港へと来ていた。

船が出航するまでまだ時間があった故に、リーナと港で立って話をしていたシュウ。
聞き慣れた声が後方から聞こえてきて振り返った。

「こんなところで何をしている？」

キラの姿がそこにあった。
ミーナもいる。

微笑んだキラ。
いつもは優しいその微笑が、この時だけはシュウの瞳に恐ろしく映った。

「母上の言葉を忘れたとは言わせないぞ、シュウ？」

一歩一歩ゆっくりと近づいてくるキラ。
シュウはたじろいでしまいながら訊く。

「や…約束？」

「言ったであろう。おまえは剣術と、リュウから受け継いだ火・水・風・地・光の力で強くなれと」

「……」

「なあ、シュウ？　母上は言ったであろう？」

じわりじわりと近づいてくるキラに、シュウの背の服を両手で握っているリーナが声を震わせる。

「シュ…シュウくん、キラ姉ちゃん怖いでっ……！」

「…さ、下がってろ、リーナ」

とシュウが言うと、リーナが慌てたようにシュウの背から抜け出し、ミーナのところへと駆けて行った。

ミーナのデコピンを食らい、リーナが額を押さえる。

「ふにゃっ！」

「何をしているのだ、おまえは！　余計なことをするでないっ！」

「よ…、余計なことなんかちゃうわっ！」と、リーナは眉を吊り上げた。「シュウくんのためや！　シュウくんは破滅の呪文を覚えて、リュウ兄ちゃんに『強くなった』って褒めてもらいたいんや！　認めてもらいたいんや！　だからうちは――」

「黙れ！」とリーナの声を遮り、ミーナはまたデコピンを食らわせる。「シュウが破滅の呪文を覚えるということは、リュウを再び恐怖のどん底に陥れるということだ！　キラはもう2度とそんなことをリュウに味あわせはしないのだ！　キラの邪魔をするな！」

「な…なんやねん！　おかん、いっつもいっつも、キラ姉ちゃん、

キラ姉ちゃんて！　他の人のことも考えてやったらどうやねん！
シュウくんのことも、考えてやったらどうやねん！」

そう食って掛かってきたリーナの顔を、数秒の間見つめたミーナ。
静かに口を開いた。

「リーナ…、おまえはわたしたち主を持つ猫モンスターのことを何も分かっていないのだ」

「当たり前やんか！　うち、誰かのペットちゃうんから！　分かるわけないやんか！」

「ならば教えてやる。わたしたちペットの猫モンスターにとって、主の幸せは絶対だ。それが己の幸せでもあるから。己の身が滅びようと、相手が大切な我が子だろうと、主の幸せのためなら何だってする…！　主の幸せを阻む者は許さぬ……！　恐怖のどん底に陥れられるのがリュウではなくリンクだったら、わたしはキラと同じことをする！！　だから…、だからわたしはキラの味方だ！！」

と牙を剥いて怒声をあげるミーナに、リーナの肩が震えた。
のは一瞬で。

「主の幸せもなにも……、おかん、めっさおとんに苦労かけてるやん」

「む？」

「おかん金使いまくりで、おとん苦労しまくりやで」

「何を言う。そんなわけないぞーっ♪」

と笑う、キラを慕うが故に天然バカになってしまったミーナ。
思わず無言になってしまうリーナの一方。

シュウとキラの間の距離は縮まっていく。
微笑んでいるキラは、シュウにゆっくりと近づいていきながら訊いた。

「母上の話を訊いているか、シュウ？」

「……」

「母上は、何度も何度もおまえに言ったはずであろう？」

「……」

「おまえは剣術と、リュウから受け継いだ力で強くなれと」

「……」

「言ったであろう？　母上は、何度も何度も言ったであろう？　なあ、シュウ…？」

と、目の前まで寄って来たキラがシュウの頬に触れる。

キラの微笑んでいる顔を見下ろしながら、ごくりと唾を飲み込んだシュウ。
口を開いた。

「オレ…、一度も約束した記憶はないよ。闇の力を使わないなんて、

一度も言った記憶はないよ、母さん」

「ふ」

と短く笑ったキラ。
次の瞬間、消え失せたその笑顔。

「――！」

頬に爪が食い込むのを感じ、瞬時に後方に飛び退ったシュウ。
だが、

「この、バカ息子がぁっ！！」

完全に逃げ切ることは出来ず、キラの爪先がシュウの頬を引っ掻いた。

「シュウ、おまえは破滅の呪文を覚えると言うのか！！」

シュウの頬に出来た3本の赤い線。
触って血が出ていることを確認したあと、シュウは顔をあげてキラの顔を見つめた。

さっきまでの微笑はどこへやら、キラが牙を剥き出しにしてこのシュウを睨みつけている。

一瞬怯んでしまいそうになったものの、シュウははっきりと答えた。
もう、意を決しているのだから。

「覚える。オレは、破滅の呪文を覚える！　そして、親父を超えるんだ！！」

その言葉を聞いたキラの身体が怒りに震え、銀色のガラスのような髪の毛がゆらゆらと揺れ出す。

「ならばっ…！　ならばっ……！！」

靴を脱ぎ捨て、足の爪をも光らせたキラ。

シュウに飛び掛った。

「私を倒してから行けっ！！」

瞬時に抜刀し、キラの爪を受け止め始めたシュウ。

少し動揺した。

剣術の修行のときよりも、キラの攻撃を食らってしまう。

だが、

（そりゃそうか）

とすぐに気付いた。

（本来、猫モンスターは爪と牙で戦う。剣を持った母さんは強くなるどころか、逆に己の力を抑制されてたんだ）

しかも剣術とは違うものだから、どこから攻撃が来るのか見当がし辛い。

手の爪や足の爪、牙、蹴りも飛んでくる。

シュウが横に振るった剣を飛び跳ねて避け、

「甘いわっ！！」

シュウの顔面に回し蹴りを食らわせたキラ。

よろけたシュウの腹に爪を突き立ててアッパー。

浮いたシュウの身体目掛けて舞い上がり、高速後方宙返りで蹴り上げて、蹴り上げて、蹴り上げる。

その1発目はシュウの腹、2発目は胸、3発目は顎と、キラの足とその爪はだんだんと上へ。

（ってことは、4発目はどこにも当たらねえっ！　隙ありっ…！）

と思い宙で剣を振るったシュウだったが、

「甘いと言っているっ！！」

3発目の蹴りを食らわせたキラは、シュウの剣の刃に逆立ち状態で手を付き、半回転で停止。

「――なっ…！」

シュウが目を丸くする前、肘を曲げ、バネのように跳ねたキラ。

「シュウ、私はっ…！　おまえを行かせるわけにはいかぬっ！！」

今度は高速で逆回転。

前方宙返りで、地へと向かいながらシュウの脳天目掛けてカカト

落とし7連発。

シュウの身体が顔面からアスファルトに叩きつけられる。

うつ伏せに倒れ血を流しているシュウを見下ろしながら、キラは声をあげる。

「主（リュウ）の幸せを阻もうとする者は、息子のおまえとて許さぬのだ！！」

「……じ…時間がねえ……」

と言いながら、顔に治癒魔法を掛けるシュウ。

鼻が折れていた。

ふらふらと立ち上がるシュウを見つめながら、キラは眉を寄せた。

「時間？　何のだ」

「船が出るまでの時間だよ…」

離島へ行く船の煙突からは、とうに白煙が出ている。

早く乗らなければ、置いて行かれてしまう。

「オレは、タマ和尚のところに行って――」

「まだ言うかっ！！」

シュウの言葉を遮り、キラが爪を構えて再び飛び掛る。

「破滅の呪文、教えてもらうんだっ！！」

と絶叫すると共に、剣を力一杯振るったシュウ。
襲ってきた風の刃に、キラが顔の前で両腕を交差させて防御する。

「ふにゃっ！」

キラの銀色のガラスのような髪の毛が数本、はらりとアスファルトの上に落ちた。
続け様に、再び剣を振るったシュウ。

キラの着ているコートの肩の部分が切れ、腰の部分が切れ、ショートパンツを穿いて露出していた華奢な脚が切れる。
キラの脚を伝っていく真っ赤な血。

それを見た瞬間、はっとしたシュウ。
剣が止まる。
修行の時間でもないのに母親を傷つけるのには、やっぱり抵抗があった。

「…か…母さん…！　頼むから、引いてくれ……！」

「引いてくれ、だと？」と、キラが短く笑った。「笑わせるな！　ここで私が引いてしまったら、リュウをまた恐怖のどん底に陥れてしまうのだ！　そんなこと、もう2度とさせぬ！！」

「母さ――」

「させぬっ…！　させぬっ！！　させぬっ！！！」

そう絶叫し、再びシュウに飛び掛ったキラ。

シュウが慌てて振るった剣を爪で跳ね除け、シュウの首の根元に噛みつく。

「――…っ……！！」

キラの牙が食い込み、シュウは歯を食いしばって激痛を堪える。
キラの身体を離そうとするが、キラはシュウの身体に爪を立ててしがみ付き、まるで離れようとはしない。

キラの口の中、血の味が広がる。
かけがえの無い、大切な息子の血だ。
決して美味いものじゃない。

だが、その頭の中は主（リュウ）のことで一杯だった。

（させぬっ…！　私はもう、リュウを恐怖のどん底に陥れたりなど、2度とさせぬっ……！）

キラの脳裏にリュウの姿が浮かぶ。
恐怖に震え泣き、呼吸すら上手くできず、発狂するリュウの姿が。

そんな主の姿など、見たくはない。

（破滅の呪文など…！　破滅の呪文など、いらぬのだっ…！　いらぬのだっ……！！）

キラの大きな黄金の瞳から零れ落ちた涙。
シュウの服を濡らしていく。

（リュウ…、リュウっ…！　大丈夫だ…、大丈夫だからな、リュウ

っ……！）

主（おまえ）の幸せは、

（私が、守る――！！）

キラの牙と爪がさらに食い込み、シュウは溜まらず声をあげる。

「ぐっ…あっ……あぁぁぁ

褒められたい。
認められたい。

早く。

（だからオレは、破滅の呪文を――！）

キラの黒猫の尾っぽを左手で掴んだシュウ。
同様に黒猫の尾っぽを持つ己の弱点がそうであるように、キラも一緒だということは分かっている。

「母さん、ごめんっ……！！」

ぎゅっと瞼を閉じたシュウ。
キラの身体がびくっと震えたのを感じながら、右手に持っている剣でその尾っぽを切り付けた。

「――ふぎゃあああぁぁぁあぁぁあああぁぁぁあぁぁあああぁぁぁあぁぁあああっ！！！」

と断末魔のような声をあげ、シュウから飛び退ったキラ。
根元から取れかかっている己の尾っぽを見て、パニックに陥る。

「ふぎゃあぁぁあああぁぁあっ！　ふぎゃあああぁぁぁあああぁぁぁあっ！！」

飛び跳ね、アスファルトに倒れ、左右にごろんごろんと転がって悶えるキラ。
そこへミーナが慌てて駆けて行く。

「キラっ！　大丈夫か、キラっ！？　キラっ！？　おのれっ…！　おのれ、シュウっ！！」

とシュウを睨み付けたミーナの鼻先に、突きつけられた剣先。

ミーナの身体が硬直する。

「…シュ…シュウ……！」

「ごめん…、ごめんミーナ姉、母さん…！　頼むから分かってくれよ……！」と声を震わせるシュウ。「オレ…オレ、早く親父から『強くなった』って褒められたいんだ…！　認められたいんだっ……！！」

シュウの顔を見つめ、ミーナは困惑した。

その顔は必死だった。

リュウに『強くなった』と言ってもらうため、リュウを超えようと死に物狂いだった。

決して、生半可な気持ちで破滅の呪文を求めているのではない。

リーナが声をあげる。

「シュウくん、船出てしまうで！　早く！　今のうちに！」

それを聞き、腰に剣を戻したシュウ。

「ミーナ姉、母さんを早くミラのところへ…！　尻尾、完全に切り離されてないならミラでも治せるからっ……！！」

そう言ったあと、葉月島の離島へと向かって出航する船へと向かって駆けて行った。

「シュウっ！　待て、シュウっ！！」背後から聞こえる母親（キラ）の絶叫。

「シュウっ…！　シュウっ！　待てと言っているのだ、シュウっ！！」

痛々しいその声を聞きながら、シュウは船が出航する寸前に乗り込んだ。

尻尾を切られた衝撃で、キラはその場から動けはしない。

船のデッキに蹲り、シュウは耳を塞ぐ。

「シュウっ！　シュウっ…！　何故なのだっ…、何故なのだぁっ！！」

人間並の聴力で生まれてきたはずなのに、何故こんなときばかり猫モンスター並によく利くのか。

強く耳を塞いでも、キラの泣き声が響いてくる。

どんなに治癒魔法を掛けようとも、胸の痛みは消えてくれない。

（ごめんっ…！　母さん、ごめんっ…！　ごめん、ごめん、ごめんっ……！！）

頭の中、繰り返すシュウ。

だけど、

（オレ、破滅の呪文を覚えて、親父を超えたいんだ…！）

そして、

（親父に『強くなった』って褒められたい…！　認められたいんだよ……！）

シュウを乗せた船は、タマのいる離島へと向かって走り出した――。

第１６１話　行く手を阻む者　～後編～（後書き）

最終話は次の次。または次の次の次…になるような気がします。どっちにしろ来週で最終話になります。
それにしてもキラの戦闘が格ゲーのようだ…。

９日の２２時３０分ごろメールくださった読者さまへ。
カハッ…！（吐血）　す、す、す、すみません…。本当すみません……ｏｒｚ

それからキラはバカなのによく騙してること気付いたなーとねｗ
１人くらいからは突っ込まれそうだなあと思っていましたがｗ
キラはバカだけど主（リュウ）のことに関しては鈍くないですよ？　敏感です。
じゃなきゃ前作のラストでリュウがあのままバハムート倒しに行って死亡。そしてシュウ産まれてねぇぇぇぇってなりますｗｗｗ

第１６２話　破滅の呪文

シュウを乗せた船は、葉月島本土から南に８００ｋｍ地点に浮かぶ離島へと向かって行った。
深夜に本土を出て、到着したのは朝だった。

船から桟橋へと下りると、近くに山が見える。
そこにある寺へと向かって、シュウは歩いて行った。

山の麓へとやって来て、寺へと続く階段を上っていく。
ここに来るのは約５ヶ月ぶりだ。

（相変わらずここは暖かいな）

今は１２月末。
本土はときどき雪がちらつくというのに、ここは初夏のような暖かさだった。

階段の中段まで上って来たとき、寺の方から声が聞こえてきた。

「こらキャロル！　ちゃんと気をつけて歩かぬか！」タマの声だ。
「そこは蟻が歩いているではないか！　危うく踏み潰すところだったぞ、おまえは」

続いてキャロルの声。

「和尚さまは完全に踏み潰してますが」

「えっ！？　うそ、どこ！？」

「不殺生戒に反しますね、和尚さま」

「うっ…！　ふ、踏んでなんかないもん」

「和尚さまが『もん』とか使ったところで可愛くないです。ていうか嘘吐きましたね。不妄語戒に反します」

「う、う、う、うるさいっ！　ちゃんと掃除をしろっ！」

「じゃー、さっさとそこどいてくださいよ」

「わ、分かっておる！」

声を聞く限り、相変わらず元気そうな2匹の声。

シュウが階段を上りきり、門へとやってくると2匹がはっとして振り返った。

「シュウさん！」

と、笑顔になったキャロル。

「キャロルちゃん、タマ和尚、お久しぶりです」

「突然どうしたんで――」

キャロルが言葉を切った。

血だらけのシュウの服を見て、笑顔が消える。

「シュ、シュウさん！？　大丈夫ですか！？」

とシュウに駆け寄ろうとしたキャロルの手を、タマが引いた。
何かとキャロルがタマを見ると、タマの灰色の瞳が困惑したように揺れ動いていた。

タマが訊く。

「お主、本当にシュウか？」

キャロルが眉を寄せた。

「どう見てもシュウさんじゃないですか。和尚さま、ついにボケが始まったんです？」

「違うわっ！」

「やだな、和尚さまの介護…」

「違うと言っておる！」

「ぶにゃー、なんて鳴く猫可愛くないっていうか」

「か、可愛いではないかっ！」

と再び騒ぎ出した2匹のところへ、シュウが歩いて行く。

「突然やって来てすみません。オレ、どうしてもタマ和尚から教えてもらいたいことがあって…」

「……」

タマはシュウの顔を見つめながら察する。

(破滅の呪文であろうな)

シュウの服に目を落とす。

切り裂かれ、半分以上が血に染められていた。

(周りの反対を押し切って来た……か)

タマはシュウに背を向けると、本堂の方へと歩いて行った。

「…来い、シュウ。こんなところでは何だ」

「はい」

と頷き、シュウもタマに続いて本堂へと向かって行った。

中に入り、正座して向き合う。

少しの静寂のあと、シュウが口を開いた。

「タマ和尚…。単刀直入に言いますが…、オレに破滅の呪文を教えてください」

そう言って頭を下げるシュウを見つめながら、タマも口を開く。

「…お主が周りの制止を振り切り、ここへやって来たことは分かる。よほど破滅の呪文を要しているのだな?」

「…はい」

「闇の力を持って生まれたならば、本来は破滅の呪文を親から教えてもらうもの。お主はもう子供とは言えぬ年だというのに、知らぬ方がおかしい。よって私はお主に教えることに抵抗はない。……だが、破滅の呪文を何に使う？　ずいぶんと切羽詰っているようだが」

「親父を……」

「父親を？」

タマの脳裏にリュウの姿が浮かぶ。
一目見ただけで、強い男だと感じた。
人間か疑ってしまうほど強い男だと分かった。

「親父を、超えたいんです。親父を超えることは、オレが物心付いたときからの目標です」

「…そうか…、なるほどな」

とタマが頷く。
続けるシュウ。

「そして…そして、親父を超えたら、今度こそ親父は……」

膝の上、ぎゅっと拳を握り締めた。

「む…？」

「オレのこと『強くなった』って褒めてくれるんです…！」

「シュウ…」タマの目が丸くなった。「おまえ……」

「……」

「ふぁざーこんぷれっくす、というやつか？」

「ちょ、ちがっ…！」赤面し、顔をあげるシュウ。「違いますっ！　ファザコンじゃねーですオレはっ！！」

「はっはっは、照れるな照れるな。可愛いやつめっ♪」

「だから違っ…！　オレはっ……！」と、シュウは真剣な顔をして声をあげる。「最強の男に、『強くなった』って認められたいんです！！」

「……」

「一度でいいから最強の男から……親父から、『強くなった』って……！」

そう言ったシュウの顔を見つめたあと、タマが短く笑った。

「そうか」と言って。「先ほども言ったが、私はお主に破滅の呪文を教えることに抵抗はない。お主は大切な者の制止を振り切り、ここへやって来た。よほどの覚悟があってのことだと分かっている」

「タマ和尚、それじゃあ…！」

「うむ。私はおまえに、破滅の呪文を教えよう」

それを聞き、顔を輝かせたシュウ。

「ありがとうございますっ！！」

ともう一度頭を下げた。

うんうんと頷き、タマは続ける。

「良いか、シュウ」

「はいっ」

「破滅の呪文は――」

ビシィっ！！！

と、タマの言葉を遮るように、その後頭部に命中したのはキャロルの草履。

タマが後頭部を押さえながら振り返る。

「なっ、何をするのだキャロルっ！！」

「和尚さまこそ何してんですかっ！！」

と、本堂の外、顔面蒼白しているキャロル。

「何がだっ！」

「破滅の呪文、口に出して言っちゃったら発動するんじゃないんです！？」

「あ…」

「和尚さま、この島の生物全滅させる気ですか！？」

「く…、口に出して言おうとなんかしてないもん」

「いいえ、してました！　思いっきりしてました！　ああ、恐ろしい！！」

「う、うるさいっ」

「憎まれ口叩いてないで、さっさと紙と筆持って来たらどうです！」

「持って来い、キャロル」

「何でわたしが！？」

「う、うるさい、持って来いキャロル。師の命令だっ…。け…決して、足がしびれて立てないわけではないぞ私はっ……」

それを聞いたキャロル。

にっこりと笑った。

「そうですね、師匠命令ですもんね。わたしが持ってきますね」

と本堂の中へと上がり、タマの方へと歩いてきたキャロル。

正座しているタマの足を、思いっきり踏ん付けた。

タマ、絶叫。

「ぶにゃあぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあっ！！」

「あー、可愛くない鳴き声」

「お、おのれキャロル――」

「おーっと足が滑っちゃったぁ」

「ぶにゃあああぁぁあああぁぁあああっ！！　ぶにゃあぁぁあああぁぁあっ！！　ちょ、やめっ、やめてぇぇえええぇぇえええぇぇえええぇぇえええっ！！」

なんて、じゃれ合っているタマとキャロルを交互に見ながら、シュウは遠慮気味に口を開く。

「あ…あの……、早くしてもらっていいっすか？」

はっとしたキャロル。

慌てたように本堂の奥へと駆けて行き、紙と筆を持って戻ってきた。

それを受け取ったタマ。

破滅の呪文を書きながら、シュウに言う。

「シュウ、おまえはハーフだ」

「はい」

「力が半端な分、破滅の呪文を使えるのは1回ではないだろう」

「はい。そのことなんですが、ハーフの場合は何回使えるんですか？」

「さあな…、私もそこまでは分からぬ。2度かもしれぬし、3度かもしれぬ。父親を超えるという目標のために使うならば、1回だけにしておくのだぞ？　お主は男だ。強くなって最強の父親を超えたいという気持ちもよく分かる。だが、破滅の呪文は本当に大切な者を守るときに使うのが望ましいというものだ」

「はい」

「それから…」と、タマはリュウの姿を思い浮かべながら続ける。
「お主の父親はとても強いのだろう？　ならば全身全霊の力を込めて唱えないと超えられぬかもしれぬ。破滅の呪文の威力を最大限にするため、破滅の呪文以外の魔法は使わない方が良いだろう」

「分かりました」

と承諾し、シュウはタマから破滅の呪文の書かれた紙を受け取った。
全て唱え終わるまでに5秒ほど掛かりそうだった。

（5秒…、何とか5秒親父にくっ付いていられれば、オレは……！）

シュウはそれを畳んでポケットにしまい、立ち上がった。

（親父を超えられる――！）

再び船に乗り、葉月島本土へと戻って行くシュウ。
船が見えなくなるまで手を振って見送りながら、キャロルが傍ら

のタマに訊く。

「あの、和尚さま？」

「む？」

「シュウさんがさっきここへやって来たとき、どうして疑ったんです？　『お主、本当にシュウか？』だなんて」

「ああ、そのことか。シュウの中の闇の力が、この前に会ったときよりも大幅に成長していたのだ。だから一瞬別人のように思えてな」

「へえ」とキャロルが声を高くした。「すごいですね、シュウさん。本当にリュウさん超えられちゃうんでしょうか」

「…分からぬ。リュウは本当に人間か疑うほど強い男だと分かる。だが、シュウのあの闇の力なら充分に超える可能性を持っている」

「そう…ですか」

頷いたタマ。

「とりあえず、どちらも軽傷では済まぬであろう」

それだけは確信できた。

シュウが帰宅したのは午後7時過ぎだった。

ちょうど晩御飯中だったのか、キッチンの方から腹が鳴りそうな香りが漂ってくる。

玄関に目を落とすと、大人たち――リュウとキラ、リンク、ミーナ、レオン、グレルの靴はない。

予定通り、まだリュウとキラが昔暮らしていたマンションへと行っているようだ。

「ただいま」

とシュウが言うと、キッチンの方から慌ただしくカレンと妹たち、リーナが駆けて来た。

それぞれシュウに『おかえり』を言ったあと、カレンが訊いた。

「ど、どうだった、シュウ!?」

「うん、無事に教えてもらったよ」

それを聞き、小さく安堵の溜め息を吐いたカレンたち。

シュウが訊く。

「母さんの怪我、大丈夫だった?」

「ええ、ママなら大丈夫よ、お兄ちゃん」

とミラが笑うと、シュウが安堵の表情を見せた。

それを見ながら、リーナが言う。

「シュウくん、おかんもキラ姉ちゃんもな、リュウ兄ちゃんには言わへんて。シュウくんが破滅の呪文覚えに行ったこと。リュウ兄ち

ゃん、戦闘どころやなくなってしまうからって…」

「そか」

とシュウはまた安堵する。

リュウに破滅の呪文のことを知られてしまったら、超えられずに終わってしまう気がしたから。

「そ、それで…」リン・ランが訊く。「ち、父上といつ戦いますかなのだ兄上っ？」

「明日」

と即答したシュウに、

「明日っ！？」

カレンたちが一斉に声をそろえた。

カレンが狼狽したように言う。

「で、でもシュウっ？　明日はお義父さまとお義母さまの誕生日なのよっ！？」

サラが短く笑った。

「…ま、いいんじゃないかな。兄貴、早く『強くなった』って言われたいんだもんね。それにもしかしたら、親父にとっても最高の誕生日プレゼントになるかもしれないよ？」

「え…？」

どういうことかと数秒考えたあと、シュウは思い出した。

リュウ自身あまり口に出して言わないが、リュウの夢は『シュウを俺に継ぐ超一流ハンターに育てること』だということを。

カレンが微笑んだ。

「そうね。シュウがお義父さまに『強くなった』って言ったとき、それは同時にお義父さまの夢が叶ったということになるのでしょうね」

そう言ったカレンの顔を数秒の間見つめたシュウ。

「ああ…、そうだな」

と微笑んだ。

大晦日の0時ちょっと過ぎ。
大人たちが帰宅した。

それを玄関まで駆けて行って出迎えたシュウ。
大人たちの顔を見回す。

リュウはいつも通りだが、キラとミーナは無理矢理笑顔を作っているようにも見える。
キラから話を聞いただろうリンクやレオン、グレルも平常を装っ

ているように見えた。

「おかえり、親父」

「おう」

「誕生日おめでとう。母さんも」

「おう」

「う、うむ」

とキラ。

やっぱり不自然な笑顔だ。

「親父、４０歳になったわけ？」

「まあ――」

「いよっ、初老っ♪」

と言った瞬間シュウは、

ゴスっ！！

とリュウの拳骨を食らった。

「い、いってーなっ！　本当のことじゃねーかっ！」

「うるせえ！　俺は永遠にピチピチだ！」

「ちったぁ老けろよ、こえーな…」

と苦笑したシュウ。
寝室の方へと向かっていくリュウを、慌てて呼び止める。

「親父っ！」

「あ？」とリュウが眉を寄せて振り返った。「まだ何かあんのか？」

「今日の仕事、休めねーかな」

「はぁ？」と、リュウがさらに眉を寄せる。「何でだよ」

とリュウに訊かれてから数秒。
シュウは答えた。

「オレと戦ってほしいから」

「あ…？」

「オレ、親父を超えたいんだ」

「……」

シュウとリュウの間に流れる沈黙。
数秒後、口を開いたリュウ。

「…そうか」

一言そう言っあと、寝室へと向かって行った。
リュウがその場を去ったあと、キラが口を開いた。

「…覚えてきたのか、シュウ。破滅の呪文を」

「うん…、母さん」

「……そうか」

と言って、キラがリュウの後を追って行く。

「…か、母さんっ」

とシュウが呼び止めると、キラが足を止めた。
振り返らずに言う。

「おまえの気持ちは充分に分かった。ここまで来たら、私はもう何も言わぬ。夜が明けたら、リュウと存分に戦って来い」

「うん…」

「…シュウ、おまえは私の大切な息子だ。リュウもおまえも、笑顔で帰って来ることを願う」

「うん…、ありがとう母さん」

そう微笑んで言ったシュウの言葉を聞いたあと、キラはリュウを追って寝室へと入って行った。
ドアを閉め、ベッドに腰掛けているリュウを見つめる。

「リュウ」

「…なあ、キラ」と、リュウが笑った。「シュウ（あいつ）、最近またさらに必死に修行してると思ったら、そういうことだったのな。俺を超えようと、必死になってたんだな」

「…ああ」

と、キラは笑顔を作る。

「あいつ、また強くなったのか？」

「うむ。強くなったぞ」

「そうか」

とリュウはまた笑った。

（そりゃ楽しみだな）

と思う。

（今日の俺の誕生日に、今までで一番最高の誕生日プレゼントをくれる気か？　シュウ…？）

翌朝。

ミーナが瞬間移動でシュウとリュウを無人島へと送って行った。

シュウたち一同が毎年夏になると遊びに行く無人島だ。

玄関先、皆に見送られながらミーナと共にシュウとリュウの姿が消えると、キラが口を開いた。

「…リンク、ケリーに連絡して来てもらってくれ」

「お、おうっ…！」と、あたふたとしながら携帯電話を取り出すリンク。「ケリーってことは治癒魔法頼むんやな、キラっ？」

「うむ。破滅の呪文を唱えるとならば、リュウかシュウか、またはそのどちらもか……、重傷は免れない」

「せ、せやなっ…！　け、けど、おれらが無人島に行くタイミングはっ……！？」

「大丈夫だ。破滅の呪文が唱えられれば、純粋なブラックキャットは分かるもの。私にはシュウがいつ破滅の呪文を唱えたのか分かる。だから大丈夫だ」

「そ、そうかっ…」

と言い、リンクはまだ就寝中かもしれないゲール宅へと電話を掛けた。

一方、その頃。

無人島へとやって来たシュウとリュウ。

夏ぶりにやってきた無人島の砂浜の上、１０ｍほど距離を空けて向き合っている。

顔を見せたばかりの朝日が２人の横顔を照らす。

リュウの顔を見つめながら、シュウは動悸を感じていた。

（親父…）

前方に立っている最強の男――父親・リュウ。

やはりこうやって向き合うと、とても威圧感があった。

でも、シュウはもう怯まない。

トーナメントバトルで一撃を与えたとき、期待したのに言われなかった言葉がある。

とても、とても言われたかった言葉がある。

それは、

『強くなった』

たったその一言だけ。

そう、褒められたい。

そう、認められたい。

他の誰からでもない。

最強である父親（リュウ）から、その言葉を言われたい。

それを言われるには、もうシュウの目標である『親父を超えること』を達成するしかない。

（だからオレは、今……）

剣の柄（つか）にシュウの手が掛かった。

（親父を超える――！）

第１６２話　破滅の呪文（後書き）

あれ、前作にもあったサブタイトルですね…。
はい、次回で最終話です。少々お時間頂くかもです。

そしてキラの尻尾がぁぁぁぁぁぁメールくださった皆様方へ。

サラの指がぁぁぁぁに続いて、ドシリアスで衝撃を与えてしまいましたね。この小説はコメディとシリアスの差がすーげー激しいですね、すみません。
しかしながら、前話は仕方なかったと思ってください。
キラはそこまでしないと引き下がってくれないとシュウは判断したんです。シュウだって大切な母親を傷つけるんですから、とても辛かったのです。シュウに罵声浴びせた方、その辺察してくださると幸いです。

それから作者の私として、最高不思議なのですがｗ
頬を引っ掻かれ、顔面に蹴り食らってクラクラしちゃったところに、腹に爪が食い込んできてアッパーを食らわせられ、続け様にサマーソルトキックで腹を切り裂かれ、胸を切り裂かれ、顎を切り裂かれて出血多量、さらにカカト落とし7連発で脳天カチ割られそうになって、アスファルトに顔面からベチャっと落下して鼻骨折した挙句に、首筋の肉を噛み千切られそうになってさらに出血したシュウの方が重傷なのに、何で皆さん揃ってキラの尻尾がぁぁぁぁぁなんでしょうっていうねｗｗｗ

え？　シュウ不人気なんだから仕方ねーだろ？
ええハイ、そうですねスミマセン。
うちの主人公とヒロインが好きって読者さま、あんまりミナイヨ…

…orz

何はともあれ、次回で最終話です！

最終話　『親父を超えること！』

シュウ一同が毎年夏にやって来る無人島。
リュウが昔、シュウが生まれる前に買った島。

１２月末。
その砂浜の上、シュウとリュウは１０ｍほど距離を空けて向き合っていた。
顔を見せたばかりの朝日が、２人の横顔を照らしている。
２人の黒髪を靡かせる微風は凍るように冷たい。

リュウの顔を見つめながら、動悸を感じるシュウ。
その威圧感にトーナメントバトルのときは一瞬怯んだものだが、現在のシュウにそれはもうない。

あのとき、シュウは父親のリュウから聞きたかった言葉がある。
言われたかった言葉がある。

それは、

『強くなった』

たったその一言。

そう、褒められたい。
そう、認められたい。

他の誰からでもない、最強の男――父親のリュウから。
その言葉を聞くためには、目標である『親父を超えること！』を

達成するしかない。

剣の柄に手を持って行ったシュウ。

（だからオレは、今……、親父を超える――！）

リュウを真っ直ぐに見つめながら抜刀し、そして構えた。

それを見、続いて抜刀したリュウ。

トーナメントバトルのときと同様に、悠然とした様子で言う。

「来い」

シュウは雄叫びをあげると共に、リュウに飛び掛った。

辺りにキンキンと響き始めた金属音。

トーナメントバトル以来、シュウは修行時間を増やした。

おかげであのときよりもリュウの剣がさらによく見える。

リュウの怪力に度々飛ばされそうになるものの、何とか踏ん張って堪えられる。

そして、リュウと刃を交えてからほんの１０分後のこと。

「――あっ…！」

リュウの頬に赤い線が出来たのを見て、目を丸くしたシュウ。

その一瞬の隙に砂浜から島の中央の方へと向かって吹っ飛ばされ、木々を突き抜けて行きながら確信した。

（行ける――！）

トーナメントバトルのときは、やっとの思いでリュウに一撃を与えた。

それが、今はそれほど難なくリュウに刃を当てられた。

（オレ、行ける！　親父を超えられる！）

十数本の木を折り、ようやく止まったシュウ。

込み上げてきた自信に笑みながら、砂浜の方へと顔を向けた。

そこに立っているリュウが軽く剣を振るった。

起きた風の刃が、島の木々を切り倒していく。

周りを囲んでいた木々が無くなり、露わになったシュウの姿。

そこへと向かって、リュウは悠々として歩いてくる。

（5秒だ、5秒。5秒親父にくっ付いていられれば、オレは親父を超えられるんだ…！）

剣を構え直したシュウに襲ってきた炎。

シュウはそれを剣を縦に振るって真っ二つにすると、リュウに向かって再び飛び掛って行った。

再び金属音を響かせながら、シュウは考える。

（それほど難なく親父に一撃与えられたんだから、何かあるはずだ！　親父に5秒くっ付いていられる方法がっ…！）

5秒。

破滅の呪文を全て唱え終わるまでに掛かる時間。

ちょっとでも距離があろうものならば、リュウを倒すことは出来ない。

刃を交えているときの距離は充分な近さであるが、リュウの目の前で5秒のもの間呪文を唱えてバレないわけがない。

瞬時に異変を感じたリュウに逃げられて終わるだろう。

そのうち機会があるかも、とも一瞬思ったがリュウがそんな隙を見せるわけがない。

（何かあるはずだ…！　親父に5秒くっ付いていられる方法っ……！）

必死に考えるが、それが中々思いつかない。

シュウの剣は、リュウの身体を傷付ける。

だがリュウの剣は、その倍以上シュウの身体を傷付ける。

加えて、魔法も襲ってくる。

炎に炙られ、激しい落雷に身体を貫かれ、鋭い氷の結晶を雨のように浴び、召喚された隕石が圧し掛かってきて地に這いつくばる。

このままでは結局、破滅の呪文を唱える前に終わってしまいそうだ。

（何かあるはずだ、何か…！　親父に5秒くっ付いていられる方法がっ……！）

必死になって考えるのに、思いついてくれない自分の頭をシュウは憎む。
隕石に押しつぶされ、意識が遠退いて行きそうになる。
「…ちっ…くしょうっ……！！」
１０ｍほど先に立っているリュウを見つめる。
霞んで見えたが、それでも分かった。
相変わらず悠然として立っているリュウ。
はっきり見えなくとも、シュウは改めて感じる。
改めて確信する。
（オレの親父は、最強の男だ）
物心付いたときから、誰よりも強い父親（リュウ）が憧れだった。
大切な家族や仲間を守る姿は、とても格好良く見えた。
多くの人々の命を預かっていると言っても過言ではないその様を、心から尊敬した。
そんなこと照れ臭くて口に出して言ったことはないが、自分もそうなりたいと思った。
だからその大きな背を必死に追いかけてきた。
超えることをずっと目標としてきた。
そして、その口から言われたい言葉があった。
（『強くなった』って）

たった1度でいい。
父親（リュウ）から――最強の男から言われたい。
他の誰でもなく、その口から聞きたい。
褒められたい。
認められたい。
たった一言『強くなった』と。
（そのために、オレは……！）
シュウの中、遠退きそうだった意識が戻る。
霞んでいたリュウの姿は、シュウの瞳にはっきりと映る。
「親父を超えるんだっ！！」
そう絶叫するなり、地に手の爪を立てたシュウ。
必死にもがき、隕石の下から這い出て行く。
それを見たリュウ。
（そうだ、来い…、シュウ）
と心の中で微笑んだが、同時に不審に思う。
（しかしおまえ、何故魔法を使わねえ…？）

隕石なんて、風魔法でも使って吹き飛ばせばいいだけのことだった。

シュウが立ち上がり、剣を構えてリュウに飛び掛る。
再び刃を交えながら、リュウはシュウを見つめた。

必死に剣を振るっている。
このリュウを超えようと、必死になって振るっている。

（おまえ、剣術だけで俺を超える気か）

そう思えるくらいに。

（バカじゃねーの）

と心の中突っ込んだリュウだったが、さらに不振に思って眉を寄せた。
シュウだってそんなに甘くないことくらい、分かっているはずなのだ。

鍔迫(つばぜ)り合いになったシュウとリュウの剣。
リュウが力を込めて剣を振り切る。

飛ばされたシュウが足を踏ん張らせて砂埃を立てるのを見つめながら、リュウは口を開いた。

「シュウおまえ、何考えてんだ」

息を切らしているシュウ。
リュウの言葉が聞こえているのか聞こえていないのか、ただ真っ

直ぐにリュウを見つめていた。

その頭の中は、

（親父に5秒くっ付いていられる方法っ…！）

それぱかり考えていた。

返答のないシュウに向かって、リュウが剣を振るう。

「おい、シュウ」

飛んできた風の刃をシュウが避けると、それは砂浜を通り、海を割って一本の道を作った。

「何考えてんのかって訊いてんだ、俺は」

シュウが短く笑う。

「何考えてんのかなんて、戦ってる相手に教えられるかよ」

「…ま、そうだな」

そう言い、シュウに続いて短く笑ったリュウ。

（隠してるソレで、今までで一番最高の誕生日プレゼントをくれる気か？　シュウ）

今日はリュウ４０歳の誕生日。

リュウの夢は『シュウを俺に継ぐ超一流ハンターにすること』。

それはシュウがリュウに『強くなった』と言われると同時に、叶う夢だった。

（親父に5秒くっ付いていられる方法っ…！）

リュウを見つめ、シュウはそれを考える。
しかし、やはりこれだと言うものが見つからない。
そんな中、リュウが剣を構えて向かってくる。

突きの構えだ。
それを打ち落とそう構えたときのこと。

シュウは、はっと思いついた。

（そうだ――！）

途端、剣を投げ捨てる。

次の瞬間、リュウの顔が驚愕した。

「――なっ…！」

己の手元に目を落とすリュウ。
シュウが俯いて咳き込み、手に生温かい液体が掛かる。
真っ赤な鮮血だ。

「何してんだ、てめえっ……！！」

リュウの剣は、刀身と柄の間に挟まれている鍔の部分まで、シュウの腹を突き刺していた。

シュウは避けるものと確信していたリュウは、衝撃のあまり呆然としてしまう。

そんなリュウの身体に、シュウの腕がしがみ付く。

「へへっ…」リュウの耳元、シュウの笑い声が聞こえた。「やっとくっ付けたぜ……！」

「あ…？　おまえ、何考えて――」

先ほどと同じ疑問を再び投げかけようとしたとき、リュウは言葉を切った。

シュウが何か呟いている。

それに耳を傾けて聞き取った瞬間、ぞくっとリュウの背筋に走った恐怖。

何を呟いているのか察した。

（――破滅の呪文っ……！）

シュウの身体から慌てて剣を抜いたリュウ。

「こっの、バカがっ……！！」

そう言った次の瞬間、シュウと共に大爆発に包まれた――。

シュウの破滅の呪文の威力は、キラのそれにはどうあがいても敵

わない。

だが、全身全霊を込めたそれは、島の木々を吹き飛ばし。
島の岩石を吹き飛ばし。
仕舞いには島そのものを吹き飛ばした。

リュウの身体を襲う味わったことのないほどの衝撃。
頭や手足が胴体から吹っ飛んで行きそうだった。
瞼には三途の川らしきものがちらつく。

リュウほどではないものの、それは破滅の呪文を唱えたシュウにも襲い掛かる。

（これでオレは親父を超えたっ…！）

爆発の衝撃の中、それを確信したシュウ。

（だから…、だから親父っ…、今度こそオレのこと『強くなった』って、褒めてくれよ…！　認めてくれよ……！）

そう願った。
そして身体が優しい光に包まれたのを感じた瞬間、気を失った。

目を覚ましたシュウの視界に最初に入ったのは、冬の空と太陽。
陽の光に片方の瞼を閉じ、むせ込んだシュウ。
上半身を起こし、口の中に入った塩辛い海水と砂を吐き出した。

そのあと、己の下半身に目を向ける。
脚の厚みの半分が海水に浸されていた。

「あれ…？」

と、辺りを見渡して仰天する。
さっきまではあったはずの木々も岩石も、どこにも見当たらない。

それどころか、

「しっ…島がねえぇぇぇ

シュウと同様に身体の半分を海水に浸された状態で、仰向けに倒れている。

呼吸はしているものの、瞼を閉じたまま動きそうにない。

どうやら気を失っているようだ。

それを見て、シュウの目が見開いていく。

「…や…やった……！」

と、さらに瞳が輝き、

「やった、オレっ…！　やった……！」

笑顔が溢れ、

「やった!!　やったんだ、オレっ!!　ついに親父を超えたんだっ!!」

太陽に向かって両腕でガッツポーズをし、

「イヤッホオオオ

三三七拍子のリズムに合わせて手を叩く。

「超・え・たっ♪　超・え・たっ♪　オ・ヤ・ジ・を・超・え・たっ♪　ヘイっ！」

その後方。

ぴくりと動いた影。

「超・え・たっ♪　超・え・たっ♪　オ・ヤ・ジ・を・超・え・たっ♪　ヘイ、皆さんもういっちょお～っ！」

それはむくりと起き上がり。

「超・え・たっ♪　超・え・たっ♪　オ・ヤ・ジ・を・超・え・たっ♪　いよっ！」

海を赤く染めていきながら、ゆらりゆらりとシュウへと向かって歩いて行き。

「超・え・たっ♪　超・え・たっ♪　オ・ヤ・ジ・を・超・え・たっ♪　いよっ、オレ最強～～～っ！！」

シュウの背後で立ち止まり。

そして振り上げられた拳は、

「なーんて言ってみちゃったりして、オーレっ♪　はーっはっはっはっ！　――って、ん…？　何かすげー殺気……？」

シュウが気配を感じて振り返り、

「――！！？」

顔面蒼白し、

「ぎっ…ぎゃあぁぁあああぁぁあああぁぁあああ

と全身から流血しながら、怒声をあげたリュウ。
浮いてこないシュウを助けに向かって地上まで引き上げ、治癒魔法を掛けてやる。

「誰が破滅の呪文を使えと言いやがった！！」

リュウの怒声が辺りに響く。
シュウはそれをむせ込んで聞きながら、呆然としてしまう。
リュウを倒したものだとばかり思っていたから。

「万全な状態で唱えたならまだしも、んな傷だらけの状態で破滅の呪文唱えたら危ねえってことが分かんねーのかおまえは！！　俺が治癒魔法掛けてやらなかったら、おまえ今頃あの世だぜ！！」

そういえば破滅の呪文を唱えた後の己の身体は軽傷で済んでいたと、シュウは思い出す。

（そうか…、オレが気を失う前、オレの身体を包んだ優しい光は親父の治癒魔法……）

突然リュウがふらりとよろけ、シュウは慌てて支えた。

「お、親父っ…！　な、何してんだよ、早く治癒魔法掛けろよっ……」

と言ったシュウの頭に、再びリュウのゲンコツ。

「おまえの治癒のせいで力使い果たしちまったんだろうが！」

「ご、ごめん…」

と言ってリュウに治癒魔法を掛けようとしたシュウだったが、同様に使えなかった。
破滅の呪文に全身全霊の力を込めたから。
（それなのに、親父を超えられなかった）
リュウの腕を肩に回し、その身体を支える。
リュウが言う。
「そろそろキラたちがケリー連れて治癒に来るだろ。待ってようぜ」
「うん…」
と笑顔を作って相槌を打ったシュウ。
心の中ではまるで笑える状態じゃなかった。
「おい、シュウ。おまえの剣術、まだまだ甘いな。察するに、魔力も俺の半分程度か」
「…うん……」
とまた笑顔を作ったあと、俯いたシュウ。
（親父を超えられなかった…。オレ、破滅の呪文まで使ったのに……）
笑顔が消えた。

（バカみてえ。バカみてえ、バカみてえ、バカみてえ…。結局オレじゃ、親父を超えられねーんだ……）

そう、己の力に絶望した。

リュウが続ける。

「でもま……、サンキュ」

「…？」

何のことかと首をかしげたシュウだったが、考えようとはしなかった。

今はもう、何も考えられる状態じゃない。

絶望のあまり、返事すらすることが出来ない。

その傍らで、リュウは続ける。

「今までの中で、最高の誕生日プレゼントだったぜ」

「…え……？」

と、シュウが顔を上げると、そこにはリュウの横顔。

それは、ふと微笑んだ。

そして、その口は満足そうに言う。

「シュウ、おまえ……、強くなったな」

「――えっ…？」

耳を疑うシュウ。

鳩が豆鉄砲を食らったようなその顔を見つめながら、リュウの口はもう一度言う。

「おまえ、強くなった」

「――」

シュウの頭の中に木霊する。

リュウの声。

強くなった。

強くなった。

強くなった。

それはずっと求めていた言葉。

聞きたかった言葉。

言われたかった言葉。

他の誰からでもない、最強の男――父親（リュウ）から。

（――オレ、聞いた。たしかに、言われた）

己の中、張り詰めていたものが切れたシュウ。

突然、目頭に熱いものが込み上げてきた。

（親父から『強くなった』って）

見つめていたリュウの顔がぼやけ、

（オレ、親父に褒められた…！）

頬を涙が滝のように伝っていく。

「おまえは剣術と、俺から受け継いだ力だけで俺を超えてみろ。時間は掛かるかもしれねーが、おまえはいつかそれを達成することの出来る力を持ってんだぜ、シュウ」

頷き、俯いたシュウ。

（オレ、親父に認められた……！）

リュウの優しい手を頭に感じながら、大きな声をあげて泣いた。

小さな子供のように泣きじゃくった。

そこへ瞬間移動で現れたシュウとリュウの大切な家族や仲間たち、治癒にやって来たケリー。

足が海水に浸かったものだから驚いて短く声をあげたあと、2人を見つめるなり困惑した。

立っているのもやっとであろう重傷のリュウ。

俯いて、一体何事かというほど泣いているシュウ。

シュウはリュウを超えたのか、超えられなかったのか。

一体どっちなのかと、一同はシュウとリュウの顔を交互に見る。

そしてリュウと目が合ったキラ。

リュウの表情を見て、微笑んだ。

キラの優しい声は問う。

「おまえのこれからの目標は何だ、シュウ？」

問われたシュウが、腕で涙を拭った。

そして短く笑った。

「そんなの、決まってんだろ」

そう言って。

顔を上げて微笑み、答えをはっきりと口にする。

父親は、最強人間でなお且つ最強の男・リュウ。

母親は、最強モンスターで絶世の美女であるブラックキャット・キラ。

その間に生まれた、二男七女の長男＋夫で伯父のシュウ。

彼の目標はこれからも、

「『親父を超えること！』」

最終話　『親父を超えること！』（後書き）

というわけで、読者さまありがとうございます。
この度おかげさまで、このハーニャンこと『ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ』を完結することの出来た姫百合です。
結局リュウを超えられなかったシュウでありますが、彼にはこれからも『親父を超えること！』という目標を目指して頑張ってもらいたいと思います。

そして続編の件ですが。
感想欄を見た方はもう知っているでしょうが、私の想像を上回って望んでくださっている方がいたので、やらせていただきたいと思います。
タイトルは『ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ２』と、そのまんまで（笑）
まだ設定やプロット等を作っていませんが、主人公はシュウではないと思います。
シュウが主人公の場合『親父を超えること！』が目標とされるのですが…。えと、破滅の呪文を１度使ってしまったシュウがリュウを超えるには、あと、うーん…。最低２０年は掛かります。長すぎるので困ります。
よって、続編の主人公は１０年後設定でジュリがいいかなーなんて思っております。また、２０％くらいの確立でハーニャン２の他にもう一本連載やろうかなーなんて考えております。

それにしても、こうして最後の後書きを書きながら思い返してみると、この小説は読者さまに支えられてきたなあと思います。
今までご愛読してくださった方やメールを下さった方、評価・感想等をくださった方、投票してくださった方、応援してくださった方、本当にありがとうございました（´；ω；｀）ウッ

これだけの大長編を完結させられたのは、皆さまのおかげです。

また、前話のあとにメールをくださった読者さまたちへ。
最後まで本当にありがとうございます。
リクエストくださった方、ご安心ください！　続編ではシオンや、
シュウ・カレンの子供も出てきます！

ではでは読者さま、少々休息をいただきますが、ハーニャン2もご
愛読くださると幸いです！

作者・姫百合ですた！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1925f/

ＨＡＬＦ☆ＮＹＡＮＫＯ

2011年7月6日23時34分発行